とある当麻の家庭事情

夾竹桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある当麻の家庭事情

【Ｎコード】
Ｎ３００７Ｑ

【作者名】
夾竹桃

【あらすじ】
上条当麻は何時ものように不幸に巻き込まれていた。
しかし彼は自分の不幸を呪ったことはない。
何故なら彼、上条当麻には……彼を愛し支え続けてくれる家族がいるからだ。

始めにお読みください（前書き）

注意点・その他色々な事を書きます。
何か追加する点が増えたらココに書きます。

始めにお読みください

これは『とある魔術の禁書目録』の本編再構成モノです。
会話は『キャラ名「会話内容」』のような書き方になります。
作者は小説が初投稿なので、文章の書き方はいまいちかもしれません。
長い目で見ていただけると幸いかも?

・読む前にチェック～

・オリキャラが受け付けられない
・原作キャラの性格が本編と違うから嫌
・人間関係などが本編と違うから嫌

のどれかが気に入らないという方は、見ないほうがいいかもしれません。

・物語について

時系列は基本的に本編にあわせていますが、再編成の都合上多少の改変が入ります。
(時期がずれる、関わっている人間が変わるなどなど…)
また本編にあった「魔術側の事件」などは極力削られています。
この都合により魔術側の人間が余り登場しなくなります。

・登場人物について

作者が作ったオリキャラが出てきます。
また、学園都市が話の起点なので魔術側の人間が余り出てきません。

（というよりほとんど出てこない？）
基本的に学園都市の人間＋オリキャラで構成されていると考えてください。

プロローグ

彼の朝はいつも早い。
それは、朝に弱い姉妹に変わって朝食の準備をしているからである。
だが彼はそれを全く嫌がらなかった。
むしろ、毎日朝食を作るのを楽しんでいるかのようである。

そんな彼の名前は上条当麻。
彼の家族は四人の女性の当麻という五人家族で構成されている。
そして当麻は五人家族のうち、長男にあたる人物である。

そんな当麻の家族を紹介しよう。
上条家家長にして長女、沈利。
次女の理后。三女のフレンダ。末っ子の最愛である。

色々な事情がある家庭だが、そんな事情を思わせないほど彼らは仲が良かった。
これは、そんな幸せな家族に囲まれた少年のお話。

「沈利姉ちゃん、朝だよ、起きろー」

沈利の部屋の扉を控えめにノックするが、当然ながら中から返事は返って来なかった。

当麻はため息を吐くと、無造作に扉のノブを回す。
普段こんな行為をすると怒られるが、朝に限っては許しを得ているので当麻は遠慮無く部屋の中に入る。

「う～ん……」

当麻の予想通り、沈利はベットの上で未だに眠り続けていた。
が、その姿は普通の高校生である当麻には刺激的過ぎた。

（いつもながら、人のシャツをパジャマにしないでください。色々と目に毒ですよ、沈利姉ちゃん！）

自分の姉である沈利は、どういう理由か知らないが当麻のＹシャツをパジャマにしている。
しかしそれだけなのである。下着の上にＹシャツだけなので色々と見えそうなのである。

「沈利姉ちゃん。もう朝だよ、起きてくれー」

そして更に罠が待っていた。沈利を起こすために当麻は沈利の肩を揺する。
揺すると、当然ながら豊満な胸も一緒に揺れる。
毎度ながらの沈利による二重の罠にひっかかると当麻だが、鋼の精神力で何とかカバーする。

「うーん、後十分～」

「そう言っていつも起きないじゃないか。ほら、シャキッとする！」

もう一度肩を揺すろうと思い、手に力を入れる。

が、力を入れたと同時に沈利が体勢を変えたので、当麻の手は沈利の肩を掴みそこねた。
そして掴みそこねた手がどこにいったかというと。

「……」

沈利の胸を掴んでいた。ちょっと触れるとかそういうレベルではない。
言い訳できないぐらいがっちり掴んでいた。

「……あん、当麻ったら朝からダ・イ・タ・ン♪」

二度三度手に力を入れてやっと気づく。

「うわぁぁぁぁぁぁ！！！　ご、ごめん！！！！」

慌てて胸から手を離すが、既に手遅れである。
がっちり揉んだ事実は覆らない。

（柔らかかった……じゃなくて！）

瞬間的に当麻は土下座をした。掛かった時間、僅か1秒以下である。
余りの早さに沈利は驚いた顔をしていた。

「わざとじゃないから！　ごめん、沈利姉ちゃん！」

やがて沈利はベットから出ると、ひたひたと当麻に向かって歩き出す。
土下座をしている当麻は沈利の表情が分からないが、きっといたずらを思いついた顔をしていると思っていた。

「どうしようっかなぁ♪　朝からお姉ちゃんにイタズラするほど欲情しちゃう当麻には……」

「には……？」

全身から嫌な汗を流しつつ、当麻は沈利の判定を待つ。

「オ・シ・オ・キ・か・く・て・い・ね♪」

その言葉と同時に、沈利は当麻に拳骨を振り下ろした。

（ひどい目にあった。まだ頭がグラグラする）

当麻の事故は沈利の拳骨の後、一日付き合う事で許してくれた。だが当麻は知らない。それが沈利の真の目的だった事に。

沈利の部屋から理后の部屋の前まで移動した当麻は、扉を軽くノックする。

「理后姉ちゃん、朝だよ～」

「とうま、おはよう」

沈利と違い、理后は既に起きていたようである。部屋の中から声が聞こえた。

だがココで油断してはいけない。理后はたまに無意識で返事をする場合がある。

「入るよ？」

一言断りを入れて、当麻は理后の部屋へ入る。
案の定、理后は布団の中から出ていなかった。

「理后姉ちゃん、起きろ～」

「うん」

返事はするがまるで起きる気配はない。
はっきり起きてる状態なのに、布団から出ない理后を当麻は訝しげに思う。
そこで当麻は気付く。

「理后姉ちゃん、もしかして体調がよくない？」

理后の体はとある事情により、とても不安定な状態である事を。

「ん～、ちょっとよくない。ご飯は食べれるけど学校はむりかも」

「そっか、わかった。んじゃ学校には連絡をいれておくよ」

そっとおでこに手を置くと、確かに少し熱っぽいと当麻は思った。

「ごめんね、とうま」

理后は布団の中から申し訳なさそうな顔で当麻を見る。
対して当麻は、理后が気にしないようにと努めて笑顔を浮かべる。

「気にすんなって、理后姉ちゃんはゆっくりしてていいよ」

「うん」

当麻は少し乱れていた布団をかけ直し、ぽんぽんと軽く布団を叩いて理后の部屋を後にした。

「さて、次は妹たちだな」

そう言うと、当麻は一人目の妹の部屋へ入る。
姉と違いノックなどせず問答無用で入っていく。

「フレンダ！　朝だから起きろ！」

どうせ起きているわけない、そう思って当麻は部屋へ突撃する。

「ふぬー、もうちょっと寝かせてー」

案の定フレンダはベットの中でモゾモゾと動くだけで、一向に起きてくる気配がない。
当麻はベットまで歩み寄ると、問答無用でシーツを剥ぐ。

「駄目だ、学校行ってないとはいえだらけるのはダメ。ほら、しゃきっとする！」

「ちぇ～、お兄ちゃんは妹にもうちょっと優しくする必要があるって訳よ」

「そういってぐーたらしまくったのは誰だよ……」

シーツを奪い取られた事に不満を上げるフレンダだが、当麻に一刀

両断されてしまった。
そっぽを向いてふけもしない口笛を吹いていたりする。

「ふっ、過去は振り向かない女って訳よ」

「いいから起きて朝飯食え」

「はーい」

最終的には素直に言う事を聞くが、このやりとりも含めてスキンシップなのだろう。
毎日同じ様なやり取りをフレンダとする当麻であった。

「先に食卓についててくれ、俺は最愛を起こしてくる」

当麻はそう言うとフレンダの返事を待たず、最愛がいる部屋へと向かった。

最後の末っ子である最愛が寝ている部屋までやってくる。
都合によりこの部屋は当麻と最愛が共同で使っている。
その為、朝は起こさないように部屋を出なければならないのである。
意外と疲れるが、当麻は最愛と部屋をわけようとは思わなかった。

「最愛〜、もう時間だ。起きろ！」

自分の部屋でもあるので、遠慮なしに部屋へ入る。
当然、最愛はベットの上でぐっすり寝ていた。

「うにゅ〜、後一年……」

寝言なのだろうが恐ろしいことを呟く最愛であった。

「なげぇ！　って違う。もう朝だ、起きろ！」

「ん～、抱っこしてくれたら超起きます」

両手を広げてだっこのポーズを最愛は取る。

当然ブラフなのだろう、ならばそのブラフに付き合ってあげよう。

当麻はそう考えると最愛を抱っこする。

「あ～わかった。ほら、抱っこしてあげるよ」

いわゆるお姫様抱っこ、という形で最愛を抱き上げる当麻。

当然、最愛は恥ずかしくて当麻の腕の中で暴れ始める。

「当麻お兄ちゃん！？　いきなり超抱っこは驚きますよ！」

「何って最愛が抱っこっていったんじゃないか。このまま食卓まで連れて行くか」

じたばたと暴れるが、しっかりと当麻に抱えられた最愛であった。

「超恥ずかしいです！　超下ろすのですよー！」

「はいはーい、お姫様一名ごあんなーい」

「超おーろーすーのーでーすー！」

結局、食卓まで連れて行かれた最愛であった。

最愛を抱っこして食卓につくと、沈利とフレンダが食事を机に並べてくれていた。

「理后姉ちゃんー、ご飯ができたよー」

理后の部屋に向かって声をかける当麻。

しばらくして、理后はパジャマ姿のまま食卓までやってきた。

全員が座るのを見て、当麻も指定の席に座る。

「それじゃあ……いただきます！」

「「「「いただきまーす！」」」」

当麻の声を皮切りに、姉妹が食事前の挨拶をする。

その姿を見て当麻は思った。今日も家族全員、元気に過ごせそうだなと。

白いシスターとの遭遇

「不幸だ…」

洗濯かごを抱えたまま当麻はそう呟いた。
彼の目の前には、白い服をきた少女がぶら下がっていた。
否、ぶら下がるではなく干されているといったほうが正しい。
体はくの字に曲がっており、両手足はだらりと垂れ下がっている。

「…お…いた…」

しげしげと眺めていると、突然少女が何かを呟いた。

「ん？　意識があるのかっ！　おい！　大丈夫か！？」

白い服を着た少女の声は、小さい動物の様にとてもか弱く今にも消えてしまいそうな程震えていた。
常識で考えれば慌てて救急車を呼ばなければならない場面であろう。
しかしここ学園都市は科学の街である。シスター服のような宗教服を見るのはまず珍しい。
その違和感が当麻に対して、現実味を薄めていた。

「…お…か、す…た」

再度何かを呟く。
危ういバランスでぶら下がっているので下手に触れない。
当麻は何か体を固定するような道具がないか、ベランダをキョロキョロと見渡してみた。
しかし一般家庭に、ベランダに固定するような道具など存在するはず

ずはない。

「…お…か、す…た」

徐々にだが少女のいっている言葉が聞こえてきた。
フードから溢れる銀髪から外国人と思っていたが、意外と流暢な日本語が聞こえてきた。

（もっと近くによればはっきり聞こえるかな？）

ベランダに極力振動を与えないようにしながら、当麻はゆっくりと歩きながら少女に近づく。
やがて目と鼻の先まで近づくと、フードの辺りに自分の耳を近づける。

「おなか、すいた」

少女の声がはっきりと耳に聞こえた。
しかしその内容はとても場にそぐわなかった。

「あのー、貴方はそんな格好で行き倒れとかいうんですか？」

ベランダにぶら下がっている少女に向かって、当麻は若干顔をひきつらせながら問いかける。
声に反応したのか、少女が顔を上げて再度口を開く。

「何か食べ物くれると嬉しいかもー」

その言葉と同時に「クーキュルルル」と可愛らしいお腹の音がなった。

（えーと、何故に俺はベランダに引っかかっている少女から食べ物を要求されるようなシチュエーションに遭遇しているのだ？）

自分の不幸さを呪っていても、目の前の少女は消えない。
シスター服といえば黒色と思っていた当麻は、すぐそこにある白いシスター服をまじまじと見る。
刺繍も金色の糸を使っており、どちらかというとコスプレに近い気がする当麻であった。

「お腹がすいた、って何回も言ってるんだけど。隣人を助けよって教えはやっぱり日本人には浸透していなかったりする？」

じっくり観察する当麻の視線に気が触ったのか、ムッとした感じの顔で少女は当麻を見る。

「お前はそれが人にご飯を要求する態度だと思ってるのか？」

ベランダに引っかかるだけでも不法侵入なのに、その上ご飯まで要求されるとか今時テレビでもありえない。
そう当麻は思っていた。ご飯が貰えないと分かったのか、目の前の少女は腹の虫を隠すことなく鳴らし続けていた。

「うぅ……」

さすがに可哀想に思えてきたので、当麻はため息を吐きながら少女を見た。

「しょうがねぇ、好き嫌い言わないなら食わせてやるよ」

食わせてやる、その言葉に反応した少女はものすごい勢いで顔を上げるとキラキラと目を輝かせた。
その変わり身の早さに、若干引きながらも当麻は少女の名前を尋ねる。

「そいやぁお前の名前、なんて言うんだ？」

もぞもぞと動いてベランダに降り立つと、目の前の少女は胸を張りながら言った。

「私の名前はね、インデックスって言うんだよ！」

明らかに偽名にしか聞こえないが、その名前が気に入ってるのか迷いが見えなかった。

「俺の名前は上条当麻だ」

相手に名前を尋ねたので、自分も名乗り上げるのが礼儀。
そう当麻は考えたが、インデックスは違ったようである。

「そんな事よりご飯！」

「俺の名前はそんな事かよ！？」

思わずインデックスにツッコミを入れる当麻。
だが、インデックスは当麻をスルーすると、我が物顔で家の中に入っていった。

インデックスをリビングに案内し、席に座らせると当麻は台所から何品か料理を出してくる。

当麻はインデックスがどのぐらい食べるか分からなかったが、末っ子と同じぐらいの歳に見えるので、同じ分量を出してきた。
しかしその認識は誤りであった。

「ガツガツムシャムシャパクパクモグリ」

物凄いスピードで末っ子分の食事を平らげると、次に当麻が自分で食べるために出しておいた料理を食べ始めた。

（少ししたら満足するだろう……）

しかしインデックスの食べるスピードは一向に衰えない。
むしろ加速すらしてるように見える。

「ぷはぁ！　助かったよ！　今回はさすがに死んじゃうかと思ったんだよ！」

やがて昼ご飯にと考えて作った料理をあらかた食い散らかしてから、インデックスはそう言った。

（五人分あったんだけど……どういう胃袋してるんだよ！？）

当麻の家族全員分を一人で食べきったインデックス。
そのブラックホール並の消費に、当麻は引きつる以外出来なかった。

「それで、何でうちのベランダにぶら下がっていたんだ？」

一息ついただけで、未だ食べることを止めないインデックスに痺れを切らした当麻は、ベランダに引っかかっていた理由を尋ねた。

「追われていたからね。こう、家から家へぴょ～んって飛ぶときに失敗して引っかかっちゃったの」

まるで普段からそのような行為を行っているかのように、インデックスは何気なく言った。

しかし当麻はその事に酷く狼狽していた。

（こんな小さい子を追いかけまわすなんて！？）

末っ子と同じに見えるインデックスを、追いかける人間に怒りを覚える当麻。

だが、次の言葉でその怒りは霧散する。

「魔術結社はシツコイからね。バレる前にここから出ていくよ。迷惑を掛けたくないからね」

は？　魔術結社？

怒りは霧散し、疑問が生まれた。

実は単にインデックスの頭がアレなだけなのでは？

当麻はそのような確信めいた考えが頭に浮かんだ。

「魔術ってアレか？　呪文唱えたり紋章を書いたりという……」

何かの冗談だと思った当麻は、ゲームから身につけた魔法に関する知識で尋ねる。

「とうまの魔術が何を指してるかわからないけど、一般的に紋章というより魔法陣だね」

常人ならここで一笑ものだろう。だが、インデックスは特に気にす

ることもなくサラリと答えた。
インデックスは頭がお花畑な女なのだ。そうだ、そうに決まっている。
当麻はそう結論をつけると、コップを手に取りお茶を飲もうとした。
が、その動作は途中で止められることになる。インデックスが持っている『モノ』を視界に入れたために……

「待て！　それは食うな！　頼むからそれ以外を食ってくれ！」

必死に止めようとしたが、一足遅く『アレ』を食べられた。

「ごちそーさま！　美味しかったよ！」

『アレ』を胃袋におさめたインデックスは、ご満悦なのか頬が緩みっぱなしである。
背もたれに全体重を預け、ゆったりとしている。
対して当麻は、顔から血の気が引いた顔をしていた。

（あれは……あれは沈利姉ちゃん専用の『鮭フレーク』！！）

確か親戚のあいつがお土産に送ってきた奴で、結構な値段がしたような。
それでいて味がねーちゃんの好みにぴったりだったから、珍しくゆっくり食べていた……
どれほど沈利が気に入っていたかを思い出した当麻は、生き残るために必死に考える。

（やべぇ！　なんとかしねぇと殺される！）

人生の危機を感じ、当麻はすべての知識を動員して沈利の怒りを回

避する方法を考え始めた。

（マズい！　とにかくあの空ビンだけでも隠さないと！）

当麻は慌てて、テーブルの上に転がってる鮭フレークのビンを掴む。
そんな当麻をインデックスは、呑気に見ていた。
どうやらインデックスには事態の重さが理解出来ていないようである。

（とにかくこれを隠さなくては……）

ここで説明しておこう。
当麻は不幸である。それはもう神様に見放されたのではと言いたくなるぐらいに。
財布は常に落とすし、道を歩けばよく喧嘩に巻き込まれる。
とあるレベル５には理不尽に絡まれたりと、散々な毎日を送っているのである。

そんな当麻が、この事態を逃れることは出来るのか？

「当麻、たっだいまにゃ～ん」

「ただいま、とうま」

「当麻お兄ちゃん、ただいまって訳よ」

「超ただいまです、当麻お兄ちゃん」

答えは否である。常に最悪の事態になるのが当麻であった。

リビングの扉があけられ、それから四人の女性が入ってきた。
当麻の姉妹である沈利たちが、買い物から帰ってきたようである。

（ああ……終わった。俺の人生はここまでのようだ）

片手には空になった鮭フレークのビン。明らかにご飯の食べた後の分かるテーブル。
言い訳不可能な状態で、一番見つかりたくない人がダイニングに入ってきた。

「当麻ぁ、どうしたの？　お帰りは……」

そしてその人物は気付く。
沈利は視線を当麻が持っている鮭フレークのビン、当麻、インデックスと順番に見始める。
少しだけ沈利が顔を下に向ける。そのせいか、顔の表情が全く分からない。
当麻は背中に嫌な汗を流しながら、沈利へ言い訳を述べる。

「沈利姉ちゃん？　これはですねー？」

しかし沈利は無言であった。それが余計に当麻を恐怖に陥れている。
心なしか笑っているようにも見える沈利を見て、姉妹たちは状況を瞬時に理解した。

「あー、これは超死にましたね」

「結局さ、当麻お兄ちゃんの人生はここで終了って訳よ」

「大丈夫、そんな地雷を踏んだとうまを応援する」

誰もが沈利の怒りを避けたいのか、当麻を援護する姉妹は皆無であった。

いきなり見捨てられた事に涙しながらも、何とか太助を求める当麻。

「最愛！　フレンダ！　理后姉ちゃん！　見捨て……」

「とぉまぁ～」

しかし言い終える前に沈利の声によって当麻は口を閉じてしまった。

静かに話しかける沈利はとても恐ろしい雰囲気を纏っていた。

「は、はい……」

蛇に睨まれた蛙のように、当麻はその場から動けなくなった。

声だけ聞けば分かる。沈利はとても激怒している。

きっと怒りのメーターをふり切ってしまったのだ。

家族である当麻には、今の沈利の恐ろしさは骨の髄まで身に染みていた。

「……その鮭フレークを食べたのはさぁ。とうまぁ？　それともそっちのクソガキどっちだぁ？」

静かに、ゆっくりと確認するように沈利は当麻に問いかける。

選択肢を間違えれば即ＢＡＤ　ＥＮＤのこの状況で、当麻はどうすれば助かるかを考えていた。

「む。神のしもべたるシスターに向かってクソガキとは失礼なんだよ。私にはインデックスって名前があるんだよ」

だがそれは無意味であった。
全く空気を読まないインデックスは、あろうことか最悪の選択肢を選んだのである。
フレンダと最愛は、インデックスの態度に少しだけ驚いていた。
当麻は瞬時に理解した。
沈利は確実にインデックスをぶち殺そうとする事に。

「……そうかそうかぁ。インデックスっていうのかぁ」

静かに沈利は笑っていた。そして静かに宣言した。

「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

そして沈利はインデックスに襲い掛かろうとした。
が、当麻が後ろから羽交い絞めしてそれを止めようとする。

「うおぉぉ！　待て待て、いくらなんでも殺人はダメだぁ！」

しかし、怒りに身を任せた沈利は想像を絶する力を発揮していた。
なんとか右手を体に当てているので、幻想殺しが発動して能力は使えない沈利。
だが、単純な身体能力でも沈利は当麻をゆうに上回っていたのである。

「当麻ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　とめるんじゃねぇ！！！　テメェもぶち殺されたいのかぁ！！！！！！」

沈利は鬼の形相でインデックスに襲い掛かろうとする。

「そこのクソガキャァァァァ！！！！！　ぶち殺してやるからじっとしてろォォォォォォォォォ！！！！！！！！！！！！！」

鬼の形相で怒号を発する沈利に、インデックスは恐怖のあまりその場から動けなくなった。
顔は真っ青になり、体はカチコチに固まってしまった。
理后やフレンダ、最愛は怒りの巻き添えを恐れてリビングから姿を消していた。

「今すぐ真っ二つにしてやらァァァァ！！！！！　当麻ぁ、はなせやァァァァァ！！！！！！！！！！！」

「不幸だーー！！」

そんな押し問答を三十分間続けて、やっと沈利は落ち着いたのである。

結局、当麻が沈利に何でも一つ言う事を聞く事を条件に、怒りをおさめてもらった。
しかしそれで不機嫌が治るわけもない。背後から黒いオーラを放ちつつ沈利は座っていた。
インデックスはそんな沈利を見て、体を震わせながら怯えていた。

「それで？　何でコイツは家で飯食ってたんだ。とうまぁ」

不機嫌を隠そうともせず、沈利は当麻を睨みつつ質問する。

「あ、あのですね。俺もコイツとは今朝知り合ったばかりでしてね。ベランダに……」

「長い、手短に話せ」

しどろもどろに話していたが、沈利はそんな当麻をバッサリ切り捨てた。

「えっと、洗濯物を干そうとしたらこいつがベランダに引っかかって……腹が減ったといったからご飯を食べさせたんです……」

端的に伝えると沈利は顎に手を当てて何かを考えていた。

が、すぐに視線をインデックスに向けると、怒りを滲ませつつ声を発する。

「それで学園都市レベル5第四位　麦野　沈利の鮭フレークを食ったと。ぶち殺すぞゴルァ！！！！！！！」

その怒声にインデックスは、顔を引きつらせて後ろに下がった。

「しずり、おちつく」

そんな怒り心頭の沈利に、理后は宥めにかかる。

「ところで気になったんだけど、なんで苗字が麦野なの？」

理后が沈利を宥めている間に、こっそり当麻の元まで近寄ったインデックスは疑問を口にする。

「うちの姉妹は全員義理の姉妹なんだ。だから皆苗字が違う」

「なるほどなんだよ」

納得いったのか、インデックスはそれ以上質問することはしなかった。
何となくこれ以上聞いてはいけない、と思ったのかも知れない。
当麻は、インデックスから最愛やフレンダに視線を向ける。

「シスターなんて学園都市では超見ないですね」

「日本じゃーシスター自体珍しいって訳よ」

最愛やフレンダは、シスター服のインデックスを物珍しそうに見ていた。
学園都市は科学の街であり、第一二学区ぐらいしか神学系の学校はない。
それでも「進んだ科学によって未知を征服する」という思想から、宗教関係は全く信じられていなかった。

「追われてるようなんで、しばらく泊めてやりたいんだ」

何とか落ち着いた沈利に、当麻は本題を切り出した。
下手にあれこれ迂回しても、単に沈利の怒りがぶり返すだけと判断したためである。

「……ダメだ、許可できねぇ」

顎に手を当てて思案した沈利だが、やがて当麻の目を見て返事を返す。
だが、それは当麻の望んだ答えではなかった。

「な！　なんでだよ！　沈利姉ちゃん」

沈利の顔を見て、適当に答えてないのは当麻も理解した。
だからこそ、沈利の答えが当麻には信じられなかった。

「当麻、別にあたしはこいつ憎しで拒否してるんじゃねぇ。確かにジュッてしたいけどさ」

だが沈利はあくまで冷静に当麻へ語りかける。
その姿につい当麻は熱くなってしまう。

「とうま、落ち着く。しずりの話は最後まで聴こう」

だが当麻が反論する前に、理后に諌められた。
理后にすら諌められた当麻は、しぶしぶ黙る以外出来なかった。

「あたしは家長だからな。この家を守る義務がある。下手にオブラートに包んだりしねぇ。ストレートに言わせて貰う。はっきりいってコイツは怪しい。追われてる？　魔術師に？　馬鹿馬鹿しい」

まるで可哀想な子を見るかのような視線で、沈利はインデックスを見ていた。

「む。魔術師は存在するんだよ！」

その視線に気付いたインデックスが、少しだけむくれた顔をする。
しかし沈利は気にせず、当麻とインデックスに対して言葉を発する。

「この際魔術師なんてどうでもいいんだよ。重要なのはテメェが部外者って事だ」

反論を許さない、そんな雰囲気を当麻は沈利から感じていた。

それはインデックスも同様だったため、反論を口にしようとはしなかった。

「あたしや理后、フレンダに最愛は学園都市管轄の組織に所属している。組織だから当然機密事項の守秘義務がある。当麻は家族だからまだいい」

そこで言葉を一旦区切り、沈利はインデックスに視線を向ける。

「だけど部外者のテメェを家に入れて上から睨まれるのはごめんだ。最悪スパイ容疑で全員が逮捕されるかも知れねぇ。そうなったら家族はバラバラだ。そんなのはごめんだね」

そして再度当麻の方へ視線を向ける。

それは、反論があるか？　と目で聞いているように見えた。

反論など当麻の中であるはずはなかった。

沈利はいつでも家族がバラバラにならないように、最新の注意を払っているのは当麻も知っている。

姉妹は全員大能力者クラス、沈利は学園都市でも七人しかいない超能力者だ。

対して当麻は無能力者。右手に奇妙な能力はあっても、学園都市からは無能力者の烙印を押されている。

学園都市がその気になれば、家族は簡単にバラバラになるだろう。

だけど、沈利のお陰で辛うじて一緒に住めているのである。

そんな沈利ですら庇いきれないような状況を作れば、どうなるか？

答えは単純で明快だった。

だからこそ、当麻は唇を噛む以外出来なかった。

インデックスを助けたい。だけど、家におけば家族に迷惑がかかる。家族か、インデックスかどちらかを選択しろ、今はそういう状況だと当麻はやっと理解した。

「悪いがあたしとしては一刻も早くこの家から出て行ってほしいわけ。わかる？」

そして沈利が家族を選ぶのは当然だった。

「……分かったんだよ。家族って大事だしね。ご飯ありがと、お世話になったね」

当麻のジレンマを感じ取ったのか、インデックスは自ら身を引くことを選んだ。

頭を沈利たちに下げると、無言で部屋から出て行く。

扉が閉まる瞬間、当麻はインデックスの横顔を見た。

それは、何もかも諦めたような顔。その顔を見た瞬間、当麻は無言で立ち上がっていた。

「当麻！」

だけど、沈利の一喝に当麻は体を硬直させてしまった。

ほどなくして、インデックスが出ていったのか、玄関が閉じられる音が聞こえた。

「沈利姉ちゃん、姉ちゃんのいう事は正論だ。確かに俺も家族がバラバラになるのは嫌だ。でもだからといって困ってる人を見捨てたくない」

当麻はたったまま沈利を見据える。その視線に迷いが無いというこ

とを伝えるために。
沈利は、無言で当麻を見返していた。

「この家に泊められない理由は分かった。だけど外で世話するのは問題ないだろう？大丈夫、この家に迷惑をかけるようにはしないからさ！」

努めて明るく笑顔を浮かべた当麻に、沈利は少ししてため息を吐く。

「当麻、あたしはさっきの理由でアンタを助けられない。だから……」

そこで言葉を区切ると、沈利は当麻に向かって微笑んだ。
それはいつも当麻が見ている、優しい姉の笑顔。

「だからアドバイスしかできない。当麻、あの子を連れてあんたの担任の家にいきな」

沈利の言葉に当麻はハッとなる。

「！　そうか、ありがとう沈利姉ちゃん！」

沈利に礼を述べると、当麻は駆け出すようにリビングを出て行った。

当麻がインデックスを追いかけて、家を出てしばらくした後。
最愛は沈利に先ほどのアドバイスについて、質問をしていた。

「超よかったんですか？　沈利お姉ちゃん」

「当麻の担任の所には第一位もいる。むかつくがあいつがいれば問

題ないだろ」

最愛の問いに、沈利はぶっきらぼうに答えを返す。

「結局さ、それって押し付けっていう訳よ」

フレンダは意地の悪い笑みを浮かべて、沈利に茶々を入れた。

「知るか、あのクソ野郎が困ろうがあたしの知った事じゃねぇ。肝心なのは当麻が納得できるって事だ」

「とうまはあーいう子を見捨てる事が出来ない」

沈利の言葉に、理后も賛同の意を述べた。

フレンダや最愛も、そのとおりと言いたげに微笑んでいた。

「あ、でも超困りました」

「どうしたの？」

「……当麻お兄ちゃんの事だからフラグを超立てるんじゃないかと……」

最愛の言葉に、他の姉妹たちはハッとなった。

そして、ある事を懸念していた。当麻の持つ「フラグ体質」が、インデックスに発動しないかと。

「「「「……」」」」

恋のライバルは増える一方か、姉妹はため息を吐きながら同じ想い

を共有していた。

魔術師との邂逅

当麻は家を飛び出すと、すぐさまインデックスの後を追う。
幸いにも余り時間がたっていなかったので、インデックスはすぐ発見出来た。

「インデックス？」

辺りを警戒しつつ移動するインデックスに当麻は背中越しに声をかける。

「うひゃあ！　ってなんだとうまか」

その声に背中をビクっとさせるインデックス。
だが、声をかけた人物が当麻と分かるとほっとした顔をする。
本人は警戒して移動しているつもりだが、傍からみると挙動不審な人物にしか見えなかった。

「探したぞ、インデックス」

「……何のようかなぁ」

周囲の警戒を怠らず、インデックスは当麻に話しかける。
その態度は、出来ればこれ以上関わらないで欲しい。
そんな雰囲気を当麻は感じていた。

「インデックス、これから小萌先生の家にいかないか？」

「小萌先生？」

自分の知らない人の名前を聞いたインデックスは、僅かに首をかしげながら当麻を見た。

「うちの学校の担任でさ。家出した子とかを拾って家に泊めてあげるんだよ。ああ、誤解しないでくれよ。きちんと……女性だから」

女性、という発言に僅かばかり間があったのをインデックスは気付いた。

だが他人を巻き込みたくないインデックスは、あえて当麻に尋ねることをしなかった。

「……というわけだ。だからこれからその家に行こう」

「でも……」

出来れば当麻にも自分を忘れて欲しい、そんな思いがインデックスにはあった。

これ以上他人を巻き込んで、不幸になる人を見たくないのである。

だからこそ、インデックスは当麻の申し出に頷くことを躊躇っていた。

「何、大丈夫だ。小萌先生なら了承してくれる」

だが当麻は単にインデックスが、遠慮しているだけだと勘違いしていた。

なので、大丈夫と強く言えばいいと考えていた。

そんな当麻の態度に、インデックスは不思議なものをみる感じで見ていた。

そしてある疑問が浮かび上がる。

「一つ聞かせて……とうまと私はさっき出会ったばかりだよ。どうしてこんなにも関わろうとするの？」

それは当麻がインデックスと関わり合いを絶とうとしない事である。インデックスには、当麻がそこまで自分に関わろうとする理由が分からなかった。

長く交友をしていたわけでもない。ただ、偶然にも出会っただけだ。すぐ切れそうなほど細い縁を、当麻は必死に掴み続けていたのだ。

「誰かが不幸にならないために、別の誰かが不幸になる……そんなのは嫌なんだ。そしてその不幸を知ってるのに、なにもしないでのうのうと暮らす自分が……」

そしてインデックスは知る。当麻は単に馬鹿がつくほどお人好しなだけなのだと。

見方によっては、当麻の態度はエゴ丸出しである。だが、彼は例え何と言われようと助けるのを止めないだろう。

自分の身をまったく省みずに。

「……分かったんだよ。行く宛もないし」

そんな当麻だからこそインデックスは賭けてみる気持ちになった。

幾多の希望と絶望を繰り返し、ついには諦めに染まったインデックスの心。

その心に再び希望の灯火が宿る事を願って。

「じゃーそっちに移動するか」

勿論、打算的な気持ちがあったのも否めない。
インデックスの事情を知らずに、交友をしてくれる人間の側にいれば追手も手出しがしにくい。
学園都市という場所で交戦を行い、全く関係ない人間を巻き込んだらどうなるか。
その後がどうなるか分からない魔術師たちはいないはず。
インデックスは、そういう計算も頭の片隅でしていたのである。

最も、それは正常な判断が出来る魔術師に限られる事をインデックスは気付いていなかった。

話がまとまると、当麻はインデックスを連れ立って小萌が住む家まで移動した。
到着まで大した時間はかからず、ものの十数分で到着した。

「しっかし相変わらず高そうなマンションだなぁ……」

当麻は目の前にある高級マンションを見上げながら呟く。
言っては悪いが、自分が知っている先生の給料レベルで住めるような場所ではない。
どう見ても学園都市にいるお偉いさんレベルが住むような場所である。
たまに用があってくるが、当麻は毎度ながらそう思っていた。

（最も、住めている理由はアイツが払っているからだけどなぁ～）

「さって部屋番号はっと……」

たまに遊ぶ友人の顔を思い浮かべながら、当麻はマンションの入口へと歩み寄る。

「……ねぇとうま。なにかおかしいんだよ」

入り口にあるオートロックを解除しようと、部屋番号を押しかけた当麻にインデックスは話しかけてきた。

「おかしい？　何が？」

「気付かない？　さっきから誰とも会わないんだよ」

「高級住宅街だし、こんなものじゃないかなぁ？」

周りを見渡したが確かに誰もいないな、と当麻は思っていた。だが、高級住宅街に入るエリアは、人通りが少ないのではと当麻は思っていた。

「ちょっとした仕掛けをして人払いをしてるからね。人と出会わないのは当然だよ」

しかしそれは間違いであった。突然背後から声をかけられ、当麻とインデックスは慌てて声がした方を向く。

そこにはニメートルを越す赤毛の人間が立っていた。

右目の下にバーコードのような刺青があり、遠くからでも分かるほど甘ったるい香水の匂いを漂わせていた。

漆黒の神父服を着ているが、派手なアクセサリー類を身につけている。

顔立ちは未成年っぽく見える。年はインデックスと同じ十四、五程度に見えた。

だが目付きは悪く、かつタバコを咥えてた。

つまりどう見ても真っ当な部類の人間ではないと、傍目からも分かるほどの出で立ちであった。

「僕の名前はステイル＝マグヌス。さぁインデックス、鬼ごっこはもう終わりにしよう」

ステイルはタバコを揺らしながら、インデックスへと話しかける。

「テメェがインデックスを狙ってる追跡者って奴か」

瞬時に当麻は理解した。目の前の男はインデックスを狙っている『魔術師』とやらだと。

当麻はこの時まで魔術師という言葉を信じていなかったが、ステイルを見て考えが変わった。

この男は自分の住んでいる学園都市という世界の『外』の住人だという事が。

当麻はインデックスを庇うように立ち、ステイルと対峙する。

「君には関係ない事だよ。死にたくなかったらとっとと逃げた方がいいよ」

口元のタバコを揺らしながら、目の前の当麻をつまらなさそうに見ながらステイルは言う。

「ふざけんじゃねぇ！魔術師だかなんだか知らねぇが……あんたがどんな理由でインデックスを追いかけるかは知らないが……俺はインデックスを助ける！」

「……学園都市の人間なのに、魔術師を知っているのか。どうやら君はここで死ぬ運命のようだ」

激昂する当麻を見ても、ステイルは微塵も動揺していなかった。
ただ冷徹に何かが刻まれたカードを手にとっていた。

「それはルーン文字！　とうま！　危ない逃げて！」

ステイルが持っているカードの文様を見てインデックスは叫んだ。

「もう遅い！」

インデックスが叫ぶと同時に、ステイルはカードを手に『魔術』を使おうとした。

「人の家の前で何をやっているンですかァ？」

しかし突如として背後から聞こえた言葉に、ステイルの動きが一瞬で凍結する。
身構えて右手を突き出していた当麻と、その背後にいたインデックスもステイルと同じ様に動きを凍結する。
そして全員が声を発した人物の方を向く。

そこにはこの場に不釣合な人物が、コンビニ袋を片手に立っていた。

一方通行

その少年はとても白かった。
何色にも染まるし、何色にも染まらない。
ただ純粋なまでに一色な人間だ。

ステイルの第一印象はそんな感じだった。

もう一度ステイルは少年を見る。
髪は短髪で白く、肌も白くまるでアルビノ患者のようだ。
だが瞳だけは爛々と紅かった。
体つきも中性的で、女に見えるほど体の線は細い。
普通の人間が見れば、単なる病弱なもやし野郎だと思うだろう。

しかし一つだけ違うモノがあった。
それは彼から漂う雰囲気。それは常人では決して纏う事はない。
だからステイルが今までの戦闘で培った経験とカンが叫ぶ。

コイツは危険だ、と。

目の前の少年に警戒しながら、ステイルは現状を理解しようとする。

（人払いのルーンを使用しているのに、何故コイツはここにこれた！）

顔には出さなかったが、内心は動揺でいっぱいのステイル。
この付近一帯にかけた人払いの魔術が破壊された形跡はない。
そもそも目の前の少年は魔術師には見えない。
ステイルと『同じ世界の匂い』がしない。

なのに何故……？

「ちィッとコンビニいってきただけなのに、愉快な来客をつれてきたなァ三下」

「すまねぇ一方通行。だが、インデックスを助けるためにお前の力を借りたい！　頼む、力を貸してくれ！」

一方通行と呼ばれた少年に、当麻は頭を下げる。
その態度を見て、一方通行は少しだけ顔をしかめる。
その後、視線をステイルとインデックスの方へ順に向ける。

全てを見た後、一方通行は口元を歪ませた。

「ハッ、頼られるっつーのも案外悪くねェ気持ちだなァ。顔を上げな三下ァ」

邪悪な笑顔を浮かべながら、一方通行はステイルの方を向く。
その顔は、退屈しのぎを見つけて喜んでいる顔だった。

「す、すまん」

そう言って当麻は顔を上げると、インデックスを庇うような位置に移動する。
突如現れた一方通行と、インデックスを庇うように立つ当麻。
二人の、特に一方通行の雰囲気に、ステイルは警戒心を強めていた。

（やれやれ、今回の回収は骨が折れそうだ……）

ステイルは思う。

余り『能力者』と対決はしたくないが、現状ではそうも言っていられない。
だから目の前の人間がどんな人間だろうが関係ない。
自分はあの時誓った。
彼女を助ける為ならどんな敵だろうが倒してみせると。
だからこそ、今この場でステイルは逃げるという選択肢を選ばなかった。

「疲れるばかりで良い事はないな。『Ｆｏｒｔｉｓ９３１』」

その言葉を口にした途端、ステイルの雰囲気がガラリと変わった。
その変わり様は、少し離れていた一方通行たちでもはっきり分かる程だった。

（なんだァ？　急に雰囲気が変わりやがった）

急な態度の変貌に、一方通行は少しだけ警戒する。
当麻も同じようにステイルを睨むだけで、その場から動こうとはしなかった。

そんな二人を尻目に、ステイルは自身の懐からカードを取り出す。

「炎よ、巨人に苦痛の贈り物を！！」

ステイルが詠唱を終えた瞬間、カードが突然燃え出した。
それも、単に燃えただけではなく炎が剣のように一直線に生み出された。

「……」

灼熱の炎剣を見ても一方通行は微動だにしなかった。
ステイルはその態度に違和感を覚えたが、気にせず炎剣を横殴りに一方通行へ叩きつけた。
自身に向かってくる炎を見ても、一方通行は動こうとしない。
ステイルは瞬間的に勝利を確信した。
やはりコイツが危険だと思ったのは気の迷いだと。

「なっ！？」

一方通行に叩きつけられて爆発すると思った瞬間、パキリとガラスが割れる音がした。
その音共に、全ての炎が同時に消し飛ぶ。
まるで最初から存在していなかったかのように。

「おい、三下ァ」

「一方通行大丈夫ぶへはぁ！」

右手を突き出しながら振り向く当麻に、一方通行の拳が突き刺さる。
予想外の所から飛んできた拳に、当麻はガードも何も出来ず顔面に食らった。
押しのけられるように飛んでいく当麻。
ベクトル操作でインデックスに当たらないようにしたが、代わりに当麻は顔から地面に激突した。
相当痛い音が辺りに響き渡る。

「なァにをしてるンですかァ。人の邪魔をするンじゃねェ」

助けた相手を殴る、その行為はインデックスは勿論、ステイルすら

思考が固まった。
誰もが思う、助けた相手をぶん殴るなどありえないだろうって。
体が丈夫な当麻は、鼻を抑えながら立ち上がる。
その瞳は少しだけ涙が浮かんでいた。
「問答無用の拳！　上条さんは説明を要求しますっ！」
「オーケー、お前邪魔、そこで大人しくしてろ」
「酷いっ！　この扱いはあんまりだ！」
わめき散らして抗議する当麻だが、一方通行は完全に無視していた。
完璧な無視の態度に、当麻は電柱を前にしていじける。
それをインデックスが慰めるという、とてもシュールな光景が展開された。
「もう一度さっきの炎を出してみなァ」
当麻とインデックスの光景に、頭の理解が追いつかなかったステイル。
だが一方通行の言葉に反応すると、懐からもう一度カードを取り出す。
「（安い挑発をしてまで、何を企んでるか知らないが……）炎よ、巨人に苦痛の贈り物を！！」
先ほどと同じように詠唱を終えると、ステイルの手に灼熱の炎剣が出来上がる。
そして、それを先ほどと同じように横殴りに一方通行へ叩きつけた。

今度は炎が一方通行を完全に飲み込む。
ステイルは今度こそ勝利を確信した。
「超能力や自然科学とは違うプロセスで作られた炎ねェ……」
しかし燃え盛る炎の向こうで、聞こえるはずのない声が聞こえた。
その事に余裕の笑みを浮かべていたステイルの表情は、みるみる驚愕の色に変わっていった。
（ば、馬鹿なっ！　三千度の炎の中で人が生きていられる訳がない！？）
人肉は二千度以上の中では『焼ける』ではなく『溶ける』になる。
そんな世界に入れば、飴細工のようにひしゃげた金属と同じようになっておかしくない。
なのに灼熱の地獄の中から、一方通行は気軽に声をかけてきた。
「なっ！？」
しかしそこで驚きは終わりではなかった。
一方通行の周りにあった炎が、突如ステイル目掛けて襲いかかってきた。
慌てて炎を生み出し、自分に襲いかかる炎を打ち消す。
自分の魔術が尽く破られる。
その事にステイルは焦ると同時に、ある事を理解した。
（これが……能力者って奴か……）

『魔術師』と対極の位置にいる存在。
その強さを垣間みたステイルは、今まであった余裕が全てなくなっている事に気付く。

「手加減してる余裕はないか……」

全身から嫌な汗を噴き出しながらステイルは口を開く。

「世界を構成する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

詠唱を口にしながらステイルは思う。
小細工ではどうにもならない、ならば自分のもつ最大の魔術を行使する以外にない。

（ここで彼女を捕まえると決め、アレを設置しておいてよかったと思う）

ステイルには目の前のシマシマ模様の服を着た生き物に寒気を覚えていた。
人の形をしているが、その中身は人にはないものが詰まっている気がして背筋が震えた。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり」

「それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり」

「その名は炎、その役は剣」

「顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せーーーーーーーッ！！」

「イノケンティウス！！」

詠唱を終えた瞬間、ステイルの前に巨大な炎の塊が飛び出した。

魔女狩りの王

ステイルの雄叫びと同時に、一方通行の前に炎の巨人が出現する。
今度こそ勝利を確信したステイルは、少し余裕を取り戻し新しいタバコを咥えた。

ステイル「魔女狩りの王イノケンティウス。その意味は…必ず殺す…！」

一方通行「いいねェ、少しは楽しめそうだよ」

炎の巨人が巨大な十字架のようなものを、一方通行に振り下ろす。
そしてその炎が一方通行に触れる。

一方通行「なっ！？」

一方通行に触れた瞬間、炎の巨人は霧散した。
しかし何事もなかったかのように、再び炎の巨人は出現したのである。
さすがの一方通行もこの現象には酷く驚いた。

ステイル「僕の奥義だからね。直ぐに終わったらつまらないだろう？
ご満足いただけたかな？」

一方通行「あァ、そうだなァ。死ぬほどめんどくせェってのは分かったよォ！」

何度かの接触後、一方通行はイノケンティウスの性能を解析した。
自分が反射した炎を再度取り込み、再び自身の体としている。

だからいくら霧散させた所で効果は得られないのである。
ならばこの効果を維持するものがあるはずだ……そう考えた一方通行。
だが、魔術に関しては無知である彼では、一体何が関係しているのか分からない。

イノケンティウスと一方通行が戦っている間、ステイルはずっとインデックスの方を見ていた。
正確には彼女を庇うように立っている当麻をである。
顔には出さなかったが、ステイルにはひとつの不安があった。

――――　さっきの炎のようにイノケンティウスも打ち消されたら？

そんな事は起きない、そう思いつつももう一方でありえない話ではない。
そういう相反する考えが、ステイルの中に渦巻いていた。

インデックス「そこの白い人！」

数え切れないほどイノケンティウスを霧散させた一方通行。
それをただ見ていたインデックスが、一方通行に向かって叫ぶ。

一方通行「あァ？　なんだクソガキ」

インデックス「いくら魔女狩りの王を攻撃しても意味がないよ！
　　辺りに刻まれたルーン文字を消さない限り！」

ステイル「！」

インデックスに魔女狩りの王の正体を看破され、わずかながら動揺

するステイル。
だが、それもすぐ収まり余裕の顔に戻った。
ステイル（幾ら何でも一瞬でルーン文字を消す事はできない。
それにそんな事はさせないよ！）
この辺り一帯に貼りつけたルーン文字。
それを全て打ち消さなければ魔女狩りの王は破られない。
広範囲かつ大量のルーンで構成されている事こそ、魔女狩りの王の真価なのである。
今まで一度として敗れたことはない。
その自信が、ステイルの余裕に繋がっていた。
一方通行「ルーンだかなんだか知らねェが、どうすればいいンだァ？」
インデックス「ルーンは色々あるけど、そいつは紙に印刷して使っているよ！」
その話を聞いた時、一方通行は酷く楽しそうな笑顔を浮かべた。
そして二度足踏みをする。たったそれだけ…
――たったそれだけなのに炎の巨人はあっさり無に帰した。
ステイルは有り得ないものを見たかのように驚き、目を見開いた。
その顔は驚愕というより、困惑とも取れる顔であった。
一方通行が何をしたか分からない。分からないが……
一方通行「で？　次のショーは何ですかァ？」

この男が何かをした。それだけは分かった……

ステイル「一体何を！　どうやって！？」

一方通行「紙むき出しとはなァ。燃えやすいンで気を付けろよ。
　　あと水にも弱そうだなァ。ラミネートフィルム付けておけよォ」

ステイルの問いには答えず、一方通行は一気に距離をつめる。
魔女狩りの王が敗れたという現実を受け入れられないステイルは、自身の顔に一方通行の拳が飛んできてもなお、反応を返すことができなかった。
気絶する程度にベクトル調整された一方通行の拳をマトモに受けたステイルは、そのまま数メートル吹き飛び地面に倒れ伏した。

一方通行「……ンで、どういう理由が有るンですかァ？」

気絶したステイルを一瞥すると、インデックスと当麻に話しかける。

当麻「え、えっとな。実はこの娘を暫く預かって欲しいんだよ」

そして当麻は一方通行に話した。インデックスが狙われている事。彼女が行く宛がない事。そこで小萌先生に預けに来た事などを。
暫く黙って聞いていた一方通行だが、小萌先生に預けるという所でわずかながら反応した。

一方通行「……はァ…分かった。ロリには俺から話してやンよォ」

一方通行は内心思った。
出来れば危険には晒したくない。だが、小萌の性格上こういう子を

見捨てる事はしない。
さっきの奴だけなら問題ないが、もし別の連中が襲ってきたら……
そして一方通行だけではなく、小萌も巻き添えを食らったら……
過去の記憶が一瞬フラッシュバックしたが、一方通行はそれを打ち消した。

当麻「本当か！？　助かるよ」

一方通行「ただし、全部話してロリがダメだと言ったら……さすがに無理だぞ」

念のため当麻に釘をさす。勿論、小萌が断るとは思わない。

一方通行「後なァ……ロリが巻き込まれたら……生きててゴメンナサイコースな」

ギロリと当麻を睨む。一方通行にとって敵を倒すだけなら楽である。
だがそれによって自分の周りの人間を傷つけるのは極力避けたい。

当麻「わ、分かってるよ。俺だって本当は心苦しい。
だけど頼れる人が小萌先生しかいないから……」

一方通行「あーあー、分かったよォ。ったくめんどくせェなァ」

一方通行はまだ何か言いたげな当麻を追い返す。
これ以上無駄なことで、うじうじ悩まれても面倒なだけだと一方通行は思った。
一方通行の不器用な優しさに気付いた当麻は、結局何も言わずそのまま自分の家に帰っていった。

闘いの後

沈利「遅い」

遅すぎると思った。ここから担任の家まで往復でも４０分程度だ。
当麻がどんな不幸にあっていても、たいてい１時間以内には帰ってきていた。
既に１時間半は経っている。遅くなるなら連絡ぐらい入れるだろうに…

理后「むぎの、落ち着く」

フレンダ「お兄ちゃんに電話はした？」

最愛「先程超しましたが、超留守番電話でしたね」

そう言いながらも三人ともどことなく落ち着きがない。
携帯電話にも出ない。それが彼女らの不安に拍車をかけている。

沈利（またアイテムに逆恨みしてる人間が当麻を襲ったわけじゃないよなぁ…）

沈利たち４人は学園都市の闇、暗部組織「アイテム」の構成員だ。
リーダーを沈利として、残り３人が構成員。学園都市の上層部から色々な仕事を請け負っている。
内容は多岐にわたり、それには殺しも含まれている。
そういう組織だから逆恨みをされることは多い。自分たちは狙われても返り討ちにできるからいい。
だが当麻はそうはいかない。以前狙われたときもボロボロになって

帰ってきた……
沈利が思考の海に浸っていると、玄関から音がした。

当麻「た、ただいま～」

なんとなくバツの悪い声が聞こえてきた。また何か不幸なことに巻き込まれたんだろう。
だがそれでもちゃんと帰ってきてくれたことが嬉しかった。

当麻「ごめん、遅くなった」

だが、リビングに入ってきた当麻を見てそんな気分は霧散した。
入ってきた当麻の全身はボロボロであった。
あちこちに擦り傷があり、服は血に染まっている。

フレンダ「ちょ、お兄ちゃん！　その怪我どうしたって訳よ！」

沈利「最愛！　救急箱を持ってきて！」

最愛「超了解です！」

最愛がすぐに救急箱を取りに行く。理后は体を拭くために濡れタオルをとりにいった。
フレンダは当麻を強引に座らせている。
きっと怪我がたいしたことないと思っているのだろう。

沈利「当麻、ちゃんと手当受けなさい」

当麻「沈利姉ちゃん、たいしたことないって…」

そう言って当麻は笑う。自分は大丈夫だから心配しないでと言いたげな顔をして笑った。

沈利「当麻、手当を受けて…おねがい」

当麻の右腕を掴んで顔を見つめる。

当麻「姉ちゃん…わかったよ」

何か言いたげだったが、当麻はそれ以上何も言わず大人しく座った。
まもなく最愛と理后がそれぞれ目的のものを持ってきた。
フレンダはゆっくりと当麻の服を脱がしている。
時々顔をしかめるのは傷口に触れたからだろうか。

沈利「何があったかは聞かない。けどこれだけは覚えておいて。
あんたが傷ついて悲しむ人間がいるって事を…」

当麻「うん…ごめん。姉ちゃん」

沈利「んっ…宜しい。とりえず治療を受けなさい。ご飯は出前でもとればいいしさ」

最愛「さぁお兄ちゃん、超脱ぐです。スッポンポンになるです」

当麻「え゛!?」

フレンダ「最愛、すっごい大胆な訳よ」

沈利「…ごくっ」

当麻「あの～…何か別の意味で怖い気がするんですが…」

理后「体を拭かないといけないから、とうま服を脱ぐ…」ポッ

当麻「理后姉ちゃん!?　何で顔を赤くしながら迫ってくるんですかね!?」

沈利「まぁまぁまぁ、その服使い物にならないだろう。破っちまえよ!」

最愛「超了解です!」

当麻「ふ、不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

こうしてケガの治療にかこつけて、当麻は姉妹にくまなく体を触られた。

小萌先生

一方通行「あのやろう…妙な能力を使いやがったが…魔術だと？」

魔術とかメルヘン垣根じゃあるまいし、信じられますか？って話だ。

だがアイツが使った炎…発火能力（パイロキネシス）だったら俺が操作出来ない理由にはならない。

インデックス「だから魔術は存在するんだよ？」

一方通行「あァ、メルヘンかと思ったが実際見せられたら否定は出来ねェな」

インデックス「魔術について知りたかったら教えるけど？」

一方通行「関係ねェ。誰がこようが敵対するならブッ潰す。それだけでいい」

ゴロンとソファーに寝転ぶ。

小萌「一方ちゃん行儀が悪いですよ～」

一方通行「チッ」

舌打ちしながらもノソノソと起き上がり、ソファーに座る。

小萌「お待たせしました、ちょっと片付けをしていたもので」

インデックス「いいんだよ、これからお世話になるし遠慮は無用だ

よ！」

一方通行「テメェは少しは遠慮しやがれェ！」

小萌「一方ちゃん、女の子に対して大声を上げてはだめですよ～」

一方通行「チッ」

再び舌打ちをするも、小萌の言う事はきちんときく一方通行。

インデックス「それにしてもこもえ、本当にいいの？」

小萌「何がですか～？」

インデックス「私狙われてるよ？　危険じゃないの？」

小萌「先程かみじょーちゃんからも電話で頼まれましたし……
　生徒のお願いを無碍に出来るほど先生は冷たくないのですよ」

ちょっと顔を赤らめながらも小萌は嬉しそうに話す。
小萌からすれば生徒が先生を頼ってくれるのは、とても嬉しい事なのである。

一方通行（三下ァ…明日ブッ殺す）

しかし一方通行から見ると、当麻にフラグを立てられたのでは？と疑ってしまうようである。
なんだかんだでヤキモチを妬いている一方通行であった。

インデックス「わかったんだよ、これからしばらくご厄介になるん

だよ」

小萌「はい、わかりました。
　一応家の持ち主は一方ちゃんなのですが、わたし的には問題ありません」

一方通行「あァ…俺はロリがいいなら別に文句はねェよ」

小萌「それじゃあＯＫという事で…お部屋の用意をしてきます～」

そう言って小萌は空いてる部屋へ向かった。
一方通行は小萌が奥に行ったのを確認してからきり出した。

一方通行「一応断っておくがなァ…もしロリを傷つけたら…」

インデックス「こもえを傷つけたら？」

一方通行「この世に生まれてゴメンナサイって言うまでブチ殺す」

インデックス「…あくせられーたはこもえが大事なんだね」

常人が見たら腰を抜かすほどの眼光で睨んでいる一方通行だったが、インデックスはそれを見てふと笑った。

一方通行「…あいつは俺を救ってくれたンだ。
　だからアイツを傷つける存在は絶対に許さねェ…」

インデックス「大丈夫だよ、私こもえが好きだし！」

未だ睨んでいる一方通行に対して二パッと笑うインデックス。

一方通行もそれが嘘ではないとわかったので、睨むのをやめた。

一方通行（まァ何かあれば俺が守ってやればいいンだ）

たとえ自分がどうなろうと小萌を守りたい。

そう強く思いながら一方通行はソファーに寝転がった。

後に戻ってきた小萌に怒られたのは言うまでもない。

魔術師たちの思惑

ステイル「いやはや…さすがに死ぬかと思ったよ」

？？？「インデックスの回収は失敗したそうですね」

ステイルのボヤキに隣にいた女性が応える。
Tシャツに、片足を大胆に露出させたジーンズ。
何より目を引くのはその腰に下げた日本刀。
二メートル以上は有るかと思われる長刀である。

ステイル「アレが学園都市最強の異能力者と知ってたらもっと別の方法を取ってたよ」

ふぅーと煙を吐き出す。実際無様に負けはしなかったもののはっきり言って一方的だった。それに…

ステイル「一緒にいた少年も気になる。どういう理由か分からないが魔術を打ち消した」

？？？「打ち消しの魔術を使ったのではないですか？」

ステイル「いやそんな風には見えなかった。こう触れるだけで壊された感じだ」

白い少年もそうだったがそれ以上にあのツンツン頭の少年が異質だった。
学園都市の人間だから魔術なんて精通してるとは思えない。なのに…

？？？「まるでそれが当然かのように打ち消した…ですか」

ステイル「そうだね。まぁ今彼女はあの男の元にはいない。だからあっちは気にしないでおこう」

？？？「この街の内通者に聞きましたが、現在彼女はあの白い少年の家にいるとの事…」

ステイル「ツンツン頭の家も確認したがかなりの距離がある。だから多少の騒ぎでは駆けつけることもないだろう」

？？？「次は私が行きます」

ステイル「了解。ボクはサポートに徹するよ」

？？？「ええ、お願いします」

二人は揃って空を見上げた。

？？？「期日まで時間がありません。急がねば…」

女性の顔にわずかな苛立ちが浮かんでいた。

垣根帝督

小萌「かみじょーちゃんは今日も補習ですねー」

当麻「不幸だ…」

本日も補習確定を言い渡された。ここのところ毎日言われている気がする。

俺ってそんなに頭が悪いのか？と本気で思うようになってきた。

？？？「補習ねぇ…補習ばっかりで最近俺と遊んでくれなくて寂しいぜ」

うな垂れている当麻に、ホスト風の男性が声をかける。

当麻「あぁ……上条さんも垣根の１／１００でいいから頭がよくなりたい」

垣根「勉強すればいいじゃねぇか」

垣根帝督、学園都市レベル５第二位。

この学園都市でただひとり一方通行と喧嘩が出来る人間である。

当麻「そうはいいますがね、垣根さん。

　上条さんは普通の人間なので判らないことも多々ありますよ」

垣根「そんなに難しいかぁ？　俺は退屈でほとんど寝てるよ」

当麻「レベル５の頭と一緒にしないでくれ！」

普通に笑いあい、時には冷やかしあう二人。
だが、過去にこの二人は殺し合いをした関係である。
それが今ではクラスメイトであり、友達である。
まっこと人生とは不思議である、と頭の悪い当麻は思った。

垣根「ま～仕方ない。帰り道にナンパでもしてくるか」

当麻「おぅ、成功を祈ってるよ」

垣根「この俺に常識は通用しねぇ。んじゃ、またな～」

そのまま垣根は教室を出て行った。
垣根は見た目かなりイケメンであり、身長も高くモテる要素はたくさんある。
ただ一つ、彼には決定的な弱点があるが……

当麻「あれでメルヘンじゃなければなぁ～」

イケメルヘン。それが彼につけられた不名誉なあだ名の一つである。
他にも中二病患者やコミュ障など、不名誉なあだ名は多々ある。
が、面と向かって彼にそれを言える人間は少ない。

小萌「お待たせしましたー」

垣根が出ていってすぐに小萌がやってきた。
その手に大量の紙をもって……

当麻（まさか……）

嫌な予感がした。

小萌「さぁかみじょーちゃん！　今日はたっぷり時間があるので補習の量も倍ですよ！」

運に見放されている当麻の勘は、不幸な事だけよく当たるのであった。

当麻（不幸だ……）

声に出して言うと、更に倍増されそうなので心のなかで思うだけにした。

結局補習が終わったのは、最終下校時刻より少し前であった。

補習を終え、更にたっぷりとレポート提出というお土産を貰った当麻。

その足取りは重く、もはや人生が終わったかのような顔で歩いていた。

最愛「当麻おにいちゃ～ん」

ふと誰かが読んでいる気がしたので、声のした方を向く。

当麻「最愛、お前も今帰りか？」

妹の最愛であった。最愛は小走りで俺の元へやってくる。

最愛「超その通りです。超一緒に帰りましょう～」

そしてそのまま俺の隣までやってくると、いきなり手を握ってきた。

当麻「さ、最愛。恥ずかしいから手を離してくれ……」

さすがにこの年で妹と手を繋いで帰るのは恥ずかしい。
そう思った当麻は、やんわりと断りを入れた。

最愛「超いいじゃないですか。
　たまには妹の甘えに超答えるべきです！」

だが最愛からは却下と言われ、更に強く握られる。

当麻（最愛は時々甘えん坊になるなぁ…）

声に出していうと、照れによる窒素パンチをもらう。
なので当麻は心のなかで思うだけに留めておいた。
とはいえそろそろいい年頃なので、出来れば勘弁願いたい。

最愛「えへへ～」

しかしはにかみながら笑う最愛を見て、当麻はその考えを否定した。
やっぱりもう少しは、この子の甘えに答えてあげたい……と
それになんだかんだで甘えてくれるのはお兄ちゃん冥利に尽きるとも思った。

当麻「（土御門の気持ちが少しはわかったかな……）じゃあ…帰るか！」

最愛「超了解です！」

そして二人は一緒に歩き出す。

当麻の足取りは軽く、さっきまでのレポートによる絶望など微塵も感じさせない。
最愛も当麻の手をしっかりと握りながら、今日学校であった事を当麻に話す。

当麻と最愛、二人とも同じことを思っていた。

――――　この幸せがずっと続きますように……

だが二人は気づいていなかった。
二人の会話をこっそり盗み聞きしている人間の存在を……

御坂美琴

当麻と最愛、ふたり仲良く歩いてる少し後ろで、一人の少女が二人をじっと見ている。

？？？「あれは……絹旗最愛。何だってアイツと一緒に歩いてるのよ」

周りから、奇異な目で見られているのに気付かない少女の名前は御坂美琴。

レベル５で第三位に位置する子。クラスは違えど最愛と同じ常盤台に通っている。

御坂「くぅ……手なんて繋いで！　わ、私だって繋いだ事ないのに！？」

ビリビリと電気を漏電させながら、地団駄を踏む。

関わらないほうがいい、それが彼女を見た人たちの共通する答えであった。

御坂「よしっ！」

ぐっと手を握ると、御坂は当麻たちに近づいていった。

御坂「き、奇遇ね。何をしているの？」

緊張していたのか、御坂は少し上ずった感じで当麻たちに声をかけた。

御坂の声に反応したのか、当麻と最愛は御坂の方を振り向いた。

当麻「ん？　ゲッ、ビリビリ！？」

御坂「アンタ！　人の顔見てゲッて何よ！？」

当麻のつぶやきに、思わず電撃を撃とうとする御坂。

だが、最愛が居るので御坂はすんでの所で電撃を放つのを踏みとどまる。

御坂（やっぱり睨まれてるわね……）

御坂は最愛を一瞥したが、彼女の予想通り最愛は御坂を嫌悪感丸出しで睨んでいる。

最愛「何かごようですか？　超電磁砲」

更に口調も固く、とてもじゃないが友好的とは思えない。

当麻「さ、最愛？」

当麻は困惑した。

こんな最愛を見たことがないからだ。

当麻にとって最愛は、甘えん坊な妹であり元気で可愛らしい子だと思っている。

だが今の最愛はそんな雰囲気を微塵も感じさせない。

まるで親の仇のような感じで、御坂を睨んでいる。

対する御坂は、何故自分がそんなに憎まれるのかが理解出来ない感じであった。

直接的な接触はあまりない。むしろ皆無といっていいほどだ。
学校は一緒だが、クラスも別だし彼女は寮に住んでいない。
研究所の手伝いをしてるから、寮生活が免除されている子。
それが最愛に対する御坂の認識である。

御坂（一度も会話した事がないのに、何でここまで睨まれるのよ！）

だが結局その答えを知りたければ、彼女から直接聞くしか無い。
しかし友好的ではない以上、素直に話してくれるかどうかも怪しい。
結局のところ、御坂にとっては八方ふさがりな状態である。

最愛「ようがないのなら、これで超失礼します。
　当麻お兄ちゃん、超帰りましょう？」

御坂（お兄ちゃん！？　アイツってそんなプレイが好きなの！？）

当麻「あ、あぁ。んじゃな、ビリビリ」

凄まじい勘違いをしている御坂に気づかず、当麻は手を振って別れようとする。

最愛「それと……いい加減人の兄に、電撃で攻撃するのは超辞めてください。
　超不愉快です」

最愛はそう言うと、回答も反論も聞かずに走り去っていった。
無論当麻の手を掴んだままで……

ものすごいスピードで去っていった最愛と当麻を、ぽかんと見送るしかない御坂。

御坂「一体なんなのよ……」

だが彼女の疑問に応えてくれる人は、その場にいなかった。

暫く走っていた最愛と当麻だが、最愛が息切れをしたのか徐々にスピードが落ちていった。

そして遂には歩いてるのと同じスピードまで落ちてしまった。

当麻「はぁはぁ……さ、最愛。ちょっと休憩させてくれ」

全速力とは言わないが、結構長く走った気がする。

肩で息をする当麻を見て、最愛も歩くのを止めその場に止まった。

だが繋いでいる手だけは離さなかった。

当麻「ふぅー、しかしどうしたんだ最愛？　さっきのお前はちょっと怖かったぞ」

最愛「……超電磁砲が嫌いなだけです」

ぷいっと拗ねたようにそっぽを向く最愛。

当麻は少し悩んだが、最愛の頭に手を置くとゆっくりと撫でた。

当麻「何があったか知らないが、アレでも結構イイヤツだからさ」

最愛「……お兄ちゃん」

最愛の頭を優しく撫でながら、語りかける当麻。

当麻「ほら、機嫌直せって。可愛い顔が台なしだぞ？」

最愛「かかかかかかかかか可愛いって！？」

瞬間湯沸かし器のように、顔を真赤にさせてぽにくる最愛。

あたふたとした拍子に繋いでいた手が離される。

そして……

最愛「超照れること言わないでください、お兄ちゃん！」

最愛から照れによるパンチが飛んできた。

当麻「ごぼふぁ！」

殴られてから当麻は気付く。

・・

今まで最愛と手を繋いでたのは右手であることに。

そしてその手が離された後の、最愛から殴られればどうなるかを。

当麻（窒素パンチだけは……勘弁だ）

最愛「わー！　超ごめんなさーい！」

謝ってくる最愛の声を聞きながら、当麻は意識を手放した。

新たなる挑戦者

一方通行は学校から帰宅していたが、ふとある感覚に囚われた。
はじめに感じたのは違和感。少しして違和感はある確信へと変貌した。

一方通行（誰か俺をつけてるなァ…）

一方通行は学園都市最強の能力者である。
過去に彼を倒して最強の座を手に入れようとした馬鹿は腐るほどいた。
だが今自分を追跡している人間は、そんな馬鹿たちとは違う存在である。

一方通行（今日は釣りと洒落こむかァ？）

心底楽しそうに笑いながら一方通行は歩く。
追跡者が痺れを切らして出てくるまで…

一方通行「いい加減出てきたらどうだァ？」

アレからずっと歩き続けたが一向に反応がない。
そろそろ目障りに思い始めたので、さっさと潰す方向に切り替えた。

？？？「…気づいていたのですね」

一方通行「ハッ、気づかれてないと思ってたのか。メデてェ頭してンなァ」

出てきたのはTシャツに、片足を大胆に露出させたジーンズ姿の女である。
しかし何より目を引くのはその腰に下げた長い日本刀。

一方通行（二メートル以上はあンな）

神裂「私の名前は神裂火織、と申します。
　出来ればもうひとつの名は名乗りたくないのですが……」

一方通行「メンドクセェ真似してまでテメェは俺の前に立ってるンだ。
　下ンねェ理由ならぶっ殺すぞ」

神裂「単刀直入にいいます。彼女をこちらに引き渡してください」

一方通行「なンでテメェの命令に従わねェといけねェンだ。
　それに俺がいないうちにあのガキ押さえればイイじゃねェか」

俺や小萌が学校に行ってる間、インデックスは家で一人だったはずだ。
そこを狙えば、誰にも邪魔される事なく捕まえられたはずだ。
それなのにどうしてそうしなかったのか、と一方通行は思った。

神裂「……期日までもう時間がありません。
　下手に彼女を刺激して行方をくらまされるよりは、
　貴方がたの家にいて頂ける方がよいと判断したからです」

一方通行（あン？　期日？）

神裂「そして貴方がたを説得し、彼女を引き取る方が良いだろう…と。
　下手に諍いを起こしても無意味ですので」

一方通行「説得…カカカ…説得ねェ！」

神裂「応じてはいただけませんか？」

一方通行「ハッ！　甘っちょろい事言ってンじゃねェ！
　悪党なら悪党らしく美学を持って力尽くで奪いにきなァ！」

欲しい物は力で奪うもの。
それが悪党らしい姿だと一方通行は思った。

神裂「…交渉…決裂というわけですね」

最初から期待していなかったのか、すぐに臨戦態勢になる神裂。

一方通行「こちとらお前みたいなババァと違って、若ェもんで気が短ェんだよ。
　さっさとかかってきなァ」

ぶちん、とどこかで何かが切れる音がした。

神裂「私はまだ１８歳だぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

神裂は刀を抜く。そして解放する、自身の魔法名を。その名は…

神裂「『Ｓａｌｖａｒｅ０００』！」

Ｓａｌｖａｒｅ０００…「救われぬ者に救いの手を」という意味を持つ魔法名。

一方通行「……１８ィ？　なンだ、てっきり芳川と同じぐれェだと思ってた」

凄まじい殺気を放つ神裂を前にしても全く動じない一方通行。

神裂「……ちなみに確認しておきましょう。
　そのヨシカワさんは一体お幾つですか！！」

神裂の持ってる刀がプルプル震えている。
怒りの余りに強く刀を握っており、小刻みに腕が震えているようである。

一方通行「詳しくは聞いてねェが…多分３０前半なンじゃねェ？」

ぶちん、とまた何かが切れる音がした。
しかもさっきより大きめの音で。

神裂「ふっざけんじゃねぇぇぇぇ、このクソもやしがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

一方通行「オイオイ、戦闘中に更年期障害を起こすンじゃねェよ。
　これだからババァは困るンだねェ」

神裂「『七閃』！！」

これ以上の会話は無用、と言いたげに神裂から斬撃が放たれる。

放たれた斬撃は間合いを無視して一方通行に襲い掛かる。
そして、一度の抜刀にも関わらず、その斬撃の数は七。
七つの斬撃が、四方八方から一方通行に襲い掛かる。

一方通行「…舐めてンですかァ」

だが彼が気怠そうに腕を払うだけで全ての斬撃があらぬ方向に散らばる。

神裂「なっ！？」

彼女の手に隠されていたワイヤーが絡まりあう。
彼女が使う『七閃』とは、抜刀術と思われるが実際はこのワイヤーを用いた攻撃である。
そのワイヤーの数は七。その全てのワイヤーが複雑にからみあっているのである。

一方通行「魔術師ってのは学習能力ゼロですかァ？
何の仕掛けも無ェ物理攻撃が俺に届くワケねェだろォが」

闘う理由

神裂はロンドンでも十指に入る実力者だ。
扱える魔術の高度さ、魔術師にとって不釣合いと思えるほどの身体能力の高さ。
人間としての基礎能力、腕力、脚力、耐久力、反応速度は言うに及ばず、視力、聴力においてさえ圧倒的能力を誇る。
魔術界隈では人間核兵器とすら言われる彼女だが…

一方通行「…さて…言い残す事はあるかァ？」

学園都市最強の悪魔が相手では、一方的な戦いにならざるを得なかった。

神裂「……！！」

首の根を抑えられ、無様に地面にひれ伏す。
どういう理由か分からないが体が全く動かない。
神裂は血が出るほどに唇を噛みしめた。

神裂「く…そ……」

当麻「待て！　一方通行！」

一方通行「！、三下…何故ココにいる…」

突然の上条登場にさすがに驚く一方通行。

ステイル「ボクが呼んだからね」

後ろから二メートルの神父も出てきた。

当麻「どうやら訳ありのようだ。とりあえず話聞こうぜ」

一方通行「ハッ、勝手な事言うな。散々…」

最後まで発言する前に上条がメモを一方通行に突き出す。
が、よく見ればそれは小萌が愛用しているメモ用紙であった。
訝しげに思いながらもそれを受け取る。

当麻（小萌先生が「これを見せれば言う事聞いてくれますよ～」といって渡してきたんだが…効果あるのか？）

ペラッとメモを見た瞬間一方通行の顔が驚愕に染まる。
そして徐々に顔が真っ青になっていく。心なしか嫌な汗をかいてるようにも見える。

当麻（なんだ！　何が書いてあるんだ！？）

明らかに恐怖一色に染まった一方通行の顔を見て、別の意味で驚愕する。
あの一方通行がコレほど狼狽し、恐怖する姿は初めて見た。

一方通行が見てるメモには単に『話を聞かないと一方ちゃんとは口をききません！』と可愛らしい文字で書かれてるだけだ。
学園都市最強の一方通行にとって、ただの教師に嫌われることなど意にも介さない。
が、その相手が小萌だとすると話は別だ。一方通行は小萌に特別な感情を向けている。

それが愛情なのか、それとも別の何かなのかは分からない。
確かなのは一方通行が小萌に対してだけは嫌われたくないと思っている点だ。

一方通行「分かった…話を聞こうじゃねェか」

当麻「うえぇ！　マジか！？」

一方通行「…うン」

当麻「（小萌先生パネェ！）といっても詳しくは聞いてないんだよな」

神裂「……私だって…好きでこんなことをしているわけじゃありません」

今まで地べたに這いつくばっていた女性が立ち上がる。

一方通行「話せ」

神裂「私とステイル…そしてあの子は同じ組織に所属する身。
そして私は同僚であり――――大切な親友です」

当麻「何だって？」

一方通行「はァ？　何言ってるンですかァ？」

一方通行と上条は揃って驚く。親友なのに何故彼女を狙うのかと感じたからだ。

ステイル「完全記憶能力、という言葉に聞き覚えはあるかい？」

黙ってタバコを吸っていたステイルが突然質問してきた。

当麻「確かインデックスが持っている能力…だっけ？」

神裂「ええ、そうです。彼女は一度見たものは絶対に忘れることがない。

その能力を使って…彼女は１０万３千冊もの魔導書を『保管』した」

ステイル「だけど弊害があってね…そのせいで彼女は脳の容量を８５％まで犠牲にしたんだよ」

神裂「そして１年毎に記憶を消さないと…死んでしまうのです」

当麻「…そんな…馬鹿な…。それなら俺たちがした事は、単にインデックスを苦しめる時間を増やしただけ…」

一方通行「……」

沈黙。上条も一方通行も驚き声を発する事ができないでいた。

神裂「これで分かったでしょう。ですので私たちを…」

一方通行「…くくくく」

神裂「？」

一方通行「コケクキカカカカカカカカカ！！！

おもしれェ！　さいっこうにおもしれェよ。お前ら！」

ステイル「なっ！　それはどういう意味だ！！」

突然の哄笑。何がおかしいのかは分からないが、自分たちが馬鹿にされたことだけは分かった。

一方通行「コレが笑わずにいられるかってンだ。テメェら…ソレ本気で言ってンのか？」

神裂「何を…言っている…」

一方通行「それとも泣けばいいンですかァ？
この愉快で滑稽過ぎる悲劇まがいの喜劇によォ！！！！」

体をくの字に折って笑い続ける一方通行。

当麻「一方通行ォ！」

ひたすらに馬鹿にする一方通行に怒りを表す上条。しかしそんな怒りを見ても一方通行は涼しげに見返した。

一方通行「お前ら…記憶のし過ぎで死ぬって…それ本気で言ってるのかァ？」

インデックスに仕掛けられた罠

一方通行「お前らそれ本気で言ってるのかァ？」

神裂「…どういう事です」

一方通行の言葉に眉をひそめる神裂。

当麻「どういう事だ？　一方通行」

一方通行「人間様の脳を甘く見てるんだな、魔術側の人間は。
俺だったら全員赤点出してるな」

ステイル「はっきり言ってくれ。遠まわしに言われても困惑するだけだ」

ステイルはイライラしてるのか、とげとげしく一方通行に噛み付く。

一方通行「……それじゃあこの一方通行様が一般脳医学について教授してやンよ」

大げさに手振りをしながら一方通行はニヤっと笑った。

一方通行「まずあのクソガキは完全記憶能力者だったよなァ」

神裂「そうです。彼女は一度見たことを絶対に忘れることの出来ない完全記憶能力者。
その能力を使って彼女は１０万３千冊もの魔道書を頭の中に『保管』した。

脳の容量を、８５％まで犠牲にして…」

一方通行「そこだ、間違ってるのは」

ステイル「何？」

当麻「？？？　あの～…俺にもわかるように説明してくれませんか…？」

早くもついていけなくなった当麻である。

一方通行「黙ってろ三下。
あのなァ、脳の容量を一律一緒にしてる時点でうさン臭せェンだよ。
だから脳の基本的な性能から説明してやンよ」

当麻「できるだけ分かりやすく頼む…」

それでも分からないのが当麻である。

一方通行「まず人間の脳は元々１４０年分の記憶が可能なンだよ。
完全記憶能力者だからってそれだけで脳がパンクするなんてありえねェ話だ。
それにな、記憶って全部まとめているがそれぞれ種類があるンだよ。
種類が違うから別々の場所に保管されているンですよォ？」

神裂「しかし私たち普通の人間は記憶を忘れる事ができます。
彼女はそれが出来ないのでは？」

一方通行「アホかババァ、忘れてても情報ってのは残ってるもンなンだよ。
　それともアレか？　細胞が消滅するとでも思ってるンですかァ？」
神裂「だから私はまだ１８歳だ！」
当麻「えぇ！？」
神裂「何か！」ギロリ
当麻「イエナニモ…」
とても１８歳には見えないとは言えない当麻であった。
一方通行「コントは他所でやれ。
　さっきババァがいった忘れるってのはな。
情報を引き出す事ができない状態なンだよ。
引き出す為の道がない、ただし情報自体は残ってる。
偶にあるだろゥ？　忘れていたのに突然思い出すって事が」
神裂「確かにありますが…」
一方通行「それは単に元々あった情報への道が再度出来ただけだ。
　再び情報が書き込まれた訳じゃねェ。
　そういう訳だからあのクソガキが意味記憶である『知識』を１０万３千冊記憶したとしてもだ。
　思い出を司るエピソード記憶や動作の経験を司る手続き

記憶が圧迫されるなンて事、脳医学上ありえねェンだよ」

ステイル「そんな……馬鹿な……！」

一方通行の説明に驚愕するステイルと神裂。

一方通行「おおかた『上の連中』が都合の良いように扱うために、そういう嘘をでっち上げたンじゃねェのか？」

当麻「それじゃあインデックスの記憶が圧迫されるってことは……」

一方通行「真っ赤な嘘だな。そこの二人は上の連中らの話を鵜呑みにしてたンだろ？」

ステイル「今までの僕たちは……ただ騙されていただけ……」

神裂「……私たちは……なんの為に……」

余りの衝撃的な事実に、ステイルはその場に膝を着き、神裂は虚ろな目で空を見上げる。

一方通行「チッ、おい三下」

当麻「どうした、一方通行？」

呆然としているステイルと神裂を一瞥すると、一方通行は当麻に話しかける。

一方通行「テメェの幻想殺しでクソガキを救うぞ」

ステイル・神裂「！」

当麻「……そうだな！」

一方通行と当麻は互いに頷きあうと、ステイルと神裂の方を向いた。

神裂「救うとは……どういう事ですか！？」

一方通行「脳医学上ありえない話なのに、あのクソガキは一年毎に苦しむンだよな」

ステイル「そうだ。一年を境に彼女を襲う激痛、苦痛……それらがやってくる」

当麻「酷ぇ話だ。一年ごとに記憶を消さないと苦しむようにしてるなんて……」

一方通行「それも不思議なンだ。脳医学上ありえないのにクソガキは苦しむ。

「そうなるのはどうしてだ？」と思わないか」

ステイル「まさか……」

ステイルが最初にその可能性に気付く。

続いて神裂もその可能性に気付く。

二人ともありえないと思いたい顔をしながらも……一方通行の言葉を待つ。

一方通行「その苦しみ…人為的に起きるように仕込まれてるかもな」

ニヤァ

神裂「……なんて事を！！」

当麻「信じられねぇ……あんな小さい女の子になんてヒデェ事しやがるんだ！」

怒りのあまり、当麻はギリギリと拳を握る。

一方通行「大方裏切りとか出来ないようにする枷のような役目なんだろう。

一年毎にエピソード記憶がリセットされるなら……

決して裏切ることのない『人形』が出来上がるなァ」

神裂「くそっ！」

ダンっと壁を強く叩く神裂。

当麻「おい一方通行、言い過ぎだぞ！」

一方通行「……話が脱線したな、戻すぞ。

何らかの仕掛けでクソガキを苦しめているもンが有るはずだ。

だが科学的な観点から見てそんな大掛かりな仕掛けなンてありえねェ。

そうなるとだ、魔術側の仕掛けがどこかにあるンじゃねぇか。

あのクソガキも魔術側の人間だしな」

神裂「そうか……何らかの魔術的仕掛けがあれば」

ステイル「それらを調べて」

当麻「俺の幻想殺しでぶっ壊すって寸法か」

よく解答に気づきましたと言いたげに一方通行は笑った。

一方通行「正解だァ」

徐々に蝕まれるインデックス

ベッドで苦しそうに寝息を立てるインデックスを、八つの瞳が見下ろしている。
上条　当麻。一方通行。神裂火織。ステイル＝マグヌス。
その中で、眼差しに明るい光をたたえている者はいない。

ステイル「……タイムリミットまで三時間を切った」

当麻「クソ！　何か手立てはないのかよ！」

神裂「……結局、私は今回もこの子に何も……何も出来なかった！」

一方通行「……」

誰もが絶望の淵に立たされていた。
結局彼女を救えない。そんな空気が場を支配した。
一方通行の理論から、彼女が一年間で記憶をリセットする必要がないのは分かった。
だが一体何が彼女をこのように苦しめているかが分からない。

ステイル「……今回はやむを得ない。この子の命を最優先にする。
　神裂……記憶を消す術式を組み上げるぞ」

神裂「……はい」

ステイル「……君達もそれでいいな」

一方通行「……」

当麻「クソ……何も……何も出来ないのかよ…」

ステイル「……ふぅ……準備にかかろう」

ステイルと神裂は返事を待たずに、部屋の中に術式を施していく。
当麻は悔しそうに、一方通行は黙ってインデックスを見下ろしていた。

一方通行（体中に魔術の術式っつーのはなかったンだよな。
冥土帰しも体自体に異常はねェって話だ。
なら何処かにソレがあっておかしくねェ。
……ドコだァ？　ドコに隠している！）

当麻「……一方通行」

考え込んでいる一方通行に当麻は話しかける。
恐らく苛立ちから無言なのだろう、そう当麻は判断して一方通行に話しかけた。

当麻「結局……何も出来なかった。結局コイツを助ける事が出来なかった。
ははっ、コイツ人の家の食材を食べるだけ食べてさ。
全部忘れるんだぜ。酷いよなー」

恐らく当麻は、何気ない事を思い出して話してるのだろう。
其の声に力はない……

一方通行（……待てよ、食事……食い物……！）

だが一方通行は、当麻の言葉からある事が閃いた。

一方通行「おい、ババァ」

神裂「だから私はまだ１８歳だと！」

一方通行「そンな事はどうでもいい、ひとつ確認だァ」

神裂「？」

一方通行「ソイツの体は全部調べて、魔術っつー奴の痕跡はなかったンだよなァ？」

神裂「ええ……そうですが？」

神裂は困惑した。

一方通行からの質問の意味が分からない。今更そんな事を確認してなんになる？

いったい一方通行は何が言いたいのだろう……

一方通行「魔術っつー奴の紋章？文字？かなンか分からンが……

そいつは『体内』に入れる事は可能か？」

神裂「それは不可能です。

どんな魔術であろうと印は体内に埋められません」

当麻「一方通行？　一体何が言いたいんだ？」

当麻を無視し、一方通行は再度考える。

一方通行（魔術の印っつー奴は体内に埋めれない。
ならどこかに書かれてるはずだ。
だが体表には一切なかった。
つー事は普段誰もが気にしない場所にあるはずだ！）

一方通行「おい、ババァ。ソイツの喉を調べろ」

神裂「……まさか！」

一方通行「俺の考えが正しかったなら、ソコに印っつーのがあるはずだ」

ステイル「まさか！　そんな場所に…」

神裂「……！　ありました！　喉の奥に魔術の印が！」

当麻「ホントかよ！」

一方通行「三下ァ、出番だぜ」

当麻は急いでインデックスの元へ駆けつける。
喉の奥を覗き込むと確かに魔術の印らしきものが、当麻には見えた。

当麻「コイツがインデックスを！」

当麻は怒りに震えながらも、右手で魔術の印を触った。
インデックスの体が、ビクンと跳ね上がった。
バギン、と音と同時に当麻が後ろに跳ね飛ばされた。

ステイル「これは……！」

その場にいる全員が絶句する。
ぎょろりと目を剥き、四人を見据える彼女に、いつものインデックスは感じられない。

インデックス「……警告、第三章第二節。
Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ――禁書目録の『首輪』、
第一から第三まで全結界の貫通を確認。
再生準備……失敗。
『首輪』の自己再生は不可能。
現状、１０万３千冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

その目に真っ赤な魔方陣を煌かせ、インデックスは機械的に言葉を口にする。

神裂「馬鹿な……あの子から迸るコレは――魔力!?
……そんな、彼女に魔力は存在しないはず……」

ステイル「どうやらそれすらも教会の嘘だったみたいだね。
インデックスは魔術を使えないんじゃない。
侵入者を撃退するシステムの為に全て使用されていたようだ！」

神裂「だから彼女に魔力が存在しないと思わされたわけか…」

当麻を助け起こしつつステイルに同意する神裂。

インデックス「『書庫』内の１０万３千冊により、

防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算……失敗。
該当する魔術は発見できず。
対侵入者用の汎用術式を組み上げます」

突然インデックスの目の前に魔方陣が発生すると、無数の魔術が打ち出された。
ステイルが咄嗟にルーンカードでその魔術を防ぐ。

インデックス「魔術師の存在を確認。ステイル＝マグヌスへの対魔術強化を発動します」

ステイル「くっ！……これは少し厳しいね……」

続けざま魔術を発動するインデックス。
ステイルがなんとか防いでいるが、徐々に押されていく。

当麻「ステイル！」

防戦一方となっているステイルだが、復帰した当麻がインデックスの攻撃を右手で触る。
途端、インデックスの前に展開されていた魔方陣が、パキンと音を立てて壊れる。

インデックス「警告、第六章第十三節、新たな敵兵を確認。
戦闘思考を変更、戦場の検索を開始……完了。
現状、最も難度の高い敵兵、上条　当麻の破壊を優先します」

インデックスが、ステイルから当麻の方へ向く。

インデックス「侵入者個人に対して、最も有効な魔術の組み込みに成功しました。
　これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

その言葉と同時に、インデックスの両目にあった魔方陣が、直径二メートルほどの巨大な魔方陣へと拡大する。
そして、インデックスが何か人のものとは思えぬ声で歌いだす。
その歌声にあわせて、魔方陣から発生した黒い雷で空間が引き裂かれる。
そしてその黒い雷が部屋の隅々まで走り抜けていく。

ステイル「そんな……」

神裂「『聖ジョージの聖域』!?　そんな、まさか!!」

ステイル「逃げろォォォォ!!!!!」

ステイルの言葉と同時に、インデックスの眼前にあった魔方陣から、直径一メートルほどの光の柱が発射された。

聖（セント）ジョージの聖域

インデックスから放たれた直径一メートルの光の柱。
その光の柱から全員を庇うように立った当麻が右手を突き出す。

光の柱が当麻の右手と衝突すると、四方八方へ光が飛び散っていく。
だが光の柱そのものが消滅することはない。
徐々にだが、当麻の足が後ろへと下がっていく。

インデックス「『聖ジョージの聖域』は侵入者に対して効果が見られません。
他の術式に切り替え、引き続き『首輪』保護のため侵入者の破壊を継続します」

当麻「くあおぉぉ！！！」

打ち消せない光の柱が、徐々に当麻の右手にダメージを与える。
その苦痛により、当麻の顔がゆがむ。

一方通行「おい！　ババァ。これは何なンですかァ！？
全く反射できねェぞ！！」

光の柱が反射できず、神裂に問い詰める一方通行。

神裂「『竜王の殺息』――伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同義です！
いかに貴方が学園都市最強の能力者とはいえ！
『竜王の殺息』と正面から向き合おうとしないでください！！」

ステイル「『Ｆｏｒｔｉｓ９３１』！！」

当麻が『竜王の殺息』を防いでいる間、ステイルは自身の魔法名を唱える。

その言葉に呼応して、漆黒の修道服から何万枚というルーンカードが飛び出し、部屋中に貼りつけられていく。

ステイル「イノケンティウス！！」

その言葉に呼応して、炎の巨人が出現する。そしてそのまま『竜王の殺息』にぶつける。

そのおかげか、わずかながら『竜王の殺息』の軌道がそれる。

ステイル「神裂の言うとおりだ！

『竜王の殺息』と正面から向き合うな！」

ステイルの怒号が当麻と一方通行へ飛ぶ。

イノケンティウスが『竜王の殺息』の軌道を逸らした、わずかに余裕が生まれるも……

インデックス「――警告、第二二章第一節。炎の魔術の術式を逆算――成功。

曲解した十字教の教義をルーンにより記述したものと判明。

対十字教用の術式を組み込み中……第一式、第二式、第三式。

命名、『神よ、何故私を見捨てたのですか』完全発動まで十二秒」

それも一瞬だけであった。

一方通行「おい、三下ァ！」

当麻「なんだ！　一方通行！」

一方通行は当麻を自分の方へ無理やり向かせると、先ほど考えた作戦を口にする。

一方通行「一度しか言わねェぞ！
俺のベクトル操作で、クソガキの足場を崩す！
それであのクソガキは、バランスを崩す！
その隙にテメェをクソガキに向けて投げるから！
テメェはその右手であのクソガキを苦しめているもンを破壊しろ！」

インデックス「『神よ、何故私を見捨てたのですか』完全発動まで後四秒」

当麻「分かった！　お前を信じるぜ、一方通行！！」

『竜王の殺息』を受け止めた時の疲弊が大きい当麻だが、一方通行の言葉に活路を見出す。
一方通行が足を強く踏むと、インデックスの手前の地面が盛り上がる。
その衝撃により、インデックスのバランスが崩れる。

わずか数秒だが、インデックスからの攻撃が止まる。
だが一方通行にとっては、その数秒の余裕があれば十分だった。
インデックスが上を向き、『竜王の殺息』も上に発射されるのを確

認した一方通行は
当麻の背中を力いっぱい叩く。

一方通行「三下ァ！　待ってるぜェ！！
　最っ高なハッピーエンドってヤツを！」

ベクトル変換した一方通行の衝撃により、当麻は一瞬でインデックスへ接近する。
当麻の右手が、インデックスへ触れると魔方陣はパキンと音を立てて崩れた。
そのまま当麻とインデックスは、崩れるように倒れる。

インデックス「――警、こく。最終……章。
　第、零――……。
　『首輪』致命的な破壊……再生……不可……」

『竜王の殺息』が消え、インデックスの口からすべての声が消える。
部屋を覆っていた黒い雷も、存在しなかったかのように消えていった。

神裂「ダメです！！
　まだ、『竜王の殺息』は終わっていません！！
　上を見てください！！」

神裂の叫びに、全員がハっとなり上を見る。
そこに見えたのは、降り注ぐ無数の光の羽。
一方通行とステイルは、降り注ぐ光の羽の範囲から素早く離れる。

一方通行「三下ァ！！」

だが気絶しているインデックスを抱えている当麻は、光の羽を避けることは出来ない。
当麻は静かに笑うと一方通行に向かって、言葉を発した。

当麻「『　　』」

最後まで言い終えると同時に、ひとつの光の羽が当麻の頭へと吸い込まれていった。

上条当麻の死

其の日朝から嫌な予感がしていた。
何がって聞かれるとはっきりと答えられない。ただなんとなく嫌な予感がする。
そんな感じ。

最愛「沈利姉ちゃんの仕事、本日は超綺麗でした。いつもあーなら嬉しいのですが」

フレンダ「まぁ以前あんな格好で帰った時に、お兄ちゃんに見つかって大変だったしね」

浜面「…参考までに聞くが、どんな格好だったんだ？」

最愛「浜面超エロイですね。近寄らないでください」

フレンダ「結局さ、浜面はエロイって訳よ」

浜面「何でだよ！　ただどんな格好か聞いただけだろ！」

浜面と最愛とフレンダがギャーギャー言い合ってる。
まぁ言い合ってるというより一方的に浜面がおもちゃにされてるだけだが。

理后「大丈夫、そんな変態でエロイ浜面を応援している」

浜面「滝壺まで！　ていうかさり気に変態が追加された！」

最愛「超変態じゃないですか。
　仕事メールを超送れといったのにバニースーツの写真を超送ってくるんですから」

ヒートアップしすぎのせいかだんだんとうるさくなってきた。

沈利「はまづらぁ、うるさいから黙れ」

浜面「ちょ！　せめて言い訳ぐらい…」

沈利「あ〝ぁ！？」

浜面「すみません、運転に集中します…」

借りてきた猫のようにおとなしくなる浜面。
最愛もここで追撃すると自分にまでとばっちりが来ると思ったのか、何も言ってこなかった。

沈利「…ちなみにさぁ、はまづらぁ…」

浜面「は、はい！」

何ビビってるのコイツ？
浜面を見ずに車外を見ながら話を続ける。

沈利「さっきフレンダがいってた格好だけどさぁ。
　あれね、服が真っ赤に染まっちゃってさぁ」

浜面「…一応念の為確認しますが、それは何でしょうか…」

沈利「あん？　決まってるだろ、ターゲットの血だよ、血。
　おまけに肉片とか着いちゃってもう最悪だったよ」

ちらっと浜面を見ると顔を真っ青にしながら運転していた。
あ、やっべぇ。ちょっと楽しいかも

沈利「あの日はお気に入りの服だったんだよ。
　それがさ、ターゲットの奴が最後に抵抗してさ。
　服がちょっと破けちゃったのよ」

浜面「どのくらい破けたんだ？」

話をあわせないといけないと思ったのか、相槌を打つ浜面。
後ろの三人は興味ないのか、思い思いの作業をしていた。ただ話の腰を折ると何が来るか分からないので黙っていたが。

沈利「んー、２ミリほど？」

浜面「それってほとんど分からないレベルじゃねぇか！」

沈利「あ〝ぁ！？
　あの服は当麻があたしに買ってくれた服なんだぞ！
　１ミリでも傷つけた奴は許さねぇよ！」

浜面「はい…ちなみにそのターゲットはどうなったんだ…」

沈利「まぁ元々殺す奴だったけどさぁ、穴あけたオ・レ・イしてあげたよ」

瞬間ニヤァと笑った沈利を見て、浜面は背中から嫌な汗が流れてい

るのを感じた。
ヤバイ、これは超ヤバイ。
浜面の頭が危険信号を流してたが沈利の発言を止めるのは不可能だった。

沈利「まずさぁ、両手両足を縛ってやったのよ。
　でさぁ、ソイツ男だったからさ。ゆっくり時間をかけながら潰してやったのよ♪」

浜面（何をだよ！　何を！　何を潰したんだよ！）

沈利「だからさぁ、はまづらぁ」

浜面「は、はい」

沈利「お気に入りの服の時に事故ってみろ。
　生きてるのが辛いぐらいオ・シ・オ・キしてあげるからにゃーん♪」

満面の笑顔でニッコリと浜面に笑いかける沈利。
しかし顔は笑顔でも、目が笑っていない。

浜面「はい…（やべぇ！　この目冗談では済まされない！）」

ガクガクブルブルしながらも浜面は正確に安全運転をする。
そんな浜面を見て、沈利はそろそろ飽きたから放置しようと思った瞬間

Ｐｒｒｒｒｒｒｒ　Ｐｒｒｒｒｒｒｒｒ

沈利の携帯がなった。仕事用の携帯ではない、プライベート用の携帯だ。
携帯を取り出しディスプレイを見ると「第一位」と表示されていた。
一方通行とはグループは違えど同じ暗部組織の人間だ。
ただ、当麻とも関係があり一応連絡先は知っている。
もっとも一度としてかけたことはないし、かかってきたこともない。
訝しげに思いながらも沈利は電話を取った。

ピッ

沈利「もしもし？　あんたから電話なんて珍しいじゃない。どーいう風の吹き回しよ」

一方通行「……原子崩し」

おちゃらけ気味に電話を取ってみたが、向こうからの返事が薄い。

沈利「何？　何か用？　これから家に帰って当麻に暖めてもらうんだにゃーん」

最愛「沈利姉ちゃん、それは聞き捨てなりませんね」

フレンダ「結局さ、お兄ちゃんに暖めてもらうのはあたしって訳よ」

理后「しずりが何をいっているか分からない」

後ろで姉妹がわめいてるが無視して話を続ける。

沈利「そういうわけで用件は手短に話してね」

一方通行「全員が揃ってンなら都合がいい。今すぐ第七学区の病院にこい」

沈利「はぁ？　何でよ」

一方通行「……三下の事で話がある」

沈利「！？　当麻がまた入院したの！？」

当麻、という単語に全員が反応する。
今さっきまでギャーギャー騒いでいた最愛とフレンダも、ぴたっと止まって私の声に集中している。

最愛「お兄ちゃんがどうしたんですか！？」

理后「さいあい、落ち着く」

そう言いながら最愛を落ち着かせてる理后も少しせわしない。
携帯のスピーカを外部モードに切り替えて全員に聞こえるようにする。

一方通行「とにかく第七学区の病院にこい。詳しい話はソコでする」

沈利「何よ、歯切れが悪いわね。はっきりと言いなさいよ。
　どうせ当麻の事だから誰かを助けようとして怪我したんでしょ？」

一方通行「……」

沈利「？　おい、第一位黙ってたら…」

一方通行「……三下がなァ……『死ンだ』」

プツッ、ツーッ、ツーッ

沈利「……え？」

ありえない発言を聞いて、電話が切れた。
え？え？何？どっきりなの？当麻が死んだ？
当麻が死んだ？今朝普通に学校にいった当麻が？
何それ、冗談にしても笑えないぞ。ははは
ナニヲイッテルンダ、アノクソヤロウ

乾いた笑いをしながら後ろを見ると全員目を見開いたまま固まっている。
浜面を見ると同様に驚いている。

沈利「はまづらぁ、第七学区の病院にいけ。今すぐに！」

浜面「！…わ、分かった！」

すぐさま方向転換し、第七学区の病院に向かう。
今までのだらけた雰囲気は霧散し、車内には緊迫した空気が漂っていた。

失われた想い出

一方通行から連絡を受け、沈利たちは第七学区の病院に向かう。
結構飛ばしたため、かなり早く着いた。

病院前には一方通行が待っていた。

沈利「おい第一位、さっきの電話はどういう意味だ」

一方通行「…ついて来いよ。中で詳しい話をする」

沈利たちの反応を待たずに、一方通行は歩きだした。
其の雰囲気からさっきのが冗談や何らかの罠でない事がわかる。
沈利たちは真意を早く聞きたいながらも、黙って後を追った。

ちょっとした休憩室のような所につくと、先に一人の男性と一人の女性がいた。
男性の方はよく知っている冥土帰しだった。
見知らぬ女性は鎮痛な面持ちでソファーに座っていた。
まるで何かに懺悔するかのように…

冥土帰し「その人たちが家族かね？」

一方通行「あァ、すまねェがさっきの話をもう一度頼む」

一方通行はソファーに座り、手前にあったコーヒーを飲んだ。

冥土帰しが何か話そうとした時、それを沈利が遮った。

沈利「さっきそこの第一位から電話があったが、当麻が死んだってのは本当なのか？」

声が震える。事実を確認するのが怖い。
お願いだ、嘘だと言ってくれ。
そう沈利は願わずにはいられなかった。

冥土帰し「ん？　彼は生きてはいるよ？」

瞬間皆がほっとした顔になる。しかし次の言葉で全員が再び凍りつく

冥土帰し「ただね、ある意味では死んだと言っても過言ではないね」

沈利「それはどういう……」

冥土帰し「簡単にいうとだね、彼は記憶『消失』なんだよ」

沈利「え……記憶……消失？　喪失じゃなくて？」

理后「……戻ることは？」

冥土帰し「ないだろうね、失ったんじゃなくてないんだ、記憶が。
記憶喪失とは違う…記憶破壊とでも言うべきかな。
今までの記憶が全部なくなってしまってるんだ、ゴッソリと」

最愛「そんな……お…兄ちゃん……」
フレンダ「なんで……お兄ちゃんが……」
理后「とうま……」
沈利「……ッ！」

全員が声を失った。戻ることがない……全員が絶望の淵へ立たされた。

冥土帰し「日常生活に支障はないだろうけど、家族の介護は必要だろう。
伝えるのは迷ったけど、それでも一応ね……」

沈利「あの……当麻は？」

冥土帰し「彼は今病室にいるよ。
面会はできるけど、相応の覚悟は要るよ？
気をしっかり持っててね」

そういいながら冥土帰しは沈利たちを病室へと案内する。
一方通行と見知らぬ女性は、そのまま休憩室に留まった。

沈利「当麻！」
理后「とうま！」
最愛「お兄ちゃん！」
フレンダ「お兄ちゃん！」

当麻「？　あのどちら様でしょうか」

突然入ってきた四人に驚いた顔を向ける当麻。
其の目にはわずかながらの怯えが見て取れた。

最愛「……ぐっ…うくっ…と、当麻お兄ちゃん……」
フレンダ「うぅ……お兄ちゃ……」

最愛とフレンダはうつむいて……ただただ泣くだけだった。
理后はうつむいていなかったが……静かに泣いていた。

沈利「と、当麻、あ、あのね……」

声を出して初めて気付く。ああ、私も泣いていたんだって…

当麻「……？　えっと申し訳ないですけど病室間違っていませんか？」

冥土帰し「間違ってはいないよ。彼女たちはね、君の家族なんだよ」

当麻「家族……あ、じゃあ俺の状態も？」

冥土帰し「当然知っている。だからこそ泣いているのだよ？」

泣き続けるわたし達に代わって冥土帰しが当麻に状況を説明している。

沈利（私が上条家の家長なんだ。私がしっかりしなきゃ！）

泣きながら私は当麻に笑いかける。
当麻は困惑する一方だった。

沈利「私はね……沈利って言うの。
こっちのピンクジャージの子は理后。
この金髪の子はフレンダ。最後にこのちっこいのが最愛」

最愛「……ひっぐ……どうも……」
理后「おはよう……とうま」

フレンダ「…こんにちわって訳よ……」

皆何かを喋らないと壊れてしまうのか、かなり意味不明な事を当麻にいう。

沈利「私はね……私たちは……」

当麻「えっと、はじめまして……？」

沈利「……」

理后「……」

フレンダ「……」

最愛「……」

耐え切れなくなったのか、気付いたら皆当麻に抱きついていた。

当麻「うえ!?　あ、あのちょっと!?　照れるんですが!」

沈利「もう怒ったりしない。お願い、お願いだから……！」

理后「とうま…思い出して……」

フレンダ「……ひっぐ……お願い、私たち…私たち！」

最愛「お兄ちゃん…お兄ちゃん、家族の事を思い出して！」

当麻「あ、あの！」

沈理フ最「あああああああああああああああああああああああああ！！」

決してかなわない望みを神に祈りながら、沈利たちは泣き続けた。

諦めきれない想い

しばらく泣き続けた沈利たち。
やがて落ち着いたのか、当麻から離れる。

沈利「ごめんね、泣きついちゃったりして」

理后「とうま、ごめんね」

フレンダ「お兄ちゃん、ごめんって訳よ」

最愛「お兄ちゃん、超ごめんなさい」

当麻「いえ、それに……」

そう言って少し考えこむ。
やがて沈利たちを見て当麻は言った。

当麻「俺って家族に愛されてたんだなぁってわかりましたから」

沈利「…ッ！」

当麻「だってそうでしょう？　嫌われてたら俺の記憶消失で泣いたりしないですし」

そういってどこかホっとした感じで笑う。
沈利はそれを見てハッとなった。

沈利（当麻…そうだね。当麻も怖かったんだね）

たった一人世界から取り残された感じ。
誰も思い出せない、自分すら思い出せない。
見るものすべてが知らない世界ばかり。
今の当麻はそんな場所に置かれているのだ。
自分がしっかりしなきゃ！と決意を新たにする。
自分は上条家の家長なのだから。
そう、沈利は自分に言い聞かせる。

沈利「当麻、記憶が全く無くて怖いってのは理解できる。
その怖さについては分かってやれないけどさ。
でもあたしたちは家族だ。
当麻の恐怖を消してはやれないかもしれないけど……」

沈利は当麻をじっとみる。

沈利（そう、あたしたちが今するのは泣くことじゃない！）

沈利「でも当麻の帰る場所はちゃんとあるんだよ……だから帰ろう？　当麻」

当麻「……うん」

少し涙ぐむも、しっかりと沈利を見る当麻。

理后「しずり、ずるい。わたしだってとうまと帰りたい」

最愛「理后姉ちゃん超違います。この場合は皆で一緒に超帰るわけですよ」

フレンダ「結局、お兄ちゃんが帰る場所はうち以外ないって訳よ」

沈利の言葉に続けるように、当麻に言葉をかける理后たち。

三人とも、先ほどの沈痛な顔が嘘のように晴れやかな笑顔である。

沈利「大丈夫！　今まで五人で生きてこれたんだ。
　これからだってちゃんと生きていける！」

沈利の声に頷く四人。

家族だから……愛しい家族だから支えあって生きていける。

沈利「とりあえずさ、疲れたでしょうからもう寝なさい。
　あたしたちも今日は帰るよ」

当麻「うん、わかった……」

理后「とうま、おやすみなさい」

最愛「お兄ちゃん、超おやすみなさーい」

フレンダ「お兄ちゃん、おやすみ！」

そういいながら出て行く沈利たち。

冥土帰しはすでにいなかった。気をきかせてさっさと出ていったのだろう。

皆が出て行った中、沈利だけはまだ部屋から出ていなかった。

沈利「当麻…辛かったら泣いてもいいんだよ？」

当麻「！」

沈利「じゃあね、当麻。おやすみなさい」

そういって沈利は出て行った。

再び休憩室に戻ってきた沈利たち。

そこには先程の二人がいた。

冥土帰しは仕事があったのだろうか、休憩室にもいなかった。

沈利「第一位、話してもらうよ。当麻が記憶を失ったワケを」

一方通行「……あァ」

一方通行は相変わらずソファーに座っていた。

見知らぬ女も先程見たときと変わらない位置にいた。

一方通行「インデックスっていただろう？
　アイツがなァ、ちィと訳ありで記憶を一年ごとに消す必要があったンだよ」

沈利「記憶を一年ごとに？　なんでまた」

一方通行「その辺はまァ聞かないでくれ。ンで話を続けるぞ」

その辺の細かい事はどうでもよかったのか、それ以上沈利は口を挟まなかった。

一方通行「そンで色々と調べた結果、なンらかの能力であいつの脳を苦しめてるモノが見つかった。

だが、それがどンなモノかまではわからなかった。そこで……」

理后「とうまの幻想殺しで破壊したと」

一方通行「そうだ、あいつの能力ならそれがどンな能力であろうと無効化できる。

そンでそれを破壊したンだが……」

フレンダ「したけど、何？」

一方通行「ソイツの防衛プログラムっていうのかな。

それが発動したンだよ。そンで三下と」

そこで言葉を区切り、チラッと一方通行は女を見る。

再び視線を沈利たちに戻し、説明を続ける。

一方通行「そこのババァと……ココにはいないがデカ神父で協力してなァ。

防衛プログラムっていうのも破壊した。だが……」

最愛「だが、なんです？

それだとお兄ちゃんが記憶喪失になる場面が超ないですよ」

一方通行「話は最後まで聞け。

三下をインデックスの元に投げ飛ばしたお陰で、防衛プログラムは破壊できた。

だけどな……最後の反撃を三下はマトモに食らって……脳に重大なダメージを負った」

沈理フ最「…ッ！」

一方通行「恨ンでもいいぜェ……
学園都市最強と言われても、結局は助けれなかったンだァ。
三下が記憶消失になったのは……俺のせいだ……」

神裂「一方通行…」

一方通行「インデックスは今、デカ神父が見ている。
腹減ってたのかブラックホールな食いっぷりだわァ……
後な、こっちの勝手だがインデックスには、三下の記憶消失の事は話してねェ。
話す予定もない。悪いがコレばっかりは譲れねェ」

深い溜息を吐き、ソファーに深く座る一方通行。

一方通行「以上だァ……」

沈利たちはじっと俯いていた。
頭がぐわんぐわんして軽い吐き気がする。

コイツラノセイデトウマノキオクガ…

沈利はそう思いもしたが、同時に当麻が言った言葉も思い出した。

『誰かが目の前で困っている。俺がそれを助けられるなら助けてやりたい』

こんな所で腐っていたり、一方通行たちを責めてる場合じゃない。

沈利「第一位、正直言ってあんたが憎いよ。お前のせいで！ってのも思う」

一方通行「あァ、それが普通だなァ。何も間違っちゃいねェ」

沈利「でもね」

一方通行「？」

沈利「そんな事をしても当麻は喜ばない。むしろそんなあたしに説教するだろうね」

言って苦笑する。そうだ、あの子はそういう子なんだって。

一方通行「ちげェねェ」

一方通行は驚いた顔しながらもそういった。

沈利「そろそろ帰るけどいいかしら？」

一方通行「あァ、問題ねェ。長い時間拘束して悪かったな」

沈利「別にいいわ。ほら、皆帰るわよ」

理后「そういえば、はまづらが外で待っていたね」

フレンダ「浜面なら、大丈夫って訳よ」

最愛「そうですね、超浜面ですし」

そういってゾロゾロと出口へ向かう。
しかし少し歩いた所で、沈利は止まる。
そしてクルッと一方通行らの方へ向く。

沈利「第一位、あたしらは諦めたわけじゃないからね」

一方通行「何をだよ…」

沈利「当麻の記憶だよ」

さも当然と言わんばかりに言ってくる。
まるで当麻の記憶が戻る事が当然と言わんばかりに。

一方通行「おィおィ、冥土帰しの説明は受けたンだろう？　だったら……」

沈利「だったら諦めろって？　冗談じゃないわ。
　いい、あたしは……いやあたしら上条家はね…」

一呼吸を置き、キッと一方通行たちを見る沈利。
他の三人も倣い、同じように一方通行たちを見る。

沈利「諦めが悪いのよ！　最後の最後まで諦めずに足掻き闘うのよ！」

拳を作り、ビシッと一方通行たちに向けて突き出す。
今度こそ一方通行たちは驚いた。
物理的に脳細胞がぐちゃぐちゃになっており、学園都市最高の医者である冥土帰しですら治療の目処が立たない。

そんな絶望的な状況なのに、まだ諦めていない。
砂漠の中からたった一粒の宝石を見つけるような状態になってもまだ諦めない。
一方通行は沈利たちを見つめた。

――――そこには不敵に笑う沈利たちがいた。その中の誰ひとりとして絶望の色はなかった…

病院を出ると、浜面のバンがそのまま止まっていた。
一応迷惑にならない程度の場所に止まっていたが。
沈利たちはそのままバンに乗り込んだ。

浜面「…どうだったんだ」

沈利「あ゛!?」

浜面「ヒィ!!　なんでもないです!」

一方通行にあーはいったが、壮絶に機嫌が悪い沈利であった。
見た目からしてすごくイライラしてるのがわかるぐらい。

フレンダ「とりあえずさ、家までよろしくって訳よ」

浜面「りょ、了解」

助手席に座っている沈利に怯えながらも、上条家に向かって運転する浜面。
しばらく運転していたが、車内は無言である。

しかも全員そこはかとなく機嫌が悪い。（理后は分かりにくいが）

浜面（当麻の事聞きたいけど、聞けねェ！　聞いたらぜってぇ殺される予感がする！）

沈利「はまづらぁ！」

浜面「は、はい！」

沈利「一回嬲り殺しさせろ」

浜面「なんの脈絡もなく嬲り殺し宣言！」

沈利「あー、悪い。つい本音が」

浜面「本音！　ちょっと奥さん、この人怖いよ！！」

最愛「浜面、超殺されたくなかったら静かにするです」

理后「はまづら、今は流石に応援出来ない…」

フレンダ「ちゃっちゃと黙るって訳よ」

浜面「なんで俺が悪い事になってるの！　というか味方ゼロって…」

泣きそうな顔になりながらも律儀に運転する浜面。

沈利「チッ、まぁ当麻の事を聞きたいんだろう。けどな、今は言えない。

こんな機嫌で喋ったら自分でも何するかわからんからな。

浜面を１００回殺していいなら今から言ってやるが」

浜面「イエ、コンドデイイデス」ガクガクブルブル

結局のところ、一方通行にあれだけ啖呵を切ったのはいいがまるで道が見えない状態である。

その事が沈利たちを苛立たせていた。

沈利（第一位にはあーはいったが、実際方法なんてないに等しい）

その道の専門家の最高位をして治療方針すら立たない状況である。

それがどれほど困難な事かは容易に想像できる。

沈利（でも……だからといって諦められるわけねぇだろう！）

しかしだからといって諦めきれない。否、諦めるなど考えられない。

窓の外から見上げた夜空は、そんな沈利の想いを塗り潰すほど暗い色をしていた。

友との約束

時間は十二時を少し過ぎた頃。
第七学区のとある喫茶店は昼食を取る客で混み合っている。
しかし今日に限っては、お昼どき特有の賑わいもない。
ウェイトレスの表情は、緊張を強いられているためか青白く生気が感じられない。
食事をとっている客たちも、お通夜のような重苦しい雰囲気のなか食器が触れ合う音すら慎ましい。
彼らに共通する点は、時折ある場所を盗み見していることだ。
その方向には……

一方通行「クソッタレがァ……」

獰猛な気配と威圧感をその身体から放つ一方通行がいた。
一方通行はコーヒーを片手に、先日のことを思い出していた。

一方通行（この俺にあんな事頼みやがって……）

グイッとコーヒーを煽る。
苦味が身体に広がっていく。――だがコーヒーの苦味ではない。
別の違う物が全身にじわじわと広がっていく。
イライラする気持ちを、コーヒーで誤魔化そうとした。
だが、結局それは叶わなかった。
いくら飲んでも気分は晴れない。むしろ余計悪化している。

当麻「『インデックスを頼む』」

光の羽が当麻たちを襲った時、脳にダメージを負う前の当麻が言っ

た台詞を思い出す。
多分当麻は何気なしに言ったのだろう。
だが、一方通行にとっては頼む相手を最も間違えていると思った。

一方通行（やはり頼む相手が間違っている。三下すら救えなかった俺に……！）

光の羽が当麻に襲いかかる前に、インデックスもろとも壁に飛ばせば良かった。
そうすれば多少のダメージはあったかもしれないが、記憶破壊など起きなかったはずだ。
しかしそう思っても既に当麻の記憶は破壊された後だ。今更『ｉｆ』の想像なんて意味をなさない。
もう一口コーヒーを飲む。さっきと同じでやはり気分は晴れない。

一方通行から発する獰猛な気配と威圧感はますます強くなる一方だ。
彼以外の人間は一様に思っていた。『早くこんな時間が終わってほしい』と……

小萌「探しましたよ、一方ちゃん。こんな所にいたんですね～」

一方通行は自分に声をかける存在に気付いた。
周りの人間も、現在の一方通行の気配に臆することなく声をかける人物に興味を持った。
その時、喫茶店にいる全員の視線が一点に集まる。
その視線の先には……

小萌「もうすぐインデックスちゃんの引越しが終わりますよ？」

園児服にしか見えないピンクの服と、ピンクの髪、外見十二歳程度

の人物、月詠小萌がいた。

小萌は仁王立ちして一方通行を見ると、多少の怒気を込めて言った。

小萌「それなのに一方ちゃんは、ファミレスでのんきにお茶を飲んでるのですかー！

罰として買出しに付き合ってもらうのですよーっ！」

ぷくぅーと可愛らしく膨れながら、小萌は一方通行のいる席に向かった。

一方通行と小萌を除く全員が唖然としていた。

小学生にしか見えない女の子が、濃密な殺気を纏う明らかにそのスジの人間を叱咤している。

その余りの光景に、この後起こるであろう惨劇を思い気を失う人までいた。

一方通行は小萌を一瞥すると、残っていたコーヒーを一気に煽る。

そしてカップを置き、ガタッと椅子の音をさせて立ち上がる。

一方通行「……分かった」

そう言うと一方通行は小萌からの返事を待たずレジへと向かう。

そして支払いを済ますと、そのまま店を出て行った。

ポカンとその様子を見ていた小萌も、一方通行が店を出て行く姿でハッとなり後を追いかける。

小萌が出ていって少しして、店にいる全員がほっと息をついた。

『獰猛な凶悪犯罪者を従える謎の幼女』という、学園都市の不思議伝説が生まれた瞬間であった。

一方通行は小萌と共に、セブンスミストまでやってきた。
歩いている途中に小萌から聞いたが、インデックスはあのシスター服以外は持ちあわせていないとのこと。

一方通行（まぁ今まで逃亡生活してりゃァそうなるなァ……）

インデックスの生い立ちや、引き取った理由を小萌には話していない。
しかし小萌はインデックスの事情を詮索せず受け入れた。
いつもは心配の元になる小萌の懐の深さだが、今回ばかりはそれが有り難かった。

一方通行「ところで肝心のクソガキは何処にいるンですかァ？」

セブンスミストに着いたが、肝心のインデックスの姿が見当たらない。

小萌「何やら黒い神父服を着た人と話があるそうですよー。
ですが寸法は調べておきましたので問題ありません」

一方通行（あァ……ステイルっつーデカ神父と話かァ）

小萌の発言から、一方通行はステイルを思い出す。
妙にインデックスを気にかけていた事が、一方通行の記憶に残っていた。
だが直ぐにどうでもよくなったのか、一方通行の脳裏から一瞬で消えた。

一方通行「ンで、買う服とかは決まってるンですかァ？」

小萌「とりあえず、当面の服だけあればいいかと思ってますー。
それ以降については、その時買い足せばいいかと思います」

自分の服ではないのに妙にハイテンションで歩く小萌。
一方通行はそんな小萌にため息を吐きながらついて行く。

店に入ってから、一方通行は妙な視線を感じていた。
今までも小萌と歩いている時、風紀委員や警備員の職務質問はよく食らっていた。

その時に受けている視線と、今現在受けている視線は別ものである。
明確に自分を倒そうとする連中たちの視線である。

一方通行（どっちかってェと、俺を付け狙う馬鹿たちの視線だなァ……）

連中たちに気付かれないようにさっと周囲を見渡す。
感じている視線が、自分がいるフロアの警備員から投げられているものではないと判断する。
この確認が、一方通行の中で決定打となった。

しかし一方通行には一抹の不安があった。
『自分は小萌を守る事が出来るのだろうか？』という不安が……
だが即座にその考えを否定すると、一方通行は静かに笑った。

一方通行（こンな弱気でどうする。学園都市最強が聞いて呆れらァ……）

例え自分の能力が、誰かを守ることに向いてないとしても……それ

でも小萌を守る。
そして自分はそれが出来ると信じた。

再度周囲を見渡し、敵の数を調べた。
幸い自分の行動は、連中たちには分からないのか特に動きはなかった。

一方通行（七……いや八人か。その程度なら十秒で片付けれる）

相手の数が分かると、次にどの位置で片付けるかを考える。
自分たちのいる場所、連中たちの数、それから連中たちを片付けるポイント。
すべての情報を吟味する。

学園都市最高の頭脳ではじき出した作戦を実行するため、一方通行は行動にでる。

一方通行「ちィっとトイレいってくるわ」

楽しそうに服選びをしている小萌に、一方通行は何気ない感じで話しかける。

小萌「はい、ここにいるのでいってらっしゃいですー」

服選びに夢中だったためか、小萌は特に気にすることなく、一方通行の言葉に頷いた。
この時小萌が顔を上げ、一方通行を見ていたらまた違った事を言っただろう。
何故なら一方通行の顔は、獲物を狩る時に見せる野獣の顔をしていたから……

一方通行はトイレがあるエリアに移動を開始する。
幸い連中たちは馬鹿だったので、一方通行が移動すると同時に、自分たちの移動も開始した。
笑いたいのを我慢しつつ、一方通行はトイレまで歩く。

移動距離がそれなりにあった為か、男子トイレまで一分から二分かかった。
だが、離れている方が小萌を巻き込まなくてすむと一方通行は考えた。

男子トイレに入ると、誰も利用客がいなかった。
都合が良いと一方通行は考えた。
少し待つと、男子トイレには不釣合な獲物を持った連中たちが入ってきた。

一方通行（スキルアウト……かァ。だが第七学区を根城にする連中らではないか……）

自身の反射の設定を素早く切り替える。
小萌といると、どうしてもある程度、ベクトル操作の設定を変更しなければならない。
だが、今は小萌がいないので本来の設定に戻す。

一方通行（この能力で……小萌だけは傷つけたくないからなァ）

既に自分たちを見ていない一方通行の余裕が気に触ったのか、何人かがわめき散らす。
だが一方通行にとっては雑音にしか聞こえない。だから、全て無視していた。

それが余計スキルアウトたちをイラつかせているのだが……

一方通行の態度に切れたスキルアウトたちは、一斉に襲いかかった。

不良Ａ「うぅ……いてぇ……」

不良Ｂ「ぐふぅ……」

だがどれほど攻撃しようと、全ての攻撃は一方通行によってベクトル操作される。

自分の攻撃で自滅したスキルアウトたちは、そのまま地面に倒れ伏した。

一方通行はスキルアウトたちを一瞥し、小萌の元に戻ろうとしたがふと違和感を感じた。

そして、もう一度地面に倒れているスキルアウトたちを見る。

一方通行（六…七……一人足りない。確認した人数は八人だったはずだ！）

？？？「おっと、動くなよ。学園都市最強さん……」

卑劣な罠

急いで小萌のところに戻ろうとした一方通行だが、それは叶わなかった。
男子トイレの入り口に立ちふさがる『八人目』のスキルアウトの声によって……

一方通行「テメェ……！」

一方通行は、自分に声をかけたスキルアウトを睨む。
普段の彼なら、スキルアウトの一人や二人一瞬で始末が出来る。
だが、今はそれが出来ない。
何故なら……

リーダー「へへ……動けばこの子の首がポキっと折れるぜ？」

スキルアウトの腕には、小萌が捕まっていた。
小萌は薬か何かで眠らされたのか、ぐったりとして一切の反応を示さない。

一方通行（クソッ……タレが）

ベクトル操作をし、一瞬でスキルアウトに接近し倒す。
その気になれば０．０１秒もあれば可能だ。
だが頭では分かっていても、一方通行の体は動いてくれない。

――　もし万が一にでも小萌を傷つけてしまったら……

そう思ってしまった一方通行は酷く臆病になっていた。

自分が傷ついても気にしない。だが、小萌を傷つけることだけはしたくない。
結局何も出来ず、ただ目の前のスキルアウトを睨むだけしか出来ない。

リーダー「それにしても驚きだ。学園都市最強さんにこんな趣味があったとは……」

無造作にベタベタと小萌に触るリーダー。
その行為に理由のわからないイラつきを覚えた一方通行。

一方通行「汚らしい手でそいつに触るンじゃねェ！」

そのイラつきを打ち消すかのように、一方通行はスキルアウトに向かって叫ぶ。
人質がいるせいか、スキルアウトは一方通行の殺気に怯えながらも余裕の態度を崩さない。

雑魚リーダー「あん？　テメェ状況が理解出来てるのか？
　テメェが抵抗したら、このガキがどうなるか分かって言ってるんだろうな？
　大人しくヤラれてくれや。学園都市最強さん」

地面に倒れていた他のスキルアウトたちも、現状を理解したのか立ちがあがってくる。
半数ほどはまだ地面に倒れているが、残りは既に立ち上がり獲物を持っている。

雑魚リーダー「おい、テメェら！　いつまで寝てやがる！　さっさと……」

立ち上がっていないスキルアウトたちを起こそうと声をかけるリーダー。
だがその声を最後まで発することはなかった。
突然、リーダーの体が横に大きく移動したのである。
そのまま壁に激突し、壁にもたれかかってズルズルとその場に崩れ落ちた。
いきなりの展開に、一方通行を含む誰もが唖然としていた。

？？？「このようなか弱い子を人質にとり、更には大勢で一人を囲む……ですか。
人として見過ごすわけにはいきませんね」

スキルアウトが立っていた場所には、一方通行も知らない女性がたっていた。
先ほどまで人質だった小萌を、その腕に抱えて……

雑魚Ａ「て、テメェ誰だ！」

スキルアウトの誰かが、状況を理解したのか女性に向かって吠える。
しかし、その肩を誰かにポンと叩かれた。
その音でスキルアウトは本能的に理解した。振り向いてはいけないと。
だが振り向かなければもっと危険だとも感じた。
スキルアウトは怯えながらも、おそるおそる後ろを振り向くと……

一方通行「おいおい、まだパーティは終わってねェンだぞォ？」

邪悪な笑顔を浮かべている一方通行の顔が、スキルアウトの目には映っていた。

その場にいたスキルアウト全員を叩きのめすと、一方通行は女性のもとに駆け寄った。
女性は先ほどのリンチに特に驚くことなく、ずっと小萌を抱えていた。
一方通行は小萌の顔を覗き込む。小萌はすやすやと安心した顔で眠っていた。
特に怪我もなく、その眠っている姿に一方通行はほっと胸をなで下ろす。

???「貴方が守りたい女性（ひと）……ですよね」

小萌の髪を慈しむように優しく撫でる女性。
一方通行はそんな女性に警戒しながらも、女性から小萌を引き離し抱き抱える。
そんな一方通行の動作に、特に気に触るわけでもなく女性は微笑んでいた。
一方通行はじっと女性を見る。

年齢は自分とほぼ変わらないと感じた。
だが、以前見たことがある第三位にはない気品があると感じた。
仕草一つ一つが優雅で、物腰も柔らかい。
これが本物のお嬢様か……と一方通行は思った。
しかしお嬢様の癖に、大の男に回し蹴りをかけたのはどうかな……とも思った。

一方通行「……守れなかった。あの時も……今も……何が最強だ。クソッタレめ……」

？？？「……」

一方通行は小萌に視線を落とすと、胸のうちに溜まっていたものを吐き出すかのように言った。

一方通行「どンなに想っても……守れねェ。だったらやっぱり……」

？？？「自分のもとから遠ざけたほうがいい……ですか？」

女性の発言に頷く一方通行。

普段の彼なら、これほど素直に頷くことはない。

だが、当麻の記憶消失の件、先程の小萌の件が彼の心を少しだけ弱くしていた。

？？？「自分の元が危険だから遠ざける。それも一つの考えでしょう。ですが……」

一方通行「……なンだ」

？？？「貴方はその手を振りほどいてまで、その子の元を離れる事が出来ますか？」

女性にそう言われて、一方通行は気付く。

小萌「んふ～、一方ちゃん駄目ですよー」

意識のない小萌が、一方通行のシャツをしっかりと握っていたのだ。

その手はまるで一方通行を『離さない』という意思表示であるかのように見える。

？？？「傍にいて欲しい。きっとその子もそう望んでいますよ。
だから……傍にいて守ってあげなさい」

女性はそう言うと、一方通行の反応を待たずに立ち去った。

一方通行「傍にいて守る……かァ。
一度や二度の失敗でへこたれてるンじゃねぇよ、最強……」

ニヤっと一方通行は笑った。
一方通行は小萌を背負うとしっかりと歩き出す。
どんな事があろうと彼女を守ると心に刻みながら……

インデックスとステイルと…

昼時のカフェ「オリャ・ポドリーダ」に、その二人は座っていた。
どちらも学園都市では珍しい服を着ている。

ステイル「美味しいかい？」

インデックス「美味しいんだよ！　すている！！」

男性は漆黒の神父服、女性のほうは白いシスター服を着ていた。
学園都市は科学の都市である。宗教関係の服は特別に珍しい。
だが、それ以上に二人は目立っていた。

ステイル「そうか。今までのお詫びだ。
遠慮せず食べてくれ」

インデックス「本当！　じゃあこれとこれとこれを！」

それは、シスター服を着た女の子の異常なまでの食欲であった。

ステイルは神裂と共に一度イギリスへ戻った。
そこで最大主教ことローラ＝スチュアートに、インデックスの今後について話し合った。
当然ながらステイルは、インデックスをローラの元に置く気はなかった。
ローラの方も、インデックスの仕掛けが破壊されたことにより、手元に置くのは危険と考えていた。
図らずも両者の思惑が一致し、インデックスは学園都市に置くこと

となった。
だがローラが一つ心配したのは「魔術師の襲撃は大丈夫か？」である。
１０万３千冊もの魔導書を『保管』しているインデックスを、他の魔術組織に奪われては元も子もない。

ステイル「学園都市は科学の都市です。
おいそれと魔術師が入れる場所ではありません。
また、彼女を保護してくれる人物は、学園都市最強の能力者です。
実際に戦闘してみましたが、強さは折り紙つきです」

しかしローラの不安は杞憂である、とステイルは言った。
だが、それでもローラの不安は拭われない。
そこで一計を案じる事とした。

「インデックスが学園都市に住んでも問題が発生しない」

それを確認出来れば、インデックスを学園都市に置いておこうと思った。
そしてそれを視察するのが……

ステイル（インデックスとデートが出来るのだ！
あの馬鹿な喋り方をする最大主教だが、今回だけは褒めてやる！）

ステイルであった。
自分が所属するイギリス清教のトップを平気でこき下ろすステイル。

インデックス「もぐもぐ……それにしても急にどうしたの？

まさか何かあったの……？」

ステイル「いや、今回の訪問は厄介事を持ってきたわけではない。
今回は、君が学園都市できちんとやっていけるかを視察しにきただけだ」

インデックス「ふ～ん、それで二人だけって条件だったの？」

ステイル「そうだよ？　君が一人できちんと出来るか僕が見るからね」

本当は違うのだが、デートの邪魔をされたくないステイルは平気で嘘を付く。
インデックスも特に気にした様子はないのか、はたまた今の食事が優先なのかそれ以上は突っ込まなかった。
だが嘘を付いた罰なのか、はたまた彼の運命なのか……

土御門「おやぁ？
そこにいるのはステイルじゃないかにゃ～」

二人が声のした方を向くと、アロハシャツを着た土御門が立っていた。

インデックス「すているの知り合い？」

土御門を知らないインデックスは、声をかけてきた人物を見てそう言った。
ステイルはインデックスの問いに答えず、土御門の肩を強引に掴む。

ステイル「君は食事を続けてくれ。僕はこの人と話すことがあるか

ら」

ニッコリと笑いかけながら、土御門を強引に引きずっていく。

土御門「お、おい。いきなりなんだにゃ～？」

ステイル「黙れ」

土御門だけに聞こえる声量でステイルは喋る。
その声は背筋が凍るほどの恐怖感を土御門に味合わせた。

土御門（あれ？　もしかして俺ってば地雷を踏んだかにゃ～？）

インデックスからは見えない位置まで土御門を引きずって行くと、
ステイルは土御門の両肩を掴んだ。

ステイル「いいか。二度は言わない。
僕とインデックスの至福の時間を邪魔しないでくれ。
邪魔すると言うのなら……」

土御門「じゃ、邪魔すると言うなら……なんだにゃ～？」

嫌な予感がジワジワと土御門に迫り来る。
以前のステイルとは何かが違う。土御門は直感的にそう思った。

ステイル「君の逆立てた金髪を、真っ黒焦げのアフロにしてあげるよ」

土御門「……分かったにゃ～」

ステイルの余りの気迫に頷く土御門。それを聞いてニッコリと笑うステイル。

ステイル「分かっていると思うが、覗きもダメだよ。
もし覗きをしたら、ハゲるまでイノケンティウスで頭を攻撃してあげるから」

その言葉を聞いて、土御門はふと自分の髪が無くなった姿を想像した。
想像して後悔した。言いようのない恐怖が土御門の背筋を駆け巡った。

土御門（この年でハゲは嫌だにゃ～！！）

ブルブルと恐怖で体が震える。
反対にステイルは今が一番幸せだといいたげな笑顔である。
結局、土御門はステイルをからかうことなく、そのまま店を立ち去った。

インデックス「お話は終わったの？」

ステイルが席に戻ってきたので、インデックスはそう尋ねた。

ステイル「うん、終わったよ。ちょっとした用事だったようだ」

当然嘘なのだが、ステイルはそれをおくびにも出さない。

インデックス「それじゃあ次は何をすればいいのかな？」

この後の予定を確認するインデックス。

インデックスの中では、自分が学園都市で問題なく住めるか？のテストだと思っている。

ステイル「何でもいいよ。君がしたい事をして欲しい。
ありのままの君を見たいから……」

だが、ステイルはそうではない。
デートも勿論したいが、それ以上に彼女には今を楽しんでほしい。

インデックス「分かったんだよ。それじゃあ行こう！　すている！」

ステイルの返事を待たずに、インデックスは勢い良く席を立つ。
そしてそのまま外に向かって走りだす。

『たとえ君は全て忘れてしまうとしても、僕は何一つ忘れずに君のために生きて死ぬ』

過去にそう誓ったステイル。だが、彼女はもう記憶を失わなくてもいい。
だったらこれからの想い出（記憶）は、せめて幸せな事でいっぱいになってほしい……

ステイル（そう……かつて僕が望んだ光景が目の前にある。
心の底から望んだ光景が……）

インデックス「すているー。早くいこうよー！」

店の出口にいたインデックスが、ステイルの元に戻ってくる。
ステイルの返事を待たずに、インデックスはステイルの手を掴む。
そして走りだす。

ステイル「おっと。そんなに慌てなくても」

インデックス「駄目だよ！　時間は待ってくれないんだよ！」

ステイルはインデックスの笑顔を見て、自分でも気付かないうちに笑っていた。

一度は手放した笑顔。だが、再びその笑顔を取り戻すことが出来た。

この笑顔に誓おう。もう二度と彼女の顔を悲しみで曇らせないと……

――　後日談

ローラ「学園都市からの請求書？」

報告書の中に混ざっていた一枚の請求書。

ローラ「なぁ！？」

その請求書に書かれている金額を見てローラは酷く混乱する。

ローラ「ステェェェイルーーーー！！！！

これはどういう事なのよー！！！」

ココにはいないステイルに向かってローラは叫ぶ。
その請求書にはこう書かれていた。

――　今月のカードのご請求額　４万３４００ポンド
※　１ＧＢＰ＝１３０円

ローラの奇声が、折りよくイギリスへ戻ってきたステイルの耳に届く。
タバコの煙を吐き出しながら、ステイルは酷く愉快な顔でひとりごちた。
ステイル「彼女を苦しめた罰は受けてもらうよ」

【番外】第壱章を終えて判明した原作と相違点

この小説は原作『とある魔術の禁書目録』を元に、再構成しています。
なので原作とは相違がある点がちらほらあります。
その相違点を、このページに纏めました。
無論他にもありますが、第壱章で判明した点をピックアップします。
その他話に影響がないと思った点も記載します。
なので、この内容は第壱章を読み終わった後に読むことをお勧めします。

・上条当麻
1. 姉妹がいる。
暗部組織「アイテム」の浜面仕上を除くメンバーが家族
2. インデックスと出会う前からレベル5のほとんどの面子と知り合い。
3. 金銭面に少し余裕がある。
4. 姉妹全員にフラグを建築済。

・一方通行
1. 上条当麻と同じ高校にかよっている。
2. 小萌と一緒に住んでいる。
3. 性格は原作より少し丸い。
4. 物語開始から暗部組織「グループ」に所属している。
5. 借金八兆円はない。
6. ロリコン疑惑がつけられている。
7. 小萌にだけは異常に甘い。

・垣根帝督

1．上条当麻と同じ高校にかよっている。
2．メルヘンな性格が混じっている。
3．未元物質を既に昇華させている状態。
4．アレイスターのプランには興味を失っている。
5．一方通行とは口を開けば罵り合いをするが、意外と仲は良い。

・御坂美琴
1．物語開始から上条当麻に惚れている。
2．原作より少々空気扱いになる。
3．あんまり活躍しない。
4．一方通行を嫌っていない。好いてもいないが。

・月詠小萌
1．タバコを吸わなくなった。かわりに酒の量が増えている。
（一方と暮らす期間が長かった為、徐々に吸う機会が失われたから）
2．ボロアパートではなく、セキュリティが高い４ＬＤＫマンションに住んでいる。
3．一方通行をとても可愛がっている。
（一方通行の呼び方は『一方ちゃん』、呼び方は『いっぽうちゃん』）

・その他
1．アウレオルスは姫神と協力せず、今でも無駄な努力を続けている。
2．インデックスは一方通行と一緒に住む事になる。
3．絶対能力進化実験は既に凍結済。
4．暗部組織に所属する学生は、基本的にダミーで学校に所属している。

ただし義務ではないので、何人かは研究所手伝いというダミー設定にしている。

5．御坂のみ他のレベル5の顔を知らない。知っているのは名前だけ。

6．浜面仕上は原作では主人公格だが、このSSでは空気扱い。

第弐章予告（前書き）

3／11
第弐章プロット変更により、芳川と一方通行の台詞は第参章予告へ移動

第弐章予告

『初めまして、本日よりこの学校に転校してきました……』

――――――――――――――――――九月二日　とある高校の教室

新たなる出会い

『彼女が……新たに生まれたレベル５ね』

――――――――――――――――――九月四日　某所

そして新たに生まれる力

『ありえない！　そんなのありえないわ!?』

――――――――――――――――――九月四日　常盤台中学校

驚愕の事実に揺れる学園都市。新たなる火種となるのか!?

『私……佐天涙子って言います。お姉さま!』

――――――――――――――――――柵川中学一年生　佐天涙子

運命の出会いを果たす佐天。その出会いは吉と出るか凶と出るか。

『当麻の記憶が戻るっていうの!?』

――――――――――――――――――学園都市レベル５第四位

麦野沈利

『あぁ、俺の計画通りにいけば…コイツがキーだ』

――――――――――――――――――学園都市レベル５第二位

垣根帝督

諦めきれない当麻の記憶！　だがそこに一つの光明が……

第弐章予告（後書き）

第壱章　完結です。
次話より第弐章に突入。

オリキャラが出てきます。
ご注意ください。

九月一日

――――――――　九月一日

小萌「……というわけで、上条ちゃんは記憶消失なのです」

始業式を終え、教室に戻ってきたクラス一同に向かって小萌は口を開いた。

当麻「そうみたいです。上条さん的には皆さんを全く知らない状況でして……」

同じく壇上にいる当麻が、申し訳なさそうな顔で頭をさげる。

クラス全員「……」

さすがに内容がヘビーなのか、茶化したりする雰囲気は微塵もない。皆どう言っていいか分からないような顔をしていた。

一方通行「……」

原因を知っている一方通行は、微妙な顔をしながら当麻を見ていた。重苦しい雰囲気の中、一人の少年が俯き肩を震わせていた。

土御門「……く……くく」

何かに耐えるように口元を抑えていた土御門。

土御門「ぎゃはははははは、カミやん馬鹿すぎるだにゃ～！」

しかし耐え切れなかったのか、腹を抱えて笑う土御門。
その様子に土御門以外の全員が唖然と見ていた。

小萌「こ、こらー！　土御門ちゃん。笑うなんて酷いですよー！」

土御門の行動に唖然としていたが、ハッと気づくと小萌は土御門を注意した。
だが聞こえてないのかなおも笑い続ける土御門。

土御門「はひー、久々に大笑いにゃ～。相変わらずカミやんは面白いだにゃ～」

当麻「上条さん的には、とっても楽しくないんですが！　えっと…土御門？」

そう言うと当麻は土御門の姿をまじまじと見る。
逆立てた金髪、制服の下にアロハシャツ、金色のネックレスとサングラスという、派手な風貌をしている。
明らかに学校には不釣合いな格好だが、誰もそれについて突っ込みはしない。

土御門「いやー、だってカミやんだぜい？
それに重苦しい雰囲気だと、本人も周りも扱いに困るにゃ～」

小萌「それもそうですねー。上条ちゃんですしねー」

土御門の説明に納得がいったのか、うんうんと頷く小萌。
他のクラスメイトも、「まぁ上条だからなー」とか「そうだね、上

条君だしね」とか言い合っている。
そのおかげか、先ほどまであった重苦しい雰囲気は霧散した。

当麻（え？　俺ってそういう扱いなの！？）

ただ一人、記憶消失になった当麻だけ頭を抱えて唸っていた。

重苦しい雰囲気が霧散し、クラスには和やかな雰囲気が流れていた。
その雰囲気を壊すかのように、ガタッと椅子を蹴立てた人間がいる。

当麻はその男の方を向くと、ゾクリと背筋に寒気がした。
男の目は、とても冷たく……しかしとても澄んだ目をしていた。

改めて男の姿を当麻は見る。
長身・茶髪でヤクザ予備軍＋新人ホストのような風貌をしている。
しかしなにより目を引くのは……

当麻（なんでこの人、背中に翼が生えているんですかー！）

垣根「マジで記憶がないのか？　上条……」

背中に六枚の翼をはやした垣根が、何かを確認するかのようにゆっくりと喋る。

当麻「どうやらそのようでして……生まれた時から夏休み中頃までごっそり無くなっております」

垣根「……誰だ……」

当麻「はい？」

垣根「上条の記憶を破壊したのは誰だって聞いてるんだよぉ！！」

バサァと音を立てて翼を広げる垣根。熱い憤りに満ちていた。

そして何を思ったか知らないが、突然窓を蹴破り飛んでいった。

垣根「どいつだぁ！？　どいつが上条の記憶をぉぉぉ！！？」

当麻の返事を待たず、垣根はそのままどこかへ飛んでいった。

あとに残された小萌とクラスメイトたちは、蹴破られた窓を呆然と眺めているだけだった。

当麻「不幸だ……」

ガックリと項垂れた当麻だけ、蹴破られた窓ではなく下を見ていた。

その後何故か蹴破られた窓の修理費を、当麻に押し付けると小萌はホームルームの続きを行った。

小萌「最後ですが、明日このクラスに転校生がやってきますー」

最後の最後で爆弾発言を投下した小萌。当然ながらクラスメイトたちは浮き足立った。

土御門「（転校生？　そんな話は聞いてないな……）小萌先生、男？　女？どっちかにゃ～？」

自分の情報網に引っかかっていない事を訝しげに思いながらも、土御門は小萌先生に質問した。

小萌「転校元の学校が女学院なので、女性だと思います。
　残念だったな子猫ちゃん、喜べ野郎ども！」

クラスの男子たち「うぉぉぉぉ！！！」

小萌の発言に、一気にヒートアップするクラスメイト（男子）たち。対して女性陣は、そんな男子たちを生暖かい目で見ていた。

青髪ピアス「でもなんで今日やないん？　時期としては中途半端やし」

何時もは率先してハイテンションな青髪ピアスが、この時ばかりは常識的な発言をした。

小萌「詳しくは聞いていませんが、その娘が転校するに当たって、随分と揉めたようです。
　本当は七月に入る頃に予定されていましたが、結局九月になったようです」

吹寄「揉めた？　また上条当麻みたいなのは勘弁して欲しいわよ」

当麻「上条さんは一体どんな扱いを受けていたんですか……」

吹寄の発言に、思わずツッコミを入れる当麻。だが、クラスメイトたちはそんな当麻をサラリと無視する。

小萌「そういう意味での揉める、ではないと聴いています。
　詳しくは、分からないのでこれ以上は何ともいえないです」

姫神「転校生…ふふふ、私と一緒」

転校生、という言葉に反応する姫神。その背後には黒いオーラのようなものが見える。
その場にいる全員が思った。姫神にツッコミを入れるのは止そうと……

小萌「まぁ明日になればわかります。それではホームルームを終わります！」

ホームルームを終え、帰宅の途につく当麻。当初はクラスメイトたちの誰かと帰ろうと考えた。
だが、あれだけの扱いを受けた為、素直に一緒に帰ろうと考える気は失せた。

当麻「はぁ～、何というか俺ってひどい扱いを受けていたんだなぁ」

先ほどまでのホームルームを、当麻は思い出していた。

当麻「不幸だ……」

なぜか知らないがチンピラみたいな人、垣根という人が蹴破った窓の代金を請求された。
その上、それについての抗告はまるで無視された。
記憶を失っているので、家族と言われた姉妹に話すのも忍びない。
結局は自分の財布から出すのだが、修理費とは意外と高いのである。
特に高校生ぐらいの財源では、そのダメージはとても高い。
そのダメージが、当麻の足取りを重くしていた。

？？？「きゃっ」

当麻「うぉ！」

下を向いて歩いてたので、反対側から歩いてくる人とぶつかってしった。

バサっという音がして、何かが地面に落ちる。

当麻「す、すみません。前をみていなかったもので！」

？？？「いえ、こちらこそ本に視線を落としていた……あら？」

ぶつかった女性がふと何かに気付いたのか、じっと当麻の顔を見る。

当麻はその視線に幾分の恥ずかしさを感じた。

改めてぶつかった女性を見た瞬間、当麻は固まってしまった。

「こんな綺麗な人を見た覚えがない」、そう当麻は思った。

記憶を失っているので、女性の顔をほとんど覚えてはいないのだが、そう思わずにはいられなかった。

腰まで届く美しい黒髪、整った顔立ち、色白で肌理細かいハリのある肌、均整のとれた体つき、気品ある佇まい……

彼女を構成する全てのパーツが、最高級品で構成されていると当麻は思った。

？？？「？　あの？」

当麻「あ！？　い、いえ……何でもないです！」

女性からの言葉で、ハッとなった当麻は地面に落ちてる本を慌てて

拾う。
ちょっと汚れていたのでパッパッとゴミを払うと、女性のほうに差し出した。

当麻「本当に悪い。ちょっとボーっと考え事していたので……」

？？？「いえ、こちらこそよそ見をしていましたので…おあいこですね」

そう言ってクスクスと花のような笑顔で笑う。
当麻はその笑顔を見て、顔が熱くなり鼓動も早くなった。

当麻「いえ……上条さん的には、こんな美人と会話できるだけで幸せです！」

ドキドキが止まらなくなり、テンパってしまったのでよく分からない事を叫ぶ。
女性は一瞬キョトンとしたが、直ぐに先ほどと同じように花がほころぶような笑顔になった。

？？？「ありがとうございます。
あ、すみません。引き止めてしまいまして……
そろそろ失礼しますね」

当麻「いえ！　気になさらず！」

少しは落ち着いたが、相変わらずドキドキは止まらない。

？？？「それでは失礼します」

深々とお辞儀をした女性にならって、当麻もお辞儀をする。

？？？「上条……『当麻』さん」

当麻「え？」

そう言った女性は当麻の返事を待たずに、本を片手に立ち去っていった。

当麻は女性の背中を見えなくなるまで眺めていた。

当麻「おっかしいな。俺って名前まで名乗ったっけ？
それ以前に名前を名乗ってないよなぁ？」

女性の背中が見えなくなった後、当麻は先ほどの言葉を思い出していた。

苗字は言ったかもしれない。時々、口ぐせで苗字を言う事はある。

だが、名前までは言ってなかったはずだ。

当麻「ま、いいか。どうせ、あんな美人と出会う事なんて二度とないしな」

疑問には思ったが、今更答えを考えても意味はない。そう、当麻は結論づけた。

当麻「しっかし本当に綺麗な人だったよなぁ。あーいうのがお嬢様？っていうのかな？
さってと……それじゃ帰りますか」

そういった当麻の足取りは少し前とは違いとても軽かった。

転校生

――――――　九月二日

この日、小萌のクラス（主に男子）は終始そわそわしていた。
理由は勿論、転校生のことである。
外からの転校生は珍しく、一体どんな人間が来るのか興味津々なのである。

当麻「修理費が痛い……不幸だ」

既に修理された窓を見て、当麻は一人愚痴っていた。
昨日、家に帰った後にレベル５　第二位が大暴れして大変だったという事を聞いた。
名前を聞くと、垣根帝督と言ってたかな。

当麻（昨日のメルヘンな人かよ！　って突っ込んだがレベル５だったのかよ……）

いくら記憶消失の当麻でも、レベル５がどういう存在かは知っている。
学園都市にいる２３０万人のうち、たった七人しかいない。
泣き寝入りするしかない。当麻はそう考えたのである。

垣根「おっす、上条」

当麻「おはようございます、垣根先生！」

ぼーっとしていたら昨日の事件の人が話しかけてきた。

垣根「あ？　垣根でいいよ。なんだよ、その先生って」

チンピラのようにニヤっと笑う垣根。

当麻「いやぁ……何となくノリで？」

自分と垣根の関係を覚えていない当麻は、一体どういうふうに接すればいいのかが分からない。

クラスメイト？　それとも友達？　実は一方的に恨まれてる？

様々な考えが頭の中に浮かんでは消える。

垣根「っと、そうだ。これを受け取ってくれ」

色々と考えているうちに、垣根は懐から茶封筒を取り出してきた。

訝しげに思いながらも、当麻はその茶封筒を受け取る。

垣根「昨日は悪かったな。
　何時もはアイツが払っているんだが今回は上条が払ってくれたそうじゃないか」

中身を見ると大量の諭吉さんが入っていた。

当麻「ぶふぉ！　何ですかこの大金は！」

垣根「何って昨日の窓の修理費とワビの金だよ。
　何か奢ってもよかったんだが、お前ってそう言うのは遠慮するタチだと思ってな」

当麻は改めて茶封筒の中身を確認する。どう見ても修理費を軽く超

えて入っている。

当麻（こんな大金見たことねぇよ！　記憶ないけど……）

ココロの中で一人ボケツッコミをする当麻。
さすがにこんな大金は受け取れないので中から何枚かお金を抜く。
そしてそのまま茶封筒を返す。

当麻「さすがにこんな大金貰えないよ。これだけあれば十分だ」

垣根「そうかぁ？　大した金額とは思えないがな」

当麻から見たら大金でも、垣根から見ればタダのはした金に見えるらしい。

当麻「これが……レベル5の力（財力）か！」

ガックリと項垂れる当麻。
垣根は当麻が最初からそう言ってくるのが分かっていたのか何も言わず茶封筒を受け取る。
返した後でちょっと勿体無いかなと思ったが、どうせ不幸で紛失するに決まっていると思った。
手に持ったお金を財布にしまっていると、垣根が話しかけてきた。

垣根「まぁ昼飯があいてるなら奢るぜ？　それぐらいは受け取ってくれよ」

当麻「それぐらいなら……」

さすがに断りすぎは相手に悪いと思ったのか、当麻は垣根の申し出

に対して素直に頷く。

土御門「ふふふ、あれは相当な美人だにゃ～」

青髪ピアス「そうやねぇ～。これは相当カミやんを警戒しないといけないわ～」

どこかに行っていた土御門と青髪ピアスが教室に戻ってくる。
二人は時々何かを企むような顔をしながら、こちらに向かってくる。

土御門「というわけだ、カミやん」

青髪ピアス「転校生にフラグ立てたら処刑やで？」

当麻「意味わからねぇよ！
大体上条さんにそんな桃色イベントが発生するわけがないでしょう？」

そういった当麻の返答に、突然クラスの男子が殺気立つ。

男子1「ほぅ……つまり上条は無意識にやっていたと」

男子2「これはこれは……勝者は余裕ですね」

男子3「上条ぉ……コロス」

ガタッと椅子の音を立てて立ち上がる男子生徒たち。
その異様な雰囲気にさすがの当麻も冷や汗を流す。
唯一、垣根は涼しそうな感じでクラスの男子たちを見ていたが……

土御門「カミやん……言い残すことはないかにゃ～？」

ポンっと当麻の右肩に手をおく土御門。

青髪ピアス「何かあるなら聞いておくで？　もっとも直ぐ忘れるけど」

ポンっと当麻の左肩に手をおく青髪ピアス。

逃げ道を失った当麻は、ダラダラと嫌な汗を流し続ける。

当麻「えっと……上条さん的には穏便に話を進めたいのですが……」

そう言って土御門と青髪ピアスを見る。二人は当麻を見るとニッコリと笑った。

土御門・青髪ピアス「問答無用！　死ねやカミやん！」

クラスの男子たち「死ねや上条ォォォォォ！！！！」

当麻「不幸だァァァァァ！！！」

瞬く間に当麻はクラスの男子たちに囲まれて見えなくなる。

クラスの男子たちからリンチというなの制裁を食らう当麻。

そしてそれを眺める垣根という構図が出来上がった。

垣根「そろそろやめておけよ。それ以上やると上条が死ぬぞ？」

暫く眺めていたが、さすがに可哀想に思えてきたので垣根が止に入る。

背中に六枚の翼を生やして。

さすがのクラスの男子たちも、レベル5が相手では引き下がる以外にない。
しぶしぶ全員が当麻から離れる。

当麻「うぅ……垣根さんが天使に見えますよ」

ボロボロになりながらも立ち上がる当麻。記憶を失っても相変わらずの丈夫さである。

垣根「そろそろお前らが望んでる転校生が来る時間だぜ？
　さっさと席に座ろうか」

クラスの男子たちの返事を待たずに、垣根はさっさと席に向かう。
それにならってクラスの男子たちも自分たちの席に座りだす。

小萌「はいはーい。ホームルームを始めますよー！
　全員席に座ってくださいー」

全員が座った頃に、ちょうどタイミングよく小萌が教室に入ってくる。

今日ばかりはホームルームの内容がまるで頭に入ってこないクラスの男子たちである。
土御門と青髪ピアスが代表で転校生を見たらしいが、二人とも大絶賛だったそうである。
青髪ピアスがアホをやって危うく見つかりそうになったので、長くは見られなかったらしいが……

小萌「皆さん、転校生が気になるのは分かりますが、私の話も聞いてくださいー」

じわぁっと涙目でクラス全員に訴える小萌。
それと同時にガタッとひときわ大きな音を立てた人物がいる。
一方通行「お前らァ……話はちゃンと聞くよなァ？」
その一言に今までそわそわ気分だったクラスの男子たちは冷や水を浴びせられた気分になった。
その後は特に問題もなくホームルームが進行していった。
小萌「それじゃあ、皆さんも気になっているようですし転校生を紹介しますー！」
クラスの男子たち「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」
待ってましたと言わんばかりにクラスの男子たちが雄叫びを上げる。
が、一方通行が再度席を立った音を聞いて、その雄叫びが嘘のように静まる。
小萌「コホン、残念だったな子猫ちゃん、喜べ野郎ども！
　美少女が転校してきましたよー！
　では、入ってきてくださいー！！」
クラスの男子たちの熱気が小萌にも伝染したのか、珍しくハイテンションで喋る小萌。
その声に呼応して教室の扉が静かに開けられる。
当麻「ゲッ！」

一方通行「！」

垣根「ほぉ……」

入ってきた人間を見て驚く人、息を飲む人、素直に驚く人等……様々な反応を示す。
その場にいた全員が心を同じくした。

――　こんな綺麗な人を見たことがない

小萌「はーい、皆。注目してくださいー。
それでは自己紹介をお願いします」

???「はい、分かりました。小萌先生」

花がほころぶかのような、華やかな笑顔で答える転校生。
その笑顔に早くも陥落する人間が出始める。

???「皆様、初めまして。
本日よりこちらに転校してくる事になりました……あら？」

挨拶をしている転校生の視線が、当麻の方を向く。
その視線に気付いたクラスメイトたちも当麻を見る。

当麻「ど、どうも……」

視線にいたたまれなくなった当麻は、おそるおそる反応を返す。
その瞬間クラスの男子たちから殺気が放たれる。

――　ま　た　上　条　か　！

クラスの男子たちの心はその一言に統一された。

小萌「どうされましたー？」

話の途中で止まったため、小萌が不思議がって転校生に尋ねる。

？？？「いえ、見知った顔を数人見ましたので……
　話を途中で止めて申し訳ありません」

小萌「いえいえー。では続きをお願いしますー」

？？？「はい」

転校生は軽い咳払いをする。

？？？「本日より学園都市の外からこちらに転校することになりました。
　学園都市にはまだ慣れておりませんので、至らない点があるかと思いますが
　少しずつ慣れていきたいと思います」

彼女は一旦そこで言葉を区切り呼吸を整える。
そしてその口から衝撃の事実を話す。

？？？「私の名前は『上条』　優菜と申します。以後宜しくお願い致します」

とても爽やかな笑顔と共に、最大級の爆弾発言を投下した。

上条　優菜

当麻「どうしてこうなった……」

自分の現状を嘆き、ため息を吐く当麻。

土御門「それはこっちの台詞だにゃ～」

青髪ピアス「カミやん？　洗いざらい吐いてもらうでぇ？」

チラっと周りを見る。そこには怒りの形相をしたクラスの男子たち全員がいた。

当麻は頭を抱えて机に突っ伏す。

当麻「記憶がないから知らないのに……不幸だ」

時は遡ってホームルーム時。

核兵器クラスの爆弾を投下した転校生はなんと……

優菜「私の名前は『上条』　優菜と申します。以後宜しくお願い致します」

上条　当麻と同じ姓を持っていた。

小萌「上条　優菜ちゃんは上条ちゃんの従姉妹に当たるそうです。
　ですので……えっと優菜ちゃん。困った事があれば上条ちゃんに聞いてください」

優菜「はい、わかりました」

当麻を除くクラス全員が固まっている間に、ホームルームはサクサクと進んでいった。

吹寄「はっ！　せ、先生！　質問があります！
　少しだけ時間を下さい！」

一番に現実に帰って来た吹寄が、慌てて小萌に質問タイムを要求する。

小萌「わかりましたー。でもホームルームの残り時間だけですよー？」

質問タイムがクラスになじむ方向になればいいと考えたのか、小萌は質問をする時間を許可した。
優菜自身も特に問題と思わなかったのか、小萌の目配せに頷いた。

土御門「まずは俺から行くにゃ～。なんで制服が違うのかにゃー？」

土御門の発言に皆がはっとなる。
優菜が着ている制服は、明らかに学園都市製ではないからである。
クラス一同は上条という姓が気になっていたので、そこまで目がいってなかったようである。

優菜「転校の確定が夏休み後半になってしまいまして…
　その為、制服を用意する時間がありませんでした。
　しばらくはこの制服を着て学校に登校することになります」

小萌を含むクラス全員が、優菜の着ている制服を改めて見る。

見た目はシックだが、明らかに生地から縫製にいたるまで高級感が漂っている。

姫神「ふふふ、私も転校生だったのにこの扱いの差…」

当麻はふと姫神の声が聞こえたので、そちらを向いた。
何かブツブツといってる姫神の背後から黒いオーラが出てるのがみえたので
慌てて目を逸らした。
関わったら何かロクでもない事が起こると当麻は判断した。

青髪ピアス「優菜ちゃん、質問いいですかい？」

優菜「はい、ご遠慮なくどうぞ」

青髪ピアス「ずばり！　優菜ちゃんのスリーサイズを教えて「貴様何を聞いている！」へぶるぁ！！」

くだらない質問をしようとした青髪ピアスをぶん殴る吹寄。
青髪ピアスは悶絶して机と一体化してるが、いつもの事なのか誰も心配しない。

姫神「質問しｔ「私からも質問いいかしら？」ふふふ、質問すら出来ない私」

吹寄「…本当に上条当麻と従姉妹なの？　どう見ても従姉妹とは思えないよ」

当麻を除くクラス全員が頷く。

優菜「いえ、本当に従姉妹ですよ。幼少の頃から面識があります」

姫神「今度こそ！　前の学校はどういう名前なの？」

シュタっと鋭く手を上げる姫神。

その必死さはもはや哀れさすらにじみ出ていた。

優菜「聖カトリーヌ女学院という所です。
　名前のとおり、女子校になりますね」

その後もあれやこれやと質問タイムが続く。

だが時間は無情である。元々短かったホームルームの残り時間は瞬く間に過ぎていった。

小萌「そろそろお終いですよー。次で最後の質問にしますー」

土御門「……最後は答えれないなら答えなくてもいいにゃ～
　ずばり！　カミやんをどう思ってるかだにゃ～！」

最後の最後に核爆弾級の質問が土御門から発せられる。

だが、クラスの男子たちはものすごく真剣な顔をして、優菜からの回答をまっている。

クラスの女子たちの半数ほども同様であった。

優菜「当麻を……ですか？　そうですねー」

顎に手を当てて思案する顔を優菜はする。

少ししして当麻の方を見て、今まで見せた中で最高の笑顔を浮かべていう。

優菜「当麻は私にとって、とても大切な（家族にあたる）人ですね」

一瞬でクラスの空気が変わる。

当麻「ちょっとまて！　何か大事な部分がカットされている気がするんですが！」

当麻の背筋を悪寒にも似た得体の知れない感覚が駆け抜けた。
ここで何も言わなければ確実に不幸になる。そう当麻は考えて必死に言葉を発した。

しかし嫉妬に狂った人間に、当麻の言葉が届くことはなかった……

その後、傍目には静かにホームルームが終了し、そのまま授業に入った。
休憩時間、一方通行が優菜に「話がある」と言い優菜を連れ出してしまった。
その隙を狙うかのように、クラスの男子たちに囲まれてたわけである。

土御門「まぁまぁカミやん。
　この場で私刑がいいか、洗いざらい話すかどっちか選ぶにゃ～」

当麻「土御門！　俺は記憶消失だって言ってるだろう！
　だから正直あの子のことも覚えてないんだよ！」

青髪ピアス「ほぉ……つまりは私刑を選ぶってわけやね」

当麻「何でだよ！　別に桃色イベントが有ったわけでもないだろう！」

本人は気付かないが、嫉妬に身を焦がす人間は恐ろしい。
理論もクソもない。ただ憎いだけなのである。
そして、そういう連中の火に油を注ぐのが当麻なのである。

当麻「大体、上条さんはモテてませんし」

その言葉が引き金となった。
ブチっという音が聞こえた後、当麻を取り巻く連中たちの殺気が膨れ上がる。

土御門・青髪ピアス「カミやん！　ぶっ殺すゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！」

クラスの男子たち「死ねや、上条ォォォォォ！！！！」

一瞬にして当麻に襲いかかるクラスの男子たち。
その速さは一瞬だがレベル5をすら凌駕していた。

当麻「不幸だァァァァァ！！！！」

結局クラスの男子たちが満足するまで当麻は殴られ続けたのである。

上条　当麻の従姉妹が転校してきた。
しかもものすごい美少女らしい。

その情報は一瞬にして学校中に駆け巡った。
一目でも見ようと、学校中の男子が当麻のクラスに押し寄せた。
しかし現実は甘くなかった。

沈利「あたしの可愛い妹に手を出した奴はぁ、ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

優菜の前には、学園都市レベル５　第四位という巨大な壁が存在していた……
沈利が男どもを追い返した後は、当麻のクラスは比較的平和であった。

そして当麻のクラスは、優菜の高スペックに驚かされる事となる。
まず頭脳。
普通の授業は勿論だが能力開発の授業も戸惑うことなくついていっている。
また、学園都市の超能力者と比べて、ほぼ同等の演算力を持っている。

次に身体能力。
基礎能力、腕力、脚力、耐久力、反応速度などを測定したが明らかにレベルが違う。
レベル２の肉体強化能力者と比べても、明らかに優菜の方が上回っている。

そして女としての魅力。
制服姿でも分かっていたが、優菜はとてもスタイルがいい。
体育の時に、クラスの男子たちのほとんどが釘付けだったのは言うまでもない。
勿論その後に吹寄からの制裁を食らったのも当然の結果である。

最後は家庭スキル。
昼食時に弁当を食べさせてもらったが、かなり美味しかった。
土御門、青髪ピアス、吹寄、姫神、一方通行、垣根も食べたようだがかなり好評だった。

今日一日で優菜のスペックを余すことなく見た、当麻を除く小萌クラス一同は思った。

――　上条　優菜はあらゆる意味で上条　当麻の対極にいる人間だと

放課後、優菜の希望により当麻は一緒に帰宅することになった。

優菜「当麻、申し訳ないですね。買い物に付き合っていただいて」

当麻「まーいいよ。どうせ俺も今日は買い物の予定だったし」

優菜「それにしても驚きました。当麻が記憶消失になっていたなんて」

当麻「あっさり見抜いた優菜にも驚いたけどな」

優菜「当麻は最初、私を見て困ったような顔をしましたよね。
貴方の性格からして、久々に会った従姉妹をそのような顔で

見るとは思えません。
　ですので何か記憶障害のような物にかかっていると思いました」

当麻は優菜の名推理に素直に感心した。
小萌先生が、優菜を当麻の身内と知ってあえて教えなかったようである。
だが優菜はそれを簡単に見破った。

当麻（俺ってそんなに簡単なのかなぁ？）

御坂「ん？　あいつは…おーい」

当麻（そんなに簡単に見破れないようにしてたんですがね）

御坂「ちょっと、アンタ！」

当麻（いや、しかしですよ。上条さんだってプライドがありますよ）

御坂「話を聞けやゴルァァァァァ！」

当麻「うおっ！」

突如として背後から電撃が飛んできた。
あわてて右手で其の電撃を打ち消す。

当麻「あぶねぇじゃねぇか！　いきなり何するんだよ！」

御坂「ふん、人の話を聞かないあんたが悪いのよ」

そいつは悪びれた様子もなく、ビリビリしている。

当麻「なんだよ。俺に何か用か？」

御坂「アンタがあたしを無視するからでしょう！？」

またもや電撃を飛ばしてくるが、何とかそれを右手で防ぐ。

そうするとビリビリの視線が俺ではなく隣の優菜にいっていた。

御坂「と、ところで隣の女性は誰よ？　（誰？　すっごいスタイル……）」

優菜「当麻、お知り合いですか？」

御坂（と、当麻？　名前を呼び合うような関係なの！？）

当麻「知り合いっちゃー知り合いだね。

（多分だけど）いつも電撃を撃って絡んでくる子（だと思う……）」

御坂「どうやらもう一回電撃を喰らいたい様ね」

ビリビリと全身から漏電している御坂。

それを見てあわててフォローするもまったく聞こえていない。

優菜「当麻では話が進みませんね。えーと、そこの貴女？」

突如話を振られてはっとなる御坂。

当麻は助かったとばかりにほっとしている。

御坂「え？　あ、はい？」

優菜「私の名前は上条　優菜。
ここにいる上条　当麻の従姉妹にあたります。
以後お見知りおきを」

そういって優雅に会釈する優菜。

御坂「み、御坂美琴です。あ、あの…」

優菜「好きなようにお呼び頂いて結構ですよ、御坂さん」

御坂「あ、じゃあ優菜さん。えっと…本当に従姉妹？」

当麻「またかよ！　ていうか何で皆そんなに疑問系なんだよ！」

御坂「えーだってね…ねぇ？」

優菜「驚くのも無理はありません。
不本意ながら戸籍上は従姉妹の設定になっています」

当麻「設定とか言われちゃったよ！　しかも戸籍上って何！」

頭を抱えてうなる当麻。

本人は自覚がないが、どう見ても従姉妹に見えないのだからしょうがない。

優菜「それにしても驚きました。当麻にこんなに可愛らしい彼女がいたとは」

御坂「か、かかかかかかかかか彼女!?」

瞬間、御坂の顔が真っ赤に染まる。

優菜「違うのですか？
　仲がよさそうに見えましたので、てっきり彼女かと思いましたが」

御坂「あ、あの彼女じゃないですけど！　あ、でも、あーうー」

優菜（ああ、なるほど。
　彼女ではないですが好意は抱いてると。
　それも彼女レベルの好意ですね）

顔を真っ赤にしながらもあたふたをしている御坂を見て、一人納得した優菜。

当麻「彼女？　違うよ、ビリビリとはただの顔見知りだよ」

空気を読まずに否定する当麻。
ビシリっと何かが割れるような音がしたが、当麻は気付いていない。
優菜ははぁとため息を吐いて当麻にいった。

優菜「当麻、どうやらここでお別れのようですね。
　後女性に対して変なあだ名で呼ぶのはおやめなさい」

凄まじい漏電をしている御坂をちらっと見ながらいった。
勿論当麻から見えていないので、気付いていない。
当麻はハテナマークの顔をしていたが、殺気で気がついたのかゆっくりと後ろを見た。

当麻「ビ、ビリビリ？　なんでそんなに漏電してるんだ…？」

嫌な汗をダラダラと流しながらもかろうじて口を開く当麻。

優菜、助けてくれ！と思い優菜の方を見ると、既に遠くに歩いていっている。

御坂「あたしには御坂美琴って名前がねぇ……
あるっつてるだろうがゴルァァァァァァァァ！！」

当麻「何度目だよちくしょう！！！
今日はいつもより不幸だァァァァァァァ！！」

こうして、毎度ながらの電撃姫との追いかけっこが始まった。

優菜「まぁこれも一種の愛情表現なのでしょうね」

遠くに走っていく二人を見つめながら、ぽつりと優菜はいった。

新しき出会い

当麻と（強制的に）別れてから、街をぶらぶらと歩いていた。
本当はスーパーなどにいって、本日の食材を買って帰ろうかと思っていたがどうもそんな気になれない。
ふらふらと歩いていると、よく知らない道に入ってしまった。

優菜「これはいけませんね、本格的に道に迷ったようです」

困った時にどうするかなどの、一般的な対処方法は先日確認を取っていたので特にあせる必要はなかった。

優菜（道に迷った場合は、其のあたりの人間に聞くのがベストですが。
　このような裏路地ではそれもかないませんね）

携帯を取り出し、電話をかけようとしたその時に奥から物音が聞こえた。
気になって見に行ってみると、どうやら女性が男達に絡まれているようである。

優菜（こういう時は風紀委員（ジャッジメント）に通報でしたね。
　但し其の間に彼女がどういう目に合わされるか不安でもあります）

優菜は考えた。このまま何もしないか、ジャッジメントが来るまでの時間を稼ぐか。
よく見ると女性は脅えきっている。
目には涙がいっぱいたまってるし足はガクガクと震えている。

優菜（どうやら時間がありませんね）

とはいえ、全く何も知らない相手に無策で行くのは頂けない。
相手は二人なので、一人を倒すだけでも違う。

優菜（不意をついて一気に攻めたい所ですが…おや？）

足元を見るとそれなりに長い棒が落ちていた。恐らくモップか何かのパーツなのだろう。
学園都市にモップが落ちてるのは気になったが、今はそれどころではない。
見つからないように棒をとると、そこそこの長さがあった。恐らく１ｍぐらいだろう。

優菜（本来は六尺前後ですが贅沢はいっていられませんね……）

相手のポジションを確認…
女の子の前にいる不良Ｂを倒し、その後奥にいる不良Ａも倒す。
勝負は一瞬…私は目の前にある物でわざとを音を立てる。
それと同時に一気に距離を詰める。

不良Ｂ「な、なんだぁ？」

物陰と暗い裏路地が幸いした。相手から私が見えにくく反応が遅れている。
顔だけこちらを向けているのでチャンス！　手前側にいる不良Ｂのコメカミに向けてモップで突く。

不良Ｂ「がっ！」

ひねりを入れて綺麗に決まり、そのまま吹き飛んでいく不良B。
続いて奥のほうにいる不良A！

不良A「なんだぁ！　なんだよてめぇ！！」

不良Aの問いに答えず、モップで彼の左足を内側から外側に向けて払う。

不良A「うぉ！……がひゃ！」

足を払い彼の重心を下に下げる。
膝を支点に梃子の原理でモップを力いっぱい跳ね上げる。
モップの先端部分が、不良の急所を直撃する。
不良Aは、耐えがたい苦痛によりそのまま股を抑える。
私はその隙に掌底で不良Aの頭を狙い意識を刈り取る。

不良A「げふはぁ！」

掌底により吹き飛ばされた不良Aは、その勢いで壁に激突する。
そのまま ずるずると壁に沿って崩れ落ち、ついには地べたに這い蹲る。

優菜「ふぅ……何とかなりましたね」

地面に転がっている二人に目をやると、完全に意識をなくしているのを確認できた。
放っておいても大丈夫だろうと思ったそのとき、後ろからパチパチと手をたたく音が聞こえてきた。

お姉さまと妹

???「すばらしいお手並みですわね」

後ろを振り返ると茶髪を赤色のリボンで結んだツインテールの少女が立っていた。
腕章がついており、どうやら不良達の仲間ではないようである。
よく見ると、その腕章はジャッジメントのものであることに気付いた。

???「風紀委員ですの。到着が遅れてしまい申し訳ありませんでしたわ」

風紀委員だという少女は微笑みながらそれだけ言うと、倒れている男たちに手錠をかけていく。

???「ご協力感謝いたします。ですがあまり無茶はなさらないでください。
　一般人に怪我をさせたとあっては風紀委員の名折れですもの」

優菜「その点については申し訳ありません。
　ですが少女へ危害が及びそうだったため、時間稼ぎをと思いまして」

ペコリと頭を下げる。
明らかに年下であるが、そんな事は関係ない。
実際自分は風紀委員を待たずに、行動に出たのである。怒られても仕方ない。

？？？「いえいえ、怪我がなくて何よりですわ。えっと」

優菜「私の名前は上条　優菜です。
お好きなようにお呼び下さい」

？？？「では優菜さんとお呼びします。
わたくしは白井黒子と申します。黒子で構いませんわ」

優菜「では黒子さんとお呼びさせていただきます」

そして、被害者と思わしき少女を見ると、風紀委員の少女は驚きの表情を浮かべた。

黒子「佐天さん？　襲われている女の子というのはあなたのことでしたの？」

佐天「はい、白井さん。
それで、この人が助けてくれたんです！
凄かったですよ！　まるでカンフー映画みたいでした！」

少々興奮気味に白井に話しかける佐天と呼ばれる少女。
どうやら二人は知り合いのようだ。

黒子「しかしこの学園都市では珍しいですわね…棒術ですか？」

優菜「ちょっとした護身術…というものです」

佐天「あ、あの！　私は佐天涙子です！」

黒子さんと話してる優菜に佐天はおずおずと話しかけてきた。

優菜「私の名前は上条　優菜です。お好きなようにお呼び頂いて結構です」

微笑みながら彼女に話しかける。

目を見たが何か熱っぽい感じがするのは気のせいだろう。

そう思いたい。

佐天「じゃあ……お姉さまってお呼びします！
　よろしくお願いします、お姉さま！」

優菜（ああ…やっぱりそうなのね。こっちでもこうなるのねー！）

お姉さまと呼ばれて、優菜は遠い目をした。

過去にいた学校でもそう呼ばれていた事を、こっちにくればそうならないだろうと思っていた希望が見事に打ち砕かれた事を。

しかし先ほど「好きに呼んで構わない」といった手前、呼び方の変更を申し出るのも無理な話である。

ちらっと黒子を見ると、何故か遠い目をして空を見ている。

優菜は黒子の援軍を期待したが無理と判断し、即座に切り捨てた。

優菜「念の為確認するけど、お姉さまって誰の事ですか？」

佐天「勿論優菜さんの事です、とっても素敵でした！」

ああ、これは無理ですね。もう目が本気です。

そう思いながら優菜は腕に抱きついてる佐天を邪険に扱えず、ため息を吐いた。

そういえばあの娘も最初こんな感じだったなぁとここにはいない誰

かを思い出す。

優菜「わかりました。ですので佐天さ「涙子です！」……涙子さん」

佐天「はい！　なんですかお姉さま！」

優菜「呼び方についてはもう何も言いません。
ですが人目を気にせず大声を上げるのはおやめなさい。
はしたないですよ？」

佐天「あ！　はい、ごめんなさい…」

シュンと気落ちする佐天。
そうしてうつむいてると、ポンっと頭に手が載せられた。

優菜「良い子です、興奮するのもよいですがきちんと節度を守りなさい」

そういって佐天の頭をナデナデする。
佐天は顔を真っ赤にしながらもされるがままにしている。

黒子「（うらやましいですわ、私もお姉さまとあんな風に！）
コホン、申し訳ありませんが事情聴取の為、
支部まで来ていただけませんでしょうか」

優菜「わかりました、涙子さんは…」

佐天「私もお姉さまについていきます！」

優菜「わかりました。（そうなりますよねー）」

黒子「では、参りましょう」

応援にきた風紀委員に事後処理を引き継いで、黒子を先頭に優菜たちは風紀委員の支部にむかった。

事情聴取　ー　風紀委員　177支部　ー

黒子「…以上です。お疲れ様でした」

優菜「はい、お疲れ様でした」

先ほどの事件での事情聴取が完了した。
ふぅっとため息をつくと、片手にお茶を持って佐天がやってきた。

佐天「お姉さま、お疲れ様でした。お茶をどうぞ！」

優菜「ありがとう、涙子さん。ありがたく頂くわ」

しっかりと受け取り、お茶を飲む。
隣では佐天がじぃっと見つめている。
これは何か評価を出さないといけないのかなーと思いながら、二度飲む。

佐天「ど、どうでしょうか…？」

優菜「そうですわね。
　素直な意見、オブラートに包んだ意見、辛口な意見、どれがご所望ですか？」

佐天「それって結局全部同じじゃないですか、お姉さま～」

クスクスと笑いながら佐天を見る。

優菜「そうですわね。では素直に言わせていただきます。

涙子さん、紅茶を入れるのは初めてですよね？」

佐天「うっ！　は、はい…」

優菜「まずティーポットとカップを暖めていませんね。
其の為紅茶の温度が下がっています。
また、お湯の温度が低かったのでしょうね。
きっと普段は日本茶などにあわせているのでしょうか。
そしてお茶の葉が開く前に注いだのでしょうね。
香りが立たず渋みが強く出ています」

つらつらと辛辣な意見を述べていく。隣で聞いている佐天は今にも泣きそうだ。

優菜「……でも」

佐天「で、でも？」

優菜「貴女が私の為を思って入れてくれているのは、はっきりと分かりました。
思いのこもった優しい味ですね」

そういって紅茶を再度飲む。

佐天は舞い上がらんばかりの様子である。

優菜（あの娘がいれた紅茶の味ではありませんが、この味も悪くありませんね）

？？？「まったく佐天さんは、いきなり紅茶を入れたいというから何かと思えば」

佐天「う、初春～。いいじゃないたまには～」

初春「悪いとは言いません。ですが後片付けを人に押し付けないでくださ い」

頭に造花の花飾りを付けており、遠目には花瓶を乗せているように見える少女がやってきた。

確か初春（ういはる）飾利（かざり）さんだったかしら。

支部に入った時に紹介していただいたわね。もっともすぐに事情聴取が始まったので余りお話できてませんが。

初春「優菜さん、お疲れ様でした。もう帰宅していただいて構いません。

佐天さんなんてほっといて」

佐天「初春～、いうわねー。頭の花をむしるぞ～」

きゃいきゃいとじゃれあう二人。

佐天も本気ではないのか、初春の花飾りをついついとつまむだけである。

黒子「ふぅ、書類も終わりましたし、本日の業務はこれまでのようですわね」

初春「そういえば気になったのですが…

優菜さんの制服って学園都市のものじゃないですよね」

ああ、と優菜は思った。

そういえば今は外の学校の制服を着ていたのだった。

優菜「そうですわね、これは学園都市の外にある学校の制服ですからね」

黒子「外？　学園都市に来たのは旅行か何かですか？」

優菜「いえ、転校です。本日より学園都市の学校で勉学に励む事になりました」

黒子は素直に驚いた。
当然だ、学園都市に来るのは基本的に子供の時からだ。
既に高校生レベルの年齢に達している人が外側から転校など聞いた事がない。
佐天も初春も同様に驚いていた。

黒子「そうなると何か特殊な事情でも？」

優菜「そうですね。色々とありまして…」

事情はある…そういったが、優菜はそれ以上詳しい事は口に出さなかった。
黒子たちも、なにか深い事情があると考えそれ以上聞こうとしなかった。

佐天「そういえばあの時使った技…何ていうのです？」

暫く無言の時間が続いたので、耐え切れなくなったのか佐天が話題を出した。

優菜「あの時というと…涙子さんが絡まれていた時ですか？」

佐天「そうです！
　なんかこうシュパッ、シュパッって感じで終わっちゃったので何が何だか…」

どうやらあの時の棒術が気になっているらしい。

初春「ああ、何かカンフー映画だー！って言っていた話ですか？」

黒子「興味はありますわね。わたくしも最後の方しか見られませんでしたから」

どうやら学園都市では、ああいった護身術が珍しいようだ。
三人とも期待に満ちた目でこちらを見ている。
私はそんな彼女たちを可愛らしく思いながらも答えた。

優菜「一人目の方は、コメカミに打ち込んだだけですわ。
　二対一にならないようにすばやいご退場を願いたかったので…。
　もう一人は……まぁ端的にいいますと金的ですね」

ギョッとした顔を三人はする。
さすがに女子中学生の年代で金的とストレートにいうのは些か問題があったかな？
そうは言ってもオブラートに包んでも一緒なので…正直に言ったほうがよいのでしょうね。

優菜「その衝撃で悶えている所を掌底で頭を揺らしただけです。
　これで意識が刈り取られますので」

もっとも、私を含め女性ではわからない痛みらしいですが…
三人を見ると少し困惑したような、それでいてどこか気恥ずかしい感じのように見受けられた。

優菜「あら、もう時間が……そろそろお暇してもよろしいでしょうか？」

黒子「え、ええ。問題ありませんわ」

佐天「じゃ、じゃあ帰りましょう！　お姉さま！」

佐天は慌てて席をたった。しかし優菜はそんな佐天を少し厳しめの目で見る。

優菜「涙子さん？　紅茶は出して終わりではありませんよ。
最後に片付けをしてからそれで終了です」

佐天「うっ！　は、はぁ～い」

どうやら片付けも初春に押し付けるつもりだったらしい。
しかしそう言われては押し付けることなど出来ない。
佐天は全員のカップを片付け始めた。

初春（お～、佐天さんが真面目に片付けている）

そして全員のカップを洗う為か、佐天は部屋から出て行った。

初春「あの佐天さんが真面目に片付けるとは…さすが佐天さんのお姉さん」

優菜「実は、私はお姉さまと呼ばれるのは些か苦手です。
前の学校でもほとほと困りました」

黒子「残念ながら振る舞いや言動がどう見ても「お姉さま」にぴったりですわ」

初春「そうですねー。前の学校でも佐天さんのような方が？」

優菜「……いえ、全校生徒からそう呼ばれてました」

そういいながら遠い目をする優菜。
二人ともこれ以上突っ込んだらいけないと思ったのか、それ以上は何も言わなかった。

佐天「お姉さま～。終わりましたので一緒に帰りましょう！」

空気を読まず明るい声で現れる佐天。

黒子「そうですわね、そろそろ最終下校時刻ですわ」

初春「それじゃ本日の業務は終了ですねー」

優菜「そうですか、長々とお邪魔してすみません。私もそろそろ失礼します」

黒子「いえいえ、中々興味深いお話でした。機会があればまたお話しましょう」

優菜「はい、それでは失礼します」

佐天「あ、お姉さま。待ってくださ〜い」

妹達　ｖｓ　超電磁砲

優菜が事情聴取を受けている頃。

御坂「待てっていってるしょうがぁぁぁぁぁ！！！」

当麻「電撃をまき散らしてるのに止まれるかぁぁぁぁ！！！」

御坂と当麻は懲りずに追いかけっこを続けていた。
電撃を撃つ御坂、右手で防ぎつつ逃げる当麻。

当麻（昔の俺はこんな女に絡まれてたのかよ！
　不幸だー！！）

過去の自分に少しだけ哀れみを持ちつつ走り続ける。
あいも変わらず御坂は追いかけるのを止めない。

当麻（くっそー！　しつこい女だなぁー！！
　俺ってアイツにどれだけ嫌われてるんだよ！！）

御坂の追いかけは、好きによる照れ隠しからくる行為である。
だが記憶を失った当麻は、御坂を「自分を嫌ってる人間」と認識していた。
大きなすれ違いをしたのだが、当の御坂は気付くことはなかった。

暫く走り続ける当麻だが、やがて一つの細道が目に止まる。

当麻（あれはこの前スキルアウトから逃げるときに使った道！
　あの道ならビリビリを撒ける！）

御坂「待てって言ってんでしょうがゴルァー！！」

その声と同時に当麻の肩を掠めるように電撃の槍が飛んでいく。
電撃の槍との距離、わずか数センチ。
当たれば大怪我は免れない。

必死に走っていると、後ろからコンッコンッと何かが地面に落ちる音がした。
振り返ってみると、黒い何かが地面に転がっていた。

当麻（何だ？　あれ？）

疑問に思ったがそれ以上考えることは出来なかった。
黒い物体がいきなり強烈な光を放ってきた。

当麻「うっ！？」

御坂「くっ！　何よ！」

当麻は勿論、急激な光を直撃した御坂も思わず足を止めてしまった。

？？？「こちらです、とミサカはあなたの手を引っ張りながら走ります」

眩しさに眼を細めていると突然誰かに右腕を掴まれた。
当麻は逆らうことが出来ず、そのまま引きずられるように走りだす。

当麻「お、おい！！」

？？？「黙って付いてきて下さい、とミサカはいいます」

今ここで言い合っても御坂に追いつかれると当麻は考えた。
なのでこれ以上言わず、素直に腕を引っ張る彼女の言うとおりにした。

御坂「逃がすわけ……って何よこれ！」

強烈な閃光ダメージを受けた御坂だが、視力が回復してきたので当麻を探す。
だが、見つけた瞬間モクモクと煙に巻き込まれる。

当麻「お、おい！　あれってなんだよ！」

？？？「殺傷能力はありません、とミサカは貴方の手を握りながら走ります」

何時の間にか当麻は右手をしっかりと握られていた。
握っている人物は、後ろを見ずにそのまま走りだす。
当麻は、一瞬御坂を気にかけたが……
仕返しが数倍になって返ってくると思い、一緒に走りだす。

御坂「ゲホッ！ゲホッ！……くっそう～～～！！！　覚えてろよーーーー！！！」

背中に投げかけられる台詞に危険を感じながら、当麻たちは走った。
暫く走り続けるが、御坂が追ってこないとわかると当麻はその場に座り込む。

当麻「はー、はー。な、なんとか撒けたか」

？？？「そのようですね、とミサカはしたり顔でいいます」

当麻「何かしらないが助かった……」

助かったのでお礼を言おうとした当麻だが、助けてくれた人物の顔を見て固まった。

当麻（ビリビリと全く同じ顔じゃねぇか！
　た、多分……妹か何かか？　それにしては同じすぎるような……）

御坂？「どうしました？　とミサカは貴方の顔を見つめつつ尋ねます」

しかしさっきのビリビリとは違い、いきなり攻撃してくる雰囲気もない。

少し警戒しながらも、当麻は汗に濡れた額を拭う。

当麻「しかし助かったよ、ありがとな。
　えーと、御坂妹（……でいいのかな？）」

御坂妹「はい、ミサカは貴方が御坂妹とよんでいる検体番号０００６号です、
　とミサカは一発で当てられたことに少しときめきます」

どうやら正解だったようだ、と当麻は心の中でガッツポーズした。

正直何か気になるワードが出たが、記憶消失中の当麻は下手に聞き返すことは出来なかった。

御坂妹「それにしてもどうしてお姉様と追いかけごっこを?、と
　ミサカは何時もの理由だと思いながら尋ねます」

当麻「（何時もやってたのかよ……）いや、ちょっとした事でな」

本当は理由が分からないのだが、ここは話を合わせておこうと思い
適当に言葉を濁す当麻。
御坂妹もいつもの事と思っていたのか、それ以上突っ込まなかった。

御坂妹「おや、時間が……とミサカはせっかく会えたのに
　直ぐ別れることに悲しみを顕にします」

当麻「そっか、何か悪いな。俺のせいで」

御坂妹「構いません、全てはあの貧乳のお姉様のせいです、と
　ミサカはお姉様に責任転嫁します」

自分の胸を見つつ御坂をけなす御坂妹。
どうやら姉をけなしたつもりだが、自分にもダメージがきた様子。
その様子がとても可愛らしいと思った。

当麻「っと悪い。つい妹にするような感じでしちまった」

無意識のうちに、当麻は御坂妹の頭を撫でていた。
気がついたので手を引っ込めようとしたが、御坂妹に手を掴まれた。
そして自分の頭に当麻の手をおき、続きを催促した。

御坂妹「構いません、続けてください、と
　ミサカは続けてもらうことを要求します」

小動物っぽいその姿に当麻は笑いながらも、頭を撫でることを続ける。

御坂妹「ほふぅ……とミサカは天にも昇る心地を味わっています」

目を閉じてその心地よさに身をゆだねる御坂妹。
しかし時間は無情である。いつまでもナデナデをしてもらうわけにもいかない。

御坂妹「そろそろ行かないと、とミサカはこの時間の終わりを告げます」

当麻「そっか、それじゃまたな」

そう言って別れようとする当麻に、御坂妹は自分でも気付かないうちに袖を掴んでいた。

御坂妹「別れる前に一つだけお願いがあります、と
ミサカは不安で押しつぶされそうな心に喝をいれます」

今にも泣きそうな顔で当麻を見つめる御坂妹。

当麻「俺で出来る事なら何でもいってくれ」

御坂妹の真剣さにあてられ、当麻も真剣に御坂妹を見る。
少しの間だけ口を開いては閉じてを繰り返した御坂妹だが、やがて当麻をしっかりと見据えるとお願いを口にした。

御坂妹「貴方の事を『当麻さん』と呼びたいのです、と
ミサカは上目づかいで貴方に尋ねます」

その願いは余りに些細な願いだった。
だが、御坂妹にとってはそれ以上大事な事はないぐらい重要な願いだった。
願いのあまりの可愛らしさにキョトンとした当麻。

当麻「そんな事でいいなら構わないぜ」

余りにも可愛らしいお願いに少し笑いながらも御坂妹の頭を撫でる。
反対に、御坂妹はほっとした感じの顔で当麻を見ていた。

御坂妹「ありがとうございます、当麻さん。と
ミサカはそっとつぶやきます」

全然そっとじゃないな、と当麻は苦笑しつつ御坂妹の頭を撫で続ける。
撫でられている御坂妹の顔は、夕日に負けないぐらいの眩しい笑顔を浮かべていた。

優菜の身体検査（システムスキャン）

――　九月四日

優菜「常盤台中学校？」

小萌「はい、そうですよ。
　優菜ちゃんの身体検査はそちらで行うようです」

ホームルーム終了時に、優菜は小萌から職員室に来るように言われた。
そして、小萌の言いつけ通り職員室に行くと、本日の身体検査について説明された。

優菜「私は詳しくは知らないのですが、身体検査とは
　各学校で行えないような検査なのですか？」

小萌「普段は各学校で行うのですが……何でもお偉いさんからの指示だそうです」

優菜「そういう事でしたら……では本日の授業は？」

小萌「身体検査が優先だそうですー。
　そちらが終わり次第、授業に参加になりますね」

身体検査が最優先、それ以外は検査が終わってから……となっているらしい。
優菜は困惑した。
ただの一学生に対する処置にしては物々しい感じがするからだ。

ましてや公式に身体検査を受けるのが初の優菜である。

優菜「移動についてはどのようにすればいいでしょうか？」

小萌「行き帰りにタクシーが用意されるそうです。
既に外で待っているそうなので、早めに行ってあげてください。
向こうについたら、案内人が待っているそうです」

優菜「案内人……ですか？」

次々と聞きなれない単語に、優菜は困惑を増す一方だった。

小萌「常盤台中学校へ案内してくれる人です。
学舎の園と呼ばれるエリアは、それなりの広さがあるのですよー」

優菜「わかりました。その他に注意する点はありますか？」

一先ず気持ちを切り替え、今日行われる身体検査について確認をとっておこうと考えた。

小萌「えーと……あ、これですね。これが証明の書類になります」

そういって書類の山から一枚の紙を抜き取る。
抜き取りが悪かったのか、引き抜くと同時にドサーと音を立てて山が崩れる。

小萌「あわわわわ～」

優菜（そうなりますよねー）

崩れていく書類の山を、あたふたとしながらかき集めている小萌。

優菜「小萌先生、机は整理しておきましょう。
　このままだと、そのうち置き場所がなくなりますよ？」

崩れた書類を拾い集めつつ、優菜は小萌にそれとなく小言を言う。
しかし崩れた書類を集めるのに忙しいのか、小萌は全く聞いていない。

やがて周りにまき散らした書類を集めきると、小萌は無造作にその書類を積み上げた。
優菜はため息をつきつつも、小萌には小萌のスタイルがあると思いそれ以上の小言を言うのをやめた。

優菜「書類は確かに受け取りました。それでは、今から行ってきます」

小萌「はーい。行ってらっしゃーいですー」

証明の書類を受け取ると、優菜は職員室を後にした。

学校の校門で待っていたタクシーに乗り込む。
運転手は優菜が乗った事を確認すると、そのまま車を発進させた。
既に混む時間を過ぎていたためか、数十分とかからずに学舎の園までたどり着いた。
優菜はタクシーから降りると学舎の園を見た。

大きな柵が周りに張り巡らされている為か、部外者を寄せ付けない雰囲気を出している。
しかし、あちこち眺めても致し方ないと思い、優菜は案内人と呼ばれる人を探すことにした。

優菜「確か入り口で既に待機しているとの話でしたが……」

？？？「お待ちしておりました。本日の案内人を勤めます……
あら？　優菜さんではございませんこと？」

辺りをキョロキョロとしていたら、突然背後から声をかけられた。
驚いて後ろを振り向くと、立っていた人の姿は見知った人物だった。

優菜「黒子さん？　もしかして案内人とは黒子さんですか？」

黒子「はい、わたくしが案内人を勤めるよう言われております。
失礼ですが、証明の書類はお持ちで？」

黒子の問いに優菜は口ではなく、持っていた書類を渡すことで答えた。
書類を受け取った黒子は暫くそれを眺めていたが、やがて納得がいったのか優菜に返す。

黒子「結構ですわ。書類に不備もありません。
では、常盤台中学校までご案内いたしますわ」

優菜「よろしくお願いします」

黒子に連れてこられて、優菜は常盤台中学校のとある教室に辿り着

く。
元々この場所で計測を行うことが決まっていたのか、既に機材等は揃っているようであった。

黒子「それにしても物々しいですわね。
　かなりの機材が持ち込まれておりますわ」

研究機材が珍しいのか、黒子は辺りをキョロキョロと見ていた。
しかし優菜は研究機材を見て、ある推測を立てていた。

優菜（学園都市は既に私の『力』が何か知っている……？）

詳しくは分からないが、既に環境が限定された感じがする。
大まかなチェックも何もなく、一回目でいきなりこの扱いである。

責任者「お待ちしておりましたわ。
　本日はよろしくお願いします」

考え事をしていると、この身体検査の責任者らしき女性が声をかけてきた。

優菜「上条　優菜と申します。本日はよろしくお願いします。
　こちらが証明の書類になります」

形式上の挨拶を済ませると、優菜は持っていた書類を責任者に渡す。
責任者は書類を受け取り一瞥すると、直ぐに優菜に返してきた。

責任者「はい、確かに。それではこちらで測定をお願いします。
　そちらの案内人さん、どうもありがとうございました」

黒子「いえ、それがわたくしの仕事ですから。
それでは優菜さん。わたくしはこれで失礼します」

そう言って黒子は立ち去っていった。

責任者「一先ずこちらに来てくれるかしら」

黒子が立ち去った後、計測の手順を説明し始める責任者。
いよいよ計測である。さすがの優菜も緊張を覚えた。

責任者「ふふ、緊張するのは分かるけど……
リラックスよ。これをつけてくれるかしら」

優菜の緊張を、初めての身体検査によるものと勘違いしたのか笑いながら話しかける。

優菜（これで……私が『化物』か『人間』か……はっきりするのですね）

だが実際、優菜は別のことで緊張をしていた。
責任者が差し出した装置や機材を無言で優菜はつけていく。
そして始まる。優菜が受ける初めての身体検査が……

新たなる力

身体検査を進めていくうちに責任者は驚愕した。
モニターに次々と映されていく数値やデータが極めておかしいからである。

モニター『該当現象・・・・・・・・・・・・・・・unknown
干渉範囲・・・・・・・・・・・・・・・unknown
該当する能力分類・・・・・・・・・・・・・unknown
（肉体系能力者に酷似）
該当能力・・・・・・・・・・・・・・・unknown
ＡＩＭ拡散力場数値・・・・・・・・・・超能力者　相当
（数値化　不可）
能力強度・・・・・・・・・・・・・・・超能力者　相当
（数値化　不可）
演算速度・・・・・』

その他詳細な計測項目が表示される。
だが、そのほとんどが「ｕｎｋｎｏｗｎ」か「測定不能」で表示される。

責任者（何よこれ……一体どういう事よ！
測定が出来ないのに、強度が超能力者クラスですって！？
ありえない！　そんなのありえないわ！？）

機材の故障を疑った。身体検査のほとんどが計測できずに終わっていくのである。
そう考えた責任者は、一旦優菜の測定を中断し別の能力者を連れて

くるよう指示した。

責任者「ごめんなさいね。ちょっと機材が故障している可能性があるのよ。
　別の能力者を使ってチェックしてみるわ」

優菜「……わかりました。では、少し席を外しますね」

優菜の退出を見届けると、責任者は周りの研究者を集めて打ち合わせを始めた。

責任者「測定結果を見たと思うけど……明らかにオカシイわよ。
　原石を疑うべきかしら？」

自分の考えを周りに伝えるが、周りはただ困惑するだけであった。

研究者A「原石だったとしても……何らかの兆しは測定出来るはずなんですがねぇ」

研究者B「分かっているのが、性能が超能力者クラスという事。
　後は何らかの能力があるはずだけど、それが特殊系列に入るという事」

研究者C「彼女が……新たに生まれたレベル5ね。
　いやー凄いですねー」

研究者A「いや……それならそれらしいデータが出るものだが……」

その後ああでもないこうでもないと言い合うが……結局答えは出ず仕舞いであった。

その上、別の能力者を数名連れて機器のチェックをしたが……故障は一切見つからなかった。

午前だけを予定していた身体検査だが、午後からも継続し詳細な検査を行う。
しかしどれだけやっても彼女の能力を判定することは出来なかった。

結局のところ、身体検査の情報を持ち帰り、上からの判断を待つという事で決着がついた。
優菜の身体検査が終わったのは、最終下校時刻ギリギリであった。

モニターを眺めていたアレイスターはほくそ笑む。
映しだされた画面に表示されていたのは、今日の優菜から得た計測結果である。
最も……ほとんどが「ｕｎｋｎｏｗｎ」か「測定不能」であるが……

土御門「楽しそうだな、アレイスター」

アレイスター「勿論だよ、土御門。想像以上のデータが手に入ったからだ」

嫌味で言ったつもりだがアレイスターには意味がなかったようである。
相変わらずモニターに流れるデータを延々と眺めている。

土御門「ほとんどが計測不可のデータじゃないか。
そんなデータが何に役立つんだ？」

アレイスター「わからんかね？　だからこそだよ。

彼女は、ただの機材で計測できない。
それが証明されただけでもよい」

土御門「何？」

アレイスターのあやふやな回答に疑問を持つ土御門。
だが、アレイスターはそんな土御門に興味を失ってしまったのか、
まるで彼を見ていない。
ずっと画面に流れるデータを眺め続けている。

土御門「チッ、それで？　俺を呼んだのはそれだけではないのだろう？」

アレイスター「無論、君に一つ仕事をしてもらいたい」

土御門「暗部としての仕事か？　それなら電話相手を通せばいいだろう？

イチイチ俺をよぶな」

最近になってだが、土御門が所属している暗部組織『グループ』は、
アレイスターから直接依頼を受ける。
以前は電話相手を通してだったはずだ。

アレイスター「冷たいね、土御門。
これでも私は君との会話を楽しんでいるのだよ？」

土御門「ほざけ」

無論、アレイスターなりの愉快なジョークなのだろう。
だがそうと分かっても土御門はイラつく気持ちを抑えられない。

反対にアレイスターはとても楽しそうな顔をしている。
土御門がそう見えるだけで、実際笑っているかどうかは怪しいが……

アレイスター「詳しい情報はデータスティックにいれてある。
では、よろしく頼むぞ」

そう言ってアレイスターは、またモニターを眺める。
今の彼は、土御門への興味を全て失ったようである。

土御門は悪態をつきながらもデータスティックを無造作に掴む。
そしてそのまま、結標と共に窓のないビルを出て行く。

アレイスター「ふふふ……やはりそうだったか」

土御門たちが去って暫くしてから口を開くアレイスター。
彼は酷く愉快な顔でひとりごちた。

アレイスター「熾烈な環境こそ彼女に相応しいだろう……
楽しませてもらうよ、上条　優菜」

優菜の能力

小萌「はい、上条ちゃん。今日の補習はココまでです。明日も補習ですので」

補習がやっと終わり、当麻は全ての力を使い果たしたかのように机に突っ伏した。

当麻「不幸だ……」

小萌「今日は優菜ちゃん、戻ってきませんでしたねー」

補習の片づけをしながら、小萌は話しかけてくる。

当麻「昼頃に一度、本日は戻れませんって連絡があったきりですね」

小萌「そうですねー。何かトラブルでもあったのでしょうか？
でもそれらしい連絡はなかったですね」

当麻「まぁ明日になれば分かるんじゃないですか？」

小萌もそうですね、と呟いた。

当麻「それじゃー帰ります。お疲れ様でしたー」

小萌「はい、お疲れ様でしたー」

この時俺は知らなかった。
まさかあんな事が起こっていようとは。

――次の日

土御門「そいやぁ昨日は優菜ちゃん朝から常盤台行ったきり帰ってこなかったにゃー」

朝教室につくと、いの一番に土御門が話しかけてきた。

当麻「そうだなー。連絡も昼に一度だけでその後音沙汰なしだったな」

青髪ピアス「なんで常盤台にいったんや?」

土御門と話してると、青髪ピアスまで話に混ざってきた。

土御門「何でもここのシステムスキャン機器だとうまくいかなかったから、

整備の整った常盤台に行ったらしいにゃー」

青髪ピアス「なんや、珍しい能力でも持ってたんかいな」

当麻「だから常盤台にいったんじゃないのか?」

しばらく待ってみたが、やぱり優菜はこなかった。

小萌「はいはーい。皆さっさと席に着きなさい。それから上条ちゃん」

当麻「は、はい。なんでしょうか……」

小萌「優菜ちゃんについて何か聞いてませんか？昨日常盤台を出てから……」

その時教室の後ろ扉があけられた。

黄泉川「小萌先生！　大変じゃん！！」

隣のクラスの黄泉川愛穂先生が、突然教室に乱入してきた。
どう言う理由かしらないが、走ってこの教室までやって来たらしい。

小萌「うひゃ！　って黄泉川先生？　どうなされましたー？」

黄泉川「さっき電話があったじゃん！
　何でもこのクラスの子が病院に担ぎ込まれたそうじゃん！！」

小萌「え……？」

吹寄「ちょっと待って！　今このクラスでいない人って……」

全員がひとつの机を見る。その席にすわっている人間の名前は…

青髪ピアス「優菜ちゃんだけやないか！」

当麻「先生！　優菜の容態は！？」

病院に担ぎ込まれたという事は、それなりの怪我や病気の可能性がある。

黄泉川「判らないじゃん。電話の話では全身血まみれで担ぎ込まれ

たそうじゃん」

当麻「そんな…どうして！」

小萌「落ち着くのですよ、上条ちゃん！」

動揺し混乱気味の当麻に一喝する小萌。
その声にハッとなり当麻はそこで初めて自分がパニックを起こしている事に気付く。

小萌「ともかく、私は病院に行ってきます。
皆さんはきちんと授業を受けてくださいー！」

そう言うやいなやテキパキと教壇の上に乗せているものを片付け、さっと教室を出て行った。
黄泉川先生もその後に続くように教室を出て行った。
後に残された当麻たちは、余りの展開に押し黙ってしまった。

当麻（優菜……無事でいてくれよ）

当麻は、ただ無事を祈るしか出来ない自分が歯がゆかった。

昼頃、小萌先生が戻ってきた時皆は一斉に状況を聞きに行こうとした。
だが小萌先生は、放課後に話すと言ったきり押し黙ってしまった。
そわそわしながらも、放課後になるまで待った。

放課後になり、小萌先生は約束どおり教室で優菜の状態を説明してくれた。
右腕がズタズタになっている事。傷がかなり深い事。

現在は治療中であること。意識は戻っていない事。

小萌「これから先生はもう一度病院に向かいます。
全員では押しかけれないので何人かしかいけません
が……
上条ちゃん、一方ちゃん、垣根ちゃん、吹寄ちゃん、付き添いお願いします」

付いていく人間を指名し、手早くホームルームを終わらせる。
他のクラスメイトも気にはなったが、小萌先生が有無を言わさず話を進めていくので何も言えなかった。
小萌はそのまま名指しした人間をつれて病院へと向かった。

――病院の屋上

病院の屋上で、優菜は黄昏ていた。
彼女は今朝血まみれで担ぎ込まれた急患だったはずだ。
だが黄昏ている彼女からは、ケガ人という感じは一切しない。

優菜「……」

彼女は手に持っている紙切れを一瞥したが、それっきりまた空を見上げていた。

優菜「……やっぱり私は普通の人間ではなかったのですね」

自嘲気味に笑う。今まで信じていたものが壊れ崩れ落ちていく感覚がする。
自分は『人』だと信じてここまで来た。
だがつきつけられた現実は『人ではない』という結果だった。

強い風がふき、彼女の髪を、病院服をはためかす。
そしてそれは彼女が持っている紙切れも同様であった。
その一部がめくれてしまった。しかし彼女は気にすることなく空を見続けた。
風によって、めくれた部分にはこう書かれていた。

――――被験者：上条　優菜　能力レベル：レベル５　能力名……

レベル5　第六位

病院についた小萌たちは早速優菜の病室に向かった。
しかし彼女たちはそこで驚愕する。病室のベッドに優菜の姿がなかったのである。

小萌「ど、どうして！　どうして優菜ちゃんがいないんですかー！」

一方通行「落ち着けロリ……どうやら荒らされた様子はねェ。
だが重体だったンだよなァ……なンでいないンですかァ？」

吹寄「でも…本当に何処に行ったんだろう…」

ナースステーションで病室を確認したから間違いない。
今朝担ぎ込まれた病室もココだったはずだ。
だから居なくなるという事はありえない。

優菜「私に何か用でも？　ってあら皆さんお揃いで…」

皆声がした方を向く。そして目を見開いて固まる。何故なら…

優菜「何か御用ですか？」

そこには『とてもケガ人には見えない』優菜が立っていたからである。
夕菜は全員を病室に招き入れると、自身が持っていた紙切れを小萌に差し出す。
小萌はその紙を受け取ると、内容を朗読しはじめた。

小萌「対象者　上条　優菜のシステムスキャン結果を以下に記載する。

彼女の能力は天上霊薬＜エリクシール＞。
これまでの肉体再生などと次元が違う。
彼女は自身は勿論、他者の怪我・病気などを治す事が可能と見られる。
通常では死に至る怪我でも完治させれる可能性がある。
また、不治の病とされていた病気についても、彼女は治せる可能性がある。
検証次第では、彼女の能力は事実上の万能薬といえるかもしれない。
以上を持って彼女を、レベル５　第六位とする。

追記：彼女の能力は直接的な戦闘には向かない。
よって、現状ではレベル５の中で『最弱』である」

小萌の衝撃の発言に全員の身体が硬直する。
優菜がレベル５？　驚愕の事実に脳の処理が追いつかない。
吹寄「レ、レベル５って……そんな簡単なものじゃないでしょう！？」
何とか理解が追いついた吹寄が、疑問を周りにぶつける。
レベル５になるなんて簡単じゃない。
ましてや優菜はこれまで能力開発など一度として受けてない。
むしろ先日、初めてシステムスキャンを受けたばかりだ。
優菜「でも……どうやら学園都市側はそう答えを出したようです」

全員に背を向けて話す優菜。一体彼女はどの様な顔をしているか。
だがその肩が、小刻みに震えているのだけは見て取れた。

垣根「……しかし解せないな。
　優菜がレベル5というのは限られた人間しか知らないはずだ。
　それなのに襲撃を食らう理由がわからん」

暫く無言の状態が続いたが、ふと垣根が疑問を口にした。
しかしその疑問は誰もが思っていた事であった。

吹寄「レベル5の情報ってかなり高いプロテクトがかかってるよね？」

一方通行「下手に見ようとすれば一発でお縄だァ」

本人の希望もあるが、一般的にレベル5に関する情報は非公開だ。
第三位の超電磁砲は広告塔だから、顔も名前も割れている。
しかし他のレベル5については、知り合いでもなければ顔すら知らない。

一方通行（土御門なら何か知ってるかもなァ……）

やつなら何か知ってるかもしれないと、一方通行は思った。
しかし今この場にはいないので、問い詰めることは出来ない。

一方通行「それで、どうするンだ。
　今回は助かったかもしれねェが次はどうなるかわからンぞ」

優菜「今の所良い案はありません……

それなりの自衛をするしかないでしょう」

相変わらず全員に背を向けているので、優菜がどういう表情をしているか分からない。

一方通行「自分の能力についてはある程度把握してるンだよな？」

優菜「ええ、ある程度知ってます。
もっとも他にできる事もあるかもしれません。
現在自分で分かっているのは怪我の治療、病気の治療、細胞の再生ですね」

垣根（ん？細胞の再生？）

優菜の言葉にふと気になるキーワードが含まれていることに気付く垣根。

優菜「細胞の再生は今のところ、頚椎や神経細胞などが可能です」

垣根「（頚椎も治療したのか…待てよそれなら）
なぁ、後で優菜ちゃんと二人で話をしたいがいいか？」

当麻「ダメ」

一方通行「却下ァ」

吹寄「ダメね」

垣根「何でだよ！
なんでダメなんだよ！」

全員からのツッコミに思わず声を荒げる垣根。

当麻「まぁ冗談は置いといて、優菜が良いって言うならな」

優菜「別に問題はありません。
この場では言えないことでしょうか？」

垣根「あーうん。ちぃっと確証が取れないのでな」

優菜「分かりました。
では、後ほどお時間を作りますのでお待ちください」

垣根「了解。
別に何もしねぇって。だから吹寄、俺を睨むな」

じとーと半眼で垣根を睨む吹寄。

一方通行「何企ンでるんですかぁ、第二位」

垣根「ん、ちょっとな」

予想外に歯切れの悪い垣根に興が削がれたのかそれ以上何も言わない一方通行。

垣根「予想が当たれば……かもな」

これからいたずらする子供のようなワクワク感が、垣根の中に沸き上がってきた。

垣根の思惑

冥土帰しによる検査の結果、特に問題がないとの事なのでその日に退院をした優菜。

垣根「悪いな、付き合ってもらって」

優菜「かまいません、それでお話というのは？」

垣根はそんな優菜を連れて街を歩いていた。

垣根「あーその辺のファミレスでいいか？」

そう言うと、垣根はファミレス「オリャ・ポドリーダ」に優菜を連れて入る。

時間が時間なのか、余り混んでおらず気軽に座ることが出来た。

垣根「話ってのは他でもない。アンタの能力で一つ試したい事がある」

優菜「試したい事？」

垣根「そうだ、上条の記憶消失についてだがな。
あれは物理的に脳細胞がぐしゃぐしゃになってるからだと冥土帰しから聞いた。
今日アンタは神経細胞の再生が出来たといっていた。
だったら脳細胞も治療可能かもしれないと思ってな」

優菜「なるほど、当麻の脳細胞を回復させ記憶消失を治療する。そ

ういう事ですね」

垣根「そうだ、そこでアンタに協力を申し入れたい。
　勿論どんな事が起こるかわからないから上条には黙っててくれ。
　アンタを傷つけたら上条に怒られそうだしな」

ハハッ、と笑いながら抹茶ラテを飲む垣根。
そんな垣根を見ながら優菜は考える。
今まで自分の力を目当てに近づいてきた人間は多い。
今回もそのような内容だろうと思っていた。
だが実際は友を心配する一人の少年からのお願いだった。

優菜「構いません、但し他にも協力者が要るでしょうね。
　まずは「あー！　お姉さま！」……後で電話します」

垣根「ん？　何をいって……」

垣根が抹茶ラテから意識を優菜に向けた瞬間、隣に座ってる奴に気付いた。
こちらを凄い目で睨んでいる。

垣根「横のガキからすっげぇ睨まれてるんですが、俺が何かしたのか」

御坂「もういきなりどうしたのよ、佐天さん。って優菜さん！？」

黒子「お姉さま～。どうしましたの？」

初春「もう佐天さ～ん。いきなり走っていかないで下さいよー！」

よく見ると他にも連れがいたのか、ゾロソロと出てくる。

優菜「ごきげんよう、皆さん」

なおも垣根を睨む佐天。対して特に気にした様子もなく垣根はおどけてみせる。

優菜「涙子さん、そんな顔してはいけませんよ」

佐天「だ、だって」

優菜「だってではありません。
いくら見た目がヤクザ予備生で新人ホストのような方でも、淑女たるもの、露骨に嫌悪感を表に出してはいけませんよ」

垣根「おい、なんで俺はそこまでディスられなきゃーならんのだ」

優菜「ちょっとした親愛の証ではありませんか。
そして、これが私の連絡先になります。
手が空いたら連絡します」

垣根「おう、こっちが俺の連絡先だ。時間が出来たら連絡してくれ」

互いの連絡先を交換しあうと、伝票を片手に垣根は立ち去っていった。

御坂「な、なんか凄い話で固まっちゃったけど……座ろっか」

御坂の発言で、固まっていた各人も思い思いに座った。

優菜は特に気にせず、紅茶を飲んでいる。

御坂「ね、ねぇ。誰かさっきの男性の事聞かないの？」ヒソヒソ

黒子「しかしいきなり不躾な質問をするのも気がひけますの」ヒソヒソ

初春「幾ら何でもいきなり聞けるわけないじゃないですか」ヒソヒソ

三人は揃って優菜を見た。優菜は特に気にする事もなく紅茶を飲んでいる。

隣にいる佐天もどうしたものかと考えているところだ。

優菜「皆さんは先ほどの男性との関係が聞きたい。
けれど、どう聞けば良いか分からない。
違いますか？」

四人「お、おっしゃるとおりです……」

優菜「先ほどの男性は、私のクラスメイトです。
少々頼み事をされてたのですが、涙子さんたちがこられたため中断しました。
余り他人に聞かれたくなさそうでしたので……
ですから後で連絡する為に互いの連絡先を交換しました」

佐天「そ、そうなんだ」

ホッと胸をなでおろす佐天さん。

御坂「……ねぇ」

ふと見ると、御坂が真剣な顔で優菜を見ている。
時々何かを考えるように視線を逸らしたりしたが、しばらくしてはっきりと言った。

御坂「どうやったらそんなに綺麗な肌になれるの？」

突拍子も無い質問に思わず硬直する優菜。

御坂「見てよこの肌！　すべすべのつやつやよ！　正直ありえないわ！」

優菜の左手を掴んで力説する。

黒子「ちょっと失礼しますわ。……本当にすべすべですわね」

初春「なんというか赤ちゃんのような感触です」

佐天「おまけにぷにぷにです」

四人から左手をひたすら触られる。

優菜「あの、くすぐったいですわ」

すべすべだのぷにぷにだのといっていた四人は、その言葉ではっとなり優菜から手を引く。

御坂「ご、ごめん！　でも同じ女性として羨ましいというか何というか……」

初春「優菜さん、普段どんなお手入れを！」

初春の言葉に、他の人間も気になるのかじっとこちらを見てくる。

優菜「……これといって何も特別なことはしていませんが……」

四人「なん……だと……」

本当に何もしてない。身嗜みに問題がなければそれでよい。
そんな感じでしかお手入れはしていない。
なのに何故四人はそんなに羨望のまなざしで見るのか。
お肌の悩みを持つ乙女たちが理解できない優菜であった。

しばらく談笑していたが、そろそろ垣根に連絡を取ろうと思い席を立った。

優菜「申し訳ありませんが、少々用事がありますのでお先に失礼します」

そういってかばんを片手に席を立つ。

御坂「そう？　また今度遊びましょうねー」

黒子「ごきげんよう、優菜さん」

初春「楽しかったです。また今度遊びましょう！」

佐天「お姉さま、またですー」

用事という事なので、佐天はおとなしく優菜を見送った。

優菜「楽しい一時でした。それでは皆さん、ごきげんよう」

そういって店を後にした。

喫茶店で優菜と別れてから街をふらふらと歩く垣根。

垣根（さぁて……何して暇を潰すかなぁ～）

女同士の話し合いだ。さぞかしクソ長いだろうなぁと垣根は思った。
くだらない理由で暇を作ってしまった垣根は、当麻の治療について
考え始める。

当然ながら細胞を元に戻しても記憶は戻らない。
記録媒体を修理しても、データは元に戻らないのと同じだ。

だから完璧な記憶回復は望めないが、九割方の回復なら見込める。
まずは協力者を確保するしか無い。そう垣根は考えていた。

？？？「邪魔です、とミサカはメルヘンに向かって言います」

深く考えながら歩いてたからか、突然の声にも反応できなかった。

垣根「……あぁ？　なんだテメェか、超電磁砲のクローン」

御坂妹「検体番号００００６号ですよ、とミサカはいつまでも覚えないメルヘンにため息を吐きます」

垣根「……やっぱテメェ等はあの実験でブッ殺しておくべきだったな」

垣根は忌々しげに御坂妹を睨むと、チッと舌打ちをした。

コイツを見るとあの実験を嫌でも思い出す。
第一位の代理としてやらされたあの実験を……

御坂妹「怖い怖い、とミサカは貴方に怯えたフリをしてみます」

垣根「ケッ、そのひん曲がった性格はオリジナル譲りか？」

実験後に初めて会った時から思っていた。
コイツ等とは絶対に馬があわない……と。
とにかくウザッたい喋りだし、イチイチ人の神経を逆撫でしやがる。
いつもは雑魚の行動を気にもとめないが、超電磁砲とそのクローンは別である。

御坂妹「貧乳のお姉様を馬鹿にしないでください、とミサカはメルヘンに向かって警告します」

垣根「……お前らはいいのかよ」

御坂妹「ミサカたちは親愛を込めて言ってるのですよ、とミサカは言い訳してみます」

ミサカの言い訳に呆れる垣根。
これ以上は馬鹿らしく思ったのでさっさと話を切り上げようと思った。

垣根「くっだらねぇ。素敵なオブジェになる前にさっさとどっか行け」

シッシッと手を振るジェスチャーをする垣根。

御坂妹「ミサカに手を出せばその瞬間に９９９９人の敵が出来上がりますよ、
　とミサカはメルヘンを脅してみます」
垣根「９９９９体の死体が出来上がるだけだ、ボケナス」
まともに戦闘した覚えはないが、超電磁砲のクローンごときに遅れを取る事はない。
オリジナルの超電磁砲ですら絶対的な力量差があるのだ。
劣化したクローンごときに負ける要素はゼロだと垣根は思った。
垣根（だがレベル０の上条に俺は負けた。
　だとするとコイツらだって？　いや……それはないな）
当麻のような特殊能力もない超電磁砲のクローンごとき問題にならない。
垣根はそう結論づけた。
御坂妹「その割には実験の最初に当麻さんから派手に殴られましたよね、と
　ミサカはメルヘンの心を抉るような言葉を選びます」
垣根「本気で死にてぇようだな……イイゼェその願いをここで叶えてやる」
御坂妹「おっとさすがに言い過ぎたかな、とミサカは謝らずに逃げます」
言うやいなや素早く垣根の視界から逃げ出す御坂妹。
逃げる御坂妹の背中を、垣根は何もせず見ていた。

垣根「絶対能力進化計画……か」

無意識のうちに当麻に殴られた左頬に触れる垣根。

今じゃ傷痕も何もない。だが、あの一撃は確実に垣根の幻想を打ち砕いた。

あの実験乱入時に当麻が言っていた言葉を垣根は思い出す。

当麻『誰かを犠牲にして力を手に入れる事が本当に正しいのかよ！？』

その目は余りにも真っ直ぐで……眩しすぎた。

当麻『お前の願いは誰かを犠牲にしなければ叶わない事なのかよ！？』

その言葉はまるで自分の弱い部分を抉るかのようだった。

当麻『いいぜ……テメェがあくまで自分の願いに、他人の犠牲が必要だっていうなら……』

レベル５という絶対的な壁を、学園都市第二位という壁を恐れずに。

当麻『まずはその幻想をブチ殺す！！』

アイツは俺に立ち向かった。

『アイテム』が途中乱入してきたとはいえ、俺が負ける要素はゼロだったはずだ。

事実、戦闘は一方的だった。

だが『アイテム』の人間が倒れたのに、アイツは常に立っていた。

垣根（実際に俺がダメージを負ったのは当麻の一撃だけだった）

ズタボロの当麻たち、一方の俺は一回殴られただけ。

その気になれば当麻たち全員を殺すことだって出来たはずだ。

それなのに俺は思った。目の前の男には勝てない……と。

初めて自分から敗北を認めた瞬間だった。

その時に何かが壊れた気がした。

垣根（思えばあの時からか。アレイスターのプランに興味を失ったのは。

心理定規も言ってたな。『実験を境に貴方は変わった』って）

ポケットから携帯を取り出すと、目的の相手を検索する。

暫くしてディスプレイに検索結果が表示された。

その画面には『第一位』と表示されていた。

垣根（確かに変わったな。あれだけ嫌っていた第一位と協力するなんてな）

携帯を操作し、通話ボタンを押しながら垣根は思った。

垣根（だが……悪くねぇ）

心理掌握

店を出た後、しばらくして優菜は垣根に電話をした。

垣根『予想より早かったな。女ってのは長話好きかと思ったよ』

優菜「そうかもしれませんが……
とにかく、今の時間以降なら問題ありません」

垣根『じゃあ悪いが、第七学区の病院まで来てくれ。
優菜が運ばれた病院だ。そこで詳しく話をする』

優菜「分かりました。これから向かいます」

垣根『よろしくなー。こっちも協力者連れて向かうよ』

そう言うと、垣根は優菜の返事を待たずして電話を切った。
ポケットに携帯をしまうと、優菜は第七学区の病院に向かって歩き出した。

一方、垣根はというと……

沈利「それで？　あたしたちを呼んだ理由は何だ？　第二位」

一方通行「態々よンだンだァ。つまンねー事なら殴るぞ」

垣根「至って真面目な話だ。
まずは冥土帰しがいる病院にいく。詳しくはそこで話す」

一方通行「もったいぶらねェで言えよ、メルヘン」

垣根「詳しい話は病院でするっつってるだろう。
まぁまだ確証はねぇけどさ。俺の推測が正しければな」

そこで一呼吸置いて、垣根は言葉を続けた。

垣根「上条の記憶消失が治るかも知れねぇって事だ」

――第七学区の病院

沈利「……そろそろ喋ってもらいたいねぇ、第二位」

そわそわしつつ垣根に話しかける沈利。
そんな沈利を無視して、垣根はあたりを見回す。

垣根「おっかしいなぁ、電話の時には既に向かっているといってたが」

???「人を待たせすぎですね。時間には正確にお願いします」

背後から声がして、一同は声がしたほうを向く。

垣根「心理掌握、どこ行ってたんだ」

そこには心理掌握と呼ばれた女性が立っていた。

心理掌握「淑女には色々と準備が必要なのですよ、垣根さん」

垣根「ああ、トイレね」

心理掌握「なっ！！　少しは言葉を選びなさい。
　相変わらず下品ですわね」

顔を真赤にしながらも、トイレ自体については否定しない心理掌握。
垣根は肩をすくめながらはいはいと答えた。

優菜は初めて出会う女性なので、少し観察を込めてみていた。
膝まで届きそうなほどの茶色がかった黒髪。
淡いピンク色の小さな花が左側ついた白いカチューシャ。
常盤台中学校の制服、黒いオーバーニーソックス……
可愛らしい雰囲気も相まって、とても似合っていると思った。

そうしてると心理掌握が優菜の存在に気づいた。

心理掌握「あら、そちらの方はどなたですか？」

優菜「初めまして、上条　優菜といいます。お好きなようにお呼び下さい」

心理掌握「上条？　当麻先輩の親戚か何かですか？」

優菜「当麻とは従姉妹にあたります」

心理掌握「なるほど……私は心理掌握。
　お好きなようにお呼び頂いて結構です。
　私は貴方を優菜さんとおよびしますわ」

胸に手を当てて一礼。
優菜もそれに習って同じように一礼をする。

一方通行「常盤台の女王様とは思えねェぐれェお淑やかモードだな」

心理掌握「お久しぶりですわね、一方通行さん。
それと女王様ではありません。ただの一学生です」

沈利「こころんは常盤台最大派閥の頂点がろうが。なぁに言ってるんだか」

心理掌握「あれはお遊びだと言ってるでしょう」

一方通行と沈利も心理掌握との会話に交じる。

優菜「こころん？」

一方通行「ン、あァ、心理掌握の先頭が心だからこころンなンだよ」

優菜「なるほど……なら私は心さんとお呼びします」

心理掌握は構いませんわと返答を返す。
どうやら呼び方はある程度の範囲なら気にしない人のようだ。

垣根「ちなみに奴の本名は上条以外言っちゃいけないっていう暗黙のルールがある」ヒソヒソ

一方通行「一応三下と幼馴染なんだよ、こころンは。
というか上条家とか……だから三下や原子崩しとは面識がある」ヒソヒソ

沈利「その当麻経由で、第二位と第一位とも面識があるって事」ヒ

ソヒソ

優菜「なるほど……わかりました」ヒソヒソ

垣根「後女だったら恒例の質問が飛ぶから気をつけろよ」ヒソヒソ

優菜「どんな質問なんですか？」ヒソヒソ

一方通行「すぐにわかる」ヒソヒソ

四人肩を揃えて話し込む。

心理掌握「人の目の前で内緒話とは、あまり気持ちの良い行為とは言えませんね」

心理掌握からじとっとした目で見られる。

垣根「なぁに、ちょっとしたルールを教えていただけだ」

たいしたことねぇといいたげに垣根は大げさに肩をすくめる。

心理掌握も大して気にしないのか、それ以上は追求してこなかった。

コホンと心理掌握はわざとらしく咳払いをする。

心理掌握「少々聞きたいことがありますがよろしいでしょうか、優菜さん」

一垣沈（キターーー！）

優菜「はい、何でしょうか。心さん」

心理掌握「と、当麻先輩の事はどの様に思っていらっしゃるのですか？」

急にもじもじしながら髪を弄る心理掌握。
心なしか顔が赤くなっている。

優菜（……あぁ、なるほど）ピコーン

心理掌握「ど、どうなんでしょうか」

じっと優菜を見つめる心理掌握。

優菜「ええ、もちろん好きですよ」

心理掌握「ッ！」

優菜の回答を聞いて驚く心理掌握。

一垣沈（おお、言い切ったァ……）

三人は気楽な構えであり、ただびっくりしてるだけである。

優菜「だって家族ですもの。嫌いなわけないでしょう？」

しかし意外な言葉を続ける優菜。
心理掌握はそれを聞いてさらに驚く。

心理掌握「え？　それはどういう……」

優菜「先程の好きとは『家族として好き』という意味ですね。

私は当麻を嫌ってはいませんので。
ですがそれ以上でもそれ以下でもありませんわ」

心理掌握「な、なるほど。よくわかりましたわ」

優菜「ご心配なら能力を使って私の心を読んでも構いませんよ？」

心理掌握「いえ、この質問には能力を使わないようにしています。
ですから、その人の口から直接お聞きしたいのですわ」

一垣沈（そんなに気になるのか……）

沈利「まぁ当麻の周りには女が多いからねぇ。
特に第三位とか第三位とか……ふふふ」ニヤァ

何かを思いだしたのか黒いオーラが出始める沈利。
関わりたくないのか他の四人はあえてみなかったことにした。

心理掌握「そろそろ呼び出した理由を説明していただけないでしょうか。

いきなり電話で『上条の記憶消失が治るかも』
だけで呼び出されましたし……」

一方通行「俺たちと同じって訳か」

心理掌握「私は現在研究所にカンヅメ状態ですからね。
研究所の方々に理由を説明しないといけませんから……
納得のいく説明を要求しますわ」

沈利「そうだそうだ。そろそろ話しなさいよ、第二位」

自分に視線が集まったのを感じ取ったのか、自身の思惑を話し始める垣根。

垣根「おーけーおーけ。さっきも第一位や麦野には言ったが確証はまだねぇ。
だが、試してみる価値はある」

話しながら四人を見つめる垣根。その瞳には冗談など微塵も感じさせない。
四人も垣根の真剣さが伝わったのか、茶化すような事を言わず黙って聞き続ける。

垣根「こいつぁ冥土帰しすら見通しが立たなかった難問だ。
今までどんな事をしてもダメだった。
だがここに来て一つの光が見えた。それが……」

垣根は言葉を続ける前に優菜を見つめる。
他の人間もそれに習って優菜を見る。

垣根「上条優菜の回復＜ヒーリング＞能力だ」

見え始める希望

――― 回復能力者

学園都市内には当麻の幻想殺しと同じで、正体不明な能力者はいくらでもおり、
絶大な威力ゆえに、誰も本気を出している姿を見た事がない能力者もいるぐらいだ。
だがその中でも回復系能力は更に稀有な存在である。
肉体再生能力や肉体変化能力は肉体系能力になっている。
確かに肉体再生もある意味回復系ではあるが……それを更に進化させたものが回復系能力である。

垣根「レベル４クラスの回復系能力者なんて、存在すら知られてないな」

一方通行「回復系能力なンて、戦闘力がゼロに近いからなァ。
簡単に情報が出回るとは思えねェ」

沈利「後はせいぜいレベル２，大体はレベル１ばっかだろう」

一方通行の言葉に、沈利も同意する。

心理掌握「多分ですけど、空間移動能力者より更にレアですね。
能力者の数はせいぜい数名程度だと思いますわ」

沈利「でもそれがどうしたんだ？」

優菜の能力が回復系なのは先程の話で分かっている。

優菜「私の能力が稀有な存在なのはわかりましたが……
それが当麻の記憶消失とどういう関係が？」

垣根「優菜は以前『細胞の再生』が行えたといったよな。
だったらそれで当麻の脳細胞も治療できないか？と考えたわけだ」

『細胞の再生』、その言葉に全員が驚きを顕にする。
通常、細胞の再生を意図的に行うのは不可能に近いからだ。

一方通行「なるほどなァ、三下の脳細胞は物理的にめちゃくちゃだァ。
だが、それを正常な状態に戻せるのなら……」

心理掌握「わたくしの能力で当麻先輩の記憶を蘇らせられる……ですか」

沈利「当麻の記憶が戻るっていうの！？」

垣根「あぁ、俺の計画通りにいけば……優菜と心理掌握で治せる」

何もかもが没してしまう程の暗闇の中でわずかに見えた光明。
全員が少しだけ希望を持ち始めた。

沈利「ならすぐにでも！」

垣根「待ちな、すぐには無理だ。色々と問題がある」

はやる沈利に向かって垣根は釘をさす。

沈利「なんだよ問題って。もったいぶらずに言えよ」

垣根「まずは優菜の能力が安定してないって点だ。
そりゃー今まで学園都市の外側にいたから当然だ。
だからいきなりぶっつけ本番は怖い。
ヘタをして余計悪化させたら笑えん」

優菜「確かにわたしの能力は分かっても……
発動させるだけで結構時間かかってます」

学園都市の外にいた優菜は、自身の能力を強化するなんて事はしていない。

一方通行「なら早急な能力開発が必要って訳ですかァ」

垣根「それもあるが、もう一つの問題は優菜の能力自身にある」

沈利「あん？　どういう事だ」

全員が訝しげな顔で垣根を見る。

垣根「考えても見ろよ。
優菜の能力で不治の病が消える可能性があるんだぜ。
それにどんな怪我も治るなら……
その能力目当てで欲しがる連中や研究者はゴロゴロいるはずだ」

絶望的な破壊力も生まないし、精神的な攻撃を行えるわけでもない。
しかし裏方側で発揮する効果は絶大である。

能力の強さがレベル5なのだ。
低レベルな能力者を揃えるより、優菜一人を抱える方がよいと考える可能性もある。

垣根「医療関係で言えば莫大な利益を得られるぞ。
優菜を研究すれば、医療関係に計り知れない影響力を持てる」

もしもこの大怪我が完治するなら?
もしもこの不治の病が治るなら?
もしもこの…
大怪我や病気にかかった人間が考える『もしも』を、優菜は実行できてしまうのである。

垣根「まだ優菜がレベル5ってのは秘匿情報だ。
だがいずれ発覚する。そうなる前に……」

一方通行「そういう連中より先に、俺らが優菜を抱えるって訳ですかァ」

垣根「そういう事だ。
他のレベル5が、第六位を研究している。
そう思わせるだけでも、関わろうとする奴は減る。
後はこっちで信用できる研究者を使って能力開発を行えばいい」

優菜「安定した状態での能力使用が可能となる……ですか」

垣根「そういう事だ。
ま、関わろうとする奴がゼロとはいえないがな……
そんなバカは、丁重に『退場』させれば良い」

沈利「『退場』ねぇ……うっかり人生も『退場』しそうだな」

愉快に笑っている垣根に、沈利は冷静なツッコミを入れる。

心理掌握「う～ん、別に他意はありませんが……
　何だか優菜さんをモルモット扱いしている気がしますわ」

納得はしているが、いまいちすっきりしない。
そんな顔で心理掌握は優菜を見ていた。

垣根「どう言い繕ったところでそれは否定出来ない。
　だが俺は例え優菜に恨まれても上条を救いたいんだ。
　昔アイツに救われたことがここで返せるなら、俺は望んで汚名を着てやるよ」

垣根は真剣な顔で優菜を見た。その目には些かの迷いもない。
友達を救うためなら何だってする男の顔だった。

優菜「当麻の言葉を借りるなら『助けられる力があるなら助けたい』ですね。
　私の力で当麻を救えるなら、進んで能力開発をお受けします」

沈利「優菜……」

優菜「沈利姉さん、心配しないでください。
　決して無茶はしませんから……」

優菜は沈利に心配はいらないというふうに笑った。
沈利もそんな優菜を見て苦笑した。

優菜「後、垣根さん。私は貴方を恨む気などありません。
　これは私が考えて出した答えです」

垣根を見ながら、優菜は迷いなく答えた。

垣根「あぁ……分かった」

そんな優菜の言葉に、少しだけ苦笑する垣根。

一方通行「研究者については心当たりがある。
　あいつならゲスな行為はしないだろう」

心理掌握「一方通行さんが信用してる研究者ですか。それなら安心ですわね」

垣根「だったら連絡を頼むな、第一位」

一方通行「ケッ、テメェに言われなくてもわかってるよ。
　俺だってアイツを助けたいんだ」

そっと呟いた言葉は誰一人として聞こえないほどの声量であった。
だが、一方通行はそれでいいと思った。
こんな恥ずかしい内容を誰かに聞かれたくはない。
ただ口に出していいたかった、それだけの事である。

沈利「しかし能力開発を行うにも、怪我や病気の人間ってそうポンポンいるかね？」

垣根「安心しろ。その点なら問題ねぇ」

沈利の疑問に、垣根はニヤっと笑って答える。

垣根「この学園都市にある病院を片っ端から回ればいいだけだ。
連中は病気や怪我が治る。
俺らは優菜の能力開発が出来る。一石二鳥じゃねぇか」

そう言った垣根は心底楽しそうに笑っていた。

特訓開始！

垣根の計画は大雑把であった。
まず優菜の能力を安定した状態まで強化する。
そして安定したのなら、当麻の脳細胞を治療する。

元々の記憶領域ごと記憶内容が破壊されているのである。
今のままではたとえ記憶を復元しても、将来的に容量が足りなくなる恐れがある。
その為に、脳のスペックである１４０年の記憶が出来る状態にまで治療を行う。

その後は心理掌握の能力で、当麻にエピソード記憶を植えつける。
植えつけるエピソード記憶は、家族や知人などの関係者全員から当麻に関する想い出を抽出。
抽出した当麻への想い出を客観的に整理し、当麻のエピソード記憶として補完する。

ただしこの状態では当麻の幻想殺しで破壊される可能性がある。
なので、当麻があくまで『自分の記憶』として認識する必要がある。
『自分の記憶』として脳細胞に書き込まれれば、幻想殺しでも破壊は不可能である。

以上が、垣根が考えた「上条当麻の記憶再生計画」である。

優菜の能力強化の研究者には芳川桔梗を付けた。
何か「働きたくない～」というダメ人間っぽい発言をしていたようである。
一方通行曰く「研究者としては優れている」との事。

結局破格の報酬を約束することで承諾を取り付けた。
研究所は一方通行が、資材については垣根が調達した。
当初は研究所ではなく、学校で行おうと考えていた。
だがセキュリティ面の問題により、専用の研究所の方が都合よいとの結論になった。

――　当麻の記憶再生に関する最高の下準備が整った。

最初の数日は単に学習面での強化だった。
当然ながら優菜は能力開発について全く知らない。
その点は一方通行や垣根が交代で持てる知識を分け与えた。
時々小萌先生も交えて勉強漬けになった。
しかし一週間の予定がたったの二日で、知識面は終わってしまった。

優菜「知識面の基礎についてはほぼクリア……ですかね」

小萌「……ええ……正直驚くべき吸収力です」

一方通行「あァ……三下なら最初の一時間でギブアップだなァ」

小萌「上条ちゃんはもっと優菜ちゃんを見習うべきですね～。
とはいえ普通の人が子供の頃から高校手前まで習うべき学習量です。
一気に教えたとはいえ……疲れましたー」

一方通行「無茶言って悪かったなァ、今度何かおごるぜェ」

小萌「いえいえ、私も教師です。
でも、一方ちゃんの想いも無碍に出来ないので今度どこか食

べに行きましょう！」

一方通行「ン、どっか適当な店選んでおくわ」

小萌「頼みましたよ～。
それじゃあ先生は学校に戻ります。
優菜ちゃん、またです～」

優菜「はい、ありがとうございました。先生、私も今度お礼をしますわ」

小萌「楽しみにしてます～」

そういって自称大人なミニチュア先生は帰っていった。
一方通行も途中まで見送るのか付いていった。

優菜「ふぅ……正直ちょっと疲れましたわ。
とはいえこの計画は私が要。しっかりしないといけません」

芳川「とはいえ余り根詰めて倒れられても困るわよ」

優菜「芳川さん。お疲れ様です」

芳川「お疲れ様、優菜。どう？　初めての能力開発は」

優菜「一番難しいのが『自分だけの現実』ですね。
知識としては知っても実際出来るかどうかは別です」

芳川「難しく考えなくていいのよ。
能力なんて使えてナンボみたいに思えばいいのよ」

優菜「そうですね、簡単にいえば信じてればいいって事ですからね」

芳川「私は働かない自分が現実になってほしいわぁ～」

優菜「……それについてはノーコメントでお願いします」

一方通行「お前は絶対能力進化実験以降、確実にダメな大人になってンぞ」

見送りから帰ってきた一方通行が芳川に向かってツッコミを入れていた。

芳川「小萌先生の見送りご苦労様。コーヒーあるけど飲む？」

一方通行「ン、貰っておく。それと見送りなンてしてねェ。
強引に付き合わされただけだァ」

そう言いながらもニヤニヤしている一方通行。
そんな一方通行を見て、芳川と優菜はクスクス笑うのであった。

一方通行「ところで優菜の能力開発だが、現状ではどンな感じだ」

優菜「発動についてはもう問題はないかと。
以前は発動するのですら苦労しました」

芳川「レベル４の連中が浮かばれないわねぇ～。
こんなに簡単に吸収されていくと虚しいものがあるわ」

一方通行「ンな雑魚なンてどうでもいい。今は優菜の能力が安定す

ればな」

優菜「残念ながら私も、今は他人を気遣う余裕はありません」

芳川「そう……まぁ泣いて枕を濡らすのは私じゃないしどうでもいいけどね」

コーヒーを飲みつつぼやく芳川であった。

芳川「そうそう、明日からは本格的に実技での能力開発になるからね。

ちゃんと休んでおきなさいよー」

優菜「今からでも問題ないですよ。

もっとも無茶は出来ないので、感触をつかむ程度になっちゃいますが……」

芳川「あ、もう18時ね。それじゃあ私は帰るね。ばっはい～」

一方通行「」

優菜「」

芳川のダメ人間の部分は治療不可のようである。

噴出する問題点

垣根「問題が発生した」

優菜の能力開発を行っているさなか、突然垣根が入ってきた。
心なしか焦っているようにも見える。

一方通行「ン、どうしたメルヘン」

垣根「遂に優菜の詳細な能力情報が出回ったようだ。
今裏では余計な馬鹿が騒ぎまくってるらしい」

優菜「そうですか……それは厄介な問題ですね」

垣根「そうだ、おまけに研究者どもも能力の利便性に目をつけた。
これからは面倒なことが増えると思うぜ」

沈利「ハッ、ゴミどもが優菜を狙ったらブッ殺してやるよ」

一方通行「とりあえず今後は護衛が必ず必要となるなァ」

今までのようには行動が出来ない。
優菜の行動にかなりの制限が発生する。
強引に研究を行おうとする人間が出てきたら、優菜ひとりでは対処しきれない。

優菜「それでも……当麻を救うために、今は立ち止まれません」

垣根「ま、馬鹿どもがきたら俺らでぶち殺せばいいだけだな」

一方通行「つーか家とか大丈夫か？　俺の家は以前襲撃されたからな……」

嫌なものでも思い出したのか苦虫を噛み潰したような顔をする。

優菜は知らないが一方通行は小萌が以前住んでいたボロアパートを、馬鹿なスキルアウトどもに襲撃された経緯がある。

ただ一方通行がいる……それだけの理由で……

あの時小萌が大怪我を負ってしまった事に自責の念に駆られた一方通行は、スキルアウトの虐殺を行ってしまった。

優菜がそうなるとは思えないが、それでも不安はつきまとう。

優菜「学生寮にはもう住めませんね。
もしもを想定して、セキュリティが高い家に引越しか……
または、沈利姉さんの家にご厄介になるか」

垣根「もしもを想定するなら、セキュリティが高い家かなぁ。
お偉いさんが住んでる場所なら、バカは出来ないしな」

沈利「そうだな。そして家には誰かが護衛でついれてば……」

垣根「はいはーい。それ俺がやりたーい」

沈利「駄目、お前が一番危険だ。あたしか第一位かな」

垣根「ぇー、だって優菜って俺の周りにはいないタイプの人だし私生活が気になるぜ」

一方通行「変態メルヘンは置いといて、能力強化を続けねェか」

優菜「一先ず能力発動については全ての問題をクリア。
ただやはり長時間の使用には、未だ不安定さが出ますね。
後はまぁ……複雑な怪我や病気には時間がかかってる事ですか」

芳川（うーん……でも計測値って全然変わってないわよね？
ま、安定してるからいっか。余計な仕事増やしたくないし～）

垣根「え？　もしかして俺に対してのツッコミってなし？」

誰も垣根を相手せず話をすすめる。
垣根は部屋の隅でのの字を書きながらすねてしまった。

芳川「でもこの娘優秀ねぇ。なんで学園都市側は手を出さなかったのかしら」

一方通行「確か外のどっかのお嬢様学校に行ってたから情報が出回らなかったンじゃね」

沈利「あ～確かにお嬢様学校にいた。
一度見たことあるけどものすっげぇでかい門だったよ。
確か街一個まるごと学校の土地だったよね」

芳川「へー、興味あるね。どんな感じだったの？」

優菜「元々は普通の街だったのですが、数十年前に私が通っていた学校の理事長が街を教育の場に大改造してしまったのです。
その為にお嬢様学校という風評がついてしまったのではないでしょうか」

一方通行「街一個買い取るのかよ、どンだけ教育に命かけてるンだ」

優菜「理事長は『どこに出しても恥ずかしくない淑女を送り出す』を理念としてたそうです。ですので日本の伝統作法から洋式の作法まで幅広く教育がなされていました」

沈利「うげぇ、私作法なんて出来ないよ。あんなの肩こるだけだってーの」

作法なんてクソくらえみたいな顔をして沈利が言う。
あんなの何がいいんだ？　とまでボヤいていた。

垣根「麦野がお嬢様……まぁ無理だな」

一方通行「なンか野原にいても花引きちぎって危険な笑いしてン所想像してしまった」

沈利「よっし、てめぇらそこに並べ。今から原子崩しで風穴あけてやんよ」ビキビキ

怒り心頭で今にも二人に襲いかかろうとしている。
対して二人は余裕綽々で沈利をかわしている。

芳川「へ～、私外の学校ってあんまり知らないから為になるわ」

垣根「でもよ、そんな話してるとあっちの友達が恋しくならねぇ？」

優菜「そうですわね、転校するといった時から引き止められはしましたね。
それでも彼女らの制止を振りきって、学園都市に来たのです。

恋しくはなりますが、帰りたいとは思わないようにしています」

大事な後輩、小さな頃から優しくしてくれた先輩。
いつも親身になってくれていた親友。迷った時に自分を導いてくれた先生。
そして……忘れる事など出来ない大切なたった一人の妹。
「学園都市に転校する」といった私を最後まで引きとめようとした。
今でも時々彼女たちを思い出してしまう。
自分に課せられた責務を全うせず、出ていったのである。
その自責の念が思い出す原因なのかは分からない。
それでもせめて思い出すときだけは笑顔で……

芳川「さって！　んじゃ研究の続きしようか」

しんみりした空気を嫌ったのか、芳川が強引に話題を変える。

一方通行「ン、それじゃあ俺は一旦戻るわ」

沈利「あたしはこれから冥土帰しの病院で、病人を見繕ってくるわ」

垣根「それじゃ俺はココに残るわ。何かあったら大変だしな」

三人も芳川の話に乗る。しんみりした空気は嫌いのご様子。

優菜「そうですね、よろしくお願いします。芳川さん」

統括理事会の思惑

それから数日後、とある研究所では

研究員「どういう事なんです！　これは！」

所長「どういう事といっても、学園都市統括理事会からの正式な通知だが？」

研究員は所長にくってかかっていた。

対して所長は面倒くさそうな顔をして適当に流していた。

研究員「何故理事会がこんな通知を出すのかがわからないから聞いてるんですよ！」

所長「そんなのわかるわけないだろう？

言えることはこの内容を守らないとうちらは路頭に迷う訳だ」

研究員「まったくもって意味がわかりません。どうして……」

憎々しげに学園都市統括理事会からきた正式な書類を睨む。

研究員「『レベル５　第六位　上条優菜に対する一切の研究を行ってはいけない。

この内容を守らない場合は、どの様な研究機関であろうと処罰を下す』

ですか……！」

所長「理事会が何を考えてるかなんてわからん。

言えることは理事会にとって上条　優菜はそれほど大事って訳だ」

机においているコーヒーを一口飲む。未だ怒り心頭の研究員は更に所長に食って掛かる。

研究員「今まで外にいた小娘一人に対して随分な執着をするんですね、理事会も……」

皮肉を込めて研究員は言うが、所長はあくまで淡々として話す。

所長「それほど彼女が持ってる能力がレアで、
能力研究の応用が生み出す利益が膨大なのだろう。
だからあちこち研究されて、彼女がボロボロに
ならないようにしたって訳じゃないかね」

研究員「確か彼女は治療系でしたよね。
学園都市でもそういないんじゃないかって言われるぐらいのレアですが……
そこまでするものですか？」

所長「お前冷静になって考えてみろ」

所長に窘められて少しは落ち着く研究員。

所長「治癒能力系って地味に聞こえるがな。どんなケガでも病気でも治してみろ。
それを頼ってくる人間はどれほどいるとおもうか？」

研究員「あ……確かに……」

冷静に考えてみると、彼女が使う能力のポテンシャルが理解できてくる。

所長「少なくとも医療関係には膨大な利益を生み出せるし、影響力も計り知れない。
　彼女一人がいれば学園都市内外問わず医療研究が一瞬にしてゴミにかわる。
　だからこそ彼女一人をめぐっての内紛を起こさないように考えたんじゃないの？
　理事会は」

研究員「……」

所長「まぁそういう事だ。それに彼女とコンタクトを取るなんて不可能だ」

研究員「何故です？」

所長「彼女の周りには常に他のレベル５がついてるからだ。
　確認しただけでも第一位と第二位、第四位がいた」

研究員「えぇ！？」

所長「俺の知り合いがな、同じように彼女にコンタクトを取ろうとしたらしいがな。
　接触する事なく研究所ごとブッ壊されたそうだ」

研究員「……その知り合いはどうなったんですか……」

所長「幸い彼女が治療してくれたそうなんで死んではいない。
　が、生きてるのが辛くなるレベルまで傷めつけられたらしい」

一口コーヒーを啜りのどを潤す。
研究員は当初の威勢などなく今は顔を真っ青にしている。
だが所長は気にせず続ける。

所長「そういう訳で彼女にコンタクトを取るなんて無理だ。
　接触する前に他のレベル５が出張ってくる。
　連中らも彼女を使って何か企んでるそうだが、相手が悪すぎる」

研究員「一人で軍隊と渡り合える人間が三人も彼女についてるのですか……」

所長「そうだ、それでも接触したいなら止めはしないが辞表は出していってくれよ。
　下手にレベル５の怒りを買って研究所が吹っ飛んでいくのは勘弁だ」

アレほど食ってかかっていたが、現実を知ると顔を真っ青にして部屋を出て行った。
この学園都市にいればレベル５と喧嘩するなんて無謀なことはしないからである。

所長「それにしても……」

そうボヤいてまたコーヒーを啜る。

所長「レベル５が行っている研究のみ特例として認めるって……

本当に何を企んでるんだろうな」

上条優菜のプロフィールデータを見ながら、所長は自分にしか聞こえない程度の音量でぼやいた。

統括理事会の思惑（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒを始めました。
ユーザ自己紹介に書いてますので、よろしければフォローしてください

蝕む恐怖

あれから更に一週間を費やし、能力の強化訓練を行なった。
普通なら潰れても不思議ではないほどの強行特訓だった。
それでも歯を食いしばり、全ての訓練に耐えぬいた。
たった一つ「当麻を助ける」という事の為に……

優菜「……これでもう大丈夫です。
　数日後には筋肉の萎縮も戻り、元通りに体を動かせます」

患者「ありがとうございます。本当にどんなお礼を言えばいいのやら……」

先程治療を終えた男性が涙を流しながら礼を述べる。
彼は本来なら「数ヶ月後にはこの世を去っている」運命だった人である。
数年前に原因不明の病に倒れ、以来ずっと入院していた。
医者がどう見ても原因が分からず、対症療法的な治療に終始していた。
彼に待っていたのは大量の薬剤投与であり、それでも死をわずかに先送りにする程度であった。

しかし目の前の男性は、そんな原因不明の病に倒れたとは思えないほどに健康的な顔になっていた。

優菜「お礼など良いのです。それより私の方こそ謝らせてください。
　どう言い繕っても貴方を、私の能力特訓に利用したのは事実ですので……」

患者「とんでもない！　貴方の能力がなければ私はただ死を待つばかり……
日に日に衰弱してゆく私を見て、家族が悲しい顔をするのをただ見ているのは辛かったのです。
それを見なくていいと思うと……」

優菜「……はい……そう仰って頂けると助かります。
明日またいらっしゃってください。
問題ないとは思いますが、予後の検診を行っておいた方が良いと思いますので」

患者「はい、わかりました。それでは失礼します」

男性は再来の予約票を手に立ち上がった。
ドアまで移動した後、また優菜に向かって礼を述べた。

患者「本当にありがとうございました」

深々と頭をたれ、男性は部屋から出て行った。
優菜はそんな男性を見て、再度礼を言われている自分に苦笑した。

優菜「……お礼……かぁ。私がやっている事は所詮人体実験。
恨まれこそすれ礼を言われるような事はないのに……」

冥土帰し「それでもね、彼らにとってキミの能力は奇跡なんだよ」

いつの間にか冥土帰しがドアの前に立っていた。
優菜は冥土帰しの言葉に反論したくなったが、結局何を言っても水掛け論になると思い黙った。

冥土帰し「ほら、あれをみてごらん？」

冥土帰しはちょいちょいと手招きし、とある方向を指さした。
訝しげに思いながらも優菜は、冥土帰しの近くまでいきその方向を見た。

患者「どうだぁ！　はっはは、お前を持ち上げることだって出来るぞ！」

そこには先程の男性と、その娘であろう少女がいた。
彼らは抱き合い涙を流していた。

患者の娘「パパ！　本当に……本当に元気になったの！？」

患者「ああ！　もう入院する必要もない。
薬を飲み続ける必要もない。
今日からお前と一緒に御飯だって食べれるんだよ」

患者の娘「あのね！　あのね！　パパ！
私ハンバーグが作れるようになったんだよ！」

患者「おお！　それは楽しみだな。
帰りにママと一緒にハンバーグの材料を買わないとな」

生きている喜びを噛み締めるかのように、お互いきつく抱きしめあう。

患者の妻「アナタ！　もう歩いてもいいの！？」

患者「ああ、大丈夫だ。
　後は細かい検査が待ってるがそれさえ終わればもう終わりらしい。
　入院する必要もない！」

患者の妻「ああっ！　アナタ！」

患者の妻も感極まって夫に抱きつく。

患者の娘「パパ！」

娘も父に強く抱きつく。そんな二人を患者はきつく抱きしめ返していた。

冥土帰し「医者が言うのもアレだけどね。
　少なくとも彼らにとって君は救いの手を差し伸べてくれた……
　天使だったんじゃないかな？」

優菜「……そう……かもしれません……ね」

しばらく抱き合っていた患者と妻子だったが、ふとこちらに気付くと、声をかけてきた。

患者「先生、ありがとうございます。ようやく妻と子を抱きしめることが出来ました」

患者の妻「本当になんてお礼を言えばいいのやら……」

患者の娘「おねーちゃん、ありがとうー！」

何度言っても尽きないのだろう。先程と同様に礼を述べ頭をさげる。
妻子もそれにならうように頭を下げてくる。

優菜「頭を上げてください。私に頭を下げるより貴方はする事があるでしょう？」

患者「え？」

優菜「あなたの愛する家族に……今まで以上に愛情を注いでください。
　それが私に対する感謝の気持ちを表してると思って……」

患者「は、はい！」

再び頭を下げた後、親子は立ち去っていった。
お互い寄り添うように……

冥土帰し「なかなかサマになってたと思うよ」

優菜「よしてください、私はまだまだ若輩の身。
　いくら能力が優れてても心が未熟では半人前ですよ」

冥土帰し「そう思えるだけで一人前だと思うよ。
　それにしても最初の頃から随分と成長したね」

優菜「最初は簡単な怪我や病気のみでしたからね。
　今では命を左右するほどの大怪我でも治せるようになりました」

冥土帰し「先程の人だってね。他の病院では緩和ケア病棟にいたらしいよ」

優菜「不治の病……と呼ばれる部類ですね。
それにしても色々と治療しちゃうと病院的には赤字ですかね？」

冥土帰し「ボクはね、患者が元気に退院してくれるならそれでいいよ」

優菜「そうですね……」

ふと前を見る。先程の患者たちは既にいない。
今後は家族で寄り添うように生きて行くだろう。

冥土帰し「それじゃあボクは行くよ。
そうそう、先程君を訪ねてきた人がいるから、早く行ったほうがいいよ」

優菜「はい、分かりました」

そう言って冥土帰しは立ち去った。
優菜はそれを見送ると、自分に割り当てられた部屋に戻った。

垣根と優菜

垣根「よぅ～、調子はどうだい？」

優菜「垣根さんでしたか」

冥土帰しが言っていた訪問者というのは垣根帝督だったらしい。
それにしても珍しい。前の研究所からこちらに移動してからあまり来ることはなかったのに。

垣根「この病院にいれば優菜は安全だが、それでもふと顔を見たくなる事があるんだよ」

優菜「ナンパですか？　それなら他所でやってくださいよ」

垣根「ちぇ、ざ～んねん」

ちっとも残念そうに見えないような顔でおどけていた。
だがふっと真面目な顔になり、優菜を見つめた。

垣根「そろそろ怖くなってるんじゃないかと思ってな……
　様子を見に来たがやっぱりそうなったか」

優菜「中々鋭いですね。経験者は語る……ですか？」

垣根「茶化すな、そうじゃねぇ。お前は強いように見えて意外と繊細だからな」

優菜「私は強くないですよ。ただ強く見せてるだけです……」

垣根「……俺たちにまで強がる必要はない。やっぱ自分の能力が怖いか？」

その言葉が……優菜の中に巣食っていた考えを外に押し出した。

優菜「ええ、怖いですよ。怖いに決まってるじゃないですか！
ボロ雑巾同然だった腕が傷跡ひとつ残さず再生し、
どんな患者も治療してしまう。
これを化物と言わずして何というのですか！？」

両腕で頭を抱えた優菜。
今まで抑えていた感情が関を切ったように流れ出す。

優菜「能力が強くなればなるほど……制御が完璧になればなるほど怖かった。
今まで漠然とした力が私の中で大きく形になっていく
触れるだけでその人がどんな状態かすぐにわかる。
時間が許せばどんな怪我でも病気でも治してしまう。
例え死にかけていても……たとえ不治の病と判断されたとしても！
その怪我を……その病気を全て『無かった事』にしてしまう」

垣根「……」

優菜「毎日毎日沢山の人を治しました。最初はただの骨折や軽い病気……でも……」

垣根「お前は日がたつに連れて力を増していた」

優菜「そうですよ……信じられますか？
数時間前に治療した人は学園都市の医者でも匙を投げたんですよ。
それを二週間前はレベル５のラベルが貼られたただの小娘だった私が治した……」

垣根「……」

優菜「最初、私に力があるといっても私には全く理解出来なかった。
しかし学園都市に来て！　能力開発の特訓を受けて！
私の中にあった力が形作っていくんです！　今まで見えなかった力が！
怖い……私が人ではなく化物になっていく！」

学園都市に来た時との違いが、徐々にだが浮かび上がっていった。
その違いに優菜は言い知れない恐怖に襲われる。

垣根「ハッ、安心したよ」

優菜「安心……ですって？
人の悩みを聞いて安心？
何……何を言って！」

垣根「当たり前だろう、人とは違う力を使うんだ。怖くないなんてありえないだろう？」

優菜「……」

垣根「だけどな、怖いからって逃げてちゃー余計怖くなるだけだ。
能力をなくすことなんて出来ねぇ。

だったら立ち向かうしかねぇだろ？」

優菜「逃げるのではなく……立ち向かう……」

垣根「そうだ、逃げてたってなんにも解決しねぇ。
だったら力のほうを叩き伏せるぐらいで立ち向かったほうがよくねぇか？」

そういって垣根はニヤっと笑う。
力を怖がるのではなく……むしろ力を俺に従わせてやると言いたげに……

優菜「全く……垣根さんらしいですね。
でもそうですね……力を怖がっていても意味はない……ですね」

優菜（うん……今はまだ怖いけど少しだけ力と向き合えるきがしてきた）

垣根「おーそうだ。お前なら出来るさ。なんたって俺が認めた奴だからな」

優菜「ありがとうございます、しかしよく私がこんな考えをしてると気づきましたね」

垣根の鋭さに優菜は素直に感心した。
今まで強がって能力開発に取り組んでいたのだ。
だから誰にも気付かれないと思っていた。

垣根「お前は最初から『完璧』を演じ過ぎてたんだよ。

普通こんな力があれば誰だって怖いさ。
でもお前はレベル5認定された時も、能力開発をしているときも、
一切そういう顔を見せなかった」

優菜「必死だったから……とは思わなかったのですか」

垣根「最初はそう思ったんだがな……こっちに強化特訓場所を移してから違うと思った」

優菜「何故そう思ったんですか」

垣根「お前こっちに来てから俺らが来なくなって油断してただろう。
時々思いつめたような顔して散歩してただろう」

優菜「ッ！」

優菜の顔がどんどん赤くなっていく。
今の病院に来てからのことを思い出す。
辛く苦しくなり、気分を変えるために散歩していた時は確かにあった。

垣根「まぁそういう事だ。だが能力が安定するまでお前を問い詰める事はできなかった。
ヘタをして能力が暴走したら危険だからな。だからちょっと時間を空けたわけよ」

優菜「いつもはメルヘン発言ばかりの垣根さんの癖に、
随分と回りくどい事をしましたね」

垣根「メルヘンは余計だ。ま、最初はお前に恨まれてもいいと思ったがな。
だけどやっぱり駄目だったわ。
俺はお前にも嫌われたくないと思ったんだ」

優菜「……随分と身勝手な発言ですね」

垣根「ああ、そうさ。身勝手極まりない話だ。でも俺は寂しいんだよ」

優菜「寂しい？」

垣根の『寂しい』という言葉に、優菜は違和感を覚える。

垣根「実際な、レベル５でも第一位と第二位以外ってとんとんな肩並べな訳よ。
ぶっちゃけていうと俺と超電磁砲の間には絶対的に超えられない壁がある。
だから俺を理解してくれそうなのは、実は第一位以外いないと言うわけよ」

垣根らしくない。優菜はそう思った。
優菜の中で垣根はいつも自信満々で、だけど時々お茶目で……
敵対する人間には容赦がなくて……
善人なのか悪人なのかわからない人だと思っていた。

垣根「まぁ上条に出会ってからはその考えを変えたけどな。
アイツはこんな俺でも理解してくれていた」

優菜「当麻ですからね」

垣根「そうだな、だけどやっぱり壁ってのは存在しちゃうんだよ。だからな……」

そういってじっと優菜を見つめる。

垣根「優菜はこんな俺を色メガネなしで見てくれる。
そう思ったら嫌われたくないって考えるようになっちまったんだよ」

優菜「こんな化物みたいな私でも？」

垣根「それを言ったら俺の方がもっと化物だ。
何せこの世に存在しない物質を作れるからな」

優菜「ふふ……確かにそうですね」

垣根「……そうやって笑ってる方が可愛いと思うぞ。
お前はいつもクールな顔してるからな」

優菜「ナンパは他所でやってください」

垣根「ちぇ、ここはドキッとする場面だぞ～？」

優菜「しませ～ん。私をときめかせるにはまだまだですね」

垣根「いつか絶対惚れたと言わせてやる」

優菜「期待しないで待ってます」

そう言って優菜は笑った。久々に心の底から笑えたと思う。
咲き誇る大輪の向日葵のような笑顔を見て、垣根は柄にもなくドキっとした。

垣根（……俺の方が惚れたってなりそうだな）

垣根は早くも敗北宣言をしそうになった。

垣根「そうそう、さっきの話もあるが実は別の話もあるんだ」

しばらく談笑していたが、ふっと垣根は思い出したかのように言った。

優菜「何でしょうか。まだ能力開発を続けるというお話ですか？
でもそろそろ一箇所に留まり続けるのは限界では？」

垣根「そうじゃねぇ。優菜の能力はぶっちゃけもう安定している。
だからさ……」

優菜「まさか……」

垣根「そう、計画の最終段階……」

垣根は心底嬉しそうな笑顔を浮かべて言った。

垣根「上条の脳細胞再生を実行する時がやってきた」

様々な想い

――　九月二十二日

学園都市では大覇星祭（だいはせいさい）の真っ只中。
しかしとある一角だけは、大覇星祭の雰囲気など微塵も感じさせない場所となっていた。
そこには数名の少年少女…それから二名の大人がいた。

垣根「いよいよだな……」

垣根帝督、学園都市レベル５　第二位。

心理掌握「余計な妨害が入らないといいですわね」

心理掌握、学園都市レベル５　第五位。

沈利「一応だけどこの場所は厳重な警備を敷いた。
まぁ攻めて来る奴等なんていないと思うがね」

麦野沈利、学園都市レベル５　第四位。

一方通行「ほとンど大覇星祭に意識がいっているからなァ」

一方通行、学園都市レベル５　第一位。

芳川「ほんっと長かったわぁ。
けど今回の報酬で当分は働かなくていいわぁ～」

芳川桔梗、学園都市最強のニート研究者。

冥土帰し「ボクが治すわけじゃないけどね。
唯一の敗北を返せるなら嬉しいよ」

冥土帰し、学園都市最高の名医。

そして……

優菜「はじめましょう……当麻の記憶消失治療を……」

上条優菜、学園都市レベル５　第六位。

――　十二時

当麻は既に全身麻酔を施され意識は無くなっている。
これから行う事……ただ『当麻の脳細胞を正常に戻す』だけ……
言葉に出せば軽いこと。
しかしこの内容がどれほど前人未到か……この場にいる人たちは理解している。
学園都市で最高の名医である冥土帰しですら、当麻への治療には目処が立たなかった。
残ったのは絶望という名前だけだった。
そこに一筋の光が差し込んだ。
それが優菜の能力「天上霊薬（エリクシール）」である。

優菜（……この力。かつては憎むべき力でした。
私は、ただ普通の人として暮らしていたかった。
それなのに私は人と違っていた）

優菜は自分の右手を見る。

優菜（私は人とは違う。そんな意識が常につきまとった。
学園都市に来てそんな力などないと証明したかった。
だが結果は逆であった。
しかも学園都市の中でも数名しかいないレベル５の扱いを受けた。
結局私には人になることは出来ないのだと諦めた）

そっと当麻の頭へ右手を置く。
肌を擦る当麻の髪の毛が少しだけくすぐったかった

優菜（だけど今だけ……今だけは感謝したい。
この力があったからこそ当麻を救える。
今まで嫌っていた力。
だけどこの瞬間……この時だけは好きになれる。
愛する人を……家族を救えるこの力を……）

優菜「……はじめます……アクセス……開始……」

そして優菜は眼を瞑る。右手に全神経を集中させ能力を発動する。

優菜（私は持てる力全てを使おう……
当麻を救うために……
私のすべてをかけて……）

沈利「……あれから数時間……特に問題はないみたいだね」

沈利はじっと優菜を見ていた。彼女たちには何もすることがない。

ただじっと優菜が治療を終えるまで待つのみ。
見ているだけという歯がゆい状態だ。

垣根「賽は投げられた。後は優菜を信じるだけだ。
ま、馬鹿が来たら容赦なく叩き潰すぜ」

心理掌握「そうですわね。
この治療……絶対に止められたくありません。
例え理事会であろうと……」

一方通行「……」

何も出来ない苛立ちを打ち消すかのように、食いるようにモニターを見続けるレベル5達。
皆一同に思った。彼女を信じてその時を待つのだ……と。

優菜（治療……修正……確認……治療……修正……確認……）

右手に全神経を集中した状態で優菜は力を使い続ける。
目を瞑り、呼吸も最小限に留めている。
最小限の生命活動のみ行い、他は全て能力を使うために利用した。

優菜（当麻を救いたい。
彼の脳細胞を見た時、ゾッとした。
記憶消失なんて運が良かったと思う。
今より少しでも酷ければ当麻は死んでいた）

当麻の右手にある幻想殺しが、優菜の能力にどの様な影響を及ぼすのか分からない。

だから優菜はゆっくりでしか当麻の治療を行えない。
一つ一つ細胞を治していく。その上で幻想殺しの影響がないか確認する。
スパコン並の精密な演算が優菜にのしかかってくる。

優菜（……修正……確認……でもそれも……もうすぐ……
そう……もうすぐ治る。私が治す……当麻を……
……確認……治療……ッ！）

しかし『ソレ』は突然やってきた。

力の暴走

優菜の全身から突如として血が吹き出す。
飛び散った血が少しだけ当麻の体にかかる。
だがそれでも、優菜は右手だけは離れないように注意した。

体がバラバラにされたかのような激痛が優菜の全身を駆け巡る。
常人なら一瞬で意識を失うレベルである。
優菜は能力を自分にも少し向けていたのか、意識は失うことはなかった。

優菜「かはっ」

ビチャッと何かが優菜の口から出てくる。
鉄臭い匂いを漂わすそれは彼女の血だった。
既に体は危険なレベルまでやられている可能性がある。

優菜（それでも……やめるわけにはいかない！）

それでも優菜は当麻に当てていた手を離すことはしなかった。

沈利「おいっ！　優菜どうしたんだ！」

優菜の異変は外から見ていた沈利たちにも確認できた。

冥土帰し「まずいね……」

芳川「まずいわね……数値がさっきから乱れっぱなしよ。

このままじゃ彼女の体がもたないわ」

沈利「冷静に分析してる場合かっ！　早く止めないと！！」

冥土帰し「無理なんだよ」

沈利「なっ！　テメェどういう……」

垣根「麦野！　落ち着くんだ！　どういう事なんだ冥土帰し！」

沈痛な顔で沈利たちを見ていた冥土帰しだが、やがて止めれない理由を語った。

冥土帰し「今止めるとね。
彼女も彼も……確実に能力の暴走に巻き込まれて死ぬよ？」

沈利「なっ！」

芳川「それにね……止めないのは彼女の意思でもあるの」

垣根「どういう事だ……？」

冥土帰し「この治療が始まる前にね、彼女はぼくらにいったんだよ。
何があっても止めないでくれって」

芳川「貴方たちにいうと絶対に止められると思ったのでしょうね。
だから私たちにだけ言ったんでしょう」

冥土帰したちの言葉を聞いて、沈利はその場にへなへなと座り込ん

だ。
しかしその視線だけは優菜に向いていた。

沈利「……あの子は最初からこうなる予感があったのね……」

視線の先には、血を流しつつも治療を続ける優菜の姿があった。
しばらくして一方通行と心理掌握が見回りから帰ってきた。
入った直後に優菜の姿を見て驚き止めようとしたが、それを麦野と垣根が制止した。
そして先程の冥土帰しの説明を一方通行たちに説明する。

一方通行「三下といい、優菜といい……
上条の血には無茶する情報でも組み込まれてるンですかァ？」

心理掌握「アレだけの出血……
幾ら何でも長時間放置したら危険ですわ」

既に日付は変わり、開始からもう十二時間以上経っている。
優菜の足元には大きな血溜まりが出来ている。
体にある血が全て抜けきったのではないだろうかと思える光景である。

優菜（……もはや痛みも感じない……か……）

しかし優菜はそんな状態でも力を止めなかった。
必ず治す、彼を必ず救う…そう思いを込めて。

優菜（後少し……そうすれば心さんに交代すればいい）

当麻は冥土帰し特製の麻酔が効いており、未だに眠り続けている。
それでいい……今の姿を見られたら確実に止められるだろう。
力を使う優菜は、当麻の顔を見つつそう思った。

優菜（もっとも……私の命はあと少しかもしれないけどね……）

自嘲気味に笑いながら、当麻に触れていた手を離す。
それが合図だった。

優菜「治療……完了……」

自分の口から出た言葉なのに、何処か遠くで聴いてる感じがすると優菜は思った。
壁にかかっている時計がふと目に入った。
時刻は既に一時を回っていたようである。
ゆうに十三時間も能力を行使したのだ。
ちょっとした新記録ではないか？と場違いな考えが浮かんだ。

優菜「その他……問題点なし……
　正常な高校男子の体……全ての器官……問題なし」

そして優菜は当麻が寝ているベットの脇にあるスイッチを押した。
このスイッチを押せば、外にいる沈利たちに優菜の声が届くようになっている。

優菜「沈利姉……さん……」

腕を動かすのも……声を出すのも億劫になってきたが伝えなければならない。
だから、この手遅れの体に鞭をうち優菜は声を発する。

優菜『沈利姉……さん……』

部屋のマイクから優菜の声が聞こえる。
その声は酷くか細かった。

沈利「優菜！？」

優菜『……治療……終わり……ました……
心さん……後を……お願い……しま……す』

心理掌握「じゃあ……当麻先輩は！」

優菜『後は……貴方……が……ガハッ！……けほっけほっ…』

沈利「優菜！　もういい喋るな！　後は心理掌握に任せて！」

血を吐き苦しむ優菜を見て、沈利は声を荒げる。

垣根「おい！　芳川。ドアを開けるんだ！」

芳川「今やってるわよ！」

垣根の怒声に、芳川がパネルを素早く操作しつつ答える。
奇襲されたときの為に、ドアを頑丈にしていた事がここで仇になってしまった。
冥土帰しは既に病院へ運ぶ手はずをしている。

一方通行「冥土帰しは病院にいってろ！　俺が優菜を運ンでやるよ」

冥土帰し「分かった。くれぐれも手荒にしないでくれよ」

一方通行「俺を誰だと思っている！？」

芳川「ドアを開けるわ。急いで！」

優菜『沈利姉……さん……』

沈利「優菜！」

優菜と沈利の視線が交差する。

芳川「開いたわよ！」

今にも泣き出しそうな沈利の顔を見た優菜は、申し訳なそうな顔をして言葉を発する。

優菜『……ごめん……なさ……い……』

そしてぐらっと揺れたと思うと、優菜はそのまま地面に倒れ込んだ。ぱしゃっと優菜の血が飛び散る。そこには明らかに『一人の人間の限界を超えた』血があった。

沈利「……はっ！　ぼさっとしてないで一方通行！　頼む！」

一方通行「あァ！　ついでだァ！　冥土帰しも一緒に運ンでやンよ！」

血溜まりから優菜を担ぎ上げ、冥土帰しと共に外に出て行く。

垣根「心！　上条を頼むぞっ！」

心理掌握「言われなくても！」

芳川「最終調整をするわよ、麦野さん。手伝って！」

沈利「えぇ！　分かったわ！」

それぞれがそれぞれの出来る事をする。

垣根「……優菜の為にも……ここでミスは許されねぇ！」

垣根たちは逸る気持ちを抑えながら、当麻への治療を続けた。

甦る記憶

冥土帰し「一瞬で移動とは恐れいったね。でもお陰で一命は取り留めたよ」

優菜への治療を施し終えた冥土帰しが戻ってくる。

一方通行「あァ……ちィっとばかし病院をブッ壊したがなァ」

冥土帰し「それについては後で直せばいいよ。それにしても驚いたね」

出血自体は酷かったが、優菜は自身にも最低限の天上霊薬を使っていたのか出血量から推察されるほど重篤な状態ではなかった。

一方通行「自分が死ンだら悲しむ人間がいるって分かってたンだろうなァ。

だから最後まで生きようとしたのかねェ？」

冥土帰し「それについてはわからないよ。

でもそのおかげでこの子を死なせずにすんだよ」

その時一方通行の携帯が鳴り響いた。

一方通行「おゥクソメルヘン、そっちはどうなンだァ？」

垣根『メルヘンは余計だ。さっき心んがやる治療は終わった。

もう少しで目も覚ますだろうって』

一方通行「そうかァ……ンじゃあ三下は……」

垣根『今芳川が見てるが問題はねぇってさ。
後は……っと目覚めたようだぜ。早くもどってこいよ』

その発言後、垣根は一方通行の返事を待たず電話を切った。

一方通行「どうやら終わったようだなァ……俺ァ戻るわ」

冥土帰し「ぼくは彼女を見ないといけないから戻れないね。
彼に宜しく言っといてね」

一方通行「あァ……」

――その頃当麻たちは

当麻「あ、あの～。なんで俺はこんな所に？
おまけにこの血だらけは一体なんですか!?」

沈利「あ、やっべぇ。そういやぁ忘れてた」

当麻「俺の怪我じゃないよね！　沈利姉ちゃん！
ちょっと洒落にならない量だよ！」

沈利「……ッ……ああ、当麻の血じゃないよ……グスッ」

記憶消失をしていた当麻は、沈利をいつも『沈利さん』と呼んでいた。
だけど今は『沈利姉ちゃん』……昔からの呼び方に戻っていた。
その事が沈利に溢れんばかりの喜びをもたらした。

当麻「ど、どどどどどうしたの沈利姉ちゃん。
　いきなり泣いて！」

沈利「……何でもないっ……何でもないよ……当麻ァ……」

そう言いながらも沈利は泣くことをやめられない。
次から次へと涙が溢れていくる。

当麻「……頼りない弟の胸かもしれないけどさ。
　いつでも胸を貸すよ」

沈利「うん……今借りるね……」

沈利は当麻の胸に顔を埋め、声を殺して泣いた。

心理掌握「まったく……当麻先輩はいつも人騒がせですわ」

当麻「何が人騒がせなんだ？
　あー名前は二人っきりの時だけだったよな？　心」

心理掌握「……何でもないです。
　それより私も胸を借りていいですか？」

当麻「あ、ああ。構わねぇよ、ホラ」

心理掌握「……ちょっとだけ借りますね」

心理掌握も沈利と同じく当麻の胸に顔をうずめた。
しばらくして心理掌握は肩を小刻みに震わせた。

垣根「俺はァ男の胸に顔を埋める趣味はねぇ。
だから遠慮させてもらうぜ」

当麻「俺だって男はお断りですよ、垣根さん」

垣根「……あぁ、その代わり……！
人に心配かけたお詫びに、め一杯抹茶ラテを奢ってもらおうじゃねぇか」

ニヤっと垣根は笑った。
しかしその目にうっすらと涙があるのを当麻は見逃さなかった。

当麻「……レベル0なんでお手柔らかにお願いします」

垣根「クックック、財布がスカスカになるまで飲んでやるよ」

当麻「お手柔らかにお願いシマス！」

そうこうしてるうちに一方通行が帰ってきたのか、突然ドアが吹き飛んだ。
正確にはあらぬ勢いでくの字に曲がって飛んでいった。
数秒後、ズドーンというとても凄い破壊音が響いた。

一方通行「ちィっとばかし勢いつけ過ぎたってかァ？」

ドアを吹き飛ばしたことなどまるで意に介さず、一方通行はそこに立っていた。

当麻「一方通行……ドアは普通にあけようぜ……」

一方通行「安心しろ、修理代はクソメルヘンが払う」

垣根「おい！　なんで俺なんだよ！」

一方通行「ごちゃごちゃうるせェよ」

垣根「お前は……そいやぁ優菜はどうなんだ」

一方通行「一命は取り留めたみてェだ。
まァ冥土帰しなら安心だろゥ」

垣根「ちげぇねぇ」

一方通行の発言に垣根はほっとした。
当麻を救って優菜が死んだんじゃあ、苦しい思いをすると思っていたからだ。

当麻「優菜って誰だ？」

一方通行「誰って三下の従姉妹だろゥ？」

何いってるんだコイツはと一方通行は思った。
しかし当麻は一体誰のことを言っているんだと言いたげな顔をする。

垣根「ああ、第一位。どうやら記憶消失中の事は忘れてるみたいだ」

一方通行「……そうかァ」

当麻「記憶消失？

なんか知らないが迷惑をかけた。すまん」

一方通行「まったくだァ。
後でミッチリ請求してやンよ」

当麻「お、お手柔らかにお願いします……」

一方通行「泣いて土下座するまで絞ってやンよォ！」

当麻「いきなり手加減なし宣言！
それよりレベル５がレベル０にモノ請求するとか
上条さん的にどうかと思いますが！」

垣根「気にするな、嫌なら断ればいいだけだよ」

そういってフサァと背中に翼が生える。
いつ見てもメルヘンな羽だなぁと当麻は現実逃避をした。

当麻「何その臨戦態勢！　断るという選択肢が選べないんですが！」

一方通行「なァに、嫌なら断ればいいンだよ」

だが、そんな事でこの現状が変わるわけでもない。

当麻「不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

当麻と優菜

当麻の記憶が回復した後色々とあった。
クラスメイトからは色々質問攻めにあって、色々弄られて……
問題が無いか検査するとの事で、冥土帰しの病院でまた入院をした。
そうこうしている内に大覇星祭が終わっていた。
結局何も出来ず、おまけに戦力になるレベル５全員が当麻にかかりっきりだったのだ。
それについてクラス連中に問い詰められた。
結局記憶が無くてもあっても当麻の不幸は変わりがなかった。

最愛「しかしお兄ちゃんの記憶が戻って超安心です」

フレンダ「ワンワン泣いてたもんね、最愛って」

最愛「ちょっ！
　それはフレンダ姉ちゃんも超一緒じゃなかったじゃないですか」

フレンダ「ふっ、過去は振り返らない女って訳よ」

最愛「超意味がわかりません！」

わいわいと賑やかなじゃれ合いが始まる。
当麻はそんな妹たちを微笑ましく見ていた。

沈利「はいはーい。病院なんだから静かにしなさい……穴あけるわよ？」

最愛・フレンダ「」

しかし沈利による鶴の一声で二人は静かになった。

当麻「それにしても優菜がこっちに転校していたなんて驚いたよ。
しかもレベル5とか……」

原因は不明だが、当麻は記憶消失の間の記憶がすっぽり抜け落ちていた。
だから優菜が転校してきたことも何もかも分からなかった。
大雑把には周りから説明を貰ったので特に問題はなかったが……

理后「とうま、荷物はこんなもの？」

病室の荷物を纏めていた理后が当麻に確認を取る。

当麻「理后姉ちゃん、そんなに無いから別にいいよ」

理后「ん、そう？」

沈利「当麻ぐらいだろうねぇ……
プレートに『ふりだし』なんて書かれたの。
あんたどんだけ入院してるのよ」

当麻「ギクゥッ……そ、それは……」

沈利「まぁそれは後できっちり問い詰めるとして……
とりあえず家に帰ろうっか」

最愛「超帰りましょう、お兄ちゃん」

フレンダ「家で退院祝いって訳よ」

しかし当麻は少し考える素振りを見せると、沈利たちに向かってある提案をした。

当麻「その前に優菜に会って行っていかないか？」

沈利「そうだね……」

理后「うん、行こう」

当麻の提案に異を唱える人間はいなかった。

――　優菜の病室

無機質な機械音が、優菜が生きてるって思わせてくれる。

でも体中にチューブやらなんやらが刺さっており、その目は固く閉じられている。

当麻「おっす、優菜」

沈利「……優菜、こんにちわ」

当麻と沈利は優菜に向かって話しかける。

当然ながら優菜は一切の反応を示さない。

理后「ゆうな、久しぶり」

フレンダ「優菜姉ちゃん、おっはー」

最愛「優菜姉ちゃん、超こんにちわです」

皆当麻にならって優菜に声をかける。

それでも優菜からの返事は一切ない。

当麻「……優菜……久しぶりだな。
随分と綺麗になって驚いたぞ。
まぁお前は昔から美人の素質が出てたしな。
それになんだ、こっちきていきなりレベル5か。
はは、上条さんはびっくりすぎて腰が抜けそうだよ」

優菜「……」

当麻「それに……俺が記憶消失の間すっげぇ世話になったらしいな。
上条さんはもう優菜に足をむけて眠れませんよ」

優菜「……」

当麻「俺は今日退院なんだよ。
知ってるか？
俺のプレートには『ふりだし』なんて書かれてるんだぜ。
ひどいよなぁ～」

優菜「……」

当麻「だからさ……お前も早く退院してくれよな……」

沈利「当麻……」

自分の為に誰かが犠牲になるのは嫌だ、たとえエゴだと言われても……

当麻は優菜を見ながら、改めて強く思った。

優菜「……」

当麻「また……来るよ……お前の顔を見にさ」

そういって立ち去ろうとしたその時、優菜に反応が生まれた。

記憶の代償

優菜「……当麻の顔なんて見飽きてるから結構ですよ」

ゆっくりと……ゆっくりと優菜の目が開く。

優菜「それに……歯の浮くような台詞をスラスラと言えるのも変わりないですね」

五人は動かない。いや、動けないと言ったほうがいい。

沈利「ゆ、優菜……目が覚めて……」

優菜「当麻の歯の浮くような台詞で、恥ずかしさのあまりに目が覚めました」

最愛「フレンダ姉ちゃん、超ナースコールですよ！」

フレンダ「わ、分かった！　これね！！」

たまたまナースコールの近くにいたフレンダがボタンを押す。

理后「お久しぶり、ゆうな」

優菜「理后姉さん、久しぶりですね」

当麻「ゆ、優菜」

未だ理解が追いつかない当麻は、優菜に何と声を掛けていいか迷っ

ていた。

優菜「当麻、記憶はどうですか」

静かに優菜は当麻に話しかける。
その言葉にハッとなった当麻は慌てて返事をする。

当麻「あ、ああ、すっかりよくなってるよ。
なんか色々世話かけたようだな」

優菜「全くです、当麻には今度いっぱいお返しして頂かないと」

未だ起き上がれない体だが、優菜はめ一杯の元気さをアピールしようとしている。

沈利「優菜……大丈夫か？」

優菜「沈利姉さん、どうやらまだ生きてるようです。
あの時は手遅れだと思いましたが……」

沈利「ばっかやろう、簡単に死ぬなんて言うなよ！」

優菜「そうですね……『約束』ですものね」

そう言いながら優菜は少しだけ昔を思い出す。
遠い昔二人で交わした『約束』。
それがなければ私はとっくの昔にこの世を去っていた。
今も生きてるのはその『約束』を守るため……

沈利「けど目が醒めたなら能力を使えば治せるな」

優菜の能力は天上霊薬。どんなケガでも完全に治療してしまうはずだ。
なのに優菜は全くそれを使おうとしない。

優菜「ふふふ……能力……ですか」

自嘲気味に笑うだけで、それ以上はなにもしない。
まるで『能力がない』かのように……

沈利「まさか……あの時に力を使い過ぎて！」

優菜「原因かどうかは分かりませんが……
今の私は全く能力が使えない『無能力者』なんですよ」

五人「！」

優菜「それも……完全なまでに力が使えない状態ですね」

全てを捨ててこの街に来た。
なのにこの街で必要なモノを失った。
その事に優菜は自嘲気味に笑う。

優菜（それでも……これで良かったのかもしれません）

自分から全てを奪った力。
父も……母も……自分すら奪ったこの力。
普通の『人』としての生活すら奪ったこの力。
常に憎み、そして恐怖したこの力。
その力が完全に感じられなくなった。

だけど優菜は能力を失ったことに何一つ後悔はしていなかった。

優菜（忌むべき力と思っていた力で、大切な家族を救えたのです。
能力を失うなんて、大した事ではありません）

当麻「……すまねぇ優菜」

優菜「何に対して謝っているのです？」

申し訳なさそうな声で優菜に頭をさげる当麻。
優菜から当麻の顔は見えないが、きっと辛い顔をしているのだろうと思った。

優菜（当麻の事だから自分のせいで力を失ったと思っているのでしょう。
そんな事は微塵も思わなくていいのに……
本当にお人好しなんだから）

当麻「俺のせいで力がなくなっちまった。
なんて言ったらいいかわからんが……」

優菜の予想通り、当麻は自分が優菜の力を奪ったと思っていた。

優菜「当麻、それは違います」

だが、優菜は当麻の考えを否定する。
当麻は頭を下げたままの状態で、優菜の言葉を聞いていた。

優菜「私は貴方より力があった。だからこそ力のない貴方を救った。
その結果に起きたことは自分で負うべきであり、

貴方が背負うものではありません。
無理に背負おうとするなら、それは私を馬鹿にしています。
私に『その責任が背負えない』と言ってるようなものです」

当麻「……」

優菜「貴方は記憶を取り戻した。
ならば貴方はそれでするべき事をしなさい」

そこでドアの前が騒がしくなる。
おそらくナースが来たのだろう。

当麻「……分かった」

頭を上げた当麻は、優菜をしっかりと見て頷いた。
その瞳に迷いはもう……ない。
優菜がそう思った時、病室のドアが開きナースたちが入ってきた。

優菜（……でも……これで）

ナースたちが入ってくるのを見ながら優菜はふっと思った。

優菜（私は『また』帰る場所を失った……）

――　窓のないビル

アレイスター「報告を聞こう」

土御門「上条当麻は記憶が回復。まぁ完璧とは言わないがな。
　そして上条優菜の怪我は全治二週間程度だ。
　原因は分からないが、能力は一切使えなくなったようだ」

アレイスター「ほぅ……能力が使えなくなったか」

土御門「そうだ、彼女を使ってなにか企んでたようだが残念だったな」

生命維持装置らしき弱アルカリ性培養液に満たされた巨大ビーカーの中に、
常に逆さまに浮いているアレイスターに向かって土御門は心底嬉しそうに笑った。

アレイスター「蝶は飛ぶ前に蛹になる必要がある」

土御門「……何？」

アレイスター「君が気にすることは何もない。
　君は黙って私の命令に従っていればいい」

心底楽しそうに笑う土御門に、まるで興味がないかのように淡々と話しかけるアレイスター。

土御門「チッ、次の仕事は何だ」

まるで堪えてないアレイスターに苛立ちを募らせる。

アレイスター「上条優菜を暗部組織に取り入れろ。
手段については全く問わない」

土御門「なっ！　さっきの報告を聞いていたのか！？
以前なら知らず上条優菜は今やただのレベル０だぞ！」

アレイスター「君が疑問を挟む必要はない」

土御門（クソッ、一体何を企んでるんだ？
優菜ちゃんはレベル０認定は間違いなく避けられないぞ。
ただのレベル０が暗部のような場所で生きていけるわけがない。
それなのにコイツは、彼女を暗部組織に入れろと！？）

アレイスター「話は以上だ。早速実行にうつしたまえ」

土御門の葛藤している様すら興味がないのか、アレイスターはあくまで淡々と命令を下す。

土御門（すまねぇ……カミやん……優菜ちゃん）

一度だけアレイスターを睨むと、土御門はそのまま『案内人』である結標と共に窓のないビルを出て行った。

アレイスター「彼女は前蛹が終わり、今は蛹化の状態なのだよ。
それが終われば……」

誰もいなくなった部屋で、ただアレイスターの楽しそうな声だけが

響く。

【番外】オリキャラ設定（上条　優菜）

上条　優菜についての設定を以下に記載します。

・家庭事情

上条　当麻の従姉妹。

父は上条　刀夜の兄弟。母はとある華族の人。

但し両名とも優菜が幼少の頃に、事故で死亡している。

両親の事故後に、世間的に隔離されている「聖カトリーヌ女学院」に転校。

高校一年の二学期より、学園都市に転校。

・学園都市に来た理由

天上霊薬の能力に気付いたが、そんな能力は無いと証明したいがために転校。

前の学校では、治癒の力は秘匿していたため知っている人間は限られている。

・上条当麻たちとの関係

当麻や沈利、理后、フレンダ、最愛とは顔見知り。仲は良い方。

特に沈利と仲が良い。

乙姫とも顔見知りだが、面識は少ない。

刀夜、詩菜とも面識あり。

・容姿

腰まで届く美しい黒髪、整った顔立ち、色白で肌理細かいハリのある肌、

均整のとれた体つき、気品ある佇まい。

世間一般的に認知されてるお嬢様のような感じである。

お肌は超電磁砲組が羨むほど瑞々しさを保っている。
吹寄制理に近いぐらいの巨乳である。

・性格
自身に非常に厳しいが、他者には意外と甘い。
基本的にクールで沈着冷静がモットーな人。
しかし心を許した人の前では意外とお茶目な面も出す。

・能力
レベル5の「天上霊薬（エリクシール）」。序列は第六位。
自身の怪我、病気などや異物による体の損傷をすべて回復（無効化）してしまう。
反面、能力研究に使う薬剤まで無効化してしまう。
当然ながら脳も弄れず、レベル5中最も研究しにくい人間。
他者の怪我や病気も治すことが出来る。
能力による戦闘力はレベル5中最弱。
高レベル同士の戦闘になれば常に別の能力者による護衛が必要となる。

・その他
上条の名を持つ者の宿命である「フラグメイカー」を保持。
但し刀夜や当麻と違って異性ではなく同性に立てやすい。

色々な武術や軍事訓練を受けている。

上条当麻とはあらゆる意味で真逆。鏡のような関係である。
（例：頭の良さ→当麻は馬鹿。
優菜は最優秀クラス
肉体面　→当麻は丈夫だが戦闘力は喧嘩が強い程度
優菜は普通だが戦闘力は滅法高い）

【番外】第弐章を終えて判明した原作と相違点

第弐章を終えて判明した原作との相違点。後、その他諸々。
内容的には第壱章で挙げた内容にプラスされる事です。

・上条当麻

1. 記憶消失の事を黙秘せず、周知します。
2. 完璧とは言いませんが記憶が戻ります。
3. 心理掌握とは顔見知りかつフラグ建築済。

・垣根帝督

1. 絶対能力進化実験に参加した。
2. 好物が抹茶ラテ。但し甘党ではない。
3. 超電磁砲とそのクローンとはソリがあわない。
4. 『アイテム』を一度ボコボコにしてるが、思いっきり嫌われてはいない。
5. 心理掌握が少々苦手。

・御坂美琴

1. ミサカたちからは「貧乳のお姉様」と慕われている?

・上条優菜

1. オリキャラ。詳細は「【番外】オリキャラ設定（上条　優菜）」で。
2. 優菜がレベル5なのはあんまり知れ渡っていない。
   但し、能力については情報が出回っている。
3. 優菜専用の研究所は存在しない。また、専門の研究者も存在しない。
   全てアレイスターが禁止している。

・その他

1．絶対能力進化試験では、ミサカたちは誰も死んではいない。
　但しクローン体は既に１００００体生産されていた。

2．妹達は全員レベル３相当の能力者。

第参章予告

『さすがにいきなり盛大にコーヒーを吹き出すとは予想外ってミサカはミサカは言ってみたり』

――――――――――――――――――検体番号２００００１号

ラストオーダー

打ち止め登場。

『デ、デートじゃないわよ！？』

――――――――――――――――――学園都市レベル５第三位

御坂美琴

デート中の御坂美琴。さて、お相手は？

『人と繋がりが欲しいと願った子供は、少しずつ成長してますね……』

――――――――――――――――――学園都市の七不思議　月詠小萌

とある子供の成長を喜ぶ小萌。

『邪魔を…邪魔を…す、るな』

――――――――――――――――――全てに見捨てられ狂った研究者　天井亜雄

哀れなピエロの末路。

『たとえ俺たちがどれほどのクズでも！　どンな理由を並べても！

それでこのガキが殺されて良い事になンかならねェだろォがよ！』

――――――――――――――――――学園都市レベル５第一位

一方通行

守りたいから守る。例えどれほど自分が傷つこうが……

『私に余計な仕事させて！　私は働きたくないのよ！？』

――――――――――――――――――学園都市最強のニート

芳川桔梗

働けよ芳川

『どうして……あの力を欲する自分がいるのでしょう』

――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位

上条優菜

失った力。だが、再びその力が必要となる。

『それにしても予想よりはるかに成長速度が早い』

――――――――――――――――――窓のないビル　アレイスター・クロウリー

予想外すら楽しむアレイスター。

『妾と姉上が離れ離れになるなどありえぬ。待っておれ……』

――――――――――――――――――？？？？？？　？？？？

新キャラ

第参章予告（後書き）

第弐章　完結です。
次話より第参章に突入。

九月二十七日

コンビニで新しいコーヒーを物色していた一方通行。
ふと、足が止まった張り紙は……新発売のお知らせだった。

一方通行（今度はこのメーカーにするかァ……）

他の缶コーヒーとは一線を画すデザインに惹かれた。
現在飲んでいるコーヒーが飽きてきた一方通行は、目の前に並んでいる新発売の缶コーヒーをカゴに入れる。

一方通行（九……いや十は買っておくか）

買い物かごに新発売の缶コーヒーを十本入れる。
ふと、一方通行は小萌の言葉を思い出した。缶コーヒーは箱で買いなさい……と。

一方通行（飽きたら飲まないから箱は無理だなァ……）

相も変わらぬ小萌の過保護だが、不思議と嫌な気持ちは一切しなかった。
他に買う物もなくそのままレジまで歩くと、バイトの店員が対応してきた。
一方通行の買い方に慣れているのか、店員はテキパキと缶コーヒーをひとつの袋に入れていく。

店員「（相変わらず箱で買わないよなこの人）ありがとうございましたー」

カードで支払いを済ませると、缶コーヒーが入っている袋を掴みそのまま店を出る。
店を出ると、一方通行は早速味見をしようと思い袋から一本取り出す。

一方通行「……」

缶コーヒーを取り出した直後に一方通行は気付く。
自分を囲むように群れている人間を。
暗部で仕事をするようになってから、他人の気配に敏感になっていた。

一方通行（こォいう馬鹿は永遠に居なくならないンだろうなァ……）

だが、相手は手慣れたプロではなく、単なる能力者たちと気づくとため息をついた。
自分に設定している反射に音を追加する。
設定した直後、一方通行はすべての音が聞こえなくなった。

一方通行（さァて帰りますかァ）

自分を狙う能力者たちを全て無視し、帰宅の途につく。
自分たちを無視する一方通行が気に入らなかったのか、能力者たちは一斉に襲いかかる。

能力者Ａ「うぅ……がぁっ」

能力者Ｂ「いてぇ……！　手が……足がぁぁ……！！」

数秒後、能力者たちは地面に倒れ伏す。

一切の攻撃は、一方通行に届くことはなかった。
対して一方通行は、物憂げな顔をしながら足をとめる。

一方通行（俺がレベル5なのは変わりないンですがねェ……）

倒れ伏している能力者たちを一瞥すると、一方通行は再び歩き出した。
暫く歩いていたが特に追ってくる事もないので、改めて缶コーヒーを袋から取り出す。

一方通行（さァて、お味はどうなンですかァ？）

少しだけの期待を込めて、一方通行は缶コーヒーを一気に煽る。

一方通行「……ごハァ！」

自分の口の中にあったコーヒーを盛大に吹く。凡そコーヒーとは思えない味であった。
周りに人がいなかったので被害を被る人はいなかったが、一方通行の口は大ダメージであった。

一方通行「なンなンですかァ！？　この不味さはァ！？」

缶コーヒーの成分表を見る。
箇条書きされている中に何点かありえないモノが書かれていた。
凡そコーヒーとは無縁の成分である。
少なくとも普通のコーヒーに入るようなものではない。

一方通行「……あァ？」

買うときには気付かなかったが、缶コーヒーの下部に赤い文字が書かれているのに気付く。
何やら嫌な予感がしながらも、一方通行はその文字を読む。

『この製品はジョークコーヒーです。決して本気で飲まないでね♪』

あ然とする。
どうやら缶コーヒーのデザインだけで実際の味は冗談の部類に入るようである。
余りの不味さに缶コーヒーを全て捨てようと思い、袋に視線をうつす。
そこでようやく気づく。自分の近くに誰かが居ることを。

???「！……！……！」

一方通行に話しかけているが、当の本人は相手が何を言っているかさっぱりわからない。

一方通行（……当たり前か、音を反射で聞こえないようにしてるンだったァ）

しかし聞こえない原因が自分の能力による反射と気づくと、直ぐに設定を変更する。
そしてようやく声の主が何を言っていたかが聞こえるようになる。

???「さすがにいきなり盛大にコーヒーを吹き出すとは予想外ってミサカはミサカは言ってみたり」

一方通行（ン？　ミサカ？……どっかで聞いたような口調だなァ……）

同じような喋り方をする人間が、自分の周りにいたような気がする
一方通行。
しかし、それが誰かが思い出せない。

？？？「しかし徹底的に無視されるのは、さすがに悲しいって
ミサカはミサカは泣きそうな気持ちを吐露してみたり」

一方通行「……ミサカだァ？」

『ミサカ』という言葉を再度聞いて思い出す。
超電磁砲のクローン体が目の前の人間と同じような喋り方をする事に。
しかし、超電磁砲のクローン体はもう少し大きかったはずだ。
目の前の人間はどう見ても、見た覚えのあるクローン体より小さい。

？？？「やっと反応があったけど、こっちの質問は全て無視なのが泣きそうって
ミサカはミサカは言ってみたりする」

一方通行「……おいテメェ、そのキタねェ毛布を脱いで顔見せろ」

目の前の人物は頭からスッポリと毛布をかぶっており、顔が見えない。
一方通行は顔を見ればはっきり分かると思い、相手に顔を見せるように言う。

？？？「えっと、この毛布を脱ぐととても危険なのって
ミサカはミサカは警戒してみたり」

一方通行「いいからその面見せやがれ」

？？？「や、ちょっと待っ！」

相手が何か言ったが強引に毛布を剥ぎ取る。剥ぎ取るとそこには……

一方通行「……あァ？」

完全無欠に素っ裸で十歳前後の『超電磁砲』がいた。

毛布を剥ぎ取り終えると同時に、背後からゴトっという音が聞こえた。

小萌「……一方ちゃん……何をしてるのですか……？」

振り返ってみると、ビール缶が入った袋を落として呆然としている小萌が立っていた。

言い訳無用

小萌「……一方ちゃん、反省してますか？」

あの後、呆然とする小萌を何とか説得して家まで一緒に帰った。
勿論、あの汚い毛布をかぶっていた少女も一緒に。
家に着きやっと理解が追いついた小萌が、まず最初にさせたのは謝罪である。

一方通行（どうして俺は正座なんてしてるンですかァ……）

最初は拒否をしたが、小萌の迫力が今まで味わったことがないほどだった為、最終的に一方通行が折れた。
そして少女に一方通行が謝るのを確認すると、次に正座をさせられた。
リビングには正座姿の一方通行に、仁王立ちしている小萌の姿がある。
毛布少女は少し離れたところで待機していた。

？？？「うぅ……公衆面前でストリップは恥ずかしかったって
ミサカはミサカは泣きそうな顔をしてみたり」

小萌「一方ちゃぁぁぁん」

少し頬を赤く染めながらいう少女を見て、小萌は怒気を込めながら一方通行に詰め寄る。
しかし余り迫力が無い為、いまいち怖さがなかった。

一方通行「……ゴメンナサイ」

しかし一方通行にだけは効果覿面である。
真っ青な顔をしながら深々と頭を下げ謝罪をする。
さすがに幼女を路上でストリップさせた事実は痛い。
夜であり、人通りが少なかったのが幸いだった。
万が一小萌以外に見られたらロリコンの烙印は免れない。
一方通行は今さらながら、自分の軽率さに後悔した。

小萌「ふぅ……打ち止めちゃん。
　インデックスちゃんが出てきたらお風呂に入りましょう～」

深々と頭を下げ続けいる一方通行を見て、怒る気力を削がれた小萌。

打ち止め「お風呂！　やったぁ！
　ってミサカはミサカは喜びを体いっぱいに表現してみたり」

小萌「綺麗にしましょう～。
　その後お部屋を用意しますね～」

打ち止め「ふかふかのベットまで！　でもいいの？
　とミサカはミサカは疑問を投げかけてみたり」

小萌「何がでしょうか？」

打ち止め「自己紹介だけしかしてないミサカを気軽に泊めるあたりにって
　ミサカはミサカは警戒心が薄いのではと心配してみる」

小萌「構いません。

困ってる子を助けるのは大人の役目ですー！」

無い胸をぐんっと精一杯そらしている小萌。
しかしその姿は子供が頑張って大人ぶろうとしているようにしか見えない。

打ち止め「大人？と何か違和感を感じる言葉が
ミサカはミサカは聞こえたような気がする」

一方通行「あァ……一応この家では保護者だからなァ」

小萌「一応って何ですか一方ちゃん！」

小馬鹿にされたと思ったのかプンプンと怒りながら一方通行に詰め寄る。
しかしその姿はどう見ても大人とは思えない、そう打ち止めは思った。

インデックス「お風呂からでたよ～」

話がちょうどまとまった頃に、風呂から出てきたインデックスがリビングに入ってきた。

小萌「それじゃあ打ち止めちゃん、一緒に入りましょう」

打ち止め「おっふろ～おっふろ～って
ミサカはミサカは浮かれながら歌ってみたり」

打ち止めは今にもスキップをしそうな勢いである。
そんな打ち止めを微笑ましく思いながら、小萌は仲良く部屋を出て

行った。
インデックスは二人のやり取りに余り興味がなかったのか、ソファーに座ってテレビを観ていた。

インデックス「所であくせられーたは何時になったら正座をやめるの？」

今だに正座を止めない一方通行に、インデックスが疑問を投げかける。

一方通行「……ロリがまだ崩していいと言ってねェ」

インデックス「……本当にあくせられーたはこもえに甘いよね」

一方通行「……うるせェ」

図星をつかれたのか一方通行は、インデックスから視線を外す。
だが、その顔は耳まで真っ赤であった。
その事に気付いたインデックスだが、あえて何も言わずテレビに意識を向けた。
しばらく正座を続けていると、風呂場から小萌と打ち止めが出てくる。

打ち止め「お風呂が豪華！
ってミサカはミサカは余りの豪華さに驚いてみたり」

小萌「お風呂あがりました。一方ちゃん、反省しましたか？」

一方通行「……反省しています」

きちんと正座姿だった一方通行を見て、小萌はうんうんと頷いた。
実際はベクトル操作で全く苦ではかった一方通行ではあったが……

小萌「一方ちゃんもきちんと反省してますね。もう足を崩していいですよ」

一方通行「ン」

ノソノソと足を崩すとソファーにごろりとなる。
その姿に小萌は苦笑しながら打ち止めの世話をする。

一方通行（……なンか眠ィなァ）

優菜が目覚めたと聞いて学校帰りに病院行ったせいか、無駄な疲労が蓄積しているようである。
いつもより早く眠気が一方通行に襲いかかる。

一方通行（……優菜……アイツにも世話になったなァ）

うとうとしながらも、一方通行は優菜の事を考えていた。
優菜は死と隣り合わせになりながらも、当麻の治療を成し遂げた。
対して自分は何だ。せいぜい芳川を紹介して、研究所の護衛をやっていた程度だ。
そう一方通行は思っていた。

優菜『一方通行さんは一方通行さんが出来る事を……
私は私が出来る全ての事をやったと考えています。
そこに優劣は存在しません。
だから自分を卑下しないでください』

だが、優菜は『何もしていない』と言った一方通行にそう返答をした。

一方通行（見舞いに行ったのに……
逆に俺の方を心配されるとか……笑えねェ冗談だ）

優菜は口に出して言っていないが、恐らく能力に何かしらの影響が出ているのだろうと一方通行は考えていた。
能力が使えるなら優菜は入院などする必要がないからである。
なのに一切能力を使うような気配がない。

一方通行（能力が使えなくなるとか、どういう気持ちになるンですかねェ）

少し考えてみたが、押し寄せてくる眠気に負けた為考える事をやめた。

一方通行「なンか眠ィから先に寝るわァ」

ソファーで寝ると小萌からの小言がうるさい。
そう思った一方通行は自分の部屋へと眠りに向かった。

小萌「はい、おやすみなさいー」

インデックス「おやすみ～」

打ち止め「おやすみー！ってミサカはミサカは挨拶してみたり」

保護者と買い物

次の日、打ち止めの服を買うため一方通行と小萌はセブンスミストまでやってきた。
本来はインデックスも一緒だったのだが、急遽ステイルに呼ばれたため不参加となった。
売り場まで来て、一方通行はとある思いに囚われていた。
それは……

一方通行（居心地が悪いンですがァ……）

女性向けの服、それも子供向け売り場に憮然と佇む一方通行は明らかに浮いていた。
周りは若い夫婦や子連れの家族しかいない。
その中に一方通行のような風貌の人間は、明らかに異質な存在であった。
しかし小萌と打ち止めは、そんな一方通行の思いを一切省みる事なくはしゃいでいた。

小萌「この服なんてどうでしょう。可愛らしいと思いますよー」

打ち止め「お～！　カエルの着ぐるみってミサカはミサカは驚いてみたり！」

しかも一方通行の異質さに拍車をかけているのが、小萌と打ち止めの容姿である。
打ち止めは歳相応だが、小萌はこれでも大人なのである。
しかし、外見はどう見ても打ち止めと同じぐらい年齢にしか見えない。

そんな訳で、一方通行は周りから『子供二人に付き纏う人相の悪いお兄さん』に見えるのである。

一方通行（なンか警備員がコッチをチラチラと見ているンですがねェ！？）

セブンスミストの警備員らしき人物が、さっきからずっと一方通行を監視している。

しかも何かあれば直ぐ動けるように臨戦態勢までとっている。

無論ただの警備員程度では一方通行の相手にならない。

だが、その後に待ち受けている騒動を思うと、怒りより空しさが勝る。

結局は、チクチクと刺さる警備員の視線を我慢して受け止めるしかない。

一方通行「……おい、ロリ。ちっとコーヒーを買ってくる。

その辺のベンチにいるから終わったら呼ンでくれ」

だがいつまでも続く視線に我慢の限界に達した一方通行は、この場から離れることを決意する。

小萌「はいー、わかりましたー」

打ち止め「了解！ってミサカはミサカは元気に答えてみたり！」

だがそんな一方通行の辛さを知らない二人は、元気よく一方通行を送り出した。

一方通行「……ったく……
　俺にはガキのお守りなンて趣味はないンですがねェ……」

缶コーヒーを買った後、手頃なベンチに座ってコーヒーを飲む。
買った缶コーヒーは、昨日と違って以前飲んだ事のあるコーヒーである。
流石に続けてチャレンジ精神を出すほど、一方通行は好奇心に溢れていなかった。
そうしてコーヒーを飲んでいると、見知った人間から声をかけられた。

当麻「……あれ？　一方通行じゃねぇか」

御坂「あら、珍しい人がいるわね」

一方通行「三下に超電磁砲か……」

当麻と御坂が一方通行の座っているベンチまでやってくる。

当麻「よう、何やってるんだ？」

一方通行「……付き添いだァ」

気軽に声をかける当麻。だが、一方通行はそんな当麻を鬱陶しく思っていた。
この男に関わると大体ロクでもない目に遭うからである。
だが、当麻はそんな一方通行の思いなど気にせず人のよい笑顔で話しかけてくる。

一方通行「さっさと視界から消えろ、三下ァ」

当麻「どうして俺の周りの友達は、皆俺にだけ冷たいのですか！？」

一方通行「アホですかァ？
　　デートの邪魔するほど、俺は空気読めない人間ではないンです」

御坂「デデデデデデデデデデート！！！？」

一方通行「あれェ？　違うンですかァ？」

瞬間湯沸かし器のように一瞬で耳まで真っ赤になる御坂。
そんな御坂を一方通行はニヤニヤしながら見ていた。

御坂「デ、デートじゃないわよ！？」

真っ赤な顔で当麻とのデートを否定する御坂だが、視線だけはチラチラと当麻に向けている。
その態度から、御坂が当麻とデートしていると考えているのは明白である。
しかし、当麻はそんな御坂の気持ちに気づく事はなかった。

当麻「上条さん的にはもっとこうお姉さんみたいな人とデートしたいですよ」

御坂「あんた！　それって私じゃデートする価値もないって事！？」

当麻「いや、決してそういう意味じゃないですよ！？」

御坂「じゃあどういう意味よ！」

やいやいと一方通行の目の前で夫婦喧嘩をする当麻と御坂。
二人のやりとりを見せられている一方通行は、正直鬱陶しいと思った。

当麻「お前だって、外見はとても可愛いさ！」

御坂「なっ！？」

再び耳まで真っ赤になる御坂。
当麻を見るその瞳は、心なしか少しだけ潤んでいる。

当麻「だからな、もうちょっとお淑やかになってくれ。
……って一方通行？　何をしているんだ？」

一方通行が携帯で何かしてるのに気付いたのか、当麻が声をかける。

一方通行「ン？　土御門と青髪ピアスにメールしてるだけですよォ？
『三下が超電磁砲とイチャついてるンですがどうするべきか？』っと」

当麻「ぎゃーーーーーー、お願いします、それだけは勘弁を！！」

一方通行「ざーンねェン。もう送ってしまいましたァ」

その言葉と同時に一方通行の携帯から音楽がなる。

一方通行「返信がきたようだ。何々……
『カミやん、首洗って待ってろ』だって。
ぎゃは、良かったじゃねェか」

当麻「なんて事を！
　クソッ、とりあえず逃げるぞ！　ビリビリ！」

御坂「可愛いって……可愛いって」

慌てて御坂に声をかけるが、さっきの当麻の言葉でトリップした御坂には聞こえてなかった。

御坂「ってうわぁ！　何よ一体！」

当麻「黙って俺について来てくれ！」

仕方ないので、当麻は御坂の手を握り引っ張った。
手を握られたことで現実に引き戻された御坂だが、当麻は気にせず走っていく。

御坂「ちょちょっと！　事情を説明してよ！
（うわぁーー！！　アイツと手を握ってるーー！！！）」

当麻「チクショウ！　不幸だァァァァ！」

全速力で走っているのか、一方通行の視界からあっという間に消えた。
一方通行はニヤニヤしながら二人を見送った。

微かな違和感。そして…

小萌「お待たせしましたー。あら？　一方ちゃんどうしました？」

当麻と御坂が立ち去った後、入れ替わるように小萌が一方通行のところに戻って来る。

買い物が満足できるレベルだったのか、服が入っているであろう袋を大事に持っている。

一方通行「ン、なンでもねェ……」

当麻とのやり取りを話す必要はない、そう一方通行は判断する。

一方通行が無造作に手を出すと、小萌は申し訳なさそうな顔をしながらも袋を渡す。

小萌「お願いしますー」

一方通行「気にすンな。世話になってるンだから荷物ぐらい持つ」

本当は小萌が持つとフラフラとして危ないからなのだが、恥ずかしいため口に出しては言わない。

荷物を受け取ると、一方通行は打ち止めがいないことに気付く。

一方通行「そういやァあのクソガキはどこいったンだァ？」

辺りをキョロキョロと見回すが、打ち止めの姿は見当たらない。

小萌「おかしいですね。さっきまで一緒にいたのですが……」

一方通行に倣って小萌も辺りを見回す。
少しして打ち止めは簡単に見つかった。

打ち止め「ちょっとフラフラとする、ってミサカはミサカは足取りが危なかったり」

だが熱病に侵されたかのように、フラフラとしている打ち止めを見て小萌は慌てて駆け寄る。
一方通行も異常を感じた為打ち止めの元に向かう。
倒れそうになったところを何とか小萌が抱きとめる。

小萌「打ち止めちゃん！」

抱きとめた小萌はそこで気付く。
苦しそうに呼吸する打ち止めの体は、異常なまでに発熱していると。

小萌「あ、あの救急車を……！」

一方通行「待ちなロリ、救急車はダメだァ」

小萌「でも一方ちゃん！　この熱は異常ですよー！」

傍から見ても異常な状態の打ち止めに、軽いパニックを起こす小萌。
しかし一方通行には、この異常な熱の原因が予想できていた。

一方通行「このクソガキはおそらく調整が終わってないはずだ……
だから病院じゃァ意味がない」

小萌「……調整？」

一方通行「……」

聞きなれない言葉に小萌は疑問を口にする。
一方通行は迷った。
小萌は知らないはずだ、打ち止めが御坂のクローン体であるという事に。
態々その事を小萌に知らせる必要はない。
だが、この状態を打破出来なければ小萌はあれこれ世話をするだろう。
もしその時クローン体の事を知れば？
その後小萌がどの様な行動を取るかは簡単に分かる。
きっと、生徒を守るために学園都市に対して抗議するだろう。
そうなれば学園都市は小萌を『疎ましい存在』と考える。
それだけは絶対に避けなければならない。

小萌「一方ちゃん？」

思案顔の一方通行を見て、小萌も自分の疑問が何か重要な事なのではと考える。
二人は暫く無言であったが、やがて一方通行が口を開く。

一方通行「なンでもねェ。
もしかしたら能力が影響している可能性もあるだろゥ？
だから研究者で対応させる方がいい。
幸いな事に、能力研究に詳しい研究者を知っている。
奴ならなンとかしてくれるかもしれないぜェ」

小萌「……そうですね。確かにそうかも知れません」

一方通行の言葉に何かを感じたのか、小萌はそれ以上何も尋ねなか

った。
きっと聞いてはいけない内容なのだろう、そう小萌は直感的に理解した。

小萌「それじゃあそこまで打ち止めちゃんを運びましょう！」

ひとまず打ち止めを助けようと思った小萌。
だが一方通行はそんな小萌を制止する。

一方通行「待ちなロリ……
そのまま運んでいいンかどうか分からねェ。
だから悪いがココで待っててくれ」

調整が終っていない打ち止めを無造作に運んで何が起きるか分からない。
そう思った一方通行は、小萌にセブンスミストで待ってもらうよう言った。
それに研究者と話をすれば、必ず絶対能力進化実験の話が出てくる。
その事は絶対に小萌に知られたくはない、そう一方通行は思った。

小萌「で、でも……」

しかし何もしない自分に納得が出来ないのだろうか、小萌は複雑な顔をして一方通行を見る。

一方通行「じゃあクソガキを頼んだぜェ！」

小萌「あ！　一方ちゃん！」

一方通行は小萌との話し合いを強引に打ち切ると、セブンスミスト

の出口に向かって走りだす。
能力を使っていたのか一瞬で小萌の前から消え去っていた。

小萌「もう……一方ちゃんは強引ですね」

そう言いながらも小萌は微笑んでいた。

小萌（人と繋がりが欲しいと願った子供は、少しずつ成長してますね）

打ち止めを抱えると、一方通行が座っていたベンチに寝転ばせる。
少しでも苦しみを和らげようとしたが、効果はあまり無かったようだ。
打ち止めの熱は一向に下がらない。
むしろ時間が経てば立つほど悪化してるようである。
汗をハンカチで拭きながら、小萌は一方通行の戻りを待った。

???「やぁ済まない。遅くなったね」

しばらく打ち止めの汗を拭いていると、突然見知らぬ男性から声をかけられた。
白衣を着ているので、もしかしたら研究者の方かもと思った。

小萌「貴方は誰ですか？」

しかし一方通行の姿が見当たらない小萌は、目の前の男性に違和感を感じた。

???「私は天井亜雄という。
一方通行に頼まれてその子を見に来たのだよ。

すまないがその子を渡してくれないか？」

小萌「……一方ちゃんは何処にいるんです？」

話せば話すほど、目の前の男性は怪しいと感じた。

確信はないが、天井に打ち止めを預けると大変なことになると小萌は思った。

天井「一方通行は別件で今いないよ。

私が先に受け取っておくようにと言われたんだよ」

小萌（一方ちゃんが連絡もなく研究者だけ向かわせるとは思えません……）

自惚れかも知れないが、小萌は一方通行から大事にされていると感じていた。

だからこそ小萌もその気持ちに応えて、多少過保護に思えるほど一方通行を大事にしていた。

その一方通行から何の連絡もないのはおかしい。

小萌「では一方ちゃんに連絡を取りますね。

そうしないと一方ちゃんは、ココに戻ってきちゃいます」

一方通行に連絡を取れば天井が怪しいかどうか分かる。

そう思って小萌はポケットから携帯を取り出した。

天井「……騒がないで頂こうか」

しかし携帯を取り出した直後、背中に何かを押し当てられた。

天井「下手に騒ぎを起こしたくはない。
　大人しく従っていただこう」

背中のモノは他人から死角になっており、周りに気付かれることはほぼない。

小萌「……この子に危害をくわえる気はないんですね」

天井「ああ、私は危害をくわえる気はない。
　むしろそのままの状態にしておきたいのだよ」

小萌「貴方は……！」

こんなに苦しんでいるのに、天井は放置しろと言う。
その事に小萌は言いようのない憤りを覚える。

天井「おっと、騒がないで頂こうか。
　うっかりスイッチを入れて君を丸焦げにしたくないのでね」

グイっと背中のモノを押し付けられる。
電撃か何かの装置なのだろうか。
小萌はスタンガンのようなものを想像した。

天井「悪いがその子を車まで運んでくれるかな。
　下手な事をすれば……どうなるか分かってるだろう？」

小萌「分かりました」

この状況を改善出来ないと分かった小萌は、天井に従うしか無いと判断した。

天井「悪いが君も付き合ってもらうよ」

無言で頷き打ち止めを抱えると、天井に従って歩き出す。

小萌「……一方ちゃんへの人質か何かですか」

天井「そうじゃない。
　下手に動かれるよりは眼に見える範囲にいて欲しいのだよ」

しばらく指示に従って歩くと、一台のスポーツカーが見えてきた。
スポーツカーの前まで行くと天井は無言で車のドアを開けた。

天井「悪いが君も最後まで付き合ってもらうよ」

一緒に車に乗れ、天井は小萌へ遠まわしにそう言ってきた。
どちらにせよ小萌には、天井に対抗するすべはない。
打ち止めを後ろに載せると、自分は助手席に乗り込んだ。
シートベルトを閉めると同時に首になにか押し当てられた。

天井「悪いが眠ってもらうよ」

直後バチっと音がして、目の前が真っ暗になっていく。

小萌（一方ちゃん……ごめんなさい）

薄れいく意識の中、小萌は自分が打ち止めを守ることが出来なかった事を一方通行に謝った。

天井の狙い

芳川『……珍しいわね。
　貴方が私に電話してくるなんて』

小萌と強引に別れた後、一方通行は芳川に電話をかけた。
彼女なら打ち止めについて何か知ってる可能性がある、そう判断したからである。

一方通行「聞きてェ事がある。
　絶対能力進化実験で作られた超電磁砲のクローン体。
　アレは全部で十二体だったよなァ？」

絶対能力進化実験に参加していない一方通行は、実際のところクローン体については詳しく知らない。
学園都市に超電磁砲のクローン体が十二体存在している、その程度である。

芳川『……違うわ。
　今だから言えるけど、クローン体は合計一万体よ。
　最も、ほとんどのクローン体は外部で調整中だけど……』

一方通行「……一万体か。あのバカな実験でそンなに作ってたのかよ」

芳川『ええ……知ってるでしょう？
　あの実験では合計二万体の生産を予定してた事ぐらい』

二万通りの戦闘環境で量産能力者を二万回『殺害』する。

それが絶対能力進化実験……
一方通行もしくは垣根帝督を絶対能力者へ進化させる実験。

一方通行「あァ……」

芳川『で、貴方は実験の参加拒否。
実際に実験を受けたのは垣根帝督。
そして、その垣根帝督もレベル0に倒された。
だから計画の妥当性が疑われ、あの実験は中止・解体されたわよ』

絶対能力進化実験のあらましを口にする芳川。
しかし今さらこのようなことを聞いて何になる？という思いが芳川にはあった。

芳川『でもそれがどうしたの？
今さら確認するような事じゃないでしょう？』

既に終わった実験である絶対能力進化実験の、クローン体について聞いてくる一方通行に芳川は疑問を感じていた。

一方通行「確認だ。
あの実験で生産されたクローン体は超電磁砲と同じ姿だったよな。
それより小さい個体は『作られた』事があるか？」

芳川『……もしかしてラストオーダーの事を言ってる？』

ビンゴだ、そう一方通行は思った。
予想通り芳川は打ち止めについて何か知っている。

その情報を聞き出す必要があると一方通行は判断した。

一方通行「それだ、ラストオーダーについて聞きたい事がある」

芳川『ラストオーダーと呼ばれる二万体の上位個体。
彼女は『妹達』の司令塔になる存在なのよ』

一方通行「つまりあのクソガキは妹達の頂点にいるって訳かァ……」

芳川『ええ、そうよ。
ラストオーダーはそっちにいるの？』

一方通行「あァ……だがちっとばかし厄介な状態だな」

芳川『まさか異常な発熱が生じている……とか？』

一方通行側の状況が分かっているのか、芳川は直ぐに打ち止めの異常な状態を当てた。

一方通行「なンで分かる。確かに異常な発熱はしてるンですがァ」

芳川『実はね。
こちらで調べたところによると、
ラストオーダーにはあるウィルスが仕込まれている事が分かったの』

一方通行「……ウィルスだと？」

芳川『不正プログラムとも言っていいわね。
内容はこっちの予想が当たってれば……

クローン体を使った無差別テロよ』

無差別テロという言葉に一方通行は眉をひそめる。
だがすぐに有る事に気付く。

一方通行「まさか……」

芳川『そのまさかかもね』

一方通行の考えは芳川も予想していたのか、直ぐに同意をした。

一方通行「無差別テロ自体の成否はどうでもいい。
目的はテロによって世間の注目を集める事……
超電磁砲のクローン体がバレれば学園都市にとっちゃダメージだなァ」

芳川『おそらくウィルスを仕込んだのは天井亜雄と思われるわ。
アイツが一番クローン体に詳しいはずだから』

過去に会った研究者に天井という男がいたのを思い出す。
確か絶対能力進化実験の説明をしていた男だ。

一方通行「……どうすればウィルスは止まる」

だが、今は天井の顔を思い出しても意味がない。
一方通行は、今の自分に出来る行動は何かを芳川に尋ねる。

芳川『方法は二つ。
一つはラストオーダーの殺害。
もう一つは彼女の人格データを書き直す方向ね』

既に調べていたのか芳川は直ぐに答えを言う。

一方通行「前者は却下だなァ。
　なら後者を行う。何をすればいいンですかァ？」

芳川『彼女の人格データが収まったデータスティックと電子ブックを渡すわ。
　それで彼女の人格データを上書きするのよ』

一方通行「そうすればウィルスは消滅って寸法ですかァ？」

芳川『ええ、そうよ。
　今私は絶対能力進化実験の研究所にいるわ。
　そっちに来れる？』

一方通行「あァ……すぐに着くぜェ」

芳川『そう、待ってるわ』

携帯の通話を切ると、一方通行は能力を使う。
目指すは絶対能力進化実験の研究所。

一方通行（クソッたれがァ！）

ビルからビルへ飛び移る一方通行の顔は、本人も気付かないほどの焦りの色が浮かんでいた。

芳川からの依頼

絶対能力進化実験の研究所にいた芳川は、一方通行に渡すべきモノを整理していた。
やがてまとめ終わり封筒にしまうと同時に、背後から爆発音が響いてきた。
敵襲か何かと思い、芳川は慌てて音がした方に視線を向ける。

一方通行「邪魔だァ」

だが、それは杞憂であった。
先ほど電話で会話していた一方通行が、研究所に入るために壁を突き破ってきたのだ。
その時に入り口の扉が巻き添えになったか、もはや扉としての原型をとどめていなかった。

芳川「……高いから壊さないでよ」

かなり頑丈に作られていると思われる扉。
だが一方通行にとっては、どんなに強固だろうと関係がなかった。

一方通行「今は時間が惜しいンだよ」

自分が破壊した扉を一瞥したが、すぐに意識を芳川に向ける。
芳川はちょうどまとめ終わった封筒を、一方通行に差し出す。

芳川「……この封筒に入ってるわ。
よろしくお願いね」

一方通行「あァ……ったくあのクソガキめ。
余計な手間をかけさせやがって」

ブツブツと文句を言いながらも、一方通行は芳川から封筒を受け取る。

芳川「それにしては必死でここに来たわね」

一方通行「あァ？
そンなンで必死になるかよ」

しかめっ面をしながら一方通行は芳川の言葉を否定する。

芳川「じゃあなんの為に？」

一方通行「テメェには関係ねェだろ」

芳川の質問に一方通行は答えることなく立ち去った。
後に残された芳川はふと、実験の説明をしていた時の一方通行のやり取りを思い出した。

一方通行『あァ？　二万通りの戦闘環境で量産能力者を二万回殺害するだとォ？』

天井『そうだ。
樹形図の設計者の算出したプランだ。
これで絶対能力者へとなれるのだよ』

芳川『……そういう訳。
量産能力者はクローン体だから問題ないわよ』

一方通行『馬鹿ですかァ？　そンな実験はお断りだ』

天井『何!?　何故だ、絶対能力者だぞ!?
　誰もたどり着いたことのないレベル６だぞ!?』

一方通行『関係ねェ！
　俺はァこれ以上アイツを泣かせないと誓ったんだ。
　アイツがこの内容を知ったら絶対許すはずがねェ』

芳川『アイツ？』

一方通行『テメェらには関係ねェ。
　それにな、いくらクローン体だからって……
　そいつらだって生きてるンだぞ？』

天井『これはこれは……
　天下の一方通行がそんなヒューマニズムを持っていたとは……』

一方通行『あァ!?
　どうやらミンチになりてェらしいなァ。
　それとも血液逆流でも味わってみますかァ!?』

天井『ヒィ！』

一方通行『とにかく俺は実験の参加は拒否だァ。
　帰るのを邪魔立てするンならテメェら全員素敵なオブジェにしてやンよ』

芳川『……』

芳川「あの時言っていた『アイツ』が関係してるのかなぁ」

優しいあの子なら有り得そうだと、芳川は思った。

一方通行は芳川から受け取った封筒を抱えてセブンスミストまで戻ってきた。

だが、別れた場所に戻ってみても小萌と打ち止めの姿が見当たらない。

一方通行「何処にいったンだァ……ン？」

場所を移動したかと一方通行は考えたが、それなら連絡があって然るべきだと思っていた。

辺りを見回してみると、ふとベンチの下に何かが落ちているのが見える。

近づいて拾ってみると小萌が使っている携帯電話だと分かった。

一方通行（携帯を落として何処かに移動したのかァ？

あァ？　なンだこりゃ）

拾った携帯を操作してみると、会話録音モードになっていた。

すぐに一方通行は理解する。

小萌は自分に何かを残すためにあえて携帯を置いていったのだと。

一方通行（一体何があったンだ、ロリとクソガキに）

携帯を操作し、録音されている内容を聞くため携帯に耳に当てる。

天井『……騒がないで頂こうか』

一方通行「！」

再生してすぐに天井の声が聞こえた。
携帯から聞こえる会話に、一方通行は全神経を集中させる。

天井『下手に騒ぎを起こしたくはない。
大人しく従っていただこう』

小萌『……この子に危害をくわえる気はないんですね』

天井『ああ、私は危害をくわえる気はない。
むしろそのままの状態にしておきたいのだよ』

小萌『貴方は……！』

天井『おっと、騒がないで頂こうか。
うっかりスイッチを入れて君を丸焦げにしたくないのでね』

一方通行「……ッ！」

天井『悪いがその子を車まで運んでくれるかな。
下手な事をすれば……どうなるか分かってるだろう？』

小萌『分かりま……』

携帯から声が聞こえなくなる。天井も小萌の声も聞こえない。
一方通行は会話の内容から、状況を分析する。

天井は自分が芳川と会っている間に、打ち止めを連れ去った。
そして同時に小萌も一緒に連れていった。
そう、一方通行は結論づけた。

一方通行（天井亜雄！！！）

一方通行は自分の心の奥深くから、暗く黒いものが湧き上がってくるのを感じていた。
しかし同時にとある記憶も蘇ってきた。
かつてこの殺意に身を染めて、とある事件を起こしてた時の記憶。
誰彼関係なく人を傷つけ、無差別な敵意をまき散らしていたあの頃を。

一方通行（落ち着くンだ……あの時のロリの顔は二度と見たくねェ！）

無差別に暴れる一方通行を見て、小萌は怒る事も罵声を浴びせる事もしなかった。
悲しみと絶望に顔を歪ませ、涙を流しながら一方通行を見ていた。
その顔を見た一方通行は、今まで経験したことのない胸の痛みに襲われた。
それは自分の心を支配していた殺意を、霧散させるに十分な痛みであった。

一方通行（あの時の繰り返しだけは勘弁だァ……）

目を閉じてあの時の誓いを思い出す。
二度と彼女を悲しませないと……自分の全てをかけて彼女を守ると。
たとえ自分の能力が人を守る事に向いてないとしても……

一方通行（冷静になれ……
　　怒りに身を任せた行動をするンじゃねェ）

自分の中に渦巻いていた殺意を消し去ると、一方通行は天井を探すための行動に移る。
ポケットから自分の携帯を取り出すと、ある人物に連絡を取る。
この街で人一人を探すのはかなり労力がいる。
だが、一方通行には天井を探す手段があった。

土御門「どうかしたかにゃ～。何か用かい？」

一方通行「あァ……ある人間を探して欲しい」

一方通行の想い

天井の捜索を土御門に頼んだ一方通行は、自身も天井の捜索を開始した。
暗部としての情報網を利用するから天井など直ぐに見つかる。
だが、一方通行は小萌の行方が分からない事に不安を募らせていた。
だから自分の足で天井を探すことにした。

幸か不幸か分からないが、何者かが学園都市に侵入したため警戒態勢が上がっていた。
特に夜間での移動には厳しい制限を設けられ、天井は直ぐに行動不能に陥った。

天井「クソっ！　一体どこの誰が学園都市に！」

打ち止めを手元に置いている為、警備員に見つかればただでは済まない。
その事が天井を異常なまでに焦らせていた。

天井「もう少しなんだ……あと少しで」

だが天井の希望はもろくも崩れ去った。
ドンッとまるで高速の物体が地面に激突したかのような音である。
その音に驚きながらも、天井は音がした方を向く。

一方通行「みィィつけたァー」

そこには天井がこれまで見たことないほど、邪悪な笑顔を浮かべている一方通行がいた。

一方通行はニヤァと笑いながら天井の車に近づく。
その姿にパニックを起こした天井は、震えながらも何とかエンジンをかけ走り出した。
走りだした道の真ん中で何もせずポツンと立つ一方通行。
常識なら人間が車に勝てる道理など無い。

一方通行「はァい、悪あがきはここまでェ」

車が一方通行に接触する直前、ドカンっと岩に激突したかに聞こえる音がした。
車の運動ベクトルを操作し、更には衝撃のベクトルも操作して中の人間が傷つかないよう、一方通行はベクトル操作を行って、天井の車を緊急停止させた。
衝突後、一方通行は車のドアを引き千切ると、天井を車から引きずりだした。

天井「ヒィ！　た、助け」

一方通行「アイツは何処にいる！」

打ち止めの姿は確認できたが、小萌の姿が見当たらない事に一方通行はイラだっていた。
一方通行は天井の首を無造作に掴み持ち上げる。

天井「あ、アイツ？」

首をしめられ呼吸困難に陥りながらも、天井は一方通行の言葉に疑問を投げかける。
しかしそれは一方通行を余計イラだたせるだけであった。

一方通行「どうやら今すぐ愉快なオブジェになりてェようだなァ？
痛覚神経を誤認させて激痛感じさせてやろうかァ？
それとも以前言ったように血液を逆流させてやろうかァ？
全身の皮膚を裏返しに貼りつけてやろうかァ？
それが嫌ならさっさとアイツの居場所を教えやがれ！！」

天井「ヒィ！！」

凄まじい殺気を放つ一方通行に、天井は恐怖のあまり錯乱を起こした。
バタバタと手足を振って一方通行から逃れようとする。
しかし一方通行が生体電気を操作すると、天井は糸の切れた人形のように動かなくなった。

一方通行「早く喋った方が身の為だぜェ？
今の俺は何するか分からねェからなァ……
それとも拷問を喰らいたいドMなンですかねェ、天井くンは？」

天井「ア、アイツって誰のことだ！」

口だけは喋れるのか、天井は必死に一方通行からの質問に答えようとする。

一方通行「誰ってテメェがクソガキと一緒に連れていった奴だよ。
俺の大事な……家族なンだよ」

天井「連れてきた彼女ならトランクに入れている。
暴れられても困るから眠ってもらってるが……」

ピクリ、と一方通行が反応する。
天井を引きずったまま、先ほど壊した車のトランクまで歩く。

天井「は、離せ……！」

ズルズルと引きずられている天井が抗議の声を上げるが一方通行は無視した。
トランクリッドを引き千切り、中を確認する。
そこには両手を後ろ手に縛られながらも眠っている小萌の姿があった。
見た感じ怪我などが見当たらない事に、一方通行はホッと胸をなで下ろした。

一方通行「……ちィと聞くがな。
アイツを眠らせる時どうやったンだァ？」

小萌に向けていた視線を天井に向ける一方通行。

天井「どうって……スタンガンを首にあててスイッチを……
がああああああああああああああああ！！！！」

一方通行「あァ……こんな風にですかァ！？」

この男は小萌を傷つけた、その事に激怒した一方通行は天井に向けて能力を使う。
痛覚の電気信号をベクトル操作して激痛が起きたと誤認させる。
常人なら腕が引きちぎれた時に匹敵する痛みである。

天井「や、やめ！　あっぐあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

一方通行「ふざけンじゃねェぞ！
アイツはなァ！　アイツは俺の大事な……
大事な家族なんだよォ！
初めて俺に！　俺にィ！！！」

悶え苦しむ天井。しかし天井の命乞いなど耳に入ってない一方通行は更に激痛を与える。

天井「も、もうやめ……
ぐあああああああああああああああああああ！！！」

一方通行「アイツを傷つける奴はたとえ誰であろうと絶対許さねェ！！！！」

Ｐｒｒｒｒｒｒｒ　Ｐｒｒｒｒｒｒｒ

突如鳴り響く携帯の音に、はっとなる一方通行。
満身創痍の天井をその辺に投げ捨てると、ポケットに入っている携帯を取り出す。

一方通行「……芳川かァ？」

携帯の音で冷静になった一方通行は、今まで酷く恥ずかしい言葉を熱弁してることに気付いた。
その事に僅かに顔を赤くする。

芳川『打ち止めは発見出来た？』

一方通行「あァ……今からそっちに運ぶ。
準備を頼む」

芳川『残念だけど、今からじゃあ間に合わないの。
天井が仕組んだウィルスは後一時間もしないうちに起動するの！
そうなったら全てが終わりよ！』

一方通行「なンだってェ！
それじゃあどうするンですかァ！？」

芳川『方法はただひとつ……ラストオーダーを殺す事よ』

第三の選択肢

一方通行「打ち止めを殺せ……だと？」

芳川『今から学習装置で人格データを上書きするのも間に合わないわ。

もうその選択肢しか残ってないのよ！

ウィルスが起動したら、無関係な人間を大量に巻き添えにするわ！』

チラッと打ち止めを見る。今も尚苦しげな表情を浮かべている打ち止め。

その顔からは大量の汗が流れていた。

一方通行（なンであのクソガキが犠牲になンねェといけねェンだよ！！！）

何ともできない歯がゆさに苛立ち、一方通行の心が失望感に染まりかかった時ある考えが浮かんだ。

一方通行「芳川、方法がもう一つだけある」

それは常識では考えられない方法である。

だが一方通行はソレにかけようと考えた。

芳川『えぇ！？　どんな方法よ』

一方通行「ここにある感染前の人格データ。

そして、今の人格データを比較して相違点がある所を全

て塗り潰す」

芳川『はぁ！？　無理よ！　そんなの出来っこないわ！』

余りにイカれた考えに芳川は声を荒げる。

だが一方通行はニヤリと笑うと、芳川に向かって答える。

一方通行「学園都市第一位の実力を見せてやンよ！
テメェはクソガキを救う準備してこの場所にきな！
場所は携帯から調べやがれ！！」

その言葉と同時に一方通行は持っていた携帯を投げ捨てる。

そして芳川から貰った封筒を破り捨て、中からデータスティックと電子ブックを取り出した。

一呼吸し気持ちを落ちつけると、一方通行はデータスティックを電子ブックに差し込んだ。

電子ブックのディスプレイに流れる感染前の打ち止めの人格データ。

感染前の打ち止めの人格データを読み切るのに……五十二秒。

全てのデータが自分の頭に記憶されたことを確認するのに……三十八秒。

再度画面を見て自分の記憶とデータが一致しているかを確認するのに……四十七秒。

――　準備は整った

持っていた電子ブックをへし折り投げ捨てると、一方通行は打ち止めの額に手を当てる。

一方通行（現在の人格データと、感染前の人格データの相違点をス

キャン開始）

機械のような緻密さとスパコン並の演算能力が必要な為、全ての演算力を打ち止めの為に使う。

一方通行は一瞬だけ迷った。

二つのデータの相違点は直ぐ判明するだろう。

だが、それはウィルスなのか記憶なのかが判断できない。

全てを消してしまうと、昨日からの小萌や一方通行との思い出も消えてしまう。

一方通行（だが迷ってる暇なンてねェ！）

相違点の数は……三十五万七千八十一。

人格データの相違点を全て洗い出し終えた一方通行は次の作業に移る。

一方通行（全ての相違点に命令を送る。

命令文はただ一つ……上書き！）

その言葉通り、一方通行は打ち止めの人格データを塗りつぶしていく。

一方通行（このクソガキが何をしたってンだ！

こンなふざけた事でこのクソガキを殺させねェ！！）

打ち止めを殺させないために次々と相違点を塗りつぶしていく。

しかし残り三万を切ったとき、視界に何かが動いているのが見て取れた。

天井「邪魔を…邪魔を…す、るな」

ズタボロになっていた天井が、いつの間にか復活しこちらに銃を向けていた。
その目は血走っており、既に正常な人間の顔ではない。

一方通行（クソっ！
どうする。
今こっちは機械並の精密さで動いてるンだ。
当然反射なンて切っている）

一瞬だけ手を離して天井を潰そうと考えた。
だが、今手を離してしまえば打ち止めの人格データがどの様な誤作動を起こすか分からない。
最悪打ち止めの頭が破壊されて死んでしまう可能性もある。
それは罪の無い子供を自らの手で殺してしまう事になる。

一方通行「くっ！？」

残りのコードを確認する。残りのコードは一万六千四百九十一。
未だ打ち止めの脳内電気信号を操るために全力を注いでいる状態だ。

天井「邪魔をォ……」

ズルズルと這いずりながら一方通行に照準を合わせる天井。
残りコードは七千四百六十一。
既に天井は一方通行が何をしてるのか、それが何を意味するのか分かっていない。
だが自分が死に物狂いで実行していることを、止められようとしていると本能的に察知した。
故に何としてでも打ち止めから、一方通行を引き離す必要があると

考えていた。

一方通行（クソったれェ！）

残りコードは三千七百六十九。

一方通行（あと少しなンだ。
　それまで銃を撃つんじゃねェ！！）

天井「邪魔を……ごあああああ！！！」

しかしその願いは叶わなかった。
天井は絶叫した後、銃の引き金を引いた。
天井と一方通行の距離は約四メートル。
この距離では天井が目標を外すという希望は……叶わない。

一方通行（まったく……考えが甘すぎンだよ）

スローモーションのように銃弾が自分に向かって飛んで来るのが分かる一方通行。
その心は不思議と穏やかだった。
残りコードは二千四百三十八。銃弾と一方通行の距離は3．４メートル

一方通行（俺が……ロリのように誰かを救えるなンて）

残りコードは八百九十。銃弾と一方通行の距離は2．１メートル

一方通行（思う事自体がおかしな話だったンだよ）

そう思い至ると同時に、天井から放たれた銃弾が、一方通行の眉間を撃ち抜いた。

打ち止め（ラストオーダー）

ドサリっと人が倒れる音がする。
辺りに硝煙の匂いが漂う。
天井が撃った銃弾は、一方通行の眉間を正確に撃ちぬいた。
その事実に、撃った本人である天井は驚きを隠せなかった。

天井「あ、当たった？
　何故……反射されるはずなのに……」

少しの時間、天井は硬直した。だが理解が追いつくとすぐさま打ち止めの方を見る。

天井「そうだ！　もう時間のはず。ウィルスは……」

打ち止めの顔を覗き込んだ天井は、彼女の口から漏れている言葉を聞いて驚愕する。

打ち止め「コード０００００００１からコード０００４８３７２までの不正な処理により
　上位命令文は中断されました。
　送信を中断し、検体番号２００００１号は再覚醒します。
繰り返します」

その言葉を天井は信じられなかった。
何かの間違いだ、そう思い込もうとした。

打ち止め「コード０００００００１からコード０００４８３７２までの不正な処理により……」

だが再度打ち止めの口から発せられた言葉は、先ほどと寸分違わず同じ内容であった。
今起きている事が信じられず、天井は今度こそ錯乱した。

天井（どうしてウィルスが起動しない！
一体何が起きたんだ！！！）

しかし頭のどこかでは理解していた。
自分の全てをかけたウィルスの起動は失敗した……と。

天井「何故だ！　何故ウィルスが起動しない！！」

怒り叫ぶ天井。
自分以外に誰も声を発するものがいないと思った。
だが、その認識は間違いであった。

一方通行「ふざけてンじゃねェぞ」

額から血を流しながらも、一方通行は天井に詰め寄る。
彼は眉間を撃ちぬかれたかに思われたが、ギリギリのところで相違点を塗り潰し終えていた。
そしてすぐさま能力を発動し、銃弾を反射したのである。

天井「あのガキを死なせない為に、全ての命令文を削除したというのか！
そんな事して何になる！　所詮コイツはクローンだぞ！」

一方通行「……分かってンだよ。
こンな人間のクズが、今さら誰かを助けようなンて

思うのは馬鹿馬鹿しいってコトぐらいよォ。
まったく甘すぎだよな、自分でも虫酸が走る。
ああ綺麗事だってのは分かってる。
今さらどの口がそンな事言うンだってのは自分でも分かってる！！！」

天井「貴様が今さらこんなことして何になると言ってるんだ！
人助けをしたところで貴様のようなクズが褒められると思ってるのか！」

血を流しながらも一方通行は少しずつ天井に近づく。

天井「クソッ！」

銃を構え一方通行に向かって銃を放つ。
だが銃弾は一方通行を撃ちぬかず、天井が持っている銃へ跳ね返される。
ボンッと音を立て銃は破壊される。

天井「ぐあっ！！」

破壊されたときの衝撃で天井は手に傷を負ったのか、右手を押さえて悶え苦しむ。
しかし一方通行の歩みが止まらないことに気づくと、手を押さえながらも立ち上がる。

一方通行「あァ……確かに俺はクズだ。
悪党だよ……けどよォ……このクソガキは関係ねェだろ。
たとえ、俺たちがどンなに腐っていてもよォ。
誰かを助けようと言い出す事すら馬鹿馬鹿しく思われる

ほどの、

どうしよォもねェ人間のクズだったとしても！！！

それが理由にはなンねェだろうが！！！」

天井「あ……ああ……」

ポタポタと血を流しながらも、少しずつ天井との距離を詰めていく一方通行の姿に、

言いようのない恐怖を感じた天井は、その場から全く動けなくなった。

一方通行「どンな理由を並べようと！

それでこのクソガキが殺されて良い事になンかならねェだろォが！」

天井「た、助け！！」

一方通行「このガキが抱えてるモンを

踏みにじって良い訳がねェだろうが！！！」

頭を撃ちぬかれ、演算力は格段に落ちてしまった一方通行。

しかし彼は打ち止めを、そして大切な人を守るために死力を尽くし能力を発動させる。

右腕を振り上げると、一方通行は全身の力を込めて天井を殴る。

潰れたヒキガエルのような声を上げた天井は、受身も取れずフェンスに強く叩きつけられる。

そしてフェンスにそって崩れ落ち、地べたに這い蹲るとそのまま意識を手放した。

一方通行（守るって……誓ったンだよ）

天井が気絶すると同時に、一方通行も意識を失った。

一方通行と天井が気絶して少し経った後、破壊された車のトランクルームで何かが動いていた。

小萌「よっと……ふぅ、何とか縄抜けが出来ました」

気絶していたと思われていた小萌である。
焦りのためか一方通行は気付かなかったが、小萌は随分前から意識があったのである。
しかし彼女は自分が動いても事態が改善されないと分かっていたため、あえて気絶したフリをしていた。

小萌「～～～～！！」

ゆえに一方通行が語った本音を全て聞いていたのである。
普段の一方通行なら絶対に言わない本音を聞いた小萌は、まるで熟れたりんごのように真っ赤になっていた。

小萌「い、一方ちゃんがそこまで……どうしましょう。
　若いツバメさんにあそこまで言われるのは正直悪い気がしませんが～～」

頬に手を当ててイヤンイヤンと頭をふる小萌。
しかしすぐにハッとなるとトランクから脱出をする。
車のトランクリッドは既に一方通行が引き剥がしており、縄抜けをし終えた彼女はすぐに車外へと出ることが出来た。

小萌（しかし打ち止めちゃんがクローン体ですか……

なにやら深い事情がありそうですね）

地面に降りた後、小萌は辺りを見渡す。
まるで爆弾でも降ってきたかのようにあちこち破壊されている。
だが不思議と車自体に大きな損傷は無かった。

小萌（今日は一緒に寝てあげて、いい子いい子してあげますね～）

一方通行へのご褒美を考えながらも、小萌には一抹の不安があった。
それは二度の銃声である。
彼の能力を知っていればその心配は杞憂というものだろう。
だがそれでも小萌は、言いようのない不安感に襲われた。
辺りを警戒しつつ小萌は移動する。
フェンスに自分を拐った人間が倒れているのを発見したが、気絶しているのが遠目からも分かった。

小萌「一方ちゃん！」

そしてその近くに一方通行が倒れているのも同時に発見した。
慌てて近寄ると、ピチャと嫌な音が足元から聞こえた。
恐る恐る小萌は自分の足元を見る。そこには……一方通行の血で血溜まりが出来ていた。

小萌「一方ちゃん！　死んじゃダメです！」

服が血で汚れるのも厭わず、小萌は一方通行を抱き起こした。
そこで小萌は更に驚く。彼の額に穴が空いていたのだ。まるで銃弾を打ち込まれたかのような穴が……

小萌（せっかく……せっかく家族って言ってくれたのに……

こんな所で終わりなんて嫌です！）

ぎゅっと一方通行を抱きしめる。
血は既に止まっていたのか、これ以上流れる様子はない。
だがこのまま放置しても事態は好転しない。

小萌「救急車に電話を……
って私携帯をあそこに置いてきちゃったんだ！」

ポケットから携帯を出そうと手を入れたが、そこにあるはずのものが無かった。
小萌は一方通行に自分の異常を伝える為、携帯をセブンスミストにおいてきたのである。
銃声を聞きつけて誰かが通報した、という淡い期待も抱いた。
しかし夜であり、裏路地に近い位置に当たる場所にすぐ警備員がやってくるとは思えない。
八方塞がりの状態に陥った小萌は、ただ焦る一方だった。

芳川「……厄介な状況だわ」

しかしそこに一つの光明が指す。
一方通行から連絡を受けていた芳川が到着したのである。

小萌「い、一方ちゃんがぁ～」

ポロポロと涙を流しながら潤んだ目で小萌は芳川を見る。
芳川はあたり一面を見渡すと、この場で何が起きたかを理解する。

芳川「私は打ち止めを連れてくるから、貴方は一方通行を車に乗せて！」

小萌「グスッ……は、はい！」

涙を袖で乱暴に拭うと、小萌は一方通行を背負い歩き始めた。
背負う、というより引きずるという表現が正しいだろうか。
一方通行と小萌では明らかに身長差がありすぎた。

小萌「くっ……はぁ……一方ちゃん」

ずっしりと小萌の背中に一方通行の重みがのし掛る。
気絶した人間は重い、そう同僚の先生から聞いたことを小萌は思い出した。
そしてどうすればそういう人間を運べるかも……

小萌「必ず……必ず助けますから！」

しかし的確な方法を知ってもなお、小萌は一方通行の運搬に苦労した。
それでも何とか車まで辿り着き後部席に横たえる。

芳川「こっちも終わったわ。っとその前に……」

打ち止めを奇妙な機械がついた調整槽の中に入れると、芳川は車ではなく別方向に歩き出した。
小萌は既に助手席に乗り込んでおり、もう後は車を出発させるだけのはずである。
芳川は一方通行が引き剥がしたであろう車の扉を担ぎ上げると、躊躇なく天井に振り下ろした。

芳川「余計な仕事させるんじゃないわよ！」

ぐぇ！っと悲鳴が聞こえた後、天井はピクピクと痙攣しだした。
しかし数秒後に痙攣も止まり、遂には完全に動かなくなった。

芳川「全く余計な仕事をさせて……私は働きたくないのよ」

小萌は乾いた笑いをする以外無かった。その顔は若干ひきつっているようである。
対して芳川は少しだけスッキリしたのか、その顔は爽やかであった。

芳川「それじゃお姫様とそのナイトを病院まで運びますか」

運転席に乗り込んだ芳川は、直ぐに車を第七学区のとある病院に向けて走らせた。
意外と飛ばしていたのか、車は数十分もかからずに病院に到着した。

救急患者として運ばれていった一方通行が、手術室に入ってはや数時間。
その間小萌は生きた心地がしなかった。
額から血を流していたという事は、脳を損傷している可能性があると小萌は考えていた。
脳が傷つく、それは何かしらの障害を受ける事を意味する。
小萌の頭に最悪の結末がよぎったが、左右に頭を振りその想像を追い出す。

小萌（芳川さんも言っていた。
　今、手術室にいる先生は学園都市の名医と……）

手を組み目を瞑って祈った。一方通行の生還を……
やがて手術室のランプが消え、中から医者が現れた。

小萌ははやる気持ちを抑えながら、医者からの言葉を待った。

冥土帰し「手術は成功したよ」

その言葉にホッと胸をなで下ろす小萌。

しかし次の言葉に再び凍りつく。

冥土帰し「だけどね、前頭葉が傷ついている。
恐らく演算能力と言語能力に多大な影響が出るよ」

『演算能力』。それは超能力を使うのに重要な機能である。

その機能に影響が出る。

それは能力が失われる可能性がある事を意味している。

小萌「そんな……それじゃあ一方ちゃんは……」

その事実に目の前が暗くなる。

冥土帰し「補助機構の案はあるんだけどね。
それでね、確認を取りたいんだよ」

小萌「……確認？」

何の確認だろう、そう小萌は思った。

冥土帰し「正直なところ彼は助けられるべき人間ではないよ。
彼に死んでほしいと願ってる人は大勢いるよ。
そんな彼でも救って欲しいと思っている？」

その質問は小萌を試しているようにも聞こえる。

小萌はじっと冥土帰しを見る。
そして自分の中にある思いを言葉にする。

小萌「一方ちゃんを助けてください。
あの子は私の大事な家族なんです！
お願いします！」

冥土帰しに対して、小萌は深々と頭を下げる。
その姿を見て、冥土帰しは小萌に向かってにこやかに微笑んだ。

冥土帰し「その返事を期待してたよ。
そうそう、もう一人の子はウィルスの影響も残ってない。
体も健康そのものだよ」

小萌「良かったです。あ、あの彼女は……クローン体なのですか？」

少し言いにくい事だが、気になるのか小萌は冥土帰しに尋ねる。

冥土帰し「うん？　クローン体だよ。
まだまだ調整が必要なので時々この病院に来てもらう必要があるけど」

対して冥土帰しは躊躇うことなく、小萌の質問に答える。
その言葉を聞いて、ああやっぱりと小萌は思った。

小萌「そうですか……分かりました。
定期的に来れるように取り計らいます」

冥土帰し「……質問いいかな？
彼女がクローン体という点は気にならないの？」

だけどそれ以上は聞かない小萌が気になったのか、今度は冥土帰しが質問した。

小萌「正直なところ、気にならないと言えば嘘になります。
でも、一方ちゃんは最後までその事を私に伝えなかった。
だから知っちゃうと一方ちゃんが困ると思います。
少しでもあの子の負担を減らしたいから……」

小萌の答えに、冥土帰しは無言であった。
だが小萌は気にせず回答を口にする。

小萌「勿論、全て知って一方ちゃんの負担を支えてあげたい気持ちもあります。
でもあの子がそれを望んでいないなら……
私は何も知らないほうがいいと思いますから」

そう言いながら微笑む小萌。
その顔は、やんちゃな子供を心配する母親の顔であった。

天井の最期

天井「うぅ……くそ……どうして私だけが……」

芳川が一方通行と打ち止め、小萌を連れて病院にいった少し後、天井は意識を取り戻した。

ベクトル操作や車のドアを叩きつけられたが、大きな怪我は負わなかったようである。

天井「はは……」

全て終わった、自分は何もかも失ったと天井は思った。

失望がじわじわと天井を蝕む。

???「なんだこりゃあ？」

壊れた車に寄りかっていると、見知らぬ男性が現れた。

???「おいおい、天井ちゃん。これは一体どういう事ですかぁ？」

男性は大胆に天井に近づくと、襟首を掴み強引に立たせた。

天井はその時初めて男性の顔がはっきりと見えた。

天井「木原……数多か……」

顔の左側に大きな刺青、両手につけているマイクロマニピュレータ。

白衣を着ている姿は研究者を連想する。

木原「おーい、俺の質問に答えろよ。

一体ここで何があったんだよ」

目を細めて天井を睨む木原。
だが、すべてを失った天井には木原の殺気すらどうでもよい事であった。

天井「ふ……ふふ……！
どうせ、どうせ私はもうおしまいだ。
なら、ならいっそ……！　がっ……！」

高笑いしながら叫び続ける天井にイラついたのか、木原の拳が天井の顔に飛んだ。
一度だけではなく二度三度、木原は天井を殴る。

木原「おい、頭をやられるのは勝手だが、俺の質問に応えてから壊れろ。
もう一回言う、一体何をしようとしたんだ？」

天井「げほっげほっ……ウィルスだ」

木原の脅迫が通じたのか、天井はポツリポツリと自分の計画を自白し始める。
部下に目配せをして、木原は天井の言葉を記録しようとする。

木原「うぃるすだぁ？
テメェ……ラストオーダーの管理費を
貰っていながら何やってんだ？」

天井「煩い！　管理費なんてどうだっていい！！
あれではただの飼い殺しじゃないか！」

木原「あぁ？」

天井の激昂に興味はないのか、木原は適当に答える。
しかし直ぐに木原の拳が天井に飛ぶ。

木原「というかよ、余計なお話はどうでもいいんだよ。
天井ちゃんが実行しようとした計画、それだけ喋ればいい。
分かったかい？」

天井「ごふっ……ウィルスをラストオーダーに投入した。
そのウィルスは今晩起動するはずだった。
起動したら上位命令文が妹達に送信される。
その命令文はただ一つ、『手近な人間を殺せ』」

木原（起動するはず『だった』？
誰かがこのアホの企みを止めたって事かぁ？）

天井の言葉に過去形が入っていることに、木原は疑問を持つ。
だがその疑問を調べる権限を自分は与えられていない。
よってその疑問は気にしない事とした。

木原「おーけー。天井ちゃん。
あんたさぁ……そんな事して何になるの？」

天井「私はもう終わりだ！
私の研究所も壊れた！！
だったら学園都市も壊れるべきだ！！
ウィルスさえ起動すれば、あの実験を黙認した理事会も
慌てふためくはずだった！！」

木原（情報ではコイツは借金で首が回らないから
こんな事しでかそうとしたらしいが……
ちっせぇなぁー）

余りに天井の行動が幼稚すぎたため、木原は天井への興味を一切失った。

木原（あ～あ、今日は非番だったのに。
せっかく死ぬほど女を抱こうと思ったのになぁ）

天井「私だけが破滅するなんて許しはしない！！
この学園都市も巻き込んで！　ごはぁ！！」

最後まで喋る前に木原が天井を殴った。
先ほどまでと違い腹を殴る。木原の我慢もそろそろ限界のようである。

木原「天井ちゃん、もういいわ。
あんた完全に壊れてるわ」

天井「がはっ……私が壊れてる……だと！
壊れているのは！　この学園都市！
こんな事なら上位個体をさっさと壊しておくべきだった！！」

ピクリと木原が反応する。初めて天井の言葉に意識を向けた。
木原は顔をしかめながら思った。
この男はラストオーダーの重要性を全く理解してないと。
学園都市も、この男がラストオーダーを作ったから任せていたが……

木原（あー、そういえばコイツの処分は聞いてないな）

上司からの命令は、天井を回収しろ。ただ、それだけである。
再び木原は天井の顔を殴る。否、それだけではない。
殴る、蹴る、ありとあらゆる暴行を加える。

天井「ぎゃ！……げべぇ！！……や、やめ！……ぐほっ！」

やがて木原の気がすんだのか、天井に加えていた暴行を止める。
しかし天井は既に満身創痍であった。
木原は懐から銃を取り出すと、天井につきつける。

木原「そうそう、お前の処分は聞いてないんだよ。
　だから俺の勝手にさせてもらうわ」

天井「た……たすけて……」

その言葉と同時に、あたりに銃声が響く。
少ししてドサリと人が倒れる音がし、硝煙の匂いが漂う。

木原「おいクズども、そこのゴミを回収しろ」

懐に銃をしまいこむと、木原は部下たちに命令する。
馴れた手つきで木原の部下たちは、次々と天井に関するものを回収していく。
天井の死体、そして天井の所持品はひっそりと学園都市の闇へと消えていった。

心理定規

垣根「第一位が入院？」

ビックニュースを手に入れた、という少女に垣根はオウム返しのように尋ねる。

？？？「ええ、そうよ。
第七学区のとある病院に入院しているようよ」

垣根「心理定規、その情報は確かか？」

心理定規、と呼ばれた少女は首を縦に振る。

垣根はソファーにドサリともたれかかると、短く息を吐き出す。

垣根（あの第一位を傷つけるとか……一体何があった）

心理定規「あんまり興味なさそうね、帝督」

想像していたよりも反応の薄い垣根に心理定規は少しだけ不満顔をする。

垣根「あぁ……まぁ今さらアイツと殺り合う気もないしな」

学校では顔を合わせるたびに汚い罵り合いをしている。

しかし垣根は一方通行を殺して、アレイスターのメインプランにのし上がる気はなかった。

心理定規「ふぅん……まぁ帝督がそうならいいけど」

垣根「てーかそれだけの為に家まで呼んだのか？」

そう言って辺りを見回す。垣根がいる場所は心理定規が借りている部屋だ。

学園都市のお偉いさんでも住んでいそうな程に部屋は広い。

明らかに少女のような風貌の心理定規が借りられるとは思えない。

心理定規「帝督がどう動くかなぁ～って思ってね」

垣根「あっそ」

そう言いつつ垣根は心理定規を見る。

いつもは派手なドレスを着ているが、今はプライベートの為か私服姿である。

黒色のドレスワンピース、少しだけ豪華なアクセサリを着けている。

垣根「んー」

心理定規「な、なによ」

垣根はじーっと私服姿の心理定規を見る。

その視線に少しだけ警戒する心理定規は、垣根との距離を取る。

垣根「いやドレス姿以外のお前は珍しくてな。
　暇だしデートでもしないか？」

心理定規「全額帝督持ちならいいわよ」

垣根の誘いに心理定規は軽く受け流す。

しかし垣根はその程度は予想済みだったのか、さらりと爆弾を投下する。

垣根「じゃあ払ってやるからエロイ事しようぜ」

心理定規「なぁっ！？」

派手な装いをしているが中身はウブなのか、垣根の発言に真っ赤になり動揺する心理定規。

対して垣根は残念そうな顔で心理定規を見る。

垣根「え？　ダメなの？」

心理定規「当たり前でしょう！　そ、そういうのはもっと雰囲気が……」

最後の方はしりすぼみしたのか、ゴニョゴニョと口を動かすだけになる心理定規。

しかし垣根は特に気にすることもなく話し続ける。

垣根「まぁ別にいいけどさ。たまには遊ぶのも悪くねぇだろ？
　最近はお前いっつもホテルでオジサマ連中と仕事ばっかりだし」

心理定規「何かその言い方だと体を売ってるビッチに聞こえるからやめて」

垣根「……エロイ事してないの？」

心理定規「してないわよ！

単に話を聞いているだけよ！」

垣根「よくわからん世界だなぁ……」

心理定規のもうひとつの仕事がイマイチ理解出来ない垣根。

垣根「で、どうよ」

心理定規「まぁ……いいわよ。
最近の帝督は見てて面白いしね。
もう少し私を楽しませて」

垣根とのデート自体は悪くない、そう心理定規は考えた。
だがその発言は垣根のプライドを少しだけ傷つけた。

垣根「うるせぇ、お前こそ俺にヨコ乳見せて誘ってるのかよ」

心理定規「誘ってないわよ！
帝督と一方通行の心の距離を……」

垣根「ごめん、やめて！」

心理定規は自分の体を抱きしめながら、垣根との距離を取る。
そして自身の能力を発動させようとする。
しかしそれに気付いた垣根は全力で止めようとする。

心理定規「まったく……」

ブツブツと文句を言いながらも、心理定規は外出するための準備をする。

少しだけ自分の体を見る。決して豊満な体とは言えない。
どちらかというとスレンダー系に入る。

心理定規（はぁ～、以前帝督が連れていた女の人。
　とってもスタイルが良かったなぁ……）

ファミレス「オリャ・ポドリーダ」で休憩していた心理定規は、たまたま優菜を連れていた垣根を見てしまった。
本当は直ぐにでも顔を合わせようと思ったが、何やらそんな雰囲気ではないと思った。

垣根「……あぁ！」

自分の体を見下ろしてため息を吐く心理定規に、疑問を持った垣根だがある結論に達する。
心理定規の肩をポンと叩くと、爽やかイケメン面で心理定規を見る。

心理定規「帝督？」

垣根「安心しろ、心理定規」

余り見せない垣根の真剣な顔に心理定規は少しドキッとする。
心臓がドキドキして止まらない、顔が少しだけ熱くなる。
心理定規の心は、垣根の顔一つで乱され続けていた。

垣根「俺はナイチチでも十分いける。
　むしろそっちは稀少価値がある！！」

心理定規「……」

机においていた本を持ち上げた心理定規は、無言でそれを垣根の顔面に叩きつけた。

重なりあう想い

――　学園都市第一位が傷つき入院した。
この情報は瞬く間に学園都市中を駆け抜けた。

何者も傷つけることが不可能な学園都市第一位。
噂では核兵器ですら傷つけることは叶わないという話もある。

ある者は第一位の負傷を喜んだ。
ある者は今が第一位を潰す機会と意気込んだ。
ある者は自分の名前を売るチャンスと睨んだ。
しかしそんな連中たちの企みは直ぐに潰えることとなる。

もし一方通行が過去のように、今でも他人を遠ざける事をしていたら違った未来となっていただろう。
しかし今の一方通行は違う。彼には『友』と呼べる存在がいる……

土御門「まぁったく、馬鹿が沢山湧いてしんどいにゃ～」

コキコキと肩を鳴らしながら、土御門は背伸びをする。
その近くに人の良さそうな少年と、長い赤毛を後ろに二つに結んだ少女がいる。
特に少女は奇抜な格好をしていた。

上は桃色の布で胸を隠しただけで、その上にブレザーを着ている。
下は冬服のミニスカートに金属製のベルトを付けているだけ。

？？？「はぁ……まったく世話がやけるわね」

？？？「まったくです。
しかし面倒事を潰しておかないと、後が怖いですからね」

土御門「海原、結標、せっかく一方通行に恩を売れる時なんだ。
せっかくだからたっぷり利子をつけて返してもらおうぜ」

だるそうにしている海原と結標に、土御門はニヤリと笑いながら言う。

海原「まぁそうですが、雑魚が湧きすぎて疲れます」

結標「そうねぇ……好みの男の子も出てこないし」

どうやら数が多すぎて、二人はうんざりしていたようだ。
しかしそんな思いを嘲笑うかのように、次の訪問者がやってくる。

土御門「やれやれ、さすがに馬鹿が多すぎて疲れてきたにゃ～」

一方通行が入院している病院の前に、明らかに病院と無関係な人間がゾロゾロと集まる。
数人は手に獲物を持っている為、レベルが低い人間と判断できる。

海原「早く片付けて終にしたいです」

その愚痴に全員が同意しながらも、襲撃者に向かって走りだす。
自分たちの組織である『グループ』に所属する一方通行を守るために。

――　十月二日

小萌「一方ちゃん、りんご剥きますねー」

病室には果物ナイフ片手にりんごを剥く小萌の姿があった。
その近くのベットに一方通行は座っていた。その目は窓の外を見ており小萌を見ていない。

九月二十八日。
あの日打ち止めを救うため天井の凶弾に倒れた一方通行は入院を余儀なくされた。
脳の前頭葉が傷ついている。その怪我が元で彼は首にチョーカーをつけることになった。
そしてそのチョーカーを通して、一方通行は演算能力と言語能力を取り戻した。

一方通行「……」

そっと首のチョーカーを一方通行は撫でる。

小萌「剥けましたよー。今日はなんとウサギさんですー！」

りんごを剥き終えて皿に並べた小萌が、一方通行の前に皿を差し出す。
そこでやっと一方通行は、小萌の方を向いた。

小萌「っ！？」

その顔を見て小萌は驚愕した。
他者を寄せ付けず、全てを遠ざけることで他人を守ろうとした『昔』

の一方通行の顔。
不器用ながらも他人との関係を持とうとした、『今』の一方通行の顔ではなかった。

一方通行「……もう二度と……俺に関わるな」

小萌「……」

初めて出会った日に、彼が自分に向かって放った言葉。
その言葉を再びこの場で、一方通行の口から言われた。
小萌の手から皿が落ちる。ガシャンと音をたてて皿が割れりんごが地面に飛び散る。
しかし一方通行は気にせず言葉を続ける。

一方通行「これで分かっただろう？
俺なンかに関わると危険な目にあう。だから……」

小萌「だから皆を拒絶する……ですか？」

コクリと頷く一方通行。

一方通行（俺なンかの近くにいて、これ以上ロリが傷つくのを見たくない。
コイツには安全な場所にいて欲しい、ロリは俺にとって『希望』だから）

小萌「じゃあ……今から言う言葉も嘘だったのですか」

一方通行の返事を待たず、小萌は深く息を吸い込む。
その行動に一方通行は、訝しげに思いながら小萌を見ていた。

小萌「『ふざけンじゃねェぞ！
　アイツはなァ！　アイツは俺の大事な……
大事な家族なんだよォ！
初めて俺に！　俺にィ！！！』」

一方通行「なっ！？」

その言葉は一方通行が天井に向かって放った言葉だった。

小萌「『アイツを傷つける奴は
　たとえ誰であろうと絶対許さねェ！！！！』」

その言葉を……全て小萌は聞いていたのである。
一方通行は目を丸くして小萌を見ていた。
その顔は少しだけ赤くなっている。

小萌「答えてください。
　この言葉も嘘だったんですか？」

真剣な目を向ける小萌に、一方通行は答えを返す事ができなかった。
小萌の顔は少しだけ泣きそうな、それでいて少しだけ恐怖している顔だった。

一方通行（何やってンだよ、俺は！！
ロリを傷つけたくないとかいいながら、
一番俺が傷つけてンじゃねェか！！！）

シーツをぎゅっと握る。
一方通行は思った、ここで小萌を拒絶すれば楽だろうと。

だが、その答えは本当に正しいのかと。
分からない、何が正しい答えなのだと。
いつしか、一方通行の頭をグルグルと巡る思考は出口の無い迷路のようになっていった。

小萌「一方ちゃん」

そっと一方通行を抱きしめる小萌。
一方通行は抵抗など出来ず、小萌にされるがままであった。
そして優しく一方通行の頭に手を伸ばす。

優しく頭を撫でる小萌の手に、一方通行は自分が作った壁が壊れていくのを感じる。

一方通行「分からねェ……何が正しくて……どうすればいいのか」

小萌「……」

その崩壊は、一方通行の中に眠っていた思いを外に押し出した。

一方通行「俺は……ロリを守るって誓った。
だけど、結果はロリに迷惑をかけてばかりだ。
今回なンて、ロリの心まで傷つけちまった。
どうしたらいいンですかァ？」

小萌「一方ちゃん、
私がいつ一方ちゃんを迷惑だなんて言いました？」

その問いに一方通行は口で答えず、静かに首を横に振るだけだった。
小萌は一方通行の頭を撫でるのをやめると、そっと一方通行の頬を

両手で押さえた。
そして自分の額をコツンと一方通行の頭に擦り付けた。

小萌「家族というのは支えあって生きていくものです。
だから一方ちゃん、一人で抱え込まないでください。
貴方は決して一人じゃないんですから」

眼を閉じて優しく一方通行に語りかける小萌。

一方通行（あったけェ……）

何かに包まれている感覚を一方通行は感じていた。
気付いたら一方通行は、小萌を抱きしめていた。
恐らく無意識だったのだろう。

小萌「一方ちゃん……」

最初はびっくりしながらも、直ぐに微笑んでそっと抱きしめ返す小萌。
ギュッと強く抱きしめてくる、一方通行の腕は力強かった。
まるで離さないと言わんばかりに……
初めて一方通行が、他人への繋がりを求めた時だった。

一方通行「これからもこう云う事があるかもしれねェ」

しばらく抱き合っていたが、やがてポツリポツリと一方通行は語りだした。

小萌「はい……」

一方通行「だがよォ……どンな状況だろうと俺はロリを守る」

小萌を抱きしめる腕に力を入れる。

一方通行（そうだ、この暖かさを離すなンて出来るわけねェ。
たとえ世界中の人間が敵に回ろうとも、
世界が終わりかかっていようとも、俺は最後まで守る）

小萌「……言いたいことがあります」

一方通行は小萌の腕に力が入ったのを感じた。

一方通行「なンだ」

小萌「私の名前は小萌ですよ。
いつまでロリって言うんですか？」

遠まわしに名前で呼べ、そう一方通行に小萌は言ってきた。
一方通行の心拍数が少しだけあがる。一方通行にとって名前で人を呼ぶのは特別な意味がある。
だからこそ他人を苗字や自分がつけたあだ名で呼んでいた。

一方通行（クソッタレ！
お前は学園都市最強だろう！！
こンな事で逃げるンじゃねぇ！）

この場から逃げ出したい心に喝を入れると、一方通行はそっと呟いた。

一方通行「こ、こここここ……っ！　小萌！」

ニワトリのように「こ」を連発していた一方通行だが、一気に息を吸い込むと小萌の名前を叫んだ。
額は汗ビッショリであったが、何かをやり遂げたような顔であった。

小萌「はい、一方ちゃん。
良く出来ました」

そう言って更に強く一方通行を抱きしめる小萌。
それに呼応するかのように、一方通行も小萌を抱きしめる力を強める。

――二人はこの時、本当の意味での家族となった

しかしこの幸せも長くは続かなった。
ドアが急に開いたかと思うと、外から訪問者がやって来たのである。

優菜「失礼します。一方通行さん、容態は……」

中からの返事を待たずに優菜が、一方通行の病室を尋ねてきたのである。
突然のことに小萌と一方通行は動けなかった。

小萌・一方通行「あ」

それは優菜も一緒であった。一方通行と小萌の姿を見て、ドアに手をかけたまま固まってしまった。

優菜「……」

しばらく小萌と一方通行、優菜は視線を彷徨わせ続けた。
三人は動けず固まる。気まずい雰囲気が病室を支配した。
しかしやがて優菜は、何も言わず扉を閉め病室を出て行った。
バタンという音が聞こえてから、一方通行ははっとなった。

一方通行「待て！優菜ァ！
誤解だァァァァァァ！！！！
お願いだから話を聞いてくれェェェェェェェェェェ！
！！」

病室に一方通行の絶叫が響き渡った。

一方通行の変化

一方通行の病室には、微妙な空気が蔓延していた。
ニコニコしている優菜、凄く気まずい顔をした小萌。
そしていたたまれない気持ちを顔に出している一方通行である。

優菜「なるほど……そういう理由でしたか」

誤解を解きたい、そういう一方通行の言葉に優菜は耳を傾けた。

一方通行「そうなンです！
　決してやましい気持ちなンてないンですよォ！？」

先ほど小萌を抱きしめていた理由を、他ならぬ一方通行の口から説明してもらった優菜は、少しだけ思案顔をする。
だが、直ぐに笑顔に変わる。しかしその笑顔は、いたずら心に満ちていた。

優菜「そうですか。
　それにしても一方通行さんは大胆ですね」

一方通行「あン？」

優菜の言いたい事がいまいち分からず、呆けた顔をする一方通行。
対して優菜はニコニコしながら爆弾発言をする。

優菜「どんな状況だろうと小萌先生を守る。
　私にはプロポーズに聞こえましたよ？」

一方通行「プ、ププププププププププロポーズだとォ！？」

小萌「っ！？」

二人にそんな意識はなかったのか、みるみる顔を赤くしていく。

特に小萌は耳まで真っ赤になり、その姿は真っ赤に熟れたりんごのようである。

優菜「違うのですか？

どこをどう読んでも『一生俺がお前を守ってやる』

という風にしか聞こえませんが？」

更に小萌は赤くなり俯いてしまった。

心なしか頭から煙を噴いているようにも見える。

一方通行は一方通行で、視線を彷徨わせ続けて全く落ち着かない。

明らかに動揺しきっている様子である。

優菜（これはこれは……

軽い気持ちで煽ってみたが、予想以上に慌てる二人を見て優菜は驚いていた。

優菜（まさかここまで固い絆だとは思いませんでした）

滅多に見られない一方通行の慌てぶりもそうだが、それ以上に心境の変化に驚かされる。

短い付き合いだが、彼が他人との関係を聞かれたときは大体悪態をついていた。

それが、これほど動揺をするのである。何やら彼の中で変化があったと優菜は思った。

打ち止め「お邪魔しますってミサカはミサカは部屋に侵入してみたり！」

バンっと大きな音を立てて病室の扉が一気に開く。

小萌「う、打ち止めちゃん！？」

打ち止めの突然の来訪に、小萌は驚き裏声が出てしまった。
しかし打ち止めは気にすること無く、腰に手を当てて仁王立ちする。

？？？「おい上位個体よ、いきなり扉をあけるんじゃねぇよってミサカは
　　上位個体を叱りつける」

その後ろから長い茶髪を後ろで纏めたナースが出てくる。
メガネをつけているが、伊達メガネのようである。

優菜「おや美鶴（みつる）さん、どうしました？」

美鶴と呼ばれた女性が、やれやれといった感じで打ち止めを見る。
その顔には打ち止めの行動に呆れているのが、ありありと浮かんでいた。

美鶴「クソ上位個体が廊下を走ってたから、追いかけて注意したってミサカは上位個体にげんこつを落とす」

そう言いつつ、美鶴は打ち止めの頭を殴る。
ぽかっと小気味の良い音をたてた打ち止めは、頭を抱えながら涙目になる。

打ち止め「検体番号００００１０号が厳しいって
　ミサカはミサカは愚痴ってみたり」

美鶴「うるせぇ、病院では少しは静かにしろ。
　他の入院患者の迷惑だってミサカは正論をいって上位個体を叱る」

打ち止め「うわーん、検体番号００００１０号がいじめるよって
　ミサカはミサカは貴方の胸にダイブしてみたり！」

未だに固まっている一方通行に向かって、打ち止めは勢い良く飛びつく。
しかし遠くから跳んだ為、飛距離が足りなかった。

一方通行「ごはっ！？」

小萌「一方ちゃん！？」

そしてちょうど打ち止めの頭が、一方通行のみぞおちに直撃した。
硬直して何も出来なかった一方通行は、まともに打ち止めの頭突きを食らう。

打ち止め「お、おおうってミサカはミサカはゴメンナサイしてみたり」

少しだけ悶絶していたが、徐々に回復したのか一方通行は勢い良く打ち止めの頭をつかむ。

打ち止め「こ、この手はなんなのかな？

そしてどうして左手がスイッチにいってるのかなって
ミサカはミサカは危機感に焦ってみたり！」

一方通行「どうやらクソガキには教育的指導が必要なようですなァ」

しかしスイッチに手が届く前に誰かが一方通行の左手を掴む。

優菜「あらあら、そんなにいじめちゃ駄目ですよ」

一方通行の手を止めたのは優菜である。

打ち止め「優菜お姉ちゃん助けてってミサカはミサカは泣きついてみたり！」

自分の頭を掴んでいる一方通行の手から逃げると、打ち止めは素早く優菜の後ろに逃げる。

優菜はクスクスと笑いながら、一方通行の肩に手を置く。

少しだけ目を瞑ったが、すぐに目を開き一方通行の肩においていた手を離す。

一方通行「ン、相変わらず便利だな。治癒能力ってのは」

腹をさすりながら一方通行は優菜に向かって呟く。

先ほどまで感じていた打ち止めによるダメージは全く消えていた。

？？？「姉御ー、大変だよってミサカは検体番号００００１０号を呼んでみる」

美鶴「ああ？　なんだよ美咲ってミサカは検体番号００００００９号に返事してみる」

美咲と呼ばれた人物が、一方通行の病室に入ってくる。
こちらも長い茶髪を後ろで結っており、ナース服を着ている。
まるで姉妹のように、二人は瓜二つである。
美鶴と違う点は伊達メガネがあるかないかぐらいである。

美咲「シスター服をきた女の子がすごい勢いで病院食を食べてるみたいって
　ミサカは現状報告してみたり」

一方通行・小萌「……まさか」

シスター服、という単語にある人物を連想した二人。
その上、食べ物に関係するとなると一人しか思いつかない。
そう……インデックスのことである。

美咲「凄い勢いで消費していくから手がつけれないって
　ミサカは姉御に丸投げしてみたり」

小萌「大変です！　すぐにいかないとっ！？」

一緒に一方通行の見舞いに来ていたが、退屈だったのかすぐ部屋を出て行ったインデックス。
その後どうしてたか分知らなかったけれど、まさか病院食を食べているとは思わなかった。

美鶴「ああっ！　ったく面倒事が増える一方じゃないかって
　ミサカは愚痴ってみたり！」

小萌は椅子から降りると、すぐさまインデックスの捜索を開始した。

美鶴と美咲もそれに続くように病室を出て行った。

美鶴「ああ、忘れてた。おい、白アスパラってミサカは
そこのベットで寝てる奴を呼ぶ」

しかしすぐに美鶴は一方通行の病室に戻ってきた。

一方通行「白アスパラは余計だ！」

美鶴「うるせぇ白もやし、とりあえず上位個体を押さえておけって
ミサカは白インゲンに上位個体を押し付ける」

そう言うと一方通行の返事を待たずに、美鶴は再度病室から出て行く。

後に残されたのは、状況を理解していない打ち止め、ちょっとだけイラついている一方通行。

そして今の状況すら楽しんでいる優菜であった。

優菜（やはり能力を取り戻したことは悪い事ではありませんでした）

打ち止めが一方通行に戯れているのを見て、優菜はそう強く思う。

病室の窓を開けて、優菜は風と光を肌に感じる。

そしてふと思い出す。

レベル５　第六位としての能力『天上霊薬』を取り戻した日の事を。

九月二十九日

――　九月二十九日

当麻の記憶再生計画後、優菜はずっと入院を余儀なくされていた。
しかし実際は、学園都市による軟禁と表現した方が正しい。
その証拠に、優菜は既に歩けるほど回復しているが病院外への移動を許されていない。

優菜「ふぅ……」

特別病棟の廊下をコツコツと歩く優菜は、ため息を吐いて憂鬱さを紛らわそうとした。
だが気分は紛れることはなく、むしろ余計悪化していった。

優菜「軟禁状態はいつまで続くのでしょうか」

学園都市から追い出すなら早くして欲しい、優菜はそう思っていた。
病室にずっといると気分が滅入る。行動に制限があるので退屈を持て余していた。
唯一、特別病棟の内部のみ自由に歩き回れる。
時々暇を持て余して散歩をしているが、それもそろそろ飽きてきた。

優菜「？」

フラフラと歩いていると、ある場所で違和感を感じる。
そして先日の記憶と照らし合わせると、違和感の正体が判明する。

優菜「誰かが……このフロアに入ってきている。

それも二名も」

特別病棟にはある程度の人間が入っているのは知っている。
だが、優菜がいるフロアは、優菜以外の人間が入っていなかった。
優菜は誰かが入っているであろう病室の前まで歩く。
病室には『入室厳禁』のプレートがかかっていた。
しかしもう片方の病室には、特に何もプレートがかかっていなかった。

優菜「すぅ……はぁ」

一度深呼吸をして気持ちを落ちつける。
このフロアに来るからには、カナリの訳ありな人間であろう。
だが、一度顔を見ておくのも悪くない。優菜はそう判断した。
コンコンっと扉をノックする。

打ち止め「はいはーい、あいてますよーって
ミサカはミサカは来訪者にわくわくしてみたり！」

すぐに病室から声が聞こえた。
声から察するに小さな女の子と優菜は判断した。

優菜「失礼します」

意識してゆっくりと扉をあける。
優菜の予想通り、病室のベットには可愛らしい女の子が腰掛けていた。
退屈していたのか、両足を所在なさ気にプラプラと揺らしている。

打ち止め「お姉ちゃんは誰？ってミサカはミサカは新しい人に

ちょっとだけ期待してみたり！」

優菜「私の名前は上条　優菜。
貴女より少し前から、このフロアに入院しているのよ」

同じフロアにいる、その言葉に打ち止めは目をキラキラとさせる。

打ち止め「優菜お姉ちゃんも入院仲間！ってミサカはミサカは
一緒に遊べる人が出来たことを喜んでみたり」

その場でクルクルと回りそうなぐらい、打ち止めは喜びを体で表している。
そんな天真爛漫な打ち止めを見て、優菜はクスクスと笑う。

優菜（事情は分かりませんが、随分と可愛らしい子ですね）

何処かで見たような顔だな、と一瞬だけ優菜は気になった。
しかし彼女の可愛らしい行動を見て、どうでもいいかと思い至った。
ゴソゴソと打ち止めは何かを探している、
少しして打ち止めは、優菜の前にトランプを持ち出してきた。

打ち止め「これで遊ぼう！ってミサカはミサカは
優菜お姉ちゃんを誘ってみる」

優菜「トランプ……ですか」

打ち止め「うん、ババ抜きやろう！ってミサカはミサカは
トランプをシャッフルしてみたり！」

余程退屈だったのか、優菜の返事を待たずに打ち止めはトランプを

シャッフルする。
ある程度シャッフルすると、優菜と打ち止めの分のカードを配る。

打ち止め「さぁ勝負だ！ってミサカはミサカは
真剣勝負を持ちかけたり！」

優菜「あらあら、後悔しても知りませんよ？」

打ち止め「望むところ！ってミサカはミサカは
意気込んでみたり！」

優菜も退屈から開放されると思ったので、いつもより張り切ってしまう。
カードを手に取ると、重なっているカードを捨てていく。
やがでカードの整理を終えると、一度打ち止めを見る。

優菜「では手加減なしでいきますよ。えーと……」

名前を言おうとして、優菜は打ち止めの名前を聞いていないことに気付く。

打ち止め「打ち止めだよっ！って
ミサカはミサカは遅すぎる自己紹介をしてみたり！」

優菜「では打ち止めさん、勝負っ！」

そして優菜は文字通り手加減なしの真剣勝負を行った。

あれから数時間、色々なカードゲームで優菜と打ち止めは遊んだ。

勿論、全て優菜の圧勝だったのは言うまでもない。

打ち止め「うぅ……完膚無きまでに打ちのめされたよって
　ミサカはミサカは優菜お姉ちゃんの膝に乗ってみたり」

優菜「あらあら」

自分の膝に乗ってくる打ち止めを、優菜は後ろから優しく抱きしめる。
打ち止めは全身を優菜に預けてゆったりとしている。

打ち止め「一方的に負けちゃったけど楽しかったよ！って
　ミサカはミサカは宣言する」

優菜「私も楽しかったですよ。
　今日は私の圧勝でしたが、次は頑張らないと負けちゃいますね」

打ち止め「次は勝つぞー！ってミサカはミサカは
　喝を入れてみたり！」

右腕を上に強く掲げる打ち止め。

？？？「おい上位個体、食事の時間だぞってミサカはノックもせず病室に入る」

打ち止めが腕を掲げると同時に、病室の扉が開いた。
そして外からナースが、食事を片手に入ってくる。

打ち止め「検体番号００００１０号はもう少し礼儀を知るべきだよって

ミサカはミサカは上位個体っぽく言ってみたり！」

？？？「ああ？　余計なお世話だ。って優菜嬢もいたのか、と
ミサカは上位個体を無視して優菜嬢を見る」

優菜「美鶴さん、こんにちは」

打ち止めの口から奇妙な言葉が聞こえたが、
優菜は何か事情があるのだろうと察知し敢えて聞いてないふりをした。

美鶴「さっき優菜嬢の病室に行ったときいなかったから散歩かと思ってたけど……
上位個体のところにいたのねってミサカは上位個体を指さしてみたり」

優菜「先ほどお友達になりました。
さっきまでカードゲームで遊んでいたのですよ」

ポンポンと打ち止めの頭を撫でる優菜。
打ち止めは気持よさそうに頬を緩ませると、されるがまま撫でられ続けた。

美鶴「カードゲームですか。それでミサカネットワークに泣きついてきた
って訳ですね、とミサカは上位個体をじとーと見てみたり」

優菜「ミサカネットワーク？」

美鶴「一種のローカルネットワークですよ。そこで色々な情報を

記録できたりしますってミサカは優菜嬢に説明してみる」

打ち止め「うわぁ！　それは秘密だよっ！って
　ミサカはミサカは検体番号００００１０号を叱ってみたり
！」

優菜「……ほほぉ。つまりインチキをしていたという訳ですね」

打ち止め「インチキって訳じゃ……ここは戦略的撤退！って
　ミサカはミサカは逃げようとしてみたり！」

逃げようとする打ち止めだが、その前に優菜にがっちりと捕まってしまった。
しっかりホールドされているので、もはや逃げることは不可能である。

打ち止め「逃げれない！ってミサカはミサカは焦ってみたり！」

優菜「美鶴さん、打ち止めさんの嫌いな食べ物は何ですか？」

ギクリっとする打ち止め。すぐにアイコンタクトで美鶴にヘルプを求める。

美鶴「あー、確かピーマンが苦手だったなって
　ミサカはニヤニヤしてみたり」

しかし美鶴はそんな打ち止めのアイコンタクトを無視した。
むしろ優菜の味方になる。

打ち止め「裏切り者～～～！！ってミサカはミサカは

検体番号０００１０号を恨みがましい目でみたり！」

美鶴「さぁって上位個体よ、大好きなピーマンの時間だぜぇって
　ミサカはうきうき気分で上位個体にピーマンを突きつけてみたり」

優菜「好き嫌いはよくありませんよ、打ち止めさん」

ジリジリと美鶴は打ち止めに近づいていく。
打ち止めは優菜に背後からがっちり捕まえられているので、逃げることは出来ない。
少しずつ近づいてくるピーマン。

打ち止め「ピーマンはイヤぁ～～～！！って
　ミサカはミサカは叫んでみたり！！」

二人の楽しそうな笑い声、そして打ち止めの絶叫が病室に響き渡った。

隔離されたレベル5

打ち止め「ううう……穢されちゃったよって
　ミサカはミサカは涙を流してみたり」

美鶴「ピーマンごときで喚いてるんじゃねぇって
　ミサカは上位個体に対して冷たく言い放つ」

ベットにぐったりとしている打ち止めに、容赦なく罵声を浴びせる美鶴。
優菜はそんな二人を眺めつつ、ある事を想像していた。
それは確信にも似たような想像。

優菜（二人は余りにも似すぎている）

髪型が違ったり、身長が違ったりしているが顔のパーツがほぼ一致する。
双子、否、一卵性双生児でなければ説明がつかないほどに……

優菜（……いけませんね。
　多分ですが、彼女たちにとっては『踏み込まれたくない』話なのでしょう）

これ以上はいけない、と思い優菜は思考を中断する。
頭を軽く振って今までの考えを追いだす。

優菜「そういえば気になっていましたが……
　もう一つの病室には一体誰が入っているのですか？」

自分の意識を別にそらす意味で、優菜は打ち止めたちに話しかける。
しかしそれは更に大きな地雷であった。

打ち止め「……」

さっきまでのハシャギが嘘のように、打ち止めは急に沈んだ顔になる。
美鶴の方も、苦いものを噛んだような顔をしていた。
瞬間的に優菜はこの疑問を口にしたことを後悔した。
どうやらもうひとつの病室は、彼女たちに何か関係している人がいるようである。

優菜「……」

何か言おうと思ったがうまく言葉が出なかった優菜は、結局黙って下を向くしか出来なかった。

打ち止め「あの人はね、ミサカを守って怪我をしちゃったの、とミサカはミサカは優菜お姉ちゃんに説明する」

しばらく静寂が訪れていたが、ふいに打ち止めがポツリとしゃべり始めた。
打ち止めがこの病室にいる理由、隣にいる人間が一方通行である事。
そして頭を撃たれて、能力に大幅な制限がつけられた事。
打ち止めと美鶴は、知っている全てを優菜に話した。

優菜「そう……ですか」

全てを聞き終えた優菜は言葉を失った。
打ち止めに何と声をかけていいのか分からない。

結局、優菜に出来たことは打ち止めを抱きしめてあげる事だけだった。

少しして優菜は自分の病室に戻った。
打ち止めは最後に「また遊ぼう」と笑顔で見送ってくれた。
明らかに無理をした笑顔で……

優菜「……」

ベットに腰掛けて、優菜はずっと思案する。
自分に何が出来るか？　と。
しかしどれほど考えようと、出来る事は一つもない。
それしか答えは出なかった。

優菜（私は既に無能力者。
　どんな奇跡を起こすことも出来ない）

ポスンっとベットに寝転ぶ。
優菜の心には、一方通行を助けたいという思いと、何も出来ないという考えが渦巻いていた。

消灯時刻を過ぎ、日付が変わっても優菜は眠ることが出来なかった。
昨日までの自分なら、消灯時刻をいくらか過ぎた頃には既に眠りについていた。

勿論、眠れない理由を優菜は理解していた。
昼間に見た打ち止めの沈んだ顔が忘れられない。

優菜「もしも私に能力があるなら……」

ありえもしないｉｆの想像を続ける。
しかしそんな事で現状が変わるわけでもない。

優菜（能力……か。
学園都市に来るまでは忌み嫌い……
そして当麻を救える時だけ喜ぶ。
なんて自分勝手な話）

都合のいい時だけ能力が欲しい、優菜はそんな自分に少し嫌気がさす。
無理矢理眠ろうと眼を閉じる。だが、眼を閉じても瞼の裏に打ち止めの顔が浮かぶ。

優菜「あの子の事情を忘れられれば……一番楽なんでしょうね」

打ち止めの事情を忘れて、何も知らない事にして付き合えばいい。

優菜「でも……」

知ってしまったからには、何もせず過ごすことなんて出来ない。
そう優菜は思っていた。
自身の左手を見る。そこには痛々しい包帯が巻かれているだけだ。
能力が発動して怪我を治すことなんてない。

既に一方通行には、補助機構の装置が取り付けられている。
その為、今さら優菜が力を取り戻してもどうしようもない。
下手をすれば、当麻の治療時の二の舞になる可能性だってある。

優菜「どうして……あの力を欲する自分がいるのでしょう」

力のない、ただの人間としての自分。
学園都市に来るまで、心の底から渇望した自分の姿。
普通に学校に通って……普通に生活をして……
そんな生活を望んでいたはずだ。
そう思っていた優菜だが、今は全く違う思いを抱いていた。

――能力を使って助けられる人に救いの手を差し伸べたい

優菜は左手を掲げると、ぐっと力強く握りしめる。
しかしどれほど強く力を込めようと、能力の発動は一切感じられない。

優菜「皮肉です。
元々こんな風になりたかったのに……
ただの人間になりたかったのに……」

今は能力を使えない事がおかしい、優菜はそう思うようになってしまった。

優菜「力を持つ、という事は
私は何かを成さねばならない。
それを放棄する事は、今の私には出来ない」

手を振り下ろし、再び目を瞑る優菜。
心の中に一本の芯が通った感覚を得る。
気持ちの整理がついたのか、徐々に優菜は眠気に襲われる。

優菜「もう……逃げない」

そう呟くと同時に優菜の意識は深く沈んでいった。

取り戻した力

美鶴「おはよう、優菜嬢ってミサカはノックをせずっ！！！！」

ノックもせず美鶴は、優菜の病室に入っていくる。
しかし優菜を見た瞬間、驚きで目を見開く。

美鶴「は、はは入るって言ってる場合じゃない、と
　ミサカは全速力でボスの元に向かう！！！」

彼女が見た物。
それは血で染まったベットで眠る優菜の姿であった。
血はベットだけではなく、床にまで溢れていた。

僅か数分で冥土帰しを連れてきた美鶴。
床にまで溢れている血を見て、仰天した冥土帰しだが直ぐに優菜の容態を見る。

冥土帰し「……」

美鶴「ど、どどどうなの、とミサカは動揺しまくり」

あまりの出血量に動揺を隠せない美鶴は、無言で優菜の容態を見る冥土帰しに尋ねる。
血はまだ新しいのか、冥土帰しが歩くとピチャピチャと音を立てる。

冥土帰し「う～ん、おかしいね」

やがて優菜の容態を見終えた冥土帰しが首をかしげる。

美鶴「な、ななにがさ、とミサカは未だ動揺から抜けられなかったり」

冥土帰し「これだけの出血量なのに、彼女は普通に生きている」

その言葉に美鶴は目が点になる。

美鶴「は？　生きている？　とミサカは当然の疑問を投げかける」

冥土帰し「呼吸も脈拍も心拍数も正常。
体のどこにも異常はないよ？」

美鶴「でででもその出血量じゃ……」

なおも動揺する美鶴だが、その時優菜がもぞもぞと動き出した。
そして閉じていた目をゆっくりと開く。

優菜「ふあぁ～～」

可愛らしいあくびをして、優菜はゆっくりと起き上がる。
血に染まった病衣を着ていなかったら、目をこしこしこする姿すら可愛らしいと思うであろう。

美鶴「あ、ああ……」

まるで怪我など存在しないかのように、優菜は普通に動く。
さすがの冥土帰しもこれには酷く驚く。

優菜「あれ……？」

ようやく目が醒めたのか、優菜は冥土帰しと美鶴がいる事に気付く。
そして自分の状態も、この時ようやく認識する。

優菜「……美鶴さん、採血の道具でもこぼしたのですか？」

血だらけのベットに、美鶴が何かミスをしたと優菜は思い至った。

美鶴「あたしはそんなドジじゃねぇってミサカは全力否定する！」

さすがにそこまでドジではない、と美鶴は思ったので優菜の疑問に対して即座に否定する。
優菜は首を傾げながらも、ベットの血を触ってみる。
血はまだ乾燥しておらず、優菜の手にべっとりと付く。

冥土帰し「ひとまず血液の確認をしてみよう。
機材の準備をお願いするよ」

美鶴「了解、ボスっとミサカは廊下を駆け出す！」

冥土帰し「廊下は走らないで欲しんだけどね」

全速力で走っていく美鶴に、冥土帰しは小言を言う。
当然ながらその小言は聞き入れられる事はなかった。

優菜「うーん……」

冥土帰し「どうかしたの？」

腕を組んで唸っている優菜に、冥土帰しは質問をする。

優菜「シャワーを浴びたいのですが、この格好で廊下にでるとホラーですよね……」

冥土帰し「……」

優菜の問いに、冥土帰しは答えを返すことが出来なかった。

それから少しして、美鶴は血液の採取機材と新しい病衣を持ってきた。

何度も往復してるため、その額には汗が滲んでいた。

美鶴「優菜嬢、さすがにその格好で歩けないだろう、と
　ミサカは新しい病衣を優菜嬢に渡す」

冥土帰し「僕としてはナース服がいいんだけどね？」

血で汚れていない場所に、病衣を置く美鶴に向かって冥土帰しが希望を述べる。

美鶴「ボス、入院患者がナース服ってどんなギャグですか、と
　ミサカはボスの要望を突っぱねる」

軽い冗談だと思ったのか、美鶴は冥土帰しの要望を無視する。

しかし冥土帰しはしょんぼりとすると、ため息を吐きながら血液を採取する。

落ち込んでいるのがありありと分かる雰囲気であった。

美鶴（え？　本気だったの？とミサカは驚いてみる）

採血が終わると、冥土帰しはそのままトボトボと病室を出て行った。

優菜「とりあえず体を拭きます。
さすがに気持ち悪いです」

そう言うと、優菜は病衣が脱ぎ捨てゴミ箱に入れる。

美鶴「っ！？」

レースカーテンから漏れる陽光を浴びた優菜の姿に美鶴は息を飲む。

美鶴（目の錯覚か？　陽光を浴びた優菜嬢の幻想的な美しさは一体……

とミサカは言葉を失ってみたり）

陽光に浮かび上がる優菜の裸身は、洗練された美しさを醸し出していた。

その姿に圧倒された美鶴は、ただぼーっと優菜を見るしか出来なかった。

優菜（何か変です。
昨日より……そう昨日より体が軽く感じます）

血に染まった包帯を外していく。

そこで優菜は気付く。

優菜（なっ！？）

傷ついていた体が、まるで嘘のように傷ひとつなくなっていた。

全ての包帯を取り外していく。

中には数週間外してはいけない包帯もあったが、優菜は気にすること無く取り外していく。
やがて全ての包帯が取り外されると、優菜は驚愕の事実を知る。

優菜「傷が……全て無くなっている」

美鶴「え……とミサカは更に硬直してみます」

優菜の言葉通り、彼女は大小合わせてカナリの怪我を負っていた。
しかし今の彼女は傷ひとつない健康体であった。

優菜（まさか能力を再び使えるようになった……とか？）

素早く体を拭き、病衣を乱暴に着こむと優菜は美鶴の手を握る。
突然の行為に美鶴は驚くも、すぐに自分の体に異変が起きていることに気付く。

美鶴「あ、あれ？　とミサカは違和感を感じてみたり」

優菜（能力は戻っている……いえ、何か違います。
以前とは決定的に何かが違う……）

以前は怪我を治療するだけであった。
しかし今は違う、美鶴の心体情報が手に取るようにわかる。
心臓の鼓動、血流速度、体のありとあらゆる情報を読み取ることが出来る。
優菜は美鶴の手をそっと離すと、自身の手を見る。

優菜（一つだけハッキリしている事があります）

ぐっと手を握る。そして『ソレ』を感じる。
自身の能力『天上霊薬』が発動している感覚を……

イレギュラー

一方通行「……で、なンでお前らがここにいるンですかァ？」

うんざりした感じで、一方通行は病室にいる面々に問いかける。

土御門「なんだなんだ、この殺風景な病室は。
　メイド服の一着もないのかにゃ～？」

海原「病室にメイド服を置くのは、きっと土御門さんだけだと思いますよ？」

結標「あ、これ美味しいね、貰うわよ？」

しかしそんな一方通行を無視して、土御門たちは好き勝手している。
その自由さにイラついた一方通行は、怒気を込めて土御門たちに言った。

一方通行「……分かった。今直ぐ退室させてやンよ」

チョーカーのスイッチに手を伸ばしながら、一方通行はゆっくりと立ち上がる。
さすがにからかい過ぎたと思ったのか、土御門は慌てながら一方通行を宥めにかかる。

土御門「冗談にゃ～、本気にするなよ？
　まぁ目的は二つほどあるから、心して聞くにゃ～」

一方通行「……言え」

おちゃらけているが、土御門が無駄にここに足をのばすとは思えない。
海原や結標も居る事から、一応真面目な話なのだろうと一方通行は判断した。
チョーカーに伸ばしていた手を引っ込めると、土御門に話すよう促す。

土御門「まず『グループ』だけどな」

一方通行「っ！？」

土御門「安心しろ、お前さんの大事な人らには聞こえないようにしてる。
ちゃんと人払いも済んでるぜ？」

暗部組織の話が出たことで、一方通行は小萌に聞かれないか心配した。
しかしそんな一方通行の心配を予測していたのか、土御門は気楽な声で喋る。

一方通行「俺はクビなンですかねェ」

能力が使えるのはたった三十分。これでは最強から程遠い存在となっている。
学園都市最強の座は降りるしかない、と一方通行は考えていた。

土御門「安心しろ、別にクビではない。
まぁ今まで通り仕事はしてもらうがな」

一方通行「……」

つまり現状どおり、そう土御門は一方通行に言いたいようである。
少しだけホッとしたが、それでも油断は出来ないと一方通行は思っていた。

土御門「そもそもお前さんに手を出したら
俺が優菜ちゃんに撲殺されるにゃ～」

一方通行「なンだと？」

ふいに優菜の名前が出てきた為、一方通行は土御門に疑問をなげる。

土御門「気づいていなかったのか？
まぁネタばらしだけど、お前さんが入院して、
一時期アホどもはこの病院に大集合さ。
大体は俺らが片付けていたんだがな。
だが、さすがに馬鹿の数が多すぎて、
何人かこぼしちまった」

一方通行「……」

土御門「そのこぼれた奴らをぶちのめしてたのが優菜ちゃんだにゃ～。
正直見物だったぞ？　優菜ちゃんの格闘センスは相当高いぜぇ」

海原「戦闘における感覚野、その全てが相当ハイレベルですね」

結標「正直な話、全方位に目があるんじゃないかと疑ったわ。

あの娘は予知能力者か何かなの？」

海原や結標は勿論、土御門すら優菜の格闘センスには脱帽していた。

一方通行「なンで優菜がそンな事してるンだよ……」

土御門「さぁなー。俺たちも分からんぜぇ」

彼女が何故、一方通行を守ろうと考えたかは誰も分からない。

おそらく本人から語られないかぎり……

土御門「そうそう、もう一個話があるにゃ～。
　というかこっちが本題だぜぇ？」

一方通行「……」

急に真面目な顔になり、土御門は一方通行の方を向く。

海原も結標も真剣な顔をして、一方通行を見る。

土御門「俺たちはお前を狙う馬鹿を片付けていた。
　無論これは正式な仕事じゃない」

一方通行「……勿体ぶるな、言いたい事を言え」

土御門は一度海原と結標を見ると、小さく頷きあう。

土御門「よし、ストレートに言おう。
　ずばり！」

何時も以上に真剣な土御門に、少しだけ気構える一方通行。

土御門「お返しがあってもいいんじゃねぇ？　と思うんだがどうだにゃ～。
　あ、俺は最高級の布を使って作ったメイド服がいいにゃ～」
海原「出来れば御坂さんとデートがしたいですね」
結標「十四歳以下の可愛い男の子が五人ぐらい欲しいね」
しかしその気構えは、一瞬で払拭されてしまった。
一方通行は無言で携帯を取り出すと、とある場所に電話を掛ける。
一方通行「もしもし警備員ですかァ？
　今、病室に変質者が三人いるンですよォ。
　さっさと連行してくれませンか？」
迷うことなく警備員に電話をする一方通行。
無論フェイクであるが、土御門たちは本気に取ったようである。
土御門「メイド服を馬鹿にするんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
海原「僕の要望を変質者扱いしないでくださいーーー！」
結標「可愛い男の子を連れてこいーーー！！！」
一方通行「うるせェェェェェェェェ！！！！
　纏めて冥土帰しに頭を見てもらえェェェェェェ！！！！」
あまりの馬鹿さぶりに大声で罵る一方通行。
と、その時バタンっ！と大きな音を立てて、一方通行の病室の扉が

開く。
その音に全員がびっくりして、扉の方に視線を向ける。
美鶴「うるせぇぇぇぇぞごるぁぁぁぁぁぁぁぁ1！！！！
病院では静かにしろやクソもやしぃぃぃぃぃ！！！！
とミサカは白もやしにクリップボードを投げる！」
手に持っていたクリップボードを、美鶴は一方通行目がけて投げる。
一方通行「ぐがっ！」
美鶴の一連の動作に無駄がなかったので、一方通行はクリップボードを避ける事が出来なかった。
ミシリッと音を立てて一方通行の顔にクリップボードが叩きつけられる。
余りに綺麗に決まったため、一方通行はベットに倒れると同時に意識を手放した。
美鶴「そこの三人も病院では静かにしろやぁぁ！！！
とミサカは注意して病室を出て行く！」
入ってきたときと同じ勢いで美鶴は病室の扉をしめる。
嵐のようなナースの乱入に、結標と海原、そして土御門は呆然とするしか出来なかった。
――同時刻、冥土帰し
冥土帰し「ふーむ……」
手に持っている紙を眺めながら、冥土帰しは唸っていた。

彼が持っている紙は、優菜が血を流してベットに横たわっていた時採取した血液の成分解析表だ。

冥土帰し「……こっちの結果と、この時の結果。
微妙に違うんだよね。誤差の範囲……なのかね」

最初に優菜が入院した時に取ったデータ、血を流してベットに横たわっていた時のデータ。
そしてその後健康チェックの為に、取った採血のデータ。
入院時と血を流していた時のデータはほぼ一致している。
大きな変化もなく、誤差の範囲に収まっている。

冥土帰し「しかしその後取ったデータは微妙に違う。
所々の数値が大きく離れている」

再び冥土帰しは唸る。短期間で大きな変化を見せるのは何か問題がある時だ。
しかしどれほど確認しようと、優菜の体に異常は見当たらない。

冥土帰し「これではまるで……いや、医者が言う言葉じゃないね」

ある仮定を思いついたが、余りにバカバカしいのでその考えを追い出す。
データを印刷した紙を纏めると、シュレッダーにかけ処分する。

冥土帰し「まぁ……今は気にする話ではないよね」

――　同時刻、窓のないビル

アレイスターは冥土帰しが採取した血液のデータを眺める。

モニターに次々と映るデータを見て、アレイスターはある結論に達する。

アレイスター「ふむ、羽化は終わったと見るべきであろう。
次のプランを実行するか」

イレギュラー、最初は優菜をそう見ていたアレイスター。
本来のプランにどの様な影響が出るか予測がつかない存在。
しかし、優菜が創りだすイレギュラーを、いつしかアレイスターは楽しむようになった。

アレイスター「それにしても予想よりはるかに成長速度が早い」

プランに従えば、優菜の羽化はまだまだ先の話ではあった。
だが一ヶ月足らずで優菜は、アレイスターのプランを大幅に短縮させた。
予定を大幅に狂わされてしまったが、それすらもアレイスターは楽しんでいる。

アレイスター「本来のプランに縛られた私にとって……
上条優菜が創り上げるイレギュラーはとても楽しいよ」

次々とモニターを表示し、その全てに優菜に関するデータを映し出す。
それを見てアレイスターは楽しそうに言う。

アレイスター「暗部組織に取り込めば、上条優菜は必ず火種となろう。

私のプランを裏切り続ける彼女は、

その時どのような舞台を演出してくれるか」

楽しそうに笑うアレイスターの顔は、これから起こる惨劇を待ち望んでいるかのようであった。

――　とある場所

???「まったく……手続きが多くて困る」

そう言って、手に持っている書類を無造作に机に置く。

バサバサと音を立てて、紙が机の上に散らばる。

だが声の主は気にする様子もない。

???「まぁそれも姉上を思えばの事」

目を閉じ、肩を揉みながら愚痴を零す。

そして、両手を上げて伸びをすると背骨がポキポキとなる。

予想以上に疲れが溜まっていると、声の主は考えた。

閉じていた瞳をゆっくりと開ける

???「妾と姉上が離れ離れになるなどありえぬ。待っておれ……」

深い海の底のような蒼色の瞳には、力強い意思が灯っていた。

【番外】絶対能力進化実験

絶対能力進化実験について原作と違う点を以下に挙げます。

1．実験参加者

【原作】

・実験に参加したのは一方通行。

【この小説】

・一方通行は参加を拒否、実際に実験を行ったのは垣根帝督

2．ミサカクローン

【原作】

・１００３１号まで死亡。１００３２号より生存。生存数は９９６８人。

【この小説】

・００００１号から生存。生産数は１００００人。
但し検体番号００００００号は所在不明。

3．学園都市にいるミサカクローンの人数

【原作】

・１００３２号と数名と思われるが詳細は不明。

【この小説】

・００００１号から００００１２号までが学園都市で調整を受けている。

その他については原作通り、各地で調整を受けている。

4．打ち止め（ラストオーダー）

【原作】

・生産時期は不明。個体番号は２０００１号

【この小説】

・００００１号生産と並行して作成。個体番号は２０００１号。

こんな質問来るかなぁ？と予想してＱＡを以下に挙げます。

Ｑ．絶対能力進化って一方通行だけしか出来ないんじゃないの？

Ａ．一方通行が参加しないので、垣根で再計算してみたところ「とりあえずなんとかなるんじゃね？」という答えだったので天井が強行した。

天井はこれ以上の借金を嫌がり、実験結果を出し研究資金を調達しようと考えた。

Ｑ．絶対能力進化実験を垣根で強行した理由は？

Ａ．完全に天井の都合。量産型能力者計画で作った借金を返済する為には、

どうしても絶対能力進化実験を行う必要があったから。

Ｑ．何で垣根を選んだの？

Ａ．第一位がダメなら第二位だという極シンプルな考え。

Ｑ．垣根は何で了承したの？

A．完全に暇潰し。退屈な毎日に刺激が出来ていいなレベル。
　この実験で絶対能力者になれるとは思っていなかった。
（明らかに簡単すぎるので）
後は、一方通行への対抗心。

Q．妹達や打ち止めの能力強度が高いよね。何で？

A．一方通行ではなく垣根にあわせて再調整したから。
　それに合わせて打ち止めの強さも再調整された。
　その関係で能力の強度が上がった。

Q．打ち止めが２００００１号として、１００００１から２００００号まではどうなったの？

A．生産すらされていない。
　元々の計画では打ち止めは２００００１号だったので
　個体番号が２００００１号になっているだけ。

Q．一方通行が参加してないなら、打ち止めを気に止める必要ないんじゃない？

A．最初はあんまり気にしない。どちらかというと小萌の方が気にする。
　なので打ち止めがセブンスミストで倒れたときも、どちらかというと
「小萌が心配している」が一方通行の大きな行動要因になっている。

Q．打ち止めが一方通行と接触した理由は？

A. ミサカネットワークで知った「一方通行」「未元物質」「上条当麻」「垣根　帝督」
という情報を頼りに、あちこち関係者を探していた。
たまたま一方通行が一番最初に見つかったので、一方通行を頼っただけ。

Q. 一方通行が最後まで打ち止めを殺さなかった理由は？

A. この小説の一方通行が人を殺すときは、『学園都市に害をなす者』だけ。
打ち止めは自らの意思で学園都市に害をなすわけではないので、一方通行は最後まで助けるつもりでいた。

Q. 自分の命より打ち止めを優先した理由は？

A. 打ち止めにしていた処理を止めれば助かったかもしれない。
だが、代わりに打ち止めが死んだ可能性がある。
罪の無い子供を自らの手で殺してしまう。
その事に恐怖した一方通行は、自らを犠牲にすることを選んだ。

Q. 垣根が敗れたからって何で実験が中止になったの？

A. アレイスターは「ミサカクローンを世界中にばらまく」という結果が欲しかった。
なので実験云々は興味ゼロ。未元物質も昇華したので用済みという事で中止にした。

Q. 芳川がダメ人間になった理由は？

A. どんなに研究してもお上の都合で潰されると分かったので働く

のが馬鹿らしくなった。
そのまま黄泉川の家に居座って、現在はダメニートっぷりを発揮。
もはや学園都市最強のニートの名を欲しいままにしている。
お金はそれなりにあったので、一生ニートでも暮らしていける。

Q．この実験で得をした人物は？

A．一番はアレイスター・クロウリー。
次に能力アップをした垣根帝督。

天井は完全なピエロ。

【番外】妹達　その１

この小説に出てくる妹達の紹介を以下に挙げます。

・検体番号００００６号
呼ばれ方：御坂妹（みさかいもうと）、検体番号００００６号
当麻への呼び方：当麻さん
ポジション：ニート
性格：基本的にクールビューティー。
　当麻の前だけ素直なわんこっぽい感じで接する。
　反面、垣根にだけはやたらと毒舌で接する。
　学園都市にいる妹達の中では常識人の部類に入る。
その他：美琴とは恋のライバル宣言をしていたり。
　しかし、案外当麻と出会わない不憫な人。

・検体番号００００９号
呼ばれ方：美咲（みさき）、検体番号００００９号
当麻への呼び方：上条さん
ポジション：冥土帰しの病院でナース勤務
　籍は内科だが、どこにでも出没する万能ナース。
性格：マイペースかつのんびりとしている。
　更に、ぽやぽやした感じを漂わせている。
　誰に対しても優しく接する。
その他：その性格からか、冥土帰しの病院では「癒し系ナースＮｏ．１」に選ばれたとか何とか……

・検体番号００００１０号
呼ばれ方：美鶴（みつる）、姉御、検体番号００００１０号
当麻への呼び方：上条

ポジション：冥土帰しの病院でナース勤務
籍は外科だが、どこにでも出没する万能ナース。
また、病棟管理も出来る。
性格：口は悪いが竹を割ったような性格。
意外と面倒見がよく、世話焼きである。
悪いことをすれば上位個体でも叱る。
クローン体のためか、「生きる」という事を非常に大切に思っている。
その他：世話になっている冥土帰しに恩返しするためにナース勤務をしている。
また、病院勤務で得た資金で、学園都市外にいる妹達に色々と援助をしている。
その為、他の妹達から敬愛の情を込めて「姉御」と呼ばれている。

【番外】第参章を終えて判明した原作と相違点

第参章を終えて判明した原作との相違点。
内容的には第弐章まで挙げた内容にプラスされる事です。

・一方通行
1．小萌と心を通わせる、但し家族的な意味での。
2．脳に損傷を負うが、原作より軽度の為バッテリーの持ちが長い。
3．絶対能力進化試験に参加していないため、超電磁砲のクローン数は１２体だけだと思っていた。
4．ロリコン疑惑が、ロリコン確定に昇格する。
但し面と向かって言える人間は垣根ぐらいなもの。

・月読小萌
1．天井に連れ去られます。
2．ステイルではなく、一方通行にフラグを立てられます。

・御坂美琴
1．絶対能力進化実験で、クローン体は死んでいないので誰も恨まない。
2．何だかんだで当麻に対して素直な面が多い。

・打ち止め
1．原作ほど一方通行に懐かない。
2．一方通行と出会う時期が一ヶ月ほどズレている。

・妹達
1．当麻により００００１号から００００１２号まで名前がつけ

られている。
2．００００９号と００００１０号は冥土帰しの病院でナース勤務してる。

・その他
1．天井は確実に死んでいる。（原作では詳細不明）
2．打ち止めはしばらく天井が管理していた。
3．結標のストライクゾーンは十四歳以下。
4．色々な思惑により、結標とエツァリは既に『グループ』に所属している。

第四章予告

『うむ……さっぱり分からん！』

――――――――――――――――――――幻想殺し　上条当麻

『開き直らないでください』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位

上条優菜

とある理由により当麻に勉強を教える優菜。

だが単に教えるだけで終わるわけはなかった……

『喜べ野郎ども！　残念だったな子猫ちゃん。今回も女の子が転校してきたぞー！』

――――――――――――――――――――学園都市の七不思議　月詠小萌

『どうした？　まさか妾の美しさに見惚れていると申すのか？』

――――――――――――――――――――？？？？？？　？？？？

『小萌先生、自分が小さいからって園児を連れてくるのは犯罪じゃねぇ？』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第二位

垣根帝督

またもや転校生。

しかし小萌クラスにまともな人間が入ってくるなどありえなかった。

『ジャッジメントですの！』

――――――――――――――――――――常盤台中学校　白井黒子

『なンでメルヘンと一緒なンですかねぇ……』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第一位

一方通行

『それはコッチの台詞だ、ロリコンが』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第二位

垣根帝督

『私を巻き添えにしておきながら、よく好き勝手言えますね……』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位

上条優菜

色々な理由により、風紀委員を手伝う事になった第一位と第二位。

何故か巻き添えの第六位。はたして、うまく手伝えるのか!?

『当麻先輩♪　今日は約束の日ですよ?』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第五位

心理掌握

『ちょちょちょっと!?　何でアンタとそいつが一緒にいるのよ!?』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第三位

御坂美琴

心理掌握との約束の日。それはとても大切な意味を……持ってなかったり?

『銃弾など根性でカバーだ!　当麻!』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第七位
削板軍覇

『上条さんは軍覇みたいに頑丈ではないんですよ！？』
――――――――――――――――――――幻想殺し　上条当麻

銀行にお金をおろしにいった当麻。
当然ながら不幸に巻き込まれて……さらに第七位の登場で現場はカオスに。

『お姉さまの能力？』
――――――――――――――――――――柵川中学　佐天涙子

『よくよく考えたらわたくし達、優菜さんの能力を全く知りませんわね』
――――――――――――――――――――常盤台中学校　白井黒子

『優菜さんに関する情報……ＳＳＳ権限でないと見れないんですよ……』
――――――――――――――――――――ゴールキーパー　初春飾利

『このプロテクトの高さは……一体』
――――――――――――――――――――学園都市レベル５第三位
御坂美琴

優菜の能力を気にしだした超電磁砲組。
しかし優菜の情報は、異常なまでのプロテクトで固められていた。

第四章予告（後書き）

第参章　完結です。
次話より第四章に突入。

束の間の休息。
彼らはしばし、平穏な日常を過ごす事になります。

勉強会

「不幸だ……」

ぐでぇと当麻はテーブルに突っ伏す。

何か毎回これを俺はやってないか？　と当麻は思い始めていた。

「そう思うなら、少しは補修を受けないように頑張りなさい」

テーブルに突っ伏している当麻に向かって、優菜は冷たく言い放った。

「休憩はさっきしましたよ？　早くノートを開きなさい」

当麻と優菜は第七学区のとある喫茶店で勉強に励んでいる。

否、勉強中というより、当麻が優菜に教わっているというのが正しい。

実際、優菜の成績は悪いわけではない。

むしろ学園都市の中でも最高位に位置する頭脳だろう。

対して当麻は、学園都市どころか日本のどこにでもいる普通の学生レベルである。

いや……むしろ普通の学生よりちょっと下に位置する。

「うむ……さっぱり分からん！」

優菜が出した参考書をちらりと見たが、すぐに当麻の脳は悲鳴を上げた。

つまり全く分からないという事である。

「開き直らないでください。そもそも、貴方に勉強を教える羽目になったのは誰のせいですか？」

しかしそんな当麻に優菜は何の躊躇いもなく、一切の手加減もなく斬り捨てる。

「ぐっ！？　わ、わたくしめでございます……」

じとーと半眼で見る優菜の視線に、当麻は耐え切れず自白する。

優菜はため息を吐きながらも、当麻にも理解できるレベルで問題の解き方を説明していく。

重要な部分には、マーカーでマークをしていく。

ひと通り説明が終わると、例題を当麻に解かせる。

分からない点が出てくれば、説明をするが決して答えを教えない。

そのような方法で優菜は当麻に勉強を教えていった。

手法がいいのか、はたまた優菜の説明が上手かったのか、次第に当麻も理解できるようになっていった。

少しだけ余裕が出てくる。

が、その余裕が当麻にある事を気付かせた。

（ぶふぉっ！？）

当麻と優菜は対面に座っている。

当然ながら、優菜が当麻に説明をするときは前かがみになってしまう。

つまり胸元が丸見えになる時間が存在するというわけである。

「この問題はまず公式Ａを当てはめます。次に、こちらのページに

ある公式Bを……」

説明に熱が入っているのか、自身の襟元が垂れている事に気づいていない優菜。

（くおぉぉぉ～～～～！！！　上条さんは紳士ですよぉー！！！）

勉強に集中するため隅の方の席に座っている事が幸いした。
また、当麻の後ろに座る席はないので、優菜の服が垂れていることに気付く人間はいない。

（見ちゃ駄目だ。見ちゃ……）

理性を総動員してで当麻は煩悩を抑えこもうとする。しかし彼は健康な男子高校生なのである。
優菜はお嬢様教育を受けたためか、肌を晒さない服を好んで着ている。
だから優菜の胸元など滅多に見ることが出来ない。
そう思った当麻は悪いと思いながらもつい見てしまう。

（すげぇ高そうなブラだなぁ……）

服が垂れているときに見えたが、シックな感じながらも高級感が漂っている。
当麻的に意味があるのかわからないフリルは、かなり細かい刺繍が施されている。

（吹寄並だな、いや吹寄の胸を見た事はないですけどね）

「そして、この式は引っ掛けがあります。一見公式Eを使うように

見えますが……」

今は勉強に集中するべきだという理性と、しっかりと目に焼き付けろという煩悩が、当麻の頭の中でせめぎあう。
そのため、勉強に集中が出来ず、全く頭に入ってこなくなった。

「最後に公式Dを使います。複雑に見える計算式も、このように分解すれば全ては簡単な式で解を得られます。分かりましたか？　当麻……あの当麻？」

理性と煩悩のせめぎ合いの結果、僅かながら煩悩が勝ってしまった当麻。
当然ながら、優菜の胸元が見える間はずっと見ていた。
しかし集中して見ていたため、優菜が声をかけたことに気付かない。
当麻の様子を訝しげに思った優菜は、当麻の視線の先を追った。

「……」

そして優菜は気付く。当麻がずっとどこを見ていたのかを。

「当麻」

とても爽やかな笑顔で当麻に声をかける優菜。
その声にやっと反応した当麻は、呆けた顔で優菜を見る。

その瞬間、優菜の拳が当麻の頭に振り下ろされた。
優菜が振り下ろしたゲンコツを、まともに食らった当麻はその痛みに悶えていた。

「何か言う事は？」

「申し訳ございません……」

当麻は、土下座の勢いで頭を下げながら優菜に謝る。
しかしそんな程度で、優菜の機嫌が治るわけはなかった。

「貴方も『そういう事』に興味を持っていても、不思議ではないのは分かります。ですが、時と場合を考えなさい」

「面目次第も無い……」

さすがに恥ずかしいためか、優菜は顔を少しだけ赤くする。
ため息を吐きながら、参考書や教科書をしまい始める。
この後も勉強をするという雰囲気ではない、と優菜は判断した。

（しかし何か罰を与えたいですね……）

優菜はテーブルを一瞥すると、当麻が携帯をテーブルに置いている事に気付く。
恐らく時計か何かの代わりにしようと思ったのだろう、そう優菜は考えた。

（そうだ……）

爽やかな笑顔で微笑む優菜。しかし、その笑顔はいたずら心に満ち溢れていた。
当麻に気付かれないよう携帯を掠め取ると、素早くいたずらメールを作成する。

（送信……っと）

「当麻、覗き見の件はこれで許してあげます」

送信完了のメッセージを確認した優菜は、先ほど送ったメールを当麻に見せる。

「ん？……ぐほぉ！？」

優菜の声に反応して顔を上げた当麻が、送信されたメールを見て吹き出す。

メールにはこう書かれていた。

Ｔｏ：沈利姉ちゃん
ｓｕｂｊｅｃｔ：ＲＥ：当麻、好きだよっ！
ｂｏｄｙ：
俺もだよ、美琴

ニッコリと微笑んで、優菜は当麻に携帯を返す。

当麻はあまりの恐怖に硬直していたため、優菜から返された携帯を上手く掴めずテーブルに落としてしまった。

優菜は全てをかばんにしまうと、伝票を片手に席を立つ。

「明日……会えるといいですね」

ボソっと不吉な台詞を残して、優菜は喫茶店を去っていった。

恐怖で硬直していた当麻は、ただ呆然と優菜を見送る事しか出来なかった。

一方、沈利はというと、理后やフレンダ、最愛とおまけの浜面を連れてゲーセンに来ていた。

「これをやってみたい訳よ！」

だらだらと見ていたが、やがてフレンダがパンチングマシーンに目をつける。

理后は音がうるさいのが嫌なのか、さっきからしきりに外に出たがっていたが、これも経験と思い沈利は敢えて無視する。

「あたしはＵＦＯキャッチャーで人形でも取るかなぁ……」

何をするか、と考えていると沈利の携帯がチカチカと光りだす。

沈利は携帯を見ると、メールを受信した事が画面に表示されていた。

「お金を入れて……さぁやるってわけよ！」

やる気充分のフレンダが、パンチングマシーンに向かって息巻く。

「ふふん、超つよいパンチを見せてあげます！」

そんなフレンダに対して、強気の発言で迎え打つ最愛である。

「なんだろ……あ〝ぁ！？」

沈利がメールを開くと、その文章に驚愕する。

しかし驚愕はすぐに怒りへと変貌する。

そして沈利の怒りは、周りにいる人間まではっきり分かるほどであった。

理后やフレンダ、最愛は勿論、ゲームに興じていた客まで怯える。

特に周りの客は、お通夜のような重苦しい雰囲気となりレバー操作

の音すら慎ましい。
ギロリっと浜面を睨んだ沈利は、背筋も凍るほどの冷たい声で言った。
「浜面……車用意してこい」
残忍な笑みをその顔に浮かべているわけでもない。
憤怒して鬼の形相をしているわけでもない。
ただ、冷静に普通の顔で沈利は浜面に向かって命令を出した。
「は、はいーーー！！！」
背筋が凍るような恐怖を感じた浜面は、恥も外聞も無く一目散に車へ向かって走りだす。
沈利は無言でパンチングマシーンの前まで移動すると、迷いなくサンドバックに向かって拳を打ち込む。
ドゴンっ！と異常な音を立てて、サンドバックがくの字を描き、そのまま測定マシーンがある壁にまで激突する。
「ちょ、ちょ、ちょ、超計測不可です……」
「な、何か煙を吹いてるって訳よ……」
明らかに対能力者専用に作られたであろうパンチングマシーン。
そのパンチングマシーンには測定不可が表示されていた。
余りの破壊力に恐怖した最愛とフレンダは、ガタガタと震えながら沈利を見ていた。
「帰るぞ」

ブスブスと煙を出しているパンチングマシーンを一瞥すると、沈利は静かにゲーセンを後にする。
恐怖にかられていたフレンダと最愛だが、慌てて沈利の後を追いかける。
理后は浜面が連れていったのか、既にゲーセンにはいなかった。
そして沈利たちが店から出て行った後、残った客は一同に思った。

――もう二度と来ないでくれ、と。

その後、浜面の車を犠牲にして家に到着した沈利たちと、恐怖にかられてながら帰宅した当麻が玄関でばったり出くわすのは当然の結果であった。

姉妹からのオシオキ

「おはようございます」

優菜は教室に入ると、柔らかい声でクラスメイトたちに挨拶をする。

「おはようだにゃ～」

ちょうど近くにいたのか、土御門が優菜に挨拶を返す。
土御門の挨拶をかわきりに、他のクラスメイトたちも優菜に挨拶をする。
優菜はクラスメイトたちに挨拶を返すと、自分の席へと向かう。

「おはよう。優菜」

席に座ると同時に、姫神が優菜に挨拶をする。

「おはようございます、姫神さん」

優菜は姫神に挨拶を返しながら、カバンの中の教科書などを机の中にいれていく。
そしてちらりと当麻の席を見る。

（やっぱりですが、学校に来ていませんね）

当麻の席はいまだ空いている。かばんもない為、まだ登校している様子はない。
もうすぐ本鈴がなる時刻なので、このままだと遅刻扱いとされてしまう。

（ふふふ、ちょ～っと罰が強すぎたかしら？）

「？。優菜。どうしたの？」

当麻の席を見ながらクスクスと笑う優菜に、姫神は首をかしげながら尋ねる。

優菜はとても楽しそうな顔で、姫神の疑問に答えようとしたが――

それはとある声によって遮られてしまった。

「おはようございますー。皆さん席についてくださいー」

小萌は教室の扉を開くと、未だ席に座っていない生徒たちに対して叱りながら教壇に立つ。

姫神は少しだけ気になった顔をしていたが、ホームルームが始まるので自分の席まで戻る。

「上条ちゃん……優菜ちゃんではなく、お馬鹿の上条ちゃんはお休みですかー？」

「小萌先生、カミやんの事ですから不幸に巻き込まれて、遅刻してはるんとちゃいますか？」

小萌の疑問に、青髪ピアスが冗談交じりに答える。しかし、その答えに大半の人間は同意していた。

特に疑問に思わず信じた小萌は、生徒名簿に当麻の遅刻を記入しようとした。

「遅れましたぁ！？」

しかし記入する直前、教室の後ろから当麻が雪崩込むように入ってきた。
全速力疾走したのかゼィゼィと息を荒げ、両膝に手をついて呼吸を整えている。

「上条ちゃん、遅いですよ。遅刻扱いです……か……ら」

遅刻してきた当麻に向かって、ぷくぅと頬を膨らましながら怒る小萌。
しかし、当麻が顔を上げると、その声は徐々に弱まっていった。
目を見開き、ありえないものを見たかのように驚いていた。

「……」

それはクラスメイトたちも同じであった。
目を大きく見開き驚いている者、困惑し体を硬直させている者。
その場にいる人間は、様々な反応を見せたが思っていることは一つであった。

――アレは何だ

当麻は小萌とクラスメイトたちの反応に、訝しげな視線を向けるだけであった。
一体、何に驚いているのか？　と。
やがて理解が追いついた優菜が、かばんから鏡を取り出すと当麻へ歩み寄る。

「当麻、それは一体何ですか……？」

鏡を当麻に向けると、優菜はその場にいる全員が思っている事を当

麻に質問した。

「……な」

鏡に映し出された当麻の顔。そこには。

「なんだこりゃあああああああああああああああ！！！！！」

油性マジックでとある文字が書かれていた。

当麻は優菜から鏡をひったくると、マジマジと自分の顔を見る。

（寝る前にこんな事をされた覚えはないぞっ！？　ということは寝ている間に！？）

これは夢だ、そう思い当麻は右頬をつねる。しかし、単に痛いだけで夢から醒めることはなかった。

当麻の顔に書かれていた文字。それはこう書かれていた。

『当麻お兄ちゃんは最愛の奴隷』

『フレンダとサバ缶と当麻お兄ちゃんは一蓮托生』

『夫、滝壺当麻。妻、滝壺理后』

『僕は沈利お姉ちゃんを一生愛します』

そして極めつけは……

（首にあるキスマークは何ですかあああああああああ！！！！！）

当麻の首から鎖骨あたりにかけて、四つのキスマークがつけられて

いた。

「……うーん」

脳の処理が追いつかなかったのか、小萌はうめき声をあげながら後ろに倒れた。

ゴンっと小気味良い音が教室に響く。

「はっ！？　小萌ェェェェェェェェ！？」

その音でハッとなった一方通行は、倒れた小萌に慌てて近寄る。

目を回している小萌を見て、一方通行は迷わずチョーカーのスイッチを入れる。

「どけェェェェェェェェェ！！！！」

一方通行は小萌を抱き上げる（お姫様抱っこ）と、教室の扉を吹き飛ばして保健室まで走りだす。

「……」

当麻の顔のらくがき、キスマーク、小萌の気絶、一方通行の暴走。

余りの急展開に誰もが声を失う。中には脳がオーバーヒートを起こして、気を失う人間までいた。

当麻は勿論、優菜も垣根も土御門も青髪ピアスも姫神も吹寄も……

ただ呆然とする以外何も出来なかった。

だが少し時間が経過すると、徐々にだがクラスメイトたちの理解が追いついてくる。

そうなると、待っているのは一つだけである。

「つまり……カミやんは昨日……四人の女の子とお楽しみやったってわけやにゃ～？」

土御門の発言後、教室の空気がガラリと変わる。
先程までは困惑という雰囲気が教室を支配していた。
しかし、今は違う。
今教室を支配しているのは……男子生徒たちの嫉妬という名の殺気であった。

「……えっと……」

あまりの迫力にジリジリと気圧された当麻は、少しずつ後ろへと下がっていく。
そんな当麻を見ながら一人、また一人と男子生徒が立ち上がる。
その目は虚ろで、まるで生気が感じられないほどだった。

「カミやん……」

「上条……」

「かみじょぉぉ……」

それは、まるで地獄の底から響くような声。
ジリジリと後退する当麻、ゆっくりだが徐々に当麻を追い詰める男子生徒たち。
やがてトンっと当麻の背中が壁にあたる——その音が合図であった。

「「「「上条（カミやん）、ブチ殺すぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」」」」

男子生徒たちが一斉に襲いかかる。

「不幸だぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

その後、男子生徒たちが満足するまで当麻は殴られ続けた。

だが、当麻の不幸はここで終わらなかった。

保健室まで小萌を運び終えた一方通行が、当麻を見るや否や問答無用で襲いかかる。

あまりの殺気にただ逃げるしか出来なかった当麻。

何とかバッテリーの限界時間まで逃げ切ったが、次に待ち構えていたのは吹寄の頭突きであった。

今回は一回だけではなく、四回も手加減なしで当麻は頭突きを貰った。

肉体的ダメージが限界に達したので、机に突っ伏すと姫神から言葉攻めを食らう。

心をグサグサと抉るように攻め立てる姫神に、当麻は体だけではなく心までボロボロにされていく。

そして、当然ながら最後に待っていたのは小萌の説教と反省のレポートである。

結局その日、当麻が解放されたのは完全下校時刻間際であった。

浜面の受難

完全下校時刻。
その時刻まで後十分程度となった学園都市のとある高校。

校庭からは部活動に勤しむ生徒の姿は見当たらない。
ほぼ全ての生徒たちは、既に帰宅している。
そう、何かしらの事情が無い限りは……

「上条！　頼むから一発殴らせろ！！」

当麻が登校している学校の校門前で、浜面は当麻に向かってあらん限りの憎悪をぶつける。

「ちょっと待て浜面！　何で殴られなきゃーならん！！」

不幸のフルコースを受けてヘロヘロの当麻だったが、いわれの無い要求に当然ながら抗議する。

「うるせぇ！　お前のせいで……お前のせいで俺の愛車である仕上ＵＳ号がスクラップになったんだよぉぉ！！！」

だが当麻の抗議を無視して、浜面は当麻に掴みかかろうとする。
何とか浜面をかわした当麻だが、浜面は尚も当麻に掴みかかろうとする。

「何だそのネーミングセンス最悪な名前の車は……」

アホっぽいネーミングに脱力しながら、当麻は浜面を宥めようとす

る。
明らかに怒りで理性が薄れている浜面に、今は何を言っても無駄だと判断したからだ。
「余計なお世話だ！　とにかく一発殴らせろ！」
だが生半可な事では浜面は怒りを収めようとしなかった。
仕方無しに当麻は、何が浜面をそこまで怒らせているのかを探ろうとする。
「何でだよ。せめて理由を言えよ！」
その作戦が功を奏して、浜面は少しだけ冷静になる。
相変わらず当麻を睨みつけてはいたが。
「……分かった。お前ちょっと前に麦野にメールを送っただろう？」
何度か呼吸を繰り返した浜面は、自身の怒りの原因を当麻に話し始める。
「メールって……まさか昨日のか？」
コクリ、と浜面は頷く。
「俺は麦野らに拉致されてゲーセンに付き合わされたんだよ。そこでお前のメールを受け取った麦野が切れて……」
そこで一旦言葉が止まる。その時の沈利を思い出したのか、浜面は真っ青な顔をしていた。

「あれ？　あの時お前いたの？」

「いたよチクショウ！　そんで麦野らを家まで送ったさ！……だがな」

さらっと当麻が酷い事をいったが、興奮している浜面は余り気しなかった。

「ど、どうした？」

「麦野はさぁ、いつも助手席に座るんだよ。で、家に到着した後あいつはどうやって車から出て行ったと思う？」

その時の光景を思い出したのか、浜面はプルプルと震えていた。
先程と違うのは、真っ青な顔ではなく真っ赤に染まった顔であった。

「普通にドアをあけたんじゃないの？」

何を常識的な事を聞いているんだ？　という顔をしながら当麻は答えた。
だが、浜面は乾いた笑いを浮かべた後、はっきりと言った。

「……原子崩しで『真正面』から出ていったんだよ」

あ然とする当麻。普通に考えれば一笑ものだろう。
だが、自分の姉は学園都市レベル５　第四位である。
しかも壊せないものが存在しない、と言われている。
その事を思い出した当麻は、浜面に対して乾いた笑いをする事以外出来なかった。

「お陰で車の前半部分は消滅さ！　おまけにエンジンまでごっそり消滅していた！　エンジンがない車なんて走るわけがないだろう！？　完全にスクラップになったんだよ！！！」

自分の目の前で愛車を破壊されたことを思い出した浜面は、言いようのない怒りを当麻にぶつけた。
対して当麻は、ただ浜面に申し訳なさそうな顔をする以外出来なかった。

「部品調達して、何とか仕上ＵＳ二号を作り上げたさ！　友人に借金しまくったけどな！」

「えっと……何かごめん」

昨日今日で車を作り上げる浜面に、少しだけ驚きながらも当麻は素直に謝る。
だが、その程度で浜面が納得するわけもなかった。

「謝らなくていいから殴らせろ！」

「そうか……だが断る！」

浜面の怒りの原因が分かり、納得しかけた当麻。
だがやっぱり殴られるのは痛い。そう思った当麻は浜面の要求を突っぱねる。

「て、てめぇ！」

浜面も言ってることが滅茶苦茶なのは理解しているのか、当麻を睨むだけであった。

「それが原因なら沈利姉ちゃんに修理費を請求すればいいじゃん」

「それが出来たら借金なんてしてねぇぇ！　下手に請求したら俺の命が燃え尽きるわぁ！！！」

車を直接破壊したのは沈利、ならばその沈利から修理費を出してもらえばいい。

当麻はそう浜面に提案した。しかし、それは絶対に不可能な提案であった。

沈利は当麻や理后などの家族以外には、滅多に甘い行動をしない。

その上、浜面には沈利が甘い顔を一切しない別の原因があった。

それは浜面と当麻の出会いに原因があった。

とある日に、当麻はスキルアウトに絡まれている常盤台中学の娘を助けようとした。

当麻は自分が囮になるから逃げろといい、何とかその子を逃がす事に成功。

二体一だったため、ギリギリ勝てるだろう。そう当麻は思っていた。

だが、そこへ通りかかった浜面とスキルアウトの仲間たちが、当麻を能力者と勘違いして仲間の助太刀をする。

一気に八対一という状況に追い込まれた。

その後は一方的に当麻が嬲られ続けた。

普段の浜面なら、能力者を追い返しておしまいにしていた。

だが、色々な理由があり鬱憤が溜まっていたスキルアウトたちは、当麻をストレスの解消に利用した。

数分間も殴られ続けた当麻は、いくら頑丈な体をしているとはいえ限界に達していた。

浜面の拳で壁にたたきつけられると、当麻はそのまま壁に沿って崩れ落ちる。

立っているのすら辛い。誰が見ても当麻は満身創痍の状態であった。

しかし浜面は、そんな当麻に容赦なく追い打ちをかけようとする。

振り挙げられる浜面の拳、当麻は覚悟を決め眼を閉じた。

地雷を踏む浜面

当麻は覚悟を決め目を閉じる。
だが一向に浜面の拳が振り下ろされてこない。
訝しげに思った当麻は、状況を確認するためにゆっくりと目を開く。
浜面の拳が振り下ろされなかったのは、簡単な理由だった。
当麻を庇うように、浜面の前に一人の少女が立っていたからである。

「さ、最愛……」

当麻がよく知っているふわふわしたニットのワンピースを着た少女。

「大丈夫ですか？　当麻お兄ちゃん」

最愛は浜面を軽くあしらうと、当麻にそう声をかける。
その顔には余裕の笑みすら浮かべていた。

明らかに年下の、それも小学生にしか見えない少女に、自分の拳を軽々と止められる。
その現実を受け入れられない浜面は、ただ呆然とする以外出来なかった。
大きく見開かれた目は驚愕と焦り、不安の色が見えた。

最愛が浜面を睨みつける。
ギロリと睨みつけるその目は、獰猛な肉食獣を思わせ、浜面の身体をゾクリとさせる。

ここでようやく彼は、目の前の少女を『化物』として認識した。

浜面が恐怖のあまり後ずさった瞬間、自身がさっきまで立っていたところに白く輝く光線が通り過ぎる。
その光線は、全てのモノを紙のように容易く貫き溶解させていった。

「チッ、外したか」

最愛を除く全員が、声のした方を向く。
そこには超軽量耐寒繊維のコートを着た沈利が立っていた。

直感的に浜面は理解する。
彼女は自分など足元にも及ばない程の暴力を行使できると。
これが本物の能力者（化物）なのだという事を。

「沈利……姉ちゃん」

「あたしも居るって訳よ！　当麻お兄ちゃん」

「とうま、大丈夫？」

沈利の背後から、フレンダと理后が顔を出す。

立ち上がる時に少し咳き込んだが、当麻は苦痛に顔を歪めながら沈利の元へ歩き出す。
浜面は、当麻が逃げているのだろうと思った。状況から考えれば当然の行動である。

しかし浜面の考えは見事に裏切られる事となる。

沈利の前までたどり着くと、当麻は彼女を庇うような形で浜面と対峙する。

そして静かに拳を構えた。

見るからに満身創痍の当麻が沈利を庇う。
その行動は、助けに来た沈利たちですら困惑させた。

浜面は当麻の目を見た時、ある事に気付いた。

資質を何一つ持っていなくても、大切な者たちのためにヒーローになれる者の瞳。

たとえレベル０（無能力者）でも、大切な人のために最後まで闘う男の姿。
浜面が昔から憧れていた理想の男性像。

「てめぇらに俺の大事な家族を傷つけられてたまるかよぉ！！！」

しかし限界に達していた当麻は、その言葉と同時に崩れ落ち意識を失う。
崩れ落ちる当麻を、沈利が慌てて抱きかかえる。

「全く……やんちゃな弟を持って大変だよ」

言葉にしなくても分かる。
当麻が沈利たちをどれほど大切に思っているかを。
だからこそ。

「理后、当麻をお願いね。さって……」

当麻と同じ気持ちである沈利たちは、大切な人を傷つけた相手が許せない。

「随分と弟がお世話になったわねぇ～」

沈利はコツコツと足音をわざとらしく鳴らしながら浜面たちに向かっていく。

その音が浜面を、まるで死刑台に上がる囚人のような心持に陥らせる。

やがて、沈利が浜面たちと一定の距離まで近付くと足を止める。

沈利に倣うように、フレンダと最愛も足を止める。

「お礼をた～～～っぷりとしてあげないとねぇ。てめぇら全員……」

笑みを浮かべながら浜面たちを見る沈利。

その笑みはまるで、獲物を前にする獰猛な獣が浮かべる笑みだった。

「「「（超）ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」」」

その言葉と同時に、浜面たちへの死刑が執行された。

その後は凄惨であった。身体能力ですら勝てない浜面たちは、一方的に嬲られるだけであった。

特に浜面が一番酷く、数日間生死の境をさまよった。

その上、沈利たちの暴力がトラウマとなり二週間も悪夢にうなされた。

何とか悪夢から立ち直った浜面。しかし、悪夢はまだ終わってはいなかった。

自分の理想の男性像を見せつけられた。

その事にプライドを傷つけられた浜面は、当麻に復讐をしようと考える。
しかし、その情報を沈利たちにキャッチされ、再び怒りを買うことになる。
浜面は退院後、僅か五分で二度目の長期入院をするハメとなった。

その後、紆余曲折を経て『アイテム』の下っ端となった浜面だが、未だに犬以下の扱いを受けている。
それでも彼はマシと思っている。何故なら、最初の顔合わせの後に三度目の入院をしたから……

当麻自身は浜面とは既に和解しており、今では友好関係を築いている。
それは最愛もフレンダも理后も同様であった。
しかし沈利だけは違った。沈利はとある理由により、当麻が傷つく事を過剰に反応する。
その事が、浜面を完全に許していない原因となった。

「……あー」

その事を知っている当麻は、微妙な顔をしながら浜面に声を掛ける事しか出来なかった。

「大体お前の姉妹はおかしいぞ！　ドコの世界にエンジンを消滅させて車から出て行く奴がいるんだよ！」

愛車を破壊される、その事が浜面に普段思っていたことを外に吐き出させた。

「……あ！」

話を聞いている途中、当麻は視線を浜面から別の所に向けた。
そこには浜面の言葉が『聞かれるとヤバい人物』が立っていた。

「おまけに麦野は足が太いとか下らない事を気にしてストッキングを履いているしさ！」

大声でまくし立てる浜面。その声は、あたり一面に響き渡っている。

「おい、浜面！　もうそのへんで！！」

慌てて止めようとする当麻だが、浜面の耳には届いていなかった。
ちらりと『彼女』たちを見る。顔は笑顔だが明らかに殺気じみた雰囲気を漂わせている。
浜面の声は確実に『彼女』たちに聞こえていた。
その事が分かった当麻は、せめて浜面の中に溜まっている鬱憤を、全部出させてあげようと考えた。

「そりゃあ麦野の足が太いのも当然だろう！！　何せ車のドアを蹴破るんだぞ！！　そんな威力を出せるなら太いに決まっているだろう！！！」

溜まっていたものを外に吐き出していく浜面。

「絹旗は超、超、超って何か馬鹿っぽいしさ！　色気ねぇ上に貧乳の癖して見えそうで見えないように服を着やがって！！　お前のパンツなんて見えても嬉しくねぇわ！！！！」

もし、彼が少しでも当麻の顔に疑問を感じていたのなら、違った未

来になったかもしれない。

「フレンダなんて缶詰が開けれないからって爆破してあけるんだぞ！！　一体どういう教育を受けていたんだよ！！！　あいつは見た目通り馬鹿なのかよ！！　缶切りぐらい使えないのかよ！！！」

だが彼は愚かにも気付かない。
当麻の顔が、真っ青になっており生気を感じさせない事に。
明らかに何かに怯えている様子である事に。

「それにさぁ！！」

もっと言いたい事は沢山ある、そんな浜面だったが次の言葉で強制的に止められた。

「ふ～ん、浜面はそう思っていたんだ～」

「超浜面ですからね」

「結局さ、浜面はそう思っていたって訳よ」

ピタリ、とまるで電池が切れたかのように浜面は止まる。
だらだらとイヤな汗を流しながら「何で？」という顔をする。

当麻はちらりと浜面の後ろを見る。
そこには、笑顔を浮かべる沈利と最愛、フレンダがいた。
だがその目は決して笑ってはいなかった。

「……なぁ、上条」

逃げれない、その事を理解したのか浜面の顔には諦めの色が浮かんでいた。

「……何だ」

「俺の幻聴か？　今、背後からとっても怖い人たちの声が聞こえたんだが……」

今の沈利たちは当麻ですら止めることは不可能である。
無情にも、かけられる言葉はたった一つだけであった。

「現実を直視しろ、浜面」

そうだよなー、と浜面は呟いてから笑った。その笑いの声に力はない。

「……最後に一つだけ……俺は後どのぐらい生きられる？」

「……後十分もないかと……」

「だよねぇ……」

そして浜面は沈利たちの方を向く。
それがまるで合図であるかのように、沈利たちが口を開く。

「……はーまづらぁ……」

「超浜面」

「浜面」

全速力疾走で逃げ出したい。だが、過去の経験からそれは無駄だと分かっている。
それならいっそこの場で終わらせた方がいい、そう浜面は思った。
だがこれから行われる凄惨な現実を、受け入れられるほど浜面は精神的に強くはなかった。

「は、ははは、ははは」

カシャリ、と何かが浜面の手からこぼれ落ちる。
それは車のキーであった。
いつも聞いているキーが鳴らす音。
その音が――――浜面への死刑執行の合図となった。

「「「（超）ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」」」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

夕焼け色に染まった校門前に、浜面の断末魔の叫びが響き渡った。

その後、仕上ＵＳ二号は破壊され、浜面は四度目の入院をする事となった。
勿論、浜面が入院中ずっと悪夢に悩まされ続けたのは言うまでもない。

喧嘩するほど仲が良い

時刻は十二時を少し過ぎた頃。
第七学区のとある喫茶店は、昼食を取る客で混み合っている。
食事を楽しむ人、知り合いとおしゃべりを楽しむ人。
様々な人の声で賑わっている。

だが、一席だけ周りとかけ離れた雰囲気を醸し出していた。
他の客の席には料理などがところ狭しに並んでいる。
しかし、その席に座っている二人の少年の前には、コップが二つ置かれているだけである。

「おい……それを飲んだらさっさと出て行けよ」

ホスト風の少年が、目の前に座っている色白の少年に話しかける。
話しかける、というよりは命令する、そう表現するのが正しいのであろう。
目を細めて色白の少年を睨む。

「あァ？　出て行くのはてめェの方だろ」

しかし色白の少年は、同じように目を細めてホスト風の少年を睨み返すだけであった。

「もやし野郎の面を見ながら飯を食う趣味はねぇ」

「こっちだってめェの辛気臭ェ面を見ながら飯を食う趣味はねぇ」

またもや互いに睨み合う。その様は一触即発の事態と言ってもいい。

幸いなことに、周りの客やウェイトレスは二人の様子を気にする素振りはない。
たまたま視線を向けた人たちも、単なる少年同士のじゃれ合いだろうと判断していた。

もしも、少年たちの立場を知っていれば違った反応を示すだろう。
そう……

ただの喫茶店で向かい合っている少年たちが、学園都市レベル５の第一位と第二位という事を知っていれば……

一方通行は久々に喫茶店に来ていた。
いつもは小萌やインデックス、打ち止めと一緒に昼食をとっていた。
だが、何の因果か小萌は当麻の補習で学校、インデックスはステイルからの呼び出し、打ち止めは調整のために病院。
と、見事に一方通行以外は予定で埋まっていた。

対して垣根も、心理定規と食事と思っていたが心理定規は仕事中。
当麻も補習だったので、暇を持て余してブラブラとしていた。

そして喫茶店に入ると同時に、二人は出会ったのである。
相席以外に、座る席がないという状態で。

「チッ、さっさと食って帰りますかねェ」

水を飲みながら、一方通行は垣根に聞こえるように言う。
明らかに不機嫌そうな声で。

「それはコッチの台詞だ」

対して垣根も不機嫌そうな声で、一方通行に噛み付く。
凄まじく不機嫌な表情をしている二人だが、睨み合うだけで喧嘩にまで発展はしなかった。
もし喧嘩をすれば喫茶店は勿論、半径五百メートルは悲惨な状態になってしまうだろう。
さすがに他人を巻き込んでまで喧嘩をする気はない、二人はそう考えていた。

やがて睨み合いをしても意味がないと思ったのか、二人は互いにメニューを見始める。
少しして注文が決まったのか、二人はウェイトレスを呼んだ。
見事なまでに声をハモらせて。

「ご注文をお伺いしますー」

注文表を片手に、人懐っこい笑顔を浮かべてウェイトレスは垣根と一方通行を見る。
垣根と一方通行は、互いを指さし合いながら注文を伝える。

「「このメルヘン（ロリコン）が選ぶメニューと違うもン（の）なら何でもいい」」

まるで神が示し合わしたかのように、見事なまでに二人の声は重なる。
ギギギギギっと音を立てるかのように、首だけ動かして垣根と一方通行は互いに睨み合いをする。

「垣根くゥゥゥゥゥゥン、なァァァに人の真似をしているンです

かァァァ！！」

「一方ちゃぁぁぁぁぁぁん！！　俺の真似をするんじゃねぇぇぇぇぇ！！」

数秒後、示し合わせたかのようにお互いに罵り合う。
ウェイトレスは、二人の雰囲気についていけず、その場でオロオロするしか出来なかった。

「お、お客様！　周りのお客様のご迷惑になりますので……」

何とか二人を宥めようと、ウェイトレスは頑張る。
それが功を奏したのか、悪態をつきながら二人は矛を収めた。

「チッ、てめェのせいで可愛いウェイトレスが怯えているじゃねぇか」

メニューを開きながら、垣根は一方通行に向かって嫌味を言う。
当然ながら一方通行は全く聞こえないふりをして無視した。

「とりあえずステーキ定食だァ」

「ダブルハンバーグ定食、ライスは大盛りだ」

今度はきちんとメニューを伝える二人。ウェイトレスは少しだけ驚いていたがすぐに笑顔に変わる。

「ご注文を承りました。ステーキ定食にダブルハンバーグ定食。ダブルハンバーグ定食のお客様はライス大盛りでよろしいですね」

喧嘩にならなかった事にホッと胸をなでおろすと、ウェイトレスは垣根と一方通行の注文を承る。

「ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

コクリと頷く二人。

互いに気づいていないが、二人の動作はまるで鏡に映し出されているかのようにぴったりと噛み合っている。

（罵り合ったりしているけど、とっても仲の良い二人なんだろうなぁ～）

そんな風に見えている事に、二人は気付かず呑気に水を飲んでいた。

少しして互いの食事がテーブルに並べられる。

普通ならここで談笑しながら食事を取るであろう。

だが、二人は無言で食事を取るだけで談笑の雰囲気は微塵も感じられない。

「……」

食事が終わった後も、二人は互いに睨み合うだけであった。

「おい、ロリコン」

少しして、その静寂を打ち破ったのは垣根であった。

「なンだ、メルヘン」

「……いや、何でもねぇ」

垣根はそう言うと、ふっと息を吐きながら椅子の背にもたれかかる。
一方通行も、悪態をつくだけでそれ以上は何も言わなかった。

（ロリコンと呑気に飯を食うなんてな。過去の俺がこの場にいたら間違い無く驚くだろうな）

垣根は目を閉じ、過去の自分を思い出す。
クソッたれで……とてもゲスな過去の自分。
上条と出会わなければ、その辺の裏路地で野垂れ死にしてもおかしく無い。
そんな過去の自分を垣根は思い出していた。

（そう考えると上条には感謝しきれねぇなぁ……勿論、ロリコンと仲良くするなんて真っ平御免だが）

ゆったりと椅子の背にもたれかかりながら、垣根はリラックスしていた。
あれほど憎んでいた一方通行の前で。

（メルヘンとメシを食うなンてなァ。しかもそれを悪くねェと思っている）

垣根と同様に、椅子の背にもたれかかる一方通行。
天上を見ながら、一方通行は過去の自分を思い出す。
誰も寄せ付けず他者を拒絶し続けた過去の自分。
小萌と出会わなければ、今でもたった独りでどこかを歩いていたであろう。

そんな過去の自分を一方通行は思い出していた。

（そう考えると小萌には感謝しきれねェ。勿論、メルヘンと仲良しごっこなンて真っ平御免だがなァ）

ゆったりと椅子の背にもたれかかりながら、一方通行はリラックスしていた。

あれほど嫌っていた垣根の前で。

静かに過ぎていく時間。

相変わらず周りは昼の客で賑わっていた。

だが、垣根と一方通行が座っている席だけは違った。

今の二人の関係を表しているかのような雰囲気。

付かず離れず、近づきすぎず。

そうかといって離れもしないで、一定の距離を保つ関係を思わせる雰囲気。

二人はそんな空間にゆったりと身をゆだねる。

声に出して言わなかったが、二人が思っていることは同じだった。

――こんな日々も悪くねェな、と。

その後、悪態をつきながら別れた二人だが、本屋でばったり再会するのはお約束であった。

またもや転校生

まだ日が登るか登らないかの早朝。
静けさが漂う学園都市のとある道に、一人の少女が佇んでいた。

「ふむ……妾とした事が、道に迷うとは」

手に持っている地図を睨みながら、その少女は歯ぎしりをして悔しがる。
必死に自分がいる場所を調べようとする。
しかし、それは徒労に終わった。何故なら、ここは彼女が知っている場所ではない。
何も知らない未知の場所なのである。

「ええい、悩んでも仕方がない。ここは一つ、タクシーというものを利用しよう」

道が分からないなら、道が分かる人間に案内を頼めばいい。
下手に自分で解決しようとすれば、泥沼にはまり余計迷う事となる。
そう少女は結論づけた。

「だが……」

地図をかばんにしまうと、少女はキョロキョロと視線を道路のあちこちに向ける。

「如何にしてタクシーを呼ぶのだ……？」

道に迷わない、という問題に対して浮かんだ解決策は、新たな問題

を生むだけだった。

「よう、カミやん。今日も辛気臭い顔してるにゃ～」

教室に入ってきた当麻に、土御門は冗談交じりな挨拶を混ぜて話しかける。

「辛気臭いは余計だ！　今日はちょっとなぁ……」

「また女性にフラグでも立てたのか？　はっはっは、カミやんその秘訣を教えてくれにゃ～」

朝からため息を吐く当麻だが、土御門は気にせず話しかける。
しかし当麻からの反応は薄い。
さすがに土御門も心配になり、当麻が悩んでいる原因を尋ねる。

「どうしたかにゃ～？　珍しく悩んでいるんだにゃ～。よかったら土御門さんに話すがいいぜぇ」

「ん～、土御門も舞夏がいるし……ダメもとで聞いてみるか」

しばらく悩んでいたが、やがて当麻は大きく頷くと土御門の方を向く。

「人の妹を呼び捨てにするとはいい度胸だにゃ～、カミやん。とりあえず何に悩んでるんだにゃ～？」

「実は最愛の授業参観日が……」

当麻が悩んでいることを土御門に言おうとしたが――本鈴のチャイムが鳴り小萌が入ってきたため中断させられた。

「はいはーい、ホームルームを始めますよー」

小萌は教壇にたつと、生徒名簿をペシペシと叩きながら生徒たちに注意を促す。

土御門と当麻は、小萌の言葉に従って自分の席に着く。

「本日は優菜ちゃんと一方ちゃんが実験でお休みですー。ついでに上条ちゃんは馬鹿なので補習ですー」

「不幸だ……」

小萌による放課後の拘束を約束された当麻は悲しみに項垂れる。

その後も小萌による連絡事項は滞りなく進み、何も問題ないかのように見えた。

最後の爆弾発言までは。

「最後にですがこのクラスに新たな転校生がやって来ましたー」

ピクリ、と男子生徒たちが反応する。

滅多に起きない転校生イベント。

そのイベントが自分たちのクラスで短期間に二回も起きる。

優菜の件もあり、次に来るのも美少女なのだろう。

そう男子生徒たちは予想した。

「喜べ野郎ども！　残念だったな子猫ちゃん。今回も女の子が転校してきたぞー！」

「うおおおおおおおお！！」

その予想は見事にあたり、男子生徒たちは勝利の雄叫びを上げた。
相も変わらぬ反応に、女子生徒たちは生暖かい目で男子生徒たちを見る。

「（何か情報が回ってこない転校生が多いにゃ～）優菜ちゃんの件もあるし、これは期待できるにゃ～」

自身の情報網に引っかからない転校生を訝しげに思う土御門であったが、あまり気にすることもないかと考える事にした。
未だに騒ぐ男子生徒たちに、小萌はオロオロとし始める。じわり、とその目尻に涙が浮かんでるのが見えた。

その瞬間、男子生徒たちは嘘のように静かになった。

きちんと言わなくても分かってくれた、その事が小萌には嬉しかったのかすぐに笑顔になる。
しかし男子生徒たちの考えは違った。
下手に小萌を困らせようなら、最凶の白い悪魔によるオシオキが待っているからである。

「コホン、それじゃ入ってきてくださいー」

一つ咳払いをすると、小萌は教室のドアに向かって声をかける。
カラカラと静かに扉が開けられ、転校生が教室の中に入ってくる。

「……」

男子生徒たちはおろか女子生徒たちまで驚きに声を失う。
転校生は教壇に立つ小萌の隣にまで移動すると、生徒たちを見渡す。
長い金髪を左右に結ったツインテール、気の強そうな深い蒼い瞳。
少しだけ偉そうな雰囲気が感じられるが、それが少しも嫌味に思えない。

「本日よりこの学校に参った」

鈴を転がすようなテノール声。
少しだけクセのある喋り方だが、間違いなく美少女の部類に入るであろう。
しかし、その少女には一つだけ違和感を与えるものがあった。

「我が名はアリシア・フォン・コルネリウス。皆の者、よろしく頼むぞ」

その少女は、小萌より更に一回り小さかった。

クラスメイトたちは呆然とする。
奇異の視線を受けながらも、平然と腕を組んで教室を見渡している、どう見ても赤いランドセルが似合う少女。

「どうした？　まさか妾の美しさに見惚れていると申すのか？」

沈黙する生徒たちを、自身の美しさに声を失っていると勘違いしたアリシア。
その事に気を良くしたアリシアは、髪を後ろへと靡かせる。

その仕草には気品があり、彼女の育ちの良さが垣間見える。

「冗談だ、いくら妾でもいきなり他人を魅了する事は不可能だ」

偉そうな喋り方するアリシアだが、他人に嫌味を感じさせないのは彼女の雰囲気のお陰なのだろうか。

ひとまず現状をスルーする方がよい、その場にいた小萌を除く生徒全員がそう判断した。

そのまま転校生イベントは終了するかに見えた。

「小萌先生、自分が小さいからって園児を連れてくるのは犯罪じゃねぇ？」

だが、その雰囲気をぶち壊す人間がいた。垣根である。

垣根はマジマジとアリシアを見ると、自分が思ったことを素直に口にした。

「汝、名前を何と言う？」

いきなり失礼な事をいう垣根に、アリシアは眉をひそめながらも名前を尋ねる。

「垣根帝督、学園都市レベル５　第二位だ」

アリシアの問いに、垣根は素直に答えた。

「我が名はアリシア・フォン・コルネリウス」

垣根はアリシアと視線をぶつけ合う。

しかしすぐに視線をそらすと、垣根は面倒くさそうな顔をする。

「まぁ小萌先生の例もあるし、気にするレベルでもないかぁ」

「うつけが、妾とて齢と身長に問題がある事は理解しておる」

自身の身長の低さは、アリシア自身も認めているのかそれほど気にする様子はなかった。

「小萌先生、毎度ながらの質問タイムいいですかにゃ～？」

話が終わったと思った土御門は、小萌に質問タイムの時間を要求する。

普段の彼なら、目立つような行動は余りしない。

無論、青髪ピアスや当麻と馬鹿騒ぎをするが、こう云う場面では大人しい方である。

（まさか……な）

土御門が質問タイムを要求した理由は、声に出して言えないが一つの疑問があった。

「そうですねー。アリシアちゃんもいいですかー？」

「構わぬ、答えられる範囲でよいなら答えよう」

腕を組んだままアリシアは頷くと、土御門の方を向く。

「汝、名前を何と言う？」

先程の垣根と同じ台詞をアリシアは口にする。

「土御門元春だにゃ～。よろしくだぜぇ、アリシアちゃん」

「土御門元春……か、良き名だ。我が名はアリシア・フォン・コルネリウス」

勝気な笑顔を浮かべると、アリシアは自身の名前を名乗る。

「ちょいと聞きたいことがあるぜぇ。これはドコかの本か何かで知ったことなんだが……コルネリウスってドイツの貴族だったかにゃ～？」

「ほぅ、よく知っているな。いかにも、妾の実家はドイツにある。最も、妾は殆ど帰っておらぬがな」

金髪碧眼の理由を尋ねているのであろう、そのように土御門は周りから見られていた。

だが、土御門は全く別の事を考えていた。

（……嫌な予感ほど当たるもんだぜぇ……）

悪い予感が当たったことに、土御門は頭を痛める。

しかし自分一人ではどうしようもない事と思い、頭をかきながら下を向く。

その瞬間、ゾクリと背中に悪寒が走った。

誰かの強い視線を感じた――誰かに見つめられているような気がした。

慌てて土御門は顔を上げる。だが、誰も土御門を見ていない。

「？　どうしたんだ？　土御門」

近くの席に座っている当麻が、土御門の行動を訝しがる。
軽く頭を振ると、土御門は当麻に笑いかけた。
「何でもないにゃ～。昨日ちょっと夜更かししたかもにゃ～」
そう言って笑う土御門だが、額には嫌な汗が浮いていた。

アリシア

「所で小萌殿よ、妾の姉上は何処に？」

色々あったが無事に終わりそうに見えたアリシアの転校イベント。

「お姉さんですかー？」

しかしそれはアリシアの一言で、再び混乱が投下された。

「うむ、妾の姉上だ。この学校に転校したと聞いたのでな。ドコに居るのだ？」

キョロキョロと辺りを見渡すアリシア。先程から周りを気にしていたのはその為だったようである。

小萌はうーんと唸っていたが、やがて誰かを思いついたのかぽんっと手を合わせた。

「転校……もしかして優菜ちゃんですかー？」

「！　姉上は！　姉上は何処にいるんだ！！！」

アリシアは小萌の肩を掴むと、ガクガクと揺らし始めた。

ものすごい勢いで小萌が前後に揺さぶられる。

「おおおおちちついて下さい～～～～」

何とかアリシアを宥めようとする小萌だが、熱が入ったアリシアには声が届かなかった。

「姉上はーーー！！！　姉上は何処だぁぁぁ！！！！」

「あわわわわわわーーーー」

なおも揺さぶれる小萌。この場に一方通行がいない事が彼女の不幸だった。

生徒たちも数名ほど興味なさそうに見ていたが、大半はアリシアの行為に呆然とする以外何も出来なかった。

「小萌先生、とりあえず優菜に連絡を取ったらいいんじゃないですか？」

そして不幸を被る人は必ず決まっていた。

「……」

ピタっとアリシアは動きを止めると、小萌の肩から手を離す。

揺さぶられ続けた小萌は、目を回してフラフラとしていた。

しかしアリシアは気にもとめず、ズンズンと当麻に歩み寄る。

「……」

「あ、あのー？　アリシア？」

やがて当麻の目の前まで来ると、アリシアはじっと当麻を見る。

見るというより睨むという方が正しいのだろうか。

当麻は困惑しながらも、とりあえず友好的な態度として握手しようと思い手を差し出す。

「……！」

その瞬間、かぷりっと可愛らしい音が聞こえた。

「ぎゃあああああああああああああああ」

その音は、アリシアがいきなり当麻の手に噛み付いた時に出た音であった。

「うふけふぁ、あねふへをよひふてにふるほわ！！！」

当麻の手を噛みながら喋っているので、一体何を言っているか分からない。

だが、アリシアが怒っている事だけは理解できた。

当麻は噛まれた手を引き抜こうと躍起になる。

が、意外と噛んでいる力が強いのか、アリシアはそれを許さなかった。

「ほのうふけうふけうふけうふけほほうふけふぁぁぁぁぁ！！！」

「上条さんの手は食べ物じゃありませんよーーー！！！」

しばらくの間、当麻はアリシアから手を噛まれ続けた。

小萌が目を回している事から回復すると、慌ててアリシアを引き離す。

何とか引き離せたが、当麻の手にはくっきりとアリシアの歯型が浮かんでいた。

「うう、不幸だ……」

「カミやん！」

歯型を見ながらうなだれていると、青髪ピアスが血相を変えて当麻の元までやって来る。
その目は真剣で、いつものおちゃらけた雰囲気は微塵も感じさせない。

「羨ましいでカミやん！！！　幼女に噛まれるなんて素敵なイベントをごはぁ！」

最後まで言い切る前に、吹寄による制裁が青髪ピアスの腹に入った。
痙攣を起こし、更に白目をむいて口から泡をふいてる状態で床に倒れこむ。
ふんっと鼻を鳴らしながら青髪ピアスを一瞥すると、吹寄はそのまま自分の席まで戻った。

「とりあえず……俺も席に座ろう……」

未だ痛む手を撫でながら、当麻は自分の席に座る。

「……その、すまんな。つい姉上の事で暴走してしまった」

椅子に座ると同時に、当麻に声をかけてきたアリシア。
流石にやり過ぎたと考えたのだろう。申し訳なさそうに当麻を見る。

「妾が冷静に考えておれば、汝の手を噛むこともなかった。ゆるせ」

そう言って姿勢を正すと、アリシアは当麻に向かって深く謝罪した。

「いやいやいや、いいって。そんなに畏まって謝罪しなくてもいいよ」

少しして顔を上げたアリシアは、やはり腕を組んで当麻を見上げる。
透き通った蒼い瞳で当麻を見上げるアリシアは、鮮やかな表情で洗練された可愛さを放っていた。
その事に気付いた当麻は、少しだけドキっとする。

「迷惑をかけたな。汝、名前を何と言う？」

「あ、ああ……上条当麻だ」

少しだけ慌てながらも、当麻は自分の名前を名乗る。

「……良き真名だな。我が名はアリシア・フォン・コルネリウス」

一瞬だけピクリとアリシアが反応する。
だがすぐに勝気な笑顔に戻ると、自らの名前を名乗る。
アリシアは再び当麻の元に歩み寄ると、当麻に握手を求めて手を差し出す。
少しだけ驚いた当麻だが、すぐに笑顔になるとアリシアの右手を握る。

「よろしくな、アリシア」

「よろしく頼むぞ、兄上」

仲良くなって終わり、とはいかなかった。

「えーと、アリシア？　何故に兄上？」

チクチクと嫉妬の視線を感じながら、当麻はアリシアに尋ねる。

「異な事を、兄上は姉上の血縁者か何かなのだろう？　ならば妾から見れば兄上だ」

「いや、確かに従兄弟だけどさ……」

「ならばよかろう、妾にとっては兄上だ」

既にアリシアの中では「当麻＝兄上」の図式が出来ているのか、淀みなく当麻の問いに答える。

「カミやん」

当麻の背後からボソリと誰かの声が聞こえる。その声は怨念と嫉妬に満ち満ちていた。

「ぬ、なんじゃ。この禍々しい空気は」

アリシアも男子生徒たちの嫉妬の空気に気付いたのか、辺りをキョロキョロし始める。

「カァァミやぁぁぁぁぁぁん」

「上条……貴様はいつもいつも」

「今度は兄上ですか……」

いつの間にか吹寄の攻撃から復活した青髪ピアスがノソリと立ち上

がる。
そして一人、また一人と男子生徒たちも立ち上がる。
そんな男子生徒たちを、女子生徒たちは毎度の事のように生温かい目で見る。
嫉妬に燃え盛った男子生徒たちが、ジリジリと当麻へにじり寄る。

「「カミやん、ぶっ殺すーーーー！！！」」

一定の距離まで当麻に近寄ると、男子生徒たちは一斉に当麻に詰め寄る。

「不幸だぁぁぁぁ！！！」

男子生徒たちは当麻に襲いかかった――――――――――かに見えた。

「……あれ？」

いつもの攻撃が来る、そう思って目をつむった当麻だが一向に攻撃が来ない。
恐る恐る目を開けると、当麻の前にはアリシアが立っていた。
両手を横に広げて、まるで当麻を庇うかのように。

「貴様ら、妾の兄上に何をする。兄上に手を出すならば妾が相手になろう」

悠然と当麻の前に立ち塞がるアリシア。
しかしその認識は誤りだった。よく見ればアリシアは小刻みに震えている。
当然であろう。
アリシアから見れば、今まで接点の薄かった男性が、猛然と襲いか

かってきたのだ。
たとえ狙われたのが当麻とはいえ、怖くないわけがない。
だが、その恐怖に耐えアリシアは当麻を守るために立ち塞がった。
その姿を見た女子生徒たちは、子どもの人権を守るべく男子生徒たちに敵意の視線を向ける。
その視線に晒された男子生徒たちは、矛を収める以外に選択肢はなかった。

「ふぅ……何とか退かせたぞ、兄上」

男子生徒たちが当麻から引き下がったのを見届けると、アリシアは当麻に向かって笑いながら言った。
その顔は、まるで向日葵のような眩しい笑顔であった。

「ハァハァ、もっと敵意の視線を向けてくれへん？」

一人だけ敵意の視線すら喜んでいる人間がいたが、誰もが無視する事にした。

全く違う異質な未知の異変

何処にでもあるビルの一フロアを丸々使った巨大な空間に、とある二人が佇んでいた。
片方は青年。緑に染めたオールバックの、長身の男。イタリア製の純白のスーツに高価な革靴。
片方は少女。銀色の髪と紅い瞳、灰色のゴスロリ服に黒いブーツ。
傍から見れば年齢差があり、全く接点が見当たらない二人。
そんな二人が巨大な空間の中で対峙していた。

「間然。一体いかなる思考にて私の思想に異を唱えるか」

男は少女に向かって尋ねる。だが、少女はただ男を見るだけで口を開かない。
その姿に男はつまらなさそうな顔をする。

「暗器銃をこの手に。弾丸は魔弾、数は一つで十二分」

男の言葉に応じて虚空にフリントロック銃を仕込んだ西洋剣が出現する。
だが、その様子を間近で見ている少女はやはり眉一つ動かさない。

「用途は粉砕。単発銃本来の目的に従い、獲物の頭骨を砕くために射出せよ」

男は少女に照準を向けると迷わず引き金を引く。
飛び出した魔弾は正確に少女の頭を撃ちぬく――――はずだった。

魔弾は少女と目と鼻の先で、まるで最初から存在しなかったかのように消失する。
それだけではない。男が持っていたフリントロック銃を仕込んだ西洋剣までもが同じように消失する。

「なっ……？」

男がここで初めて驚愕する。
この場は我が支配下、ならば我が意図しない事は起こりえない。
そう男は思っていた。

「先の手順を複製せよ。用途は乱射。二十の暗器銃を一斉射撃せよ」

ありえない、という思いを打ち消すかのように男は先程と同じことを行う。
否、同じではない。動作自体は同じでも、打ち出す魔弾の数は二十倍である。

虚空から二十の暗器銃を出現させると、今度は男が引き金を引くことなく魔弾が発射される。
しかし結果は変わらなかった。またしても少女の目と鼻の先で、同じように消失する。
暗器銃も同じように……

二十の魔弾が消失した後、少女はその口を動かす。
酷く残酷な笑みを浮かべて、人間らしさを感じさせない冷たい瞳で男を見る。
その顔を見た時、男の心は動揺で埋め尽くされていった。

（馬鹿な……っ！　何故に黄金練成の中で！）

少女が無造作に一歩進む。その音と同時に男が一歩下がる。

（パラケルススの末裔、アウレオルス＝イザードは黄金練成を完成させた）

その男、アウレオルスは考える。目の前の少女の異質さを。

（疑問、何故にこの女には通用しない）

対して、少女はまるで何かを数えているかのようにゆっくりと歩を進める。

「おのれ……我が黄金練成に逃げ道はなし。断頭の刃を無数に配置、速やかにその体を切断せよ」

アウレオルスの言葉と同時に、少女の頭上、天上からいくつもの巨大なギロチンの刃が生み出される。

水面を引き裂くように出現したギロチンの刃は、少女などたやすく切断できる代物である。

その刃は重力に従って振り下ろされる。

重量が百キロに届く処刑の刃、だが少女に触れると同時に砂糖菓子のように粉々に吹き飛ぶ。

（何故だ!?　停止、やめろ、それ以上は考えるな）

少女は特に気にした様子もなく、ただ銀髪を靡かせながら歩くだけだった。

残酷な笑みを浮かべて……

「直接死ね、女！」

アウレオルスは叫ぶ。その声は一フロアに響き渡るほどの声量だった。

だが少女に変化はない。相変わらずアウレオルスに向かって歩くだけだった。

やがて少女は立ち止まると、すっと腕をアウレオルスに向けた。

そして『ただ』その腕を振り下ろした。

瞬間、アウレオルスの右腕は引き裂かれた。

「ぐあああああああああああああああああああああああ」

あまりの激痛に叫び声を上げるアウレオルス。

「……ふふふ、あはははははははは」

少女が初めて声を発する。

「黄金練成？　笑わせるわね」

小馬鹿にした表情で少女はアウレオルスを見る。

まるで、それが何？　と言いたげに。

「『そんな物』程度で私にチョッカイをかけてきたの？」

再び少女はアウレオルスに向かって歩きだす。

「楽しみにして来てみれば……こんな雑兵だったなんて、失望しち

ゃうわ～」

そしてつまらさそうに腕をふるう。
それと同時に、引き裂かれたアウレオルスの右腕が無造作に引きちぎられる。
ごぽり、と鮮血が飛び散る。その血が床と純白のスーツを濡らす。

「我が右腕よ、再生せよ」

その言葉と同時に、アウレオルスの右腕がまるでビデオの巻き戻しのように元に戻り始める。
が、少女が指を鳴らすと、停止ボタンを押したように再生が止まる。

「な、何故……？」

アウレオルスは驚愕する。先ほどまで再生していた右腕。
その右腕の再生が、再生テープを停止ボタンで止めるかのように簡単に止まったのである。
その現実を受け入れられないアウレオルスは、ただ呆然と自分の右腕を見るだけしか出来なかった。

「お馬鹿さぁん。わかんないのぉ？」

「な、何……？」

何が起きているのかが分からない、アウレオルスは困惑で頭が一杯だった。
そんなアウレオルスを、心底呆れたというふうに少女はため息を吐いた。

「はぁ～、お馬鹿さんに時間を取られたなんて……そうだわ、久々にアレで楽しむ事にしましょう」

そういうや否や、少女が何かを口ずさむ。
少ししてアウレオルスの足元に魔法陣が出現する。

「さぁて、何分持つかしら。楽しい楽しい舞の始まりよ」

その声の意味をアウレオルスは理解できなかった。
だが、すぐに理解する。
魔法陣から蒼い焔が立ち上り、アウレオルスを焼き尽くそうとしたのだ。

「我が身を蝕む焔よ！　消えろ！」

アウレオルスは叫ぶ。少女に向かっての命令は無駄でも、『魔術』と思えるモノなら黄金練成で消せると考えたからである。
しかしその考えはすぐに否定される。

「疑問、黄金練成は完璧なはず！　何故！」

蒼い焔は消えることがなかったのである。それ所か煉獄の焔のように激しく燃え始めた。
そして更にアウレオルスを驚愕させる現象が発生する。

（疑問、何故に焼けた所が少しして再生している！）

焔に焼かれて炭と化した自分の体が、少し間を開けて元に戻っているのである。
それはビデオテープを巻き戻したかのように。

「……！」

アウレオルスは気付く。この少女がした事を。
一体この魔法陣の中で何が起きているのかを。

「ふふ。さぁ、舞踏会は始まったばかりよ」

残酷な笑みを浮かべて、少女はアウレオルスにそう宣言した。

「アレイスター、どうしてアレを招き入れた」

土御門はとある疑問を尋ねるため、窓のないビルを訪れていた。

「ふむ、アレとは何を指す」

「とぼけるな、あの異質な魔導師を何故学園都市に招きいれた？」

人を小馬鹿にしたようにとぼけるアレイスターに、土御門は苛立ちを隠せなかった。
対してアレイスターは、土御門の怒りを興味なさげな雰囲気で見ている。

「私は科学側の人間だ、魔術側に関しては畑が違う」

「ほざけ、この星で貴様ほど魔術に精通した人間はいないだろう。

なぁ……」

そこで土御門は一度深呼吸をする。
次に言う言葉を、目の前の人間に言う事はリスクが高すぎる。
だが、それでも言う必要がある。だからこそ土御門は口にする。
最大のタブーである言葉を。

「魔術師アレイスター・クロウリー」

数秒間、沈黙が窓のないビルを支配する。
アレイスターは肯定も否定もせず、ただ土御門を見ているだけであった。

「三沢塾があったビルは消失。分かるか？　破壊されたとかそんなモノじゃない」

タブーを言ってしまった土御門は、もはや最後まで言い切る以外出来なかった。

「あのビルで使われていた魔術ごと存在を消し去ったんだよ」

「ふむ、何が言いたいのだ？」

アレイスターは土御門を心底興味なさそうな雰囲気で見ていた。
まるで、それがどうした？　と言わんばかりに。
今日は珍しくアレイスターが、人間らしい感情を覗かせるなと土御門は思った。

「とぼけているのか？　それともからかっているのか？　相手は音も立てずにビル一つを消し去るような奴だぞ」

再びアレイスターは沈黙する。だが、土御門は気にすることなく言葉を続ける。

「アウレオルス＝イザードが科学側の人間に関与した。この事はお前もまずい事だと思っていただろう。最悪、魔術側と戦争になるからな」

土御門の問いに、アレイスターは肯定も否定もしなかった。

「アレがアウレオルス＝イザードを始末したお陰で、魔術側にとっても面子は保たれた。アレが魔術側の範疇に入るかは別だがな」

そこで土御門は、一旦息を吐く。胸の内に溜まった何かを吐き出すかのように。

「だけどな、アレはローマ正教から喧嘩を売られても、真正面から潰し合いができる存在だ。そんな危険な存在を学園都市に取り入れて、お前のプランは影響が出ないのかね？」

「いつから私のプランを心配するようになったのだね、土御門」

今まで沈黙していたアレイスターだが、プランという単語に反応して口を開く。

「魔術側の事情を並べられても、科学側の私にはどうしようもない。先程も言ったが畑が違う。下らない事を言い続けるなら去りたまえ」

「……ああ……わかったよ」

土御門の警告も、アレイスターにとっては畑違いの内容を並べられているように聞こえるらしい。
結局、何を言ってもアレイスターにとっては問題ないと判断なのだろう。
そう思い土御門は結標に連れられて、窓のないビルを後にした。

少ししてアレイスターは、幾つかのモニターを表示した。

「ふむ、魔術側であって魔術側の人間ではない者」

モニターに表示されている無数のプラン。
それを見ながら、アレイスターは笑った。

「それも楽しいイレギュラーとなろう」

理后の病気

「それでは今日はここまでですー。皆さん寄り道せずまっすぐ帰ってくださいー」

ホームルームの終了を宣言した小萌は、教壇の上に置いているモノを片付ける。

片付け終えると、それらを抱えて教室を後にした。

「カミやん、ゲーセンで遊ばないかにゃ～？」

背伸びする当麻に、土御門は遊びの誘いをかける。

しかし当麻は申し訳なさそうに、土御門の誘いを断る。

「悪い、今日は俺が買出しの日なんだよ。だからまた今度誘ってくれー」

かばんを片手に立ち上がると、当麻はそう言いながら教室を後にした。

「残念だにゃ～、垣根はどうだにゃ～？」

肩をすくめながら当麻を見送った土御門は、当麻と同じようにかばんを持って立ち上がった垣根に声をかける。

「おう、別にいいぜ。どうせ家に帰ってもあいつはいないだろうしな」

特に断る理由もない垣根は、土御門の誘いを二つ返事で了承する。

「かっきーはん、今日こそ負けへんでぇ～」

青髪ピアスも同行するのか、かばん片手に土御門の元に歩み寄る。

「テメェ如き秒殺してやるよ」

「お前らまたアレをやるのかにゃ～？　飽きない奴らだにゃ～」

青髪ピアスと垣根が互いに息巻いているのを、土御門は呆れながら見ていた。

「三バカが四バカになる日も近いかもなァ……」

ヤレヤレといった感じで、一方通行が三人を見る。

「小萌先生専用の学級委員のご登場だ、ご苦労様だなロリコン」

嫌味たっぷりな感じを隠そうともせず、垣根は意地の悪い笑みを浮かべて一方通行を見る。

「うるせェ、さっさと帰って童話集でも読ンでろ。仕事の邪魔だァ」

犬を追い払うかのように手を振る一方通行。

そんな一方通行に、三人は意地の悪い笑みを浮かべてニヤニヤしていた。

「相変わらず小萌先生ラブな一方はんやなぁ。さすがに僕から強引に学級委員の立場を奪っただけの事はある」

「青髪ピアスくゥゥゥゥン、なァァァァァァにを言ってますかァァァァ」

青髪ピアスの言葉に、一方通行は間を置かず反論する。
しかしその顔は少し赤みがかっていた。
そんな一方通行を見て、三人はニヤニヤする事を止められなかった。

「照れるな一方通行、お前さんが小萌先生に激烈に甘いのは公然の事実にゃ～」

「そうそう、知ってるんだぜ。テメェがさりげ無く小萌先生の手伝いをしているのを」

「でもね、小萌先生が絡まないと僕に学級委員を押し付けるのはやめてくれへん？」

一方通行は小萌に甘い、これはクラス全員の共通認識であった。
勿論、小萌を困らせようものなら酷い制裁が下るという事も。
一方通行は学園都市最高の頭脳を利用して、可能なかぎり小萌のサポートを行なっている。
しかも小萌に気付かれないように。

「テメェら、そンなに愉快なオブジェになりたいンですかァ？」

チョーカーのスイッチに手を伸ばしながら、一方通行は三人を睨みつける。
だがその顔に迫力はなく、ただの照れ隠しである事は一目瞭然であった。

「おっと、怖いにゃ～。からかい過ぎはよくないにゃ～。んじゃ、

俺らも帰るぜ。またにゃ～、一方通行」

「あばよ、ロリコン」

「小萌先生によろしく～。それじゃあ一方はん、また明日～」

ひらひらと手を振りながら出て行く三人。

そんな三人の後ろ姿を見送りながら、一方通行はとある言葉を口ずさむ。

「また明日……か」

そう口ずさんだ後、彼は残っていた学級委員の仕事を再開する。

楽しそうな笑みを浮かべながら。

「ただいまー」

「ただいまってわけよ」

買出しの途中に遭遇した、フレンダと一緒に当麻は上条家に帰宅した。

「超お帰りです」

リビングからひょっこり顔を出した最愛が、当麻たちを出迎える。

当麻は両手に買い物袋を持つと、そのままキッチンに移動した。

「そういえばお姉ちゃんたちはどうしたの？」

最愛がいるリビングまで移動したフレンダは、理后と沈利の姿がないことに疑問を持つ。

「あー、二人は超病院です」

「病院？　なんでって訳よ」

最愛の顔には心配するような雰囲気は見られないので、一応の安心はあるとフレンダは見ていた。

だが、やはり家族が病院にいるという事は気持ちが良いとは言えない。

それは当麻も一緒であった。

「えぇ！？　理后姉ちゃんがどっか悪いの！？」

冷蔵庫に買出し品を仕舞い終えた当麻が、最愛に詰め寄る。

「それなら超電話しています。やっと優菜お姉ちゃんによる治療が行えるようになったのですよ」

興奮する当麻をなだめながら、最愛は理后と沈利が病院に行っている理由を話す。

「能力体結晶」という名前の毒素に蝕まれた理后。

彼女の治療には、冥土帰しすら僅かばかりの毒素を取り出す事しか出来なかった。

その僅かばかりの毒を抜いた事で、理后は日常生活を送ることが出来た。

だが依然危険な状態であることに変わりなく、理后は常に死の危険

に晒されていた。
だが優菜に能力が戻った事を知ると、沈利はすぐに治療の打診をした。
勿論、優菜は二つ返事で了承を返したようである。

「……ほっ、よかったぁ」

「や～っとって訳よ。案外時間がかかったね？」

ひとまず理后に何かがあったわけではない事に、安堵のため息を漏らす二人。
しかし、ふと疑問に感じたフレンダは、最愛に質問をする。

「別に優菜お姉ちゃんが超渋っていたわけではないです。珍しい病気ですから治療方針が超問題だったわけです」

沈利から連絡を受けていたのか、最愛はフレンダの問いに淀みなく答える。
しかし、その答えは新たな疑問をフレンダに与えていた。

「普通に能力使ってさらっと完治って訳じゃないの？」

優菜の能力『天上霊薬』は世界最強の万能薬である。
常識では不可能な、脳細胞の再生という実績が彼女には有る。
ならば「能力体結晶」という名前の毒素もすぐに取り除けるのではないか？
そうフレンダは思ってた。

「一気に治すと、その反動でどんな影響が超出るか分からないから

じゃないですか？」

フレンダの疑問に、最愛は自分の推測を述べる。

「ふーん、結構面倒って訳よ」

その推測でフレンダは納得したのか、特に疑問を口にすることはなかった。

「それでも治療の目処すら立たなかった事を考えると超前進です」

「そうだな……理后姉ちゃんの病気、早く治るといいな」

当麻の問いに、フレンダと最愛は静かに頷いた。

「ふむ……『能力体結晶』……ですか」

病院の関係者用休憩室で、優菜は理后のカルテを見ながら、一人呟いていた。

場所が場所なために、優菜は普段着ではなく白衣を着ていた。

無論、ただ普段着の上に白衣を着ただけではあるが。

「そうだよ。それが彼女の身体を蝕んでいるモノだよ」

コーヒーカップを片手に、冥土帰しは優菜の呟きに答える。

「師よ、この奇妙な代物……通常の生活ではまず摂取しませんよね？」

優菜はカルテを見ながら、当然の疑問を冥土帰しにした。
医学的知識はまだまだな優菜だが、それでも理后のカルテは異常な内容だらけであった。

「……」

優菜の問いに冥土帰しは沈黙で返すしか出来なかった。
ため息を吐くと、優菜はカルテをテーブルに置く。

「分かりました、この件は問わない事にします。ですが、この『能力体結晶』は用意をお願い致します」

「それは可能だけどね。何に使うのだね？」

能力体結晶を手に入れて貰うよう、冥土帰しにたのみこむ優菜。
しかし、冥土帰しは能力体結晶が何故必要なのか当然の疑問を投げる。

「無論、私が取り込んで解析します。どういった動作をするのか調べないといけません」

「自分の体を実験体にするのかね」

「こんな事、他人にお願いするわけにはいきません。私が一番適任ですから私がやるべきです」

「……」

自分が適任なら、自分がやるべきである。

まるでそれが当然の事のように、優菜は冥土帰しの疑問に答える。
対して冥土帰しは、ただ優菜を見て沈黙をする以外出来なかった。

「別に私は自分の体を犠牲にする気はありません。単にその方が治療期間が短くなるだけです」

「……わかったよ、数日のうちに用意するね」

くいっとコーヒーを飲み干す冥土帰し。

「ところで話は変わるけどね」

カップをテーブルに置くと、冥土帰しは優菜の方を向く。
その目は真剣であり、彼が問いかける内容は大事な事なのだろうと優菜は思った。
姿勢をただし、優菜は冥土帰しの目を見る。

「僕を師と呼ぶなら、ナース服を着て欲しいんだけどね？」

だが優菜の考えは誤りであった。
冥土帰しは冗談なのか本気なのか、どちらに取ればいいのか分からない問いを優菜にしたのであった。

「……善処します」

優菜は顔をひきつらせ、白衣を少し肩からずり落としながら冥土帰しにそう答えた。

削板軍覇

「不幸だ」

その日、当麻は銀行にお金を下ろしに来た。
レシートとカードしかない財布に、お金を入れるためである。
財布の中身はたったの六十五円。これではジュースすら買えない。

何故お金が少ないのかと当麻は考えた。
フレンダがサバ缶を買うから、最愛が映画を見に行くからと。
何故かやたらと妹たちからの誘いが多く、予定外出費が多かったと結論づけた。

そして予定外出費が続けばどうなるか。
当然ながら、当麻の財布は必然的に軽くなる。
レシートとカードしか入っていない財布の出来上がりである。

本来なら妹たちも、お金が減り必然的に誘いが減るはずであった。
だが、当麻の軍資金と妹たちの軍資金では文字通り桁が違った。

（これが……レベル４とレベル０の違いかっ！）

項垂れながら、当麻はＡＴＭを操作してお金を下ろす。
残高はもはや雀の涙程度である。
次の奨学金や補助金が入るのはまだまだ先、それまで残り少ない金額でやりくりしなくてはいけない。

（お金に関してだけは、沈利姉ちゃんはシビアだからなー）

一番お金を使ってそうな沈利が、実は一番お金を消費していないのである。
研究所の手伝いや奨学金、補助金の大半を上条家の為に使用している。
残ったお金も八割ほど貯蓄しており、ほとんど使っているように見えない。
それでも当麻の奨学金を軽く上回ってはいるが。

家長だから、と沈利は当麻たちにお金を使わない理由を語った。
そんな沈利だからこそ、妹たちが無駄な浪費をすれば説教をする。
それは当麻も例外ではない、賢いお金の使い道を当麻に教えた。

（それでもたまにはパーッと使いたい時があるんですよ、沈利姉ちゃんーーーー！！）

やはり全額下ろしちまえっ！　と当麻は考え直す。
口座の残りが残金ゼロになってしまったが、構うものかっ！　と当麻は意気込んだ。
そしてお金を下ろして、外に出ようとしたところで――――入り口が大爆発した。

「な、なんだぁ！？」

モクモクと煙を上げている入り口を見ると、何やら武装した人間が入ってきた。

「早く金をつめやがれ！！」

「さっさとしねぇとブチ殺すぞ！」

明らかに普通の利用客ではない、となれば結論は一つ。

「銀行強盗か……」

当麻は直ぐ様状況を把握する。
入口の扉を何かしらの爆薬でブチ破り、武装した人間が一気に雪崩込んできた。
人数は不明だが、ほとんどの人間が銃火器類で武装している。

「いくら上条さんでも銃火器類では、手が出せませんよ。ここは大人しく……」

そう言いかけた当麻に、何かが突きつけられた。
それが何かを理解するため、当麻は顔を上げる。
そしてすぐに後悔する。

「おい、テメェ。ちょっと協力してもらうぞ」

それは銀行強盗の一人が、当麻に向かって銃を突きつけていたからである。

「不幸だ……」

「おい、小僧。無駄な抵抗はするなよ？」

なけなしの金は巻き上げられ、更には人質として扱われる。
背中に銃を押し付けられた状態で、当麻は両手を上げて立ち尽くしていた。
ちらっと周りを見る。ほとんどのお客は床にひれ伏しており、銀行

員は怯えながらお金を袋にいれている。
風紀委員や警備員に通報した様子もない。

「ああ、不幸だ……」

大事な事なので二度言おう、そう思った当麻が口を開いた時。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

遠くから凄い大声でこちらに向かってくる何かが見えた。
ソレは瓦礫を物ともせず、まっ直線にこちらに向かってくる。
やがてソレが店内に入り、銀行員の前で止まる。
銀行員に銃を突きつけていた銀行強盗を吹き飛ばして。

「すまねぇぇぇ、金を下ろさせてくれぇぇぇ！！！」

砲声とともに口から謎の波動を放つ男。
あちこち壁に穴をあけているが、本人は全く気にする様子はない。

「またなんか不幸の予感がしてきましたよ！」

その人物は白い学ランに鉢巻、旭日旗Tシャツ着用と、いわゆる番長のようにも見える少年であった。
その少年が当麻に気づき、場の雰囲気にそぐわないほど陽気な声で当麻に話しかける。

「おー、当麻じゃねぇか！　相変わらず根性のある髪型だな！　天を突く勢いだぜ！！」

「ちげぇよ！　これは単に整髪料を使っているだけだよ！　てーか

壁壊すなよ！　軍覇！」

余りの急展開に理解が追いついていなかった銀行強盗たちだが、はっとなると軍覇に銃を向ける。

「て、てめぇ！！　何者だ！」

「逆らうってのか！」

軍覇を何かよく分からない存在として見ているのか、少しだけ腰が引けている銀行強盗たち。
そして当然ながら。

「そこの男も刃向かうって言うのか！」

軍覇と会話していた当麻にも、銀行強盗たちは銃を向ける。
当麻が人質から敵対者にランクアップした瞬間である。

「なんだぁ？　一体何をやっているんだ？」

状況を確認しようと、あちこち視線を向ける軍覇だが、それより早く銀行強盗たちが銃の引き金を引いた。
銃声が響くと同時に、軍覇の身体が吹き飛んでいく。
間違いなく脳天を撃ちぬいた、そう銀行強盗たちは見ていた。

「いってぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

しかしその認識は誤りであった。
軍覇はすぐに起き上がると、額を押さえながら銀行強盗たちを睨む。

「おい！　銃なんぞ撃ったら人が死ぬぞ！？」

誰もがあ然としていた。銃で頭を撃たれた人間が、まるで何事も無かったかのように立ち上がったからである。
銀行強盗たちが使っている銃はゴム弾などではない。殺傷能力が備わった実弾である。

「相変わらず滅茶苦茶な体だよな……」

軍覇の身体がおかしい事を当麻は知っていた為、冷静に軍覇の行動を眺めていた。

「根性があれば、当麻だって出来るさ！」

当麻の呟きが聞こえたのか、軍覇は当麻に向かって持論を述べる。
親指を立てて、無駄に爽やかな笑顔を浮かべていた。

「上条さんは軍覇みたいに頑丈ではないんですよ！？」

「銃弾など根性でカバーだ！　当麻！」

「人の話を聞けぇぇぇぇぇ！！！」

「うむ、いい声だ！！　根性が入っているぞ！！」

周りを無視して完全にひとりの世界に入る軍覇に、苛立った銀行強盗たちは軍覇に向かって一斉に銃の引き金を引く。

「いたたたた、おい、いい加減に、いてぇぇぇぇ！！！」

しかしまるで効果は見られない。
だが、恐怖にかられた銀行強盗たちは銃を撃ち続ける以外に選択肢はなかった。
やがて銃弾が切れるが、相変わらず軍覇はただ痛がるだけであった。

「くそ！　こうなったら！？」

銃を投げ捨てると、銀行強盗たちの一人が手に火の玉を作り出す。
だがサイズが小さく、明らかに低レベルだと分かる。

「なんだぁ！？　銃の次は能力か。全く根性ねぇなぁ！！　男なら拳一つだろう！」

そう言うや否や、軍覇は自分の拳に力を入れる。
少しして、軍覇の拳には奇妙なオーラが発生し始めた。

「くらえぇぇぇ！！」

「根性を入れなおしてやる！！！　すごいパーンチ！！」

火の玉を軍覇に向かって打ち出す銀行強盗。
だが、軍覇は拳を振り上げると、明らかに距離がある強盗に向かって一気に振り下ろす。
その瞬間、軍覇の拳から奇妙な力が吹き出した。
それは銀行強盗を吹き飛ばすだけではなく、周りにいた銀行強盗の仲間たちすら吹き飛ばしていた。
強盗たちは、軍覇に恐れていたために固まっていた事が、不幸にも巻き添えを食らう原因となった。

「どうだ！　根性は入ったか！？」

「軍覇、誰も意識ないから。てーか壊しすぎだろう、お前！」

だが、軍覇の力はそれだけでは済まなかった。
その奇妙な力は、周りにあった机や椅子、しいては壁や扉まで吹き飛ばしていったのである。

「風紀委員ですの！！」

銀行強盗たちが軍覇や当麻に気を取られている間に、誰かが通報したのだろうか。
爆破された入り口から、風紀委員と思われる数名の人間が乗り込んできた。

「ゲッ、あの声は！！」

その中に見知った顔を見た当麻は、ヤバいモノを見たと言いたげな顔をした。
それは風紀委員の方も同じであった。
当麻を見つけるや否や、嫌なものを見つけたと言いたげな顔をしていた。

「また貴方ですの。とりあえず逮捕しますから、大人しく投降して下さいますの」

「何で逮捕なんだよ！　俺は被害者だ！」

見知った顔の風紀委員――――黒子は、当麻を見て腹黒い笑みを浮かべていた。
明らかに悪巧みを考えている顔である。

「ここで貴方を始末すれば、晴れてお姉様はわたくしのもの。うっふっふ、えっへっへっあっはーっ！！」

「本音がダダ漏れですよ、白井黒子！！」

本気で逮捕する気なのだろうか、風紀委員が使用している拘束手錠を片手に当麻へにじり寄る。

当麻は黒子の目を見る。明らかに殺る気満々であった。

「あっ！　あんな所に御坂がっ！」

「どこですの！？」

当麻は、外を指差し黒子の意中の人の名前を叫ぶ。

すっかり信じ切った黒子は、当麻が指差した方へと視線を向ける。

だが、そこには誰もいなかった。

「誰もいませんの……って逃げやがったですの！？」

当麻の必死の演技力が功を奏したのか、はたまた黒子が御坂の事を考えていた時だったためか。

とにかく黒子は古典的な罠に引っかかってしまった。

当麻はしばらく走り続けていたが、やがて体力も底を尽きぐったりとその場に倒れこむ。

「はぁはぁ……何とか逃げ切れた」

「根性がないぞ、当麻」

横で同じように走っていた軍覇が、へばっている当麻に対して不満を述べる。

軍覇は汗すらかいておらず涼しげな顔をしていた。

明らかに理不尽だと当麻は思ったが、何か言えば余計疲れると思いぐっと言葉を飲み込んだ。

やがて呼吸が整い、何とか一息つくと当麻は軍覇にとある疑問を投げかけた。

「それにしても軍覇がお金を下ろしに来るとか珍しいな」

街でたまに見かける時があるが、明らかにお金を使っているように見えない。

それなりの友好関係がある当麻ですら、軍覇の私生活は全く謎に満ちていた。

「うむ。早急にお金がいったからな」

「何を買うつもりだったんだ？」

軍覇がモノを買う事自体を珍しく思った当麻は、純粋に軍覇の買うものが気になった。

「名書と思われる『実践！　根性の入れ方９９選』だ！」

「……」

ある意味軍覇らしく、少しだけ安心した気持ちもあったが、当麻は

自分の顔が引つるのを感じていた。

「ちなみに値段は七万円」

「たけぇぇぇぇぇぇ」

明らかに値段と内容が釣り合っていないその本。

そんな本を、軍覇は本気で欲しがっていた。

「後一冊しかなかったのだ。そこで早急に現金が必要だったのだ」

（それは単に売れてないから一冊なんじゃないの？）

現実的な突っ込みを心の中でした当麻。

軍覇は少しだけ考えると、当麻の方を向いた。

「まぁひとまず別の銀行にいってくる。さらばだ！！！」

「あ、おい！」

「またな！　当麻！！　根性ダッシューーーー！！！」

当麻の返事を待たず、軍覇は砂塵を巻き上げて走り去ってしまった。

「はぁ……毎度ながら嵐のような奴だなぁ」

嵐のように現れて、嵐のように立ち去った軍覇に苦笑する。

いつも軍覇の騒動に巻き込まれているが、当麻は不思議と嫌な気持ちにはならなかった。

それは彼が、真っ直ぐで純粋、そして戦隊ヒーローのような好青年

だからだろうか。
少しだけ楽しい気持ちになる当麻であった。

しかしそれはすぐに絶望へと変わる。
ズボンに付いた砂を軽く払っていると、ある違和感を感じたのである。
少ししてその違和感の原因が分かる。

「あ！　俺の全財産！　そういえば銀行強盗に取られたまんまだった！」

ズボンのポケットに有るべき財布がなかったのである。

「不幸だぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

当麻は空に向かって叫ぶ。しかし、現実は無情にも当麻にある事実を突きつけた。

――　今月は無一文で過ごすハメになる、と。

後日、当麻は沈利に土下座してお小遣いを貰った。
沈利に一日こき使われる条件と引き換えに。

愛しの姉上

その日、優菜は少しだけ気持ちが浮ついていた。
数日ぶりに登校出来た事が主な理由である。
彼女にとって普通に登校するというのは、今まで数えるほどしか経験していない。
転校直後に能力強化、その後は入院。
退院した後でも、色々な実験が舞い込んでくる。

（単なる治療行為なのに、大規模な実験扱いされるとは……意外と肩がこりますね）

中でも今一番の実験が、『一方通行の前頭葉蘇生実験』になる。
一方通行の損傷した前頭葉は、冥土帰しの補助機構のお陰でカバーされている。
しかしそれを良しとしない一方通行は、前頭葉の治療を優菜に打診した。
無論、優菜はこれを二つ返事で了承した。

だが、その話をどこから聞きつけたのか知らないが、理事会が優菜の治療行為に介入。
あっという間に大規模な実験へと変貌してしまった。それも最高機密レベルの実験として。

（治療行為の相手が学園都市　第一位ですから、慎重に慎重を重ねたいのでしょう）

優菜が理后への治療行為を行う時は、理事会は一切のアクションもなく沈黙を保っていた。

理后の価値はその程度だ、と言いたげに……

（私にとっては二人とも助けるべき患者。それなのに、あのような区別を見せ付けられると、何だか嫌な気持ちになります）

一方通行への治療に関しては、莫大な予算がつぎ込まれている。研究資材は勿論、人材は理事会より選別された優秀な研究者ばかり。タイムスケジュールを作成し、可能なかぎり問題が発生しないように配慮されていた。

優菜や一方通行には、実験で拘束されている間、学校は全て出席扱いとして処理されている。

その上、実験の成否に関わらず莫大な給金が支払われていた。

対して理后は研究所も人材もなく、ほぼ全ての対応を優菜一人で行っていた。

当然ながらかかる出費は、全て優菜のポケットマネーから支払われていた。

明確な差別化をされている二人だが、優菜にとってはどちらも治療しなければならない存在。

常に二人の扱いは公平であった。

（いけません。そんな事より今日の授業に集中するべきですね）

優菜は頭を軽く振ると、実験や治療の事を頭から追い出す。

そして前方を見ると、久々に見る自分の教室。優菜は心が少しだけ弾んだ。

教室の扉を開けながら優菜は思った。今日は素敵な日になるだろうと。

「おはようございます」

「おはよう、姉上」

しかしその思いは、たった一言で完膚なきまで破壊された。
扉を開けた格好で優菜は石のように固まっていた。
何かありえない声を聞いた、そう優菜は思った。
そして恐る恐る下を向くと。

「どうした、姉上。まさか妾の顔を見忘れたと申すのか？」

そこには腕を組んで優菜を見上げているアリシアがいた。
待ち焦がれていた人物と、ついに対面することができたと言いたげな顔。
目は潤んでおり、少しだけ涙を堪えているようにも見える。

「どうやら私はまだ寝ぼけているようです。あの子がここにいるはず無いのに……」

額に手を当てて優菜はため息を吐いた。

「おっす、アリシア」

そんな優菜に気付かず、アリシアに声をかける人物がいた。

「おはよう、兄上。今日もいい天気だぞ」

片手を上げながら近づいてくる当麻に、アリシアは笑顔で挨拶を返した。

「兄上……？」

優菜にとって聞き捨てならない言葉が耳に入った。
オウム返しのようにアリシアにその言葉の意味を尋ねる。

「うむ、兄上は姉上の血縁者なのだろう？　ならば、妾から見れば兄上だ」

優菜はジロリと当麻を睨む。普段からは想像もつかないほどの迫力に、当麻は思わず後ずさった。

「べ、別に上条さんが強要したわけでないですよ！？」

あたふたと優菜に向かって当麻は言い訳をする。
だが、優菜は当麻を睨むのを止めなかった。

「姉上、きっと兄上は『ソロル』の事を知らん。だから、そんなに睨むのは可哀想だ」

「……はぁ。まぁ貴方が認めたならば、私がとやかく言う必要はありませんね」

また額に手を当てながら、優菜はさっき以上に盛大に溜息を吐いた。

「『ソロル』？」

聞きなれない単語を聞いた当麻が、アリシアに言葉の意味を尋ねる。

「聖カトリーヌ女学院の伝統的な習慣だ。簡単に言うと生徒同士で義理の姉妹関係を結ぶ儀式だな。妾が姉上の事を『姉』として見て

いるのもその習慣から来ている」

少しだけ誇らしげに微笑んで、アリシアは当麻の問いに答える。
優菜は頭を軽く振ると、そっと当麻に歩み寄る。

「当麻、先に断っておきます」

肩にそっと手を置くと、優菜は当麻にだけ聞こえる声量で囁いた。

「アリシアは私にとって、とても大切な妹。彼女を泣かすような真似は許しませんよ」

当麻は優菜を見る。彼女の目は冗談なんかではなく、真剣そのものだった。
その目を見た時、当麻は理解した。優菜はアリシアの為なら、どんな困難でも立ち向かうであろうと。
自身がどうなろうと必ず守るべき存在として見ている事を。

「分かった」

そんな優菜の目を見たからこそ、当麻は目を決して反らす事無くはっきりと答えた。
その返事に満足したのか、優菜は少しだけ微笑んでいた。

ホームルーム前に、一悶着があったが授業は予定通り進行した。
そして放課後。優菜はアリシアと一緒に帰宅していた。

「そういえば家はどこなんです？」

「小萌殿の家に厄介になっておる。本当は学生寮というものがあったのだが狭苦しい部屋なので断った」

「貴方は……」

優菜は盛大にため息を吐くと、アリシアの方を見る。
何がそんなに誇らしげに思っているのか分からないほど、アリシアは自信にあふれた笑顔をしていた。
少しだけワガママな所は変りないな、と優菜は微笑しながら思った。

「そうだ、今日は姉上の家に泊まりたい。よいだろう?」

「最初から其のつもりだったのでしょう?」

「まぁな。今日は久々に姉上に会えたのだ。眠るまで姉上と共にいたい」

ワガママな妹のおねだりを聞きながら、優菜は昔を少し思い出していた。
共に歩む友人とのあたたかな日々。
時に笑い合い、時に涙を流し、時にぶつかり合い、時に感動を分かち合っていた。
過去の想い出にしてしまいたくない時間。
そんな日々を優菜は思い出していた。胸に少しだけの寂しさと暖かさを感じながら。

そんな思いを抱きながら、優菜はアリシアと連れ添って帰宅した。
家に入ると、アリシアは部屋を見渡して驚いた。

「中々の広さだな。聖カトリーヌ女学院の時も姉上の部屋は特別広かったが……」

優菜が現在借りている部屋は、学園都市の権力者が住んでいそうなほどに広い。
明らかに一人で住むには十分すぎる程の広さだ。

「色々な理由があって、それなりの広い部屋を借りているのですよ」

優菜の説明を聞きながら、アリシアは周りを物珍しそうに見る。

「うむ、姉上のセンスは相変わらず良いな」

しばらく部屋の調度品などを見ていたアリシアだが、ある程度見終わると優菜に感想を述べた。
部屋の調度品は一つ一つのデザインがよく、また空間的な一体性を帯びるように配置されていた。
調度品の品質もかなり良く、高級品である事が一目瞭然であった。

「ありがとう、アリシア。貴方にそう言ってもらえると嬉しいわ」

二人は笑いあう。そしてお互いの事を話し合う。
今まで離れていた分の時間を取り戻すかのように。

「おー、そういえば姉上に手紙があったのだ」

夕食を取り、リビングでお互いの話に華を咲かせていた二人。
だが、アリシアが何かを思い出したかのようにぽんっと手を叩いた。
そして自分のバックから、手紙を取り出す。

「手紙？　また誰から……」

アリシアから差し出された手紙を見ながら、優菜は差出人を予測する。
そしてすぐに気付く。渡された封筒が、自分の親友が愛用している封筒である事に。
丁寧に封を切ると、中には二つ折りの便箋が一枚と幾つかの写真が入っていた。
優菜はそっと便箋を開くと、中身を読み始める。

『やっほー、優菜。元気にやってる？
こっちは相変わらずよ、皆元気にやってるわ。
まぁアンタが転校したお陰で、色々と大惨事だったけどねー。
未だにアンタの転校にショックを受けている娘もいるのよ？
改めてアンタの影響力が分かったわ。

あーそうそう、この手紙を見ているから分かると思うけどアリシアがそっちに行くわ。
アンタとしても色々と思う所があるのかもしれない。
でもね、アンタの転校を一番悲しんだのはアリシアなのよ？
それを分かってあげて欲しいわ。

学園都市ってのをあたし達は、詳しく知らないからなんとも言えない。
だけどアンタの事だから、大丈夫とは思ってるわ。
そっちでも頑張ってね。

その内、あたし達は学園都市に旅行で遊びにくよ。
その時はあたしだけじゃなく、朱莉様とか静華とか香奈枝がついて行くかも？

後はまぁ化学マニアの椋子先生が引率で付いて来るかな～。
ま、詳しく決まったらまた連絡するね！
そん時はよろしくね。それじゃ、まったねー。

追伸．皆の写真を同封するね。アンタの写真があればよろしく！

優菜の大親友　まりなより』

便箋を綺麗にたたむと、優菜はそれを愛おしく抱きしめる。

「相変わらず……ですね」

そう言った優菜の頬には一筋の涙が流れていた。
それ以上何も語らず手紙を抱きしめたまま、ただ涙だけが流れていた。
幾筋もの涙が、彼女の膝の上にポタリポタリと落ちる。
アリシアは、涙を流す優菜に何も言えずただ黙っている事しか出来なかった。

やがて泣き止んだ優菜は、封筒に便箋をしまうと写真を手に取る。
何枚もの写真、その写真には懐かしい顔ぶれが写っていた。

「皆さん、元気そうですね」

「うむ、皆元気だったぞ。まりなは相変わらず弾丸小娘だったわ」

「眩しいぐらいの笑顔で溢れていますね」

優菜が手に取っている写真。
その写真には親友たちが晴れやかな笑顔を向けていた。

心理掌握のデート日

その少女は傍目から見ても、楽しげな笑顔を浮かべていた。
少女が今日という日を、どれほど待ち望んでいたかがうかがい知れる。
待ち人を待つ時間すら彼女には楽しいのかもしれない。
ちらちらと時計で時間を気にしているが、そんな時ですら笑顔であった。
少女がそっと呟く、待ち人の名前を。

「当麻先輩」

また時計を見る。約束の時間まで後三十分。
ふと空を見上げる。そこには晴れ渡った青々とした空が広がっていた。

（今日は絶対、素敵なデートの日になる）

眩しげに空を見上げなら、その少女――――――心理掌握はそう予感した。

「当麻先輩♪　今日は約束の日ですよ？」

再び時計を見る。約束の時間まで後十五分。
きっと遅刻してくるだろうな、と心理掌握は思っていた。

「悪い、待たせたか？」

しかしそれは良い意味で裏切られる。

当麻は、約束の時間より十分前に姿を現したのである。

「待ち合わせの時間前ですから構いません」

当麻を待つドキドキした時間が減って少し不満の心理掌握だが、それ以上に当麻が来てくれた事に心が嬉しさで躍っていた。
精神系の頂点に立つ心理掌握も、自分の乙女心だけは支配する事が不可能であった。

「それにしても……」

心理掌握の元まで歩み寄った当麻は、心理掌握の姿をじっと見る。
当麻は彼女の姿に微妙な違和感を覚えていた。

「どうしました？」

「いや、その服装……可愛いんだけどさ。常盤台って制服着用義務がなかったっけ？」

心理掌握の格好は常盤台の制服ではない。明らかに私服姿と分かる格好である。
かなりお洒落な格好であり、心理掌握の可愛らしさが際立つ服装である。

「簡単です、私は今制服を着ていると周りに思わせているだけです」

そういえばそんな校則もありましたね、と今思い出したかのように心理掌握は答えた。
その顔を見て、始めから守る気がないと分かる。

「おい……いいのかよ。それ」

「当麻先輩に、一番可愛い姿を見て欲しいのです。その為なら校則なんて知りませんわ」

ふわりっと心理掌握が笑う。可憐な一輪の花のように、見ているだけで安らぐ雰囲気の笑顔。

可憐なその笑顔に、当麻は自分の顔が赤くなるのを感じた。

「ま、まぁ、心がいいなら……な」

「当麻先輩、二人っきりの時は？」

当麻の頬をつつきながら、心理掌握は当麻を見上げる。

上目遣いでおねだりしてくる心理掌握の甘い香りが、当麻の鼻腔いっぱいに広がる。

その香りに彼は頭がクラクラしているのを感じた。

「ああ、そうだったな……」

顔を赤くしながらも当麻は頷くと、そっと心理掌握の耳元で囁く。

彼しか許されていない、心理掌握の本当の名前を。

心理掌握は、当麻の声を聞きながら思った。

今日はいいデート日だと。

当麻は心理掌握を連れ添ってセブンスミストまでやって来た。

制服着用義務のある常盤台では、私服は余り意味がない。

だからほとんどはウィンドウショッピングとなってしまう。

「当麻先輩、次はあっちですよー」

嬉しそうにはしゃぎながら、次々と店を回る心理掌握。

「何故に買い物がここまで長いのだ……」

対して当麻は、既にヘロヘロにへばっていた。

「ほらほらー、時間は待ってくれませんよー」

当麻の右腕をぐいぐいと引っ張りながら、心理掌握は楽しそうに言う。

「わ、わかった。そんなに引っ張るなよ」

右腕をがっちりと抱きしめられているので、小柄な身体に似合わず豊満な心理掌握の胸が、当麻の右腕に押しつけられる。

その上、右手はしっかりと絡められ、所謂恋人つなぎのようになっている。

他人の声が聞こえないから、という理由で右手を繋いでいるが、何もわざわざ恋人つなぎをしなくてもいいだろ。

そう当麻は思った。だが、心理掌握の笑顔を見ると何も言えなくなる。

（垣根先生の言うとおりだったなー）

当麻は思い出す。この日の事を垣根に相談した時の事を。

『心と遊びに行くから、いい店を知らないかだと？』

『上条さんはあんまり女の子と遊びにいかないから、そういう店を知らないんですよ。垣根なら知ってそうだと思って』

少しだけ思案顔をする垣根だが、すぐにとある疑問を口にする。

『つーてもなぁ……俺が利用する店に上条は入れるのか？』

『……普段どんな店利用してるんだよ』

財力の違いをまざまざと見せ付けられた気分になった当麻だが、気にすると虚しいので考えないことにした。

『ま、心の場合は上条と一緒ってのが重要だろう。だからセブンスミストにでも行けば？』

『セブンスミストかぁ、やっぱそのへんかねぇ？』

『後は色々と二人で楽しむような事をするべきだな。例えばクレープの食べ比べとかー』

何だかんだで垣根は当麻に的確なアドバイスを送る。しかし、鈍感な当麻は垣根の言っている事が余り理解出来ていない。

『そんなのが重要なのか？』

本気でわかってない顔をする当麻に、垣根は盛大にため息を吐く。

『上条、せめて女心は勉強しろよ。重要なのは食べる事じゃねぇ、一緒に何かをしたっていう想い出が重要なんだよ』

『はぁ……』

『まぁ鈍感の上条にはちと分からんかもな』

垣根は頭をかきながら当麻を見る。明らかに半分も理解できいない顔であった。

心の中で盛大にため息を吐くと、垣根は当麻にアドバイスを送る。

『とにかくこの三つは守れ。一つ、心と一緒に何かをしろ。二つ、一緒にいる間は絶対に他の女の話をするな。三つ、心の甘えには照れずにきちんと答えてやれ』

『わ、わかった』

垣根の真剣な顔に思わずたじろぐ当麻。

『上条、鈍感なのもいいけどな。あんまり鈍感すぎて心を泣かすなよ』

『……』

しばらく当麻を見ていた垣根だが、やがて真剣な顔をして言葉を口にする。

『俺は心が苦手だ。だが別に嫌っちゃいねぇ。あっちはどう思っているか知らんが俺は友人だと思っている』

そこで言葉を区切ると、垣根は少しだけ意地の悪い笑みを浮かべてた。

『だから上条。俺に友人を泣かせるなって言って、お前を殴るような真似はさせないでくれよ?』

『分かった、気をつけるよ。万が一、心を泣かせたら一発喝を入れてくれ』

『もしそうなったら未元物質でぶん殴ってやるよ』

『それ死ぬから!』

『俺を誰だと思っている? 死なない程度にぶん殴ってやるよ』

『ねぇ!? それ趣旨変わってませんか!?』

当麻はアクセサリーを見て唸っている心理掌握を見る。
その顔に、昔のような陰りは一つも見えない。
全てを諦め、何もかもに絶望していたあの頃の顔。
あの頃からは想像もつかないほど、心理掌握の顔は笑顔に満ち溢れていた。

「当麻先輩、このアクセサリー可愛いと思いませんか?」

当麻に向けて見せているブローチは、可愛らしい花がワンポイントのシンプルなものであった。
理由は不明だが、心理掌握はよく花がついたアクセサリーを好む。
当麻は覚えていない、その理由を。
それが心理掌握にとって大切な意味を持っている事に。

「うーん、どっちかというとこっちがよくない?」

当麻は二匹の猫が寄り添うデザインのブローチを手に取る。

「あ、当麻先輩にしてはいい感じですね」

心理掌握は少しだけ驚く。いつもは見ているだけの当麻が意見を述べてくれたことに。

だからだろうか、心理掌握は柄にもなく当麻に意地悪を言ってしまった。

「悪かったな、どうせ俺はファッションに疎いですよ」

「あはははー」

結局あれこれ迷って、心理掌握は当麻が選んだブローチを買った。

ブローチが入った袋を嬉しそうに胸に抱く。

そして次の店に行こうと、心理掌握が当麻の手を握った時、その人物は現れた。

力強き想いと覚悟

「ちょっと！　アンタ！！」

当麻と心理掌握は、声のした方を向く。
そこには、たまたまセブンスミストに来ていた御坂が立っていた。

「ん？　ゲッ、ビリビリ！！」

「あら、御坂さんじゃありませんか」

当麻の隣にいる女性が心理掌握と分かると、御坂は驚いた顔を二人に向ける。

「ちょちょちょっと！？　何でアンタとそいつが一緒にいるのよ！？」

御坂にとって明らかに接点がないと思っていた二人が、仲良くセブンスミストで買い物をしている。
しかも恋人のように手を繋いでまで。
その事に動揺した御坂は、二人を交互に見比べる。

「何故と言われましても……デートだから当然じゃないですか」

何を言ってるの？　と言いたげな心理掌握。
自信満々の態度に御坂は、ただただ動揺し続けるだけであった。

「デ、デデデデデート！！」

「ええ、そうですよ。当麻先輩とデートです」

そういって心理掌握はぎゅっと当麻の右腕を抱きしめる。

少し慌てながらも、当麻は心理掌握の行動を止めはしなかった。

（くぅっ！　なんでこいつがアイツとデートしてるのよ！？）

その事が御坂には悔しかった。だが、どうしていいか分からず二人を睨むだけしか出来なかった。

「ふぅ……御坂さん。少しあちらでお話しません事？」

心理掌握がため息を吐くと、少し離れた場所を指さす。

御坂は少し警戒したが、やがて小さく頷く。

「当麻先輩、少しだけガールズトークをしてきますね。盗み聞きしちゃ嫌ですよ？」

「上条さんはそこまで無神経じゃないですよ！？」

少しだけ意地悪を当麻にしながら、心理掌握は御坂を連れ添って当麻と離れる。

「単刀直入に言いますね。私たちの邪魔はしないでください。悪く言えば私たちの前から消えてください」

やがて当麻から幾分か離れると、心理掌握は御坂を見ながら言葉を発した。

開口一番から敵意むき出しで。

「あんた！　あいつと態度が違いすぎるわよ！」

明らかに友好的な態度とは言えない。

当麻がいないだけでここまで豹変出来るものなのか、と御坂は思った。

「当たり前です。貴方にデートの邪魔をされているのですよ。愛想よく接する必要はありません」

心理掌握は盛大にため息を吐くと、御坂を見てヤレヤレといったポーズを取る。

しまいにはお馬鹿な子を見るかのような視線を向けてきた。

（く～～、相変わらずいけ好かない奴！）

「とにかく、デートの邪魔をしないでください。それともデートの邪魔をするほど教養が無い事を晒しますか？」

その言葉に御坂は思い出す。目の前の人間がどういう能力を持っているのかを。

「第三位は人のデートを邪魔するほど心が狭い……とか？」

心理掌握は他人の心を手のひらで転がす事が出来ると言う事に。

「あんた……自分の能力でそう思わせるだけでしょう！」

「あら、人聞きの悪い。事実じゃありませんか？　現に私はデートの邪魔をされていますよ？」

「くっ」

実際の所、御坂がどう思おうが他人から見れば単なるデートの邪魔をしたとしか見えない。
心理掌握が能力を使わずとも、ほとんどの人間はそういう答えに行き着く。
そうなれば御坂には、とても大きなマイナスイメージとなるだろう。

「貴方が理解するまで何度でも警告しますね。私と当麻先輩のデートの邪魔はしないでください」

（くっそ～～～、相変わらず高飛車な性格！！）

嫌味が混ざっていたが正論で諭されたので、御坂はただ単に心理掌握を睨むしか出来なかった。
そんな視線すら心理掌握にとっては愉快なのか、勝ち誇ったように笑みを浮かべていた。

「あんた、アイツのこと……その……すすす好きなの？」

だがふと御坂は疑問に思う。
心理掌握がこれほど感情をあらわにしているという事に。
学校で顔を合わせても、ここまで感情を剥き出しにしている事はなかった。
常に沈着冷静。時には冷酷にも見えるほどに心理掌握は心を平静に保っていた。
だからこそ更に疑問が生まれる。心理掌握が当麻をどう思っているのかを。

「ええ、好きですよ。勿論、男性として……という意味ですよ？」

それが当然の答えとばかりに、心理掌握は御坂の疑問に淀みなく答える。

（こいつの事だから能力で、そういう風に仕向けたりしないのかしら？）

「貴方は私を何だと思っているのですか」

心理掌握は額に手を当てながら、御坂が分かるほどのため息を吐く。明らかに人を馬鹿にした態度に、御坂はカチンと来る。

「人の心を勝手に読むな！」

「お馬鹿過ぎる御坂さんが悪いのです。そもそも貴方は能力で自分を好いてもらっても嬉しいですか？」

心理掌握の問いに御坂は答えを返すことが出来なかった。

確かに好きとも思ってくれていない人間を、強引に好きになってもらっても嬉しくはない。

けど、例え汚い手と罵られようとも、愛して欲しいと思ってしまった。

だからこそ、御坂は心理掌握の問いに答えを返せなかった。

「私は……いえ、私だからこそ能力を使うなんて選択肢はありえません。正々堂々と、心理掌握という一人の女としての魅力で、当麻先輩を振り向かせてみせます」

御坂は心理掌握を見る。彼女からは一切の躊躇や迷いなどが感じられず、とても力強く堂々としていた。

その雰囲気に、先ほどの言葉が嘘偽りではなく、心理掌握の本心だと分かる。

「当麻先輩に愛していただけるのなら、どんな困難や境遇と出会っても乗り越えてみせますわ」

「あんた……そこまで……」

心理掌握の『覚悟』の強さを見せ付けられた御坂はただ圧倒され、何も言えず、何も出来ず、じっと心理掌握を見る事しか出来なかった。

「残念ながら今は片思いですけどね。さて、当麻先輩が待っているのでこれで失礼します」

そう言うと御坂の返事を待たずに心理掌握は立ち去った。

対して御坂は、ただ心理掌握の背中を見続けることしか出来なかった。

心理掌握は当麻の愛を得るためならばどんな事でもすると言った。

当麻がレベル５の地位を捨てろと言ったなら、彼女は何の迷いもなく笑顔で捨てるだろう。

まるで紙くずを捨てるかのように。

（私はそこまでアイツを想えているの？）

その問いに御坂は答えを見つける事が出来なかった。

優菜の秘密

その日、久々に黒子と初春が揃って風紀委員の仕事がオフであった。
御坂と佐天は、二人を連れ添って近くの喫茶店へと行く。
久々のガールズトークに華を咲かせていたが、黒子が佐天にとある質問をした。

「お姉さまの能力ですか？」

黒子の疑問にオウム返しのように佐天は尋ねた。

「よくよく考えたらわたくし達、優菜さんの能力を全く知りませんですの」

カップの中で銀のスプーンをぐるぐる回しながら、黒子は言葉を続けた。

「常盤台に一度システムスキャンに来ているから、何かしらの能力はあると思うのですの」

「ふーん、でもそんなに気になるものなの？　別に私は気にする必要は無いと思うけどな」

他人の能力に余り興味がないのか、御坂はやる気がなさそうな顔で返事をする。
佐天や初春も同様なのか、特に興味を示している様子はない。

「といっても……誰も知らないと思いますよ、白井さん」

巨大なパフェを食べながら、初春は黒子へ適当な返事を返す。

「そうですわね。誰も『知らない』からこそ奇妙ですの。別に友人同士なら能力ぐらい話してても問題はないはずですの」

だが初春の返事に納得がいかなかったのか、黒子は更に考え込む。余りの真剣さに、さすがの三人も黒子を心配し始める。

「ねぇ黒子、一体どうしたの？」

他人の能力をこれほど気にしている黒子は、初めてであった。御坂は、ここまで真剣に悩む黒子に異常を感じ始めていた。

「少し前のお話ですが……わたくしがとある病院に用事で出向いた時に、たまたま優菜さんをお見かけしましたの」

少ししてポツリポツリと黒子は話し始める。

「そこにはカエル顔の医者と優菜さん、それから患者らしき人間が話し合っていました」

「それの何が疑問なんですか？」

初春がパフェを食べるのを止めて、黒子に疑問を投げかける。病院ならごく普通に見られる光景だと、初春は思っていた。

「患者らしき人間とその付き添いをしていた人間は、カエル顔の医者ではなく優菜さんに頭を下げていましたの」

ティーカップを見つめながら黒子は言葉を続ける。

「おかしいですわよね。もし患者なら礼を述べるのはカエル顔の医者の方のはず……なぜ優菜さんの方に頭を下げていたのでしょうか」

それは些細な疑問に過ぎないのかもしれない。

だけど黒子は、その些細な疑問がじわじわと心に広がっていった。

「それからわたくしは優菜さんの能力を調べましたわ。でも、能力に関する情報は一切ありませんでしたの」

黒子の雰囲気に飲まれたのか、三人は真剣な顔をして黒子を見ていた。

しかし黒子は三人の様子を気にする事なく、更に疑問を口にする。

「勿論、友人関係にも質問してみましたの。でも、なんて言われたと思いますの？」

「知らない……とかですか？」

三人を代表して初春が黒子の問いに答える。

だが、黒子は首を横に振ると答えを言う。

「『本人から教えてはいけないと言われているので教えられない』」

三人は黒子の回答を聞いて息を飲む。

黒子は三人を一瞥すると、またティーカップへ視線を落とす。

「病院での件、能力が全く分からない件、友人への緘口令の件。わたくしはとても奇妙に見えますの」

「もしかして……何か秘密があるとか？」

ミルクティーをスプーンでくるくると回していた初春が、ふとそんな事を呟いた。

黒子もそう思っていたのか、初春の言葉に静かに頷いた。

「でもさー、そんな事を知ってどうするの？」

頬杖をつきながら御坂は呟いた。

視線は黒子に向いておらず、明らかに興味がないという事がうかがい知れる。

「まぁ端的にいいますと、わたくしの興味本位と言えますの。ついつい何か裏があるかのように思えてしまいますの」

「まぁまぁ白井さんですから」

真剣な顔をして話す黒子を、初春はパフェを食べながら茶化す。

「……初春、それはどう言う意味ですの？」

「だって白井さんですから、そういう無駄なことに労力を……痛い痛い！！　痛いですよ白井さーん！！」

パフェを食べて至福なのか、黒子の睨みにも気付かず軽口を叩く初春。

当然ながら黒子からの制裁が下り、コメカミをグリグリとされていた。

必死の抵抗をする初春だが、余り効果は見えなかった。

「う～ん、だったらさ！　初春の出番だよね！」

「初春の？」

グリグリを止めて、黒子は佐天の言葉に疑問を返す。

「嫌な予感しかしません」

涙目の初春は佐天を見ながら、どうせロクでもない事を考えていると思っていた。

それから数十分後、彼女の予感は的中したようである。勿論、ロクでもない方向で。

「書庫で調べるって……そこまでする事ですかねー」

「まーまー、ちょ～と気になるじゃない」

未だ不満を述べる初春に、佐天は困った顔をしながら宥める。

「ま、いいんじゃない」

御坂も気にはなるのか、結局ついてきていた。

黒子はじっと初春を見ており、冗談を口にする雰囲気ではなかった。

「書庫にアクセスは出来ました……あれ？」

やがて初春が書庫にアクセス完了したようだが、何か問題が発生したようである。

何度かキーボードを操作しては、首をひねる動作を繰り返していた。

「どうしたの？」

近くにいた御坂が、初春に話しかける。

う～んと唸っていたが、やがて初春は今の問題を口にする。

「いえ、優菜さんの名前で検索しても出てこないのですよ。おかしいですね……ランクA権限で入っているのですが……」

初春の言葉から、かなり高い権限で書庫にアクセスしているのだろう。

しかし、そんな高い権限をもってしても、優菜の情報を書庫から取り出すことは出来なかった。

「な～に、初春。まさか失敗したとか～？」

首を傾げる初春を茶化す佐天だが、初春は聞こえてないのかしきりに唸るだけであった。

その様子に、失敗やミスをしているようには見えない。

「……」

黙って見ていた御坂だが、やがて何かを口にしようとした。

「あ！　見つかりました。何故だが知りませんが検索対象から外されていますね」

しかしその前に初春が声を上げたため、御坂の声はかき消された。

初春の言葉に黒子と佐天は、モニターに釘付けとなる。

「……ねぇ……なーんも出てこないんだけど」

そのモニターには優菜の名前と、通っている学校しか表示されていなかった。

他の項目は全てブランク。

つまり権限が足らずに表示されないか、もしくは入力されていないかのどちらかである。

「……データがない？　そんな馬鹿な話があるはずありません。書庫は全学生の情報が記録されているはずです」

焦りの色を滲ませながら、初春はひたすらキーボードを叩く。

何かが初春のプライドに触ったのか、いつものやる気が無さそうな雰囲気はなりを潜め、ただ真剣にキーボードを叩いていた。

その雰囲気に周りは何も言うことが出来なかった。

「……え？」

初春を周りが見守って数分、突然初春が手を止める。

その顔には驚愕の色がありありと浮かんでいた。

「どうしたの？」

御坂が心配になって尋ねるが初春は答えない。

震える手でモニターのとある場所を指す。

周りは訝しげに思いながらも、初春が指差した場所に視線を向ける。

「……何……これ」

「そんな……」

「……ま、まさか……」

三者三様の言葉を口にするが、共通している事は一つ。
全員が驚きしか感じていない。
初春が指差した所には、こう表示されていた。

上条優菜に関する情報へのアクセス権限・
名前・・・・・・・・・・・・・・A権限・
学歴情報・・・・・・・・・・・・A情報
居住場所・・・・・・・・・・・・S権限・
身体情報・・・・・・・・・・・・S権限・
能力情報・・・・・・・・・・・・SSS権限
能力測定情報・・・・・・・・・・SSS権限
その他能力に関する情報・・・・SSS権限

誰もが声を失った。画面に表示されている事が本当なら、ある一つの事実が浮かんでくる。

―　上条優菜の能力は学園都市から完全に秘匿扱いとされている

しばらく画面を見続けていた四人だが、やがて初春がポツリと言った。

「優菜さんに関する情報……SSS権限でないと見れないんですよ……」

SSS権限、書庫の中でもトップレベルの権限。

つまり学園都市総括理事長のみ閲覧が許可されている情報。
優菜の能力情報は、学園都市総括理事長が気にするほどのレベルという事である。

「その上……能力に関する情報の一文字一文字に別々の暗号がかけられています」

ポツリポツリと、初春は言葉を発する。誰に話しかけているのか、本人すら理解していないのだろう。
だが、初春から発される言葉に嘘や冗談は……一切感じられない。

「このプロテクトの高さは……一体」

背中に嫌な汗を感じながら、御坂は息を飲んだ。
ここまで強固に隠そうとする情報は初めて見たからである。

「は、はは。それ……何？　お姉さまの能力情報って……学園都市の理事長様しか許されていないっての？」

乾いた笑いを浮かべながら佐天は呟く。
その顔は引きつっており、笑っているのすら無理矢理である事がうかがい知れる。

「つまり……能力に関する情報は、発覚する時点で学園都市にとってマイナスになるという事ですの？」

今まで黙っていた黒子だが、やがて自身の中で出した結論を口にする。
しかし黒子の結論に何か言える人間は、この場にはいなかった。

「ねぇ、初春さん。ちょっとレベル５全員のアクセス権限一覧を出してみて」

考え込んでいた御坂が、何かを思いついたのか初春へ頼み事をする。
少し驚いた初春だが、首を軽く縦にふるとすぐにキーボードを叩き始める。
数分して、初春はアクセス権限一覧を全員に見せた。

「……」

表示されたモニターを、御坂は何も口にせずただ無言で見続けていた。
目は真剣であり、何か考えているのだろうと三人は考えていた。

「皆、七人全員のアクセス権限を見比べてみて」

御坂に言われたとおり、三人はそれぞれのアクセス権限を見る。

「見てここ、レベル５の中で第六位だけ権限がＳＳＳ権限よね」

レベル５　第一位・・・・・・・・・・・・・・・ＳＳ権限
レベル５　第二位・・・・・・・・・・・・・・・ＳＳ権限
レベル５　第三位・・・・・・・・・・・・・・・Ｓ権限
レベル５　第四位・・・・・・・・・・・・・・・Ｓ権限
レベル５　第五位・・・・・・・・・・・・・・・Ｓ権限
レベル５　第六位・・・・・・・・・・・・・・・ＳＳＳ権限
レベル５　第七位・・・・・・・・・・・・・・・Ａ権限

表示されている文字を見ると、三人とも驚いた顔をする。
確かに第一位や第二位より、第六位のアクセス権限が高いのである。

序列だけで考えれば、明らかに下から数えた方が早い第六位が第一位より高いのである。
この事を驚かずにはいられない。もし、驚かない人間がいたならば、それは『情報を知る立場』の人間だけである。

「いい、今から言う事は私の予測よ。ちゃんとした確証があるわけじゃない」

モニターを指さしながら、御坂は全員に釘をさす。
推測でしか無い、だからいい加減な事を言うかもしれない。だけど、いい？
そう、御坂は三人に尋ねた。
三人は互いを見たりしたが、やがて全員が御坂に向かって頷いた。

「昔から奇妙な話だったのよ。第六位だけ名前も能力も一切出てこない事に」

時々考えをまとめる為に黙ったりしたが、御坂は自分の考えを説明する。

「ロストナンバー、もしくは予約番号だった……と？」

御坂は黒子の言葉に頷く。
やがて御坂は結論を述べる。

「仮定だけど……優菜さんはレベル５　第六位よ……それも……学園都市が極秘にするほどの能力を持っている……」

勿論、確証はないので間違っているかもしれない。
そう言い足す御坂だが、本人の中では確定に近いのだろう。

その顔に、迷いや悩みは見えなかった。

（優菜さん、貴方は一体……何者なの）

風紀委員の手伝い　前編

学園都市における警察的組織は二つ存在している。
『警備員』と『風紀委員』である。

『警備員』は次世代兵器で武装した教員で構成されている。
『風紀委員』は学生によって構成されている。
志願制である事が共通しているが、基本的には別組織となっている。

そのうち『風紀委員』には、最近になってとある噂が流れ始めた。
その噂とは、第一七七支部にレベル５第一位と第二位がヘルプに来たという噂である。
その内容が事実であるかどうかを問わず、噂は瞬く間に学園都市中を駆け抜けた。
勿論、馬鹿をする人間が激減したのは言うまでもない。
レベル５の実力を知っていれば、二人に捕まるという事がどういう結果を招くか。
だがそれを理解出来ない人間は、やはり一定数存在する。
そんな連中は、二人に捕まった時に初めて理解する。

この二人を敵に回したくない、と。

しかし本来の風紀委員になるには、九枚の契約書にサインして、十三種の適正試験と四ヶ月に及ぶ研修を突破しなければならない。
だが、レベル５第一位と第二位という事で、全ての試験や研修を特例としてパスしていた。
その為、ヘルプに来た日から現場に投入される事となった。

「風紀委員ですの」

一般人からの通報を受け、黒子は揉め事があったという場所に駆けつける。

そこには一人の男性が、複数の人間から手ひどい暴力を受けていた。

普段の彼女なら、単身で動いているのだが今日は少し事情が違っていた。

後ろに二人の男性を連れていたのである。

「はぁ～、まぁたスライムかよ」

「……ねみィ」

二人の男性、垣根と一方通行はまるでやる気がない雰囲気であった。

腕章をつけているので、ぎりぎり風紀委員と分かる。

しかし、腕章がなければどちらかというと『揉め事を起こす方』の人にしか見えない二人である。

「貴方たち、遊んでないで真面目にしなさいですの！」

だらけムード全開の二人に、イラついた黒子は大声で二人を叱咤する。

「あァ？　メンドクセェなァ……雑魚なんてブチ殺せばいいじゃねェか」

「死ぬほど殴ってやれば、二度と馬鹿は起こさねぇぞ」

しかし二人には何を言っても馬耳東風であり、更には黒子に文句ま

で言う始末である。
その態度に、黒子の堪忍袋の緒がブチりと切れた。
「風紀委員自ら暴力を振るいまくってどうするんですのー！」
ツインテールを逆立てて絶叫する黒子だが、やはり二人には効果がなくだらけムードを醸し出していた。
「だってなぁ……かったるいし。だがな、それよりも」
「ンだァ……どうせ手伝いだしなァ……それよりも」
ギロリと垣根と一方通行が、互いに視線をぶつけて睨み合う。
「なン（ん）でこいつと一緒なン（ん）だぁ（ァ）！！！」
「知りませんの」
今にも殴り合いにまで発展しそうな状況の二人だが、黒子から見れば単なるワガママ連中にしか見えなかったようである。
余りの子供さに黒子はため息を吐いた。
最初はレベル５第一位と第二位が、自分の支部にヘルプで来てくれると聞いて喜んだ。
自分の敬愛するお姉様より、更に上位の二人の存在を利用するだけで、治安の悪化を防ぐ事が出来ると見ていた。
今後、定期的にヘルプをしてもらうという噂を流すだけで、治安の向上も得れると黒子は睨んでいた。
だが実際に二人と出会って、その作戦を取りやめようと考えていた。
これでは単なる頭痛のネタが増えただけである。

二人のやり取りに呆然としていた加害者たちだが、やがて理解が追いつくと品のない笑いをし始めた。

「風紀委員ってのは、コントの集まりなのか？」

下卑た笑いで、三人を馬鹿にする加害者たち。
だが、一方通行と垣根は加害者たちを全く見ておらず、互いの存在しか見えていないようである。
そんな二人に黒子は、額に手を当てながらため息を吐いた。

「てーかテメェの面で風紀委員とか愉快な冗談は止めようぜ」

「チンピラ風情のメルヘンも、風紀委員の面って感じじゃねェぞ」

もう少しすれば、風紀委員が自ら事件現場を作るという自体に陥りそうである。
だが、二人の実力だけは理解している黒子は、二人の喧嘩を止める事など出来るわけがなかった。

「お、おい！　無視するんじゃねぇ！」

しかし二人の実力を知らない加害者たちは、二人に向かって大声を上げて威嚇する。
その威嚇に気付いたのか、一方通行と垣根は揃って加害者の方を向いた。

「「ウルセェ！」」

二人が叫んだ瞬間に、加害者たちは吹き飛んでいた。
ある者はノーバウンドで数メートルも飛んだ。

ある者はコンクリートの壁にめり込むほど、凄まじい力で叩きつけられた。
ある者は地面に大きなクレーターを作るほど、強烈な力で叩きつけられていた。
誰もが共通することは、全く反応する暇も与えずに全員が倒されたという事である。

垣根と一方通行は加害者たちを吹き飛ばすと、能力使用を止める。
そのままなし崩し的に、睨み合いが終わるかに見えた。

「なンでメルヘンと一緒なンですかねぇ……」

「それはコッチの台詞だ、ロリコンが」

「誰がロリコンだぁ！　そンなに素敵なオブジェになりたいンですかァ！？」

「あぁ！？　やるってのかコラァ！！！」

だがそれは淡い期待であった。
一旦は落ち着いたと思われた二人だが、またもや一触即発の事態となってしまった。
睨み合いをしていた二人だが、突然ゴンっとかなりいい音が二人の頭からした。

「私を巻き添えにしておきながら、よく好き勝手言えますね……」

どうやら優菜が、二人の頭にゲンコツを落としたようである。
優菜は盛大にため息を吐くと、メモ帳を取り出して何か書き始めた。

「垣根さんと一方通行さん、両名とも減点二です。後減点が三追加されると小萌先生に報告しますね」

メモを書き終えると、優菜はメモ帳をポケットに仕舞う。
よほど痛かったのか頭を押さえながら、垣根と一方通行は顔を上げる。

「この現場を片付けたら、一度風紀委員支部に戻りましょう」

そう言うと、優菜の言葉に従って垣根と一方通行は嫌々ながらも現場の片付けをし始める。
その光景に黒子は内心驚いていた。
黒子は勿論、風紀委員支部の誰の言う事も聞かなかった二人。
それほど好き勝手にしている二人が、優菜の言葉にだけは従っているのである。
それはある意味異常と見ても良い。

（能力といい、この二人の態度といい……優菜さん、貴方は一体何者ですの）

しかし黒子の問いに答えてくれる人間は、この場には居なかった。
やがて現場の片付けが完了すると、四人は風紀委員の第一七七支部へと戻った。

現場の片付けを終え、四人は風紀委員第一七七支部へと帰還した。

「あ、お帰りなさいー」

「お帰りだ、姉上」

部屋へ入ると、そこには初春とアリシアが出迎えてくれた。
あまりの自然さに、一瞬アリシアがこの場にいる事に、四人は疑問を感じなかった。
しかし、すぐに『何故アリシアがいるのか？』という事に気付く。

「アリシア……貴方は何故ここにいるのですか？」

四人を代表して、少し引きつった笑顔をしながら優菜はアリシアに尋ねた。
対して、淹れたての優雅に紅茶を一口含んでから、アリシアは一息つきつつ言った。

「何を異な事を、姉が居る所に妹は常にいるものだ」

至極当たり前の摂理だと言いたげに、アリシアは自信満々に答える。
優菜がいるから自分がここにいるのは当然、そう思っているようである。

「はぁ……」

アリシアの態度に呆れたのか、優菜は少しだけため息を吐いた。

しかし垣根と一方通行は、その言葉で納得したのか特に何も言わなかった。

「俺も喉が乾いた。抹茶ラテを頼むよ、花瓶」

「だから、私の名前は初春飾利ですー！」

その辺の椅子にどっかりと座ると、垣根は初春にお茶を要求する。しかし、未だに名前を読んでくれない垣根に、初春は少しだけ食ってかかる。

「だって花瓶にしか見えないですの！」

そんな初春が面白いのか、垣根は黒子の口調を真似しながら初春をからかう。

「人の口調を真似するなですのぉ！！」

初春と黒子が揃って垣根に食って掛かるが、垣根自身はひょうひょうとした態度で二人をからかい続ける。

「花、俺にはブラックを頼む」

三人のやりとりに興味がない一方通行は、初春にブラックコーヒーを要求する。

「何で二人とも私の名前をちゃんと言ってくれないんですかー！！」

その言葉が今まで垣根に食ってかかっていた初春を、一方通行の方へ意識を向けさせた。

「妾も気になったのだが、初春殿の頭のアレは成長したりするのか？」

「きっとこうニョキニョキと伸びて、いつかは体を支配するんだよ！」

「しませんー！」

プンプンと怒って垣根をポカポカと殴る初春だが、残念ながら垣根には効果がないようである。
まるで肩叩きとでも思っているのか、垣根はゆったりしていた。

「どうでもいいンだが、俺のブラックはまだかよ？」

「俺は抹茶ラテな」

「初春、紅茶をお願いしますの」

散々弄られた上に、それぞれの飲み物を入れる事を要求される初春。
しなを作って、およよとわざとらしく泣き崩れる。

「えぐえぐ……皆して私を虐めます」

「……さて、初春。ここに残っている仕事は一体どういう事ですの？」

黒子の言葉に、しなを作った状態でピタっと止まる初春。

「お茶入れてきますー！」

「初春ー！　また貴方はサボりましたんですの！？」

その場にいる全員からの射抜く視線に晒された初春は、直ぐ様立ち上がると逃げるように奥へ引っ込んだ。

どうやら、アリシアと遊んでいたのか見回りに行く前と、同じ量の仕事が残っているようである。

「やっほー、遊びに来たよー」

「佐天さん、ここは遊び場ではないのですの」

正規の風紀委員ではない佐天が、第一七七支部へとやって来たようである。

しかし、気軽に入ってくる佐天に、黒子は小言を言って釘をさす。

「なんだ、オセロ。別に構わんだろう」

椅子に座ってぼーっとしていた垣根が、笑いながら黒子を誂う。

垣根から見れば女が増える事は、歓迎しても文句は言うはずがないからである。

「オセロって言うなですのぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

垣根がつけた黒子のあだ名に、黒子はブチリと堪忍袋の緒を切れるのを感じた。

理由は不明だが、垣根と一方通行は自分の事を最初から「オセロ」と呼んできた。

何となく小馬鹿にされている、そう黒子は感じていた。

「だってオセロですの！」

ツインテールを逆毛立てて、憤怒の形相で垣根を見る黒子。
明らかに激怒していると分かるが、その程度で垣根が誂うのを止めるはずもなかった。

「おんどりゃぁぁ！！　ブチ殺すですのぉぉ！！」

「やってみろですの！」

黒子は憤怒の形相で、垣根は意地の悪いにやついた顔で互いにぶつかり合う。
当然ながら、黒子ではレベル5第二位に勝つ事など不可能である。
一分も立たないうちに、潰れたヒキガエルのように黒子は倒れていた。
プスプスと体のあちこちから煙を上げる黒子に対して、垣根は無駄に爽やかな笑顔で黒子を見下ろしていた。

「阿保が……」

垣根と黒子のやり取りを一部始終見ていたアリシアは、盛大にため息を吐きつつ呟いた。
一方通行は最初から興味がなかったのか、明後日の方向を見ていた。

「あーお姉さまと知らない人がいるー！」

支部に入った直後、初春の元へ歩み寄り一緒にお茶を入れていた佐天が戻ってきた。
優菜とアリシア、そして垣根と一方通行の顔を見て驚く。

「お姉さま……だと？」

佐天の言葉に、聞き捨てならない言葉を聞いたアリシアは佐天に詰め寄る。

しかし、一歩遅く佐天は優菜へと駆け出していた。

「お姉さま！」

そのままの勢いで優菜へ抱きつく佐天。

困った顔をした優菜だが、無下にも出来ないので佐天をしっかりと受け止める。

心地良いのか、佐天はそのまま優菜へスリスリとし始めた。

「き、きききき貴様ぁ！！！　妾の姉上に何という狼藉を！」

佐天の行動に硬直していたアリシアだが、やがて理解が追いつくと佐天を引き剥がそうとする。

しかし、身長差があり単にアリシアが佐天の腰にしがみついているようにしか見えない。

「うわっ！　何、何なのよー」

至福の時間を邪魔されて、若干不満気味の佐天がアリシアを見る。

「妾の姉上に馴れ馴れしくするな！」

対してアリシアは、猫のようにシャーと歯を剥き出して佐天を威嚇する。

「えぇ？　お姉さまは私のお姉さまよ！」

威嚇されて一瞬怯んだ佐天。
だが本能的に理解したのか、優菜の妹の座を巡ってアリシアと対立する。

「新参者が、貴様ごときが姉上の妹を名乗るなど千年早いわ！」

互いに優菜の妹は私、を譲らず睨み合いを続ける。
やがてアリシアが猫のように立てた爪を振り下ろす。
がしっ！と音がして、アリシアの手のひらを、佐天が手のひらで受け止める。

「ぬぐぐぐぐぐ」

「ぐぎぎぎぎぎ」

互いに負けられないと思っているのか、一進一退の攻防を続ける二人。
そんな二人を見て、額に手を当てて優菜はため息を吐いた。

「はぁ……当麻じゃありませんが私も不幸です、と言いたいです」

しかし優菜の呟きは、二人の耳には届かなかった。
結局二人の攻防が終わったのは、それから一時間近くたった後であった。

「所でよォ……いつまでこンな面倒な手伝い続けるンだァ？」

「そうだな、スライム狩りはそろそろ飽きてきたぞ」

風紀委員の手伝いを僅か一日で飽きたのか、早くも不満を言う二人であった。

「貴方たちが半壊させたグラウンドが、完全に元通りになるまでです」

優雅に紅茶を飲みながら、優菜は二人の不満を一刀両断する。
左右で睨み合う佐天とアリシアは、気にしないことにしてるようである。

垣根と一方通行が、風紀委員の手伝いにきた理由。
それはグラウンドを、完膚なきまで破壊したのが本当の理由である。
とある日、小萌は研究所へ出張、優菜と当麻は理后の治療により学校に来れなかった。
つまり二人のストッパー役が、揃って学校にいなかったのである。
そんな状態で、二人が出会うとどうなるか。
簡単である、周りを考えずの喧嘩をし始める。
結果、学校のグラウンドがまるで戦争でもあったかのようにボロボロになってしまった。

後日話を聞いた小萌は、泣きながら二人を説教。
最終的に、風紀委員の手伝いをするという罰則が下された。
しかし二人だけでは、同じ過ちが繰り返されるかも知れないと教師陣は考えた。
そこで、二人のコントロール役として優菜に白羽の矢が立った。
明らかにとばっちりである。
だが、ため息を一つ吐いた後に優菜は「わかりました」と仕方なさそうに答えた。
二人が優菜に大人しく従うのは、完全なとばっちりを引き受けた優菜に頭が上がらないからである。

「つーと、一週間程度か……うわ、面倒くせぇー」

しかめっ面をして垣根は愚痴を呟く。

当然、優菜はその愚痴を完全に無視した。

完全下校時刻を過ぎたため、風紀委員の仕事を終えた優菜は真っ直ぐ帰宅する。

佐天との一悶着があったためか、アリシアは当然のように優菜と一緒に帰宅していた。

「アリシア、涙子さんと喧嘩は駄目ですよ？」

「幾ら姉上の頼みとはいえ、こればかりは聞けない。あ奴とは遺伝子レベルで噛みあわん」

プイッとそっぽを向くアリシアを見て、優菜は困ったような苦笑を浮かべる。

やがて優菜の家に到着すると、アリシアは優菜を見上げながらとある疑問を口にする。

「姉上、ソロルの儀式で述べた誓いの言葉。あの時の言葉は今も有効なのだな？」

いつもの勝気な雰囲気はなりを潜め、アリシアは思いつめたような感じの顔をしていた。

まるで捨てられた子猫のように、不安な気持ちを隠そうともせず、救いを求めるように優菜を見つめた。

その顔を見て、優菜はアリシアの本当の姿を思い出す。

彼女はいつも偉そうな言い方をするが、本当は寂しさや悲しみを人

一倍恐れている。
そんな弱さを隠すために、仮面をつけて生きている彼女の姿を見て誓ったはずだ。
彼女を寂しさや悲しみから守れる『姉』になろうと。

優菜はポケットからある物を取り出すと、ソレをアリシアの前にかざす。
一瞬驚いたアリシアだが、すぐに安堵した笑みを浮かべる。
そして、ポケットから優菜と同じものを取り出すと、同じように優菜の前にかざす。

「「誓いの言葉を」」

目を瞑り、二人はソロルの儀式で述べた誓いの言葉を語り出す。
違える事の決して無い誓約の言葉。

「「これより永遠にわれらふたり、死が二人を分かつときまで、変ることなく君とともに歩まん」」

風紀委員の手伝い　後編

レベル5第一位と第二位が、風紀委員を手伝ってはや数日。
慣れてきたという事で、公平な判断の結果、黒子と一方通行ペア。
そして垣根、優菜、初春の三人という組み合わせで見回りを行うことになった。

「今日もスライム狩りですなぁ、花瓶」

「違います！　それに私の名前は初春飾利ですー！」

いつも以上にやる気がない垣根と、変なあだ名をつけられて怒り心頭の初春。

「……はぁ」

垣根という問題児に頭を悩ます優菜であった。
実際、垣根と一方通行による風紀委員の手伝いに関しては、大きな問題は発生しなかった。
それ所か、他人とは比較にならないほどの効率を弾き出していた。
だが、それ以上に風紀委員内部で問題行動も起こしていた。

「いや、どう見てもよぉ……」

垣根はちらっと初春の頭を見る。そこには、今日も花をかたどった髪飾りが初春の頭に乗っていた。

「花瓶だな」

初春の頭を遠くからみると、どう見ても花瓶のように見える。
そう思った垣根は、オブラートに包まず直球で言い切る。

「どこを見て言ってるのですかー！」

少しだけ涙目になりながら、垣根の背中をぽかぽかと殴る初春。
明らかに力が入っていないので、垣根にとっては単なるマッサージ気分であった。

「……はぁ～」

額に手を当てながら、優菜は深い溜息を吐く。
その日の活動の評価を下すため二人の行動は、最終的に優菜へ報告されるようになっている。
その為、毎日二人の問題行動を聞かされたので、幾ら優菜でも気分が滅入ってしまった。

「お、な～んかあっちで誰か揉めてるぜ」

初春のぽかぽか攻撃を受けている垣根が、ふと遠くを見ながら二人に向かって言った。
優菜と初春は垣根の視線を追う。そこには、確かにめ事を起こしている人間がいた。
遠くからははっきりと分からないが、二人の男女が言い争いをしているようである。

「いえ、垣根さん。見てるだけじゃなくて早く止めないといけません！」

「へいへい、んじゃ馬鹿をぶん殴るか、花瓶」

明らかにやる気がない雰囲気の垣根。

だが、そろそろ真面目にやらないと優菜から拳骨が落ちてくる。

その事を理解した垣根は、欠伸を噛み殺しながら初春の後をついて行った。

優菜も二人の後を追い、揉め事を起こしている人間の元まで駆け寄る。

やがて三人が現場へとたどり着く。そこには……

「だから勝負しなさいって言ってるでしょう！」

「上条さんはこれから特売に行かないといけないんですよ!?　そんなのに付き合ってれるかぁ！」

「アンタ！　あたしより特売を取るって言うの!?」

「何でそうなるんだよ、意味分からねぇよ！」

当麻と御坂が道のど真ん中で、他人の視線を全く気にせず痴話喧嘩をしていた。

その光景に三人は、深い溜息を吐く以外出来なかった。

「おい、上条」

無視して立ち去りたい衝動にかれれたが、垣根はぐっと堪えて当麻に声をかける。

「ん？　垣根じゃないか。どうしたんだ、こんな所で」

「アンタ誰？」

当麻は友人を見る目、御坂は怪しげな人間を見る目で垣根を見る。
垣根は顎に手を置いて少し考える。

「俺か？　俺は……」

そう言うや否や、腕につけた腕章を二人に見せるように立つ。
そしてニヤリと笑うと、垣根は口を開いた。

「風紀委員ですの！」

キリッとした顔で自分の立場を名乗る垣根。
しかし周りはハトが豆鉄砲を食ったような顔をして垣根を見ていた。

「あれ？　オセロの真似をしてみたんだが違ったのか？」

行動自体がおかしい事に気付かない垣根は、周りの反応に首をひねるだけであった。
優菜は盛大にため息を吐くと、メモ帳を取り出しペンを走らせる。

（減点四）

新たにマイナス点が追加された垣根だが、優菜の行動に気付くことはなかった。

「オセロって誰だ。いや、どうでもいいがこのビリビリ娘をどうにかして下さい」

早く特売に行きたいのか、そわそわしながら垣根に頼み込む当麻であった。
相変わらず主夫の鏡だなと思いつつ、垣根は当麻の期待をぶち壊す。
「大丈夫だ、お前もセットで逮捕だ」
「何が大丈夫なんですか！？」
「ひとまず軽く事情聴取だ。一体何があったんだ？」
がっくりとうな垂れる当麻だが、早く終わらせたいのか素直に事情聴取に応じる。
御坂も相手が風紀委員とわかったため、こちらも当麻と同様の態度であった。
十分ほどして、簡単な事情聴取は終わる。
垣根は二人を交互に見ながら、今までの経由を確認する。
「超電磁砲が上条に話しかけた。だけど、上条は特売に急ぐために走っていたから気付かなかった。で、超電磁砲が電撃を上条にぶつけた、間違いはないか？」
内容的に間違っていないため、当麻は首を縦に振りつつ答える。
「兼ね兼ね間違ってないな」
「アンタが気付かないのが悪いのよ！」
しかし御坂にとっては何かがイラつくのか、電気をまき散らしながら当麻に食いつく。
ところ構わず撒き散らされる電気に、垣根は目を細めて軽く腕をふ

るう。

「あー邪魔だ」

腕を振るった直後、周囲に飛び散っていた電気が跡形もなく霧散する。

「なっ！？」

軽く腕をふるうだけで自分の電気を消された。

その事に少なからずショックを受けた御坂は、垣根を警戒心剥き出しのまま、睨むように見る。

その視線を無視して、垣根は射ぬくような視線を御坂に向ける。

「とりあえず話を最後まで聞け。それから文句は受け付けてやる」

有無を言わせぬ垣根の視線に、御坂は言葉を飲み込んで俯くことしか出来なかった。

「超電磁砲、一つ質問だ。お前はそんなに上条が嫌いなのか？」

「え？　いや……その」

突然の質問に御坂はあたふたとしながら答える。

だが、垣根はそんな御坂を気にせず更に言葉を発する。

「第三者の立場から言わせてもらう。そんな事しているのは上条が嫌いって以外に理由がつかないんだよ」

「うっ……べ、別に嫌ってないけど……その」

少しだけ顔を赤くしつつ、御坂は当麻をチラチラと盗み見する。
その視線に気づいていないのか、当麻はあさっての方向を見て何かブツブツと言っていた。
その態度で納得がいった垣根はため息を吐く。

「はぁ……お前な、上条の立場になって考えてみろ。良く解らん理由で電撃が飛んできてみろ、それが続くと嫌いになるぞ？」

「いや、俺は別に……」

話自体は聞いていたのか、垣根の言葉に当麻は否定をしようとする。
だが垣根はそれを手で止めると、当麻の方を見ずに言う。

「上条も黙ってろ、さっきも言ったがお前ら話を最後まで聞け」

その言葉に当麻は言いかけた言葉を飲み込むしかなかった。
優菜や初春も、垣根に任せているのか言葉を挟む雰囲気は感じられない。

「超電磁砲、お前が本気で上条を嫌っていないのはわかった。だがよ……」

そこで垣根は言葉を切ると、深く息を吐き出す。
あんまり柄じゃないな、と思いつつも垣根は言葉を紡ぐ。

「思い通りにいかないからって電撃をぶつけるのはただの阿保だ」

「なっ！？」

馬鹿にされたことに少なからず怒りを覚えた御坂は、何か言い返そうと思った。
だが垣根から発される雰囲気は、反論する余地すら許さなかった。
その雰囲気に飲まれた御坂は、ただ悔しげに唇を噛む事しか出来なかった。

「お前は単に自分勝手な思いで突っ走っているだけだ。それで勝手に自分の期待通りに動かない上条に、八つ当たりをしているだけだろう。それで上条が気付かないのが悪い？　随分と自己中な話だな」

垣根は御坂を見ながら、辛辣に御坂を責め立てる。
その目に冗談などは微塵も感じられない。

「勝手な思い込みで癇癪を起こしている人間に、誰が冷静に対応してくれるってんだ？　まだ上条が優しいから付き合ってくれているんだよ。だけどな、上条の優しさに甘え過ぎるな、ワガママ言い続けて上条を困らせるんじゃねぇ」

少しだけ自覚があったのか、御坂は痛い所をつかれたような顔をする。

「テメェで行動も起こしてねぇ癖に、上条が気付かないからって切れてるんじゃねぇ。テメェの弱さを上条に押し付けるな」

グサグサと心に刺さる言葉を次々に投げかけられ、御坂は目に涙を浮かべる。
だが、その自覚はあったのか、垣根に反論することなく下を向いているだけであった。
垣根はそんな御坂を見て、深い溜息を吐きつつ頭をかく。

「なぁ超電磁砲。別にお前を泣かすためにこんな事を言ってるんじゃねぇ。もし上条が呆れて相手にしなくなったらどうなると思う。テメェに待ってるのはただの悔やみきれない後悔だけが残るんだぞ？」

その言葉に御坂ははっとなる。
確かに目の前の男が、自分を辛辣にせめても利点が見つからない。
それに、彼の言葉はとても説得力がある。
まるでそれを経験してきたかのような……。

「俺の言葉を聞いて今後どうするかはお前次第だ、超電磁砲」

そう言うと御坂の言葉を待たずに、垣根は当麻の方を向く。
少しだけ怒っている垣根に、当麻はバツの悪そうな顔をする。

「上条も、この前言っただろう？　鈍感なのもいいが、鈍感すぎるなと。気づかれないってのはな、案外寂しいもんなんだよ。ちったぁ周りの人間の気持ちにも気づいてやれや」

当麻まで近寄ると、垣根は当麻の肩をポンポンと叩く。
軽く諫める感じの叩き方に、垣根の目を見て当麻は頷いた。
それを見て、垣根は陽気の笑みを浮かべて当麻と御坂の背中を軽く叩く。

「じゃあお前ら二人とも、風紀委員支部まで連行だぁ！」

今までの重苦しい雰囲気を吹き飛ばすかのように、垣根は努めて明るい口調で言った。

風紀委員の手伝い　番外編

黒子と一方通行は、大通りの見回りをしていた。
ここ最近の治安はかなり良く、大きな事件は全く起きなくなっていた。
勿論、第一位と第二位が風紀委員を手伝っている点が主な理由である。
しかしそれだけではない。
誰もが見逃しそうな所にいち早く気づき、状況に合わせて的確な判断を下せる。
そんな二人の地道な活動も、現在の平和を作り出している理由となっている。
最も、その影で黒子と初春がからかわれるという事態も招いているが。

「一方通行さんも、風紀委員の仕事に大分慣れてきていますの」

研修も何もかもすっ飛ばしたのに、わずか一時間で仕事を理解し的確にこなしていった。
そんな二人を黒子は、さすがレベル5第一位と第二位だと改めて思った。

「褒めても何にもでねェですの」

人の悪い笑みを浮かべながら、一方通行は黒子をからかう。
この数日で黒子という人間を理解しきったのか、一方通行が黒子をからかう頻度はかなり高くなった。
初日あたりは垣根の方が酷かったが、今では一方通行の方が酷い状態になっている。

ちなみに垣根は飽きたのか、ほとんど黒子をからかわなくなった。

「貴方といい垣根さんといい、どうして人の口調を真似するんですの！」

そうやって怒るから弄りがいがあるんだよ、と一方通行は思ったが決して口には出さなかった。

何故なら、そう教えるとからかえなくなるからだと思ったからである。

「いいじゃねェか、オセロ」

黒子の怒りをスルーして、一方通行はケタケタと楽しそうに笑う。

「だからオセロって言うなですの！！」

ここ数日で黒子の沸点は確実に下がったと、黒子自身すら理解できるほどよく怒っていた。

しかしブチ切れても反撃されるため、ただ怒ることしか出来なかった。

レベル５第一位と第二位の力の燐片を味わった黒子は、本能的に理解していた。

自分の敬愛するお姉様でも、第二位すら倒す事は不可能だと。

更にその上にいる第一位を自分が倒せるわけがないと。

絶対的な力の壁が存在していると感じた黒子は、一方通行に弄られてもただ怒りを見せるぐらいしか出来なかった。

「でもよォ……お前の名前は白井黒子だよなァ？　略せば白黒だなァ……だったらオセロじゃねェか」

しかし頭では理解してても、心は別であった。
ブチリと黒子の何かが切れる音がすると、ツインテールを逆立てて一方通行に襲いかかった。

「この白もやし野郎がぁ！！　殺ってやるですのぉぉぉぉぉ！！！」

「かかってこいですの！」

そして激突する二人。結果は勿論、黒子の完全敗北で幕を閉じた。
プスプスと煙をあげる黒子を見て、一方通行は無駄に何かをやり遂げた顔をしていた。

「阿保か、レベル5第一位様をナメるンじゃねェ」

パンパンと手をはたくと、一方通行は杖を手に取る。

「何をしているのですかー？」

「いや、オセロをからかっていたら、逆切れされたンでな。返り討ちにしてやったンだよ」

「そうですかー、それはそれはご苦労様ですー」

「ン、ご苦労……様……」

ふと一方通行は違和感を感じる。自分は一体誰と会話しているんだ？　と。
目の前には黒子が煙を吹いて倒れている。確実に風紀委員の人間ではないと分かる。
そしてこの声は、何処かで聞いた覚えがある。そう、いつも聞いて

いる気が。
一方通行は恐る恐る後ろを振り向く。
「一方ちゃん、ちゃんと理由を説明してくれますよね？」
そこには額に青筋を浮かべ、にっこりと笑っている小萌が立っていた。
「ハイ……」
一方通行に残された道は、ただ黙って小萌の言う事を聞き、説教を受ける以外なかった。
後日、一方通行には風紀委員の手伝いという罰則が一週間延長された。
しかし、それに伴って優菜の手伝いも延長されたのは言うまでもない。

その日、当麻はセブンスミストへ来ていた。
勿論、この日は買い物の付き添いである。
その相手とは。

「あ～、これよくない？」

「しずり、それはちょっと……」

沈利が手にとったある物を見て、理后は眉をひそめる。
反応が鈍い事に首を傾げる沈利は、フレンダと最愛にも見せてみた。

「沈利姉ちゃんは超大胆すぎます」

「結局、この中で一番のプロポーションだからって訳よ」

しかし理后と同じで、やはり反応は鈍かった。

「ねー当麻。これはどうよ？」

最後の望みとばかりに、当麻にもある物を見せる。
しかし当麻は赤い顔をして、あらぬ方向を見てから口を開く。

「あの……沈利お姉さま……上条さんに女性の下着選びはレベルが高すぎる訳ですが……」

沈利が持っているある物、それは女性の下着であった。
それもかなりきわどいデザインの。

「ん～、反応が鈍いね。んじゃ、他のを選びますか～」

全員からの反応が鈍かったので、沈利はその下着を元の位置に戻す。

「不幸だ……どうして姉妹の下着選びに付き合わされているんだ」

しかし当麻には意見を言う権利がない。

それは、軍覇との一件に由来する。

『当麻～、明日は買い物行くから付き合いなさい』

『え～、明日は久々にゆっくりしようと思ったのに』

リビングでダラダラと映画を見ていた当麻は、沈利の提案に不満を言う。

『それは超聞き捨てなりません、沈利お姉ちゃん』

当麻の膝の上に座っている最愛も、沈利の提案に不満を口にする。

普段の姉妹なら、ここでワーワー言い合う展開になるが、今日の沈利には必殺の武器があった。

『んふふ～、当麻ぁ～。これが何だか分かるかにゃ～？』

沈利は手に持っていた紙を、当麻にピラっと見せる。

『ん？　ゲッ、これは！』

『当麻が書いた、あたしの言う事を何でも一日聞く権利書だにゃ～ん』

軍覇の時に全額を失った当麻は、最終手段である沈利にお金を借りるという方法に出た。
苦笑しながらお金を出してくれた沈利だが、勿論タダという訳にはいかなかった。
無計画にお金を使おうとした罰として、当麻は『一日沈利に従う宣誓書』を作らされたのである。
その宣誓書を、早くも使ってきたというわけである。

『さぁて当麻。もう一度聞くよ？　明日はあたしに付き合いなさい』

『はい……』

必殺の武器を使われた当麻に選べる選択肢は、たった一つしか無かった。

『む～、超ずるいです』

『そうよ、ずるいって訳よ！』

『しずり、そんな手を使うのは応援できない』

どう言う耳をしているのか、何故かフレンダと理后が沈利の話を聞きつけてやって来た。

『そう？　じゃあこの紙は撤回するわね』

また揉め合うのか、そう当麻は考えていたが、意外にも沈利はすぐ

に宣誓書を撤回させた。
余りに素直なために、当麻は勿論理后たちも訝しげに思った。

『じゃあ当麻、明日は家族で買い物よ！　それなら文句はないでしょう？』

『……はっ』

ニヤっと笑う沈利を見て、当麻は理解する。
元から沈利はあの宣誓書を使う気はなかった事を。
宣誓書をチラつかせて当麻を拘束出来ればよし、出来なくても家族で買い物にシフトすれば不満など上がらない。
案の定、理后たちは不満を口にする事はなかった。
むしろ明日は何処へ行くか、という話で盛り上がっている。

『不幸だ……』

沈利による拘束から逃れる道など残されていなかった当麻は、ただうな垂れるしかなかった。
そしてもう一人、浜面の予定が完全に無視されたのは言うまでもない。

今も外で待機させられている浜面を哀れに思いながらも、当麻は視線をあちこちへ彷徨わせる。
姉妹がいるのである程度は下着に耐性があっても、やはり気恥ずかしい気持ちはある。

「とうま、とうま」

「ん？　どうしたんだ、理后姉ちゃん」

明後日の方向を見て余り下着を見ないようにしていた当麻に、理后が後ろから声をかける。

「これ、どうかな」

「どういって言われても上条さんはぶはぁ！！」

後ろを振り向いて理后の方を見た当麻だが、理后の持っている下着を見て思わず吹いてしまった。
ぷるぷると指を震えさせながら、当麻は理后に下着の事を尋ねる。

「り、理后姉ちゃん……それは……なんですか」

「スケスケ」

理后が見せたほのかに透けた下着。
それはどう見ても下着の意味を成さないほどの代物であった。

「理后姉ちゃん！　お願いだから普通のをお願いします！」

盛大に首を横に振って、当麻は理后にＮＧを伝える。
ちょっとだけしょんぼりしながら、理后は下着を元の位置へ戻しに行った。

「当麻ぁ、こんなのどうかな？」

理后と入れ替わるように、今度は沈利が当麻に選んだ下着を見せに来た。

「沈利姉ちゃん！　どう見てもＮＧですよ！」

それって下着なの？　と当麻は疑問を抱いた。
布地の面積が限りなくゼロに近い。
もはや何のための肌着なのかわからないレベルである。

「えー、当麻が脱がせやすいように紐パンにしたのにー」

自慢のチョイスだと思っていたのか、沈利は当麻の反応に少しだけ不満そうに頬を膨らませる。

「何で上条さんが脱がす前提なの!?　え？　ちょっと！　無言で去らないでください、沈利お姉さま!!」

ニヤニヤしつつ沈利は、手に持っていた下着を元の位置へ戻しに行った。
確実に何か企んでいるという顔に、当麻は不幸の予感をヒシヒシと感じていた。

「当麻お兄ちゃん、これはどうって訳よ」

今度はフレンダがやって来て、手に持っている下着を当麻に見せる。
姉二人より幾分マシな下着だった為、当麻は特に焦る事はなかった。
しかし、一つだけ疑問を感じていた。

「いや、どうって言われても……てーか何故にシマシマ？」

フレンダが持っている下着は青と白、赤と白という二種類のストライプ下着であった。
何故このチョイスをしたのか、当麻には理解が出来なかった。

「この前テレビでやっていたんだけど、男の人は縞々ぱんつが好きと言っていたって訳よ」

「どんなテレビだよ、それ！　てーか、それはごく一部の特殊な方々ですよ！？」

例えば青髪ピアスとか、と当麻は考えたが口にはしなかった。
口にすれば、あの似非関西人が出没しそうと思ったからである。
当麻の解答が気に入らなかったのか、フレンダはぷくぅっと頬を膨らませて不満顔をしていた。

「当麻お兄ちゃん、これは超どうですか？」

どうしたものか、とフレンダへの対応に困っていた時に最愛がやってきた。
手に持っている下着は、ブラとパンツのセット物である。
パンツには小さなフリルが、ブラにはアクセントとして小さなリボンが付いていた。

「うむ……やっぱり最愛が一番マシなのを選ぶな。でも、お前ってブラとか必要だっけ？」

「ム、当麻お兄ちゃんは超失礼です。私だって超成長してます」

唯一まともな下着を持ってきた最愛を褒めるが、ふと疑問に思ったことを当麻は口にした。
相変わらず女心がわからない当麻であった。

「その割に、いつも俺の膝の上がお気に入りだったりするけどなー」

「それとこれは超別問題です。当麻お兄ちゃんの膝の上は、私の超特等席ですよ」

最愛は家で映画を見る時や暇潰しでテレビを見る時は、常に当麻の膝の上に座っている。
当麻が何度言っても、膝の上に座るのを最愛は止めなかった。

「当麻お兄ちゃん、これはどうって訳よ！」

ストライプ下着を止めて、フレンダは別の下着を持ってきた。

「ぶふぉ！　なんでガーターベルト！」

「ふふん、私の脚線美を見せてあげるって訳よ」

自信満々にガーターベルトを掲げるフレンダ。
この場に沈利が居ない事が幸いした。足の話題は沈利の前では禁句だからである。
もし口にすれば、恐ろしい制裁が下される事になる。何故か浜面に。

「おや？　あれは……おーい、兄上ー」

フレンダや最愛とわいわいやっていると、見知った顔が当麻に声をかけてきた。

「「兄上？」」

アリシアの声にオウム返しのように、フレンダと最愛は呟く。

「お、アリシアじゃねぇか。お前も買い物か？」

当麻の元まで歩み寄る、他称赤いランドセルが似合う少女であるアリシア。

いつもの様に腕を組み当麻を見上げる。

「うむ、退屈だったので買い物に出かけたのだ。そしたら兄上を見かけたので、声をかけたという訳だ」

「あー、そうなんだ」

アリシアをよく見ると、彼女が何も持っていない事に当麻は気付く。

恐らくウィンドウショッピングというのをしていたのだろう、そう当麻は判断した。

「所で兄上は何故に女人の肌着売場へ？　まさか女装の趣味でもあるのか？」

「違いますよ！　上条さんは家族で買い物ですよー」

周囲を見渡していたアリシアからの疑問に、当麻は全力で否定をする。

下手に噂が流れば『女装趣味の当麻』という汚名をそそぐ事になる。

「「当麻お兄ちゃん！」」

今まで黙っていたフレンダと最愛が、当麻へと詰め寄る。

あまりの迫力に、当麻は一瞬たじろいでしまう。

「「その娘との関係を（超）詳しく！」」

当麻と仲良く話すアリシアに嫉妬を感じた最愛とフレンダは、当麻にアリシアとの関係を尋ねる。

「おお、なれらが兄上の妹君か。我が名はアリシア・フォン・コルネリウス。兄上とは同じ学び舎に通っておる」

最愛とフレンダに気付いたアリシアが、姿勢を正して挨拶をする。優雅に挨拶をするアリシアだが、最愛とフレンダは別の事に意識を取られていた。

「え、この身長で……」

「当麻お兄ちゃんと超同じ年……ですか？」

当麻の身長は一六八センチ、対してアリシアは一三〇センチをゆうに下回っている。

「えー、信じられないかもしれないが……同じ年です」

「おおうつけが、女人の身体的特徴に触れるな」

自覚はあっても、やはり身長には触れてほしくないのか、アリシアは少しだけ怒りを滲ませる。

「ははは、所で優菜と一緒ではないのか？」

とりあえず話題をそらそうと当麻は思ったので、優菜の事を尋ねる。基本的にアリシアは優菜と行動を共にしている。

「姉上なら今日は別件で外出されておる。何やら秘密のようだったので、妾は大人しくお留守番という訳だ」

「お前、ほとんどいないか……」

小萌の家に厄介になっているが、アリシアはほとんど優菜の家に居座っている。

一方通行には、生活費等を渡しているようではあるが……。

だが、一方通行からしてみれば、『子供から金を巻き上げているように感じる』との事らしい。

その為、優菜を経由してアリシアにお金を返しているようである。

「まぁな、妾と姉上は姉妹だからな。おっと、そろそろ姉上が戻ってくる時間だ。またな、兄上」

「おう、またなー」

手を振るとアリシアはそのまま当麻の前から立ち去る。

「なんか、すっごい古風な喋り方って訳よ」

「むむむ、超ライバル出現ですかね」

アリシアと当麻の会話を聞いていたフレンダと最愛は、当麻に聞こえない程の声量で話し合う。

勿論、アリシアの存在についてである。

「まぁ当麻お兄ちゃんは超渡しません！」

フレンダと最愛は顔を見合わせ、無言で頷きあう。

（（妹の座は絶対に渡さない！））

学園都市の外

当麻は半分寝ぼけたまま、うっすらと目を開ける。
視界に映るのは、いつも見ている天井ではなく豪華な照明であった。
横倒しの視界に映るのは、とても手入れの行き届いた机や椅子などの調度品。
一般家庭では、まずお目にかかれないほどの高級品である。
軽く伸びをすると、ふわっとカーテンレースが風で浮き上がる。
ちょっと鼻を動かすと潮の香りがした。

ここはいつも当麻が住んでいる家ではない。学園都市ですらない。
一般世界・某県の某海岸。
某高級ホテルにあるオーシャンビュータイプのスイートルームである。
そんな部屋に一人で寝ていた当麻は、ぼんやりする頭で独り言を呟く。

「……あ、そっかぁ。オレは学園都市の外に来てたんだっけ」

無論、当麻が一人でこのような場所に来たわけではない。
別の部屋には姉妹が四人で寝ているはずである。
いつも最愛と一緒に寝ているので、せめて外にいる間ぐらいは一人でゆったりさせよう。
そんな沈利の提案で、当麻は豪華な部屋に一人で眠っていたというわけである。
最後まで最愛がぐずったのは言うまでもない。

何故当麻が学園都市の外にいるのか……それは親たちに会う為である。

当麻の記憶消失は、垣根を筆頭とする「上条当麻の記憶再生計画」である程度まで戻っている。
しかし、それはあくまで『学園都市にいる間』がほとんどである。
当麻が学園都市に来る前は、殆どと言っていいほど再生されていない。

幼少期から学園都市にいた当麻にとって、学園都市の外の記憶を保管してくれる人物はたった二人である。
そう、自分の父親と母親だ。二人の協力無くして、その記憶を手に入れる事は出来ない。
知らない方が幸せ、という言葉もある。
だが自分の愛する家族に、嘘をつき続けるという重荷に耐え切れなかった当麻は決断した。
自分の親に、記憶消失の事を話すという事に。

当然、父親の刀夜も母親の詩菜も驚きを隠せなかった。
詩菜に至っては、ショックでぶっ倒れてしまったぐらいである。
だが、刀夜も詩菜も当麻の現状を理解すると、記憶を取り戻す事に了承してくれた。

といってもどうするべきか？　という問題が当然の如く立ちはだかった。
紆余曲折を経て、結局は顔を合わせて思い出を語るのがベターだと結論づけられた。

では何処で出会うべきなのか？　という問題が新たに発生する。
当麻一人なら問題無かったが、その旅行に何故か姉妹たちが付いて来ると言い始めた。

本来、学園都市では機密保持と各種工作員による生徒の拉致の危険

性を考慮して、滅多な理由では学生を外に出す事はない。
特に沈利は、学園都市でも七人しかいないレベル5である。
その上、最愛や理后たちも研究所の手伝いをしており、そうそう簡単な外出の許可が出るとは思っていなかった。
よく外出の許可が降りたな、と当麻は思っていた。

事実、本来なら三枚の申請書へサインと、血液中に極小の機械を注入する。そして保証人の用意までで問題はなかった。
しかし、沈利たちが外出する時は書類の数は数倍に増え、更には行動予定表の提出を求められた。
保証人も親限定とされ、緊急時の通信機器を携帯する義務までつけてきた。
このホテルも学園都市協力派の施設に当たるそうだ。

色々なしがらみはあるが、ようやく両親と出会える……と思ったのだが。

「それにしても急な仕事とか……父さんはいつも忙しいのか？」

記憶にある刀夜の顔を思い出す。
自分とよく似た顔立ちの無精ひげを生やした三十代中盤で、実は結構大きな外資系企業の営業マンである。
月に三度は海外へ出張している。精悍だがどこか理知的な雰囲気が漂っていた。

「まぁ俺から見れば、ただの冴えないおっさんだがなぁ……あれ？」

そろそろ眼も覚めたきたので、起きようと思い体を起こす。
その時に違和感を感じる、何かが腰に張り付いているかのような感覚が……。

「まさか……」

当麻は恐る恐る布団をめくる。そこには当麻の腰にしがみついて眠る最愛の姿があった。

「……な、なんだこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

モゾモゾと動く最愛に連動して足に色々な感触を味わうが、それらを全力で頭から追い出し最愛をゆする。

「おおい、最愛さん？　上条さんは枕じゃないですよー！」

ゆさゆさと揺すってみるが、よほど眠りが深いのか全く起きる気配がない。

どうしようかなぁと思っていたら、急にドアがバンッ！と大きな音を立てて勢い良く開けられた。

「はへぇ！　今度はなんだぁ！」

「いないと思ったら、やっぱりココか！」

ドアを盛大に開けた沈利は、当麻を無視してズカズカと中に入ってくる。

よく見れば、沈利の後ろにはフレンダと理后もいた。

「さいあい、ゆるせない」

「当麻お兄ちゃんと一緒に寝るなんてずるいってわけよ」

沈利は勿論、理后もフレンダも怒りを滲ませていた。
しかしそんな三人の雰囲気を無視して、最愛はモゾモゾと当麻にひっつく。

「にゅふふ～、すりすり～」

呑気な最愛の寝言が聞こえる。その瞬間、ビシリという音を当麻は聞いた気がする。

（……最愛、お兄ちゃんはお前を守る事は出来なかったよ……）

これから訪れる最愛の不幸を、当麻はただ無言で見ている事しか出来なかった。
沈利は無造作に最愛の首ねっこを掴むと、強引に当麻から引き剥がす。

「にゃあ～、ちょ、超なんですか～！？」

その勢いで強制的に目を覚まされた最愛は、現在の状況が理解できずあたふたとしていた。

「「「最愛！　当麻（お兄ちゃん）と一緒に寝るなんてずるい！」」」

「え、えぇ！？」

最愛の理解を待たず、沈利はズルズルと最愛を引きずっていく。
バタバタと暴れるがそんな事で、沈利の拘束を解く事は出来なかった。

「「「オ・シ・オ・キ・か・く・て・い・ね」」」

三人からの死刑宣告を受けた最愛は、真っ青な顔をして当麻を見る。

「ちょ！　当麻お兄ちゃん超助けてください！」

ズルズルと引きずられていく最愛を見て、当麻はかけられるたった一つの言葉を口にする。

「最愛……すまんとしか言えない」

にっこり微笑んでいるが額に青筋を浮かべている三人に対して、当麻はただ見送る事しか出来なかった。

「いやぁぁぁ～～～～～～～～～～」

最愛の悲鳴が部屋に反響したが、無情にもドアは三人の手によって閉められた。

閉められたドアを見ながら、当麻は目を瞑って祈る。

最愛へのオシオキが軽く済むようにと。

しかしオシオキされたにも関わらず、その日もまた当麻の布団に潜り込んだ最愛である。

当然、速攻でバレてまたオシオキされたのは言うまでもない。

上条家

昨日と違い、当麻はしっかりと目を覚ました。
それは緊張から、眠りが浅かったせいかも知れない。

「……今日は父さんたちが来るんだな……」

ボソっと呟くと同時に、当麻が起きたのを見計らったかのように部屋の電話が鳴る。
ベットから出ると、当麻は慌てて電話を取りに向かう。

『おはようございます、昨日は良く眠れたでしょうか』

「あ、はい。眠れました」

受話器を取ると、電話の向こうから渋い声が聞こえてくた。
恐らく昨日から世話になっている、ホテルマンの人だと当麻は直感的に理解した。

『それはようございました。先ほどお連れ様からご連絡があり、まもなく当ホテルにご到着されるとの事です』

「あー、わかりました」

『別室のお客様にも、お電話させて頂きましたがお受取りになられませんでした。いかがいたしましょうか?』

どうやら先に沈利の方に電話をしたようである。
しかし、全員が寝ているのかだろうか電話は取らなかったようであ

る。

「あーいいですよ。そのまま寝かせておいてください」

『かしこまりました。それでは、失礼いたします』

受話器を置くと、当麻は息を吐き出す。

（緊張してるのかなぁ……）

ベットに寝転ぶと、天井を眺めながら考える。親と会ってまず何を話すべきなのか、と。

（いくら記憶が戻っても、実際に顔を合わせるのは今日が初めてみたいな感覚だ）

目を瞑りながら自問自答してみたが、結局答えは出なかった。

当麻は勢い良く立ち上がると、頭を軽く振って頬を叩く。

「（うじうじ悩んでも仕方ない）せっかくだ、出迎えてやろうか」

そう思い立った当麻は、素早く着替えると部屋を後にする。

そのままホテルを出てると、適当な場所まで歩いて行く。

しばらく待つと、向こうから一人の男性が歩いて来るのが見えた。

男性は当麻に気づくと、手を振りながら当麻に駆け寄る。

「当麻！　久しぶりだな、元気そうじゃないか」

その男性は当麻の父親、刀夜であった。

埋め込まれた記憶どおりに、刀夜は無精髭を生やしていたが、どこ

か理知的な雰囲気が漂っていた。

「あ、ああ……あの、電話でも伝えたけどさ」

しかし記憶があったとしても、当麻から見ればまるで初対面のように感じる。

頭では理解してても、戸惑いを隠せない。

そんな当麻を見て、刀夜は少しだけ困った笑顔を向ける。

「ああ、すまん。記憶消失になって記憶があやふやなんだな。父さんの顔は覚えてるか？」

「ああ……」

「そっか、母さんももうすぐ来る。従姉妹の乙姫ちゃんも来ているぞ」

「うん」

当麻は自分の父親と話しているのに、どこかぎこちなさを感じていた。

（父さんの顔は覚えている。けど、まるで他人のように感じてしまう……）

ちゃんと頭では刀夜を父親と認識している。

しかし、父親との距離感が全く掴めず、最後のワンピースがパズルにうまくはまらないもどかしさを当麻は感じていた。

「そういえば優菜ちゃんはどうしたんだ？　お前らがくるからてっ

きり一緒だと思ったぞ」

だが刀夜は、息子と久々に会えて嬉しいのか、記憶消失のことを感じさせることなく話しかけてくる。

その心遣いに、幾分気持ちを落ち着けた当麻は苦笑しながら刀夜に答える。

「優菜は今回都合が悪かったようなんだ。学園都市関係の事で、時間が取られているようなんだ」

「残念だ、久々に会ってみたかったな。きっと凄い美少女に成長しているんだろう？」

「あらあら、刀夜さんったら。そんなに病院のベットがいいのかしら？」

「か、母さん。じょ、冗談だよ。あ、あはははは」

刀夜と会話していると、母親が到着したのか刀夜に向かって声をかける。

その声に幾分怒りが滲んでいるように感じられるが、当麻は敢えて気にしないことにした。

「えっと、母さ……ぶはぁ！」

母親のほうを向いた瞬間、当麻は盛大に吹き出した。

そこには、記憶にある母親ではなく銀髪で緑目の外国人少女が立っていたのである。

時々見かける見知った顔なので、普段の当麻なら『白いシスター』と表現していただろう。

足首まである薄手の長い半袖ワンピースに、カーディガンを肩に引っ掛けている。
おまけに頭には鍔広の大きな白い帽子。
普段のシスター服ではなく、どこか避暑地のお嬢様のような格好をしていた。
たまに会うが、極めて活動的な彼女には圧倒的に似合わない。
女性の服に疎い当麻だが、それでもこの格好はインデックスより自分の母親が似合うと思っていた。

混乱する当麻だが、刀夜は全く気にせず母親に話しかけている。
そして更に混乱に拍車をかける人間が現れた。

「おにーーーーーちゃーーーーーーーーーーーーん」

「お、乙姫ちゃんもきたようだ」

当麻は慌てて刀夜が向いた方へ視線を向ける。

「……えぇぇ！」

そこには、乙姫と呼ばれた人物がこちらに向かってきた。
とても爽やかな笑顔をしており、全身で喜びを表しているようである。
が、その人物は当麻もよく知る人物であった。
そう……クラスメイトの吹寄制理だったのである。
あ然とする当麻だが、吹寄は全く気にする事なく当麻まで駆け寄る。

「会いたかったよ、おにーちゃん！」

当麻の元までたどり着いた吹寄は、そのまま勢い良く抱きつく。
当然ながら豊満な胸が押し付けられるが、吹寄は気にせずグリグリと抱きついてくる。

（のぉぉ！！！　おっぱいがぁ！おっぱいがぁぁ！！！！）

危うく鼻血を吹きそうになった当麻だが、理性を総動員して吹寄を引き剥がす。
あと少し遅れていたら、当麻は鼻血を吹き出して倒れていたであろう。

「ちょ、ちょっと落ち着け！」

吹寄を引き剥がす事に成功した当麻だが、既に疲労困憊の状態であった。
理性を総動員して、先程の感触を頭から追い出す。
もう一度されたら耐え切れる自信がなかった当麻であった。

「なによう、いいじゃーん。おにーちゃんをぎゅーっとしたってベタベタしたって～」

幼い子供のように頬膨らます吹寄。
その姿に可愛らしさを感じた当麻だが、頭を盛大に横に振りその考えを追い出す。

「あらあら、当麻さんったら。久々にあった乙姫ちゃんに照れているのかしら」

しかし当麻の態度をただの照れ隠しと思ったのか、インデックスも刀夜も苦笑しながら当麻を見る。

（いやまて!?　皆どこかで見た顔なのに誰もツッコまないの!?
もしかしてどっきりなの!?）

最初は家族全員でのどっきりだと思ったが、すぐにその考えを否定する。
インデックスは分からないが、吹寄はそんな冗談に付き合う義理は全くない。

（冷静になれ、優菜からも言われただろう……『混乱しそうになったら焦らず、気持ちを落ちつけなさい』と……）

正直、この場で『ざけんなぁぁー!』とわめき散らしたい。
しかしそれでは何も解決しない。
むしろ単に自分が癇癪を起こしたと勘違いされてしまう。
ひとまず現状を確認しようと思い、当麻はインデックスを指さしながら刀夜に尋ねる。

「ねぇ父さん、このどう見てもＲ１５映画館からすら追い出されるような人が俺の母さんなの?」

「あらあら、当麻さんったら。母さんの事が年より若く見えるのかしら」

「いかにも、若々しくて美人な母さんじゃないか。父さんが生涯愛し続ける人だ!」

当麻と刀夜の言葉に頬に手を当てて照れるインデックス。はっきり言って似合わない。
当麻は記憶にある母親が同じ仕草をとったらどうなのか?　という

想像をしてみた。

（うん、やっぱり母さんじゃないと似合わない）

外見年齢が二十代後半の詩菜なら、避暑地のお嬢様格好も先ほどの仕草も似合うと結論づけた。

「あらあら、刀夜さんったら。では、この間の女性との関係は何だったのかしら」

「あ、あれは道を尋ねられただけで……まって、母さん！　話を聞いて！」

少しだけ照れた雰囲気を出していたインデックスだが、急に顔に怖笑顔を浮かべて刀夜に詰め寄る。

その怖笑顔に焦った刀夜は、手を振りながらインデックスを宥めようとする。

「むふん、お兄ちゃんの背中ゲットォ！」

当麻と刀夜、インデックスの会話で仲間はずれにされたと思ったのか、吹寄が背後から当麻に抱きつく。

意識を自分の父親である刀夜に向けていた当麻は、その抱きつきに対してされるがままであった。

「ちょ、お前はちょっと落ち着け！　頼むから抱きつくなぁ！」

「ぶぅ～、いいじゃない～」

不満声を上げる吹寄だが、しっかりと背後から当麻を抱きしめる。

更に体全体を使って当麻へすりすりし始める。

（ぎゃ～～～～～、俺の理性がぁぁぁ！！！！）

押し付けられる胸や体の柔らかさに、当麻は理性がガラガラと崩れていくのを感じていた。

「と、とりあえずホテルに行くか。娘たちにも早く会いたいからな！」

自分の妻からの問い詰めから逃げるように、刀夜は荷物を持って走りだした。

インデックスはそんな刀夜の姿にため息を吐いたが、すぐに刀夜を追いかけていった。

「何か……とてつもなく不幸の予感が……」

今さらながら思い出したが、ホテルには姉妹がいるのであった。

もしこのドッキリが継続なら、姉妹も別の人に変わっている可能性があると当麻は思っていた。

何か不幸の予感を感じつつ、当麻もホテルへと向かう。背中にへばりついた吹寄を背負って……。

やがて四人はホテルへとたどり着く。

ホテルに着く頃には、吹寄も当麻の背中から降りて自分の足で歩いていた。

そして中に入ると、待ち構えていたかのようにホテルマンが歩み寄ってきた。

「ようこそ、当ホテルへお越しくださいました。お客様、お荷物を

お持ち致します」

下を向いていた当麻は、ホテルマンの制服を見てほっと一息をつく。
だがその顔を見て唖然とした。
その顔は、昨日から世話になっている中年の男性ではなく……全く知らない顔であった。

（えぇぇぇ!?　昨日の中年ホテルマンじゃない!?　何この刺青を入れたおっさんは!　てーか眼つきが怖いよこの人!）

顔の左側に刺青と両手に奇妙なグローブをつけた人が、物凄く低姿勢で当麻たちに話しかける。
顔だけ見れば、明らかにその筋の人にしか見えない。

「親父ィ!　この荷物は何処に運ンでおけばいいンだァ?」

「こら、お客様の前だろう。口の聞き方に気をつけなさい」

（え〜〜〜!　アイツは一方通行!!　何でホテルマンなんてやってるのぉ!?）

無駄に爽やかな笑顔を浮かべた一方通行が、当麻たちの荷物を運んでいた。
どうやらさっきの男性と親子のようである。しきりに親に向かってペコペコしている。

（どうなってるんだぁ!?）

家族をおいて全力ダッシュで部屋に戻る。
そうだ、テレビを見ればどっきりだって分かるはずだと当麻は思い

至った。
ルームのドアを勢い良く開けると、当麻は迷わずテレビのスイッチを入れる。

「それではこれより、アメリカ大統領の会見があります！」

しかし当麻の期待は盛大に打ち砕かれた。
ニュース番組のキャスターがよく見知った人物だったからである。
更に当麻を困惑させる人物が、テレビに映った。

「アメリカ国民の諸君！」

そこにはマイクの前に余裕の笑みを浮かべた、更に見知った人物が映っていた。

「おいこらぁぁぁぁぁぁぁ！！！　お前はいつからアメリカ大統領になったんだよ垣根ぇぇぇぇ！！！　てーか何で軍覇がニュースキャスターをやっているんだよぉぉぉぉ！！！！」

余りの急展開に、当麻は冷静さを失い絶叫した。

「な～に、当麻。何騒いでるの？」

当麻の絶叫を聞きつけたのか、沈利たちが部屋へと入ってくる。

（まさか……）

沈利の口調なのに、何故か最愛の声で聞こえた当麻は恐る恐る後ろを向く。
そこには。

「超どうしました？　当麻お兄ちゃん？」

最愛の口調で喋る沈利が。

「当麻お兄ちゃん、どうしたって訳よ」

フレンダの口調で喋る理后が。

「とうま、大声上げてどうしたの？」

理后の口調で喋るフレンダが。

「うっさいわよ、当麻。もう少し静かにしなさい」

沈利の口調で喋る最愛が立っていた。

「は、ははは……」

脳の処理能力を限界突破した当麻は、乾いた笑いを浮かべながらベットに倒れこんだ。

（不幸だ……）

そう心の中で思うと、当麻はそのまま意識を手放した。

意識を手放した当麻だが、僅か一分で意識を取り戻した。
少しだけ頑丈な自分の体を恨んだが、そんな愚痴を言っていても始まらない。
とにかく冷静に考える必要がある、そう当麻は判断を下した。
考えを纏めるために一人になろうと思い、散歩に行ってくると家族に伝えた。

当麻の行動を訝しんだ家族だが、記憶消失の事を冷静に考えたいのだと誤解した。
本当は違うのだが、今はその誤解をありがたく利用しようと当麻は思った。

暫く歩くと砂浜にたどり着く。もう海のシーズンはとっくに過ぎているので誰もいない。
冷静に考えるにはちょうどいい場所と思い、当麻は適当な棒を見つけて地面に文字を書いていく。

（良く考えろ、どうせ上条さんの不幸が発動しているのだ。何かロクでもない事件に巻き込まれたに違いない）

次々と名前を書き、矢印を書いて名前を更に書く。
今まで入れ替わったと思われる人たちを、当麻は地面に書いていく。

沈利姉ちゃん↓最愛
理后姉ちゃん↓フレンダ
フレンダ↓理后姉ちゃん
最愛↓沈利姉ちゃん

母さん↓インデックス
乙姫↓吹寄
ホテルマン↓知らない刺青のおっさん
その息子↓一方通行
ニュースキャスター↓軍覇
アメリカ大統領↓垣根

その文字を眺めながら、当麻は優菜が教えてくれた言葉を思い出す。

『迷った時は、今まで得た情報を何かに書き綴って眺めるとよいですよ。そうすれば、色々な事が見えてくるはずですから』

聞いた時はさっぱりわからなかったが、今になってようやく理解する。

地面に書いた文字を眺めていくと状況が一目瞭然になり、今まで混乱していた頭がすっきりした。

優菜の言葉はいつもタメになるなと、当麻は思いつつ更に文字を足していく。

（誰もが外見と中身が一致していない。完全にバラバラになっている。家族だけならどっきりかも知れないが、アメリカ大統領が変わるなんてどっきりレベルじゃすまない）

焦らず冷静に考えるんだと、自分に言い聞かせるように当麻は呟く。

そして色々と書き足していくと、ある疑問が湧き上がる。

（そういやぁ、なんで俺と父さんは外見と中身が入れ替わっていないんだ？）

何故か入れ替わりに、自分と自分の父親が対象に入っていない点で

ある。
しかし父親の顔は、沈利たち家族から保管された記憶なので、絶対とは言い切れない。
だから、刀夜の顔を映した何か物的証拠が必要だなと、当麻は思い至った。
そう……例えば写真とか。

（ん？　待てよ……確か、父さんと母さんはアルバムを持っていくとか言ってたような……）

後一歩で答えに辿り着けると考えた当麻だが、その思考を邪魔するかのように大きな声が海岸に響き渡った。

「うにゃーっ！　カミやーん、やっと見つけたんだぜーい！」

その声に当麻ははっとなると、今まで地面に書いていた文字をかき消す。
下手にさっきの文字を見られて、危ない人に思われては困ると当麻は思った。
幸いな事に砂面に書いていたので、すぐにかき消すことが出来た。
そして声のした方を振り向くと、そこには見知った顔の人間が慌ててこちらに近寄ってきていた。

「えぇ！？　土御門、何でお前がこんなトコロにいるんだよ！」

「そんな事はいいから、早く逃げるにゃ～！」

慌てる当麻だが、土御門は当麻の言葉を無視して捲し立てる。
その態度は、伊達や酔狂で言っているようには見えない。

ただ、状況が理解出来ない当麻は、ただ首を傾げるしかなかった。

「早く逃げないと、ねーちんがカミやんを犯人と思って襲ってくるんだぜよっ！」

犯人？　と当麻が更に首をかしげた瞬間。

「見つけました、上条当麻！！」

憎しみがこもった女性の声が、海岸に響き渡った。
その声を聞いて、土御門が天を仰ぎ見る。
当麻が声のした方を向くと、そこには憤怒の形相で当麻を睨む神裂が立ってきた。

「上条当麻！　貴方がこの入れ替わりの魔術を発動させたのは分かっています！　三つ数える間にもとに戻しなさい！」

腰にぶら下げている二メートル以上の刀を抜くと、神裂は一気に当麻へと詰め寄っていた。
三つ数えると言ったが、数える前に叩き斬る勢いである。

「え、えええぇ！？　一体何のことですかー！」

いきなりの急展開に腰を抜かしそうになった当麻だが、既の所で耐える。
でかい刃物を持って憤怒の形相をした人間が詰め寄ってきたら、誰だって腰を抜かしそうになる。
当麻があたふたとしていると、神裂は訝しそうに当麻を見始める。

「……御使堕しを発動させたのは貴方ではないのですか？」

言葉にして冷静になったのか、神裂は剣を収める。
だが当麻への警戒心までは解いていないのか、刀を鞘には仕舞わなかった。

「だから言っただろう、ねーちん。カミやんが魔術を使えるわけねぇってにゃ～」

やれやれという気持ちで神裂に話しかける土御門だが、何か考えているのか神裂は全く反応しなかった。
再び当麻の方を向くと、自分を指さしつつ当麻に尋ねる。

「念の為に確認しておきます。上条当麻、あなたには私が誰に見えますか？」

尋ねられた当麻は困惑するしかなかった。
目の前にいる人は、少々危ないが身長が高い女性にしか見えないからである。
しかし何処かでみたなぁと思っていた当麻は、記憶から該当する女性を探りだす。

「あぁ！　確か一方通行にババァとか言われていた十八歳さん！」

記憶の糸を手繰り寄せて、たどり着いた答えは最悪の答えであった。
ぶちん、と何かが切れる音がしたと同時に、当麻の首筋に刀が押し付けられる。

「そうですか、上条当麻。貴方はそんなに早死したいのですか。でしたら、今すぐにでも首と胴を斬り離してあげますよ」

抑揚のない声で神裂は当麻に話しかける。
何か言えば問答無用で叩き斬る、神裂の雰囲気から当麻はそう感じていた。
当麻の自業自得だが、次の選択肢を間違えれば即ゲームオーバーという状態に当麻は陥った。

「えっと……実は上条さん、貴方の名前を知らないのですよ……ひとまず女性という事しか分からないです」

インデックスの時に協力していたが、きちんと顔合わせをした覚えがない。
勿論、記憶があやふやなので実際はしたかも知れないと、当麻は思っていた。
当麻の言葉に、神裂は何かに気付いたのか首に押し当てていた刀をゆっくりと下ろす。

「確かにそうですね。私の名前は神裂、神裂火織。イギリス清教必要悪の教会の魔術師です」

鞘に刀をしまった後、神裂は胸に手を当てて名前を名乗り上げる。
気品のある仕草に少しだけ驚く当麻だが、口にすれば危険な目にあうので黙ることにした。

「まったく、ねーちんはいつも好戦的すぎるにゃ～」

ヤレヤレと言いたげに、土御門は大げさに首を振る。
土御門の言葉に神裂はむっとなると、視線を当麻から土御門の方へ向ける。

「失礼ですね、土御門。私はただ目の前の問題に全力を尽くしてい

るだけです。だいたい私から言わせてもらえれば、貴方の方は魔術師としての自覚が足らなさ過ぎます」

「え？　今なんて言った？　土御門が魔術師？」

聞き捨てならない台詞を言った神裂に、当麻は疑問を投げかける。

「そうだぜ、カミやん。オレも『必要悪の教会』の一員って事だぜい」

しかし、その答えは土御門本人の口から返された。

「でも学園都市は科学の街だぜ。魔術師は……」

単なるクラスメイトが、実は魔術師でした。
その事を理解できなかった当麻はただ困惑するだけでだった。
だが、土御門はそんな当麻を気にすることなく話す。

「もしかしてカミやん、超能力開発機関に魔術師はいないって思ったか？　むしろ逆だろう、学園都市ってのは教会世界の敵だぜい？　だったら敵地に潜り込んでいる工作員の一人や二人、いたって別におかしくないだろう？」

土御門の質問に、当麻は答えを返す事が出来なかった。
『科学』と『魔術』の関係は、とても仲が悪いという事はインデックスの時に聞いた。
互いの領域を決めて、それぞれの技術を独占しているからこそ、今の地位がある。

「考えても見ろよ、オレがこうして学園都市の外にいる時点でおか

しいと思わないか？　外に出るには保証人が必要だろう？」

だがお互い不可侵状態だからといって、それで終わりというほど世界は甘くない。

機会があれば相手を倒そうとするぐらい行うだろう。

それぐらいは、当麻でも十分理解していた。

「……けど」

日常にいると思っていた友人が、実は非日常の人間でした。

ただそれだけのはず、そう当麻は自分に言い聞かせる。

しかし、頭では分かっても心は別であった。

「まーそんなオレの事情はどうでもいいにゃ～。単なるスパイだと思ってくれればいいにゃ～」

「お前、単なるシスコン野郎じゃなかったのか」

何となく納得出来なかった当麻は、つい土御門に憎まれ口を言ってしまう。

それが地雷とも知らずに。

「妹の何が悪いにゃ～！！　義理なら尚よし！　妹こそ最強だにゃ～！」

妹好きを馬鹿にされたと思ったのか、土御門は手振り身振りを交えて熱弁する。

「うるせぇ！　妹なんかよりお姉さんの方がいいに決まっているだろう！」

土御門のあまりの馬鹿っぽさに、当麻もつい熱くなってしまった。
『寮の管理人のお姉さん』がタイプだと公言する当麻は、土御門と真っ向からぶつかり合う。

「妹なんかより……だと？……カミやん、どうやら決着をつけなければいけないようだな」

大きく息を吐き出すと、土御門は当麻に向かって拳を構える。

「ああ、お前があくまで妹が最高という幻想を抱いているのなら！」

土御門の雰囲気が伝染ったのか、当麻も自然と土御門に向かって拳を構える。

「まずはその幻想をぶち殺す！」

そして両者は激突する。自分の幻想（姉／妹好き）を守るために、負けられないと思いながら。

「このこのだぜい～～～！！」

「ふぬぐぐぐ～～～！！」

しかしやっている事は、単なる取っ組み合いである。
当麻が土御門の髪を引っ張ったり、土御門が当麻の頬を引っ張ったり。
時々、当麻が土御門を噛んだりするが、土御門もお返しとばかりに当麻を噛んだりする。
言っている事もやっている事も、第三者から見れば単なる馬鹿二人

にしか見えない。

「二人とも……馬鹿をやってないで」

額に手を当ててため息を吐いた神裂は、二人の行動にすっかり呆れていた。

しかし時間を無駄にする訳にはいかないので、取っ組み合いを止めようとする。

「あらぁ？　お馬鹿さぁん二人の取っ組み合いは意外と面白いわよ。もう少し鑑賞させて欲しいわ」

しかし声をかけている途中で、横合いから声が飛んでくる。

三人が声のした方を向くと、そこには銀髪の少女が立っていた。

「もう止めちゃうの？　もう少し続けてほしいわ」

当麻と土御門の取っ組み合いが止まった事に、少々残念そうにする銀髪の少女。

「お前は……！」

「土御門！　上条当麻！　気をつけてください！」

突然の乱入者である銀髪の少女に、土御門と神裂は警戒心を剥き出しにして睨む。

いつ抜いたか分からないが、神裂の手には七天七刀が握られていた。

「え？　ええ？　一体全体どうなっていやがるんですか！？」

当麻は二人の行動が理解できず、ただ困惑するだけであった。
別に何もされていないのに、何故二人は目の前の少女に警戒心を剥き出しているのか。
しかし当麻も、目の前の少女の雰囲気を感じていたのか、『単なる少女』とは思っていなかった。

「あらあら、別に何もしていないのに随分と嫌われているわね」

二人の殺気を一身に受けている銀髪の少女。
だが二人の殺気すら、銀髪の少女にとっては楽しいのかケタケタと笑う。

「一体何のようだ……」

「ふふふ、随分と楽しい事をしているからね。ちょ～っと様子を見に来ただけよ」

二人と違い、銀髪の少女はゆったりしながら土御門の言葉に受け答えする。
警戒していた神裂だが、目の前のある事に気付く。

「……貴方が発動させたのではないのですか」

銀髪の少女は『外見』と『中身』が入れ替わっていないという事に。
文献に載っている姿と一致していると、神裂は判断を下した。
そして入れ替わりが起きていないと言う事は……魔術を発動させた術者という事になる。

「あらぁ？　こんなんじゃ私が楽しめないじゃない。私が発動させるなら、もう少し愉快な状態を作り出すわよ？　例えば～……愛し

あう者同士で殺し合い……とか？」

自分が口にした世界を想像したのか、銀髪の少女は楽しそうに笑う。
冷酷で残酷な世界が、まるで愉快な喜劇とでも言いたげに。

「いかにも貴様らしい回答だな……アクゼリュス」

銀髪の少女、アクゼリュスの非道ぶりに反吐が出そうになった土御門は、奥歯を噛み締めながら睨む。
名前を呼ばれた事に、アクゼリュスは少しだけ驚いた顔をする。だが、直ぐに目を細めて楽しそうに微笑む。

「久々にその名前で呼ばれたわ。最も、イギリス清教の人間なら知っていて当然かも知れないわね」

口元に手を添えてくすくすと笑いながら、アクゼリュスは土御門を褒める。
普通に見れば、アクゼリュスの仕草は優雅に映るだろう。
しかし、些細な仕草の一つ一つが、土御門と神裂の体を震わせる。

「ほざけ、破滅を招く魔女が……」

二人は気付いている。この体の震えは恐怖から来る物だという事に。
だが、その恐怖に負ければ、ただアクゼリュスを喜ばすだけだと二人は思った。
震える体に鞭をうって、二人はアクゼリュスに対峙する。

「ふぅん、これがあの人間が気にしている男ねぇ……随分と冴えない顔をしてるわね」

しかしアクゼリュスは二人を見ておらず、彼女の視線は当麻にしか向けられていなかった。

「どうして上条さんは、初対面の女の子に顔のことで馬鹿にされないといけないんでしょうか！？」

二人と違って、当麻にはアクゼリュスが単なる魔術側の少女にしか見えなかった。

雰囲気は別だが、アクゼリュスの見た目は小萌より十センチほど大きい程度である。

「あらぁ？　私を女の子として見るなんて……貴方随分と」

そこで言葉を区切ると、何かが面白かったのかアクゼリュスはクスクスと笑う。

その仕草に、当麻はただ困惑するしかなかった。

「お馬鹿さぁんなのね」

やがて落ち着いた後に出た言葉は、ただ当麻を馬鹿にするだけの言葉だった。

「でも嫌いじゃないわよ。気に入ったわ、坊やの事」

残酷な笑みを浮かべながら、アクゼリュスは当麻へ話しかける。

「そこの淫乱な格好をしている女がいった御使堕しという魔術。この魔術は意図的じゃないわ、偶発的に発動したものよ」

「だれが淫乱な格好ですか！」

明らかに馬鹿にした言葉に激怒した神裂だが、怒鳴る以上の行動には出なかった。
否、出れなかったというのが正しいのだろうか。
意識が神裂に向いていなくても、神裂は感じる事が出来た。
アクゼリュスの禍々しい力の燐片を。

「落ちた天使にもすぐ会えるわ。術者は坊やの近くにいる人間よ。儀式場は術者が分かれば、すぐに場所が特定できるわよ」

「ちょっと待ちなさい！　貴方は御使堕しの全てを知っているというのですか！？」

アクゼリュスから語られる言葉は、御使堕しの確信に近い言葉である。
だが微妙にぼかしているのか、全体的に抽象的な表現であった。
神裂は直感的に理解した。
アクゼリュスは発動に関わっていなくても、御使堕しのほぼ全てを知っている事に。
大声を上げる神裂に反応したのか、アクゼリュスは視線を当麻から神裂へと向ける。

（なんという瞳の色。これが人間の瞳ですか？　ここまで冷酷な瞳をする人間を見た事がありません）

背中に嫌な汗が流れるのを感じながら、神裂は七天七刀を強く握る。
すると突如空間が撓んだ。まるでガラスに亀裂が走るかのように空間がひび割れていく。

「しらけちゃったわ」

一際大きな亀裂が走ったかと思うと、次の瞬間無数の氷片が舞い散るかのように砕け散った。
砕け散る音と共に、アクゼリュスの姿も消えていった。

「……どうやら立ち去っただけのようですね」

周囲を警戒していた神裂が、大きく息を吐き出すと七天七刀を仕舞う。

「……とにかく、今はアクゼリュスより御使堕しの方を優先しよう。どうやら、あっちは全く干渉する気がないようだしな」

「ええ……そうですね」

そう呟く二人だが、体中が嫌な汗でびっしょりだった。

「話を戻しましょう。御使堕し――――文字通り天の位にいる天使を、強制的に人の位へ落とす物」

咳払いをして一旦仕切りなおしをすると、神裂は御使堕しについて説明し始める。

「ねーちん、カミやんは『カバラの樹』を知らないから、そういう説明だと分からないにゃ～」

しかし土御門が神裂の言葉を遮ると、当麻が持っていた棒を奪い取る。

「ここはオレに任せておくんだぜい。まずカミやんにも分り易く説明するとだにゃ～。ある場所に三階建ての建物があるとする。一階から三階は全てとあるルールで分けられている。上へ行けば行くほどえらいとするにゃ～」

地面に図を書きつつ、土御門は当麻に説明をする。

土御門の言葉の方が分からなかったのか、神裂は小首を傾げていた。

「一階を人間、二階を天使、三階を神様の住処とする」

建物らしき図の横に、土御門は『人』『天使』『神』を書き足していく。

「当然どの階にいる奴も、違う階へ移動はできない。ま、単に階段が無いって思えばいいにゃ～」

『移動不可』という文字を、土御門は建物の図の上に書き足す。
神裂も土御門の説明を理解し始めたのか、一応の納得をしていた。

「そして、どの階のどの部屋も全て満席状態で座れる椅子がない状態だ。さて、カミやん。そんな状態で二階の『天使』様が一階に落とされてきたらどうなると思うかにゃ～？」

土御門は建物の図の二階から一階に矢印を書き、そこに『天使』という文字を書き足した。

「一階の人間はニ階の天使には逆らえない。だから一階の奴の誰かが追い出されて……更に他の奴が追い出されてと……一階の奴らのみでの椅子取りゲームか？」

少し考えて出した当麻の答えを、土御門は笑いながら拍手をする。

「正解だにゃ～。つまり天使が人間の領域に混入された事で、『外見』という椅子が取り合いになったんだにゃ～。だから……」

土御門は正解を口にしようとするが、その前に当麻が土御門の言葉を遮る。

「だから、皆の『中身』と『外見』が入れ替わっているって事か」

「カミやん、意外と理解が早くて楽だにゃ～。てっきり『ナニイッテルンデスカコノヒトタチ』とか言うと思ってたにゃ～」

スラスラと理解していく当麻に、土御門は少しだけ驚いていた。
少なくとも当麻は『科学』側の人間に分類される。今のような『魔

術』に関する話はほぼ知らないはずだ。
そう思っていた土御門に、当麻は理解できた理由を教える。

「優菜から教わったんだよ。『理解出来ないなら、無理に理解しようとせず分かる範囲だけで考えなさい』ってな」

（カミやん、それって単に『馬鹿だから理解しなくていい』って遠まわしに言われているのと同じだぜい？）

理解しているようで、何も理解していないとわかった土御門は少しだけ苦笑する。
とはいえ、無理に理解させようとして癇癪を起こされても困る。
そのまま放置がいいと土御門は判断した。

「ひとまず現状がおかしいって事と……この現象をどうにかしないといけないって点は理解した」

「それだけ分かれば、今はいいにゃ～。所で何故かこの魔術は、カミやんを中心に展開されているんだにゃ～。この点があったから、ねーちんはカミやんを犯人と思ったんだにゃ～」

土御門の言葉に当麻は唸る。
自分は魔術に関してはシロウトだ。
そもそも超能力側の人間が、魔術を使うのは体に負荷がかかると聞いている。
それに右手の幻想殺しもあるから、自分に魔術をかけたってすぐに破壊されるはずだ。
なのに、何故自分が中心点になっているのか。当麻は、ない頭で考えてみるが、当然ながら答えは出なかった。

「とりあえず、オレとねーちんは何とか防げたかが、それでも不完全だにゃ～。俺の外見はアイドル『一一一』らしいにゃ～。モテるかと思って、ナンパしたけど外見の方が人気女優に手を出したっぽいにゃ～。おかげでアイドルファンに出会うと金属バット片手に追い回されたにゃ～」

（なるほど、さっきからチラチラ見えていた包帯はそういう理由なのか）

土御門の怪我の理由がわかった当麻は、それ以上何も質問をしなかった。

「となると神裂の方は誰なんだ？」

土御門の外見がわかったので、当麻は神裂の外見も確認する事にした。

「……グヌスです」

ぴくっと、神裂の肩が少しだけ揺れる。

「ステイル＝マグヌスです！　周りから見ると私は妙に女っぽいシナを作る巨漢なんですよ！！　お陰で散々な目にあいましたよ！！」

しかし次の瞬間、神裂は反響するほどの大声で、自分の外見について語る。

「えーと、ご愁傷さま？」

「上条当麻、本当に貴方じゃないのですよね。私はもう耐え切れま

せん、このままでは……」

よりにもよってステイルとか、哀れ過ぎて涙が出てくると、当麻が思っていると。

「うっかり抜刀しそうになります」

神裂は七天七刀を握りながら、無表情かつとても平たい声で当麻を見ていた。

「ストォォォップ！！　頼むから抑えてー！！！」

神裂はとんでもなく怒っている事を理解した当麻は、慌てて両手を振りながら神裂を宥めにかかる。

「ひとまず作戦会議といくにゃ～」

そんな二人をニヤニヤしながら見ていた土御門が、棒で地面をつつきながら提案する。

「ん？　おい、あの子は何だ？」

その言葉に賛同しようと土御門の方を向くが、その後ろに全く知らない人間が立っている事に当麻は気づいた。

当麻の言葉に、土御門と神裂も反応し、同じ方向を向く。

三人から少し離れた所に、赤いシスターが立っていた。

十二か十三歳程度の少女に見える、緩やかなウェーブがかかった金髪に、月明かりを反射するかのような白い肌。

とても可愛らしい容姿の少女だったが、身につけているモノは全て異様なものばかりだった。

修道服の下に着るインナースーツの上に、外套を羽織っただけである。
しかもインナースーツというが、どちらかというと黒いベルトで構成された拘束衣のように見える。
リード付きの首輪をしており、腰のベルトには金属ペンチや金槌、L字の釘抜きやらノコギリをぶら下げていた。

つまりどう見ても、真っ当な部類の人間には見えなかったのである。

「上条さんにあんな奇抜な格好の知り合いはいません。よって、一番怪しいのは土御門だな」

「いやまて、カミやん。少女の姿だが実は中身はムキムキのおっさんかもしれないにゃ～」

一瞬だけ当麻は、土御門の方へ視線を向ける。時間にして僅か数秒程度である。
だが、僅か数秒程度の時間で赤いシスターの少女は、恐るべき速度で当麻に襲いかかった。

「問一。御使堕しを引き起こしたのは貴方か」

少女はノコギリの刃を当麻の首筋に押し付けたまま、機械のような平坦な声で当麻に問いかける。

一瞬で当麻の目の前まで踏み込んできた赤いシスターに、誰も反応できなかった。
当麻は元より、近くにいた土御門や神裂さえも動くことができなかった。

「ストォォォップ、今度はなんですかー！！」

「問一をもう一度。御使堕しを引き起こしたのは貴方か」

何とか宥めようとノコギリを握る少女を見下ろすと、当麻は長い前髪の隙間から少女の瞳を見る事になる。
その瞳は押し付けられたノコギリの刃よりも、格段に冷たい感情の色が見えていた。

その瞳を見た当麻は言葉を失った。
しかし、土御門より先に理解が追いついた神裂が赤いシスターに対して詰め寄る。

「待ってください。貴方は一体何者ですか！」

赤いシスターの少女は視線だけを神裂の方に向ける。

「解答一。ロシア正教の『殲滅白書』の一員、ミーシャ＝クロイツェフ」

赤いシスターの少女、ミーシャは視線を神裂から当麻の方へ戻す。

「ミーシャ＝クロイツェフ、残念ながらその男ではありません。イギリス清教必要悪の教会の公式見解として解答します」

イギリス清教というフレーズに、ミーシャが僅かながら反応する。
わずかに首を傾げたが、やがて何かに思い至ったのかノコギリを下ろす。
しかし視線は当麻から外してはいなかった。

「問二。それを証明する手段はあるか」

「彼の右手には『幻想殺し』という異能を打ち消す力があります。実際に魔術を右手にぶつけてみてください。それが証明となります」

「うぉぉい！！　俺の都合は完全に無視ですかー！」

問答無用の展開にさすがの当麻も抗議をあげるが、残念ながら神裂とミーシャには全く聞き入れられなかった。

ミーシャは当麻の右手に視線を向けると、そのまま口を動かした。

「数価。四〇・九・三〇・七。あわせて八六」

ミーシャの言葉に呼応して、彼女の後ろにある海から水の柱が飛び出してきた。

「照応。水よ、蛇となりて剣のように突き刺せ」

更にミーシャが口を動かすと、水の柱がまるで蛇のように鎌首をもたげた。

いくつもの水の槍と化した水流が、当麻へと襲いかかる。

「うおっ！！」

咄嗟に右手を突き出し、襲いかかる水槍から自分の身をガードする。

右手に触れなかった水槍は当麻の周りに突き刺さったが、触れた水槍だけは水風船のように弾けて四方八方へ飛び散った。

一部始終を注意深く見ていたミーシャは、地面に飛び散った水を観察しながら口を開いた。

「正答。イギリス清教の見解と今の実験結果には符合するものがある。この解を容疑撤回の証明手段として認める。少年、誤った解のために刃を向けた事をここに謝罪する」

「ちょっとまてぇ！　全然反省してるように見えねぇぞこらぁ！　せめて人の目を見てから謝りやがれ！」

「問三。ならば御使堕しは誰が実行したのか」

「聞けよお前！」

本当に反省しているのか分からないほど、ミーシャは当麻を見ていなかった。
ミーシャの視線の先には、神裂が立っていた。

「……まだ私たちも術者については分かっていません。そこで提案なのですが、ここは行動を共にしませんか？」

術者は不明、という言葉を聞いたミーシャはそのまま立ち去ろうとした。
しかし、立ち去ろうとするミーシャの肩を、神裂は掴んで止めに入る。

「問四。それに対する私のメリットはあるか」

「まずこの男の周りに必ず術者がいるはずです。歪みの中心点はこの男ですから。それに、私たちは幸いなことにこの男と顔見知りです。周りの人間にも怪しまれずに行動を共に出来ますよ」

神裂の説明に納得がいったのか、ミーシャは視線を神裂の方へ向ける。
その視線から話を聞くと考えた神裂は、ミーシャの肩に乗せていた手を離す。

「貴方だけで動けば、周りの人間は怪しむでしょう。行動を共にすれば多少変な動きをしても、ある程度ごまかしが効きます。それに貴方は人間狩りのノウハウを心得ているのですか？　ロシア正教の専門は『幽霊退治』のはずです」

「……賢答。その問い掛けに感謝する」

その言葉と同時に、ミーシャは自分の小さな手を神裂の方へ差し出した。
一瞬面を喰らった神裂だが、ミーシャが握手を求めている事に気づくと小さく笑いながら手を取った。

「やれやれだぜい、話がポンポンと進んでいくにゃ～」

「上条さんの都合は完全に無視ですね」

すっかり蚊帳の外の扱いを受けていた土御門と当麻は、お互いに視線を交わしながらため息を吐く。

「あの女の言葉を信じたわけではありませんが……必ず上条当麻の近くに術者がいるはずです」

少しだけ殺気を込めた顔をしながら、神裂はミーシャから当麻の方へ視線を向ける。

「問五。あの女とは」

「……アクゼリュス」

「問六。今は敵対しているのか」

「いえ、敵対はしておりません。少なくとも御使堕しに関しては」

神裂の答えに、ミーシャは少し不満そうな雰囲気をする。

なんとなく、アクゼリュスと関わっている人間と協定を結んだ事を後悔しているように見える、そう当麻には映った。

「なぁ、どこの組織もあの女の子が嫌いなのか？」

隣にいる土御門にしか聞こえない程度の声量で、当麻は疑問に思ったことを口にする。

「あたりまえぜよ。アクゼリュスに何かされた組織は、それこそ星の数ほどあるんだぜい？」

当麻の雰囲気が伝染ったのか、土御門も当麻にしか聞こえない程度の声量で答える。

「あんな小さい女の子が？」

「カミやん、外見に騙されるな。アクゼリュスは不老不死で三千年以上は生きている、世界最悪最古の魔女だって話もあるぐらいだぜい」

「不老不死って……ゲームかよ」

土御門から出てくる言葉が、余りに現実味がないので当麻は内心呆れていた。
不老不死だの魔女だという単語は、当麻にとってはゲームでしか出てこない言葉だと思っているようである。

「まぁそれほど忌み嫌われているって訳だにゃ～。オレも出来れば一生関わり合いたくないぜよ」

にが虫をかみつぶしたような表情をする土御門を見て、関わり合いたくないという事が本心だと当麻は理解する。

「そうなんか……」

しかし、魔術側の都合を知らない当麻にとっては何となく寂しい感じを覚えていた。
もし自分が長く生き続けて、その上忌み嫌われ続けたら……と思うと、どうしてもアクゼリュスを毛嫌いする事が出来なかった。

「ひとまず上条当麻が宿泊しているホテルの近くに宿をとります。そこで、クロイツェフと今後の協議を行います。……土御門、何を逃げようとしているのです？　貴方も参加するのですよ」

「解答二。それで問題なし」

コソコソと砂浜を移動していた土御門は、神裂の言葉にビクっと震えて振り返る。
その顔には冷や汗が流れており、反射してキラリと光っていた。

「ガムでも食うか……少しは気がまぎれるだろう」

散歩に行く前に、適当な店で買った板ガムを取り出す。
封を開けて板ガムを取り出そうとした所で、背後から人の気配を感じた。

「問七。それは何か」

「うお！」

声に反応して後ろを振り向くと、そこには首を傾げたミーシャが立っていた。

「問七をもう一度。それは何か」

「ガムだよ、食うか？」

大声を上げた当麻は、おっかなびっくりという感じでミーシャに板ガムを突き出す。
案の定、ミーシャは微動だにせずじっと当麻の手を見る。
正確には当麻が持っているガムを、だ。

「問八。それは食物なのか？」

「食べ物だけど飲み込んじゃいけないモノだ」

当麻の言っている事が、余り理解出来なかったのかミーシャは更に首を傾げた。
だが少ししてミーシャは、ゆったりと手を動かし始める。
当麻の指に触れないように、板ガムの端っこを指で摘む。
そして、少しずつ引きぬくかのように板ガムを引っ張る。

引き抜いた銀紙に包まれた板ガムを、じっくり観察しながら剥がし始める。
しかし、出てきた板ガムを眺めるだけで食べようとはしなかった。
時々小さな舌の先端で、板ガムの表面を僅かに舐めるだけである。

（めっさ信用されていねぇ！！！　思いっきり毒見してやがる！！）

警戒心剥き出しのミーシャを見て、当麻は心で泣きながら笑顔を浮かべた。
しばらく板ガムに警戒していたミーシャだが、やがて板ガムを口の中へと放り込んだ。
が、放り込んだ瞬間その動きがピタリと止まった。
板ガムの食感が未知のものだったためか、しばらくミーシャは直立不動だった。
だが、暫くすると一噛み二噛みと、小さな口が動き出した。

「私見一。うん、甘味は良いな。糖のたぐいは長寿の元とも言うし、神の恵みを思い出す」

何かミーシャ的に気に入ったようである。もぐもぐと口を動かして、ガムの食感を楽しんでいる。
その姿に当麻はホッと安堵の息を吐いた。
だが、ごっくんとミーシャの喉が動いたのを見て、当麻は大声で叫び上げた。

「おいこらテメェ！！　ガムを飲み込むんじゃねぇ！！　さっき飲み込むなと言っただろうがぁ！！」

「解答三。飲み込んではならぬ物なのか」

当麻の叫びに、ミーシャは小さく首を傾げるだけだった。
そして、にゅっと小さな手を伸ばして、さも当然のように次の板ガムを当麻に要求する。

（ま、大丈夫だろう）

ため息を吐きながら、当麻はミーシャに板ガムを差し出す。
やはり他人行儀な態度でミーシャは板ガムを引きぬく。
だがミーシャが抜いた板ガムは一枚ではなく、あろうことか全部引っこ抜いたのである。

「おいこらぁぁ！！　テメェには遠慮ってものはないのかよぉぉ！！！」

まさか全部を引き抜くと思わなかった当麻は反射的に叫んでいた。
しかし、ミーシャは当麻を全く無視して、ガムの銀紙を剥がし始めていた。

（不幸だ……）

中身の無くなったガムの包装紙を握りつぶしながら、当麻は心の中で涙を流した。

苦悩の末の答え

土御門への連絡先だけを交換して、当麻は自分が泊まっているホテルへと戻っていた。
家族に散歩と言ってから随分と時間が経過しており、そろそろ戻らないと皆が心配すると当麻は思った。
だが、ホテルへ戻る当麻の足取りは遅く重かった。
それはある疑問が、当麻の中に渦巻いていたからである。

（俺の他に父さんは『外見』と『中身』が一致している）

御使堕しの影響は魔術師すら受けていた。
だから、影響を受けていない当麻を神裂は犯人と思ったのである。

（だが記憶が戻っているとしても、本当にあの顔が自分の父親なのか？）

記憶にある刀夜と、今日会った刀夜の顔は一致していた。
だが、その記憶に当麻は自信が持てなかった。

（まさか父さんが御使堕しを発動させた？）

一瞬だけ自分の父親を犯人候補に上げたが、当麻はすぐにその考えを否定する。
刀夜は日常の人間だ、魔術なんて非日常の世界に生きているわけがない、と。

少しだけ心に引っ掛かりを覚えたが、当麻は敢えて無視してホテルへと戻った。

「あ、当麻お兄ちゃん」

ホテルへ入り、部屋へと戻ろうとしたところで最愛に呼び止められた。

最愛は当麻の元まで駆け寄ると、腕をグイグイと引っ張り出した。

「今、皆で昔の写真を超見ているのです。当麻お兄ちゃんも超来るのです」

「えー、ちょっと疲れたから休みたいぜ」

腕に伝わる感触を無視しながら、当麻は最愛の提案を拒否する。

「もう、当麻お兄ちゃん。何のためにここまで超来たと思っているんですか」

その言葉に当麻はハッとなる。

御使堕しやら魔術師やらの話ですっかり忘れていたが、当麻は元々両親に会って記憶を取り戻す事が目的だったはずだ。

今の事態に慣れ始めていたため、その目的をすっかり忘れていた当麻である。

「じゃー少しだけ見るか」

非日常を忘れ、今は日常を楽しもう。

当麻はそう思い至ると、最愛の提案に乗る。

最愛はにっこりと笑顔を浮かべると、当麻と一緒に沈利たちが借りている部屋へと移動する。

「あれ？　父さんは」

沈利たちが借りている部屋へ入ると、当麻は部屋にいる人間を見渡しながら言った。

沈利たち姉妹と乙姫、詩菜は部屋にいるが、刀夜の姿が見えないのである。

「散歩に行くって言っていた訳よ」

当麻の疑問にフレンダが答える。

フレンダの答えを皮切りに、他の人たちも思い思いの言葉を口にする。

「とうや、皆で弄られてたからきっと逃げた」

「父さんは、いつもそういう立場だからねー」

どうやら女性陣から総出で弄り倒されたようである。

（うわぁ……親父哀れだな）

その様を脳裏に浮かべながら、当麻は刀夜を哀れんだ。

上条家は女性の比率が高いためか、女性陣の発言力が高いのである。

当然ながら沈利や理后は、刀夜より発言力が強かったりする。

まぁその二人も、トップである詩菜には一切勝てないが。

「お兄ちゃんの背中を再びゲットォ！」

背後に人の気配を感じた瞬間、当麻は後ろから乙姫に抱きつかれていた。

「最愛と乙姫ばかりずるいって訳よ！」

二人の姿に対抗心を燃やしたのか、いつもは遠巻きに見ているフレンダも当麻に抱きついてきた。

（のぉぉぉぉぉ！！！！　俺の理性が音を立てて崩れるぅぅぅぅぅぅ！！）

両腕と背中に、それぞれ母性の塊や女性特有の柔らかさを味わう。

ある意味で桃源郷の世界だが、当麻にとってはとても困った状態であった。

（吹寄がでかいのは知っているが、沈利姉ちゃんも中々……いや、理后姉ちゃんも案外…って！　俺は何を考えているんだぁぁぁぁぁぁ！！！！）

普段の最愛やフレンダ、乙姫なら当麻もここまで焦ることは無かっただろう。

だが、今は御使堕しの影響でその外見が変わっているのである。

沈利と理后、吹寄というスタイル抜群の三人に、抱きつかれている様を想像してみよう。

単なる男子高校生である当麻が、三人の色気に対して抵抗出来るわけがなかった。

「お前ら少しは落ち着けぇ！　頼むから抱きつくんじゃねぇぇぇ！！！」

これ以上俺の理性を崩壊させるな、と心の中で叫びつつ当麻は三人を引き剥がす。

無理矢理引き剥がされた事に、不満顔をする三人だが当麻が本気で嫌がっているのを見て大人しく引き下がる。

「あらあら、当麻さんったら。妹たちの甘えに照れているのかしら」

インデックスの姿で説教される事に、不愉快を覚える当麻だがぐっと堪える。

さすがに母親に対して暴言を吐くほど、当麻は命知らずではなかった。

（下手に母さんを怒らせたら……いや、想像するのは止めよう）

背中に言いようのない寒気を感じた当麻は、頭を軽く振ってその想像を追い出す。

過去の自分はどんな感じなのかなーと、少しだけ楽しみにしていた当麻である。

適当なソファーに座ると、テーブルに置かれているアルバムを開いた。

開いた瞬間、楽しい気持ちは呆気無く崩壊した。

アルバムにある刀夜の姿を見てしまったからである。

無言でアルバムを捲る当麻を見て、周りの人間は声をかけられなくなった。

（……何でだよ、親父）

周りは、単に当麻が記憶消失の事で悔やんでいると思ったのだろう。

だが、当麻はたった一つの事しか考えていなかった。

写真の一枚をきつく睨みながら、当麻はもう一度心の中で刀夜に怒った。

（……どうして非日常の世界に足を入れたんだよ！）

当麻が睨む写真に写った刀夜、そこには記憶どおりの顔で映っていたのである。

「ねぇ母さん、ここ最近の父さんや母さんの写真ってある？」

「え、ええ。ちょっと前に父さんと旅行に行ったのでよければ」

そう言うと詩菜は自分の鞄から、何枚かの写真を取り出し当麻に渡す。

そこに映っている詩菜は別人であるが、刀夜は同じであった。

今日会った時と同じ様に不精ヒゲを生やして、幸せそうに刀夜は詩菜と一緒に映っていた。

「ちょっとこの一枚を借りるね」

詩菜の返事を待たず、当麻は複数の写真から一枚を引き抜く。

そして、唖然としている周りを無視して部屋を後にした。

ホテルを出て適当な道まで歩くと、当麻はその辺に植えられている木を思いっきり殴った。

「ちくしょう……ちくしょう！」

殴った時の痛みを無視して、何度も木を殴り続ける。

当麻は刀夜が犯人だと分かった時、刀夜の考えを理解したのである。

昔から不幸だった当麻に、刀夜はよくお土産と称して怪しげなモノを渡していた。

よく見る有名なお土産から、何処で手に入れたか分からない程怪し

げなお土産まで。
ありとあらゆるお土産を当麻に渡していた。
一見統一性が無さそうなお土産だったが、ある一つの事だけは共通していた。
それは『お守り』という点である。

そのお土産には、当麻を不幸から守れるようにという刀夜の願いがあった。
だからこそ、どんなに怪しげなモノも当麻は受け取っていたのである。
刀夜の気持ちを無下にしないためにも……。

だが、そんなお守りで当麻の不幸が消える事はなかった。
おそらく刀夜は何年も続けて疲れたのだろう……だからすがったのだ。
『魔術』という非日常の力に。

自分の中にある言いようのない怒りを沈めた当麻は、ポケットから携帯電話を取り出す。
かける先は勿論、土御門である。
電話で二言三言伝えると、当麻は土御門の返事を待たず電話を切る。

待ち合わせの場所である海岸に行くと、土御門は既に当麻を待っていた。
土御門は当麻を見つけると、困ったような笑顔を浮かべながら近づいてきた。

「やれやれ、単なる話なら電話でしてほしいにゃ～。これでも危険なアイドルさんですにゃ～？」

軽い冗談を飛ばしながら土御門は当麻に話しかける。

「土御門、一つ質問させてくれ。御使堕しの効果は全世界なんだよな？」

だが、当麻はそんな冗談に付き合う余裕がなかった。

土御門のノリを無視して、聞きたいことを尋ねる。

「そうだにゃ～。世界中で効果が発揮されているにゃ～」

「じゃあ単なる偶然で効果から外れるってことはないんだよな？」

「……カミやん。何がいいたんだにゃ～」

当麻が何かを伝えたい事が分かった土御門は、ふざけた雰囲気を霧散させて真剣に当麻を見る。

その視線を受けて、当麻は持っていた写真を土御門に差し出す。

訝しげに写真を見る土御門だが、やがてそれを受け取る。

「今日両親に会ったんだ。母さんは別人だったが……父さんはその写真に写っている通りの顔だった」

当麻はそこで言葉を区切ると、肺にたまった息を吐き出す。

次に言う言葉で、誰がどの様に動くか分からない。

だが、伝えないわけにはいかないと思い、当麻はその言葉を口にする。

「つまり……俺の父さんが御使堕しを引き起こした犯人なんだよ……」

当麻の言葉に、土御門は無言であった。
無造作にサングラスの位置を直すと、視線を写真から当麻に向ける。
「カミやん、一つ質問だ。この事をいつ知ったんだ？」
写真を当麻に返すと、土御門は当麻に質問をする。
「……さっき家族で写真を見ていたんだ。そしたら父さんだけ写真と今の顔が一致した。だから……はっきりしたのはついさっきだ」
当麻の答えに、土御門は顎に手を添えて考える。
「カミやん、こっからは俺らに任せろ。おまえさんじゃ辛いだろう。上条刀夜はこちらで『保護』する」
『保護』という言葉を聞いて、当麻はピクリと反応する。
魔術側の都合がどの様な事か知らないが、恐らく単なる保護と見ないほうがいいと考えていた。
眉をひそめる当麻を見て、土御門は苦笑しながら言った。
「なめるんじゃないぜ、カミやん。オレ達の目的は御使堕しを止める事ぜよ。殺さずに解決できるならそれに越したことはないにゃー」
しかし一転、土御門は吐き捨てるように言葉を発する。
「だがミーシャの野郎は早計すぎる。術者を殺せば済むと考えるいるようなんだ」
殺せばいいという言葉に、当麻はゾッと背筋を凍らせた。
御使堕しを止める方法は二つ、儀式場を崩すか術者を倒すこと。

なのにミーシャは術者を倒すことしか考えていなかった。
刀夜が犯人と分かった以上、ミーシャは犯人を追い詰める事にためらいを見せる事はないだろう。
何故なら、ミーシャ＝クロイツェフはその為にここまで来たのだから。

「お断りだ」

だが、当麻は土御門の言葉を一言で否定する。

「……カミやん」

当麻の言葉に、土御門は戸惑いながら声をかける。
それは、身近な人間と顔を付き合わせて対立させないという友人の優しさだった。

「こいつは、俺が決着を着ける、誰でもない、俺が着けなくちゃいけない問題なんだ」

だが土御門の優しさを分かってて、なお当麻は譲らなかった。

「だがよ……」

「だがよ、じゃねぇよ！　何様だテメェ！　上条刀夜は俺の父さんなんだ！　世界にたった一人しかいない、他の誰にも代わりは出来ない、たった一人の父さんなんだよ！！」

刀夜がどの様に御使堕しを発動させたかは分からない。
だが、理由が自分にあるのだから、解決するべき人間は自分と当麻は考えていた。

「だから、決着は俺が着ける。お前たちにも、訳のわからない魔術師たちにも邪魔はさせない。上条刀夜を救うのは、俺がやるべき事なんだよ!!」

当麻の意思が固いと分かると土御門は苦笑した。

「わかったにゃ～、俺は何をすればいい？」

「儀式場ってのを探しててくれ。勿論、父さんが吐いたらすぐに連絡する。だが、念のために頼む」

「わかった。といっても、多分カミやんの実家あたりだろうからにゃ～」

御使堕しを発動させるには、結界や魔法陣が必要となる。
それほど規模の大きい魔術なら、自ずと場所は限定されていく。
個人ならだいたい自分の家を使うだろうと、土御門は予想していた。

「頼んだぜ、土御門。俺は父さんをぶん殴ってくるよ」

「……カミやん！」

その場を立ち去ろうとした当麻に、土御門は背中越しに声をかけてきた。
当麻は振り返らずそのまま立ち止まる。

「気をつけろよ……」

それだけ言うと、土御門は当麻の返事を待たず走りだす。

土御門の言葉に当麻は笑う。
こんな時でも心配してくれる友人をありがたく思いながら。
そして当麻も走り出す。こんな馬鹿な世界を終わらせる為に。

走る。刀夜を探して当麻は走る。
時間がないのもあるが、それ以上に魔術師たちの存在も気がかりだからだ。
そして当麻は刀夜を見つける。夕暮れに染まる浜辺を歩いていたようだ。
だが遠巻きに見えた刀夜の顔を見て、当麻の足は自然と止まってしまった。

刀夜の顔は疲れが見えていた。体中も汗びっしょりだった。
きっと中々帰ってこない当麻を探すために、そこらじゅうを走りまわったんだろう。
くたくたになりながらも、足を止めず疲労のたまった体に鞭を打って歩いていた。
きっと写真を見ていた時も、当麻の事が心配だったのだろう。

刀夜の姿は魔術師にも、戦闘のプロにも見えなかった。
ただ迷子になった息子を心配する普通の父の姿であった。

「……父さん！」

鈍りそうになった決心を奮い起こすため、当麻は刀夜に向かって呼びかける。
その声に振り返った刀夜は、当麻の顔を見て嬉しそうな表情をしながら駆け寄ってくる。

「当麻！　お前は今までどこに行っていたんだ。散歩にしては長かったから心配したんだぞ。母さんや娘たちだって、心配していたん

だから後で謝っておくんだぞ」

汗を流しながら、刀夜は怒りの表情で当麻を怒る。
当たり前だ、刀夜は今まで息子が心配だったから怒っているのである。
決して、当麻の事が嫌いだから怒っているわけではない。

「ごめん、父さん」

素直に謝る当麻を見て、刀夜は再び笑顔を浮かべた。
刀夜の笑顔を見て、当麻は奥歯を噛み締める。
出来る事なら、何もなかった事にしてこのままホテルへと帰りたかった。
だけど、それは許されない。御使堕しの事件は解決しなくてはいけないのだ。
例え刀夜に恨まれて、二度と家族らしい会話が出来なくなったとしても。
大好きな家族がバラバラになってしまうと分かっていても。
決めたのだ、刀夜を助けて御使堕しを終わらせるのだと。
当麻は刀夜をしっかりと見据えて語りかける。

「なぁ、父さん。なんで非日常にいるんだよ。あんたは日常の人間だろうが。つまんねえオカルトになんざはまりやがって……どうしてなんだよ」

その一言が、刀夜の笑顔を止めた。

「何を言ってるんだ当麻？　それより今日は――――――」

「シラ切ってるんじゃねぇ！　どうして魔法使いの真似事なんかし

たんだって言ってるんだ！」

その言葉と同時に、刀夜から表情が消えていく。
だがその顔は、息子にやましい所を見られた父親の顔であった。
決して、身の危険を感じた表情ではなかった。

「……答える前に、一つだけ聞かせてくれ。当麻、お前がどこに行っていたかは問わない。だが、身体は大丈夫なのか？」

視線を当麻から、燃えるようなオレンジ色の海に向けた刀夜が言った言葉は一つだった。
そう……ただ自分の息子を心配する言葉だった。

「ああ」

この期に及んでまだ父親であろうとする刀夜に、当麻はわずかに安堵の息を吐く。

「そっか。なら問題なさそうだな。さて、と。何から話そうか」

困ったような笑顔を刀夜は浮かべていた。
当麻はそんな刀夜を見て、胸が痛むのを感じたがそれでも視線だけは外さなかった。

「あんな方法で願いを叶えようとは……馬鹿な話だなと、私自身も思っていたのだがな」

そう言ってため息を吐く刀夜は、年を一気に十も取ったように見えた。

「なぁ、当麻。お前を小さい頃に、学園都市へ送ったから覚えていないかもしれないがな」

海に落としていた視線を、海と同じくオレンジ色に染まった夕暮れに向ける。

「ああ……記憶消失になってたんだな。そうだな、娘たちがまだ小さい頃……お前が学園都市に行く前だ」

刀夜は何かを思い出すように語り出す。

時々見える横顔以外、ずっと背中を見ている当麻には刀夜の顔を見る事は出来なかった。

だが、その背中を見ていればどの様な表情かは分かる。

きっと今は、少しだけ懐かしそうな顔をしているんだろうと、当麻は思っていた。

「お前が周りの人達からなんと呼ばれていたか……覚えているか？」

「……いや、覚えていない」

元より記憶消失の当麻には、補完してくれる人間がいなければわずか数ヶ月前の事すら思い出す事は出来ない。

だから大昔の事を尋ねられても、分からないという答えしか出来なかった。

だが、それでも刀夜は確認したかったのだろう。

「そっか……本当は覚えてて欲しくないのだがな」

喉まで出かかった言葉を一度飲み込み、刀夜は僅かに拳を握る。

その動作だけで、刀夜がその言葉をどれほど忌み嫌っているかが分

かる。

「疫病神……さ」

刀夜は吐き捨てるかのように言葉を出した。
彼の顔には思い出させてしまったと言わんばかりに、後悔の表情がありありと浮かんでいた。

「お前は生まれつき『不幸』な人間だった。だから、子供たちはお前をそう呼んでいた。だけどな当麻、それは何も子供だけじゃなかったんだよ」

一瞬、ほんの一瞬だけ刀夜は怒りを滲ませた。
だがすぐに無表情となり、刀夜の感情が読めなくなった。

「誰も関係なくそう呼んでいた。理由も原因もないのに、お前はいつもそう呼ばれていた」

当麻は理解した。顔に出さなくても背中を見ていれば分かる。
刀夜の中には、未だに押し殺す事が出来ないほどの怒りの感情が渦巻いていることに。
だが、その表情を当麻に決して見せたくないのだろう。だから無表情という仮面をつけたのだ。

「そうだな、優菜ちゃんぐらいだった。お前を疫病神と呼ばなかったのは」

刀夜は言うが当麻には、その記憶がない。
だから、優菜が自分をどう呼んでいたのかすら覚えていない。
だが、今はそんな事はどうでもいいと当麻は思っていた。

「けどそれすら周りからすれば、優菜ちゃんの株が上がるだけで疫病神と呼ばれるのは止まらなかった。ああ、別に優菜ちゃんを悪く思っているわけじゃないよ。むしろ、当麻と仲良くしてくれて嬉しかったぐらいだ」

刀夜にとっては、優菜の態度がよほど嬉しかったのだろう。
優菜の事を口にする時だけ、幾分の優しさを滲ませていた。

「優菜ちゃんを見て思ったんだよ。当麻を理解してくれる人がいれば、お前を傷つける人たちがいなくなるんじゃないかと。その為に色々と考えたさ」

だがそれもすぐに無表情という仮面に隠される。

「正直に言おう。娘たちを引き取ったのもお前の為と考えてだ。だから、決して娘たちの事を考えての行動じゃない。彼女たちも何かワケありで捨て子となっていた。だから、当麻と仲良くなってくれると思った」

その時の気持ちを思い出したのだろうか……最低だな、と刀夜は呟いた。

「自分でも分かっている。私は最低の人間だと。だがな、当麻。そんな汚名をそそいでも、お前を傷つけようとする人たちから守りたかったんだ。あー、こう言うと言い訳にしか聞こえないな、ははは」

刀夜は無表情で力なく笑う。
そんな刀夜の姿を、当麻は奥歯を噛み締めながら見ているしかなか

った。
明らかに自分で自分の心を傷つける刀夜を止めたかった。
だけど、それは刀夜が望んでいない。だから、当麻は歯を食いしばって耐えるしか無かった。

「だけどな、結局はお前を傷つける人たちは減らなかった。むしろ、優菜ちゃんに起きた『あの事故』のせいで余計に増えた」

「あの事故？」

「……いや、何でもない」

刀夜は頭を軽く振ると、視線をあかね色の空から当麻へ向ける。
その表情を見て、当麻は直感的に理解した。
優菜に起きたとされる事故が、どれほど凄惨で彼女を傷つけたのかを。
それは優菜の何かを変えるほどに……。
顔色ひとつ変えていなかった刀夜だが、心の中で慟哭していた。

「それでも、優菜ちゃんは一度として当麻を責めなかった。だけどな、他の人達は違ったんだよ。『不幸』という見えないモノで、お前に暴力を振るうばかりだった。私はそんな現実に耐え切れなくなった」

大きくため息を吐くと刀夜は肩を落とした。

「科学の最先端である学園都市なら、お前を『不幸』と呼ばないという淡い期待があった。だけどな、結局は淡い期待だったよ。陰湿な暴力はなかったようだが、やっぱりお前は『不幸』な人間として扱われていた」

だが直ぐに姿勢を正すと、当麻の顔を見据える。

「お前の『不幸』そのものをうち殺したかった。だが、それは科学という常識では叶わぬ願いと分かっていた」

そして、決定的な事を口にする。

「残された道は一つしかない。私はオカルトに手を染めることにした」

魔術に手を染めたという自白。

当麻にとって、心の何処かで聞きたくないと思っていた言葉。

その言葉を刀夜は口にした。

ガラガラと何かが音を立てて崩れていくのを当麻は感じていた。

「それが唯一、お前を『不幸』から守れると信じて」

刀夜の顔に迷いはなかった。彼は最後まで諦めなかったのだ。

たとえどれだけ無理と言われようと。

諦めきれなかったのだ、当麻の不幸をなくすことに。

ふと当麻は考える。では、一体何のために御使堕しを発動させたのだと。

天使を呼んだぐらいで、当麻の不幸を打ち消せれると思ったのだろうか。

全世界の人間の『外見』と『中身』が入れ替わったぐらいだと、当麻は思った。

（……まてよ……入れ替わるという事は……！）

当麻は気付く。刀夜が何を目的で御使堕しを発動させたのか。
つまり『中身』が入れ替われば、当麻の持つ不幸は別の人間へと入れ替わる。
天使とかそういうのは、刀夜にとってはどうでも良かったのだ。
刀夜にとって当麻の『不幸』さえ消えれば、その他はどうなろうと構わないと思ったのだ。

たとえ、家族がバラバラになっても。
たとえ、赤の他人が当麻となってしまおうとも。
たとえ、世界中の人から恨まれようとも。

刀夜は守りたかったのだ。たった一人の息子を不幸から――――。

「ばっかやろうがぁ！！」

その事に考え至った当麻は、腹の底から叫ぶような大声を上げる。
刀夜は驚いたような顔をするが、当麻は気にせず吼える。
大切な人たちから引き離そうとした刀夜に向かって。

「ああ、俺は確かに不幸だよ。いつも喧嘩に巻き込まれるし、何度も殺されかけたよ。記憶消失にもなっちまった」

確かに不幸な人生だなぁと思った当麻は自嘲気味に笑う。

「クラスメイトを一列に並べて比べりゃ、不幸な人生を送り続けているのは俺一人ぐらいだろうさ。けどな……」

当麻はそこで言葉を断ち切る。当麻は無言で刀夜に詰め寄ると胸倉を掴み上げる。

「俺はたった一度でも、後悔してるなんて言ったか？　こんな不幸な人生は真っ平御免だと言ったかよ！」

当麻は犬歯を剥き出しにして、刀夜に向かってあらん限りの声量で叫ぶ。

「冗談じゃねぇ！　不幸、それがなんだ？　そんな程度で、この俺が後悔するとでも思っているのか！？」

叫びながら当麻は気付く。

そうだ、自分が不幸であったからこそ、大切な人たちと出会えたのだ。

その点は誇るべきだ。沈利や理后、フレンダや最愛と出会えたのは自分が不幸だったからだ。

「確かに俺が不幸じゃなかったら、平穏な人生だったかもしれねぇ。喧嘩にも巻き込まれず、死にかける事すらねぇ。記憶消失になる事もなかっただろう」

刀夜はただ驚いた顔で当麻を見ていた。

ただ黙って当麻の言葉を聞く事しか出来なかった。

「けどよぉ、それが幸運なのか？」

当麻は気付く。

もしも自分が不幸じゃなかったら、どうなっていたのかと。

その事を想像した当麻は、ゾッと背筋を凍らせた。

沈利や理后、フレンダや最愛は勿論、優菜やクラスメイトたち、親友たちが周りに誰もいない世界。

「自分がのうのうと暮らしている影で！　沈利姉ちゃんが苦しんでるのを！　理后姉ちゃんが助けを求めているのを！　フレンダが心を殺しているのを！　最愛が泣き叫んでいるのを！　そんな事にも気づけずに、ただふらふらと生きている世界のどこが幸運なんだっていうんだ！？」

大切な家族や親友たちが苦しんで、血まみれになって、助けを求めている事に気づかない。
そんな幸運で寒気のする世界。

「すぐ側で大切な人たちが苦しんでいる事にも気づけず、ただのうのうと生き続けるぐらいなら幸運なんていらねぇ！」

当麻は胸倉をつかむ手に力を込める。
苦しそうにする刀夜だが、当麻は構わず言葉を叩きつける。

「惨めったらしい幸運なんざ押し付けるな！　こんなにも素晴らしい不幸を俺から奪うな！　この道は俺が歩く。これからも、決して後悔しないために！」

当麻は右手に力を込めて振り上げると、刀夜に向かって振り下ろす。
刀夜の幻想を打ち砕くために。当麻が不幸だという幻想をぶち殺す為に。
力は込めたが当麻は強くは殴っていなかった。だが、刀夜は殴られた頬を押さえながら尻餅をつく。
当麻は自分を見上げる刀夜に向かって、喉が張り裂けるほどの大声で怒鳴りつけた。

「世界一『幸運』だなんて見下してんじゃねぇ！　俺は世界一『不幸』なんだよ！」

「なんだ、お前。幸せだったのか」

オレンジ色に染まる夕焼けを浴びながら、ただ静かに波の音を聞きながら、刀夜は笑っていた。

「俺は父さんに感謝しているんだ。姉ちゃんたちに巡りあわせてくれた事を」

座り込んでいる刀夜に手を差し伸べながら、当麻はしっかりと答えた。

「そっか」

気の抜けたような声で返事をした刀夜。
当麻の手を握り立ち上がると、砂を払い落とす。

「馬鹿だな、私は。当麻は幸せなんだ。それじゃあ全く逆効果になっちゃうじゃないか」

そして、何か肩の荷が降りたと言いたげな表情で言葉を発する。

「父さんがいて、母さんがいて、沈利姉ちゃんが、理后姉ちゃんが、フレンダが、最愛がいる。そして、俺と優菜がいて、家族が一緒に暮らしている。それ以上に幸せの世界なんてあるのか？」

刀夜の言葉に躊躇うことなく頷く当麻は、刀夜の目をしっかりと見据えながら語る。

この気持がこの場で出た嘘や偽りでないと言いたげに。

「それじゃあ、私は自分の息子から幸せを奪おうとしていたのか」

どこか自嘲気味な笑顔をした刀夜だが、その言葉は安堵の色を滲ませていた。

「といっても、何か出来た訳ではないがな。単なる『お土産』を収集してお前に渡していた程度だ。だいたいオカルトなんぞに何の力もないって分かっていたはずなのにな」

え？　と当麻は刀夜の言葉に眉をひそめる。

だが、刀夜は気付かず更に言葉を発する。

「そもそも、お土産屋にある程度のもので治る『不幸』なら、お前が誇るはずもない。だから変なお土産を買うのは止めにするよ。菓子の方がまだ母さんも喜ぶし食卓も賑わうよ」

「ちょっと待て。父さんは御使堕しを発動させたんだろう？　だったら今さら儀式場を隠す必要はないはずだ。一体何処にあるんだよ、儀式場は！」

何かが違う、そう思った当麻は刀夜の言葉を遮る。

「エンゼルフォール？　何だそれは。何か流行りのおまじないか何かか？」

だが当麻の言葉に、刀夜は不審そうな顔で見るだけだった。

その顔に嘘や偽りはなく、本当に知らないと言いたげな顔であった。

「なぁ父さん、母さんらが何処にいるか知ってるのか？」

「何を言ってるんだ？　ホテルで娘たちと写真を見ているんじゃないか？　ああ、私は戻りたくないぞ。これ以上弄られたら父の威厳が地に落ちる！」

入れ替わりに気付いていない、刀夜の言葉からその事に気づいた当麻はギョッとした。

御使堕しの犯人だと思っていたが、何かがズレている。

今の刀夜の言葉だと、単に当麻へお守りを渡していただけという認識にしか聞こえない。

（ちょっと待て……父さんは一度でも『魔術』という言葉を使ったか？　単に『オカルト』としか言ってない！）

ひょっとして俺はとんでも無い勘違いをしているんじゃないか、そう当麻は思った。

だが、その疑問に対する答えを考えている時間は、当麻には与えられなかった。

「上条当麻！」

砂を踏む音をさせながら駆けつけた神裂が、当麻の思考を唐突に遮る。

「神裂！」

神裂の声に反応した二人は、声がした方へ視線を向ける。

その時、刀夜がギョッとしたのを当麻は見逃さなかった。

「探しましたよ、上条当麻。ココは危険です、早く……」

「え、えぇ？」

焦っているのか神裂の言葉は要領を得ない。
だが、肩を叩く刀夜の方へ視線を向けると、更におかしなことに気付く。
刀夜は視線を神裂より、更に上へを向けているのだ。
まるで、神裂が今より更に大きいと思っているかのように。

「おい、当麻。知り合いなのか、随分と女らしい口調をする人じゃないか。しかし、外国人は大きいな……二メートルはあるのかな？
巨漢という表現がぴったりあう」

「え？」

巨漢という言葉で思い出す。神裂は外見が一体誰だったのかと。
それは、二メートルを越す英国人であるステイル＝マグヌスだ。
そう……刀夜は神裂がバーコードの刺青がある、漆黒の神父服を着たステイルに見えているのだ。

（父さんには、神裂がステイルに見えている！？）

自分の立てた推理がガラガラと崩れていく。
今、ハッキリしていることは『刀夜は御使堕しの影響を受けている』という事である。

そこへ、さくっと砂を踏む音が聞こえる。
当麻は視線を音の方へ向ける。

「ミーシャ＝クロイツェフ」

一体いつからそこにいたのか、砂浜の波打ち際にポツンとミーシャは立っていた。

「ミーシャは独自に貴方を監視していたようです。貴方を監視していれば、術者が分かると思ったのでしょう」

当麻の元まで駆け寄ると、神裂は当麻と刀夜を庇うような位置に立つ。

それは、ミーシャは敵だと言っているようなものだった。

「おい、当麻。随分と……その……個性的な格好をする少女と知り合いなんだな。と、父さんは理解があるから、大丈夫だぞ！」

ミーシャの外見に少し驚いたのか、引きつった笑顔を向けながら刀夜は口を開く。

（父さんにはミーシャが外見通りの格好に見えている！？）

ミーシャの外見は黒いベルトをつけて、首輪までつけた金髪の少女である。

はっきり言って真っ当な格好ではない。

日常の刀夜には、ミーシャの格好は奇抜な格好にしか映らない。

『この魔術は意図的じゃないわ、偶発的に発動したものよ』

アクゼリュスの言葉を思い出す。確か、アクゼリュスは偶発的に発動したと言っていた。

（……まさか父さんは、意図的にやったんじゃない。だから父さんは御使堕しを発動させたと思っていない！）

ならば、刀夜が御使堕しを知らないのはつじつまが合うと当麻は思った。

だが魔術の素人である刀夜が、一体どういう手法で魔法陣を作り上げ魔術を発動させたのか。

その点は全く不明であった。だが今はそんな事はどうでもいいと、当麻は考え至る。

「待ってくれ、ミーシャ。何か様子がおかしい。確かに父さんは誰とも『入れ替わり』していない。だけど、他の人間が『入れ替わっている』事にも気づいていない」

頭を軽く振ると、当麻はミーシャに向かって呼びかける。

だが、その呼びかけに一切反応せず、ミーシャは無言のまま刀夜を見ている。

互いの距離は十メートル前後。当麻の時ですら、一瞬で間合いを詰めてきたミーシャだ。

たった十メートルでは、とてもではないが『距離』と呼べない。

「だから、早急に術者を倒すとかじゃなくて影響を調べ――――っ！？」

だが説得の言葉は途中で止まる。

ミーシャからぞわりと、見えない何かが吹き出した。

それに当てられた当麻は、喉が凍りついたかのように言葉を発せなくなった。

見えない何か、それは単なる殺気とか小さな物ではない。

ミーシャは存在だけで、当麻を黙らせたのである。

「下がりなさい、上条当麻！」

前に出ていた当麻を、神崎は強引に下がらせる、
ミーシャの気に当てられていた当麻は、無言で後ろに下がるしかなかった。

「土御門から聞きました。彼は今、儀式場を探しています」

「おい、ミーシャは一体どうしちまったんだよ！」

当麻は再びミーシャの方へ視線を向ける。
風が拭きゆらりとミーシャの前髪が揺れる。
その奥にある感情の消滅した瞳。その瞳がギョロリと蠢く。

その瞳は人間の瞳ではない。あらゆる心理を遮断した硝子や水晶で作られた瞳にしか見えなかった。
ミーシャは無言でＬ字の釘抜きを手に持つと、無造作に真横に降る。
ただ、それだけ。それだけの動作なのに、当麻は体が硬直し声を失ってしまった。

十メートル先にいる少女が、人の皮を被った別のものに見えたのだ。
当麻の心が恐怖で支配されている中、神裂がゆっくりと七天七刀で構える。

「初めに聞いた時に気付くべきでした」

油断無くミーシャを睨みながら、神裂は言葉を紡ぐ。

「ミーシャという名前は、ロシア語で男性につけられる名前なのですよ。他宗教の人間に名乗る偽名としても、明らかにおかしすぎます」

神裂の言葉を聞いても、ミーシャは何も告げない。
肯定も否定もしない。ただ無言でL字の釘抜きを神裂に向けているだけだった。

「その疑問を持った私は、ロシア成教に問い合せました。その結果、サーシャ＝クロイツェフという人物がいることは確認しました」

ミーシャが目を細めて神裂を見る。それだけで人が射抜けるほどの瞳だった。
刀夜のゴクリと唾を飲み込む音が聞こえる。
それはそうだろう。
少しだけだが修羅場をくぐり抜けた当麻ですら、今のミーシャは恐ろしいのである。
そんなミーシャを見て、刀夜が腰を抜かしていないだけでも奇跡なのである。

「ですが、ミーシャ＝クロイツェフという人物はいないと。おそらく『外見』がサーシャ＝クロイツェフなのでしょう」

当麻はミーシャに向けていた視線を神裂に向ける。

「じゃあアイツの中身は一体誰なんだよ」

「上条当麻、この大魔術を私が一体何という名前で呼んでいたか忘れたのですか？」

神裂の言葉に眉を潜めた当麻だが、すぐに思い出す。神裂がこの魔術をどういう名前で呼んでいたのかを。

「この世には、性別が決まっておらず、男性にも女性にもなれる存在がいるのですよ。常に両性として神話に書かれる存在が」

そうだ、この人の世界より上位の存在を強制的に人の世界に落とす魔術。

「その者たちにとって『名前』とは自分が神に作られた『目的』そのものなんです。人間ごときの『名前』と交換なんて出来るはずはない！」

その名も『御使堕し』という魔術だった事を。

神裂の言葉と同時に、細めていた目を一気に見開く。

その瞬間、地面を揺るがすような轟音と共に世界が一変した。

夕焼け色に染まっていた空が、一瞬で星の散らばる夜空へと変貌したのである。

「なっ！！」

あまりの事に当麻は頭上を見上げる。刀夜に至ってはショックのあまり声も出ない様子である。

「な、何が起きたんだよ一体！」

視線を頭上から神裂に移す当麻だが、ふと刀夜の様子がおかしい事に気付く。

訝しげに思いながら、刀夜の方を見ると彼はある方向を指していた。
震える手で指している方を見て、当麻は思わず絶句した。
刀夜の指差す先、そこには昨日まで半月だった月が巨大な蒼い満月で夜空に浮かび上がっていたのである。

「見たままです。アレが夕闇を夜闇へ切り替えただけです」

絶句する二人に対して、神裂は何事もないかのように言う。

「アストロインハンド……天体制御という名前が指し示す通り、彼女が自分の都合のいい天体配置に変えたのです」

「魔術ってのはそこまで操れるのかよ！」

冷静な神裂を見て、当麻はつい絶叫してしまう。
言葉遊びなら簡単だが、言葉通りならアレは天体単位で地球とか惑星の位置関係を自在に操作できる事を意味している。
その意味を知った当麻は、余りの凄まじさに『世界を終わらせる魔術』とまで思ってしまった。

それはミーシャが想い望んだだけで、世界に大災害を引き起こせると言う事なのである。

「自身の属性強化のための夜ですか。月を主軸と置く所を見ると……水の象徴にして青を司り、月の守護者にして後方を守護する者」

鋭利な刃のような声で、神裂はミーシャに話しかける。
だが、相変わらずミーシャは無反応であった。

「旧約においては堕落都市ゴモラを火の矢の雨で焼き払い、新約においては聖母に神の子の受胎を告知した者」

しかしミーシャは、まるで見えない殻を砕くかのように、見えない皮を剥ぎ取るかのように。

「その者の名は『神の力（ガブリエル）』。常に神の左手に侍る双翼の大天使……！」

――覚醒する。

『神の力』は無言でL字の釘抜きを振り上げる。
すると、蒼い月が一際大きく輝いた。
そして眩い月の周りに、光の輪が生まれる。
複雑な紋章を描きながら、光の輪は広がっていった。
その広さは広大であり、水平線の向こうまで消えていったのである。

「正気ですか！　ただ一人を狙うためだけに旧約に記された神話上の術式を持ち出すなど！」

同じく光の輪を見上げていた神裂が、汗の珠を浮かび上がらせながら叫んだ。
その様だけで魔術に詳しくない当麻も理解した。
これは桁外れの魔術を使うための魔法陣だと。

「何だって？　おい、あの天使は一体何を始めようって」

「堕落都市ゴモラを焼き尽くした時の再現……ってとこかしら？」

横合いから飛んできた言葉に、その場にいる全員が反応する。
それは『神の力』も例外ではなく視線を刀夜から声を発した人物に向ける。

「貴方はアクゼリュス！　何故、ここに！」

「懐かしいモノが見れたからね」

銀髪の少女、アクゼリュスはさくっと砂を踏みながら当麻たちに歩み寄る。

「何ですって……？」

アクゼリュスの言葉を訝しんだ神裂だが、彼女は気にすることなく『神の力』に視線を向ける。

「ま、そんな事はどうでもいいわ。坊やは早くオジサマを連れて儀式場に行きなさい」

『神の力』の視線を受けてなお、アクゼリュスは余裕の笑みを浮かべていた。
その姿に幾分の余裕を取り戻した当麻は、頭上に浮かぶ魔法陣について尋ねる。

「あれが落ちてきたらどうなるんだ」

「そうねぇ……人類は滅亡しましたって歴史書に書いてあげるわよ」

当麻を見ずにアクゼリュスは単純に答える。

しかしスケールが大きすぎて、逆に現実味がわかなかった。
それは刀夜も同じで、困惑した顔でアクゼリュスを見る。

「アクゼリュス、貴方は一体何を考えて」

「昼間言ったでしょう？　坊やの事は気に入ってるからね。あんな天使ごときに、私の楽しみを取られるのは些か尺なのよ」

理由は褒められた事ではないが、アクゼリュスは暗に手を貸すと言ってきている。
実力は分からないが、魔術のプロである土御門や神裂が恐れるぐらいなのだ。
それなりの実力者なのだろう、ならば、その力を借りるべきである。

「けどよ、女の子二人に任せて逃げるなんて」

当麻はそう結論づけたが、一方では自分の不甲斐なさに怒っていた。
何か自分に出来ることはないか、当麻は必死に考えていた。

「坊や」

しかし、当麻の思考を遮るかのようにアクゼリュスは強い口調で言葉を発する。
一瞬、ほんの一瞬だけアクゼリュスは当麻に向かって笑った。
それは昼間みた禍々しい笑みではない。とても優しさに満ちた笑みであった。

「オジサマに向かって言った言葉が嘘じゃないなら、早く儀式場を破壊しなさい。儀式場はオジサマの新居よ」

そう言うと、アクゼリュスは視線を当麻から『神の力』に変える。

「待ちなさい！　ここを貴方に任せてはイギリス清教の名が泣きます。私もあの天使の足止めをします」

無造作に砂を踏んで、『神の力』に近づいていくアクゼリュスを慌てて神裂が追いかける。

「好きにしなさい」

「上条当麻、早く行きなさい。儀式場の破壊は土御門に連絡すればよいです」

当麻を見ず神裂は吐き捨てるように言った。

「私は何も無駄死する気はありません。儀式場を壊せば、あの大魔術も止まるはずです」

一瞬止めようと考えた当麻だが、その背中を見て手が止まる。

「かつて私の前であの子を救った時のように、今度は私の命を救ってくれると助かります」

怖いのではない、『神の力』と敵対する者という役にふさわしすぎたのである。

「私は貴方を信じてみる事にしたのです。だから……早く行きなさい」

「ああ、分かった。神裂、俺もお前を信じるぜ！」

刀夜の手を掴むと、当麻は走りだす。
自分が宿泊しているホテルでは危険だと思い、遠くで見える使用されていなさそうな家に向かって走る。

しかしそれを呑気に見ている『神の力』ではない。
当然、『神の力』の目的は刀夜を消し本来の座に戻る事なのだから。

瞬時にして氷の槍を作り上げると、『神の力』は刀夜に向かって放つ。
その数は三十。それも、ただの氷の槍ではない、天使の力が封入されている氷の槍である。
一つでも地面に当たれば、砂浜など軽く吹き飛び海岸は壊滅状態になるであろう。

だが、氷の槍は地面に激突する事はなかった。
勿論だが、刀夜にぶつかる事もなかった。
ただ空中で飴細工のように砕け散ったのである。

「あなたの相手は私よぉ。坊やじゃ物足りないでしょう？」

再び氷の槍を放とうとする『神の力』。
しかし、やはり氷の槍は地面に突き刺さることはなかった。
何度も破壊された事で、優先順位を変えたのだろうか。
『神の力』は刀夜に向けていた視線を、アクゼリュスへ変える。

「……ｑｒｏｆ愚劣ｓｈｂｆ」

轟音と共に『神の力』の背中が爆発した。
その背から出現したものは、氷細工で出来た奇妙な翼であった。

鋭く荒削りな翼が何十と集まり、それと同時に海水も『神の力』の背中へと集う。
その二つが融合すると、巨大な水の翼へと変貌した。
一本が数十メートルあり、巨大な水翼の剣にも見えた。

水の翼が出来上がると、翼から次々と氷の槍が二人に襲いかかってくる。
七天七刀を構えた神裂だが、氷の槍は神裂に届く事はなかった。
全てアクゼリュスが破壊したのである。

（さすが文献にのる程の魔女。あの氷の槍をいとも簡単に破壊するとは）

氷の槍を破壊する様を間近で見た神裂は、改めてアクゼリュスの強さを認識した。
直接的な対峙はないが、アクゼリュスというキーワードで探せば、いくらでも文献はみつかる。

曰く、混沌の海より産み落とされた存在。
曰く、不死の肉体と強大な魔力を誇る存在。
曰く、カタリストを用いず魔神の力を自由に行使する存在。

――アクゼリュス（残酷）という名を冠する夜の魔女。

文献を読んだ時は眉唾モノだったが、実際に見て初めて理解する。
『神の力』という天使を前に、彼女は余裕を崩していなかった。

神裂には分かったのである。
数百年もの間、教会世界で敵対する存在を全て倒してこれた理由が。
それはアクゼリュスが、人の身でありながら神の領域まで足を踏み

込んでいる存在だからと。

「ｅｉｘチィッｔｓｌｑＪｅ――」

幾ら氷の槍を投げつけようと、全く効果が見れないことに『神の力』は苛立っていた。

目の前の存在をどうやって倒すべきか、考えあぐねているようである。

「ここは通さないわよ」

対して、アクゼリュスは腕を組み余裕の笑みを浮かべていた。

アクゼリュスと神裂が『神の力』と対峙している中、当麻と刀夜は使われていない家へ駆け込んだ。
儀式場を破壊せよ、と言われたが当麻たちに破壊する事は不可能である。
今いる場所から実家に行くまで、車でも一時間近くかかる。
だからこそ、当麻は儀式場を探してくれと土御門に頼んだのである。
疲労のたまった体に鞭を打って、当麻は携帯電話をポケットから取り出す。

「はぁはぁ……あれは何なんだ。今ここで何が起きているんだ？何かのテレビ撮影でもしていたのか？」

事情をよく飲み込めていない刀夜は、当麻に対して説明を要求する。
何も説明がない刀夜には当然の疑問だろう。
だが、当麻には説明をする時間的余裕が無かった。

「いいか父さん、説明は後でする。このままじゃ人が死ぬ、一人残らずだ。この事態を止めるには御使堕しを解除するしかない」

「当麻、何をいって……」

要領を得ない説明に、刀夜はただ困惑した表情で当麻を見るだけだった。
しかし当麻はそんな刀夜を無視して、電話をかけようとする。

「やめとけよ、カミやん。そいつは何も知らないぜよ」

部屋の入口から当麻に声をかける人物が立っていた。
刀夜と当麻は揃って振り返り、そこにいる人物を見る。
そしてギョっとした。立っていた人物は土御門だったのである。

「なっ!?　土御門、お前なんでここに」

てっきり儀式場を探していると思っていた土御門の登場に、当麻はすっかり落ち着きを無くしていた。
だが土御門はサングラスの位置を直すと、刀夜の方に視線を向ける。

「御使堕しを発動させた犯人は刀夜だ。だがアクゼリュスも言っていただろう?　この魔術は偶発的に発動したと」

「な、何が犯人だ!　初対面のくせに失礼だぞ」

『犯人』という言葉に反応して刀夜は激昂する。
だが、土御門は刀夜の激昂を無視して言葉を続ける。

「カミやんの実家を見てきたが……ありゃあ驚きを隠せなかったぜ」

「何?」

土御門が語る言葉の意味が、当麻には分からなかった。

「普通の家ではない、いろんなお守り、民芸品、オカルトグッツが所狭しと並んでいた。だがよ、ただ並んでいたわけじゃない」

それは刀夜も同じであった。二人揃って困惑する顔しか出来なかった。

「それが風水的、陰陽的に正しい位置に配置されていたんだよ。そのせいで相乗効果が生まれていた」

だが土御門は二人を無視して、何が楽しいのか分からない笑みを浮かべながら説明する。

「一つ一つは小さな力でも、三千を超えるお守りで相乗効果が生まれたらどうなると思う？　巨大なひとつの力となる。そのせいか、カミやんの実家は一つの神殿と化していたよ」

「なっ！？」

当麻は言葉の意味が理解出来ていなかった。
土御門が何を言っているのか、さっぱり分からなかった。
ただ一つだけ分かった事がある。
それは、自分の実家が『普通の家』ではないという事だ。

「恐らく上条夫婦がカミやんと会う為に家を空けた時点で、御使堕しは発動したのだろう」

「ふざけんな、お土産の位置が風水的に正しかったからとか単なるこじつけじゃねぇか！」

「ああ、こじつけに近いさ。だがよ、それ以外に説明がつけられるか？」

土御門の問いに、当麻は答えを返すことが出来なかった。
曲りなりにも土御門はその道のプロなのだ。
そのプロがあやふやな事だけで結論を出すとは思えない。

当麻はただ下を向いて、唇を噛むしかなかった。

「それにな、カミやん。実家を調べてみたが、はっきり言って御使堕しはまだマシな方だったよ」

その言葉にハッとなり、当麻は視線を土御門に向ける。

「上条刀夜が作り上げた魔法陣に『失敗』はない。『お土産』をどう配置した所で、必ず何らかの大魔術が発動したはずだ」

その顔には余裕というモノが消え失せていた。
先ほどまで浮かべていた笑みも、鳴りを潜めてただ無表情な顔をしていた。

「……それにな、御使堕しだけじゃなかった。過去にだが『何らかの大魔術』が発動した形跡すらあった。最も、創作魔術過ぎて一体何が起きたのかすら分からなかったがな」

プロである自分ですら分からないモノを、ズブの素人である刀夜に作られたのがよほど悔しいのだろう。
少しだけ悔しさを滲ませながら、土御門は刀夜を見ていた。

「カミやんの実家は、戦術魔法陣の宝庫だったよ。その上、このオレにも正体が分からない創作魔法陣が存在していた」

当麻は土御門の言葉を否定する材料を探そうとした。

「分かるか？　カミやん。風水のエキスパートである土御門さんにさえ分からないような魔法陣があるんだよ。カミやんの実家はそれほど危険極まりないものなんだよ」

だが、思い浮かんだ材料は自分の中ですぐに否定された。
刀夜は月に三度の出張をしている。それは国内、国外を問わずだ。
実際インドの何とかとか、エジプトの奇妙なお守りを貰った当麻には分かる。
もしかしたら当麻に渡す物以外もあるのだろう。

「あの魔法陣は刀夜という変圧器を通して発動している。だからミーシャは刀夜を狙ったのだろう」

だから当麻は分かってしまったのだ。
土御門がお土産で固められた実家を神殿と呼んだ理由が。
ばらばらで統一性のないお土産の山。
それらが一箇所に固められているのだ。

もしも、それを魔術的に正しく組み上げたならどうなるか？

科学で例えるなら、小さな電子回路を正しい配線で組み上げるのと同じだ。
電子回路自体の力は弱くても、それらを正しく組み合わせていけば大きな力へと変貌する。
ならば、魔術にも同じことが起きてもおかしくは無い。

「じゃあどうしろっていうんだよ！」

当麻は首を横に振って、土御門に問い詰める。
今さら原因を調べて一体何になる。
今やるべき事は『儀式場を破壊』する事だ。
そんなつまらない話し合いをしている暇はないなずだと当麻は考えていた。

だが、土御門はニヤニヤと笑いながら当麻の問いに答える。

「簡単だよカミやん。この場にいる誰かさんが犠牲になってくれればいいんだよ」

「何……を……」

土御門の言葉が理解出来なかった。

ただ、体は理解していたのかすぐに刀夜を庇うように動いていた。

刀夜も身の危険を感じたのか、土御門に対して警戒心を出し始める。

「もうこうなった以上は誰かが犠牲になるしかない。なぁに、カミやんは気にしなくていいんだよ」

そんな二人を見て土御門は笑いながら言う。

そしてゆっくりと歩み出してくる。

「ふざけんな！」

怒声を放つ当麻だが、胃の中に強烈な重圧を感じていた。

土御門から放たれる重圧は、普段からは想像できないほど重かった。

「当麻、一体……」

「ああ、知らないうちに終わるのは酷だな。教えてやるよ」

刀夜は、当麻や土御門が何を言い合っているのか分からない。

分からないが、そこに自分が関わっていることだけは理解していた。

「まっ！」

土御門の言葉にギョっとした当麻は、慌てて土御門の声を押し留めようとする。

「上条刀夜、あんたのお土産のせいで人が死ぬ。それも数えきれないほどの人がだ」

だがそれは間に合わなかった。

「そこには老若男女関係ない。無差別、そう無差別に死ぬのだよ」

衝撃を受けた刀夜の顔を見ながら、土御門は残酷な笑みを浮かべていた。

「テメェ！！」

その顔を見た瞬間、当麻は叫んでいた。

その叫び声こそが土御門の言葉を、信用に価する言葉になるとも知らずに。

「やめとけ、カミやん。優菜ちゃんならいざ知らず、お前さんじゃオレには勝てないよ」

拳を構えて対峙する当麻を、土御門は楽しそうな笑みを浮かべながら見ていた。

今の土御門を見て当麻は理解していた。自分では土御門に勝てる要素はゼロだという事を。

「認めない。誰かが犠牲になるような法則があるなら」

だが、ソレがなんだ。そんな事で諦められるか。
当麻は歯を食いしばって土御門を睨みつける。

「まずはそのふざけた幻想をぶち殺す！！」

その言葉を聞いた土御門は、ほんの一瞬だけ笑みを浮かべた。
それは魔術師としての顔ではなく、普段の友人としての笑みだった。

「そうだな……こうしよう、カミやん」

だがその笑みはすぐに消える。
土御門と当麻、互いの体が間合いの中に入る。

「素人には地べたに這いつくばってもらおう」

気軽に、まるでこれから散歩に行くような口調で土御門は言う。
それと同時に、壮絶な音がした。

「がっ……はぁ……」

一瞬で間合いを詰めた土御門の蹴りが、当麻の鳩尾に入る。
当麻は激痛のあまり思わず体を曲げる。だが、それは致命的なミスであった。

「ばっ……がはぁ」

当麻は無防備に自分の頭部を土御門に晒したのである。
その隙を逃すほど、土御門は甘くなかった。

土御門は当麻の後頭部へ肘を落とす。

後遺症が残る危険性がある人体の急所に。
壮大な衝撃を受けた当麻は、そのまま全身から力が消し飛んだ。

「三秒すら持たないか。ま、カミやんならいい方だよ」

床に倒れ伏した当麻を見下ろしながら、土御門は冷たい言葉を投げつける。

「テ……テメ……ェ」

当麻は体に力を入れようとする。
だが体は正直だった、全く力が入らないのである。
バランス感覚を失って、どうやれば平行に立てるのかすら分からない。
少しでも気を抜けば、胃液が逆流しそうになる。

「それにしても、優菜ちゃんがカミやんについていかなくて助かったにゃ～。あの子の頭脳と戦闘的な感覚野は恐ろしいモノがあるしにゃ～」

対して土御門は楽しそうに笑いながら言った。

「ああ、カミやんの家族はちょいと薬で眠ってもらっているから今頃はぐっすりだにゃ～」

これがプロと素人の差、とでも言いたげに当麻を見下ろしていた。

「ま、これ以上は見たくないだろう。寝ていろ、素人」

襟首を掴み強引に当麻を立たせた土御門は、最後の一撃と言いたげ

に拳を振るう。
土御門の攻撃に対して、当麻には抵抗できる力など残っていなかった。

かする程度の威力。だが、それは壮絶な威力を持っている攻撃だった。
土御門の狙はただ一つ、当麻の顎である。
その攻撃で脳震盪を起こした当麻は、もはや立つことはおろか指一本すら動かせず床に倒れ伏した。

「すぐに済む。なぁにさっきも言ったが、カミやんは気にしなくていいんだよ。カミやんは」

盛大なダメージを受けたが、それでもなお当麻は必死に立ち上がろうとした。
愛すべき家族を守るために。

「もういい」

だが、そんな当麻に向かって声がかけられた。
土御門ではない、刀夜であった。
その声色は優しく、それでいてどこか力強さを感じさせた。

「立つな当麻。お前が傷つけられる場面じゃない」

「刀夜の方は良き理解力をお持ちだな、カミやん」

当麻は倒れ伏しているので、土御門の顔を見ることは出来ない。
だが土御門は笑っているのだろう、そう当麻は思っていた。

「事情は飲み込めないが、私に用があるなら好きにすれば良い。だが、これ以上は当麻に手を出すな。いや、絶対に当麻には手を出させない」

だが、その笑みに隠された獰猛な気を感じてなお、刀夜は一歩足りとも怯まなかった。

怖くないはずがない、喧嘩慣れしている当麻ですら今の土御門は怖い。

ましてや刀夜はただの会社員だ。

路地裏の喧嘩ですら負けるような刀夜が、プロの土御門に震え上がらないはずがない。

「……へぇ、面白い事をいうな。まさかオレに勝利できる秘策でもあるのか？」

「ないさ。私はただの中年だ、もう体もガタガタし始めて困っているぐらいだからな」

土御門の問いに、刀夜は自嘲気味に笑いながら答える。

「だけどそんなのは関係ない。素人だから、私には引き際も交渉の余地もない。たとえ敵わずとも、何度敗北しようと、絶対に許さない。どんな目にあおうと、死して骨になろうと決して諦めない」

刀夜は土御門を睨みつける。

目を逸らさず、目を背ける事なく、ただ真正面から睨みつける。

「いいか？　理解出来ないなら、一つだけ教えてやる」

一歩、挑むように刀夜は前に出る。

土御門と対等な位置に立つために。
そして刀夜は『魔術師』に宣告する。

「私は上条当麻の父親だ。私はその事を、誇りに思って生きている」

その言葉を聞いて当麻は思った。
自分の父さんはいい年して母さんとベタベタしてる癖に、女性問題をよく起こして母さんに怒られている。
冴えないおっさんにしか見えないし、戦闘においては全く役に立たないだろう。

だけど、刀夜の声が当麻にはこれ以上無いほど頼りに聞こえた。
理由など語ってもらう必要もない。
どんなに強大な敵であろうが、家族を守るために闘う父親。
きっとこれが刀夜の思い描く父親の姿なのだ。
姿を見なくても当麻には分かる。

今の刀夜は世界で最高に頼りになる『父親の姿』なのだ。

「お、おおおあああああああああああああああ！！！」

ならば、むざむざ黙って見ているだけなど当麻に出来るはずがない。
バキバキと体中から悲鳴を上げるのを無視して、当麻は立ち上がる。

「……不発か？　いや、違うな」

立ち上がった当麻を見て、土御門はわずかに驚いたような顔をした。

「良い眼だな」

だが、当麻の目を見てすぐに不敵な笑みを浮かべる。

「当麻、もういい！　立つんじゃない！」

手負いの獣さながらの姿で立ち上がる当麻を見て、刀夜は見るに耐えないという感じで言う。

「ふざ……けんな！」

「当麻……」

驚いた顔をする刀夜に、当麻は歯を食いしばりながら睨む。

「いいか、分からないようなら、一つだけ教えてやる！」

止めようと足を踏み出した刀夜だが、当麻の言葉によって動きを止める。

「俺は上条刀夜の息子だ。例え記憶があやふやでも、それだけは誇りに思って生きている！！」

そして視線を刀夜から土御門へ向ける。

当麻は、ほとんど力の入らない両腕で拳を作り、静かに構える。

「ぬるま湯に浸かっている程度の人間と思っていたが……いやはや、正直なところ見直した。いいぜ、認める」

土御門の顔から笑みが消え、両腕で拳を作り構える。

その姿は、全力を出すという土御門なりの敬意が見て取れた。

「上条当麻は土御門元春の敵だ」

その瞬間、火蓋が切って落とされた。

一瞬にして懐に飛び込む土御門に、当麻は一歩下がる。

瞬間的に足を踏むと予想したのだ。

事実それは正しく、さっきまで当麻の足があった場所に、土御門が力強く踏み込んでいたのだ。

だが懐に飛び込まれたことには変わらない。

直ぐ様、土御門は右手で半月を描くようなフックを放つ。

当麻は反射的に左手で自分の頭を守るように構える。

（フェイント！？）

だが、それは土御門の思い描く通りの行動だった。

ふりかけた右手を途中で戻し、がら空きとなったボディへ拳を放つ。

「ぐ、ぁ――――」

肺の中にある空気が全て押し出された感覚になる。

足から力が抜け、崩れ落ちそうになる。

それでも当麻は拳を握り締め、土御門の顔面へ右拳を放つ。

決死の拳だったが、ぽすんという小さな音しかならなかった。

つまり、その程度しか力は残っていなかったのである。

「褒めてやるよ、カミやん」

その言葉と同時に、土御門は当麻の鳩尾に膝を突き上げる。

抵抗する力すら残されていなかった当麻は、無防備に土御門の攻撃

を食らう。

そのまま壁まで弾き飛ばされた後、床に倒れ伏した当麻はもはや指先一つすら動かせない状態だった。
否、今まで立っていたことすら不思議なのだ。

それでも当麻は諦めきれず、土御門を睨むのを止めなかった。
刀夜が駆け寄って何かを言っているが、全く聞こえていなかった。
ただ、土御門を睨むのだけは止めなかった。

そんな当麻を見て、土御門は静かに笑った。
見下しているとか侮蔑の表情ではない。ただ子供のように笑っていた。

「――場ヲ区切ル事。紙ノ吹雪ヲ用イ現世ノ穢レヲ祓エ清メ禊ヲ通シ場ヲ制定」

土御門は懐から何かを取り出すと、蓋を開けて中身をばら蒔いた。

「――界ヲ結ブ事。四方ヲ固メ四封ヲ配シ至宝ヲ得ン」

その瞬間、周囲の空気が変わる。

「――折紙ヲ重ネ降リ神トシ式ノ寄ル辺ト為ス」

更に懐から何かを取り出すと、部屋の四方へと放り投げる。

「――四獣ニ命ヲ。北ノ黒式、西ノ白式、南ノ赤式、東ノ青式」

土御門の言葉に呼応するかのように、放り投げたものが青白く光り

始める。

「――式打ツ場ヲ進呈。凶ツ式ヲ招キ喚ビ場ヲ安置」

（ちょっと待て……これは魔術？）

「――丑ノ刻ニテ釘打ツ凶巫女、其ニ使役スル類ノ式ヲ」

満身創痍の当麻に対して、魔術を使うという事に当麻は違和感を覚えた。

「ごふは！……げふっ……げふっ……」

その時、土御門は盛大に血を吐き出した。

尋常じゃない吐血に、当麻は思わずギョっとする。

「――人形ニ代ワリテ此ノ界ヲ」

それでも土御門は魔術を止めない。

「――釘ニ代ワリテ式神ヲ打チ」

その姿を見て、当麻はある言葉を思い出していた。

「――鎚ニ代ワリテ我ノ拳ヲ打タン」

超能力者は、魔術を使えない。使えば、体に強烈な負荷がかかると。

ならば土御門が昼間巻いていた包帯の意味は……？

その時、土御門のアロハシャツが少しだけめくれた。
そこには青黒い内出血のアザが所狭しと浮かび上がっていた。
単なるアイドルファンに追いかけられた程度でつく怪我じゃない。

「やめろ……土御門……」

となればどうやってついた怪我か。
答えは簡単だ。土御門は一回『魔術』を使っているのだ。
そんな状態でもう一度『魔術』を使えばどうなるか、答えは余りにも明白だった。

「げふっ……げふっ……カミやん、殴って悪かったな。でも、お前さんの事だから、こんな方法を取ると言ったら止めるだろう？」

もう一度『魔術』を使えば土御門の体は死に至る。
見えない刃物で切り裂かれているかのように、土御門の体のあちこちから血が吹き出す。

「当たり前だ。みんなで笑ってみんなで帰る。それ以外の結末なんて認められるわけねぇ！」

その姿を見て土御門の『解決法』と『誰かが犠牲になる』、という言葉の意味を当麻は理解する。
自分は勘違いしていたのだ。
土御門は一度として『術者（刀夜）を殺す』とは言わなかった。
ただ『誰かが犠牲になる』としか言っていなかったのだ。

「……そっか」

当麻の言葉に、土御門はまるで死にゆく人のような静かな笑みを浮

かべていた。

「カミやん。わかっていないようだから、オレからも一つだけ教えておいてやるにゃ～」

必死に体を動かそうとする当麻を見ながら、土御門はいつもの口調で当麻に語りかける。

「オレって実は天邪鬼（ウソツキ）なんだぜい」

そして土御門は最後の呪を紡いだ。

その瞬間、目が開けられないほどの白光が部屋に溢れかえり、屋根を突き破って夜空に解き放たれた。

全てを終わらせる一撃を見届けたのと同時に、捨てられた人形のように土御門は手足を投げ出して床へと倒れ込んだ。

「つ、ちみ……かど？」

うつ伏せに倒れている土御門に、当麻は声をかける。

だが、土御門は全く動かなかった。ピクリとも動かなかったのである。

そして今までのダメージが今ごろ響いてきたのか、その言葉と同時に当麻は意識を手放した。

世は全てこともなし

当麻は病室のベットで眠っていた。
無能力者とはいえ、当麻の体には学園都市に関する機密がある。
当然、学園都市外の病院に回すことは出来ない。
そして御使堕しの事件から二日後、当麻は目を覚ました。

「またこの病室か……」

当麻は周りを見渡しながら、ここが学園都市の病院であることに気付く。
そしていつも入院時に利用している病室である事にも気付く。
何故なら、サイドテーブルの上にルーズリーフで書かれた手紙のようなものがあったからだ。
そこにはボールペンでこう記されていた。

『また振り出しに戻る？　上条当麻クン』

ルーズリーフの隅っこに小さなアマガエルのシールが貼られていた。
間違いない、担当はあのカエル顔の先生だと当麻は思った。

「しょぼくれるな、カミやん。ナースさんでも眺めて、入院生活を愉しむがいいにゃ～」

ベットに身を沈め、両眼を閉じていると突然声がかけられる。

「テメェに言われたくねぇ！　つーか原因のお前が何で呑気にココにいるんだよ！！」

「酷いなぁ、カミやん。友人のお見舞いだにゃ～」

病室に突然乱入してきた人物、それは土御門であった。
ニヤリと笑う土御門だが、体のあちこちに包帯が巻かれていた。

「だ・か・ら、原因のお前が見舞いとかおかしいんだよ！」

「あれぇ？　手加減したんだけどなぁ？」

激怒する当麻に、土御門はあくまで飄々とした態度を取る。
とりあえず枕を土御門に投げた当麻だが、当然のごとく土御門は避けた。

「どこがだよ！　てーか何で生きてるんだよ！　その体はクローンボディか何かか！？」

「ふっ、土御門さんはそんな没個性は嫌ですにゃ～。きちんとナマ土御門元春ですぜい」

「元気に体が動くなら、真っ先にテメェをしばきたい」

「はっはっは、それは無理だぜい。さって、ここからは真面目な話だ」

冗談を言い合う二人だが、土御門がふと真面目な顔をする。
当麻も頭のどこかで分かっていたのか、真剣な顔をして土御門を見る。

「最後に残った問題。それは今回の事件、誰が責任を取るべきか」

「……そうだな」

そう言いながらも、当麻はそれ以上口を開けず黙りこんでしまった。
結局、悪気の有り無しに関係なく『御使堕し』は刀夜が発動させた。
そのせいであちこち迷惑かけたし、あの二人に至っては天使と戦わせる事となってしまった。
最もアクゼリュスに関しては『良い退屈しのぎになったわよ。次はもっと高位の天使を頼むわ』とか言っていたが……。

悪意が無いから無罪なんて訳にはいかない。
責任の一端が刀夜にあるなら、それは責任を取るべきなのだ。
だが刀夜が『御使堕し』を発動させた原因の一端が、自分にもあると考えていた。
ならば刀夜が責任を取るなら、自分も取る。
もし土御門が刀夜に責任を取らそうとするなら、そう告げようと当麻は考えていた。

「一応、オレはイギリス清教の人間だから、教会から問われたら真実を話さないといけないんだがな」

ちょっとだけ悩むような顔をしていた土御門。
だが、すぐにニヤリと笑うとトンでもない事を口にする。

「ま、メンドくさいしメイドさんもいないから、イギリス清教にはテキトーな事いっとくにゃ～」

ずるっと当麻はずっこけた。

「おい！　いいのかよそれ！　あれ？　よく考えれば俺が殴られる

理由がねぇ！？」

「ごめんちゃい♪　あれは演技」

「うばあああああああああ！！！！」

頭が痛くなった当麻である。

スパイとか魔術師とか思っていたが、友人は単なる口が軽い人だったようである。

おまけに殴られたのは単なる演技だったのだ。

「でもカミやんの事だから、俺が死なないかも？と分かると『そんな方法絶対認めねぇ！』、と言って絶対オレを止めようとするにゃ～。それに、勝手にどっかで死んでても、それはそれでカミやんがずっと後悔の念を抱きそうだったからにゃ～」

「……」

死なないから大丈夫と言って、自分が土御門を止める可能性は否めない。

ならば今回の演技は必要だったかも知れない、理不尽だが……。

「今日ここまで訪ねてきたのは、口裏合わせるためにゃ～。勿論、ねーちんの方はオレがしっかりと口止めさせとくぜい」

「分かってはいる。分かってはいるんだが……お前が信じられない」

頭を抱えて軽く叫ぶ当麻だが、そんな当麻の姿を見て土御門は笑っていた。

「酷いにゃ～。とはいえ、御使堕しに関しては適当にデッチあげておくにゃ～。それだけは、信じてほしいにゃ～」

（そもそもアクゼリュスと手を組んだとか、イギリス清教に話せるわけないしにゃ～）

軽く笑い飛ばしている土御門を見ながら、当麻は疲れたようなため息を吐く。

「……まぁ父さんの顔が割れている時点で、お前を信用するしか無いか」

「おーけー。んじゃ俺は帰るぜい。そうそう、ねーちんの方はピンピンしてるから、安心するんだにゃ～」

そう言うと、土御門は病室を後にしようとする。

「土御門！」

だが当麻がそれを止める。土御門は振り返らなかった。

だが、その足は止まっており、当麻の次の言葉を待っているようである。

暫く視線を彷徨わせていた当麻だが、やがて土御門の背中に視線を向けるとはっきりと言いたい言葉を口にした。

「……ありがとな」

少しだけ顔を赤くしながら、当麻は親友に向かって礼を述べる。

土御門は顔だけ当麻の方に向けると、ニヤリと笑った。

「気にするなにゃ～。カミやんの家を爆発四散させちゃったしにゃ～」

凄い爆弾発言だけ残して、土御門は病室を後にした。
言葉の意味が理解できなかった当麻だが、やがて理解が追いつくと悲痛な叫びを上げた。

「え？　ちょっと待て！　土御門！　今なんていった！！！」

慌てて土御門を呼びとめようとしたが、既に土御門は立ち去った後であった。
頭を抱えて絶叫していると、別の人物が病室に入ってきた。

「おいおい、当麻。興奮してどうしたんだ？」

入ってきた人物は刀夜だったようである。
その後ろに詩菜もいたので、両親が見舞いにきた事を理解する。
刀夜たちは当麻のベットまで歩み寄る。

「あー、当麻。その……すまんかったな」

頬をかきながら、どことなくバツの悪い顔をして刀夜は謝ってきた。

「いいって、もう終わったことだし」

「そうか」

肩の荷が下りたような顔をして、刀夜は当麻を見ていた。
そんな二人に詩菜はハテナマークを浮かべていたが、何か男同士の話と思ったのか尋ねることはなかった。

「当麻～、見舞いに来たわよ」

「とうま、大丈夫？」

「当麻お兄ちゃん、お見舞い品にサバ缶を買ってきたって訳よ！」

「フレンダお姉ちゃん、それは自分が超食べるためじゃないのですか？」

刀夜たちより少し後に、沈利たちも当麻の病室にやってくる。
姉妹たちは刀夜と反対側の位置にまで歩み寄る。
一気に六人も病室に入ってきたので、少々狭苦しい感じがしたが不思議とそれが嫌な気持ちにはならなかった。

「それにしても、喧嘩して入院とか……あんた、どんだけ激しい喧嘩しているのよ」

少々怒り気味の顔をして、沈利は当麻に苦言を口にする。

「ごめんね、沈利姉ちゃん」

『御使堕し』の事を言えない当麻は、当麻の怪我を『友人と喧嘩して出来た怪我』と偽った。
勿論、刀夜にもキツク口止めをしている。
だからいつもの事か、と納得はしてもらえた。
ただ、やっぱり説教は貰った当麻であるが。

「ま、大怪我にならなくって良かったわ」

怒り顔の沈利だがすぐに苦笑すると、当麻の頭を撫でる。
少々恥ずかしいが、頭を撫でる沈利には有無を言わせない雰囲気があった。
そのため、当麻はなすがまま頭を撫でられていた。

「当麻、貴方は私の仕事を増やす趣味でも持っているのですか？」

撫でられ続けていると、当麻の病室に優菜が訪ねてきた。
だがプライベートの格好ではなく、白衣を着ていた。

「いや、そんな趣味は持ちあわせておりませんよ？」

「では土御門さんの怪我は何なのです？　彼はかなり危険な状態でしたよ？」

優菜の言葉に反論できなくなる当麻。
確かに、大量の血を吹き出し吐血していた土御門は死んでもおかしく無い怪我である。
いくら周りに『御使堕し』の事が言えないとはいえ、あの怪我が尋常ではない事は誰の目にも明らかだ。

「……」

「さっきも血塗れになって運ばれてきましたよ。当麻、何をそんなに争っているのです？」

え？　と耳を疑った。
優菜の言葉によると、さっき土御門は緊急患者として運ばれてきたようである。

（あれぇ？　さっきまで元気に馬鹿笑いしてたぞ。アイツは！）

少し考えてある事に気付く。
そういえば、何故姉ちゃんたちは父さんより少し遅れて病室にやってきたのか？
恐る恐る視線を沈利の方へ向ける。そこにはニコニコ笑う沈利がいた。
しかし、顔は笑っているが目が笑っていなかった。

「（まさか……）なぁ、優菜。土御門は何か言っていたか？」

嫌な予感をしつつ、当麻は土御門の様子を優菜に尋ねる。
顎に手を当てて考えた優菜は、やがて当麻にとって最も聞きたくなかった言葉を口にする。

「えーと、確か……『ゴメンナサイ……ゴメンナサイ……もうしません……だにゃ～』とかうめいていましたね」

当麻は自分の顔が引きつるのが分かった。
ギギギっと油が切れた機械のように、頭だけを沈利の方へ向ける。

「あの……沈利お姉さま？」

「なぁに、当麻」

当麻は視線を沈利から、理后、フレンダ、最愛と順番に移していく。
姉妹全員、晴れやかな笑顔である。しかし全員、沈利と同じで目が笑っていなかった。

「イエ、ナンデモアリマセン！」

土御門の身に何が起きたか理解した当麻だが、それを沈利たちに尋ねる勇気は無かった。
『御使堕し』の事を知らない沈利たちは、当麻の怪我を『友人と喧嘩』でついたとしか知らない。
ならば当麻の怪我をとても気にする沈利が取る行動は一つだった。
そして、その行動に姉妹が反対するわけがない。むしろ、同じ様な行動を取るに違いない。

（土御門……すまん……）

当麻は土御門に対して心の中で謝った。

「そうだ、家族が折角揃ったんだ。皆で写真を取らないか？」

同じ様に土御門の身に起きた事を理解した刀夜は、顔を引きつらせながらカメラを取り出す。

「わー、それはいい案だね、父さん！」

明らかに話題逸らしだが、今はありがたいと思い当麻は手を上げて喜ぶ。

「だろう！？」

学園都市製の使い捨てカメラを片手に、刀夜は冷や汗を流しながら当麻と肩を組む。
二人の気持ちは一緒だった。

『我が家の姉妹（娘）たちは怒らすと怖い。あれは確実に母さんの

血を引き継いでいる』

肩を組みながら引きつった笑顔を浮かべる二人を、姉妹と詩菜は不審そうに見ていた。

「そうねぇ、そろそろ額縁に飾る写真が欲しかったところだしね～」

「家族の集合写真、パパもいい事言うって訳よ」

写真自体は悪くないと思ったのか、特に不満を述べず賛同の声を上げる。

そして写真に映るため、思い思いの場所に移動する。

最愛は当麻の膝の上。

フレンダは当麻の右側。

理后は当麻の左側。

沈利は当麻の後ろ側。

刀夜と詩菜は子供たちを見守るように、少し離れた左側。

そして優菜は……。

「……」

カメラに映らない場所で壁にもたれかかっていた。

その瞳も顔も、全く表情を映していない。

だから優菜が何を考えているか誰も分からなかった。

「優菜ちゃん」

だが刀夜は気にすることなく、笑顔で優菜に話しかける。

「……何でしょう」

「……あんな事があって、こんな事を言う資格はないのかもしれないが」

そこで刀夜は言葉を区切る。少しだけ深呼吸をすると、優しい声色で優菜に言う。

「君は私たち家族の一員だ。だから、一緒に写真に映ろう」

少しだけ驚いた顔をした優菜だが、直ぐに満面の美しい笑顔を見せた。

「……はい」

だれもが見惚れるほどの美しい笑顔を――。

白衣を脱いで椅子にかけると、優菜は自分のポジションと思っている位置につく。

それは沈利の隣。その姿は沈利を支えるという意思表示なのかもしれない。

沈利が当麻の後ろに立っているのと同じ様に。

「刀夜さんの言う通りよ。沈利さん、理后さん、優菜さん、フレンダさん、最愛さん」

今まで黙っていた詩菜が、胸に手を当てながら自分の子供たちに語りかける。

「皆、私が最も心を痛めて育てた娘たちよ」

詩菜は優しく包まれている気持ちになる笑顔を浮かべていた。
その笑顔に、その場にいる全員は自然と笑顔になっていた。

「さぁ、写真をとるぞ！」

「……さすが学園都市製。使い捨てカメラの癖に、リモートシャッターかよ」

よく分からないところに突っ込みを入れる当麻。
だが、当麻の言葉を無視して刀夜はカメラのスイッチを手に取る。

「いくぞ！　はいチーズ！」

カシャっとカメラ音が部屋に響く。それは家族の新たな想い出を刻む音。

その写真に映った家族は、皆心からの笑顔を浮かべていた。

【番外】とある世界の混沌学園（前書き）

１００話記念の短編作品です。
「とある当麻の家庭事情」と全く関係はありません。
その上、登場人物は性格破錠しまくっています。

では、濃厚ギャグ１００％のとある話　スタートです！

【番外】とある世界の混沌学園

これはとある平行世界。
そこは『科学』と『魔術』がいがみ合うこともなく。
互いをだまし取ろうとする謀略もなく。
ただ、平和がそこにはあった。

そんな世界の、とある学園の物語。

「遅刻だぁぁぁぁーーーーーー！！！」

当麻は全速力で走っていた。時刻は既に八時二十五分、後五分で予鈴がなる。
このままでは生活指導部の先生がたからきつい説教が待っている。

「うぉぉぉぉ、姉ちゃん達も冷たいなぁぁぁーーー！！！　昨日御坂と遊んだからって、目覚まし時計を止めるなんてぇぇーーー！！！」

昨日御坂と御坂妹と遊んだ（彼女らにとってはデート）のがバレて姉妹から何故か怒られた当麻。
色々と問い詰められた挙句に、この様である。

「うぉぉぉぉ、唸れ俺の脚力よぉぉーー！！」

全速力で走る。既に足はガクガクとしていて力が入ってない気がする。
だが、それを無視して校門を目指して走る。

「間に合ったぁぁーー」

校門が開いていたので、当麻は雪崩込むように校門をくぐり抜ける。
その瞬間、力が抜けたのか膝に手をおいて息を整える。

「ギリ……ギリ……」

「残念ながら貴様は遅刻である」

ギクリっとした。走った時の汗とは他に、もう一つ別の汗が流れ始める。
恐る恐る後ろを振り返ると。

「上条当麻、貴様は精神が弛んでいるのである」

生活指導部の長、アックアことウィリアム＝オルウェル先生が立っていた。

「ふ、不幸だぁぁぁぁぁーーーーーー！！！」

アックアに首根っこを掴まれ、引きずられている当麻は叫んだ。
当麻の時計は、学校の時計より三分ほど遅れていたのである。

「ひ、ひどい目にあった……」

通称アックア教室と呼ばれる部屋で、みっちりと説教を食らった当麻はズタボロの状態で教室に入った。
中で何が起きているかは口にしたくない。だが、連れて行かれた生徒たちは口を揃えて語る。

――二度とアックア先生の説教部屋には行きたくない、と。

「カミやん、今日もアックア先生とデートかいにゃ～？」

「カミやんだからな～。アックア先生も力が入るって訳かいな」

ズタボロの状態で机に座ると、土御門と青髪ピアスが話しかけてきた。

だが、体力がゼロである当麻はただ机に突っ伏すしかなかった。

「あ、あの。これで顔を拭いたらどうでしょうか」

突然、頭上から女性の声が聞こえたので当麻は顔を上げる。

「か、上条さん。ど、どうぞ」

そこには隠れ巨乳と呼ばれる五和が、濡れたタオルを持って立っていた。

「五和さん、貴方は心のオアシスです」

五和の優しさに感激した当麻は、五和の手を握りしめて涙を流す。

いきなりの行動に真っ赤になる五和だが、すぐに優しい笑顔を当麻に向ける。

「おらテメェら、イチャついてねぇでさっさと席に座れ」

だが当麻の幸せの時間はすぐ終わりを迎えた。

「き、木原先生。べ、別にイチャついてなんて……」

顔を真赤にしながら否定する五和だが、時々視線は当麻に向けられていた。

「知るか、早く席に座れ」

だが木原にとっては興味がないのか、壇上をバンバンと叩きながら五和に注意をする。

「よぉし、テメェら。今日も……ん？　おい、一方通行はどうした？」

五和が席に座るのを確認した木原は、生徒名簿を開いて生徒を確認していく。

だが、一席空いていることに気づいた。

「連絡は来ていませんー。どうせ、サボりじゃないですかー？」

クラスの誰かが木原の疑問に答える。と、同時に教室のドアが開けられた。

「遅れてさーせん。ごめンねェ、木原くン」

ドアを開けた人間は、一方通行であった。

その瞬間、眼に見えない速度で木原が生徒名簿を投げる。

「何度言ったら分かる」

あまりの速さに反応できなかった一方通行は、綺麗に生徒名簿を顔

面に食らう。

「俺は木原先生だ」

そしてそのまま気を失った一方通行であった。

「くそゥ、木原くンは暴力的だ」

顔面に絆創膏を貼っている一方通行は、ブツブツと木原への文句を口にする。

「仕方ねぇだろ、遅刻したお前が悪い」

「メルヘンに正論述べられると、なンとなくムカつくンですが」

横から話しかけてきた垣根を一方通行は邪険に扱う。

「何だ白もやし、反論できないからって泣くなよ」

「泣いてねェわ！　てめェよっぽど愉快なオブジェになりてェらしいなァ」

二人揃ってにらみ合いをするが、すぐに制裁が下りる事となる。

「貴様ら、今が何をしている最中かわかっているのであるか？」

ゲンコツを落としたアックアが、二人を睨みながら言う。

「「はい……」」

アックア教室に連れて行かれたくない二人は、素直にアックアに向かって謝罪した。
ふんっと鼻を鳴らすと、アックアは自分の立っている場所まで戻る。

「えー、それでは校長よりお話があります」

そう、今は全校集会の時間だったのである。
一方通行と垣根は、生徒会に所属しているため別の場所にいたのである。
だから何かすると凄く目立つのだった。

「ふむ、朝の挨拶は毎回悩むな」

やがてビーカーに逆さ吊りされた校長が現れた。

（毎度ながら何でこの人逆さまなんだろう）

その場にいる全員が疑問に思ったが、敢えて口にはしなかった。

「諸君、ベストを尽くしたまえ」

それで終わりなのか、ビーカーに入っている校長はさっさと壇上から立ち去った。

「えー、続いて……」

「エイワスちゃんのお話よー」

一体いつから居たのか、凄いキラキラと輝く人が立っていた。

「り、理事長！　貴方は一体いつからそこに！」

「いや～ん、エイワスわかんな～い。でも、楽しそうだから壇上を支配するねー」

パチンと片目をつむると、どういう原理か分からないが星が目から出てきた。

相変わらずの人外行動を取る理事長である。

「エイワス、君の時間はない。早く壇上から降りたまえ」

「アレイスターったら冷たいんだからー」

先ほど立ち去った校長が、エイワスの登場でまた戻ってきた。

（まーた、始まった。この二人の言い争い）

その様を見ていた生徒たちは、一同に思った。

この二人、相変わらず言い争いが絶えないなと。

そんなこんなで全校集会が終わった後、教室に戻った当麻たちである。

「相変わらず仲が良いよなぁ、あの二人」

喧々囂々と言い争いをする理事長と校長。

だが、驚くべきことにあの二人は夫婦だったりする。

どっちも性別は不明だが。

「はいはーい。皆席に座りやがれーです」
席に座ると同時に、一時間目の教科を担当する小萌が入ってきた。
「それでは、授業を始めますー」
二時間目
「軍事とは何なのかを教えるだしー」
三時間目
「国語の時間ー。音聞きはできとろうかしらー？」
四時間目
「続いて、ローマ正教の歴史をいきますー」
そんなこんなで色々授業が終わって昼。
「べ、弁当がない……」
かばんの中に弁当を入れ忘れた当麻は、腹を押さえながら机に突っ伏した。
朝、慌ててきたので弁当を入れ忘れたようである。
「んふふ、当麻お兄ちゃんの行動は読めたって訳よ」
しかしそんな当麻に救世主が現れる。
「フレンダ、その手に持っているのは……」
「じゃじゃじゃーん、当麻お兄ちゃんのお弁当よ」

弁当を掲げながら、腰に手を当てて答えるフレンダ。
だが、当麻は不幸なのである。そのままでは終わらなかった。

「ふれんだ、抜け駆けはずるい」

「当麻お兄ちゃんは私の弁当を超食べるのですよ」

「当麻、グリーンピース以外なら、大体、食べる。にゃあ」

「フレンダァ、オシオキね」

フレンダの後ろには、最愛と理后、フレメアと沈利という当麻の姉妹が立っていた。
ワーワー言い合う姉妹だが、更に現場をカオスにする人間がやってきた。

「あ、あの。上条さん。でしたら私のお弁当を」

五和である。
どうやら言い争いをしている間に、当麻に弁当を渡そうと思ったのだろう。
だが、それを姉妹が逃すほど甘くはなかった。

「「「「「待ちなさい！！」」」」」

案の定、今日も昼ごはんの前にカオスな状況を作り上げた当麻であった。

「ふ、不幸だ……」

当然ながら騒ぎが大きすぎて、放課後に生活指導部へ呼び出された当麻であった。

「上条ぉ～、お前ほんと毎日呼び出されているよなぁ」

「そろそろ君専用の机を用意するべきですかねー」

「貴様、揉め事を起こしすぎなのである」

「俺様はそろそろ帰りたいのだが？」

生活指導部の部屋にいる四人、通称『生活指導部の四席』な方々に囲まれて萎縮している当麻である。

「フィアンマ、上条当麻の指導がまだである。帰宅はそれからである」

「でもお前さんも、奥さんが待ってるだろうー？」

「……ヴィリアンはきっと分かってくれるのである」

アックアは顔をしかめながら、フィアンマの言葉を否定しようとする。

「さすが万年新婚さんのアックアですねー」

「つーても以前、アックアの家って命知らずの強盗が入ったよなぁ

？」

「あー、大丈夫だ。あの時のアックアのお陰で治安は一気に向上した」

アックアと当麻を無視して、三人は自分たちの会話をし始める。
こめかみがぴくぴくとしているアックアだが、三人は全く気づいていなかった。

「何をしたんですかー？」

「鬼の形相でアスカロン持って強盗を追いかけた」

「うわぁ～、そりゃご愁傷さまだな」

「捕まったら死亡ですしねー」

「まぁ実際捕まってボコボコにされてたぞ。俺様はたまたま見たが、正直あれは怖かった」

その時のアックアを思い出したのか、フィアンマはぶるっと身震いをした。

「奥さんは大丈夫だったんですかー？」

「ああ、それは問題なかったな。ちょっとショックを受けてたが外傷も無かったそうだ」

「で、強盗はどうなったの？」

「……暫く肉料理が食えなくなるけど聞きたい？」

「「おーけー、理解した。それ以上は言わないでくれ」」

ヴェントとテッラは、フィアンマに向かって両手をブンブンと振る。

「そういやぁ、フィアンマは何で早く帰りたいんだ？」

「俺様は帰ってぷ〇ぷ〇がしたいんだ」

「ぷ〇ぷ〇っつーとテッラも好きだったよな」

「そうですねー。ヴェントはどうなんですかー？」

「あたしはあーいうのは苦手だ。どっちかってーとガンアクション系だな」

各自好き勝手に喋っていると、アックアが机をバンっと強く叩いた。

「貴様ら……」

好き勝手言っている三人に怒ったのだろうか、その顔は憤怒の形相をしていた。

「ぷ〇ぷ〇など軟弱である。男は黙ってテト〇スである！」

「「「そっちかよ！！！」」」

アックアのボケに盛大に突っ込む三人であった。

「ぴんぽんぱんぽ〜ん、エイワスちゃんからのご連絡〜。フィアンマ先生は至急校長室までくるよ〜に。エイワスちゃんからのご連絡でした〜」

最後にウィンクでもしたのだろうか、パチンという音が聞こえた。と同時に謎の現象でスピーカーから星が飛び散った。

「「「「……」」」」

物理現象をぶっ飛ばしたエイワスに全員が沈黙した。

「ま、まぁ俺様は行ってくるよ。上条もほどほどにしとけよー」

そう言ってフィアンマは立ち去っていった。

「こってり絞られた……」

アックア教室で絞られた当麻は、とぼとぼと歩いていた。その足取りは重く、まるで人生終わったと言いたげであった。

「当麻先輩〜〜〜」

「ん？」

ふと誰かが自分を呼んでいる。その声に反応した当麻は、声がした方を向く。

「当麻先輩、一緒に帰りましょう」

声をかけてきたのは心理掌握だったようである。
当麻の元まで駆け寄ると、心理掌握は腕を掴んで引っ張り始めた。

「わ、わかった。一緒に帰ろうか」

グイグイと引っ張られる。
そしてそのまま下駄箱を通過すると。

「うはははは～～～、根性～～～～～！！」

「百メートルが０．４秒とか……お前はいつから人外になったんだじゃん」

削板が人外な速度でグランドを走っていた。

「「……」」

二人のとった行動は、見なかったことにしよう、であった。

「あ、当麻やっときた」

「当麻お兄ちゃん、一緒に帰るって訳よ」

「心お姉ちゃんもいますね」

「とうま、一緒に帰る」

「大体、当麻は私たちと一緒に帰る。にゃあ」

校門を抜けると、当麻を待っていたのか姉妹たちが立っていた。

全員が当麻に駆け寄ると、一緒の帰宅を誘う。

「じゃあ皆で」

「ちょぉぉぉっと、待ちなさいぃぃ！！」

当麻が言葉を言い終える前に、横合いから大声が飛んできた。

「ゲッ！　ビリビリ！」

「当麻はあたしと帰るの。昨日約束したでしょう？」

腰に手を当てながら、勝ち誇ったような顔で御坂は立っていた。

「おい、コラ。電波飛ばすなら他所でやれ」

「ふふん、残念ながら事実なので諦めなさい。ブラコン姉さん」

ピキりと空気が割れるような音がした。
沈利以外の全員が一斉に沈利から離れる。

「おいおいビッチよ。いい度胸じゃねぇか」

沈利の肩が震えている。あれはマズイ、確実に怒っていると全員が理解した。

「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

そして沈利が動いたかと思うと。
ドカンっと音立てて二人の間に、巨大な剣が突き刺さる。

「貴様ら、喧嘩はそこまでである」

剣を投げた人間は、生活指導部の長アックアであった。
さすがにアックア相手では、引き下がる以外ないので二人とも矛を収める。

「誰かを仲間はずれにしてはいけないのである。皆仲良く帰るのである」

そう言うと、地面に突き刺した剣を引きぬいて立ち去る。

「む、そうだ。上条当麻」

だが、その足を途中で止めて当麻に話しかける。
視線を向けていないので、背中ごしにアックアは話しかけてきた。
当麻が訝しげに思うと。

「男は黙ってテト○スである。貴様は決してぷ○らーなどになるな」

そう言うと、当麻の返事を待たずしてアックアは立ち去った。

（まだそのネタ引きずっていたのかよ……）

アックアの本気か冗談か分からないボケに、頭を悩ます当麻であった。

一方、そのころフィアンマはというと。

「おいアレイスター、貴様あの連鎖はインチキであろう」

「ふむ、私は単に二十連鎖を四連続で出しただけだが？」

「どうやったらそんな真似が出来るんだよチクショウ！」

仲良くぷ○ぷ○をしていた。

今日も仲良く生活をしていた『科学』と『魔術』でした。

＜＜【番外】とある世界の混沌学園　キャスト＞＞

理事長
　エイワス

校長
　アレイスター・クロウリー

生活指導部
　アックア（長）
　フィアンマ
　ヴェント
　テッラ

教師

月詠小萌（能力教師）
木原数多（担任＋数学教師）
キャーリサ（軍事教師）
ローラ＝スチュアート（国語教師）
オルソラ＝アクィナス（神学教師）
黄泉川愛穂（体育教師）
名もなき司会進行役の人

生徒

上条当麻
麦野沈利
滝壺理后
フレンダ＝セイヴェルン
絹旗最愛
フレメア＝セイヴェルン
土御門元春
青髪ピアス
五和
一方通行
垣根帝督
心理掌握
御坂美琴
削板軍覇
その他色々な方々

その他

ヴィリアン（アックアの奥さん）

【番外】とある世界の混沌学園　完

【番外】オリキャラ設定（アクゼリュス）

アクゼリュスについての設定を以下に記載します。

・家庭
　不明。

・あれこれ出てくる理由
　不明。予想では単に楽しいからという理由のみ。

・住居
　不明。

・容姿
　銀髪で紅い瞳をした少女。当麻が見るには身長は１４５センチぐらいとの事。
　髪の長さは自身の身長とほぼ同レベルの長さである。
　クセはなく、髪はストレートである。
　灰色のゴスロリと黒いブーツだが、気分にあわせて服や靴の色が変わる。

・性格
　可愛らしい少女の外見とは裏腹に残虐非道との事。
　自分が楽しめるなら、あちこち引っかきましても平気な顔をする。
　気に入った人間には寛容な態度をとるが、敵対者には容赦しない。

・能力

多様な魔術を駆使するが、大半が『説明できない力』である。
『神の力』を前に、余裕を崩さない所を見ると大天使と同レベルと思われる。
文献には以下の点が記載されている。
1．不死性と強大な魔力を誇る。
2．人間が扱える魔力だけで、魔神の力を自由に行使できる。
3．カタリスト（触媒など）を使わなくても魔術を行使できる

・その他
・文献に乗る程、長い時間を生きている魔女。
土御門曰く三千年以上は生きているかもしれないとの事。

・何故か当麻の事が気に入ったようである。

・容易に学園都市へ出這入りをしている。
当然、非公式ルートで。

・教会世界からは異端児扱い。とても忌み嫌われている。
多様な組織から何百年も襲撃を受けているが、襲撃者は全員返り討ちにあっている。

【番外】オリキャラ設定（アリシア）

アリシア・フォン・コルネリウスについての設定を以下に記載します。

・家庭

不明。

唯一、本家がドイツにあるという事程度。

・学園都市に来た理由

自分の姉である上条優菜を追って学園都市までやって来た。

・住居

一方通行の家

・容姿

年齢は優菜と同じだが、身長１１８ｃｍとどう見ても６～７歳の子供にしか見えない。

金髪碧眼で、膝まである長い髪を左右で結っている。

無駄に偉そうな年寄りくさい喋り方をする。

優菜曰く『黙っていれば人形みたいな娘』との事。

・性格

何事においても優菜が一番優先されるわんこっぽい思考。

知らない相手が優菜を気安く呼ぶと噛むぐらい凶暴になる。

（当麻は最初噛まれた）

それを除けば、基本的には礼儀正しい。

・能力

能力は一切なくレベル0扱い。

・その他

・佐天涙子とは遺伝子レベルでかみ合わない犬猿の仲。

・それなりの生活費を、一方通行に支払っているが
彼曰く『子供から金を巻き上げてる気になる』という訳で
優菜経由で返金しているようである。

【番外】第四章を終えて判明した原作と相違点

第四章を終えて判明した原作との相違点。後、その他諸々。
内容的には第壱章で挙げた内容にプラスされる事です。

・上条当麻
1．両親に記憶消失の事を話す。
2．案外思ったことを口にするようになる。

・上条夫妻
1．当麻の記憶喪失の事をしる。

・上条姉妹
1．詩菜には絶対に勝てない。
2．最愛の甘えっぷりに拍車がかかり始めている。

・上条優菜
1．一方通行と滝壺理后の治療を担当するようになる。
2．冥土帰しを師と仰ぐようになる。
3．能力自体が極秘扱い。

・一方通行
1．周りとのコミュニケーションを徐々にだが取れるようになっていく。
2．前頭葉の損傷を徐々にだが治療していっている。

・垣根帝督
1．周りを諭す兄貴的ポジションになっていく。

・削板軍覇
1．当麻と知り合い。
所々に、当麻から根性を感じるとの事。
（ツンツンヘアーとか）

・アリシア・フォン・コルネリウス
1．オリキャラ。詳細は「【番外】オリキャラ設定（アリシア）」で。

・アクゼリュス
1．オリキャラ。詳細は「【番外】オリキャラ設定（アクゼリュス）」で。

・その他
1．一方通行の家は、通称『ロリハウス』
住んでいる女性陣が悉くロリっ娘の為。
2．御使堕しの前に、刀夜は何か創作魔法を発動させている。
内容は土御門も知ることが出来なかった。
当然ながら刀夜も発動自体知らない。
3．浜面は借金しながらも、マイカーを持っていたりする。
但し無免許。

第伍章予告

『仕事だ、三十分以内にくるよーに』
――――――――――――――――――――暗部組織『グループ』
土御門元春

『誰がロリコン帝王だァ！？』
――――――――――――――――――――学園都市レベル５第一位
一方通行

『ところで、私の愛書『半ズボンが似合う少年たちの戯れ』を知らない？』
――――――――――――――――――――暗部組織『グループ』
結標淡希

『貴方はやってはいけない事をした……』
――――――――――――――――――――暗部組織『グループ』
海原光貴

暗部組織『グループ』の日常……？

『俺は幼馴染の手料理が欲しいんだ！』
――――――――――――――――――――暗部組織『スクール』
垣根帝督

『帝督はどれだけメルヘンでいれば気が済むの？』
――――――――――――――――――――暗部組織『スクール』

心理定規

暗部組織『スクール』の二人。仲が良い（？）のには理由があった。

『あら？　当麻ったら鮭に胡麻塩振ってないじゃな～い。オシオキとしてデートさせないとね』

――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』

麦野沈利

『その日、とうまは私と買い物の予定』

――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』

滝壺理后

『やっぱサバ缶は最高だね。今度、当麻お兄ちゃんと一緒に買いに行くって訳よ』

――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』

フレンダ＝セイヴェルン

『当麻お兄ちゃんとお揃いのパジャマが超欲しいです』

――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』

絹旗最愛

『あの……俺の予定は、考慮……されないん……ですよね……』

――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』

パシリの浜面仕上

暗部組織『アイテム』の方々とパシリの浜面。今日も仲良く当麻を

巡って火花を散らす。

『更に進化した愛車、その名も仕上ＵＳ三号をナメんなよ！』

――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』

パシリの浜面仕上

『超いい所に武器があります。誰の車か超知りませんが、サイズ的に超よさげです』

――――――――――――――――――――窒素装甲　絹旗最愛

『たとえ、この命と引き換えにしてでも、誰かを守りたいと思うことは、悪い事なのか』

――――――――――――――――――――流れの魔術師　闇咲逢魔

『アンタ、知ってんだろ。大切な誰かに死なれる事の痛みが』

――――――――――――――――――――幻想殺し　上条当麻

『何で一言も相談してくれねぇんだよ！？　頼れよ！！　あたしらを頼れよぉ！！　なんで自分一人で背負い込むんだよ！！』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第四位

麦野沈利

あいも変わらず不幸に巻き込まれる当麻。

そして傷つきながらも事件は終わるかのように見えたが……？

『……仕事だ』

――――――――――――――――――――暗部組織『グループ』

土御門元春

『成功率零パーセントの仕事を、誰が引き受けると思うのです？』

――――――――――――――――――――暗部組織『グループ』

海原光貴

『どういう事よ？』

――――――――――――――――――――暗部組織『グループ』

結標淡希

『あぁ？　『グループ』が何かきな臭い動きをしているだと？』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第二位

垣根帝督

『姉上！　妾なら平気だから逃げてくれ！』

――――――――――――――――――――優菜の妹　アリシア・フォン・コルネリウス

『アリシア……貴方を見捨てて逃げるぐらいなら、私はここで朽ちる事を選びます！』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位

上条優菜

『分からねェ。　一体何が起きたンだァ。演算は完璧だったはずだァ』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第一位

一方通行

『臭いわね。な～にを企んでいるのかしら？』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第四位

麦野沈利

動き出すアレイスター。学園都市の闇という魔手が優菜を襲う。

第伍章予告（後書き）

第四章　完結です。
次話より第伍章に突入。

学園都市の闇『暗部組織』

学園都市における警察的組織は『警備員』と『風紀委員』の二組織が担当している。

しかし広大な学園都市の治安を、たった二組織でカバー出来るとは到底思えない。

その上、風紀委員は学生で構成されている。

その風紀委員はたかだか『校内治安の安定』程度の権限しか有していない。

実質的に、学園都市の治安は警備員に委ねられていると言っても過言ではない。

その筈だが、警備員も『学校外での事件』を主としている。

この程度の組織で、学園都市に関するスパイや裏切りに対応できるのか？

答えは否である。何故なら、二つの組織はどちらも『学生』を主眼として置いている。

研究所やそこに勤める研究員、学園都市にある施設などを考慮しているようには見えない。

ならば学園都市に、研究所や施設の動向を監視する組織は存在しないのか？

その答えも否である。

学園都市には一般の人間が知らない、闇に身を染めた人間で構成された組織がある。

その組織は幾つかの呼び方がある。
だが、基本的には『暗部組織』という括りで呼ばれている。
機密の漏洩や様々な組織・人物の暴走を防ぐための活動を主としている。
その他にも、多岐に渡って学園都市の治安を守るために活動を行っている。

では、何故この組織について一般の人間は知らないのか。

それは暗部組織が取る解決方法の中に『殺し』が含まれているからである。
拉致、誘拐、拷問、暗殺などの非合法な事も平気で行う。
そのような組織が存在している事自体、一般の人間に知られてはいけないのは至極当然であった。
そして、そんな非公式な組織も殆どが学生で構成されている。

彼らは一体どの様な想いで闇に身を染めたのだろうか……。

『仕事だ、三十分以内にくるよーに』

土御門は一方通行に対して言いたい事だけを告げ、そのまま返事を待たずに通話を切った。

「チッ、面倒なンだよなァ……」

イライラとしながら、一方通行は携帯電話をポケットに仕舞う。
正直な話、暗部の仕事はいつも面倒だと思っていた。
そう思いつつ、一方通行は外出する準備を整え始める。

「あれ？　一方ちゃん、どうしたんですかー？」

玄関で靴を履いている一方通行を見た小萌が疑問を投げかけてくる。

「ン、あァ……なンか研究所から緊急の連絡がきた。ちィと行ってくる」

一方通行は振り返らず、小萌に要件を手短に伝える。
当然、そんな連絡などあるわけがない。
完全下校時刻を過ぎた夜に呼び出す研究所など非常識極まりない。

「そうですかー。気をつけていってらっしゃいですー」

だが小萌は特に疑問を口にする事なく、一方通行を見送った。
一方通行は手をひらひらと振りながら家を後にする。

暫く歩いた一方通行は、ふと空を見上げて息をはき出す。
少しだけ肌寒くなってきた十一月の夜空だが、学園都市の空には星など輝いていなかった。
ただ飲み込まれそうなほど暗い色をした夜空だけだった。

「カンのいい小萌だ。何か気付いているかもしれねェ……」

先ほどのやり取りを思い出しながら、一方通行は再び歩く。
急な呼び出しなのに、小萌は一方通行に対して理由を尋ねなかった。

それは一方通行の保護者と自他共に認めている小萌を知っていれば、酷く不自然に思えた。

「……はァ……相変わらず懐が広いというかなンというか。二年前に拾われた時から変わってねェな」

時々夜に出かける事については、一方通行が何も語らないので小萌は理由を聞かないのだろう。

小萌はそういう人間だと一方通行は思っていた。

（そう言えば、二年前のあの時もこンな空だったなァ……あの時は雨が降っていたが）

再び夜空を見上げた一方通行は、小萌と出会った時のことを思い出す。

『傘をささないと風邪をひきますよー？』

よく考えてみると、それはとてもおかしな話だ。

『家出ですかー？　でしたら私の家でしたい事が見つかるまでいるといいですよー』

学園都市レベル５　第一位に対して萎縮せず、恐れもせず。

『一方通行って名前ですか。でしたら一方ちゃんですねー』

単なる一生徒として話しかける人間がこの世に存在しているなど。

『私の名前は月詠小萌です。これでも先生なんですよー』

『レベル５　第一位』という名前ではなく、『一方通行』という名前で見てくれる人間がいるとは思わなかった。

小萌との出会いが一方通行の全てを変えた。
他者を拒絶する事が少なくなり、今では友人と呼べる人間もいる。
それなりに充実した表の生活をしているのである。

ふと小萌と出会わなければどうなっていたかを想像してみた。
それは今では絶対に耐え切れない孤独の生活。
起きて、実験をして、寝るというおよそモルモットのような生活。
恐らく絶対能力進化実験も参加しただろう。そして妹達を全員殺していたはずだ。

最終的には今と同じ様に、暗部組織に堕ちる結末だろうなと一方通行は思った。

勿論、今所属している暗部組織の仕事は人に威張れるような事ではない。
一方通行の両手は拭い切れないほど血に染まっている。
だが、小萌と出会わなかった場合と今では心の持ちようが違う。
それだけは自信を持って答えられる。

視線を夜空から前に向ける。

（クソどもの欲の為だけに、小萌が傷つくのだけは絶対にさせねェ！）

杖を握る腕にぐっと力を入れると、一方通行は再び歩き出す。
今日も彼は大切な存在を守りぬくために、人知れず活動を行う。

「ついたか、これで全員だな」

ゴミ収集車に偽装した車両に乗り込むと、既に他のメンバーは揃っていた。

この車は暗部組織『グループ』が移動や運搬によく利用する。

適当な席に座ろうとした一方通行。

だが彼の目の前では、いつもとは違う異様な光景が繰り広げられていた。

「ふむふむ……」

一方通行の存在に気付かず、結標は手に持っている本に集中していた。

本のタイトルは『学園都市　第一三学区の小学校一覧』と書かれている。

「……」

一方通行は視線を結標から海原に向ける。

海原も一方通行に気付かず、真剣な顔をしてノートに何か書いていた。

ノートのタイトルは『御坂さんの行動記録　その１４５６０』と書かれている。

「どうした？　早く座れ一方通行」

一方通行は更に視線を変える。

土御門の方を向けると、手には何も持っておらず訝しげな視線を一方通行に向けていた。

だが、机の上をよく見るととある本が置いてあった。
その本のタイトルは『今日から始める義理の妹獲得方法☆』と『今日から始める義理の妹をメイドにする方法☆』と書かれていた。

一方通行は無言で携帯電話をポケットから取り出すと、とある場所に電話をかける。

「もしもし、警備員ですかァ？　今ここにショタコンとストーカーとシスコンという変態が三人います。早く逮捕してください」

「「「誰が変態だ！！！　このロリコン帝王！！」」」

「誰がロリコン帝王だァ！？」

一瞬にして四人は一触即発の事態になってしまった。

「オレは知ってるんだにゃ～。一方通行の家にはロリっ娘しかいない事を！」

ニヤニヤと一方通行を見ながら、土御門が暴露してやったという顔を向ける。

「ン？　まぁ小さいガキは多いな。だが本人たちが気にするから、目の前では言うンじゃねェぞ」

しかし一方通行は自覚があるのか、土御門の嫌味をさらりと受け流す。

「何このお父さんっぽい一方通行は……ある意味怖いにゃ～」

「ところで、私の愛書『半ズボンが似合う少年たちの戯れ』を知らない？」

「それは前に海原が捨ててたにゃ～」

「……はい？」

いきなり声をかけられた海原は、変な声で返事を返してしまった。だが顔を上げると同時に、海原が手に持っていたノートが消える。

「……あぁぁぁ！！　僕のバイブルが！！」

「海原ぁ……私の愛書を捨てたんですって……？」

ゆらりと結標が立ち上がる。その背後から燃える怒りの炎が見えた気がする。

「貴方はやってはいけない事をした……」

しかしそれは海原も同じだった。こちらも背後から燃える怒りの炎が見えた気がする。

「やれやれ、ショタコンとストーカーは怖いにゃ～」

困った奴らだなーと言いたげに土御門は肩をすくめた。

だが、彼は一つ大きなミスをした。

二人は言い争っていたが、そこへ共通の敵という存在を与えてしまったのである。

「ふん！」

いきなり土御門の本が消える。そして海原が外に飛び出した。
まだ収集車は移動していなかったので、海原は簡単に車外へ出る事が出来た。

「トラウィスカルパンテクウトリの槍！！」

結標によって土御門の本が外にテレポートされた後、海原は懐からトラウィスカルパンテクウトリの槍を取り出した。
何故、取り出したかというと答えは簡単である。

「ぎゃあああああーーーー！！！、オレの愛書がぁぁぁぁぁぁーーー！！！！！」

土御門の本を分子レベルで分解するためである。
事実、土御門の本はもはや原型をとどめていなかった。
ぷるぷると手を震わせながら、さっきまで本が浮かんでいた所を掴もうとする。
だが、当然ながらそのような行為で本が返ってくる事はなかった。

「テメェら……ぶち殺す！」

「上等！」

「今日こそ決着をつけてあげますよ！」

涙を流しながら土御門は二人に突撃する。それを迎え討つ海原と結標。
薄暗い路地裏で、三人による愛書への恨みという事を発端とした醜い争いが始まった。

「……別組織に移動してェ……」

眼の前で繰り広げられる馬鹿騒ぎを眺めながら、一方通行は缶コーヒーを口に含んだ。

常識知らずの垣根と苦労人の心理定規

「ごめん、もう一回言ってくれる？」

心理定規はため息を吐きながら垣根に問いかける。

「おいおい、分からないのか？　仕方ねぇ、もう一度言うぞ？」

悪い夢だと心理定規は思っていたが、残念ながら現実だったようである。

対して垣根は自信満々な態度で拳を握っていた。

「オレはな！」

ぐっと拳に力を入れた垣根は、腹に力を入れて先ほどの台詞を繰り返す。

「幼馴染の手料理が食べたいんだよ！」

（珍しく帝督から呼ばれたから来てみたけど……）

暗部組織『スクール』としても、普段やっている仕事もなく一日フリーだった心理定規。

ゆっくり過ごそうと思っていたが、突如として垣根から呼び出しを貰った。

確認せず垣根の家に来たのが間違いだった。

家について開口一番が先ほどの台詞である。

心理定規は額に手を当てながら、ため息を吐く。

「ごめん、病院は詳しくないけどお勧めするわ」

「おい、なんだその可愛そうな人を見る目は」

（実際可哀想な人だと思うけど）

最近はかなり変わってきていると思っていたが、どうやら相当ダメな方向で変わってきたようである。

心理定規は少しだけ哀れみの視線を向けてみたが、垣根は全く気づかなかった。

「帝督はどれだけメルヘンでいれば気が済むの？」

「男の浪漫をメルヘンとは！」

「……実際そうじゃない？」

ため息を吐きつつ、心理定規は天井を見上げる。

垣根の奇想天外な発言は今に始まったことではない。

随分と昔から、垣根は常識知らずの発言を繰り返していた。

心理定規は天井に向けていた視線を、垣根に向ける。

「そもそも何でそんな考えが浮かんだのよ？」

とはいえ垣根の奇抜な発言は、何かしらの原因があっての行動である。

今回もロクでもない事だと思いつつ、心理定規は垣根に理由を尋ね

てみた。

「ふむ……俺が学生をやっているのは知っているよな？」

その話は心理定規も知っている。

ほとんど学校に行かなかった垣根が、絶対能力進化実験を境に真面目に登校し始めた。

それは垣根をよく知っている心理定規すら、驚きを隠せなかった垣根の行動である。

最も、それは元々在籍していた学校ではなく別の学校であったが。

「ええ、最初は冗談かと思ったわ。だって貴方、長点上機学園に在籍してた時はロクに行かなかったじゃない」

垣根は長点上機学園を辞めて、あろうことか底辺扱いの高校に転校してしまったのである。

これぱかりは長点上機学園を含め、転校先の学校すら驚いた行動であった。

無論、長点上機学園の人間は転校を止めようとしたが、レベル５第二位を止められる人材がいるはずもない。

全員返り討ちにあったのである。

「ま、あんなエリート意識丸出しの馬鹿の相手は疲れるからな。で、今の学校で知り合った友人と話していたんだがな」

「……友人……ね」

心理定規はチクッと心に何か刺さったような感覚を覚える。

「ん？　どうしたんだ？」

「いえ何でもないわ」

だがそれを強引に無視して、心理定規は垣根と会話を続ける。

（帝督が友人を作れるとは思わなかったわ。でも、いい傾向かも知れないわね）

「で、その友人が言うにはだな」

しかし垣根の発言を聞けば聞くほど、心の痛みは強くなっていった。

（でも……少しだけ寂しいと思っている私がいる）

「何でも幼馴染というのはだな」

（貴方の隣はいつでも私と思っていたけど……それがずっと続くわけないわね）

「毎朝起こして！」

（あ～あ、今の関係が居心地良すぎるのよね。前にも後ろにも進めないわ）

「そして毎日手料理をふるまってくれるそうなのだ！」

（帝督の……馬鹿）

心の痛みの原因は寂しさ。その事に心理定規は気付いた。

だけどそれはどうしようも無いワガママから来る痛みと思っていた。

少しだけ息苦しくなるのを我慢する。今の心を決して垣根に悟られないように。

「聞いているか？　心理定規」

返事も突っ込みも帰ってこない事を訝しげに思った垣根は、心理定規に質問を投げかける。
その声にハッとなると、心理定規は少しだけ頭を横に振り考えを追い出す。

「聞いているわよ、それで私を呼んだの？」

「おう、俺の幼馴染はお前だけだからな」

「帝督の幼馴染という点が、私の人生最大の汚点ね」

軽く嫌味を口にした心理定規だが、垣根は怒る事も睨む事もしなかった。

「ちょっと！　無言で泣かないでよ！」

ただ無言で涙を流していたのである。

「これが……世に言うツンデレって奴か！」

「……はい？」

なにかショックを受けたと思った心理定規はあたふたとするが、垣根は全く違うことを考えていた。
垣根の言葉が理解出来ないのか、呆けた顔を心理定規はしていた。

「いいぞ、心理定規。お前は幼馴染からツンデレ幼馴染にランクアップしたのか！？　友人が言っていたが悪くない」

「帝督……せめて友人の付き合いは考えてほしいわ……」

額に手を当ててため息を吐く心理定規だが、垣根は全く聞いていなかった。

単に「ツンデレは悪くない」と呟く程度だった。

「じゃあ卵焼き……だったかな。それを頼む、砂糖たっぷりでな！」

「はいはい、貴方はソファーに座って待ってなさい」

だんだん疲れたのでさっさと終わらせよう。

そう思っていた心理定規だが、更なる疲労が彼女を待っていた。

「よし、エプロンならこれだ。ちゃんと準備しておいたぞ！」

そう言うと垣根はどこからか、一つのエプロンを取り出した。

しかし垣根は、ただのエプロンを出すほど常識人ではなかった。

「……まさか、そのフリフリだらけのエプロンとは言わないよね？」

顔を引きつらせながら、心理定規は垣根が持っているエプロンを指さす。

心なしかドレスの肩紐がずり落ちている気がしていた。

「若奥様仕様らしい。俺には良く解らん」

大して垣根は自信満々で答えたが、深くは分かっていない顔をしていた。
その様子から、垣根は自分ではなく友人から聞いた話をそのまま自分に話しているのだと、心理定規は理解した。

「それも友人のお勧め？」

「おう、何でもこれは一家に一着必須らしい」

「……やっぱり付き合いは考えて」

出来れば付き合いを止めて、と呟いたが残念ながら垣根は聞いていなかった。
エプロンを揚々と掲げて心理定規に差し出していた。

「さぁ！　エプロンも装着するのだ！」

拒否してもあれこれ手を尽くしてエプロンを強要する垣根。
最終的には心理定規が根負けした。

「はぁ……つけたわよ」

嫌そうな顔をする心理定規だが、垣根は満面の笑顔を浮かべて心理定規を見ていた。

「いいな、悪くない。結構似合ってて可愛いぞ」

「そ、そう？　お世辞でもありがとうね」

（たまに素で歯の浮くような台詞を言うのよね……正直、あれは困

りものだわ）

急な褒め言葉に顔が熱くなり、胸がドキドキする心理定規。
必死に沈めようとするが、うれしい気持ちは押さえれそうになかった。
今の顔を見られたくない心理定規は、キッチンに立ち背中越しに話そうと考えた。
垣根は訝しげに思ったが、料理をするんだろうと思い心理定規の背中越しに話しかける。

「世辞なんかお前にはいわねーよ」

垣根に背を向けて良かったと、心理定規は思っていた。
何故なら、心理定規の顔は嬉しさで笑みを浮かべていたし、真っ赤になっていたからである。

「はい、出来たわよ」

垣根所望の卵焼きを作り上げ、皿に盛ると垣根の前に出す。
少しだけ焦げ目があるが、それがかえって手作り感を醸し出していた。

「サンキュー。そいやぁ今更なんだがお前って料理できたんだな」

長い付き合いの垣根だが、それでも知らない一面はあったようである。
しかし、その事が不満だったのか心理定規は頬を膨らませる。

「失礼ね、私だって料理ぐらい出来るわよ」

「普段の姿を見ていると、全く想像つかない」

「何よそれー！」

拳を振りあげて抗議する心理定規。

だが、その顔に笑みが浮かんでいる所を見ると、彼女が本気で怒っているわけではないのがわかる。

「おっと、冷めないうちに食べよう。いっただきまーす」

対して垣根は子供のような笑みを浮かべながら、料理を見ていた。

その姿に、心理定規も毒気を抜かれて振り上げた拳を下ろす。

「……はぁ、召し上がれ」

その言葉と同時に、垣根は卵焼きを一つ口に放り込む。

ゆっくり咀嚼して飲み込むと、満面の笑みを浮かべながら心理定規を見る。

「うん、旨いぜ」

（甘いな……砂糖菓子のようにくそ甘いなぁ）

言葉では褒めていたが、垣根は心では別の事を考えていた。

心理定規が作った卵焼きは、垣根にとっては甘すぎたのである。

「そいやぁさ、この間ロリコンと一緒に風紀委員の手伝いをしたんだがよ」

（でも嫌いじゃねぇ。何となくほっとする気持ちになる。やっぱ作った相手が心理定規だからか？）

だが彼はそれを口にしなかった。

何故なら、その卵焼きを本当に美味しいと思ったのだから。

「話だけなら聞いているわよ。何でも罰則らしいわね。よく受ける気になったわね」

（こいつが俺に好意を抱いているのは知っている）

卵焼きを食べながら何気ない雑談を心理定規とする。

一つ一つの会話が、垣根の心を少しずつ暖かくしていく。

「まー色々と悪いと思ったからな」

（でも俺みたいなクソな悪党と一緒になったら、最後はロクでもない結果にしかならねぇ）

「グラウンドを半壊させたんだっけ？」

（でも……一度切れたこの繋がり。もう二度と失いたくねぇ）

一度切れた心理定規との縁。その時の絶望感を思い出して垣根は恐怖した。

もし心理定規との縁が再び切れたら、自分は耐え切れず狂うだろう。

そう自覚できるほど、垣根は心理定規との縁が切れることを恐れていた。

「一応手加減はしたんだがな。残念ながらグラウンドには酷だったらしい」

（クソっ、今の関係が居心地良すぎるんだよ）

「貴方と一方通行が喧嘩して、その程度で済んだほうが奇跡よ」

（あ～あ、前にも後ろにも進めねぇじゃねぇか）

「だから～ちゃんと加減したんだよ。そうじゃなきゃ学校が全壊してるぜ！」

（こいつは俺が守りたい『最後』の奴だ。もう二度と……後悔したくねぇ）

最後、その言葉が垣根にとってどれほど重たい言葉か。
それは彼にしか分からない。

「その前に喧嘩しないって選択肢はないの？」

（超電磁砲や上条には偉そうに言ったけどよ）

「無理だ。あのロリコンとは一生仲良しになることはない」

（何てことはない。俺はあいつらより先に『そういう結末』を選んじまっただけじゃねぇか）

「まぁいいけどね」

（ざまぁねぇ、カッコ悪いよ）

「よし、ごちそーさま」

やがて卵焼きを全て食べた垣根は、両手を合わせて食事後の挨拶をする。

全部食べてくれた事が嬉しい心理定規は、優しく微笑んで垣根を見ていた。

（だから……心理定規との関係だけは後悔したくねぇ）

「お粗末さま」

だが内心の喜びを悟られたくないのか、心理定規は努めて素っ気なく返事をした。

（例えこいつに恨まれても、憎まれても）

「んじゃ、この後デートでもしねぇか？」

（俺はこいつを最後まで守るって決めたんだ）

「いいわよ。そろそろ冬物の服も欲しいしね」

（たとえそれで、命を落とすようなことになっても……）

「よっしゃ！　んじゃ行くかー」

（もう二度と、後悔だけはしたくねぇ）

垣根は立ち上がると、上着を着て心理定規と一緒に部屋を後にする。

後悔しないために。最後まで笑顔で心理定規との縁を続けたいがために。

今日も彼は心の中で誓う。

どんなに自分の手が汚れようと、たった一人の少女を守り続けると。

彼女の手だけは汚させないと。

当麻と休日を過ごせるのは誰だ

第七学区のファミレスに、とある五人が席を陣取っていた。
しかし五人のうち、四人はやりたい放題をしていた。

「あら？　当麻ったら鮭に胡麻塩振ってないじゃな～い。オシオキとしてデートさせないとね」

まず麦野沈利。
彼女はファミレスにいながら、手作り弁当と思わしきものを食べていた。
明らかにファミレスの商品ではない。持ち込みの物だと丸分かりだった。
だが彼女は気にすることなく正々堂々と食べている。

「今週の日曜日がいいかしら。後でちゃんと言っておかないとね」

勿論、ファミレスとしては大迷惑この上ない。
しかし沈利に苦情を言える人間は……残念ながらこの場にはいなかった。
ウェイトレスは隅の方で真っ青な顔をしつつビクビクする事しか出来なかった。

「しずり、残念だけどそれは無理」

沈利の向かいに座っているのは滝壺理后。
彼女は特に食事を注文する事もせず、だらりと手足を投げ出している。

「その日、とうまは私と買い物の予定」

時々、視線を彷徨わせて喋る様はある意味不気味である。
クスリでもやっているのかと尋ねたくなる姿であった。

「やっぱサバ缶は最高だね。今度、当麻お兄ちゃんと一緒に買いに行くって訳よ」

沈利の隣にいる金髪碧眼の少女、フレンダ＝セイヴェルン。
以前、浜面に言われたことが悔しかったのか、いつものように爆薬で缶詰を焼ききらなかった。
最も随分と苦労したようではあるが。

「うーん、そろそろ新しいパジャマが超欲しいですね」

最後は理后の隣にいる絹旗最愛。彼女は今時のファッション雑誌に目を通している。
いつもの映画のパンフレットではない。
どうやら最近は当麻と一緒に見るというのがお気に入りらしい。
では、彼女は何故ファッション雑誌を読んでいるのか。

「当麻お兄ちゃんとお揃いのパジャマが超欲しいです」

それは単に兄である当麻とお揃いのパジャマが欲しかっただけである。
男性にも受けが良く、かつ可愛い物がないか探していたのである。

そしてこの女性陣、実は姉妹関係だったりする。
容姿も何もかも揃わないのは単に全員が捨て子で、今はとある家族の養子だからである。

と言っても仲は悪くなく、いつも仲良しな姉妹である。

最後に五人の中で唯一男性である浜面仕上。

彼は今、何をしているかというとドリンクバーと沈利たちが座っている席の往復である。

それだけで美少女四人と一緒の席に座れるので、男達は羨ましいと思うだろう。

だが、ドリンクバーでの往復作業。

実は失敗すれば即命を落とすぐらい危険な仕事なのである。

姉妹たちは自分たちが愛する上条当麻以外、男の扱いはかなり適当なのだ。

浜面が今生きているのも、単に当麻の知り合いという理由だからだ。

「ふぅ……これで終わりだよな」

最愛が頼んだジュースをテーブルに置くと、浜面は心底疲れたと言いたげに座り込む。

実際、神経をすり減らしながら往復しているので当然と言えば当然である。

勿論、この五名は単なるお友達の関係ではない。

学園都市の非公式組織、通称『暗部組織』と呼ばれる組織の一つ『アイテム』のメンバーだ。

浜面は扱い的には下部組織のメンバーだが、実際やっている事は『アイテム』の正規メンバーとほぼ変わらない。

「こらこら、当麻はあたしとデートなの。これは譲れないわよ」

「しずり、それはダメ。とうまはわたしとお買い物」

「チッチッチ、お姉ちゃんたち。当麻お兄ちゃんは私とサバ缶購入ツアーって訳よ」

「皆、超何を言ってるのですか？　当麻お兄ちゃんは私と一緒にパジャマを超購入するのです！」

仲が良い姉妹だが、一つだけ絶対に譲れないものがあった。
それは姉妹が共通で好きな男性、上条当麻の事である。

そして大好きな当麻の存在が、彼女たちを暗部組織に堕とした原因ともなっている。
それは当麻の持つ『幻想殺し』が稀有すぎるためである。
何しろ『異能の力』と呼べる物なら、どんな状態であろうが問答無用で無効化が出来るのである。
学園都市第一位だろうが、第二位であろうが、それが超能力という部類に入るなら触れるだけで破壊出来る。

その事が学園都市にとってどれほど利益を生むかは語らなくても分かるだろう。

仮に超能力と別の力が存在しても、百パーセントの勝利を得られるのである。
何しろそれも『異能の力』なのだから。
『幻想殺し』の解析に乗り出した学園都市だが、そこに立ちはだかったのが上条姉妹である。
といっても子供の沈利たちに出来る事はたかが知れている。
しかし下手な騒ぎを起こされても困る学園都市は一つの条件を沈利たちに提案した。

『君たちが私たちの仕事を手伝ってくれるなら、上条当麻には手を出さない』

元より選択の余地がない沈利たちは、首を縦に振るしかなかった。
ここで学園都市を追い出されても、当麻に待っているのは悲惨な迫害しか訪れないのだ。

学園都市の非公式組織、暗部組織『アイテム』が出来た瞬間である。

それからは凄惨な日々だった。拉致、拷問は当たり前、暗殺も勿論行った。
相手が命乞いをしようが何をしてこようが、学園都市が消せと命令してきたら従うしか無かった。
例えそれが、仲の良かった友人であろうとも。

彼女たちが大能力者や超能力者があろうと、中身はただの子供なのである。
普通に生きてきた彼女たちが、そんな悲惨な現実に精神が耐え切れるわけがなかった。
だが、彼女たちはそれでも耐えぬいた。
心の中で悲痛な叫びをあげようと、気が狂いそうなほどの心の痛みを味わっても。
それでも耐えたのだ。

たった一人の愛する男性の居場所を護る為に。

今では心の痛みは無くなってしまった。
それは彼女たちが自分の心を守るための術なのかも知れない。
暗部としての時だけは、自分の心を殺してしまうという。

「「「「……」」」」

そういう気持ちでも、やっぱり当麻に関しては譲れない姉妹である。
隙あらば当麻とベタベタイチャイチャしたいのである。

「ああ！？　いいだろ、最近お前らばっかりじゃねぇか！」

「妹の超強みです！」

「だって当麻お兄ちゃんって明らかに姉好きって訳よ！」

当麻は『寮の管理人のお姉さん』と公言するぐらい、お姉さんタイプが好きなのである。
取り方によっては単なる『お姉ちゃん好き』とも取れる。

実際、当麻は理后や沈利にはかなり甘い。
対してフレンダや最愛には時々厳しい所もある。
それは単に当麻が、良き兄になろうとしての行動なのだが、残念ながらフレンダや最愛は気付いていなかった。
そして沈利や理后に甘いのは単に逆らえないからである。
ポジション的に優菜も当麻の姉にあたるが、この三人に逆らえるなど当麻に出来るわけがなかった。
しかし、やぱりフレンダや最愛は気付いていないようである。

「だから我慢してお前らに譲ってやってるんじゃねぇか。たまにはいいでしょー」

「じゃあ姉であるわたしがとうまとお買い物」

「ソレはダメ」

さらっと話を持っていこうとした理后だが、沈利に釘を刺されてしまった。

「理后も家では結構甘えてるじゃない。最近、私だけが付き合えてないのよ？」

何とか自分の都合の良い方向に話を持って行こうとする沈利。

「でもシャツを超貰っていますよね」

「時々、風呂も襲撃しているって訳よ」

「このまえソファーでとうまを枕替わりに寝てた」

しかし三人は反撃の手を緩めなかった。
ぐぅの音も出ないほど沈利の反論を潰したのである。
少しだけ自覚があったのか、沈利は三人の視線から顔を背けていた。

「じゃあとうまの休日、誰が付き合うか」

「ここではっきり決めましょう」

視線をぶつけ合う姉妹。
そして一斉に口を開く。

「「「「当然、（超）わたしですけどね」」」」

綺麗に姉妹の声が重なった。
ある意味仲が良い証拠なのだが……。

「お前らおもてでろやぁぁぁぁ！！！」

「まけられない」

「当麻お兄ちゃんとデートの為に！」

「超やる気を出します！」

ワーワーといがみ合う姉妹。
明らかに迷惑行為だが、今の姉妹に注意が出来る人間はこの場にいなかった。
ウェとレスは恐怖のあまり気絶していた。

浜面は横目に見ながら思った。
この姉妹、こんな事毎日して飽きないのかと。

「勝った、ぶい」

烏龍茶を飲みつつ、ぼけっとしていると決着がついたようである。
どうやら理后が日曜日の当麻とのデート権を得たようである。

「くっ……ちくしょう」

「残念って訳よ」

「まぁこうなったら理后お姉ちゃんのプランを超手伝います」

当麻の取り合いはするが、それ以上のいがみ合いはしないようである。

「所で足はどうするの？」

「はまづらを使う」

呑気に眺めていた浜面だが、突然話をふられてギョッとする。
思わず烏龍茶を吹き出しそうになったが、既のところで堪える。

「ちょ、ちょっと！　俺にも予定ってものが」

「はまづら、うるさい。今は大事な時」

普段の理后から想像できないほど、理后はすごい速度で携帯電話を弄っていた。
視線も浜面に向けず、携帯電話に集中している。
何となくだが買い物のプランを立てているのだろうと浜面は理解した。

「あの……俺の予定は、考慮……されないん……ですよね……」

「はまづら、うるさいって言ったよ？」

よほど邪魔されたくないのか、理后にしては強い口調で浜面に対して怒る。
普段から想像できない雰囲気に、浜面も黙るしかなかった。

「もしもし、とうま？　今度の日曜日なんだけど付き合って欲しい所があるの」

やがて理后は当麻に電話をかける。

勿論、早めに日曜日の予定を確保するためだろう。

「うん……うん……ありがとう。それじゃあ日曜日はお願いね」

傍目から見ても分かる。理后は今すごく良い笑顔をしている。

その笑顔に言葉をつけるなら『幸せ』という言葉だろうと、その場にいる全員が思った。

第二位と第三位

その少女は人目も気にせず、頭を抱えながら呻いていた。

「あー、もう！　どうすればいいのよ！」

常盤台の冬服を着た少女、御坂美琴は空を見上げる。
憎らしいほど晴れ晴れとした空であった。

（わかんない……何をどうすればいいのよ！？）

御坂の悩み、それは垣根とのやり取りの言葉についてであった。

『はぁ……お前な、上条の立場になって考えてみろ。良く解らん理由で電撃が飛んできてみろ、それが続くと嫌いになるぞ？』

垣根に諭された後、御坂は自分の行動を振り返ってみた。
確かに会っては些細なことで怒って、怒鳴って電撃ぶつけていただけである。
そんな女を誰が好きになるのか。

（分かってる、アイツの優しさがなければ私はとっくに嫌われていた）

「……このままじゃアイツに愛想つかされちゃう」

そしてそんな女の行為を見て、当麻が愛想を尽かす可能性はあったはずだ。
当麻が優しいから未だに二人の関係は続いているのだ。

御坂は垣根に諭されるまでその事に気づかなかったのである。

「（わかんない。何がいいのかが……）どうしよう……」

自分の立場が分かっても、彼女にはその問題に関する解決策が見いだせない。

例えレベル5といえでも彼女は単なる中学生なのである。

こと恋愛に関する知識が抜け落ちており、また経験も全くない状態である。

「ぷはぁっ、今日のジュースはあたりだぜ。これは箱で買ってくるかな」

ぐるぐると出口のない迷路のような思考に、陥っていった御坂の前に垣根が通りすぎていく。

垣根は御坂に気付くことなく、ジュース片手に歩いていた。

「あ！　アイツは……！」

垣根の存在に気付いた御坂は、千載一遇の機会と思い垣根に駆け寄る。

「さって今日はナンパでもするかな。どうせなら初々しい娘が……」

「ちょっと待って！」

飲み終えた缶を握りつぶして掃除ロボの前に捨てた垣根に、御坂は背中越しに声をかける。

その声に反応して、垣根は御坂の方に視線を向ける。

「ん？　誰だテメェは？」

見覚えのない顔に声をかけられた為か、垣根は幾分怪しむような視線を御坂に向ける。

「御坂美琴よ。一度会ってるはずよ」

「知らん。俺は中学生に手を出すほどロリコンじゃないしな。第一位なら相手してくれるぞ」

少しだけ思い出そうとしていたが、垣根の記憶には該当する人間がいなかったようである。

「……どういった基準よ、それ」

「知り合いじゃなきゃ、ナンパでしか出会わん」

知り合いでなければナンパ、実に垣根らしいシンプルな答えである。少しだけ頭痛のした御坂だが、何とか顔には出さずに垣根を見る事が出来た。

「違うわよ。あんた風紀委員してるでしょう？　その時よ」

「……あー、あの時上条と言い争ってた奴か。ちなみに風紀委員は手伝いだからもうやっていないがな」

今やっと思い出しました、そんな顔を垣根はしていた。

余りにも記憶に残っていない事に、御坂は多少イライラしたが何とか抑えることが出来た。

「で、超電磁砲よ。俺に一体何のようだ？」

「ちょっと聞きたいことがあるの」

御坂の言葉と同時に、垣根は心底嫌そうな顔をした。

「却下だ、却下。俺はこれからナンパに出かけるんだよ」

「……アンタの頭の中はそれしか無いの……」

断る理由がナンパというのが予想外だったためか、御坂はため息を吐いた。

だが垣根の方はナンパの方が優先と言いたげな雰囲気であった。

「アイツの事で少し聞きたいの。少しだけ時間をくれないかしら？」

「……はぁ、かったりいなぁ」

両手を合わせてお願いポーズをする御坂。

少しだけ頭をかくと、垣根はめんどくさそうに返事をした。

「分かったよ、少しだけだが付き合ってやるよ」

さすがにここまでされて拒否するのは悪いと思ったのか、垣根は御坂の頼みを引き受けることにした。

頼れる人物が、目の前の男しかいなかった御坂は、垣根の返事に少しだけ喜ぶ。

「ありがと。ここじゃ喋りにくいし、適当な喫茶店でも行きましょうか」

「へいへい」

面倒だなぁと思いつつ、垣根は御坂について行った。

喫茶店につくと、適当なソファー席に二人は座る。

時間的に混む時間ではなかったので、席はまばらにしか埋まっていなかった。

「所で気になってたんだけど、あんたはアイツと知り合いなの？」

紅茶を一口含んだ後、御坂は随分前から気になっていた事を質問した。

垣根も抹茶ラテを飲みつつ、御坂の質問に答える。

「マブダチと書いて親友と呼ぶ」

「あんたいつの時代の人間よ……」

明らかに適当に答えた垣根だが、御坂にとってはそれ以外の事が気になったようである。

「まー学校も一緒だしな」

「ふぅん」

そう言って抹茶ラテをもう一口飲んだ垣根だが、ふとなにか思いついたような顔をした。

「まてよ。という事は上条はほとんどのレベル5と知り合いになるのか」

「そういえば、心理掌握とも知り合いだよね。アイツは」

「俺は詳しく聞いてないから知らんが、何でも子供の頃からの付き合いらしいな」

よく考えて見れば凄い人脈じゃないか？　と御坂は思った。
だが、御坂にとっては更に驚きの情報が垣根の口から発される。

「麦野も姉だしな。なら第三位から第五位までが全員上条にホの字かよ」

「え？　ちょっと待って！　アイツって第四位と姉弟なの！？」

知らなかった御坂にとってはびっくり情報だったため、ついつい声を荒らげてしまう。
だが目立ったことに気付いた御坂は、萎縮しながら咳払いをする。

「あぁ？　知らなかったのかよ。アイツは第四位を含めて五人家族だぞ」

「え、えぇ？　でも苗字が違うよ？」

第四位の名前は麦野沈利。対して当麻の苗字は上条。
苗字が違うのに姉弟とは変じゃないか、そう御坂は思っていた。

「そりゃ麦野は養子だからな。単に名前を他人に言わせたくないから旧姓を名乗っているだけだ。本当は上条沈利だ」

御坂の疑問に、垣根は淀みなく答えた。
どうやら知っている人間には、沈利が苗字を変えているのは公然の事実のようである。
実際、ほとんどの書類に沈利は「麦野」を使っていた。
だがそれは単にレベル5の弟という事で、当麻が理不尽に狙われないようにする沈利なりの優しさだった。

「アイツを名前だけで呼んでいいのは、今のところ上条だけだな。それ以外の奴が呼ぶと大体ぶち殺されているな」

「……なんか第四位に対するイメージが一気に変わったわ」

「ま、色々な家庭事情があるってわけだ」

くいっと垣根は抹茶ラテを飲み干す。
コップをテーブルに置くと、改めて御坂に視線を向ける。

「ま、本題に入ろう。お前は俺に何が聞きたいんだ？」

それぞれの想い

「その……色々よ」

垣根が本題について御坂に尋ねると、急に顔を赤くしてもじもじし始めた。
その姿を見て垣根は御坂が何を言いたいか理解した。

「あ～、その様子じゃまだ整理がついてないな」

「そうよ、一体あいつとどう話せばいいのか分からないのよ！」

頭を抱えて唸る御坂だが、垣根はそんな御坂を冷静に見ていた。

「まぁそれはお前が最終的に答えを見つけないといけないが」

垣根は、どうしてその程度すら分からないのか？　と言いたげな視線を御坂に向ける。

「しいてあげるなら素直になれとしかいえないな」

頭をかきながらため息を吐くと、垣根は真剣な目をして御坂を見る。
垣根が纏う雰囲気は、以前言った『話を最後まで聞け』の時と同じであった。
その事に気付いた御坂は、ただ黙って垣根を見るしかなかった。

「大体よ、テメェはわがまま言い過ぎなんだよ。どうせレベル５になってチヤホヤされたから調子に乗ったんだろう？」

「うっ……ないって言い切れないけど……」

少しだけ自覚があったのか、御坂はバツの悪そうな顔をする。

「お前の欠点はその辺りだ。短気、ワガママ、好戦的ときたもんだ。友人としてならまだいいかもしれんが、恋人になるのは絶対不可能だな」

「こ、こここここ恋人!?」

恋人というキーワードに過剰反応する御坂。
その顔は真っ赤になっており、視線をあちこち彷徨わせている。
傍から見ても落ち着きを失っている姿であった。

「何を慌てているんだ。上条が好きなら最終的には恋人関係になるだろう？」

「う～」

確かに仲良くなれば、そんな関係も……と御坂は思っていた。
ただ他人に指摘されると、とても恥ずかしい。
ある意味で御坂はそういう思考を持つウブな人間だったのである。

「とにかく喋るときは常に落ち着け。上条が変な言葉を口にしても怒るな。何故上条がそういう言葉を口にしたかを考えろ」

「うん……」

「お前は相手の立場になって考えるって事が根本的に抜けている。自分の考えだけをずっと押し付けるばかりだ」

御坂は垣根の言葉を一字一句聞き逃さないようにしていた。
彼の言葉は説明できないが説得力はある、そう御坂は思っていたからだ。

「何も上条に限った話じゃない。相手が何故その事を選択したか、それをちゃんと考えろ」

垣根の言葉を聞きながら御坂は当麻との会話を思い返す。
確かに自分で勝手に「何故気付いてくれないの！？」という思いから怒鳴ってばかりだった。

「ただ怒りをぶつけられても、相手にとっちゃ理不尽な怒りにしか見えない」

そして好意を一度でも口にしたことがあったか？
御坂は自分の中に生まれた問いに否の答えを突きつけた。

「言い返せないから暴力に訴えたと思われるかもしれねぇ。時と場合によっては、それはお互いに不幸になるだけだ」

単に恥ずかしがって、照れ隠しに電撃をぶつけただけじゃないか。
そんな女が万が一好意を口にしても、誰も信じるわけがない。
心の中で整理がつくと、御坂は自分の中で何かが少しずつ変わっていく感覚を覚えた。

「まぁ上条に関しては素直になっておけ。アイツは生粋の鈍感だ、ストレートに好意を見せている心理掌握にすら気づかないような男だぞ」

テーブルに置いているコップに視線を向けると、垣根はコップを手に取る。

「う、うん……」

コップを手のひらでクルクルと回して遊んでいたが、やがてテーブルに置くと垣根は御坂の方に再び視線を向ける。

「話は変わるがよ、お前は俺と普通に話しているが、気付いていないのか？」

「え？　何をよ……」

垣根の問いの意味が分からない御坂は、単に眉をひそめるだけだった。

「はぁ……俺はな、学園都市レベル５　第二位の垣根帝督だ。お前さんの妹達をぶっ殺そうとした人間だぞ？」

「なっ！？」

垣根の発言に御坂は驚きを隠せなかった。
目の前の人間が第二位という事もそうだが、それ以上に妹達を殺そうとしたという発言に驚いた。

「その様子じゃ、絶対能力進化実験の詳細を知らないようだな」

御坂の驚きに、垣根は特に反応を示すわけでもなく平然と見ていた。
だがその態度が御坂を余計激怒させる原因となってしまった。

「どういう事よ！　あの実験は一方通行が参加しなかったから凍結になったはずよ！」

「……スペアプランとして俺が呼ばれたんだよ。最も、実験は一回も実施されずに凍結となったがな」

御坂は言葉を失った。

一方通行が実験の参加を拒否し続けたので、実験は実施されないと思っていた。

計画書を盗み見た時も、被験者は一方通行だけだった。

だから他の人間で実験を実施する事は不可能、そう御坂はタカをくくっていた。

「ま、そういうわけだ。気付いていないようだから教えてやったまでだ」

「どうしてよ」

信じられなかった。いや、信じたくなかった。

目の前の男は、口は悪いし態度は粗暴だ。

だけど、悪いことをきちんと叱ってくれるお兄さんみたいな人だと御坂は思っていた。

「あん？」

「どうしてあんな非道な実験に参加しようと思ったのよ！」

だが今の言葉で、御坂の思いはガラガラと崩れていった。

代わりに出てきた思いは憎しみ。あの実験に参加した憎い相手。

その思いに御坂の心は支配されていた。

「お前には分からん」

まるで親の敵のように睨む御坂を見ても、垣根は態度を変える事なく平然と御坂の質問に答える。

「どうしてよ！　何で人を殺してまで力を手に入れようと思ったのよ！？　そんなに絶対能力者が魅力的なの！？」

否定して欲しかった。きっと理由があるんだと言って欲しかった。御坂は少しだけ願いを込めて、垣根を見つめていた。

「……そうだな。魅力的と言えば魅力的だ。絶対能力者になりたかったよ」

だが御坂の思いは、あっさり裏切られてしまった。

「こっ……！？」

怒りのあまり声すらうまく出なかった。
御坂は、この場でこの男を殴りたい衝動に駆られる。

「絶対能力進化実験まではな」

だけど垣根の一言で、その衝動は止められることになる。

「……え？」

代わりに御坂から出たのは呆けたような情けない声。
だが垣根は気にすることなく、更に思いを口にする。

「俺はクソでクズな悪党さ。ロリコンから言わせればチンピラらしい」

どこか自虐的な笑みを浮かべながら、垣根は再びコップを手のひらで弄ぶ。

「だがよ、例え俺の両手が拭えないほど血に染まっていようと、誰かを守りたいという言葉すら笑い飛ばされるような人間でも」

コップを弄ぶのをやめ、垣根はコップに落としていた視線を御坂に向ける。

「俺は欲したんだよ、たった一人の人間を守りきれる力をな……」

御坂に向けた垣根の瞳に一切の迷いは見えない。

彼の気持ちは本気だと御坂は理解した。

「まぁ上条と出会って考えは変えたがな。例え力がなくても気持ちがあれば守れるだろってな」

コップを再びテーブルの上に置くと、垣根は少しだけ身を乗り出す。

御坂から視線をそらさず、ただ真っ直ぐ見つめる。

「ま、そういうわけだ。だから妹達の事はテメェに謝るつもりもねぇ。恨みたいなら勝手に恨んでろ」

そう言うと垣根は伝票を片手に立ち上がる。

対して御坂は垣根をただ見送ることしか出来なかった。

「だがよ、俺が言うのも変だがな。ずっと恨んで憎しみ続けて疲れるような事を妹達は望んでいるのか？」

その言葉に御坂はビクっとなる。

「後は妹達の誰かに聞け。んじゃなー」

そう言うと御坂の返事を待たず、垣根は立ち去っていった。

暫く御坂は視線をテーブルに落としていたが、やがてポツリポツリと言葉を口にする。

「そうよね、私は一度としてあの子たちに気持ちを聞いたことはなかった」

それは先ほど立ち去った垣根の言葉。

絶対能力進化実験の事は今でも憎い。

自分のＤＮＡマップを使って、あんな非道な実験を行おうとしたのだ。

（だけど彼を憎む事、それをあの子たちは一度でも望んだ？）

御坂の心の問いに明確な否がつきつけられた。

妹達は一度として、そんな思いを抱いて欲しいとは言っていない。

何もかも自分の思い込みなのだ、その事に御坂は気付いた。

「アイツの言う通りじゃない。私はただ自分の思いだけで勝手にあの子たちの気持ちを代弁していた」

ぎゅっと手を握ると、御坂は涙を堪えながら言葉を口にする。

「何よ……姉失格じゃない……」

鬱な一方通行

その日、当麻の教室は異様な雰囲気に包まれていた。
当麻がフラグを建てたわけではない。
青髪ピアスや土御門が何か馬鹿をやったわけでもない。
垣根が暴走したわけでもない。

「……」

何が起きているか。
それは一方通行が全身から物凄く鬱なオーラを醸し出していたのである。
机に突っ伏して黒いオーラをまき散らしている一方通行を、周りはただ遠巻きに見ているしか出来なかった。

「おい、ロリコンは一体どうしたんだ」

垣根は遠巻きに一方通行を見ながら、横にいる土御門に質問をする。

「わからないにゃ～。昨日会った時は普通だったんだがにゃ～」

しかし土御門も知らないのか、垣根の問いに答えることは出来なかった。

「……何か絶望しきっているって感じだな」

「魂抜けているともいうわ」

青髪ピアスや当麻も、一方通行が今の状態になっている理由を知ら

なかった。
四人揃って単に頭を悩ますだけであった。

「はいはーい、皆席に座ってくださいー」

あれでもないと考えていたら、いつの間にかホームルームの時間になっていた。
四人は仕方なしに各自の席に座ろうとした。
だが垣根だけ、一方通行が奇妙な反応を示した事に気付く。

（あ～、なるほど。分り易すぎるぞ）

よく考えれば一方通行がこんな風になる原因は一人しかいないと。
席に座った後も、垣根は一方通行を観察していた。

「全員いますねー。今日は大きな連絡事項はありません。優菜ちゃんは後で先生のところに来てくださいー」

一方通行はある意味で分り易すぎた。
どこかビクビクとしていながら、小萌をずっと見ていた。
しかし小萌はそんな一方通行の視線を敢えて無視をしているのか、一方通行の方に視線を向けることはなかった。
最後まで二人は一度も視線を交わさす事はなかった。

「なぁロリコン。お前、小萌先生と何かがあっただろ？」

ホームルームが終わった後、垣根は一方通行に話しかけていた。
理由は勿論、さっきからまき散らしている黒いオーラの原因についてである。

「な、ななな何を言ってるンですかァ！？」

「動揺しすぎ、バレバレだぞ？」

軽く突っつくつもりが、予想以上の反応を一方通行は示していた。
少しだけ驚く垣根であったが、一方通行は気付くことなくオロオロとする。

「なぁ一方通行。お前が言いたくないならこれ以上は聞かないけど、何があったんだ？」

垣根と一方通行のやり取りに気付いた当麻が、一方通行の元へ歩み寄る。

「……ケッ……つまンねェ話だぞ」

少しだけ悪態を吐きながら、一方通行は垣根と当麻に視線を送る。

「友人の悩みを聞いてやるのも、ダチとしての役割だぜ」

「まぁ話せよ、ロリコン。そんな抜け殻のようなお前を見ててもつまらんしな」

その視線は遠まわしに、助けを求めているように二人は感じていた。
だからこそ二人は少しだけ笑みを浮かべながら、一方通行に話しかける。

「……あのよォ。昨日の夜なンだがな。いつものように小萌の晩酌に付き合ってた」

（本当にべったりだよ、このロリコン）

（いつものように？）

初球から一方通行の意外な一面が判明した事に驚いた二人だが、一方通行は無視して言葉を続ける。

「その日は虫の居所が悪かったンか、いつもより酒の量が多かったンだ」

ポツリポツリと、まるで罪を告白するかのように一方通行は語り続ける。

それは一方通行がどれほど小萌を大事に思っているかが分かる一面であった。

「なんで分かるんだ？」

「缶ビールの数を記録しているンですゥ。飲み過ぎはよくありませンン」

当麻の疑問に、一方通行は淀みなく答える。

まるでそれが当然の行為と言いたげに。

しかし二人はその答えに、ため息を吐きながら呆れていた。

「お前……お父さんかよ……」

「本当にロリコンは、小萌先生に激甘だよなぁ……」

分かってはいたが、二人は一歩通行がここまで甘いとは思わなかっ

た。
想像をはるかに上にいく過保護っぷりであった。
垣根に至っては、この二人結婚すればいいんじゃね？　と思ったぐらいである。

「でも許容範囲を超えて飲もうとしたンで、止めたンだがな」

そこで一歩通行は語りを止めた。
代わりにぷるぷると体が震え始めていた。
その様子に、二人は次の言葉が欝になる原因と瞬時に理解した。

「そしたらよォ……そしたら……い、いいいいいい一方ちゃんなんて……」

「あ～『一方ちゃんなんて嫌いですー』と言われたか」

「……そうだよ！　そう言われたンですよォ！？」

言いにくそうにしていた一歩通行の代わりに、垣根が最後の台詞を一歩通行に代わって口にした。
どうやら正解だったらしく、一歩通行は立ち上がると激昂しながら垣根を見ていた。

「落ち着け、一方通行。それは単に虫の居所が悪いせいじゃないのか？」

何とか宥めようとする当麻だが、残念ながら一歩通行の耳には届いていなかった。
再び椅子に座った一歩通行は、下を見ながらこの世の終わりと言いたげな雰囲気で呟く。

「学校来る途中で理解した。俺は小萌に嫌われたンですね」

「おいおい、ちょっと落ち着け」

その姿にさすがの垣根も驚きを隠せなかった。

たった一人の言葉で、一方通行がこうまで脆くなっているのである。

しかし絶望に染まりきった一歩通行には、やはり言葉は届かなかった。

「三下ァ……」

「なんだ？　一方通行」

唐突に一歩通行は、視線を椅子から当麻に向ける。

「お前ブチ殺していい？」

そして当麻にむかってとんでもない事を口にする。

「唐突に虐殺宣言！　上条さんは理由を求めます！」

「もう俺はダメだァ……小萌に嫌われたらこんな街に用はねぇ。最後にお前にリターンマッチしてブチ殺したい」

チョーカーのスイッチに手を伸ばしながら、一歩通行はゆらゆらと立ち上がる。

明らかに殺る気満々の雰囲気である。その雰囲気が、先程の言葉が嘘でも冗談でもない事を物語っていた。

「ちょおおおおっとまてぇぇぇぇ。頼むから落ち着けぇエエエエエ」

「落ち着いてられるかァァァァァ！！！！」

一歩通行はチョーカーのスイッチを入れて、当麻に襲いかかろうとした。

が、スイッチを入れる一歩手前で、一歩通行は机に突っ伏すことになる。

「ぐはっ」

一歩通行の上から、誰かによるゲンコツが落ちてきたようである。

全く警戒していなかった一歩通行は、無防備に攻撃を受けるしか出来なかった。

「少しは落ち着きなさい」

パンパンと手を叩く人間、それは先ほど小萌に呼ばれた優菜であった。

額に手を当てながらため息を吐くと、優菜は呆れながら言葉を口にする。

「はぁ……どうやらお互いに気まずいだけのようですね」

「ん？　優菜は小萌先生とロリコンの事情を知ってるのか？」

事情を知ってそうな雰囲気の優菜を見て、垣根は疑問を口にする。

「ええ、知っています。先ほど呼ばれた理由もその事情に関しての

相談でした」

垣根の疑問に、優菜は淀みなく答える。
優菜によると小萌は単に一方通行へ、素直に謝られないだけのようである。
そして一方通行も、小萌に素直に話しかける事が出来ないだけ。

二人がギクシャクしているのは、単にお互いに素直になれないだけのようであった。

「なら、二人が素直になる場面を用意すればいいのか？」

「そうですね。ちょっとした案ならありますから実行してみますか」

その方向で話を進めよう、そう結論に至った二人だがある問題が残っていた。

「なぁ……ところでよ」

垣根は一歩通行を指さしながら、当麻と優菜に向かって引きつった笑みを浮かべていた。

「ロリコンが息をしていないんだが」

その後、天上霊薬によって復活した一歩通行であった。

その後授業は問題なく進行し、放課後になった。
鬱状態の一歩通行はずっとそのままだったが、誰もが怖がって注意

すらしなかった。
ただ黒いオーラをまき散らして、ずっと椅子に座っていたのである。

「さて、優菜。その案とやらを聞きたいんだが？」

そんな一歩通行をどうにかしようと思い、当麻と垣根と優菜は喫茶店で話し合っていた。
当然ながら、あの状態を放置しておくのはかなり危険である。
いつ暴走するか分からないぐらい、今の一歩通行は精神的に不安定なのである。

「簡単です。食事をしてお互いの不満をぶつければいいのですよ」

紅茶を口に含みながら、優菜は垣根の質問に答える。

「食事ィ？　つーても場所はどうするんだ。下手なところだと話すことも出来ないだろ？」

当然ながら今の一歩通行に場所を提供する場合、完膚無きにまで破壊されることがありえる。
選択肢を一つでも間違えれば、一歩通行は本当に自暴自棄になるからだ。

「場所は私の家を提供します。参加者は垣根さんと当麻、貴方たち二人でお願いします」

「俺は構わないけど……理由は？」

「万が一、一方通行さんが暴走しても取り押さえる為です。私じゃ役不足ですからね」

「まぁ俺も依存はない。日曜日は無理だけど土曜日ならオーケーだ」

「では、土曜日の夜に行いましょう」

話が纏まりかけて、後は日にちを待つだけと思っていたが当麻はある事を思い出した。

「あ、一つだけ質問だ。もしかして一方通行の家にいる連中を全員呼ぶのか？」

問題はインデックスの存在である。

一回だけしか見ていないが、インデックスの食事量は尋常じゃないの量である事を当麻は思い出した。

「ええ、まぁ他の方々もいれば呼ばないと不公平ですからね」

「……ひとりだけ無駄に食うシスターがいるんだが……材料は大丈夫か？」

しかし優菜はその事を知らなかった。

「なければ当麻の頭でもかじってもらいましょう」

「上条さんの頭は食べ物じゃありませんよ！？」

「冗談です。よく食べると言いましたがどのぐらいですか？」

優菜の問いに当麻は頭を悩ませた。

よく食べる、ではない。食べる量はあの体のどこに入るのか？　と

疑うレベルである。
ボキャブラリーの少ない当麻は、何とかうまく説明しようと試みた。
「えーと……ブラックホールだなアイツは」
だが、出てきた言葉は優菜を余計に混乱させるだけであった。
「後で小萌先生に聞いておきます……」
額に手を当てながら、優菜はため息を吐いた。
垣根はインデックスの存在を知らないので、終始疑問符を浮かべながら当麻と優菜を見ていた。
その後、小萌に食事の提案をした優菜だが、インデックスの食事量を聞いて更に頭痛のネタが増えたのは言うまでもなかった。

素直になれない二人

そして約束の日がやって来た。
その日は一方通行と小萌の仲直りを行うための食事会を開く事となっている。
だが、そんな日でも遅刻する人間は一人だけいた。

「はぁ……ったく、上条。お前はいつも遅すぎ」

「だって携帯が壊れているなんて思わなかったんですよ！？」

勿論、当麻である。
携帯のアラーム機能で待ち合わせの時間を通知するよう、当麻は携帯に設定を行っていた。
しかし、その日に限って携帯のアラーム機能が壊れてしまった。
当然の如く、時間を過ぎてもこない当麻を、垣根が探す事となったのである。

「抜けている証拠だ」

「……すまんな、態々迎えに来てくれて」

「まーいいよ。とりあえずロリコンと先生が待っているから早く行こうぜ」

「おお」

これ以上の遅刻は後が怖いので、当麻は全速力で走る。
が、一つだけ理不尽な事があった。

「ちくしょう！　俺も飛べたらなぁ！？」

当麻は全速力で走っている。
対して垣根は能力で翼を出して飛んでいたのである。

「あ、やっときたんだよ」

全速力で走ること十数分、やっと当麻は目的の場所にたどり着いた。
そこには既に、小萌と一方通行、インデックス、打ち止め、アリシアがいた。

「よし、三下。ブチ殺すから遺書を書いておけ」

「遅刻しただけでそこまでですか！！！」

傍から見てもソワソワしている一方通行。
誰もが思った、彼は早く小萌と仲直りしたいと。

「知らない人がいるってミサカはミサカは言ってみたり」

当麻と垣根を見つつ、打ち止めは小首を傾げていた。
勿論、ミサカネットワークで顔は知っているが、打ち止めはあえて知らないふりをしていた。

「そう言えば、お二人は初対面ですねー」

打ち止めとインデックスが、当麻と垣根に対して初対面なのを思い出した小萌。

「私はとうまを知っているけど、隣の人は知らないね」

「ミサカはどっちも初対面ってミサカはミサカは言ってみたり！」

打ち止めとインデックスは元気よく返事をする。

新しい友だちが増えることが、よほど嬉しいようである。

「ん、まぁ自己紹介といこうか。俺の名前は垣根帝督」

「上条当麻だ、今日は宜しくな」

垣根と当麻、それぞれ自分の名前を名乗り上げる。

「私の名前はね、インデックスって言うんだよ！」

「打ち止めだよってミサカはミサカは名乗りあげてみたり！」

打ち止めとインデックスも、当麻たちに倣って自分の名前を名乗り上げる。

活発そうな笑顔を浮かべながら、打ち止めは当麻と垣根に向かって小さな手を差し出した。

少しだけ面を喰らった垣根に対して、当麻は笑顔で打ち止めの手を握る。

ガラじゃない、そう思いながら垣根も当麻の後に打ち止めの手を握った。

「自己紹介は終わったな。移動するぞ、姉上の家はこっちだ」

本日の案内役であるアリシアは、あいも変わらず腕を組んでそんな四人を見ていた。

挨拶が終わると、アリシアは他の人間の返事を待たず歩き始めた。

歩くこと十数分、当麻たちはとあるマンションの前まで来ていた。

「随分といい所に住んでいるんだな」

「結構広そうだな」

そのマンションは優菜が住んでいるマンションである。

傍目に見ても分かる。学園都市の中でも高級部類に入るマンションだという事に。

とても一介の学生が住むようなレベルではないと。

アリシアがセキュリティを解除していくと、やがて優菜が住んでいる部屋の前まで到着する。

しかしここで問題が発生した。アリシアではインターホンに手が届かないのである。

少しだけ涙目になりながら、必死に届かせようとするアリシアに誰もが声を掛けることが出来なかった。

結局、その問題は垣根がインターホンを押すことで解決した。

「はい、いらっしゃいませ」

少しして扉の中から優菜の声が聞こえた。その声と同時に、扉がガ

チャリと音を立てて開けられる。

「今日は世話に……なる……」

挨拶をしようとした垣根だが、最期まで言い切る前に声を失ってしまった。

「どうされました？」

優菜は普段とは違う格好をしていた。普段着だがその上にエプロンをしている。

髪は邪魔にならないように後ろで一つに纏めていた。所謂、ポニーテールである。

「い、いや。何でもねぇ！　今日はよろしくな！」

（これは破壊力満点だ）

普段と違う優菜の姿に、心臓がバクバクとしている垣根だが、何とか顔に出さないようにした。

「優菜ちゃん、本日はお招きありがとうございます。今日はよろしくお願いしますー」

「はい、皆さん。よろしくお願いします」

優菜の姿に見惚れていると、垣根の後ろから小萌が改めて挨拶をしてきた。

残りの人間も、軽く会釈をして小萌の挨拶に続く。

「どうぞ、お上がりください」

「おじゃましまーす」

部屋に入ると、キッチンから漂ういい匂いにインデックスが反応する。

「いい匂いなんだよ！」

その顔は既に待ちきれないと言いたげな顔をしていた。

「たくさんありますから、一杯食べてくださいね」

「勿論なんだよ！」

およそ遠慮という言葉が辞書に存在しないインデックスであった。

「お前は遠慮って言葉を覚えやがれ！」

さすがの傍若無人っぷりに、一方通行はつい叱咤をしてしまう。

しかし既に料理しか興味ないのか、インデックスの耳には届いてなかった。

「初対面の方もいますので改めて自己紹介をさせていただきますね」

全員をリビングに招き入れると、優菜は改めて全員を見渡しながら言葉を口にする。

「私の名前は上条優菜。そこにいる上条当麻の従姉妹にあたります」

「私の名前はね、インデックスって言うんだよ！」

優菜の挨拶を皮切りに、インデックスが自分の名前を名乗り上げる。

「インデックスさんですね、よろしくお願いします」

「久しぶりなんだよ、優菜お姉ちゃんってミサカはミサカは抱きついてみる！」

「お久しぶりですね、打ち止めさん」

打ち止めは優菜に向かって勢い良く抱きつく。

少しだけ驚いた優菜だが、打ち止めをしっかりと抱きとめる。

優しく打ち止めの頭を撫でる優菜に、少しだけ嫉妬をしたアリシアであった。

「もう少しで出来ますので、くつろいでいてください」

そう言って優菜は打ち止めを離すと、そのままキッチンまで引っ込んでいった。

「おおう、良いソファーだ。ふかふかだぜ」

優菜が料理をしている間、他の人間はリビングでくつろいでいた。

「上条さんの家もそれなりのソファーだけど……これは中々だな」

リビングのソファーに座った当麻と垣根は、ソファーにゆったりともたれかかる。
ふかふかで心地良いのか、全身の体重をソファーに預けていた。

「テーブルの上に載っているこの冊子は何ですか？」

同じ様にソファーに座っていた小萌が、テーブルの上に載っている奇妙な冊子に気付く。
明らかに日本語ではない冊子に、打ち止めやインデックスも興味を示す。

「ああ、それは聖カトリーヌ女学院の冊子だな。ラテン語で書いているから分からんだろう」

小萌の疑問にアリシアが答える。
だが、それは小萌に更なる疑問を与えていた。

「何でラテン語なんですかー？」

「聖カトリーヌ女学院は、ローマ正教の教育も行っておる。よってその都合でラテン語が必須となっておるのだよ」

ピクリとインデックスが反応する。
インデックスの所属はイギリス清教である。
ローマ正教とは敵対していなくても、仲が良いとは言えない。

「じゃあアリシアもローマ正教のシスターー？」

シスターであるインデックスが、アリシアに疑問を投げかける。

「妾は信仰心なぞ持ち合わせてはおらぬ。よってシスターではない」

だがアリシアは、インデックスの疑問に否定の言葉を返す。

その態度に、とてもではないが信仰心があるとは思えなかった。

「そもそもローマ正教の教育すら、国際社会に出た時のためだ。あれは信徒が多いからな、教育していて損は無いというわけだ」

「ほえー、そうなんですかー」

アリシアの説明に素直に感心する小萌。

垣根は興味がないのか、ソファーにもたれかかって眼を閉じていた。

それは一歩通行も同様であった。

「一応、ローマ正教から公認は受けておる、だから教会も一応はある。しかし信仰心を持ち合わせている人間は数えるほどしかいなかったな」

「よくそんな状態で公認なんて受けれたんだよ……」

信仰心がほとんど零という事に突っ込みを入れるインデックス。

「まぁローマ正教から見れば、極東の島国なんだろう。だから、そこまでうるさくはなかったな」

そこでアリシアはポケットからあるものを取り出した。

「都合上、ローマ正教の十字架を持ってはおるがな」

言葉通り、アリシアは十字架を手に持っていた。

「なんで持っているんだ?」

信仰心がないのに、十字架を持っている事に疑問を感じた当麻はアリシアに尋ねる。

「兄上には前話したソロルの為だ。あれは、互いに十字架を交換する儀式がある」

当麻の疑問に、アリシアは淀みなく答える。

「交換する理由は何でだ?」

「信仰心の要である十字架を委ねるからこそ、姉妹の絆は強固になるとの考えでだ」

「ふーん、まぁ色々あるんだな」

当麻も余り興味はなかったのか、それ以上質問をすることはなかった。

「出来ましたよー」

インデックスが何かいいかけたが、それを遮るようにキッチンから優菜の声が聞こえた。

「待ち望んだ時間なんだよ!」

瞬時にして食事の事に意識を奪われたインデックスは、いの一番に

ダイニングに駆け込んだ。
その姿に、その場にいる全員が苦笑するしか無かった。

「おおう……これは」

「豪勢なんだよ！」

全員がダイニングに移動すると、テーブルの上を見て驚く。
色とりどりの料理が、所狭しと並んでいたのだ。

「ふふ、少しだけ奮発しました」

「あァ……なンか悪いな」

「気にしないでください。さぁ召し上がれ」

優菜の言葉に、全員が指定の席に座る。
左側は打ち止め、優菜、垣根、当麻。
右側はアリシア、小萌、一歩通行、インデックス。

アリシアは今回、優菜の邪魔をしないようにとあえて優菜の隣を座らなかったようである。

「いただきます」

全員が食事前の挨拶をして、料理を一口食べる。
が、優菜とアリシア以外は口に含んだ状態で硬直していた。
料理が美味しすぎて、頭の理解が追いついていなかったためである。

しかし、アリシアは食べ慣れているのか、普通に食事を進めていた。

「美味しいんだよ、ゆうなは料理が上手なんだよ！」

やがて一番最初に硬直がとけたインデックスが、すごい勢いで料理を食べ始める。

「ありがとうございます」

「おい、インデックス！　ちゃんと味わって食え！」

味わっているように見えないインデックスに、当麻はついつい突っ込みを入れてしまった。

だが、それでもインデックスは止まらなかった。

「味わっているよ。でも、手が止まらないんだよ」

その言葉通り、インデックスは手が止まらなかった。

次々と料理を平らげる姿に、垣根は顔を引きつらせながら当麻に質問を投げかけた。

「なぁ……このガキの胃はブラックホールか？」

インデックスが座った席には、通常の三～四倍の量が置かれていた。

恐らく小萌から助言を受けた優菜が、あえてインデックスの席だけ量を増やしていたのだろう。

だが、それでも次々と料理を平らげていくインデックスであった。

「優菜お姉ちゃんの料理は初めてだけど……美味しいんだよってミサカはミサカは言ってみる！」

「ふふふ、いっぱい食べてくださいね」

打ち止めは満面の笑顔で優菜の料理を褒めていた。

「……なァ小萌」

「……何ですかー？」

周りの様子を眺めながら、一方通行は自然に小萌へ話しかけていた。

小萌も今までのように意識せず、自然に返事を返していた。

「皆で集まって料理を食ってると……些細な事にうだうだやってるのが馬鹿らしくなるな」

「奇遇ですね。私もそう思っていました」

今まで意地をはって素直にならなかった事が、二人には馬鹿らしく思えてきたのである。

「この前は悪かったな」

「私も御免なさいです。一方ちゃんに酷い事を言っちゃいました」

「気にしてねェ」

「そうですか、ありがとうございます」

そう言って二人は微笑みあった。

その姿に、さっきまでのわだかまりは一切感じられない。

いつもの二人の姿であった。

（うまくいったようですね）

そんな二人の様子を見て、優菜は今回の作戦がうまくいったことを確信した。

「あくせられーたは要らないの？　だったら私が食べてあげるんだよ！」

「誰も食わねぇって……おいこらインデックス！　何勝手に食ってるンですかァ！？」

「もぐもぐ……早い者勝ち……ごっくん、なんだよ！」

インデックスを止めようとしたが、一歩遅くインデックスは料理を口に入れていた。

「よし、分かった。じゃあオレは！」

一方通行はインデックスから料理を奪うように見せかけて。

「ぎゃあああ！！　上条さんのお肉がぁぁぁぁ！！」

当麻から肉を奪っていた。明らかにメインディッシュに見える大きな肉である。

「三下の肉をゲットだぜ！」

「行儀が悪いですよー、一方ちゃん！」

「おいおい、小萌。インデックスが言ったンだよ、早い者勝ちってなァ」

ニヤニヤとしながら肉を食べる一方通行。
対して当麻は涙を流しながら、メインディッシュの皿を眺めていた。

「はいはい、当麻。貴方には別に焼いてあげますよ」

さすがに可哀想に見えてきたので、優菜は予備で置いている肉を焼いてあげる事にした。

「お願いします……」

「兄上、まだまだだな。油断するとまた取られるぞ？」

「次に上条さんのお肉を奪った奴は噛みついてやる！」

周りを威嚇する当麻だが、残念ながらそれは周りを悪乗りさせるだけであった。

「打ち止め！　三下から肉を奪い取れェ！」

「了解です、大佐！ってミサカはミサカはノリノリで答えてみたり！」

「ソレは卑怯だろう、一方通行ーーーー！！！」

こうして、一方通行と小萌の仲直り作戦は予想以上の成功をおさめたのであった。

「不幸だぁーーーーーーーー！！！」

当麻の食べる肉を犠牲にして。

策士な理后姉ちゃん

その日、理后は朝早くから起きていた。
いつもの彼女は、体が弱いのもあるが朝は滅法弱い。
当麻に毎日起こされる日々を過ごしていた彼女だが、この日の早起きには理由があった。

（今日はとうまとデートの日）

それは当麻とデートを行うからである。
体調を整えるため、理后は前の晩はすぐにベットに潜り込んでいた。
期待で心が踊っていたせいで、すぐに寝る事は出来なかったが……。

（体調よし、髪型よし、服装よし）

いつも着ているピンクのジャージ姿だが、実はジャージは新品であった。
髪型もいつもと変わらないが、理后の中では何かが違うようである。
当麻に気負いさせず、なおかつ普段と少しだけ違う感じで行くことに決めたようである。

「うん、がんばるぞ」

鏡の前で軽く拳を握り、理后は気合を入れる。
今日という日を、最高に素敵な日にする為に……。

最終的なチェックを終え、理后は部屋を後にするとダイニングに移

動した。

「お、理后姉ちゃん。おはようー」

自分以外は既に食事を終えていたのか、テーブルには自分の分の食事しかなかった。

（とうまと一緒に食べたかったけど、それは高望みすぎ）

恐らく当麻は早めに食事や準備を済ませておいたのだろう。

理后はそう判断すると、普段どおりに当麻へ挨拶をする。

「おはよう、とうま」

「今日は一日よろしく。朝御飯食べたら出かける？」

「うん」

ちょっとドキドキしているけど、いつもと同じ様に挨拶できた。

理后は食事をとりながら、さっきの自分をそう振り返っていた。

（落ち着こう、普段どおり普段どおり……）

デートだからって浮かれたら失敗する。

以前、デートで大はしゃぎして翌日に倒れた経験が理后にはある。

その時の当麻の顔が、理后にとっては一番見たくない顔をしていた。

自責の念にかられた顔である。

当麻は自分が理后の体調を気遣えてなかった事をひどく後悔してい

た。
その時の入院は、贖罪の意味があったのか当麻はずっと理后の世話をしていた。

（あの時のようになるのはもう嫌だ）

当麻に辛い顔はしてほしくない。当麻にはずっと笑っていて欲しい。
その想いが通じたのか、理后は奇跡的に回復を果たした。

最近は優菜による治療のおかげで、滅多に体調が崩れることはなくなった。
しかし優菜からも「油断は禁物」という言葉を理后は貰っていた。

（体晶の使用も厳禁されたしね）

理后が使っていた体晶は、現在は優菜が管理をしている。
何となくだが理后は理解していた。体晶は二度と使用される事はない。
優菜が体晶の利用に関して首を縦に振る事はありえないと。

そして沈利も体晶の利用は常に躊躇っている。
下部組織の扱いは適当な沈利だが、反対に『アイテム』の構成員に対しては過保護である。
そんな沈利が、理后の体を壊す薬を平気で渡すことなど出来るはずがない。

（きっとしずりも、今までずっと悩んで苦しんで渡していた）

「ごちそうさま」

上条家の家長として、理后の姉として。
沈利はどんな時でもその事を念頭に行動をしていた。

「お粗末さまー」

そんな沈利の想いをムダにしないためにも、体を壊すような事は二度としない。
そんな想いが理后にはあった。

（でも、とうまの事だけは譲れないよ）

「じゃあ、出かけようか」

そう言って理后は当麻の『右手』を握る。

「そうだねー、やっぱセブンスミスト？」

「うん、はまづらが車を用意しているからすぐだよ」

それは能力を使わないという理后からのメッセージ。
その姿に当麻は安心しきっていた。

しかし、理后の目論見が別にある事を当麻は知らない。

能力の事を気にする当麻を安心させ、かつ当麻とナチュラルに手を握れる。
理后の本当の目論見はそこにあったのである。

（どうせ三人は追跡するはず）

三人とは当然ながら姉妹たちである。
沈利たちが大人しく家にいるとは思えない。そう理后は考えていた。

（だから……これでよしっと）

携帯を取り出し、理后は予め用意していたメールを送信する。
送信完了を確認すると、理后は携帯をしまって当麻の腕に抱きつく。

（これぐらいは……いいよね？）

そう目で当麻に訴えかけると、当麻は顔を赤くして黙る以外出来なかった。

一方、その頃沈利たちは。

「くそう、理后の奴。やる気満々じゃねぇか」

「何でわかるって訳よ」

「ジャージがいつもより新品だ」

「さすが沈利お姉ちゃん、超すごいです」

理后の予想通り、三人をこっそり理后たちを追跡していた。

「いつものジャージ姿で、当麻を気負いさせず尚且つ新品で綺麗さをアピールか」

「さ、さすが理后姉ちゃん」

「よし、こっそり追跡するぞ」

「超了解です」

しかしここで沈利の携帯から着信音が鳴り出す。
沈利は訝しげに思いながらも、携帯を開く。
そこには一通のメールを受信と表示されていた。

そのメールを開いた沈利は、驚きに声を失った。

沈利の様子を訝しげに思ったフレンダと最愛だが、沈利は二人に無言で携帯画面を見せてくる。

『三人ともついてきても分かるよ？　私の能力は能力追跡だから』

表示されている画面には、本文にそう書かれていた。勿論、送り主は理后である。

「結局さ、最初から無理ゲーって訳よ……」

「これは……家で超大人しくしますか」

「……そうだな」

沈利たちは無言で頷きあうと、失意のまま理后の追跡を諦めた。

「いや……まだ手はあるな」

しかし何かを思いついた沈利は、ある人物に電話をかけた。

「おーい」

暫く雑談をしていた当麻と理后だが、突然声をかけられた。

「お、来たようだぜ」

車を用意した浜面が、理后たちの元に到着したようである。

「はまづら、今日はお願いね」

「すまんな、浜面。今日は頼むー」

理后はいつものように車に乗り込むと、浜面に一声かける。
当麻も理后に倣って乗り込むと、浜面に感謝の言葉を述べる。

「いいって、気にするな」

二人の言葉に浜面は軽く笑みを浮かべながら答える。

（麦野から追跡しろって電話が来たけど、なんでだろうなぁ？）

しかし心では別のことを考えていた。
浜面は先ほどかかってきた沈利の電話を訝しげに思っていた。
しかし、逆らう事は不可能なので大人しく指示に従うことにした。

「はまづら、可及的速やかにセブンスミストへお願い」

「あいよー」

ハンドルを握り、車を発進させようとした所で当麻がある疑問を持った。

「所で浜面は免許を持っているのか？」

それは車の免許を浜面が持っているかである。

年齢的に同じ程度の浜面が、運転免許を持っているとは思えない。

嫌な予感がしつつも、当麻は浜面に尋ねていた。

「必要なのはテクだ、カードじゃねぇ」

そして当麻の嫌な予感は的中した。

浜面はニヤリと笑うと、当麻に向かって親指を立てつつ質問に答える。

「無免許かよ！」

「いっくぜぇ！」

突っ込む当麻だが、浜面はそれを無視して車を発進させる。

理后は気にしていないのか、ずっと当麻に寄りかかっていた。

「不幸だーーーー」

「ついたね」

「うん、ついたね」

それから数十分後、理后たちはセブンスミスト前に到着していた。
一言で言えば浜面の運転は結構荒かった。
慣れている理后は平気だが、当麻にはきつかったようである。

「しかし浜面も災難だな。セブンスミストを巡回していた黄泉川先生に捕まるなんて」

しかし不幸は当麻だけではなかった。
たまたまセブンスミスト前を巡回していた黄泉川に、浜面は見つかってしまったのである。
当然、無免許運転がバレすぐ御用となった浜面であった。

「そうだね」

だが、果たして黄泉川が巡回していたのはたまたまだったのか。

（しずりははまづらを使って追跡するつもりだったんだろうけど……まだまだだね）

答えは否である。
黄泉川は『善意の一般人』からの通報で、セブンスミスト前を巡回していただけである。
通報内容は『無免許運転をする人がセブンスミスト前にいる』である。

訝しげに思った黄泉川だが、無視するわけにもいかずセブンスミスト前を巡回していた。
そして浜面を見つけ、そのまま連行していったのである。
そんな策が張り巡らされた事を知らない当麻は、単に浜面を「運悪く警備員に見つかっただけ」と思っていた。

（しずりにメールを送信）

理后は最後のつめを行うと、当麻の右手を握りながらセブンスミストに入っていった。
送ったメールの本文は『はまづらは警備員に連れて行かれました』である。

（これで誰の目も気にせずとうまとデートが出来る）

空いている手をぐっと握ると、理后はどうやって当麻とイチャつくか考えを巡らせていた。

そして理后はあらゆる手を使って当麻とイチャついた。
手を握るのは当然、更には恋人つなぎのように手を絡ませて腕に抱きつく。
更に、照れる当麻が何かを言う前に理后は上目遣いで当麻を見る。
少しだけ悲しそうな目を見て、当麻は何も言えなくなった。

（とうまの腕……あったかい）

スリスリと当麻の腕に頬ずりする理后。

（理后姉ちゃんの甘い匂いが……って落ち着くんだ！　素数だ！　素数を数えろ俺！　えーと、0，1，2，3，4，5……）

既にパニック状態の当麻だが、理后の甘え攻撃はそれで終わらなかった。

昼ごはんによったファーストフード店では、理后は当然のように当麻の隣りに座る。

二人の距離は零センチ。理后はべったりと当麻に寄りかかっているのである。

「あーん」

勿論、食事は当麻に食べさせてもらっている理后である。

「あの……理后お姉さま……出来れば自分で食べて欲しいのですが……」

「どうして？」

理后はきょとんとした顔で当麻を見る。

（ぐおおおお！！！　純真な理后姉ちゃんの視線が痛い！！　痛すぎるよ！！！）

特に何も言っていない理后だが、当麻は理后の視線だけで簡単に折れていた。

「あーん」

「あ、あーん」

それから三十分間、理后は時々当麻の指まで啄ばみながら食事を終える。
啄まれた事に当麻は心臓をバクバクさせていたが、当然ながら理后はわざとやっていたのである。

服を見るときも理后は腕を組んでいた。
むしろ組んでいるのが当然といわんばかりである。

しかし理后は服にこだわりがないので、店に並んでいる服の何が良いか分からなかった。
ただ当麻の好みの服を知るためだけに、店を回っていたのである。

「そうだ、家族でお揃いのパジャマを買おう」

「パジャマ？　最愛も言っていたけど皆パジャマが傷んでいるの？」

当麻は最愛が以前「お揃いのパジャマが欲しい」と駄々をこねている事を思い出した。

「仲良し家族だから、皆でお揃いのパジャマが欲しい」

「じゃあ適当に見繕って買って帰ろうか」

当然、理后も当麻とお揃いのパジャマが欲しいと思っている。
だがそれは難しい事なので、敢えて家族でお揃いという路線で理后は願いを叶えようとした。

（これでしずりもふれんだもさいあいも不満はいわないと思う）

当麻が自分たちの事を思って買ったパジャマを断るわけがない。
そう踏んだ理后は、当麻と一緒にパジャマを購入する。
勿論、理后が当麻とお揃いの色を選んだは言うまでもない。

「ただいまー」

「ただいま」

パジャマを買い終えて帰宅した二人。
浜面が警備員に捕まったので、帰りは当然ながら徒歩だった。
そして理后は家に入るちょっと前まで当麻と腕を組んで歩いていた。
途中その姿を見た某レベル５の人は、泣きながら立ち去ったようだが、残念ながら当麻は気付かなかった。

勿論、某レベル５の人に見せつけるのも理后の計算の内である。

（第三位なんかにとうまは渡さない）

例え相手がレベル５でも、恋のライバルには容赦しない理后であった。

「お帰りー」

リビングから沈利が声をかける。

「超おかえりです」

「おかえり、当麻お兄ちゃんー」

リビングに入ると、最愛やフレンダもいた。
どうやら最愛おすすめの映画を見ていたようだ。

「お揃いのパジャマ買った。今日は皆で川の字に寝よう」

「おー、いいねぇそれ」

理后の提案に沈利たちは乗り気であった。
当麻は何か言ったようだが、残念ながら誰にも聞き入られなかった。

その後、当麻の両隣を巡って姉妹がまた火花を散らしたのはお約束である。

土御門はアレイスターの呼び出しで、窓のないビルに来ていた。
結標は土御門をエスコートすると、一言も言葉を発しないまま会釈し、再びテレポートした。

残された土御門は、ただ不機嫌そうな顔をアレイスターに向けていた。
その態度から従属的な部下の匂いは一切しない。

「上条優菜の件をきこう」

またか、土御門は苛立った雰囲気でそう呟く。
このところ頻繁にこの件で呼び出しを食らっている土御門である。
逐一報告書は上げているはずなのに、何故かアレイスターは土御門の口から報告を確認していた。

「報告は上げているだろう。今の所、彼女を暗部に引き入れる材料がないんだよ」

上条優菜の件、それは彼女を暗部に取り入れる指令である。
随分前から受けていた仕事だが、土御門は未だに実行出来ていなかった。

当然ながら優菜が暗部に堕ちるだけの材料がないためである。
彼女を知る人間なら、優菜をなだめたりすかしたり、脅したりしても効果がないのはすぐに分かる。
また、金で釣ったりするのも不可能なのである。

「では入る理由を作りたまえ」

無いのなら作って取り入れろ、それもまた土御門が最近アレイスターに言われる言葉である。

「本気で言っているのか？」

アレイスターに向かって土御門は苛立った口調で言った。

「あの子は戦闘分野においては天性の才能がある。下手に手を出しても逆に彼女から手痛いしっぺ返しを貰うだけだ」

優菜は柔和で礼儀正しく、他のレベル５より常識力がある。

大人しいが気配りが的確であり、周囲の雰囲気を良くしようと配慮を常にしている。

一見守られるだけのような存在の優菜だが、実際はそうではない。

どんなに強大な敵でも、立ち向かう勇気と強靭な精神力を持ち合わせている。

「それに幻想殺しの存在もある」

更に問題なのが彼女の血縁者に当たる当麻の存在である。

彼自身は気付いていないが、彼が持つ友好関係は通称『上条勢力』とまで名付けられるほど一つの団体となっている。

レベル５の第三位から第五位、それから第七位も当麻と友好関係がある。

「彼女に手を出して、幻想殺しが出てきてみろ。レベル５は全員お前から離反するぞ」

更に問題がある。当麻が持つ『上条勢力』の他にもう一つ新しい団体が出来上がりつつある。
それが優菜の持つ友好関係で出来ている『上条勢力』である。当麻と多少被っている人間はいる。
だが、レベル５第一位と第二位は、ほとんど優菜の『上条勢力』にいると言っても過言ではない。

一方通行は前頭葉の治療で優菜に恩を感じている。
そして垣根は純粋に彼女に好感を抱いている。
二人はいつもいがみ合っているが、優菜に何かあればいの一番に駆けつけて手を差し伸べるだろう。

「だからこそこの仕事は慎重にならざるを得ない」

優菜に手を出して、当麻が持つ『上条勢力』と優菜が持つ『上条勢力』が出てきては勝ち目は零である。
学園都市に七人しかいないレベル５全員と敵対することになるのである。
それはこの街に住む人間なら、どれほど絶望的な状況か直ぐ理解できるはずである。

「ならば、もう暫くの猶予を与えよう。だが、必ず遂行したまえ」

それだけ彼女に手を出すのは危険、そう土御門は何度も報告していた。
報告していたが、アレイスターが言う事は常に一つであった。

『上条優菜を暗部組織に取り入れろ』

どれほどデメリットが大きいか報告しても、アレイスターは全く態

度を変えなかった。
優菜が暗部組織に入るのは確定事項、そう言いたげな態度である。

「……なぁ、なんでお前はそこまで彼女にこだわるんだ？」

だからこそ土御門は疑問に思っていた。
見方によっては焦っているようにも見えるアレイスターの態度が。

「確かに彼女の能力は稀有過ぎて、首輪をつけたいのは分かる。治癒というのは教会世界では神の奇跡だからな」

魔術にも回復系統の魔術は存在する。
だが回復魔術と一口に言っても宗派・法則・術式は様々である。
風邪薬を出して骨折を治せ、という事が不可能なように、使う相手に対して適切な術式を使用する必要がある。

だが彼女が有する能力は違う。
まるでゲームのように呪文を唱えたら最適な治療が行われるように、彼女は相手に触れるだけで適切な治療を行う。
現代科学を持ってしても不可能と言われた病気の完治を行い、物理的に破壊された脳細胞を再生させたのである。
それは聖書にある『主の奇跡』と同一視出来るレベルなのである。

「あのまま聖カトリーヌ女学院にいたら、間違いなくローマ正教に連れて行かれただろう。だからお前は外から招き入れたんだろう？」

優菜が元いた聖カトリーヌ女学院は、ローマ正教の教育を行なっている。
彼女自身は敬虔なローマ正教のシスターという雰囲気はない。
洗礼を受けた様子もない。だが、それでもローマ正教の教育を受け

ているのである。
もし彼女の力をローマ正教が知れば、どんな手を使ってでも彼女を学園都市から奪い取ろうと考えるだろう。

それは、科学世界と教会世界の戦争を意味しているのである。

それを避けるためか、アレイスターは一度流れた優菜に関する情報を徹底的に抹消していった。
情報を持っていると思われた研究所や研究員は悉く『処分』され、書庫には偽のデータで記録している。
更に複雑な暗号を施して、容易に見る事が出来ない状態という徹底ぶりである。
優菜自身にも緘口令をしいているので、現在の学園都市で彼女の能力を知る人間は極限られている。

「ふむ、そういう考え方もあるな」

「ほざけ、お前が名指しで指定するなんて数えるぐらいだろう。それなりの理由があるのだろう？」

「君には理解出来ないさ」

結局のところ、アレイスターが答える事は一つである。
君に教えるつもりはない、そう土御門に言っているのである。

「雑談も構わないがそろそろ仕事の話をしよう」

「チッ、今度は何だ」

「この人間を排除したまえ。手段は問わない」

アレイスターの声と同時に、空中にモニターが一つ表示される。
そこには排除する人間の顔と名前が映し出されいた。
映しだされている画面を見て、土御門は声を失った。
それは排除する人間が彼のよく見知った人間だったからである。
（何故だ……お前は一体何を考えているんだ）
アレイスターの意図が分からぬ土御門は、ただ無言でモニターを見る事しか出来なかった。
結局、土御門は疑問を口にする事が出来ず、追い出されるような形で窓のないビルを後にした。
「まーた、いつもの呼び出し？」
「……ああ」
窓のないビルを出て少しした後、結標は土御門に話しかける。
「どんな小言を言われているかしらないけど、そう落ち込まないほうがいいわよー」
「……」
結標なりに慰めてみるが、土御門には聞こえていないのかずっと空を見上げているだけだった。

ため息を吐きつつ適当に首を横に振ると、結標はこの場を後にしようとした。

「待て、結標。この後予定はあるか？」

「……その面をコルクでぶち抜かれたい？」

土御門の言葉に壮絶な勘違いをしている結標であったが、土御門は気にせず言葉を続ける。

「……仕事だ」

「そう、それならもう案内人の仕事はないわよ。最も、早く帰って寝たいけどね」

「すぐ終わるにゃ～。そんなに心配するにゃ～」

そう言うと土御門はポケットから携帯電話を取り出す。

かける相手は一方通行と海原。要件は暗部組織『グループ』の集合である。

「所で結標に聞きたいことがあるんだがにゃ～」

二人に召集命令をし終えた土御門は、ニヤリと笑いながら結標に話しかける。

「何よ、言っとくけど変な事を聞いたら、その瞬間にコンクリート内に転送してあげるから」

「十四歳の少年の写真が手に入ったんだが……いるかにゃ～？」

その瞬間、結標の眼の色が変わった。

「よこせ」

シンプルな言葉だった。ただこの言葉を聞いた土御門は背筋に悪寒が走った。

空気も数度下がったような感覚を味わう。

（だ、大丈夫かにゃ～？）

結標の急な変わり様に少しだけビビった土御門だが、ポケットから写真を取り出す。

「さってどんな……顔……し……」

結標は写真を自分の手元に転送した。

そして期待を胸に写真を見る。

だがその瞬間、結標は笑顔のまま凍りついた。

「名前はステイル＝マグヌス、れっきとした十四歳だにゃ～」

写真に写っている人物、それはステイル＝マグヌスであった。

タバコを咥えていかにも人が悪そうな顔をしている。

明らかに結標の好みから逸脱していた。

「ふ」

「ど、どうしたにゃ～？」

写真を持っている結標の手がぷるぷると震え始めた。

「ふふふふふ、あはははははは」

（こ、これはヤバいにゃ～。ちょっとショタコンのレベルをなめてたぜい）

脱兎の如く逃げ出した土御門。

「土御門ぉ……コ・ロ・ス」

写真を破り捨てると、結標は逃げ出した土御門を追いかける。

土御門は思った。ショタコンをからかうと命がいくつあっても足りないと。

「集まったな？」

いつものように、ゴミ収集車に偽装した車両に『グループ』全員が集まっていた。

が、一つだけいつもと違っていた。

「「……」」

一方通行と海原は、土御門と結標を交互に見る。

土御門は全身包帯でグルグル巻きになっていた。どこからどう見ても重病人である。

対して結標は険悪な顔をしていた。明らかに不機嫌なオーラが漂っている。

（土御門さんが結標さんをからかったんですね）

（ショタコンをからかったンですねェ……）

瞬時にして二人は同じ答えにたどり着いた。

「さて、今回の仕事はちょ～～っと厄介だにゃ～」

そう言うとポケットから一枚の写真を取り出す。

「この子を学園都市から排除するにゃ～」

写真をテーブルに置こうとしたが……その前に結標が自分の手元へテレポートしていた。

「さっきのような事はしてないんだがにゃ～？」

「……当たり前よ、もし同じ様な事をしたらその程度では済まないわよ」

ギロリと土御門を睨む結標の眼光は、死線を潜り抜けた土御門ですら恐ろしかった。

改めて思った。この女は本物（変態）だと。

「なーに、この子まだ幼いじゃないー。学園都市も随分と酷い事を言うわねー」

そう言って写真をテーブルに置く。
一方通行と海原が、写真を覗き込むと同時に土御門が口を開く。

「ターゲットの名前は、アリシア・フォン・コルネリウスだにゃ～」

コルネリウス家

アリシア・フォン・コルネリウス。
優菜を追って聖カトリーヌ女学院より学園都市に来た少女。
その少女は、能力測定で無能力者（レベル０）を言い渡された。

他と違うのは、当麻と同じく文字通りの『無』能力者である。

最初からその事を理解していたのか、アリシアは能力開発で使用する錠剤も粉薬も服用しなかった。
ある人物が尋ねると「超能力なんぞより、姉上と共にいる事が重要だ」と語った。
小萌がいくら能力開発の補習を行おうと、一度として態度が変わる事はなかった。

それほど優菜を慕ってやって来た少女に、学園都市は排除を命令したのである。

ダンッ！と一方通行がテーブルを叩く。
その音に驚く海原と結標だが、一方通行は気にせず土御門を睨む。

「一体どういう事だァ……」

今にも襲い掛かりそうな勢いで、一方通行は土御門に質問を投げかける。
優菜にお熱をあげている点を除けば、アリシアの素行は特に悪くない。
むしろお嬢様教育を受けている点で他より幾分良いぐらいである。
家事スキルが壊滅的にダメな点もあるが、それすらも学園都市から

排除される理由にならない。

「俺の家の住人を狙う理由はなンですかァ？」

そしてなにより、アリシアは一方通行の家に住んでいる。

インデックスや打ち止めとも仲が良く、傍からみると姉妹のように見える。

時間的には短いが、アリシアは既に一方通行の家にとってなくてはならない人間なのである。

「理由は……」

「ちょっと待ってください」

土御門が理由を口にしようとしたが、それを遮るように海原が言葉を発する。

発言者・海原に全員の視線が集まる。

「土御門さん、今コルネリウスと言いましたよね？」

「ああ、言ったぞ」

土御門はやっぱりか、とでも言いたげな顔で海原の質問に答える。

ターゲットの名前を上げた時、海原が必ず質問することを予想していた雰囲気である。

「笑えない冗談のつもりなら、今のうちに撤回をお願いします」

「……」

いつも温和な顔をしている海原が、この時ばかりは真剣な顔をして土御門を見ていた。
その様子に結標は勿論、一方通行すら訝しげに思っていた。

「土御門さん。貴方なら分かるでしょう、自分が何を言ったのか……」

「ああ……分かっているよ。そして残念だが冗談でもない」

「……そうですか」

ため息を一つ吐くと、海原は突然立ち上がった。
そして無言のまま車両から出ていこうとする。

「どこへ行く」

出ていこうとする海原を止めるかのように、土御門は海原の背中に向かって声をかける。
だが、その声量に力強さは感じられなかった。

「残念ですが僕はこの仕事から外させていただきます。僕は土御門さんと違い自殺志願者ではありませんから」

背中越しに土御門の問いに対して答える海原の姿に、結標は疑問を抱いた。

「どういう事よ？」

「何、至極簡単なことですよ」

海原は普段の顔で結標を見る。

「成功率零パーセントの仕事を、誰が引き受けると思うのです？」

だが、抑揚のない平べったい声で答えを口にした。

成功率零パーセント、確実に成功しない仕事とはっきり言い切った。

言い方によっては一方通行という、学園都市最強がいても確実に失敗すると言っているのだ。

「……ちょっと待て。どういう事ですかァ？」

取り方によっては侮辱されている事にもなるが、一方通行は怒りよりも先に疑問が浮かんできた。

何故、海原は仕事が成功不可能と断言できたのか。

何故、土御門は最初から海原がそういう態度を取る事を予測していたのか。

「海原、座れ。一方通行も結標もお前の態度に疑問を持っている」

「そうですね。確かに僕と土御門さんぐらいしかコルネリウス家の事を理解していないでしょう」

そう言うと、海原はさっきまで座っていた位置に戻る。

海原が座ったのを確認すると、土御門は全員を見渡しながら言葉を発する。

「以前言ったと思うが、この世界には学園都市の超能力とは別に教会が持つ『神秘』という力がある」

「あのオカルトチックな言い方した……魔術……だったかしら？」

結標の言葉に土御門は無言で頷く。

「ハッ、随分とメルヘンチックな力があるンだな」

「超能力と違う原理の力がないと言い切れるか？」

オカルト的な発言に、一方通行は胡散臭い顔をしていたが、土御門の問いに答えることが出来なかった。

「現に海原はそうだ。詳しい理屈の説明は省くが、海原は他人とすり替わる事が出来るスキルを持っている」

「スキルではなく魔術ですがね」

海原は細かい突っ込みをしたが、土御門は無視して話をすすめる。

「まぁ信じられないのも無理はない。ようは超能力とは別の力が存在すると思えばいい。その力を持つのが教会世界だ」

「で、その教会世界が何だって言うの？」

いい加減答えを言って欲しい、結標の態度から土御門はそう読み取った。

「ターゲットであるアリシア・フォン・コルネリウス。彼女の家系であるコルネリウス家は教会世界でも独自に進化を遂げた一族なんだよ」

写真をトントンと叩きながら、土御門は結標の問いに答える。

「現在の魔術師の五割近くは、数十年前にいた『とある魔術師』の影響を受けている」

「ですがコルネリウス家はその影響を一切受けていない……ですね」

海原の補足に、土御門は無言で頷く。

「そしてコルネリウス家の力は、一言で言うと『説明できない力』だ」

「何それ？」

酷くあやふやな土御門の言葉に、結標は素っ頓狂な声を上げる。

「学園都市で言うと、レベル５第七位に該当する。どういう原理で何が起こっているか全然わかっていないんだよ」

「じゃあ使う前に叩けばいいんじゃないの？」

使う前に叩け、至って分かりやすい対処法である。

結標が言うことは最もだろう。

「出来るか？　範囲も方向も分からない様な力を使わせずに対処出来るか？」

しかしそれは説明や理解の出来る前提での話だ。

分からなければ、何をどう対策すればいいのか全く思いつかないのである。

「うっ……確かに無理そうね」

土御門の剣幕に押されて、結標は素直に謝った。
最も、普通に考えれば当然の結果ではあるが。

「確かにどンな不思議な力の源があっても、それが理解できるンなら対策は立てられる。銃と同じように使ってくれれば、銃と同じ様に防げばいいンだからなァ」

一方通行の言葉に土御門は頷く。

「一方通行の言うとおりだ。説明や理解できる動作など一切せず、曖昧で本当に存在しているかも分からない力を使ってくるんだ。だからこそコルネリウス家は教会世界で１５００年もの間、単一家系で生き延びてきたんだ」

「１５００年間……」

言葉にすれば簡単だが、１５００年という長き日を生き延びたコルネリウス家である。
その力を想像するしかない結標と一方通行だが、かなり強大な力である事は感じ取っていた。

「分かるか？　どこか大きな組織の加護があったわけでもない。文字通り単一家系で……」

「コルネリウスの名を冠する人間だけで生き延びてきた……よねぇ？」

土御門が最後まで言い切る前に、横合いから見知らぬ声が飛んできた。
その場にいる全員が慌てて声のする方に視線を向ける。

「誰もいない？」

だが声がした場所には、誰もいなかった。
しかし確かに声はしたので、周囲の警戒だけは怠らなかった。

「この声……まさか！」

「土御門さん、出来ればこっちの方が冗談であって欲しかったです」

土御門と海原は、体に嫌な汗が流れているのを感じていた。

「冷たいわね、アステカの魔術師」

その声と共に、水面を引き裂くかのように声がした場所から一人の少女が姿を現す。

「アクゼリュス……！」

「久しいわね、イギリス清教の魔術師。他は……学園都市の超能力者か」

夜の魔女と呼ばれるアクゼリュスが、突如として土御門のいる車両に姿を現した。
銀色に輝く髪と深紅の双眸。白い肌とゴスロリ服を着ていた。
ただ土御門が前回会った時に着ていた、黒に近い灰色のゴスロリ服ではなかった。

漆黒のゴスロリ服と、奇妙な文様を書いた暗い赤色の帯のようなものを体に巻きつけていた。

「さっきの現象は何だっていうのよ……」

「……」

一方通行と結標はアクゼリュスの雰囲気から、単なる少女でない事を理解していた。

ちょっとでも気を抜けば、そのまま飲み込まれそうな雰囲気をヒシヒシと感じ取っていた。

「何の用だ？　オレはお前に用なんざないぜ」

「コルネリウス家に手を出すようだからね、警告しにきてあげただけよ」

「警告？」

アクゼリュスの言葉を訝しむ土御門。

対してアクゼリュスは土御門を楽しそうな笑みを浮かべながら見ていた。

「そうよ。見ているだけでも良かったんだけど、こんな雑魚だと面白そうに思えなかったからね。多少の情報を提供してバランスを整えようと思っただけよ」

「……相変わらずいい趣味をしているな」

土御門は吐き捨てるように言う。

アクゼリュスは常に自分が楽しめるために行動を取る。
その為なら、さっきまで手を貸していた相手だろうが平気で裏切る。

「雑魚って……言ってくれるわね」

「おもしれェ……そンなに言うなら楽しませてくれるンだろうなァ？」

プライドを傷つけられて怒りを覚えた二人。
一方通行はチョーカーのスイッチを入れ、結標は軍事用ライトを手に持つ。

「褒めても何も出ないわよ。アリシアは力を使うと、次の攻撃に移るまでに多少のタイムラグが発生するわ。その隙をつけるかどうかが鍵よ、イギリス清教の魔術師」

だが、獰猛な殺気を放つ二人に対して、アクゼリュスは全く意に介していなかった。
完全に眼中に無いという態度である。初めから彼女は土御門しか見ていなかった。

「ご丁寧にどうもだぜ」

二人が激怒している事に気付いていたが、土御門は止めることなど出来なかった。
一瞬でも気を抜けば、次の瞬間にはひき肉にされている予感がしていた。

「オーケーオーケー、オマエの皮膚の五割を剥いでやる。それでもまだ生きてたら許してやるよ」

「……」

二人とも完璧に無視されたことに、更に怒りを募らせたようである。結標に至っては、怒りで声すら出せないほどである。

「せいぜい面白い戦いをして私を楽しませて頂戴ね。期待に応えられたら何かご褒美をあげるわよ？」

「結構だ……」

その言葉が合図だった。一方通行は一気にアクゼリュスまで踏み込み、その顔を掴んで叩きつけようとした。

「そうそう、さっき『説明できない力』の説明をしていたけど、あれじゃピンと来ないわよ」

一方通行の手がアクゼリュスの顔に触れる直前、そんな言葉を一方通行は耳にした。

アクゼリュスを掴んだと思った一方通行だが、気付いたら吹き飛ばされていた。

一方通行だけではない。

軍用ライトを構えていた結標、

大人しく話を聞いていた海原、

ずっとアクゼリュスに意識を向けていた土御門、

その場にいる全員が、気付いた時には大きく吹き飛ばされていたのである。

「これが『説明できない力』の一つよ。経験すると分かるでしょう？」

車両は内側から粉々に吹き飛ばされていた。
運転席に座っていた人間は既に人の形をしておらずひき肉状態であった。
全ての破壊の中心に、アクゼリュスは一人立っていた。

コツコツとブーツの音をならしながら、アクゼリュスは吹き飛ばされた車両を下りる。

「待てよ……」

その場を立ち去ろうとしたアクゼリュスを、辛うじて意識がある一方通行が呼び止める。

「白い坊やは元気ね。その体から最初に倒れると思っていたわ」

一方通行の方へは振り返らず返事をするアクゼリュス。

「残りの三人のように、気絶しておいた方が幸せよ。今なら気絶したフリをしても、見逃してあげるわ」

アクゼリュスの言うように、土御門と海原と結標は既に意識がなくなっていた。
暗部として生き抜いてきた三人が、抵抗する間もなく倒されたのである。
この事が何を意味するか、分からない一方通行ではなかった。

「なめンじゃねェ……」

満身創痍な状態の一方通行だった。
足に力が入らず、ガクガクと笑っている。
手に持っている杖で何とか立てている状態。
だが、それでも一方通行はアクゼリュスに立ち向かおうとした。

「白い坊や、勇気と無謀は別よ」

そう言って振り返るアクゼリュス。
ただ、それだけしかしていないのに、一方通行は再び『奇妙な衝撃』を受けていた。

「がっ……！」

衝撃で壁に叩きつけられ、肺に溜まっていた空気が一気に押し出される。

再度『説明できない力』を受けた一方通行は更に困惑していた。

自分の身に何が起きたか全く理解できなかったのである。

どんなに逆算・解析を行おうと、その足がかりすら掴めないのである。
どこかを起点に衝撃が広がったのでもない。
ただ、不自然なダメージが一気に体全体に浸透した。それぐらいしか理解できなかった。
一方通行の姿を見ながら、アクゼリュスはパチンと指を鳴らす。

その音と同時に、土御門たちが意識を取り戻した。

「うぅ……一体何が起きたのよ……」

「生きているって……素晴らしいにゃ～」

「五体満足って素晴らしいです」

満身創痍だが、幸いにも致命傷を負っていなかった三人。

「どう？　これが『説明できない力』というモノよ」

しかし致命傷を負わなかった、という訳ではない。
致命傷を負わない程度に加減された、という方が正しい。

「初心者コース用に、程度の低い力で経験させてあげたわ。多少の怪我で済んでいるはずよ」

「ご丁寧にありがとうだぜい……」

フラフラとしながら立ち上がった土御門。
結標や海原も、土御門の後に続いて立ち上がる。

「白い坊やは連続で経験したから、立ち上がれないかもね」

アクゼリュスの言葉通り、一方通行は意識はあったものの立ち上がる素振りは一切無かった。

「てめェは必ず俺がブッ殺す……」

満身創痍の状態だったが、一方通行はアクゼリュスを睨んでいた。
その姿に、闘志が衰えている様子は一切しない。

「ふ」

ボソリと笑った。

「あはははははははははははは、気に入ったわ。幻想殺しの坊やとまた違った面白い子ね！」

アクゼリュスは一方通行の姿を見て、ただ楽しそうに笑った。
そして突如空間が撓んだかと思うと、ガラスに亀裂が走るかのように空間がひび割れていく。

「いいわ、白い坊や。私を殺しに来なさい。いつでも相手してあげるわよ」

その言葉と同時に一際大きな亀裂が走る。
そして、次の瞬間無数の氷片が舞い散るかのように砕け散った。
砕け散る音と共に、アクゼリュスの姿も消えていった。

「去ったか……」

土御門が呟いた言葉は、一方通行の耳に届いていなかった。
彼は暫くの間、アクゼリュスがいた所をずっと睨んでいたのである。

交差する思惑

奇妙な情報をキャッチしたから報告する、心理定規はそう電話で告げてきた。
訝しげに思った垣根だが、心理定規が嘘や冗談を報告をするような人間ではないと思って大人しく聞く事にした。

「あぁ？　『グループ』が何かきな臭い動きをしているだと？」

コップ片手に、垣根は心理定規からその奇妙な情報の報告を受けていた。

『ええ、そうよ。何かこそこそと動き回っているわ』

「詳細は分かるか？」

当然だがきな臭い動きだけでは判断のしようがない。
詳細を掴んでいるかどうか、垣根は心理定規に確認する。

『今調べているわ。ただ、噂では一人の人間を学園都市から排除するつもりみたい』

「たった一人に何で時間をかけているんだろうな」

暗部組織『グループ』には、一方通行がいる。
ならば、態々一人の人間を排除するぐらいワケがない。
何故、そんなに面倒な事をしているのか、垣根には奇妙に見えてならなかった。

『さぁ？　とにかくここ最近の『グループ』は変ね。何か企んでいるんじゃない？』

「どうかなー。あいつらはこの街に『守りたい人間』がいるからな。よっぽどの事がない限り学園都市に牙を剥かないだろう」

心理定規は『グループ』が裏切るのでは、と推測するが垣根はその推測を一蹴する。

「連中らが『守りたい人間』に何も対策せず動くなんてありえないな。特にロリコンは」

『そぅ……私は第一位と面識が薄いから分からないけど、そんなに大事な人間なの？　第一位にとって』

その質問は最もだった。

普段の一方通行を知らない人間にとって、垣根の言葉はある意味異常とも取れる。

レベル５第一位とは、文字通り学園都市最強なのである。

そんな人物にアキレス腱となるような人間が存在するのかと。

「そうだな。馬鹿が何か危害を加えたとしよう。そいつの未来ははひき肉以外ありえないな」

『凄いわね……』

「まぁ俺もあの先生は嫌いじゃない。こんなクソな俺でも、ちゃんと学生と見てくれるからな」

コップをくるくると回しながら、垣根はニヤリと笑みを浮かべる。

実際、今の学校は楽しくて仕方が無い。

『青春してるわねぇ～』

そんな垣根の声を聞いて、心理定規は少し嫉妬をしながら茶化す。
表の生活と裏の生活をきっちり分け、心の底から表の生活を楽しんでいる垣根が羨ましかった。

「お前も学生をやってみろ。俺の気持ちが分かるぞ？　どうせなら俺が行っている学校にこいよ」

『考えておくわね』

一瞬、ほんの一瞬だけ心理定規は悪くないかも、と考えていた。
だけどそれは無理と同時に思っていた。
何故なら、自分は垣根ほど表と裏をきっちり分ける事が出来ないと考えていたからだ。

「そうか。まぁ期待しないで待っておくよ」

垣根も思う所があるのか、それ以上は何も言わなかった。

アリシアは少しだけ薄暗い道を歩いていた。
時刻は完全下校時刻をとうに過ぎており、辺りは暗闇が支配していた。
普段の彼女は、夜に出歩くことは一切しない。

では、何故彼女が夜に外を出歩いているかというと。

「妾としたことが……禁書目録殿のプリンを食べてしまうとは」

冷蔵庫にあったインデックス用のプリンを、誤って食べてしまったからである。

相当楽しみにしていたのか、インデックスは終始ご立腹であった。

その怒りから逃げるようにアリシアは外に出たのである。

「とりあえずその辺りのコンビニで、同じ物があれば買って帰ろう」

歩くこと十分、適当なコンビニに入りプリンを物色する。

この時、店員からはアリシアが見えてなかった為、突然あいた自動ドアに酷く怯えたようである。

「……あった。これが先ほど食したプリンであろう」

幸いにも同じプリンがあったので、アリシアはカゴにプリンを入れる。

「そうだ、この際だから他の奴らの分も買って帰ろう……打ち止め殿と小萌殿は食べるとして……」

カゴにいくつかの種類のプリンを入れていくアリシア。

「一方通行殿は食べないだろうな……『甘いもンは苦手なンだよ』とか言って」

その様子を想像したのかクスクスとアリシアは笑った。

その後、いくつかの種類を更にカゴに入れていく。

そのままレジまで向かい精算を行う。

「（プリンばっかり……）ありがとうございましたー」

プリンが入った袋を片手に、アリシアはコンビニを後にする。

「ふ～んふん……ん？」

陽気に鼻歌を歌いながら、アリシアは帰宅していた。

だが、ふと見慣れないモノが眼に入る。

「なんじゃ、これは……何々『ここから先、夜間工事中』だと？くっ、コンピニで時間を潰し過ぎたか」

それは夜間工事の案内看板であった。

「仕方ない、この地図に書いている迂回路を使うしか無いか」

その看板には迂回路の地図が貼られていた。

アリシアは特に気にせず、その地図に書かれている迂回路へと歩き出す。

だが、アリシアは気付いていなかった。

工事を行うはずの人間が誰もその場にいないという事に。

「ええい！　遠すぎやしないか！　これではプリンが温まってしまうではないか」

迂回路に入って十分、アリシアは途方にくれていた。
歩いても歩いても普段見慣れた道に戻らないからである。
街灯も少なく、薄暗さが一層不気味に見えてきた。

「十一月とはいえ、氷でも要求しておいた方がよかったかのぅ」

そう言いながら更に歩を進めていく。
が、すぐにその足は止まることとなる。

「隠れてないで出てこい、妾に用があるのだろう？」

アリシアは足を止め、はるか先の暗闇に向かって声をかける。
すると、その闇から一人の男性が姿を現した。

「さすがに貴方の背後は取れませんか」

その男、海原は困ったような笑顔を浮かべながらアリシアの前に立ちはだかる。

「ふむ、妾に何のようだ？　ナンパならお断りだぞ」

「単刀直入にいいましょう。申し訳ありませんが学園都市から出ていってもらえないでしょうか」

冗談を飛ばしてみたが、海原は無視して自分の要件だけをアリシアに伝える。
少しだけムッとしたアリシアだが、海原は全く意に介していなかった。

「お断りだ。妾は姉上と共にある。姉上が学園都市にいるのなら妾

もいるのは当然だ」

「どうしても聞き入れてくれませんか？」

海原はアリシアに向かって、殺気を込めながら用件をもう一度述べる。

だが、アリシアの態度は全く変わらなかった。

「くどい、意見を変えるつもりはない」

「……仕方ありません」

そう言うと海原はアリシアに向かって身構える。

交渉決裂、強硬手段に訴えます。

海原の態度から、アリシアはそう読み取っていた。

「なんだ、婦女暴行でもするのか？　言っておくがその時点で大声を上げてやるぞ？」

「声を上げても無駄ですよ。周辺の人払いはすんでいますから」

つまりは既に袋小路状態。だが、それでもアリシアは態度を崩さなかった。

「何やら計画的じゃな。そんなに幼い姿の女人が好きなのか。このド変態め」

「僕はロリコンじゃありません！」

不名誉なレッテルを貼られて、つい声を荒げる海原。

今まで余裕の態度を崩さなかった海原が、急に態度を豹変させた事にアリシアは驚いていた。

（……ムキになっているところがますます怪しいな）

そして何かを思いついたアリシアは、海原を見てニヤリと笑う。
底意地の悪い笑顔を浮かべたアリシアを見て、海原は背筋がゾクッとした。
何か嫌な予感がする、海原は警戒して身構えたが、それは無意味であった。

「なんだ、無自覚か。心配するな、なれが幼女が好きで好きで、ビデオカメラでローアングルを撮り続けてハァハァして、あわよくば鎖に繋いでペットにしたいという願望を抱いても、妾は一向に構わんぞ」

「ちょっと待ってください！　どうして僕はそんな変態性を装備した人になっているんですか!?」

凄まじい変態のレッテルをアリシアから貼られた海原。
さすがにそんな変態ではないと否定したが、ムキになればなるほどアリシアは気を良くしていた。

「じゃあ、妹とメイドが大好きで、でも幼女も好きで、どの部屋にもメイド服とメイドに関する本があって、妾を義理の妹にして鎖に繋いでメイド服を着せたいのだろう？　妾は気にしないぞ」

「何でそんなに変態な人扱いなんですか!?　僕は至ってノーマルですよ!?」

海原は様々な変態性を装備した人という事がアリシアの中で確定したようだ。

「ワガママじゃのぅ。じゃあアレだ、なれは実は男色家で幼い男の子が大好きで毎日小学校を盗撮しては悦に入る人じゃな！　いやぁ妾の貞操は安心じゃなぁー」

「ちょっと!?　今のどこに僕が男色家になる要素があるんですか!?」

「はて？　おかしいな。この国の戦士は基本的に衆道なんじゃろ？」

「いつの時代の話ですか!?」

もはや滅茶苦茶であった。アリシアは愉快に笑いながら海原をからかい続けていた。

「なんじゃ、じゃあやはりそこに隠れている三人の性癖のようじゃな」

「なっ！……気付いていたのですか」

だがアリシアの一言で、再び辺りに緊張感が漂う。

「気付いていないと思っていた理由が知りたい。のぅ、ロリコンのアステカ魔術師」

「……出来ればその名前は止めてください」

その言葉と同時に、暗闇から土御門、一方通行、結標が姿を現す。

「やれやれだにゃ〜、背後を取るのがオレの特技なんだがにゃ〜」

「……」

「本当に小さい子ね」

どうしたものか、とアリシアは思案したが、ふと手にプリンが入った袋を持っている事に気付く。
これを使おう、そう思ったアリシアは視線を一方通行の方へ向ける。

「一方通行殿」

「ン？」

ぐっと握ると、袋を一方通行の方へ投げる。

「プリンだ、帰ったなら禁書目録殿、小萌殿、打ち止め殿にあげてくれ」

「……あァ」

そう言ってアリシアが投げた袋を受け取る一方通行。
と、同時に視界を遮るほどの黒い霧が辺りに吹き荒れた。

「なっ！？」

一瞬にして十センチ先すら見えない状態になる。
その事に一方通行は勿論、海原や土御門、結標も動揺し声を失う。

「まだまだじゃな、油断大敵じゃぞ！」

そう言うと同時に、アリシアの気配が徐々に遠のいていく。
おそらくは逃げている、一方通行はそう判断した。

「クソったれがァ！」

ベクトル操作をして暴風を起こしたが、黒い霧はいっこうに晴れる気配をみせなかった。

それは不思議な現象だった。
まるで存在自体があやふやなものを、強引にこの場に固定しているように見えた。
その証拠に自分の周りにある保護膜は、一切黒い霧に反応していなかったのだ。

アリシアが立ち去ると黒い霧は、最初から存在していなかったかのように霧散した。

「分からねェ。一体何が起きたンだァ。演算は完璧だったはずだァ」

（なのに全く理解できなかった）

苛立ちと焦りからか、一方通行は歯ぎしりをする。
この短期間で彼は『二度の敗北』を経験した。
アクゼリュス然り、アリシア然り。
あの黒い霧に毒が含まれていたら、一方通行は反射する事が出来ず命を落としたであろう。

「クソがァ！」

手に持っているプリンが入った袋を地面に叩きつける。
叩きつけた勢いで、容器が砕け散り中身が地面に撒き散らされる。

「俺はあのクソガキを追いかける」

そして一方通行は走りだす。
傷つけられた最強というプライドを取り戻すために。

揺るぎない信念

一方通行たちから逃げたアリシアは、夜の街をひたすら走っていた。
普段の彼女からは想像もつかないほど、走るスピードは速かった。

（さって……どこに逃げるかのぅ。姉上には迷惑をかけられないな）

走りながらアリシアはどこに逃げるかを考えていた。
勿論、一方通行の家にはもう戻れない。
かといって優菜の所に逃げこむのも出来ない。
無関係な優菜を自分の都合だけで巻き込みたくないからである。

（困ったな。ホテルとかだと、すぐに居場所がバレるだろう）

ホテルとかに逃げる事も考えたが、現実的ではないとすぐに却下する。
もし学園都市が自分を狙っているなら、すぐに居場所は特定される。
持ち合わせも少ないので、無駄な浪費は極力避けるべきと考えていた。

（とりあえずあの鉄橋を渡ろう。今はとにかく逃げの一手だな）

目の前に見える鉄橋に向かって、アリシアは更に加速する。
あれだけ走り続けているのに、彼女の顔には疲労の色が一切見えなかった。

「こんな事なら飲み物ぐらい買っておくべきだったな」

夜の鉄橋を走り抜けながら、アリシアは呑気に呟いた。

（この鉄橋を渡ったら、少し休憩して今後を考えよう）

鉄橋を半分ほど渡った辺りで、アリシアは今後どうするかを再び考えだす。

だが、彼女の考えを遮るかのように上から声が投げかけられる。

「見つけたぜェ！」

空から何かが急下降してきたかと思うと、アリシアより十五メートルほど先に墜落してきた。

ズドンッ！と大きな音を立てたモノ、それは一方通行が鉄橋に着地した音である。

「そう簡単にはいかない……か」

（ここは第七学区にある鉄橋……どうやらそんなに移動出来てなかったようだ）

そう呟くアリシアだが、その顔はどこか楽しそうな笑みを浮かべていた。

「……奇妙だ」

「何がだ？」

アリシアの逃げる道を塞ぐかのように、一方通行は立っていた。

だが、すぐに仕掛ける様子はなく、ただアリシアを見据えていた。

「お前といい、優菜といい……お嬢様の癖に荒事に慣れすぎている

ンだよ」

優菜はまだいい。
武術や軍事訓練の知識を身につけているし、彼女は基本的に冷静だからだ。
だが、アリシアまでが同じだと別だ。
ただのお嬢様にしか見えないアリシアまでが、荒事に対して冷静に判断をしている。
その事が一方通行には奇妙に見えていた。

「その事か。一方通行殿はお嬢様がただ守られるだけの存在だと思っていたのか？　漫画か何かの見過ぎだな」

「……」

アリシアに言われて一方通行は初めて気付く。
お嬢様という言葉に、何か固定したイメージを持っていたかもしれない、と。

「例えばだ。護衛が全てやられて一人だけとなった場合、頼れるのは自分の身だけだ。そんな状態でただ怯えているだけでは生存出来ないぞ」

「なるほどなァ……」

つまり、一人でも荒事をくぐり抜けるだけの知識と技術を身につけているという事。
お嬢様学校というからか、本当に『お上品な事』だけを教育しているだけと一方通行は勘違いしていたのだ。

「その辺りが普通のお嬢様学校と違う点だな。まぁだからこそあの学校は信頼が高いというわけだが」

「ハッ、随分と危険な事まで教えるンだな」

「当然だ。特にお嬢様というのは身代金目当ての拉致が多い。そんな現場に出会って思考停止してるだけでは助からない」

「生兵法は怪我のもと……と思うがな」

ニヤリと笑いながら、一方通行はそんな事を口ずさむ。

「学園都市最強の頭脳と言う割に、随分と頭が悪い事を言うのだな」

「何だと？」

だがそんな一方通行を見て、アリシアはため息を吐いた。

「荒事を片付けるだけの技術なぞ誰でも身につけられる。本当の目的は『冷静に判断できる能力』を身につける事だからな」

「……」

「どんな強大な力を持とうと、それを行使する知能がなければ無意味だ。銃を持っていても、扱い方が分からなければ無用の長物になるだろう？　それと同じだ」

「ふン……なるほどな。優菜の冷静さもその辺りの教育のおかげか」

ならば納得出来ると一方通行は思った。

荒事だろうが何だろうが、優菜は常に冷静に判断を下していた。
どこでそんな技術を身につけたのかと思っていたが、何てことはない。
前の学校で、ずっとそんな訓練を受けていたのだ。

「姉上は別格だ。聖カトリーヌ女学院で常にトップだったからな。
姉上は本当の意味で天才だ」

「そうかァ……ま、優菜はどうでもいい。どうせお前は二度とあえなくなるンだからな」

ゆらりと一方通行が身構える。
アリシアはこの場をどうやって切り抜けるか、冷静に考えていた。
出来れば一方通行を傷つけたくない。曲がりなりにも同じ家に住んでいたのである。
簡単に割り切れるほど、アリシアは冷徹に徹する事が出来なかった。

「悪いが……お前を排除させて貰う」

「仕方ない、妾が悪役に徹しよう。では、こう言ってやる。やってみろ、井の中の蛙……とな」

その瞬間、アリシアの雰囲気がガラリと変わる。
一方通行は重圧を感じながら思った。これがアリシアの本当の姿なのだと。

「何をしているのです。二人とも」

聞きようによっては冷徹な声が、突然一方通行の背後から飛んできた。

アリシアも一方通行も、声がした方を振り向く。
そこには。

「姉上！」

「優菜……なンでお前がここにいる」

一方通行より十メートルほど離れた所に、優菜が立っていた。
普段と違うのは、その手に長物の棒を持っている事である。

「……どうしてです。二人は何故争っているのですか」

少しだけ目を細めながら、優菜は一方通行に問いかける。
対して、一方通行はその問いに答える事は出来なかった。

「姉上！　妾なら平気だから逃げてくれ！」

アリシアは優菜に向かって大声で叫ぶ。
だが、優菜にはアリシアの声が微塵も響いていなかった。

「……それを本気で言っているのですか？」

「あ、姉上……」

それどころか、アリシアに対して怒りの色を滲ませていた。
普段の優菜を知るアリシアですら、見たことがないほどだった。

「アリシア……貴方を見捨てて逃げるぐらいなら、私はここで朽ちる事を選びます！」

そこでアリシアは気付く。優菜は先程の会話を全て聞いていたのだと。
今まで秘密にしていた自分の事は、全て知られてしまったと。

「お前には関係ねェ……とっとと尻尾巻いて逃げろ」

優菜と諍いを起こしたくない一方通行は、殺気を込めて優菜を退かせようとする。

「逆に問いましょう。私が一方通行さん、アリシアが小萌先生。そして一方通行さんが勝てない敵という状況で……貴方は逃げますか？」

だがその程度で逃げる優菜ではなかった。

「それが答えです。貴方が何故アリシアを狙っているかは分からない。ですが、私はアリシアの姉です、この子に危害を加える人間は例え誰であろうと許しません」

棒を構えて、一方通行と対峙する優菜。

「闘うしかないのか」

「貴方がひかないのなら、それしかありません」

優菜の雰囲気、その眼光に一切の迷いは見えなかった。
彼女は恐ろしいほどに、冷静に一方通行を敵としてみていた。

ここまで割り切れるものなのか、と一方通行は内心驚いていた。
だが、ここまで来た以上は、自分も引く事が不可能と判断した。

「……おもしれェ……第一位の実力を見せてやンよ」

「アリシア……下がっていなさい」

身構える一方通行に、優菜も呼応するかのように棒を構える。

「姉上……でも」

「下がりなさい」

何かいおうとしたが、優菜の強い口調にアリシアは口をつむぐ。

ゆっくりとだが、一方通行から距離をとりはじめる。

「一言断っておくが、そいつは俺と対等に闘ってるンだぜ」

下がっていくアリシアを背に感じながら、一方通行は優菜に語りかける。

第一位と対等に闘う、その意味を理解させて拳をひかそうと思った。

「……それが何か？」

「何だと？」

だが優菜は微塵も態度を変えなかった。

「アリシアが何かを秘密にしているのは知っています。ですが、それがなんだというのです？　姉である私はその秘密ごと包んであげるのが役目です」

優菜の目には既に一方通行しか映っていない。
この場にいる『敵』を倒し、アリシアを救い出す。
それが自分の取るべき道と信じて。

「例え私がアリシアより弱くても、それが逃げる理由にはなりません。妹を守ってこその姉です」

「チッ……」

一方通行は自分でも理由が分からない事で、イライラとしていた。
初めは単にこの状況にイラついていたと思っていたが、今の言葉を聞いて答えにたどり着く。

優菜を見ていると、一方通行はある人物を思い出すからである。

（優菜の姿は三下とダブって見える……）

それは当麻である。
優菜は当麻と違い、現実的な思考が出来る。
だから、覆す事が不可能な状況を理解させれば手を引くと考えていた。
だがそれは一方通行の誤りであった。

優菜もまた上条の血を引き継いでいる。
例え無理と言われようと、絶望的な状況になろうと最後まで諦めない。
どんな時でもへし折れない真っ直ぐな信念がある。

「では……いざ、参る」

そして学園都市第一位と第六位、両者は激突する。

「えぇ～、何よそれ」

携帯の相手が依頼した仕事に、沈利は素っ頓狂な声を上げる。
だが今回の仕事内容が意味不明なのは、どうやら電話相手も同様だった。

『だから～私も知らないだってこのやろう～』

「はぁー、めんどくさいわねぇ。まぁいいわ」

『ワガママいうな、ちゃんと仕事しやがれ～』

「はいはい」

めんどくさそうに返事をして、沈利は通話を切る。
すると、今まで黙っていた理后たちが一斉に沈利に質問を投げかける。

「しずり、何だって？」

「よく分からないけど、指定の場所まで移動しろってさ」

今回の仕事内容、それは単に指定された場所まで移動するだけである。
単にそれだけでいいという、今までにない仕事内容であった。

「超意味が分かりません……」

それは最愛や理后やフレンダも同様であった。
移動して終わり、というだけなら楽な仕事だが、暗部の仕事がその程度で終わるはずがない。
そう四人は考えていた。

「それは私もよ。初めての仕事内容じゃないかしら」

「単に移動したら終わりって訳？」

フレンダの疑問に、沈利は首を縦に振って答える。

「臭いわね。な～にを企んでいるのかしら？」

電話相手も理解出来ていない仕事を要求された理由が分からない。
声から察するに、電話相手は演技ではないと考えていた。
恐らく電話相手が一番困惑していると沈利は思っていた。

「ま、移動するしか無いわね。さっさと行きましょう」

「場所はどこですか？」

最愛の疑問に、沈利は先ほど転送された仕事メールを確認する。
メールに移動場所の詳細が書かれていたので、メール内容をそのまま口に出す。

「第七学区に流れる川を跨ぐ鉄橋よ」

学園都市最強の力

レベル5第一位と第六位。
二人が闘うと聞いた人は必ず同じ答えを口にするだろう。
レベル5第一位が勝つ、と。

第三位と第二位の間には、絶対的に越えられない壁が存在する。
その第二位ですら、第一位との間に絶対的な壁が存在する。
上位三位ですら大きなな壁が存在するのに、それより下の第六位が相手になるはずがない。
そう答えるだろう。

それが大きな間違いである事にも気付かず。

優菜と一方通行は対極的な動きであった。
はっきり言えば、一方通行は特に動く必要もない。
対して、優菜は一方通行の攻撃を避けるために動きまわる必要がある。

しかし未だに決着はついていなかった。
すぐに終わる、そう一方通行は考えていたが見事に裏切られた。
優菜は辛うじて致命傷を避けつつ、一方通行に攻撃をしかけていたのだ。

（天上霊薬を自動で展開してンのかァ？　カスリ傷程度はすぐに回

復してやがる）

更に厄介なのが、自動で展開されていると思わしき天上霊薬である。能力の詳細は一方通行も知らない。ただ回復が可能という点のみである。

だからどんな行動が出来るか殆ど分からない。

しかし優菜は、一方通行の前頭葉治療で一方通行の能力に精通している。

治癒のために一方通行に関する資料を、全て目を通したと言っていた。

演算能力が高い優菜なら、その資料に関するデータを全て記憶していたとしても不思議ではない。

一方通行の能力情報は丸裸、対して優菜は完全なブラックボックス化。

両者の能力情報はまさに対極的であった。

そして一方通行は過激な行動に出れない理由が別にあった。

単純に優菜を傷つけられない。一方通行本人は勿論、小萌、打ち止め、インデックス、アリシア。

一方通行の家に住む人間は、皆優菜を高く信頼し友好を結んでいる。

そんな人間を手にかけることが、一方通行には出来なかった。

結局はほぼ棒立ちで、優菜の攻撃を反射するしかなかった。

「ハッ、土御門がやたらと褒める理由が分かった。本当にお前は戦闘における感覚野が優れている」

「褒めていただきありがとうございます」

実際、今の戦闘が成り立っているのは一方通行が闘いの素人だからである。
どんなに強大な力を使おうと、的確なタイミングが全く分かっていない。
予備動作も大きいので、優菜は一方通行の攻撃を簡単に回避していた。

対して優菜は無拍子と呼ばれる、予備動作が全くない技術で攻撃を繰り出す。
見てからでは予兆が分からない動作なので、一方通行は優菜の攻撃に対して全く反応出来ていない。
だが、その全ての攻撃は一方通行に届くことはなかった。

「だがよ、お前じゃ俺の反射は破れない」

（反射？）

優菜は聞きなれない言葉を耳にする。
幾ら一方通行の能力を資料で読んでいても、細かい情報までは知らないのである。
ただ分かっている事は『あらゆる攻撃が通じない』という点である。

実際それは正しかった。
優菜が幾ら棒術を駆使しようと、理不尽なまでに弾き返されていた。
辛うじて棒が折れないように、不自然な力の流れをコントロールしていたが、それもいつまで持つか分からない。

「そういうわけだ。諦めておねンねしな」

再び一方通行が優菜に接近し、その手で吹き飛ばそうとする。

動作が大きすぎるテレフォンパンチだが、あたれば致命傷に成り得る破壊力を持つ攻撃だ。

「くっ！」

『視力』と『反応速度』を引き上げて、優菜はギリギリのラインで回避する。

（確かに最強の名に相応しい能力です。ですが彼は素人です。こと戦闘においては能力に頼り切った行動に出ています）

再び距離を取った優菜は、一方通行の行動を注意深く見る。
最初から変わらず、一方通行は鉄橋の真ん中に立っていた。

「そんな棒切れ一本でよく持ちこたえられるな」

「一方通行さんこそ、反射とやらで棒切れを破壊しないのですか？」

「お前が反射の時に力を逃がしてるようだからな」

「そうですか、どうやらあの動作に意味はあったようですね」

その風格はまさに王者。学園都市最強の名を体現する姿。
能力に制限が出来たとは言え、タイムオーバーを許すほど一方通行は甘くない。
一方通行のタイムリミットは、逆に優菜にとってもタイムリミットとなっている。
つまり、バッテリーが切れかかった時、一方通行は本気を出して攻撃をしてくるという事だ。
今のような油断や余裕からくる攻撃ではなくなる。

それは、優菜の完全敗北を意味していた。

「何がそこまでお前を駆り立てる」

幾ら攻撃しようと、無意味なのは既に理解しているはずだ。
だが優菜の目から諦めという感情は一切見えない。
その姿に、一方通行は疑問を感じていた。
優菜は当麻のように自分の体を省みない性格ではないと、読んでいたからだ。

「言ったはずです。例え勝てない相手であろうと、それが逃げる理由にはならないと！」

だが、それは一方通行の大きな間違いであった。
優菜もまた上条の名を持つ人間。
大切な人間を守るためなら自らの事を省みないのである。

「……さすが三下と同じ姓を持つ奴だな。ばかだよお前は」

「馬鹿で結構です。私は最後までアリシアを守る。例えこの血が全て無くなろうと、ただの肉片になりさがろうと、最後まで守ると誓ったのです」

つまりはそういう事、と一方通行は思っていた。
当麻も優菜も強さは能力でも何でもない。

どれほど絶望的な状況であろうと、最後まで諦めないという不動の信念。

それこそが上条の姓を持つ者の本当の強さ。

「……その信念、どこまでもつか試してみてやンよ！」

今まで一方通行は優菜を敵として見ていなかった。
能力もそうだが、当麻と違い闘う相手にならないと見下していた。
だが違う、優菜もまた立派な敵なのだ。そう一方通行は考え直した。

そして一方通行は解放する。
無敵の盾だけではなく、強靭な威力を発揮する矛を。

そこから優菜は防戦一方となった。
辛うじて前兆の感知と、一方通行のテレフォンパンチという条件が重なって攻撃を避けられている。
優菜自身が優れた戦闘技術を持っているのも幸いした。

（反射……反射。思い出すのです、一方通行さんの言葉、治療の時に見た能力の資料。何か勝機を掴むモノがあるはずです）

だが防げているだけで、一向に攻撃に転じる事は出来なかった。
避けるだけで手一杯である。たった一つのミスが即敗北に繋がる。

（『最強』ですが『無敵』ではないのです。どんな力でも必ず弱点はあるはずです！）

砂漠の中でたった一粒の光る砂を探すように、優菜は一方通行の弱点を探し始める。

「そんな突きで俺の反射は破れねェよ！」

「ふっ！」

一方通行から繰り出された大ぶりの拳を、優菜は大きく後ろに飛んで避ける。
少しだけ距離をとると、優菜は改めて棒を構える。
だが、一方通行は優菜からある違和感を感じていた。

「……おかしいな。優菜ァ……お前の運動神経が高いのは知ってるンだが、その動きは明らかにおかしい」

先ほどから何度もベクトル操作で動きつづけていた一方通行。
だが、そこから繰り出された攻撃を、優菜は辛うじて避け続けていた。
最初は鍛えあげられた戦闘のカンと思っていたが、それでは説明がつかない点があると一方通行は感じていた。

「そうか、お前の能力はそういう使い方も出来るのか」

「気づきましたか」

そして一方通行は優菜から感じていた違和感の正体に気付く。
それは人間としての基礎能力を底上げしているから、優菜は辛うじて一方通行の攻撃を避けているのだと。

「明らかに反応速度が高すぎるンだよ。俺のベクトル移動についてきているンだからなァ」

「（ベクトル移動……？）人間としての基礎能力、腕力、脚力、耐久力、反応速度、視力、聴力、その他色々な能力を底上げしています」

「そうか、そういう事かァ。俺が入院していた時に馬鹿を倒していたのは……」

「……そうですね。貴方を守るという点もありましたが……それ以外にこの能力の使い方を実践するという目的もありました」

（反射……ベクトル移動……ベクトル……後一つキーワードが欲しい所ですね）

一方通行がチョーカーをつける原因となった打ち止め事件。
その事件後、第七学区のとある病院には一方通行に怨みや、この機に乗じてのし上がろうとする連中が集まった。
ほとんどは『グループ』によって処分されたが、思いのほか数が多かったので少しばかり取りこぼしていた。

だが、そんな幸運な連中が一方通行の元へたどり着くことはなかった。
全ては優菜の手で倒されていったのである。

一方通行は今まで優菜の行動を不思議に思っていたが、ココに来てやっと回答を得ることが出来た。
彼女は単に新しい力の使い方を実験していたのである。

「人体操作……か」

「どうにも治癒の方に目がいってしまったようでしたが……私の能力はあらゆる生命の操作に介入できるようです」

治癒と肉体強化、これほど相性が良い組み合わせはないだろう。

どれほど肉体強化を行おうと、酷使すればやがて肉体の崩壊を招く。
だが、そこに治癒が行えるとしたら？
どれほど酷使しようと、全ては無かった事になる。

それは音速に近い動きをする一方通行の動きに、対応する事も可能という事を意味していた。

「最も、デメリットとして触れなければなりませんが」

「おいおい、そンな情報を教えていいのかよ」

「構いません、逆に言えば貴方は私に触れた時点で負けなのですよ」

触れたら体を乗っ取られる。
それは、一方通行が接近戦で優菜を倒すのが不可能という事を意味する。
どれほど強大な力を振舞おうと、相手に接触する攻撃は全てＮＧなのだ。

「おっと、服の上からなら大丈夫とか思わないほうがいいですよ。
何せ接触出来れば一マイクロあればいいのですから」

それは一方通行に『遠距離攻撃のみ有効』という制限をつけさせる。
優菜から見れば、一方通行の遠距離攻撃のみを警戒すればいいという事である。
接触してしまえば、そこから他人の体を支配すればいい。

（第五位と違い、優菜の場合は反射膜の中で起きる。ここは警戒して行動するべきだな……）

「ふン、俺のベクトル操作で触れずに倒せばいい事だ」

少々尺だがどちらにせよ結果は変わらない。
一方通行は先ほどまで行っていた接近戦をやめ、遠距離攻撃に切り替える事にした。

（ベクトル操作……なるほど、キーワードが揃いました）

優菜が身構えると、一方通行は手に何も持っていないのにボールを投げる動作を行う。

（反射、ベクトル移動、ベクトル操作。そして彼の能力名である一方通行）

「！？」

反射的に危険を察知した優菜は、横にずれて何かを避ける。
そしてその動作は正解であった。
優菜の少し後ろのコンクリートが、まるで隕石でも落ちてきたかのようにクレーターを作ったのである。

「圧縮空気さ。プラズマだと時間がかかるンでな、簡単なもので対応させてもらう」

コキコキと手をならしながら、一方通行は再び優菜の方に向かって圧縮空気を投げつける。
先ほどと違い、眼に見えないものを投げているので、優菜にとっては幾分不利な状況となっていた。

（ベクトルとは向き。そして反射とはそのベクトルの反転。ならば

答えは一つ！）

一方通行の手の動きだけで、優菜は圧縮空気を避けていた。
馬鹿正直に一方通行は直線的な攻撃しかしていなかったのである。
それは見下しているからか、はたまた傷つけたくないという意思からくるものなのか。

（彼はどこかのラインで、能力を使って私の棒の運動量の向きを逆にしている。その言動から見るに無意識下の可能性あり）

少しずつ圧縮空気の数が増えていく。
一つだけだったのが、同時に二つ三つとなっていく。

（逆に考えるなら、意図的に向きを変えているわけではない。そこには必ず穴があるはず！）

そんな眼に見えない攻撃を避けつつ、優菜は一方通行の弱点を探し出す。
そして気付く。ある『穴』がある事に。

（単に向きを変えているだけなら……）

しかし思考しすぎた。一瞬だが優菜は意識を一方通行からそらしてしまった。
時間にして一秒以下だが、それでも致命的なミスであった。

「何をぼさっとしてるのかねェ！」

「しまっ！」

圧縮空気が優菜を遂に捉える。その数は四つ、両足と両手である。
幸いにも棒を手放さなかったが、それでも大きく後ろへ弾き飛ばされた。

「姉上！」

何度か地面に叩きつけられて、ようやく優菜の勢いが止まる。
叩きつけられた場所に生々しい血の跡が出来ていた。

アリシアはボロボロになった優菜を見て足が震えていた。
目の前にいる一方通行が怖いのではない。
優菜をそんな状況にした自分の運命が恐ろしかったのだ。
この世で最も敬愛する姉である優菜を、自分の都合だけで巻き込んでしまったのだ。
それはアリシアの心を引き裂く十分な理由となった。

「さって、終わりだ。次は……」

大分時間を浪費したが、まだチョーカーのバッテリーは半分ほどある。
アリシアと対決するのに十分な時間だ、そう思って視線をアリシアの方に向けた。
だが、アリシアから感じられたのは酷く怯えた子犬のような雰囲気であった。
ガクガクと肩を震えさせ、今にも泣きそうな顔をしていた。

「あ、姉上……すまぬ……すまぬ……」

譫言のように呟くアリシアは、先程まで見せていた獰猛な気配など一切なかった。

ただ今の現状に打ちひしがれるだけであった。

「チッ……」

軽く舌打ちをして、一方通行はその手をアリシアに向けた。

アリシアを連れていけば仕事は終わる、これ以上無駄な争いはしたくない。
一方通行はそう割り切ると、アリシアを捕獲するべく歩み寄る。
対してアリシアはその場から逃げようとせず、ただ自分の体を抱きしめているだけだった。

「……まァいい。お前さえ連れていけば」

「お前さえ連れていけば……なんだ？」

あと少しでアリシアを捕獲できる、そんなタイミングで突然背後から声を投げられた。
慌てて背後を見るが、その場には誰もいなかった。
そして再びアリシアの方に視線を戻すと。

「なっ！？」

その場にいたはずのアリシアが消えていた。

「どこ見てるんだよ、ロリコン。こっちだ」

再び別の場所から声が投げかけられる。

「……なンでメルヘンがここにいる」

一方通行に声をかけたのは、アリシアを抱きかかえて滞空している垣根からだった。

だが、この場にいたのは垣根だけではない。

「なーんか色々と怪しいなとは思っていたが、これはどういう事かなぁ？」

更に別の方向から声が聞こえたので、一方通行はそちらに視線を向ける。

そこには、優菜を庇うように沈利が立っていた。

沈利だけではない。理后とフレンダ、最愛もその場にいた。

「いつまで滞空しているの？　帝督」

滞空している垣根に心理定規が声をかける。

何か言いたげな顔だったが、大人しく地面に降り立った垣根。

「『スクール』と『アイテム』か……なンでここに大集合しているンだァ」

奇妙だった。暗部組織の二つが同時にこの場に集合したのだ。

しかも同タイミングで。

（なンか仕組まれている気がするが……まァいい）

「そのガキを渡してもらおうか、メルヘン。こっちは仕事なンだよ」

暗部の仕事だから手出しするな、そう暗黙的に一方通行は伝える。

「仕事……ねぇ」

だが、垣根は一向に動じていなかった。

それ所か、ニヤニヤとしながら一方通行を見ていた。

「俺はてっきりお前がロリコンをこじらせて、アリシアを襲っているのかと思ってたぜ」

「中々愉快な事を言ってくれるなァ……」

安っぽい挑発だった。

だが、最強のプライドが揺らいでいた一方通行は、安っぽい挑発に簡単に乗ってしまった。

「待つんだにゃ～、一方通行。これ以上は危険だにゃ～」

「そうですね、暗部組織の抗争は避けたい所です」

一方通行が垣根へ襲いかかろうとした時、背後から土御門と海原が現れた。

二人とも困ったような顔をして、鉄橋に起きている状況を見ていた。

「うぅ……」

「優菜っ！？」

まるで示し合わせたかのように、優菜が意識を取り戻す。

沈利は慌てて優菜の前にしゃがんで顔色を確認する。

「沈利……姉さん？　どうしてココに……」

「それはコッチの台詞だ。全く無茶しちゃって」

驚いた顔をして沈利を見ている優菜に、沈利は優しく微笑んで顔を撫でる。

「姉上……」

優菜の近くにアリシアは立っていた。
普段の勝ち気さなど微塵もなく、今にも消え入りそうな雰囲気だった。
彼女がどれほど後悔の念を抱いているか一目瞭然であった。

「アリシア……怪我はありませんか？」

そんなアリシアにかけた言葉はただ一つ。
自身の体よりアリシアの体を気遣う言葉。
目を見開き驚いたアリシアだが、やがて何度も頷く。

「そうですか……ならばよいのです。貴方が気に病む事は一つもありません」

「で、でも」

「言ったはずです。貴方が何を秘密にしていようと、私の取るべき行動は変わりません。私は貴方の姉なのですから」

「姉上……」

戸惑いと困惑を浮かべていたアリシアだが、やがて小さく微笑んだ。
アリシアは優菜に何も語っていない。秘密にしている事は山ほどある。

「私に貴方の秘密を知るべき時が来たなら、その時に分かるのでしょう？　今は無理に語ろうとしなくて良いのです」

だけど優菜はそれを語る必要がないと言い切った。
知るべき時がくれば分かる。口にするのは簡単だ。
だが、相手をよほど信頼していなければ行動は出来ない。
全幅の信頼をアリシアに寄せている優菜のみが、口にすることを許される言葉だ。

「暗部同士の抗争……ねぇ。なら、全く関係ない優菜が何で巻き込まれているのかなぁ？」

そんな二人の様子を横目に、垣根は一方通行たち『グループ』と対峙する。

「……理由は分からねェが、途中から優菜が介入してきたンだよ」

「なら何でその時撤退しなかった？　無関係な人間を巻き込みたくねぇって思うなら引くのが正解だぜ」

垣根の問いに、一方通行は答えることが出来なかった。
その気になれば、一方通行はすぐにでも立ち去ることが可能のはず。
態々対峙する必要はないはずだ、そう垣根は思っていた。

「暗部同士の抗争になるから止めろ？　関係ねえよ！！　カァンケイねェェんだよォォォ！！　人の妹を傷つけておいて今さら拳を下げろって都合のいい事言ってるんじゃねぇ！！」

立ち上がった沈利もまた、優菜を庇うように『グループ』と対峙する。

「麦野の言う通りだぜ。今さら拳を下げろってどの面して言える？」

「……確かに言えないにゃ～。でも、完全な抗争になったらまずいにゃ～」

垣根の言葉に、困ったような笑顔を浮かべながら答える土御門。
しかしそんな言葉で納得出来る二人ではなかった。

「ケッ、まとめて相手してやンよ」

抗争は避けられない。その事を理解した一方通行は二人と対峙する。
土御門も無理と判断したのか、一方通行を止めようとしなかった。
だが三人へ声をかける人物がいた。

「……待ってください」

優菜はふらつきながら立ち上がると棒を持つ。

「私と一方通行さんの闘いはまだ終わっていません」

そして驚くべきことを口にする。
まだ一方通行と決着をつけていない、だからまだ闘う。
その事にアリシアは勿論、周りにいた全員があ然としていた。

「ストーっプ！　優菜お姉ちゃん、何を言っているのよ！」

「ちょっと優菜お姉ちゃん、超危ないですよ！」

「ゆうな、それは無茶」

「姉上！　危険だからやめてくれ！」

理解が追いついた人間から、順次優菜を止めようとする。

だが、その言葉は優菜の耳に届いていなかった。

「武人としての誇りのため、決着がつくまではやめられません」

（これ以上、大切な人たちがいがみ合う姿を見たくないのです……）

一歩ずつ、ゆっくりと優菜は歩き出す。

その姿を見て、沈利は盛大にため息を吐くと、優菜のために道をあける。

「分かったよ、優菜。あんたはそうなると絶対に意思を貫き通すからね」

苦笑しながら優菜を見る沈利。

「盛大にロリコンを倒してこい、優菜」

垣根も首を盛大に左右にふると、ヤレヤレといった感じで優菜に道をあける。

一方通行は勿論、土御門と海原も困惑していた。

「また無意味な闘いを続けるのか。いい加減学習しな」

あきれて物が言えない、そんな態度で一方通行は優菜を見る。
どうあっても勝敗は揺るがない。そう言いたげである。

「土御門さん、お願いがあります」

「……なんだにゃ～？」

だが優菜は一方通行を無視して、後ろにいる土御門に声をかける。

「この諍い、私と一方通行さんの闘いで決着をつけさせてください」

「……」

「この闘いで私が敗れれば、アリシアを連れていって構いません。
逆に私が勝てば……」

そこで優菜は一旦言葉を区切る。
数回の深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着ける。

「アリシアに手を出した理由を教えてください」

状況的に一方通行の勝利は揺るがない。そんな状態で優菜は土御門に交渉を持ちかける。

「ハッ、随分と自信があるんだな」

一方通行は下らないと笑うが、土御門は笑うことが出来なかった。
何も仕掛けや打算もなく、こんな交渉を持ち出さない。
優菜の危険度を一番理解している土御門は、この時点で出てきた交渉に何か意味があると考えていた。

しかしこの交渉に対する答えはＹＥＳと答える以外になかった。
一方通行という学園都市最強が相手だからだ。だからこそ、優菜の言葉は交渉ではない。
優菜の希望通りの答えを確約させる命令である。

（くそ～、これは痛いにゃ～。ここでＮＯといえば確実に立場を悪くする。かと言って優菜ちゃんが何か秘策を持ってるのも気になるにゃ～）

盛大に悩む土御門だが、考える時間はあまり無かった。

「……分かった。その申し出を受け取るにゃ～」

どう転んでも答えはＹＥＳ以外ないとはっきり理解したからである。

「その言葉、嘘偽りはありませんね。では、他の方たちも手出しは無用です」

そう言うと優菜は棒を手に構え、一方通行に向かって走りだす。
砂漠の中でたった一粒の光る砂を手に取るために。

（やはり……特定のタイミングで攻撃が弾き返されています）

あれだけ勢い良く飛び出したが、優菜がやることは先ほどと変わっていなかった。
ただ棒で一方通行に攻撃をするだけ。

（力の向きを逆にする。それは確かに『最強』と呼んでいいでしょう）

だが優菜の中では全く違っていた。
しきりに何かを探すかのように。
あらゆるパターンで、一方通行に攻撃を仕掛けていく。

（ですが無意識でやる事には、自ずと制限が発生します）

（なンだ？　今、一瞬だが反射をすり抜けてきた気がしたぞ）

そして優菜は見つける。一方通行が持つ最大の弱点という名の光る砂を。

「七百三十九回、この数の意味が分かりますか？」

「あン？」

そこに気付けば優菜にとって、一方通行は単なる能力者にしか見えなかった。
学園都市最強でも何でもない。ただベクトルが操作出来る『程度』の存在だと。

「貴方に攻撃した回数です」

優菜は心も体も最大の力を発揮出来るように集中する。
この攻撃が失敗すれば次はない。そう思い自らを背水の陣へと追い込む。

（この攻撃が失敗すれば、恐らく体が限界を超えて立てなくなるでしょう。私は次の攻撃に全てを賭けます）

精神を集中し、持てる全ての力を操作する。
幸いにも一方通行は、ただ黙ってみているだけであった。

「いきます」

ポツリと呟くと、優菜は一方通行に向かって攻撃を繰り出す。
さっきと変わらないと誰もが思った。

「がっ……いっ……！」

だが優菜が繰り出した攻撃は、遂に一方通行の体を捉える。
左肩に強烈な打撃を食らった一方通行は、激痛の余り悶え苦しむ。

（な、なンでだ！　何故！！　反射をどうやって突き破ったァ！？）

「がァァァァ！」

痛みのあまり声を荒げながら片膝をつく。

（優菜ァ！　お前は何をしたンだァ！？）

（本当の弱点はチョーカーですが、それは私の武人としてのプライドが許しません）

片膝をついた一方通行に、優菜は手を緩めなかった。

「かはっ！……」

反射がなければ、一方通行に優菜の攻撃を避ける事は不可能だ。

（だから……『もう一つの弱点』で倒させていただきます）

トドメと言わんばかりの一撃必殺の突き。
それは優菜が持てる最高のタイミングで繰り出せた。

一方通行には全く見えていなかった。
気付いたら攻撃を食らい、ただ無様に吹き飛ばされていた。
何度か地面を転がると、そのまま倒れ伏した。
起き上がってくる気配は全くない。
一方通行は攻撃を貰った時点で、完全に意識を手放していたのだ。

「勝負あり……ですね」

今宵、第七学区のとある鉄橋の上で起きた第一位と第六位の戦闘。
その結果は、第六位の勝利という学園都市を揺るがす結果で幕を閉じた。

最後の勝者

その場にいる全員が言葉を失った。
この結末を誰が予想できたであろう。
地面に倒れ伏した一方通行。
フラフラになりながらも、自らの足で立っている優菜。

とある十一月の夜に起きた、レベル5同士の戦闘。
それは第一位の敗北という結末で幕を閉じた。

肩で息をしながら、優菜は一方通行を見ていた。
もし一方通行が立ち上がれば、地面に倒れ伏すのは自分だからである。
土御門が一方通行に歩み寄ると、様子を確認する。
少しして首を横に振る。

「完全にのびている。文句のつけようのないぐらい一方通行の敗北だにゃ～」

そして一方通行の敗北を宣言する。
その言葉に安心した優菜は、一つ大きく息を吐き出した。

「っ！？」

気を抜いた瞬間、身体中の筋肉に激痛が走り、関節が音を立て骨がバラバラになるかのような痛みが優菜に襲いかかる。
苦悶の声を上げると、優菜の意識はそのまま遠のいていった。

「優菜！」

優菜が地面に倒れ伏す音を聞いて、理解が追いついた沈利が駆け出す。
慌てて抱き起すが、優菜は完全に意識を失っていた。
どうやら天上霊薬を発動させる前に、体が意識を手放したようである。

「理后、救急車だ！　とりあえず電話を頼む！」

「しずり、了解だよ」

沈利や理后が、慌てながらも優菜を助けようと動き出す。

「これか、こんな棒で勝利を勝ちとったのか」

優菜を沈利たちに任せた垣根は、優菜が持っていた棒を拾う。
じっくり観察してみるが、その辺に売っているような代物にしか見えなかった。

「帝督、どうして勝ったか分かる？」

どうやって一方通行の反射を打ち破ったか、心理定規は垣根に質問をした。

「わからん、さっぱりだ」

だが垣根は心理定規の質問に答える事が出来なかった。
簡単にへし折れそうな棒で、学園都市の誰もが行えなかった事を成しとげた。
一方通行を破るのは自分と思っていた垣根だけに、少しだけショッ

クを受けていた。
しかしそれ以上に楽しさも感じていた。

（面白れぇ……優菜がコッチに来てから退屈しねぇな。あんないい女はいないぜ）

垣根が面白いと思っていた事の大半は優菜がそばにいた。
風紀委員の手伝い然り、今回のこの件然り。
優菜の近くにいると全く退屈しなかった。

ほどなくして救急車が到着。
一方通行と優菜を乗せると、そのまま病院まで搬送されていった。

「さって、土御門。ちょーっと聞きたいんだけどさー」

「い、いやぁ、オレはちょっと用事が……」

傍目から見ても怒り心頭の沈利たちに、土御門はただ怯えているだけだった。
何故なら、前回もこんな沈利たちにボコボコにされたからである。
彼は少しだけトラウマになっていた。

「海原っ！　ってあの野郎、先に逃げやがったにゃ～！」

海原を犠牲にして逃げようとした土御門だが、残念ながら海原には読まれていた。
既にその場から立ち去っていた。

「土御門、ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

その言葉を聞く前に、土御門は全速力で走っていた。

「待てやコラァ！！」

逃げる土御門を全速力で追いかける『アイテム』の面々。

（なんか最近不幸だにゃ～！）

捕まったら最後、そんなデッドレースが開始された。

「な、なんか凄い状態だが、妾はどうすればいいんだ」

ようやく理解が追いついたアリシアだが、今後の事について途方に暮れる。

「とりあえずロリコンの家に戻っとけ。事情を知らない連中が心配するだろう？」

垣根は優菜が持っていた棒を持つと、アリシアの悩みにアドバイスを送る。

「あの様子じゃ、ロリコンも土御門も何もしないだろう」

「……分かった。世話になったな、垣根殿」

そう言うと、アリシアは一方通行の家に向かって走りだす。

コンビニに出かけてから随分と時間はたっている。

これ以上遅いと、周りの人間に居らぬ心配をかけると思った。

「ロリコンが何か言ってきたら、小萌先生に助けてもらえ！」

「あぁ！」

走りだしているアリシアに、垣根は更にアドバイスを送る。
この時のアドバイスが、一方通行を不幸のどん底に落とす事になるとは垣根も思わなかっただろう。
そう、何故か「女性を殴った」という事だけが小萌の耳に入り、一週間口を聞いてくれないという不幸が。

「さて、俺たちも帰るか」

「そうね。中々楽しい物が見れたわね」

垣根と心理定規も鉄橋を後にする。

『グループ』も『スクール』も『アイテム』も気付いていなかった。
何故、その場に結標がいなかったのか。
そして優菜を乗せた救急車が向かった方角に、病院など存在しないという事に。

「うぅ……ここは……？」

鉄橋で気を失った優菜は、暫くして意識を取り戻す。
だが、目覚めた場所は病院ではなかった。

「ふむ、ようやく目を覚ましたか」

優菜は窓のないビルの中に連れて行かれていたのだ。
結標がいなかったのはその為。案内人としての仕事で、窓のないビル前に待機していたのである。
優菜はふらふらしながらも、天上霊薬を使い体の痛みをなくす。

「……貴方は？」

「私か。私は学園都市総括理事長をやっているものだ」

改めて目の前にいる『人間』を見る。
薄暗いが広大な空間の中央に、巨大なビーカーが鎮座していた。
そしてその『人間』はビーカーの中に、緑色の手術衣をきて逆さに浮いていた。

「貴方が、学園都市の最大権力者」

「そういう解釈もあるな」

その姿は男性にも女性にも、大人にも子供にも見えた。
優菜はじっとアレイスターを見る。

「警戒しているのかね？　気にする必要はない。別に君へ危害を加えるつもりはない」

その声は男にも女にも聞こえ、大人にも子供にも聞こえた。

「ええ、警戒しています。目が覚めたら見知らぬ場所、そして貴方

のような人が目の前にいて、警戒しないほうがおかしいと思いませんか？」

実際、優菜は目の前にいる『人間』を学園都市総括理事長と思っていなかった。

明らかにイカれた人間を見るかのような視線で、アレイスターを見る。

「ふ」

だがアレイスターは怒るどころか笑っていた。

アレイスターは優菜の態度を非常に好ましい物と思っているかのように、ただ淡く笑った。

「ここに来た人間は皆、私の在り方を観察して、皆同じ反応をするのだが……君は違うようだな」

過去にここを訪れた土御門にしろステイルにしろ、皆同じ反応をしていた。

「貴方には貴方なりの考えがあるのでしょう？　ならば私が驚いても意味はないと思いますよ、学園都市総括理事長様」

「率直な意見をありがとう」

「そもそも私を呼んだ理由は何ですか？　いくらレベル５の肩書きがあるとはいえ、総括理事長様とお会いできる権利など有していないと思っていますが？」

皮肉めいた言葉も効果がないと分かると、優菜は率直な意見を述べ

る。
何故、自分をここに連れてきたか。
「第一位に勝利して、気持ちが高ぶっているのかね」
「！……見ていたのですか」
一方通行との闘いを指摘され、優菜は幾分動揺した。
「……なるほど、第一位という最強を倒されたので都合が悪いという事ですか」
そして連れてこられた理由を思い至る。
学園都市最強と言われた第一位を、第六位が打ち破ったのだ。
それが例え偶然と言えども。
ならば、その結果を考えて先に手をうとうとするのは至極当然だと思った。
「先ほども言ったが君に危害を加えるつもりはない」
だがアレイスターは優菜の考えを一蹴する。
「むしろ私は君を高く評価している。あの状況で第一位を破ったのだから」
学園都市レベル5第一位が敗れたというのに、アレイスターは酷く楽しそうに笑っていた。
「……あれは勝利と言えないでしょう。次に闘ったら間違いなく私の敗北でしょうね」

そんなアレイスターを訝しげに思いながらも、優菜は自嘲気味に笑う。

「だが君は勝利を得た。それは間違えようのない事実だ」

淡々とアレイスターは語る。

まるで第一位の敗北が、この上なく嬉しいようにすら見えた。

「君との雑談は楽しいが、そろそろ本題に入らせてもらおう」

闇の奥へ堕とされる第六位

本題、つまり第一位との戦闘でもない。
何か本当に、優菜と話す事があるという事だ。
態々ここまで準備をするのは何故。
そんな思いが優菜にはあった。

「どうぞ」

「勿論今から話す事は秘密にしてもらおう。誰かに喋れば君は勿論、話した相手も保証は出来ない」

つまり今から話す内容は、決して表沙汰に出来るような内容ではない。

「……わかりました」

きな臭い話にしか見えなくても、話を聞く以外の選択肢は優菜に用意されていない。
ここがどこで、どの様な場所かも分からないうちに相手の機嫌を損ねるのはよくないと思った。

「アリシア・フォン・コルネリウス。先ほど第一位が襲っていた子だが、あの子の排除は私が命令した」

さらっと、まるでいつものような雰囲気でアレイスターは、アリシアの排除を命令したと言った。
優菜は怒りを覚えたが、辛うじて押さえ込めることが出来た。
そうしなければ、何かが終わる。そう感じていた。

「この世界には科学世界の他に、もう一つ別の世界が存在している」

アレイスターは怒りに耐えて言葉を聞く優菜をみて、薄く笑っていた。

「そして二つの世界は常に対立しあっている。現在はそれぞれの技術を独占しているから、大きな対立は発生していない」

「勿体ぶらないで、はっきり言ってください」

遠まわしに語るアレイスターに、優菜は発言を遮るかのように言った。

「ふむ、細かい説明と思ったがお気に召さなかったかな？」

「……アリシアは違う世界の住人だから、科学世界に属する学園都市に置いておくわけにはいかない。そう申したいのでしょう」

科学世界とか違う世界など優菜には興味が一切わかなかった。

知りたいのはアリシアの今後のみ。

彼女がどう扱われるかが、優菜にとって最優先事項にあたるのだ。

「考えてみたまえ。もし、彼女が学園都市にいるのをその世界が知ってしまったらどうなるか。門外不出の技術がそこから『漏れてしまうかもしれない』と思われる」

「……」

「それは互いに疑心暗鬼となり、最後には科学世界とその世界で戦

争が勃発する」

何となくだがアレイスターの言葉を優菜は理解していた。
例えるならダムに出来た小さな傷が、やがてダムを破壊する亀裂になるのと同じだ。
優菜やアリシアが単に姉妹だから一緒にいたいと思っても、それが万国共通になるとは考えられない。

「そうなれば多くの犠牲者が出て、罪の無い子供たちが巻き添えを食らう。それは、とても悲しいことなのだよ」

戯言を、と優菜は思った。
目の前の人間は、決して博愛など持ち合わせていない。
ただ己の目的のためなら、何でも利用する。
そんな人間だと優菜は思っていた。

「私が土御門たちを使って彼女を排除しようとした理由が分かってもらえたかな？」

「……貴方の立場で考えれば理解は出来ます。個人的に納得出来るかは別ですが……」

納得など出来るはずはない。でも、優菜は頭のどこかで理解していた。
学園都市総括理事長の立場で言えば、この選択肢は正しいことなのだと。
アリシアが普通に立ち去る事などありえない。
ならば強制的に排除する選択肢しか、学園都市にはないのだと。
驚くほど冷静な自分に嫌気を覚える。

「悲観することはない。私は君にひとつの案を提示しよう」

「……案？」

アレイスターは薄く笑うと、優菜に対して『プラン通りの言葉』を語る。

「君には土御門と同じように、ある組織に所属して私の手伝いをして欲しい」

「……」

「もし君の返事が私の期待通りなら、アリシア・フォン・コルネリウスの安全は確約しよう」

優菜の身柄を学園都市に委ねる代わりに、アリシアの安全は保証する。

「その程度の勧誘に、学園都市総括理事長様から直々とは……少しだけ驚いています」

実際、単なる暗部組織の勧誘である。

その程度なのに、アレイスターは直接交渉を持ちかけてきた。

ある意味異常である。

「補充の聞く連中では君の素晴らしさは理解出来ないさ」

優菜自身すら気付いていない所に、アレイスターはかなり興味を持っていた。

「君自身も少しは感じているだろう。学園都市の力と君が持っている力、何かしらのズレがあるという事が」

「……」

その事は優菜も気付いていた。決定的におかしいと感じたのは十月である。

それまで治癒ぐらいしか使えなかった。なのに能力が取り戻ってからは格段に変わっていた。

治癒は勿論、肉体操作に肉体支配。

「君は接触できた人間の体を操作出来る。それは、体外から人間の生命活動を操作しているようなものだ」

「……かもしれません」

特に肉体支配はかなり異質と優菜自身も思っていた。

相手の体を乗っ取れるのである。洗脳とは違う、文字通り本当に乗っ取りを行えるのである。

その気になれば相手の心臓活動を意図的に停止する事も出来るだろう。

「脳を支配すれば、君は仮想的に二重能力者（ダブルスキル）になれる」

「……」

「その力を応用すれば、相手の演算能力を底上げする事も可能かもしれない」

支配下においた人間の演算能力を底上げする。

超能力者の演算能力が加算される事で、演算能力を爆発的にアップさせれる可能性が出てくる。

「私が君に重要な関心を抱いている理由を理解してもらえたかね」

「……わかりました。替えの効かない実験体ですからね、私は」

能力が稀有なら、利用方法も稀有だった。だから、学園都市としては手放したくない。

恐らくアリシアと共に学園都市を去ると言っても受け入れられる事はないだろう。

学園都市が欲しいのは優菜の『能力』なのだから。

「組織に所属し学園都市総括理事長様のお手伝いをする。その申し出をお受けいたします。ですから……」

そこで優菜はアレイスターに対して、敵意の篭った眼光を向ける。

「再びアリシアに手を出したなら、私は貴方を許しません」

一切の迷いも躊躇いもなく、優菜はアレイスターにはっきり宣言する。

次にアリシアに手を出せば持てる全ての力を使ってでもアレイスターに牙を剥く。

それは学園都市レベル5全員の離反を意味していた。

優菜自身がそこまで分かっていたとは思えない。だが、彼女はたった一人でも闘うだろう。

自らを犠牲にしてまで守ろうとしたアリシアのために。

「肝に銘じておこう」

だが、それでもアレイスターは淡々と答えた。

「やはり君は素晴らしい人間だ。出来れば、今後も私と雑談をして欲しいものだ」

「ご期待に添えれるようにします、学園都市総括理事長様」

アレイスターは優菜との会話を楽しんでいる。

どんな敵意を向けられようと、アレイスターにとっては露程も感情が動かないようだ。

「これから宜しく頼むよ、上条優菜」

薄く笑うと、アレイスターはそう言葉を口にした。

「どうやらあの女を手に入れる為に、色々と手を回したようね」

窓のないビルから上空三千メートルに、アクゼリュスは滞空していた。

眼下には学園都市が見えていた。

常人にはもはや米粒程度の存在しか見えない。
それでも彼女は全てを『見て』いた。

「ふん、あの人間め。いちいちやることが姑息すぎる」

少しだけ不愉快な顔をしながら、アクゼリュスは吐き捨てるように言う。
アリシアと一方通行の闘いが、思いの外つまらなかったのも彼女が不愉快になっている原因であろう。

「しかしあの女にこだわるののは何故だ？　調べてみる価値はあるか……」

しかしそれ以上にアレイスターが優菜にこだわっているのを疑問視した。
ざっと見た感じでは、単なる学園都市のレベル5程度だ。
何か大きな秘密を隠している可能性もある。

アクゼリュスは闇の中にその身を溶かしながら呟く。

「次こそは楽しい事になってほしいわね」

もう一人の守るべき存在

垣根は手に持っていた携帯を握り締める。
ビキリッと携帯のフレームにヒビが入る音がした。
電話の向こうから悲鳴が聞こえたが、垣根には全く聞こえていなかった。

「……そうか」

搾り出すように言葉を口にすると、相手の返事を待たずに電話を切る。
パキャッと砕け散るような音を立てて、垣根は持っていた携帯を握り潰す。
垣根自身でも持て余している、ドロドロした感情をモノにぶつけたようである。

「帝督、どうしたの？」

ただならぬ様子に、さすがの心理定規も少し怯えながら尋ねる。
垣根は基本的に喜怒哀楽を顔に出すタイプだが、今のように静かな怒りを見せるのは稀だ。

「友人が一人、暗部に堕ちた」

垣根はそれだけ言うと、また口を閉ざす。

「そぅ……」

その様子に心理定規も、それ以上声をかけるのを躊躇わせた。

垣根が友人と口にする相手は、基本的に表の住人だ。
その友人が暗部という学園都市の闇に堕ちたという事は、垣根にとって内心穏やかになれるはずはない。

「どうやら『スクール』に入るようだ。アレイスターが直々に指名してきた」

「随分と大げさね？」

暗部組織はいくつか存在するが、基本的に電話相手が上司に当たる。
直接アレイスターから指令を受ける組織もある。
だが、人事について直接アレイスターが関わったのは、垣根が知る限り初めてである。

「俺も理由は分からん。アレイスターが何を企んでいるかは分からんが……」

（もう一人、守るべき存在が出来てしまったな……）

少しだけ考えてみたが、やはりアレイスターの思惑は垣根には理解できなかった。

「帝督？」

心配そうに声をかけてくる心理定規に、垣根ははっとなると頭を何度かふる。

「いや、何でもない」

（恐らくアリシアがアキレス腱なのだろうな、優菜は……）

彼女のためなら己を犠牲にしても守る。
どれほど自分が傷つこうと、アリシアが無事ならそれでよい。
その姿は、どんな損得勘定にも揺るがない愚直なまでの信念にも見えた。

だからこそ優菜はアリシアを護る為に、暗部へと身を堕としたのだろう。

「そういやぁ土御門からの呼び出しがあったんだ。ちょっと行ってくる」

土御門の呼び出しを思い出した垣根は、立ち上がると手をひらひらと振りながら出て行く。

「行ってらっしゃい」

背中に心理定規の声を聞きながら、垣根は部屋を後にした。

（優菜を見ていれば分かる。アリシアのためならアイツは平気で自分の両手を汚すだろうと）

少し歩いた後、垣根は改めて優菜の事を考える。
そして想像する。優菜が自らの心を殺してでもアリシアを守り続ける姿を。
それは垣根にとって言いようのない気持ちにさせるに、十分な想像であった。

（だけどよ、それは俺がさせねぇ）

感情を消し、学園都市にとって都合の悪い人間をひたすら殺し続ける。
機械のような正確さで、優菜は仕事をする事が出来るだろう。
だが、彼女の心が引き裂かれ続けていくのを垣根は間近で見る事になる。

（例えエゴだと言われても、アイツに人を殺すなんて事をさせるか）

垣根にとって、それは自分の心を傷つけられる事より恐ろしかった。

改めて誓う。
優菜も心理定規も必ずこの腐りきった闇の世界から救い出す。
いつか表の住人に戻れたとき、彼女たちに穢れが限りなく無いように。
二人が両手を汚さないように。

心理定規と優菜、二人を学園都市の闇から必ず守ってみせると。
たとえ、それで己の身に破滅を招く事になろうと。

「全員揃ったか」

廃ビルに集合した垣根と沈利、一方通行を見て土御門はそう言った。

「コンな所で何を話そうってンだァ？」

「もう一回ボコボコにされたいなら、希望を叶えてあげるわ」

沈利と一方通行は、揃って不満を口にする。
誰も使っていない廃ビルに、暗部組織のトップが三人も集まっているのだ。
何か重大な話があるという事については、その場にいる全員が理解していた。
それも学園都市には内密で。

「知っていると思うが、優菜ちゃんが暗部組織に入ることになった」

土御門の言葉に、全員が押し黙る。
この場にいる人間に、誰よりも安らぎを与えてくれた優菜。
彼女に最も似つかわしくない、汚れきった学園都市の闇。
そんな世界に、彼女は足を踏み入れる。

「表向きは暗部組織に関わったからという話になっているが……」

一度だけ土御門は全員に視線を向ける。
皆、同じ顔をしていた。暗部組織に関わらせたのは自分、そう言いたげな顔であった。
そして土御門は言葉を口にする。その考えは誤りであるという言葉を。

「残念ながらそれは嘘だ。優菜ちゃんの暗部組織入りは十月には既に決定済みだった」

その言葉に全員が土御門の方に視線を向ける。

「おいおい、ちょっと待て。優菜の暗部組織入りは……」

「表向き上は秘密を知ったから消されるか仲間になるかの二択。そしてそれはアリシアちゃんも同様……」

辛うじて言葉を口に出来た垣根が、土御門に言葉の真意を尋ねる。

土御門は垣根の問いに答えず、暗部組織に流れている情報を口にする。

「そこで優菜ちゃんが持ちかけた提案は、自分が全てを引き受けるからアリシアちゃんには今まで通りの生活をさせろ。で、学園都市はこれを受け入れた」

「……それが違うっていうのか？」

沈利の言葉に土御門は無言で頷く。

「当然だにゃ～。何せ十月には優菜ちゃんを暗部組織に取り入れろという仕事を貰っていたからにゃ～」

全員が絶句した。土御門の話が正しければ、自分たちの事などまるで関係ない。

もしあの場で優菜が暗部組織に関わらなくても、最後には必ず暗部組織に取り入れられていたのだ。

「ちょっと待て。既に一ヶ月以上はたってンぞ。なンで今ごろその仕事を実行したンだ」

今は十一月、十月より既に一ヶ月以上は立っている。

優菜の事を考えるなら、仕事は早めのほうがよい。

何故なら、彼女は知らず知らずのうちに多くの友人を作るからだ。

レベル5は第一位から第五位まで、当麻にインデックスに打ち止め、黒子に初春に佐天と。
まだ二ヶ月しかいない優菜だが、友好関係は破竹の勢いで出来ていった。
それは一種の勢力図が出来たと言ってもいいぐらいに。

「仕事なんてやる気はなかったにゃ～。だから、ず～～っと理由をつけて仕事をサボっていたにゃ～」

それを知っていたからこそ、土御門は時間が立てば立つほどアレイスターにとって不利になる。
そう読んで仕事を行わなかった。

「だけど総括理事長は痺れを切らしたようだ。オレが実行しないと分かると、自らが手を下したようだ」

「随分と大げさだな……優菜一人を引き入れる理由が俺にはさっぱり分からん」

「それはオレも一緒だにゃ～。しかし引き入れられたのは仕方ない。そこでオレから提案がある」

そう言うと土御門は真剣な顔をして三人を見る。

「優菜ちゃんに関してだけだが、協定を組まないかという提案だ」

「「「協定？」」」

三人が揃って声を上げる。

「そ、協定。暗部で優菜ちゃんに何かあれば、オレは『グループ』を動かして彼女を手助けするぜ」

それは暗部組織での横繋がりを意味する。
今まで単独で存在し続けた暗部組織が、ココに来て手を取り合って動くという事だ。

「そして『スクール』と『アイテム』にもどうかという提案だ。無論、断っても構わない」

二人を試すような感じで、土御門は垣根と沈利を見ていた。
明らかに答えが分かっている、そんな雰囲気であった。

「断る理由はねぇ。あの子に何かあればあたしだって助けるさ。あの子は私の家族なんだから」

「へっ、お前ら揃いもそろって甘いぜ。暗部組織にしては激甘だ」

「そういう『スクール』はどうなんだ？」

「俺か？　俺はそんな激甘が嫌いじゃねぇってだけだ」

「なら協定成立だな。優菜ちゃんに関してだけは『グループ』と『スクール』と『アイテム』は共同で事に当たる」

土御門が宣言をする。優菜に関して暗部組織は合同で動く事を。
学園都市が知れば必ず介入してくるだろう。だが、それでも四人は守りたいのだ。
腐りきった自分たちに安らぎを与えてくれる優菜の笑顔を。

「アレイスターが動くって事は、優菜の能力はなンか秘密があるンですかねェ……」

「治癒がレア過ぎるだけじゃないのー？」

アレイスターが動いたことに、若干の疑問をいだいた一方通行。
沈利が適当に答えるが、一方通行は首を横に振るだけだった。

「戦っている最中にアイツはこう言った」

『人間としての基礎能力、腕力、脚力、耐久力、反応速度、視力、聴力、その他色々な能力を底上げしています』

「つまり肉体強化系の使い方も出来るらしい」

肉体強化と治癒、という二種類の使い方が可能という事になる。

「なんというか……それが本当なら優菜の能力がイマイチ分からなくなってきたな？」

どちらも肉体系能力に分類されている事ではなる。
だが肉体再生と肉体強化という、取り方によっては二種類の能力が優菜には備わっている事になる。

（もし発言が本当なら、優菜ちゃんは聖人クラスの力を自在に出せれるって事かにゃ～？）

話を聞いていた土御門は、あの晩に一方通行と闘っていた優菜の動きを思い出していた。
全体的に劣ると見ているが、見知った顔の魔術師と同じと思ってい

た。

（聖人クラスといかなくても、それなりの底上げは可能。そしてそれは能力が使えている間に維持できる）

神裂のような力を発揮できなくても、神裂には出来ない事が優菜には出来る。

（肉体が持たなくても、治癒で治していける。最適な底上げが分かれば、それを基本とすればいいにゃ～）

聖人の力は暴走しそうになるが、優菜にはそれが発生しない。
そして体を痛めても、彼女にはそれを回復する術がある。

どちらがよいかは状況によるが、聖人にはいくつかの弱点がある事を土御門は知っていた。
神の子に連なる強力な力と引き換えに、処刑・刺殺に弱いという弱点が。

だが優菜にとってはどちらも弱点になりえない。その点が聖人と大きく違う所である。

（……改めて御使堕しの時居なくて助かったにゃ～。ねーちんクラスのパンチとか……死ねるにゃ～）

一方通行の話によれば、十月の時点でその事に気付いていたとの事。
それから彼女がただだらけているとは思えない。
きっと見えない所で恐ろしいほどの修練を積んでいたのだろう。

（一撃で倒れる自信があるにゃ～。一方通行と闘っていた時も、辛

うじて見えたレベルだしにゃ～）

他の肉体強化系と違って、優菜はその力をただ振るうだけではない。
極限まで合理化し、無駄なパワーを出さずに一撃を繰り出す。

例えるなら、白兵戦で神裂と闘うようなもの。
神裂に届かなくても、七、八割の神裂と闘えと言われるのと同じだ。

（それに神裂と違うのは、優菜ちゃんの万華鏡のような思考だにゃ～）

神裂は性格が生真面目なので、行動がかなり読みやすい。
だが、優菜は万華鏡のように変幻自在で不確定な思考を繰り出してくる。
だから先が読みにくい。
読めたと思ったら、それは彼女がそういう思考に持っていくように仕組んでいたと気付かされる。
まさに万華鏡なのだ。

（怖い怖い、可能なかぎり彼女を怒らせないようにしないとにゃ～）

改て優菜の恐ろしさを理解した土御門であった。
そして三人の方に視線を向けると、ニヤリと笑いながら言葉を呟く。

「なら、今から協定発動だにゃ～」

冗談ですよね？　フレンダさん

「む～」

フレンダは自分に割り当てられた棚を見ながら唸っていた。

「そろそろサバ缶が少なくなってきた……」

そこには多種多様のサバ缶が並んでいた。
ざっと二十個近くあったが、彼女にとってはそれが少なく見えるらしい。

「いつもはちゃんと補充しているのに、今回は仕事が多くて買い忘れてた」

フレンダは学校に行っておらずもっぱら家に居座っていた。
ニートのように見えるが、ちゃんとした理由がある。
暗部組織に恨みを持つ人間が、上条家に忍び込まない保証はない。
勿論、沈利たちの居住場所は極秘扱いであり、学園都市でも一握りの人間しか知らない。
それでも用心しようと思い、フレンダが家を警備していた。
なので買い物は家族の誰かが帰宅しなければ、家を出ることは出来ない。
フレンダも一人で外出などは滅多にしない。

「こうなったら！」

こういう時、フレンダはいつも誰かを連れて買い物に出かけていた。
その人物とは……。

「というわけで、当麻お兄ちゃんは付き合う訳よ」

当麻を連れてサバ缶購入をしようと考えたフレンダであった。

「何がとういわけなんだよ、フレンダ」

帰宅直後に意味のわからないことを言われて、少々困惑している当麻。

だがフレンダはそんな当麻を無視して、更に用件を述べる。

「当麻お兄ちゃんは私とデート、サバ缶購入ツアーに出かける。OK？」

「ちょっと待て！　お前この前も買ってなかったか！」

少し前も同じ様な買い物に付き合わされた当麻は、あの時のサバ缶の数を思い出す。

どう考えてもひとりで食べるにはかなり時間がかかるものと思っていた。

「いいじゃない、妹の可愛い頼みじゃなーい」

「色気も何もないがな……まぁいいか」

ため息を吐きながら、当麻はフレンダの買い物に付き合うことにした。

「やった」

とても嬉しいのかフレンダはニコニコしながら当麻を見ていた。
なんとなくだが当麻は思った。毎回、この笑顔に騙されて付き合ってる気がするなぁと。
だけどフレンダの笑顔は嫌いじゃない。だから、つい付き合うんだよな。
妹に甘い事を自覚していない当麻は、そう思いながら自分の部屋に移動する。

「準備するからちょっと待ってろ」

「はーい」

元気よく返事すると、フレンダは玄関まで向かった。

当麻とフレンダはショッピングモールへやって来ていた。

「なぁフレンダさんや」

「な～に、当麻お兄ちゃん」

フレンダはニコニコ、当麻は少しだけ顔を赤くしながら頬をかいていた。

「手を繋ぐ必要があるのか？　上条さんは恥ずかしいんだが」

顔が紅い理由、それは当麻とフレンダが手を繋いでいるからである。
理后のように恋人つなぎはしていないが、それでも当麻的に恥ずかしいようである。

「当麻お兄ちゃんは人ごみになると必ずはぐれる。なら、手を繋いでいる方が安心って訳よ」

「言い返せないところが悔しい！」

本当の理由はただ手を繋ぎたいだけだが、それっぽい理由をつけてフレンダは当麻の質問に答える。
しかし自覚があったのか、当麻は片手で頭を抱えて唸っていた。

「結局さ、当麻お兄ちゃんは私と手とつなぐ以外ないって訳よ」

「まぁ仕方ない。それで何処に行くんだ？」

「適当にスーパー巡り？」

「無計画な……」

「いーの、こういう時は適当に歩くと意外な掘り出し物が見つかるの」

（本当は長時間当麻お兄ちゃんを独り占めする為だけど！）

適当にブラブラと歩いて、サバ缶を探せばいいかなとフレンダは思っていた。

「まぁさくさくっとサバ缶を買うって訳よ」

「へーへー」

そして適当な店に入ってはサバ缶を見る事になった。

「当麻お兄ちゃん、これはどうかな？」

「スーパーゴールド鯖から作った、究極の味噌煮サバ缶。なんだこの怪しさたっぷりな缶詰は」

「ネタ的にいいじゃない」

二軒目に入り、やはり缶詰コーナに一直線の二人。

「あ、これ良さそうじゃない？」

「黄金サバ醤油味……だからなんで黄金をつけるんだよ！」

「サバの見た目が金っぽいからじゃない？」

三軒目。そろそろ当麻は疲れ気味でフレンダを見ていた。
対してフレンダは元気にあれこれサバ缶を見ていた。

「これは……素敵っぽい」

「ハリー　サバ。おい、何味なんだよ！　てーかラベルが『鯖』って文字しかねぇぞ！」

「チャレンジ精神を試されるわね」

四軒目。次々と増えていく缶詰を持つ当麻としては、そろそろ終わりにして欲しい感じであった。
だがフレンダはまだまだ見ていくつもりのようである。

「こっちはどうかな？」

「キーマカレー味のサバ缶。いいのか悪いのか分からんな」

「カレー味と何か違うのかな」

五軒目。当麻がギブアップをしたので、この店で最後となる。

「これ欲しい」

「たけぇ！　缶詰の癖に上条さんの一食分に該当しやがる！」

「んーと、十個でいいかな」

最後の高級サバ缶を十個買って、本日のサバ缶購入ツアーを終了したフレンダであった。

「ほくほくって訳よ」

満足気に歩くフレンダと、フレンダが買ったサバ缶を両手に持つ当麻。
両者は対極的な顔であった。

「缶詰だけで五桁払う奴を初めて見た……」

実際、当麻が払ったわけではないがフレンダの缶詰支払額は五桁に達していた。

当麻にとっては死活問題になる金額だが、フレンダ的には特に気にならないレベルのようである。

ちょっとだけ格差を感じて涙を流した当麻であった。

「サバ缶に対する愛って訳よ、当麻お兄ちゃん」

ケラケラと笑いながら、当麻に語りかけるフレンダ。

だが当麻は、そんなフレンダを見て少しだけ苦い顔をしていた。

「ふーん、俺はサバ缶が嫌いだ」

「なんでってわけよ」

サバ缶が嫌いな当麻にちょっとショックを受けたフレンダだが、次の言葉でそんなショックはどこかへ吹き飛んだ。

「なんとなくフレンダを取られた気持ちになる」

「……むふふ、ヤキモチ？」

当麻にとってはサバ缶にフレンダを取られたと思っているらしい。

その証拠に、当麻はフレンダのサバ缶購入ツアーをあまり長く付き合わない。

他のことなら長く付き合ってくれるが、サバ缶だけはいつも短かった。

どうしてか疑問に思っていたフレンダだが、ココに来て当麻の気持ちがやっと分かった。

単にサバ缶にヤキモチを焼いていただけである。

「まぁな……って俺は何を言ってるんだ！」

今更ながら自分が言った言葉に驚く当麻だが、時既に遅し。

ニヤニヤしながら、フレンダは携帯を片手に当麻を見ていた。

「ふふーん、もう録音しちゃったもんねー」

「いつのまに！　すぐに消しなさいー！」

携帯を奪い取ろうとするが、フレンダは素早く当麻の手の範囲から逃げる。

缶詰を持った当麻では、フレンダの体術には叶わなかった。

「じゃあかわりのボイスを入れてくれたら消してあげる」

「くっ……無難のなら」

今のままでは埒があかない。ならば、フレンダの要求を飲んで消してもらう方がよい。

当麻はそう判断を下すと、フレンダの要求をのむ。

「じゃあ『上条さんは可愛いフレンダが大好きですよ』をお願いね」

「なんという羞恥プレイ！」

「どっちでもいいよー、私は」

「わ、分かった……」

結局、要求を飲む以外ないと分かった当麻は、フレンダの携帯に向かって言葉を発する。

少しだけ顔が紅い当麻だが、羞恥心をぐっと抑える。

「上条さんは可愛いフレンダが大好きですよ」

言い切った、俺は言い切ったぞ！　と自らを鼓舞して羞恥心を忘れ去ろうとする。

だが顔が真っ赤なのは隠しようがなかった。

「……むふふ、おーけーおーけー」

録音ボイスを聞いて満足気に笑うフレンダ。

「じゃあさっきのを消してね」

「消すも何も、最初から録音なんてしてないって訳よ」

「……は？」

呆けた顔をして当麻はフレンダを見る。

よくよく考えたら、そんなにすぐ録音なんて出来るはずがない。

まんまと騙された当麻であった。

「むふふー、当麻お兄ちゃんのラブボイスゲット～」

「け、消しなさい！」

「おっと」

当麻の手の範囲からさっと逃げると、携帯を胸の中にしまいこむフレンダ。

「なっ！　そんな男子が手を突っ込んだら確実にお縄になる場所に隠すなんて！」

「どうする～？　当麻お兄ちゃん」

ちょっとだけ挑発しつつ、フレンダはニヤニヤしながら当麻を見ていた。

「……いいぜ、フレンダがその態度なら……絶対に消してやる！」

「きゃ～、当麻お兄ちゃんがケダモノになった～」

両手を上げてフレンダに襲い掛かろうとした当麻。
そんな当麻を見て、キャーキャー笑いながら逃げるフレンダ。

完全にバカップルのような行動だが、二人は全く気付いていなかった。

「待てや～！　ってサバ缶が重てぇ！　だが俺はフレンダを捕まえてやるぜ！」

「当麻お兄ちゃんには、捕まらないよーだ」

全速力で追いかける当麻に、全速力で逃げるフレンダ。
この後、二人は家につくまでずっと追いかけっこをしたのであった。

進化した美琴さん

「う～」

御坂はあいも変わらず唸る日々を過ごしていた。
悩む日々は続くばかりで、一向に解決が見いだせない。

（素直になれと言われても……どうすればいいのかなぁ）

垣根からも言われた『素直になる』という事が、御坂にはどういう行動か理解できなかった。

何かにつけて照れ隠しを能力で誤魔化していた彼女である。
いきなり素直になれと言われても、一体どういう事が素直なのかさっぱり分からない。
だが、誤魔化しを能力でやれば関係は悪化の一途をたどる。
垣根に叱咤されて初めて気付くほど、彼女は自分の行動を省みていなかった。
ある意味では自分勝手、ある意味では最も素直ではない人物なのである。
そんな人間がすぐに素直になれるか。

「あ、そうだ。あの人ならうまくサポートしてくれるかも……」

答えは否である。結局誰かの助けがなければ彼女は素直になる一歩を踏み出せない。

「よし！」

だがそれでも一歩を踏み出した勇気は賞賛に値するだろう。
それは彼女が精神的成長を成し遂げる為の第一歩だからである。

第七学区にあるファミレスで、優菜と当麻は対面するように座っている。

「さて、当麻。この結果はどういう事ですか？」

「申し訳ございません……」

優菜はテーブルに置かれている紙を何度か指でトントンと叩く。
当麻は萎縮しながら、優菜へ謝罪を口にしていた。

「真っ赤ですね。ええ、真っ赤です。どうしようもないぐらい真っ赤ですね」

内容は当麻の小テストの結果である。呆れるほど赤ペンでバツ印がつけられていた。
そのテストはここ最近の成果を出すテストだったため、優菜が当麻を叱咤するのは当然であった。
仮にもあれだけしっかりと勉強を教えて、この結果では嘆きたくもなる。

「ぐほっ、そ、その辺でご勘弁を」

グサグサと心に言葉が刺さる当麻は、既にライフゼロであった。

「駄目です。貴方は甘やかすとこれ以上無いぐらいつけあがりますので」

「うぅ……まさか記入した回答が一つずつズレているとは……」

この頃は学校の成績もよく、万年補習組からの脱出を果たした当麻である。

青髪ピアスから裏切り者扱いをされたが、貴重な放課後が自由に使える方が幸せだった。

当然ながら優菜からの家庭教師の時間も減らしたかった当麻だが、優菜は頑として減らす事を認めなかった。

結局は小テストを受けて、その結果で考慮するという話を優菜は当麻に持ちかけた。

勿論、結果は惨敗である。そして今に至る。

「安心しなさい、当麻。例えズレていなくても間違っていますから」

「な、なんですとー！」

「この問題は途中の計算式が誤っています。単純な引っ掛けに惑わされていますね」

「なんてこった……」

当麻は気付いていない。テストを作った優菜は学園都市でも一方通行と肩を並べる演算力を持つ事を。

そんな優菜が作ったテストの引っ掛けに、当麻が気付くわけもない。

「以前よりは格段に出来ているのですが……」

「だ、だろう！　上条さんは以前よりは馬鹿と言われないぞ！　補習もだいぶなくなったしな！」

「小萌先生からも聞いています。特定の科目以外は補習の必要が無くなったと」

勿論、そんな引っ掛けだらけのテストを優菜が普段から作るわけもない。

「やれば出来る子なのですよ、上条さんは」

「で、この結果ですか」

「ぐほ」

慢心しかけている当麻への警告で、こんなテストを作ったのである。見事に当麻の慢心を粉砕した優菜だが、さすがにこの結果は予想外であった。

「ふぅ……仕方ありませんね。もう少し宿題を増やしますか」

「そ、それだけはご勘弁を！」

今より宿題の量を二倍にしようとした優菜。

その事に気付いた当麻は、神速と言ってもいいレベルで土下座を展開した。

「……何やってるの？」

そんな見事な土下座をする当麻に、呆れながら声をかける人物がいた。

「ん？　ゲッ！　ビリビリ！」

「人の顔を見てゲッとか言ってはいけません」

御坂の存在に驚いた当麻だが、すぐさま教科書が当麻の頭に振り下ろされる。

見事に角を使って。頭をかかえて悶絶する当麻だが、優菜は完全に放置して御坂の方を向く。

「こんにちわ、御坂さん」

「こんにちはー。相席いいかな？」

「どうぞ、構いませんよ」

当麻が悶え苦しんでいる間に、優菜と御坂は仲良く話し合っていた。

二人に無視された当麻は、恨みがましい目をしながら席に座る。

「えーと、えーと」

御坂はどっちに座るべきか悩んでいた。当麻の隣に座りたいが、恥ずかしくて座れない。

唸っていた御坂だが、やがて優菜が助け舟を出す。

「当麻の隣でお願いします」

「は、はい」

進められたから座ろう。そう自分に言い訳をすると、御坂は当麻の隣りに座る。

少しだけおどおどしながらちょこんと座る御坂に、当麻は何か奇妙なものを見る目で見ていた。

「おい、ビリビ……いてぇ！　上条さんの頭は叩きものじゃありませんよ！」

再び当麻の頭に教科書の角が振り下ろされる。

余りの痛みに苦情を上げる当麻だが、それを無視して優菜は当麻を睨む。

「きちんと名前で呼んであげなさい」

当麻が御坂をビリビリと呼ぶとき、僅かに御坂が悲しい顔をするのを優菜は気付いていた。

機会があればきちんとただす必要がある。その機会が目の前に出来たのだ、優菜がそれを見逃すはずもない。

「そうよ、私には御坂美琴って名前があるの。いい加減覚えてくれないかしら？」

傍目から見れば、どちらが悪いか一目瞭然であった。

当麻的にはぴったりな愛称だと思っていたが、御坂はずっと気に入らなかったようである。

その事に今更ながら気付く。

「うっ！　そーか……そうだな、すまんな。じゃあ、えーと……美

琴？」

御坂妹と区別をつけるため、名前で呼んでみようと思った当麻。
だがそれは別の意味での地雷であった。
瞬間湯沸かし器のように、耳まで一気に真っ赤になった御坂である。
心なしか湯気が出ている気が、当麻にはしていた。

「あれ？　駄目だったかな。じゃあ御坂でいいか？」

「み、みみみみ美琴でいいわよ！！！　か、かかかかわりにアンタもとととととと当麻って呼ぶから！？」

目を回しながらものすごい勢いで捲し立てる御坂を、優菜は何か微笑ましいモノを見る目で見ていた。

「御坂さん、深呼吸ですよ」

「スーハースーハー……うん、落ち着いたわ」

未だに真っ赤な顔をしているが、少しは落ち着いたのか深い息を吐き出していた。
だが、まるで借りてきた猫のように大人しかった。

「と、所で当麻は何をしてたの？」

何とか話題を変えようと、御坂は勇気を振り絞って話題をそらす。
変な奴だな？　と言いたかった当麻だが、何となく教科書の角が落ちてきそうだったので黙ることにした。

「ああ、優菜から家庭教師をしてもらってるんだよ」

「……ちょっと待って。優菜さんって当麻と同学年よね？」

同学年に家庭教師をされるという事に、若干訝しげに思った御坂。

「御坂さん、お察しください」

「……あぁ」

だが、優菜の言葉ですぐに納得できた。

「美琴まで！　何でそれだけで納得されるの！」

「だっていつも『補習だ……不幸だ……』とか言ってなかったかしら？」

たまに遅くに出会った時は、よく補習の帰りという事を御坂は覚えていた。

だから当麻のオツムの出来も、何となくだが理解していた。

優菜の成績を知らない御坂だが、その雰囲気と言動からかなり博識だと思っていた。

「……記憶にございません」

御坂と優菜から視線をそらすと、当麻はポツリと呟く。

「あんたはどっかの政治家か！」

思わず突っ込みをいれる御坂だが、ふとどんな事をしているか気になった。

強引に当麻から課題を奪い取る。ざっと目を通してみたが、特に難しいところは見当たらなかった。

「……ねぇ、何で出来ないの？」

ペンをとると、御坂はスラスラと解いていく。
特に詰まることなく解いていく姿に、当麻は若干顔がひきつっていた。

「……あの、何で解けるの？」

曲がりなりにも当麻は高校生である。
中学生である御坂が何故解けるのか当麻には理解できなかった。

「復習でしょう？　どーして出来ないのよ」

問答無用の一刀両断であった。
当麻は涙を流しながらうな垂れる以外なかった。

「当麻だからです」

紅茶を口に含みながら、優菜は止めをさしにかかる。

「……あー、ゴメンね」

その言葉に納得のいった御坂は、何か可哀想な子を見る目で当麻を見る。
当麻の高校生としてのプライドが完膚なきまで破壊されて瞬間である。

「上条さんのライフはゼロなのに、ここに来て止めを刺すのですね！」

当麻はテーブルに突っ伏して涙を流す。
優菜と御坂は苦笑しながら当麻を見ていた。

それから少しだけ雑談をしていた三人。

「あ、そうだ。二人とも予定があいてればでいいんだけどさ」

だが、ふと御坂が何かを思い出す。
そして二人にある提案を持ちかける。

「明日、常盤台の寮に遊びに来ない？」

常盤台の寮監

「やってまいりました、常盤台の寮」

当麻の眼前には、常盤台中学校の寮が見えていた。
数々のセキュリティをくぐりぬけた者のみが、外部からこの景観を眺めることが出来る。

「青髪ピアスと土御門に話したら殴られた。不幸だ……」

しかし当麻には友人から無駄な恨みを買った憎い建物にしか見えていなかった。
頭を抱えて唸っている当麻を、優菜と御坂は呆れながら見ていた。

「なーに、一人でブツブツ言ってるの？」

「当麻ですから、毎度のことです」

「触れないほうがいいわね」

女性陣からは不評の嵐であった。
それもその筈、寮の入り口で頭を抱えて唸っている男性など好感を持つ理由がない。

「何やら女性二人に散々な事を言われていますが、上条さんは至って普通ですよ！？」

その事に気付いてはいない当麻だが、話の流れからロクな扱いでない事は理解していた。

慌てて否定するが時既に遅し。二人からは微妙な距離を取られていた。

「はいはーい、おふたり様ごあんなーい」

このまま放置でもよかったが、御坂にも世間体がある。
寮の住人に変な噂を立てられる前に、さっさと当麻を部屋に招こうと判断した。

「聞けよおい！」

存在な扱いに抗議する当麻だが、当然ながら二人には聞き入れられなかった。

寮の扉が開かれ、優菜と当麻は二人揃って扉を潜り抜ける。

「なかなか豪勢だな、これは」

「そうですね、手入れもかなり行き届いていますね」

感嘆の声をあげる二人に、御坂は幾分得意げな顔をして笑う。
暫く眺めていた二人だが、ふと優菜がある事を思い出す。

「そういえばこの寮の管理人さんはどちらへ？」

「……寮監に何か用なの？」

さっきまでの得意げな顔はなりを潜め、今度は心底嫌そうな顔をする御坂。

明らかに会いたくないと顔でバレバレであった。

「一応、ご挨拶はしておかないと」

「えー、私は会いたくないなぁ……」

「ほぅ御坂、それはどういう理由でだ？」

「ソレは勿論……！？」

その瞬間、御坂がびしっと背筋を伸ばして固まった。
ギギギっと錆びついた機械のような感じで、首だけを後ろに向ける。

「勿論……なんだ？　続けたまえ」

そこには常盤台の寮監が立っていた。
その眼光や佇まいから、規律や規則に非常に厳しい人だと分かる。

「そそそれ勿論、寮監様のお手を煩わせるのは悪いと思いまして！」

「……」

すぐに姿勢を正して寮監の前にたつと、御坂は早口で言い訳を述べる。
対して寮監は無言で立ち、御坂に視線を向けていた。
その目は睨んでいると言っても過言ではなかったが……。

「あなた様がこの寮の管理人様でしょうか」

カチコチに固まっている御坂に対して、優菜は自然体で寮監へ話しかける。
声をかけられたので優菜の方に視線を向けた寮監は、じっと優菜を見つめる。

「私の名前は上条優菜、こちらは……」

「上条当麻です」

優菜に促されて当麻も自己紹介をする。
その姿は幾分緊張気味であったが、なんとか舌を噛まずに言葉を発することが出来た。

「本日は御坂様のご招待でこちらに参りました。少々お騒がせするかもしれませんがどうかご容赦ください」

優菜は御坂と同じく姿勢を正して挨拶を述べる。
だがその姿は優雅で華麗、それでいて凛として気品を漂わせていた。
御坂と当麻は優菜の姿に目をみはり、寮監ですら思わず感嘆の息が漏れるほどであった。

「これはこれは、ご丁寧なご挨拶をどうもありがとう」

一つ咳払いをして、寮監も優菜に向かって挨拶をする。
さっきまで厳しい顔をしていたが、優菜には幾分和らいだ顔をしていた。

「私はこの寮の管理人を務めている。何かあったら遠慮無く声をかけてくれ」

「はい、その時はよろしくお願い致します」

「では私はこれで。御坂、失礼のないようにしたまえ」

そう言って御坂に釘をさすと、寮監は姿勢をただしたまま立ち去っていった。

立ち去った後、御坂が盛大なため息を吐いたのは言うまでもない。

「いやぁ助かったわ」

「私は挨拶をしただけですわ」

寮監に小言を言われずに立ちされた事が嬉しかったのか、御坂は笑顔で廊下を歩く。

「さ、ここが……」

御坂が扉を開けて二人を中に招待する。

だが扉の上に何かの罠が仕掛けられている事に優菜は気付く。

「！……御坂さん、下がって！」

「え？」

優菜は一気に御坂を後ろに引っ張る。

反動で優菜は扉前に来てしまったので、頭をガードしながら身構える。

バシャーンと水を被る音があたりに響き渡る。

「おーほっほっほっほ、類人猿め。思い知り……！」

すぐその後、黒子が高笑いをしながら突然現れる。
どうやら扉を開けた時に、水が入ったバケツを落とす罠を仕掛けていたようだ。

「あれ……？　何故優菜さんが？」

しかしずぶ濡れになったのは当麻ではなく優菜であった。
さすがの優菜も水を全身に被るとは思わず、ただ呆然としていた。
全員が優菜に視線を向けるが、その視線はとある部分に集中していた。
ぴったりと服に張り付いていても、その服を強引に隆起させる二つのカタマリである。

（巨大なマスクメロンが二つ……）

（私にはないものを装備していらっしゃる……）

（でかすぎず小さすぎず……乙女にとって最適なサイズですの……）

暫く呆然と眺めていた三人。
優菜もこの状況をどうしようか考えあぐねているようであった。
ただ困ったような笑顔を浮かべていた。
だれかこの事態を解決して欲しい。四人はそう考えていた。

そんな彼らの希望通り、この事態を解決する人物がこの場に現れる。

「寮則第九条、寮内での能力の使用はこれを固く禁ずる。よもや忘

れたわけではあるまい、白井？」

言わずと知れた寮監である。黒子の後ろに立ちながら寮監は寮則を口にする。

「そして彼女がずぶ濡れもお前の仕業か？　ん？」

ツインテールを逆立てて、黒子は一気に姿勢を正す。
その顔には汗がダラダラと流れ続けていた。

「こここここここれは寮監様、ご機嫌麗しゅう」

御坂と同様、一気に姿勢を正すと黒子は寮監に頭を下げ続ける。

「こここここれには、深いじじじじじじ事情が！」

対して寮監は鬼も裸足で逃げる眼光で、黒子を睨んでいた。
明らかに激怒している雰囲気が、はっきり見て取れた。
その姿に御坂も反射的に姿勢を正す。

「言い訳無用、貴様は来客者に迷惑をかけたのだ。罰を与えないといけないな」

「ぴぎぃ！」

寮監はそう言うと、目にもとまらぬ早業で黒子の首を捻る。
変な悲鳴を上げた黒子は、そのまま意識を刈り取られていた。

（黒子がぁ！）

（ひぃ！　あれヤバい方向に首が曲がっていないか！）

その姿に怯える二人だったが、優菜だけは未だにどうするべきか悩んでいた。

「あー優菜君だったかな。そのままでは困るだろう、寮監室で風呂を用意しよう」

「は、はぁ……」

「本当に申し訳ない。白井の馬鹿にはきっちり叱っておく」

優菜に申し訳ない顔をすると、寮監は頭を下げる。

特に怒っていなかった優菜は慌てて取り繕う。

「いえ、まぁ別に怒っていませんから……」

「ではこちらへ。御坂、優菜君を少々借りるぞ」

「は、はい！」

自分が叱られたわけでもないのに、御坂は背筋を伸ばして寮監の問いに答えていた。

そのまま優菜は寮監と一緒に、その場を立ち去った。廊下を水で濡らしながら……。

「なぁ……寮監って強いのか……」

「強いってものじゃないわよ。レベル４を三人一度に相手して倒したぐらいよ」

怯えながら語る御坂を見て、当麻の中で寮監は何か恐ろしい存在と認識することにした。

「……すげぇ……ていうかさっき白井の首をねじ切ったように見えたが……」

「そうね……」

「深く考えないほうがいいな……」

（あれ？　ていうかこれって……二人きりって事！？）

「お、落ち着くのよ、美琴。冷静に……冷静に」

今さらながら二人きりになったことに、幾分黒子に感謝しながら御坂は息を整える。

またパニックになって失敗しないためにも、ここは冷静になるべきだと考えたからだ。

「なぁ美琴。そろそろ部屋に入ったほうがよくねぇか？」

「そ、そうね。ど、どうぞ」

入り口が幾分濡れているが、それは後で黒子に掃除させようと思った御坂。

一つ咳払いをして、御坂は当麻を部屋へと招き入れる。

素直な美琴

御坂は内心ドキドキしながら、当麻を部屋に招き入れる。
姉妹によって女性の部屋に入り慣れている当麻は、特に緊張する事もなく御坂の部屋に入る。

「へー、中はいたってシンプルだな」

机とベット以外は特にこれといって目立つ家具が見当たらない。
もっと凝った装飾品が置いていると考えていた当麻は、部屋のシンプルさに少しだけ驚いた。

「そう？　どういったのを想像していたのよ」

「もっとこう豪華っぽい感じでな」

当麻が描くお嬢様っぽいゴテゴテした部屋を、手振り身振りで御坂に伝える。
最初は呆れ顔の御坂だったが、途中から苦笑しながら話を聞いていた。

「まさか、お嬢様学校と言われてもそこまでお金をかけないわよ」

手をパタパタと振りながら、御坂は当麻の想像を否定する。

「そうかぁ。じゃあ優菜の方はどんな感じだったんだろう」

「ちょっとだけ興味はあるわねー」

優菜も元はお嬢様学校に通っていたので、一体どんな部屋に住んでいたかが気になった。
だが肝心の優菜は黒子の罠による水バケツの被害にあい、寮監室に移動したので今はこの場にいない。

「今度、写真とかあれば見せてもらおうぜ」

「あ、それいいわね」

そう言うと御坂は自分のベットを指さす。

「そっちのベットに座っていいわよ」

「ん？　そうか。んじゃお邪魔するな」

特に気にする様子もなく当麻はベットに腰掛ける。
御坂にとってはある意味で大イベントだったが、当麻に気付かれないように平静な顔を作る。

「（落ち着け落ち着け）そういえばさ、この前垣根さんと知り合ったんだけど」

「ん？　垣根と知り合いなのか」

御坂と垣根の接点が思いつかない当麻は少しだけ驚く。
だが、すぐにお互いがレベル５同士という事に気付き、その関係で知り合ったのだと思い至った。

「そうよ。で、気になったんだけど当麻って学校ではどんな感じなの？」

「どんなって……普通だなぁ。時々補習を受けるけど、毎日友達と馬鹿やってるな」

天井を眺めながら当麻は学校での自分を思い返す。
青髪ピアスや土御門、垣根とよく馬鹿な話をしては吹寄に怒られたりしている。
時々一方通行を連れてゲーセンに行ったり、適当な喫茶店でだべったりもしていた。
何となくだが毎日が馬鹿をやっているなぁと当麻は漠然と思っていた。

「へー、不幸だーとか言って毎日過ごしているのかと思ったわ」

「どんだけ上条さんのイメージは悪いのですか……」

御坂の言葉に少しだけショックを受けた当麻だが、確かに不幸だとか言っていればそう思われても仕方ない。
今度からは気をつけようと、無駄な考えをする当麻であった。

そんな二人は時々冗談を交えながら、近頃の自分について話す。
御坂も当麻も特に大きな事件に巻き込まれていないので、話す内容は殆どが学校での話になっていた。

（うっしゃぁぁぁぁぁぁ！　普通に話せてるわぁぁぁぁぁ！！？）

そんな普通の会話をしながら、御坂は心の中でガッツポーズを取る。
今までの御坂と当麻の見解を知る者なら愕然とする光景だが、これもまた素直になった御坂の変化であった。

御坂は垣根に叱咤されたとおり、当麻が自分の期待と違う言葉を発した場合、何故その言葉を選んだかを考えていた。
そしてどうすれば自分の期待通りの会話を出来るか考え、それを実行していく。

まるで営業のような会話の仕方だが、御坂にとってはほぼ手探りな状態なのである。
故に一つ一つの会話に確認作業が入ってしまうが、慣れるまではこれを続けるしか無いと考えていた。

「あははは。あ、そうそう。本当は優菜さんともしたかったんだけど」

そして御坂は思い切った行動に出る。
今までは決して出来なかった行動だが、今なら恥ずかしがらずに出来ると確信した。

「ん？」

「あ、あのね。互いの連絡先の交換……しない？」

携帯を片手におずおずと当麻に提案をする御坂。
上目遣いな御坂に、当麻は少しだけドキっとした。

「いいよ、ちょっと待ってくれ」

少しだけ恥ずかしい気持ちを隠すように、当麻はポケットから携帯を取り出すと御坂の方に向ける。

（うっしゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！）

顔は平静を保っていたが、心の中では歓喜の踊りをしていた御坂。
携帯を当麻の方へ向けると、自分のデータを転送する。

「ほら、上条さんの番号をメモリーに記録させてやるぜ！」

「何言ってるの。美琴さんの番号をメモリーに記録させてあげるんだから。感謝しなさいよねー」

互いに恥ずかしさを誤魔化すため、憎まれ口を叩きながら番号交換をする。
交換が終わると、御坂は早速当麻の番号に対して設定をしていく。

（えーっとグループは……大事な人……はわわわわわ、いきなり恥ずかしくなってきたー！！！）

携帯を見ながらニヤニヤする御坂を、当麻は少しだけ引きながら見ていた。
だが幸せ絶頂の御坂は、そんな当麻の視線に気づくことはなかった。

「……よくよく考えたらこの携帯にレベル５のグループに分ける。……」

当麻は御坂をレベル５のグループに分ける。
そして気付く。自分の携帯にレベル５が六人分登録されていることに。

「ある意味すごいわね」

「軍覇は携帯なんて持ってるか知らないからなぁ。今度会ったら聞

いてみよう」

七人目の軍覇は携帯を持っているのかすら怪しい。
いつも根性と叫んでいるし神出鬼没な存在だ。

「軍覇？　もしかして第七位の削板軍覇？」

当麻の口から、またレベル５が出てきた事に御坂は気付く。

「おう」

「……当麻の友好範囲って広いわね」

御坂は当麻がレベル５のほとんどと友好関係がある事に今さらながら驚く。
垣根との会話の時に気付いていたが、その時は半信半疑だったのである。
だが、改めて当麻の口から言われるとそれが事実であると確信する。

（第六位だけ不明だけど……それでもレベル５の六人と知り合いかぁ……ある意味すごいコネね）

御坂は優菜がレベル５である事を知らないので、当麻がレベル５全員と友好関係がある事を知らない。
しかしライバルは沈利と心理掌握だけなので、不明な第六位は気にしない方で考えていた。

「はっはっは、レベル５と太いコネクションを持つ男……だぜぇ？」

「だっさ、馬鹿じゃないの？」

ニヒルな笑いを浮かべながら、変なポーズを決める当麻。
呆れた御坂は、少しだけ可哀想な子を見る目で当麻を見る。

「ちょっと前に見た映画の真似をしたんだが……似合わなかったか」

御坂の反応から、自分が外したことに気付いた当麻は、頭をかきながら照れ隠しをする。

「そうそう、普通のほうがかっこいいわよ」

（あたしは何を言ってるのぉぉぉーーー！！！）

心の中で頭を抱えて悶絶する御坂だが、勿論顔は平静を保っていた。
今ならどんな事でもポーカーフェイスを作れそうだと、場違いな考えが浮かんだりしていた。

「お世辞でもありがとうな、美琴。お前も今のほうが可愛いよ」

そんな御坂を見て、当麻は笑顔を浮かべて御坂に礼を述べる。

「かかかかかかかかか可愛いって！」

当麻の言葉に呼応するかのように、御坂の顔が一気に真っ赤に染まっていく。
だが当麻はそんな御坂の様子に気づかず言葉を続ける。

「正直ビリビリしてるお前は怖かったしな。今のようにフランクに話せている方が俺は好きだぜ」

限界だった。
普段から会話すらまともに出来なかった御坂が、当麻から『好き』だの『可愛い』だの言われてポーカーフェイスを続けられるわけがない。
盛大にバチバチと帯電しながら、御坂はそのまま床に崩れ落ちる。

「ふ、ふにゃ～」

可愛らしい悲鳴をあげながら、御坂は目を回していた。

「わー美琴ー！」

慌てて駆け寄る当麻だが、美琴は既に意識が別の世界に飛んでいた。

「め、迷惑かけたわね」

「いきなり漏電するからびっくりしたぜ」

それから十分ほど帯電していた御坂だが、何とか平静を取り戻す。
だがそれでも顔が赤いのは隠すことが出来なかった。

「ちょっと……当麻の言葉が急だったから」

「すまん、周りからも言われるが俺ってデリカシーがないらしいから……なんか悪いこと言ったのかな？」

「そ、そんなんじゃないよ！　ちょっとだけ……嬉しかったから……」

「そ、そっか」

お互いが口を閉じる。御坂も当麻も互いに思うことだけは同じであった。

（気まずい……）

御坂は当麻をチラチラと見ながらさっきまでの会話を思い返す。

（う～、当麻に可愛いとか言われた）

（でもでも、多分深い意味はないんだろうなぁ）

（素直になってみたけど、当麻と普段以上に話せている）

（とっても幸せ。今まで意地をはっていたのが馬鹿みたい）

（まぁきっかけがあの垣根さんだと思うと正直微妙だけど……）

（これを気に前へ……前へ！？）

（ど、どどどどうするの。次ってどうすればいいのぉぉぉ！！）

御坂は気付いていない。さっきから顔がすごい勢いで沈んだり喜んだりしている事に。

（なんか美琴が百面相してるけど……どうしたんだ？）

そんな御坂に驚いた当麻だが、勿論指摘はしなかった。

したら電撃が飛んでくる。今までの経験からそう判断した当麻であった。

「あ、そろそろ時間がヤバいな」

「ふぇ！　挙式は洋式でお願いします！」

「……は？」

突然御坂が当麻の言葉に反応して言葉を発する。
しかしそれは当麻には理解出来ない内容であった。

（だぁぁぁぁぁぁ、私は何を口走っているの！？）

盛大に自爆した御坂は、またもや心の中で頭を抱えて悶絶する。

「な、何でもない！」

勿論、顔は真っ赤だが両手でブンブンと否定するだけであった。
若干訝しげに思った当麻だが、更に突っ込んで尋ねる気も起きなかったようである。
ゆっくりとベットから腰を上げると、少しだけ背伸びをする。

「名残惜しいけど、今日はそろそろ帰るわ」

「あ、送っていくわよ」

「いいって、そこまでしなくても大丈夫だ。じゃなー」

御坂の言葉に苦笑しながら否定する当麻は、御坂の返事を待たずに

そのまま部屋から出て行く。
少しだけ残念に思った御坂だが、これ以上望むのは欲張りと思った。

（またね……当麻）

そっと呟くと、御坂は自分のベットに腰掛ける。
本人は気付いていなかったが、御坂は幸せいっぱいの笑顔を浮かべていた。

一方、当麻と御坂が話している頃、黒子はどうなっていたか。
それは勿論。

「白井、まずは反省文だ」

寮監室でみっちり説教と罰則を受けていた。

「寮監様……このタワーは一体」

意識を取り戻した黒子の前には、紙で出来た巨大なタワーが鎮座していた。
真っ青な顔をしながらそのタワーを指さすと、寮監はメガネの位置を直しながら黒子の質問に答える。

「四百字の原稿用紙が五百枚ある。全部埋めろ」

「ぴぃ！」

顔色ひとつ変えず、寮監は黒子に罰則を告げる。
変な悲鳴をあげた黒子だが、当然ながら逃げることは不可能であっ

た。

「それが終わったら寮の掃除だ。全フロアを綺麗にしろ」

「寮監様、お情けを！」

一日で終る量とは思えない罰則を寮監から告げられた黒子は、当麻並の勢いで土下座をする。

だが、寮監は顔色ひとつ変えずに黒子を見下ろす。

「これでも手加減している。本当はもっとあるんだが優菜君たっての頼みだ」

再びメガネの位置を直した寮監は、少しだけため息を吐きながら優菜から言われた言葉を口にする。

「『ちょっとした嫉妬の暴走ですから、余りきつい罰則は与えないでください』とな」

黒子の肩に手を置きながら、寮監は黒子にだけ聞こえる声量で呟く。

「感謝するんだな、この程度で済んだ事に」

「ち、ちなみにソレが無かった場合は」

聞きたくないが、聞かずにはいられない。

もし優菜の口添えがなければ、一体どんな罰則が自分の身に降りかかっていたか。

「原稿用紙が後三百枚追加。寮の掃除にプールの掃除、グラウンド

の整備ぐらいはやってもらう所だったな」

真っ青を通り越して土気色にまでなった黒子の顔だが、やはり寮監は顔色ひとつ変えずに黒子の質問に答える。

「ぴぎぃ！」

あまりの恐ろしさに変な悲鳴をあげた黒子。

「当たり前だ。貴様は来客者に迷惑をかけたのだ。優菜君がまだ優しかったからよかったものを」

黒子の肩においた寮監の手に力が入る。

ミシミシと嫌な音を立てていたが、黒子は恐怖のあまりに痛みを感じていなかった。

「下手に噂を立てられたら学校の評価が下がっていたんだぞ。それを理解しろ！」

「は、はいー！」

鬼も裸足で逃げるほど恐ろしい雰囲気をまとって、寮監は黒子を叱咤する。

恐怖で心が染まった黒子は、無言で原稿用紙に反省文を書き続ける以外なかった。

そんな黒子だが最終的には原稿用紙だけで解放される事となった。

勿論、そうなった理由は優菜から寮監へ更なる口添えがあったから

だが。

流れの魔術師

学園都市は基本的に学生が住む街である。
一部例外を除いて、夜になれば殆どの人間が家の中で過ごすだろう。
電柱の代わりに無数に立っている風力発電のプロペラ音が、カラカラとあたりに響き渡る。
それほど夜の街並みは無人であった。

そんな夜の町並みを、その男は無言で歩いていた。
その男は一言で言えば異様な存在であった。

上下共に黒のスーツを着込み、ネクタイまでが黒色に統一されていた。
その体躯は、みっちりとした筋肉で覆われており強靱である。
マフィアの人間か、マフィアのボスを警護する人間といえば誰もが納得しただろう。

だがそんな大男の右腕に、この学園都市でもマフィアでも似つかわしくない物が装着されていた。
仕込み弓のような黒塗りの和弓が取り付けられていた和風の篭手。
更に弓は片手を動かすだけで弦を引き、矢を放つ事が出来るように工夫されていた。

黒塗りのスーツの大男、その男の名は闇咲逢魔。
科学の世界とは別の世界の住人。つまり魔術師である。

「Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ……禁書目録」

闇咲は流暢な英語を駆使して、ある人物の名前を口にする。
教会世界では有名な、その頭脳に十万三千冊の魔導書を持つ少女。
その知識があれば、世界の仕組みを組み換えあらゆる願いを叶えることも可能。
そんな少女を狙う魔術師は世界中にいくらでもいた。
では闇咲も十万三千冊の魔導書を欲するため、インデックスを狙う魔術師の一人であろうか。

「ふむ。まだ遠い、か」

そっと呟く闇咲。その足取りに迷いはなかった。
まるでインデックスの居場所を既に把握しているかのように。

「ここまで来たのだ。もはや止まる事は許されない」

両眼を閉じて、ここに来るまでの犠牲者を思い出す。

（ここで諦めれば、犠牲になった人々が可哀想だ。やるからには、徹底しなければ）

闇咲は夜の学園都市を歩く。目指すは一点、インデックスがいるとある場所。

「ごちそーさまなんだよ！」

「相変わらずすげぇ食うな……」

インデックスの前に積み上げられた皿を眺めながら、当麻は呆れたように呟く。

「とうまにしては、いい店を知っていたんだよ」

「店員からオーダーの拒否って、俺は初めての経験だわ」

紅茶を口に含めながら、当麻は先程の光景を思い出す。
材料がないので料理をお持ちする事が出来ません。
そういって店員はインデックスに頭を下げていた。
勿論、インデックスがそれで納得するはずもなく、さっきまでずっとワガママを言っていた。
しかし無いものは無い。空想で料理が出てくるなら、料理人は全て不要となってしまう。
結局、デザートを食べて終わりにする事で決着がついた。
バケツのようなパフェだったが。

（一方通行から電話があった時は何事かと思ったが……ようするにインデックスのお守りなのね……）

姉妹たちが研究所で手伝いだったので、当麻は家で暇を持て余していた。
普段は誰かが残っているのだが、今回だけは違ったらしい。
聞いてみると『大事な話だから全員参加』と返された。

（そんな時に一方通行から電話があったんだよなぁ。インデックスを面倒みろって……）

インデックスの面倒を見るか、楽しいお空の旅かどっちか選べ。
そんな脅迫にしか聞こえない電話を、当麻は一時間ほど前に受け取った。
勿論、選択肢はひとつしか無く当麻は泣く泣くインデックスの面倒をみる事となった。

『これだけあれば問題ねェだろ』

当麻が一生拝むことが出来ないほどの札束と一緒に。

「超何でですかー！」

満足気に座っているインデックスを眺めながら、紅茶を飲んでいると店の入口が騒がしいことに気付く。

「申し訳ございません。本日は材料が底をついておりまして……」

どうやら来客と揉めているらしい。しきりに店員が頭を下げながら謝罪している。
だが相手は納得しておらず、ずっと店員に文句を言っているようだ。

「ん～？　どっかで聞いたような……」

「どうしたの？　とうま～」

どこか聞いたことのある声が聞こえたので、当麻は店の入口の方に視線を向ける。
そこにはふわふわニットのワンピースを着た少女が怒り心頭で立っていた。
つまり絹旗最愛である。

「ぶふっ！　アイツ何をしてるんだよ！」

さすがに身内がぎゃーぎゃー喚いているのは恥ずかしいと思った当麻は、急いで店の入口にまで移動する。

インデックスが何か言っていたが、当麻は完全に無視していた。

「ですから！」

「おーい、最愛。その辺にしてやれや」

未だに怒り心頭の最愛に、当麻はいつものように近寄って声をかける。

それが問題であった。怒り心頭の最愛には、周りの声は一切聞こえていなかった。

「気安くナンパしてくるンじゃねェ！」

直後、当麻の体に窒素パンチが飛んでくる。

そんな事を全く考えていなかった当麻は、最愛の窒素パンチをまともに食らう。

「ごはぁ！」

当麻が幾ら体が丈夫とはいえ、基本的には単なる高校生である。

そんな体で大能力者の攻撃を受けたらどうなるか。答えは単純であった。

「不幸だ……」

床に倒れ伏した当麻は、涙を流しながら腹を押さえる。
さすがの最愛も、やっと自分に声をかけてきた人間が誰か気付いたらしい。

「わー！　当麻お兄ちゃん！　超ごめんなさいー！！」

慌てて駆け寄ってくる最愛だが、当麻は半分意識を飛ばしかけていた。

（不幸だ……）

大事なので二回言おう。そう思って心の中で呟くと同時に当麻は意識を手放した。

「さて、最愛さん。何か言う事はありませんか？」

「うっ！……ちょ、超ごめんなさい……」

あれから少しして意識を取り戻した当麻。
今度は当麻が怒り心頭になる番だった。
問答無用の窒素パンチを食らったのである。
さすがの当麻も、簡単に許す気はないらしい。

「超ごめんなさい……」

シュンとなって謝る最愛。
だが、当麻は最愛の肩を叩くと、とある方向を指差す。
「俺に謝るより先に謝る相手がいるだろう？」
当麻が指差す方向には、先ほどまで最愛の怒りを一心に受け止めていた店員が立っていた。
その顔は真っ青で、後一つ何かがあれば倒れてもおかしくないぐらいであった。
「先程は超迷惑をかけました。超ごめんなさい」
最愛は店員の元まで歩み寄ると、頭を下げて謝罪の言葉を口にする。
少しだけ怯えている店員だが、最愛の謝罪を聞くとほっと胸をなで下ろす。
「あんなにしおらしい絹旗は珍しいな」
そう言って当麻の近くに歩み寄る人物がいた。言わずと知れたパシリの浜面である。
「あれ？　お前いたの？」
浜面の登場に心底首をひねる当麻だった。
「何で俺の扱いってそんなに悪いの！　ねぇ！」
まるで『お前の存在なんて今まで気付きませんでした』、と言いたげな当麻の態度に浜面は涙を流しながら抗議する。

「わ、悪い。ほら、浜面ってよく沈利姉ちゃんたちと一緒だからそっちにいるのかと……」

「あー、さっきまで麦野たちを送っていったんだがな。絹旗だけこの店に用があってだな……」

浜面的には仕事なのだが、傍から聞くと単なるパシリにしか聞こえない。

周りの男たちは心の中で浜面にエールを送った。お前はもっと頑張れと……。

そんなこんなで店の入口で当麻は浜面と談笑する。

インデックスが食材を平らげたため、店の入り口には看板が立っていた。

『本日の営業は終了しました』

そのため、客は既に当麻たち以外はいなかったのである。

「所で当麻お兄ちゃんは、何でこの店に超いるのですか？」

店員への謝罪が終わった最愛が、当麻の元へ戻ってくる。

そこで当麻は思い出す。インデックスをほったらかしだった事に。

「と～う～ま～！」

インデックスが犬歯を剥き出しにして近づいてくる。

どうやら一人放ったらかしにされた事に、酷くお怒りの様子である。

半なき状態で当麻を睨むと、一気に襲い掛かる。

「当麻お兄ちゃん、危ない！　超浜面ガード！」

インデックスの攻撃にいち早く気付いた最愛が、当麻を引っ張ると同時に浜面の背中を押す。
つまり当麻と浜面の位置が入れ替わったわけである。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ」

その結果、本来なら噛まれるはずだった当麻が難を逃れ、浜面が不幸にも噛まれる事となった。
怒り心頭のインデックスは、浜面を噛んでいる事に気付かずひたすら顎に力を入れる。

「ゼッタイ、許さない！　とうまの頭蓋骨をカミクダク！」

恐ろしいことを口にしながら、更に顎に力を入れるインデックス。

「俺は上条じゃねぇぇーーーーー！！！！！」

「お、おい！　インデックス！　その辺で！」

何とかインデックスを止めようとするが、浜面が痛みのあまり体を振り回しているせいで中々止められない。
と、その時当麻の右手が僅かながらインデックスの服に接触する。

パキンッ

何かの割れる音が辺りに響く。

「こ、このガキ！　いい加減に！」

その音と浜面がインデックスの頭を掴むのは同タイミングであった。
よって誰もその音に気付くことはなかった。

所でインデックスが今までステイルや神裂から逃げ切れたのは何故であろうか。
彼女が天才である事も理由の一つである。しかし彼女はある無敵の盾を持っていたのである。
そう……『歩く教会』である。その結界の防御力は法王級であり、物理・魔術を問わずダメージを受け流し吸収するという。
学園都市が知ったら、喉から手が出るほど欲しがる物だろう。

そして当麻の右手にはある能力がある。そう……『幻想殺し』である。
異能の力なら問答無用で破壊する、魔術師・超能力者泣かせの力である。

さぁここで更なる問題を出そう。当麻の右手とインデックスの歩く教会。
二つが接触すれば一体どういう結果を招くか。

答えは単純である。

「……あれ？」

「えぇぇぇぇ！！！」

「超浜面……超最低です……」

「お、おい……浜面。それは幾ら何でも」

インデックスの歩く教会は破壊される。
その結果、インデックスの修道服はストンと床に落ちる。
フードと下着しか身につけていない格好のインデックスの出来上がりである。
当麻の能力とインデックスの事を知らない人間にはこう見えるだろう。

少女の服を引き裂いて襲っている不良少年の図、と。

「っ！！」

バラバラになった修道服を素早く拾うと、インデックスは一気に化粧室まで駆け込む。
周りはあ然とその様子を見ていたが、理解が追いつくとやる事は一つであった。

「超浜面……覚悟は超出来ていますか？」

「ま、待て！　俺にも何が何だかさっぱり分からんのだが！」

指をならしながら影の濃い笑顔を浮かべて近寄る最愛に、浜面はひたすら言い訳という泣き言を口にする。
だが、その言葉を聞き入れてくれる人間は……この場にはいなかった。

「乙女の超敵です！　超浜面！　超反省しなさーい！！！」

「俺の話を聞いてくれぇ！」

窒素パンチを繰り出す最愛の拳を、浜面は避ける事も出来ずまともに食らう。

床を何回かバウンドしながら、浜面はこう思った。

ああ……不幸だ、と。

焦る心と助けたい気持ち

あの後、インデックスは化粧室で修道服の応急処置を行った。
といってもピンセットを使って、なんとかカタチを取り戻しただけである。
何十本もの安全ピンが光る修道服は、はっきりいってアイアンメイデンにしか見えなかった。

だがインデックスはそれでもよいと考えていた。
歩く教会の能力は失われたとはいえ、彼女は敬虔なシスターなのである。
敬虔な、という言葉に甚だ疑問を感じるかもしれないが。

ひとまず安全ピンを外したいと考えていたインデックスは、今度優菜の家に行った時に直してもらおうと考えていた。
実はインデックス、一方通行と小萌の仲直りの後で、ちょくちょく優菜の家にアリシアと共に遊びに行っていた。
主に食事方面のことで。

一方通行の家に住む人間は、食事にはこだわりがなく無頓着である。
小萌は家庭料理を作る。
だが、一方通行が料理をすれば肉しかない。
アリシアは壊滅的に家事がＮＧである。
打ち止めはそもそも包丁が危ないという理由で台所に立たせていない。

勿論インデックスは、小萌の料理が嫌いというわけではない。
美味しい料理を作ってくれる小萌には感謝をしている。
だが、それでも時には珍しい料理を食べたいと思うのがインデック

スであった。

第四学区にいけば、世界中のメニューを食べることが可能だが、インデックスには先立つモノがない。

基本的に、インデックスの生活資金はイギリス清教より支給されている。

だがそれはあくまで十四歳ぐらいの少女が一ヶ月に生活する資金レベルである。

大食漢のインデックスが、無頓着に食べたらどうなるか。

あっという間に資金が枯渇する。

そこでインデックスは、ある人物を思い出していた。優菜である。

とはいえ幾らインデックスでも、一度会った程度の人間に不躾な願いをするほど無神経ではない。

何度もアリシアと共に遊びに行っては、仲良くなる行動をしていた。

最も、そのたびにご飯を相伴していたのはご愛嬌だが。

「散々な目にあった……」

頭に歯型、腹には大きな青あざ。

身に覚えのないロリコン強姦魔のレッテルを貼られ、浜面は身も心もズタボロであった。

「乙女のプライドはズタズタなんだよ、しあげ！」

半泣きになりながらも、インデックスは浜面を威嚇する。

犬歯を剥き出しにして噛み付こうとする格好のインデックスに、浜

面は悲鳴を上げながら後ろに下がる。
どうやらインデックスの噛み付きがトラウマになってしまったようである。

そして騒ぎすぎた四人は、当然ながら店から追い出されていた。
元々インデックスのせいで営業が出来なくなったのだ。
その知人関係も一緒に追い出されるのは、至極当然である。

「超いい所に武器があります。誰の車か超知りませんが、サイズ的に超よさげです」

わざとらしく最愛はそう口にすると、浜面の車を持ち上げる。
傍から見ると怪力少女にしか見えないが、彼女は窒素を使って持ち上げているだけである。

「ちょ、ちょっと待ったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　それだけは頼むぁぁぁぁ！」

恥も外見もなく浜面は、最愛の前に土下座をして頭を地面に擦り付ける。

「ちっ、しょうがありません。この程度で超許してあげますよ」

さすがにやり過ぎかと考えていた最愛。
そのまま車を地面に置くと、軽い足取りで当麻の元まで歩み寄る。

「しかし、当麻お兄ちゃんは何をしていたのですか？」

「ん？　一方通行に頼まれてインデックスのお守りをしていた」

未だに浜面を威嚇しているインデックスと、その姿に及び腰になりながら向かい合う浜面。
そんな二人を生温かい目で見ながら、当麻は最愛の質問に答える。

「あの店のバケツパフェというのが超気になっていたのですが……」

そこで最愛は少しだけ思案顔をする。
元々、パフェを食べたかっただけの最愛である。
食べきれなかった時のために、浜面を連れてきていただけ。

（わざわざ浜面なんかを連れて行くより超いい人が目の前にいるじゃないですか）

「今度一緒に超行きませんか？　当麻お兄ちゃん」

最愛は当麻の裾を掴みながら上目遣いでねだる。
当麻への、最愛必殺のねだりポーズである。
最愛自身も恥ずかしいが……。
過去に何度も当麻の心を陥落させたため、未だに最愛の中では最終奥義の扱いとなっている。

だが今回だけは事情が違った。

「おーい上条、俺の車に乗せてやるから帰ろうぜ」

「おいおい、この前黄泉川先生に捕まったばっかりだろう」

「更に進化した愛車、その名も仕上ＵＳ三号をナメんなよ！」

警備員なんぞに捕まるか！　と叫ぶ浜面。

そしてそれに苦笑しながら会話する当麻。
つまり最愛の話には、全く気付いていなかったのである。

「……」

恥ずかしさでぷるぷると震える最愛だが、辛うじて怒りを収める。
浜面でストレスを発散したかったが、当麻がいる手前無闇矢鱈に力を使うわけにもいかない。

（ん？　なんだ？）

当麻はある方向を見ると、黒一色のスーツを着た闇咲が立っているのに気付く。
最初は歩いているのかと思っていたが、すぐにそれは違うと理解する。
何故なら、闇咲は目を瞑っていたのだ。普通、歩く人間が目を瞑るわけがない。

「開戦の狼煙を上げん。断魔の弦」

そんな声が聞こえたと同時に、闇咲は引き絞った弓を当麻たちに向ける。

「！？」

最愛を庇うように抱きしめると、当麻は右手を闇咲の方に突き出す。
直後、弓の弦が解き放たれ見えない何かで地面が切り裂かれる。
しかしその見えない刃が当麻たちを傷つける事はなかった。
当麻の右手が、向かい来る刃を全て打ち消したからである。

「ちょ、超何ですかー！」

突然当麻から抱きしめられてパニックを起こした最愛だが、直後の攻撃を見て現状を理解する。

アイテムに恨みを持つ人間と思ったが、この場には無関係な人間が二人もいる。

よっぽどの馬鹿でない限り、無関係な人間を巻き込んでもデメリットだらけなのは常識である。

無駄な工作に対する資金の浪費と、工作に対する人員が割かれてしまう。

浜面もアイテムに恨みのある人間の行為と考えたが、最愛と同じですぐにその考えを否定する。

暗部の比較的軽い位置にいる浜面ですら、無関係な人間を巻き込む事へのデメリットを理解していた。

では一体何者なのか。

そんな思考を持った三人は、少しの間だが闇咲から意識を逸らした。

それが闇咲の策略と気付かずに。

「禁書目録は頂いていくぞ――――透魔の弦」

その声に気付いた時には、既に遅かった。

闇咲がインデックスに軽く触れると、スタンガンを押し付けられたかのように硬直して動かなくなった。

そして何の前触れもなく、インデックスとともに虚空へ消えてしまった。

まさに電光石火。フェイクの攻撃を行い、意識が固まった三人を嘲笑うかの如くインデックスを連れ去る。
あまりの展開に三人は、暫く呆けた顔をする以外なかった。

「って、あのロリコン野郎！　インデックスを連れ去っていったぞ！」

やがて理解が追いつくと、当麻は辺りを見渡す。
当然ながらインデックスも闇咲もその場にはいなかった。

「くそっ！」

アテなどないが、当麻は何かをせずにはいられなかった。
最愛と浜面をその場に残し闇雲に走り出す。

「当麻お兄ちゃん！」

その事で理解が追いついた最愛は、当麻に向かって叫ぶ。
だが、当麻には聞こえておらずすぐに視界から消えていった。

「超浜面！　私たちも！」

そう言いかけた最愛だが、その言葉を遮るかのように携帯から着信音がなる。
その音は、暗部組織としての連絡を行う電話番号。無視するわけにもいかず、最愛はしぶしぶ電話を取る。

「もしもし、超誰ですか。今は……」

不機嫌な声を隠そうともせず、最愛は電話口に向かって口を開く。

だがすぐに驚きの顔に変わる。何故なら、電話の向こうにいる人物は最愛のよく知っている人物だったからだ。

「……え？」

電話口の向こうにいる人物は、最愛の反応などお構いなしに用件だけを伝える。
そして最愛の反応を待たずして通話を切った。

「手を出すなって……超どういう意味ですか……」

無機質な電子音がなる携帯を耳に当てたまま、最愛はぽつりと疑問を呟いた。

「くそっ！　くそっ！」

当麻は夜の街をひたすら走る。食事時の時刻を過ぎれば学園都市の街並みは無人に近くなる。
故に障害となる人などはおらず、当麻は全速力で走ることが出来た。

（あの時、俺がぼけっとしなければ！）

インデックスが連れ去られた事に、当麻は後悔の念を抱いていた。
自分がしっかりしていれば、と今更過去の事を振り返って後悔しても始まらない。
だが、それでも当麻は後悔せずにはいられなかった。

（あのロリコン野郎め、インデックスをどこに連れて行った！）

インデックスを探す手がかりはゼロである。

今のように無闇矢鱈に走りまわっても何も得る事はできない。

焦りだけが募り、当麻はだんだんと視野が狭くなっていった。

そんな当麻を叱咤するかのように、携帯から着信音が鳴る。

一瞬、電話を無視しようと考えた当麻だが、着信音がある人物のみの着信しか鳴らない設定だった事を思い出す。

「もしもし！」

その相手とは優菜である。

常に冷静な彼女なら、この状況を打破する考えが貰えるかもしれない。

藁にも縋る思いで当麻は電話をとる。

『……また人助けか、それとも誰かに追われているのですか？』

挨拶もなく、いきなり核心をついてくる優菜。

どうやら当麻の呼吸音が荒い事を、走り回っていると考え至ったようだ。

それが当麻にはありがたかった。一を言う前に、十までを予測する優菜が。

「詳しい説明は言えない！　一人の女の子が大男に攫われた！　その大男は女の子の記憶にある『ある物』を欲しがっているんだ！」

支離滅裂であった。要領を得ない言葉の上に、一体何が言いたいかすら分からない。

『……屋上を探しなさい、当麻』

だが、そんな言葉でも優菜は当麻が何を言いたいのか分かった。

「屋上!?　何でだよ!」

『いいですか、当麻。屋上というのは、基本的に人の出入りが少なく出入口が一つしかありません。よって人の出入りを監視しやすいのです』

焦って捲し立てる当麻だが、優菜はあくまで冷静であった。

『更に出入口が一つという事は防御に最適なのですよ。部屋の場合は追い詰められる事が多いのですが、屋上は逃走ルートとして使われる場合もありますので逆にメリットとして働きます』

冷静に当麻へ助言を口にする。

『最も、これは理性のある人間の場合に限ります。精神的欠陥がある狂信者などには当てはまりません』

「……」

『大男に少女、でしたね。ならば、高級ホテルなどの屋上を当たりなさい。警備の厳しい所が多いでしょうが、一旦中に入ればそれは逆に追手を追い払う衛兵と変わります』

優菜の言葉を聞いていると、焦りに支配されていた当麻の心に冷静さが戻ってくる。
そうだ、考えて見ればあの異様な風貌だ。それに、学園都市では無能なニートシスターのインデックスである。
それなのにインデックスをさらったという事は……。

（相手は魔術師！）

「例えばさ！　大男が呪術とか怪しいオカルトにはまっているような奴だったら、どういう行動に出ると思う！？」

『オカルトという事が何を示すかわかりませんが、もし学園都市の『外』にあるオカルトなら広い場所が必要となりますね』

学園都市に長く住む人間にとって、オカルトや魔法という言葉は鼻で笑うだけだろう。
だが優菜は少し前まで、学園都市の外にいたのだ。科学万歳の学園都市の常識に囚われる事がない。

『しかし部屋を借りる事は難しい。ならば秘め事を行うのは部屋の中。そんな心理を逆に利用して、開けた場所で堂々と秘め事を行う可能性があります』

「それってすぐにバレないか！？」

『人間というのは、堂々と行動をしている存在に対して意外と見落とす事があるのですよ』

言われてみればそうかも、と当麻は思った。
自信満々に行動している人間は、多少の怪しい動きをしても気にな

らない。

『こちらで考えた条件に当てはまるホテルは三つ。場所を当麻の携帯に送っておきます』

「悪い！　何か用事があったと思うのに俺の都合だけ押し付けて！」

『今の当麻に私の声が届くとは思えません。今度の機会に語りますので、ちゃんと聞いてくださいね』

「あぁ！　分かった！」

そう言って優菜からの返事を待たず、当麻は携帯の通話を切る。時間を置かず優菜から、先ほど電話で言っていた情報が送られてくる。

（とにかく手短な場所から当たるしかねぇ！）

今まで何も見えず闇雲に走っていた当麻の足取りは重かった。だが、優菜から貰った情報で方向性が見えると、その足取りはとても軽くなった。

「まずはあそこのホテルから行くぜ！」

遠くに見えるホテルに向かって当麻は走りだす。インデックスを助ける、ただそれだけを考えて。

命と引換えの行動

当麻が闇咲を探して走り回っている頃、闇咲はある高級ホテルの屋上にいた。
インデックスはロープで縛られ、冷たいコンクリートの床に転がっていた。
電光石火の勢いで拉致された割に、随分と扱いが適当な感じがするとインデックスは思っていた。

闇咲は空を見上げながら舌打ちをする。
学園都市の様子は三基の人工衛星が絶えず監視をしている。
入るときに少々揉め事を起こした闇咲に対して、何の音沙汰も妨害もない。

（学園都市からの妨害はない。これは泳がされているのか、無視されているのか判断出来ないな……）

妨害ありきで高級ホテルの屋上を陣取ったが、無意味だったようである。

（泳がされていても構わない。ならば欲するものを手に入れ、なおかつ相手の罠をかいくぐるまで）

ゆっくりと息を吐くと、闇咲はスーツの内ポケットから一枚の写真を取り出す。
闇咲よりニ、三歳年上に見える女性。
よく言えば線が細く、色白であった。
だが悪く言えば、それはもはや病弱を通り越して死にかけという表現がぴったりとくる。

そんな死の淵にいる女性の写真を闇咲は無表情で見ていた。

闇咲とその女性は家族でも友人でもない。
時々病院で会話をする程度の関係であった。
故に女性は闇咲に助けを求めたわけでもない。

なのに闇咲は女性を助けるために立ち上がった。
学園都市に侵入するという危険を侵してまで、闇咲はその女性を救おうと考えた。

闇咲は魔術師になれば何でも出来ると思って生きてきた。
もう二度と挫折をしたくないから魔術師になると誓いを立てていた。

女性を助けるのは彼女のためではない、自分自身のためだと言い聞かせてきた。
『何でも出来る』とか『二度と挫折したくない』を、こんなつまらない女のせいで己の夢を諦めるわけにはいかなかった。

ただそれだけ。ただそれだけだと自分に言い聞かせる。

「……ふん」

写真をスーツの内ポケットに戻すと、闇咲は両眼を閉じた。
まるで自分の心を強引に封じ込めるかのように。

再び目を開き顔を上げる。
その視線の先には、雁字搦めに縛られたインデックスがあぐらをかいていた。

「驚いたな。短時間で結び目を二つも解いたか。縄縛術は私の専門

ではないが、それでも下級妖物ぐらいは縛れるものだと自負していたのだがね」

コンクリートの上に寝そべっていると思っていた闇咲は、インデックスの姿を見て少々驚いた顔をする。
だが、依然インデックスが囚われの身である事に代わりはない。

「縄は日本が産んだ独自の拷問文化だけど、こんな雑な方法じゃ私はしゃべらないんだよ」

絶体絶命のピンチだが、インデックスには恐怖心で心を染めるほどの効果はなかった。
実際、十万三千冊の魔導書を守り続けてきた彼女である。この手の危機は常に付きまとっていた。
ある程度の耐性は身につけている。

「なるほど。腐っても魔女狩り・拷問裁判に特化したイギリス清教の人間か……」

だが、それはある程度という話だ。
インデックスは拷問に対して素で耐えぬくほど精神的な強さはない。

「しかし勘違いしてもらっては困る。拷問をするつもりはない。」

「だったら、結びがキツ過ぎるんだよ。腕や足の動脈を止めたり肺を圧迫するのは良くないかも」

「なるほど。専門家は詳しいな。どの結び目はキツイのだ」

その言葉を聞いたインデックスは面を食らう。

自分をさらった敵にしては余りに素直すぎる。
実際、インデックスが苦しいと思っていた箇所を述べると、闇咲は素直に縄の結び目を解いていった。

「言ったはずだ。君に拷問をするつもりはない。君の中にある魔導書を手に入れるのが私の目的だ」

闇咲は涼しい顔でインデックスの疑問に答える。
魔道書、その言葉を聞いてインデックスは闇咲を睨みつける、それを守るのが彼女の役目だ。
だから、何としてでも目の前にいる闇咲から逃げなくてはいけない。
そう考えていたインデックスだが、現実は無情である。
彼女には囚われの身として、冷たいコンクリートの上であぐらをかく以外出来なかった。

「さて、準備のために少々時間がかかるな」

闇咲は、インデックスの睨みを涼しげに受け流す。

「まずは増幅のための結界を張らねばなるまい」

「くそっ！　ここでもないのかよ！」

当麻は高級ホテルの屋上を睨みつけながら、吐き捨てるように言う。

入り口から素直に入る事が出来ない当麻は非常階段を駆け上がるしかなかったのだ。
当麻のスタミナと引き換えに、屋上へ上がる事が出来た訳だが、残念ながら現実は無情である。
優菜から指定されたホテルは既に二件回った。残りは一件しかない。
その上、そのホテルはここから更に遠い。

「だが迷っている暇はねぇ。早くインデックスを助けないと！」

そう言うと、当麻は屋上を後にして非常階段を駆け下りる。
はっきり言えば既にヘロヘロの状態だった。
高級ホテルというのは非常に高い建築物が多く、それを一階から屋上まで駆け上がるのだ。
単なる高校生には、フルマラソン完走に匹敵するだろう。
しかし当麻は立ち止まれない。
自らの愚かさで救えなかったインデックスを助けるまでは。

当麻は気付いていなかった。何故、最愛から連絡がないのか。
そして闇咲が優菜からもたらされた情報にあった、最後のホテルに陣取っていた事を。

闇咲も気付いていない。入念な下準備と計画を持って学園都市にやって来た。
長い年月をかけて作り上げた計画が、僅か十分程度である少女に見破られた事を。

当麻と優菜、二人は互いに足りない部分を補えるような関係なのだ。
闘う力が弱い優菜に代わって、異能の力を打ち消すという強大な力を持つ当麻。
頭の回転が悪い当麻に代わって、少ない情報から相手の思考を逆算・

解析を行い更には先読みを行う優菜。
そんな互いの弱い部分を補える関係。

ビルの屋上にある給水塔を頂点にして、四方八方へ無数の縄が張られていた。
縄の途中には和紙に墨で印を描いた護符を、一定の間隔で何十枚と貼りつけていた。

「これは……神楽舞台？」

縛られたまま座り込んでいるインデックスは訝しげに疑問を口にする。
神楽とは、その名の通り神に奉納する舞の事だ。

「そんな大それた代物ではない。どちらかというと盆踊りの会場といった所だな」

神仏混合というヤツだ、と闇咲は付け加える。
盆踊りの知識が書物しかないインデックスは、闇咲の思考がいまいち読めなかった。

舞と踊りは区別すべきだが、盆踊りも起源をたどれば死者へ捧げる鎮魂の踊り。
つまりオカルト一点から見れば、神楽と似た部分がある。

（そんなものを用意して……まさか私に何かを憑かせる気？）

憑依されるという事に、少しだけ恐怖したインデックスは闇咲の方を見る。

その視線に気付いた闇咲は、右腕に装着された弓を誇示するかのようにインデックスに見せる。

「憑依するのではない。結界を張ったのは少しばかりコイツの威力を増強するためだ。この弓は、元々舞踊の席で使うべきものだから」

インデックスは闇咲の右腕についている弓をじっと眺め、自分の記憶にある知識と照らし合わせる。

「……梓弓？」

「ほぅ、日本の文化園もカバーしているのか。中々な性能だな、その魔道書図書館は」

梓弓。それは矢を射る事ではなく、弓を引き弦の音を鳴らす衝撃で魔を撃ち抜くと言われる日本神道の呪具。

本来は神楽の舞に使われる楽器で、弦の音を使い舞を踊る巫女をトランス状態にし神をその身に降ろす手助けの呪具だ。

「元々の威力はせいぜい心の患部に衝撃を加え、歪みを正す程度の威力しか無い」

そう言うと、闇咲は頭上の縄を指差す。

「だが、一定の条件さえ揃えば相手の心の中を詳細に読む事が出来

る」

その視線をインデックスに向ける。
正確にはインデックスの脳を見ていた。

「そう、例えば君が必死に隠している十万三千冊の魔道書を暴く事なども……な」

闇咲の言葉にインデックスがギョッとした瞬間、縦横に張り巡らされた縄を中心に、空間が淡く輝き始めた。
その様子にパニックを起こしたインデックスは慌てて闇咲に向かって叫ぶ。

「だ、ダメ！！　これは、あなたの思っているようなものじゃないの！　普通の人間なら、一冊でも目を通せば発狂しちゃうんだから！」

驚くべき事に、インデックスは命乞いの言葉を口にしたのではない。
ただ、闇咲を心配する言葉を口にした。

「いくら魔術師でも、三十冊も耐えられない！　私以外の人間が、十万三千冊の魔導書を読み取れば何が起こるか、分からないあなたじゃないでしょう！？」

インデックスのような特別な才能なくして、魔術師が原典や写本と呼ばれる魔導書を読めばどうなるか。
普通の人間は一冊で廃人コース、そして特別な魔術師でも三十冊程度を読めば廃人コースだろう。
では、普通の魔術師である闇咲が十万三千冊もの魔道書を読み取ればどうなるか。

答えは単純、そして残酷な結果しか生まない。

しかし闇咲は静かに笑った。インデックスに向かって静かに笑ってこう言った。

「無論、百も承知」

許されざる選択肢

術式が始まってすぐに異変が起きた。
光りに包まれた巨大な結界の中で弓を引く闇咲。

全身から嫌な汗が吹き出し、眼の焦点がぐらぐらと揺らいでいた。
体は風邪のように小刻みに震えだした。

術式にも手法にも手違いはない上に、副作用に襲われる危険な魔術ではない。
にもかかわらず闇咲の寿命は確実に削り取られていった。
彼がしている事は、インデックスの心の中を覗いているだけだ。
普通なら、その程度でこの様な事にはならない。

インデックスの心の中に十万三千冊の魔導書がなければ。

魔導書からもたらされた毒素が、闇咲の体を確実に蝕んでいった。
その毒素に闇咲は理解出来ない頭痛に襲われ、痛みの声すら出せなかった。
闇咲は何も十万三千冊の魔導書を全て手に入れたいわけではない。
そんな危険を冒すより、インデックスを連れ去り利用したほうが安上がりだ。

彼がここまでして欲しかったものはたった一冊の魔道書。その名は『抱朴子(ほうぼくし)』。
中国文化における不老不死、仙人と呼ばれる存在になるための魔道書。
闇咲はその中にある、あらゆる病や呪いを解く薬を作る『錬丹術(れんたんじゅつ)』というモノを手に入れるつもりだった。

それも限りなく原典に近い純度を誇る魔導書の一冊。
たった一冊さえあれば、事足りると考えていた。
それは大きな誤りであった。たった一冊でこの威力なのだ。

闇咲は原典を読むという事をして、初めて『偽書』や『写本』のような存在がどうして必要だったかを理解する。
無粋で余計な真似と思っていたがそうではない。毒が強すぎて、常人には目を通す事が不可能なのだ。
純度を落とし、毒抜きをしなければ一ページを読むだけで、人によっては廃人になってしまう。
それほど危険な代物なのだ。原典と呼ばれる魔道書とは。

必死に何かを叫んでいるインデックスに闇咲は視線を向ける。
一ページをめくるだけで脳が破壊される魔道書を、その心の中に十万三千冊も溜め込んでいる少女。
それは人間には出来る所業ではない。インデックスの存在自体が異常と呼んで間違いない。

弓の弦を鳴らすたびに、猛毒の魔導書が一ページずつ闇咲の脳へ引きずり込まれていく。
その激痛に歯を食いしばって弦を鳴らす。

（魔術師になればなんでもできると思って生きてきた。もう二度と挫折したくないと思ったから魔術師になる事を誓った。なのに、なんだ！　死にかけの女一人すら救えないではないか！！）

魔導書が欲しいだけの魔術師なら、これほどの激痛を耐えぬく必要はない。

（あの女は助けてと叫ぶ気力も残っていなかった。目前に迫る死に対して微笑む事しかできない無力な女だ。こんなつまらない人間一人すら助けられないで、何が『何でも出来る』だ！　何が『挫折したくない』だ！）

たった一つの思いが、闇咲をこの激痛に耐えぬく意思として存在していた。

（あんなつまらない女のために、自分が今まで大事に育ててきた夢を傷つけさせるわけにはいかない）

目や耳から血を吹き出してでも、闇咲は弓を引くのを止めなかった。

（この身が傷つき罪に溺れるのは、己の欲望のためだ。決して、あんなつまらない女のためではない！　絶対に、あんなつまらない女のせいではない！！！）

心の中で叫び続けながら、闇咲は弦を鳴らし続ける。

どれほど体が傷つこうとも。

だが彼の思いも虚しく、抱朴子の原典を読みきる事は出来なかった。

何故なら、半分も読まないうちに彼の体は限界を超えていたのだから。

「インデックス！」

全身から滝のような汗を流しながら、当麻は屋上に駆け込む。
しかし目の前の光景を見て、体が硬直して動かなくなっていた。
全身から血を噴出しながらも、右手にある弓をひこうとする闇咲。

「……違うよ」

そんな闇咲を見て、ポツリとインデックスが呟いた。

「私には分かる。その梓弓……威力が増幅されすぎて、あなたの心が私の中に逆流している。だから分かるの！」

悲痛な叫びをあげて、今にも泣きそうな顔でインデックスは言う。

「ただその女の人が好きだった！　だから全てを賭して助けたかった。けれど、他人を傷つき罪を犯す必要があった。だから、その責任を女の人に押し付けたくなかった。お前のせいで罪を犯した、そんな台詞は絶対に言いたくなかったから！」

攫われたはずのインデックスが、闇咲を引き止めるかのように言葉を発する。

「あなたは破滅しちゃいけないんだよ！　その女の人の呪いを解くにしても！　あなたが壊れたら、その女の人は罪悪感を一生背負って生きていく事になるんだよ！」

当麻は奥歯を噛み締める。そういう事か……と、闇咲がしたい事を理解する。

「助けたいんでしょう、その女の人を！　例え誰から見捨てられていたとしても、あなたは手を差し伸べたかったんでしょう！　手を

差し伸べた人間が世界であなたひとりだけだとしても！」

闇咲は既に弦を引くことをしていなかった。いや、出来なかったと言ってもいい。

「死に至る呪いをかけられた人を見て、あなたは見て見ぬふりをできなかったんでしょう！」

インデックスの悲痛な叫びが、彼の動きを止めていた。

「だったらダメだよ！　こんな薄汚れた魔道書に頼っちゃ！！」

その時、当麻の右手に何かが触れる。それは、結界を張るロープの一つ。

その一つが当麻の右手と接触した瞬間、早送りビデオのように急激にロープが風化していく。

次々と破壊されていくロープ、すぐに空間そのものを輝かせている淡い光が消えていった。

三人が気付いた時には、普段の高級ホテルの屋上に戻っていた。

「……悪いのか」

インデックスの拘束を解いた当麻は、名前も知らない魔術師と静かに向かい合った。

全身がびっしょりと汗に濡れ、体はあちこちから血を噴出している闇咲が呟く。

「たとえ、この命と引き換えにしてでも、誰かを守りたいと思うことは、悪い事なのか」

インデックスの元に駆け寄った当麻を見ながら、闇咲は絡繰りを用いて弓の弦を引く。

「悪いに……決まっているだろ」

少しの間を置いて、当麻は闇咲の問いに答える。

「アンタ、知ってんだろ。大切な誰かに死なれる事の痛みが」

当麻は知っている。かつて白い病室で、それを大事な人たちに押し付けてしまった。

「目の前で誰かが苦しんで、傷ついても何も出来ない。どうしようもないっていう苦しみを知っているんだろ」

家族という、当麻にとってかけがえのない人たちに。

「焦ったはずだ、辛かったはずだ、心が痛かったはずだ、涙が出たはずだ。だったら、それは駄目だ。そんな重たい衝撃を、誰かに押し付けちゃいけないんだ」

返事の代わりに闇咲は無言で弓を構えた。

何が正しくて、何が間違っているのか、それを理解出来ないほど闇咲は愚かではない。

だが、それでも諦めきれなかったのだ。

怖かったのだ、大切な人が目の前で死ぬ事に。

「断魔の……」

弦を引こうとした闇咲だが、それは叶わなかった。
突然ぐらりと体が揺らぐ。体を支える力すらなかったのか、そのまま地面に倒れてしまった。
闇咲は起き上がらない。いや、起き上がれないという方が正しい。
倒れた体からじわりと血が染み出していく。

その事に気付いた当麻は、全力で闇咲の元へと駆け寄る。

「まったく。たった、一冊読み取った程度で……この有様だ」

血の混じった吐息と共に、闇咲は真っ赤になった唇から言葉を紡ぐ。

「原典の一冊すら入手する事は不可能だった訳だ。はは、何だ。私の人生は挫折ばかりだ。人生でもう三度も諦めてしまった」

誰が見てもそれは助からない傷だった。
彼の生命は風前のともし火、そう表現するのが正しかった。

「それでも、諦めきれなかったのだ……」

今から救急車を呼んでも手遅れである。
彼はここで命を潰える未来しか残されていなかった。

「ただ一つ、たった一つだけの事……だったのだが、なぁ……」

闇咲の閉じられたままのまぶたの奥から、優しすぎて弱すぎた涙がこぼれ落ちる。
唇の動きはゆっくりなっていき、やがて止まろうとした。
インデックスが息を呑む。
当麻は唇を噛み締めながら、何も出来ない自分に怒りを覚える。

（ちくしょう……）

終わりはハッピーエンド

「毎度ながら、貴方は随分と過激な事件に巻き込まれるのですね」

その言葉にインデックスと当麻はハッとなって声がした方を向く。
そこには、私服姿の優菜が立っていた。
二人の様子を無視して優菜は闇咲の元まで歩み寄る。

「貴方の出番は後ですよ。ここは私の出番です」

当麻を押しのけて優菜は何も言わず闇咲の前にひざまづく
ピチャリと血が音を立てて彼女が着ている服に染みこんでいく。

「随分と何かで無茶をされたようですが……まだ生きているので大丈夫ですね」

そっと優菜の手が闇咲の顔に触れる。
血で手も服も汚れてしまった優菜だが、それでも闇咲を助ける事を止めなかった。

「……何だ……これは」

やがて闇咲が自分の体の異変に気付く。
さっきまで断続的に続いていた痛みがスゥーと引いていくのだ。

「何故……だ。何故、私を助ける」

「私の前で死ぬ事は許しません。これは私の夢であり、貴方によって傷つけられたくないからです」

地面に倒れ伏している闇咲の問いに、優菜は間を置かず答える。
その答えに、闇咲はどこかで聞いた事があるように思えた。
すぐにその答えに気付く。

（そうか……私の考えは相手にとってこういう風に聞こえるのか……）

優菜の答えは闇咲が死にかけの女に対して考えていた事。
自分の夢のためだと言い聞かせていたが、聞いた相手にはこれほどの罪悪感を背負わせるのか。
その事に闇咲は気付いた。

「すまない……私は不法侵入をしている立場なのに……」

「不法侵入とかそんな『小さな事』など、どうでもよいのです。大事なのは貴方が『ここで死ぬべき人ではない』という事です」

そう言って優菜は闇咲から手を離す。

「もう体が動かないという事はないです。インデックスさんは引き受けますから、当麻は彼の想い人を助けてあげなさい」

立ち上がった優菜は、当麻の返事を待たずインデックスの元へ歩み寄る。

「そうそう、何故私がここにいるかの理由ですが……当麻の携帯は切れていませんから」

「……え？」

その言葉に慌てて携帯を取り出す当麻。そこには、通話中という表示がされていた。
どうやら今までの会話は全部優菜に筒抜けだったらしい。

「ふ、不幸だ……」

恐ろしいほど長い通話時間を見て、当麻はがっくりと肩を落とす。
今月の電話代は凄い事になりそうだ、そう当麻は思っていた。

「勘違いをしているようですが、通話をしてきた方は私ですよ？」

「あ……」

「お陰で今月の電話代はとても素敵な事になりそうです」

じゃあ通話を切ればいいじゃないか、そう言いかけた当麻だがぐっと堪える。
結果的に闇咲が助かり、万々歳な結果に終わったのだ。
多少の嫌味ぐらい軽く受け止めてあげるべきだと当麻は思った。

「少女よ……先ほど、その少年の仕事といったが……一体どういう事だ？」

立ち上がった闇咲が優菜に向かって質問を口にする。

「当麻の右手には異能の力を打ち消す力があります。彼の右手を使えば、貴方の想い人にかかっている『呪い』というのを打ち消す事が出来るのではと」

「な……何だと……？」

優菜の説明に当麻は軽く頭をかきながら言葉を発する。

「幻想殺しって名前なんだけどな。魔術だろうが超能力だろうが、触れただけで打ち消す事が出来る。多分だが、呪いなんて訳のわからねーモンも例外じゃねぇ」

「な、あ……馬鹿な」

呆然と当麻の言葉を聞いていた闇咲。
突然振って湧いたこの展開に、どういう反応をしてよいのか分からないようである。

「詳しい理屈は説明できねぇが、アンタだって一度見たろ。テメェの出した魔術を俺が打ち消すトコを」

そこで当麻はハッとなり、ある事に気付く。
この場に魔術を知らない人間が一人だけいた。

「……」

言わずと知れた優菜である。彼女は当麻に向かって怪しむ目で見ていた。
その眼光に全てを暴かれると感じた当麻は、思わず優菜からの視線に顔をそらす。

「今顔をそらしましたね、当麻。どうやら想像以上に厄介事を抱えているご様子で」

チクチクと刺さるような視線を受けながら、当麻は優菜の言葉に対して萎縮する。

「な、何のことでしょうか」

体から嫌な汗を流しながら当麻は否定の言葉を口にする。
すっと優菜の眼が細められると、当麻は更に萎縮していく。

「当麻、貴方程度が隠している事を私が知らないとでも思っているのですか？」

「なっ！　まさか優菜も魔術や魔術師の存在を知っているというのか！？」

優菜の言葉にギョッとした当麻は、思わず優菜の方を向き疑問を口にする。

「魔術……魔術師ですか。なるほど、学園都市では聞かない言葉ですから、それ以外の場所で聞く事が出来る言葉ですね」

だが、それはひっかけであった。気付いた時には後の祭りである。
当麻はたった一言でパニックになり、自ら自分の抱えている厄介事を口にしたのだ。
盛大な自爆とも言うが。

「まぁ深くは追求しないことにしましょう。代わりにしっかりと彼の想い人を助けてきなさい」

未だ呆然と立っている闇咲を見ずに、優菜は言葉を発する。

「が、頑張ります……」

当麻は思った。優菜の前では絶対に隠し事は出来ないだろうと。
そして一生彼女に対して頭があがらないだろうと。

「少女よ、そして少年と禁書目録。すまなかった、この恩は必ず返す」

姿勢を正すと、闇咲は三人に向かって深々と頭をさげる。
もう二度とチャンスは訪れないと思っていた。
そんな絶望の淵から掬い上げてくれた三人に、闇咲は感謝の言葉を述べる。

「まだ終わってないぜ。まずはその想い人を助けるためにアンタの協力が必要なんだぞ。世界でたった一人のアンタの力が」

ガリガリと頭をかきながら、当麻は闇咲に向かって言葉を発する。

「アンタだって助けたいんだろう、自分自身の手で」

「……あぁ……」

当麻の言葉に、深く頷きながら答える闇咲。
その瞳に、涙が流れている事に彼は気付いていなかった。

「ま、朝までに帰ってくればいいか。んじゃ、出発しようぜ！」

幻想殺しの教育係

当麻と闇咲を見送ると、優菜はインデックスを一方通行の家まで送り届ける。
途中、服を着替える必要があったが、概ね優菜の予定通りの時刻であった。
そしてそのまま家に戻らず、ある場所へと移動する。
その場所とは……。

「報告をきこう」

窓のないビルで、優菜はアレイスターと会談をしていた。
話す内容が電話などで出来ない学園都市でも極秘中の極秘扱いの話であった。
故に報告は電子類に一切残されなかった。

「闇咲逢魔氏による禁書目録氏の誘拐事件は上条当麻氏によって解決。禁書目録氏に危害はなく、特に問題はありません」

先ほどの事件を、優菜は詳細に報告する。

「上条当麻氏を連れて闇咲逢魔氏は学園都市を脱出。行き先は闇咲逢魔氏の想い人がいる場所。そこで呪いを幻想殺しによって破壊した後、上条当麻氏を連れて再び学園都市に戻ってくるでしょう」

「わざわざ侵入しなくても、ゲートを通って入ってきて欲しいもの

だ」

アレイスターの冗談とも本気とも取れる言葉に、優菜は眉をひそめる。

（侵入をわざと許し、そのまま当麻と闘わせようとした人間が、よくもまぁ抜け抜けと言えるものです）

元々闇咲の侵入に関してアレイスターはすぐに報告を受けていた。
受けていた上で、彼を泳がし当麻と闘わせる予定だった。
最も、魔道書の毒素にやられて闘うどころではなかったが……。

「『魔術師』が学園都市にいるのは困る、そう以前仰られていましたが？」

優菜が知っているだけでも、魔術側に与する人物はこの学園都市に多数存在する。
イギリス清教に所属するインデックスと土御門。
コルネリウス家の名を連ねるアリシア。
書類上で知っている『グループ』のエツァリと『メンバー』のショチトル。
その他にも、名前すら知られていない魔術師は沢山いる。

「手厳しいな」

優菜の皮肉にアレイスターは薄く笑って答える。

「なお、『アイテム』の絹旗最愛氏が介入しそうでしたが、こちらは電話相手に介入阻止を命じました」

闇咲がインデックスを拉致した時、その場には当麻の他に最愛と浜面がいた。
だが、アレイスターはあくまで当麻だけの解決を望み、その他の介入は抑えこむ方向で考えていた。

「以上で報告を終わります」

そう言うと優菜はアレイスターに一度頭を下げる。
優菜は従順な部下というわけではない。単に彼女はこういう仕事のスタイルなのだ。
相手がどんなに腐りきった存在でも、自分が礼を欠く行為はしない。ある意味、生真面目にしか見えない優菜だが、自分のスタイルを変えるつもりはないらしい。

「次の仕事は追って連絡をする」

その瞬間、結標が突如として姿を現す。どうやら、今回はここで終わりのようである。
もう一度頭を下げた優菜は、結標と共に窓のないビルを後にする。

さて、ここで優菜の状況を説明しなければならない。
優菜はどうして闇咲の名前を知っていたのか。
何故、アレイスターと会談をしていたのか。
本来は上司にあたる電話相手を命令できたのは何故か。
色々な疑問について一つずつ答えていこう。

優菜の立場は、他のレベル5と違いかなり異質な立場である。

暗部組織に身を置くだけなら、他にも存在している。
だが、優菜のみ暗部組織に身を置きながら、単身でアレイスターからの仕事を引き受けている。

その仕事とは、魔術側による事件へ介入した上条当麻をサポートする事。

ただしあくまでサポートを許されているのは優菜のみであり、他の能力者は介入してはいけない。
優菜は正式にはレベル５　第六位だが、学園都市内ではレベル０で通されている。
表立って魔術側の人間を攻撃しても、レベル０なら大きな問題にならない事を考慮しての結果だ。

アレイスターが優菜に執着した理由はここにある。
優菜は当麻から高い信頼を得ており、なおかつ当麻の足りない部分を補う事が出来る。
科学、魔術を問わず当麻を事件に関わらせれば、必ず優菜は関わろうとするだろう。
そして当麻に的確な助言を与え、成長を促す。

幻想殺しの成長スピードをはやめる駒としては最適なのだ。

故に優菜は暗部としての仕事を殆どしていない。
せいぜい事務処理や後方支援程度である。
垣根としては願ったり叶ったりだが。

そしてアレイスターは優菜に二つの物を与えた。
一つ目はアレイスターへの直通回線。
特殊な端末を利用する事で、アレイスターと直に話す事が可能であ

る。
この回線を使うと、ある程度の事は学園都市内で融通が聞く。
二つ目は優菜用に用意された特殊なアクセスコード。
学園都市内の情報端末に合法的にアクセスする事が可能になる。
警備員や風紀委員の報告書から、人工衛星がもたらす監視データまで。
このアクセスコードを使えば、電話相手に対して命令をを発令する端末を操作する事も可能である。

故に知っていたのだ、優菜はインデックスが拉致された事を。
魔術と魔術師、魔導書が何を意味する言葉なのかを。
全てを知った上で、優菜は当麻に対して敢えて知らないふりをしていたのだ。

当麻の携帯が繋がりっぱなしだったのも、単に切り忘れていたわけではない。
優菜が意図的に切断を取消したからだ。何故、そんな手間をかけたか。

この仕事を引き受けた時、優菜にはある懸念があったのだ。
何も知らず事情に介入する当麻が、傷つきながらも事件を解決した後の事が。
彼が一人っ子ならまだ良かったかもしれない。
だが、彼には帰りを待っている家族がいるのだ。
理由も分からず、傷ついた当麻を見て沈利たちが心穏やかにいられるわけはない。

だから優菜は決めたのだ。当麻の為に、先に道を切り開くことを。
例えるなら全く整備のされていない山道に、人が通るための道を作るようなモノ。

危険な獣がいるかもしれない、猛毒を持つ植物があるかもしれない。
そんな何も分からない場所を切り開き、人が通れる為の道を作る。

そうすれば当麻が不要なことで傷つくことはない。
だが、それは優菜がより多くの傷を請け負うこととなる。
それでも彼女は躊躇わなかった。否、躊躇うという考えすら浮かばなかったのだ。

（幻想殺しのような力は私にはない。だけど、力がないからとか無理だからという言い訳で、私は逃げることはもうしたくない）

窓のないビルを立ち去り、家にまで戻った優菜はベットに腰掛けながら考える。

（弓から放たれたカマイタチのような攻撃、盆踊りにしか見えない縄の張り方……）

監視カメラに映っていた闇咲の行動を思い出していたが、やはり魔術という存在に違和感を覚えずにはいられなかった。
幾ら知識があろうと、やはり初めて見るものに驚きを隠せない優菜であった。
気配を消して当麻と闇咲の行動を見ていたときも、内心は驚きの連続であった。

（やはり素手では危険過ぎます。自分を守るための武具が必要ですね……それも汎用性を捨てた私自身の為の武具が……）

持っている知識を総動員して、優菜は自分のための武具を考案していく。

（棒にナイフ……電子機器類にそれらを運搬するアタッシュケース……）

しかし単なる武具では、魔術師に対抗する事が出来ないかもしれない。

常識を覆す必要がある。そして、ふと思い出す。

身近に常識が通じないデタラメな存在を持つ人間がいる事を。

（出来るか不明ですが、未元物質を現存の物質に混入させる事が出来るなら……今までにない素材が出来るかも知れません）

そう思い至った優菜は携帯電を取り垣根に電話を掛ける。

この行動が、彼女に新たな力をもたらす結果になる事を、この時の彼女は気付いていなかった。

垣根と連絡を取り、未元物質の提供を取り付けた優菜は再びベットに腰をおろす。

優菜がここまで当麻を守ろうと考えるのは、ある理由があった。

幼き日の彼女は、沈利とある約束をしていたのだ。

幼少の頃から当麻と優菜は、無神経な大人たちに常に比較されていた。

しかし優菜は大人たちの思考を酷く嫌った。

幼少の頃から聡明な彼女にとって、大人たちの悪意が酷く気味の悪いモノに見えていた。

だから手を差し伸べた。
世界でたった一人であろうと、優菜は当麻に手を差し伸べたのだ。

そしてその行動は周りに変化をもたらした。一人っ子だった当麻には新しい家族が出来た。
言わずと知れた沈利たちである。それまで余り笑わなかった当麻だが、沈利たちが来てから変わった。
周りから蔑まれるのは変わらなかったが、当麻はいつも笑顔を浮かべていた。
何かを諦めた笑顔ではない、喜びに満ちた笑顔を浮かべていた。

当麻にとって短いながらも幸せに満ちた時間であった。
だけど、それが長く続くことはなかった。

当麻や刀夜、詩菜を変えた優菜の身に起きた『事故』によって。

「あの事故……か……」

優菜はそっと呟く。今ではあの事故を知っている人間は上条家以外いない。
そして当麻も記憶消失をして覚えていない。
優菜はあの事故の記憶だけ、当麻の記憶再生から意図的に外したのだ。
人生は良いことばかりではない。だから良い記憶だけ再生する事はしなかった。
そんな優菜ですら、あの事故だけは記憶再生から外したのだ。

「あの事を覚えてて、当麻が苦しむのは見たくありません。あれは……私が悪いのですから……」

目を瞑れば今でも思い出す事が出来る。

降りしきる雨の中。

泣き叫ぶ当麻、血だらけの優菜、そして地面に倒れ伏した大人二人。

優菜の両親が殺された凄惨な『事故』という記憶。

覚えててほしくない過去

沈利たちが上条家にやってきて一年が経とうとした頃。
その頃には、沈利たちと当麻は血が繋がっていないと思えないほど仲良しであった。
その光景に優菜は喜びと共にある一つの感情を抱いていた。

嫉妬である。

当麻を最も可愛がっていた優菜にとって、沈利たちに懐く当麻の姿に僅かな嫉妬の心を抱いていた。
それは彼女が自覚するほどではなかったが、それでも常に心の中で燻っていた。
ちりも積もれば、という言葉通りに彼女の心をじわじわと侵食していった。

それから更に月日が経ち、優菜が沈利たちに嫉妬していると自覚した頃。
彼女はある日、とある行動に出たのである。
ある日とは優菜の誕生日を祝う日であった。

刀夜や詩菜たち上条家と、優菜の両親を含めた全員で遊園地へと遊びに行く事になっていた。
ただし、優菜は沈利たちにあるお願いをしていたのだ。

その日だけは当麻と二人で遊ばして欲しい、と。

元より優菜なら問題ないと考えていた沈利たちはすぐに了解した。
刀夜と詩菜も、優菜なら当麻を任せれると思っていたので特に気に

はしなかった。

県外にある初めて行く遊園地。
優菜がその遊園地にこだわったのは、あるジンクスがあったからである。

夕焼けを見ながら観覧車に乗った二人は、いつまでも仲良しでいられると。

元々はカップルとかが利用するジンクスだが、優菜にはそれが理解出来ていなかった。
いくら聡明な彼女とは言え、年齢的には幼い子供なのだ。
それが恋心なのか、はたまた弟を可愛がる姉としての愛情なのかは彼女には分からなかった。

遠くにあるので当然ながら移動は車である。
優菜の父親が運転する車には、優菜の母親と優菜と当麻。
刀夜が運転する車には沈利たちと詩菜が乗っていた。

だが、刀夜も優菜の父親も初めて向かう場所なので、道に迷ってしまった。
幸い行き先は同じなので、現地で会おうという話になった。

道に迷うというアクシデントがあったが、優菜にはそれすらも嬉しいことだった。
やがて優菜の父親は、とある場所で休憩をとろうと考えた。
その場が彼らの命を奪う場所と知らずに。

優菜の父親は地図を広げて唸り、それを苦笑しながらサポートする優菜の母親。

当麻と優菜はジュースを買いに自動販売機まで行っていた。

そして二人が車に戻ると、奇妙な男が立っている事に気付く。
眼の焦点がぐらぐらと揺れていて、ぶつぶつと何かをつぶやいている。
優菜の両親はその男の存在に気付いていなかった。

その男が当麻を見据えると、突如として寄声を上げながらあるものを向けてきた。
銃、それも大型の獣を倒すための猟銃である。
男は躊躇うことなく一発目を発射する。
当麻を狙ったその弾は、結果的に当麻にあたる事はなかった。
何故なら、その直線上には優菜の母親が立っていたからだ。

銃弾を食らった優菜の母親は、何が起きたかも分からず倒れる。
優菜の父親も、優菜も、当麻も一体何が起きたのか理解できなかった。
男は迷わず二発目を構える。優菜を狙ったと思った優菜の父親は無意識のうちに自分を壁にする。
だがそれを見ても男は態度を変えなかった。無慈悲に猟銃を撃つ。

優菜の両親は即死だった。

二発目を撃つと、何かが起きたのか猟銃が破損していた。
舌打ちしながら男は銃を捨てると、懐からナイフを取り出す。
それまで呆然としていた優菜だがナイフの光る光景を見て理解が追いつく。

だが理解が追いついても、彼女は恐怖に震えるだけであった。
その場から逃げ出したい衝動に駆られる。だが、それはぎりぎりの

所で耐えぬいた。
彼女の腕には、当麻のぬくもりが感じられたのだ。それを捨てて逃げるなど、彼女には出来るはずもなかった。
恐怖にかられながらも、彼女は生き抜く為に何をするべきか考える。すぐ近くに棒が落ちているのに気づくと、彼女は迷わずそれを拾う。

優菜の行動にわずかばかり動揺した男だが、再びナイフ片手に無言で近づいてくる。

今でこそ武術を極めている優菜だが、この時は単なる少女であった。何をどうすればよいか分からなかった。だけど、たった一つだけは理解していた。

自分が当麻を守るのだと。

そして男と優菜の間合いが重なる。ナイフ片手に襲いかかる男。
優菜は無我夢中で男を攻撃する。
元々打たれ弱かったのか、当たり所がよかったのか男は一撃で沈んだ。
荒い呼吸をしながら、優菜は男を見下ろす。やがて棒を地面に落とすと、優菜は当麻を強く抱きしめる。
両親が死んだことをやっと理解した優菜は、その辛さを忘れるかのように当麻を抱きしめる。

だが、それが結果的に問題だった。

男は意識を取り戻すと、ナイフを優菜の背中に突き刺したのだ。
熱い鉄を押し付けられたかのような激痛が優菜を襲う。だが、その激痛に襲われながらも優菜は理解した。
この男の目的は当麻だと。彼女は自分の体を使って当麻を庇う。

それに逆上した男は何度も優菜を刺す。
血が飛び散り肉がえぐれたが、それでも彼女は倒れなかった。
やがて騒ぎを聞きつけた人たちに男は取り押さえられる。
そして誰もが現場を見て息を飲む。

あちこちにべっとりとへばりついた血の跡。
血の池の真ん中で、自分の体を犠牲にして一人の子供を守っている優菜。
腕の中で泣き叫ぶ当麻に対して、優菜がいった言葉はたった一つだった。

『もう……大丈夫……だから……』

その場にいる誰もが、幼き少女に聖母の面影を感じた。
それに呼応するかのように、晴天の空が突如として曇り雨が降る。
その光景に誰もが同じことを思っていた。

この雨は天が流す涙なのだと。

すぐに優菜は病院に運ばれる。
誰もが助からないと思っていたが、彼女は奇跡的に生きていたのだ。
しかし生きているだけで、意識があるという訳ではなかった。
生死の境を二ヶ月も彷徨った上に、普段の体を取り戻すのに半年以上を要した。

「両親を殺したのは当麻の不幸……大人たちはそう叫び続けた……」

唯一無傷だった当麻に、心無い大人たちは大声で罵った。

お前のせいで三人も不幸に見舞われたと。

「だけと違う。悪いのは私なのだ……」

生死の境から舞い戻った優菜は、暫くして当麻たちの現状を耳にする。

それは彼女にとって聞くに耐えれない内容であった。

元より疫病神と罵られていた当麻だが、優菜の事故を皮切りに凄惨ないじめが始まった。

それまではただ陰口を叩かれる程度だった。

だが陰湿な暴力が横行し、当麻はいじめによる怪我を負う毎日だった。

嘲笑いながら石を投げられた日もあった。

ある日には包丁で刺された日もあった。

全ては疫病神だからという理由だけで。

「あの事件が……沈利姉さんに当麻の怪我を過剰に嫌う理由となった……」

包丁で当麻が刺された事件の後、沈利は当麻の怪我を過剰に気にするようになってしまった。

異常とも取れる彼女の行動に、刀夜たちですら驚いたぐらいである。

「私が当麻を誘わなければ……沈利姉さんたちが暗部に堕ちる事もなかった。当麻も学園都市に来る必要はなかった」

当麻の現状を知った優菜は、ただひたすらある言葉を発した。
悪いのは愚かにも沈利たちに嫉妬した自分である、と。

「彼らの人生を狂わせたのは私の愚かな行動のせいだ！」

喉が潰れて声が出なくなっても、彼女は叫び続けたのだ。
ただ当麻を庇い、罪を全て背負おうとした。

だがそんな優菜の行動が、当麻へのいじめを加速させていた。
両親が殺され、更には自分すら死にかけていたのに、恨みの一つもこぼさない。
そんな彼女を見て、大人たちは当麻を嘲笑いながら責め立てた。

彼女を不幸にして悪いと思わないのか、と。

「ただ願えば手に入る……そんな、普通の生活だった……はずなのに……」

当麻への陰湿な暴力に耐え切れなくなった刀夜はある決断をする。
当麻を学園都市に送ると。

「私のせいで……あの人達が味わう必要のない苦しみを受けた……」

当麻が学園都市に送られる事をしった優菜は絶望した。
自分の行動一つで、家族がバラバラになったのだ。
沈利たちがついていくとはいえ、両親と離れ離れに過ごすのだ。
それは優菜にとって、最も辛い光景であった。

「……私は当麻を地獄へたたき落としてしまった……」

普通ならここまで自分で責任を背負おうと思わないだろう。
彼女の願いは可愛い子供のワガママ程度なのだ。
だが、彼女は子供にしては聡明すぎたのだ。
だから思ってしまったのだ。

自分さえあんな行動に出なければと……。

嘆き苦しみ、心の中で慟哭し続けた彼女はやがて一つの決断を下す。

自らの命をもって、当麻への贖罪を果たすと。

優菜と沈利の約束

自分の命をもって贖罪とする、と考えた優菜だがすぐには行動を起こさなかった。
当然である、優菜は自分がこの時期に命を落とせば、確実に当麻へ悪影響が出ると考えていた。
贖罪のためなのに、逆に追い込んでしまっては意味がない。

『幸いにも当麻は学園都市に行く。ならば、暫く時間をあければ問題ないはず……』

結論に至ると彼女は早速計画をたてる。
常人なら自分が死ぬための計画など恐ろしくて立てる事などできない。
だが彼女は既に自分の命に執着していなかった。
七人もの人間を不幸に落とした自分を、生きているだけで浅ましいとまで考えていたのだ。
生を捨てた彼女は、既に死人に等しかった。その時の彼女には生気というものが全く感じられなかったのだ。
誰が見ても同じ感想を抱いただろう。

ちょっとでもバランスが崩れれば、たちまち彼女は死へと誘われるだろうと。

当麻も沈利たちも刀夜も詩菜も、そんな優菜を見ていられなかった。
恨み言の一つでも言ってくれた方がまだマシだと思えたぐらいに……。

そんな優菜の姿に一番我慢がならなかったのが沈利である。

沈利はある疑問を抱いていた。優菜の態度は何かがおかしいと。
そして偶然にも見つけてしまったのだ。彼女が贖罪のために作り上げた計画の内容を。
日記と兼用していたのか、計画と共に優菜の思いが書き綴られていた。
当麻への恨み言の一つでもあると思ったが、実際は全く違ったのだ。
ただ自分の愚かさと、当麻たちへの謝罪で埋め尽くされていた。

沈利には理解できず、薄気味悪さすら感じていた。
だけど理解した。彼女は自分の命に全く執着していないと。
既に死への道を歩き始めていると。

計画が書かれたノートを優菜に叩きつけると、沈利は大声で優菜を叱る。
簡単に命を捨てる優菜に沈利は許せなかったのだ。
だが優菜の贖罪に対する気持ちは根深すぎた。
彼女は純粋で、そして誰よりも優しすぎたのだ。
たとえ神が彼女を許しても、優菜は自分が許せなかった。

そんな優菜を見て、沈利はある一つの約束をかわした。

『優菜の命は、姉である私が預かる。いつか当麻がどうしようもない事態に陥った時に、その命を当麻の為に捨てる事を許可する。だから私が許可するまで絶対に死ぬんじゃない』

それまで当麻を不幸から守るための力を手に入れよう、そう沈利は付け加えた。

その言葉を聞いて優菜は体に電撃が走るのを感じた。

今まで死ぬ事で贖罪を果たそうと考えていた彼女だが、その様な考えもあるのだと理解した。
優菜は計画を捨てて、当麻を守るための力を手に入れる事を決意する。
沈利との約束を胸に彼女は生きる事を決意する。

ある日を境に、雰囲気ががらりと変わった優菜を見て周りは困惑した。
だが彼女は周りを無視してひたすら突き進んだ。当麻を不幸から守るための力を得る道へ。
色々考えた結果、彼女は自分を極限まで高める事にした。
そうすれば、どんな事でも当麻を助ける事が出来ると考えたのだ。

当麻たちが学園都市に行く直前、優菜は当麻たちを自分の元に呼び出した。
そこで彼女は言った。私は聖カトリーヌ女学院へ行くと。
態々言ったのは誤解をされないようにするため。

自分の考えを語る優菜を見て刀夜は驚愕した。
彼女からは既に子供の雰囲気が全く感じられないと。
十にも満たない少女は既に子供を捨てていたのだ。
年齢こそ子供だが、その精神は既に大人顔負けなぐらい大人であった。

やがて優菜の語りが終わると、優菜は当麻を優しく抱きしめた。
愛くしむように、ただ優しく抱きしめた。

「お別れの直前、沈利姉さんはいった。当麻を守るための力が得れたなら、必ず私の元に帰って来いと……」

沈利は学園都市で、優菜は学園都市の外でそれぞれ当麻を守るための力を手に入れ始める。

科学については学園都市が最高峰だが、色々な総合評価をすれば聖カトリーヌ女学院は、日本でも有数の場であった。

勿論、それなりに教育費が必要である。

学園都市とは違い、聖カトリーヌ女学院には補助金などのシステムは存在しなかった。

優菜はそれを親の遺産と事故の時に得た資金で解決する。

「そして聖カトリーヌ女学院であらゆる知識を得た」

聖カトリーヌ女学院は、ある特殊な教育システムが存在していた。

義務教育は必須だったが、それ以外に教える学科は生徒が選ぶシステムだった。

色々な学科が存在し、中には奇妙な学科まで存在していた。

「必要のない知識と言われたものまで吸収し続けた……」

それを知っていた優菜は、ありとあらゆる学科を総なめにしていった。

校内では不人気だった学科ですら全て習得するほどであった。

「体も鍛えた、あらゆる武道を身につけていった」

お嬢様学校には似つかわしくないと思われがちな、武術方面も聖カトリーヌ女学院は揃えていた。

優菜はそこで体を鍛えあげていく。

勉学と違い、武術には持って生まれた才能というのが必要になる場合もある。
だが彼女は才能を揃えていた。そして才能がないと言われたら、それを努力で補っていった。
血の滲むよう努力で、彼女はない部分を補っていったのだ。

やがて十歳を少し過ぎた頃、聖カトリーヌ女学院は遂に根を上げた。
彼女に教える事はもうないと。
学園始まって以来の秀才に、誰もが驚きを隠せなかった。

それほど優秀な彼女を周りが大人しく見ているわけがなかった。
優菜を手に入れようと、こぞって彼女に話を持ち込んだ。

ある者は大金を手に彼女を手に入れようとした。
ある者は高い地位を彼女に与えて、彼女を手に入れようとした。

だが誰も彼女の心を動かす事は出来なかった。
優菜の目的はたった一つ、当麻を守る力を手に入れること。
自分が成功する事など最初から眼中になかった。

そして優菜は十二歳の時、一つの出逢いを果たす。
優菜が今でも敬愛する恩師との出会い。

ヴァチカンより訪れたその人物は、僅か数ヶ月だけという短い滞在であった。
だが優菜にとって、最も衝撃を与えた人物である。
もしもその出会いがなければ、優菜は今でも学園都市に来る事は無かっただろう。
優菜は自分を高める事をしていたが、心の持ち方は歪であった。

よく言えば淡白、悪く言えば冷淡にしか見えなかったのだ。

『貴様の心は死んでいるのである』

そんな彼女を諭した恩師は、優菜に色々な事を教え込む。
最初は反発した優菜だが、やがてそれが誤りである事に気付くと破竹の勢いで教えを吸収する。
僅かな滞在であったが、優菜を劇的に変化させた。

心の成長を成し遂げた優菜。それは、彼女の周りに変化をもたらした。
それまで取っ付きにくい人物と思われがちな優菜だったが、友人が多く出来るほどフランクになっていた。
最初は戸惑う周りだったがすぐに慣れていった。

「天上霊薬という能力が知りたかったのもありましたが……」

肉体と精神の両方が成長した優菜にある事件が起こった。
背中に残っていた傷痕が、綺麗サッパリ消えていたのだ。
医者からも絶対に消えることはないと断言されたほどの傷痕。

無意識とはいえ、彼女が初めて天上霊薬を使った瞬間であった。

天上霊薬の存在に気付いた優菜は、この力こそが自分の両親を奪った力と考えていた。
眼に見えていた事が、不幸にも優菜の勘違いを加速させていた。

「約束を果たすために学園都市に転校した……」

その時の優菜は、聖カトリーヌ女学院でも前例のない地位を築いて

いた。
聖母の化身とまで崇められた優菜を、慕う学生たちは数多くいた。
教師ですら、中には彼女を信奉する人もいた。
聖カトリーヌ女学院の中で、壮絶な影響力を誇る存在になった優菜。
だがまるで道端に捨てるかのように、優菜はその地位を捨てたのだ。
当麻を守る力を得たから沈利のもとへ向かうという理由で。

教師も、クラスメイトも、友人も、親友も、アリシアも引きとめようとした。
だが優菜の信念を曲げることは不可能であった。数ヶ月もかかったが優菜は周りを全て説得しきったのだ。
そして学園都市に転校する。

九月の初め、彼女は思いも寄らない事で当麻と再開を果たす。
そしてすぐに知る事となる。当麻は記憶消失になっている事を。

「私は今こそ約束を果たす時と確信した」

自分にある謎の力で当麻が救える、その事が分かると彼女は垣根へ力を貸す。
いくつもの苦難を乗り越え、優菜は遂に当麻の脳細胞を再生しきる。
しかし優菜には当麻の記憶再生について、一つの事が気がかりだった。

もしも、当麻に自分が拒絶されたりしたら。

当麻を知る人間には、馬鹿なと笑い飛ばされる事だろう。
だが優菜には大事だったのだ。
体を傷つけ、力すら失った優菜は自分の体が壊れる事より、当麻に

嫌われる事が怖かったのだ。

そして当麻を助けるための力が失くなったと思った優菜。
彼女は、また当麻と共にいられる居場所を失ったと考えていた。
学園都市が病院に軟禁していなければ、彼女は学園都市より姿を消しただろう。
再び当麻を守るための力を得るために。

居場所がないと思っていた優菜に、当麻は手を差し伸べた。
彼は優菜が初めて当麻にかけた言葉と同じ事を口にした。

『優菜、また明日も一緒に遊べるよな？』

居場所がないという優菜の幻想が破壊された瞬間であった。

そして十月、刀夜と詩菜が学園都市にやって来た時。
刀夜は家族の写真をとろうと言った。
それを聞いた優菜は、心の何処かで思った。

自分は写真に写ってはいけない存在だと。

だけどそれは違った。刀夜も詩菜も沈利たちも当麻も。

彼らは常に思っていたのだ。優菜も家族の一員であると。

例え優菜の両親が当麻の不幸で死んだ事が事実でも。
刀夜たちは優菜を家族の一員と思っていたのだ。

遂に刀夜たちは、優菜の幻想を完全に殺すことが出来た。
自分が背負うべき罪の十字架があると考えていた優菜の幻想を。

「私は馬鹿だったのですね。自分が罪を背負えば当麻は救われると勘違いしていた」

ベットの上にある写真立てを見る。
その写真立てには当麻たちと一緒にとった彼女の家族が写っていた。

「それがどれほど周りに苦痛を与えるかも知らないで……」

写真を手に取る。そして、ガラスの部分を愛くしむようにそっと撫でる。
暫く撫で続けた優菜は、やがて元の位置に写真立てを置く。
そして優菜はもうひとつの写真立てを手に取る。

「敬愛する恩師よ。貴方が言った言葉がやっと理解できたようです」

その写真には幼き姿の優菜と、彼女が恩師と呼ぶ人物が写っていた。

「ふふふ、貴方に再び逢えたら私はこう言うでしょう」

当麻たちの写真にした時と同じように優菜は写真を撫でる。

「別れの時にした約束は果たせましたよ……と」

優しき姉の気持ち

十一月のとある早朝。
東京都の三分の一を独占する学園都市は、少しだけ肌寒い空気に包まれていた。
人の姿もまばらで、ジョギングや犬の散歩をしている人たちしかいない。
あちこちに立つ風力発電のプロペラがゆっくりと回転している。
そんな爽やかな景色の中に、一人だけ威風を放つ人物が歩いていた。

「つ、疲れた……」

先ほどフルマラソンを完走してきましたと言いたげな風貌である。
上から下まで汗でぐっしょりと濡れており、衣服が肌に張り付いていた。

「ちくしょう！　魔術師ってのはどいつもこいつも強引に話を進めやがって！」

（滅茶苦茶だった……もう帰って寝たい……）

昨日インデックスを拉致した魔術師、闇咲と出会った当麻。
彼の想い人である女性を助けるために、学園都市の外へ出かけていたのだ。
どちらかというと出かけるより強行突破という表現が正しいが。

「あ、朝だ。ご飯作らないといけないんだ……」

さっきまで警備網を突破するという命がけの作業を行っていた当麻だが、時間は無情にも過ぎていくのであった。
今は早朝、彼は家族にご飯を作るという仕事が待ち構えていた。

「待てよ……俺って姉ちゃんたちに連絡したっけ……？」

疲労した頭で考えてみるが、やっぱり連絡した記憶がない。
つまり連絡なしで朝帰りである。

「……いや、優菜がいたはずだ。あいつなら連絡ぐらい入れてくれるはずだ！」

沈利による折檻を想像して寒気を覚えた当麻だが、その場にはインデックスの他に優菜もいた。
彼女なら何とか上手くやってくれる、そんな淡い期待があった。

そしてタイミング良く優菜から電話がかかってきた。

「も、もしもし！」

『おはようございます、当麻』

慌てて電話をとると、向こうから爽やかな声が聞こえてくる。
少々眠たそうな声だが、そんな細かい点にまで気付く当麻ではなかった。

『許可証もなしにゲートの通行は感心しませんね。先ほど警備網を担当している方から連絡がありましたよ』

最初から反論不可の状態であった。
いくら闇咲の件があるとはいえ、ゲートの強行突破を行ったのである。
さすがに家族の方へ連絡がいったようだ。

『幸いにも私が最初でしたので、後ろから手を回して不問にしてもらいました。よかったですね、沈利姉さんに伝わっていなくて』

「えぇぇ！　ちょ、いいのかよ！？」

基本的に学園都市は鎖国状態であり、人や物の出入りに厳しい。
それを二回も強行突破した当麻である。
レベル５などの重要な位置にいる人間ならともかく、当麻は扱い的にはレベル０だ。
幻想殺しがあるとはいえ、後ろからもみ消しが受け入れられるほど重要な人間とは思っていない。

『罰を受けたいのなら、私が用意する宿題を五倍にする事で手を打ちましょう。それとも少年院に入りたいのですか？』

「どちらもご遠慮します！」

即効で現状を受け入れる当麻。
優菜が出す宿題は、基本的に覚えていれば出来るような代物ではない。
きちんと頭を使って問題を解く必要がある。そんな宿題が五倍に増えるわけである。
当麻は言いようのない恐怖を感じていた。

『後はそうですね。きっと沈利姉さんに連絡してないーと思ってい

そうですが正解です。私が連絡を入れていなかったら危険でしたね』

現実は甘くない、そういう事である。

『しかし私が連絡を入れてもなお、沈利姉さんは激怒していましたよ。多少の説教は覚悟する事ですね』

そう言うと優菜は当麻の返事を待たず通話を切る。

無機質な電子音を聞きながら、当麻はここにはいない闇咲に向かって叫んだ。

今が恩を返す時ですよー！っと。

「こそ～っと」

結局、忍び寄るように家に入った当麻。だが、彼は馬鹿なのか気付いていない。

玄関が普通にあけれた事に関して。

「お・か・え・り」

廊下に仁王立ちしている沈利とばったり出くわした。

ゲームで言うならゲームオーバー扱いである。

ビクっとなり背筋を伸ばした当麻は、全身から汗が大量に吹き出し

ていた。
沈利の声はのっぺりと、ものすごく平坦であった。

「当麻、ただいまは？」

「あ、あのですね。沈利姉ちゃん、これは」

言い訳という泣き言を口にしようとしたが、残念ながらそれは許されなかった。

「た・だ・い・ま・は？」

再びのっぺりとした平坦な声で当麻に声をかける。
少しだけ俯いている沈利は、前髪に隠れて表情が良く見えない。
だが当麻には分かる。今の沈利に逆らったら人生に重大な危機が訪れる事を。

「……ただいま」

「当麻、コッチに来なさい」

無言でリビングのソファまで移動すると、自分の隣を指さす沈利。

「い、いや、今汚れて……」

「コッチに来い」

「はい」

何とか逃げようとした当麻だが、沈利に勝てるはずもなく。

大人しく沈利の言うとおりにする以外なかった。

「さて、当麻。今から言い訳タイムだ、言いたいことがあるなら聞いてやる」

足を組んで沈利は当麻を見据える。

普段なら脚を組む沈利にドキドキする当麻だが、今は逆だった。

当麻は知っている。沈利の蹴りの威力を。

体を鍛えている浜面を、たった一発で数メートル宙を舞わせたその力。

本気で蹴られたら一発で気絶する自信があると当麻は思っていた。

「えっとですね！」

全身汗グッショリだった当麻だが、ここにきて別の汗を流し続ける。

「最も、嘘を付いたら……オシオキを覚悟しておくことね」

「ぐ、具体的には……」

「そうねぇ……三ヶ月間お小遣い無しとか？」

「正直に話しますので、どうかご勘弁を！」

完敗であった。当麻には勝利などあり得なかったのだ。

「えーっと、昨日の夜はインデックスって子と浜面と最愛で外食をしました」

しかし魔術については喋るわけにはいかないと考えていた。

「そこへ変な能力者が襲ってきて……俺がターゲットだったので、皆を逃がすために途中で分かれました」

何故なら、魔術師と超能力者は闘ってはいけないのを知っていたから。

当麻はレベル0だが、沈利はレベル5である。その影響力は桁違いなのだ。

「その能力者は俺の幻想殺しを目当てにしていました」

魔術に関する点を除いて、当麻は沈利に今日のことを説明する。

ある程度嘘を混ぜてはいるが、部分部分で真実を混ぜている。

「精神能力系の子が暴走して意識不明なので……幻想殺しで破壊させようと思ったようですが……知らなかった俺は逃げてしまったので」

だからそれっぽい話が出来ていると当麻は思っていた。

「紆余曲折の挙句、何とかその子を助けて終わったのが朝……です」

（魔術師の事いえないけど……これでいけるかな？）

「とうまぁ～」

だがそれは当麻の思い違いであった。沈利は最初から当麻の話を疑っていたのだ。

それは当麻が嘘を付く癖を知っていたから。

「は、はい！」

「あたしはいいったよね。嘘は許さいって」

「ぐっ！？」

沈利は当麻の襟首を掴み強引に立たせると、じっと当麻を睨む。

「最愛からの話と違うよねぇ……最愛がいうにはその男の目的は『当麻』じゃなくて『インデックス』って子だよなぁ」

「……」

その言葉にハッとなる当麻。彼は忘れていたのだ、インデックスが拉致された時、その場に最愛と浜面がいた事を。

「……そんなに沈利お姉ちゃんは頼りにならないってか。あたしじゃ当麻を助ける事は出来ないってか……」

怒りの色と僅かに悲しみの色をない交ぜにした瞳に、当麻はギョッとなる。

沈利が僅かだが弱音を吐いたのだ。その事に当麻は激しく動揺する。

（魔術のことは言えない……言えば確実に巻き込んでしまう。それだけは……）

「……巻き込みたくないんだよ……」

いくつもの考えが浮かんでは消え、結局当麻が出した答えは隠す事

だった。
沈利は僅かに視線を下に向けており、その表情を伺うことは出来ない。

「俺はもう十分巻き込まれている。だけど、何も知らない沈利姉ちゃんたちを巻き込みたくない」

だが当麻は気にせず自分の考えを口にする。
他人が不幸になるのは我慢ならない。

「だから……言えない」

だけど自分の大切な家族を巻き込みたくない。
何故なら、当麻にとって家族とは守るべき最終ライン。
家族を失うことは、当麻にとって自分が死ぬ事とイコールなのだ。

「当麻、誤魔化してるんじゃねぇ」

だけど当麻は一つ間違っていた。その考えは沈利にも当てはまるのだ。
沈利も家族を失うことは、自分が死ぬ事とイコールなのだ。

「関係ねえよ!!　カァンケイねェェんだよォォォ!!　幻想殺しがあるからって図に乗ってるんじゃねぇぞ!!」

壁に当麻を叩きつけると、沈利は激昂しながら大声で叫ぶ。
背中の痛みで一瞬呼吸が止まった当麻だが、沈利の顔を見て言葉を失う。

「テメェみたいな無能力者があたしらにナマ言ってるんじゃねぇ！

！　あたしらを巻き込ませたくない！？　巻き込まれたからってあたしらがどうにかなると思ってるのか！！！！　あたしらを馬鹿にするんじゃねぇぇぇぇ！！！」

沈利は泣いていたのだ。ポロポロと大粒の涙を流しながら、当麻に向かってあらん限りの声量で叫んでいた。

「何で一言も相談してくれねぇんだよ！？　頼れよ！！　あたしらを頼れよぉ！！　なんで自分一人で背負い込むんだよ！！」

時に優しく、時にワガママで、時に甘えてくる。
誰よりも凛々しいと思っていた沈利が、恥も外聞もなく涙を流し続けた。

「辛いなら辛いって言ってくれよ！！」

その事実に当麻は愕然とした。
大切だと思っていた家族を、大好きな姉である沈利を。

他ならぬ自分が傷つけて泣かせてしまった。

ハンマーで頭を殴られたような衝撃を当麻はうけた。
沈利は当麻の胸に顔を埋めると、そのまま声を殺して泣き続けた。
対して、当麻はただ呆然と立ち尽くすしか出来なかった。

「当麻……あたしが当麻の怪我を嫌がる理由を覚えているか？」

暫くして沈利はそのままの体勢で当麻に問いかける。
きっと目は真っ赤になっているのだろう。そう思っただけで当麻は胸に痛みが走った。

「当麻の背中にはね、包丁で刺された傷があるのよ。あたしはね、その時に当麻の近くにいたのよ……」

当麻の返事を期待していないのか、沈利は当麻を無視して語り始める。

「まだ単なる少女だったあたしはね……その包丁を見て足がすくんだのよ……」

それは沈利にとって辛い過去。出来れば思い出したくもない過去。

「動けなかった、声が出なかった……ただ呆然と当麻が刺されるのを見ていただけだった……」

しかしそれでも沈利は何かを当麻に伝えようとした。

その事が分かった当麻は、沈利の言葉をただ黙って聞いていた。

「背中を滅多刺しにされようと、当麻を庇い続けた優菜のような行動があたしには出来なかった！」

「……」

その記憶は当麻にはない。

だが、当麻は漠然とだが理解した。

幼き日に自分は優菜によって守れた事を。

「思い知らされたよ。優菜は当麻の『姉』だったんだって……ちゃんと当麻を守っていたんだって……」

フルフルと肩を震わせながら、沈利は語り続ける。

「だからね、あんたが傷ついて帰ってくるのを見ると、自分がちゃんとお姉ちゃん出来てないんじゃないかって思ってしまう」

その声が幾分涙声になっていたが、当麻はあえて気付かないふりをした。

「自分勝手な思いだってのは十分わかっている。身勝手な想いを押し付けているのも……」

「……そんな事ねぇよ……」

ギュッと沈利を抱きしめた当麻は、はっきりと沈利の考えを否定する。

一瞬だがビクっとなった沈利。だが、当麻のぬくもりを感じた後は、その身を当麻に預ける。

「俺は本当に馬鹿だ」

やがて当麻はポツポツと語る。

沈利は自分の思いを語った。だったら次は自分が語る番だと思ったからだ。

「ははは、何だよ。俺は家族を守っていると言いながらただ傷つけてただけじゃねぇか」

沈利を抱きしめる力をさらに強くする当麻。それに呼応するかのように、沈利も当麻の背中に手を回して抱きしめる。

「情けねぇ……本当に情けねぇよ……」

巻き込みたくないと言ったが、それは単に自分の心を守りたかっただけなのだ。
自分が辛い思いをしたくないから、沈利たちを遠くに押しのけようとした。
その事に当麻は気付いた。

結局は、自分の愚かな幻想を守りたかっただけなのだ。
例え家族が傷ついても、目を逸らしながら。

当麻は右手で自分の頭をコツンと叩く。
表面上は何も変わらないが、当麻の心の中では何かが壊された。
数回の深呼吸の後、当麻は沈利に言った。

「聞いてくれ、沈利姉ちゃん。昨日の夜、俺に起きた事を……」

【番外】第伍章を終えて判明した原作と相違点

第伍章を終えて判明した原作との相違点。後、その他諸々。

・上条当麻

1．成績が少しずつだが上がっている。
2．魔術側に余り関与していなかった。
3．浜面をよく不幸にする。
4．『歩く教会』を破壊するが、自覚していない。

・上条優菜

1．暗部組織に身を堕とす。
2．ローマ正教に恩師と呼べる人物がいる。
3．アレイスターと直接交渉権を有する。
4．魔術と超能力のどちらにも当てはまらない系統の力を有する。

・一方通行

1．小萌にとても甘いから、想像を絶するほど甘くなる。
2．無自覚で小萌家のお父さん的ポジションになる。

・垣根帝督

1．優菜も守るべき存在と認識する。
2．心理定規にだけは、よく馬鹿な事を言っている。

・御坂美琴

1．当麻に対して素直になる。
2．ツンとデレを使い分ける。

・アリシア・フォン・コルネリウス
1．魔術師だが、どの系統も当てはまらないほど特殊。

・アクゼリュス
1．存在自体が恐怖と畏怖の象徴のようなもの。
2．魔術世界では有名。敵対しないように避けられていた。

・その他
1．優菜の為に、暗部協定が組まれる。
2．浜面はロリコン強姦魔のレッテルをはられる事となる。

第六章予告

『隣人を愛する者同士が互いにいがみ合うとは、随分と素敵な職場だな』

――――――――――――――――――学園都市総括理事長　アレイスター・クロウリー

『――――――本気か？　それを本気で言っているのか！？』

――――――――――――――――――暗部組織『グループ』土御門元春

『お金はあるんだけど、ご飯がある店を知らない……』

――――――――――――――――――魔道書図書館　インデックス

『あの……大丈夫……？』

――――――――――――――――――霧ヶ丘女学院　風斬氷華

『冗談ですよ、風斬さん』

――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位　上条優菜

突如として起こった教会世界に属する魔術師からの襲撃。
それは科学世界と教会世界の関係を崩壊させる序章であった。

『写真シールですね』

――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位　上条優菜

『戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの』
――――――――――――――――――――――イギリス清教の魔術師
シェリー＝クロムウェル
『クソったれ……あんなトン単位の巨重の塊をどうすれば止められるんだよ』
――――――――――――――――――――――幻想殺し　上条当麻
シェリーによる学園都市への襲撃。彼女は戦争を欲していた。
彼女が狙った人物は、思いがけない人物であった。
『……どう、して……？』
――――――――――――――――――――――霧ヶ丘女学院　風斬氷華
『待たせちまったみたいだな』
――――――――――――――――――――――幻想殺し　上条当麻
『友達を助けるのに理由が必要ですか？』
――――――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位
上条優菜
『……は？』
――――――――――――――――――――――イギリス清教の魔術師
シェリー＝クロムウェル
友達だから助ける。その想いが二人を動かし、やがてその二人の想いが周りを動かす。

『硬き事ね。なに？』

――――――――――――――――――――イギリス清教最大主教

ローラ＝スチュアート

『最大主教、貴方はどうしてそこまで馬鹿な喋り方をしているのですか？』

――――――――――――――――――――イギリス清教の魔術師

ステイル

『おいこら、インデックスを拉致とかテメェもロリコン魔術師かよ』

――――――――――――――――――――幻想殺し　上条当麻

『恐れ入りますが学園都市に向かうためには、どのバスを利用すればよいのでございましょうか？』

――――――――――――――――――――ローマ正教　オルソラ＝アクィナス

『私でよければ相談に乗りますよ？』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位

上条優菜

『あ、は、はい』

――――――――――――――――――――ローマ正教　アニェーゼ＝サンクティス

『けどまぁ、やるってんなら仕方がねぇ。今日がお前さんの命日だ』

――――――――――――――――――――天草式十字凄教教皇代理

建宮斎字

『法の書』を巡る事件。
ローマ正教はオルソラ奪還を遂行すれば引くと思われたが……。

『だから、そもそもどうして力を手に入れる必要があんのよ？』
――――――――――――――――――――天草式十字凄教教皇代理
建宮斎字

『なるほど……そういう事か……』
――――――――――――――――――――イギリス清教の魔術師
ステイル

『迷う必要はありません。友人が危険に晒されているのですよ？』
――――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位
上条優菜

『ナニ笑ってんですか、あなた』
――――――――――――――――――――ローマ正教　アニェーゼ＝サンクティス

『一体……何を恨めば、よいのでございましょうか？』
――――――――――――――――――――ローマ正教　オルソラ＝アクィナス

死の淵に落とされるオルソラ。
その事に気付いた当麻と優菜。二人はオルソラを助けるために動く。
不条理な話に決着をつけるために。

『騒いでんじゃないですよ、ばかみたいに見えちまいますよ』

――――――――――――――――――――――――ローマ正教　アニェーゼ
＝サンクティス
『まさか……！』
――――――――――――――――――――――――魔道書図書館　インデックス
『ローマ正教だからな』
――――――――――――――――――――――――優菜の妹　アリシア・フォン・コルネリウス
『決着は貴方がつけなさい』
――――――――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位
上条優菜
『……決着をつけるぞ』
――――――――――――――――――――――――幻想殺し　上条当麻
ローマ正教の魔術師シスター部隊との対決。
『申し訳ねぇですが、聖母様には我らと一緒に来てもらいます』
――――――――――――――――――――――――ローマ正教　アニェーゼ
＝サンクティス
『これが運命と言うのなら、私はあえてその運命に逆らってみましょう』
――――――――――――――――――――――――学園都市レベル５第六位
上条優菜

『久しぶりなのである。上条優菜』

――――――――――――――――――――――――優菜の恩師

『二十人ものシスターを……一瞬で……！』

――――――――――――――――――――――――ローマ正教　ルチア

『法の書』事件後、アニェーゼ部隊は立ち去ったかにみえたが……。
彼女たちはある人物を、最後に連れ去ろうとした。
しかし、そこに現れる優菜の恩師。
その力は優菜の恩師に相応しいぐらい圧倒的だった。

第六章予告（後書き）

第伍章　完結です。
次話より第六章に突入。

学園都市への侵入者

窓のないビルにいるアレイスターは、上がってきた報告を眺めていた。

「侵入者か」

ポツリとアレイスターは呟いた。

眺めている報告、それは学園都市へ侵入した人物についての情報である。

闇咲と同様の魔術師が、また学園都市へ侵入をしたのだ。

だが闇咲とは決定的に違う事があった。

「イギリス清教の魔術師、幻想殺しの進化には最適だな」

その魔術師はイギリス清教に所属する魔術師だったのだ。

本来、学園都市に魔術師が侵入する事自体、教会世界と科学世界の間に大きな亀裂を作る事となる。

闇咲が大きな問題にならなかったのも、彼が単なる流れの魔術師であったからだ。

「天上霊薬――――上条優菜」

だがそれを分かっていてなおアレイスターは魔術師を放置していた。

短く呟くと、アレイスターは優菜にコンタクトを取る。

『おはようございます、学園都市総括理事長様。この電話に連絡が入ったという事は、新たな仕事が出来たという事ですか？』

少しして一つのモニターが表示されると、どこかから優菜の声が聞こえる。
映像は表示されていないので、音声通話のみのようである。

「理解が早くて助かるよ。先ほど魔術師が学園都市に侵入した。幻想殺しと共に魔術師を排除したまえ」

『……魔術師は魔術師によって倒さなければならない。そのような暗黙のルールがある筈ですが？』

既に教会世界と科学世界の情報に詳しい優菜は、魔術師の排除を命令された事を訝しげに思った。
少し前に闇咲と絡んだが、あの事件はあくまで偶発的に絡んだだけだ。
今回のようにこちらから排除をしようとした訳ではない。

「君なら分かるだろう。無礼を働いたのは教会世界の人間だ、それなりの歓迎をしてあげねばならん」

『……了解しました』

「理解出来たなら早速行動したまえ。詳しい情報は追って連絡をする」

そう言うと、アレイスターは通話を一方的に切る。
そして彼は約束通り、イギリス清教の魔術師に関する情報を優菜に送る。

（……さて、そろそろか）

優菜に行う全てのことが完了したと思った瞬間、タイミングを合わせたかのように唐突に二つの人影が現れた。
一人は土御門、もう一人は結標である。結標は会釈をすると、すぐにその場から消える。

「警備が甘すぎるぞ。遊んでいるのか？」

突き放すような響きを含んだ口調で、土御門はアレイスターに不満を言う。
傍目から見てもイライラしているのがよく分かった。

「構わぬよ。侵入者の所在は常に追跡している。これを使えば、少しの変更でプラン二〇八二から二三七七まで短縮で――」

最後まで言い切る前に、土御門は手に持っていたレポートをガラスの円筒へ押し付ける。
パンっと小気味良い音があたりに響き渡る。

「言っておくが、今回は流れの魔術師ではない」

クリップで止められた隠し撮りのような写真には、侵入者の姿が写っていた。
年は二十代後半に見え、金色の髪と褐色の肌が特徴的な女性だった。

「シェリー＝クロムウェル、イギリス清教『必要悪の教会』の人間だ」

イライラした口調を隠そうともせず、土御門は言葉を発する。

「アウレオルスの時はアクゼリュスが処分した。だが、今回も同じ

様にいくとは限らない。あの魔女は気まぐれだし、何よりどちらに力を向けるか想像すら出来ない」

その姿は無理な喫煙をして、ニコチンが足りなくなった時の様子に似ていた。

「お前とて分かっているだろう。人の作る組織である以上は一枚岩なぞ存在しないと。それはイギリス清教にだって当てはまる」

しかしアレイスターはそんな土御門の様子を、薄く笑いながら見ていた。
その事が更に土御門を苛立させる。

「構成の特性上、十字教の中でもあれほど複雑に分岐した国教は他にない」

「隣人を愛する者同士が互いにいがみ合うとは、随分と素敵な職場だな」

アレイスターの皮肉に、土御門はまったくだと呟く。
ため息を吐きながら土御門は更に言う。

「それ故にイギリス清教も様々な派閥と考えがある。学園都市協力派だけとは限らないぞ」

一つの意思として纏まっているように見えたイギリス清教も、実際は複雑な思惑が飛び交っていた。
学園都市協力派もいれば、全世界を英国の植民地にして全ての国旗のデザインを一つに統一したいと考える人間もいる。

「お前がウチのお姫様と結んだ『協定』にしても、どこまで役に立つかは分からん」

イギリス清教と学園都市のトップ同士が決めた『協定』すら問題視する者もいる。

インデックスという魔道図書館を、学園都市の内部に置いておくが、情報漏洩の危険をはらむに違いないと。

「隣人を愛せという教えがあるはずだが、随分と好戦的な人間ばかりなのだな」

「……『騎士団』の中には十字軍時代の侵略精神をそのまま引き継いでいる派閥もあるからな」

忌々しげに土御門は言葉を吐き捨てる。

彼が情報操作をしなければ、学園都市討伐運動を起こしかねないほどであった。

「大体、アウレオルスの時でさえ散々あちこちに手を回していただろうが。最も、アクゼリュスの名を出せば誰もが黙ったがな」

魔術師が学園都市で倒されたという情報が、教会世界の人間にあらぬ疑惑を生み出した。

だが、その情報の後に「アクゼリュスによって倒された」という文が付け加えられると、たちまち疑惑の波は引いていった。

教会世界にとってアクゼリュスとはジョーカー扱いなのだ。

彼女を手に入れれば、大天使を手に入れたと同意義である。

故に彼女を手に入れる、または彼女を討伐するという行動が一時期教会世界で流行った。

しかしそれがどれほど愚かな行為だったか、教会世界はその身を持ってしる。

ある小さな組織は、彼女を手に入れようと躍起になった。
しかしそれは逆に彼女から敵対行為とみなされ皆殺しにされた。
それも単に組織が壊滅したわけではない。
組織の人間から、その組織の親族、果ては一度会話した程度の友好関係の人間まで。
中には生後数カ月の赤子がいたが、女子供でも容赦しない彼女は、文字通り『皆殺し』にしたのだ。

ローマ正教は過去にアクゼリュスの討伐隊を組織した。
しかし実際彼女を倒すことは出来ず、それ所か討伐隊全員の首を教会に飾られるというお返しを貰った。
教会の壁にはべっとりと血が塗りつけられており、その血でローマ正教を皮肉った言葉が書き綴られていた。

そして、それはイギリス清教も同様であた。
過去に討伐隊を組織したが、ご丁寧にも無残に殺された死体を磔にして飾られるという結果になった。
それもイギリス清教総本山のカンタベリー寺院で。

多大なる犠牲を払って教会世界は理解した。
彼女をコントロールする事など不可能だと。
名も分からない少女を、教会世界は皮肉を込めてこう名付けた。
残酷を冠する夜の魔女　アクゼリュスと。

それほど恐怖と畏怖の対象となっているアクゼリュスだからこそ、

学園都市という科学世界の場所にいても誰も文句を言わない。言えば殺されるのは分かっているからだ。だからこそ、土御門はその情報を流し教会世界を黙らせた。

「お前は何を考えている？　本腰を入れて警備に力を入れれば、いくらでも侵入を阻止できたはずだ」

舌打ちしながら、土御門はアレイスターに文句をいう。

「とにかくオレはシェリーを討つぞ。いくらスパイとは言え、魔術師であるオレが倒せば、少しは波も小さくなる」

盛大に溜息を吐きながら、アレイスターを睨む土御門。

「もうスパイは廃業だ。ここまで派手に動けば必ず目をつけられるからな。まったく、お前のせいで大変――」

「君は手を出さなくて良い」

嫌味の一つや二つでも言ってやろうと考えてた土御門だが、アレイスターの一言でそんな思考はどこかへ消えた。

理解できなかった。アレイスターがその言葉を言った意味が。

「君は手を出さなくとも良いと告げた」

呆けた顔をする土御門に認識させるかのようにアレイスターは言う。

「――――本気か？　それを本気で言っているのか！？」

アレイスターに気が狂ったのかと言いたげな土御門。

だが、そんな土御門を見てもアレイスターは普段どおりだった。

「アレイスター、お前は何を考えている？　上条当麻に魔術師をぶつけるのがそんなに魅力的か？　あの右手は確かに魔術に対するジョーカだろう。だけどな、あれだけで教会全体の破壊など出来るわけがないだろ！」

「プラン二〇八二から二三七七までを短縮出来る。理由はそれだけだが？」

土御門は息が詰まるのを感じた。
アレイスターの言葉に出てくる『プラン』という言葉の意味は……。

「虚数学区・五行機関の制御法か……」

忌々しげに呟く土御門。
虚数学区・五行機関、学園都市に対して絶大な影響力を持つ『ソレ』。
『ソレ』は誰にも制御できず何のためにあるのかさえ分からないまま学園都市に潜んでいる。

学園都市を治めるアレイスターとしては、全てのものを利用してでも五行機関の制御を掴む必要がある。
その制御に必要な材料を揃えるための手順が『プラン』という事になる。

「その程度のために」

「この街の軍事力や影響力を考えれば、その程度などとは呼べないはずだがな。暴れ馬の手綱はできるだけ速く掴み直したほうが無難

だろう」

喜ぶようにも嘲るようにも憐れむようにも楽しむようにも見える笑みを、アレイスターは浮かべる。

土御門は舌打ちをした。この場に呼ばれた理由をやっと理解したのだ。

いくらアレイスターの命令とはいえ、土御門は無視する可能性があったからこそ、この窓のないビルに閉じ込めたのだ。

生活に必要な全てのものを生成しているから、このビルには出口がない。

「外と連絡がつくはずもない、か」

アレイスターの浮かぶ円筒器に背を預けると、土御門はアレイスターに質問をした。

「お前、本当に戦争を未然に回避する自信があるのだろうな？」

科学世界と教会世界に明確な力の差はない。

ならば、戦争になったら泥沼化するのは眼に見えていた。

そんな戦争に、自分の大切な人たちが巻き込まれるのは我慢ならなかった。

「安心したまえ。幻想殺しとシェリー＝クロムウェルを闘わせるが、最終的には魔術師によって倒される」

「……なんだと？」

学園都市にいる魔術師の何人かは知っているが、どう考えてもシェリーを倒せるような人材ではない。

それに、魔術師にもそれぞれ組織が後ろに控えている。
組織を無視して行動を起こすようには思えない。
そう考えていた土御門は、その事に該当しないある人物が思い浮かんだ。

魔術側の人間でかつ組織に所属しておらず、シェリーを倒せるような人物。

「まさかっ!?」

慌ててアレイスターの方を向く土御門。

「そろそろあの娘にも駒として動いてもらおう」

驚愕した顔を浮かべる土御門を見て、アレイスターは薄く笑いながら言った。

魔術を知った超能力者たち

とある学区の廃ビルに、三人の人物が集まっていた。
学園都市レベル5第一位の一方通行、同じくレベル5第四位の麦野沈利。
そして本来はレベル5第六位の上条優菜。優菜のみ、対外的にレベル0であるが。

「コンな所に呼び出して、一体何の用なンだ」

よく分からない理由で呼び出された一方通行は不満を口にする。
人の言う事を素直に聞く事自体が驚きだが、これも小萌の教育のおかげである。

「まぁまぁ、一方通行さん。ひとまず話を聞いてからにしましょう」

そんな一方通行を優菜は宥める。
舌打ちをした一方通行は、頭をかきながら呼び出した人間に視線を向ける。
その視線の先には沈利が立っていた。

「あたしとしては優菜だけでも良かったんだけどな」

一方通行の疑問に適当に答える沈利。

「そういう訳にもいきません。多分ですが、一方通行さんも知っていると思います」

「だから、一体なンの話なンだよ？」

いい加減話をして欲しいと思っていた一方通行。
イライラが手に取るように分かるほど、彼は口調が荒くなっていた。

「知ってたらでいいんだがな。お前らは……」

そこで一旦言葉を切ると、沈利は数回の深呼吸の後に言葉を発した。

「魔術って知っているか？」

一方通行は少しだけ驚いた顔をした。
魔術に関係を持っているとは思えない人物が、魔術について尋ねてきたからだ。

「へぇ……優菜はともかく第一位は馬鹿にしないんだな」

一方通行の様子に少しだけ驚く沈利。
彼からは沈利を馬鹿にする雰囲気は感じられなかった。
学園都市、それもレベル５が魔術というオカルトチックな言葉を口にしたのだ。

「……お前らよりは知ってるからな。魔術ってやつを……」

「沈利姉さんが言うからには、学園都市の外でやっているような事と違うのですね」

優菜の質問に沈利は無言で頷く。

「ちょっと前に当麻から聞いたんだ。あたしらとは違う世界の力を持つ連中の話を」

「……」

その事件は優菜も知っている。

自分の愛する人を助けるために、インデックスを拉致した人。

彼女の中に記憶されている一つの魔導書を求めた人間、その名は闇咲逢魔。

「最初はあたしも当麻がイカれたのかと思ったさ」

「……でも違ったンだよな」

「ああ……正直言って驚いたさ」

少しだけ笑みを浮かべると、沈利は一方通行と優菜を見て言った。

「そこでひとつの提案がある」

「……断る」

話を聞く前から一方通行は沈利の話を切り捨てる。

その事に驚きと怒りを滲ませた沈利だが、一方通行は無視して話し始める。

「おおかた三下が巻き込まれた時に、俺らで手助けするンだろ。だ

が、残念ながらそれは無理な話なンだ」

「……何でだよ」

一方通行は面倒くさそうにため息を吐くと、沈利の方に視線を向ける。

「言っただろ、お前らよりは魔術には詳しいと。俺ら超能力者が魔術を使う人間を倒すと厄介な事になンだよ」

「厄介な事ですか？」

この中で実は一番詳しい優菜が、一方通行に質問をする。
彼女は沈利から魔術という単語を聞いた時から、協力を申し出る事は分かっていた。
だが、それは危険なのだ。
当麻のようにどこにでもいるレベル０が闘うのと、レベル５が動くのでは影響力が桁違いなのだ。

「科学世界である俺らが、魔術世界に生きている連中を倒すとだな。互いの世界に大きな亀裂を生むンだよ」

「……そんな連中は片っ端からブチ殺せばいいじゃねぇか」

一方通行の言葉に、沈利は軽く笑みを浮かべながら答える。
だがそんな沈利を見て、一方通行は盛大なため息を吐く。

「身を持って知ったンだよ。魔術世界には俺をも倒せるような化物がいるンだって事がな」

かつてアクゼリュスに倒された一方通行。その勝負は一方的だった。
否、勝負と言ってもいいか分からないほどであった。

「もし互いの世界に亀裂を作れば、それはやがて戦争へと発展するンだよ。そうなれば、俺たちが守りたい人間に危害が及ぶ」

「……」

「だからお前の話には賛成できねェンだよ」

反論したかったが一方通行の言っている事も沈利は理解できた。
互いの力量に差がなければ、戦争になった場合に泥沼化するのはすぐに理解できる。
そうなれば自分の大切な人だけではなく、全く関係ない人たちまで危害が及ぶことになる。
見知らぬ他人を犠牲にしてまで、当麻を守りたいと思えるほど沈利は冷淡ではなかった。
拳を作ると、それを強く握る。

「ふむ……ならば、私なら動きやすいという事ですね」

そんな沈利を見て優菜は言葉を発する。
その言葉に一方通行と沈利が反応し、視線を優菜に向ける。

「学園都市が何を考えて私を対外的にレベル０にしたか分かりませんが……私なら動きやすいという事ですよ」

訝しげに思った一方通行だが、ふとある事に思い至った。

「……確かに三下もレベル０だ。それなのにお咎めがないという事

は……」

「レベル0なら、魔術側の人間と闘っても大きな影響はない」

一方通行の言葉に、沈利が言葉を付け足す。

その言葉を聞いて優菜は無言で頷く。

「そういう事です。沈利姉さんとしても当麻が傷つくのは嫌なのでしょう？　でしたら、私に任せてくれませんか」

元より当麻の教育係に割り当てられている優菜だが、その事を沈利と一方通行は知らない。

「確かにそれならありだなァ……三下の制御には優菜が一番適任なンだし」

「そうねぇ……他の女ならブチ殺すが、優菜なら安心だしな」

優菜の提案に、二人は異論を挟まなかった。

この会話の流れが、優菜にとっては計算通りと気付かずに。

（嫌な女です、私は……）

少しだけ自分に嫌悪しながらも、沈利と一方通行に向かって笑顔を浮かべる。

「ま、それならよろしく頼むぜ」

軽く肩を叩きながら、沈利は優菜に向かって言う。

優菜はそんな沈利に向かって微笑みながら頷いた。

「話は変わるンだけどな、優菜が手に持っているアタッシュケースには一体何が入っているンだ？」

この頃の優菜は実験だの何かの研究だので、一方通行の治療と理后の治療の時以外は殆ど姿を見なかった。

そして今日、久々に会った時から妙なアタッシュケースを手に持っていたのである。

沈利と話している時でさえ、手放していなかった。

その事に一方通行は少しだけ訝しげに思っていた。

「まだ試作段階ですが、これは未元物質を素材とした武具です」

アタッシュケースを掲げながら、優菜は一方通行の疑問に答える。

未元物質、レベル５第二位が生み出すこの世に存在しない素粒子（物質）。

「未元物質……メルヘンが生み出した物質か。それで作り上げたってか？」

「ええ、正確には未元物質によって歪められた物質で、ですがね」

そう言うと優菜はアタッシュケースをあける。

そこには膨大な資料と思わしき紙と、二振りの大型ナイフ、それか

ら折りたたみ式の棒らしきものが入っていた。

「ナイフ……というよりマチェットに近いな。全長五十センチぐらいあンぞ」

「未元物質を使用した弊害なのでしょうか。現状ではこのサイズ以下に出来ないのです」

苦笑しながら優菜はナイフを持つ。
それは優菜の手にしっくりと収まるように作られていた。
一方通行がもう片方のナイフを手に持ってみたが、違和感しかえられなかった。

「汎用性は完全に捨てています。私以外が手に持てば違和感しかえられないはずです」

「……確かに持ちにくいな。使いにくくて手放したい感覚に襲われる」

そう言うと、一方通行はナイフをアタッシュケースに置く。

「こっちは棒だが……大体二メートル近いな。どうやって使うんだ？」

「互いに接合させていけば、自然と一本の棒に変貌します」

沈利は言われたとおりにやって見る。少し苦戦したが、折りたたみ式のものはやがて一本の棒に変化した。
少し振ってみたが、接合部分が折れるような雰囲気は全くなかった。

「……便利だな、未元物質」

さすがは常識を知らない第二位が作る物質、と沈利は心の中で思っていた。

こういう折りたたみ式は、接合部分がとても弱くなるケースが多い。

だが、未元物質の特性なのか接合部分が全く見当たらなかった。

最初から一本の棒と言われれば納得するほどの。

「学校を最近来なかった理由はこれなンだな」

「そういう事になります。私のワガママとはいえ、毎日遅くまで垣根さんを拘束していたのは悪いと思っていますが……」

そう言いながら優菜は棒とナイフをアタッシュケースに仕舞う。

アタッシュケース自体も未元物質で出来ているのか、頑丈そうなイメージが漂っていた。

「しかし、タイミングが良いです。これを使えば当麻を守れますね」

沈利と一方通行に向かって優菜は言った。だが、その言葉は嘘であった。

元々、この武具は当麻を守るためだけに考案されたモノであった。

そしてそれを使うのは優菜限定というおまけ付きで。

（ごめんなさい、沈利姉さん。そして一方通行さん）

その謝罪は何に対してか、優菜にも分かっていなかった。

風斬氷華

平日の昼間からフラフラしているインデックス。
不良学生にしか思えない行動だったが、彼女は学校に通う学生ではない。

学園都市には似合わない白いシスター服を着ているインデックス。
少し前に『歩く教会』を破壊され、安全ピンで止めていたはずだった。
だが既に安全ピンは取り払われており、アイアンメイデンの姿は脱却したようである。

「さすがゆうな。歩く教会は失ったけど、前と同じようにしっくりくるんだよ」

どうしてシスター服を直せたか疑問に思わないのがインデックスであった。
そんな事より大事なことが彼女の頭を支配していた。

「お腹すいた……」

その言葉と同時に、お腹から可愛らしい音が鳴り響く。
お腹を抑えつつインデックスはポケットから紙幣を取り出す。

「お金はあるんだけど、ご飯がある店を知らない……」

勿論、インデックスのご飯を用意しない小萌ではない。
ちゃんと昼食用のご飯は用意されていた。
しかし、それをおやつ感覚で食い上げてしまったインデックス。

自業自得なのだが、それが分かっていても彼女のお腹は待ってくれなかった。

「うちどめは病院で調整だし、この時間だときっとゆうなも学校……」

家によくいるもう一人の住人は、朝早く病院に行っていた。
その為、家にはインデックスひとりだけであった。

「うぅ……お腹すいたよ」

腹を押さえながら再び呟くインデックス。
そんな彼女の肩を、何者かが軽く叩いてきた。

「あの……大丈夫……？」

一方通行と沈利と別れた優菜は、一人街を歩いていた。
沈利たちに食事をどうだと誘われたが、彼女はそれをやんわりと断っていた。
それはある仕事があったからである。

（イギリス清教の魔術師、シェリー＝クロムウェル……）

今朝方、アレイスターより勅命を受けた優菜だが、勿論言うとおりにする気はゼロだった。

当然である。彼女は当麻を守る為に力を手に入れているのだ。
その当麻をわざわざ危険地帯に送り込む事などするはずもない。
先にシェリーを見つけて、素早く舞台からの退場をして頂こうと考えていた。

（幸いにも相手は不法侵入者。警備員に渡せばそのまま学園都市の外に追放されます）

相手は魔術師なので、学園都市内での拘束はご法度である。
それだけで教会世界との亀裂を作ってしまう。
だが、合法的にゲートを通っていないシェリーなら話は別だ。
学園都市の法に従って拘束・外への追放を行う事が可能である。
もし警備員が長く拘束しようとすれば、上位から命令文を発令すれば問題ない。

（イギリス清教ですから、インデックスさんを狙っている可能性が高いかと……）

シェリーが何のために学園都市へ侵入してきたかが分からないが、優菜的にはインデックスの奪還と考えていた。

（そう考えると、インデックスさんとコンタクトをとり行動を共にするのがベターですね）

他にも何か思惑があると考えていた優菜だが、現状の情報ではこれが精一杯である。
何しろえられた情報は『イギリス清教の魔術師であるシェリー＝クロムウェルが学園都市に侵入した』だけである。
それ以上の情報は、優菜には上がってきていなかった。
たったそれだけでインデックスが危険と推理した彼女の頭脳には驚

かされるが……。

「あ、ゆうなー！」

インデックスとコンタクトを取ろうと考えた優菜だが無駄に終わった。

何しろ本人が優菜に向かって走ってきているのだから。

「ゆうなー！」

勢い良く優菜の胸へ飛び込んでくるインデックス。

あっけに取られた優菜だが、何とか勢いに負けることはなかった。

「がっこう？だったかな、それはどうしたの？　ゆうな」

「本日は実験の付き添いでお休みを頂いています。予定より早く終わったのでこれから食事にいこうかと考えていました」

食事、という単語にインデックスが反応する。

と、同時に盛大にお腹の音が鳴る。

「～～～～っ！」

一瞬で耳まで真っ赤になったインデックスだが、時既に遅しであった。

その音は優菜の耳にまで届いていたのだ。

彼女はクスクスと笑いながら、インデックスの頭を撫でていた。

「一緒に食事へ行きますか？」

優しく微笑みながら囁く優菜に、インデックスは無言で頷く。

「あ、そうだ。お友達も一緒にいっていい？」

「断る理由などありません。食事は人数が多いほうが楽しいですから」

インデックスは優菜から離れると、少し遠くにいた少女に手を振る。一瞬ビクっとなった少女は、オドオドとしながらインデックスの元まで歩み寄る。

「紹介するね。お友達のひょうかだよ！」

「わ、私は……風斬氷華って、言います。えと……あなたは？」

ビクビクと小動物みたいに震えていたが、ゆっくりと深呼吸をして自己紹介をする。

「私の名前は上条優菜。よろしくお願いします、風斬さん」

そう言って優菜はすっと手を差し出す。

一瞬、キョトンとした表情を浮かべた風斬だが、その態度が握手を求めていると分かると、慌てて優菜の手を握る。

（ッ！？）

風斬と握手した瞬間、優菜はある違和感を感じた。微妙なズレだったが、それでも優菜は困惑した。

ほんの一瞬だが優菜は肩をピクリと震わせた。インデックスは気付かなかったが、風斬は気付いていた。

「あ、あの……何か悪いことしたのかな？……私……」

優菜の反応を怒っていると勘違いした風斬は、更にビクビクと小動物みたいに震えていた。

「……いえ、貴方の手が案外冷たかったのでビックリしただけです」

「え、えー……っと」

「冗談ですよ、風斬さん」

そう言って朗らかな笑みを浮かべながら優菜は風斬の手をぎゅっと握る。

（……この娘は悪い子じゃない）

ホッとした表情の後、風斬は可愛らしい笑みを浮かべていた。

「よ、よろしくお願いします。優菜さん」

「おー。ゆうな、これがウワサの地下世界なんだね」

学園都市にある地下街を見て、インデックスは子供のようにはしゃ

ぐ。
あの後、インデックスと風斬と優菜で食事をとる事となった。
しかしインデックスの食事量を見て、風斬は食欲を減退して結局サラダをつつく程度になった。

「地下街ですよ、インデックスさん」

「あ、あの……優菜さん。えっと……その……」

何か言いたいけど、口にしていいかどうか迷っている。
そんな表情で風斬は優菜を見ていた。

「遠慮は無用ですよ」

「あ……でも……その……」

「今日は記念日ですからね！」

優菜は風斬の手を取るとそのまま走りだす。
こけそうになった風斬だが、何とかバランスを取りなおした。
呆気に取られたインデックスだが、やがて理解が追いつくと二人を追いかけるように走りだす。

「き、記念日って……？」

優菜が言った記念日の意味が分からず呆けた顔をしながら走る風斬。

「私と風斬さんが友達になった日ですから」

誰もが見惚れるほど美しい笑顔で、優菜は風斬の疑問に答えた。

闘いの前の平穏な時間

優菜が風斬とインデックスと楽しく遊んでいた頃。
当麻は全く逆の憂鬱な気分になっていた。

「ふ、不幸だ……」

手に持っている用紙を眺めながら、当麻はがっくりとうな垂れる。
真っ赤なバツマークがついたその用紙は、なんと抜き打ちテストの結果であった。

この頃、優菜は別件で当麻の家庭教師を一時停止していたのである。
中途半端にやるより、ここは一旦止めにして時間が取れるようになってから再開する。
そう優菜は提案してきた。
勿論、家庭教師が止まっている間も勉強は忘れないようにと釘をさしながら。

しかし素直に勉強をする当麻ではなかった。
遊ぶ時間が増えたという訳で、当麻は勉強を忘れて遊び呆けたのだ。
垣根、土御門、青髪ピアスの面々で。

当麻は忘れていたのだ。
垣根はそもそも自分が通う高校レベルでは、一切勉強しなくても問題ないことが。
青髪ピアスは小萌先生に叱られたくてわざと悪い点をとる事を。
土御門が悪い点を取っても、誰も叱らないという事を。

存分に遊び呆けてた結果がこの様である。

とてもではないが、優菜に見せれるような代物ではない。
どうしようか迷っていると、向こうからすごい勢いで走ってくる人物が見えた。

と、同時に真横を通り抜けていった。

「おっと！　当麻じゃねぇか！　どうした、根性ない顔をして」

正体不明の爆走人物は、音速レベルで走っている軍覇であった。
あれだけ凄いスピードで走っているのに、軍覇は一切汗をかいていない。

「あー軍覇か。実はテストの点が悪くてな」

「テストなんて根性があれば大丈夫だ！」

脳天気に笑う軍覇を見て、当麻は少しだけ気が楽になった。
うじうじ悩んでも結果は変わらない。なら、次に活かせばいいだけさ。
そう当麻は考えた。勿論、次に活かせれるかは別の話になるが。

「そうだな！　テストなんて根性があれば大丈夫だな！」

テスト用紙を強引にカバンに仕舞い込むと、当麻は天に向かって拳を突き出す。
その姿に、軍覇も釣られて拳を突き出す。

「根性があれば大丈夫だ！」

「そうだぞ、当麻！」

男二人は拳を突き上げながら笑いあった。
周りから訝しげな視線を向けられている事にも気付かずに。

軍覇に携帯電話の話をしたら「根性がないので走っているとすぐ壊れる」という回答。
音速の衝撃に耐えれる携帯などあるか、そう当麻は心の中で突っ込んだ。

そして軍覇と別れて、当麻は地下街にまでやってきた。

「さーて、どこで遊ぼうかな」

さっきまで次のテストを頑張ると決意した当麻。
だが彼は普通の高校生、まだまだ遊びたい盛りなのだ。

「お、上条じゃねぇか。奇遇だな」

適当にブラブラと歩いていると、横から肩を叩かれた。
声のした方を向くと、見知った顔がニヤリと笑っていた。

「ん？　浜面か、元気しているか」

話しかけてきた人物が浜面と分かると、当麻は笑みを浮かべながら言う。

「まーな。よく麦野たちの無茶に付き合わされるが、かねがね元気だぜ？」

「はっはっは、俺はテストの点が悪くて泣きそうだ」

どちらともなく歩き出すと、二人は笑いながら最近の自分について話す。

傍から見れば単なる少年二人にしか見えないだろう。

だが、片方は幻想殺しという意味不明な力を持つ。

もう片方は学園都市の暗部に身を置く。

色々と複雑な事情を持つ少年たちであった。

「なんだ、お前って家庭教師がいたのかよ」

「おう、けど最近は忙しいのか停止気味だ」

「どうせお前の事だから、この隙に遊びまくるぞーって魂胆だろう」

「バレたか」

当麻と浜面はゲーセンの前に立つ。

浜面は親指でクイッとゲーセンの入り口を指さす。

「じゃあ俺と勝負しねぇか？」

ニヤリと挑発的な笑みを浮かべる浜面。

「ほほぅ、上条さんに勝てると思っていますのか？」

安っぽい挑発にあえて乗る当麻。

二人は互いに睨み合う。

「浜面、その勝負――――――」

当麻が口を開くが、最後まで言い切る事は出来なかった。
何故なら、彼の肩に手を置く人物がいたからだ。

「テストの点が悪かったのに、随分と余裕ですね？　当麻」

ビシリッと体が硬直した。
体中から嫌な汗を流しながら、当麻は恐る恐る後ろを向く。
そこには普段は決して見せないような黒い笑みを浮かべた優菜が立っていた。

「ふ、不幸だ……」

「なぁ上条……この美少女と知り合いなのか？」

ヒソヒソと当麻に聞こえるだけの声量で、浜面は当麻に話しかける。

「ああ、俺の従姉妹だよ。言っておくが優菜には手を出さないほうがいいぞ？」

「なんでだよ。あんな美少女と知り合えるなんて、一生に一度あるかないかのチャンスだぞ！」

当麻の発言が気に入らなかったのか、少し怒りを込めて詰め寄る浜面。
そんな浜面に、当麻は面倒くさそうな雰囲気で呟いた。

「優菜と沈利姉ちゃんは大の仲良しなの。下手な男が優菜に手を出したら、原子崩しで真っ二つだぞ？」

その言葉に真っ青になる浜面。彼は誰よりも原子崩しの威力を知っていた。
暗部組織『アイテム』の下部組織の一員である浜面。
沈利たちを送り迎えする役目の彼は、『アイテム』の仕事風景を知っている。
故に原子崩しの恐ろしさが身にしみていた。

「……うん。どう考えても真っ二つじゃすまない。原子レベルまで裁断されるな」

「だろう？」

浜面と当麻はうんうんと互いに頷きあう。
そんな男性陣を、女性陣は生暖かい目で見ていた。
唯一、風斬だけがオロオロとしていたが。

「とうまとしあげって……似たもの同士なんだね」

「片方の殿方は存じ上げませんが……あの雰囲気では似た者同士なのですね」

盛大に溜息を吐く優菜とインデックスであった。

「と、所で優菜とインデックスは何をしているんだ？　それと後ろの子は？」

「私も当麻の隣の方は存じ上げませんね。ここは自己紹介といきましょう」

そう言うと、優菜は姿勢を正して浜面の方を見る。
といっても元から歩く姿すら優雅さを出している優菜である。
多少姿勢が崩れていても、何も問題はなかった。

「私の名前は上条優菜。隣にいる上条当麻の従姉妹にあたります」

「……あ、えっと。浜面仕上です」

（麦野と仲良しって聞いてたからどんな子かと思ったけど……ものすっげぇお嬢様じゃねぇか！）

内心ビクビクしていた浜面。
彼は骨の髄まで沈利の恐怖が染み込んでいた。

「こちらは私の友達の風斬氷華さん」

優菜の声に一瞬ビクっとなった風斬だが、やがてびくびくとしながらと頭を下げる。

「あ、あの……風斬氷華……です」

「ん？　ああ、上条当麻だ」

風斬の視線に気付いた当麻は、何気なく自己紹介を口にする。
だが、何故か風斬の肩がビクリと震えた。
と、同時に当麻は優菜から睨まれる。

「私の友達を怖がらせるとは感心しませんね、当麻」

「ちょっと待て！　別に怖がらせるつもりはないぞ！」

大声で否定するがそれが問題であった。
当麻の声にビックリした風斬は、目尻に涙を浮かべ始める。

「怖がる事はないですよ、風斬さん。当麻はデリカシーのない男性ですが、女性に危害を加えるような人でなしではないですよ？」

そう言って、そっと風斬を抱きしめて頭を撫でる優菜。
最初は涙を浮かべていた風斬も、やがて安心したのか甘えるような感じで優菜に抱きつく。
美しい少女たちの友情である。
だが、男性陣は別の事に頭を支配されていた。

（胸が……胸が押しつぶされて……上条さんにはありえない幸運ですよ……）

（何あのパラダイス。男なら一度は挟まれたいな……）

良くも悪くも本心に素直な二人であった。

用事があるという浜面と別れた当麻たちは、そのまま地下街をブラブラと歩く。
当麻もそのまま立ち去ろうとしたが、残念ながら優菜に阻止されてしまった。

『今回は見逃しますが、遊び終わったら勉強をしますよ？』

逃げる事は不可能、そう思った当麻は大人しくついて行く事にした。

「ねーねー、ゆうな。これって何なのかな？」

「写真シールですね」

「この写真を撮るのには、どうすればいいの？」

「えっと……ここに、お金を入れて……ボタンを押して、五秒後に……」

三人の美少女たちのはしゃぐ声が聞こえる。当麻はある意味で羨ましい立場にいた。
その為、男性たちからやっかみの視線をチクチクと受けていた。
殺気すら向けられていた当麻は、がっくりとうな垂れていた。

（不幸だ……）

楽しそうな光景の少し後ろで、当麻は突き刺さる視線に一人愚痴を零していた。

「色々と種類がありますね。では、ここは風斬さんに決めて頂きましょう」

「わ、私！……えっと……え～っと……」

「ひょうか！　可愛いのをお願いね！」

楽しそうだなと思った当麻だが、女性陣の中に突撃するほどの勇気は当麻にはなかった。
間違いなく追い出される。そう当麻は思っていた。

やがて写真を撮り終えたのか、出来上がった写真シールを見てはしゃいでいた。
といってもインデックスだけだったが。

「はい、ひょうかとゆうな」

インデックスは、十五枚一つづりの写真シールを切り取り線に従って五枚ずつに分割する。
そして分割した写真シールを、優菜と風斬に手渡した。

「写真シールというのは、余り経験がありませんが良いものですね」

「優菜さんは……その、こういうのは嫌い……なんですか？」

写真シールを眺める優菜に、風斬はおずおずと質問を口にする。

「嫌いではありません。単に機会がなかった……そういう訳です」

少しだけ寂しそうに笑う優菜を見て、風斬はぎゅっと拳に力を入れながら言う。

「あ、あの！　わ、私でよければ……いつでも、その……こういうのは……と、友達と気軽に撮るモノ……だから」

風斬の言葉に少しだけ驚いた優菜。
優菜から見れば、風斬は自分の意見を余り言わない性格だと思っていたからだ。
オロオロとしながらも、風斬は優菜を見ながら更に言葉を発する。

「わ、私なんかと……と、友達なんて……嫌かも知れないけど……その……」

自分で言っていて悲しくなったのだろうか。
風斬は小動物のような瞳に、涙を溜めながら言う。

「自分を卑下してはいけません」

そんな風斬を優菜はそっと抱きしめて優しく嗜める。

「あう……」

「私と風斬さんは友達ですよ。例え何があろうと、どんな事が起ころうと、それが変わる事は決してありません」

優菜は優しく風斬の頭を撫でる。
まるで母親のように、慈しみを込めて頭を撫でる。
最初はビックリしていた風斬だが、やがて目尻に涙を溜めると優菜に強く抱きつく。

「怖いのですね。でも、大丈夫です」

恐らく優菜自身も風斬が何に恐怖を抱いているか分かっていないだろう。

だが、それでも優菜は自信を持って答えていた。

大切な友達が不安にならないようにと。

「ゆうなって時々だけど、聖母のように見えるね」

「……そうだな」

当麻とインデックスは、そんな二人を微笑ましく眺めていた。

だが、彼らの日常は長く続かなかった。

日常に割り込んできた、非日常の手によって。

『――――見ぃつっけた』

それは女の声だった。女の声は妖艶だが、どこか錆び付いていた。

四人は声のした方に視線を向け、そして硬直する。

壁に掌サイズの茶色い泥がへばりついていた。

ただ、それだけなら驚くに値しない。

問題はその泥の中央に、人間の眼球が沈んでいたのである。

ギョロギョロと、眼球はカメラのレンズのようにせわしなく動く。

『うふ、うふうふうふふ。禁書目録に、幻想殺しに、虚数学区の鍵。

余計なのが一匹いるが、よりどりみどりで困っちゃうわ』

そこで一旦言葉を区切ると、退廃的な声は一転した。

『ま、全部ぶっ殺しちまえば手っ取り早えか』

それは粗暴な声色だった。

当麻は、この奇妙な乱入者が何者か判断しかねた。

だが優菜は、乱入者の素性に気付く。

（イギリス清教の魔術師、シェリー＝クロムウェル……）

「土より出でる人の虚像。そのカバラの術式、アレンジの仕方がウチとよく似てるね。ユダヤの守護者たるゴーレムを無理矢理に英国の守護天使に置き換えている辺りなんか、特に」

そしてその推測は当たっていた。

インデックスは壁にへばりついた泥と眼球を一秒も待たずに切り捨てた。

その言葉の中に『ウチとよく似ている』という言葉の意味する事は明らかだった。

（幻想殺しは当麻、禁書目録とはインデックスさん。ならば、虚数学区の鍵と言うのは……風斬さんか……）

虚数学区という単語が何を意味するか優菜は分からなかった。

初めて聞く単語だし、内容をイメージする事が難しい。

（殺害……ですか。なるほど……何か企んでいるようですが、そんな『小さい事』など考える必要はありませんね）

優菜はアタッシュケースの持ち手を強く握る。

（私の家族である当麻を、友人であるインデックスさんと風斬さんを狙うなら……容赦はしません）

「えっと……もしかして……テロリストさん？」

唯一、状況を分かっていない風斬がオドオドとしながら言葉を発する。

風斬の言葉に、泥は妖艶な笑い声を発する。

『テロリスト？　テロリスト！　うふふ。テロリストっていうのは、こういう真似をする人たちを指すのかしら？』

その言葉と同時に、泥と眼球は弾け壁の中に溶けて消えた。

と、同時に地下街全体が大きく揺れた。

「なっ！」

当麻はその振動に耐え切れず、思わずよろめいた。

転びそうになったインデックスが風斬に抱きつく。

唯一、優菜のみ普段どおりに立っていた。

そして再び地下街全体が大きく揺れた。まるで砲弾が直撃したような揺れであった。

爆心地は当麻たちより遠いが、その余波が一瞬で地下全体に拡がっている感じだった。

二度の地揺れに、それまで普通にのんびりと歩いていた一般人がパニックを起こした。

まるで暴走した猛牛の群れのように、我先にと出口へ殺到する。

蛍光灯が二、三度ちらついたと思った途端、いきなりすべての照明が消えた。
少しして非常灯の赤い光が薄暗く周囲を照らし始める。
出口に人が殺到していると、今度は低く重たい音が響き始めた。
やたらと分厚い鋼鉄の城門が、出口を遮るように天井から落ちてくる。

（警備員が動いているのですか……）

人の波を遠巻きに眺めながら、優菜は冷静に現状を分析していた。
シェリーは機会を伺っていたのだ。地下街で効果的に『何か』を演出するために。

『さあ、パーティを始めましょう』

ぐちゃりと潰れた泥から、女の声が聞こえた。
既に壊れた眼球の最後の断末魔のように言葉を発した。

『土の被った泥臭ぇ墓穴の中で、存分に鳴きやがれ』

その言葉と同時に、一際大きな振動が地下街を揺らした。

当麻と優菜、インデックスと風斬はその場を離れた。
空調が切られたのか、地下の温度はぐんぐんと上がっていった。
だから人が密集している出口付近を避け、なるべく人の少ない場所へと移動した。

「他の出口を探そう」

当麻はそう提案したが一秒もたたず優菜に斬り捨てられた。

「残念ですが出口があるとは思えません。それに、今は無駄に歩きまわるより体力を温存する方が得策です」

「でもっ！」

徒労に終わるかもしれないと分かっていたが、当麻は諦めきれなかった。

そんな当麻に、優菜は人差し指を当麻の唇に押す。

「いいですか、当麻。貴方はよくても、インデックスさんや風斬さんは普通の女性なのです。蒸し暑い地下街を歩きまわって、体力の消耗を招いてどうするのですか？」

少しは黙って考えなさい、という意味も込められているのか。

優菜は少しだけ指を強く押す。その事に、少し赤くなりながらも当麻は頷く。

「分かった……まず落ち着ける場所を探そうか」

「冷静になりましたね。それでよいのです、焦っていても良い事態にはなりません」

優菜がそう言って微笑むと、風斬がいきなり優菜の腕に抱きついた。

それも目尻に涙を浮かべながら。

「う～～～～～」

そして風斬は何故か当麻を睨んでいた。
それは、まるでおもちゃを取り上げられた子供のように。

「な、何故に上条さんは風斬に睨まれているんですか！？」

女性が泣くと理由はわからなくても自分が悪いと思ってしまう当麻。
なんとか宥めようとする当麻だが、残念ながら風斬は当麻を威嚇するだけであった。

（可愛らしい子ですね）

そう思っていた優菜は、慌てる当麻をクスクスと笑いながら見ていた。

「笑っていないで、助けてくれー！」

誰もいない地下街に、当麻の悲痛な叫び声が反響した。

風斬を落ち着かせると、優菜は今までの状況を整理しようと考えた。

（侵入者の報告は警備員や風紀委員にも流れていましたが……何故、地下街にいる事が分かっていたのでしょうか）

シェリーが地下街を爆破か何かした後の、警備員の行動は早すぎた。

まるで最初から、シェリーが地下街にいるのを知っていたかのようだった。

（恐らく学園都市総括理事長様が、情報を警備員や風紀委員に流したと考えるのがベターでしょうね）

自分に回ってこなかった理由も、優菜は理解していた。
恐らく『自分に回すと当麻と魔術師を闘わせない』と判断したからだろう。
そう優菜は思っていた。

（どうあっても闘わせる気ですか。ならば、次回から自分のコントロール下に置いて当麻を動かす方が得策……）

総括理事長がどうあっても魔術師を当麻と闘わせる気なら、自分が流れをコントロールすればよい。
そうすれば、魔術師と当麻を闘わせてかつ当麻の怪我を少なくするという事が可能となる。
優菜はそう結論付けると、次に今の状況を打破する方法を考え始める。
だが、そんな彼女の考えは強引に断ち切られる。

手近な曲がり角から聞こえたカツンという足音によって。

その音に一番早く反応したのが優菜であった。
優菜は風斬を抱き抱えると、音のする方に視線を向ける。
当麻は幸いにもインデックスの近くにいたため、彼女を足音を立てた人物から庇うように立つ。

「黒子。あんた本当に大丈夫なの？」

「まぁまぁまぁ、お姉さまったら。黒子を心配してくれるなんて感激ですの！」

曲がり角の向こうから姿を現した人物、それは御坂と黒子であった。
その事に安堵した当麻と優菜は、ホッと息を吐く。

「……何で当麻がここにいるの？」

御坂が当麻たちの姿を捉えると、開口一番にそう言う。
明らかに奇異の目で見ていた。そして御坂は直ぐに理解する。
何故、当麻がこの場にいるかを。

「あー、不幸だーと言いながら事件に巻き込まれたのね」

「上条さんは最近フルボッコで涙が出てきそうです……」

小馬鹿にするような笑みを浮かべて、御坂は当麻を見つめていた。
その場には優菜と風斬とインデックスがいたのだが、どうやら彼女には見えていないらしい。

（恋する乙女は盲目……ですね）

そんな御坂を苦笑しながら見ている優菜。
だが、その近くに全く正反対の思いで御坂を見ている人物がいた。

（あの類人猿め。お姉様の部屋にやってきた日に何かあったんですね。あのヤロウめ、うふうふうふふふふふ）

危険な笑みを浮かべながらブツブツと平坦な独り言を呟いていた。
その姿にインデックスはどん引きし、風斬に至っては恐怖のあまり優菜の背中に隠れてしまった。

やがて御坂と黒子が落ち着くと、今まで起きた事情を簡単に説明する。
もちろん、魔術うんぬんの話は危険なので割愛したが。

「ふうん、なんだかよく分からないけど、テロリストが攻めてきた……ねぇ」

「いくら能力者とはいえ、単身で学園都市に攻めこむとは……」

御坂も黒子も魔術というものを知らないため、目の前の現象は全て超能力という事で理解しようとした。
インデックスがムッとするが、話がこじれると思ったのか何も言わなかった。

（厄介ですね……）

この場に御坂が登場した事に頭を悩ます優菜であった。
今朝方も自分の姉である沈利が魔術に関わろうとした所だ。

あの時は、口八丁で抑えこむ事が出来たが御坂はそうは行かない。

（レベル５が魔術師を倒すと、学園都市が窮地に陥る。それは、当麻の居場所を失うという事……その点をついて沈利姉さんが魔術に関与をする事がないように仕向けましたが……）

だが御坂の場合はそれが難しいと優菜は思っていた。

決して御坂を馬鹿にするわけではないが、彼女は後さき考えずに自分の正義だけで突き進む所がある。

彼女は自分が起こした行動の後、一体どういう事になるか考えないのである。

それは時として類稀な強さを発揮するが、魔術師というシビアな問題では厄介な事にしかならない。

（何とか彼女をこの場から立ち去らせないと……）

それも単に立ち去らせるだけではなく、納得して立ち去らせる必要がある。

無理に追い返せば、彼女は意固地になってシェリーを追いかけるだろう。

（黒子さんは空間移動の使い手……そして風紀委員でしたね。恐らく人命救助の為でしょう）

そこで優菜は疑問が浮かぶ。では、一体何のために御坂は黒子と一緒にいるのか。

すぐに答えにたどりつく。黒子の付き添いでついてきたのであろうと。

（書庫によれば黒子さんは１３０ｋｇほどが質量制限。そして御坂

さんは電撃使い……）

その瞬間、優菜の頭に御坂を納得させて立ち去らせる方法が思いつく。

少しだけ意地悪な話だが、御坂は納得する以外にないはず。

そして黒子も協力してくれると、優菜は考えていた。

「とにかくテロリストをどうにかしないとね。さっさと……」

「ちょっと待ってください、御坂さん」

シェリーをどうにかしようと考えた御坂だが、その考えを遮るかのように優菜は言葉を口にする。

その声に御坂は勿論、当麻たちも優菜に視線を向ける。

「御坂さん、貴方は闘ってはいけません」

「なっ！　なんでよ！　あたしが負けるって言いたいの！？」

まさか止められると思っていなかった御坂は、優菜の言葉に酷く驚く。

それは黒子や当麻も同様であった。

御坂はレベル5なのだ、戦力としては頼もしいはず。

それなのに闘ってはいけないと優菜は迷いなく言った。

「そうではありません。御坂さん、冷静に考えてみてください。地下街が『蒸し暑い』のは何故ですか？」

「？　簡単じゃない。空調が止まって……」

最後まで言い切る前に、御坂はハッとなった。
優菜が一体何を言いたいのか理解したようだ。

「そうです。空調が止まっています。では、空調を動かしている動力源は何でしょうか？」

「電気……」

そう呟く御坂を見て黒子も気付いた。
何故、御坂に向かって闘ってはいけないと言った理由が。
当麻とインデックスは全く分かっていなかったが。

「電撃使いである御坂さんが、能力を使えば周りの電子機器を破壊する恐れがあります。それは、本当の意味で地下街に閉じ込められるという事になります」

今、地下街を封鎖している分厚い鋼鉄の城門も開閉は電子制御されている。
ではその電子制御が行えなくなったらどうなるか。
答えは簡単である、鋼鉄の壁は全く動かなくなってしまう。
それは文字通り地下街に閉じ込められるという事になる。

「うぅ……」

いくら電撃使いの頂点とは言え、一切電子機器を破壊せずにシェリーを倒すという事は不可能である。

「黒子さん、御坂さんとインデックスさんを外へお願いします」

「了解ですの」

優菜がそう言うと、黒子は敬礼をした後で御坂とインデックスの手を掴む。

瞬間、羽音のような音色が響いたかと思うと三人の姿は虚空へ消えた。

「上条さんは幻想殺しがあるけど……何でインデックスが先なんだ？」

今までのやり取りを黙ってみていた当麻が、優菜の人選に質問をする。

優菜は「その程度も分からないのですか」と言いたげにため息を吐くと当麻の質問に答える。

「インデックスさんは、あのシスター服ですよ。蒸し暑い地下街にいたら茹で上がってしまいますよ」

「あー……」

そう言えばそうだなと言いたげに当麻は適当に答える。

「さて、こちらも準備をしないといけませんね」

「準備？」

「忘れたのですか、当麻。この状況を作り上げた人物が、地下街にいる事を」

そう言って優菜は手に持っていたアタッシュケースを床に置く。

そして当麻にはよく分からない事をすると、アタッシュケースは自動的に開いた。

「当麻、触ってはいけませんよ。これは未元物質で出来ていますから」

アタッシュケースに興味を持った当麻に、優菜は釘を刺すように言う。

「垣根のアレか、もし触ったらどうなるんだ？」

「恐らく跡形もなく消えるかと。その時は当麻に修理費を請求します」

折りたたみ式の棒を接合させながら、優菜は当麻の質問に答える。修理費、という単語に当麻は嫌な予感がしていた。

「ち、ちなみにお幾らで……」

「そうですね、ゼロが八つぐらい付きますね」

その瞬間、当麻は三メートルぐらい後ろに下がっていた。近くに入れば不幸で壊すと思ったようである。

（この武具の調子を確かめる機会がこんなに早く訪れるとは思っていませんでした）

そう思いながら、優菜はナイフを腰部に装備し組み上げた棒を両手で持つ。

携帯用の小型端末をポケットにしまう。

「な、なんかごつい装備だな……」

「……（こくこく）」

ナイフは全長で五十センチクラス、棒は二メートル近くあるのだ。
ある意味でかなり目立つ風貌である。

「風斬さんを驚かすつもりはありません。現状ではどうしてもサイズが小さく出来ないので」

苦笑しながら答える優菜に、風斬は盛大に首を横に振る。

「う、ううん。そんな事……ない。なんか……かっこいい」

そう言ってコクコクと頭を縦にふる風斬。

「ありがとうございます。さて、少しだけ見回りをしてきます。当麻は風斬さんを守るように」

この場から全員で移動するわけにはいかない。
何しろシェリーが狙っている人物は当麻と風斬である。
纏めて移動していれば、狙ってくださいと言っているようなものだ。
だから、まずインデックスをこの場から切り離した。
次に風斬をどこか遠くに逃せば、いくらシェリーでも追う事は難しい。
誰でもいいと言っていたので、逆に誰を狙うかを迷う状況にする。
それが優菜の考える作戦である。

狙った相手が逃げられたらシェリーはターゲットを変えなければならない。
だが、その時点で他の二人の追跡が不可能な状態となれば話は別だ。
再び追跡するためにあちこち移動しなければならない。
それは自分が捕まる可能性を高くする。
最も、シェリーがその事を気にしていればの話だが。

「あ、ああ……けど、気を付けろよ。いくら優菜でも……」

「魔術師と直接対決は危険……と？」

優菜の言葉に当麻は頷く。
魔術師を知っている事に内心驚いた当麻。
だが彼女は情報収集能力が高い。
ならば知っていてもおかしくないと当麻は思った。

「私も直接対決はしません。まずは、相手の位置を特定して逃走経路を考えるためです」

そう言うと、優菜は歩を進めようとした。
が、服の裾を誰かに掴まれた為にその歩を止める事となる。

「あ、あの……」

その人物とは風斬である。
風斬は視線を彷徨わていたが、やがて優菜を見て怯えながら言った。

「ぶ、無事に……戻って来ます……よね」

まるで見捨てられた子供のように、すがるように風斬は言葉を発す

る。
優菜は優しく微笑むと、風斬の頭に手を伸ばす。
「約束しましょう。私は必ず戻ってきます」
少しだけ思案顔をした風斬だが、やがてホッとしたかのように微笑んだ。
その顔を見た優菜は、一つ頷くと風斬に背を向けて走りだす。
優菜の走るスピードは早く、あっという間に見えなくなってしまった。
「あんな約束しなくても優菜ならきっと帰ってくるぞ」
「……悪い予感がするのです。何故だか知りませんが、もう優菜さんが私に微笑んでくれない……そんな予感が」
そんな不安を自分の中から追い出すかのように、風斬は手を胸にあててぎゅっと握った。

優菜がその場から離れたのには、周りを見てくる事の他にもう一つ理由があった。
彼女が持っている小型の携帯端末。
単に使用するだけでは、ここまで警戒する必要はない。
だが、これからコンタクトを取る相手が問題であった。

（この際、手段を選んでいられません）

優菜はそう自分に言い聞かせると、端末をポケットから取り出す。
何度かシャープボタンを叩くと、今度は素早く番号を打ち込んでいく。
全てを打ち終えると端末を耳に当てる。呼び出し音は一切しなかった。
無音である、だが通話に失敗しているわけではない。
そもそも特殊な回線を利用するこの携帯端末が、通話失敗などするはずもない。

（私の知りたい情報を教えていただきますよ、学園都市総括理事長様）

窓のないビルの内部で、土御門は呆然と上を見ていた。
何をするわけでもなくただ呆然と見ていたのだ。

だが突如として空中にモニターが表示される。

「おい、アレイスター。アレは何だ」

土御門は適当に質問した。

それは、何も出来ない自分が歯がゆいのを紛らわしたかった為である。

「そろそろだと思っていたよ」

そんな土御門を無視してアレイスターは画面を操作する。

暫くすると、この部屋にいない人物の声が響く。

それは土御門を驚愕させる声であった。

『この会話すら貴方の予定通りのでしょう？　でしたら必要な情報を頂けないでしょうか、学園都市総括理事長様』

その声の持ち主は優菜であった。土御門はあまりの驚きに声を失う。

何故、優菜はアレイスターに直接コンタクトが取れるのか。

何故、アレイスターはそれを普通に受け入れているのか。

いくつもの疑問が浮かんだが、結局全てに対して答えを見つけることは出来なかった。

「君ほど先読みの能力はないよ。さて、シェリー＝クロムウェルの居場所かな。それについては現在も追跡中だよ」

『とぼけないでください。では、警備員が地下街の城門を爆発と同時に動かしたのは何故ですか？』

「警備員にも侵入者の情報はいっている。恐らくだが彼らはシェリー＝クロムウェルの居場所を突き止めていたのではないのかね？」

アレイスターにとって優菜との会話はとても楽しいもの。

故にアレイスターは楽しそうな笑みを浮かべながら言葉を発する。

だが、優菜はそんなアレイスターに付き合う気は毛頭ない。

『百歩譲ってそうとしましょう。でしたら、学園都市総括理事長様にも情報は届いているはずですが？』

「鋭いな。確かに侵入者の居場所は報告を受けている。だが、彼女の狙いは虚数学区の鍵や――――」

『風斬氷華』

アレイスターが最後まで言い切る前に、優菜はそれを遮るかのように強く言う。

『彼女の名前は虚数学区の鍵などではありません。私の友人である彼女の名前は風斬氷華です』

真正面からアレイスターに敵意を向ける優菜に、土御門は驚きを隠せなかった。

だがアレイスターは優菜の敵意すら楽しいのか笑っていた。

「彼女は人ではないが？」

嘲るようにも憐れむようにも楽しむようにも聞こえる声で、アレイスターは優菜に問う。

『人でないといけない理由は何なのですか』

一秒も待たず優菜はアレイスターの問いを切り捨てた。

『そんなくだらない理由が彼女を仲間はずれにする理由となるのですか』

土御門には優菜の心が痛いほど分かった。

友達を、大事な親友を穢されたのだ。

『確かに彼女は人間と呼べません。どれだけあがいても、どんなに努力を重ねても人にはなれません。ですが彼女は意思を持っています。それは生きるという事』

それは自分が穢されるよりはるかに辛い事。

『人間だとかそうでないという事だけで、簡単に失われて良いほど彼女は軽い存在ではありません』

だからこそ優菜は許せなかったのだ。風斬を侮辱したアレイスターを。

「ご高説、痛み入るよ。シェリー＝クロムウェルの居場所は君の端末に送っておこう」

だがアレイスターには全く届いていなかった。

優菜も分かっていたのか、あえてそれ以上は言わなかった。

そして優菜はアレイスターの返事を待たず通話を切る。

「おい、アレイスター。お前優菜ちゃんに何をさせているんだ」

「君が知る必要はない」

疑問を口にした土御門に対して、アレイスターは素っ気なく答える。

「急ぎたまえ、天上霊薬」

舌打ちをした土御門を無視して、アレイスターは楽しそうに笑いながら呟く。

「シェリー＝クロムウェルは、君の大事な友人を狙っているのだから」

時刻は少し前。優菜が当麻たちがいる場所から離れてすぐの頃。風斬から警戒の視線を受けつつも、当麻は先ほどシェリーが言った事を思い出していた。

（……幻想殺しってのは俺の事だろう。だったら風斬や優菜を巻き込んじゃいけねぇ）

当麻がそう思ったのと同時に、再び地下街全体が大きく揺れた。

それだけではない。

薄暗い通路の先から、銃声らしき爆発音と、人の怒号や絶叫が流れてきた。

当麻には分かった。敵はすぐそこまで迫ってきていると。

（ちょうど優菜がいない時に来たとはいえ、ちょっと早過ぎるぞ！）

敵の進行スピードが予想以上に早いことに焦った当麻だが、すぐにその答えが分かる。

（そうか、さっきまであの目玉と会話していたんだ。だったら、敵はこの場所を知っている……最短距離でここまで到着してもおかしくねぇ！）

つまりのんびりと考え込んでいる時間はない。

当麻は決断をすぐ下す事に迫られていた。

しかし当麻の決断は早かった。

「風斬、お前はここにいろ。俺はあれを止めてくる」

当麻はそう言うと、風斬の返事を待たずに走りだす。

風斬が何か言っていたが、当麻は無視した。

走っている途中で、地下街が大きく振動した。

その揺れの強さから、敵がすぐ近くまで来ている事を理解する。

（俺の近くにいれば風斬の命が奪われる。それだけは、絶対にさせる訳にはいかない！）

右手を硬く握り締めると、当麻は敵がいるであろう闇の奥へ向かった。

そして通路の角を曲がった瞬間、思わず口元を手で覆いそうになった。

当麻の目の前に広がる光景は戦場だったのだ。

第一線ではなかったが、傷つき倒れた者たちが一時的に後退した場所。

傷の緊急手当をするために、緊急の野戦病院に割り当てたのだろう。

あちこちに人が柱や壁に寄りかかっていた。

数にしておよそ二十人程度の警備員。恐らくどこかの部隊が丸々やられたのだろう。

だが、当麻は警備員たちの行動を見て驚愕した。

彼らに撤退の意思は全くないのだ。

傷といっても単に絆創膏を貼る程度ではない。骨が折れていた人もいれば、大量の出血に苦しむ人もいた。

だが、少しでも体が動くなら近くの店から椅子やテーブルを運び出してバリケードを作っていた。

死ぬ気でやっているのではない。死んでも成し遂げるという決意しか感じ取れない。

（どうして……）

警備員とはいえ、彼らはヒーローではない。中身は単なる学校の先生なのだ。

だから彼らが命惜しさに逃げても、誰も非難する事は出来ない。

なのに彼らは撤退していなかった。最後まで戦い抜く決意しかなかった。

「そこの少年！　一体ここで何をしてんじゃん！！」

呆然と立っている当麻に、横合いから怒号が飛んできた。
その声に、その場にいた警備員全員が当麻に視線を向ける。

「くそ、月詠先生んトコの悪ガキじゃん。城門封鎖で閉じこめられたのか？　だったらＡ０３ゲートまで行けば風紀委員がいるからそこまで退避！　メットを持って行け、ないよりはマシじゃん！」

怒鳴っていたのは黄泉川だった。自分の装備品を外すと当麻へ乱暴に放り投げる。
それを無言で受け取った当麻はもう一度警備員を見回す。

彼らの顔を見て理解した。こんなにボロボロになっても退かない理由（ワケ）を。

当麻は歩き出した。だが、Ａ０３ゲートではない、更に奥へ歩き出したのだ。
そんな当麻を周りの警備員は慌てながら止めようとする。
だが、止めれなかった。傷ついた彼らは既に単なる高校生を止める力すら残されていなかった。

だが、彼らは逃げ出さない。

どれだけ装備を持っていようが、プロとしての訓練を積もうが、中身は単なる学校の先生だ。
そして警備員だから給料が高いわけでもない。
大きな権力を手に入れれるわけでもない。
そもそも警備員は志願制なのだ。
いってしまえば警備員とは治安維持に対するのボランティアなのだ。

だからなのだ。彼らは誰かに強要されて闘っているわけではない。
子供達を守りたいから志願してここに集まってきたのだ。
その気持は当麻にも理解できた。
彼も誰かに強要されたからここに来たわけではない。

（くそったれ！）

当麻は更に通路の奥へと向かうが、少しして奇妙だと思い始める。

（物音が……しない？）

今向かっている場所は、敵が待ち構えている場所。
それなのに何も音が聞こえてこない。人の声も、銃声も、足音も聞こえない。
先程まで断続的に来ていた地下街を揺らすような振動もない。
嫌な予感がした当麻は、更に走るスピードを上げる。
そして、通路の角を曲がる。
そこに広がっていた光景は――――。

魔術師　対　幻想殺し

「うふ、こんにちは。うふふ」

錆びた女の声が、薄暗い空間に反響する。
声の持ち主である荒れた金髪と褐色肌の女は、通路の中央に立っていた。
そして彼女と盾となるように石像が立っている。

それは椅子やタイルや土など、あらゆるものを強引に練り混ぜて形を整えたような巨大な石像だった。
その石像の前にあったと思われるバリケードは、無残にも四方八方へ散らばっていた。
付近に七、八人の警備員達が倒れている。
まだ息はあるのか、細かく震えるように手足が動いていた。
だがほとんどが虫の息と表現するのが正しいほど傷めつけられていた。

「くふ。衝撃吸収率の高い装備で固めているのね。エリスの直撃を受けて生きているなんて」

その言葉から、石像がバリケードを破壊した事を当麻は理解した。
バラバラに砕け散った様を見れば、どれほどの破壊力か想像がつく。

「どうして……そんな事が出来るんだ」

当麻は絶句した。
力量差は目に見えて明らかである。
なのに彼女は警備員達を攻撃した。

まるで狩りを楽しむかのように。

「虚数学区の鍵が一緒ではないが……幻想殺しが現れたか。まぁぶち殺すのはあのガキである必要もないが、出来れば虚数学区の鍵の方がダメージは大きいな」

面倒臭そうに金髪をいじりながら、シェリーは乱暴に言葉を発する。
シェリーの言葉に当麻は訝しげに思った。
自分や風斬を狙っている事は察していたが、目の前の女は余りにも投げやりだと。

「まぁ別にテメェを殺したって問題ねえワケ、だ！」

シェリーが思い切りオイルパステルを横一閃に振り回す。
その動作に呼応するかのように、石像が大きく地面を踏みしめる。

「ぐっ！」

その瞬間、強烈な振動が走り当麻は思わずよろめいた。
続けて石像が足をふると、耐え切れずに地面へと倒れてしまう。

だが、シェリーだけは平然と立っていた。

（あの女は体術が出来るとは思わねぇ……だったら魔術か何か使ってやがるな）

少し前に、最初の揺れの時も優菜は普通に立っていた。

（水をイメージして揺れと同化したとか言ってたが……目の前の女に出来るとは思えないな）

揺れのダメージから完全に逃れているシェリーを見ながら、当麻は冷静に分析していた。
まるで風景から切り離されたように、揺れの中立っていられるのは魔術を使っているから。
そう当麻は分析した。

（だったら幻想殺しで、その魔術を破壊すれば。あいつも揺れの攻撃が出来なくなるはずだ！）

「地は私の力。そもそもエリスを前にしたら、誰も地に立つ事などできはしない。ほらほら、無様に這いつくばれよ。その状態で私に噛みつけるかぁ、負け犬？」

勝ち誇るように笑みを浮かべたシェリーを、当麻は冷静に見つめていた。
慢心は隙を生む、その隙が敗北に繋がる事もある。そんな事を当麻は思い出していた。

地面を揺らしながら戦えば、確かに一方的な攻撃を可能とする戦法だろう。
警備員達も大した攻撃が出来ず、更には同士うちすら引き起こす可能性もある。

何とか起き上がろうとする当麻だが、まるで牽制するようにシェリーはオイルパステルを一閃する。

「お前……何でこんな事を……！？」

幻想殺しによる石像の破壊を行おうとしたが、一歩も動けない今の

状況では当麻は無様に地面へ這いつくばるしか出来なかった。

「お前じゃなくて、シェリー＝クロムウェルよ。覚えておきなさい……っと言っても無駄か。あなたはここで死んでしまうんだし」

地面に這いつくばる当麻を、シェリーは薄く笑いながら見下ろす。

「何でこんな事を？　決まっているじゃない」

侮蔑の篭った視線で当麻を見ながらシェリーは答える。

「戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの」

シェリーの答えに当麻は理解が出来なかった。戦争を起こす、そうシェリーは言った。

「だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒だって事をしってもらわないと、ね？　――エリス」

何故、という疑問しか浮かばなかった。

いくら関係が悪いとはいえ、魔術と能力は互いの領分を大きく侵食していなかった。

それなのに、目の前の女は戦争の火種を欲した。

（何で……どうしてだよ……）

困惑する当麻だが、シェリーは気にせず手首のスナップを利かせてオイルパステルを回す。

エリスと呼ばれた石像は、その大きすぎる拳を振り上げる。

「クソったれ……あんなトン単位の巨重の塊をどうすれば止められるんだよ」

未だ地面を揺らす石像のお陰で当麻は立つことすら許されない。
死に物狂いで右手を振り上げると。

「離れろ、少年！」

当麻の横合いから叫び声が上がった。
その声に反応して、当麻が何か行動を起こす前に銃声が鳴り響いた。
傷ついた警備員の一人が、倒れたままライフルを掴んでいたのだ。
エリスを転倒させるべく銃弾を脚部に集中させる。

「くそっ！」

警備員の行動は、実際エリスの行動を停止させた。
下手に足を上げれば銃弾がシェリーに当たりかねない。
だが一つ問題があった。エリスは鉄やコンクリートを練り合わせて作られている。
トン単位の質量を持つエリスに向かって撃てば、弾は跳弾するに決まっている。
結果、エリスの攻撃から逃れられた当麻は、今度は味方の警備員による跳弾に命を脅かされる事となる。

（警備員が弾倉の差し替えを行う時に、エリスの懐に飛び込むしかねぇ！）

いつでも行動を起こせるように当麻は体勢を整える。

その時、当麻の後方からカツンと小さな足音が聞こえた。

銃声が鳴り響く現状でも聞こえた足音。
全身からぶわりと汗が吹き出す。嫌な予感が胸を駆け巡る。

「まさか……」

首だけを動かし後ろを見ると、ビクビクと怯えたように歩く少女が見えた。

「あ、あの……」

「馬鹿野郎！　なんでここに来た！」

無防備に立つ風斬を怒鳴りつける当麻。
銃声にも負けないような叫びが地下街に響き渡る。

状況を掴めていない風斬がキョトンとした顔をする。
今すぐ風斬の元に駆け寄りたいが、跳弾でそれも不可能だった。

「良いから早く伏せっ……！」

当麻が最後まで言い切る事はなかった。

突然、風斬が大きく後ろへ跳ねた。

「あ……？」

思わず間の抜けた声を出す当麻。
何が起きたか理解したくなかった。
メガネのフレームが千切れ、吹き飛ぶ様子が目に入っても。

肌色の何かが飛び散る様を見ても。
当麻は理解したくなかった。
結果、当麻の頭が極度の混乱状態に陥り、真っ白に飛びかける。
警備員も、呆然とした様子で撃ちぬかれた少女を見ていた。
唯一、シェリーは己のターゲットが自滅した事に、若干眉をひそめていた。

「か、ざ……きり！！」

慌てて立ち上がり、風斬の元へ走りだす当麻。
まるで酔っ払いのような足取りだったが、何とか風斬の側に駆け寄る事が出来た。

だがそこで目にしたある異常が当麻の足を止める。
その異常を見て当麻は表情を驚愕に染める。

あまりの惨状にではない。
あまりの無残さにではない。

風斬の傷口自体が異常だったのだ。
頭の半分が吹き飛ばされた風斬だが、その中身はただの空洞だった。
生物としてあるべき器官が何一つない。

そして更に驚愕する情景が当麻の目に入る。
空洞となった頭部の中心に、小さな物体が浮かんでいたのだ。
それは肌色をした三角柱だった。

底は一辺が二センチ弱の正三角形、高さは五センチ弱。
固定された状態に見えるほど、ひとりでにくるくると回転していた。
その側面には、縦一ミリ横二ミリの長方形の物体がびっしりと収ま

っていた。
三角柱の側面で、長方形の物体がせわしなく進退する。

（な……んだ、これ……）

当麻はそれを見て、困惑する以外なかった。
学園都市でいくつもの非現実を見てきた彼だが、それでも目の前の光景は余りに非現実的だった。

「う……」

風斬が小さな呻き声を上げる。その声を聞いても当麻はただ呆然としていた。
意識が戻った事に反応したのか、三角柱がくるくると回転する。
側面の長方形の物体、キーボードのようなものが高速で叩かれていく。

（……いや、これは逆だ。風斬の動きにあわせてじゃない。三角柱の動きに合わせて風斬が動いている気がする……）

豪雨のように響き渡る音に、シェリーですら攻撃を忘れギョッと肩を固まらせていた。
やがて風斬が片方しか無い目を開く。
上体だけを地面から起こし、辺りを見渡す様子に痛みを訴える気配はない。

「あ……れ？　メガネが……な…い……」

そう言って欠けた顔をなぞった風斬。その行動で彼女は気付いた。

「……な……に……これ？」

空洞の縁をなぞると、側にある店のガラスが眼に入る。
彼女は見た、自分の姿に気付いた。
風斬の顔から血の気が引き、みるみる不安と恐怖の色に染まる。

「いや……いやぁぁぁぁぁぁ！！！！」

髪を振り乱して叫びながら、風斬は逃げるように走りだす。
バランス感覚を失ったかのように、フラフラとしながら走っていた。

「かざ……きり……」

手足を振り回して通路の奥に走っていく風斬を、当麻はただ呆然と見ていることしか出来なかった。

「面白い。行くぞ、エリス。無様で滑稽な狐を狩りに行きましょう」

当麻と警備員には目もくれず、シェリーはオイルパステルでエリスを操る。
そしてそのまま、風斬が逃げ出した方へと移動する。

風斬を追った理由は風斬を殺す為だ。

その事を理解しても、当麻はその場から動く事が出来なかった。

決断

当麻は薄暗い通路をひとり歩いていた。
その足取りは重く、一歩進むのに十秒以上を要するほどだった。

やるべき事は分かっている。
どこへ行くべきかも理解している。

なのに当麻の足取りは枷がついたかのように遅かった。

「くそ……」

当麻は奥歯を噛み締める。
足を止め、頭を掻きむしりながら考える。

自分の行動が風斬を傷つけるかもしれない。

だから下手な行動が出来ない。良く考えて行動する必要がある。
そう思っている当麻は、何が最良の行動か頭を悩ませていた。

そして更にもうひとつの問題があった。
エリスの存在である。
エリスに勝たなければ、風斬を助けることは出来ない。
いくら幻想殺しがあるとはいえ、巨重のエリスから繰り出される攻撃には太刀打ち出来ない。
同じ土俵にも立てない。エリスが起こす振動だけで、当麻は立っている事が出来ないのだ。

「くそっ、ここは優菜を待って……」

そこで当麻はハッとなる。

（今、自分は何を考えてた……）

その事に愕然となるとともに、自分への怒りが込み上げてくる。
当麻は右手に力を込めると自分の頭を強く殴る。
傍から見れば自暴自棄になったかのように見えるかもしれない。
だが彼の中では違った。

「……俺は馬鹿か。何でも優菜に頼るんじゃねぇ。アイツを巻き込みたくないとかいいながら、都合のいい時だけ助けを求めるんじゃねぇ」

ズキズキと頭が痛む。
だが、それが逆に当麻の思考をクリアにしていく。

「確かに優菜の頭は俺よりケタ違いにすげぇよ。俺が十を考えつく間に、アイツは百まで考えつく」

再び右手に力を入れる。だが、今度は自分を殴るためではない。
何かを決めるために、当麻は右手に力を入れた。

「けどよぉ……それでいいのか？」

優菜が作るレールに乗れば最適な道筋を手に入れれる。
その上、責任を負わなくていい。
全ては用意された物をただ利用するのみ。

だけどそれで本当にいいのか？

そんな思いが当麻の心に湧き上がる。

「アイツに頼り切って責任を押し付けて、自分では何も決断しねぇ。そんなクソみたいな奴に、風斬は助けられたいと思うか？」

答えは最初から決まっている。

そんな奴からの助けはお断りだと当麻は理解していた。

「迷う必要はねぇ。俺は風斬を助ける。それ以外は考える必要はねぇ！」

殻を破るかのように当麻は叫ぶ。

そんな当麻は、近くにあったガラスのウィンドウに視線を向ける。

自分の背後に誰かが立っている。

その事に気付くと、風切音が鳴るぐらいの勢いで当麻は振り返る。

当麻の後ろに立っていたのは優菜であった。

当麻はある違和感を感じる。そしてその理由にすぐ気付く。

優菜の顔は今まで見た事がないほど、思い詰めた表情をしていた。

「優菜……どうしてここに」

あ然としながらも、当麻は優菜に問いかける。

だが、彼女は口を固く閉ざし当麻の問いに答えようとしない。

（一体何があったんだよ……）

胸がかきむしられるような思いが当麻の心を襲う。
理由は分からないが、当麻の心はこう囁いていた。
彼女にあの顔をさせてはいけない、と。

「当麻……ごめんなさい」

そんな当麻の困惑を無視して、優菜は当麻に頭を下げた。
その行為でハッとなった当麻はあたふたとしながら優菜に問う。

「お、おいおい！　一体何に謝っているんだよ！」

「……私は愚かでした。いえ、傲慢すぎました」

頭を下げたまま、優菜は当麻の問いに答えず言葉を紡ぐ。

「貴方に最適な道を作り上げておこうと考えていた。全ては貴方の為にと自分の心に言い聞かせて」

「ゆ、優菜？」

「危険から遠ざけ、貴方より先に危険を潰しておけば大丈夫と。そうすれば貴方は余計な傷がつかないと思っていました」

優菜の言葉に当麻は声を失った。

彼女は心の中でそのようなことを考えていたのかと。

そして疑問に思う。

では何故、今それを自分にバラしているのかと。
当麻には優菜の考えが分からなかった。

「だけどそれは私のエゴだった。貴方は籠の鳥ではない」

己の罪を告白するかのように、優菜はポツリポツリと語り続ける。

「貴方は上条優菜ではない、上条当麻なのですから」

やがて語り終えたのか、優菜は顔を上げる。
その顔を見て当麻は目を見開く。
優菜の顔は、自分を責める色で染まっていたのだ。

「これでは当麻の『姉』失格ですね。貴方の気持ちを理解していなかったのですから……本当、馬鹿みたい」

困ったような笑顔を浮かべながら、優菜は自分の事を笑う。
その言葉を聞いて、当麻は自分の頭の中で何かのスイッチが切り替わる音を聞いた。

「そんな事ねぇよ」

「……当麻？」

当麻は優菜を睨みながら言葉を口にする。

「そんな事ねぇっつたんだよ！　お前はすげぇよ！　俺なんかそこまで考える事すら出来なかったよ！　確かに俺はお前じゃねぇ。全てをお前に頼り切るような人間になるつもりもねぇ！　けどよ、お前を愚かとか傲慢とか思わねぇ！」

当麻は優菜の顔を見て嫌な過去を思い出した。
といっても、はっきりしない朧げな過去の記憶だが。
その過去の記憶から、当麻はある事に気付いた。

彼女があのような顔をする時は、どんなに自分が悪くなくても自分を責め続ける時だと。

だから当麻は否定する。

「お前はちょっと間違った道を歩いただけだろう！　引き返して正しい道を歩けばいいだろう！　何で止まるんだよ！　何で全て自分が悪いという顔をするんだよ！」

優菜の言葉を全て否定する。
それで彼女が傷つかないなら何度でも否定する。
たとえ優菜より頭が悪いと言われても。
当麻は決して優菜の言葉を否定することを止めないだろう。

優菜が苦悩しないように。

「いつ俺がお前を責めたんだよ！　俺はお前を責めるつもりなんてハナッからねぇ！　むしろ感謝しているんだよ、こんな馬鹿な俺を今まで見捨てなかったお前に！　それでもお前が全て自分が悪いと思っているのなら！」

風切音がするぐらいの勢いで、当麻は右手を突き出す。
優菜の幻想を打ち砕く為に。

「まずはその幻想をぶち殺す！」

肩で息をする当麻を見て、優菜は目を見開いて固まった。
はっきり言えば滅茶苦茶だった。反論も何もあったものではない。
それでも優菜はある事に気付く。

当麻の言葉は１００％混じりっけなしの本心だと。

気付いたら優菜は笑みを浮かべていた。
悲痛な笑みではない。ただ柔らかに笑みを浮かべていた。

「……まさか弟から説教される日がくるとは……」

当麻の成長が嬉しい。そう思うと優菜は自然と笑みを浮かべていたのだ。
しかしすぐに笑みを引っ込めると、真剣な顔をして当麻を見つめる。

「当麻、貴方にはこれから過酷な試練が訪れるでしょう。それはとても辛く、苦悩したり嘆き悲しむ事があるでしょう。ですが……」

そこで言葉を一旦区切ると、優菜は小さく息を吐く。

「その先に出した答え。それは貴方が自分で出した答えです。私が用意した答えではない」

「……」

「私は今までのように、貴方がすべき事に大きく口出しはしません。貴方がなすべき事には、見守る立場となります」

「優菜……」

「ですが時には頼ってください。頼られないお姉ちゃんは、ちょっぴり寂しいですから」

すべての言葉を出し終えると、優菜は柔らかな笑顔を浮かべる。

心が軽くなるのを優菜は感じていた。

自分がどれほど愚かで馬鹿な勘違いをしていたか優菜は気付く。

その事に気付くと同時に、優菜の脳裏にはある言葉が浮かんだ。

『その男は、果たして貴様に守られるだけの生を望んでいるのか？』

恩師と別れの時に交わした約束の後。ポツリと恩師が漏らした言葉の意味を優菜は理解する。

（当麻は守られるだけの生など望んでいない）

優菜は理解する。当麻の本質というものを。

（当麻は誰かから教えられなくても、自分の中から湧く感情に従って真っ直ぐ進もうとする）

優菜は思う。

そんな当麻の心を理解してあげるのが、当麻の『姉』である自分の役目ではないかと。

（私はそれを強引にねじ曲げようとした。彼は私の作るレールを歩くピエロではない）

優菜は決意する。本当の意味で当麻を助け支えようと。

「行こうぜ、優菜」

「ええ、行きましょう。当麻」

通路の奥に広がる闇を見ながら、二人は同時に同じ言葉を口にする。

「「友達を助けるために」」

そして二人は駆け出す。友達が助けを求めているであろう場所へと。

「う、ぐうう……！？」

灼熱で溶けた鉄を流し込まれたような激痛が風斬に襲いかかる。

その痛みに、走るどころか立っている事すら出来なくなった。

地面に倒れ伏すと、彼女は痛みのあまり地面の上を転がりまわる。

生き地獄のような痛みが彼女を襲っていた。

明らかに致命傷なのに、生きているはずのない怪我なのに。

なのに風斬は死ななかった。
死への逃避を拒否された風斬は、ただ苦痛に呻く事だけしか出来なかった。

「あ……がぐ……ぐ……ぅ、ううう！！　げぼっ、うえ、ええ……が、あぁぁ！」

永遠に続くと思われた痛み。だが、それはすぐに終わりを告げる。
ゼリーが崩れるような音がしたかと思うと、彼女の傷口が塞がり始める。
空洞化した場所が、ありえない速度で修復されていく。
それに伴って、痛みも熱が冷めるように引いていった。

「あ、ああ……」

それだけもおかしいのに、更には吹き飛ばされたメガネや衣服の端々までが元に戻っていた。
恐怖が彼女の心を支配する。

自分は普通だと思っていた。
何もかもが初めての経験だったが、それでも普通だと思っていた。
だけど、そんな風斬の考えは真っ向から否定された。
風斬は最初から異常な存在であった。

そんな絶望の淵に落とされた風斬の前に、更なる絶望が現れる。
闇の奥から現れた鉄とコンクリートで創られた歪な化物。
そして、その化物を携える金髪の女。

地下街全体を揺るがす振動に、風斬は恐怖で体が動かせなくなっていた。

無様に手足をばたつかせるだけ。

「ひ……あ……」

それでも風斬は逃げようとした。
そんな風斬をシェリーは何も告げずオイルパステルを振るう。
エリスの攻撃をまともに受けた風斬は、無理矢理皮膚を剥がされるような激痛に襲われる。

「げうっ……！！」

ヤスリで丁寧に削られるように、風斬は地面を滑り続ける。
数メートルも渡って彼女から剥がされた皮膚や髪の一部が一直線に走っていた。

「何なのかしらねぇ、これ」

ぐずぐずと体の修復が始まる風斬が、おかしくておかしくて仕方がないという風に笑いながらシェリーは言う。

「虚数学区の鍵と言われたからどんなものかと思ってみれば、正体はこんなんかよ」

下品に笑うシェリーに対して、風斬はべちゃべちゃと湿った音を立てながら体を修復する。
彼女の意思とは無関係に。

「こんなものを後生大事に抱え込むなんざホントに科学ってのは狂ってるよなぁ！」

そう言いながらオイルパステルを横一閃になぎ払う。
エリスが拳を横になぎ払うと、風斬の体がおもちゃのように横に吹き飛ぶ。

「う……うぐ……」

軽々しく扱われる事に、風斬は屈辱のあまり涙を流していた。
だけど、それ以上に何も出来ない自分の弱さに腹がたった。

「おいおいおい、何なのよ。涙を見せてお涙頂戴ってかぁ？　モノに対して擬人化して涙なんか浮かべると思ってんのか気持ち悪りぃな」

「あ、ぅあ……」

「テメェみたいな化物が涙ながして保護欲あおるとか馬鹿だろ。この世界からテメェの存在が消えた所で何か損失がある訳？」

シェリーは手の中にあるオイルパステルの側面を軽く叩く。
瞬間、エリスが風斬の体を吹き飛ばす。
壁に直撃した風斬の腕が、真ん中から千切れる。

「私があなたにしている事って、この程度の事でしょう？」

千切れた腕だが、僅かに時間をおいて再び再生していく。
そして、エリスも周囲のガラスや建材を巻き込んで元に戻っていく。
その姿は奇しくも風斬と良く似ていた。

「これで分かっただろう？　テメェに逃げる場所なんてない事が。
テメェみたいな化物を受け入れてくれる場所ってどこかしら？　だ

から分かったろ。分かれよ。なんで分からねぇの？　テメェの居場所なんて最初から無かったんだって事が」

オイルパステルをくるくると回しながら、シェリーは蔑む口調で吐き捨てる。

風斬は動けなかった。

傷は全て治っていた。だけど彼女は動けなかった。

心では逃げろと叫んでいたが、別の声が心の中でした。

どこに逃げればいいの？

風斬は思い出す。何もかもが初めてだと。

ご飯を食べたのも、飲み物を飲んだのも、写真シールを撮ったのも。

全ては初めての事だった。

今までどういう理屈で自分が納得していたのか思い出せなかった。

どうして気付かなかった。どうして理解しようとしなかった。

自分の空虚な過去に、どうして疑問に思わなかったのだ。

風斬の頭の中で疑問がせわしなく浮かぶ。

しかし、どの疑問にも答えを出すことは出来なかった。

風斬はそこで気付く。

こんな醜い自分を温かく迎えてくれるような、そんな楽園はこの世界に存在しない。

スカートのポケットには、インデックスと優菜と一緒に写った写真シールが入っている。

二人は知らない。自分がこんな化物である事なんて知らない。

（優菜……さん）

ふと優菜の事を風斬は思い出す。

何故だか分からないけど、自分は彼女に好感を抱いていた。
抱きしめられると温かい気持ちになる。
心がとても安らいでいく。
母なる温もりだと、風斬は思っていた。

もし自分が化物という事を彼女が知ったら。
きっと、もう笑ってくれない。抱きしめてくれない。
彼女の温もりがこの世界から失われる。

その事に考え至った風斬は、無意識に涙を流していた。

「泣くなよ、化物」

そんな風斬を、オイルパステルを振り回しながらシェリーは嘲笑う。

「アナタガナイテモ、キモチワルイダケダシ」

風斬は絶望の中で思う。

死にたくない、けど優菜の温もりが失われるぐらいなら死んだほうがマシだ。
インデックスの笑顔が失われるなら、ここで死んだほうがマシだ。

そう思って、風斬はぎゅっと両目を閉じる。

これから襲い来るであろう、地獄のような激痛に身を固めていた風斬。
だが、衝撃は来なかった。

代わりに彼女の身に届いたのは、暖かな温もり。
心から手放したくないと思ったある人が与えてくれる温もり。

「待たせちまったみたいだな」

「当麻は足が遅すぎます。もう少し鍛えなさい」

「音速クラスで走るなんて、普通の高校生には無理な話ですよ！」

耳に届く声には聞き覚えがあった。
一人はちょっと苦手な男の子。だけど大切な友人。
一人は自分に暖かな温もりを与えてくれる女の子。そして大切な友人。

「エリス？　おい、エリス！　反応なさい！　くそ、何がどうなっているの？」

遠くでシェリーの吼える声が聞こえる。風斬は恐る恐る目を開けた。
そこには。

「しかしお姫様を救う役目は、残念ながら当麻には渡しませんよ」

「いやいやいや、そんな事したら不幸な事件が起きて、上条さんが

フルボッコにされるのは眼に見えてますから」

自分を守るように抱き抱える優菜と、エリスの巨大な腕を掴んでいる当麻がいた。
戦車でも薙ぎ払えそうなほどの巨大な腕を、まるで掌で受け止めるように。
たったそれだけで、エリスの動きは止まりあまつさえ体に亀裂が走っていた。

二人はうろたえた声をあげるシェリーに見向きもしていなかった。
ただ真っ直ぐ風斬を見ていた。

「……どう、して……？」

どうして自分のような化物を助けにきたの、そう口に出したつもりだった。
だが、あまりの展開に風斬はうまく言葉を口に出来なかった。

「友達を助けるのに理由が必要ですか？」

風斬は言葉に詰まる。
優菜の顔は、最初から一度も変わっていなかった。
抱きしめる腕を緩めると、優菜は優しく風斬を立たせる。

困惑しながら優菜を見た風斬の頭の隅で、ある言葉が囁かれていた。

カノジョハシラナイ。ジブンガバケモノダトイウコトニ。

それを伝える必要がある。だから風斬はその言葉を口にしようとした。

しかし言葉にはならなかった。口をパクパクと動かす事しか風斬には出来なかった。
そんな風斬の唇に、優菜は優しく人差し指を押し当てる。

「私は言いましたよね？　例え何があろうと、どんな事が起ころうと、私たちが友達である事は変わらないと」

写真シールを撮った時に優菜が風斬に言った言葉。
その時は分からなかったが、自分の正体を知った今の風斬には理解できる。

優菜は風斬が人でない事に最初から気付いていたと。

それを知った上で彼女は自分を友達だと言ってくれた。
それを知った上で彼女は自分を抱きしめてくれた。
それを知った上で彼女は自分を助けてくれた。

その事が風斬には嬉しかった。
風斬にとって優菜の声は、力強く、温かく、頼もしかった。
そして何より優しかった。

風斬は優菜にぎゅっと抱きつく。
優菜の胸に顔をうずめて風斬は泣いた。
しかしその涙は悲しみや恐怖からくる涙ではない。
嬉しさからくる涙であった。
泣きじゃくる風斬を優菜は優しく包み込むように抱きしめる。

「上条さんは蚊帳の外過ぎて悲しいです……」

一人ポツンとしている当麻が不満を口にする。

「せっかくの感動のシーンを台無しにしないでください」

風斬の頭を優しく撫でながら、優菜は当麻の不満を斬り捨てる。

「エリス……。呆けるな、エリス！！」

シェリーが一際大きく叫んだ瞬間、エリスの全身に亀裂が走り崩れ落ちる。

崩れたエリスを見て驚愕したシェリーだが、すぐにオイルパステルで壁に何かを書き殴る。

同時に、何かを早口言葉のようにまくし立てる。

シェリーの行動が終わると同時に、ものの数秒でエリスが元通りとなった。

いくら壊された所で、何度でも作り直せる。それがエリスの最大の強み。

盾にも囮にも特攻にも自爆にも使える。そして壊れたら作りなおせばいい。

その事に自信を持っているシェリーだったのか、焦りが浮かんでも平静は失っていなかった。

「くっ、はは。うふあああ！　何だぁこの笑い話は、おい、一体何を食べたらそんな気持ち悪い育ち方をするんだよ！　よかったな、化物。この世界にこんな馬鹿が二人もいて！」

嘲り笑うシェリーだが、二人は全く動じていなかった。

優菜は風斬を後ろに下がらせると、当麻の隣まで歩み寄る。

そして二人は言う。

「誰が二人だけと言いました？」

「二人だけじゃねぇぞ」

二人の言葉に、シェリーは間の抜けた声をあげかける。
瞬間、眩いばかりの閃光が辺りに襲いかかった。

目を潰すような白い光の渦に、風斬は思わず両手で自分の顔をかばう。
シェリーのいる通路以外の三方全てから、フラッシュライトによる光が放たれていた。
三十人から四十人の警備員。彼らは一人として無傷な者などいなかった。
病院のベットにいる方が正しい状態だと思えた。

それでも、彼らは臆さない。

己の危険を省みず、死地とよべるこの現場に躊躇いもなく駆けつけたのだ。

「なん……で……？」

不思議そうに風斬は問いただした。
どうして彼らは自分を守るように前へ出てきたのだろうと、風斬は思う。

「ばっかばかしい。理由なんていらねぇだろうが」

「私たちは特別な事などしていません。たった一言、彼らに言った

だけです」

二人は溢れんばかりの光の中で言う。

「「友達を助けて欲しいって」」

風斬はその言葉の意味を理解する。

「ここにいる全員が、お前に死なれちゃ困ると思ってんだ」

「貴方の居場所は、これぐらいで簡単に壊れない事を教えてあげます」

暗闇の中で溺れる風斬を掬い上げた二人はそう告げた。

「エリス」

シェリーは怒りに震えた声で言う。

「ブチ殺せ、一人残らず！　こいつらの肉片を集めてお前の体を作ってやる！！」

オイルパステルを乱暴に振り回しながら、シェリーは叫ぶ。

今のシェリーには冷静さが失われていた。

「実際問題、あの石像は厄介だよなぁ」

「まぁ何とかなるのではないですか？　当麻なら」

「ちょっと待て！　何かその言葉で嫌なフラグが立った気がするぞ！」

復活したエリスを前にしても、当麻と優菜は全く動じていなかった。

「く、はは。なんだ、テメェらだけかよ。後ろの奴らは単なる飾りってかぁ？　やっぱ科学の連中は臆病だな」

警備員はライトを照らすだけで、その他の行動を一切していない事にシェリーは気付く。

それがシェリーに冷静さを取り戻すきっかけとなった。だが、シェリーは気付いていない。

何故、警備員が動かないのか。

それは、風斬を守る為。

そして二人の邪魔にならないように、彼らは後ろで待機しているのだ。

（悔しいじゃん。子供に全てを任せるなんて）

透明な盾を構えながら、黄泉川は何も出来ない自分に歯がゆさを感じる。

だが、二人を止める事すら出来ない自分たちでは、この事態を好転させる事など出来ない。

悔しさに歯ぎしりしながら、黄泉川は二人を戦地へと送ったのだ。

「やっちまいな、エリス」

そう言ってオイルパステルを振るうシェリー。
その動きに連動するように、エリスが大きく拳を振り上げた。
だがやはり二人は動じていなかった。

「次は私がいきます。当麻はさっき試しましたしね」

そう言うと、優菜は持っていた棒を水平に構える。
直径は約三センチほど、長さは約二メートル。漆黒の色をしている棒。
棒術で使用する基本的な寸法より少し長めだが、太さは平均的なサイズであった。
エリスの腕と衝突すればその棒は簡単にへし折れる。
そう思っていたシェリーは歪んだ笑みを浮かべる。

エリスが拳を振り下ろすのと同時に、優菜は風を切り裂く音を立てながら棒でその拳を突く。

「……は？」

目の前の光景が理解できず、呆けた声を出すシェリー。
それもそのはず。
エリスの腕は柳のような棒によってもぎ取られたのだから。

「……雷閃のテストにはちょうどいい対象です。最も、まだ未完成の技ですがね」

宙を舞うエリスの腕が、ズシンと大きな音を立てて地面に落ちる。
石像は痛みを感じない。
だが腕を失った事に困惑しているかのように体を揺らしていた。

「もう少し改良がいるかもしれません」

「……いつか上条さんに振舞われそうな気がします……」

その言葉にハッとなったシェリーだが既に手遅れであった。
当麻の右手はエリスに触れていたのだ。
魔術は全て破壊され、エリスは大きな亀裂を作りながら崩れる。

「大丈夫です。一撃で気絶させてあげます」

「どう見ても気絶ってレベルじゃないんですがねぇ！？」

焦るシェリーに対して、二人は終始余裕であった。
だが決して慢心しているわけではない。
互いが互いに背中を預けているからこそ、当麻と優菜は余裕があったのだ。

「クソったれ！」

壁に文字を書きなぐり、またエリスを作り出すシェリー。
だが、その顔には最初の頃にあった余裕や侮蔑の顔はなかった。
ただ目の前の二人が不気味だった。

それは彼女を恐怖に陥れ、冷静さを失わせていく。
焦りと動揺で、シェリーは頭が真っ白になった。
そして更にある事に気付く。

どちらかを攻撃すれば、もう片方から攻撃を食らう事となる。

当麻を狙えば、優菜からの攻撃でエリスが破壊される。
優菜を狙えば、当麻の幻想殺しでエリスが破壊される。
どちらかを攻撃しないといけないのに、どちらにも攻撃する事が出来ない。

「くそ！　くそ！　何だよ、何なんだよテメェらは！」

もはや振動を起こして行動を封じるという事すら、思いつかないシェリーは苛立った口調で叫ぶ。
順調だった。なのに何だ。何故、この二人にそれを覆される。
説明のつかない事で、自分の計画がボロボロになっていく。
それがシェリーには我慢がならなかった。

「エリス！　あいつらを肉片にするぞ！」

金切り声に近い叫びをあげるシェリー。

「さて……これの真価はまだ出していません。そろそろ運用試験をしますか」

「真価って……？」

優菜の言葉に疑問をもつ当麻だが、優菜は答えずに棒の先端を弄り始める。
相変わらず当麻は優菜が何をしているか分からなかった。
何かルービックキューブを触っている感じで、優菜は棒の先端を弄るとその部分にナイフを押し付けた。
奇妙な音がすると、ナイフは棒の先端に固定される。

しっかりと固定されており、それはもはや薙刀にしか見えなかった。

「……は？　おいおい、優菜。一体何をしたんだ？」

どう見ても接合するようには見えなかった棒とナイフが接合される。
その事が、当麻に大きな疑問を沸かせた。

「少々特殊な技術が使われています。秘匿技術なので口外は出来ません」

薙刀の調子を確かめながら、優菜は当麻の問いに答える。
少し考えた当麻だが、すぐにある事に気付く。

そもそも説明されて理解できるのか、と。

（うん、無理だな）

「ま、いいや。そろそろケリをつけようぜ」

「道は私が作ります。当麻はシェリー＝クロムウェルをお願いします」

二人は一度頷くと、シェリーに向かって真っ直ぐ走りだす。

「馬鹿にして！」

激昂したシェリーは、オイルパステルを横一閃になぎ払う。
呼応したエリスは、豪腕を横一直線に振るう。

「未元物質より作られた薙刀、その力を存分に味わいなさい」

風切り音と共に、優菜はシェリーに向かってそう言う。

「……は？　え？」

目の前の現実が理解できず、呆けた顔をするシェリー。
瞬きをした間に、エリスの上半身は一瞬でバラバラになっていたのだ。
その場にいる警備員も、何が起きたか理解できなかった。

優菜は単に自分が持つ武具でエリスを切断しただけだ。
ただし優菜は音速レベルでエリスへ攻撃を繰り出したのだ。
まるで熱したナイフでバターを切り取るように、エリスの上半身は綺麗に切断された。

鉄やコンクリートで作り上げたエリス。
それが単なる槍にしか見えないものに、面白いように解体された。
その事に頭が真っ白になったシェリーは、その場でただ硬直するしか出来なかった。

「……あ？」

自分に向かってくる足音に、シェリーは気づいたが遅すぎた。
エリスの股の間を抜けて、当麻がシェリーに向かって走ってきている。

その事に気付いても、シェリーは行動を起こす事が出来なかった。
エリスは動けない。
動こうとしても自分の体だったモノが、邪魔になって歩くのすら困難である。

新しくエリスを作る時間もない。全ては八方塞がりな状況であった。

「は、はは。なんだよ、逃げ道がねぇじゃん」

絶望的な状況に、シェリーは引きつった笑みを浮かべる。

「逃げ道なんて必要ねぇ」

当麻は右手を強く握り、シェリーへと振り下ろした。

「テメェは黙って眠っていろ」

当麻はシェリーを一切の手加減をせず殴り飛ばす。

シェリーの体が、風に流される紙クズのように地面を何度も転がった。

悲劇が教えた答え

シェリーが倒れると同時に、エリスがその動きを止める。
まるでネジの切れた人形のように。

「これどうすればいいんだ？」

通路の中央に鎮座するエリスの残骸。
それを指さしながら当麻は疑問を口にする。

「当麻が右手で触れれば崩れるでしょう。それで、良いのではないでしょうか？」

当麻の疑問に答える優菜。
だが、当麻はそれを実行するのに躊躇いを感じていた。

（何となくですが、上条さんの方に崩れてきそうな気がします）

そう思いつつエリスへ手を伸ばした当麻。
だが、その行動は強引に止められる事となる。

「ふ、うふふ」

シェリーが笑う声を聞いて、優菜と当麻は勢い良く振り返る。

（浅かったのか？）

（……自分から後ろに飛んで衝撃を和らげたのですか……）

オイルパステルを握り締めながら、シェリーは笑っていた。
気が狂ったわけでもなく、ただ楽しそうに笑っていた。

「私が何でエリスを複数体創らなかったわかるかい？」

笑いながらシェリーは二人に問う。
勿論、魔術について素人と余り変わらない二人は答えることが出来なかった。
優菜も単語の意味は知っていても、魔術世界を詳しく知っているわけではない。

「作れないんだよ。同時に作って操ることが出来ない。無理に二体目を作ろうとした所で、どうやっても形を維持できない。腐った泥みてーに崩れちまう」

そこで言葉を切ったシェリーは、獰猛な笑を浮かべながら二人を見る。
その顔を見て二人は嫌な予感を感じる。

「そいつも上手く活用すりゃあ、こういう事もできんのさ！」

その言葉と同時に、シェリーが倒れている地面がまるごと崩れ落ちた。
二人は慌てて駆け寄ったが、そこには空洞しかなかった。

「地下鉄の線路に逃げたか！」

当麻が舌打ちすると同時に、背後にあったエリスが音を立てて崩れる。

「……奇妙だな」

「……当麻、今更ですが私たちは一体何人でこの地下街に来ましたか？」

まるで何かを確認するかのように、優菜は当麻に質問する。

少々訝しげに思いながらも、当麻は面子を思い出す。

「俺だろ、優菜だろう、風斬に……」

「インデックスさん……」

「……まさか」

優菜が何を言いたいのか当麻も理解する。

シェリーのターゲットは三人。

幻想殺しの当麻。

虚数学区の鍵である風斬。

そして……禁書目録であるインデックスの三人。

「やべぇ！　インデックスがあぶねぇ！」

「迂闊でした。シェリー＝クロムウェルはターゲットに対して執着が少ない。ならば、インデックスさんにターゲットを切り替えてもおかしくはありません！」

風斬に軽く説明をつけて、二人はこの場にいないインデックスの元へ向かう。

もう一人の友人を助ける為に。

少し肌寒い街中に、インデックスと御坂はぽつんと残されていた。
黒子は今も地下に閉じ込められた学生たちを外に運び出している。

（話題がない……）

二人の間に妙な沈黙が下りていた。
共通の友人である当麻と優菜はこの場にはいない。
友達を放置して帰るのも、何となく薄情だ。
そう考えた二人は、結局この沈黙に耐えながら待つしか無かった。

（黒子の奴め……）

この場にいない黒子に、心の中で恨み言を告げる御坂。
地下鉄の隔壁ぐらいなら超電磁砲で破壊する事も可能である。
だが、それをして万が一テロリストが逃げたら目も当てられない。

（いくらレベル5とはいえ、警備員の隔壁を破壊したらタダじゃすまないわよね……）

レベル5といえども絶大な権力があるわけではない。
警備員が協力を申し出たならともかく、無理矢理割り込んで行動する事は問題だ。
結局、御坂は動きたいけと動けないというジレンマに襲われていた。

（それに優菜さんにも言われたしなぁ……万が一電子部品壊して周

りの人を閉じ込めたりしたら……）

その光景を想像して、御坂は身震いした。

「……何をしておるのだ？　禁書目録殿」

あれこれ頭の中で考えていると、背後から人の声が聞こえた。

御坂とインデックスは慌てて後ろを振り向く。

そこにはアリシアが立っていた。

「ありしあ、どうしたの？　こんな所まで来て」

「何やらきな臭い魔術師の匂いがしたのでな。学園都市では珍しいので見学にきた」

「……うん、どうしよう。なんかあの魔術師はひょうかの事を狙ってたみたいだし。術式もロンドン仕込みみたいだし……」

「ロンドン仕込みというと、イギリス清教の魔術師か？」

「かもしれない。ゴーレムを操っていたけどかなり強引だったよ」

「ゴーレムというと、基本理論はカバラだろう？　なんでイギリス清教が使っておるのだ？」

魔術師やら何やら、普段あまり聞き慣れない言葉に御坂は首を傾げる。

ちょっと考えてみたが、最終的にはまぁいいかと思うことにした。

インデックスの格好はどう見ても宗教関係者にしか見えない。

そのインデックスと仲が良い小さい子は、同じ様に宗教関係者だったとしてもおかしくない。
そう思うことにした御坂である。

「まぁそんなのはどうだってよい。姉上を知らぬか？　最近はとんと見ないのでな」

「ゆうなは今日会ったけど、さっき言った魔術師のせいで地下街に閉じ込められたよ」

「何だと？」

ピクリとアリシアの眉が動く。瞬間、辺りの空気が一変する。
御坂はゾクッと背筋に冷たい汗が流れるのを感じた。
殺気、ではない。説明できないような感情がアリシアから漏れ出していた。

インデックスも御坂も、アリシアのあまりの豹変っぷりに驚き声を失う。
さっきまで街中を無邪気に歩くような少女の雰囲気だったが今は違う。
恐ろしい獰猛な獣が牙を研いでいる様な雰囲気であった。

「はっはっは、妾の姉上を襲うとは……よっぽど命知らずなのだな、その魔術師は」

「あ、ありしあ？」

獰猛な笑みを浮かべるアリシアに、インデックスは恐る恐る声をか

ける。
アリシアが魔術師という事をインデックスは知っていた。
だが魔術師の顔を今まで見た事はなかった。
いつも勝ち気だし自信満々な態度で喋る。
だが、ワガママを言う自分や打ち止めに付き合ってくれる面倒見の良さも持っていた。
それがインデックスのアリシアに対する印象であった。

「Ｔｏｄｅｓｓｔｒａｆｅ」

ポツリと流暢な外国語を喋ると、アリシアはそのまま歩き出す。
理解が追いついたインデックスは、慌ててアリシアの後を追った。

（Ｔｏｄｅｓｓｔｒａｆｅ（トーデス・シュトラーフェ）……ドイツ語で死刑って意味）

アリシアの呟いた言葉が理解できず、御坂はただその場に立ち尽くしかなかった。

当麻と優菜は地下街を全速力で走っていた。
途中、警備員の城門で立ち往生させられたが、優菜が端末を操作すると城門は自動的に開いた。

（何なんだ？　あの端末は）

黄泉川の部隊と鋼鉄の城門を管轄する部門は別。
故に、命令系統があるから、封鎖を解くには時間がかかる。

そのように黄泉川は語っていた。だが、優菜はそれを無視して強引に鋼鉄の城門を開け続けていく。
無論、二人が通った後は再び城門を下ろしていたが。

（考えたって始まらねぇ。今はインデックスを助けるのみ！）

余計な思考を打ち消して当麻は走り続ける。

『早くこないとお仲間が肉片になるわよ』

その瞬間、天井からコンクリートの柱が落ちてくる。
自分を踏み潰そうとする柱に、当麻は慌てて横合いに跳んで避ける。

「邪魔です」

そう言うと、優菜は倒れてきた柱を軽く斬り捨てる。
未元物質の薙刀は学園都市製のコンクリートすら軽く切断出来るようだ。

『ちぃ、その武器。厄介すぎるわね』

舌打ちしたシェリーの声が聴こえるが姿は見えない。
恐らく最初の目玉ゴーレムをどこかにおいて話しかけているのだろう。

『うふふ、うふふうふ。エリスを先に追わせているわよ。今ごろもう標的の元にたどり着いて肉片に変えちまってるかもなぁ』

その言葉に当麻は焦りを覚える。
オイルパステルのようなものでエリスを操っていたシェリー。

だが、実はそのオイルパステルを使わなくてもエリスを操る方法があったことに。

『うふふうふ。早くしないとね、でもどうするの地下街は……』

「焦りを生ませて私たちを混乱させるつもりですか？　随分と稚拙な内容でですが」

余裕の口調で語るシェリーだが優菜はばっさりと斬り捨てる。
少しだけイラついた口調で、シェリーは言う。

『てめぇは一体何者だ？　こんな状況でも頭が切れる上に、その手に持っている武器。間違いなく単なる学生とは思えねぇな』

「インデックスさんの友人ですよ。それだけですが？」

『……私達は住み分けするべきなのよ』

優菜の答えに、シェリーはゆっくりとした口調で言う。
それは今までのように粗暴な声色ではなかった。

『超能力者が魔術を使うと、肉体が破壊されてしまう。なんでそんな事が分かっているのか疑問に思ったことはない？』

シェリーの問いに二人は答えることが出来なかった。
超能力者は魔術を使うことが出来ない、使えば肉体の崩壊を招く。
問われてみて初めて疑問に思う。何故その事が分かったのか。
答えは簡単。

「つまり過去に誰かが試したって事ですか……」

『……正解だ。今からざっと二十年ぐらい前に、イギリス清教と学園都市が、魔術と科学が手を繋ごうとした』

シェリーの言葉は、当麻の胸へと少しずつ突き刺さっていく。

『ウチの部署の一部だがな。お互いの技術や知識を一つの施設に持ち寄って、能力と魔術を組み合わせた新たな術者を生み出そうとした』

「その結果が肉体の崩壊……ですか」

「……」

優菜の問いにシェリーは答えなかったが、その無言は肯定の意味にしか取れなかった。

『施設は潰されたよ。同じイギリス清教の手によってね。互いの技術・知識が流れるのはそれだけで攻め込まれる口実にもなりかねねえからな』

当麻はシェリーの言葉を聞いて押し黙った。

『エリスは私の友達だった。エリスは学園都市の一派に連れてこられた超能力者の一人だった』

ゴーレムに付けられた名前は、かつて彼女が友達と呼んでいた人物の名前であった。

『私が教えた術式のせいで、エリスは血まみれになった。施設を潰

そうとやってきた『騎士派』の人間から私を逃がすために、エリスは棍棒で打たれて死んだわ』

どの様な想いを込めてその名前を呼んでいたかは、彼女以外に理解する事など不可能である。

『魔術師は魔術師の、科学者は科学者の、それぞれの領分を定めておかなければ何度でも同じ事が繰り返されちまう。その為の戦争の火種だ』

だが、それでも当麻は思ってしまった。シェリーがどういう思いでゴーレムに対してエリスと呼んでいたのかと。

『だからよぉ、止めるな！　今のこの状況が一番危険なんだって事にどうして気付かないの!?　学園都市はガードが緩くなってるし、イギリス清教だって禁書目録を他所に預けるだなんて甘えを見せている』

悲痛な叫びを上げるシェリーに二人は彼女の行動原理が何か理解する。

彼女は一人の友人の死を、科学者と魔術師が不用意に距離を縮める事から生まれたと考えている。

『私達の時でさえ、あれだけの悲劇が起きた。これが学園都市とイギリス清教全体なんて規模になったら！　不用意に互いの領域に踏みこめば、どういう結果が生まれるか考えるまでもねぇだろ!!』

いがみ合いだけではなく、仲良くなろうとする想いまで裏目に出る。だからお互いの領域を決めて、双方のエリアから一人残らず他勢力を締め出すしかない。

そのための手段としての戦争の火種。悲劇を知ったシェリーが苦悩の末に出した答え。

「そんな言い分がテメェの行動を正当化出来ると思うな！」

当麻はつまらなさそうに息を吐いた後、自分の胸にあるものを吐き出すかのように叫ぶ。

「風斬が何をした？　インデックスがテメェに何をした！？　争いたくないなんてご大層な演説をしてる割に、テメェは一体誰を殺そうとしてるんだよ！」

納得できない、だから当麻は叫ぶ。

「向ける矛先が違うだろうが！　誰にも向けちゃいけねぇんだよ、その矛先は！　それは辛いだろう、俺には理解できるわけがねぇ！　それでもよ、その矛先を誰かに向けたら、それこそテメェがさっきまで言っていた争いが起きるだろうが！！」

『うるせぇよ！　憎いんだよ！　エリスを殺した人間なんて皆死んでしまえと思っているわよ！　魔術師も科学者もみんな八つ当たりでぶっ殺したいわよ』

奥歯を噛み締めるようにシェリーは叫ぶ。

『だけどそれだけじゃねぇんだよ！　本当に魔術師と超能力者を争わせたくないとも思ってんだよ！　なんだよ、頭の中がぐちゃぐちゃじゃねぇか！』

相反する矛盾した絶叫が響き渡る。自身を引き裂くような声で、シ

ェリーは叫び続ける。

『信念なんて一つなんじゃねぇんだよ！　私の信念は星の数ほどあるんだよ！　笑いたければ笑い飛ばせ。私には人形のような生き方なんてできないんだよ！』

「テメェは何で気付かねぇんだよ！」

『何ですって？』

「テメェの信念は星の数ほどあるとかいってるがよ。俺には最初から最後まで一つしか見えねぇんだよ」

当麻は言う、恐らく彼女すら気付いていないたった一つの事を。

「お前は大切な友達を失いたくなかったんだろう？」

例えどれほど月日がたとうと、どれほど信念を分岐・派生させたとしても。
シェリーの根本にある信念は変わっていなかった。
友達に対する想いだけは、ずっと変わらなかったのだ。

『……くそったれ……くそったれがぁ！！』

シェリーの願いはもう叶わない。
だけどどれほど大事な望みだったかは覚えいた。
それを奪われたからこそ、その痛みがどれほどのものか知っている。
当麻の言葉は単純で理解するのは難しくない。
否、当麻が言った言葉はかつてシェリーが放った事があるはずの叫びだった。

『もう止まらねぇんだよ！』

しかしシェリーは拒絶するように絶叫した。

当麻の言葉が理解できても、それでも彼女は止まらなかった。

『禁書目録をぶっ殺して戦争の火種を作る！』

まるで誰かに止めて欲しいと言いたげなシェリーの叫びが地下街に反響した。

「ちょっとまってありしあ！　貴方は本気で魔術師を殺すつもりなの！？」

無言で歩くアリシアに、インデックスは真剣な顔をしながら問う。

「……言葉が悪かったな、殺しはしない。だが妾の姉上を襲ったのだ。それがどんな魔術師でもそれ相応の罰は受けてもらう」

「相手はゴーレムを使うんだよ！？　それにイギリス清教の魔術師かもしれないよ！？」

叫びながらアリシアに叱咤するインデックスだが、アリシアはそんなインデックスを見て笑っていた。
いつもの勝ち気な笑みではない、獲物を狙う獰猛な獣の笑みであった。

「く、はは……」

「？」

「くはははははは！！　イギリス清教だから？　イギリス清教だから何なのだ！　我らコルネリウス家がどれだけ他の魔術組織から狙われ続けたか知ってて言うのか？　イギリス清教『必要悪の教会』所属の魔術師、魔道図書館　Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ」

「！？　……知ってたの……？」

「知らぬと思っていたなら、よほどめでたい頭をしていたのだな。妾の正体も知っていたのだろう？」

アリシアの問いにコクリと頷くインデックス。
最初からフルネームを語るアリシアだから、その素性は知っていた。
自分の知識に存在しない力を振るう魔導師。
それが魔導師としてのアリシアに対するインデックスの認識だった。

コルネリウス家は代々魔術を継承する事しかしない。よって魔術師とは呼べない。
魔術を行使する者を魔術師と呼ぶなら、魔導師は魔道書の中身を学んでそれを弟子に伝える者。
コルネリウス家は、代々自分たちが持っている魔導書を常に子孫へと受け継がせてきた。

後ろ盾もないコルネリウス家が、未知なる魔導書を所有している。
その噂だけで十分な理由となった。下は単なる個人から、上はローマ正教まで。
ありとあらゆる組織から狙われていたが、そのどれもが失敗に終わった。

インデックスもかつて魔導書を盗み見しようとしたが、それは叶うことがなかった。
分かったのは少しだけの情報。

「コルネリウス家。始祖の名前はゲハイムニス・フォン・コルネリウス」

インデックスはコルネリウス家について知っている事を述べる。

「基本的に管理者と呼ばれる人物がコルネリウス家を運営している。魔導書を引き継げる者のみが名乗ることを許され、その数は絶対的に七名と決まっている」

「詳しいな。そこまで情報が漏れているとは、秘密を守る為に動く連中らも役に立たん訳だ」

秘匿をモットーとするコルネリウス家は、常に秘密を知られないように動く。
もし秘密をバラそうとしたなら。
否、そう思われただけでその人物は人生を終える事となる。
たとえ本家の管理者であろうとも。
非情とも思える血の掟を守るからこそ、コルネリウス家の秘密は今まで守られてきた。

「じゃあ……どうしてありしあはお咎めがないの？」

そんなコルネリウス家だからこそ、アリシアのような存在は処罰されても不思議ではない。
何故アリシアが日本で平気な顔をして歩けるのかがインデックスには不思議だった。

「詳しくはいえないが、妾は契約者様から外に出る事を命じられただけだ」

「契約者？」

「……」

インデックスの問いに、アリシアは答えず視線を逸らすだけだった。
その態度に、インデックスは聞いてはいけない事だと理解する。

「……それでも、例え妾がコルネリウス家の者だとしても」

「？」

逸らした視線を再びインデックスの方に向けると、アリシアは笑いながら言う。

「妾は禁書目録殿を友人と思っている。例え、それが許されない事だとしても」

その笑顔はいつも見せている笑顔だった。
獰猛な笑みではない、いつものアリシアの笑顔だった。
その笑顔にインデックスは自然と笑みで返す。

「うん、わたしとありしあは友達だよ」

ニパッと笑うインデックス。その笑みにアリシアはほっと胸をなで下ろす。

「……ありがとうな、禁書目録殿」

「どういたしまして、なんだよ！」

そんな笑みを浮かべる二人に、非日常の手が振り下ろされる。

「見つけたぜぇ、禁書目録！」

その声にはっとなるインデックス。
周りをよく見ると、廃墟にしか見えない場所に立っていた。
どうやらアリシアを追いかけていて、周りに全く気付いていなかったようだ。

「誘いだしたのだよ、禁書目録殿」

無表情に言うアリシアは、その細い指で下を指す。
インデックスが下を向くと、マンホールがかたかたと震えていた。

「……足元が、揺れている？」

「正解だ。奴は足元、つまり地下を通って禁書目録殿を追ってきたのだよ」

その言葉と同時に、アリシアはインデックスを強く後ろに引っ張る。
瞬間、インデックスがいた場所の地面が爆発した。

「禁書目録殿、なれは妾が守る。ここは友達を守るかっこいいヒーロー役をさせてくれ」

無邪気に、純粋な子供のような笑顔でアリシアは言う。
インデックスはその笑顔に、何故だか分からないが安堵感を覚えた。

「くそ、あいつらと喋っていたら無駄に時間を浪費した。余計な奴がいるが……とっととぶっ殺して終わらす」

爆心地から石で固めて作った化物の腕が伸びていた。
そしてまるで墓場から這い出る亡者のような動きで、ゆっくりと巨大な石像が姿を現す。

その手には、術者らしき人間が抱えられていた。
シェリーの姿を捉えたアリシアの眼が音もなく細まる。
ズンという地を震わせる石像の足音。
インデックスは秒もおかず石像の正体を暴いた。
「ありしあ、あれは……」
エリスの本質を語ろうとしたインデックスだが、それをアリシアが手で制する。
「何やら色々と混ぜているが要らぬ心配だ。あんな出来損ないの泥人形など、百体あろうが相手にならん」
そう言うとアリシアは自分の髪を結っているリボンを取り外す。
「１５００年前、我らが始祖のゲハイムニスはある魔女と契約を交わした」
パサりと音を立ててアリシアの髪が流れ落ちる。
直後、アリシアに異変が起こる。
その光景を目にしたインデックスは目を見開く。
「そのせいかな？　力を使うとその魔女と似たような外見になる人間がたまに生まれた」
アリシアの髪が金から銀へ、瞳の色が蒼から紅へと変わっていく。
その光景にシェリーも驚きに肩を固まらせた。

「それは我が一族で、ある意味を持っていた」

銀色の髪、紅き瞳のアリシア。

「その意味とは……コルネリウス家の当主という意味だ」

身長こそ違うが、もし彼女にゴスロリ服を着せればある人物が思い浮かぶだろう。

その姿はまるで……。

「夜の魔女　アクゼリュス……！」

あまりの驚きに声を荒げるシェリー。

アリシアの姿は、教会世界の異端児　夜の魔女アクゼリュスに似ていた。

あくまで似ていたであり、顔つきや雰囲気はアリシアのものであったが。

「当主は七人の管理者を超える存在。コルネリウス家において絶対を意味する」

硬直する二人を無視して、アリシアは語り続ける。

「その姿を持つ者はコルネリウス家でこう呼ばれていた」

右腕を振り上げると、アリシアはそのまま横へ一閃する。

「Ｈｅｒｒｓｃｈｅｒ（ヘルシャー）……支配者とな」

それが終わりの合図であった。

理解の追いついたインデックスだが、更に理解に苦しむ光景を目にする。
アリシアのやった事は腕を横に一閃するだけ。
なのにエリスは粉々に打ち砕かれ、シェリーはまるで紙クズのように地面を転がり続けた。
やがて柱に激突しその勢いを失うが、シェリーは意識を完全に手放していた。
どういう理論で、どういう力を使って目の前の攻撃を実現したのか。
インデックスは全く解析する事が出来なかった。

地面を転がるシェリーは気を失う直前に、体に衝撃を受けた事を理解する。
だが理解できたのはそこまで。
何故、そんな衝撃を受けたのか。どうして、気付かなかったのか。
何も理解できなかった。
分かったことは、まるで巨大な板に全身が叩きつけられたような感覚だけ。
ポイントから波紋のように広がったのではなく、均一に力を叩きつけられた。
そう思い至ったのと同時に、シェリーは意識を手放した。

気を失ったシェリーを見下ろしながら、アリシアは無表情な顔で言う。

「我が名はアリシア・フォン・コルネリウス。十代目のコルネリウス家当主だ」

舞台裏の終わり

「……おい、アレイスター。お前は知っていたのか？」

「何をだね」

歯ぎしりしながら睨む土御門を、興味なさそうな雰囲気で呟くアレイスター。

「とぼけるな、アリシアの力をだよ」

空中に浮かぶ映像から目を離して、土御門は吐き捨てるように言う。
彼女の今の姿は魔術世界でも存在自体がおかしい魔女に似ていた。
あの魔女と関係があるなら、１５００年間も生き長らえた理由となる。
土御門はそう理解した。

土御門の問いにアレイスターは答えなかった。
代わりにうっすらと笑っていた。

「それで？　これで満足か？　お前は人を駒のように操る事で、虚数学区・五行機関を掌握する鍵の完成に一歩近づいた」

うっすらと笑うアレイスターを睨みながら土御門は言う。

「虚数学区・五行機関。その正体が、まさかＡＩＭ拡散力場そのものだなんて誰も思わぬだろう。学園都市に住む全ての学生の周囲に自然に発生する力が虚数学区を作っているなどな」

能力者が存在していれば虚数学区・五行機関は必ず作られる。
そしてそれは人に感知する事は出来ない。
ＡＩＭ拡散力場を計測するには、機械で計測しなければ分からない程度のもの。

故に虚数学区・五行機関を制御するため、どこまで踏み込んで良いのか判別できない。
何が起こるか分からない。場合によっては学園都市が地図から消滅する事だってありえる。
逆に虚数学区・五行機関が崩壊する場合もある。

だからこそ、滅ぼさず学園都市が危害を受けずに制御する方法が考えられた。
そのための鍵こそが。

「ＡＩＭ拡散力場そのものの塊である風斬氷華。あくまで虚数学区の一部とは言え、あんなものへ人為的に自我を植えつけて実体化をさせるなどな」

「これも虚数学区を御するための方策だ。無自我状態よりも、あえて思考能力を与えた方が行動を予測できるし、上手く立ち回れば交渉や脅威なども行える」

「幻想殺しは虚数学区にとって唯一の脅威とも言える。その脅威が自我を生む……か」

「それだけではない」

アレイスターは薄く笑いながら言う。

「幻想殺しによって死を教えれば、虚数学区の鍵は生を望む。だが、それだけでは不足だ」

土御門は黙ってアレイスターの言葉を聞く。
やはり優菜を風斬と合わせたのは訳がある、と土御門は思った。

「天上霊薬による生きる事という意味、それを教え込むだけでアレはより思考の読みやすい性質へと変貌する」

死があるからこそ生にしがみつく。
生きようとするからこそ死を遠ざけようとする。

「虚数学区の鍵が天上霊薬により多くの接触を行うのも、生への渇望から生まれた無自覚の行動だ」

生死を知らない者には最初から本能や自我といったものは芽生えない。
ならばこそ。

「……幻想殺しによって死を教え、天上霊薬によって生を教える」

土御門の言葉にアレイスターは薄く笑う。

「感情が乏しい存在より感情が豊かな存在の方が、取引に使うカードの種類が多くなるだろう」

くそったれが、と土御門は毒づく。
そこまでして虚数学区を掌握したいのかと土御門は思っていた。

「虚数学区に意識を向けるのはいいが、脅威は内側だけではないぞ。

今回、お前が黙認した一件によって、世界は緩やかに狂い始める。
最後が魔術師とはいえ、お前は途中まで学園都市に住む能力者を使った」

土御門はアレイスターに問い質す。
当麻と優菜は学園都市に住む人間だ。
本来なら二人が魔術師と戦闘を行う事を止めなければならない。
だがアレイスターは二人を魔術師と闘わせた。

「聖ジョージ大聖堂の面々はこれを黙って見過ごすとは思えない。
まさか、お前はこの街一つで世界中の魔術師達に勝てるなどとは思っていないだろうな」

「ふ」

土御門の脅迫めいた声に、アレイスターは短く笑う。
喜怒哀楽の全てを含んだその笑みに、土御門は背筋に寒気を覚えた。
教会世界が敵として襲ってくると理解しても。
アレイスターはただ笑みを浮かべるだけであった。

説明不能の笑みを浮かべながら、アレイスターは語りかけるように言う。

「天上霊薬が『覚醒』すれば、それは問題にすらならぬ」

「……『覚醒』だと？」

「それに、あれさえ掌握出来れば魔術師どもなど取るに足らん相手だ」

アレイスターの言葉に、土御門は眉をひそめる。
天上霊薬の『覚醒』、そして虚数学区・五行機関の掌握。
前者の方は全く分からないが、後者の方は意味がわかる。
だが、虚数学区・五行機関は学園都市内部限定だ。
ＡＩＭ拡散力場は能力者の周囲にしか展開できないのだから。

そこでふと土御門はある事に気付く。
ＡＩＭ拡散力場は、人とは別位相に存在する。
そしてその力の集合体によって構成される生命体。

（まさか、天使？）

土御門の背中に嫌な感覚が走り抜けた。もし風斬氷華が『天使』と表現されるなら。
彼女が住んでいる虚数学区の住人は全て『天使』となる。

「アレイスター……お前はまさか、人工的に天界を作り上げるつもりか！？」

虚数学区の住人が住む世界。それは天界と呼ばれてもおかしくない存在になる。
土御門はその事に気づく。

「さてね」

対してアレイスターはつまらなさそうに一言答えるだけであった。

もし科学の力のみで『界』を作られるなら、それは天界や魔界などという現存の言葉では呼べない。

全く新しい『界』を生み出す事となる。
それは、あらゆる魔術の崩壊を意味していた。

魔術という世界の根源が変わるのだ。
今までのように魔術を使おうとしても環境が狂っているから使えない。
よしんば使えても、魔術による自爆をするだけである。
そして、魔術によって支えられている神殿や聖堂などは柱を失って自ら崩れ落ちていく。
どんな宗教にも当てはまるこの現象。

簡単にいえば、どの魔術にも存在するルールを完全にかき乱す事だ。

土御門はそこでもう一度考え直す。
ＡＩＭ拡散力場が虚数学区・五行機関の正体だ。
今は学園都市にしか存在しないＡＩＭ拡散力場を、全世界に埋め尽くせばどうなるか。
あらゆる魔術師は魔術を使う事が出来なくなる。

虚数学区・五行機関の制御が完璧になれば、アレイスターは能力開発を世界規模に展開するだけで良い。
それだけで全ては終わる。
たとえ教会世界が戦争を仕掛けてきても、結果は目に見えている。
学園都市は虚数学区という、新たな『界』を起動すればよいのだから。

「人造天界か……イギリス清教が知れば即座に開戦だな」

「馬鹿馬鹿しい妄想を膨らませるな。まずオリジナルの天界を知らない科学者の私には、人造天界など作れるわけがなかろう。それに

私は教会世界を敵にまわすつもりは毛頭ない」

その言葉に土御門は唇の端を歪める。

「お前以上に詳しい人間がこの星にいるか？　魔術師アレイスター＝クロウリー」

アレイスターは男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見える。

人間としてのあらゆる可能性を内包しているといってもよい。

それ故に、アレイスターの考えは予想がつかない。

土御門は半ば負け犬が吼えかの如く吐き捨てる。

「まるっきり負け惜しみになるがな。お前には二つほど忠告してやるよ」

「ふむ。聞こうか」

「オレにはお前が何を考えているか分からない。だが、あの幻想殺しを利用するというなら覚悟しろ。生半可な信念で立ち向かえば、あの右手はお前の世界を食い殺すぞ」

その瞬間、タイミングを計ったように結標が部屋に入ってきた。

「それからな、天上霊薬にも気を付けろよ。彼女はお前が思っているほど甘い性格ではないぞ」

結標にエスコートされ、土御門はビルから出て行く。

誰もいなくなった部屋の中、逆さに浮かぶアレイスターは一人呟く。

「ふむ。私の信じる世界など、とうの昔に壊れているさ」

そう呟くと一つのモニターに、あるデータを表示する。

モニターにある文字を目で追って、アレイスターは笑みを浮かべる。

アレイスターが見ているモニターには、こんな報告が表示されていた。

―――――――

検体名称『天上霊薬』、覚醒率三十四％。

基準点による素体への影響率二十三％。

白色コアと素体の接合度　レベル六を維持。

プランによる『天上霊薬』の開放　計画通り稼働中。

―――――――

検体名称『幻想殺し』、プラン影響率七十八％

ＡＩＭ拡散力場への相殺値　計画通りの値を観測。

『幻想殺し』による『天上霊薬』への影響を確認。

メインプラン主軸としての力は計画よりズレあり。

居場所

シェリーが気絶して少し後、当麻と優菜はインデックスたちと合流する。
怪我がない二人の姿を見て、当麻と優菜はほっと息を吐く。

「所で何でアリシアがいるんだ？」

インデックスと共にアリシアがいた事を疑問に思う当麻。
当麻はアリシアを単なる学生と思っていた。
だが、それはアリシアの一言で誤りだと悟る。

「魔術師は魔術師によって倒されなければならぬ。そうであろう？兄上」

その言葉で当麻は気付く。アリシアもまた魔術師なのだと。
少しだけ困惑した当麻を見ながら、アリシアは意地の悪い笑みを浮かべて言う。

「今ごろ気付くとは鈍すぎるぞ、兄上」

「とうまは魔術については素人だからね」

インデックスが当麻に向かって偉そうに言う。

（何でお前が偉そうに言うんだ……？）

口に出して言えば何か嫌な予感がする。
そう思った当麻は心の中で突っ込んだ。

「所でアレはどうするんだ……」

インデックスを軽く無視して、当麻はある方向を指差す。
そこには壁に寄りかかって気絶しているシェリーがいた。
警備員の姿はまだないが、いずれこの場にやってくるであろう。
何故なら、辺り一面ボコボコに破壊されていたから。

「少々やり過ぎたな。ついムカッとしたとは言え……」

（契約者様に無断で『あの力』を使ってしまったな……厄介な事になりそうだ……）

「とりあえずこの場から逃げるぞ。ついでにこの魔術師も連れていかないとな」

「どういう意味だ、兄上？　そいつは敵だろう？」

シェリーを担ぐ当麻を見て、アリシアは首を傾げながら疑問を口にする。

「コイツはもうちょっと世界を見るべきだと思うんだ」

「うぅ……」

「お、気がついたようだな」

うっすらとシェリーがその目を開く。
覗き込む当麻を、顔が間近に迫ってくると感じたシェリーは無言で当麻を殴った。

「いってぇ！　何すんだよ！」

「やかましい！　目が覚めたらテメェみてぇな面が見えたら普通殴るだろう」

文句を言いながらシェリーはその場に立つ。
気絶してから随分と時間がたったと感じたシェリーは、自分の体に異変がある事に気付く。

体の痛みが全くない。

当麻に殴られた痛みも、アリシアにつけられた傷も、全て無くなっていた。
まるで学園都市に来た直後のようだとシェリーは思っていた。

（変な薬でも打たれたのか？　アレだけあった怪我が一つもねぇ……）

「当麻はデリカシーがないですからね。その痛みは教訓としておきなさい」

「兄上はデリカシーがなさすぎるぞ。さすがに女性の顔を無断で覗き込むのは如何なものか？」

「とうまはデリカシーがないね」

優菜、アリシア、インデックスの三人から、盛大に言葉の暴力をもらう当麻。
反論が出来ない当麻は、三人の言葉が胸に突き刺さる。

「とほほ、上条さんはフルボッコが基本なのですね」

がっくりと項垂れる当麻を見て、シェリーは眉よひそめる。

「……何で敵を前にしてのんきな会話が出来るんだよ」

シェリーは周りの人間を見ながら疑問を口にする。
さっきまで争っていた人間が、自分に敵意を向けていない。
それがシェリーには疑問だった。

「ばっかやろう。怪我人を放置しておけるかよ」

当麻はシェリーの疑問を笑い飛ばしながら言う。
敵か味方か、などという話は既に終わっている。
だから当麻はシェリーを助けたのだ。

「はん、一つはテメェにぶん殴られた怪我だけどな」

「うっ！　申し訳ございません……」

「……なんか素直に謝られると調子が狂うな」

バツの悪そうな顔をする当麻を見て、シェリーは金髪を掻きむしりながら言う。
その顔はいかにも当麻の扱いに困っている顔であった。

「あたしはテメェやテメェの大事なヤツを殺そうとしたんだぞ？」

「確かにお前はインデックスや風斬を殺そうとした。だけど、結局は殺してないだろう？　だったらつまんねぇ事に拘る必要はねぇだろ」

当麻の言葉にシェリーは驚きに目を見開く。

「お前はお前の信念に従って動いたんだ。確かに手段は褒められた事じゃねぇ。だけどな、一度道を誤ったからといってずっと悪人である必要はねぇだろう」

「……」

「もう一度、今度は正しい道で信念を貫けばいいさ。だからよ、少しは視野を広げてみろや」

当麻の言葉はシェリーの何かを少しづつ壊していく。
シェリーはそれを感じつつ当麻の言葉を耳にする。

「それでもお前が悪人であり続けるというのなら」

当麻はシェリーに向かって右手を突き出す。
見えない壁のような物を破壊するかのように。

「まずはその幻想をぶち殺す」

不敵な笑みを浮かべる当麻を見て、シェリーは少しだけ笑った。
今までのような獰猛な笑みではない。

それは彼女の美しさを引き立てる笑みだった。

「笑っていればお前は可愛いんだからさ。だから……」

その瞬間、当麻の顔面にシェリーの拳が飛んでいく。

最初と違って、全く手加減なしの攻撃に当麻は思わず仰け反る。

シェリーの顔が赤いのは、照れているのか恥ずかしいのかどちらかは読み取れない。

「いってぇ！！　お前暴力過ぎだろう！」

「テメェはなんでそうキザな台詞がぽんぽんと出てくるんだよ！」

当麻にヘッドロックをかけつつ、シェリーは反論する。

「痛い痛い痛い！　ギブッ！　ギブですよ！？」

「暫くそのキザな言葉を吐けないようにみっちり調教してやる！」

ギリギリと頭から嫌な音がするのを当麻は耳にする。

頭の痛みと頬に感じる柔らかい感触の二重苦を味わいながら当麻は言う。

「不幸だぁーーー！！！」

その後、シェリーは学園都市を去った。
素っ気ない挨拶だったが、それでも禍根なく別れる事が出来たのを当麻は嬉しく思っていた。

そして、そのままの気分で帰宅しようとした当麻だが、ある事に気付く。
全身傷だらけである。
あちこち擦り傷があり、とてもではないがこのまま家に帰る事は出来ない。
結局当麻は、家ではなく急遽病院に移動する事となった。
何故か他の面子もぞろぞろと付いてきたが……。

インデックスとアリシア、そして途中で合流した風斬は、病院の待合室のソファに並んで座っていた。
退屈そうにしているインデックスとアリシア、ちょこんと正しい姿勢で座る風斬。
話題はないが、決して嫌な空気ではなかった。

やがて風斬が引っ込み思案な声で言う。

「あ、あの……二人とも」

風斬の声に、インデックスとアリシアはゆっくりと風斬に視線を向ける。

「これは、二人にとって……重要な事か、どうかはわからないんだけど……」

「なに？」

「うん、あのね……」

風斬はそこで言葉を区切ると、一息ついてから告げる。

上条当麻の右手、それと上条優菜の力は超能力では説明できないという事を。

インデックスとアリシアの動きがピタリと止まる。

「え？　ちょっとまって、ひょうか」

「ちょっと待て娘。姉上と兄上の力が超能力では説明が出来ないだと？　馬鹿をいうな」

「うん、だって魔術には当麻の右手は存在しないもん。私の頭の中には十万三千冊分の知識があるけど、あそこまでデタラメな力の事なんてしらない！」

「姉上のあの力だっておかしいぞ。治癒の魔術はあるが、触れただけで治療するなんてデタラメは聞いたことがない」

だから魔術ではなく超能力でないとおかしい、そう二人は呟いた。

対して風斬は小さく笑いながら言う。

「少なくとも能力、じゃないよ……。大体、当麻……さんが能力者ならば……その微弱な力が私の中に侵入して、私の体は一瞬で破壊されているはずだもの……」

（それに……優菜さんのＡＩＭ拡散力場は……あの力じゃない……）

風斬はインデックスとアリシアに伝えていない。
自分の体はＡＩＭ拡散力場で作られているという事を。
その点をぼかしながら、風斬は二人に伝える。

（自分が人と違う存在だと分かった時、私は気付いた。『正体不明』という力と私の体の正体を……）

「ふむ、娘……えっと風斬殿は何だと思う？」

「多分……超能力でもない別次元の力……だと思う」

「とうまもゆうなも生まれた時から備わっていた天然モノ……」

二人は頭を更に悩ます。
当麻と優菜に共通している点は同じ血を引いているという事のみ。
風斬は能力ではないと言った。
でも、魔術でもあんな力は該当するのが見当たらない。

「幻想殺しは異能の全てを破壊する力。つまり死をもたらす力」

「姉上の力は知らんが、治療をしていた所を見ると治癒の力。つまり生をもたらす力」

だがそれ以上は分からなかった。
魔術でも能力でもない、まったく別次元の力。
だからインデックスとアリシアは同じ思いを抱いていた。

じゃああの力は一体何なのだ？　と。

「右手だけは治らないんだよな、不便だ……」

「沈利姉さんに怒られないように、怪我の跡をなるべく消しておきましたよ」

「悪いなー。何から何まで」

二人が頭を悩ませていると、廊下の向こうから見知った顔が見えた。
声の主は当麻と優菜。
二人はゆっくりと廊下を歩きながらインデックスたちの元に歩いて来る。
そんな二人を見て、インデックスとアリシアは笑いながら言う。

「まぁいいか」

「うん、謎の力があってもゆうなもとうまも友達だしね」

二人はこれ以上考えても仕方がないと思ったのか、考えることを放棄する。
そしてソファを勢い良く立ち上がると、当麻と優菜に向かって走り出した。

「……そう、だね。友達だからね」

そんな二人を眺めながら風斬は笑う。
奇妙な力があろうとなかろうと友達だという事に代わりはない。
風斬はそれを教えてくれた優菜に視線を向ける。

（優菜さんは教えてくれた。生きるという事は意思を持つという事……）

ならば自分は生きるという事を教えてくれた優菜の為に生きよう。
それが自分の意思だ、と風斬は心の中で決意する。

（穏やかな時間を過ごして、誰かと一緒に笑っていられる。それはとても温かい世界）

一分でも良い、一秒でも構わない。
死にもの狂いで何にでもすがってでも欲した世界。

それほど渇望した世界に、自分の居場所がある。

その事を思った風斬のまぶたに涙が浮かぶ。
それは喜びの涙。
涙を流す風斬に気付いた優菜は、風斬に向かって手招きをする。
この上ない友達に向けるような笑顔を見せて。

風斬は子供のようにごしごしとまぶたをこする。
優菜に負けないほど、晴れやかな笑顔を浮かべてソファから立ち上がる。
そして優菜に向かって駆け出すと、その勢いのまま優菜の胸に飛び込む。

（ここが……私の居場所）

優菜の優しい温もりを感じながら、風斬は心の中でそう呟いた。

当麻たちがいる病院より少し離れたビルの屋上。
そこに一人の少女と大きな獣が一匹いた。

『よろしいのですか？　アクゼリュス様』

巨大な獣が口を動かす。
驚いく事に獣は人の言葉が喋れるようだ。

『アリシアの行動は契約上許されない事です』

獣は銀色の毛を持つ狼の姿をしていた。
だが狼にしては大きすぎる。
まるで水牛並のサイズを誇っていた。

『アクゼリュス様の許可無しに「あの力」の行使は禁止されております』

アクゼリュスは獣の言葉に答えない。
ただ、静かに病院を見下ろすだけであった。

『何らかの制裁が必要かと存じますが……』

「黙れ、オートクレール。死にたくなければその口を閉じろ」

銀狼、オートクレールを見ずにアクゼリュスは言う。
その言葉を聞いて、オートクレールは素直に口を閉ざす。
そして数歩下がると、アクゼリュスの邪魔にならない位置に立つ。

対してアクゼリュスはずっと当麻たちがいる病院を見下ろすだけであった。
いつもの冷酷な笑みはその顔にない。
どこまでも冷たい瞳をしていた。

「１％以下とはいえ、私の力を使うことが出来たか……」

アクゼリュスはそう呟くと薄く笑う。
アリシアの成長がこの上なく嬉しいと言いたげに。

「１５００年前の気まぐれが、こうも面白い結果を生むとはな」

視線を病院からオートクレールに変えると、アクゼリュスは愉快そうに言う。

「オートクレール、アリシアが力を使う事を私は許可する。フラガラッハにもそう伝えろ。余計な手出しをするな、貴様らは黙って私の命令に従っていろ」

『御意』

頭を下げたオートクレールは、そのまま虚空へと溶け出す。
一秒もたたず、オートクレールは姿を消していた。

「ふふふ。魔術と能力、二つの世界に小さな亀裂は出来た。世界は緩やかに狂い始める」

アクゼリュスは空を見上げながら言う。

「悲劇という物語がいくつ出来るだろうな」

これから起こる悲劇を想像して、アクゼリュスは楽しそうな笑みを浮かべた。

霧の都ロンドン

ステイルは霧の都と歌われるロンドンを歩いていた。
街の景色自体に変化はない。
色々と不便はあるが、それでもステイルはこの街を選んで住んでいる。
だがある事が、彼を困惑させていた。

「最大主教」

「ん。折角地味な装束を選ったのだから仰々しき名前で呼ぶべからずなのよ」

簡素なベージュの修道服に身を包んだ若い女性が言葉を発する。
見た目は十八歳ぐらい、光り輝くような白い肌に、透き通った青い瞳。
美しい黄金の髪が、彼女を雑踏に紛れ込む事を許さない。

そして何より眼を引くのは、異様に長い黄金に輝く髪であろう。
まっすぐ伸びた髪をくるぶしの当たりで一度折り返し、頭の後ろにある大きな銀の髪留めを使って固定している。
更にもう一度折り返して腰のあたりまで届いているから、相当な長さとなる。
軽く見積もって身長のニ・五倍ほどあるだろう。

異彩を放つ彼女の素性は、イギリス清教第零聖堂区『必要悪の教会』最大主教。
名前はローラ＝スチュアート。

イギリス清教のトップは国王である。
その側近のローラが担う役目は『多忙な国王に代わって、イギリス清教の指揮を執る事』だ。
しかし書類上と実質的な立場は逆転しており、命令権は彼女の手の中にあった。
それほど絶大な権力を持つローラだが、彼女は護衛もなく朝の町並みを普通に歩いていた。

聖ジョージ大聖堂にこい。
そうステイルに命じたローラだが、何故かローラは指定時間に聖ジョージ大聖堂にいなかった。

「わたしにも帰るべき家ぐらいありけるのよ。まさか年がら年中あんな古めき聖堂の中になど取り籠らないわ」

ステイルは少しだけ難しい顔をした後に言葉を発する。

「一つだけ尋ねてもよろしいですか」

「硬き事ね。なに？」

「最大主教、貴方はどうしてそこまで馬鹿な喋り方をしているのですか？」

まるでシャツのボタンの掛け間違えを指摘されたかのようにローラはキョトンとする。
しかしステイルは気にせず、周りを指さして更に言う。

「出来れば恥ずかしいので、貴方の用件は聖ジョージ大聖堂でお願いします」

ステイルがいる場所は、ロンドンでも最大級のウォータールー駅の近くである。
シスターや神父の服だけならそれほど珍しくない。
だが、そのシスター服を着ている女性が馬鹿みたいな喋り方をしていると話は別だ。

「な、え、あ！　お、おかしいの？　日本語とはこんな感じといふものではないければかしら！？」

顔を真っ赤にしながら言うローラ。

「あの、失礼ですがもう何を言っているか分かりません、古語としても狂っています」

街行く人に日本語は通じていないはずだが、何故か周囲の視線がローラに集中しているように感じられた。

「文献やテレビジョンなどの参考資料を元に、色々と勉学に励みて、さらには本物の日本人にもチェックをいれてもろうたのに……」

「本物の日本人って一体誰なんですか？」

「つ、つちみかどもとはるのヤツなのよ……」

その瞬間ステイルは理解した。
ローラがエセ古文調な言葉使いをする理由を。
土御門は変な日本語をローラに仕込んだようである。

「……ああ、あの義理の妹にメイド服を着せて悶絶しているような危険人物ですか」

「さ、さにあったね。しからば誤りたる口ぶりは改めねば……」

頭を抱えて唸るローラ。だが、その口調は既に癖となっているのだろか。

あーとかうーとか唸るが一向に変化する様子はない。

「まぁそんなくだらない事はどうでもいいです。『仕事』の話をしましょう。あー、日本語に自信がないなら誰か別の人を教師にしてもらえば良いじゃないですか」

「く、くだらな……。じ、自信がなしとかそういう訳ではさにあらずなの。いやあれよそう今日はたまたま調子が悪しきだけ」

挙動不審いっぱいな態度でローラは言うと、修道服の胸元からメモ用紙のような紙を二枚と黒マジックを取り出した。

「きゅっきゅーっと♪」

歌うように口で言いながら、黒マジックで紙になにか模様のようなものを描いていくローラ。

だがその姿は単に教科書に落書きをする学生にしか見えない。

ステイルは思う、もうすこし壮厳と出来ないのかと。

「きゅっきゅきゅーきゅっきゅきゅーきゅっきゅきゅーきゅっきゅきゅーきゅっきゅきゅー♪」

いい加減うざくなってきた。後ろから蹴り飛ばして黙らせたい。

そう思うステイルだが、相手は一応仕事の上司なのだと自分に言い聞かせる。
歯を食いしばり、小刻みに震えながらステイルは言う。

「……一応確認しますけど、何をやっているんですか？」

こめかみに青筋が立つが、何とか冷静に言葉を口にできたステイル。

「ほんの少しき配慮なのよ。ほら」

二枚の紙に模様を書き終えると、その片方をステイルの手に押し付ける。

『あっあー。音聞きはできとろうかしらー？』

その直後、ステイルの頭の中へ直接声が聞こえてきた。
ステイルは確認するようにローラの顔を見る。
だが、彼女の小さな口は動いてはいない。

「通信用の護符、ですか？」

『声に出さねど思うだけで音聴きできようものなのよ』

どうやらステイルが周りに聞かれるとまずい、と進言した事にわざわざ対応してくれたらしい。
やはりよく分からない人だ、とステイルは思った。

『所で何でまた心の声まで馬鹿口調なんですか？　ああ、いまどき流行らない個性って奴ですね』

『えっ！？　ま、待っていなのよステイル！　わ、わたしは今、英国語で語らいているわよ！』

声もなく慌てる様子にステイルはため息を吐いた。
その態度に、ローラは余計慌てて何かを言いかけるが、呑み込んで仕事の話題を言う。

『ごほんっ！　ステイル、貴方は「法の書」を知り足るわね』

『気は抜けますけど意味は通じますし、まぁ問題ないですね』

辛辣な言葉を言うステイル。
威厳とか冷静さを持てとローラに進言するステイルだが、無意味だと思い始めた。

『く、く……』

『「法の書」ですか。著者は確かエドワード＝アレクサンダーだと思いましたが』

エドワード＝アレクサンダー。またの名をクロウリー。
二十世紀最高の魔術師と同時に、二十世紀最低の魔術師とも呼ばれた男。
常軌を逸した苛烈で異常な言動から様々な国から国外退去処分を受けた。
ありとあらゆる魔術師を敵に回した伝説の男。
彼の死と共に世界中の緊張の糸が一気に緩んだとさえ言われるほど敵と混乱と問題に満ちていた。

『「法の書」の原典は今、ローマ正教のバチカン図書館にあったと

記憶していますが』

『クロウリーは一九二〇年から一九二三年までの間、イタリアのシチリア島にて活動しとったのよ』

その時の落し物という訳なの、とローラは教科書を朗読するような声で言う。

『そもそもあれは誰も解読できない、という話ですが。禁書目録も解読を諦め、暗号解読専門官であるシェリー＝クロムウェルすらサジを投げたそうですが？』

『法の書』は誰にも読めない。現存の言語学で解読できるようなシロモノではない。

一〇万三千冊の魔導書を有する禁書目録ですら、予測止まりなのである。

よって、インデックスの頭の中には原文そのままの状態で詰め込まれている。

『では、その何人たりとも読めん「法の書」を解読できる人間が現れんとしたら、どうする？』

ローラは愉快げに笑いながら言う。

『……何ですって？』

その言葉にステイルはローラの顔を見る。その顔から冗談を言っているようには見えない。

『その者はローマ正教の修道女で、オルソラ＝アクィナスと言うさ

うよ』

『……』

ローマ正教は現在、勢力争いのための戦力が不足している。
だからだろうか、『法の書』の解読に乗り出した。
噂では天使の術式すら記載されているとかいう話をステイルは思い出していた。

『ヤツら、「法の書」を単なる新兵器の設計図ぐらいにしか見ていないのか……しかし天使の術式は人間には扱えないはずですが』

『連中が戦力増強のために「法の書」を利用する可能性はあらずのようね。それに天使の術式は人間でも使わん事は可能よ』

何だと、とステイルが口にする前にローラは断言する。

『夜の魔女　アクゼリュスが数百年前に実演したなりね』

『……』

ステイルは声を失った。
イギリス清教もローマ正教も過去に何度か討伐隊を組織したほどの魔女。
数百年前の話なので詳しくは文献を見るしかない。
何しろ「法の書」の著者以上に常軌を逸した存在なのだ。

『最近ではローマ正教の「グレゴリオの聖歌隊」を潰したとか……ご丁寧にも全員が磔刑されてラテラノ大聖堂に飾られたとか』

『話が脱線したるわね。「法の書」とオルソラ＝アクィナス。この二つが一緒に盗まれたさうだから』

「そんな……誰に！？」

ローラの言葉にステイルは思わず口に出していた。

だがそんなステイルを見ながらローラは冷静に言う。

『予測はついているから後は其の始末をつけてみよというのが私があなたに伝えし今回のお仕事。まぁ大体、相手は日本の天草式十字凄教で間違ん事ないと思うけど』

『はぁ。それで、ヤツらは恥も外見もなくこちらへ協力の打診をしてきたって訳ですか』

『いいえ。小奴どもは己が手で事を収めたいみたい。はっきり言いやれば現実見ろ馬鹿って感じよね。それよりまずし事がありけるの』

ローマ正教に恩でも売る気なのか、とステイルは思っていたがどうやら違うようである。

もし恩を売っても、はっきりいえば借りを返すような連中ではない。邪魔者はおろか協力者に対してまで『協力しようとするその哀れみが気に食わない』とか言い出す連中もいる。

特に強硬派に所属する頭の硬い司祭だの司教になると顕著にそれが出てくる。

そんな連中らが、イギリス清教からの恩を返す訳がない。むしろ仇で返したほうがまだしっくりくる。

ステイルがそう思うほど、ローマ正教は自尊心が高いのである。

『まずい事？』

『神裂火織と連絡が取れんのよ』

ローラの言葉にステイルは即座にその意味を悟った。

神裂は元・天草式のトップだ。現在は離反しているとはいえあの性格だ。

天草式がローマ正教に喧嘩を売っていると知ったら、神裂は一体どんな行動を起こすか。

『あの性格なれば後先考えずに手を出したる可能性は極めて高いわ。並かそれ以下ぐらいの腕ならまだしも、神裂クラスとなりたると流石に、ね』

ローラは大きくため息を吐く。その態度から明らかに面白くないと言わんばかりであった。

『神裂が下手を打つ前に、落を付けて欲しいのよ。其れが最優先、方法は何れでも構わないわ』

『あの神裂と戦えと？』

『場合が場合ならね』

ローラは簡単に言う。だが、ステイルにはそれがいかに困難か理解していた。

神裂は世界でも二十人といない『聖人』で、その存在は核兵器にも等しい意味を持つ。

『貴方は別働隊として、始めに学園都市と接触して頂戴ね』

『これは教会諸勢力の問題でしょう。そこで何故、科学側の手がいるんです？』

『禁書目録』

ローラはインデックスの名前を口にした。

『魔道書の、それも「法の書」の原典がおでましとなれば、専門家の手は必要でしょ。向こうにはすでに話をつけたるから、遠慮無くさらいて構わないわよ。条件の一つとして、二人を同伴させる事になっているけどね』

『……』

『何ぞ。久々にあれと仕事ができようと言うに、あまり嬉しげでないわね』

『馬鹿ですか？　当たり前じゃないですか。お邪魔虫が複数もついて来るんですよ』

『……』

ステイルのはっきりした物言いに今度はローラが言葉を失った。
ローラでも分かるほどステイルはインデックスを好いているがそれでもこれはない。
そうローラは思った。

『……心配性なのね。顔に出とるわよん。大丈夫ったら大丈夫』

『何を言っているのです！　インデックスに男が二人もついてくる

んですよ！　これが心配せずにいられますか！？』

『誰が全員男と言うたか……』

ここまでくると病気だな、とローラは生暖かい目でステイルを見る。
その視線に恥ずかしくなったのか、ステイルは慌てて視線から顔を逸らした。

『幻想殺しとサポート役の女性。せいさい有効に使うといいわ。あ、弑ては駄目よ』

『学園都市所属の人間を、魔術師同士の争いに巻き込んでしまって大丈夫なのですか？』

『先方の交換条件につき外せんわね。それに交渉を長引かせている時間はないのよ。それからステイル。これを持ちておいて』

そう言うとローラは修道服の袖の中から小さな十字架のついたネックレスと取り出す。
信仰の象徴をローラはを無造作にステイルへと放り投げる。
片手で受け取ったステイルは、十字架に視線を落とす。

『霊装の一種ですか？　見た所、それらしき加工は見られませんが』

『件のオルソラ＝アクィナスへのささやかなる贈り物という所かしら。その者に出会いし機会があらば適当に渡しといてね』

それ以上ローラは語らないので、ステイルはそれを『黙って仕事してろ』と受け取る。
十字架を懐にしまうと、ステイルは少し悩んだ後ローラに言った。

『やっぱり幻想殺しだけ外すってのは無理ですか？』

ステイル＝マグヌス。

彼は今日もインデックスの為を思って行動……しているのだと思われる。

学園都市側の動き

「……今、なんと言われましたか？」

アレイスターの言葉が信じられず、優菜は思わず問い質す。

「君にしては理解が悪いな。先ほども言ったが……」

「『法の書』と呼ばれる魔道書が日本の魔術結社によって盗まれた。イギリス清教より協力依頼を受けた学園都市はこれを了承。そして協力者として当麻と私、それからインデックスさんが出向く」

「正確には禁書目録の護衛として、だがな」

優菜の言葉につまらさそうに答えるアレイスター。

だが、そこが優菜には分からなかった。

「そこです、分からないのは。どうして魔術側の人間であるインデックスさんを、科学側の私達が護衛をするのですか？」

「禁書目録は君の友人であろう。友人を護衛して何が問題なのだ」

「……友人と思っています。しかし、魔術側の人間に堂々と見せて問題はないのか、と思いますが？」

学園都市の中では問題なくても、学園都市の外は安全とは限らない。最悪、インデックスが教会世界の裏切り者として狙われる可能性だってある。

だからこそ、外での行動は慎重にするべきだ。そう優菜はアレイス

ターに進言した。

「イギリス清教との協定でもあるのだよ。禁書目録の護衛は」

「協定？」

「禁書目録を預かる時に、いくつかの取り決めをしているのだ。その中の一つに『禁書目録が学園都市の外に出向く場合、安全にイギリス清教の使者に会わせる事』という文がある」

優菜はアレイスターの言葉を聞いて驚いた。

インデックスが今も学園都市にいられる理由を不思議に思っていた。

魔術に関する膨大な知識を持つ禁書目録。

それを科学側にいる学園都市に預ける。

通常ならば、それだけで戦争になると考えていた優菜だから、協定が存在しているとは予想外だったのだ。

「今回は正式にイギリス清教の依頼だ。何かあってもイギリス清教が責任を取るべきであろう」

だからアレイスターは意見を変えなかった。

学園都市にインデックスを預けているのはイギリス清教の考え。

それによって起こる不利益は、全てイギリス清教が負うべき。

そうアレイスターは言っていた。

「……もしかして、その時に何かあれば学園都市側は嫌々ながらも関わる必要がある。そう考えておりますか？」

「ふ」

アレイスターは肯定も否定もしなかったが、優菜の言葉を聞いて短く笑った。
それが答えと言わんばかりに。

「なるほど、護衛中にインデックスさんが拉致されれば、学園都市としては面子上助けなければならない。そして『偶然』にも『法の書』に関する事件に関わる事となった。そんなシナリオですか？」

「馬鹿馬鹿しい妄想をしないでほしいな」

否定するアレイスターだがその顔は薄く笑っていた。
嘲るようにも憐れむようにも楽しむようにも見えるその笑みからは肯定か否定かは判断がつかなかった。

「それから君が使っている未元物質の武具だが、一つだけ持ち出す事は許可しよう。だが他は勿論、小型端末も持ち出す事は厳禁だと思いたまえ」

「了解です。そもそも護衛だけですから『偶然』にも深く関わらない限り、私達が戦闘に巻き込まれる事はないでしょう」

その言葉と同時に、結標が部屋に入ってきた。
それが今回の会談は終わりという合図であった。

「それでは本日より護衛任務に入ります」

アレイスターに一礼をすると、結標にエスコートされ優菜はビルから出て行く。
二人がいなくなった部屋の中で、アレイスターは一人呟く。

「幻想殺しの成長と思っているようだが、君の成長も含まれているのだよ」

第七学区のある喫茶店に、ある少女二人は対峙するように座っていた。

片方の少女の前には身長に見合わないほど、大きなパフェが鎮座していた。

色とりどりの果物が乗せられ、濃厚なクリームがかけられていた。

どう見ても激烈に甘いパフェという印象しか抱けなかった。

「どうしたのぉ？　何か食べないと体に悪いわよ」

パフェの前に座っている少女、アクゼリュスは対面に座っている少女に声をかける。

「……契約者様は甘い物が好きなのですか？」

対面に座っている少女、アリシアはパフェを食べるアクゼリュスにある意味驚く。

そのせいか、ついアリシアはアクゼリュスに質問を投げかけた。

「女はいくつになっても甘い物が好きなのよ」

本気なのか冗談なのか分からない答えをアクゼリュスは言う。

だが嬉しそうに食べている所を見ると、案外甘い物が好きなのかも

しれない。
そうアリシアは思った。

「さて、いつぞや私の許可無く力を使ったようだけどー」

乗っている果物を手にとって食べながら、アクゼリュスは本題を切りだしてきた。
アリシアはごくりと唾を飲み込む。
アクゼリュスが突如として姿を現した理由は、その事についての話しかないと思っていた。
勿論、アリシアは全面的に自分が悪いと思っている。何しろ契約違反なのだ。
それ相応のペナルティが発生してもおかしくないと思っていた。

「……どの様な制裁も覚悟しております。私は契約者様との約束を破ったのですから」

「そう？　じゃあねぇ……」

その瞬間、アクゼリュスは冷酷とも残酷とも非情とも見れる笑みを浮かべる。
アリシアは頬に嫌な汗が伝うのを感じる。

「ここの支払いは任せたわよ」

「……え？」

呆けた顔をするアリシアを無視して、アクゼリュスはパフェを本格的に食べ始める。
時に味わったりしているが、ほとんどは流し込んでいると見てよい

だろう。

「え？　は？　ええ！？　ちょ、いいのですか？　それで！？」

「なーに、そんなに体を傷めつけてほしいの？　アリシアってそんなにドMだっけ？」

「あ、いえ。違いますが……」

アクゼリュスの意図が読めず、アリシアは混乱するばかりであった。
契約違反というアクゼリュスの機嫌を損ねる行為をしたのだ。
命が無くなっても不思議ではない、そうアリシアは覚悟していた。

何しろアクゼリュスは機嫌を損ねたという理由で、国一個を地上から消したりする。
はたまた、喧嘩を売られたという理由で、一族郎党を皆殺しにしたりもする。
ようするに、彼女の機嫌を損ねると大体碌でも無い結果にしかならない。

だけどアクゼリュスはパフェの支払いだけで許すと言ってきた。
それがアリシアには理解できなかった。
最も、理解しようとしても無駄な結果に終わるが。

「それから、暫くは力を使う事を許可するわ。後はねぇ、オートクレールとフラガラッハが余計なちょっかいをしてきたら教えなさい。あの駄犬どもにきつく言い聞かせるから」

「はぁ……」

オートクレールとフラガラッハ。
いつからかアクゼリュスが連れて歩くようになった使い魔。
見た目は狼だが水牛並な体躯をしている。
オートクレールが銀、フラガラッハが金の毛を持つ。
雌雄らしいが、正確には分かっていない。
並か中級の魔術師では二匹の相手をする事が不可能。
それがアリシアの知っている情報である。

それ以上については、主人同様謎に包まれている。
一体いつ、どこで彼らが産まれてアクゼリュスの使い魔となったのか。
アクゼリュスと長い付き合いがあるコルネリウス家の人間ですら分からなかった。

「ま、オートクレールは心配ないけどね。問題は、フラガラッハの方よ。たまに馬鹿やるからね、あの駄犬」

不愉快そうに言いながら、アクゼリュスはパフェをかきこむ。
恐らく最近も何かしらやったのだろう、そうアリシアは思ったが怖くて聞く事を躊躇った。
とばっちりは勘弁、である。

「力の使用に関しては、許可していただけるのですか？」

おそるおそるアリシアはアクゼリュスに質問する。

「『虐殺大蛇（ニドヘッグル）』を使いこなしたご褒美よ」

アリシアの質問に、アクゼリュスは興味なさそうに答える。

あれだけあったパフェを全て平らげた後、アクゼリュスは席を立った。
その体にどうやって入れた、と言いたくなったがアリシアはぐっと我慢した。

「幻想殺しの手助けをしなさい」

そう言うと、アクゼリュスはアリシアの返事を待たず店を出て行く。

「本当に何を考えているんだろうな……」

ポツリと呟いたアリシアだが、その問いに答える人物はこの場にはいなかった。

「しかし『季節のフルーツ盛り合わせスペシャルジャンボパフェバケツバージョン』を食べきるとは……恐るべし契約者様。値段もジャンボだけどな……」

妙なところで感心するアリシアであった。

動き出す歯車

「暇だよ退屈だよつまんないんだよ」

昼間の街中をインデックスは怒り心頭で歩いていた。
その理由は、遊び相手がいないという何ともわがままな理由だったりする。
時刻は既に下校時間を過ぎているので、昼間というより夕方より少し前になるが。

「ありしあは帰ってこないし、うちどめは病院にいってるし、あくせられーたはソファで寝てるし、こもえは学校だし……」

家の住人は帰っていない、もしくはいても相手してくれない。

「街を歩いてみたけど、誰ともであわないんだよ」

家が駄目なら外で誰かと遊ぼう、そう考えたインデックス。
だが、残念ながら今日は誰とも出会えなかった。

インデックスは機械が苦手だ。
駅の自動改札や指紋・静脈・生体電気認証キーロックなど、ちょっとでも機械っぽいものが絡むと何も出来ずに逃げ帰る日々を送っている。
小萌より携帯電話を手渡されているが、勿論ろくに使えないインデックスである。
登録自体はそれなりにあるが、昼間では誰も出てくれない。

「めーる？　だったかな。今日はゆうなからも連絡がないし……」

唯一例外として、実験を行った後の優菜が出てくれるぐらいだ。
時々昼間でも見かける優菜を見て、インデックスは学校について尋ねてみた。
曰く『実験の日は、実験が終われば昼間にでも解放されています』との事。
ならばと、実験後に時間があるなら遊び相手になって欲しいとインデックスは優菜に頼んだ。
連絡はメールで、となり今に至る。

「退屈だよ退屈だよ退屈だよ！」

口を尖らせて体を左右に揺らしながらインデックスは叫んだ。
銀色の長い髪と純白のフードがつられてなびく。
むーむーと頬を膨らませるインデックスは気付いていない。
下校時刻なのに誰にも出会わない事を。

「うん、そんなに暇なのかい？　だったら少々僕と付き合って欲しいんだがね」

不意に、インデックスの背後から声が聞こえた。
慌てて後ろを振り返ろうとしたが、その前に相手の手がインデックスの口を粘着テープのように押さえつけた。

当麻は夕暮れの街をとぼとぼと歩いていた。

（優菜が今日は実験でいない、ならば家庭教師なしだ！　と思っていた上条さんがお馬鹿でした……）

今日は実験で学校を休んだ優菜なので、家庭教師はなしなんだろう。
そう思っていた当麻だが、現実は甘くなかった。
きっちりと小萌に教材や何やらを渡していたのである。

『さぁ上条ちゃん！　今日は時間もありますしみっちりやりますよ！！』

出来の悪い生徒ほど可愛いと思う小萌である。
優菜の教材を片手に、ワンツーマンの補習を受けた当麻であった。

「つ、疲れた……まさかノンストップで補習とは思わなかった……」

休憩なしの補習を受けて、身も心もヘロヘロの当麻。
帰ってベットに寝転びたい。その思いだけが彼の心を占めていた。

「……ん？」

疲れきった体を引きずるようにして家に向かっていた当麻だが、前方から何やら不幸の予感を感じた。
慌てて引き返そうとしたが、目に見えた光景を見てそれを止める。

「インデックス！」

何者かがインデックスの背後から口を押さえていた。
インデックスの身の危険を感じた当麻は走る。

「クソっ！　また魔術師かよ！」

全速力でインデックスの元に向かう当麻だが、現場に近づくにつれて焦りから呆れの顔に変わる。
インデックスを背後から押さえているのは当麻の見知った顔だったからだ。

「……何やってんだ、お前……？」

「ああ、やっときたか」

神父のくせに香水を漂わせ、肩まである髪を真っ赤に染め、両手の十本指には銀の指輪をつけている。
右目の下にバーコードの刺青が入ってて、耳にはピアスが大量につき、更には煙草をくわえていた。
つまりイギリス清教『必要悪の教会』所属、魔術師ステイル＝マグヌスであった。
インデックスは薬でもかがされたのか、ぐったりとして意識がないのが分かる。

「おいこら、インデックスを拉致とかテメェもロリコン魔術師かよ」

「うん？　君に言われたくないね」

そう言うと手に持っていた封筒を当麻の方に無造作に放り投げる。
慌ててキャッチし、ステイルの方を向いたが既に二人はいなかった。

「あ！　逃げやがったな！　あの腐れイギリス神父！！」

憤慨する当麻だが、後悔先に立たず。

しぶしぶ封筒に目を落とす。
そして無造作に封を開けると、中には一枚の便箋が入っていた。

『上条当麻　彼女の命が惜しくば　今夜七時に　学園都市の外にある　廃劇場『薄明座』跡地まで　保護者をつれてやってこい』

「……ちょっとまて、定規で筆跡隠しとかギャグかよ……」

脅迫文が書かれた便箋を見ながら、当麻は盛大に溜息を吐いた。
今日び、定規で筆跡を隠した程度で身元が割れないという事は絶対にない。
個人差のある細かい『指先の震え』を文字の溝から調べる方法もあるし、何よりここは学園都市だ。
外にはない奇妙な鑑定方法があっても不思議ではない。

（本気でやってるとしたら笑いを狙っているようにしか見えない……）

そしてもう一度便箋に目を落とす。と、そこで当麻はある事に気付く。
文字の最後に書かれた『保護者』という単語だ。

「あれ？　俺の保護者って……父さんでも呼べばいいのか？」

そう思って封筒を更に細かく見る。
よく見ると便箋の他に折り畳まれた紙切れがあった。
それは学園都市の外出許可証と関連書類だった。
それが二名分入っている。

「うん？　もしかして保護者って学園都市の人間なのか？」

頭に浮かんだ保護者は一人だけだった、沈利である。
だが沈利はレベル5だ、おいそれと学園都市の外に出る事は出来ない。
前も出た事があるが、こんな紙切れだけではすまなかった。
束のような書類に目を通して、十枚近くある申請書にサインを行う必要があった。

「となれば誰だ？」

そう思って外出許可証を開く。両方共既に必須事項は記入済みであった。
そして二枚の紙に書かれていた名前は、それぞれこう記してあった。

『上条当麻』『上条優菜』

「……優菜が保護者？」

意味が分からなかった。分からなかったが、このままだと優菜が巻き込まれる。
そう考えた当麻は優菜に連絡を取らず、即座に薄明座へ向かう事を決意する。
書類がなければ、例え優菜でも外に出る事は不可能。
そう考えてカバンに書類を突っ込む。

「姉ちゃんに補習と補習と補習で帰りが遅くなると言っておくか……」

疑問に思われずに遅くまで動ける理由として、最適だったのが補習フルコースである。

言ってて悲しくなったが、当麻はぐっと涙をこらえた。

「連絡も済んだし、もうちょっとでゲートですよ」

あの後、沈利に連絡を入れて補習フルコースを伝えた。
盛大に笑われたが、何とか疑問を持たれずに納得してくれたので当麻はほっと胸をなで下ろす。
代わりに当麻の心は涙を流したが。

「ここだな、すいませーん」

ゲートにいる警備員のおっさんに当麻は書類を渡す。
ここで彼は理解する。わざわざステイルが保護者と書いていた理由を。

「あー、あんた。これだけじゃ駄目だね」

「……え？」

「ほれ、ここをよく見てみ？」

おっさんが指差した場所を、当麻はじっくり見る。
そこにはこう記してあった。

『なお上条当麻の外出時には上条優菜の同伴が必要となる』

「は？」

呆けた声を上げて当麻は固まった。

（何それ、一体どういう事だよ！？）

当麻はカバンから封筒を取り出すと、便箋をなめるように見直す。
最初は気付かなかったが、よく見ると下の方に文が書かれている事に気付く。

『君一人で外出して　あの子の前で格好つけさせるわけにはいかないからね　きちんと保護者同伴で出れるようにしておいたよ　ありがたく思うんだな　嬉しいか？　嬉しいだろう？　はっはっは』

便箋に書かれていた文字の意味を理解して当麻は人目も気にせず叫ぶ。

「不幸だーーーー！！！」

オルソラ＝アクィナス

結局優菜を呼び出して、ゲートを通過するしか当麻には道が残されていなかった。
勿論、小言を貰ったのは言うまでもない。

「貴方はどうやって外を歩く気だったのですか」

二人揃って外壁沿いの道を歩きながら、優菜は当麻に小言を言う。
当然である。無一文、無計画、無鉄砲の三拍子。
それほどダメダメな状態で出発していた当麻であった。

まず場所の名前しか分からず正確な位置が特定出来ていない。
携帯電話のＧＰＳマップでは、潰れた建物の名前は載っていなかった。
仕方ないので、二人はコンビニにいって東京の観光ガイドブックを買おうと考えた。

そこで当麻は自分が無一文だという事に気付く。
カバンにもポケットにも財布が無かった。
当麻は財布をよくなくすので、極力財布を持ち歩かず大体は家に置いている。
だが今回はそれが仇になった。

そして最後に服装。十一月ともなれば夜は気温が下がり冷えてくる。
しかし当麻は学生服の格好のまま外に出てきていた。
案の定寒さで震え、結局マフラーと手袋を装着する事となる。
それを用意したのは、勿論優菜であるが。

「あの……ここまで用意されると上条さんは悲しいモノがあるのですが……」

至れり尽くせりなのだが、全てが読まれていた事に当麻は涙を流す。

「どうせ家に帰って準備すると沈利姉さんが心配すると思って、着の身着のまま外に出る気だったのでしょう？」

ガイドブックを恐ろしい勢いで記憶しながら、優菜は当麻の愚痴を斬り捨てる。

図星だった当麻は何も言えず、がっくりと肩を落とした。

「読み終わりました。大体ここから二キロメートルほどですね」

「人間ＧＰＳですか、貴方は……」

ガイドブックを当麻の方に投げると、優菜は普通のファッション雑誌を取り出した。

先ほどと違い、今度は特定のページまで移動すると食い入るように見る。

「何かいいのでもあるのか？　じっと見ているけど……」

そもそも優菜がファッション雑誌を読んでいる所すら当麻には珍しかった。

どこからか分からないが、優菜はファッション情報を仕入れては服を買っている。

大量に買うことはせず、これと決めて買うので実際は服の数がそこまで多いわけではない。

そんな話を以前聞いた覚えがある。

（まぁ優菜って母さんと同じで、どこかの令嬢みたいな服を着るけどな……）

今着ている服も深窓の令嬢を思わせる雰囲気だ。
当麻にはファッションがさっぱりだが、優菜に似合っていると思っている。

「友人が載っているので、気になったから買っただけです」

「ふぅん、友人が……うえぇ！　友人！！」

驚く当麻の事を気にせず、優菜はページをゆっくりとめくっていく。
ちらっと盗み見してみると、インタビューページが目に入った。

『独占インタビュー！　今話題のお嬢様アイドルの私生活に迫る！！』

「……何そのゴシップ丸出しの記事……」

愉快すぎて乾いた笑いを浮かべる当麻は、インタビューに応じている女の子の写真を見る。
年は自分と同じか一つ上。
綺麗な黒髪で、顔からは活発そうな感じがしていた。
だが、何よりも目を引くのはそのスタイルだろう。
健康的な体をしているが、光を反射しそうなほど白い肌。
豊かな胸に、引き締まった腰とスラリと伸びた足。
大人の色気と少女の可憐さが混じったような感じであった。

可愛いなと思いつつ、当麻はさっきの記事見出しである事に気付く。

「お嬢様？　あーもしかして聖カトリーヌ女学院の娘？」

「正解です。彼女は元クラスメイトです」

「恐るべしお嬢様……」

クラスメイトが芸能人とかどんな環境、と当麻は思ったが勿論想像すら出来なかった。

すごい環境だなぁと当麻は思っていた。だが、彼は気付いていない。

当麻がいる小萌クラスは、レベル５が三人もいるという摩訶不思議なクラスだと言う事に。

「……ん？」

ガイドブックを片手に当麻は歩きながら、近くにあるバスの停留所を見る。

その停留所に誰かがいる事に気付く。

その人物は時刻表を超至近距離から食い入るように見ていた。

（怪しい……）

不幸な事に敏感な当麻はすぐ理解した。そして優菜もその人物を見て何かを感じ取る。

あの子に関わるとロクでもない事にしかならない。

そう思った当麻と優菜。

二人の思惑は一致し、スルーする事を決める。

だが、世の中そんなに甘くはなかった。

二人が通りすぎようとすると、その人物は当麻と優菜の存在に気付く。

「あのー」

まさか怪しげな人物の方から声をかけられると思っていなかった二人は思わずその足を止める。
二人は小さくため息を吐くと、その人物の方を向く。

（何でシスターさんがこんな所にいるの……）

その人物の姿を見て当麻は頭が痛くなる。
顔以外の全部の肌を隠しているシスターが立っていたのだ。

「何でしょうか？」

一先ず声をかけられたのに無視するのも何となく後味が悪い。
そう思った優菜は、シスターに声をかける。

（おい、何で日本語なんだ？）

心の中で突っ込む当麻だが、彼は恐ろしい事に気付いていない。
自分が呼び止められた言葉は日本語だったという事に。

「恐れ入りますが学園都市に向かうためには、どのバスを利用すればよいのでございましょうか？」

とてつもなく丁寧な日本語で質問された事に少し驚いた二人。
だがシスターは気にする事なく、にこにこと微笑みながら二人を見ていた。

「学園都市行きのバスはねぇよ」

「はい？」

キョトンとした感じで首を傾げるシスター。
当麻は改めて目の前のシスターをよく見る。

（……わざとか？　でっかい胸とかくびれた腰が浮いてるぞ……）

服装のせいか、目の前のシスターは無駄にでっかい胸とくびれた腰が浮いていた。
奇妙な人だ。
それが当麻の第一感想であった。

「学園都市は一種の鎖国状態と思ってください。なので、外部からの乗り物で入る事は出来ません」

「そうですか。それでお二人様は徒歩で学園都市から出てきたのでございますね」

そう言ってシスターは袖の中からオペラグラスを取り出す。

「こちらで確認したのでございますよ」

にこにこ笑いながら言うシスターを見て、優菜はどうして見られている事に気付かなかったかを理解する。

目の前の人に悪意は全くなかったからだ。

ある程度意思のある視線には気付く。
だが全く意識されずに見られていては気付くはずもない。

そして目の前のシスターは、悪意を隠して人を見るような人物とは思えなかった。

（ふむ……この人は悪い人ではないかもしれません）

勿論これだけで判断するのは危険だが、シスターからは敵意などが感じられない。

よって今の所は強く警戒する必要もない。優菜はそう結論付ける。

当麻は頭をかきながら、シスターに質問を口にする。

「あーシスターさん？　学園都市に行くのはいいけど許可証持ってるの？」

「許可証、でございますか？」

当麻がシスターに尋ねると、シスターは困ったように頬に手を当てる。

「その許可証というのは、どこでもらえばよろしいのでございましょうか？」

「……あのな、かなり難しいぞ。というか内部に肉親とかがいないとまず発行されないぞ……」

その態度から許可証を持っていない事に気付いた当麻。

許可証が必要な理由は説明するまでもない。

学園都市のゲートを通るには、街が発行する許可証がいる。

それがなければ入れない。ただそれだけだ。

そう当麻が思っていても、シスターはそう思っていなかった。

「それは諦めるしかないのでございますね」

「うん、こればっかりはね……」

「お忙しい中、ご助言いただき、まことにありがとうございました。それでは」

しょんぼりと肩を落としたシスターだが、そのまま学園都市のゲートの方に向かって歩き出した。

「おいこらぁ！　許可証がなきゃ街に入れないって言っただろう！　聞けよテメェは！」

当麻の荒声にシスターは立ち止まって振り返る。

「困りました」

ほのぼのとした笑顔を浮かべていたシスターが、みるみる顔を曇らせる。

その様子に当麻は思わず怯む。

「私でよければ相談に乗りますよ？」

今まで黙っていた優菜が、シスターの顔を見て思わず言葉を口にする。

「実は私、追われているのでございます」

シスターは首を傾げながら、当麻と優菜に向かって言う。

その言葉を聞いて当麻も優菜も、すぐにある疑問を頭に浮かべる。

目の前の人間はシスターだ、ならばシスターが追われる理由となるのは何だ。

考えるまでもなかった。

シスターという教会世界に属する人間が追われるとなれば答えは一つだ。

「……もしかして魔術師絡みか？」

当麻の言葉に、シスターはびっくりした顔をする。

「何故、魔術師の存在を認めているのでございましょう？」

学園都市の人間が魔術師の存在を知っている。

その事を疑問に思ったシスターは、当麻と優菜を警戒しながら質問する。

「あー、まぁ知り合いに魔術師がいるから？」

「妹が魔術師だから？」

「はぁ……そうなんでございますか」

当麻と優菜の答えに、幾分毒気が抜けた感じのシスター。

（許可証の一枚ぐらい総括理事長様に頼めば手に入れれますが、何でもかんでもポンポン入れるわけには参りませんよね……）

優菜としては、目の前のシスターを見捨てる事は出来ない。
かと言って魔術関係の揉め事を学園都市に持ち込みたくない。
無関係な人間を、自分の勝手な行動で巻き込むことはよくない。
そう考えると優菜は一体どうすればよいのか悩む。
それは当麻も一緒だった。

「んー……」

当麻は頭をかきながら考える。
魔術師に追われているというシスターを放置していくのはまずい。
だが、自分では許可証なんて発行してもらえるほどの力はない。
それにインデックスも心配だ。
ネタ満載の脅迫状だったが、かといって無視するのもよろしくない。
結局二人は盛大に頭を悩ませる姿をシスターに見せるだけであった。

「あのー……」

盛大に悩む二人を見て、シスターは泣きそうな顔をしながら言う。

「どうすればバスの路線図を読む事ができるのでしょうか？」

「おいまて！　学園都市に入る入らないの話はどこいった！！！」

シスターの盛大なボケに思わず当麻は叫ぶ。
だがシスターはキョトンとした顔で、当麻を見ていた。

（うーん……ん？）

シスターの言動に悩みながらも、当麻はある考えが閃く。

「なぁ優菜。とりあえずシスターさんを連れていくか？」

「……なるほど、それは良い考えですね」

脅迫状には二人でこいと書かれていたが、あえて無視する事にした二人。

「ひとまず私たちと行動を共にしませんか？　今から向かう場所に魔術師に詳しい方がいますので……その人に相談するというのも手かと」

「しかしご迷惑になるのではございませんか？」

「日本にはこんなことわざがあります。『袖振り合うも多生の縁』、私たちが出会ったのも何かしら縁があっての事ではないでしょうか」

シスターは盛大に悩む。

追われている身だが、かといって出会ったばかりの人を巻き添えにしたくはない。

そんな思いがシスターにはあった。

「まぁいいじゃねぇの？」

シスターが悩まないように、あえて気楽そうに当麻は言う。

「……本当によろしいのでございましょうか？」

追われていると口に出せば、それなりに気分が楽になるかもしれない。

そう思ってシスターは口に出したが、聞いた相手が悪かった。
当麻と優菜が、その言葉を聞いてそのまま別れるという事はありえないのだ。

「いいって、そんなにかしこまらなくても」

「ではお言葉に甘えさせていただきます」

そう言ってシスターは二人に向かって頭を下げる。
当麻と優菜は困ったような笑顔を浮かべつつ、シスターに向かって言う。

「そーいやぁ自己紹介がまだだったな。俺は上条当麻」

「私の名前は上条優菜です。頭を上げてください。えっと……」

優菜の言葉を聞いて、シスターは頭を上げるとにっこりと笑顔を浮かべて言った。

「オルソラ＝アクィナスでございます」

ローマ正教とイギリス清教

廃劇場『薄明座』の跡地は、学園都市からほんの三キロほど離れた場所にある。
潰れてから三ヶ月ほどたっているが、まだ建物には大きく傷んだ場所は見当たらない。
掃除も何もしていないので、そこかしこにホコリが積もっている。
だが、まだ『廃墟』という感じではない。

そんな場所に、インデックスとステイルはいた。
薄夕闇に落ちる舞台の上で、インデックスは女の子座りしている。

「いきなり後ろから襲うとか酷いかも」

ほっぺたを膨らませて抗議するインデックス。
抗議の視線にステイルは一瞬だけ怯みかけたが、決してそれは表に出さない。
しかし彼の顔には歯型がついている。
それはインデックスによる噛みつきの跡であった。

「悪かった。ちょっとした理由があったからね」

「イギリス清教の正式な勅命……なのは分かっているよ」

インデックスはここに連れて来られてから受けた説明を思い出す。

ローマ正教のシスターであるオルソラ＝アクィナスが『法の書』を解読できるという話。
そして『法の書』とオルソラが、日本にやってきた折に何者かにさ

らわれた。
犯人は天草式十字凄教。
ローマ正教は『法の書』とオルソラの救出を目的に活動をしているとの事。
事件が発覚すると同時に神裂と連絡が取れなくなった事。
表向きはローマ正教の協力だが、最優先事項は神裂が問題を起こす前に事件を解決する事。
そして……。

「最優先事項は問題ないよ。だけどね、どうして正式なお仕事に、一般人を巻き込む訳？」

その事件には当麻と優菜が関わる事。
この点がインデックスには納得行かなかった。
二人の力が魔術でもないのは知っているが、だからと言って魔術に対抗出来るかと言えば怪しい。
何しろ二人は魔術については素人だ。
いくら謎の力があるとはいえ、魔術を『何も知らない』というのは危険である。

「実は僕も何で巻き込まなくちゃいけないのか少し疑問でね。まぁ、所謂お上の都合ってヤツじゃない？」

煙草の端をゆらゆら揺らしながらステイルは言う。
実際彼も二人を巻き込む理由がはっきりとは分かっていなかった。
科学側の人間を、魔術側の事件に関わらすだけで大問題となってしまう可能性すらある。

「科学サイドが魔術サイドの問題に首を突っ込んだ、と見なされると大問題だ。だから、僕は君を拉致してわざわざ『学園都市内部で

起きた問題』という状況を作り出したわけだよ」

「……学園都市内部では私の護衛役の二人。護衛対象の私が拉致されたから、二人は『たまたま』学園都市の外に出る事になった。そして『たまたま』天草式の人間と関わり合い、『たまたま』この事件に関わる事となった……」

「そういう事になるね。強引だけど、それ相応の動機付けが必要だった訳だよ。苦しい言い訳だけど、その『たまたま』が重なった結果が大義名分となる」

「二人はあくまで『法の書』事件と無関係って前提があるんだね」

「勿論、君の友人である二人を巻き込みたくないという気持ちは理解できる」

ステイルは煙草の煙を吐き出しながら言う。
しかしステイルは何も分かっていなかった。
それをインデックスの言葉から思い知らされる。

「二人はね、『助けて』って言ったら必ず来てくれる。どんなに危険な場所でも絶対来てくれる。だからだよ……二人が傷つくのを見るのは嫌だよ……」

「……」

当麻と優菜、二人は暗闇の中で助けを求める人がいれば、どんな危険が迫っていても手を差し伸べるだろう。
その人を暗闇の中から掬い出す為に、例え己の身がどんなに傷つこうと。

特に優菜は怪我をしても、謎の力で怪我を消してしまう。
だからこそ、彼女がどれほど傷ついても誰も分からない。
それがインデックスには怖かった。
自分の友だち、アリシアの大切な人、そんな人が自分の都合で傷ついていく。
しかもそれがどれほどの傷か分からない。

（傷つきながらも帰ってくるとうまの方がまだマシだよ。ゆうなは何事も無かったかのように帰ってくるもん……）

自分の都合で彼らが傷つくなら、せめてその傷を自分の手で癒させて欲しい。
そう願うインデックスであったが、優菜に関してはそれが叶わぬ願いとなる。
それがより一層インデックスを悩ます原因となる。

「ふぅ……」

ため息を吐くインデックスを見て、ステイルは改めてインデックスの優しさを理解する。
例え住む世界が違ったとしても、彼女は友達の為に思い悩む事が出来る人だ。
そうステイルは感じていた。

（とはいえ、本当に何で巻き込むのだろうな）

インデックスは魔術サイドの人間である。
現在、学園都市とイギリス清教の間でいくつか取り決めがされてい

る。

インデックスの身柄は一時的に学園都市が預かる事。
表向き上は、彼女の身元引受人は月詠小萌という大人の人物だという事。
インデックスが学園都市から外に出る場合、必ず護衛をつけて外まで送り届ける事。

その他にも色々あるが、今回は最後の取り決めを逆に利用した形となる。
そうしなければならないほど、二人を関わらせる理由がステイルには分からなかった。

「それで、これからどうするの？」

インデックスの声に、ステイルはハッとなる。
軽く頭をふると、煙を吐きながらステイルは言う。

「一一分前に、ローマ正教と天草式が激突した。多分だけどオルソラ救出戦だね」

「成功していたら、私がいる必要はないから失敗したんだね」

「その通りだ。だが、明確に失敗した訳でもない。だが、随分とマズイ事になったな」

「どういう事？」

苦そうに煙を吐くステイルを見て、インデックスは小首を傾げながら問う。

「オルソラが乱戦の隙を突いて天草式から逃げ出した」

「……ローマ正教にも戻っていないとすれば、それはまずいかも」

「そうだね。逃亡した後に再び天草式に捕まれば、反抗心を削ぐために何かをするだろうしね」

煙を吐き出すステイルは、忌々しげに言葉を吐き捨てる。

その煙に何度か魔力がまとわりつくのを見ていたインデックス。

ステイルは、煙を使って通信をしているのだろう。

「できればローマ正教側からの協力者が来る前に、君の友人である二人と合流したかったが……」

ステイルがそう言うと同時に、大ホールの出入口の一つに人影が現れた。

「残念ながらそうも言っていられないみたいだ」

その人影とは、ローマ正教側の協力者であった。

ローマ正教側の協力者と合流したステイルたちは、薄明座の大ホールから移動していた。

彼らの少し前を、漆黒の修道服を着た少女が先導していた。

彼女はローマ正教側の協力。その協力者はアニェーゼ＝サンクティスと名乗った。

「状況はもうメチャクチャ。情報も錯綜しちまってオルソラはどこへいったのやら、って感じですか」

パカパカと馬みたいな足音を立てて歩くアニェーゼ。

チョピンと呼ばれる、一七世紀のイタリアで流行ったコルクの厚底サンダルだ。

「捜索の範囲網を広げすぎたのが仇んなりましたね。一部隊の人数が少なすぎて、奪還をしてもすぐ強奪される。それを繰り返している内に、いつの間にか追っかけてたはずのオルソラがどっかに消えちまってたって訳なのですよ」

「それほど驚異的な勢力なのかな、天草式という組織は」

「数や武装ならこちらが上なんですけどね。連中は地の利を生かして引っ掻き回しやがるのですよ。悔しいですが、ヤツらは強いです」

「日本は天草式の庭という訳か……」

「はい、それに日本は外国人が少ねぇので大移動もし辛いのですよ。反面、ヤツらは日本人なので多少の大移動も気にされない。その辺の事情も厄介なんです」

ローマ正教と天草式の事情に、ステイルは僅かに苦い思いをした。

二つの勢力の戦闘が長引けば長引くほど、神裂が横から首を突っ込んでくる危険性が高まる。

ステイルにとって、ローマ正教と天草式がどうなろうと関係ない。

最優先事項はあくまで神裂が余計な事をする前に、この事件を解決する事なのだから。

（電撃戦で天草式を撃破する方が、話はスムーズに進むかもしれないな……）

「天草式の連中はどんな術式を使うか分かるかな？」

相手の使う術式が分かれば、探索や防御のための陣や符を用意できるかもしれない。

そう考えたステイルは、アニェーゼに質問をしたが彼女は困ったような顔をして言った。

「実は……こっちも正確には天草式の術式は解析できちゃいないんです。ヤツらは色々と混ざりすぎなんです。多分ですが東洋系の影響力を強く受けたせいでしょう」

「天草式の特徴は『隠密性』だからだよ」

インデックスが、ステイルとアニェーゼの会話に割って入る。

ステイルも、最初からアニェーゼに期待していなかったのかインデックスが割って入ってきても何も言わなかった。

「母体が隠れキリシタンの天草式は、全ての痕跡を徹底的に隠し通すの。だから儀式と術式を挨拶や食事や仕草や作法の中に隠している。街中で食べ物を食べる事で術を作るのが天草式と思えばいいよ」

「例えばですが、どんな感じですか？」

インデックスの意見に、アニェーゼは質問をする。

その言葉にインデックスはさも当然と言った口ぶりで答える。

「例えば服装とかだね。服自体は『どこにでも売っている』ものだけど、色とか模様で術式を組むとか。食べ物で言えば食べている物、向いている方向、咀嚼する回数などだね。こういった一見どこにでもある物を使って魔術を行うんだよ」

「となると、偶像のスペシャリストといった所かな？」

「そうなるね。街中でハンバーガーを食べながら術式を完成させるとか、プロの魔術師でも気付かないと思うよ」

「なら接近戦闘戦もお得意って所なのかな？　それとも遠距離狙撃戦が得意なの？」

ステイルは嬉しそうにインデックスに質問をする。

彼は天草式に興味を持っているわけではない。

まるで昔のように感じられるこの雰囲気に自然と笑みがこぼれただけである。

最も、その影で会話の輪の外に追いやられたアニェーゼがいるが。

「天草式は独自の格闘術を身につけているの。それは洋の東西問わず、だから様々な剣術を取り入れられているよ。日本刀から西洋の刀までなんでも振り回せると思う」

「文武両道か、面倒な連中だ」

煙を吐き出しながら、ステイルは忌々しげに吐き捨てる。

「それで？　僕らは何をすればいいかな？」

「あ、は、はい」

いきなり会話の中心に戻されて、少し慌てたように姿勢を正すアニエーゼ。

一つ咳払いをすると、アニェーゼはステイルの質問に答える。

「探索はこちらで行ってんで大丈夫です。ですがウチらでも調べらんなトコがあるのでそちらをお願いします」

「……学園都市かな。そうなると」

「そうです。学園都市とウチらローマ正教は繋がりがないんで、オルソラがそこに逃げ込んだとすると厄介な事になるのです。天草式も勿論追えませんが、ローマ正教も動けなくなります」

イギリス清教は学園都市と細い糸で繋がっている。

だが、ローマ正教はそれが全くない。

だから、少しは交流があるイギリス清教の方が波風は少ない事になる。

「……本当に学園都市に逃げ込んだのなら面倒な所へ駆け込まれたもんだ」

「可能性の話ですが、あえりえねぇ話ではないかと。我らがオルソラ嬢に、そんぐらいの分別がつく心の余裕があんのを祈りましょう」

「とはいえ、天草式から逃げるのなら学園都市が最適なのは否めないよ」

困ったような顔をするアニェーゼだが、ステイルはそれらを無視して言った。
魔術師に追われているのなら、魔術師が手を出しにくい所に逃げ込めばいい。
そう考えるのは何もおかしなことではない。
ただし自分の身も危険に晒されるが、幸いにもここは日本である。
住む世界が違うからという理由で、すぐに殺されるような事にはならない。

「……そうですね。ま、確認だけでいんで、学園都市に連絡をお願い――――」

そう言いかけたアニェーゼが、不意に動きを止める。
ステイルとインデックスが不審に思って、アニェーゼの視線を追う。

「何だ？　一体どうし――――」

そう言いかけたステイルもその動きを止める。

「あ、とうまとゆうなだ」

インデックスのみ、見慣れた少年と少女の名前を告げた。

「お、るそら＝アクィナス？」

アニェーゼは二人と一緒に歩いている漆黒のシスターの名前を口にする。
名を呼ばれた彼らは、まだアニェーゼたちの存在に気付いていなかった。

時はアニェーゼたちが当麻たちを見つける少し前。
少し肌寒い時間帯とはいえ、当麻は二キロの徒歩という重労働を馬鹿にしていた。

（れ、冷静に考えれば二キロって意外と遠いぞ）

財布がない当麻には、当然ながら移動手段は徒歩しか残されていない。
ちなみにオルソラもお金を持っていなかった。
唯一お金を持っている優菜だが『二キロ程度などすぐです』といい、タクシーを利用する考えはなかったようである。

（オルソラはどうやってバスに乗る気だったんだろう……）

とても気になった当麻だが、当然ながら尋ねる気力はなかった。

「あの……お二人は何故涼しい顔して歩けるのですか……？」

もう一つ気になる事がある。優菜とオルソラは全く汗をかいていなかった。
対して当麻はうっすらとだが汗をかいていた。

「肉の苦など心の痛みに比べればどうという事はございませんから」

「……何このマゾシスター」

にこにこ笑顔で答えるオルソラに、当麻はがっくりと項垂れる。

「二キロ程度でへばるとは、お姉ちゃんは悲しいですよ。当麻」

冗談交じりで答える優菜だが、勿論彼女も汗一つすらかいていない。
女性二人はケロリとしているのに、男性である自分だけがヘロヘロとなる。
その事に、何か理不尽な物を感じた当麻であった。

「あの……お姉様。上条さんは喉が乾いたのですが」

二キロ歩いたからそれなりに喉が乾いた当麻は、水分補給を訴えた。

「自動販売機などこの辺りにあるとは思えませんよ？」

「……だよねー」

しかし学園都市と違い、自動販売機が数多く転がっているとは思えない。
そんな場所を当麻たちは歩いていた。
その上、この辺りに薄明座以外の大きな建物は見当たらない。
よって自動販売機が置かれているとも思えない。
結局は喉の渇きに耐えるしかない当麻であった。

「まぁ。水分が足りていないのでございますか。それならそうと言っていただければ、お茶の用意はございますのに」

そう言ったオルソラは、修道服の袖の中から魔法瓶を取り出す。
何で魔法瓶が出てくるんだ、と疑問に思った当麻だがあえて何も突っ込まなかった。
オルソラの摩訶不思議な行動に、いちいち突っ込んでは疲れるだけ

だ。
そう思った当麻は、オルソラから魔法瓶を無言で受け取る。
「ありがたいな。中身は何なの？」
「麦茶でございますよ」
「……何か不幸の予感がしてきましたよ」
カップ兼フタを手に取り、麦茶をカップに注ぐ。
「冷てぇ！！！　何で冬の時期にキンキンに冷えた麦茶なの！？」
「熱い時に熱い飲み物を、寒い時に冷たい飲み物を用意するのが、この国の嗜みでございましょう？」
「いやいやいやいや、寒い時に冷たい飲み物を飲んだら風邪引くだろう！？」
当麻は叫ぶが、オルソラはにこにこと善意の笑みを浮かべていた。
今更カップにある麦茶を捨てるわけにもいかず、当麻は寒さに耐えながら氷のようなお茶を飲み干していく。
（氷でも入ってるのか？　めっさ冷てぇ！）
「……ご馳走様でした」
体が暖まる所か寒さで余計に凍える結果になった当麻。
「お粗末さまでございます」

にこにこしながら魔法瓶を受け取るオルソラ。
嫌味の一つでも言いたくなったが、それをぐっと堪える当麻。
悪意があれば別だが、オルソラには悪意が全くない。
よってオルソラに当たるのも何か変だ。
そう考えた当麻は、寒さに耐えながら歩くしかなかった。

「あーやっと着いたな」

何度かトラブルはあったものの、指定時間内に薄明座に到着した三人。

「さってと、連中は中かな？」

当麻は薄明座の入場口へと眼を向ける。
それと同時に、五つ並んだドアの一つが手前に開いた。

「ありゃ？」

手前に開いたドアから、三人の男女が出てきた。
一人は見知らぬ少女だが、残り二人には当麻は見覚えがあった。

「とうま、またなの？」

「……何ですか、その『また女性と仲良しになったのか、この野郎』みたいな言い方は」

「違うの？」

「違うから！　そもそも上条さんはそんなナンパ野郎ではないです

よ！？」

叫ぶ当麻だが、当然ながら見知った人間には受け入れられなかった。
オルソラとアニェーゼだけ、ハテナマークを浮かべていたが。

「つーかとりあえず、こんなネタ満載の脅迫状を書いた凶悪神父に聞きたい。ここまで手の込んだ誘拐ごっこをした理由を」

「ネタ満載とは失礼だな。君をここへ呼んだのは人探しを手伝って欲しかったからだよ。ちなみに現場責任者はこちら。ローマ正教のアニェーゼ＝サンクティス」

「ど、どーもです」

ステイルが適当にアニェーゼを指さすと、厚底サンダルのアニェーゼが頭を下げた。

「まぁそれも終わりだ。君の隣にいるシスターをこっちに引き渡してくれれば良いだけだから」

「は？」

ステイルの言葉に目が点になる当麻。
そんな当麻を心底つまらさなさそうに見ながら、ステイルは煙草の煙を吐いた後に言う。

「だから、君の隣にいるシスターが探して欲しい人だったんだよ。物分りが悪いね、君は。はいお疲れ様。よく頑張ってくれたね、上条当麻。君はもう帰って良いよ」

「おい……。狂言誘拐かまされて、学園都市から二キロも歩き続けた上条さんの立場は？」

「だからお疲れ様と言ってるじゃないか。なんだ、構って欲しいのか？　そんな気持ちが悪い言葉は言わないでくれよ」

明らかに心の篭っていない言葉を並べたステイルに、当麻はブチリと何かが切れる音を耳にする。

（ブチリ？）

頭にハテナマークが浮いた当麻は、一瞬だが視線をステイルから逸らす。

その瞬間、顔の横を何かが高速で掠めていった。

「ふぐっ！」

同時に、奇妙な声が聞こえたので、当麻は視線を声のした方へ向ける。

「はい？」

それまでインデックスの横にいたステイルが地面を転がっていた。

ざっと見た限りでも、数メートル後ろには吹っ飛んでいた。

いきなりの光景に、インデックスもアニェーゼもオルソラも固まっていた。

「え、えーと？　一体何がどうなっているのでございましょうか？」

混乱した当麻は奇妙な言葉遣いになりながら、周りに尋ねてみる。

しかし、彼の問いに答えを返す人物はいなかった。

「あらあら、いきなり何がどうなったんでしょうね。当麻」

その声にゾワリと寒気を感じた当麻は、声の主に視線を恐る恐る向ける。

そこには光すら放ちそうな笑みを浮かべている優菜がいた。

が、よく見ればこめかみに青筋が浮かび上がっているのが見える。

（ま、まさか……）

当麻は気を失っているステイルの方に視線を再び向ける。

よく見ると地面に、何かが転がっているのが見えた。

それはそこそこ大きめの石であった。

それを見た瞬間、当麻は一体何が起きたのか理解する。

言葉にすれば簡単。

単にそこそこ大きめの石が、ステイルに目がけて放たれただけ。

問題は『誰』が『いつ』それを投げたか。

当然ながら誰も気付かなかった。否、気付けなかったというのが正しい。

「……あの……優菜？」

「どうしました、当麻？」

まるで聖母のような笑みを浮かべる優菜。

だが、その笑顔を見て当麻はそれ以上何も言えなくなった。

「イエ、ナンデモゴザイマセン」

「変な当麻ですね？　あぁ……寂しいのならお姉ちゃんが構ってあげますよ？」

首を傾げながら当麻を見る優菜。

「イエ、ケッコウデス……」

優菜を見て当麻は心の中で誓う。優菜を怒らせないようにしないとな、と。

（うん……優菜を怒らすと怖いな。普段怒らない人物が怒ると、これほど恐ろしいとはな）

寒気がする笑顔を浮かべる優菜から、オルソラの方へ視線を向ける当麻。

「そういや、お前誰かに追われているって言ってたけど、この『人捜し』と関係してたのか？」

当麻が声をかけると、オルソラは僅かにだが体を震わせた。

その震えに気付いた当麻は、僅かに首を傾げる。

オルソラの視線を追うと、それは当麻ではなくアニェーゼの方を向いていた。

インデックスとじゃれる優菜でも、地面に転がっているステイルでもない。

（ん？　お仲間じゃないの？　何かすごく警戒しているような……）

オルソラの考えが分からず、ハテナマーク浮かべる当麻。

『そう簡単に引き渡されては困るよなぁ？』

そんな時、不意に野太い男の大声が当麻の頭上から聞こえた。

当麻たちが視線を上に向けると、七メートルほどの高さに紙風船がふわふわと浮いていた。

『ローマ正教に引き渡されると、困るのはお前が一番良く分かっているはずよな。我らと共にあった方が有意義な暮らしを送る事ができるとよ』

その瞬間、オルソラの足元から三本の剣が飛び出た。

不意打ちに近い形での行動に、当麻たちは全く動くことが出来なかった。

そんな当麻たちを無視して、剣は一直線に滑る。

ものの数秒でオルソラを中心として、三角形の形に地面を切り抜かれた。

「あ……？」

恐怖というより戸惑いの声を上げるオルソラに、当麻たちはハッとなるが既に遅かった。

オルソラの体は暗い地下へと落下していた。

「下水道かよ！」

穴の近くまで駆け寄った当麻は、忌々しそうに舌打ちをする。

『ローマ正教の指揮官さえ追っていれば、オルソラ＝アクィナスが

どこへ逃げようが誰につかまろうが、いずれはここまで連れてこられると踏んでいたのよ。まったく地下をたどって待ち構えていた甲斐があったというものよなぁ！』

「くそっ！」

理由は分からないが、オルソラが攫われた。
それも突発的ではなく事前に計画を立てて、ひたすらチャンスを待ち続けていたのだ。

当麻は穴に向かって飛び込もうとしたが、誰かに服を掴まれて阻止された。

「穴をよく見なさい、当麻！」

優菜は当麻を止めると、穴の中を忌々しげに見る。

「！」

その事で気付く。ギラリと闇の中から何十もの刃の光が閃いているのを。
僅かな光が穴の中を通して、地下道の中をうっすらと浮かび上がらせる。
ギラギラとした下水道の中で、地下に潜む者たちの輪郭がうっすらと浮かぶ。

だがすぐにその輪郭は消える。

まるで堤防に張り付いていたフナ虫の群れが一斉に逃げるように。
一瞬にして人の気配が、その場から消えていった。

「ちくしょうが。何がどうなってやがんだ」

当麻は吐き捨てるように言うが、その問いに答える者はいなかった。

行間　騎士派

人工物に固められた海岸は、ようやく日が落ちて夜を迎える。
テトラポッドがうずたかく積み上げられた海岸だった。
完全に日の沈んだ海は、どこまでも深く黒色に染まっていた。
だがそれを待ち構えていたかのように、黒い界面から『手』が現れた。

手というより手甲である。
テトラポッドを掴んで海面から割って出てきたのは全身鎧だった。
頭の先から足の指まで全て鉄鋼に覆われている。

最初の一人が上陸を果たすと、それを真似るかの如く次々と全身鎧が姿を現す。
その数は合計で二十一名。
その姿はまさに騎士と呼べる姿であった。
そしてその腕にはこう文字が刻まれていた。

『連合王国（Ｕｎｉｔｅｄ　Ｋｉｎｇｄｏｍ）』

それはイギリスという国家を一言で示す記号でもある。
その文字と姿から彼らの素性が分かる。

彼らはイギリスの『騎士派』と呼ばれる存在だと。

その『騎士派』がわざわざ日本にやってきた理由は簡単である。
勅命である『法の書とオルソラ＝アクィナスの救出戦の援護』であった。
だが『騎士派』は『清教派』の命令には従わない。

何故なら、『清教派』とは『騎士派』が行動しやすいようという理由で作られた道具だから。

故に彼らは騎士団長や英国女王こそが主であると考えている。
よってイギリス清教トップの最大主教の命令には手を抜くばかりか、酷い時には突っぱねたりもする。
今回の勅命にしても、イギリス清教の命令と分かると彼らは独自の答えを出す。

天草式を皆殺しにすればいい。

故にオルソラを救出する気などゼロである。
ローマ正教に協力する気もなく、ただ天草式をこの地上から抹消する。
それが『騎士派』の出した答えであった。
そもそも最大主教の指示に命を懸ける義理など『騎士派』はないと考えている。
『騎士派』の人間はこう考えていた。

道具である『清教派』に行動を制限される謂れはない。

天草式を皆殺しにして神裂が襲いかかってこようと、逆に血祭りに上げれば良い。
オルソラを殺してしまった事で、ローマ正教と揉め事を起こしてもそれを抑えるのは最大主教の仕事。
そう考えていたのに。

それら全てはたった三秒で狂ってしまった。

テトラポッドに乗り上げていた騎士派の人間が、突如として宙に放

り投げられる。
しかしその程度では騎士派の人間は驚かず、宙で身をひねってバランスを取り戻し、着地しようとした。
その時間は僅か一秒もない。
なのに、騎士派の人間は誰一人としてまともな着地をする事が出来なかった。
全員が地面へと叩きつけられていたのだ。中には海水の上を滑っていた者もいた。

「き、さま……」

立ち上がろうとするが、体の芯を完全に揺さぶられ、指先を動かすのが精一杯だった。

「加減はしたつもりです。この程度なら死者が出ることはないでしょう」

テトラポットを地面から吹き飛ばし、騎士派の人間を全てなぎ倒した人物。
神裂火織。

彼女の言葉を侮辱と受け取った騎士は、唯一動く口を必死で動かす。

「分かって、いるのか？　貴様が今、攻撃したのは一体誰なのかを」

「私もその一員です。ローマ正教やロシア成教など他宗派なら問題になりますが、同じイギリス清教内でのトラブルなら……」

神裂はそこで言葉を切る。何故なら、声を放った騎士が気を失っていたからだ。

「海へ堕ちた方もいましたが……まぁ、潜水術式はまだ解除されていなかったようですし、溺死の心配はないでしょう」

「そーんな心配そうな目で言われても迫力に欠けるぜい」

聞きなれた声に、神裂は動揺を浮かべながら振り返った。
そこには青いサングラスをつけた、アロハシャツの少年が立っている。

「土御門……」

少年、土御門の名前を口にして神裂は驚く。
土御門の立っている場所は、僅か十メートル先だったのだ。
人の気配に敏感な神裂が、その距離にいるまで土御門の気配を感じ取れなかった。
そして今も『気配が感じられない』。

「私を止めに来ましたか」

「やめとけ、ねーちん。テメェはどんなに強くても人を殺せない。そんなテメェに俺を殺して先に進む覚悟はあんのか？　あぁ？」

土御門の言葉に神裂は奥歯を噛み締める。
勝っても負けても土御門は死ぬ。

彼が自分を止めようと魔術を使えば体の崩壊を招く。
それで負けた場合、土御門はタダの犬死だ。
仮に土御門が勝ったとしても、それは土御門の死を意味する。
それに聖人の攻撃を受けて、土御門がタダで済むはずもない。

どう想像しても土御門が無事に引いてくれる展開は神裂には思い浮かばなかった。

刀の柄に触れている神裂の指が、カチカチと震えているのに土御門は気付く。

それを見て、土御門は子供のように無邪気な笑みを浮かべる。

「オレはねーちん個人を止めるようには言われてないぜい。まぁねーちんが問題を起こしそうな事柄に先回りして排除しろとは言われているけど。それに、こっちはこっちの仕事があるんだぜい？」

「仕事……ですか？」

「そ、ローマ正教と天草式がドンパチやってる隙に、『法の書』の原典を掠め取って来いっつーありがたい命令ぜよ」

土御門の言葉に、神裂は黙り込んだ。

相変わらず何を考えているか不明な男だと思った。

神崎は土御門を見たが、結局彼がどういう考えで動いているかはわからなかった。

「……私はもう行きます。上へ報告したければご自由に」

そう言って土御門の返事を待たずして、神裂はその場を去った。

「しかし、ねーちんはイギリスから遠路はるばる何しに来たんだろうにゃー？」

そう呟く土御門だが、神崎は既に立ち去っていたので答えを望める

はずもなかった。
小さくため息を吐くと、土御門は騎士派の方に視線を向ける。

「さって、伸びてる連中を回収……」

そう言いかけた土御門は、テトラポットを見て硬直する。
さっきまで伸びていた騎士派の人間が一人残らずいなくなっていたのだ。
神裂の攻撃から回復して移動したとは思えない。
もし回復していたのなら、土御門がいようがいまいが関係なく襲いかかっただろう。

「……どこにいったんだ？　騎士派の人間は……」

「ここよ」

背後から突如として声をかけられた土御門は、慌てて声の主の方を振り向く。

「なぁっ！？」

その光景が目に入って思わず声を上げる土御門。
それもその筈。宙に浮かぶ奇妙な球体。
騎士派の人間を無理やり押し込めて作り上げたモノ。
人の肉で作り上げた『肉の球体』であった。

球体からゴキゴキと嫌な音が聞こえてくる。
形状を維持するために、明らかに関節の限界を超えてへし曲がっているのだ。
当然ながら骨が悲鳴を上げ、中にはへし折れているものもいるだろ

う。

土御門は全身鎧である事が幸運だと思った。
あれの中身を見れば、暫くは肉が食えなくなる。
そう思えるほど、無残で残酷な状態になっているのだろうと思ったから。

「私の楽しみを邪魔しようとしたゴミを生かして帰すと思った？」

宙に浮いた球体を楽しそうに見ながら声の主は言う。

「どうして貴様がここにいる。夜の魔女」

土御門はアクゼリュスを睨みながら吐き捨てるように言う。

「さっき言ったでしょう？　私の楽しみを邪魔したゴミを生かして帰すと思った？　と」

「……」

土御門は視線をアクゼリュスから宙に浮かぶ球体に向ける。
直径はおよそ四メートルほど。明らかに二十一名を押し込むには無理がある。
しかも少しずつだが小さくなっていっている。
それは水圧でバスケットボールが、ピンポン玉のように小さくなっていくかの如く。

「土御門元春……だったかしらね」

「名前を覚えてもらえるとは光栄ぜよ」

皮肉を込めて土御門は吐き捨てるように言うが、アクゼリュスは全く意に介していなかった。
ただ冷酷な笑みを浮かべながら言う。

「今回の件、上にはこう報告しなさい。『騎士派の人間は、誤って夜の魔女と交戦し全滅した』とね」

「……何が目的ぜよ」

「そうすれば怒り狂った『騎士派』のゴミが私を狙いに来るからよ」

土御門の疑問に、アクゼリュスは楽しそうな笑みを浮かべながら言う。
わざわざ自分の命を危険に晒すなど正気の沙汰じゃない、土御門はそう思った。

「ふふふ、顔に書いているわよ。お前は狂っているとね」

心の中を暴かれ驚いた土御門だが、何とか顔には出さずにすんだ。
しかしそんな土御門を見て、アクゼリュスは愉快そうに笑う。

「心配しなくても殺しはしないわよ。今の私はとても気分が良いから」

「その機嫌を損ねると、オレは肉の球体を作る二十二人目のオブジェになるんだろうな」

土御門の言葉に、アクゼリュスは冷酷な笑みを浮かべる。
それが答えだと言わんばかりに。

「分かった。上には貴様の言う通り報告しよう。だがその後の事は知らん」

「結構よ。それだけしか貴方には望まないから」

アクゼリュスの言葉に呼応するかのように、突如として肉の球体が移動を開始する。
ある一定の距離を移動した後、球体は動きを止める。
パチンとアクゼリュスが指を鳴らすと、球体は突然バラバラになる。
球体を形成していた二十一名の『肉の塊』が、バシャバシャと音を立てて海に落ちて行く。
鎧の重さのせいか、どの肉の塊も浮いてくる事はなかった。
代わりに海面が、夜でも分かるほど赤く染まる。

「お前の目的は一体なんぜよ」

長い年月を生き続け、数多の術式を駆使する夜の魔女。
人にカテゴライズして良いか迷うほど、人を捨てた存在。
そんな存在が、何の目的で動いているのか土御門には全く理解できなかった。

「そんなご大層な理由はないわよ」

アクゼリュスは冷酷な笑みを浮かべて土御門の疑問に答える。

「物語を楽しく読みたいだけよ」

アリシアの意外な一面

アニェーゼが、同じ色の修道服を着たシスターたちに外国語で何かを叫んで、あちこちを指さして命令している。
そんなローマ正教のシスター達を遠巻きから見ている当麻たち。

当麻はそもそも外国語が話せない。
インデックスとステイルは、余計な口を挟めばローマ正教が混乱するため、大人しくしている。
優菜も無駄に口をはさむつもりはないのか、黙ってシスターたちをじっと見ている。
ようするに四人は手持ち無沙汰であった。

やがてアニェーゼは指示を終えたのか、パカパカと馬の蹄のような足音をならしながら歩いてきた。
当麻はインデックスより小さいシスターに少しだけ怯える。
目の前の小さい女の子はさっきまで外国語で格好良く指示を飛ばしていた人物だ。
しかし『偉い人』が問題ではない、当麻にとって『外国語』が問題だった。

何故なら、この場で一番外国語が喋れない人物は当麻だけだからだ。

優菜は知らないが、一方通行とタメはれるほど演算力は高い。
よって喋れると考えていいだろう。
そしてステイルもインデックスも流暢な日本語を駆使する。
なので外国語は普通に喋れると考えてよい。
対して当麻は赤点ギリギリの成績だ。
日本語すら怪しいのに外国語なんてもっての外。

（こうなったら魂のボディランゲージで対応するしかねぇ！？）

アニェーゼの口が動き始めるのを、当麻はじっと見つめる。

今まさに異文化交流をしようとするアニェーゼの前で華麗に舞うべく構えていた。

「あ、え、っと。これから状況の説明を始めちまいたんですが……」

「……」

強烈な日本語だった。

（さっきまでの外国語はどうしたんだよ！）

心の中で突っ込む当麻だが、彼は気付いていない。

もし外国語で喋られたら理解できたのか、という事に。

「問題ないね」

お馬鹿な顔をして固まっている当麻に代わって、ステイルが場を代表して言う。

「では今から『法の書』、オルソラ＝アクィナス、及び天草式の動向と、我々の今後の行動について説明しちまいたいと思います」

足元がふらふらとして危なっかしい感じがするが、何とかバランスを保って立つアニェーゼ。

「現在、オルソラ＝アクィナスは確実に天草式の手にあります。『

法の書』も同様だと考えて間違いないでしょう。今回の件に出っ張っている天草式の数は、推定五十名弱」

「現在地上いいるか、下水道を利用して移動しているか分からないって所かな？」

「はい。我々は残存してる魔力の痕跡から動向をおっていますが、これが上手くいきやせん」

フラフラとするアニェーゼは、最終的に優菜の腰にしがみつく感じで落ち着いた。
優菜もあまり気にしていないのか、アニェーゼに対して何も言わなかった。

（ん？　待てよ。優菜ってアリシアと同じでローマ正教の教育を受けていたよなぁ？）

恐らくその辺りに感づいて、アニェーゼは優菜にしがみついているのかな。
当麻はそう一人で納得していた。

「ここを中心として、半径十キロの包囲網を敷かせてます。いずれ包囲網に接触しますので、それまでは待機でお願いします」

「天草式が対抗策を練ってないのはありえないかも」

インデックスの疑問に、アニェーゼは少し戸惑った感じで言葉を発する。

「でも、実際問題、ウチの包囲網を突破しちまえる方法なんて」

「あるの。そういう魔術が」

間髪入れずに答えるインデックスに、アニェーゼは息が詰まったような顔をする。

「日本国内限定の術式なんだけどね。簡単に言えば特定のポイントから特定のポイントまで自由に行き来できるような『地図の魔術』があるの」

「大日本沿海輿地全図。伊能忠敬か」

ステイルの言葉に、当麻は全く意味が掴めなかった。

「何それ？　伊能忠敬って伝説の魔術師か何かなの？」

疑問を口にした結果、当麻は全員からものすごく冷たい目を向けられた。

「あの、とうま。日本で始めて実測で日本地図を作ったひとって、歴史年表にも載ってる人なんだけど」

「……その、イタリア人の私でもそんぐらい知ってたんですけど」

「君って歴史に疎そうだしね」

外国人三人から、ボコボコに言われた当麻はちょっと塞ぎ込んでしまった。

「ゆうなは勿論、知っているよね？」

「伊能忠敬ですか？　延享２年１月１１日から文化１５年４月１３日まで生きた人で、江戸時代の商人・測量家だった人ですね。先ほど上がった大日本沿海輿地全図は寛政１２年から文化１３年の１７年間かけて作ったものですね」

すらすらと語る優菜をアニェーゼは尊敬の眼差しで見る。
その顔は「流石本場の人間だ」という感じが読み取れた。

「気を落とす必要はないよ、とうま」

ニッコリと笑顔を浮かべるインデックスに、少しだけ救いを感じた当麻。
だがそれはすぐに裏切られる事となる。

「とうまがお馬鹿なのは、皆知っているから」

トドメであった。当麻はがっくりと項垂れて涙を流す。

「で、とにかく江戸時代に作られた日本地図には特殊な仕掛けがしてあるの」

「『偶像の理論』を逆手にとった『渦』だね」

インデックスの言葉に、ステイルは何故か嬉しそうに言い足す。

「すているの言う通りだね。本物が偶像に影響をあたえるのなら逆に、本来あるはずのないモノ。空間を瞬時に移動するための出入口を強引に大日本沿海輿地全図に書き込んだの。その数は合計で４７ヶ所」

次々と飛び交う怪情報を必死で理解しようとする当麻。
だが、伊能忠敬すら知らなかった当麻に、理解出来るはずもなかった。
そして彼が出した結論は、無理に理解しようとしないという結論だった。

「で、その『渦』ってヤツを天草式は使えるって事か？」

「可能性としてはあるね。伊能忠敬は諸外国へ強い興味を持っていたし。彼の一派は大日本沿海輿地全図をシーボルトへ売り払おうとしていた経由があるからね。主に学術的興味から天草式と非公式な接触があったとしても不思議ではないかも」

インデックスの話をぽかんと聞いていたアニェーゼ。

「天草式の本拠地は知られてないし、更に謎なのは『渦』は二十三ヶ所しか見つかってないんだよ。仕様書には、ちゃんと四十七ヶ所あるって書かれているのに」

「つまりポイントの半数以上は謎のまま……か」

ぽかんとした顔から、真っ青になるアニェーゼ。
百面相みたいな感じだなぁと当麻はのんきに思っていた。

「じゃ、じゃあどうするんですか！？　飛ばれちまったらもう終わりだ！　ヤツらが飛ぶ前に急いで手を打てばまだ何とかなったかもしんねぇってのに、何をのんびりしてんですか！？」

「急ぐ必要はないよ。特殊移動法を使うには決まった時間じゃない

と駄目なんだよ」

インデックスの説明に、アニェーゼは再びポカンとした顔になる。

「特殊移動法使用制限解除は日付変更直後。つまり十二時から僅かな時間の間だけだよ。『渦』は固定されているから、この包囲網の中で使える『渦』はたった一つしかないね」

「今は大体午後七時半ですから、ざっと四時間半ぐらい余裕はありますね」

「このエリアの地図を用意してもらえるかな？」

「あ、は、はい」

ポカンとするアニェーゼだが、その前に優菜が手に持っていたガイドブックを差し出す。

位置を特定するだけならこれでも問題ないとインデックスは判断した。

ページを捲って、地図を広げると彼女は細い人差し指の先で、一点を示す。

「えっと、ここだよ」

「斥候に先行偵察させた結果、例のポイント付近で不審者を二名ほ

ど発見したそうです。天草式の線が濃いので、現在は泳がせています」

「本隊の姿は確認出来なかったのかな？」

「そうなります。他に手を抜く事も出来ないので、全ての人員を指定区域へ割くのは難しいです。包囲網の維持もありますから」

アニェーゼは困ったように言うが、インデックスもステイルも気にした様子はない。

「使える人員は合計で何名かな？」

「私を含めてざっと七十四名となります。なのですいませんが、そちらの身はそちらで守ってもらう事になっちまってます」

「構わないよ。援軍を送ると約束したこちらの『騎士』の馬鹿どもとは連絡が取れないし、その上で僕達がお荷物となっては話にならない」

「いや、すいません。では改めて……」

話し合いの結果、アニェーゼ達と当麻たちは行動を共にして『渦』のポイントへ向かう事となる。

行動開始時間は午後十一時。それまで食事と仮眠をとる事となった。

アニェーゼは優菜から離れると、両手を叩いて外国語でなにか指示を飛ばす。

当麻たちは特に準備もなく、いち早く食事と仮眠に入る事となった。

そして割り当てられた野営の場所に行くと。

「……何だあれは？」

簀巻き状態のアリシアがポツンと置かれていた。
縄でグルグル巻きにされており、その姿はミノムシにしか見えない。
口には謎の文字が書かれた紙が張られている。

「―ッ！　―ッ！」

その姿に全員が硬直していたが、やがて理解が追いついた当麻はアリシアに駆け寄る。
傍からみるとアリシアの姿はシュール以外の何者でもないが。

「おい、大丈夫か？」

当麻がアリシアに触れると、突然パキンっと何かが壊れる音が聞こえる。
と同時に、アリシアを包んでいた簀巻きが音もなく崩れる。

「ぷはぁっ！　助かったぞ、兄上」

「何やってんだお前？」

「知らん。気付いたら簀巻きにされて放置されておった」

パンパンと砂を払うと、アリシアは体の調子を確かめつつ立ち上がる。
突然のアリシア登場に未だ理解が追いついていない三人。
だが、徐々に理解が追いついていくと彼らもアリシアの元に駆け寄る。

「ありしあ、何で簀巻きだったの？」

「知らんといっておろうが。妾も気付いたら簀巻きにされておったのだ。ええい、折角テレビを見ておったというのに」

「この子は誰かな？」

アリシアの事を少し警戒しつつ、ステイルは周りを見ながら問う。

そんなステイルに、インデックスはニパっと笑いながら答える。

「ありしあは私の友達だよ」

「……悪いけど、一般人がこれ以上巻き込まれるのはよろしくないんでね。出来ればこの場から立ち去って欲しいんだけど」

煙草の煙を吐き出しながら、ステイルは本気で迷惑そうな顔をして言う。

当麻としても、アリシアを巻き込むのは余り良いとは思えない。

そう思ってステイルの言葉に、何も言わなかった。

「ああ、折角良いシーンだったのに……」

そんな二人を無視して、アリシアは忌々しげに言葉を吐き捨てる。

「また時代劇ですか？　アリシア」

「正解だ姉上」

さも当然と言いたげな雰囲気で、アリシアは優菜の問いに答える。

インデックスも何か知っているのか、アリシアの答えに驚きはしなかった。
が、余りアリシアの事を知らない当麻は素直に驚いた。

「アリシアって時代劇が好きなのか？」

「どちらかと言うと、日本文化が大好きって所ですね」

「ふふん。源氏物語と枕草子は原文で読めるぞ。百人一首は全て暗記しておるわ」

何が凄いのかさっぱりわからない当麻だが、何となく凄いことだけは理解した。
しかし、凄さのバロメーターが分からないのでどれだけ凄いかは分からなかった。

「武士道はいいぞ、兄上。特に忠臣蔵の話は感動ものだ」

何となく日本文化を勘違いした外国人っぽい雰囲気がアリシアから感じられた。
しかしあえて突っ込む気力は当麻には無かった。

「……とりあえず立ち去ってくれないかな？」

話の外に追いやられたステイルが、不機嫌そうな顔をして言う。
明らかにアリシアを追い出したい雰囲気が感じ取れた。

「そうだぞ、アリシア。今回の件はお前に関係ないだろうしな」

当麻もまたアリシアを巻き込みたくなかった。

だから、アリシアを学園都市に戻そうと考えていた。

「ふん、そこの貧弱な魔術師と姉上を一緒にしたら危険だ。何をされるか分かったもんじゃない」

だがアリシアは頑として帰る気は無かった。
当然である。姉である優菜がいれば、アリシアはそこから動こうとする気はない。
姉がいる所に妹あり。それがアリシアの信条であった。
それが分かっているからこそ、優菜もまた何も言わなかったのだ。

「まぁいいさ。危険になったとしても助けないし、助けるつもりもない。君は君で自分の身を守ってくれ」

これ以上は話の無駄だと理解したステイルは、そう言ってその場を立ち去る。
野営地はここなのにどこに行くんだろう、と当麻は思ったがそれを尋ねはしなかった。
何となくだが、聞いても答えてくれそうにないと思ったから。

「野営か。キャンプと思えば楽しいものだな、禁書目録殿」

対してアリシアは、とても楽しそうな笑みを浮かべていた。

午後十一時

その男はアニェーゼの野営地から少し離れた所にいた。
外見は青系の長袖シャツを中心に、ゴルフウェアを連想させるスポーティな格好の茶髪白人。
歴戦の猛者を思わせる体躯だが、そこに健全さはない。
まるで血塗れた兵隊の体だ。
静かで揺るぎない雰囲気を放つその男は、アニェーゼの野営地のある一点を見ていた。

（……まさか学園都市にいるとはな……）

彼の目線の先には、インデックスやアリシアと楽しそうに話す優菜の姿があった。
彼の雰囲気から敵意も悪意も感じられない。
ただ、優しく見守るかの如く見つめていた。

「久々の再会なのに、感動のご対面はしないのぉ？」

そんな彼の後ろから声をかける人物がいた。
男は声の主の方を見ず、優菜をじっと見る。

「……不要である。今はあの娘と会う時間ではない」

無骨な声で答える男を、声をかけた主はクスクスと笑いながら見ていた。

「ふーん。幾ら神の右席でも愛弟子には甘いのね」

ピクリと男が初めて反応を示す。
そんな男の反応に、声の主は楽しそうに言う。

「怖い怖い。そんなに殺気を向けなくても、貴方の愛弟子には手を出さないわよ」

「ふん、貴様を信用など出来ないのである。夜の魔女よ」

夜の魔女　アクゼリュスは男から向けられる殺気をクスクスと笑いながら受け止める。
常人ではその場から動けなくなるほどの、莫大な殺気を受け止めて尚アクゼリュスは笑っていた。

「そんなに可愛がっていた愛弟子が、まさか学園都市にいるとは思わなかったわよねぇ？　ウィリアム＝オルウェル。いえ、ここは神の右席　後方のアックアと言ったほうがいいかしら？」

瞬間、轟音が辺りに響き渡る。
男、アックアと呼ばれた人物が、五メートルを越す金属棍棒を振り回した。
ただそれだけなのに、凶悪な力が辺りを破壊し尽くした。

「暴力は良くないわよ」

だがアクゼリュスは金属棍棒を、その細い腕で受け止めていた。
とてもではないが受け止める事など不可能、そう思わせるほど彼女の腕は細かった。

「それを受け止めて、なお余裕があるか」

アックアは忌々しげに吐き捨てる。
元々、ローマ正教の討伐隊すら平気で返り討ちにする存在だ。
如何に自分が強大な力を持っているとはいえ、たった一人では勝つ要素すらない。
だがそれでもアックアはアクゼリュスに攻撃をした。

「大事な武器だから壊さないように受け止めるのは大変だったわよ」

「ふん」

金属棍棒を自身の影に仕舞うと、アックアは再び優菜の方に視線を向ける。
幸いにも彼女はこちらの様子に気付いた雰囲気はない。
そして、その他の人間にも気付かれた様子はない。

「おやおや、冗談ではなく本当に大事な愛弟子なのねぇ」

「貴様には分からないのである」

アクゼリュスの言葉に、アックアは吐き捨てるように言う。

「あの娘は純粋過ぎるのである。誰かが支えてやらねば、あの娘は自分の命すら軽く扱ってしまう」

「さすが『慈愛の聖母』とまで言われた人物ね。そこまで他人のために命をかけれるのは純粋に凄いと思うわよ？」

「……優し過ぎるのだ。あの娘は」

そう叱咤するアックアだが、その顔には僅かな笑みを浮かべていた。

無骨な男が無理矢理浮かべたような笑みではあるが。

「だから自分が培った戦闘技術『傭兵の流儀』を彼女に仕込んだの？」

アックアは答えない。

アクゼリュスも答えは分かっているのか、それ以上は突っ込まなかった。

「ま、いいわ。その聖母様がオルソラ殺しの片棒を担がされていると知ったら……どう動くでしょうね？」

「……彼女は己の信念に従って動くだけである」

冷酷な笑みを浮かべるアクゼリュスを、アックアはつまらなさそうに見ながら言う。

少ししてアクゼリュスは空気に溶け込むかの如く、その姿を薄めていく。

「なら、じっくりと見させてもらうわ」

やがて完全に姿が消えると、禍々しい気配も霧散する。

アックアはもう一度優菜の方を見る。

「貴様の信念……歪んでいないか見させてもらうのである」

そう呟くと、アックアもまたその場を後にする。

午後十一時。
天草式は動き出した。
教皇代理の建宮斎字は、本隊四十七名を連れて『縮図巡礼』の特定ポイント『渦』へと集結していた。
といっても神秘的な森や山の中ではない。
パラレルスウィーツパークという看板を提げた、大規模な菓子専門のテーマパークの一角だ。

そのような場所に『渦』がある理由。
それは『渦』を知らぬ人間が、『渦』の上に建築物を作ってしまうからだ。
街の開発状況は日々変化している。
江戸時代では平野だったかもしれない場所が、現代もそうとは限らない。
まだここはいい方であり、場所によっては銀行の大金庫の中など、移動手段としては完全に使えなくなった『渦』も存在している。

テーマパークに侵入した天草式の面々は、早速『縮図巡礼』の準備を始める。
『縮図巡礼』の使用条件はかなり厳しい条件となっている。
まず使えるのは日本国内限定である。加えて午前零時からわずか五分間しか利用できない。
準備を午前零時に終わらせるルールはないが、かと言って零時から準備を始めるのでは遅すぎる。

定石として午前零時までに準備を終わらせる。そして午前零時にスイッチを押して発動させる。
それが『縮図巡礼』の利用方法である。

天草式の面々は各自準備を始めるが、怪しげな魔法陣を描いたり呪文を唱えたりはしない。
テーマパークに侵入という事以外に彼らの挙動に怪しい動きはない。
服装も動作も何もかもおかしい所はないが、彼らは着々と準備を進めている。

しかし詳しい者なら分かるだろう。
彼らの何気ない仕草や、服装などは計算された魔術的な意味が含まれている事を。
男女の性別、年齢の高低、衣服のカラーの組み合わせ。
会話や食べ物の具材や食べ方、果ては本を読む仕草や本の総ページに至るまで。
全ては『文字』や『記号』に分解され、蠢く人々の流れによって一つの呪文を魔法陣を作り出す。
日常生活の中にわずかに残る宗教様式を拾い上げるからこそ、天草式の魔術は使った痕跡が残らない。

（さて）

準備を進める天草式の面々から一人離れて、建宮は夜空を見上げる。

（見せてやろうぞ、女教皇様。天草式十字凄教の今の姿を）

当麻は『パラレルスウィーツパーク』を、暗い夜に飲み込まれた遺跡のように感じていた。

本来なら遊園地のように華々しく彩られているはずの建物が、今は黒に塗り潰されている。
それが当麻には違和感に感じられていた。

視線をテーマパークから、百貨店の大きな駐車場に移す。
そこには何十人という漆黒の修道服を着たシスター達が集まっていた。
遠巻きにみれば異様な光景である。

「緊張しているのですか？　当麻」

あちこちに視線を彷徨わす当麻を、優菜は咎める訳でもなく優しく言う。
緊張しない方がおかしい。
これから行うのは、ただテーマパークの侵入だけではない。
オルソラ奪還という戦争なのだから。
そう当麻は思ったが、その言葉を飲み込む。

「安心しなさい。貴方は一人ではないのですよ」

肩を軽く叩く優菜と視線が合う。その瞳に恐怖は微塵も感じられない。
その姿が当麻には心強く感じられた。
一つ盛大に息を吐き出すと、当麻は小さく頷く。

そんな当麻たちにアニェーゼが厚底サンダルをパカパカ鳴らしながら近づいてくる。

「例の『パラレルスウィーツパーク』で天草式本隊を発見しました。しかしこれが陽動という可能性もあります。従って包囲網は解かず、

今の人員で交戦に入っちまいます」

「オルソラと『法の書』は確認出来なかったか」

アニェーゼの言葉に、ステイルは付け足すように言う。

ステイルの言葉をアニェーゼは否定をしなかったが、肯定もしなかった。

「オルソラが人質にされる要素はないのか？」

「それはありえねぇです。天草式の第一目的は『オルソラから「法の書」の解読法を教えてもらう事』でしょ。そのオルソラを死なせちまったらヤツらの計画は失敗になっちまいます」

「……なら天草式が自暴自棄になる前にオルソラを見つけないとな」

さじ加減が難しい問題と当麻は思った。

手を抜けばオルソラを探す事が出来なくなってしまう。

かといって追い詰めすぎて、天草式がオルソラごと自滅する恐れもある。

「そこで人員を分けちまいたいと思います。我々ローマ正教側はオトリんなって、正面から天草式と激突します。その間にあなた達はオルソラ奪還と法の書の確保をしちまってください」

「午前零時五分を過ぎたらどうしたらいいんだい？」

「その場合はオルソラを『いない』ものとみなしちまいます。あなた達は『パラレルスウィーツパーク』から脱出しちまってください」

当麻はアニェーゼの言葉を聞いて、『パラレルスウィーツパーク』の方に視線を向ける。
人探しに向いていない環境というのは、アニェーゼの聞いた話で分かっている。
中には七十五もの店があるのだ。そのどこかにオルソラが隠されているかもしれない。
はたまた意表をついて、その辺りに転がしているかもしれない。
タイトなスケジュールだと当麻は思った。

「それでは、よろしく頼みます」

そう言ってアニェーゼは両足のカカトで地面を叩く。
すると三十センチ以上あった厚底が綺麗に外れて普通のサンダルになる。
修道服のファスナー同様、お好みに合わせて脱着可能な作りらしい。

「……あのさ、歩きにくいのなら日頃から外しておけば？」

「うっさいです。おしゃれなんです。自分的こだわりポイントなんです」

午後十一時二十七分。
『パラレルスウィーツパーク』の職員用出入口に近い金網フェンスの辺りまで、当麻、インデックス、ステイル、優菜、アリシアの五人はやってきた。
途中参加のアリシアを少しだけ訝しげに思ったアニェーゼだが、特

に何も言っては来なかった。
恐らくゲストが一人増えただけで問題なし、と判断したのだろう。

「当麻、先ほどの作戦は覚えていますか？」

最終確認のように、優菜が当麻に尋ねてくる。
当麻は先ほど優菜が語った作戦を頭の中に思い浮かべる。

「ええっと、優菜とアリシアがまず突入。アニェーゼ同様に陽動として動くから、その間に俺とステイルとインデックスの三人でオルソラを奪還する……だったかな？」

アニェーゼ部隊が行う正面からの戦闘が陽動となり、本来は当麻たちが遊撃隊として動く。
そこへ更に優菜とアリシアが遊撃隊の陽動として動く。
二重陽動、それが優菜の打ち立てた作戦である。

「しかしアニェーゼたちに連絡しなくていいのか？」

しかし奇妙な事に、この作戦を優菜はアニェーゼたちに連絡していないのだ。
当麻はその点を不思議がっていたが、優菜は軽く笑うだけであった。
アリシアも『兄上はローマ正教というものを知らんからな』と呟いただけであった。
ステイルもインデックスも、何か知っているのか優菜の行動に口を挟む気はさらさらないようだ。

「ふむ、そろそろ準備をしておくかな？」

そう言うアリシアは、自身の髪を結っているリボンを外す。

パサリと音を立ててアリシアの髪が舞う。月明かりに反射して綺麗な金色をしていた。
が、すぐにその色が変化していく。金から銀へと変化していくアリシアの髪。
初めて見る当麻とステイルは、その光景に驚き硬直した。

「ふふん、変化の術じゃ。どうじゃ、カッコイイだろう？」

そう言って視線を向けるアリシアの瞳は、血を連想させるほど紅く輝いていた。
インデックスは一度見たことがあるが、それでも驚きは隠せなかった。

「……その姿、嫌な魔女を思い出すね」

「気にするな、香水神父」

銀色の髪を靡かせながらアリシアは薄く笑った。

「ありしあは派手に暴れるのはいいけど、あんまり派手すぎないでね。誤ってローマ正教ごとふっ飛ばしたら笑えないよ」

「加減はする。が、期待はしないでくれ」

「いや、味方吹き飛ばしてどうするんだよ！？」

傲慢不遜な態度でいうアリシアに、思わず当麻は突っ込む。

「気にするな兄上。吹っ飛ばすのはせいぜい七十人強のシスターだけだ」

「おい、それってアニェーゼ全員って事かよ！？」

ニヤニヤと笑って言うアリシアは、普段の姿から想像できないほど冗談交じりで言う。

が、冗談でも笑えない冗談ばかりで当麻は疲れを感じた。

「ま、兄上。オルソラ奪還、法の書の奪還、ポイントの破壊。これらを片付けれるのは正直厳しいだろう。だからまずポイントの破壊を最低の優先度にしておけばいい」

「何でだ？　その『渦』を壊さないと逃げこまれたら大変だろう？」

「ふふん、兄上」

当麻の疑問にアリシアは獰猛な獣を連想する笑みを浮かべた。

「『渦』なんぞ天草式ごと吹っ飛ばせばいいのだよ！？」

拳を作って力説するアリシア。当麻はアリシアのいっている事を頭の中でまとめた。

アリシアのいっている事は実にシンプルだ。

何かあれば問答無用で吹っ飛ばせばＯＫ。

何とも暴力的かつ大雑把なアリシアの意見であった。

「いや……ここはオルソラ最優先でお願いします。アリシアさん……」

ほっとけばオルソラごと吹き飛ばしそうな勢いのアリシア。
助けに来たのに、オルソラを怪我させるとかシュール以外の何者でもない。

「まぁ全部冗談だ、兄上。妾はそこまで粗暴ではないぞ？」

ケタケタと笑うアリシアを見て、当麻はがっくりと項垂れながら思った。

（冗談に聞こえませんよ、アリシアさん……）

危険な姉妹

後ろに当麻とインデックス、ステイルがいる事も忘れて優菜とアリシアはその時を待った。
ローマ正教が陽動としての戦の狼煙を上げるその時を。

そして遂にその刻はきた。

遠く離れた一般用出入口の方から突如として巨大な爆発が起きる。
轟々と燃え上がる火柱が見えた時、二人は動き出していた。

「は、はえぇ……」

鮮やかにフェンスを超える二人。
当麻はフェンスを飛び越える二人を見て、余りの華麗さに呆けた顔をする。

「どういう身体能力だ」

暗闇の中でも見えているかの如く、優菜とアリシアは迷いなく走っていた。
その光景に、さすがのステイルも驚きを隠せなかった。

「もう少し後でわたしたちは出るんだね」

「ああ……」

当麻がそう呟いたと同時に、遠くからガンっという金属音が聞こえた。

その音に慌てて当麻が視線を向けると、店の屋根から少年少女が宙を舞っていた。
しかし、次の瞬間当麻たちはあり得ない光景を目にする。
宙を舞っていた少年少女たちが見えた瞬間。
何かに引き摺られたように彼らは地面に叩きつけられていた。

優菜とアリシアは今も走り続けている。
もう豆粒程度にしか見えないが、それでも何かをしたようには見えなかった。
あり得ない光景に当麻たちはしばし声を失う。

「な、何が起きたんだ？」

「……微かに魔術を使った形跡があるね。分かったのはそれだけだがな」

ステイルが苦々しく吐き捨てる。
プロの魔術師を持ってしても、今の現象は魔術という曖昧な答えしか出せない。
それ以上は一体何が起きてどうしてあの結末になったのかが誰も分からなかった。

「ありしあ……あれがコルネリウス家の力……なんだよ」

ポツリと呟くインデックスの言葉が、今の現象を理解する最大の言葉であった。

明らかに物理現象をねじ曲げたアリシアの力に、優菜は内心驚いていた。
走っている最中に、アリシアは何かを引っ張るような動作をしただけ。
それだけで、頭上にいた少年少女たちが地面に叩きつけられた。

「……もう少し奥で私たちは暴れます。用意はいいですね？」

「ああ、構わぬ。妾はいつでも準備は出来ているぞ」

優菜の問いにアリシアは同意すると、聞き取れない言葉で何か囁く。
それは人のどの言葉にも当てはまらない言葉だった。

（魔術というのを、はっきりと見たのは今回が初めてですが……想像以上ですね）

手に持っている『普通の棒』を握り締めると、優菜は改めて魔術というモノの力を考える。
超能力とは別の理論で創り上げる力。その力を駆使する教会世界。
確かに今のまま教会世界と戦争になれば、それは泥沼の戦争にしかならないのも頷ける。

「ここでいいでしょう」

魔術に関する考察を強引に打ち切ると、優菜は少し開けた場所で足を止める。
そこは店と店の間から、少し離れた場所。
恐らく小さな休憩場所として活用する予定なのだろう。

その場に優菜とアリシアは互いの背中をあわせて敵を迎え討つ。

「ざっと十人……かな？」

「十二人ですね。どうやらローマ正教の陽動はバレバレのようです」

「あれほど分かりやすい陽動などないだろう。ローマ正教如きあの程度が限界だ」

四方八方を囲まれても、優菜とアリシアは余裕の笑みを浮かべていた。

元々この状況を優菜たちは予測していたのだから。

予定通りに事が進んでむしろ喜ばしい。

二人はそう思っていた。

「見た所、槍を持った少女が集団のリーダーのようですね」

「それっぽい雰囲気はないがなぁ。街を歩けば地味な娘にしか見えんぞ」

年は自分たちと同じぐらいで肩までである黒い髪。

全体的にほっそりとしたシルエットの女の子だった。

だがその手に持っているモノは、普通の女の子ではまず持たないモノ。

「海軍用船上槍かな……？」

「どちらでもいいですよ。今は目立って陽動としての意味を成しましょう」

優菜は棒を水平に構える。それだけで辺りの空気が一変した。
場の温度が数度下がったように感じられたのは、天草式も同様だった。
数名、動揺のためか少し後ずさった者もいる。

「アリシア、今は『本気』で闘ってはいけません」

「分かっておる、姉上。やる気をだすのは……」

腕を横に一閃しながらアリシアは言う。
それだけで、優菜たちを囲っていた内の一人が、音もなく吹き飛ばされていった。
壁に叩きつけられた少年は、その体勢のまま気を失う。

「この後……だろう？」

当麻たちは少し気まずい雰囲気を感じながら歩いていた。
彼らの耳には、時々悲鳴のようなモノが聞こえる。
およそ人が出せるものとは思えないその悲鳴に、ステイルすら少し恐れていた。

「……君の周りの娘に、普通の娘はいないのかね……」

ステイルらしかぬ物言いだが、そう言いたくなる気持ちを当麻は理解した。

暫く歩いていると、ふいにステイルが自分の懐をゴソゴソとあさり始めた。

「君にこれをやる。死にたくなければ肌身離さず持っていろ」

懐から取り出した十字架を、ステイルは当麻に向かって無造作に投げる。

慌てて受け取ると銀で出来た十字架のネックレスだった。

「何に使うものなんだ？」

そう言いながら当麻は顔を上げると、目の前からステイルとインデックスの姿が消えていた。

「あー！　あの野郎！　俺を囮にする気か！！！」

敵地のど真ん中で叫ぶ当麻。

彼は不幸である、それはこのような場の時に発揮される。

突然金属音が聞こえたかと思うと、当麻目がけて少女が飛び降りてきた。

その手には細いレイピアのようなものが握られている。

「うぉ！」

少女は一気にレイピアを振り下ろす。

とっさの判断で避けた当麻だが、少女は追撃を緩めない。

そのまま横払いに転じて、当麻を真っ二つにしようとする。

「くそっ！」

ギリギリの所でかわした当麻だが、状況は悪化する一方だった。
相手が持っているのは細いレイピアに、装飾をつけた貴族用の剣。
とはいえ、それなりのスピードで振り回せば人を斬る事も可能だ。

（さて……どうすっかなぁ……）

普通の人間なら刃物を見て腰を抜かすが当麻は違った。
彼は学園都市でも喧嘩をよくするし、よく巻き込まれたりもする。
なので刃物類を見慣れている。
だから冷静さを失うことなく少女と対峙する事が出来た。
彼の周りにいる人間が、単なる刃物以上に凶悪な事も冷静さを保てる一因だろうが。

ジリジリと間合いをつめながら、当麻はどうやって切り抜けるか考える。
冷静さを失わず、的確な判断を下す。それが喧嘩慣れした当麻の持論であった。
そして当麻はある事を思い出す。
ここに来る前に立ち寄ったコンビニであるモノを買った事を。

（一か八か！）

そう思った当麻はポケットから『ソレ』を取り出して少女に投げつける。
危険なものと感じた少女は、レイピアで『ソレ』を斬った。
瞬間。ベチャっと音を立てて、薄透明なジェルのようなものが少女を襲う。

「はっはー！　上条さんの整髪料ですよー！」

いきなりの展開に、頭の処理が追いつかない少女は当麻のタックルをそのまま食らう。
少女の腰へ腕を巻きつけるようにタックルした当麻は、全体重をかけて一気に少女の背中を地面に叩きつけた。
頭を地面にぶつけないように、後頭部へ手を回しているのはいかにも当麻らしいが。

「ごふ」

衝突と同時に、少女の口から酸素が吐き出される。
受身の取れない状態で、柔道の投げ技を食らったようなものだ。
そんな攻撃を食らったのなら、少女が気を失うのは当然のことである。

「うん……怪我はないな」

少女が怪我をしていない事だけを確かめると、当麻は少女を近くの壁に寄り掛からせる。
ジェルが月明かりに照らされて、かなり卑猥な感じを醸しだしていたが当麻はあえて見ぬふりをした。

（ごめんよ、少し我慢してくれ。さて……インデックスはステイルがいるから、俺はオルソラ捜しを行うか）

心の中で謝罪を述べた当麻は、オルソラ探しを続行した。

暫く店と店の隙間を移動していた当麻は、円形の観覧コースに差し掛かった瞬間、真横から何者かに体当たりされた。
店の壁の影からの完全な不意打ちだった。

当麻は体当りしてきた人物に、地面へ押し倒される。
とはいえ、先ほどの少女と違い受身はとれたのでダメージは少なかったが。
追撃を防ぐため、当麻は両手の拳を握って構える。

「……ありゃ？」

「むぐー。むがむぐむむぐむーむーむぐぐぐぐ」

体当りしてきた人物をよく見ると黒いフードに黒い修道服。
手の先から足の先までぴっちりと肌の露出を控えた『シスター』。
どう見てもオルソラ以外に見えなかった。
見ると布のようなもので、腕を後ろに固定され更には口にも粘着テープが貼りつけられていた。
布にはうっすらと崩れた漢字のようなものが、びっしりと書き込まれていた。

得体のしれないモノに口を塞がれたオルソラは、必死の形相で何かを当麻に伝えようとした。
が、当麻にはミノムシのように蠢く怪しい人間にしか見えなかった。

「お前ってそういう趣味でもあったのか……？」

「むぐー！！」

軽い冗談を言った当麻だが、オルソラには通じなかった。
オルソラによる本気の頭突きが、当麻の鳩尾に入る。

「ごはっ！」

今度は受身も取れず、当麻はオルソラと一緒に地面に倒れこむ。
その瞬間、手に柔らかな感触を感じる。
思わず握ってみると、それはとても柔らかいものだった。
当麻は視線を自分の手の方へ向ける。
彼は理解していた。こういう場合は大体ロクでもない結果を招くと。

（ぶっ！　ぶはぁ！）

当麻の手は、温かい鼓動を伝えてくるオルソラの大きな胸を揉んでいた。
言い訳不可能なぐらいがっちりと。
幸いにもオルソラは気付いていなかったので、当麻は全速力でオルソラの下から這い出る。
いくら姉妹がいるとはいえ、女性に対しては大きな免疫力がない当麻である。
胸を揉んだ事により、当麻の顔は真っ赤に染まっていた。

「ちょっと……待ってろな」

まともにオルソラの顔を見れない当麻は、視線を微妙に外しながらオルソラの口を塞ぐお札をなぞる。
直後、お札らしきものが自然と剥がれる。
その光景を見て、オルソラはびっくりした顔をしていた。
唇を間接的に触られた事もあるが、当麻が右手でなぞっただけで魔術的な意味があるお札が自然と剥がれた。
その事がオルソラには不思議であった。

「あ、あの。あなた様はバス停でお会いした方でございますよね。
でも、何で」

「お前を助けに来たからに決まってんだろう」

秒を置かず答える当麻に、オルソラは更に驚いた顔をする。
が、その顔には僅かな警戒心が混じっていた。

「え、え？　あの、本当に……私を、助けに？　『法の書』などとは関係なく……？」

「んなカビ臭ぇ本なんかどうでもいいだろうが。テメェには俺が古臭い本一冊のために、こんなトコまでやってくるような物好きにみえんのか？」

「カビ臭い……？　『法の書』は莫大な力を持てるという……」

「つーかよ。逆に聞くがそんな力持って何すんの？」

頭を掻きむしりながら尋ねる当麻に、オルソラはビクっと肩を震わせる。

「は、はぁ。えと、あの……」

「まぁそんな小っせぇ事情なんかどうだって良いか。とにかくここから逃げるぞ」

当麻はオルソラの後ろへ回って腕に施されている封も破壊する。
拘束がとけた事により、自由となった自分の両手をオルソラはさする。

「あ、ありがとうございます。あら？　これは、どうやって……？」

「ん？　まぁそういう能力なんだが、詳しい説明はパスだ。俺は馬鹿だからな！」

さんざん馬鹿にされたことを根に持った当麻は、遂には開き直って言い切った。
馬鹿に説明を求めるなと。言ってて悲しくなった当麻だが、勿論顔には出さなかった。

「ちょっとこっちへ！」

小声で叫んだ当麻は、オルソラの返事を待たずに彼女の腕を引っ張る。
声を上げかけたオルソラだが、その前に当麻の右手が彼女の口を押さえた。

傍から見ると、当麻がオルソラを抱きしめているように見えるのだが、二人は全く気付いていなかった。

少しして天草式の数名が、バタバタと足音を立てて通りすぎていった。
その姿は、当麻たちを追うというよりオルソラの逃亡に気付いたという雰囲気である。
やがて足音が遠ざかると、当麻はオルソラを開放してその場に座り込む。
オルソラもそれにならって、当麻の隣で上品に座り込んだ。

命をかけて願った世界

当麻たちがいる場所は、天草式にとって死角になったようである。
しかし、それは逆に当麻たちがその場から動けない事を意味していた。

断続的に天草式の人間が足音を立てながら通りすぎていく。
これでは全く身動きできない。
当麻はそう思って暫くやり過ごそうと考えた。
時々通り過ぎる青年たちの声から、当麻は現状を理解する。

オルソラが逃亡した事に天草式が気付いた事。
ローマ正教との乱戦で、半数近くが捕虜として捕縛された事。
特殊移動法の時間が刻一刻と近付いているという事。
悪鬼とも言える女二人組に十二名いた部隊が殲滅させられた事。

最後の方に聞こえた話は、間違いなくあの二人だよなぁ。
と当麻はのんきに考えていた。
敵ではない当麻は気楽だが、天草式の怯え方は尋常ではなかった。

（聞いていると面白いよなぁ……）

「さて……どうやってやり過ごすかなぁ。午前零時を五分過ぎれば『渦』だったかな？　あれが使えなくなるからそれまでやり過ごすかな……」

ステイルはどうでもいい、だがインデックスの方は心配な当麻。
優菜とアリシアの方も心配したが、天草式の様子から大丈夫だろうと考えていた。

「あの……」

呆けた顔でぼーっとしていた当麻に、オルソラはおそるおそる声をかけてきた。

「ん？」

「あの、あなた様は確か学園都市の方でございましたよね？」

何かを確認するかのように、オルソラは一言一言噛み締めるかのように質問してきた。

「ああ、まぁそうだけど？」

「一緒にいた方も、確か学園都市の方でございましたよね？」

「あー優菜？　そうだけど、それがどうしたの？」

当麻の問いに、オルソラは考え込むような仕草をする。

「あの、学園都市のあなた様が何故このような所にいるのでございましょう？　学園都市の中に教会はなかったと存じ上げてございますけど」

当麻の行動がとても不思議に見えたのか、オルソラは首を傾げながら言葉を発する。

対して当麻は適当な感じで答える。

「あーまぁ教会はないね。俺はちょっと特別でね、イギリス清教に

知り合いがいんの。何だか知らない内にヤツらの手伝いをさせられているだけってトコ」

その答えにオルソラの肩がピクリと動いた。
当麻は反射的にしまったと思った。
宗教ってのは宗派によっては、とても仲が悪い。
そんなことを、少し前に学校で習ったのを思い出していた。

「えっと、ローマ正教のお前にとって、イギリス清教ってのはやっぱ敵なのか？」

「いえ、そうではございません」

オルソラは首を軽く横に振り、当麻の言葉を否定する。

「確認させてもらいますけど、あなた様はイギリス清教からの協力要請があって手伝う事になったのでございましょうか？」

「そうだけど。別にソレがなくても、俺はお前を助けるぞ？」

「どうしてでございましょう？」

オルソラは心底不思議そうな顔をして当麻を見る。
対して当麻は、さも当然な事と言わんばかりに答える。

「友達が危険に晒されているんだ。助けにいくのは当然だろ？」

「友達……」

「あ、悪い。俺みたいな学園都市の住人が友達とか嫌かな？」

当麻の問いにオルソラは大げさにも見えるほど、首を横に振って否定する。

「そんな事はございません。しかし、あなた様のような方は、私たちのような教会世界にかかわりを持たない方がよろしいに決まっているのでございましょう」

「ふーん、そんなモノかな。確かに俺はこんなの持っていてもしょうがないけど」

そう言って当麻はステイルから渡された十字架を見る。
何か効果があったかもしれないが、当麻の右手は既に触れているのであったとしても破壊されているだろう。
よってこの十字架は、今は単なる銀で出来た十字架であった。

「それはイギリス清教のお知り合いからいただいたものでございましょうか？」

「あーやっぱ本職の人間には一発で分かるもんなの？」

「一口に十字架と言いましても、様々な形、種類のものがあるのでございますよ」

「ふーん。まぁ俺が持ってても仕方ないし、良かったらお前が預かっててくれ」

当麻の何気ない言葉に、オルソラは飛び上がりそうになった。

「あら、よろしいのでございますか！」

「いや別に良いけど。ステイルがどういうつもりで渡したか知らないけど、大した意味とかないだろう」

皮肉屋のヤツなら何か嫌味を込めて渡したのかもしれないが、と当麻は心の中で呟いた。

当麻は手の平に十字架を載せて、オルソラに差し出す。

と、オルソラは何故か握手をするかのように当麻の手を掴み、さらにもう片方の手で包み込む。

「ひとつだけ、お願いがあるのでございます」

予想以上に柔らかいオルソラの手の感触に、当麻はドキドキしながらオルソラを見る。

「あなた様の手で私の首にかけてもらえないでございましょうか」

「は？　まぁ、構わねぇけど……」

当麻がそう答えると、オルソラは瞳を閉じて顎を上げた。

（何だかキスを求められている気分になるが、上条さんにそんなラッキーイベントなんてありえませんよ）

ドキマキする心を抑えようと、意識を他に向けようとして視線を下に向ける。

すると、視界いっぱいにオルソラの大きな膨らみが目に飛び込んできた。

（ぶはぁ！！！）

奇しくも顎を上げたことによって、胸が反らされた為にいつもより更に強調されていた。
その事に当麻は心の中で盛大に吹出す。

当麻は焦りながらネックレスをオルソラの喉に巻きつけようとした。
が、やってから当麻は後悔する。
まるで抱きしめるかのような格好だったのだ。
更にそれを意識してしまい、緊張がより一層増した。
カチカチと手の震えで接合部が音を立てたが、なんとか鎖の連結部を繋げる事が出来た。

「お、終わったぞ……」

盛大に浪費した当麻に対して、オルソラは胸元にある十字架を指で撫でる。
その顔は何かに満足していたかのようだった。

「そういやぁ聞きたいんだけどさ。なんでお前は『法の書』を解読しようとしたの？」

当麻の何気ない一言に、オルソラははっとしたように身を固くした。
だが、当麻はあえてそれを無視して言葉を続ける。

「コレは人づてに聞いた話だけどさ。魔道書ってのは危険なモンなんだろう？　特に……なんだっけ、原典？　とか言われるヤツは」

「……はい。魔道書の原典はどんな方法を使っても破壊する事は出来ないのでございます。しかし……」

そこでオルソラは言葉を区切ると、少し考えこむような感じになる。

「悪い、別に『法の書』の解読方法が知りたいとかじゃないんだ。純粋に、何でそこまでして調べようと思ったのかが気になったんだ」

「魔道書が危険なのは、あなた様が言ったとおりでございます。ですが、その魔道書の原典がなくなれば？」

オルソラは当麻を見定めるかのように質問を口にする。

その顔は真剣そのものであり、下手な回答は彼女を失望させると当麻は感じた。

「今みたいな争いがなくなる？」

当麻の答えに、オルソラは心底嬉しそうな笑顔を浮かべる。

それはオルソラの考えと当麻の考えが一緒だったから。

「その通りでございます。魔道書の力なんて、誰も幸せにしないのでございますよ。ですから私は、ああいった魔道書を壊すために、その仕組を調べてみたかったのでございます」

「でも魔道書の原典は壊れないのじゃ？」

「原典が一種の魔法陣であるのなら、その魔法陣の仕組みそのものを逆手に取る事もできるのでございます。つまり、原典を自爆させる事も可能なはずでございましょう」

「あー……でもやっぱり危険じゃねぇ？　女の子がそんな危ない橋を渡るなんて、上条さんは心苦しいですよ」

当麻の言葉にオルソラは一瞬キョトンとした後、くすくすと笑い出した。

（何かおかしい所あったかな？）

当麻は最後までオルソラが笑う理由を知ることは出来なかった。

困ったような顔の当麻と上品に笑うオルソラ。

二人の間に少しだけの平穏が訪れたかに見えた。

しかし店の向かいから鈍い音が聞こえた瞬間、そんな空気は一瞬にして霧散した。

慌てて飛び上がると、当麻の視界に何か映った。

それは赤い髪の、黒い服を着た神父であった。

「す、て……いる……？」

理解が追いつく前に、ステイルは勢い良く地面へ落下した。

背中から地面へ激突した彼の体は、あちこちが刃物で切り裂かれたかのようにズタボロだった。

「く、そ。上条、当麻か。何をやっている。早く逃げろ！！」

「え？」

呆けた声を当麻があげると、背中を預けている店の二つ横の店の壁が大きく盛り上がった。

まるで海面を突き破ってジャンプするシャチのように、店の壁を木っ端微塵に砕いて何者かが飛び出してきた。

「くっく。なぁにをやっとんのよイギリス清教の神父様。おら、英国紳士の誇りはどこ行った？　この建宮斎字に見せてみろ。そんなんじゃ女の一人も守れんぞ」

フランベルジュを軽々と片手で握る男、建宮斎字が笑みを浮かべながらステイルに言う。

「これじゃ、あっちの悪鬼と連絡を受けた女二人組の方がまだマシだったかもなぁ。なにせその二人に十六人も戦闘不能にされたからなぁ。五十二人のうち十六人だぜ、三割をたった二人で潰されたわけだ」

舌打ちをするステイルをニヤニヤと見ながら建宮は更に言う。

「なぁお前さんが呼べるなら呼んでくれや。英国神父相手してるより、何倍もマシだろうしな」

しかしステイルは建宮など見ていなかった。
その先、壊れた店舗の向こうの観覧コースで身構えている人物。
白いシスター服を着た女の子、インデックスの行く末を最重要視している。

「お前、守りながら戦ってきたのか……」

「余計なことは、考えるな」

血を吐き出すような勢いで、ステイルは当麻に言う。

「……よし、オルソラ＝アクィナスを確保しているね。後は隙を作って逃げるぞ。無理にあれを倒さずとも、逃げ切れば僕たちの勝ち

だ」

震える足で無理やり立ち上がったステイルは、建宮を睨みながらそう言った。

行間　五和　対　優菜

少しだけ時間は遡る。

海軍用船上槍を持った少女は肩で息をしながら目の前の光景を見ていた。

十一名の仲間が無残にも地面に倒れ伏している。

誰一人として立ち上がってくる気配はない。

大半は気を失っていたが、運悪く意識があり激痛に呻き声をあげる仲間がいた。

そして少女に相対するように、二人の人物が立っていた。

一人は棒術を駆使する武闘派の少女、しかし魔術師ではない。

もう一人は小学生のような小さな少女、だが謎の魔術を使う魔術師。

見た目も使う力もバラバラな二人に共通している点は無傷という点である。

（一体……何者なの！　この人たちは！）

立っているだけで強烈な重圧を受けている少女は、一度も剣を交えていないのに大量の汗を流していた。

「い、五和……逃げろ……お前ひとりで立ち向かえるような相手ではない……」

近くにいた人物が、五和と呼ばれる少女に向かって呟く。

だが五和はそれに対して首を横に振ると、目の前の敵に視線を向け

ながら言う。

「仲間を見捨てて逃げるわけにはいきません……！」

槍を握り締めながら、五和は仲間に向かって叫ぶ。

仲間たちを見捨てて逃げるぐらいなら、この場で闘う事を選ぶ。

それが五和と呼ばれる少女が出した答えであった。

「おー姉上。地味子は意外と根性があったようだぞ？」

「地味子……人を馬鹿にしてはいけませんよ？　アリシア」

五和を前にしても二人の少女、優菜とアリシアは終始余裕を崩していなかった。

自分が馬鹿にされている事に気付いても、五和は攻撃をする事が出来なかった。

あの余裕は罠だ。

そう五和は理解していた。

仲間たちもあの罠にかかって倒されていったのだ。

（一つ……たった一つの本当の隙が欲しい……）

そう願う五和だが、残念ながらそれは叶いそうになかった。

二人はどんなに余裕を見せても、罠以外の隙は全く見せなかったのだ。

（くっ……負けられない……！）

槍を構えて二人と対峙する。
二対一なら勝利できないが、それはないと五和は考えていた。
優菜とアリシアは、同時に攻撃をしてくる事はなかった。
それに五和は優菜を高潔な戦士と見ていた。
だからこちらが真剣に立ち向かえば、必ず一対一の状態に持っていける。

「……いい眼をしています」

そして五和の思惑はあたった。

「アリシア、手を出してはいけませんよ。彼女の目は戦士です、ここは礼儀を持って答えるべきです」

「了解だ、姉上」

優菜はアリシアを下がらせると、棒を片手に五和の前に立つ。
計算通り、と五和は思った。だがここからが正念場だ。

「私がお相手いたしましょう」

棒が水平に構えられた瞬間、場の空気が一瞬にして数度下がる。
五和は優菜の眼を見て、背筋が凍るような寒気を感じた。
恐怖。
それが五和の心を支配しかける。

「いざ、参る！」

それを大声で押しのけると、五和は手に持った槍で優菜を突き刺す。
だが槍の刃は優菜に当たることはなかった。

優菜は最短距離で五和の攻撃を避けると、お返しとばかりにカウンター攻撃を仕掛ける。

「くっ！」

ギリギリの所で回避したが、直撃を避けれただけで余波までは避けれなかった。
余波で切れた場所から鮮血が流れ落ちる。

「今のを避けるとは、さすがこの部隊のリーダーですね」

避けられた事に若干驚いた優菜。
しかしすぐに笑みを浮かべると、今度は自分の番とばかりに五和に攻撃を仕掛ける。

「！」

殆ど見えない優菜の攻撃だが、五和は辛うじて避けれた。
だが内心は驚きと混乱だらけであった。
魔術を使って身体能力を強化した形跡がない。
まるで『聖人』を相手にするかのよう。
五和はその事に気付くと、持っている槍を強く握る。

（まさか……相手は聖人なの？）

五和はもう一度優菜の戦力を分析する。
もし相手が『聖人』なら、一般的な魔術師である自分では勝つ事が出来ない。
だが、相手は偶像の理論を使っているようには見えない。

「魔術を使っている形跡はない……だとしたら……」

その先の言葉を思うのすら躊躇った五和は、言葉を唾と共に飲み込む。

しかし心は正直であった。たとえ口に出さなくても心は思ってしまったのだ。

（本当に生まれ持った身体能力だけで、私たちを圧倒したっていうの！？）

もしそうなら実力差は明らかであった。

五和の攻撃を優菜は余裕を持ちながら避けれ、尚且つカウンターも打ち出せれる。

対して五和は反撃どころか、避けるので精一杯だった。

更に優菜は本気で敵対している訳ではない。明らかに手心が加えられている。

「姉上、『ソレ』でいいのか？」

「ええ、アリシア。『コレ』でいきます」

『ソレ』とか『コレ』が何を指すか五和には分からなかった。

だが何となく自分を指しているのだろう、漠然とそう思っていた。

（何を企んでいるの？）

相手の言葉に翻弄される訳にはいかない。

そう思っていても何かを企んでいる二人の言葉が気になった。

しかし考えたところで答えが出ないと分かると、五和は考えること

をやめる。

「倒されるわけにはいかない……！」

押しつぶされそうな重圧をはねのけ、五和は優菜に向かって突き刺す。

五和は優菜を殺す勢いで攻撃を繰り出す。

およそ人体の急所と呼ばれる所を的確に狙う。

だが何度槍を振るおうと、その切っ先が優菜に当たることはなかった。

優菜は、まるで舞踊のように五和の攻撃を最短距離で避け続けた。

「……はぁはぁ……」

肩で荒い息をしながら槍を構える五和。

（まるで静かに流れる川の水を相手にしているみたい。どれだけ攻撃しても反応が感じられない……）

涼しい顔で棒を片手に立つ優菜を、五和はもう一度じっくり見る。

見た目はほっそりとした体だが五和には分かる。

あれは鍛えあげられた戦士の体であると。

出会って少ししか立っていないが、五和は優菜をこう評価していた。

彼女は勇敢さ、高潔さ、聡明さを備えた誇り高き戦士だと。

故に非道な振る舞いに手を染める事はないと。

だからこそ五和には分からなかった。

（分からない。これほど高潔な戦士が何故オルソラさん殺しに加担するの……）

ローマ正教の手先に見えない。純粋に自分の意思を持って行動している。

優菜をそう見た五和だからこそ、一体何を目的にしてローマ正教に加担しているのかが分からなかった。

だが嘆いていても話は始まらない。気持ちを切り替えて五和は優菜を見る。

「眼の色は変わりませんか……ならば」

その言葉に、五和の全身へ緊張が走る。

声質そのものは禍々しい訳でもないのに、酷く恐ろしい声質に聞こえた。

槍を持つ手から、異様な汗が噴き出してくるのが分かる。

理由は分からないが、さっきまでの彼女ではないと五和は理解した。

奇跡が起これば勝てるかもしれないとか、そういう事を思うのもおこがましい。

そう思えるほど、今の彼女は別格だ。

今の自分を例えるなら、巨大なダイヤモンドに果物ナイフで立ち向かっている。

そんな感覚しか得られなかった。

優菜はゆっくりと棒を水平に構える。

その動作を見ているだけで、五和は死へのカウントダウンが始まったと感じた。

五和の全身を恐怖が包み込んでいく。

槍を持つ手がガクガクと震えているが、それを止める事を五和は出

来なかった。

「我が恩師より授かりし『傭兵の流儀』、貴方にとくと味わって頂きましょう」

計り知れないほどの重圧が、五和の全身にのしかかる。
もはや気を正常に保つので精一杯な彼女は、その重圧に屈しかける。

「貴方の名前は何というのです？」

「……五和……」

優菜の問いに僅かに時間がかかりながらも答える五和。

「いい名前です、五和。私の名前は上条優菜、学園都市に住む『ただの無能力者』ですよ」

その言葉と共に優菜は微笑んだ。この場に不釣合なほど柔らかい笑みであった。
それが五和がまともな意識があるうちに見た、優菜の最後の顔であった。

「参ります」

その声と共に轟音が辺りに響き渡る。
音と共に繰り出された優菜の技。

雷閃。

夜闇を切り裂く一閃の光を作り出す雷のように直突きをする。

言葉にすれば単純。しかし、それが人の目には見えない速度で繰り出されるのだ。
更に横回転運動が加えられており、高い貫通力が加算されている。
例えるなら棒を弾丸のように撃ち出すようなモノ。

「がぁっ！」

音が聞こえたと思った瞬間、五和は左肩に強烈な衝撃を感じていた。
その勢いで数メートル後ろに吹き飛ばされる。
そして店の壁に背中を強打して、肺の空気が一気に押し出される。

（な……にが……）

何が起きたか理解できなかった五和は、朦朧とする意識の中考える。
雷のような轟音が聞こえたと思ったら後ろに吹き飛ばされていた。
優菜の雰囲気がガラリと変わった時から、耐衝撃用の術式を組み上げたはずだ。
なのに術式を突き破って、何か強烈な衝撃が襲ってきた。

（あの力……は、何……？　……分からない……）

「やはり『コレ』では威力はほとんど出ませんか。先に棒が悲鳴を上げますね」

「そもそも姉上の技は『ソレ』ではなく専用の武器を使用して初めて威力が出る技であろう」

遠くから聞こえる優菜とアリシアの声に、五和は僅かながら顔を上げて視線を向ける。
今の優菜は手に何も持っておらず、その足元にバラバラになった何

かが落ちていた。
棒が技の衝撃に耐え切れず粉々になったのだろう。
その事を理解した五和はゾッとした。
もしもあの技を本来の力で出されていたのならどうなっていたのか、と。
恐らく肩は引き裂かれ、腕は威力によって引きちぎれて宙を舞っていただろう。
それを大量出血しながら、呆然と眺める自分が想像できた。
「しかし姉上はやる気を出すなと言っておきながら、自分だけズルイぞ」
「戦士としての礼儀ですよ、アリシア。しかし、自分で破ったのは変わりはないですね。ごめんなさい、アリシア」
「礼儀という割に、未完成の技を放つのだな？」
「今日は随分と意地悪ですね。お姉さんは嬉しさで涙が流れそうです」
（アレで……未完成……なの……？）
「たまには姉を弄る妹というのも乙だろう」
優菜とアリシアは、既に五和の方を見ていなかった。
それでいい、そのまま視線を向けないでくれ。
茂みに隠れて猛獣をやり過ごす草食動物のように、五和は息を止め

ながらそう願った。

彼女は既に戦士ではない、獣の牙に怯える子羊であった。

やがて優菜とアリシアが視界から消えると、五和は安堵感からか意識を手放した。

教皇代理　建宮斎字の力

震える足で立ち上がるステイルを、建宮は愉快そうに眺める。
が、すぐに視線をオルソラに向けると、薄っぺらな声で言う。

「何だってこんな所でお前と鉢合わせにゃならんのよ？　何度も説明したが、我々は貴女に危害をくわえるつもりはない。オルソラ＝アクィナス」

建宮の言葉に、オルソラは視線を壊れた店、傷ついたステイル、建宮の持つフランベルジュの順に移す。

「確かに、あなた様のお言葉は希望に満ちていたと存じ上げてございますが、私は武器を振り回しながら訴える平和など信じられないのでございますよ」

「ローマ正教などに戻っても仕方がないだろうによ」

肩の調子を確かめるように、建宮は大剣を握った右手を軽く振り回した。
当麻はオルソラを庇うように、無言でオルソラの前に立つ。
ふと足元にドレスソードが転がっている事に、当麻は気付いたが無視した。
武器を扱う事に慣れていない自分が、武器を振り回しても無駄な体力を消費するだけだ。
ならば持たない方がマシ、当麻はそう判断を下した。
そんな当麻を、建宮は目を細めて見ながら言う。

「武術の構えじゃねぇ、霊装などもなし、魔術的記号などもなし。本当の意味で丸腰……か。ふん、素人とは剣を合わせるつもりもなかったんだが……そうもいかんようじゃねぇの。お前さんの足元に転がっている剣は浦上から奪ったもんか？」

当麻としては知らない間に足元に転がっていた武器である。だが、先ほど相対した少女の武器と似ていたので、漠然とさっきの少女の事だろうと考えた。

「テメェの部下ならむこうで寝てんぞ。ちょっと整髪料臭いが、死んじゃいねぇけどな」

その瞬間、建宮の体が数倍膨らんだかのような感覚に当麻は襲われた。

「ナメてんのかテメェは。死ななきゃ何やっても良いってわけじゃねえのよ」

ふざけたような色が消えた建宮の声を聞いて、当麻は建宮の人間性を理解した。

相手は仲間のために怒れる人間だ。それは誰かのために戦えるような人間という事。

「出来れば俺はテメェみたいな奴とは戦いたくない。テメェはクソったれじゃなくて誰かのために戦えるような人間だ」

「そうしたいのは山々なんだがなぁ、こちらにも事情があんのよ」

フランベルジュを頭上で気軽に振り回しながら建宮は言う。

「俺もよ、テメェみたいな奴とは戦いたくない気持ちがある。だから、今すぐこの場で膝をついて降参してくれねえかなぁ。余計な血を見る必要もねえんだけどよ」

自分の口で提案しておきながら、当麻がどう答えるか予測がついているのだろう。
建宮は残念そうな笑みを浮かべながら言った。

当麻は建宮を『最も厄介な部類』に入る人間だと判断した。
能力でも魔術でも、絶対的な力を持つ者は、その力ゆえに切り札を一つしか用意しない。
それを破られれば次の攻撃はない。
対して、魔術師で言えば土御門、能力者で言えば優菜のように切り札へ過度な自信を持たない者。
そんな連中は、切り札が破られてもそれを補えるように無数の手札を揃えておく。

目の前の男、建宮は明らかに後者のタイプに入る。
魔術が使え尚且つフランベルジュを、まるでチアリーダーのバトンのように振り回す。
インデックスを庇っていたのもあるだろうが、ステイルを撃破した手並みを見ると相手の底の深さが思い知らされる。

まともに相対して勝てる相手ではない。
大人しく降参するべきか？

思わず弱音を吐きそうになった当麻だが、それを頭から追いやって考える。

（俺が一人追加されただけで、どうにかなるとは思わねぇ。けどよ

ぉ……だったらステイルはどうなる？　インデックスはどうなる？）

ステイルは身を屈めたまま、荒い息を吐いて建宮を睨みつけている。
恐らく立つことすら辛いのだろう。だが、それでも彼の瞳に諦めの色は見えなかった。
諦めるわけがない。彼はたった一人の少女を守る為だけに闘ったのだ。

そのインデックスもどうなるか分からない。
もし当麻と建宮が戦闘になれば、彼女は走り出して当麻を止めようとするだろう。
たとえ戦力がなくとも、実力差がはっきりしていたとしても。

（それにオルソラは、どうなる）

当麻はオルソラに視線を向ける。
彼女は当麻と建宮の顔を、不安そうな目で交互に見ていた。
再び視線を建宮に戻した当麻は冷静に考える。

天草式は『法の書』の力を欲している。
ならばオルソラは『今この場』では危害を加えられる事はないだろう。
だが、天草式が『法の書』の力を手に入れた後、一体どうなるかなど分かりきっている。
もしもオルソラが解読法の伝授を拒めば、その先に何が待っているのかも分かりきっている。

――――彼女は『法の書』の力なんて求めていなかったのに。

『原典が一種の魔法陣であるのなら、その魔法陣の仕組みそのもの

を逆手に取る事もできるのでございます。つまり、原典を自爆させる事も可能なはずでございましょう』

――――ただ争いの種となる魔導書をどうにかしたいと願っただけなのに。

『魔道書が危険なのは、あなた様が言ったとおりでございます。ですが、その魔道書の原典がなくなれば？』

――――こんな事態を防ぐために努力してきたのに。

『その通りでございます。魔道書の力なんて、誰も幸せにしないのでございますよ。ですから私は、ああいった魔道書を壊すために、その仕組を調べてみたかったのでございます』

――――そんな死に物狂いの努力を嘲り踏みにじろうとする相手がいる。

――――己の欲望の為に利用しようとする相手が、自分の目の前に笑いながら立っている。

――――ならばこの拳から力を抜く理由がどこにある？

当麻はドレスソードを横へ蹴り飛ばすと、挑むように一歩前へ踏み出す。

かつて自分の父親が土御門と対峙した時のように。

『魔術師』と対等な位置に立つために。

当麻は目を逸らさず、目を背ける事なく、ただ真正面から建宮を睨みつける。

「……なめてんじゃねぇぞ、テメェ」

当麻は硬く握りしめた右の拳に、さらなる力を加えながら思った。
無様だろうが滑稽だろうが、この場で戦えるのは自分だけだ。
ならば真っ直ぐ突き進むのみ。後ろに振り返る必要はない。

当麻を見ていた建宮は、心底残念そうなため息を吐く。

「なんて目ぇしやがるんだ。そんな目で睨まれちまったら悲しくなっちまうじゃねぇの。やるべき事はわかっちゃいるんだが、こういうまっすぐな反応されると思っちまうのよ。もっと別の出会い方はなかったのかとね」

建宮はフランベルジュを軽く揺らしながら言う。

「けどまぁ、やるってんなら仕方がねぇ。今日がお前さんの命日だ」

建宮が言葉を吐き出したとの同時に、凄まじい爆音を当麻は聞いた。
ただ建宮が地面を蹴りつけただけ。
なのにそれは凄まじい爆発のエネルギーを帯びていた。
そんな建宮を見て、当麻は後ろにも横にでもなく前へ一歩を駆け出す。
怪訝そうな顔をする建宮だが、当麻は気にせずわずかに斜め右方向へ突撃する。

「ふっ！！」

吐息と共に、建宮が剣を振り下ろす。

ただ真上から真下へ振り下ろしただけなのに、雷光のように見えた。
それは当麻を真っ二つにしようという必殺の一撃だった。

「っ！」

それを感じた瞬間、当麻はわずかにではなく、全身全霊を込めて真横へ直角に飛んだ。
それまであった慣性の力を全く無視した飛び方なので、足首に重い負荷がかかる。
バランスを崩した当麻は、横手にあった店の裏壁に激突する。

「しっ！」

予め予測していたのか、建宮は驚くことなく当麻へ追撃を行う。
振り下ろした刀をそのまま跳ね上げて、真横へ薙ぎ払う。

建宮の動きを見て、当麻は不敵な笑みを浮かべる。
攻撃が来る前から当麻は身を低くしたまま、地面を舐めるように建宮へと突撃する。

（こっちが横方向に逃げれば、あっちは真横に薙ぎ払って追撃をするってな！）

「おおおおおおおお！！！」

建宮の攻撃を頭上すれすれでやり過ごした当麻は、雄叫びを上げながら建宮に向かって拳を振るう。
対処できるはずはないと見ていた。

だが、建宮の姿は急に消えた。

まるで時間を巻き戻したかのように、建宮は一瞬で一メートルほど後方へ下がっていた。
真横に振るいきった剣は、すでに真上に構えられていた。

「！！！」

心臓が恐怖でわし掴みされたと感じたと同時に、当麻は真横へ転がった。
直後、建宮が真上から一撃を放った。
ギリギリで当麻に回避された攻撃は、そのまま地面へと激突する。
あまりの摩擦のせいか、激突したときにえぐれた土がマグマのようなオレンジ色の光を放っていた。

（まさか……魔術！）

物理法則を無視した攻撃に、当麻は右手に力を込める。
その右手で建宮のフランベルジュに触れようとした。

「違う……だめだよ！　とうま！！」

その瞬間、インデックスの叫び声が当麻の耳に入る。
考えなしに走りだしたインデックスを見て、当麻はギョッとする。

（だめって……まさか魔術じゃない！？）

建宮の挙動、それは全て力技によって繰り出されたもの、その事に気付いた当麻は戦慄する。

「駄目だ、来るな！　インデックス！」

当麻は思わず叫ぶが、インデックスは聞こえていないのか止まらない。

「原初の炎、その意味は光、優しき温もりを守り厳しき裁きを与える剣を！」

建宮の剣が今にも当麻に振り下ろされそうな時、ステイルは大声で叫ぶ。
その瞬間、酸素を吸い込んで炎が爆発する音が辺りに響く。
建宮の意識は当麻から強制的にステイルへと向いた。

「くっ！」

左に大きく跳んで距離をとろうとした当麻だが、それに呼応するかのように建宮がついてきた。
不自然極まりない動作で、ぬるりと地面を滑るような動作であった。

（魔術！）

当麻が建宮の行動に気付いた瞬間、振り返りざまに建宮の横薙ぎが襲いかかってきた。
とっさに身を屈めて避けようとした当麻の脇腹に何かが直撃した。
まるで硬いボールが直撃したかのように、重たい衝撃が脇腹から広がっていく。
当麻が自分の脇腹をよく見ると、氷で作ったサッカーボールのようなものが体にめり込んでいた。
その衝撃で、当麻は強引に地面へ押し倒されて転がる。

「とうま！」

インデックスは叫ぶ。天草式の本領を見て走りながら戦慄する。
だが同時に感心もしてしまう。
天草式の術式には、派手さも強力な攻撃力も特殊さもない。
だがそれを逆手に取る。
天草式の戦術は一言で言えば『偽装』である。
魔術の攻撃かと思えば単なる力技だったり、手品とおもえば魔術を使う。
どのような攻撃が来るか分からない。まるでマジシャンのような攻撃を繰り出す。

走りながらインデックスは考える。天草式に『強制詠唱』は通じない。
天草式は一度に術式を組むのではなく、魔術的に意味のある仕草を無数に重ねて魔術を発動させる。
よってコンマ数秒の間に『強制詠唱』を割り込ませることは不可能だ。
建宮の剣術についていけないインデックスが、術式の発動条件を阻害する事など出来るわけがなかった。

インデックスには当麻の元へ駆け寄っても何も出来ない。
建宮の攻撃を止める術もない。
だけどインデックスの足は止まらない。
後先など何も考えていないかの如く。

「よいのか？　姉上」

建宮と当麻、インデックスとステイルの闘いを遠巻きに見ているアリシア。

本来なら既に助けに行けたはずだが、それを止めた人物がいる。

「構いません。当麻はここで彼と闘うべき定めなのですから」

止めた人物とは優菜。彼女は当麻が建宮と闘うのを当麻の試練と考えたようである。

よって当麻の成長を止めるべきではないと考え、こうして遠巻きに見ているだけにした。

「……そんなに殺気を漂わせて言われても説得力がないぞ」

頭で分かっていても、心が理解するかは別である。

当麻の成長、と頭が考えていても、心では当麻のもとに駆け寄り助けたい。

相反する考えをしていた優菜であった。

結局、腕を組んで目を瞑る事で自分の行動を押さえつけようとするしかなかった。

「やれやれ、よくわからんな。地味子を見逃したかと思えば、兄上には厳しい試練を与える。妾には姉上の考えが良く解らんぞ」

そんな優菜を見て、アリシアはやや呆れ顔で言う。

「まぁいいか。しかし、動くのはまだなのか？」

「彼女たちが動くまで、私たちが行動を起こすわけにはいきません。

事に気付かれたら、彼女を助ける機会を奪われてしまいます」

「そうだな……あくまでヤツらが敵という状態にまで事態が動かないといかんしな」

優菜とアリシアは揃ってある方向を向く。

そしてポツリと言葉を零す。

「……歯がゆいな。敵は分かっているというのに、全く動けないというのは」

「あの時のあの子の波長から、この戦いが終われば動くと思いますよ。それまでは耐え忍ぶしかないのです」

「もしこの場で動かなかったら？」

試すような顔をしてアリシアは優菜に問う。

対して優菜は酷く面白くなさそうな顔をして、アリシアの問いに答える。

「その時は、彼女たちがそう動くように仕組むだけです」

仮初の勝利

ステイルは無防備に飛び出したインデックスを見て、心臓が止まる思いをした。
彼女は戦う力を持っていない。そんな彼女が建宮に立ち向かえば一瞬で殺される。

「ぐっ……！」

手の中には一本の炎剣のみ。
それで攻撃し、建宮が剣で受け止めた瞬間に爆発すれば目眩ましになる。
幸いにもインデックスより先に攻撃できる位置にいる。
その事が分かっていても、ステイルは一瞬だけ迷った。

自分と建宮の間には、当麻が塞ぐように立っている。

インデックスは当麻を助けるために走りだした。
今のままでは、ステイルは当麻の体を貫いてしまう。
苦いものを噛み潰すように、ステイルは顔を歪めた。

だが葛藤は一瞬。

それが終えた頃には、ステイルの瞳は決意の光を宿していた。

（ずっと昔に、誓ったはずだ……）

乱れた呼吸を、ステイルは必死に整えようとする。

（僕は彼女に誓ったはずだ。『安心して眠ると良い、たとえ君が全てを忘れてしまうとしても、僕は何一つ忘れずに君の為に生きて死ぬ』と！）

当麻の背中を見据えてステイルは炎剣を構える。

（ならば何も恐れる必要などない。彼女のために生きて死ねるなら本望だろう！　ステイル＝マグヌス！！）

一番大切なものを守るため、ステイルは全ての覚悟を決めた。

意識が朦朧とする当麻の瞳に、フランベルジュを振り上げる建宮の姿が写った。

今の状況をどうにか飲み込もうとする。

状況は最悪。当麻の足は震え、建宮が放つ攻撃を避けるのは不可能だ。

インデックスは既に走りだしており、あと少しで建宮と激突する。

そうなれば彼女が瞬殺されるのは眼に見えている。

後ろをチラリと見る。

そこには炎剣を構えたステイルがいたが、それを使う雰囲気が感じられない。

一秒も満たいない時間の中で、当麻は頭をフル回転させて考える。

ステイルが炎剣を使えないのは自分が建宮の壁となっているからだ。

この状況で誰一人欠けることなく。
何一つ失うものはなく。
皆で笑って帰るには。

一体どうすればよいのか。

その答えを当麻はすぐに出した。

「……やれ」

当麻は右手を握り締めるとステイルに向かって言う。

「俺ごとやれ、ステイル！」

そう叫んだ当麻は、残った力を全て振り絞って建宮へ突撃した。

建宮は当麻の一言に混乱した。
背後から迫るインデックスなど建宮にとっては簡単に両断出来る。
当麻がそれを止めようと飛び込んできたが、当麻を叩き斬ってからでも十分時間は残されている。
建宮にとって、当麻もインデックスも倒す時間は十分確保できる対象であった。

だが、問題は当麻の後ろ。

ステイルが、炎剣を腰だめに構えたままかけ出してきた。

どう考えても、目の前の少年の体を貫通してしまう。

なのに瞳に迷いの色はない。刃のような鋭い瞳で、敵を倒す事のみを計算している。

建宮は現状をそう理解すると、フランベルジュで炎剣を防ごうとした。

しかしそれを当麻が許さない。

当麻は建宮の前で右腕を後ろへ振り回し、ハンマーのような拳を放とうとする。

「チッ！」

当麻の攻撃を対応してからでは、炎剣の一撃に防御が間に合わない。

拳は耐衝撃術式があるから問題はないが、炎剣の対応を誤れば死の危険がある。

（素人の拳は問題ないのよ、だから炎剣を優先して対応。あの剣は爆破のための武器だから、早急に術式を組み上げる！）

建宮は振り上げたフランベルジュを水平に構え直す。

それだけで『炎を鎮める』術式を即興で作り上げていく。

フランベルジュの名前『炎のような形の剣』から炎属性という記号を。

水平という構えから『鎮める』という記号を。

それぞれを組み合わせて作り上げた。

（よし、もらった、組み上げ完了！　思い切り反撃してやろうじゃねえのよ！）

建宮はステイルをじっと見る。彼の瞳には既に当麻は写っていない。
炎剣で貫かれる存在など、どうでも良いと考えていたのだろう。
そう思っていたから、建宮は当麻がどういった体勢か気付いていなかった。

当麻の背中にステイルが激突する。
炎剣が当麻の体を貫通して、建宮目がけて襲いかかる。

（勝った！）

建宮は炎剣の爆破を、耐火の術式を使って逆に利用しようとした。
そうすれば全員が炎によって吹き飛ばされると。
そう思っていた建宮だが、予想に反して何も起こらなかった。

起きたのは風船が割れるような音と共に、炎剣が火の粉になって消滅しただけ。

「な……？　に、が……」

建宮が考えていたのは耐火術式の防御から反撃のタイミングのみ。
それしか考えていなかった建宮は、炎剣が突如消えた事に頭が混乱する。
そして更に建宮を混乱させる現象が起きた。

「が、ば……！」

当麻の拳が勢い良く建宮の顔面に突き刺さった。

建宮の体が大きく後ろへ仰け反る。

（な、に……耐衝撃用術式が、貫かれた……？）

崩しかけたバランスを取り戻そうとしたが、ソレより一瞬早く当麻とステイルが体当たりを仕掛けてきた。

二人分の重圧を受けた建宮は、真横へ吹き飛ばされ凄まじい勢いで地面へ叩きつけられる。

そこで建宮の意識は途切れる。

武器として使っていたフランベルジュが地面を滑っていった。

「……終わったな、まさかあんな方法で倒すとは」

「危険すぎですね。とはいえ、当麻ですから」

「心臓に悪い兄上だ」

そう言いながらもアリシアと優菜は笑みを浮かべていた。

「ローマ正教側も終わったようだな。全く、たかだか二十人程度を倒すのにこれだけ時間を弄するとはな」

アリシアは遠くを見ながらポツリと呟く。

ピリピリと張り詰めた気配がなくなった所から、アリシアは何となくそう理解していた。

優菜もまた同じなのか、アリシアの言葉に同意するかのように頷く。

「仮初の勝利を演じましょう、アリシア」

「しかし姉上は大丈夫か？　妾はとても心配だぞ」

「……何がですか？」

「だってそうだろう？」

アリシアはいつものように腕を組んでいたが、その顔には笑みを浮かべていなかった。

ただ優菜を心配するかのような瞳で、じっと優菜を見上げていた。

「姉上の友人であるオルソラが、謂れなき暴力に晒されてからでないと妾たちは動けないのだから」

アリシアの言語に優菜は少し俯くだけで答えを返そうとしなかった。

そんな優菜を見て、アリシアは少しだけため息を吐いた。

（優しすぎる姉上にとって、自分が傷つくより友人が傷つけられる事の方が何倍も堪えるからな）

アリシアは視線を、優菜からローマ正教がいるであろう方向へと移す。

（我慢の時間が早く終わってほしい。妾もこんな姉上を見ているのは辛い）

建宮という司令塔を失った事で、天草式の統率が一気に崩れた。
遠くから聞こえた物音がピタリと止み、ピリピリと張り詰めた気配もなくなっていた。
何となくだが当麻は、ローマ正教が勝利したと理解する。
だが、すぐに激突したローマ正教や天草式の人たちの安否を気にしはじめた当麻。

「双方ともに死者はなし、現在ローマ正教が天草式の人間を連行している」

それに答えるかのようにステイルが確定的に断言する。
煙草の火を操って交信しているようだが、当麻が見てもサッパリだった。
そしてステイルは当麻を無視して、オルソラを連れてアニェーゼたちの元へと行ってしまった。

建宮は少し離れた所に座らされていて、全身のあちこちにルーンのカードが貼りつけてあった。
ステイル曰く『姿勢が崩れると、即座に体が火ダルマになる』という凶悪な術式との事。

少ししてとある方向から優菜とアリシアが姿を現した。

「無事ですか？」

「……ああ、何とかな」

優菜の問いに当麻は少しだけ迷ってから答えた。

「なーにが、『ああ、何とかな』だ、兄上。さっき脇腹をやられていたであろう」

アリシアが優菜の背後から現れる。

じとーと半眼で当麻を睨むアリシアに臆して、当麻は何も言わず自分の体を確かめてみる。

「……うん。脇腹はちょっと痛むな。ってなんで知ってるんだ？」

「兄上の勇姿、見させてもらったぞ。とはいえ、無謀にも近い行動だったがな」

「とうまは無謀過ぎるんだよ。本当に脇腹だけ？　どこか他に痛むところとかは！？」

さっきまで真っ青な顔をしていたインデックスが、突然涙目で叫びながら当麻に絡む。

「やめんかインデックス！　ぶはっ！　テメェどこに手ぇかけようとしてんだ！」

インデックスに服を脱がされかけた当麻は、慌ててインデックスを引き剥がそうとする。

それでもインデックスは涙目で、当麻の体を確かめようとした。

そこで当麻は気付く。インデックスにとても心配をかけたのだという事に。

「本当に？　本当に大丈夫？」

「ああ……大丈夫だ」

「そっか……良かったぁ……」

そう言ってインデックスは当麻の脇腹を優しく撫でる。
ちょっとくすぐったい感じがしたが、当麻はあえてインデックスの行為を止めなかった。

「心配……したんだよ……」

「悪い」

「とうまのばか、向こう見ず。本物の魔術師相手にゲンコツ一つで立ち向かうなんて尋常じゃないよね」

インデックスは口の中で呟くと、当麻の脇腹を撫でることを止めた。
その顔が少しだけ赤みがかっているのは、今ごろになって恥ずかしさが湧き出た為であろうか。

「それについては禁書目録殿に同意だな。兄上は気付いていたのか？　あの鍬形頭が術式を組むのに時間がかかっていた事を」

「クワガタ頭って……え？　そうなの？」

アリシアの問いに、当麻はハテナマークを浮かべながら首を傾げる。
その顔で何も考えていない事を理解したアリシアは、盛大に溜息を吐きながら言った。

「無謀だな、兄上。術式準備の時間を読み間違えていたなら、兄上は今ごろ真っ二つだったぞ？」

「え、えぇぇ！？」

「……心配をかけた兄上にはお仕置きが必要だ、なっ！？」

その瞬間、カプリと可愛らしい音が辺りに響き渡る。

一瞬何が起きたか分からなかった当麻だが、ふと自分の手を見て理解する。

当麻の左指は、半分以上がアリシアの口の中に入っているという事に。

「う、うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「うふふぇなあにふへめ！　しゅふぉひははんはへてふほへ！（うつけな兄上め！　少しは考えて動け！）」

まるで猛獣のようにアリシアは当麻の指を噛み続ける。

「ちょっと待てアリシア！　それが女の子の取る行動ですかぁ！？ぎゃあああああああ！？」

「はへふへふぉしんふぁいしゃしぇたヴぁふふぁ！（姉上を心配させた罰だ！）」

「お前が新しい傷を作ってどうするんだ、やめ――――――――アリシアさあああああああああああああああん！？」

ミシミシと嫌な音と共に痛みを感じていた当麻だが、もう一つの感

覚を当麻は指から感じていた。
ぬらりとした何かが指を這う感覚。

（な、なんだぁ！　このくすぐったい攻撃はぁ！　一体何が……）

そこで当麻は気付く。一体自分の指はどこに入っているのか。
勿論、アリシアの口の中である。そして口の中で動くものと言えば……。

（ひぃ！　舌ぁ！？　ちょ、なんですかぁこの緩急をつけた攻撃は！）

アリシアの様子から自覚してやっているのではない。
恐らく無意識のうちにやっているのであろう。

早く終わってほしい。
そう思いながら、痛みと共に何とも言いがたい感触を暫く味わった当麻であった。

本当の敵

アリシアの攻撃から解放された当麻は、痛みに耐えながら夜空を見上げる。

「……静かだなぁ」

剣や槍を振り回したり誰かが怒号を上げたり何かが壊れる騒音は全く聞こえない。

その静寂を心地良く感じながら、当麻は耳をすます。

「おい」

だが、それを許さないかのように、妙に焦った音色を秘めた建宮の声が、当麻の耳に届いた。

当麻がそちらを見る前に、インデックスが両手を広げて当麻の盾になるように立ち塞がる。

「くそ。お前さんよ、悪いがこいつを解いてくれんかな？　無理を言ってんのは分かってんのよ。けどな、このまま彼女を放っておけるはずもないんでな」

「馬鹿、何言ってるんだお前？　一番やばい人間をみすみす放すはずが……」

「お前さん、まさか本当にローマ正教へ彼女を引き渡す気か？　その後彼女がどういう扱いを受けるか分かってやがんだろうな」

「……どういう意味だ？」

「お前さんは馬鹿って事だよ」

建宮の言葉に当麻の声が詰まる。

「駄目だよ、とうま。この人は今、言葉を武器にして戦ってるだけなの。だから耳を貸しちゃ駄目」

インデックスの冷静な声が聞こえた。

当麻は優菜とアリシアの方を見る。その顔に驚きの色は一切なかった。

むしろ『建宮の言葉を予め予測してた』と見えるほど、その顔は普段と代わりがなかった。

「殺されんのよ、彼女はな」

悩む当麻に追い打ちをかけるかのように建宮は更に言う。

「いいか、先に結論だけを伝えとくのよ。彼女をローマ正教に引き渡すな。ローマ正教の本当の目的は、彼女を殺す事なのよな」

「自分はオルソラの味方だから、拘束を解いて逃がせってか？　お前らは『法の書』を盗みオルソラを拉致した。これだけの戦闘を起こしたのだって、結局は力が欲しかっただけだろう！？　今更都合の良い話をするんじゃねぇ！　ふざけんのも大概にしろ！！」

怒りのあまり、当麻は喉を痛めつけるほどの大声で叫んでいた。

しかし建宮は当麻の怒りなど気にせず、冷静な声で言う。

「我らは『法の書』など盗んじゃいねえのよ」

「は？」

「大体、考えてみるといいのよ。ローマ正教は世界最大の十字教宗派で、その数合わせて二十億人強。そんな所にわざわざケンカを売ってまで手に入れたいものか？　たかが『法の書』が」

建宮の言葉に更に混乱する当麻。

だがインデックスは身を固くしてきっぱりと言い切る。

「真面目に受け答えしちゃ駄目、とうま」

建宮を睨みながら、インデックスは更に言う。

「天草式は女教皇を失って弱体している。だからあなた達は足りない力を『法の書』に書かれた未知の大魔術で補おうとした、違う？」

インデックスの問いに建宮は心底つまらなさそうにため息を吐く。

「逆に問うのよ」

建宮はしっかりとインデックスの眼を見て語る。

「だから、そもそもどうして力を手に入れる必要があんのよ？」

その問いに当麻とインデックスはハテナマークを浮かべる。

建宮の言葉の意味が分からない。そんな事を考えていると建宮は理解した。

「どうにも、お前さんらじゃ駄目なのよ。なぁ、後ろのお嬢さん方。

アンタたちなら分かるだろう？」

当麻とインデックスでは拉致があかない。

そう考えた建宮は、後ろにずっと控えていた優菜とアリシアに声をかける。

「どういう意味じゃ？　妾とてお前さんをむざむざ開放する気などないぞ？」

「なら、何でお前さんらはそこまで冷静なのよ」

アリシアが冗談めいていうが、建宮はそれを無視してアリシアに問う。

「さっきから見ていたが、俺が何を言ってもお前さんらは驚きもしなかった。まるで『そんな事は分かっている』と言いたげなのよ？」

建宮の言葉を聞いて、アリシアがゆっくりとだが笑みを浮かべる。

「さすが天草式の教皇代理。人の見る目はあるのじゃな」

そう言うと、アリシアは心底楽しそうな顔をして笑う。

だが、アリシアの言動は当麻とインデックスを更に困惑させるだけであった。

「兄上、禁書目録殿。結論から言えば『法の書』は盗まれていない。そもそも日本にすらないだろうな」

確定的に断言するかのようにアリシアは言う。

「どうしてそう思えるの？」

「考えて見ろ、禁書目録殿。『法の書』の原典ともなれば、それだけで莫大な魔力を秘めている。そんなモノを何の霊装もなしに運搬出来ると思うか？」

「……あ」

アリシアの言葉でインデックスは初めて気付く。

魔導書の原典が、どうして持ち出したりする事が出来ないのか。

建宮を敵としてみていたから、インデックスはそこまで頭がまわっていなかった。

「けどよ、力が無かったら他の勢力に負けちまうじゃないのか？」

なおも納得がいかない当麻は、アリシアの言葉に疑問を挟む。

力がなければ他勢力に負けるから、莫大な力を求める。

そう思っている当麻だが、アリシアは少しだけ小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「兄上、少しは考えろ。天草式の本拠地を知っているのは『誰』だ？」

「誰って……」

そこで当麻はインデックスのある言葉を思い出す。

『天草式の本拠地は知られてないし、更に謎なのは『渦』は二十三ヶ所しか見つかってないんだよ』

天草式の本拠地は誰も知らない。
ならば、わからないのにどうやって他勢力が攻めて来る。
答えは簡単だ。本拠地がわからなければ攻められる心配はない。
アリシアの言葉に不意を突かれた感覚に当麻は襲われた。

「そこのお嬢ちゃんの言うとおりなのよ。我らの身内以外に誰も場所の分からん本拠地を、一体誰が攻められんのよ？」

アリシアの言葉にかぶせるように、建宮は更に当麻に問う。

「天草式は昔からずっと迫害され続けてきた。ならば何の対策も練ってないと思えないな」

「話が分かって楽だぜ、お嬢ちゃん」

建宮は頬に汗を流しながら言う。
だがその表情は、迫る時間制限に焦っているようにも見えた。
当麻は更に思い出す。

天草式の本拠地が分からないから、そこに逃げこまれたら終わりだ。
二度とオルソラを助けだす事が出来なくなる。
だからこそ、特殊移動法が発動する前に決着をつける。
それが今回の戦闘の目的だった。

「お前さんよ、一つ確認するが『法の書』ってのがどんなモノか知っているのか？」

「『法の書』はエドワード＝アレクサンダー、またの名をクロウリー。本人が言うには『汝が欲する所を為せ、それが汝の法とならん』というのが『法の書』の一番重要な所らしいけど、何の事かは誰に

もわからないの」

建宮の問いにインデックスはすらすらと答える。

「『法の書』は謎の存在エイワスによって伝授された内容を記したもので、一説には天使が使用する術式がそのまま使えるとも評されているんだよ。その威力は絶大で、『法の書』のページが開かれた瞬間に十字教の時代は終わりを告げると言われている」

「ホルスの刧……か」

インデックスの言葉にアリシアがポツリと呟く。

だがその声に被せるかのように、建宮が声を発する。

そのため、アリシアの言葉は誰にも聞き取られる事はなかった。

「そこよな」

建宮は意味ありげな笑みを浮かべながら言う。

「ローマ正教、十字教最大宗派であり、世界のトップ、二十億人もの信徒を抱える」

その言葉でインデックスは気付いたのか、にが虫を噛み潰したような顔をする。

それを見て建宮は静かに笑った。

「そんな所が『十字教の時代の終わり』なんて望んでいるとは思わんよなぁ？」

その言葉で当麻は気付かされた。

今の時代のバランスで満足している人間が、変化なんて望むはずがない。
特にこの時代のトップの座に君臨している者ならなおさらだ。
いつの時代も変化を求める人間は、自分の立場を変えたい人間のはずだ。

「ローマ正教にとって必要なのは世界を制圧する武器であって、世界を粉々にするほどの兵器じゃなかったって訳だ」

当麻もインデックスも黙り込んだ。建宮の言葉に反論する事が出来ない。
夜の暗さが、一気に何倍にも濃くなったような錯覚が二人を襲った。

「従って『十字教の終わり』を象徴する『法の書』の力を引き出せる彼女を秘密裏に消す事にした。だが彼女もそれに気付いてたのよ、だからローマ正教の息のかかっていない場所……つまりは日本だ」

「日本で十字教の人間は僅か一割とかいうレベルだからな。ローマ正教だけで、ではない。全部の十字教をあわせてだからな」

建宮の言葉にアリシアが付け足す。
軽く頷いた建宮は更に語る。

「その通りなのよ。しかし皮肉にもオルソラの逃亡と『法の書』の運搬が重なったようなのよ。それすらも、ローマ正教側が仕組んだ事なのかもしれないが……」

「なるほど……二つをセットにしたのも『ローマ正教からオルソラが逃亡するために亡命した』と思わせないためにか」

善と悪、攻と守、強奪と救出。
全てが裏返る瞬間を、当麻は見た。

「で、これでもまだローマ正教が正しいと断言できるか？　ヤツらの手にオルソラを帰しても大丈夫だと、絶対に断言出来るか？」

建宮の問いに当麻は答えを返すことが出来なかった。
そんな当麻を見て、建宮は怒号で更に言う。

「断言出来ないなら、自分の疑念に立ち向かえ！　冷静になれば誰でも分かるだろうよ、どちらが本当の敵なのかぐらい！」

当麻は冷静に一つ一つを検証していく。
頭の中の情報を丁寧に整理していくと、ひとつだけ疑問に思える事があった。

「お前に聞きたい、どうしてオルソラはお前たちから逃げたんだ？」

それはオルソラの逃亡。本当に天草式が味方ならオルソラは逃げる理由がない。
なのに彼女は天草式からも逃げ、学園都市に逃げこもうと考えていた。
つまりは両陣営から逃げようと考えていた。当麻にはそこが疑問だった。

「同じよな」

建宮は静かに笑った。

「今のお前さんと同じなのよ。オルソラは確かに同じ十字教である我らに助けを求めてきた」

それは人生に疲れたような、とても弱々しい笑みだった。

「だけどな、結局彼女は最後の最後で我らを信じる事ができんかったのよ。きっと我らはこう思われたのだろうよ」

寂しそうな音色を混ぜながら建宮は言った。

「世界最大宗派であるローマ正教を敵に回してまで自分を彼らが助ける理由はない。おそらく、彼らは見返りに『法の書』の解読方法を求めてくる」

建宮の言葉に当麻は黙り込んだ。

最後の最後で信じてもらえなかった。

それは建宮にとってどれほど辛い事なのだろうか。

想像すら出来ない当麻だが、それでも考えてしまったのだ。

建宮の心の辛さを。

「まったく、お門違いも良い所なの。何で我らが『法の書』など求めにゃならんのよ」

どこか遠くを見つめるような視線で建宮は言う。

彼の顔に嘘偽りはない。本当に純粋な気持ちでオルソラを助けよう

と考えていた。

「じゃあ、何のためにオルソラを助けようとしたんだよ」

建宮の顔を見た当麻は、慎重に問いかける。

「理由なんてねえのよ」

対して建宮は秒も置かず即答した。

まるでそれが当然の答えと言いたげに。

「そんなもんハナっからねえのよ。我らは、ずっと昔からそうやってきた」

少しだけ思案顔をした建宮は、やがて顔を上げて言葉を発する。

「理由を強いてあげるなら一つなのよな」

「……」

真剣な瞳で見る当麻など見えていないのか、建宮は遠くを見ながら言う。

「救われぬ者に救いの手を」

「それは……！」

建宮が口にした言葉は神裂の魔法名。

驚きの顔を浮かべる当麻とインデックスを無視して建宮は言葉を続ける。

「誰一人味方がいなくても、例え神様が見捨てようとしても、我らは決して見捨てず救いの手を差し伸べる。それが天草式十字凄教の行動理念なのよな」

沈黙が場を支配する。

しかし、静寂を破るかのように建宮は当麻を見つめながら言った。

「お前さんは人を助けるのに『理由』を求めるような人間なのか？　誰かを助けたいという気持ちすら助ける『理由』と思ってしまうようなヤツなのか？　なら、俺の見る目がなかったって事なのよな」

「……」

「お前さんがオルソラを守ろうと俺と戦ったのは『助けたい』という気持ちからだろう？　違うのか？」

「違わねぇ」

今度は当麻が建宮の言葉に秒も置かず即答した。

答えは最初から分かっていたのか、建宮は静かに笑った。

「ならよ……」

次の言葉を語ろうとした建宮の声を遮るかのように、どこか遠くで悲鳴が炸裂した。

ローマ正教のやり方

その悲鳴は、悲鳴という生ぬるいものではなかった。
絶叫、咆哮、号叫。そしてその声は女の叫び声だった。
本当に人間が出したものなのか、当麻には自信が持てなかった。
まるで人間にあるまじき絶音の中から、人間的すぎる感情が染み出したかのようだった。

「お、る……そら？」

「お前さん、彼女をローマ正教に預けるだなんて言ったのか？　彼女はローマ正教じゃなくてお前さんを信用してたんじゃねえのよな？」

建宮の言葉に、当麻は思い出す。
オルソラと隠れていた時のやりとりを。

『確認させてもらいますけど、あなた様はイギリス清教からの協力要請があって手伝う事になったのでございましょうか？』

――――何故、オルソラはそんなこ事を恐る恐る尋ねてきたのだろうか。

『友達が危険に晒されているんだ。助けにいくのは当然だろ？』

――――どうして何気ない言葉に、オルソラは心底安心したような顔をしたのだろう。

『あ、悪い。俺みたいな学園都市の住人が友達とか嫌かな？』

――――特に深く考えずに答えた言葉にどうしてあれほど否定の意思を見せたのか。

オルソラは最後の最後まで信じていた。

当麻は、ずっと身を預けていても大丈夫な人間だと。

そんなオルソラの期待を裏切ってしまった。

「くそ！」

当麻は奥歯を噛み締めた。悲鳴が聞こえた方向へ勢い良く振り返る。

（危険を侵してでも学園都市に入れていれば……こんなことには！）

「ふざけんじゃねぇ！　こんな結末なんて認められるかよ！」

「慌てるな、今のは別に彼女が死んだって訳じゃねえのよ。ローマ正教にはある事情があるから今この場で彼女を殺す事はできねえってもんよ。これだけは確実な話だ」

「何？」

建宮の言葉に当麻は疑問を浮かべる。

だが、その疑問を考える時間すら建宮は許さなかった。

「急げばまだ助かるって意味よ。逆にここで手を誤れば次は怪しい。だから約束しろ、必ずオルソラをローマ正教から取り戻して、ヤツラの手に届かん所まで連れて行くと！」

「……」

「この際、我らを信用しなくたっていい！　我らを利用したいなら存分に利用しろ！　それよりもオルソラの安全を確保する方が重要だからな！！」

当麻がたじろいでしまうほどに、建宮の目は真剣だった。

その時、不意にカツンという足音が聞こえた。

視線を建宮から音の方に当麻は向ける。

そこには暗闇を割って出てくるように、二人の黒いシスターがやってきた。

ローマ正教のシスターたちである。

背の高いシスターと背の低いシスターで、見事にアンバランスな二人だと当麻は思った。

片方の背の高いシスターは丸テーブルのような車輪を担いでいる。

背の低いシスターは腰にまいたベルトに革の袋を四つほどぶら下げている。

じっと観察していると、背の高いシスターが袂から革張りの古い手帳を取り出した。

ページをめくり、何かを確認するように頷いてから当麻の方へ来た。

（ん？　アリシアの姿が見えない）

ふと周りに視線を向けると、アリシアの姿が見えなかった。

恐らく外部協力者として登録されていない彼女が、この場にいるとややこしくなる。

そう考えて姿を消したのだろう、当麻はそう考えていた。

「外部協力者の御方ですね。貴方たちが捕らえた異端の首謀者の身柄を預かりに参上いたしました。神の敵は……そちらですか？」

背の高いシスターの声と同時に、背の低いシスターが建宮の方へと近づいていく。

だが、建宮に貼られているルーンのカードに気付いたのか、彼の周囲をぐるぐると回って観察していた。

「なぁ、ちょっと頼みがあるんだけどよ」

「何か？」

「アンタ達が引き上げる前に、もう一回オルソラの顔をみたいんだけど構わねぇか？」

「残念ですが、ご辞退願います。シスター・オルソラの身柄は無事に確保できたとはいえ、安全とは言い難いのが現状です。我々は規則に従い人員の安全を再優先させていただきます」

完璧な答えであった。だからこそ逆に当麻は疑問に思った。

建宮が捕まっている今、何故そこまでオルソラに会わせようとしないのか。

「いや、駄目だ。納得できない。大体、さっきの悲鳴は何だったんだ？　ありゃオルソラの声じゃないのか。あいつの身柄は保護できたって、あれが保護された人間の出すものか？　とにかく会わせてくれ」

「しかし、規則では……」

「あーもう！　規則規則うるせぇよ！　アニェーゼはあっちにいるのか？　もうアイツに直接聞いてきてやる！」

そう言って当麻は背の高いシスターの肩を掴んで横にどける。
背の高いシスターは肩の力を抜くと、背に預けている巨大な車輪を自分の手前に盾のように置いた。
それを見て、インデックスの顔が急激に緊張を帯びていった。

「駄目だよ、とうま！！！」

インデックスが叫び終える前に、木製の車輪が勢いよく爆発した。
その音を聞いてインデックスが短い悲鳴をあげる。

しかし、その爆発は当麻に当たることはなかった。

ほんのまたたきの間に当麻は数メートル真横に移動していた。
強引に誰かが引きずったかのように。

「……あ？」

一瞬、当麻には何が起きたかわからなかった。
散弾銃のように、数百という鋭い破片が当麻の方に恐ろしい速度で襲いかかってきた。
そう理解したと同時に、真横から恐ろしい勢いで何かに引っ張られた。

「あ？　ゆ、優菜？」

当麻を引っ張った人物は優菜であった。

そのため、当麻は無傷であったが優菜は破片を食らったのかあちこち血が滲み出ていた。

「大丈夫ですか？　当麻」

まるで自分の怪我などたいしたことない、そう言いたげなほど優菜は優しい音色で当麻に言った。

「し、シスター・ルチア。あの、えと、よ、よろしいんですかぁ、これって？　確か……ゲストとの不用意な接触は避けるようにってシスター・アニェーゼが……」

背の低いシスターがややオロオロした様子で背の高いシスターを見ていた。

「黙りなさい、シスター・アンジェレネ。だから異教の徒などは我らの懐などへもぐらせずに、もっと早く追い払っておくべきだったのに」

背の高いシスター、ルチアは背の低いシスター、アンジェレネを睨んで黙らせる。
そして気持ちを落ち着けるかのように、口の中で何かブツブツと呟き始める。

「悲鳴などいちいち変に勘ぐったりしなければこちらの仕事も増えずに済むのに……」

ルチアの眼の色が変わっている。
その瞳はどろどろに溶けたバターのような熱に浮かされた目であった。

「そこの天草式が抵抗し、貴方たちを殺めたことにしましょうか。ああ、それが一番楽みたいです。その後に私たちが天草式の口を封じれば問題にはならないでしょう」

まるで舞台劇の壊れたシナリオをアドリブで修正していこうとする様子。

その様子に、当麻は返事もできない。

「っ！」

不意に優菜が激痛に顔を歪める。

よく見ると皮膚に刺さった木片が、不意にぐちゃりとひとりでに上下した。

まるで大木に刺さった斧を引き抜くように、次々と木片が取り出されていく。

そして血のついた木片は、磁石で集められるようにルチアの手元へ帰っていく。

「ゆうな！」

インデックスが叫び、二人のもとへと駆け寄ろうとした。

「シスタ・アンジェレネ」

ルチアはインデックスを横目で見て、アネジェレネに声をかける。

「は、はぁい」

ルチアの声にアネジェレネは舌っ足らずに答えると、腰にぶら下げ

ている四つの硬化袋を頭上へ投げる。
途端、大きな布で空気を叩くかのような音とも、袋の口からそれぞれツバメのように鋭い翼が六枚ずつ飛び出した。

「きたれ。十二使徒のひとつ、徴税吏にして魔術師を打ち滅ぼす卑賤なるしもべよ」

アネジェレネが夜空を迎え入れるように両手を頭上へ差し出した瞬間。
弾丸のような速度で、緑の翼を持つ硬貨袋がインデックスの体をかすめ、その足元の地面へ勢い良く突き刺さった。

「この……っ？」

インデックスが慌てて飛び退こうとして、その体ががくんと落ちた。
足元をよく見ると、地面に突き刺さった硬貨袋の口紐がほどけており、それがインデックスを地面へと縛り付けていた。

（ま、ずい！　あんなモンがぶち当たったら！）

硬貨袋は残り三つ。あんなものをインデックスの腕で防げるとは思えない。
理解が追いついた当麻だが、その前にルチアが車輪を構えて立っていた。

「貴方は貴方の心配をなさい。少しでも痛みなく逝ける心配を」

まるで銃口のように固定された車輪を見て、当麻の喉が戦慄に干上がる。
肩で息をしている優菜をかばいながら、右手で車輪を殴るのと、こ

の車輪が木っ端微塵に爆破されるのでは、明らかに当麻の分が悪い。

「同胞であり死すべき愚者でもあるシスタ・オルソラなら『手続き』を踏む必要がありますが、異教徒の貴方たちを殺すのには何の迷いも必要ないのです」

「チッ！」

当麻の目の前で、ぴしりと車輪に亀裂が入る。

ゆっくりと速度を落とす時間の中で、中心軸を頂点に、ピザのように六等分された車輪が内側から膨らむのを当麻はみた。

「死になさい、異教徒」

「がああああああああああああ」

ルチアがの声に当麻は右手の拳を握って吼える。

だが圧倒的に遅い、とてもではないが間に合わない。

当麻が拳を突き出す前に、ルチアのかざす巨大な車輪が甲高い音を立てた。

ガゴンと大きな音がしたかと思うと、ルチアの姿が当麻の視界から消えた。

「……は？」

目を凝らすとルチアは馬鹿みたいな音を立てて五、六メートル後ろまで吹き飛ばされていた。

ゴトリとルチアが持っていた車輪が目の前に落ちる。

その事に、目の前にいた当麻は勿論、インデックスもアネジェレネ

も建宮も理解できなかった。

そして当麻の目の前で、不思議な現象が起こり始める。
優菜の血が染みこんでおり、所々赤く染まっている車輪。
その車輪についている血がひとりでに動き始めた。

「な、なんだこれ……？」

その血は車輪から地面へ、まるで生き物のようにある場所に移動する。
本来あるべき場所へ、血の持ち主である優菜の元へ。

「……」

無言で立つ優菜の足元に血が次々と集まっていく。
量にすれば少量。だから当麻以外には見えていない。
故にその光景を見ているのは、当麻だけとなった。

まるで吸い込まれていくかのように、血は次々と優菜の足の裏へと消えていく。
全てが集まると、優菜はそっと歩き出して車輪を手に取る。

さっきまで優菜が立っていた場所に、血の跡は一切残っていなかった。

（な……あ？　な、なんだこれ……）

目の前の光景が理解できず、当麻は呆然と優菜を見上げる。
少しうつむいており、その顔がどのような表情をしているかがわからない。

「……」

優菜は無造作に車輪をアンジェレネ目がけて放り投げる。
突然の事に固まっていた彼女は、車輪を避ける事など出来なかった。
車輪とともに、アンジェレネは面白いように転がっていった。

「……学園都市の規則では外での能力使用は禁止でした。ですから、今まで極力使用を控えていましたが……」

当麻の目の前で、優菜の傷がみるみる消えていく。
『天上霊薬』、優菜が持つ学園都市レベル５　第六位の力。
夜のため、周りは優菜に何が起きているかがわからないが、確かに彼女は能力を使った。

そこで当麻は理解する。
以前だが、優菜の力には肉体強化の使い道が出来るという事を聞いた。
ならば力を使ってルチアを無造作に殴った。
ただし、その動きが人に『見えない』レベルで行われたが。

「ローマ正教の本質はやはり変わりませんか。あの人だけが特別だったのですね……」

つまらなさそうに呟く優菜。
その声に呼応するかのように、ルチアが気を取り戻す。

「い、一体……何が……」

痛む体に耐えつつ、ルチアは自分に起きた事を考える。

だが、無様に這いつくばっている事以外、理解する事はできなかった。

その時、遠くから甲高い笛のような音が聞こえてきた。
鳥の悲鳴のような音色に、ルチアは忌々しげに黒い夜空を見上げる。

「撤退命令ですか。シスター・アンジェレネ！」

車輪と一緒に倒れているアンジェレネに向かって叫ぶルチア。
ルチアがきすびを帰して暗闇の向こうへと消えていくと、アンジェレネは慌ててその後を追った。

「これで、分かったろうよ」

今までの状況を眺めていた建宮が、夜空を見上げながら苦虫を噛み潰したような声で言った。

「あれが、ローマ正教の裏のやり方よ」

進むべき道は一つ

「なるほど……そういう事か……」

ステイルは少しだけ考えるような素振りをした後いった。

「道理でアニェーゼ＝サンクティスを見た途端に彼女が茫然自失としていた訳だ」

あれから当麻はアニェーゼの元へと走ったが、彼女たちはすでに撤退した後でそこには誰もいなかった。

建宮を追撃してくる刺客も現れない。

もはや天草式は壊滅したものと見なされているのかもしれない。

「その男の言っている事が事実なら、オルソラ＝アクィナスはすぐに殺されないだろうね。だから上条当麻、今この瞬間にどこかに駆け出そうとするのはやめろ。君が出張ると余計にややこしくなる」

釘を刺された当麻は口を尖らせて言った。

「何でだよ、どうして俺が出張るとややこしくなるんだよ」

「忘れたのか？　君をここに連れてくるのにどういう手順を踏んだか」

その言葉で当麻はハッとなる。

さっき合流したアリシアは別だが、当麻も優菜も学園都市の人間と相手は分かっている。

だからこそ、『魔術』の事情に『科学』が絡むと危険。

ステイルはそう言いたいのだ。

ルーンの罠から解放された建宮は、肩の調子を確かめながら当麻に言う。

「ローマ正教もあれだけでかい勢力だと、様々な派閥があるってなもんよ。だから外部より内部の方に大きな敵を抱えているのよ」

建宮の言葉をステイルはつまらなさそうに聞いていた。

煙草の煙を吐いた後、面倒くさそうに言う。

「今回の件は非情にデリケートな側面がある。『法の書』はローマ正教にとって脅威だが、かと言ってオルソラ＝アクィナス本人には何の罪もない。だから無闇に彼女を殺せば、世界中の同胞たちがアニェーゼの敵となる」

「そういう訳なのよ。同胞の些細な問題をよってたかってつつき回るという訳。だからアニェーゼたちも下手な事は出来ないよな」

「しかしあいつらはいきなり攻撃してきたぞ？」

当麻は視線を優菜に向ける。

既に傷は消えており、全く痕が残っていないので分からないが。

確かに彼女はかなりの深手を負わされたはずだ。

「異教・異端の場合は言い訳ができるのさ。『神の教えに背く者は罰しても構わない』。素敵なこの一言で過去にどれだけ虐殺が正当化されたと思ってるんだい？　歴史を軽く眺めるだけでもかなりの数が出てくるさ」

「だから逆にオルソラは手をかけられないと思うかも。『神の教えを信じる者を殺めてはならない』からね」

「しかし例外があるんじゃろう？」

インデックスやステイルの言葉に、アリシアは愉快そうに笑いながら言う。

まるで十字教自体を嘲笑うかの如く。

「……そうだね。教会から追い出された人間は『神の教えを信じない者』として殺しても良い事になるんだね」

「『神の敵』とな。過去、何度も我ら一族を襲撃する理由としていたな」

「……君の一族がどうかは知らないが、オルソラに『神の敵』というレッテルを貼る神明裁判を行うには準備期間がある」

短くなった煙草を捨てると、ステイルは新たな煙草に火をつける。

煙を吐き出すと、面倒臭そうに言う。

「だから今この場で殺される事はないだろうが、死ななければ多少何をされても大目に見られるだろうね」

「ふざけんじゃねぇぞ……」

ステイルの冷静な言葉に、当麻は奥歯を砕きかねないほど噛み締めながら言う。

「人の人生を何だと思ってやがる！　そんな理由でオルソラの抱え

てきた大切なものを一つずつ没収していく理由になるのかよ！？」

「だから、君が動くと余計ややこしくなるって言ってるだろう」

物分りの悪いヤツだな、そう言いたげな目でステイルは当麻を見ていた。

「気持ちは分かるがね、少しは気を静めたらどうだ」

悠々と煙を吐き出すとステイルは言う。

「天草式の話が全部本当だったとしたら、僕たちの出る幕はもうないんだ」

「なん、だと？」

「冷静に考えてみろよ、上条当麻。どの組織だって一定のルールは存在する。オルソラ＝アクィナスはそのルールを破った。アニェーゼ＝サンクティスはルールを破ったオルソラを罰するために彼女を追った。言ってしまえば、今回の件はそれだけだろう？」

当麻は迷わずステイルの胸倉を掴み上げた。

インデックスは口を覆って小さな悲鳴を出し、建宮は当麻の顔を見て小さく口笛を吹いた。

アリシアは愉快そうに笑みを浮かべ、優菜はじっと当麻の顔を真剣な目で見ていた。

それらを全て無視して、当麻はステイルを睨む。

だがステイルは少しも動じない。

「君の立場で考えてみろ。学園都市が外部へ何の影響もない事件を起こしたとして、それを外部の人間が文句を言えば君はどう受け止める？　その人物の行動を『内政干渉』として見るだろう？」

「！？」

「それと一緒さ。これはローマ正教内で起きた事件を彼らのルールで捌いているに過ぎないんだ。残念だが諦めるんだね、上条当麻。それとも君は戦争を起こしてでも彼女を助ける気かい？」

「……それは」

「君は真実を知らない善良で無力な子羊たちを巻き込んでまで、オルソラ＝アクィナス一人を守りたいと思えるのか？」

ステイルの言葉に、襟首を掴む当麻の手から力が抜けていく。

これが素人とプロの違い。これが個人と組織の違い。

その事をまざまざと見せつけられた当麻は、ただ俯いて拳を強く握るしかなかった。

心底つまらないと言いたげに当麻を見ていたステイルだが、視線を建宮の方に向けると静かに言った。

「僕は君の行動まで止める権限は持たないよ。君は君の好きな理由で戦えば良い。だが向かうなら一人で行け。今回の件にイギリス清教を巻き込もうものなら、この島全土を焦土にしてでも天草式をあぶり出して皆殺しにする」

ステイルの脅しに、建宮は軽く肩をゆすって言った。

「ま、そんぐらい分かってのよ。少年もそこまでヘコむなって」

「一人でいくのか？」

「それしかねえならそれで行くしかねってのよ。幸いにもうちのバカどもどもは処刑されていない。だから狙うとすれば、移動時よな」

フランベルジュをゆらゆらと揺らしながら建宮は言う。

「集団の脆さはなんといっても移動中でな。ローマ正教がウチらの仲間とシスターを全員一度に移動させるとは思えないのよ。合わせて三百名だ、そんな大集団が移動したらいやでも人目につく」

「……」

「だから必ず移動のために何らかの偽装を行うだろうよ。集団を少人数に小分けして車に乗せていくとかよな。そういう偽装中には集団の本来の力は発揮できないのが定石だ。だから奇襲をかけるならその時しかねってもんよ」

移動こそが最大のチャンス。

そう言う建宮だが、それは逆に移動するまで手を出せないという事を意味している。

ステイルは、オルソラを抹殺する為に神明裁判をする必要があると言っていた。

そしてその間に何をしても大目に見てもらえるとも。

それが何を意味するかがわからないほど、当麻は物知らずではなかった。

アニェーゼ部隊総出での暴力。

死ななければ何をしても良い。
明確なボーダーラインが存在しない。
間違いなく、オルソラは人が死ぬギリギリ一歩手前まで傷めつけられるだろう。

「……いくら我らでも出来る事と出来ない事はしっかり存在するのよ」

当麻の顔を見て、建宮は苦々しく吐き捨てるように言った。
ローマ正教の者が、捕らえた敵をどのように扱うのか。
それは素人の当麻よりプロの建宮の方がより鮮明に想像できたのだろう。

最悪の事態が想像できるのに、何も行動に移せない自分がどこまでも情けなかった。
当麻は近くにある電柱を思い切り殴る。

「上条当麻。君に一つだけ聞いておきたことがあるんだ」

「……何だよ？」

ステイルの言葉に当麻は力無く振り返る。
その顔を見て、ステイルは皮肉げな笑みを浮かべたまま言う。

「君にやった十字架。今、君はもっていないようだが、どこへやったのかな？」

「……悪い、オルソラに預けちまったままだった。俺が首に掛けてやったらメチャクチャ喜んでたけど。あれ、そんなに高価なモンだったのか？」

少し考えて思い出した当麻は、ステイルにそう説明した。
その言葉を聞いて、ステイルは何故か愉快そうな笑みを浮かべた。
何故かアリシアもニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべていたが。

「なるほど……な」

ポツリとアリシアが呟くが、その意味が当麻には理解できなかった。

「何のへんてつもない鉄の十字架だよ。きっと土産物を作っている町工場で大量生産されているものだろう」

当麻とって訳の分からない台詞をステイルは吐いた。
その意味が理解できなかったが、当麻には既にどうでもよいと思えていた。
失意のまま、当麻は暗い道を歩き出す。
こうして、つまらない事件はつまらない結末と共に幕を下ろした。

建宮の姿は消えていた。
ステイルとインデックスは、事後の仕事でもあるのか二人揃ってどこかへ消えた。
故に、学園都市に向かっているのは当麻、優菜、アリシアの三人であった。

日本の首都と言っても、中心から外れれば夜は暗闇に包まれる。
時刻は既に午前一時。街の灯りのほとんどが落ちていた。

「……どうすれば、良かったんだろうな」

ポツリと、当麻は言った。

戦いを軸においた非日常は終わり、あと少しで日常の生活へと戻る。

寝不足の頭を振って学校に行き、家に帰れば家族と共に過ごす。

帰宅途中で美琴に出会ったり、はたまた垣根や青髪ピアス、土御門と遊んだりするだろう。

命の心配をする必要のない日常に戻れる。

なのに当麻の心は晴れなかった。

オルソラ＝アクィナスを助けたかった。

だけど彼女を助ける方法が何一つ思い浮かばなかった。

「今更後悔しても遅いけどさ、他に方法はあったんじゃねぇのかって思っちまうんだ。オルソラを学園都市に連れて行ってやったらどうなるんだろうとかさ」

「……」

優菜もアリシアも黙って当麻の独白を聞いていた。

その雰囲気から口をはさむ気はないようである。

「勿論分かってるんだ。そっちの結果を見ていないから希望に見えるだけなんだって。だけどよ、聞いてしまったんだよ」

どこからか聞こえてきた、オルソラの絶望の悲鳴。

それが聞こえなければ当麻は万々歳で事件が終わったと考えていただろう。

「……本当に、どうすれば良かったんだろうな……」

二人は何も語らない。当麻の泣き言を聞いても一言も口を挟もうとしない。

今回の件は当麻には何の関係もない。

ただの高校生が、偶然魔術世界に関わっただけ。

そしてその厳しさを垣間見ただけ。

だから、そこから元の世界に帰ろうとしても誰も咎める者はいない。

「当麻」

三人は黙って歩いていたが、やがて優菜は当麻を見ずに口を開く。

「前に言いましたが、私は貴方のなすべき事に口を大きく挟みません。ですから、言えることはたった一つです」

優菜は足を止めて当麻を見る。

その目は真剣で、余計な冗談を挟むことすらおこがましいと思えるほどだった。

「……何だよ……」

精神的に追い詰められた当麻はついぶっきらぼうに言う。

だが優菜は気にせず、当麻を見て言った。

「貴方はどうしたいのですか？」

優菜の問いに当麻は言葉が詰まった。

「意味が分からないのなら、こう言いましょう。貴方は今、一体何

をしたいと考えているのですか？　と」

（俺が……したい事……）

優菜の言葉に当麻は少しだけ考える。
だが、考えたのは数秒にも満たなかった。
すぐに当麻は優菜を見ると、何をしたいのかを告げる。

「オルソラを助けたい」

「ならば行きましょうか」

当麻の答えに、優菜は秒を置かず答えた。
どこへ、という野暮な質問を当麻はしなかった。
考えつかなかったという事が正しいのかもしれない。
優菜の顔を見れば、どこを指しているかなど一目瞭然であるから。

「いいのか？」

「迷う必要はありません。友人が危険に晒されているのですよ？」

そう言うと優菜は背中に隠していた未元物質の武具を取り出す。
今まで使用しなかったのは、この武器自体があまり人目に晒してはいけないものだから。
だから普通の棒を使って今まで対応していた。

「それに貴方の進むべき道が塞がれた時、その存在を叩き潰すのが私の役目です」

一瞬で組み上げると、それは全長ニメートルの漆黒の武器へと変貌

する。
闇夜の中でもその存在感が分かるほど、黒光りする棒を見て当麻は心が安堵している事に気付く。
過去に優菜は自分に向かってこう言った。

『安心しなさい。貴方は一人ではないのですよ』

その意味を当麻はここに来て理解する。
今まで誰一人として頼らず自分だけで事件を解決しようとした。
それは単に巻き込みたくないから。
しかし笑みを浮かべる優菜を見て理解した。
安心して背中を預けられる存在がいるということは、とても大きな支えになるという事に。
そんな当麻と優菜を見て、アリシアは深くため息を吐いた。

「やれやれ、姉上も兄上も本当に人がいい」

「貴方は帰ってもいいのですよ？　これは私、いえ私たちの問題ですし」

「馬鹿を言うな。姉上のいる所に妾あり、だ。たとえ地獄の底でもついて行くぞ」

優菜の言葉にアリシアは笑いながら答える。
そんなアリシアを見て、当麻と優菜は笑みを浮かべながら言った。

「じゃあ、行こうぜ」

目的地が明確に分かった以上、三人が立ち止まる必要はない。

言ってしまえば彼らにオルソラを助ける理由はない。
事実として、彼らは戦い続けなければならない理由など何一つなかった。
だけど三人は夜の闇を走り続ける。
戦う理由がないから、オルソラを助けるのではない。
彼らの中に、戦い続けたい理由があるから戦い続けるのだ。

「場所はきっとオルソラ教会でしょうね」

当麻は優菜の言葉に同意する。
天草式との話しあい時に、アニェーゼが冗談交じりで言った言葉。
オルソラは三ヶ国もの異教地で神を教えを広めた功績がある。
よって、自分の名前を冠する教会を立てる許可が特別にいただいた。
広さは野球場クラス。

携帯を取り出しＧＰＳ画面を見る。
軍事衛星としての機能すらあるのではとウワサされる学園都市製のＧＰＳ機能は高い精度を誇っていた。
古い建築物はデータから消されるが、反対に建築予定地までもが完璧に表示されている。

その機能で調べると、巨大な建築予定地など一箇所しか見当たらなかった。
建物名がＧＰＳ地図に出ているわけではないが、大きさからしてこれしかない。

そこにアニェーゼがいる保証はなかったが、当麻たちは迷わなかった。

理由は大人数という事である。
大人数の移動は建宮も言っていたが、集団行動の弱点となる。
それを軽減しようと考えているのなら、最短距離にあるオルソラ教会を要塞化するのが筋だろう。

「さって飛び入りでパーティのお邪魔をさせてもらうとしますかね」

「くは、兄上も随分と言うよな」

当麻の言葉に、アリシアは酷く愉快そうな笑いをしながら言った。

最後の戦い

オルソラ教会と名がついているが、実際は教会と呼べるような建物ではなかった。
並の学校の体育館を五つも並べられるほどの大きさを持つ教会は、完成すれば日本国内では例をみないほどの本格的な大聖堂となるだろう。
それほどの規模を誇る教会を、学園都市から僅か数キロメートル離れた場所に建築する。
科学勢力への牽制という意味合いすら含ませているかのようだった。
しかし、建築途中の現状ではただ広いだけの空間でしかない。
教会も外壁を築き終えたところだが、周囲には鋼鉄の足場やはしごなどがそのまま放置されている。

そんな場所に、漆黒の修道服を着たシスターたちが何百人と無言で佇んでいた。
シスターたちの意識は建物の外になど向いていない。
彼女たちの目は、ただ人の輪の中央にぽっかりと空いたスペースへと集中していた。

そこから誰かの押し殺すような悲鳴と、何かを殴るような音が聞こえた。

「ったく、手間ぁかけさせちゃあ駄目でしょう？　私を含めて皆さんお忙しいんですよ、残念ながら。おい、聞いてるんですか？　聞いてるんですかーっつってんでしょうがよ！　こら！！」

何か重たい袋を蹴り飛ばすような音と共に、この世のものとは思えない絶叫が闇を引き裂いた。

「ハッ！！　何ですかぁその悲鳴は。すっかり女捨てちゃって、みっともないとは思わないんですか？」

アニェーゼの問いに、オルソラは答えられない。
ボロボロになるまで殴られたオルソラに、答えるような体力など残されているはずもない。
衣服は敗れ、ファスナーも壊れて布地が大きくめくれ上がっていた。

アニェーゼたちは魔術などを使用してオルソラを苦しめたわけではない。
単純に数の暴力による暴行を行っただけだ。
だがその数が十や二十ではなく、数百となれば話は別だ。
一人一発でも、その数が重なれば壮絶な苦痛を生み出す。
手加減をした今ですら、オルソラを死の淵ギリギリのラインへと追い込んでいた。
床に投げ出されたオルソラの手足は、一目で力が入れられない事を窺わせた。

朦朧とした意識の中、オルソラはぼんやりと考える。
ただ魔道書の原典をどうにかしたかった。
ローマ正教も、悪名高い『法の書』を消したいという気持ちは同じだと思っていた。
なのにどうして、何で。
何がどう変化したら、ここまで決定的に道が分かれてしまうのだろう。
最後の最後で、救いを見たような気がするのに。
どうして、あの少年は自分の身柄をアニェーゼに引き渡してしまったんだろうか？
あの笑顔も、あの言葉も、全て自分をアニェーゼに引き渡すための

演技だったのだろうか？
何故、という疑問しかオルソラには思いつかなかった。

「それにしても、死の淵まで追い詰められといて、最後にすがったのは小汚い国の見知らぬ東洋人どもとはね。駄目ですよ、あんな聖典も読めない子豚さんたちなんかに期待しちゃ。同じ十字教なら何でも良いと思っちまってたんですか？」

息も絶え絶えなオルソラを見下ろしながら、アニェーゼは獰猛な笑みを浮かべていた。

「天草式とかイギリス清教だの、あんなのが十字教を名乗るのもおこがましいってなもんですよ。あいつらは人間じゃありません、ただのブタとかロバでしょ？　そんなもんに大事な命をあずけちまうからこんな目に遭っちまうんです。ったく、獣を騙すのって簡単ですよね。ちょっと手懐ければ後は向こうが獲物を口に咥えて持ってきてくれるんですから！」

アニェーゼの一言で、それまで痛みで朦朧としたオルソラの意識がはっきりとする。

「だま、された？」

「あ？」

「あなた、たちに……協力した……のではな、なく……騙され、て……？」

オルソラの問いにアニェーゼは心底つまらなさそうな顔をして言った。

「そんなのどっちでも良いでしょうが。あはは、そうそう愉快でしたよ愉快愉快。あいつら守るべき者をテメェがその手で敵の元へ送り返したんですよね！　愉快すぎて今でも笑っちまうんですよ！」

アニェーゼの言葉に、オルソラは僅かに笑みを浮かべた。
あの少年は決して自分を売ったのではない。
あの笑みも、あの言葉も、一つとして偽りはなかった。
真剣に自分のことを心配してくれて、危険な戦場にまでやってきてくれた。
たとえそれが失敗に終わったとしても。
その努力が空回りして、逆に自分の命を脅かしてしまったとしても。
最後まで自分の味方でいてくれた。

天草式もあの少年といた少女も、誰一人として一度さえ裏切らなかった。
最後まで、終わりの終わりまで戦ってくれた、温かく、頼もしい味方だった。

「ナニ笑ってんですか、あなた」

「思い知らされた……ので、ございますよ。私たち、ローマ正教の本質が……どういうものかを」

オルソラはゆっくりと優しい声で言った。

「彼らは……信じる事によって、行動するのでございますよ。……人を信じ、想いを信じ、その気持を信じて、どこまでも駆けつけて……くれるのでございましょう。ですが」

そこでオルソラは一度咳き込む。
口から血を掃き出し、粘つく血が言葉を紡ぐのを阻害する。
それでも、オルソラは言葉を紡ぐのをやめなかった。

「それに引き換え……私たちの……なんと醜い事か。私……たちは、騙す事でしか、行動できな、い、ので、ございます」

オルソラは笑う。ボロボロになった顔で、少しも面白くなさそうな表情で笑う。

「私はもう、あなたの手から逃れる事はできないので、ございましょう。そしてあなたの予定通りに、私は偽りの罪人として……裁かれ、闇に葬られましょう。けれど、私はもうそれで良いのでございますよ。私は、自分自身を騙せませんし……まして、私のために無償で、力を貸してくれた人々を、これ以上騙すなど……絶対に、不可能で、ございます」

「はん、殉職者の台詞ですね」

オルソラの言葉に、アニェーゼは空き缶を蹴飛ばすような気軽さで、オルソラの足を踏みにじる。

「抵抗がない方がこっちとしてもやりやすいですしね。せいぜい、自分をこんな目に遭わせちまったあの馬鹿どもを恨みながら死に逝けばいいんですよ」

朦朧とする意識の中、オルソラの耳には間近にいるはずのアニェーゼの言葉さえ、途切れ途切れにしか聞こえなくなる。

「一体……何を恨めば、よいのでございましょうか？」

しかしほとんど動かない頭を巡らせて、オルソラは言った。

「な……に？」

「彼らには、戦う理由などなかったのでございますよ。中には、ローマ正教でも、イギリス清教でもない。本当に……ただの少年少女だったとか。それでも……彼らは見ず知らずの私のために駆けつけて……きてくれたのでございます。少女の方は分かりませんが……あの少年と一緒にいるから……きっと同じ想いなのでございましょう」

「……」

「ほら、これ以上に……魅力的な贈り物が、この世界のどこにあるというのでございましょう……。素晴らしい贈り物をくださった……方々に、私は一体何を恨めばよいというのでございますか？」

オルソラは朦朧とした意識の中で思う。

絶対に、彼らを恨むものか。

彼らには自分を助ける理由も義務もない。

道に迷ってた自分を見捨てればよかったのに、わざわざ自分を助けようとしてくれた。

義務で助けたんじゃない。

彼らは自分を助けたいという『権利』を使って助けてくれた。

そして危険な戦場にまでやってきて、助けようという想いで来てくれた。

もう、十分だ。

戦ってくれただけでも、立ち上がってくれただけでも、存分に感謝

するべきだ。
決して彼らを恨むものか。
もう、満足だ。
見ず知らずの自分にそこまでしてくれた人々に出会えた事に、これ以上の幸運があるだろうか。
両手で抱えきれないほどの、幸運を授けてくれた神様に感謝したい。

そう思っているオルソラの幸運はまだ止まらない。

アニェーゼが足を上げた瞬間、パンっ！！と何かが砕け散る音と共に、教会を包んでいた結界が消し飛ばされた。

「こわ、れた……？」

思わずオルソラから視界を外すアニェーゼ。
あり得ない事態が進行しているとアニェーゼは理解した。

「おい！　あの扉にかけられたアエギディウスの加護の再確認！
それから周囲の探索！」

アニェーゼは矢継ぎ早に命令を下す。
だが、どれも実行されるまでもなく望んだ答えはやってくる。

「あ……」

オルソラは教会の正面入口が勢い良く開け放たれるのを見る。
まるで絵本に描かれた王子様がお姫様を助けに来たシーンのように、
そこに何者かが立っていた。
そこには、ただの少年がたっていた。
何の変哲もない少年のはずなのに、逃げも隠れもせずにやってきた。

オルソラを取り囲んでいた二百人以上のシスターたちが一斉に少年を睨みつける。
数の暴力を前にして、怖いはずがない。なのに少年は怯まずに一歩足を進めた。
オルソラを助けだすために、闇に塗りつぶされた教会へと踏み込んだ。

その姿を見て、オルソラは彼が言いたいことを理解する。
彼はもう大丈夫だぞと、言いたいのだと。

「そういやぁ、おかしいとは思ってたんですがね」

嘲るような笑い声と共にアニェーゼが言った。
くすくすと、笑みをこぼし更に言う。

「どうして魔術師でもないただのド素人二人が、ゲスト扱いで戦場へ駆りだされていたのか」

「……」

「理屈は分かりゃしませんが、結界に対して絶対の力を持つ『何か』があると、そういう訳ですか」

「一応聞くけどよ。もう、ごまかすつもりもねえんだな？」

アニェーゼの言葉を無視して当麻は問う。
一瞬アニェーゼの顔が驚きに代わるが、すぐに邪な笑みを浮かべて答える。

「ごまかす？　何を？　この状況を見て分かんないんですか？　一体どっちが上でどっちが下か」

たった一人で二百人以上を相手にする。そんな状況で当麻が勝てるはずもない。
アニェーゼもそれが分かっているのだろう。
何の警戒もせず、むしろ挑発するように当麻の目の前まで無造作に歩く。

「ったく、本当に馬鹿も馬鹿、大馬鹿ですね。あなたは一体何なんですか？　んー、まぁ良いか。ほら、これが最後のチャンスです。自分がなにをすべきかぐらい分かっちまってますよね？」

アニェーゼには当麻が自分を殴れないと思っている。
それは勝ち目のない戦が始まる合図となる。
なのに当麻はどこか安心したような笑みを浮かべながら言った。

「そうだな。確かにこれが最後のチャンスだ。よく分かっているよ」

その言葉と同時にアニェーゼに向かって当麻は拳を振り下ろした。
どっさに両腕をクロスして、顔面を守るアニェーゼの足が床から離れた。
ガードごと体を後ろへと弾かれた彼女は、狂犬のような目で当麻を睨みつける。

「き、サマ。何の真似だ、これは！！」

一瞬の迷いすら見せず、当麻は己の覚悟を敵へと見せつけた。
怒号を放つアニェーゼに向かって、それ以上の怒号を当麻は突きつける。

「何をすべきか、だと？　決まってるじゃないか！　オルソラを助けるのが俺のすべき事だよ！！」

両者の感情が至近距離で激突する。
アニェーゼが吹き飛ばされせいか、無言で飛び出してくるシスターたちが二名いた。
手には宗教的な意味を持つ武器。当麻では絶対に対応する事が出来ない。

しかしシスターたちに当麻を攻撃する事は出来なかった。

一人はまるで突然横合いから何かで殴られたかのように真横に吹き飛ばされた。
その威力は凄まじく、オルソラ教会の壁にめり込むほどであった。
もう一人は空中で三回転半した後で、地面へと叩きつけられた。
当然ながら受身などは取れず背中を強打した後に意識を失う。

「分かっただろう、兄上。ローマ正教がどういった存在か」

「自分の目で確かめるから、一人で行かせてくれ。そう格好つけたのはいいですが、おかげで私たちは空気ですね」

当麻の左側から優菜が、ステンドグラスをつけると思わしき場所からアリシアが姿を現す。

最初から姿を現していなかったのは、当麻が納得するまで待っていたため。

しかしアニェーゼ達は突然の登場をした優菜とアリシアのうち、ほとんどがアリシアへと視線を向ける。

それもその筈、アリシアの外見は夜の魔女とそっくりなのだから。

「夜の魔女がどうしてここにいるんですか！」

「残念ながら妾は契約者様ではないぞ。大体妾の力なぞ契約者様の０．０００１％もあればいいほうだ。なにせ本気を出されたら地球が吹き飛ぶからな。ま、本気を見たことなど一度としてないがな」

ニヤニヤと笑いながらアリシアはアニェーゼたちを見下ろす。

「な……に……」

驚くアニェーゼたちだが、更に何者かの声が飛んでくる。

「まったく、勝手に始めないでほしいね。せっかく結界の穴から上手く侵入できたというのに」

「……は？」

アニェーゼが呆けた顔で振り返った瞬間、教会を支配していた闇がオレンジ色の爆発によって一気に薙ぎ払われた。

アリシアがいる所とは別の場所。教会の奥、ちょうど当麻とは正反対の位置。

そこに炎剣を片手に、ステイルが立っていた。

「後の始末は僕ら魔術師が着ける気でいたから君たちには引っ込んでもらう予定だったんだけどね。あれだけの説明が全部台無しだ」

「イギ、リス清教？　馬鹿な……あなたが関わるというのなら、内政干渉とみなされちまうのが分かんないんですか！？」

喚くアニェーゼに、ステイルは心底つまらなさそうに煙を吐く。

「ああ、残念ながらそれは適応されない。オルソラ＝アクィナスの胸を見ろ。そこにイギリス清教の十字架が掛けられているのが分かるな？　そう、そこの素人が不用意に預けてしまった十字架さ」

ステイルの言葉にアリシアは意地の悪い笑みを浮かべていた。
その姿を見て、少し前にステイルが十字架の所在を確かめていた時に笑っていた理由を当麻は理解する。
アリシアは最初からステイルがその気だったのを知っていたのだ。
だから愉快そうな笑みを浮かべていたのだ。

「その十字架はウチの最大主教が直々に用意した一品さ。僕の手でオルソラの首にかけろとの命も下っている。まぁそこの素人が君たちに捕まった際、『イギリス清教という巨大な組織の下にいる人間』と思わせるために持たせていたのだが……何がどう転んだのか、今ではオルソラの首にある。つまり、今のオルソラ＝アクィナスはローマ正教ではなく、僕たちイギリス清教のメンバーであるという訳さ」

「そ、そんな詭弁が通じるとでも思ってんですか！？」

顔を真っ赤にして口をぱくぱくと動かしながらアニェーゼは叫ぶ。
明らかに詭弁、どう見たって屁理屈にしか聞こえない。

それはステイルも分かっていたのか、アニェーゼの姿を愉快そうに見ながら答えた。

「思っちゃいないね。だが、今のオルソラがデリケートな位置にいるのは間違いはないだろう？　ローマ正教のくせにイギリス清教の十字架を受け、さらにそれは科学サイドの学園都市の人間によって行われた。彼女が今、どこの勢力に所属しているか、ここは時間をかけて審議すべきだと僕は思う。それを押しのけて君たちローマ正教の一存のみで審問にかけるというのなら、イギリス清教はこれを黙って見過ごす訳にはいかないんだよ」

煙草を揺らしながら、ステイルは窓から跳んで説教壇の前へと静かに着地する。

「それにだね。それに何よりもだ」

そこでステイルの雰囲気がガラリと変わる。

炎剣の切っ先を、遠く離れたアニェーゼの顔へ突きつける。

「よくもあの子に刃を向けてくれたものだ。この僕が、それを見過ごすほど甘く優しい人間だとでも思ったのか？」

「ほぅ、香水神父と初めて意見があったな。おい、そこの車輪を担いでるクソ女」

アリシアは一度愉快な笑いをした後、獰猛な獣の雰囲気を漂わせながら言う。

余りの変化に、一瞬だが当麻すら怯えてしまった。

「お前、姉上を傷つけたであろう。香水神父と一緒で、妾がそれを

見過ごすほど甘い性格をしていると思っていたか？」

アリシアはルチアを睨みながら、犬歯をむき出しにして言葉を発する。

普段のアリシアを知っている者なら、彼女が粗暴な口調で相手を罵る事など見たことないだろう。

「お前は十回命乞いをするまで痛めつける。その次は百回命乞いをするまでだ。それが終われば千回だ。呪詛のように命乞いをするまで身も心も徹底的に破壊しつくしてやる」

睨みつけるルチアを見下ろしながらアリシアは告げる。

「恐怖に染まる心に我が名を刻み付けるがいい。我が名はアリシア、アリシア・フォン・コルネリウス」

その言葉を聞いて、アニェーゼ部隊が一瞬だがざわついた。

コルネリウス、ローマ正教すら手を焼く獰猛な魔導師の一族。

その名を冠する人間がこの場にいる事に動揺の波が広がりかかる。

それを鎮めるかのように、アニェーゼは憎々しげに声を上げる。

「騒いでんじゃないですよ！　たかだか数人ごときで……」

だがアニェーゼが最後まで言い切る前に、別の人間の声によって遮られてしまう。

「数人で済むと思ってんじゃねえのよ」

野太い男の声にアニェーゼが振り返った瞬間、横合いの壁が爆弾で吹き飛ばされたかのように砕け散った。

もうもうと立ち込める砂煙の中、大剣を握る大男が歩いて来る。

「建宮……」

フランベルジュを片手に持った男の名を当麻は呼ぶ。
その後ろには、天草式の面々が揃っていた。
その数は五十人程度、おそらくは監禁されていた全員なんだろうと当麻は理解した。

「お前、奇襲をかけるのは移動中が最適だって……」

「そういう風に言っときゃ納得して帰ってくれると思ってたんだがよぉ。お前さん、想像以上の馬鹿だよな。ま、見ていて楽しい馬鹿は嫌いじゃねえが」

建宮は呆れたように当麻の問いに答える。

「まったく、だからゆうなと一緒にいさせて止めてもらおうと思ったのに。まさかゆうなまで一緒に来るとは思わなかったよ」

「期待に答えられなくてごめんなさいね」

最後に、当麻の背後からインデックスの声が飛んできた。
そんなインデックスの声に、優菜は申し訳なさそうにしながら答えた。

「こんど、美味しいご飯をご馳走する罰をゆうなには与えるんだよ！」

「厳しい罰ですね。御期待に添えるように頑張ります」

当麻の肩にポンと小さな手が置かれる。

「でも、こうなっちゃったなら仕方がないよね。助けよう、とうま。オルソラ＝アクィナスを、私たちの手で」

「ああ」

インデックスの言葉に当麻は頷く。

そんな彼らの姿を見て、アニェーゼはただ一言の命令を下した。

「殺せ」

その言葉と同時に、闇に染まる数百ものシスターたちが襲いかかってきた。

最後の戦いが火蓋をきって落とされる。

不条理な話に決着をつけるために。

オルソラを助けだすという結末を迎えるために。

決戦の始まり

オルソラ教会は七つの聖堂で構成されている。
十字教における七つの秘儀を、それぞれの聖堂が担当するためだ。
聖堂の大きさは均一ではなく使用用途や重要度によって、建物のサイズが変わってくる。

オルソラたちがいた場所は結婚式にまつわる『婚姻聖堂』で、一番巨大な建築物だ。
当然ながら収入も一番大きくなる予定なので、予算のかけ方も莫大である。
その他にも『終油聖堂』や『堅信聖堂』など、宗教的には重要な建物もある。
だが、これらの建物は『一般客』からの収入が見込めない為、比較的小さなサイズになっている。
ここまでが、当麻が携帯電話上のホームページで調べた情報の要点だった。
それ以上はわからないし、多分知っても意味がない。
そう判断すると、それ以上は調べる事を止めた。

幸いにもその中で『完成予定図』と『内部見取り図』が公開されていた事が拾い物であった。
しかしそれは『客に見せる範囲』であったが。

「チッ！」

当麻は傷ついたオルソラを抱き上げて『婚姻聖堂』の裏口から外へ飛び出す。
完全に平らな石造りの地面を少し走り抜けると、抜けだした裏口か

ら次々と武装したシスターたちが姿を現す。
だが急に将棋倒しのように倒れていった。

（あ？　何が起きたんだ）

もう一度後ろを見ると、裏口の近くで誰かが足元に何かを設置していた。
おそらくそれに引っかかって一番前の人間が倒れ込んだのだろう。
後は、何人かがこけていけばそのまま後ろが自動的にこけていく寸法だ。
その人物は姿が見えるが『気配がまるで感じない』から、その罠が成功したのだろう。

そんな事が出来るのは、当麻の中でたった一人しか知らない。

心の中で感謝しながら当麻は走り続ける。

「悪いな、遅れちまって。体は大丈夫か！？」

「……ええ。こんなもの、全然平気でございますよ」

そういうオルソラだが、僅かに体が揺れるだけでもぎゅっと身を硬くする。
相当ダメージを負っているのは推測できた。
衣服はボロボロに擦り切れ、ファスナーも金属部分が噛みちぎられているように壊されている。

しかしオルソラの顔には苦痛のようなものはない。
今にも泣き出しそうな顔をして、当麻の顔を見上げていた。
まるで迷子の子がようやく自分の親を見つけた時のように。

（何だよ、迷う必要なんてなかったじゃねぇか。戦う理由なんてこんなにわかりやすいものがあったじゃねぇか！）

「これが沈利姉さんの言っていた『当麻の悪い癖』ですか。なるほど、こんな時でも女の子の好感度上げですか？」

突然背後から声が聞こえた事にぎょっとした当麻だが、見知った声と気付くと少しだけ気を緩める。

「いやいや、優菜さん。上条さんはそんなナンパ野郎ではないですよ！？」

自分が女の子の好感上げに終始していると思われた発言に、当麻は全力で否定をしようとする。
が、優菜は呆れたような顔をして当麻を見ていた。

「へー、あんな御伽話のような登場の仕方をして？　それで今もお姫様抱っこで走っているのに？」

「お、お姉様！　上条さんは喋りながら走る余裕なんて無いんですが！？」

「頑張れ男の子」

「おいこらテメェ！！」

敵地のど真ん中なのに二人は冗談交じりに会話をしていた。
それはオルソラを安心させるため。
あえて二人は馬鹿みたいな話しをして笑う。

オルソラも、最初はキョトンとしたが少しだけ苦痛に顔を歪ませながらも笑った。

そんな三人の背後から漆黒の修道服を着たシスターたちが襲いかかろうとした。

だが、聖堂の屋根の上から天草式の男女が剣を手に飛び降りてきた。

ローマ正教の武器が天草式の剣に切断され、凶悪な蹴りが最前列の黒いシスターを吹き飛ばす。

（さんきゅー……）

当麻は走りながら、足元に転がっていた空き缶をカカトで蹴り上げる。

そしてそれを優菜が、持っていた棒をバットのように振って力強く打つ。

当然ながらそんな物を打ち飛ばしても、黒いシスターたちをなぎ払えるわけではない。

だが、視界の隅に何かが横切れば、視線を一瞬だがそちらに向けてしまう。

その隙をついて、天草式の男女はシスターたちから逃げの姿勢に入る。

「さてっと……どこに！」

そう言った当麻の前に、突如として黒い壁が出来上がる。

言わなくても分かる。アニェーゼ部隊の連中だ。

「くそ……」

「オルソラさん、少しだけ失礼します」

敵に視線を送りつつ、優菜はオルソラの額に手を当てる。
一瞬だけビクっとしたオルソラだが、体に起きた異変がすぐにそんな些細な事を忘れさせる。

「あ、あら？」

オルソラは困惑した。
断続的に起きていた痛みが、まるで波が引くかのように消えていく。
優菜は額に手を触れただけで、その他に何かした形跡はない。
なのにオルソラの怪我は時間を巻き戻したかのように完治していた。

「当麻、貴方はオルソラさんを連れて逃げなさい。道は私が切り開きます」

オルソラの額に当てていた手をひくと、優菜は漆黒の棒を持ちながら言う。

「一体何が……」

「詳しくは説明できません。ですが貴方の体は今、普通に走る事が出来るでしょう」

「……」

優菜の言葉にオルソラは黙って頷いた。
当麻は優菜が一体何をしたかを知っているが、その事を口にはしなかった。

「いいですか、当麻。彼女たちはオルソラさんが走れるとは思って

いません。タイミングを見て二人は走りだしてください。一瞬ですが彼女たちは思考が固まるでしょう」

「……気を付けろよ」

目の前には漆黒のシスターが無数蠢いている。数で言えばおよそ五十名ほど。
それをたった一人で立ち向かうというのだ。

「あの……」

ジリジリと包囲網が敷かれる中、オルソラは優菜に向かって言葉を発する。

「なんでしょうか、オルソラさん」

どこを突き破るべきか、周囲を見ながらオルソラの言葉に答える優菜。
少しだけ迷ったがオルソラははっきりと口にした。

「もしかしてですが……貴方は以前、ローマ正教で聖……」

オルソラが何かを言いかけたが、最後まで言い切る前にシスターの一人が飛び出してきた。
当麻は身構えたが、それより早く優菜による攻撃でシスターは吹き飛んでいた。
その攻撃が見えなかった事で、シスターたちは僅かに動揺する。

「話している暇はありません。行きますよ、当麻！　オルソラさん！」

その言葉と同時に、当麻はオルソラを地面に下ろす。
そしてシスターたちにとってあり得ない光景が目の前に繰り広げられた。
あれだけ傷めつけたオルソラが、自分の足で走っている。
信じられないものを見たかのように、シスターたちは思考が停止した。

「行きなさい、当麻！」

「優菜！　絶対に死ぬんじゃねぇぞ！」

ここから一番近い『終油聖堂』を目指して、当麻とオルソラは走っていった。
二人が闇に飲み込まれてから、初めてシスターたちは理解が追いつくが既に遅い。

「……弟の期待に答えられないと、お姉ちゃん失格ですね」

二人が逃げた道を塞ぐように、漆黒の棒を構えた優菜が立ちはだかっていた。
相手は一名、そう思って四人が一斉に優菜へと襲いかかった。
常識で考えればたった一人に四人でかかれば勝てるはずはない。
しかし襲ってくるシスターを見て、優菜は少しだけ笑みを浮かべる。

瞬間、ゴパッ！！と見えない爆発が起きてシスターたちは大きく宙を舞った。

薙ぎ払われて無造作に吹き飛ばされた仲間を見てシスターたちに動揺が走る。

一瞬にして四名が戦闘不能に追いやられた。
恐ろしき暴威によって。

その事を理解したシスターたちは、優菜に強く踏み込む事が出来なくなった。
どんなに人数がいようが、一度に襲える数は大体四、多くて五名だ。
それ以上で襲いかかれば同士討ちの可能性が出てくる。
しかし四人では確実に敗北をしてしまう。
結局、優菜を三方から取り囲んでいるだけで、それ以上の事は出来なかった。

自分の囲むシスターたちを見渡した後、小さく息を吐きながら優菜は言った。

「この道を通りたいのなら、私を倒してからにしていただきましょうか」

その声にゾクリと背筋を凍らすシスターたち。
目の前の少女が、まるで凶暴な猛禽類に変質した感覚に襲われた。
実際、その感覚は正解であった。

「弟が怯えるから、極力怒るお姉ちゃんは見せたくないのですが…
…当麻がいない以上、私が手加減をする必要もありませんね」

コキコキと体を鳴らす優菜の瞳は、まるで血塗られた傭兵に感じられた。
無造作に優菜が一歩足を進める。
その足音を聞いてシスターたちは統率がとれたように一歩後退する。

シスターたちには明らかに怯えの感情が見て取れた。

優菜が出す足音は、まっとうな人間の出す音ではない。
一歩一歩踏み出す音が、圧倒的な力を教えるかのように聞こえた。
誰もがこう思った。

この女を止める事など不可能だと。

もはや実力差以前の理不尽さすら感じられた。
目の前の少女が、まるで幾多の戦場をくぐり抜けた歴戦の猛者に見えた。

接近される前に魔術を使えばよいと考えた誰かが、武器を優菜に向けて詠唱する。
が、術式を組み上げる前にそのシスターはガクンと後ろに大きく吹き飛んでいた。
自分たちの頭上を軽々と飛び越えた味方を、シスターたちは呆然とした顔で眺めていた。

背中を強打して地面に叩きつけられたシスターは、そのまま喉を押さえて地面を転がる。
悲鳴は聞こえない。
激痛に悶え苦しむのにその口から声が出る事はなかった。

「……天草式の時は、こういった事態になると考えていたから、彼らには手加減をしていました」

距離にして十メートル近くあったが、一瞬にして距離を縮められて攻撃を繰り出した優菜。
すぐにシスターたちと距離を取ると、棒を水平に構えてシスターたちを睨む。

「ですが、貴方たちに手加減をする理由はありません」

距離が十メートル『も』あるではなく、十メートル『しか』ない。
仲間が五十人『も』いるのではなく、五十人『しか』いない。
そして魔術を使おうにも相手の動きが『見えない』のではどうしようもない。
敵意を見せれば攻撃される。
その威力は理不尽さすら覚える強大な破壊力を秘めている。

そう考えていたシスターたちだが、使える手札は数多く存在する。

人の雪崩で押しつぶせばいい、だがそれが効果あるのか。
全員で魔術を使えばいい、だが果たして相手が見えるのか。
仲間を呼べばいい、だが相手がそれを待ってくれるのか。

しかしいくつ手札を思いつこうと、それらに対してすぐ否定文が浮かんでくる。

つまるところ、シスターたちが確実にこなせる選択肢はたった二つ。

「さぁ、戦う意思があるものは名乗りあげなさい」

一つ、優菜を攻撃して倒される。

「それが出来ないのなら、こちらから向かわせてもらいます」

もう一つは、優菜から攻撃を貰って倒される。

絶望しかない選択肢の中、シスターたちが選んだ選択肢は三つ目の選択肢。

『降伏』である。
彼女たちは、信仰心を超える恐怖で心が塗りつぶされていた。
武器を捨ててシスターたちは、降伏の意思を見せた。
中には悪夢に怯えるかのようにカタカタと怯えながら跪く人物もいた。
誰一人として戦う意思はなくなっていた。
降伏と見せかけて不意を突くという思考すら無かった。
優菜のほっそりとした腕すら、まるで研ぎ澄まされた鋭利な刃物に見えたのだ。
シスターたちの顔が絶望の一色に塗りつぶされる。

「降伏……ですか」

優菜の言葉にビクっとシスターたちが反応する。
背筋が凍るような冷たい声が耳に届く。

「確認ですが、不意を突くような無粋な真似は考えておりませんよね？」

シスターたちはコクコクと首を縦に振って優菜に意思を伝える。
総勢五十名ほどで行われる動作に、ある意味シュールさがあるが本人たちは至って真面目である。

「もしそう考えている輩がいるのなら……今度は容赦しませんよ？」

そう言うと優菜はシスターたちの返事を待たずその場を立ち去る。
その背後に襲いかかる者は誰一人としていなかった。
優菜の背中を見ていれば、もし攻撃すればどうなるか手に取るように分かる。

次こそ本当に手加減抜きの攻撃を食らう事となる。

一瞬でその事を理解したシスターたちは、優菜が立ち去ってからも暫くその場を動く事は出来なかった。

行間　見守る者たち

建設途中のオルソラ教会を見下ろすように、神裂は深夜のビルの屋上にいた。
彼女は教会から遠く離れた場所に立っていたが、それでも鋭敏な耳は彼らの言葉を聞いていた。
天草式が、たった一人の少女のために立ち上がった言葉を聞いていた。

そもそも神裂の目的は天草式の味方をすることではない。
ましてやローマ正教を斬る事でもない。
ただ天草式の真意を見届けたかった。
自分が抜けても、天草式は天草式のまま。
何も変わらずそこにあるという事を見届けたかった。

そして今、信じていた通りの真意を見せてもらった。

神裂は自然と優しげに目を細めてしまう。
その瞳は、まるで懐かしいものでも眺めているかのようだった。

もう帰れない場所。だけどいつまでも大切にしておきたい場所。
そう思っていた神裂の背後で、隠そうともしない足音が聞こえた。

「感謝感激感動の極みってトコかい？　ねーちんは。かつての仲間たちが私欲で『法の書』を使うためにオルソラを誘拐した訳じゃないって分かって安心したかにゃ～？」

「土御門……」

神裂は表情を消してから振り返った。
だが、完全に消せていなかったのか土御門はニヤニヤとした笑みを浮かべていた。
土御門は神裂の隣まで歩いて、金属でできた落下防止用の手すりに両手を置く。

「ねーちん、満足できたのかい？」

神裂と同じものを静かに眺めながら土御門は言った。

「……ええ、予想以上の結果です。天草式が道を違えることはないでしょう、彼らはとても強くなりました」

わずかに寂しそうに、しかし誇らしげに神裂は言った。

「助けに行かんでいいのかにゃー？」

「私には、彼らの前に立つ資格などありません」

寂しそうに言う神裂を見て、土御門は笑いをこらえていた。

「何ですか、土御門」

「いやさーねーちんはそーいうけど、その手にある包帯はなーんなーのさー？　それに今回はカミやんを自分の問題にまで関わらせちまって、後でどう詫びようかビクビクしているんじゃないのかにゃー？」

「いいえ、別にあなたが想像しているような事などなにもありません」

極めて真面目な顔で返した神裂だが、その顔を見て土御門は遂に爆笑した。
オルソラ教会にまで聞こえるのではと思えるほど大声でひとしきり笑う。
だが、彼は気付いていない。神裂のコメカミがぴくぴくと動いている事を。

やがて目元に涙を浮かべながら土御門は言う。

「もー本当にねーちんはベッタベタだなぁ。戦いが終わった後に気絶した仲間をこっそり手当するつもりだったんだろう？　そして手当が終わった後に頭をそっと撫でて小さく微笑んでから静かに立ち去ろうとか考えてたのかにゃ～？　ぷっ、くくっ！！　ぎゃはははははは！！！　よくそんな恥ずかしい事を真顔でやろうと思えるよなー！！」

土御門の笑い声に混じってビキリと謎の音がした。
ゆらりと神裂が土御門を見ると、前回とは違い迷いなく七天七刀の柄を握る。

「待て待て待て待て！　こっちは素手ですよ！」

「大丈夫です」

のっぺりと平らな言葉で神裂は言う。

「素手がご希望なら素手で殺らせてもらいます」

「待った待った待った待ったぁ！　なーんか一つ漢字が違う気がす

るんですかにゃー！！！」

「問答無用！！！」

「洒落にならんぜい！　ヤツらより先に包帯巻かれるのはオレの方なのかにゃーっ！？」

神裂が天草式を見守るかのように見ていたビルから少し離れた所。
そのビルの屋上にアックアは立っていた。
眼下に見えるのはオルソラ教会。
その教会の一つ『婚姻聖堂』から走り出した人物を見ていた。

「ご満足？」

アックアの背後からアクゼリュスの声が聞こえる。
その声に振り向くことなく、アックアは無骨な声で答える。

「答える義務はない」

「そ。まぁそんな嬉しそうな声色で言われたら、聞かなくても分かるけどね」

アクゼリュスの言葉に、ますます顔をしかめるアックア。
だが、その口は僅かに微笑していた。

「それにしても……あなたの愛弟子は不思議な力を持っているわねぇ？」

少しだけアックアと距離を開けながら、アクゼリュスは落下防止の手すりに手を置く。

普通の人には豆粒程度にしか見えないが、アックアとアクゼリュスにははっきりと見えていた。

「万能とも言える治癒魔術みたいな力、『聖人』に近い肉体強化、そして貴方の『傭兵の流儀』。随分とハイスペックな娘じゃない」

「……」

「それにしても相手を恐怖に陥れるなんて、随分とこわーい聖母様じゃない」

「貴様にはわからないのである」

眼下にはシスターたちを屈服させた優菜の姿が見える。

普通に見れば、シスターたちは理不尽な暴威を前に屈する弱者のように見えるだろう。

だが、そうさせたのは優菜の優しさから来るものだとアックアは理解していた。

「あの娘はたとえ敵であっても傷つけたくないのである。六十人近いシスターがいたが、負傷したのは僅か数名。その他は戦う前から降服した」

「それが優しさとでも？」

意地の悪い笑みを浮かべながら、アクゼリュスはアックアに質問を投げる。
その顔は、明らかに答えが分かっていてあえて質問したかのようだ。

「彼女を最後まで見ていれば分かるのである。私には分かる、あの娘が戦いの後にどんな行動をするのかを」

「ふーん。ま、いいわ。だけど使っている力、能力ではないわね。どちらかというと魔術に近いけど……魔術にしては説明が出来ない部分があるわね。まるで……」

「些細な事などどうでもよいのである」

アクゼリュスが最後まで言い切る前に、アックアはつまらなさそうな顔をしながら言った。

「あら？　愛弟子の事をもっと知りたいとは思わないのー？」

「不要である。それに必要なら彼女が自分の口から語るであろう」

アックアの言葉にアクゼリュスは意地の悪い笑みを浮かべながら笑う。
くすくすと笑うアクゼリュスを見て、アックアは眉をひそめる。

「なーにその『彼女が語るなら自分が最初』って言いたげな台詞はー？」

底意地悪い笑い声を上げながら、アクゼリュスはアックアに向かって言った。
一瞬動揺したアックアだが、何とか顔には出さずにすんだ。

ひとしきり笑うと、アクゼリュスは愉快そうな声で言う。

「『我が力は守るべき人の為だけに行使する』、かつて貴方が上条優菜に授けた誓いの名」

アクゼリュスの声に反応したのか、アックアの眉がピクリと動く。だが、そんなアックアを見て、アクゼリュスはくすくすと笑いを殺しながら更に言った。

「私欲のために力を使わず、大切な人を守りぬく為だけに力を使う。貴方のようにどんな立場や損得勘定にも揺るがない。それはもう愚直なまでの信念を現したかのよう」

「……」

「考えてみると魔法名に聞こえるのだけど？　実は分かってて授けたのかな？」

答えないアックアを見ながら、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべるアクゼリュス。

そして、ひとしきり笑うとアクゼリュスはふいにアックアに背を向ける。

「ま、もう少しで貴方は上条優菜とご対面だろうし、お邪魔虫は立ち去っておくわ」

「会うとは限らないのである」

アクゼリュスに視線を向けず、アックアはオルソラ教会を見下ろし

ながら答える。
その姿が答えと分かっているアクゼリュスは、それ以上は何も言わず闇夜へと溶けこんでいく。
アクゼリュスの気配がない事を確認すると、アックアは僅かに笑みを浮かべながら言った。
「……上条優菜。たとえ学園都市に行こうと、昔と変わらず……か」
眼下にはまだ戦いが続いている。だが、それも少ししたら終わるであろう。
アックアはそれまで、優菜がどう動くかじっくりと見定めようと考えた。

魔滅の声

建宮は『婚姻聖堂』と『洗礼聖堂』の間にある中庭で戦っていた。
『洗礼聖堂』は『婚姻聖堂』に対して斜めに配置されている。
よって三角形をした中庭が形成されていた。
草木一本ない磨かれた石の庭のあちこちに、彫刻のための台座が置かれていた。
しかし台座だけなら空虚という印象しかない。
まるで廃墟のような感じがする。

建宮は当麻のように逃げながら戦うわけではない。
彼がやっているのは、場の膠着状態という見えない壁を作り上げる事だ。

集団というものは意思が一つになっていれば強固な力となる。
だがその足並みが乱れればどうなるか。一つとなっている意思にほころびが出来る。
そうなれば集団としての強さを発揮できず、結果的に膠着状態となる。

（とはいえ、この方法もいつまでも使えるわけじゃねえのよな……）

屋根から屋根へ飛び移りながら剣を振るう仲間を見ながら、建宮はそんな事を思う。
攻撃にしても防御にしても、今のバランスが保てているから維持できている。
もしもそのバランスが崩れれば、その瞬間に心理的な壁は崩れる。
それは建宮が集団という巨大な波に飲み込まれる事を意味する。

（彼女たちに勝機があると思い込ませなければ……）

取り囲む何十人ものシスターたちは、一つの生き物のように動いて壁を作り出していた。

（しかしそろそろ危険なのよ。どうにかしてここを抜け出さないと……）

と、そんな事を考えている建宮の耳に、ズルズルと何かを引きずる音と小さな足音が聞こえてきた。

その音にギョッとした建宮だが、それは新手の敵ではなかった。

「ぬ、なんじゃ。鍬形頭の大男ではないか」

その声は、味方による声だったからだ。だが、建宮はすぐに疑問に思う。

足音がアリシアなら、引きずるような音は一体何なのか。

シスターたちも、声の主の方に視線を向ける。

「姉上と思ったが外れか。せっかくコイツに土下座させるつもりだったんだがのぅ」

そういったアリシアの声と共に、何かを放り投げるような音がする。

ソレはシスターたちの頭上を軽々とこえ、建宮の前にゴトリと音を立てて落ちてきた。

ゴトリと音がして落ちてきたのは一人の人間。

漆黒の修道服を着たシスター。

「シスター・ルチア……」

一人のシスターが、地面に倒れ伏しているシスターの名前を口にする。
だが、倒れ伏しているシスターは全く動かない。

「い、いやぁ……」

その声にその場にいる全員が硬直した。
およそ人が出せると思えない音色だった。
その声は人が出せるような声なのかと思えるほどであった。

ルチアはゆっくりとだが、体を赤ん坊のように丸めて両手で自分の体を抱きしめた。
カタカタと震えており、悪夢に怯えているかのようだった。

「どけ」

その声に反応して、まるで海が割れるかのごとくシスターたちが道をあける。
その道をアリシアは我が物顔で歩く。

ルチアの足元まで近寄ると、その髪を無造作に掴む。
短い悲鳴を上げてルチアが苦悶の声を上げた。

「どうした？　まだ後四百回は残っておるぞ？」

ルチアの顔をのぞき込みながらアリシアは言う。
その瞬間、ルチアの顔には様々な感情が浮かんでいった。
絶望、恐怖、畏怖、どれでもなければどれとも取れる顔をしていた。

「ふん」

その顔を見て、アリシアはつまらなさそうにしながらルチアの顔を地面に叩きつける。
そして小さな足で頭を踏みつけながら言った。

「さっきまでの威勢はどこにいった？」

グリグリと頭を踏みつけながら、アリシアはルチアに向かって言った。
その顔は仲間である建宮すら、息を飲むほど冷酷な笑みを浮かべていた。
建宮もシスターたちも、アリシアの行動を止めることなど出来なかった。
止めようという考えすら浮かばなかった。

人の姿をしていながら、およそ人とも思えぬ行為を行える存在。
そう思ったシスターたちが、誰ともなく一歩ずつ下がる。

こんな化物と敵対したくない。
そんな思いがシスターたちの心に蔓延していた。
誰ともなくその場から逃げ出す。一人が動けば、また一人。
気がつけば建宮を包囲していたシスターたちは一人残らず消えていた。

「おいおい、仲間を見捨てて逃げるとは酷いのぅ」

冷酷な笑いを浮かべながら、アリシアは逃げていくシスターたちを見て言った。

「お嬢ちゃん、あんた一体何者なのよな……」

「ふふん、我が名はアリシア・フォン・コル……へぶぅっ！！」

ポーズを決めて語るアリシアの頭が突然がくんと下を向いた。
否、下を向かされたと言ってもいいだろう。

「っつー、一体誰じゃ、妾の頭を……」

「ア・リ・シ・ア」

頭を押さえて文句を言ったアリシアだが、背後から聞こえた声でビクっと背筋を伸ばす。
背後の人間からは見えないが、今のアリシアは嫌な汗をだらだらと流し続けていた。

「あ、あああああああ姉上……？」

恐る恐る後ろを振り返ると、そこには漆黒の棒を片手に優菜が立っていた。
にこにこと笑みを浮かべているが、全身から怒気が漏れ出しているのが建宮にはよく分かった。

「これはどういう事でしょうか？」

のっぺりと平べったい声であった。
声だけ聞けばとてもではないが、怒っているようには見えない。
しかし顔を見れば分かる。今の優菜はとても怒っていると。

「こ、これはだな。恐怖を与えて敵対意識を奪うという兵法を実践……ストップ！　ストォォップ！　姉上のゲンコツはもう勘――

―はぐぅっ！」

アリシアが最後まで言い切る前に、再び優菜からの拳が振り下ろされた。
いわゆる悪いことをしたときにするゲンコツのようなものである。

「幾ら何でもやり過ぎです」

「ぐおおおぉぉぉ……ッ！！」

二度の拳骨を食らった為か、アリシアは地面を転がりながら悶絶していた。
その光景を呆けた顔で建宮は見る。

「よく分からんのよ……」

冷酷な存在かと思えば、今は姉から怒られている妹のような存在にも見える。
どちらが本当のアリシアなのかは、建宮にはサッパリわからなかった。

「やだ、やだやだやだやだ……」

優菜がルチアを抱き起こすと、それを怖がるかのようにルチアが暴れだす。
まるで子供のようにも見える行為だが、それほどルチアは恐怖に心が染まっていた。

「落ち着きなさい」

そんなルチアの頬を優菜はやさしく撫でる。
最初はビクっとしたルチアだが、徐々に落ち着いたのか大人しくなっていった。

「安心して眠りなさい」

聖母の微笑みにも見える笑みで、優菜は優しくルチアを撫で続ける。
その顔から恐怖が取り除かれたかのように、ルチアは安堵した息を吐いた後静かに目を閉じた。
少しして可愛らしい寝息がルチアの口から聞こえ始めた。
優菜はルチアを優しく持ち上げると、近くの台座に寄りかからせる。
そして、心地良さそうに眠るルチアの頭を優しく撫でていた。

その光景を見て建宮は、ここが戦場だという事を忘れそうになった。
目の前の少女が、迷子の子供を安心させる母親の表情をしていた。
敵であるはずの人間すら、慈悲を与えている優菜は、まるで聖母のように建宮は見えた。

（不思議な二人組なのよな）

戦場の一角だが、この場だけが微笑ましい空気に満ちていた。
だが、その空気を引き裂くかのようにバタバタと足音が聞こえてきた。

三人は足音が聞こえる方へと視線を向ける。
『婚姻聖堂』と、斜めに配置された『礼拝聖堂』の間にある三角形

状の中庭。
そして三角形の頂点、二つの聖堂の僅かな隙間の奥に、イギリス清教のシスターであるインデックスがいた。
インデックスはローマ正教のシスターたちから逃げてきたようだが、別方向からの集団とぶつかったようである。
更に先ほど逃げ出したシスターたちも合流し、全く身動きが取れなくなっていた。

「まずっ！　急いで……ッ！」

建宮フランベルジュを担いで急いでインデックスのもとへ駆けつけようとした。
そんな彼の頭上から、男の叫び声が飛んできた。

「よせ！　今のあの子の元へは不用意に近づくんじゃない！」

三人が頭上を仰ぎ見た瞬間、『洗礼聖堂』の二階部分の窓が内側から砕け散った。
そこから砲弾のようにローマ正教のシスターが吹き飛ばされる。
気を失っており、着地すら不可能だったが彼女が地面へと叩きつけられる事はなかった。
着地地点に優菜が構えており、シスターをうまく抱きとめたのだ。

「相変わらず甘いのぅ、姉上は」

そんな優菜を見ながらアリシアは呆れたように言う。

「敵にすら甘いのは嫌いじゃないぜ。そういう馬鹿は見てて楽しいのよな」

ルチアの隣にシスターを寄りかからせる優菜を見ながら建宮は言った。
実際見たわけではないが、優菜が高い身体能力を持っているのを建宮は理解していた。
本気を出せば、シスターたちが敵う相手ではないという事も。

「それが姉上の魅力の一つだ。よく分かっているじゃないか鍬形頭」

「……名前は建宮斎字だ。鍬形頭じゃないのよな」

「いや、その頭がどうも鍬形みたいに見えたのでな。建宮殿……でよいかな？」

「どう呼んでも構わんよ。俺もアリシアちゃんと呼ぶがいいかな？」

「構わぬ」

アンバランスな二人は戦場という事も忘れて談笑していた。
そんな二人を呆れながら観ている人物がいた。

「近づかないのはいいんだが、僕を話題の外に追いやらないでほしいね」

炎剣を持つステイルだ。彼は窓からじっとインデックスを見ていた。

「近づくな、といったのは香水神父だろう。多分だが、何かしら危険な技を使うのだろう？」

「まぁね。君たちだってあんなものに巻き込まれたくはないだろう？」

建宮が訝しげな声を上げた瞬間、インデックスの辺りから爆発が起きた。
インデックスを取り囲んでいた包囲網の一角が、見えない力で薙ぎ払われたかのように無造作に吹き飛ばされた。
直撃したのは十人前後のシスターたち。
だが、何十メートルと離れている建宮たちの元にすら、吹き飛ばされてきたシスターがいる。
包囲網のシスターたちが呆然としていると、再び爆発が起きて更にシスターたちが宙を舞った。

「……何なのよ、こりゃあ」

建宮は足元に転がったシスターを見る。
先ほどのルチアがしていたのと殆ど同じような感じであった。
顔は絶望一色に塗り潰されおり、体を赤ん坊のように丸めて両手で頭を押さえつけている。
気を失っているが、それでもなお悪夢に怯えるようにカタカタと震えていた。

「妾のとは少し違うが……矛盾点を突かれたのかな？」

ステイルが二階の窓から建宮たちの近くへと着地する。

「天草式の君も十字教なら分かっているだろう。十字教の様式には、それぞれ弱点がある。その弱点を直すために宗派が生み出された。だが、それは更に別の弱点や矛盾を作り上げてしまった」

「宗派の特色というヤツか」

「……それが何だってのよ？」

フランベルジュでトントンと肩を叩きながらステイルに問う。

さっき足元にいたシスターは、いつの間にやら優菜がさっきのシスターと同じように寄りかからせていた。

ステイルは特に気にした様子もなく、視線をインデックスの方に向けながら言った。

「世界の叡智、十万三千冊のあらゆる知識を使って、十字教の教義の信仰にある『矛盾点』を糾弾する『魔滅の声（シェオールフィア）』さ。十字教というOSに従って動いている人間にとっては、教義の矛盾点を的確に貫く『魔滅の声（シェオールフィア）』は天敵と言っても良い」

インデックスの何気ない『ささやき』が、漆黒の修道服を着たシスターたちを吹き飛ばしていく。

「魔道書を単に読むだけじゃない。『強制詠唱（スペルインターセプト）』や『魔滅の声（シェオールフィア）』など、あの子は魔力がなくとも魔道書を使いこなす。魔道図書館としてあれほど相応しい人材は他にないだろうね」

煙草に火をつけながらステイルは言った。

彼らを取り巻くシスターたちはいない。

先ほどの事もあったが、殆どがインデックスの方へ向かっているのだ。

「あんな隠し玉があんなら何で最初っから使わんかったのよ？」

「あの攻撃は繊細で面倒な一面があるのさ。あの技は集団心理ってヤツに働きかけて心の防壁を突破する足がかりにしているって訳だ。だから『複数の思想を持つ混戦した一集団』にはかかりづらい弊害

がある」

「十字教なんぞの教えがない妾にはとんと効かないという弱点もあるがな」

ステイルの言葉に付け足すように、アリシアはニヤニヤと笑いながら言った。

「……他にも魔道書を書けるような存在は、特殊なプロテクトがかかっているから効果はないね。最も、そんな存在は全世界でも極少数しかいないだろうがね」

ステイルの説明に建宮は半分感心半分呆れといった顔で聞いていた。

「気になっていたんだがね、どうしてコルネリウス家の者が学園都市にいるのだい？」

煙草の煙を吹き出しながら、ステイルはアリシアを見ずに尋ねる。

「妾にも色々と事情があるのよ。安心しろ、香水神父。別に禁書目録殿に何かする気も狙う気もない」

今にも炎剣で襲ってきそうなステイルだが、そんなステイルをアリシアはニヤニヤしながら見ていた。

「貴様の惚れている禁書目録殿を狙うはずもなかろう」

「ぶはっ！」

アリシアの問いにステイルは呼吸が詰まったのかわなわなと震え始

めた。
口に咥えていた煙草が弧を描いて飛んでいく。

「な、何を根拠にそう言っているのかな」

「……バレていないとでも思っていたのか？」

自分としては隠していたつもりでも、周りからは一発でバレているステイルであった。
視線を建宮の方へ向けると、建宮はニヤニヤしながらステイルを見ていた。
その顔を見てステイルは理解した。建宮もまたそう思っているという事に。

「君たちは誤解している。僕の尊敬する女性はエリザベス一世で好みのタイプは聖女マルタだ。愛と慈悲の祈りのみで……」

あたふたと否定しながらステイルは言うが、最後まで言い切ることはなかった。
それは新たな足音が頭上から聞こえたから。
仰ぎ見れば、中庭を挟む二つの聖堂の屋根にそれぞれ何十人というシスターたちが立っていた。

バランスの崩壊

「騒いでんじゃないですよ、ばかみたいに見えちまいますよ」

自分の周りでオロオロとするシスターたちを叱咤するかのようにアニェーゼは言った。

彼女は大理石の柱に背を預けて、腕を組んだまま軽く眼を閉じている。

対して彼女を護衛するシスターたちは、爆発音や激突音が聞こえるたびに肩を震わせていた。

護衛するシスターたちが、まるでアニェーゼに護衛されているという光景である。

「し、しかし、アニェーゼ様」

アニェーゼの言葉にアンジェレネが過敏に反応した。

「シスター・ルチアはあの銀髪少女に連れ去られてしまいましたし、戦闘が始まってから十分以上立っているのに何も報告が上がってこないのですよ。オルソラを数に入れても、アレだけの人数差、でですよ？」

「……」

不安な言葉を並べているのに、アンジェレネの顔は少しだけ安堵の色が含まれていた。

おそらく誰かと話すことで緊張を紛らわせようと考えたのであろう。

しかし、アニェーゼはそれに付き合う気がないのか、つまらなさそうにアンジェレネを見ていた。

「こんなの普通じゃありません。わ、私たちも動きましょう。少しでも人数が多いほうが……」

「意味がないからやめときなさい」

心底つまらなさそうな顔して、心底つまらなさそうな声でアニェーゼは言った。

「オルソラも連れ去られてしまいましたし、このまま再び逃げられては……」

「逃げられやしませんよ」

確信めいた雰囲気で、アニェーゼはアンジェレネの言葉を遮って言い切った。

しかしその事を説明するのが億劫だと言いたげな感じで更に言った。

「逃げられるはずがありません。そういう風にできちまってんです、このくそったれな世界は」

インデックスとシスターたちのバランスは突如として崩壊した。

きっかけは集団の一人、おそらくそれなりの立場に立つであろうシスターの言葉であった。

「攻撃を重視、防御を軽視、玉砕覚悟で我らが主の敵を殲滅せよ！！」

本来ならルチアが担当するような位置だが、現在ルチアは戦闘不能になっている。
よって代理の人間が、シスターたちに命を下したのだろう。
その声で、百人を越えるシスターたちの動きがピタリと止まった。
そして全員が呼吸を合わせて、衣服の中から何かを取り出す。

左右の手に握られていたのは、高級そうな万年筆だった。

それを握っている彼女たちの顔に表情は全く消え失せていた。
インデックスがその行動を訝しげに思った瞬間。

シスターたちは一切の迷いなく己の両耳の鼓膜を万年筆で突き破った。

魔術攻撃を予想していたインデックスの予想は大きく裏切られた。
それも酷く嫌な方向で。

「まさか……！」

ぐちゅりと葡萄の粒を指で潰すような音が響く。
万年筆を刺した耳の穴から真っ赤な鮮血がだらりと溢れる。
鼓膜を破ると、万年筆を投げ捨てて再び武器を構える。
地面に転がる万年筆の尖った先端に、血に濡れた白い糸のようなものがべたりとこびりついていた。
それを見たインデックスは、体の奥から猛烈な吐き気が込み上がってくるのを感じた。
言わなくても分かる。あれは人の鼓膜だという事が。

「『魔滅の声（シェオールフィア）』を、回避するために……鼓膜を……」

聞こえなければ『魔滅の声（シェオールフィア）』は効果を生まない。
唯一の防御策を何の躊躇いもなく実行したシスターたちに、インデックスは戦慄のようなものを感じた。
攻撃の力を失ったインデックスを屠るため、シスターたちは一気に襲いかかっていた。

しかし突如としてインデックスの姿が掻き消える。
ノイズのような音がした後、代わりに別の人間が立っていた。

「ふん。『魔滅の声（シェオールフィア）』を回避するために鼓膜を破るか。弱い、弱いなぁ……そんな事でしか回避できないとはな」

銀髪を靡かせた少女、アリシアがつまらなさそうな顔をして立っていた。
普通ならシスターたちは躊躇いを見せたが、既に玉砕覚悟のシスターたちに恐怖はない。
インデックスへ向けるべき刃を、そのままアリシアへと切り替えそのまま襲いかかった。

「愚か者が！」

怒声と共にアリシアは地面へ拳を打ち立てる。
瞬間、ドンッ！と何かが爆発するような音があたりに響き渡った。

アリシアを基点として、強大な爆風が発生していたのだ。
突如として発生した爆風にシスターたちは為す術も無く吹き飛ばされていた。

だが爆風のダメージから復帰すると、シスターたちは次々と立ち上がった。

「こっちだ！」

そこへ手近な建物『終油聖堂』の両開きの扉を開け放って当麻が叫んだ。

インデックス、優菜、ステイル、建宮、アリシアの四人は辛うじて聖堂の中へと飛び込む。

当麻が急いで扉を閉めると同時、厚さ五センチを越す黒樫の板に無数の刃が次々と貫通された。

当麻はへなへなと冷たい大理石の床に座り込む。

「とりあえず、全員無事みたいだな……」

「そうでございますね」

当麻の言葉にオルソラが答える。

そこでステイルと建宮は驚きに目を見開く。

オルソラは何の支えも無しに、自らの足でその場に立っていたのだ。

救出当初はアレほど傷めつけられていたはず。

なのに、どうして自分の足で立っていられるのか。

ステイルと建宮には、何が起きたかさっぱりわからなかった。

「……で、どうするよ。これから？」

ステイルたちはまだ固まっていたが、それらを無視して当麻は話題を周りにふる。

しかしその問いに答えられる者はいなかった。

今までバランスが保たれていた戦局が、一気に傾いてしまった事にこの場の誰もが気付いていた。
扉からは鉄杭を打ちこむような音と共に、聖堂の扉に次々と風穴が出来ていく。
残された時間は少ない。

「妾の力も、下手に使うとこの辺りに巨大なクレーターを作るしのぅ」

「いやいやいや、アリシアさん。そんな危険な力は使わなくていいですから！？」

どう聞いても味方諸共吹き飛ばすようにしか聞こえないアリシアの話に当麻は思わず突っ込む。

「私の『魔滅の声（シェオールフィア）』も、あ、あんな風に耳を潰されちゃ効果が、でな、でないと思うし」

耳を潰す光景を思い出したのか、インデックスは真っ青な顔をしながら言った。
彼女が使った『魔滅の声（シェオールフィア）』は聞こえなければ効果は生まれない。
だからシスターたちは聞こえないように鼓膜を破った。

「ローマ正教だからな」

少し小馬鹿にしたような笑みを浮かべたアリシアがインデックスの言葉にそう付け足す。

「『強制詠唱（スペルインターセプト）』だって一度に一人しか相手に出来ないよ。流石に何百人もの相手が出す何百通りの術式へ同時に割り込むのは無理かも」

そしてもう一つの『強制詠唱（スペルインターセプト）』も、単体向けの力となる。
故に集団戦に向いていない。あくまで一対一向けの攻撃方法である。

「ウチの部下も頑張っちゃいるようだが、難しそうってなもんよ。
人間、何が一番怖いって自滅覚悟で襲いかかってくる事よ。全てを捨てた人間ってのは怖いものがないのよな」

「既に死んだ兵士、死兵ですね……」

苦々しい口調でいう建宮に付け足すように、優菜の言葉が重なる。
更にそれに重なるように、扉に刺さった刃が引き抜かれる音が聞こえる。
その穴から無数の眼球がこちらを覗いていた。

猶予はおよそ数分。
その間に戦局を変える策が浮かばなければ、泥沼のような戦闘へと発展する。
それは犠牲者が出てくる事を暗に示していた。

「はぁ……もしも、この場に『法の書』があれば、私の解読法と合わせて活路が見いだせるかもしれないのでございますけど」

ため息と共にオルソラが言った。
しかしオルソラに向かってアリシアはニヤニヤと笑いながら言った。

「やめとけ、オルソラ＝アクィナス。なれの解読法なんて無意味じゃ」

「なっ……」

アリシアの声にオルソラが身を固める。
だがアリシアは気にせず更に言う。

「禁書目録殿、なれなら分かるだろう？　『法の書』の怖い所は、解読法が百通りを超える所にある。しかも、それが文章として通じてしまう所じゃな」

アリシアの言葉に、インデックスは心底苦い顔をしながら言う。

「……ありしあの言う通りなんだよ。『法の書』は誰にも読めないんじゃない。本当は誰でも読めるけど、誰もが間違った解読法に誘導されてしまう恐ろしい魔道書なんだよ」

「そ……んな」

オルソラの喉が干上がった声を上げる。
その顔からあらゆる希望が消えていく。
だが、そんなオルソラに過酷な事実を笑みを浮かべながらアリシアは言った。

「おおかた、テムラーか何かの文字置換法と思ったのじゃろう。もしそうなら、それはトラップとして用意されたダミー解答じゃ」

オルソラの全身が一瞬で凍りついた。その顔から事実だと当麻ですら分かった。

「まぁよかったじゃないか。偽りの解答なぞ誰も……へぶぅっ！！」

胸の中に大事に抱えていた宝物を土足で踏みにじるようなアリシア

の態度に、当麻は奥歯を噛み締めていた。
だが、当麻が何かを叫ぶ前にアリシアの頭に何かが落ちてきた。
毎度ながら優菜のげんこつである。

「言いたいことはわかりますが、もう少し優しくいいなさい」

「おおぉぉぉ……ッ！」

よほど痛いのか頭を両手で抱えながら、大理石の床をゴロゴロと転げまわる。
床からアリシアから苦悶の声が聴こえるが、優菜は全く無視してオルソラを見る。

「希望を捨ててはいけませんよ、オルソラさん」

優菜の声にオルソラは反応しなかった。
無理もない。
命をかけてまで解読に挑み、そこで得た知識は皆を幸せに出来ると信じていたのに。
土壇場でそれが覆された。何も出来なくなった。
魔道書の原典を破壊する事も、仲間を助ける事も。

「当麻」

ため息と吐くと、優菜は当麻を手招きする。
ハテナマークを浮かべながら、当麻は優菜の元にいくと優菜はゴソゴソと何かを耳打ちをする。

「えぇ！　俺が言うの！？」

「貴方以外に適任者はいません」

驚きの声を上げる当麻に、それを冷静に突き放す優菜。
他の三人は何の事かわからず、訝しげな顔をする。
そして当麻が一つ咳払いをすると、オルソラの前に立つ。

「オ、オルソラ！」

「？」

当麻の声に辛うじて反応するオルソラ。
だが、その顔は絶望の一色に染まっていた。
その顔を見て、当麻は自然と言葉が頭に浮かんでくる。

「確かにお前は『法の書』の解読を間違ったかもしれねぇ。だけどよ、たった一度の失敗で希望を捨てるんじゃねぇ！」

その顔を見たくない。その思いが当麻の口を動かす。

「願ったんだろう！　魔道書の原典で人が争わなくなる世界を！　だったらここで挫けている場合じゃねぇぞ！　お前が挫ければ誰が魔道書の原典を壊せれるんだよ！！」

扉から聞こえる衝撃の音に負けないほど当麻は叫ぶ。
その声に反応したのか、オルソラは徐々にだが瞳に色を灯し始める。

「だから諦めるんじゃねぇ！　お前は決して一人なんかじゃねぇ！　俺を！　仲間を信じて！　どこまでもお前が進むべきと信じた道を走っていけ！　それでもお前が道を進めないというのなら！！！」

当麻はオルソラの目の前にまで右手を突き出す。
その勢いで、少しだけふわりとオルソラの髪が揺れる。

「まずはその幻想をぶち殺す！！！」

当麻の声に建宮は口笛をふき、アリシアはくすくすと笑っていた。
インデックスとステイルは呆れながらも少しだけ笑みを浮かべていた。

「……そう、でございますね」

やるべき事はなくなった。掴むべき希望は永遠に失われた。
そう思っていたオルソラの心に火が灯る。

「一度の失敗で挫けている場合ではございません」

瞳に色を灯し、オルソラは当麻を見上げながら優しく微笑んだ。

「あなた様の言う通りでございます。ここで希望を捨てては、私を助けてくださった方々に失礼でございます」

「ああ……」

オルソラの瞳をじっと見つめながら当麻は頷く。
対してオルソラは当麻の右手を慈しむように両手で包み込む。

「わっはっは、いい雰囲気じゃないのよな。俺たちはお邪魔虫だな」

「兄上は女を落とすテクがうまいのぅ」

「こんな時でも女の子の好感度上げとか、とうまはある意味凄いかも」

「どこまで女好きなのかね、上条当麻」

そんな二人を冷やかすように周りの人間ははやしたてる。

「ちょっとまてぇ！　上条さんはオルソラを元気づけようとしただけでですよ！？」

「あなた様の言葉、一字一句心に刻みつけたのでございますよ」

光すら放ちそうな笑みを浮かべてオルソラは言う。

その顔を見た当麻は、自身の顔を赤くして黙るしかなかった。

「やれやれ、元気づけろとはいいましたが……お姉ちゃんは将来が心配です」

「優菜まで！　お姉様は信じてくれないんですか！？」

当麻の叫びに周りの人間は笑った。

その笑いは諦めきった笑いではない。

希望を捨てず、未来を切り開く人の笑い。

「当麻」

やがて優菜は当麻を見ながら優しく言った。

「決着は貴方がつけなさい」

何を、という無粋な事は言わなかった。
優菜の言葉に当麻は短く頷く。

「いい眼です。では、お姉ちゃんは貴方の進むべき道を切り開きましょう」

背中から漆黒の棒を取り出し連結する。
優菜が持つ未元物質の武具。
この世の物質ではないモノで出来た代物。

「本来なら学園都市の外では能力の使用を控えるべきですが……」

ニメートルの棒を構えつつ優菜は言葉を発する。
それに呼応するかのように、優菜が持つ雰囲気が徐々に変わる。

「幸いにも私のは分かりにくいので、誤魔化しはある程度効きますからね」

少女にしか見えないのに、まるで血塗られた戦士のような雰囲気が優菜から漂う。

「恩師より授かりし誓いの名」

当麻はその気に当てられて、思わずつばを飲み込む。

「我が力は守るべき人の為だけに行使する」

優菜の言葉と共に、一際大きな衝撃音がしたと思うと両開きの扉が破壊された。
当麻たちがニ、三の言葉をかわすと同時に、葬式にまつわる儀式を

行う教会に武器を携えたシスターたちが雪崩れ込んでくる。

容赦無き武人の行進

一対百五十。
これを聞いて勝利をするのは百五十人の方だと、十人中十人が答えるであろう。
単純計算しても、百五十人という人数から勝利を得るには相当な策略が必要であろう。
しかし常識的には無理でも、決して不可能ではない。

世界に極少数だが、そんな人数差を真正面から叩き潰せる存在がいる。

その少数に入る存在は学園都市にもいる。
学園都市に七人しかいない最高レベルの能力者。
一人で軍隊と戦えるほどの力を有する存在。
学園都市で彼らはこう呼ばれている。

レベル５（超能力者）と。

アニェーゼ部隊のうち、六割にたちするほどの集団が『終油聖堂』に集まった。
理由は単純、現在の『終油聖堂』には神の敵である集団の頭が逃げ込んでいたのだ。
集団組織の場合、頭がやられればその集団が崩壊するのは定石だ。
しかし漆黒の修道服を着たシスターたちの思惑は外れる。

「撤退！　この場は危険！　早く……」

耳の聞こえないシスターのために身振りで指令を与えていたシスター。

しかし突如としてその体は崩れ落ちる。

何の理由もなく崩れ落ちたシスターを見た数人も、秒を置かず崩れ落ちていく。

外傷はない。何か魔術的措置をされた形跡もない。

純粋にただ気絶しただけ、ただそれだけだが問題は『何故気絶した』かが分からない点だ。

「安心しなさい。死んではいませんよ」

鼓膜を破ったシスターには他人の声が聞こえない。

なのにその声に反応するかのように、全員が声の方に視線を振り向かせる。

そこに立っていたのは優菜ただ一人。

「純粋に能力を使った戦闘は初めてです。使い勝手はいいですが、頼りすぎても良くありませんね」

優菜の姿を見た何人かのシスターたちが玉砕覚悟で突撃する。

だがそれを見た優菜はその場から動こうとしなかった。

そしてシスターの手にある武器が優菜を貫くかに見えた。

しかし優菜に触れる直前、武器は見えない壁に叩きつけられたかのように壊れてしまった。

破壊された武器を見て、シスターはあり得ないモノを見たかのよう

な顔をした。
目の前の人間が動いた形跡はなかったはず。なのに何故、武器が破壊されたのだ。
不可解な現象に困惑するが、その事を考える暇は与えられなかった。
優菜の手がシスターの頬に触れる。
瞬間、ネジの切れた人形のようにシスターが全身の力を抜いて床に崩れ落ちた。

「アリシアの魔術『幻想の城（トロイメライ・シュロス）』の効果は凄いですね」

優菜はアリシアがかけた魔術の凄さに改めて感心する。
この魔術をかけてもらう時の自信満々なアリシアの説明を優菜は思い出す。

防御魔術『幻想の城（トロイメライ・シュロス）』は対十字教の為にコルネリウス家が総力を上げて作った術式。
他者に付加する事で、物理・魔術を問わずダメージを弾き返す。
他にもメリットはあるらしいが、大きなメリットはそのぐらいとの事。
反面、デメリットもかなり大きい。
まず術者、この場合アリシアが防御魔術に全てを取られるのでその他の行動が出来ない。
対十字教の術式なので、十字教の人間に付加をする事は出来ない。
他人に付加出来るが術者自身に付加は不可能。
アリシアの魔力では補助がなければ十分ぐらいで切れる。
使い所が難しいと、アリシア自身も語っていた。

（余り時間をかける事も出来ませんね。短期決戦で行きましょう）

未だ呆然としているシスターたちに優菜は次々と触れていく。

優菜が持つ学園都市レベル5の力。レベル5中最弱と評された『天上霊薬』。
だが使い方を選べば、凶悪な力を振るう事も出来る。

優菜は相手の生命活動に関する制御権を奪うことが出来る。
ならば、その力でシスターたちを気絶させていけばいい。
どんなに屈強な人間でも、自分の体が『気絶する事』を選択したなら抗う事などできない。
しかし欠点は分り易するので、対策も簡単である。

触れさせなければいい。

単にそれだけの話。シスターたちもすぐにそれに気付く。
だが、それは相手が普通に動く存在ならの話だ。
音速に近い動きが出来る相手に、果たして触れさせずに対応する事など可能であろうか。
答えは否である。一度でも触れさせれば、その時点でゲームオーバーだ。
だからこそ優菜にとっても、この弱点は初めから読まれても問題はないのだ。

優菜の攻撃にシスターたちは抗う事が出来ない。

物理攻撃が効かない、魔術も効かない。
相手のスピードは目で追えないぐらい速い。
謎の攻撃によって接触されれば戦闘不能に追いやられる。
現状は分かっても肝心な部分がまるで見えない。

見えない恐怖にシスターたちは蝕まれていく。
眼に見える、というのはある程度の精神的な安定をもたらす。

だが眼に見えないというのは、想像力によっては際限のない恐怖に陥っていくのだ。

優菜の姿がふわりと消えるたびに、次々とシスターたちが崩れ落ちていく。

僅か五分で、シスターたちと優菜の立場は完全に逆転していた。

「時間をかける気はありません。残念ですが、一気に片付けさせてもらいます」

その言葉通りシスターたちは次々と撃破されていった。

残っていたシスターたちは、辺りを見渡して愕然とする。

立っている者は、既に数えるほどしかいないという現実に。

「終わりです」

その言葉と同時に、愕然としていたシスターも地面に崩れ落ちる。

アニェーゼがアンジェレネたちを追い出して更に十分が経過した。

追い出した理由は簡単、単に目の前をチョロチョロとされて鬱陶しいとアニェーゼが思ったからだ。

護衛の任務を解いて、戦列に加わるように命令を下した。

見えない恐怖に怯えるよりは、戦列に加わって戦うほうが気楽と思ったのだろう。

直接戦闘に出向く方が危険は高いのに、彼女たちは明るい顔で戦場へ向かっていった。

（それほど慌てる必要もないのに、どうして緊張しちまうんですかね）

小心な部下たちの様子を思い出して、アニェーゼはため息を吐く。
同じような場数を踏んでいるはずなのに、どうして戦場の流れを読めないのか。
音を聞けば、敵が防戦一方になっているのは手に取るように分かる。

（少しは教育をしないといけねぇです）

それなのに小心な部下たちは、戦場を読めずに怯えていた。
もう少し教育が必要かなとアニェーゼは気楽にそんな事を考えていた。

（おや？）

ふと戦闘のリズムに合わない異質な雑音を聞き取る。
よく聞くと、それは足音でありまっすぐこちらに向かっている。
そして教会の両開きの扉を勢い良く開け放った。

扉を開けた人物は当麻、だがその顔を見てもアニェーゼは顔色ひとつ変えなかった。
むしろ、その顔は笑みすら浮かべていた。

「どう考えたってあれだけの人数を相手にしちまいながら、自由に敷地内を移動出来るとは思えないんですけどね」

大理石の柱に背を預けるアニェーゼの言葉に、当麻は荒い息を吐きながら言う。

「……信じられないかもしれねぇけどよ」

「あん？」

「テメェんとこの部下なら、六割方は戦闘不能になってるぜ」

当麻の言葉にアニェーゼは片目を閉じながら言う。

「馬鹿いってんじゃないですよ。ウチの戦力が全力でかかれば」

「それにな、作戦もあるしな」

アニェーゼが言い切る前に当麻は更に揺さぶりをかける。

「ああ……なるほどなるほど、そういう訳なんですか。あなた、仲間を囮にしちまったんですか」

アニェーゼは愉快そうに笑いながら言った。
だがそんなアニェーゼの言葉に当麻は無言を貫く。

「あはは！　まったく笑っちまいますよね。結局あなたは今こうして誰かを騙しているのですから。オルソラ＝アクィナスは言っていましたよ。あなたたちは信じる事で行動する、とか何とか」

嘲りの声でアニェーゼはひたすら当麻を罵る。

「俺は信じているよ、あいつらをな。あいつらにはあいつらにしか出来ない事がある、そして俺にはそれが出来ない。だから他の役をもらっただけさ」

だが、当麻は全く悪意のない笑みを浮かべながら言った。

「あいつらにも信じてもらえると嬉しいけどな。こっちの問題はこっちで片付けられるって」

「司令塔である私を倒せば全てが終わるとでも？　良くもまぁ、そんな都合の良い想像ができますね」

そう言いながらアニェーゼは大理石の柱から背を話す。
そして床に転がっていた銀の杖を爪先で蹴り上げると片手で掴み取る。

「怠惰は罪ですからね。あなたの希望を打ち砕いておく事で罪を回避しちまいますか！」

アニェーゼの背後、二階のステンドグラスを嵌める予定の窓枠に二匹の獣と一人の少女がいた。

「あは、あはは、あはははははははははははははは！！」

一人の少女が腹を抱えて笑う。
その笑い声はあまりにも禍々しい声をしていた。

「あー面白い。幻想殺しの坊やは全然変わってないわね」

そして不思議な事がある。
彼女は大声を上げて笑っているのに、当麻もアニェーゼも気付かない。
そもそもその場にアクゼリュスがいる事すら気付いていないかのようだ。

『アクゼリュス様、あの少年と以前お会いになられたのですか？』

銀の狼、オートクレールがアクゼリュスに質問をする。
アクゼリュスは笑みを浮かべながらオートクレールの質問に答える。

「以前に不完全な『神の力』と遊んだ時にちょっとね」

『そんなに大した存在には見えませんがねぇ？　単なるジャリガキにしか見えねぇ』

アクゼリュスの左側にいる金の狼が、半分呆れながらアクゼリュスの言葉に口を挟む。
金の狼、フラガラッハである。
サイズはオートクレールより少し大きめ程度で、その他に違いはないように見える。
しかし、唯一オートクレールと違う点はその大きな牙であろう。
およそ四十センチに及ぶ短刀状の牙は、まるで王者の威風を漂わせる。
オートクレールには、フラガラッハ程の大きな牙は存在しない。

『口を慎め、フラガラッハ。貴様はアクゼリュス様に異を唱えるつもりか？』

『そーいうつもりはねぇよ。俺は単にあのガキがアクゼリュス様に

気に入られるほどの存在か、と疑問に思っただけだ』

粗暴な口調でオートクレールの問いに答えるフラガラッハ。
知的な雰囲気を漂わすオートクレールに対して、フラガラッハはまるで粗暴な雰囲気を漂わす。
悪い言い方をすれば、フラガラッハは少々頭が足りないようにも見える。

『貴様程度ではアクゼリュス様のお考えなど理解できるはずもなかろう。黙って成り行きを見ておれ』

これ以上下らないことは言いたくない、そう言いたげにオートクレールは会話を一方的に打ち切る。
フラガラッハもアクゼリュスの前でわめき散らす気はないのか、舌打ちをしてから視線を当麻へ向ける。

「しかしアリシアも『幻想の城（トロイメライ・シュロス）』なんか使っちゃって……『封印』に使う魔力なんて残るのかしら」

アリシアがいる『終油聖堂』の方を見ながらアクゼリュスは言う。
アクゼリュスに倣って、オートクレールとフラガラッハも同じ方向に視線を向ける。

『……完全に封印が解けた場合は、アリシアを殺す必要が出てきますが？』

『その前にあの体が耐え切れずにボンって破裂するんじゃねぇの』

オートクレールの言葉にフラガラッハが下卑た笑いをしながら口を挟む。

『お前としちゃ、アリシアは小さい頃から見てたから心苦しんじゃねぇの？　あぁ？　オートクレールよぉ』

『……封印が解けた場合はそれ相応の処罰を行うだけだ。そこに私の私情を挟む必要はない』

『ひゃはははは！　そう言いながらお前って案外アリシアに甘い』

オートクレールとフラガラッハは言い争うが、たった一言でその言い争いは止められる事となる。

「黙れ」

二匹の主、アクゼリュスである。
アクゼリュスの気配が凄みを増し、場の空気が完全に支配された。
その声にオートクレールとフラガラッハは口を閉じる以外出来なかった。
下手に声を出せば、その瞬間に存在そのものを否定し尽くされる。
それは二匹にとって死を意味する。

「人の頭の上で喚くんじゃないわよ、駄犬どもが」

つまらなさそうな顔でアクゼリュスは二匹を一睨みする。

「眼下の戦闘がつまらなくなるでしょう。喚くなら私の見えない所でしなさい」

禍々しい笑みを浮かべながら、アクゼリュスは当麻の方へ視線を向ける。

アクゼリュスから見れば児戯に等しい戦闘。
だが、彼女はそれを楽しんで眺めていた。

（我ら神獣を一睨みで黙らせれるほどの強さを誇るアクゼリュス様が、何故あの少年に強い興味を持たれるのだ……）

オートクレールはアクゼリュスに倣って黙って当麻たちの戦闘を見る。
フラガラッハも同じように見ていたが、その視線は明らかに暇そうな雰囲気を出していた。

（たかだか一人の人間程度。戦闘は児戯にも等しい）

オートクレールは視線をアクゼリュスに向ける。
そこにはある意味純粋な笑みを浮かべたアクゼリュスの顔があった。
明らかに戦闘を、否、当麻を見て楽しんでいる。

（やはり私程度では理解する事など出来ぬか）

オートクレールはそう結論を出すと、これ以上の思考は無駄と判断した。
そしてアクゼリュスに倣って当麻の戦闘を眺めることにした。

アニェーゼとの対決

当麻はアニェーゼとの距離を目測で測る。

（だいたい十五メートルってところか……障害物もねぇし、魔術を使っても何とかなるな）

障害物もないので、魔術による二次災害を気にする必要もない当麻。
圧倒的に有利な当麻だが、油断も慢心もしていなかった。
それはアニェーゼが持っている杖。

（あの銀の杖……一体どんな用途に使うんだ？）

アニェーゼの使う魔術が分からないので、当麻には十五メートルを一気に縮める事は出来なかった。
下手に突撃して自滅しては、信じてくれている仲間に申し訳ないからだ。

「万物照応、五大の素の第五。平和と秩序の象徴『司教杖』を展開」

両手で杖を抱き、祈りの言葉を発するアニェーゼ。
その声に呼応するかのように、杖の先端にあったモノが花のように開いた。
それは六枚の羽。

「偶像の一。神の子と十字架の法則に従い、異なる物と異なる者を接続せよ」

その羽根は時計の文字盤のように、円を六等分する形で配置されて

いく。
やがて祈りの言葉が終わると、アニェーゼは杖を軽く振る。

（……？）

アニェーゼの振るわれた一撃で、杖の先が大理石の柱に軽くぶつかる。
其の攻撃は明らかに間合いの外。
何のためにした行動かと当麻は訝しげに思っていた。
其の瞬間、頭に強烈な痛みと共に当麻の視界は九十度真横に折れ曲がった。

「が……っ！！」

何かで殴られたと当麻は理解したが、体は既に硬い大理石の床に倒れ込んでいた。
霞む視界を何とか元に戻した時、アニェーゼは持っていた杖で大理石の床を叩いていた。

（まずっ！）

危険を感じた当麻は床を転がる。
当麻が避けた瞬間、直前まで彼の頭があった所にハンマーが振り下ろされたかのように床に窪みと亀裂が生じた。
悪寒を感じていた当麻だが、アニェーゼは気にせず次の攻撃へ移る。
懐からナイフを取り出し、それで杖の側面をメッタ切りにする。
すぐに奇妙な異音と共に空気が見えざる何かに切り裂かれていく。

「……その杖と連動してるのか……」

「ははっ。そりゃ流石に気づいちまいますか。コイツを傷つけると連動して他の物に傷がつく。だけど知った所でどうしようもねぇでしょう？」

ナイフで側面を傷つけると見せかけて、ナイフを滑らせてその勢いで杖を床に叩きつける。
当麻は真上から襲ってきた衝撃に対処できず、肩が不自然に落ちかけた。

アニェーゼの攻撃も異能の力を利用しているから、幻想殺しで防ぐことは可能だろう。
だがどこから攻撃が来るのかがわからない以上、当麻にはアニェーゼの攻撃を右手で防ぐ事はできない。

ニヤリと笑みを浮かべたアニェーゼは、手近な大理石の柱へフルスイングで杖を叩きつける。
まずいと思った当麻は、慌てて横へ飛ぶ。
だが避けたと思った当麻の右脇腹に、強烈な衝撃が襲いかかった。

「ぐっ……！！」

避けたと思ったのに、アニェーゼの攻撃にあたった。
攻撃から魔術の発動まで一秒に見たないが若干の余裕があると思っていた。
なのに攻撃を食らった、その事が当麻の頭を真っ白にしていく。

アニェーゼが杖の先で床を叩くのを見た当麻は、とっさに転がって避ける。
しかし当麻の胸には強烈な叩きつけが襲ってきた。
体中の酸素を強引に吐き出された当麻だが、それでも後ろへ下がろ

うとした。
だがそれを読んでいたかのように、当麻の背中が斜めに切り裂かれる。

「がっ、あああああああああああっ！？」

背中をナイフで切り裂かれたかのように、当麻の背中に焼きつくような痛みが襲う。
余りの激痛にのた打ち回る当麻に、アニェーゼは杖を横にふる。
大理石の柱にぶつかると同時に、当麻は飛び石のように床を飛んだ。

「いつまでも単調な攻撃と思わねえ事です。あなたの回避位置を考えた上で、空間に攻撃を『設置』しちまえば、そっちが勝手に自滅しちまうって寸法です。大したネタでもねえですよ」

アニェーゼは既に勝利を確信しているのか、ペラペラと自慢の杖について語る。
当麻は殆ど聞き取れていなかったが、それでも頭を動かして必死に理解しようとした。

（……慢心は隙を生む、その隙が敗北に繋がる事もある。考えろ、上条当麻。アニェーゼの攻撃を回避する方法を……）

じくじくと痛む背中やあちこちの痛みに耐えながら当麻は立ち上がる。
視界の明るさがゆっくりと明滅する。既に視界すら危険な状態となっている当麻。

（どうやってアニェーゼの攻撃の方向・角度を見極める？　タイミングだけなら掴めるんだ）

必死の形相で考える当麻の顔を見て、アニェーゼは楽しそうに唇を歪める。

「五大元素は万物全てを形作るもの。ならば五大元素の杖は、何にでもその法則を適用できるんですよ。例えば空間そのものに作用させるとか、ね！」

その言葉と同時にアニェーゼは杖を杭のように柱へ叩き込む。
当麻は腹に鈍い衝撃が弾け、そのまま後ろへ転がった。
起き上がろうとして当麻は気付く。口の端から血が垂れている事に。

「……なるほどな……」

口から血を垂れ流しながら当麻は笑った。
全身ボロボロであちこち痛みながらも当麻は笑みを浮かべた。
まるで勝利を確信したかのような。

「……気に入らねえです。何なんですか、その笑みは」

「ベラベラとご自慢の杖について語ってくれてありがとうって事だよ」

「……」

小さな光だがわずかに見えたアニェーゼの攻撃を突破する方法。
それに気付いた当麻は、自分の周囲の状況を確認する。
色々とあちこちに飛ばされたが『幸運』にも、今はアニェーゼと一直線上で向かい合っている。

「まぁいいです。さっさと流れ作業で死んでください」

杖を構えたアニェーゼを見て、当麻は自分の状態を再度確認する。
がくがくと足は震え、すでに体は限界が近い事を示している。

アニェーゼの攻撃のタイミングは分かっている。
幻想殺しに触れただけで破壊できる事も分かっている。
後は攻撃の角度と方向を掴めれば、アニェーゼの攻撃を防ぐ事が出来る。

（掴めないなら……掴みやすいようにするだけさ！！）

杖を振り回すアニェーゼに、当麻は全速力で懐に飛び込もうとした。
当麻を見てアニェーゼは冷静に杖を両手で握り締めると、思い切り大理石の床へ叩きつける。
その顔に焦りはなく、一直線に向かってくる当麻の先読みが簡単だと判断したのだろう。

（……今だ！）

重たい衝撃音を聞いた当麻は、靴底を削るように急停止する。

トドメを刺すのに、一番楽な場所はどこか。
それは頭を狙えばいい。
アニェーゼにトドメを刺すよう仕向ければ、必然的に当麻の頭を狙うだろう。
受ければ頭蓋骨の粉砕は避けられないほどの一撃を。

そう、当麻の『一歩先にある頭の位置』を狙って。

「その攻撃を待ってたんだよ！！！」

一歩先の場所へ攻撃を設置しているのなら、一歩前へ進まなければ当たらない。

当麻は握りしめた右の拳で、一歩前の空間を思い切り殴り飛ばす。

その瞬間、風船が割れたような轟音と共に、本来は当麻に襲いかかるはずだった攻撃が跡形もなく消える。

「なっ！？」

異常な事態にアニェーゼは驚きに目を見開いた。

しかし、すぐに思考を取り戻すと慌てて杖を思い切り振るう。

だが当麻は既にアニェーゼの懐に飛び込んでいた。

アニェーゼの杖が大理石の柱へ直撃したのと同時に、鈍い打撃音がした。

当麻の拳がついにアニェーゼを捕らえたのである。

その衝撃でアニェーゼは吹き飛ばされ、後ろにあった大理石の柱に背中を叩きつけられた。

ぐらりとアニェーゼの意識が揺らぐ。

（ぎ、ぁ……ま、さか……）

意識のゆらぎのせいで、封じ込めていた記憶の断片が急激に浮上してくる。

必死に封じ込めようとしても、腹の奥から湧き出す吐き気でうまくいかない。

それは必死に封じ込めていた忌まわしき過去。

レンガの地面に人とねずみと羽虫となめくじが一緒になってうずく

まる、希望の消えた小さな集まり。

（戻るのか……もう一度、あそこへ）

記憶の断片が心に刺さる。レストランの裏手、ゴミ箱の中、捨てられた肉の残り。

這いずるナメクジを、ねずみの死骸の抜け毛を、ゴキブリの羽を落として。

ただ噛み潰して、噛み潰して、噛み潰すだけの日々。

（いやだ……いやだ！　戻ってたまるか、あんな場所に！　絶対に戻ってたまるか！！）

失いかけていた意識を強引に引き戻す。

痺れて力の抜けた手に無理やり力を入れて杖を握る。

ナイフが落ちようとアニェーゼは気にしない。

（戻ってたまるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！）

戦う意思を取り戻したアニェーゼは、銀の杖を握り潰すかのように、己の手に力を込める。

当麻とアニェーゼは互いの顔を睨みつける。

ふたりの距離はおよそ五メートル。どちらの攻撃も、一瞬で届く距離。

動けば勝負は一瞬で決まる。

そんな両者の神経がジリジリと削られるような雰囲気であった。

「ふん」

だが突如としてアニェーゼは杖の構えを解いた。
あまつさえ、当麻から視線を外して辺りをゆっくりと見渡す。

「もう終わっちまったみたいですよ」

当麻は一瞬何を言われたか理解できなかった。
だが遅れて気付く。辺りが静かすぎるのだ。
物音一つせず、音らしい音は一つ残らず消え去ったかのように。
外ではローマ正教のシスターたちと、仲間たちが混合部隊を作って戦っているはずなのに。
そんな状況のはずなのに、周囲を取り囲む音響が全てまとめて消えていた。

「……」

「彼らが囮になって粘っている間に、司令塔たる私を倒して話を収めるつもりだったようですけど」

勝利を確信したアニェーゼは、嘲り、罵り、そしてほんの少しの哀れみを込めて言った。

「あなたの描いた幻想は、あっさり終わっちまったようですね」

当麻は拳から力を抜き、ゆっくりと体から力を抜く。

「ああ……そうだな」

そして当麻は絶対の自信を持ってアニェーゼに告げる。

「その通りだ。お前の幻想は終わっちまったよ、アニェーゼ＝サンクティス」

アニェーゼが呆けた声を上げた瞬間、当麻の背後で『婚姻聖堂』の両開きの扉が勢い良く開け放たれる。

入ってきた人物を、アニェーゼは当麻の肩越しに見た。

『婚姻聖堂』の入り口から入ってきた人影は、見慣れた自分の部下たちではなかった。

イギリス清教の禁書目録、ステイル＝マグヌス。

天草式十字凄教の建宮斎字、そして建宮の仲間たち。

そして自分の足で立つオルソラ＝アクィナス。

それからもう一つ。

オレンジ色の炎に包まれた、人の形をした化物がステイルの横に佇んでいる。

アニェーゼは知らない。それを知っている者ならこう呼んだだろう。

『魔女狩りの王（イノケンティウス）』と。

だが、それを知っている者が見ても目を疑っただろう。

全身から放たれる熱波は周囲の空気を歪め、その背から透明な翼が無数に生えていた。

炎の密度が違う、威圧感が違う。

もはや通常の『魔女狩りの王（イノケンティウス）』では説明がつかなかった。

「使用枚数は四三〇〇枚。数の上では大した事はないが……いや、天草式ってのは馬鹿に出来ないね」

ステイルは歌うように告げる。

「そこにあるモノすべてを利用した多重構成魔法陣、こういった小細工は、僕には学びきれなさそうだ」

勢い良く燃え上がる魔女狩り(イノケンティウス)の王を自慢気に眺めながらステイルは言った。

決着

「疲れたのじゃー」

アリシアの声が聞こえたかと思うと、突如『婚姻聖堂』の壁が崩れ落ちる。

もうもうと立ち込める砂煙の奥から二人の少女が姿を現す。

「いやはや、『幻想の城（トロイメライ・シュロス）』で魔力が枯渇するかと思ったぞ」

「無茶はよくないですよ、アリシア」

優菜とアリシアである。

その声に反応したのか、アニェーゼは視線を優菜とアリシアの方へ向ける。

「ゲストのもう一人は一体何者なんです？　獰猛なコルネリウス家の人間を手懐けるなんて、普通の人間には出来ねえ芸当です」

ローマ正教がいくら圧力をかけても全く意に介さない一族。

彼らが保持している魔道書を奪おうとしても、一度として成功した試しはない。

常に何かのルールに従って動くが、他者に従った姿は一度して確認されていない。

コルネリウス家をそう認識していたアニェーゼは、アリシアと一緒にいる優菜が酷く不気味に見えた。

「誰が獰猛だ。勝手なイメージをつけるでない。そもそもお前たちローマ正教が何もしてこなければ、妾たちとて無用の争いはせんわ」

ひらひらと手を振りながらアリシアはアニェーゼの言葉を否定する。
実際、コルネリウス家から攻め込んだという話は一度としてない。
報復の意味で攻め滅ぼされた組織もあるが、きっかけはコルネリウス家を攻撃した事に起因する。
それ以外は、何もせずただじっと年月を過ごすだけであった。

「ゲストのもう一人の名前は何て言うんですか」

アリシアの言葉を無視してアニェーゼは優菜だけを睨みながら尋ねた。

「私の名前ですか？　私の名前は上条優菜です。学園都市に住む『ただの無能力者』ですよ」

「上条……優菜……」

優菜の名前を聞いた時、アニェーゼは心の何処かに引っ掛かりを覚えた。

（どこか……そう、どこかで聞いた覚えのある名前です。一体どこで……）

思い出そうとするアニェーゼだが、その思考を中断させるかのようにアリシアが言葉を口にする。

「妾は姉上の妹だからな。死が二人を分かつまで、妾は姉上と共に歩むのだ。そう誓ったからな」

一瞬の迷いも見せずアリシアは断言した。

「だからこの場にいる全員は覚えておけ。姉上に手出しをしたなら、妾は全身全霊を持ってその者を排除するとな」

優菜に手を出すなら味方でも容赦しない。

アリシアの雰囲気から、その場にいる全員がその事を理解した。

アニェーゼは視線を、優菜とアリシアから大きく開け放たれた扉の向こう側に向けた。

草木一本ない石造りの平たい庭園に、あちこちから魔力の炎が燻っている。

黒い修道服のシスターたちが覆いかぶさるように倒れていた。

体が炭化したりはしていないが、中にはそれなりに酷い火傷を負っているシスターもいた。

『魔女狩りの王（イノケンティウス）』の破壊力を目の当たりにしたシスターたちは動けなかった。

不用意に近づけば爆炎の餌食になるからと考えているのだろう。

「……数が少ねえです。せいぜい百人しかいないのはどういう事ですか……」

アニェーゼはある事に気付く。それは部下の数が余りに少なすぎるという点だ。

戦闘不能に追いやられたシスターと、武器を構えたままのシスターたちを合わせても百人程度しかいない。

大体だが全体の四割程度しかいない事となる。

「なれのお仲間なら『終油聖堂』でオネンネ中だぞ」

アニェーゼの疑問に答えるかのように、アリシアがニヤニヤと笑いながら言う。

「言っただろう、六割は戦闘不能になったって。後、作戦もあるって」

当麻は獰猛に笑いながらアニェーゼに向かって言う。

「こいつらは囮なんかじゃない。単にステイルの秘密兵器を使うための準備をしていただけさ」

当麻の説明にアニェーゼはイライラしながら聞いていた。
事細かく説明されなくても、現状を見れば大体の顛末は予測できる。
だが、イラついている理由は別にあった。

「何をやっちまってんですか！　まとめてつぶしにかかりゃあこんなヤツら！」

杖を構えると、アニェーゼは『婚姻聖堂』の外にいるシスターたちに叫ぶ。
だがシスターたちは動かない。
その事を理解したアニェーゼは部下を怒鳴りつけようとした。
しかし気づいてしまった。
シスターたちは不審を持ってしまったのだと。
倫理的に正しいと理解しても、心の何処かでそれを信じられないのだ。
今、シスターたちの心は天秤のようにギリギリの均衡を保っている状態なのだ。

「面白い、じゃないですか」

天秤が均衡を保っているのなら、それを強引に傾けてしまえばいい。
今の場で、シスターたちを使って当麻たちを叩き潰しても優勢は見せつけられない。
そうアニェーゼは理解した。
そして今の自分の立場は、そのまま当麻たちにも当てはまると同時に理解した。
当麻は仲間を使ってアニェーゼを叩き潰す事はできない。
それはシスターたちに、自分の劣勢を見せつける事となる。
そうなれば、ガタの外れたシスターたちが暴徒の群れとなして襲いかかってくる。

つまり、当麻とアニェーゼ。二人は一対一の状況になったのだ。

「……決着をつけるぞ」

当麻はそう言うと、右の拳をこれ以上無いぐらいに握り締める。
条件は五分。アニェーゼの間合いにいるが、ほんの少し踏み込めば当麻の拳も届く。
つまり、先に攻撃が届いた方がそのまま勝利者となるのだ。
だが条件は一緒でも、当麻とアニェーゼでは全く正反対の立ち位置だった。

（どうする……何を、どうすればいいのだ……ッ！）

アニェーゼにはたくさんの手札がある。

（方法は？　タイミングは？　踏み込みは！　何をどう選べば良い！！）

だが沢山ありすぎて逆にどれを切って良いのかが決断できない。
対して当麻は単純であった。
迷いもなく、力を残さず、全ての力を己の右の拳に注ぎこみ一撃を放てばよい。

「終わりだ、アニェーゼ」

当麻は迷いのない声で言う。

「テメェももう自分で分かってんだろう。テメェの幻想は、とっくの昔に殺されてんだよ」

彼は信じている。己の武器が確実に敵を倒し、勝利をつかむ事を。
信じているからこそ行動出来るのだ。

優菜は近くに落ちていた大理石の破片を持つと、軽く上に放り投げる。
やがて破片が床に落ち、音が辺りに響き渡った瞬間、火蓋は切って落とされた。

当麻は右の拳を作りアニェーゼの懐へ迷い無く突撃する。
対してアニェーゼは、満足な答えが出ずに半ば泣きそうな顔をして杖を振るう。

二つの影が激突し、壮絶な激突音が響き渡った。

その片方、アニェーゼの体が吹き飛び床の上を転がった。
あまりの衝撃にアニェーゼの手から杖が離れ、数メートルも跳ね上がった彼女は、背中を強打して酸素を全て吐き出した。

そこまでしてようやくその動きを止め、そのまま彼女は気を失っていた。

それで全てが決まった。
シスターの一人が手に持っている武器を足元へ落とす。
それは自分では勝てないという降伏の意思表示。
やがてそれは一人、また一人と続いていった。

戦いは終わった。

「ふふふ、良い成長してるわね。幻想殺しの坊やも、アリシアも」

当麻とアニェーゼの戦いを見ていたアクゼリュスは、喉を震わせて笑う。
楽しすぎてたまらない、という雰囲気がありありと感じ取れた。

『……封印は解けていないようです。どうやらアリシアもそこまで愚かではなかったという事ですね』

「封印が解けても構わないわよ。どっちにしろ私の力が戻ってくるだけだし」

オートクレールの心配をアクゼリュスはつまらなさそうな声で言う。

『しかし力を抑えて敵を倒す方が楽しいと仰られたのはアクゼリュ

ス様です。だからこそ、わざわざ力の一部を切り離してコルネリウス家に与えたはずですが……』

「今は幻想殺しの坊やのほうが面白いから、そんなのどうだっていいわ」

どんな小言を言っても、アクゼリュスは全く聞く気はないようである。

その事に若干ため息を吐くオートクレールだが、主にこれ以上の進言をするつもりもないらしい。

すぐにその口を閉じる。

「アリシアと一緒にいる上条優菜も興味深い力を持っているわね」

『あの少女の力は、治癒と肉体強化の力ですね』

「それだけじゃないわ。他にもまだ何か眠ってそうね」

アクゼリュスはじっと優菜を見る。

『私には彼女は莫大な力を有していながら、それを強引に封じ込めているように感じられます』

「……ふぅん」

優菜を見ていたアクゼリュスの眼が音もなく細まる。

「……血液ね。体に流れる血が蓋の役割をしているようね」

『血液、ですか？』

「憶測だけどね、あの子の最奥部には何かがいるわ。そして血液がそれを封じ込めている。治癒も肉体強化も血液を外に出させないための力でしょうね」

『しかし過去に二度も大量出血をしたはずですが……』

「それで徐々に血の力が薄まっているんでしょう。次に大量出血したら……そうね、刺殺が弱点ではない『聖人』クラスまで肉体強化の力が上がるでしょうね。それに伴って、治癒の力も何かしら強化されるでしょう。最も、最奥部に眠る何かの力に比べれば絞りカス程度でしょうが」

その顔に笑みはなく、真剣な顔で優菜を見ていた。

『そんな莫大な力を人間の体が耐えきれるはずがありません』

「人間ならね。でも……」

何かを言いかけたアクゼリュスだが、そっと目を閉じるとそのまま黙ってしまった。

そしてゆっくりと目をあけると、アクゼリュスは静かに言った。

「まぁいいわ。そのうちあの人間が何か策を弄するでしょう」

そして笑みを浮かべると、アクゼリュスは楽しそうに言った。

オートクレールも、そこまで興味はないのか余りアクゼリュスに進言はしなかった。

「それまでは、傍観者の立場でいましょう。時々、介入はさせても

らうけど」

傷ついた者たち

アニェーゼ部隊の損害は尋常ではなかった。
総勢二五二名のうち、無傷な人間は誰一人としていない。
火傷を負った者、骨が折れた者、怪我の出血に苦しむ者。
それらを比較的軽傷な人間が治療していく。
だが何もかもが足りなさすぎた。

「ちく……しょう……です」

治療をされたアニェーゼは悔しさについ愚痴をこぼす。
大理石の柱に寄りかかって座っている彼女は、まだ軽傷といえるレベルであった。
中には口を開くのすら出来ない者もいる。

「ア、アニェーゼ様……あの、薬品がそろそろ底をつきそうです」

そんなアニェーゼに、アンジェレネは恐る恐る話しかける。
部隊の損害用に治療薬は持ち運んでいるが、全滅クラスの量など確保していない。
よって、中には治療を受けれない人間が出始めてきた。

「分かっちゃいるんです。これだけの損害の治療薬はないって……」

「はい……近くにローマ正教の拠点もありませんし」

「目の前には学園都市。多分ですが、イギリス清教か天草式がウチらを見張っているでしょう」

忌々しげにアニェーゼは言う。
既に部隊としての行動は不可能だが、それでも何かすると思われているのだろう。
時々であるが、奇妙な気配を感じる事がある。
アニェーゼはそれを、天草式かイギリス清教の見張り役と考えていた。

「一先ず夜が明ける前に移動しちまいましょう。そうでないと……」

だがアニェーゼの発言は強引に止められる事となる。
『婚姻聖堂』の両開きの扉がゆっくりと開け放たれる。
そして開かれた扉から一人の人物が姿を現した。

「テメェは……上条優菜……何しにここに来たのですか!?」

それは、先ほどまで敵対していた優菜であった。
その顔は驚くほど無表情であった。
一体何を考えているか、その場にいる誰もが分からなかった。

優菜の存在に気付いたシスターたちは、武器を片手に立ち上がる。
だが、武器を持つというよりは武器を支えにして無理やり立ち上がるという感じであった。

「……」

優菜は無言で一歩前へ進む。無造作に進む優菜だが、誰一人として動けなかった。
満身創痍なのもあるが、アニェーゼたちは報告で彼女の強さを聞いていた。
聖人に近い強さを持つという事を。

「あぐっ」

一番優菜に近かったシスターが、激痛のあまり床に崩れ落ちる。
だが、誰一人として助け起こしに行けなかった。
殆どが立っているだけで精一杯なのだ。
誰かを助け起こす体力など残っているはずもない。

倒れ伏したシスターに、優菜は無表情で近づく。
何を考えて、何をするか分からないが、アニェーゼたちはただ見ているだけしか出来なかった。

「落ち着きなさい」

何とか逃げようとするシスターに、優菜は優しく声をかける。
そしてその体を抱き起こす。

「あ、ああ……？」

周りは勿論、抱き起こされたシスターすら驚き硬直した。
優菜の姿が恐ろしいほどに絵になっていたのだ。
それはまるで傷つき倒れた戦士を、慈愛をもって癒す聖母の姿。

そしてシスターたちは驚愕の光景を見る事となる。

「……なっ！」

優菜は怪我と思わしき場所を優しく手で触れていく。
ただ触れただけなのに、彼女が手を離した時には怪我が消えていた。
まるでそこだけが時間を巻き戻したかのように。

「あ、あれ……痛みが……」

自分の体に何が起きているのか分からないシスターは、顔を動かしてあちこち視線を彷徨わせる。

だが、それ自体が既におかしい動作であった。

彼女は数分前まで、床に倒れ伏して呻き声をあげるほどの重度の怪我人であった。

それが今では口調もしっかりし、尚且つ視線を彷徨わせるほど動けるのだ。

「もう大丈夫ですよ」

そう言って優菜はそっとシスターを立ち上がらせる。

「何が起きて……いや、何が目的なんです」

あり得ない光景を目にして、やっとアニェーゼの口から出た言葉は疑問。

自分たちは彼女の助ける人間、オルソラを痛めつけていた。

そして、それを阻止するために彼女を含む人間が自分たちと敵対した。

なのに彼女は、今度はそんな自分たちを癒そうとしている。

意味が分からない。アニェーゼは優菜の行動が分からず酷く混乱していた。

「戦いは終わりました。今も尚、私たちが憎しみあう理由は無いと思いますが？」

アニェーゼの疑問に優菜はなんでもない事と言いたげな雰囲気で答

える。

「だからって……信用出来るわけがねえです」

「信用出来ないと仰るのなら、私を利用すればいいでしょう。貴方たちはこれだけの重傷者を抱えて、ヴァチカンに帰れると思っているのですか？」

優菜の問いにアニェーゼは痛い所を突かれたような顔をする。
アニェーゼもその点を凄く気にしていた。
これだけの重傷者、中にはその場で治療を受けなければ命すら危うい可能性がある者もいる。
下手に動かし続けて死なせてしまうなど、部下を預かる者としてあるまじき行為。
そう考えていたからこそ、アニェーゼは最後まで移動するべきかどうか悩んでいた。

「私の力は先ほど見せたとおり治癒。それを利用して重傷者を救えばよろしいでしょう」

迷いなき瞳で優菜はアニェーゼを見る。

「分からねえです。何だってそこまでして救おうとするのです」

その視線を真正面から受けたアニェーゼは僅かに怯みながら更に尋ねる。

「仮にあなたを利用して治療させてもらったとしましょう。ですが、その後にウチらがそのまま貴方を見逃すと思っちまってるんですか？」

杖の先を優菜に突きつけながらアニェーゼは問う。
自分たちを治癒して、彼女には何のメリットもない。
シスターたちもどこか信じられないのか、なおも優菜に武器を突きつけていた。

もし全員を治療したらその場で二五二名のシスターたちに取り囲まれる。
そんな危険性すらあるのに、それでも彼女は来た。

「私は私の意思でここにきた、ただそれだけの事です」

そう言うと、優菜はアニェーゼの返事を待たず次々とシスターたちを治療していく。
ぽかんと呆けた顔をしてアニェーゼは優菜の行動を見ていた。
目の前で次々と立ち上がる部下たち。
やがて彼女の言うとおり誰一人として怪我人はいなくなった。

だが、アニェーゼは頭をふると優菜を睨みながら言う。

「そんな事言われても分かんねえです。私たちがオルソラに何をやったか覚えているのですか！？」

「……」

アニェーゼの絶叫に優菜は答えを返さない。
ただ、ゆっくりとアニェーゼの元へ歩み寄る。
その姿を見て、アニェーゼは杖を構えながら更に問う。

「私が貴方の仲間に何をしたか分かっているのですか！？　私は貴

方の仲間を殺しちまおうとしたんですよ!?　なのに何故!?」

「もうよいのです」

そう言うと優菜はアニェーゼを自分のもとに引き寄せて抱きしめる。

驚いたアニェーゼは、そのままの状態で体を硬直させる。

「……一度敵対したからといって、一生敵対する必要はないでしょう」

「あ、ああ……ああ」

修道服のフードの上から優菜はアニェーゼの頭を撫でる。

「それでも貴方がそう思っているのなら、その幻想をぶち殺す、ですよ」

くすくすと笑いながら優菜は言った。

自分の弟がよく言う台詞。それを真似する自分がおかしかったのだろうか。

優菜は愉快そうに笑っていた。

「だから、もうよいのです」

そう言って優菜はアニェーゼの頭を優しく撫でる。

アニェーゼは何か温かいものに包まれている感覚を味わっていた。

遠い昔、記憶にはないけど体が憶えている事。

母がもたらす安らぎの感覚。

それに気付けば後は一瞬であった。

どんなに抑えこもうとしても、彼女の瞳から次々と涙が零れていった。

「あ、ああ……あああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

アニェーゼは部下たちの前だというのに、人目も気にせず大声で泣いた。

だが部下たちは決して卑下したりしない。

逆にその光景を見て、自然と膝をついて祈りを捧げていた。

ルチアも、アンジェレネも、その他のシスターたちも。

綺麗に整列し、誰一人として乱れることなく。

やがて誰か一人がぽつりと呟いた。

「聖母様」

泣き止んだアニェーゼは子供のように目をゴシゴシとこすった。

おそらく目は真っ赤に腫れ上がっているのだろう。

それを何とか消そうとしているが、それは無駄な行為であった。

「思い出しちまいました。上条優菜……いえ、かつて慈愛の聖母とまで言われた御方」

優菜と少しだけ距離をとったアニェーゼは、真剣な瞳で優菜を見ながら言う。

「助けを求める人に手を差し伸べ、そして敵対した人すら最後には手を差し伸べる。優柔不断のように聞えちまいますが、簡単に出来る事とは思えねえです。何せ逆恨みされちまって殺されるかもしれねえですし」

優菜もまたアニェーゼに真剣な瞳で見つめ返す。

「日本なんてえ島国に、そんなご大層な人間がいるとは思っちゃいなかったんですが……あながち嘘でもなかったようです」

杖をくるくると回しながらアニェーゼは言葉を発する。

「だからこそ、私はひとつだけ我慢出来ないのがあります。それは、貴女様が学園都市の住人になっちまっている事。ですので」

杖を優菜に突きつけてアニェーゼは告げる。

「申し訳ねぇですが、聖母様には我らと一緒に来てもらいます」

その声にシスターたちは再度武器を手に取る。

今度は『神の敵』として優菜を見るのではなく、例え彼女に恨まれようと自分たちの元へ連れ帰る。

そんな強固な意志が見て取れた。

少しだけ目を伏せた後、優菜は顔を上げてアニェーゼの問いに答える。

「これが運命と言うのなら、私はあえてその運命に逆らってみましょう」

「……どうしてもですか？」

「分かってくれとはいいません、恨んでくれても構いません。ですが……」

そう言うと優菜はゆらりと動く。まるで気持ちを切り替えるかのように。

「私にはやらねばならぬ事があります。ですので、貴女たちについて行くことは出来ません」

それは決裂の言葉。

アニェーゼは静かに杖を構え、シスターたちも無言で武器を構える。

一触即発の事態。次に何かが動けば、取り返しのつかない戦闘に発展する。

「そこまでである」

だが、それを止めるかのように声が響く。

闇の向こうから聞こえる無骨な男の声。

「それ以上の戦闘は認められない。アニェーゼ部隊はすぐに帰還するのである」

闇の向こうから足音が聞こえる。

その場にいる全員が、声のした方に視線を向ける。

否、強引に向けさせられたという方が正しい。

まるで見えない力が頭を無理やり掴んで、視線を無理やり変えたかのように。

一歩一歩足音が聞こえるたびに、ズンッ！と大理石の床に低い振動が伝わってくる。

「あ……あ……ま、まさか……」

優菜はその声の主を知っている。

僅か数ヶ月ほどの間だったが、彼女にとっては毎日が素敵な日だった。

目指すべき人、敬愛すべき人、そして自分を導いてくれた人。

「どうして……ここに……」

シスターたちは、彼の出す足音に恐怖と畏怖の表情を浮かべていた。

だが、優菜はその人物を知っているので恐怖はない。

むしろ喜びしかなかった。

やがてその人物が闇の奥から姿を現す。

茶色い髪に、屈強な体つき。青系のゴルフウェアみたいな衣服。

数年は立っているが、その顔を見間違えるわけはない。

優菜は震える喉で、だけどしっかりした口調で彼の名前を呼んだ。

「ウィリアム様……」

「久しぶりなのである。上条優菜」

アックアが優菜に向かって声を発する。

今だ呆然とする優菜を見て、アックアは少しだけ優しげな色を混ぜて言葉を紡ぐ。

「貴様の信念、歪んでいないか確かめさせてもらった」

まるで教師が生徒に教えるかのように、アックアはゆっくりと言葉を選んで語る。
周りにいるアニェーゼたちは、何のことか分からないがそれでもアックアの邪魔をするような事はしなかった。
しなかった、というよりは出来なかったが正しいが。

「貴様のような弟子を持てて誇りに思うぞ」

アックアはそう言うと、アニェーゼたちに視線を向ける。

「アニェーゼ＝サンクティス、及びその部下であるシスターたち。
貴様たちはすぐにヴァチカンへ帰還しろ」

「あ、あなたは何者なんですか。一体何の権限があって」

アニェーゼはアックアに恐怖を感じながら言った。
実力で言えば文字通り桁違い。
その事を理解したアニェーゼだが、見知らぬ人間から命令される謂れはない。
そう考え、精一杯の気力でアックアへ襲いかかった。

「宣告は与えた。それでもなお、命令に従わないと言うのであれば」

その瞬間、大地を引き裂くかのような轟音が辺りに響き渡る。
ゴパッ！と音がしたかと思うと、アックアの近くにいたシスターたちが宙を舞った。

「二十人ものシスターを……一瞬で……！」

驚きにルチアが声を上げる。アックアが何をしたかが全く見えなかった。
それなりに危険な仕事をしたシスターたちが、何の行動も取れずに倒される。
目の前の男は本当に同じ人間なのか、とルチアは疑った。

「それなりの手段をもってして連れて帰るのみ」

そう言ってアックアはポケットから一枚の紙を取り出し、近くのシスターに投げる。

「こ、これは……ッ！」

その紙を見開き、中身を見たシスターが驚きに声を上げる。
アニェーゼは訝しげに思っていると、その紙を持ったシスターが駆け寄ってくる。
無造作に受け取って、中身を見るとアニェーゼも驚きに目を見開く。

「ローマ教皇様直々の命令書……」

「貴様たちは今すぐ帰還するのである」

その言葉が全ての決着であった。

それから十分ぐらいで、アニェーゼたちは帰還準備を終えこの場を

去った。
最後にルチアは優菜に敬虔な祈りを捧げ、アンジェレネはなんとなくハイテンションで喋っていた。
アニェーゼは少しだけ顔を赤くしてもじもじしていたが、優菜が無言で抱きしめるとほっとした感じで眼を閉じて身を委ねていた。
そして今、『婚姻聖堂』にはアックアと優菜だけとなった。

「本当にお久しぶりです、ウィリアム様」

そう言って優菜はにこっと笑った。
いつものように、何か大人を感じさせるような笑みではない。
本当に歳相応の少女の笑みであった。

「数年ぶりである。貴様はいつまでも変わらぬな」

「変わって欲しかったのですか？」

アックアの言葉に優菜は少しだけ意地悪な感じで答える。
普段の大人びた雰囲気も口調も、何もかもが消え失せた優菜。

「そうは言っていない。学園都市に行こうと貴様は貴様だという事だ」

「ふふふ、ウィリアム様？　昔みたいに優菜って言ってくれないのですか？」

「……」

優菜の茶目っ気な言葉に、アックアは無言でじろりと睨む。

「弟子を放ったらかしにした罪です。少しはいじられてください」

だが優菜はその視線を華麗にかわす。

アックアも、放ったらかしにした自覚はあったのか、余り強くは言わなかった。

「では少しは師らしい事をするのである。上条優菜、貴様は今、学園都市にいるのであろう」

「……はい」

アックアの真剣な目に、優菜もまた真剣な顔をして答える。

「貴様の妹である魔術世界の人間、アリシア。貴様が守りたいと思っている科学世界の人間、上条当麻。貴様にとって一体どちらが大事なのだ」

「！」

「どちらも、という選択肢はない。貴様はいずれ選ばなければならない。魔術世界に来るか、科学世界に残るか……」

アックアの語った事は優菜も気付いていた。

魔術世界や科学世界を知った時、自分の周りには両方の人間がいるという事に。

かたや大事な妹であるアリシア。

かたや大切な守るべき人と思っている当麻。

どちらも捨てれない、だけどどちらかを選ばなければならない。

迷い続けた優菜は、その事を極力考えないようにしていた。

「それは……」

だけど結果を先延ばしにしてもいつかは選ばないといけない。
アックアはそう語っていた。

「今すぐという訳ではない。だが、覚悟しておけ。貴様の進むべき道に、必ずその選択を迫られる時があるという事を」

そう言うとアックアはポケットから紙を取り出して優菜に投げつける。
呆けた感じで受け取った優菜を見て、アックアはそのまま背を向けて歩き出す。

「私の連絡先だ。これからは師らしい事をしよう。迷ったことがあれば頼るが良い」

暗闇に溶け込むようにアックアはその姿を消していく。
その背中を優菜はじっと見つめていた。

「だが貴様が科学世界を選んだ時、我らは師弟ではなくなる。その時は敵同士になるのである」

その言葉と同時にアックアの気配は完全に消えた。
それから暫く時間がたったが、優菜はその場から動くことが出来なかった。

フラグメーカー

思ったより当麻の体は大きなダメージがかかっていたらしい。
優菜に即席の治療をされたとはいえ、気付いたら病院のベットで寝ていたようである。

（いつもの病室か。うっ、部屋の匂いで分かっちまうなんて、いやだなぁ……）

途切れがちな記憶を思い出しながら、どうして病院に運ばれているかを思い出す。

分かったのはかなり断片的な事であった。
アリシアが倒れていたアニェーゼ部隊に何か余計な事をした事。
それで優菜が怒ってアリシアにゲンコツをした事。
学園都市のゲートでぶっ倒れた事。
アリシアとインデックスが何か叫んでいたという事。
ゲートから直行で病院に運ばれた事。
冥土帰しが覗き込んでくるのを機にプツリと意識が断ち切られた事。

当麻は眼を閉じながらぼんやりと考え事をする。
オルソラはどうなったのか、天草式はどうなったのか。
インデックスはどうなったのかと。

そしてふと気付く。誰かが自分の近くにいるという事に。
小さな吐息が聞こえたかと思うと、温かくて柔らかい手が前髪を軽く撫でてくる。

「土御門は腹を抱えて笑っていましたが……やはり、こういうもの

はいい事だと思います」

その声に反応するかのように、当麻は重たいまぶたをゆっくりと開ける。

そして自分の前髪を撫でている人物の名前を口にする。

「……神裂か？」

「あ、起きてしまわれましたか。このまま立ち去るつもりだったのですが……」

当麻が起きたことに、僅かばかり神裂は驚いて身を引いた。

彼女は今までベットの近くにあった見舞い客用のパイプ椅子に座りながら覗き込んでいたようだ。

「……あー」

上半身をベットから起こし、当麻は眠気を飛ばすために首をぶんぶんと振り回す。

そして視線を彷徨わせるとサイドテーブルに複数の書置きがある事に気付く。

「ご家族の方の書き置きです。見られますか？」

そう言ってサイドテーブルにあったメモ五枚のうち、四枚を手渡してきた。

「あれ？　残りの一枚は？」

当麻がそう言った瞬間、恐ろしい速度で神裂の手が書き置きの小さ

な紙切れを握りつぶした。

「べ、別になんでもありません。こちらの書き置きは私のですが、こうして直接話す機会が出来たのですから不要でしょう」

顔を真っ赤にしながら視線をあちこちに揺らしてメモを握り潰していく。

体中から変な汗を出してメモを丸めていく神裂に、当麻はハテナマークを浮かべていた。

「家族っていうと沈利ねーちゃんたちかな？」

そう言って受け取った四枚のメモに視線を落とす。

『オ・シ・オ・キ・か・く・て・い・ね』

『とうま、帰ったら可及的速やかに白状する』

『爆弾が入った人形を抱いて橋から落とされるのと、素直に何やっていたか白状するのどっちがいい？』

『当麻お兄ちゃんの馬鹿ー！！』

今度は当麻が体中から変な汗を流し続ける事になる。

だらだらと流れる汗を感じながら、当麻はどうやって姉妹の怒りを収めるか考え始めた。

（……家に帰りたくない……）

結論、無理である。

沈利の怒りですら石油化学コンビナートに引火したぐらいなのに姉妹揃ってである。

限界まで積んだＵＬＣＣスケールの石油タンカーが大炎上したぐら

いのレベルだ。

「憤怒の魔王が四人もいるなんて……」

怒りがおさまるまで病室に逃げ込みたいと思った当麻だが、それに反して彼の体は治りが早かった。
冥土帰し曰く『ファンタジーな体をしている』との事。

がっくりと項垂れる当麻を見て、神裂は頭にハテナマークを浮かべながら見ていた。

「あの……お体の方は仔細ないでしょうか？」

「ん？　まぁ……大丈夫じゃない？　麻酔が残ってて痛むトコとか分かんねーし」

基本的に怪我は優菜の治療で治っているのだが、時々だが右手が影響して上手く治らない場合もある。
今回はそれにあたったのか、普通に歩いていたのにちょっと油断したら倒れていた。
結果、姉妹に知られる事となったのだが。

（ああ……不幸だ）

「すみません。天草式には食事による術的な回復方法もあるのですが、どうもあなたにはうまく作用しないようですので」

「多分、右手のせいだろうねー。ってその言い方だと、寿司とかハンバーガー食べたら傷が治るの？　すげーな、なんかＲＰＧの回復アイテムみてぇだ」

「は、はぁ……？」

当麻の例えが分からないのか、神裂は困惑しながら適当な返事を返す。

だが神裂は一つ咳払いをすると、豊かな胸に片手を当てて一度だけ深呼吸した後言った。

「事後報告ですが……オルソラ＝アクィナスの動向などを伝えに来たのですが、余計なお世話でしたでしょうか？」

「聞く！　ぜひ！」

身を乗り出して即答する当麻に、神裂はほんの少しだけ肩の力を抜く。

「オルソラ＝アクィナス、及び天草式本隊はイギリス清教の傘下に入る事で話を収めました。理由はローマ正教の報復・暗殺を防ぐためです」

「……もしかしてオルソラって、これからも危険な立場は変わらないのか？」

「いえ、彼女が持っていた解読法は偽物だったために、『法の書』絡みで追われる心配はなくなりました。解読法も魔術世界全体に公開しましたし、本気で狙ってくる所はないでしょう。しかし意義が薄いとは言え、ローマ正教が本当に狙ってこないかは不明ですので……」

その言葉を聞いて当麻は、もしオルソラが本当に『法の書』を読め

たらまさしく全世界から狙われていた訳だと理解した。

「んで、天草式もイギリス清教の傘下に収まるんだな。なんとなくだが、大企業に吸収された感じがするんだが、神裂的にはいいのかそれで？」

「傘下といっても天草式の聖典や教義を捨てろというほどのものではありません。まったく、私の後は追うなときつく厳命しておいたはずなんですが、どうも彼らは心のどこかでこの展開を望んでいた節があります」

そういう神裂だが、その顔はどこか親離れ出来ない子供を見ているような表情であった。

『まったく』と口の中で呟くが、口元は微かに笑みを浮かべているのを彼女は気づいているのだろうか。

「天草式は時代に合わせて適した形に変化する宗派です。一つの形にこだわる必要はありません」

何気なくいう神裂だが、当麻はその姿をカッコイイと感じていた。守るべき人々のために今まで自分が君臨していた小さな社会を何の迷いもなく手放したのだ。

そう考えている当麻の前で、神裂は姿勢を正すと深く頭を提げた。

「ええと、あの、今回は、その、すみませんでした」

「は？　え？　えぇぇぇぇぇ！？」

突然神裂が頭を下げた事に当麻はパニックを起こした。

女の子が頭を下げているのを見ると、なんとなく自分が凄く悪い事をやっているような気分になる。

「あの、今回は、一身上の都合で、色々とご迷惑をおかけしました」

珍しく歯切れの良くない声で神裂は言葉を紡ぐ。

「あの……神裂？　俺なんかお前に迷惑かけた？　だったら謝るけど」

ものすごく慣れていない感じの台詞を口にする神裂は、とても困っているという感じに当麻は見えた。

「いえ、違うのです。ここであなたに謝られては本格的に私に立つ瀬がありません。つまりですね――」

一瞬言葉に詰まったが、神裂は意を決して何かを言おうとした。

その瞬間、夜明けなのにノックもせず病室のドアが勢い良く叩き開けられた。

「ふんふんふふーん！！　カミやーん、遊びにきたぜい。メロン一個は高いからカットメロンの乗ったプリンで我慢せよ」

見舞い品が入った袋をぐるんぐるんと回しながら、土御門は当麻に向かって言った。

当麻は神裂から土御門の方へ視線を移動させる。

「うーっす、お前は寝なくて大丈夫なのか？　もう少ししたら学校だぞ？　あ、悪い神裂。なに言おうとしてたんだっけ？」

神裂は当麻の言葉を受けて僅かに怯んだ。
そして土御門の方に視線を向けて、何でこのタイミングで現れるというオーラを発信する。

「おおう、何だねーちん。ついにカミやんに平謝りする時が来たって感じですかい？　きっとベタベタの王道で『今までかけた迷惑の借りを返します』って言うつもりだぜい！　で、脱ぐの？」

「ぬ、脱ぎませんよ！」

「え、じゃあお詫びにどんな服でも着るっていう方向で？　サービス精神満点だなぁ」

「あなたはちょっと黙ってなさい！」

ぎゃあぎゃあと楽しそうに大騒ぎする二人を遠巻きに見ていた当麻。
しかし神裂はともかく、土御門は忘れていたようである。
この病院にはとっても怖い看護婦がいるという事を。

「にゃははは、だってさ。カミやん、年上の膝枕で母性本能丸出しのぐぼはぁ！！」

さっきまでニヤニヤ笑いながら喋っていた土御門が、突然苦悶の声を上げる。
そして股を抑えて微妙に中腰のまま、真っ青な顔をして口をパクパクとさせていた。

「病室ではお静かにお願いしますねー。不法侵入者さん」

当麻の担当ナースである美鶴が、土御門の後ろから姿を現す。

その手には厚みのあるキングファイルがあり、それを見た当麻は思わず自分の股間をガードしてしまった。

「何やってるんだ、上条。朝から女なんて連れ込んで、フラグメーカーの極みってかぁ？」

キングファイルで肩をトントンと叩きながら、美鶴は病室を見渡した後に言った。

「いや待て、美鶴！　お前絶対上条さんを誤解しているだろう！」

「……他にどう取ればいいの？」

そう言われて当麻は周りを再度見渡す。
早朝、それも日が昇るか昇らないかの時間に女性と二人だけ。
途中土御門の介入はあったが、それでも大体は二人っきりだった。

「いやいやいや、美鶴さんの考えているような素敵なイベントはありませんよ？」

「つまり機会があればやったと？　上条、ここは病院だよ？　ハレンチな事をするならホテルにでも行ってください」

「違げぇよ！　聞いてねぇだろテメェ！　どうして上条さんと女性が一緒だと皆そう取るのですかねぇ！？」

「まぁこの不法侵入者は連れて行く。そっちの女性は上条とイチャついててくれ」

当麻は思いっ切り大声で叫ぶが、美鶴は気にせず土御門の襟首を掴

むとそのままズルズルと引きずっていった。
ナースらしく、全く音を感じさせずに扉を閉めていったのは流石としかいいようがない。

「どうして土御門さんの侵入がバレたのですかにゃー！？」

「上条が入院すると、お前みたいに侵入してくるのが多いからな。美月に言って上条の病室を監視してもらってるんだよ」

「この土御門様を見つけるとは……恐るべき監視能力だぜい！」

扉の向こうから土御門と美鶴の声が聞こえてくる。
だが、それもやがて聞こえなくなると病室には静寂が戻ってきた。
それをぶち壊すかのように、当麻は乾いた笑いの後に神裂に尋ねた。

「あのー、神裂さん？　まさかとは思いますが、恩を返すとか借りを返しますとか、そんなアホみたいな話は土御門の冗談の中だけですよね？」

当麻の問いに神裂はポツリと歯切れの悪い声で答えた。

「あなたは本来、私たちに守られるべき一般人です。ですが、こんな手傷を負わせてしまって……単に頭を下げれば許される次元をとっくに過ぎています。ですから……」

神裂の言葉に当麻はため息を吐いた。
土御門やアリシアみたいに『じゃまた明日な』みたいなノリで別れてくれる方がありがたい。
事後の関係はずるずると引きずらず、さっと終わらせてくれて欲しい当麻であった。

だが、神裂的道徳心ではそういう訳にもいかないらしい。

「あのな神裂、俺は別に恩を売るとかそういうつもりで戦ったんじゃねぇぞ。つーかよ、そんな下んねぇモンの為に、戦ったなんて思われたら悲しくなっちまうよ」

当麻の言葉に神裂は驚いた顔をする。
しかし当麻は気にせず言葉を続ける。

「イギリス清教とかローマ正教とか、そっちは色々大変みたいだけど素人の俺にはあんま区別できない。馬鹿な俺としては組織なんてどうだっていいじゃねぇかと言いたい」

「……」

「俺は自分で決めてオルソラを助けた。他から強制されたとか、巻き込まれたから仕方なしとかじゃねぇ。助けたかった、だから戦った。言ってしまえば、ただそれだけなんだよ」

神裂は呆然と当麻の言葉を聞いていた。
対して当麻はろくに考えもせずに言葉を紡ぐ。
まるで深く考える必要もないとでも言いたげに。

「多分、今度アニェーゼが助けてって言ったら俺は助けに行くだろうな。今回はたまたまアイツが悪かった。だけど、アイツがこれからもずっと悪くあり続けなければならないルールなんてどこにもない。だからアイツが助けを求めたなら、俺はその手を掴んで助けるだろうな」

当麻は何気ない顔で断言する。

助けたいと思った、だから戦って助けた。

言ってしまえば当麻の行動理由はたったこれだけの事。
これ以上無いぐらい単純で、馬鹿馬鹿しく聞こえるかもしれない。

当麻の言葉を聞いて神裂は思わず驚いた顔をした後、困ったように小さく笑った。

【番外】第六章を終えて判明した原作と相違点

第六章を終えて判明した原作との相違点。後、その他諸々。

・上条当麻

1. 神裂、シェリー、オルソラにフラグ建築をする。
後、分かりにくいけど五和にもフラグ建築をする。
2. 担当ナースが美鶴。
3. 部屋の匂いだけでいつもの病室と分かるようになる。
4. 迷った末に自分で行動するようになる。
5. 戦いの中でも冷静な思考が出来るようになる。
6. 女性へのデリカシーの無さは全然成長しない。

・上条優菜

1. 神の右席　後方のアックアとは師弟の仲。
2. 制御権の強奪が、能力だけではなく魔術にも適用出来る。
ただし、無自覚だったので本人は気付いていない。
3. 過去に『慈愛の聖母』と呼ばれていた事がある。
4. 風斬氷華とアニェーゼ部隊にフラグ建築をする。
5. 未元物質の武具を創り上げる。といってもまだ試作段階。

・アリシア・フォン・コルネリウス

1. 日本文化大好き。だけど、時々勘違いをする。
2. 『封印』というものを維持するために常に魔力を消費している。
3. 優菜のゲンコツだけは怖い。
4. 身体能力を何かしらの魔術で補っている。
5. 対十字教のために、十字教などの知識はかなり幅広く持っている。

6. 時々だが説明キャラになる。
7. 人に珍妙なあだ名をつけたがる。

・アクゼリュス
1. 当麻の他に優菜にも微妙ながら興味を持つ。
2. 優菜の本質の力を知っている雰囲気がある。
3. 神獣と呼ばれる二匹の獣を連れて歩いている。
4. 甘い物が意外と好き。
5. 自分にとって都合が悪い事が起こると、相手の都合を気にせずぶっ潰す。
6. 力の一部を切り離してコルネリウス家に与えている。

・その他
1. 天草式の一部は優菜をとても怖がる。ある意味、トラウマレベル。

第七章予告

『クリスマスぐらい彼女と過ごしたいなー』
――――――――――――――――――――幻想殺し　上条当麻

『カミやんが言うと、スゲェ嫌味にしか聞こえねんダヨ』
――――――――――――――――――――幻想殺しの学友　土御門元春

『ブッコロスヨ、カミやん』
――――――――――――――――――――幻想殺しの学友　青髪ピアス

冬の十二月。全てはこの一言から始まった。

『日本ではクリスマスというイベントがあるのでございます』
――――――――――――――――――――元ローマ正教　オルソラ＝アクィナス

『……何を企んでいるの？』
――――――――――――――――――――イギリス清教の魔術師シェリー＝クロムウェル

『何故だか分かりませんが、オルソラから悪巧みの気配を感じます』
――――――――――――――――――――イギリス清教の魔術師神裂火織

『だ、大丈夫です。きっと上手く行きますよ！』
――――――――――――――――――――天草式十字凄教　五和

遠くイギリスの地に住む魔術世界の女性陣。
日本のクリスマスに合わせて何か悪巧みを考えている……？

『アックア、貴方に手紙と荷物が来ていますねー』
――――――――――――――――――――ローマ正教『神の右席』
テッラ

『……は？』
――――――――――――――――――――ローマ正教『神の右席』
ヴェント

『アックアの奴はどうしたんだ？』
――――――――――――――――――――ローマ正教『神の右席』
フィアンマ

『アニェーゼ部隊、貴様たちは今すぐヴァチカンへ帰還するのである』
――――――――――――――――――――ローマ正教『神の右席』
アックア

『各自霊装のチェック！　それから体調を万全にしなさい！』
――――――――――――――――――――ローマ正教　ルチア

『ヴァチカンの地図を用意！　それで全ルートを構築しちまいますよ！』
――――――――――――――――――――ローマ正教　アニェーゼ
＝サンクティス

『シ、シスター・ルチアとシスター・アニェーゼがかつて無いほど

やる気にっ』

――――――――――――――――――――――――ローマ正教　アンジェレネ

アックアの元に届いた一通の手紙。
それを見た後から、アックアの奇行は始まった。
そこからローマ正教の一部は、かつてないほどやる気を出す人達がちらほらと。

『クリスマスか……また大変な日が来たなぁ』

――――――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』
麦野沈利

『大丈夫だよ、しずり。私はそんなしずりを応援してる』

――――――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』
滝壺理后

『結局さ、毎年の恒例行事って訳よ』

――――――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』
フレンダ＝セイヴェルン

『敵の数が年を追うごとに超増えていきます』

――――――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』
絹旗最愛

クリスマス。それは家族が揃って過ごす日。
だがここは日本。
そんな事はないので、毎年家族である沈利たちは大変だった。
主に当麻のせいで。

そして迎えるクリスマスの日。

一体どのような物語となるのだろうか？

第七章予告（後書き）

第六章　完結です。
次話より第七章に突入。

始まりの言葉

当麻は廊下の窓をあけてぼけーっと外を眺めていた。

季節は十二月。

既に葉は全て落ちている木がチラホラと見え、厚着をしていても寒いと感じてしまう。

当麻も上着の下に赤系のTシャツを着ていた。

眠たそうな目つきで外を眺め、大口をあけてあくびを連発している当麻。

窓枠に肘をつき、少しだけ肌寒い風を浴びつつ呟いた。

「クリスマスぐらい彼女と過ごしたいなー」

告げた瞬間、当麻のこめかみに左右から正拳突きが突き刺さった。

まるで万力で押し潰したかのような壮絶な音が廊下に響く。

「ぐはっ！　何するんだテメェら!!」

当麻に拳を突き刺したのは、左が青髪ピアス、右が土御門であった。

痛む頭を押さえながら叫ぶ当麻だが、土御門と青髪ピアスは瞳をギラリと輝かせながら言った。

「カミやんが言うと、スゲェ嫌味にしか聞こえねんダヨ」

「ブッコロスヨ、カミやん」

二人の恐ろしい怨念を感じ取った当麻は、思わず後ろに身を引いた。
その当麻に追い打ちをかけるように二人は大声で叫ぶ。

「クールな長女のお姉さん！　癒し系な次女のお姉さん！　パーフェクト従姉妹の優菜ちゃん！」

「金髪美少女の妹に、甘え妹ボイスの末っ子ちゃん！！」

二人はビシィっと音がしそうなぐらい、当麻を指さしながら絶叫した。

「「こんな幸せ環境のくせに、更に彼女が欲しいってかぁ！！！
テメェは一回地獄に堕ちろ！！」」

「待てやコラァ！　全員家族じゃねぇか！　上条さんが欲しいのは彼女ですよ？　彼女なんですよ！　だから彼女なんですって！」

土御門と青髪ピアスの言葉に当麻は否定をするが、それは単に火に油を注ぐ行為にしかならなかった。
ブチリという音がしたと同時に、土御門と青髪ピアスは当麻に襲いかかる。

「カミやん、テメェはモテない男たちの傷をえぐった！」

「その罪、万死に値するにゃー！」

まるで亡者のように襲いかかる土御門と青髪ピアスに、当麻は直感的に危険なものを感じた。
すぐに二人に背を向けると、全速力で逃亡をはかる。

「俺だってモテないわー！」

全力で逃げながら言葉を発する当麻だが、本人は気づいていないのか火に油を注ぐ言葉しか口にしなかった。
この男、上条当麻は一部ではフラグメーカーと呼ばれている。
クラスの女子の大半は当麻に好感を抱いている。
更にその上に、常盤台のお嬢様二人、そして常盤台のお嬢様から生まれたクローンたち。
褐色ゴスロリの人に、巨乳金髪シスターに、世界でも僅か二十人しかいない聖人。
そして二重瞼のほっそりした子と。
言ってしまえば、当麻は高校生の身でありながら既にハーレムを形成していた。
だが、本人は全く無自覚なのが罪であった。所謂、生殺しという奴である。
そんな当麻なのに女性陣は全く嫌う事なく、ずっと当麻に好感を抱き続けている。

その事を青髪ピアスは知らないが、土御門は知っていた。
だからこそ、その一言が土御門の心にガソリンをぶち込む結果となった。

「こちらデルタT、デルタKは現在逃亡中。絶対に生かして学校から出すな！　オーバー！」

「何だその無線機はぁ！！」

土御門の懐から出てきた謎の無線機に突っ込む当麻だが、そうも言っていられない状況となった。
どこに隠れていたと突っ込みたくなるぐらい、突如として男たちが

ワラワラと湧き出してきたのである。

「チッ！！」

軽く舌打ちをすると当麻は男たちを避けつつ逃げる。
だが学校という狭い場所では数の暴力は強かった。
あっという間に逃げ道を失い、当麻は数十名の男たちに囲まれる。

「ぜーっ！　ぜーっ！　くそっ……」

肩で息をしながら当麻は男たちを睨む。
だが、その程度で男たちが怯むわけもなく、むしろ当麻を睨み返すだけであった。

「カミやん……年貢の納め時だぜい？」

土御門が勝ち誇ったように、自分の手を上へと掲げる。
振り下ろした瞬間、男たちが襲ってくる。
当麻はそう理解すると、その事に対応するため身構える。
だが、土御門の腕は振り下ろされる事はなかった。

「なーにをやってるのかにゃ～」

「当麻が囲まれていますね」

「大方、上条がモテない男の傷でもえぐったんじゃねぇの？」

「相変わらずの三下って訳なンですね」

その声に土御門は勿論、周りにいた男たちや青髪ピアスすら動きを

止めた。
そして全員が、恐る恐る声の主の方に視線を向ける。

「で？　うちの当麻になーにをするつもりだったんだぁ？　つ・ち・み・か・ど？」

当麻の姉にして学園都市レベル５　第四位である麦野沈利。
にこにこと影の濃い笑みを浮かべる沈利の背後で、黒いオーラに満ちた炎が燃え盛っていた。
額には青筋が浮かび上がっており、拳は恐ろしいほど強く握り締められていた。
その姿を見て、全員が生命の危機を感じたのは言うまでもない。

「何があったかは知りませんが、当麻に暴力は振るわせませんよ？」

当麻の従姉妹にして学園都市レベル５　第六位である上条優菜。
最も、それを知っているの土御門や他のレベル５たちぐらいであるが。
だが彼女がお嬢様という外見に似合わず恐ろしいほどに武闘派なのを男たちは知っていた。
それはもう普通の高校生が勝てるとか、そう思うのすらおこがましいほどに。

「大人数で囲むのは見過ごせないなぁ。男なら一対一だろう」

当麻の友人にして学園都市レベル５　第二位である垣根帝督。
通称、常識知らずのメルヘン男。
勿論それを口に出して指摘すれば、碌でも無い結果にしかならないが。

「俺ァ三下なンてどうでもいいが……後で小萌が困りそうだしなァ……」

当麻の友人にして学園都市レベル５　第一位である一方通行。
通称、小萌先生の白騎士。
この男、小萌には激烈に甘いのである。
故に小萌を困らせる事態になれば、この男から悪夢のようなお仕置きがやってくる。

四人を見て、土御門を含む全員が振り上げた拳を下ろした。
レベル５一人でも敵対すら無理なのに、この場に複数人もいるのである。
降参以外の選択肢を選ぶことなど不可能であった。

「た、助かったぁ～」

四人の姿を見て、当麻はその場にへなへなと座り込む。
それが終了の合図であった。

沈利にボコボコにされた後、土御門はある人物へ電話をかけていた。

「……っと言うわけだから、カミやんはただいま彼女募集中ですにゃ～」

「……それを私に言ってどうするんですか？」

相手は神裂であった。
理由は勿論、当麻が言った一言を伝える為である。

「こんな面白……げふん、こんな重要な情報を教えない訳にはいかないにゃ～」

「……何やら不穏な空気を感じますが、まぁいいでしょう」

「失礼だにゃ～。オレはねーちんを思って教えているんだにゃ～」

土御門はケラケラと笑いながら、神裂の言葉を否定する。
実際、彼は面白いと思って伝えたのだが、ここで一つ大きな誤算が生まれた。

「そうですね。上条当麻を好いている人は女子寮にもいますし、皆さんにお伝えしておきます」

「ゲッ!?」

「……なんですか、ゲッとは」

「い、いや。何でもないにゃ～!!」

土御門は神裂のみに教えて、後ろから色々してからかうつもりであった。
だが、神裂はその情報をイギリス清教の女子寮に住む人間に教えるといった。
つまり教会世界の人間で、当麻に好感を抱く人物が動くという事になる。

（やっべぇ……下手するとカミやんを巡って科学世界と教会世界の人間が大戦争するぜい……）

神裂一人なら色々と手を打てるし、それなりの裏回しも出来るだろう。

だが、それが女子寮に住む人間となると話は別だ。

一体何人出てくるのか予想すら出来ない。

「えーっと、ねーちん？　一応、カミやんは学園都市の住人だから穏便に……ね？」

体中から変な汗がだらだらと吹き出しているのを感じながら、土御門は言葉を慎重に選びつつ話す。

だが、神裂は吹っ切れたのか迷いなく言葉を発した。

「安心しなさい。上条当麻には迷惑にならないようにします」

「そ、そっかにゃ～」

一先ずいきなり当麻を拉致するとか、そういった話はないと土御門は理解した。

ホッとため息を一つ吐く。

「所で土御門。最初に断っておきますが、もし覗いてからかおうと考えているのなら……」

神裂がそう告げた瞬間、電話の向こうから爆音と思わしき音が聞こえた。

その音は電話を通してなお凄まじい音であり、その破壊力をまざまざと語っていた。

「夜道には気をつけなさい」

プツリと電話が一方的に切られる。

土御門は電話を耳に当てた状態のまま固まっていた。

（やべぇ……もしかしてねーちんは本気を出すのか？）

そう思った土御門はチラリと視線をある方向へ向ける。

そこには一つのダンボールが置かれていた。

箱の側面には『堕天使メイドセット』と書かれていた。

（これを渡そうと考えていたが……絶対に無理だにゃ～）

送りつけた後、自分がボコボコにされるのが目に浮かぶ。

それを理解した土御門は、ダンボールを部屋の隅に置く事にした。

イギリス清教　女子寮

イギリス清教には女子寮というものがある。
『必要悪の教会（ネセサリウス）』所属の女魔術師たちなど、イギリス清教の人間が使う場所。

イギリス清教は魔術対策で様々な術式や文化を取り込むことに積極的なため信仰の制限は緩い。
そのせいか異教の枠組みを持ったまま入信する事が可能である。
だから天草式十字凄教やローマ正教を出奔してきた人間までもが入居する状態となった。

そんな女子寮の一角に、ある女性たちが集まっていた。
彼女たちは神裂を囲むような形で座っている。

元ローマ正教のシスター、オルソラ＝アクィナス。
『必要悪の教会（ネセサリウス）』所属の女魔術師、シェリー＝クロムウェル。
天草式十字凄教所属の五和。

オルソラは毎度ながらにこにこと笑みを浮かべながら神裂を見ていた。
逆にシェリーは、物凄く不機嫌な顔をしてどこか別の場所に視線を向けていた。
明らかに関わりたくない、そんな雰囲気が感じ取れた。
五和は顔を真っ赤にして下を向いてもじもじとしていたが、地味なせいか誰も気にしなかった。

そんな三人を一別した後、神裂は真面目な顔をしながら立ち上がった。

「土御門から貰った情報です。各自、どうするかはご自由に」

「まぁまぁ、お急ぎにならずに」

そう言った神裂のポニーテールを、オルソラは無造作に掴んで引き止めた。

予想しなかったオルソラの動きに神裂は何も出来なかった。

「ぐがっ！　人の髪を引っ張らないでください！」

頭を抑えつつ神裂はオルソラを睨む。

その目に微妙な涙が溜まっているがオルソラは無視して言葉を発する。

「まずは座ってください。私に少々考えがございます」

「……何でしょうか」

「あらあら、髪を引っ張って申し訳ございません」

「それはもういいです！」

「あの方が彼女募集中の件ですけれども」

毎度ながらのオルソラペースにはまった神裂だが、誰も助けようと思わなかった。

オルソラは独自のルールに基づいて会話しているのだが、そのルールが誰にも分からない。

よって他人には非常に会話のリズムが掴みにくい。

だから助けようにも、オルソラペースにハマってしまうのが落ち。
シェリーも五和も短い付き合いでそれがわかったので、神裂を助けようと思わなかったのだ。

「……それが何か」

ぶすっとした顔で座った神裂だが、オルソラはにこにこと笑顔を崩さず爆弾発言を投下した。

「私たちでクリスマスの日を一緒に祝うのはどうでございましょうか」

「はぁ!?」

「なっ!?」

「えええぇぇ!?」

オルソラの言葉に三者が奇妙な声を上げながら席を立つ。
勢いのついた椅子がガタンッと音を立てて倒れる。
しかしそれを見ても、オルソラは人のよい笑顔を浮かべたまま言った。

「彼女ではございませんが、あの方はクリスマスを女性と過ごしたいという事でございますね？」

「まぁ……そう聞こえるわね」

「日本ではクリスマスというイベントがあるのでございます」

「それはもういいです！」

にこにこと笑顔を浮かべるオルソラに神裂は思わず叫ぶ。

普段からぽやぽやしているが、今日のオルソラは妙にやる気が見える。

そう思ったシェリーは、頬杖をつきながら尋ねた。

「……何を企んでいるの？」

「あの方には返しきれないほどの恩がございます。この程度でお返しできるのでしたら、喜んでお返しするのでございます」

後光すら見えそうな笑顔でオルソラは断言した。

恩を返す、その言葉に三人は神妙な顔をしながら考える。

シェリーは学園都市に攻め込んだのに、最終的には怪我なしで帰ってきた。

その後に謹慎があったが、その程度で済んだのである。

神裂はインデックスの事や法の書事件など、色々と事件に巻き込んで申し訳ないと思っていた。

本人は不要といったが、やはり恩を返したいと思った神裂である。

五和は法の書事件で仲間共々助けていただいた。

二百五十人のシスターたちに、一人で立ち向かった姿は素直にカッコイイとも思っていた。

勿論、オルソラは法の書事件で当麻に返せないほどの恩を感じていた。

どうやって返すべきか考えてた時に神裂の情報である。

これでオルソラがやる気を出すなというのは無理がある。

「何故だか分かりませんが、オルソラから悪巧みの気配を感じます」

しかしなんとなく嫌な予感がする。

そう思っていた三人の心を代表するかのように神裂がため息を吐きつつ言った。

「だ、大丈夫です。きっと上手く行きますよ！」

五和は神裂のフォローをするが、嫌な予感がするせいか微妙に顔がひきつっていた。

シェリーは呆れてものが言えないのか、気だるさそうな顔でオルソラを見ていた。

そして三人の予想は的中する。

オルソラはとんでもない事を考えていたのだと。

「インデックスさんを緊急召集すれば、自動的にあの方もついて来るのでございます」

「禁書目録の緊急召集？」

オルソラの言葉にシェリーは怪訝そうな顔をして言った。

「正確には『禁書目録召集令状』でございます」

「それは、最大主教（アークビショップ）による布告が必要なはずですが……」

にこにこと笑みを浮かべるオルソラに、神裂は怪訝そうな顔をして疑問を口にした。

『禁書目録召集令状』、インデックスをイギリスに強制召集させる布告。

イギリス清教の正式な勅命のため、インデックスには拒否権というモノが存在しない。

それを布告する、とオルソラは言うのだ。

「法の書事件の時に聞いたのでございますが、インデックスさんが召集されると護衛としてあの方と優菜さんがご一緒されるのでございます」

「……つまり、それにかこつけて上条当麻を学園都市から連れ出すと……」

「そうでございます」

神裂の疑問にオルソラは笑顔で答える。

シェリーはアホらしいと言いたげにしていたが五和は違った。

何かぶるぶると震えており、顔は真っ青であった。

「い、五和！？　だ、大丈夫ですか！？」

「だ、だだだだだだだ大丈夫です。べ、べべべべ別に、ゆ、ゆゆゆゆゆ優菜さんがががががぁ～～」

最後まで言い切る前に五和はふらっとしたかと思うと、そのままバ

タンと床に崩れ落ちた。

「い、五和ーーー！？」

ぐるぐると目を回して倒れた五和を神裂は慌てて抱き起こす。
うんうんと唸りながら五和は何かぼそぼそと呟いていた。

「ああ、何でも上条優菜に酷くヤラれてかなりトラウマになってんだよ、ソイツは」

目を回す五和に呆れつつシェリーは五和が倒れた理由を口にする。
とりあえず大丈夫と分かった神裂は、ほっと胸をなで下ろす。

「五和がトラウマになるほどの猛者なのですか？」

神裂はシェリーの方を見つつ尋ねる。
この場で優菜と対決したことがあるのは五和とシェリーだけである。
オルソラは救いだされる方だったし、神裂はそもそも面識がない。

「……強さでいけば、そこそこだろうな。ただ頭のキレっぷりが半端ないな、あの女」

「魔法名に近い名前を持っているのでございます。本人は『誓いの名』と語っておりましたが」

「……誓いの名？」

「五和さんは大丈夫でございますか？」

「五和は大丈夫ですから、その誓いの名というのを教えてください

！」

頬に手を当てながらオルソラは首を傾げていた。
相変わらずマイペースだなと、シェリーはぼんやりと考えていた。
だが、誓いの名は自分の時には聞いてないので、密かに興味を抱いていた。

「そうでございますね。確か『恩師より授かりし誓いの名』と言った後に、こう言ったのでございます。『我が力は守るべき人の為だけに行使する』でございます」

「……確かに魔法名に近い感じがしますね」

「ただラテン語と数字は口にされなかったのでございます。ですので、魔法名とは別物でございましょう」

神裂は少しだけ思案顔をするが、シェリーはそんな神裂を見ながら言う。

「戦闘バカはほっといて、どうやって『禁書目録召集令状』を布告させんのよ？」

「誰が戦闘バカですか！？　っと確かにそうですね。その点をオルソラはどう考えているのですか？」

椅子によかったまま唸っている五和を無視して、シェリーと神裂はオルソラに視線を向ける。
その視線を受けて、オルソラはにこにこしながら二人の疑問に答えた。

「その点は大丈夫でございます。とっておきの策がございますので」

「ふんふんふふーん。英国史女たるもの、紅茶の時間は大事なのよ」

紅茶を片手に優雅にティータイムを楽しんでいるローラ。

今、彼女は業務を忘れて紅茶を飲んでいた。

英国人は仕事より紅茶の時間が大事だ。

だから今は仕事を忘れて紅茶を飲むのは間違っていない。

ローラはそう自分に言い訳をする。

脇に見える仕事を視界に入れないようにしながら。

ティータイムを満喫していたローラだがすぐにその時間は終わりを告げる。

「最大主教（アークビショップ）！」

突然、荒々しい足音の後に護衛役のステイルがローラの前に現れたからだ。

「騒々したるわよ、ステイル。折角の紅茶が――」

「紅茶なんて飲んでいる暇はありません。今すぐ『禁書目録召集令状』を布告してください！」

ステイルの言葉にローラは小首を傾げる。

『禁書目録召集令状』とは、その名の通りインデックスをイギリス

に召集する礼状だ。
これを布告すれば、インデックスはただちに学園都市からイギリスにこなくてはならない。
そんなものをステイルは布告しろと言ってきたのだ。
インデックスが可能なかぎり学園都市で生活を送れるようにしていたステイルなのに。
何故、真逆の事を要求してくるのかローラには分からなかった。

「ス、ステイル？　ステイルさーん？　あの、ええと、何故……？」

意味がわからずハテナマークを浮かべながらステイルに疑問を口にするローラ。
だが、ステイルは我を忘れているのか、ブチリと煙草のフィルターを噛みちぎった後に叫んだ。

「いいから黙って『禁書目録召集令状』を布告しろ、このバカ女！」

「バッ！　いっ、今ちょっと聞き捨てならぬ事を言われしような……よっ、ようし叱りけるわよ。コラステイル！！　仮にもイギリス清教の――――」

そこでローラはハッとなる。
今のステイルはこめかみに血管を浮かび上がらせている。
その上、片手はゆらゆらと何か燃えるようなモノを持っていた。
まるで炎剣のようなモノを。

それに気付いたローラは一瞬で血の気が引いた。
同時に、かなり危険な状況なのも理解した。

「ま、待ていなのよステイル！？　落ち着く――！」

「さっさと礼状を書けよ！」

ローラは身の危険を感じてそのまま転がるように逃げる。
直後、ローラが座っていた椅子は勿論、机と机に乗っていた物全てが消し炭となっていた。
躊躇いなしの炎剣が振り下ろされたのである。

「ひっ、ひぃぃぃ！？　私が燃えちゃうー！？」

口をパクパクとしながらステイルを見ていたローラだが、ステイルが自分の方を向いた瞬間全速力で逃げ出した。
当然ステイルは逃げるローラを追う。
そんな二人を遠巻きに見る目が四つあった。

「これで問題ないのでございます」

「……その前に最大主教（アークビショップ）が消し炭になりそうだがな……」

「ステイル……単純すぎですよ……」

「だ、大丈夫なんでしょうか……」

オルソラ、シェリー、神裂、五和の四名であった。
彼女たち、というよりオルソラが考えた作戦は単純であった。
まず『禁書目録召集令状』を布告する。
そうなればインデックスと共に当麻と優菜がセットでついて来る。
インデックスを女子寮まで連れて行くのに、当麻と優菜についてきてもらう。
その後、優菜には事情を説明して立ち去ってもらう。

後はインデックスをステイルに任せれば全てが丸く収まるという寸法だ。

その最初に上がった『禁書目録召集令状』は、ローラが布告しなければならない。

そこでステイルに依頼、もといそそのかしたのだ。

『禁書目録召集令状』があれば、クリスマスをインデックスと一緒に過ごせるぞと。

効果は抜群だった。

ステイルはすぐに動き、ローラに『禁書目録召集令状』を布告するよう迫ったのだ。

「ひぃぃぃ!?　だ、誰かー！　たーすーけーてー！！！」

「逃げるなあああああああああああああああああああああ！！！」

やけに軽快な破壊音と切羽詰った悲鳴をあげるローラ。

そして完全に我を忘れたステイルの叫び声。

抜群すぎて後が怖いなと三人は思ったぐらいであった。

「これで、下準備は完璧でございます」

唯一、オルソラだけがにこにこと楽しそうにしていた。

一方さんのデート曜日

十二月の肌寒い風を感じながら、現代風の杖を片手に一方通行は歩いていた。
その横には、学園都市の七不思議にも数えられるほどミニマムな教師である小萌が歩いていた。
勿論、一方通行は自身が持つ演算力を駆使して、小萌が快適に歩ける歩幅を算出して歩いていたのは言うまでもない。
当然ながらあくまで自然体で実行しているの小萌は気付いていないが。

そんな二人にはある目的があった。

「クリスマスなンて、普通に過ごせばいいンじゃねェか……」

「駄目ですよー。初めての娘が多いんですからね」

その目的とは、クリスマスの準備をするためである。
一方通行は現在、インデックス、打ち止め、アリシア、小萌の四人と同居している。
五人も住むと狭苦しくなると思われるが、一方通行は持てる財力を使って高級マンションを借りている。
そのため、五人住んでもまだ広々とした空間を保っていた。
余りに広いので、引越し当初は小萌が気絶して倒れたぐらいである。

「所で一方ちゃん？　杖をつきながらポケットに手を入れると危ないですよー？」

「あァ？　大丈夫だっつーの。こんなもン……」

そう言った一方通行だが、最後まで言い切る前に片手に妙な違和感を感じた。
さっきまでポケットに入っていた手に、柔らかな感触が襲ってきたのだ。
何か嫌な予感を感じた一方通行は、恐る恐る自分の手に視線を向ける。

「こうすれば安全ですー」

「な、なななな、なァ！？」

どうやったか分からないが、小萌は一方通行の手をポケットから取り出して自分の手で握っていた。
身長差があるので、握るというよりぶら下がるに近い感じだが。

しかし一方通行には十分なダメージであった。
恥ずかしさで振りほどきたいが、そんな事をして小萌がコケたりしたら大事件だ。
悩む一方通行だが、小萌は全く気にしないのか鼻歌を歌いながら歩いていた。

（ど、どどどど、どうすンだァ！？　お、落ち着くンだ、とにかく知り合いに会わねェように……）

「おーっす、一方通行じゃん。奇遇だなぁー」

誰にも会わないようにと考えた一方通行の思いは、脆くも崩れ去った。
こんな時、一方通行に声をかける不幸な人は一人しかいなかった。

「上条ちゃんじゃないですか。どうしたんですかー？」

小萌は当麻の存在に気付き、にこにこと笑みを浮かべながら声をかける。

一方通行と手を繋いだまま。

「優菜との勉強が終わったんで、その辺をぶらっと歩いていたんです。小萌先生は……」

そこで当麻は気付く。一方通行と小萌が手を繋いでいるという事に。

睨みつける一方通行に気付かず、当麻は言ってはいけない言葉を口にする。

「ああ、一方通行とデートですか。これはお邪魔しましたね」

ニヤリと当麻は意地の悪い笑みを浮かべながら、二人が繋いでいる手を指さす。

キョトンとしながら小萌は当麻の指差す場所を視線で追う。

そしてどこを指さしていたかを知った瞬間、ボンッと音が出るぐらい顔を真っ赤にした。

「ち、ちちち違うのですよー。こ、これは一方ちゃんがコケたりしないようって！」

慌てて一方通行の手を離すと、両手をブンブンと振って小萌は当麻の言葉を否定する。

しかし、それを見て当麻は何か悟ったような顔をしながら言った。

「いやいや、恥ずかしがらなくてもいいのですよ？　仲が良いのは

いい事ですから」

「上条ちゃーん！　先生をからかわないでくださいー！」

顔を真っ赤にしながら両手をふる小萌だが、当麻には怖くも何ともないのかニヤニヤと笑っていた。

しかし当麻は忘れていた。小萌の隣にいるのは一体誰なのかを。

「なァ……三下ァ、ちィっと話があンだがよォ」

当麻の肩に腕を回した一方通行は獰猛な笑みを浮かべながら言った。

からかい過ぎた当麻は忘れていたのである。

一方通行が一体どんな事で怒るのかという事に。

「は、ははは。上条さんはこれから行く所がありまして……」

引きつった笑みを浮かべながら、当麻は一方通行を見る。

その顔は凶暴な笑みを浮かべていた。

まるで猛獣が、獲物を捕獲した時のような雰囲気である。

逃げれない、当麻はすぐにその事を理解した。

「小萌、男同士の話だからよォ。悪いンだが少し席を外してくれねェか？」

「は、はぁ……」

可愛らしく小首を傾げながら、小萌は一方通行の言われた通りに二人から距離を取る。

やがて二人の声が聞こえないだろうと思わしき場所まで移動すると、

小萌はそこで立ち止まった。

それを見届けた後、一方通行は当麻の方を向くと、肩を軽く叩きながらささやいた。

「三下ァ……足りねェ脳みそで理解しろよ。次に小萌をからかったらよォ……夜の一人歩きには注意しろよ？」

「ハイ、ゴメンナサイ」

カクカクとロボットのように首を縦にふる当麻を見て、一方通行は満足気に笑みを浮かべた。

ペシペシと二、三回肩を叩く。普通なら軽い攻撃に見えるが、一方通行は能力モードのためにベクトル操作が出来る。

よって軽くに見えても、実際は強烈な痛みが当麻を襲った。

「いってぇ！　お前、絶対能力使っただろう！」

「あァ！？　こンだけで済ませてやったンだァ。ありがたく思え！？　それとも愉快なミートパティになンか？」

文句を口にした当麻だが、一方通行の凶悪な顔を見て再び口を閉ざした。

（ああ……不幸だ）

そう思った当麻はがっくりと項垂れた。

しかし神は言った。不幸じゃなくて、完璧にお前の自業自得だと。

当麻を追い払うような形で別れた一方通行と小萌は、セブンスミストまで来ていた。
あれから二人の間には微妙な空気が出来たのか、ここに来るまで手を繋ぐ事は一切なかった。

「と、所でよォ……今日は何を買うンだァ？」

微妙にどもりながら一方通行は小萌に尋ねる。
セブンスミストは服屋である。
今日はクリスマスの買い物だったので、服屋に来た事を疑問に思った一方通行である。

「きょ、今日はですねー。私の服も買っておこうかなぁと思ったのですー」

小萌も微妙にどもりながら一方通行の問いに答える。
気不味い、それが二人の共通の認識であった。

（やっぱ三下は明日ぶっ殺す……）

不穏なことを考えつつ、一方通行はこの事態をどうにかしようと考えた。
一方通行は視線をあちこち彷徨わせると、この事態をどうにかできそうな人物を見つける。
が、その人物は本来あり得ない場所にいた事をすぐに理解する。

「なァ小萌……あれって優菜だよなァ？」

「ほえ？　あーそうですねー。でもあそこって男性服売り場では、なかったのではないでしょうかー」

二人の視線の先、そこには優菜が一人で服を見ていた。
といっても見ている服は女性服売り場ではなく、男性服売り場であったが。

「なンで男性服売り場なンかにいるンだ？」

「先生も分かりませんー」

素直に話しかければいいのに、二人はなぜか影からこっそり見る感じで優菜を見ていた。
その視線に気付いていないのか、優菜はさっきから服を掲げては元に戻すという行為を繰り返していた。

「青ばっかだな」

「青だらけですねー」

そして選ぶ服は決まって青色の服であった。
長袖シャツやズボンなどを色々と見ている優菜だが、決まって青系の服を選んでいる。
それも派手すぎず、なるべくスポーティな服ばかりを。

「男だな」

「男ですねー」

二人は顔を合わせて頷いた。どう見ても男にプレゼントする事以外思いつかなかった。

「何が男なんですか？」

そんな二人に背後から声をかける人物がいた。
声に反応して、二人は慌てて後ろを振り向く。

「こんにちは、一方通行さん、小萌先生。人の覗きは余り褒められた事ではありませんよ？」

そこにはにこにこと笑みを浮かべた優菜が立っていた。
最初からバレていた。
二人は優菜の姿を見てその事に気付き、顔を真っ青にする。

「お、おォ。奇遇だな、優菜」

「き、奇遇ですね。優菜ちゃん」

軽いパニックを起こしながら二人は優菜の言葉に答える。
そんな二人を見て、優菜はくすくすと笑う。

「そんなに怯えなくても、何もしませんよ。ちなみに、お二人が考えたような事で、服を選んではいませんので悪しからず」

「じゃあどういった理由で、服を選んでいたんですかー？」

優菜の言葉にほっとした二人は、軽く息を吐いて胸をなで下ろす。
しかし、すぐに別の疑問が浮かぶ。では、一体なんのために服を選

んでいたのかと。
二人はそう思ったが、疑問を口にしたのは小萌であった。

「数年ぶりに出会えた恩師に贈り物をするためです。無口で自分を語らない人ですから、何を贈ればよいのかなと迷いました。そこで、服なら受け取って頂けるかなと思いまして、こうして選んでいる訳です」

「恩師っつーと学園都市に来る前か？」

「そうですね。聖カトリーヌ女学院の時に出会いました。私が十二の時に出会いましたから、かれこれ数年は立っていますね。最も、最初の数ヶ月以降は、放ったらかしにされましたが」

そう言ってくすくすと笑う優菜は過去を懐かしむ表情をしていた。
彼女にとって大切な思い出を興味本位などでは聞いてはいけない。
そんな気持ちになった二人は、それ以上の質問を口にはしなかった。

妹達のささやかな楽しみ

「ああ、不幸だ」

当麻はがっくりとうな垂れながら歩く。
彼はずっしりとした袋を四つほど手に持ちながら歩いていた。
その隣に、軽そうな袋を三つほど持つ女性がいた。

「あっはは、流石に持ちきれなかったから困ってたんだ。ありがとうな、上条」

長い髪を後ろで結った伊達メガネの女、美鶴である。
ケラケラと笑う美鶴だが、反対に当麻の方は不幸オーラ満載といった雰囲気であった。
それもそのはず、当麻は重い荷物のみを持たされているのだ。
重量級の荷物は当麻の体力をすごいスピードで削っていく。
腕がプルプルと震えだし、そろそろ休憩を希望したいと考えているぐらいだ。

「それが問答無用で荷物を押し付けた人の言う事ですかね？　美鶴さん」

皮肉を込めて言うが、残念ながら美鶴には通じなかった。

「じゃあお礼に恋人っぽく腕でも組んでやろうか？」

更にはからかわれる始末。
当麻はぐぅの根も出ずに敗れ去ることとなった。

「それにしても大荷物だなぁ。一体何が入ってるんだ？」

「クリスマスの準備道具さ。私を含めて学園都市にいる妹達の十二人でささやかなパーティをやるんだ」

「十二人……えっと御坂妹に、美鶴に、美咲に……」

「美冬（みふゆ）、美静（みしず）、美秋（みあき）、美夏（みなつ）、美春（みはる）、美月（みつき）、美里（みさと）、美空（みそら）、美朱（みあか）の十二人。名前ぐらい覚えてくれよ、名付け親の上条さん」

「うぐ……善処します……」

ニヤニヤと笑う美鶴に何か言いたかったが分が悪いと判断して当麻は黙る事にした。

それから暫く無言で歩いていた二人だが、美鶴が突然足を止めて空を見上げた。

最初は訝しげに思った当麻だが、彼女に倣って空を見上げる。

「雪……か」

美鶴が見上げていた理由、それは僅かだが雪が降っていたのだ。

触れてしまえばすぐに消えるほど儚い雪。だけど、確かにそこに存在していた。

「雪か……早いもんだな、あれからもう半年以上たってるなんてさ」

「……そうだな」

あれからもう半年か、と当麻は再び思った。

絶対能力進化実験。
一万人もの妹達が産まれていたが、感情が豊かだったのは美鶴たち十二人のみであった。
後から聞いた話では、研究者の一人が実験で感情データを投入したとの事。
何のために入れたかは本人以外分からない。
幸か不幸か感情データを投入されたという理由で、美鶴たち十二人は学園都市に残される事になった。
だが、その他の妹達は外の協力機関へと調整のために送られた。

考えて見ればもう半年もたっていたんだ。
そう思うと、時間がたつのは早いなと当麻は漠然と思っていた。

「……後どれだけ冬を迎えれるんだろうなぁ……」

その言葉に当麻はハッとなる。
こうして普通に話しているが、美鶴たちはクローン体だ。
無理やり成長させた弊害で普通の人間より寿命が短い。
調整で何とかしているが、それでも普通の人間より短いのは避けられない。

「美鶴……」

「そんな悲観そうな顔するな、上条。誰かが悪いってわけじゃない」

屈託なく笑いながら美鶴はそう言った。
クローンだからといって彼女は悲観したりしない。
むしろ普通の人間より精一杯毎日を生きている。

「他の妹達は知らないけど、私は誰も恨んでいない。むしろ皆がい

たからこそ、私は産まれてきたんだ」

「……」

「なのに姉貴はいつも辛そうな顔ばっかり見せるんだ。だから言ってやったのさ」

くすくすと笑いながら、美鶴は何か遠くを見るような表情で言った。

「姉貴がいたからこそ、私は産まれてこれたんだ。だから、ありがとう……てな」

「美鶴……」

「その後は大変だったさ。姉貴はボロボロと泣き始めるんだかさ。全く、どっちが姉だったのやら」

懐かしい思い出を語るかのように美鶴は告げる。
まるで、御坂の事を誇るかのように。

「……上条」

見上げていた視線を美鶴は当麻の方へ変える。

「これは私のわがままだ。上条が無理に聞く必要もねえし、聞き流したっていい」

その顔は優しさに満ちた笑顔だった。
そんな顔をしながら美鶴は当麻に語りかける。

「今年のクリスマスさ……妹達の皆にクリスマスカードを送ってくれないか？」

「クリスマスカード？」

「百円ショップで売ってるようなモノでもいい、量産されたクリスマスカードでもいい。本当に何でもいいんだ」

「……」

「私たちが生きていたっていう証になれば……ね」

優しい笑みから少しだけ寂しそうな表情に変えながら美鶴は言葉を紡ぐ。

「私たち妹達はクローン体だ。どれだけあがいても短命なのは避けられない。だからといって悲観したりはしない。むしろ最後まで生き続けてやるよ。みっともないと言われようと、無様だと言われようと最後まで精一杯にな。私はこれだけ生きたんた、胸を張って誇れる人生を歩んだんだぞってな……だけどよ」

そこで言葉を一旦区切ると、美鶴は一度深呼吸をした。

まるでその先の言葉を言うのに勇気がいるかのように当麻には見えた。

「外の……さ、学園都市にいない連中の何人かは思ってるんだよ。ずっと研究所で調整なら、モルモットと何が違うのか……ってね。そう思っちゃうのは仕方ないんだ。だけどね、私には我慢出来ないんだ……だから上条からクリスマスカードをプレゼントされれば、考えが変わるかも……てね」

当麻は言葉が出なかった。
美鶴が他の妹達のために色々しているのは知っていたが、ここまでとは思っていなかった。
寒気すら覚えるほど、彼女は妹達のために何かを成そうとする。
そう思ったせいか、自然と当麻から言葉が紡がれた。

「美鶴……お前は何でそこまで出来るんだ？」

当麻の質問を聞いた美鶴は軽く笑う。

「そんなの決まってるじゃない。妹達（みんな）が大好きだからだよ」

本当に何気なく、まるで当たり前の事だと言いたげな表情で美鶴は答えた。

美鶴の荷物を運び終えた当麻は、病院の休憩室にあるソファーに深く座っていた。
荷物運びのお礼と言って奢ってもらったジュースを飲みつつ、当麻は先ほどの会話を思い返す。

「大好きだから……か」

先ほど言った美鶴の言葉を当麻はポツリと呟く。

「何が大好きなのですか、とミサカは当麻さんに尋ねてみます」

「おわっ！？」

突然声をかけられて当麻は驚きの余り奇妙な声を出す。

「突然の大声は止めてください、とミサカはしれっと言います」

「お前のせいだろうが！　御坂妹」

いきなり現れた御坂妹に当麻は思わず突っ込む。

だが、そんな当麻を無視して御坂妹はソファーに座る。

当麻の隣に。

「あの……御坂妹。何で上条さんの隣に座るのですか？」

やたらいい匂いがするとか、柔らかい感触がふとももに当たっているのを全力で意識の外に追いやりながら当麻は言う。

しかし御坂妹は分かってやっているのか、執拗に当麻に見えない攻撃を仕掛けていく。

「当麻さんは私が横に座るのが嫌なのですね、とミサカは舌打ちしながら言います」

「いや、くっつきすぎでですね。もういいです……」

何を言っても止める気がなさそうな御坂妹に当麻は半分呆れながら言った。

御坂妹は小さくガッツポーズをすると、本当に遠慮なしにくっつき始めた。

「お姉様が素直になったのでミサカも対抗を、とミサカは心の中で闘志を燃やします」

「何の闘志かしらんが、きっと碌でも無い事なんだろうな」

「所で当麻さんはクリスマスをどう過ごすのですか、とミサカは話題を変えてみます」

「んー、今の所は沈利姉ちゃんたちと一緒に過ごすかなぁ……って考えている」

毎年のように彼女が欲しいなと思いつつ、結局は家族と過ごしているクリスマス。
それも悪くないなと、当麻は思っているのだがやはり彼女と過ごしたい。
そういう思いもあったりする。単純のようで複雑な男子高校生の悩みであった。

「ミサカは妹達と一緒に祝います、とミサカは手伝わない割に偉そうに胸を張ります」

「いや手伝えよ！」

「そうしたいのは山々ですが、姉御へのサプライズを用意するためです、とミサカは責任転嫁を試みます」

「……美鶴へのサプライズ？」

「はい、当麻さんは姉御の性格をご存知ですよね、とミサカは嫉妬を混ぜつつ尋ねます」

御坂妹の言葉に、当麻は美鶴の性格を思い浮かべる。
口は悪いけど竹を割ったよう性格で、何だかんだいって楽しいヤツだと当麻は思っている。
ただ妹達のために頑張り過ぎだなというのも同時に思い浮かんだ。

「ご存知のように姉御は妹達の皆にいつも気を使っています、とミサカは姉御について語ります」

「……そっか」

「本当に姉御は凄いと思います、だから私たちも敬愛の情を込めて姉御と言っています、とミサカは姉御を警戒しつつ言います」

「何で警戒するのさ」

別におかしいことじゃないと思った当麻は笑いながら御坂妹に尋ねた。

「姉御は意外と恥ずかしがり屋なのです、だから褒められるのになれていません、とミサカは姉御の弱点を口にします」

「弱点というより可愛い所だと思うけどな」

「うわ、この男ナチュラルにキザな台詞を言ったよ、とミサカは鼻で笑いつつ指を指します」

「待てや御坂妹」

「だけどそんな姉御だからこそ、クリスマスぐらいは楽しんで欲し

いのです、とミサカは話題変更して話を有耶無耶にします」

普段から表情が余り変わらない御坂妹だが、当麻は何となく御坂妹が嬉しそうにしていると思った。
まるで自慢の姉だと言いたげに。

「姉御は凄いです、普通の人になるためにミサカたちの口調を消しました、とミサカは姉御の凄さを語ります」

「あ……そういえば……」

御坂妹に指摘されて当麻は思い出す。
十一月末に病院に運ばれた時から、美鶴は普通の口調で喋っていた事を。
余りにも自然すぎて、指摘されるまで分からなかったぐらいである。

「口調が消えても姉御という個性（パーソナリティ）は消えませんでした、とミサカは羨ましく思いながら言います」

「……」

「姉御は妹達の皆を引っ張ってくれる存在です、とミサカは自分の思いを口にします」

「そうか……」

「だからこそ、私たちは姉御に日頃の感謝を込めてクリスマスプレゼントを考えています、とミサカは今更ながら手伝わない理由を語ります」

美鶴は妹達が大好きだと言った、だけど御坂妹たちも美鶴が大好きなのだと当麻は理解した。
少し不器用な美鶴の思いは、妹達の皆にしっかりと伝わっているのだと。

「プレゼント……か。そんなの一つしかねぇだろう」

「一つ……ですか？　それは何でしょうか、とミサカは当麻さんに尋ねます」

首を傾げて尋ねてくる御坂妹に当麻は確定的に断言する。

「そんなもん、お前らが今生きてて楽しいって気持ちを教えてやればいいんだよ！」

今を精一杯楽しんで生きていく、妹達の皆にはそう生きて欲しいと願っている美鶴。
だからこそ、その気持ちに応える事が、美鶴にとって何物にも変えられない最高のプレゼントになる。
当麻はそう確信していた。

そして自分も美鶴の気持ちにこたえよう、そう思った当麻は心に決めた。
気持ちをこめた一万人分のクリスマスカードを送ると。

頑張る師匠

ヴァチカンの聖ピエトロ大聖堂。
ローマ正教の総本山たる世界最大の聖堂にてローマ教皇が住む場所。
そしてもうひとつの顔は旧教勢力最大最高の要塞。
莫大な魔術的な仕掛けや領土を保護するための防御陣などが施されている。

しかしヴァチカンはそれだけではない。
領土にある建築物の九割以上が十字教的な意味を持つ。
その意味が複雑に絡み合った結果、最高管理者であるローマ教皇すら全容を把握しきれなくなった。
当然ながらイギリス清教が誇る魔道書図書館・禁書目録でも解析は不可能である。
無数の結界が衝突や競合を繰り返すヴァチカンは、もはや難攻不落といっても過言ではなかった。

そんな聖ピエトロ大聖堂の最奥。
限られた者しか知ることも、入ることも許されない所にその男はいた。

「降誕祭日が近いのである」

ウィリアム＝オルウェル、しかしローマ正教では一部の者からこう呼ばれていた。
『神の右席』後方のアックア、と。

彼がまとう雰囲気を感じただけで常人は萎縮してしまうであろう。
鍛えあげられた体躯に健全さがなく、血塗られた戦士という方が的

確な表現に思える。
どう見ても聖職者には見えない。
しかし彼は世界に二十人といない神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間である。
その身に宿すテレズマは圧倒的な力を発揮する。

「アックア、貴方に手紙と荷物が来ていますねー」

そんな彼へ気軽に声をかける人物が現れた。
頭の先から足の裏まで、全てが緑色の礼服に覆われた人物。
体は痩せすぎて、頬のこけた顔をしていたが妙な活力を感じさせる。
礼服の中も随分とゆったりしているように見えたその人物を、アックアは一瞥する。

「テッラか。私に手紙と荷物だと？」

緑色の礼服男、テッラと呼ばれた人物は両手に持っているモノを軽く上にあげる。
まるでこれがそうだぞ、と言いたげなように。

「この私を小間使いにしないでほしいですねー。まぁ貴方が相手では私たちに頼むしかないんですがねー」

テッラの言葉を聞きながらアックアは荷物を見る。
荷物はそこそこのサイズをしており、テッラが両手で抱えるぐらいの大きさであった。
その割に中身がないのか、重そうな雰囲気はテッラから感じられない。

「……この私に荷物とか間違いであろう。手紙などもっての外、捨

てて構わぬ」

視線を荷物から外すとアックアはつまらなさそうに言う。
テッラもそう答えると思ってたのか、アックアに何も言おうとしなかった。

「そうですねー。まぁ貴方に東洋人の知り合いがいるとは思えませんしねー」

荷物を持ちながら立ち去ろうとしたテッラ。
だがその言葉に聞き捨てならない事が含まれているのをアックアは気付いた。

「……待て、テッラ。その荷物はどこから送られてきたものだ」

「え？　えーっと、日本って所からですねー」

東洋人、日本、アックアの中で一つの答えが浮かんでくる。
だが早計はいけないと思っているのか、冷静に対処しようと努力する。
最も、彼の努力は無駄に終わりを告げるが。

「名前は、えーっと。日本人の名前は呼びにくいですねー。カ、カミジョー、ユーナって書いてますねー」

瞬間、テッラの手から手紙と荷物が消えていた。
あまりの素早さにテッラは一切反応する事が出来なかった。

「私の勘違いであった。手紙と荷物はありがたく貰っていく」

人類史上、最速の記録を打ち出したアックアは、荷物を大事そうに抱えながら早歩きで立ち去った。
完全に置いてけぼりのテッラは、首を傾げてアックアの背中を見る事しか出来なかった。

早歩きでテッラの前から立ち去ったアックアは、手頃な部屋を見つけると滑りこむように入る。
折よく鍵がかかる部屋だったため、躊躇いなくアックアは鍵をかけた。

「全くあの娘は心臓に悪い事をするのである」

そう言いながら大事そうに荷物をテーブルに置くアックア。
言ってることと、やってることがちぐはぐなのを彼は気づいているのだろうか。

「ふむ……相変わらず綺麗な字である。私など適当に書けばよいものを」

手紙は飾り気のない封筒であった。
表には『親愛なるウィリアム様へ』と書かれていたので、アックアは少しだけむず痒く感じてしまった。
封筒を綺麗に切ると、中には二つ折りの便箋が数枚ほど入っていた。
アックアは便箋を取り出すと、そっとひらいて中身を読み始める。

『親愛なるウィリアム様へ。

ご無沙汰しております、上条優菜です。
突然のお手紙で驚かれたと思いますが……』

ごく簡単な挨拶から入り、些細な事や最近あった事が事細かく書かれていた。
アックアとしては対応に困るなと思っていたが、口もとは薄く笑っていた。
よく見ると便箋にはうっすらと、別の文字を書いたような凹みがある。
きっと何度も書き直したのだろう、その事を理解したアックアは少しだけ苦笑した。
しかし最後の文を見て、そのまま凍りつく事となる。

「……まずいのである」

アックアはもう一度最後あたりを見直す。

『今年の降誕祭に、そちらへ伺いたいと考えています。
お返事を頂ければ幸いです。
もしお伺いが出来るのでしたら、アニェーゼさんにも会いたいです。
アンジェレネさんやルチアさんも元気にしてるのか気になります。
是非、声をかけていただけると幸いです』

「……」

自分の見間違いである事を期待したが、その淡い期待は木っ端微塵に砕かれた。
来ることは歓迎だ、誰にも文句は言わせない。

だが、アニェーゼたちは今ヴァチカンにいない。
その事がアックアにとっては気がかりだった。

「アニェーゼ部隊は確か……」

法の書事件のミスでアニェーゼ部隊は前線から外された。
ローマ正教にとって不利益を働いたという罪で、現在はヴァチカンから遠く離れた場所にいる。
北イタリアのキオッジア、そこである術式の労働を行っているのだ。
労働時間は平均で一日十八時間ほど。

「そんな所で働かさせれていると聞いたら、あの子は間違いなく乗り込むのである」

地獄のような労働を強いられていると聞いて、優菜が黙っているはずもない。
何かとんでもない事に事態が動くことだってあり得る話だ。

「その前にこの荷物には何が入っているのだ？」

一先ず荷物の中身を見てから考えよう、そう思い至ったアックアは荷物の封を解く。
封をといて箱をあけると、そこには服が一着入っていた。

「青……『神の力（ガブリエル）』の司る色である」

青系の長袖シャツと青色のズボン。今と余り変わりがないスポーティな服装であった。
だが、アックアはこの服に着替えようと思いいたった。
幸いにも鍵をかけているので、ばったり誰かに出くわす心配もない。

アックアは箱から服を取り出すと素早く着替える。

「うむ、ぴったりである」

着心地は快適であった。

今まで着ていた服が、とても違和感があるように思えるほど。

どうしてサイズがぴったりなのかは疑問たが、そこはあまり気にしないでおこう。

そう思ったアックアは、箱と手紙を綺麗に片付けた後、ある場所へ向かった。

「ヴェント、少し話がある」

「あぁ？」

ヴェント、と呼ばれた黄色い礼服を纏った女性がアックアの方を向く。

こちらもテッラ同様、頭の先から足の裏まで黄色一色であった。

「……ヴェント、貴様は貰って嬉しいプレゼントとは何なのである」

「……は？」

一瞬、ヴェントの頭は処理能力を超えて真っ白になった。

真っ白どころか、時空の彼方まで飛びそうな勢いであったが。

間違いに気付いたアックアは、一つ咳払いをした後に再びヴェントに言葉を口にする。

「……すまん、間違えたのである。ヴェント、少しの間アニェーゼ部隊を貸して欲しい」

「あ、ああ……アニェーゼ部隊つーと、ブゾーニの馬鹿の所にいる……」

「その通りである。一週間ほど貸して欲しい」

「はぁ!?　一週間もだと!　おい、アックア……」

驚いたヴェントが声を荒らげる。
アックアに文句を言おうとした彼女が、最後まで言い切る前に気付いた。
今のアックアは何かヤバい、ここでノーと言うと金属棍棒を振り回しそうな勢いに見えた。
そして更に奇妙な事にヴェントは気付く。

「おい、アックア。その服は何だ?　妙な術式を組んでいるようだが」

「ぬ、術式を組んだ覚えはないが」

ヴェントはアックアの顔を見たが嘘を言っているように見えなかった。
特に細かく聞く気がないヴェントは、それ以上の事を質問する気にならなかった。

「妙な多重構成魔法陣っぽいものだな。一つ一つの図形は小さいが、それを全部着ると初めて大きな図形を描く。一応、小さい図形にも意味はあるが……気にはなるな」

しかし興味はあるのか、ブツブツと何かを呟いていた。
アックアは余り興味がなかったので、再度ヴェントに質問を投げる。

「ヴェント、アニェーゼ部隊を一週間ほど貸して欲しい」

「……チッ、まぁいいよ。ブゾーニの馬鹿がいいっていったらな」

「分かったのである」

そう言うとアックアは早歩きでその場を立ち去った。
立ち去った後も、何かつまらなさそうな顔をしながらヴェントは考えていた。

「アックアの奴はどうしたんだ？」

そんなヴェントに声をかける人物がいた。
これまたやはり、頭の先から足の裏まで全て赤一色であった。

「知らねーよ、フィアンマこそ知らないのか？」

「俺様も知らんから聞いているのだ」

フィアンマ、と呼ばれた男が気怠そうに答える。
二人揃って考えてみたが、当然ながら答えは出るはずもなかった。

「所でだ」

飽きたのかどうか知らないが、急にフィアンマが真面目な顔をして口を開いた。

ヴェントは面倒くさそうな顔をしながら、フィアンマの言葉を待った。

「俺様の出番はこれで終わりなのか？」

待つんじゃなかった、そう思うヴェントであった。

数日後、北イタリアのキオッジア。

そこに総勢二百五十二名にものぼる漆黒の修道服を着たシスターが集まっていた。

そんなシスターたちを見ながらアックアは言った。

「アニェーゼ部隊、貴様たちは今すぐヴァチカンへ帰還するのである」

ヴァチカンへの帰還。それを聞いてもアニェーゼたちは無反応であった。

それより更に気になる事があったからだ。

視界の隅の方にボロ雑巾のように倒れているあるモノ。

明らかに『誰か』がボコボコにしたように見えるその人物。

それは変わり果てたビアージオ＝ブゾーニ司教であった。

もはや生きも絶え絶えという感じで、その顔に狡猾さは微塵も感じ

られない。

「ビアージオ＝ブゾーニ司教も快く了解してくれたのである」

（快く了解？）

明らかに了解を得たんじゃなくて、強引に了解させたにしか見えない。

そう思ったシスターたちは、心の中でアックアに突っ込んだ。

「あのー、ウチらは何をするんですか？」

ひとまず全員を代表してアニェーゼがアックアに質問を投げる。

アックアも予想していたのか、よどみなくアニェーゼの問いに答える。

「降誕祭の日に来るある人物の護衛を担当してもらう」

「護衛？」

「うむ、彼女はヴァチカンに不慣れだと思うのである」

「えーっと、護衛対象者の名前は？」

アンジェレネがそう質問すると、アックアは少しだけ笑いながら言った。

「上条優菜」

その人物名にピクリと反応する二百五十二名。

その中で、一瞬で眼の色を変えた人間が二人いた。

「各自霊装のチェック！　それから体調を万全にしなさい！」

「ヴァチカンの地図を用意！　それで全ルートを構築しちまいますよ！」

「当日の陸路、海路、空路に関する情報を集めなさい！」

「部隊を今から分けちまいますよ！　全員キビキビと動きやがれです！」

ルチアとアニェーゼであった。

周りも驚くほどの変り身の早さに、流石のアックアも少しだけ面を喰らった。

しかしルチアとアニェーゼはそれらを無視して、ひたすらシスターたちに命令を送り続けていく。

「シ、シスター・ルチアとシスター・アニェーゼがかつて無いほどやる気にっ」

アンジェレネが驚きのあまりに呟く。

「シスター・アンジェレネ。ぼさっとしてないで早く動きなさい！」

それを見たルチアがアンジェレネに叱咤の声を飛ばす。

理解の追いついたシスターたちも一斉に動き出す。

「聖母様の護衛です、ミスは許されません！　万全の体制で臨みます！」

「了解！！」

ルチアの叫びにシスターたちが声をあわせて叫ぶ。

家族会議

神妙な顔をしながら沈利は姉妹を一瞥する。
彼女たちは今、家族会議をしている。
座長の席に沈利、右側に理后、左側にフレンダと最愛という席であった。

「始めるわよ」

どこから用意した分からないレトロなホワイトボードに沈利は文字を書き綴っていく。
学園都市でアナログなホワイトボードかよ、という突っ込みはあるだろうが姉妹はこれを気に入っている。
キュッキュとマジックの音が部屋に響く。
やがて書き終えた沈利は、姉妹の方に視線を向けながらホワイトボードを叩いた。

「クリスマスか……また大変な日が来たなぁ」

重苦しく言いながら語る沈利に、理后たちは無言で頷いた。
ホワイトボードには、こう書かれていた。

『当麻のクリスマスデート阻止作戦』

「さて、言ってしまえば年末の悩み事だな」

「大丈夫だよ、しずり。私はそんなしずりを応援してる」

「結局さ、毎年の恒例行事って訳よ」

「敵の数が年を追うごとに超増えていきます」

理后以外は深い溜息を吐く。

この場にいない当麻は、自覚していないがかなりモテる事を沈利たちは知っている。

そのため、クリスマスデートの誘いは意外と多い。

姉妹たちはこっそり後ろから手を回して、あれこれ策を弄する事で当麻とクリスマスを祝う権利を獲得していた。

だが今年は違う。何故か当麻は今年に入ってからはやたらとフラグを建築する。

「土御門の情報ではイギリス在住の人間にまで好感度上げをしたとか……」

「地球の裏側までいって超何やってるんですか……」

頭を抱えてうなる最愛だが、単にナンパしにいっただけとは思っていない。

姉妹たちは知っている。当麻はそんな事をするほど器用じゃないと。

きっと人助けをして、その結果が女の子から好意を抱かれたという事に。

「今年に入ってからだなぁ。というより七月にインデックスって奴が来てから調子が狂いまくりだ」

「おまけに学園都市公認の仕事が、当麻お兄ちゃんについてるって訳よね」

「……あれってとうまとゆうなが二人で担当だったよね？」

学園都市公認の仕事、それはインデックスが学園都市より外出する場合は護衛としてついていく事。
勿論、情報自体は秘密であるので、知っている人間は数少ないが。

元々の管理者は小萌であるが、小萌は教師であり万が一拉致されては問題になる。
また、一方通行は学園都市の最高機密にあたるので、これもおいそれと外に出す事は出来ない。
よってインデックスの知り合いで、かつ影響度が低い人間が護衛としてつく事となった。
それが当麻と優菜なのである。

「まぁまずは敵の数を整理しよう」

そう言って沈利はホワイトボードに人物の名前を書いていく。

「まずは第三位こと御坂美琴、妹達の中で一番要チェックの御坂妹、当麻のクラスメイト（女子）、心理掌握こと心ん、そしてイギリスの人間っと……」

「他にもいそうですが、超大物の敵と言えば超それぐらいですね」

最愛の言葉に理后とフレンダは無言で頷く。
沈利は黒マジックから赤マジックに持ち替えると、ホワイトボードに視線を向ける。

「まず第三位は簡単だ、合法的な罠で奴を仕留める。御坂妹は情報によれば誘う気がなく、妹達の連中らでパーティをするらしい。当麻のクラスメイトはまぁ問題にならんだろう」

「やはり毎年の強敵である心お姉ちゃんと……」

「ダークホース的な存在のイギリスの人間だね」

最愛とフレンダの言葉に沈利は頷く。

赤マジックで心の横に『強敵』と書き、イギリスの人間の横に『ダークホース』と書き足す。

そんな沈利を見て理后は疑問に思ったことを口にする。

「そういえば、ゆうなってとうまに好意を抱いたりしないのかな？」

「んー、どうだろうなぁ。でも、あいつの考えからいってなさそうだしなぁ」

「優菜お姉ちゃんってさ、当麻お兄ちゃんを可愛がっているだけな感じがするんだよね」

「男女の関係というより家族的な関係を超重視している感じです」

優菜がライバルになる事はないと分かってても、姉妹は揃って頭を悩ます。

もし優菜が当麻に好意を抱いたら大変だ。強敵とかいうレベルではない。

他の連中にはない『家族』というアドバンテージが、優菜だけには通じなくなる。

「……ただ優菜って、男より同姓の女にモテるよなぁ」

「それは超ありますね」

「特に年下はイチロコよね、母性本能全力全開の優菜お姉ちゃんは強すぎるって訳よ」

「なんというか、本当に『お姉ちゃん』って感じがして、超甘えたくなるのです」

「しかも無自覚でやるからタチが悪い。気付いたら堕ちてるからな」

「実はゆうなは女の子が好き？」

「「それは（超）違います」」

理后のボケに全員が突っ込みを返す。

それでもキョトンとする理后であったが、姉妹たちはとりあえず無視した。

「ひとまず心んは要注意だ。後はイギリスの人間がどう動くか分からんが、それっぽい奴を見たらチェックしとけ」

「了解ー、っとそう言えば第三位って本当に大丈夫なの？」

フレンダの問いに沈利は意地の悪い笑みを浮かべながら言った。

「ああ、絶対にあの罠から逃げることは出来ねぇ」

沈利たちが家族会議をしていた頃。
遠く離れた常盤台の寮。
その一室である二〇八号室では、一人の少女が燃えていた。

「今年こそは……当麻とクリスマスデートをする！」

拳を握りしめて叫ぶ御坂を、黒子は何か恐ろしいものを見た表情で呟く。

「お、お姉さまが……かつてないほど燃えていらっしゃるんですの！」

全身から電気が漏電するほど、御坂は燃えていた。
なぜなら素直になった今、今の御坂は意地を張るような真似をしないからだ。

「ふっふっふ、今年の私は誰も止められないわ！」

そう意気込むと早速デートの誘いをするために携帯電話を取る。
ある意味では暴走とも取れる御坂の行動だが、そのせいか無駄に行動力が発揮されていた。
しかし、そんな御坂に横槍が入った。

「白井、御坂。ちょっと寮監室までこい」

突然ノックの後に女性の声が扉の向こうから聞こえてきた。

その声を聞いた瞬間、二人はビクっとなり顔から嫌な汗が流れだした。

「え、えええっと。寮監様？」

「今が無理なら後でも良い。だが、忘れずに寮監室まで来るのだぞ」

扉の向こうから寮監の立ち去る音が聞こえる。
その音を聞きながら、黒子と御坂は顔を見合わせながら首を傾げた。
なんで寮監室に二人が呼ばれるの、と。

あれから身なりを整えた二人は、頭を悩ませながら寮監室にやってきた。
理由は何故二人が呼び出しされたかだ。特に何かした覚えもない。
隠れた罪状はいっぱいあるかもしれないが。

寮監に促されて部屋に入ると、二人は案内されたソファーに座る。
そして寮監から、二人を呼んだ理由が語られる。

「「あすなろ園のクリスマスパーティ？」」

「そうだ、私があすなろ園でボランティアをしているのは知っているよな？」

「は、はい」

「お前たちも一時期ボランティアをしていたが、あの時に子供たちがいたくお前たちを気に入ってな。クリスマスパーティを一緒にどうだという話がきたのだ」

寝耳に水の話とはまさにこの事である。
御坂としては当麻とデートがしたい、しかし子供たちの思いを無碍にするのも出来ない。
盛大に頭を悩ませる御坂だが、反対に黒子は満面の笑顔を浮かべながら言った。

「まぁまぁまぁ、可愛らしい子供たちですの。お姉様、子供たちの期待に答えるのも、レベル5としての責務ですの」

「うぐっ、あんた……何か企んでるでしょう」

「おーっほほほほ、失礼ですの。お姉さまはわたくしが何か企むような女とでもいいたいんですの？」

「うん」

即答であった。秒の迷いすらなく御坂は黒子の問いに答えた。
その迷いなき瞳に、黒子は高笑いのポーズのまま固まった。

「白井の事はどうでもいい。お前たちの返事を聞きたい。今すぐではないが、なるべく早く返事が欲しいのでな」

「ええっと……断った場合は？」

おそるおそる御坂は寮監に尋ねる。
寮監は持っていたやたら硬い印象をあたえるカップを握りつぶしながら言った。

「……その場合は残念だが子供たちにそういうだけだ」

寮監の背後で黒いオーラが燃え上がるのが見えた御坂と黒子。
二人は顔をひきつらせながら、互いに聞こえる程度の声量で話す。

（ねぇ黒子……あのカップってレベル４の念動力能力者でも潰せないって代物じゃなかったっけ……？）

（どんなに手荒に扱っても大丈夫、がキャッチコピーですの。それを素手で……）

あの細い腕のどこにそんなパワーがあるのだろう、御坂と黒子は戦々恐々しながら思った。
この時点で御坂たちに選択肢はひとつしかなかった。
寮監の無言のプレッシャーに屈した二人は、あすなろ園のクリスマスパーティ参加を選んだ。

「と、所で失礼ですが資金などは大丈夫なんですの？」

黒子は資金面に関して疑問に思ったので、寮監に質問を投げる。
あすなろ園は置き去りを保護して育てる施設だ。
いっては悪いが、潤沢な資金などがあるとは思えない。

「その点は大丈夫だ。何でも寄付があったそうだ」

「寄付？」

「そうだ。寄付と一緒にあった手紙に『レベル５なのに驕り高ぶらず、ボランティアに精を出す御坂様に感銘を受けました。このお金で是非御坂様とクリスマスを楽しんでいただけたら幸いです』と書かれていた。だからお前たちに声をかけたという訳だ」

「な、なるほど……」

流石にこれで断るのは気が引ける。そう思った御坂は、少しだけ残念そうにため息を吐く。

当麻とデートしたい御坂だが、今年は諦めるしかないと思い至った。

「ではお前たち二人とも参加でよいな？」

寮監の言葉に御坂と黒子は二人揃って頷く。

今年のクリスマスは別の意味で賑やかになりそうだ、と御坂は思った。

気紛れ

アクゼリュスは学園都市のとあるコンビニで悩んでいた。

「ふむ……」

彼女の前には甘そうなお菓子が二種類並んでいた。

片方はチョコレート、もう片方はクリーム菓子のようである。

どちらも同じ商品であり、かかっているモノが違うだけであった。

『あの……アクゼリュス様。悩むのでしたら二つとも買えばよろしいのでは……』

「馬鹿いうんじゃないわよ。こういうのは悩むからいいのよ」

冷静な意見を言うオートクレールだが、アクゼリュスは全く聞き入れる気はないらしい。

周りの客の迷惑も考えず、ずっと商品とにらめっこをしていた。

『甘い物がお好きなのは存じ上げておりますが、もう三十分もにらめっこしておりますよ……』

「二種類ってのが悩むのよ。どっちかハズレだった時に困るでしょう？」

『はぁ……』

アクゼリュスの言葉にオートクレールはついため息を吐く。

ついてこい、の一言でついてきたオートクレールだが、まさかコン

ビニの買い物とは思わなかった。
わざわざ姿を偽装する魔術をしなくてもよかったのでは、と思い始めたぐらいである。
そんなオートクレールの考えを他所に、アクゼリュスは至近距離で商品をにらめっこする。

「よし、決めた。今回はクリーム味で行くわよ」

ようやく結論に至ったアクゼリュスは、そう言うとカゴに商品を入れていく。
数は三つ、入れ終えた後はそのままレジへと向かった。

「（毎度ながら甘い物ばっかり）ありがとうございましたー」

すっかり顔なじみの客になっているアクゼリュスだが、気にせず支払いを終える。
アクゼリュスが出したのは現金ではなく奇妙な黒い色をしたカード。
学園都市外のカードであるが、不思議と学園都市でも使用が出来た。

支払いを終えたアクゼリュスは、コンビニ袋を片手に持つとそのまま店を出て行った。

教会世界でも最も悪名高い魔女が、日本のコンビニで買い物というのも奇妙である。
だが、アクゼリュスは単なる戦闘バカではない。
強靭な力を持ちながら、柔軟な思考を持ち合わせている。

情報収集能力も高く、あらゆる知識に対して貪欲なまでに吸収していく。

一箇所に余りとどまらない彼女だが、今は学園都市でじっくりと腰を落ち着かせている。
勿論、不法侵入の上に不法滞在者ではあるが。

彼女を追い出す気もないのか、学園都市は彼女の存在を知っていてあえて放置している。
最も、追いだすとなれば相当の労力を要求されるので、デメリットが大きすぎると判断した可能性もあるが。

そして、周りに溶け込むという行為をアクゼリュスは時々だが行う。
しかしいくら周りに溶け込もうと、彼女は知らず知らずの内に目立ってしまう。
特に悪人から。

暗い夜道を歩いていたアクゼリュスとオートクレール。
だが、ふいにオートクレールが耳をピクリと動かす。

『……アクゼリュス様』

「分かっているわよ」

オートクレールの言いたい事を理解していたアクゼリュスは、歩くスピードを変えずに答える。

「七……んー、九ね」

『いかがいたしましょうか。虫ケラが九匹程度など、お相手するま

でもないかと』

「魔術師ではないわね。感じからして能力者かしら」

そう言いながら語るアクゼリュスの顔は、禍々しいほどの笑みを浮かべていた。

「私に敵対するというのなら、たとえ無知でも相手してあげないとね。貴方はこのお菓子を絶対に死守しなさい。九匹を血祭りにあげたら食べるわ」

『御意。しかし、お戯れも程々にお願い致します』

「分かってるわよ」

そう言うとアクゼリュスはオートクレールを見ずにコンビニ袋を突きつける。

それを口に咥えると、オートクレールの姿は空気に溶け込むように消えた。

オートクレールが消えた後、夜道にはアクゼリュスと彼女に敵対する九人の能力者だけとなった。

「裏の人間ではないわね。となれば、無知で可哀想な子羊さんね」

その言葉と同時にアクゼリュスは走り出した。

追われる者を演じるために。

アクゼリュスが走りだした事に気付いた九人は、慌てる事なく彼女を追いかける。

（追う事には少し慣れている感じね。でも、私を追いかけるのは少

々大変よ？）

その言葉通り、彼女は余裕の雰囲気を漂わせながら走っていた。

こうして、追う者と追われる者が逆転している狩りの時間が始まった。

九人は知らない。この時間が終われば、狩られるのは自分たちだという事に。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ！」

少女は暗い夜道を全速力で走る。

路地裏にある空き缶やポリバケツなどを蹴り飛ばしたりするが、その事を気にする様子は一切無い。

何かから全速力で逃げているかのように、少女の顔は必死の形相をしていた。

「ひゃはは、ほらほら。逃げないと丸焼けになるよー？」

その言葉と同時に、少女の真横に火球が飛んでくる。

明らかに加減が入っており、それほどの威力は見受けられない。

「きゃっ！」

だが真横に炎が飛んできた事に驚いた少女は、驚きのあまり足がもつれて地面に倒れてしまう。

ゴミの入ったバケツをひっくり返しながらこける少女を、その男はニヤニヤとしながら見ていた。

「あー、きったねぇなぁ。ったく、ゴミはゴミと一緒になりたいってかぁ、あひゃひゃひゃ」

「おいおい、お前だけ楽しむとかズルイぞ」

よく見れば男の他に、数人の男女が見受けられた。
彼らは接点がないように見えて、あるひとつの事に接点があった。

今、彼らは『無能力者狩り』というのをしているのだ。
そして狩る獲物は少女。
勿論、彼女が望んだわけでもなく、彼らが勝手に獲物と見なしただけだ。
彼女は裏の人間ではなく、ただ普通に学校へ通う無能力者であった。

「はぁはぁはぁ、な、なんで……」

「ん？」

息も絶え絶えな少女は、荒くなった呼吸を整えながら疑問を口にする。
だが、上手く口にできないのかそれは言葉になっていなかった。

「あー、どうせいつもの『なんで私を狙うの』じゃねー？」

「無能力者なんて、バカだから同じ事しかいわねーしよぉー」

その言葉に下卑た笑いをする能力者たち。

「あっちのチームも獲物を追ってるそうだし、いつもの場所まで追い詰めるかぁ？」

「そうだなー。ほら、さっさと立って逃げろよ。痛い目にあいたくなければなぁ！」

そう言って少女に火球を放り投げる能力者。
その力からいって一般的な発火能力（パイロキネシス）なのだろう。
だが、火の出力が圧倒的に高い。明らかに大能力者クラスである。

少女は火球を見ると立ち上がり、恐怖にかられながら走りだす。
選択肢は一つしか無い。少女には逃げるという選択肢しか。

そして走り続ける事十分。
やがて、開けた場所に出たがそこは行き止まりであった。
三方を壁に覆われ、上には鉄筋の屋根が存在する。
逃げ道は全くなく完全に追い詰められた状況であった。

荒い息をしながら後ろを見ると、少女の目にもう一つの道が見えた。
そちらに逃げよう、そう考えた少女だがそれを実行する事は出来なかった。

「ざーんねん。ゲームオーバーだぜ」

その声とともに火球が少女目がけて飛んでくる。
その火球は少女の手前に落ちて爆発した。
既に足に力が入らない少女は、その爆風で簡単に飛ばされていった。

「げほっ、はぁはぁはぁ……」

肉体的にも精神的にも限界に達した少女は、立つ力すら残されていなかった。
上半身だけを起こして、周りを見ると少し離れた所に十人ぐらいが立っていた。

「おぉっし、今日は俺たちの勝ちだな」

「あっちの方はおっせぇなぁ。九人もいて一体何を手間取っているんだぁ？」

少女のほうなど目もくれず下卑た笑いをする能力者たち。
今のうちに、と思っても少女の足は正直であった。
既に走る事すら出来ず、ましてや立つことすら容易ではなかった。

「お、きったようだぜぇ？」

やがてコツコツとブーツの足音が聞こえ始める。
この時点で異常に気付けば、彼らに生き残るチャンスはあったかもしれない。
何故、狩られる者が普通に足音を立てているのかという事に、彼らは気付かなかった。

やがて足音を立てていた人物が闇の中から現れる。
夜の魔女アクゼリュスであった。

「なーに、虫ケラが十匹しかいないじゃなーい。期待して損したわ」

つまらなさそうな顔をして、心底つまらなさそうな声でアクゼリュスは言った。

汚れどころか、汗ひとつすらかいていない少女を、能力者は最初訝しげに思った。
だが、相手チームが何か手を抜いたんだろうと考えると、ニヤニヤと笑いながらアクゼリュスを見ていた。

「へ、強がりはよしな。無能力者よぉ、てめぇらは……」

能力者の一人が下卑た笑いでアクゼリュスに声をかけるが、最後まで言い切る事は出来なかった。
アクゼリュスの顔、正確には瞳を見た瞬間に能力者は固まってしまった。
まるで見えない力で無理やり口を塞がれて、更には粘着テープを貼られたかのように。

「ふん」

震える能力者を一瞥した後、アクゼリュスは少女の元に歩み寄った。

「娘、名前は何と言う」

「……え？」

「名前だよ。娘なんて呼びにくいから、名前を教えろって言ってるの」

「紗、紗月。竜童（りんどう）　紗月（さつき）……」

少女、紗月はアクゼリュスを見上げなら自分の名前を口にする。
それと同時に、アクゼリュスが来た道に複数の足音が聞こえ始めた。
能力者たちは相手チームがきたと思って僅かに余裕を取り戻す。

だが、闇の中から現れた九人を見て仰天した。
九人はまるでフルマラソンをしてきたかのように汗だくだった。
ほとんどがフラフラであり、歩いているのが精一杯にしか見えなかった。

「紗月、助かりたいか？」

アクゼリュスは周りの能力者を無視して、紗月に向かって質問を口にする。

「希望は絶望を味わう為の愚かな夢だが……それでも助かるという希望にすがりたいか？」

禍々しい笑みを浮かべながら、アクゼリュスは紗月に向かって手を差し出す。
意味が分からず、紗月は呆けた顔をしてアクゼリュスの手と顔を交互に見ていた。

「この手を取れば、お前はこの危機を脱する事が出来る」

アクゼリュスは眼を細めて紗月を見ながら言う。

「だが、代価は頂くぞ。犠牲なくしてこの手を取る事は叶わん。それでもよいのなら、我が手を取るがいい」

少しだけ迷った紗月だが、助かりたい一心でアクゼリュスの手を握った。

「あはははははは、紗月。貴様はいい選択をした。約束通り貴様を助けよう」

アクゼリュスは歪んだ笑みを浮かべながら言った。

「……うん……た、助けて……」

そう紗月が言った瞬間、アクゼリュスを中心に荒れ狂う風が突如として発生した。

その場にいた紗月を除く全員が、風に対して為す術も無く飲まれていく。

殆どが壁にたたきつけられ、呼吸するのすら苦労するほどであった。

風の正体は単純であった。

アクゼリュスが普段使っていない魔力を少し開放しただけであった。

たったそれだけで、凶暴な台風を生み出していたのだ。

もしこの場に魔術師がいれば、余りの魔力の量に腰を抜かしただろう。

魔術業界の学者がいれば歓喜していただろう。

何故あれほどの力を溜め込んで暴走しないのか、という生きたサンプルになるから。

「貴様には少々刺激が強すぎる。安心して眠るといい」

そう言うとアクゼリュスは紗月の額にそっと触れる。

その瞬間、紗月はまるで糸の切れた人形のようにカクンと意識を失った。

やがてアクゼリュスが魔力の放出を終えると、その場にいた能力者

たちは無様に地面へ這いつくばっていた。

「ふん、雑魚に力を使うのも億劫だ。オートクレール、フラガラッハ！　雑魚を処分しろ、一匹たりとも残すなよ」

『御意』

『お任せあれ！』

アクゼリュスの声に反応して、二匹の獣が突如として姿を現す。
空間を引き裂いて現れた二匹の獣に、能力者たちは驚きのあまりに声を失う。
獣が喋るのもそうだが、それ以上に二匹から漂う雰囲気がある事を物語っていた。
今から狩られるのは自分たちであるという事を。

『アクゼリュス様、こいつら喰ってもいいんですか？　人間を食べるなんて久々ですよ』

「構わぬ、ゴミをどう処分しようと貴様らの勝手だ。逃さなければ、後はどう扱おうと構わん」

その言葉と同時に、アクゼリュスと紗月は空気に溶け込むように姿を消した。
その場に残ったのはオートクレールとフラガラッハ、そして大能力者や強能力者があわせて十九人。
実力差は明らかであった。

『へっ、オートクレールよぉ。俺は女を喰わさせて貰うぜ。ヤローの肉はマズイからな』

『勝手にしろ。私には貴様のような趣味はない。さっさと片付けて、アクゼリュス様の元に戻るだけさ』

『相変わらずキザったらしいヤツだな。あ、あの人間、ビッチ臭い女だけど、そこまで劣化してないだろう、よ！』

ノイズのような音がした瞬間、フラガラッハの姿が掻き消える。
同時に、何かゴリゴリと噛み砕くような音が辺りに聞こえ始める。
ピチャピチャと音を立てる方へ、能力者たちはおそるおそる視線を向けた。

「おごっ、ごば、ぶがっ」

そこにはフラガラッハによって頭をまる齧りされている能力者がいた。
ゴリゴリと噛み砕く音は、頭蓋骨を噛み砕く音であった。

『……マズイ……やっぱ能力者は薬品漬けだからクッサイわぁ。もうちょっと生娘みたいな甘い肉を期待したんだが……』

『貴様の好みなど知らぬ。食する気がないのなら、全員をさっさと消すぞ』

『へーへー』

咥えていた人間だったものを吐き出したフラガラッハは、めんどくさそうな雰囲気で答える。
だが、能力者は気が気でなかった。見たこともないような化物に人が喰われた。

その事が恐怖となり、逃げ出そうとする者もいたがそれは叶わなかった。

『無様だな。これほどの醜態を晒すとは、呆れてモノも言えん』

逃げ出す能力者に一瞬で追いつくと、オートクレールはその腕をふるう。

魔術などの力は一切使っていない、単純な腕力から生み出された攻撃。

だが、その攻撃を受けた能力者はまるで紙クズのように引き裂かれて絶命した。

「ひ、ひぃぃぃ!?　た、たすけて!!」

恐怖の極限に達した能力者たちは、腰を抜かしながら命乞いをする。

だが、オートクレールは少しだけ目を細めながら言った。

『……狩る者になれるのは、狩られる覚悟がある者だけだ。それがない貴様の願いなど聞く必要はない』

『そーそー、大人しく死んどけ。俺に捕まると、死ぬのが大変だぜぇ？』

『貴様らに死ぬ以外の選択肢はない』

オートクレールの言葉と同時に、虐殺という名の狩りの時間が幕を上げた。

代価

「こりゃあ酷いじゃん……」

事件現場を見て黄泉川はそう呟いた。

直視するのが躊躇われるほど、暴虐の限りを尽くした感じであった。

「せ、先輩……吐きそうです……」

「警備員が現場を荒らすなよ、鉄装（てっそう）。吐くなら何かビニールにでも吐け」

顔を真っ青にして今にも吐きそうな鉄装に、黄泉川は呆れながら言う。

「うぅ……暫く肉が食べれません……」

限界に達したのか鉄装は口を押さえながらふらふらと何処かに行った。

おそらく本当に吐くために移動したのだろう。

黄泉川はそう判断すると、もう一度現場のほうを見る。

「それにしても不思議じゃん。人が暴れたというよりは、大型の肉食獣が暴れたという方がぴったりじゃん」

あちこちにある死体の破片は、まるで獣が噛みちぎったように見える。

そして壁のあちこちにあるひっかき傷のようなもの。

しかしその傷は余りにも大きすぎる。
検証した警備員も、現存の生物では説明がつかないと首を傾げていた。

「死体も死んでから引き裂いたんじゃない。生きたまま引き裂いた感じじゃん」

比較的まともな死体の顔は畏怖、驚愕、恐怖、絶望、戦慄と色々な感情が綯い交ぜされた顔であった。
最も、それはマシな方でほとんどは肉片に近い形でバラされていたが。

「被害者の数も分からないじゃん。これだけバラバラだと、一体何人か判別するのに時間がかかりそうじゃん」

今夜は徹夜かな、と思いながら黄泉川は現場の整理作業を開始した。

そんな黄泉川たち警備員を見る目が一つだけあった。
現場の屋根、正確には鉄筋の上にソレはいた。

『ふん、やはりフラガラッハはあの後死体を弄んだか。相変わらずな趣味だ』

眼下の光景をつまらさなさそうな表情で見ながらオートクレールは言った。
あの夜、オートクレールとフラガラッハは十九人の始末をした。
だが、終わった後にフラガラッハが動こうとしなかったのを気に留めていたのだ。
だから夜が明けてから、また現場に戻ってきた訳である。

『フラガラッハがどう思われようと構わぬが、私の品性まで疑われるのは心外だな』

オートクレールがこの現場に戻ってきたのも、全てを抹消するためであった。

最初はそこまで凄惨な死体ではなかったが、フラガラッハが『お楽しみ』をしたせいで今の状態となった。

言うなればフラガラッハの尻拭いで、オートクレールは動いた事になる。

無論、警備員がアクゼリュスにたどり着く事などありえないが、念には念を入れるのがオートクレールの考えであった。

『他の人間に見つかった以上、消し炭にするのも叶わぬか』

しかし無駄な犠牲者を増やしてまでやる事でもない。

オートクレールはそう考え至ると、その場を後にした。

「うぅん……」

紗月はまぶたに陽光を感じたので、うっすらと目を開く。

最初に眼に飛び込んできたのは見慣れた天井。

ゆっくりと上半身を起こすと、目をさますために軽く頭を振る。

時計を見れば時刻は六時を少し過ぎた後。

普段起きる時間より、一時間近く早い事になる。

「あれ、私……昨日……」

その言葉を口にした瞬間、昨日の記憶が断片的に浮上してくる。
思わず吐き気を催した紗月だが、既の所でそれをおさえこむ。

「うぐ……昨日、能力者に襲われて……その後、その後？」

そこで気付く。その後一体どうやってここまで戻ってきたのかが思い出せない。
襲われて袋小路に追い込まれてからの記憶がプッツリと途切れていた。

「どうやって……」

「あ、起きたー？」

突然横合いから声が飛んできたので、紗月は慌てて声の方を向く。
そこにはルームメイトが、お盆を片手に立っていた。

「いやー、びっくりしたよ。帰ってきたと思ったら、いきなり玄関で倒れたんだから」

「倒れ……え？」

「ありゃ、覚えていない？」

「……」

ルームメイトの言葉に、言いようのない不安や苦しさが紗月に襲い

かかってくる。

「まぁ元気そうでよかったわ。おかゆ、食べる？」

「あ、うん。頂くよ」

「ほいよ、熱いから気をつけなさい」

「ありがと」

そう言って笑顔でお盆を受け取ると、紗月は早速おかゆを食べ始める。

ちょっと塩分が高いけど、それでもこの温かさが今の紗月には嬉しかった。

「そうそう、あんたこんな手紙握り締めていたけど……何なのこれ？」

「むぐっ……え？　手紙？」

「はい、これ。差出人の名前がないから分からないけど、物凄い達筆よね」

差し出された手紙を紗月は受け取る。

その瞬間、脳裏にある声が聞こえてきた。

『希望は絶望を味わう為の愚かな夢だが……それでも助かるという希望にすがりたいか？』

覚えのない少女の声が、軽い頭痛と共に囁くように聞こえてくる。

『だが、代価は頂くぞ。犠牲なくしてこの手を取る事は叶わん。それでもよいのなら、我が手を取るがいい』

それはとても可憐な少女の声。なのに、とても恐怖を覚えるような声色だった。

「ちょっと大丈夫!?　顔色が悪いわよ?」

「え?　う、うん。大丈夫」

「本当に危なかったら学校休むのよ?」

「もう、心配性だなー」

ルームメイトの心配に笑顔で答える紗月だが、心の何処かでひっかかりを覚えていた。

代価、という単語に。

その後、紗月はシャワーを浴びて学校に行く事にした。

部屋にいると気分が滅入るかもしれない。

そう考えた紗月だが、ルームメイトは最後まで心配していた。

（心配性だなぁー）

学園都市に来てからずっと一緒で、多少心配性なルームメイトの顔

を思い出してくすりと笑う。

（それにしても……この手紙は一体何なのだろう？）

カバンから手紙を取り出して文字を見る。

英語っぽい感じがするが、一体何が書かれているかさっぱりわからない。

手紙もそれなりに豪華な感じがするし、紙の材質がかなり良い。

だけど、差出人の名前はないし誰が何のために自分に持たせたのかが紗月には分からなかった。

「おっはよー、さっちゃん」

手紙とにらめっこしていると、クラスメイトが声をかけてきた。

「おはよー、涙子ちゃん」

顔だけそちらに向けて、紗月はクラスメイトの佐天に挨拶をする。

近寄ってきた佐天は紗月が持っている手紙を目聡く見つけた。

「なーにそれ、ラブレター？」

「ち、違うよー。そんな物貰ったこともないよー」

「ほっほぉー。ムキになる所が……って確かにラブレターじゃないわね」

紗月から強引に手紙を奪い取ると、佐天はニヤニヤしながらその手紙を見る。

だが、書いている文面を見てげんなりとした顔になった。

「よ、読めない……」

「そうだよねー。読めないよねー」

二人は同時にため息を吐く。

成績が良いと言えない二人に、筆達な文字は未知の文字に見えたのだ。

「あ、そうだ！　知り合いに読めそうな人がいた！」

「そうなの？」

「うん！　ちょうど今日遊ぶ約束しているし、ダメ元で聞いてみよう！」

「う、うんー」

佐天の言葉に、紗月は戸惑いを感じつつ返事を返す。

しかし、紗月は僅かばかりの嫌な予感を感じていた。

そして放課後、佐天は紗月を連れてファミレスまで来ていた。

「へー、かなり本格的な書き方ね」

「やー私たちじゃ読めませんのでー、ここは御坂さんの力を借りようかと」

手紙をじっくりと見ながら御坂はそういった。
佐天が言う読める人、とは御坂の事である。
常盤台の生徒だから、きっと英語ぐらい簡単だろうと佐天は気軽に考えていた。
だが、反対に紗月は気が気でなかった。

「ちょ、ちょっと涙子ちゃん！　と、常盤台のお嬢様だよ！　そんな人たちに手間をかけさせちゃ駄目だよ！」

紗月は半分涙目になりながら、佐天の服を引っ張りながら言う。
しかし佐天は軽く笑いながら紗月の肩を軽く叩く。

「問題ないよ、きっと常盤台のお嬢様だからすぐに解けるよ」

「涙子ちゃ～～～～～ん」

そんな事を言っているのではない、と紗月は言いたいのだが佐天には伝わらなかったようである。
二人のコントを無視して御坂は鼻歌まじりに文字を解読していく。

「んー、分かったわ。だけど、何の意味が込められているかまでは分からないわね……」

「本当ですか！　是非、内容を教えてください！」

御坂の言葉に佐天はいち早く反応する。
そのあまりの速さに御坂は少し引きながらも、軽く咳払いをする。

「えっとね、書いているのは英文。文は『Ｇｒｅａｔｅｒ　ｌｏｖｅ　ｈａｓ　ｎｏ　ｏｎｅ　ｔｈａｎ　ｔｈｉｓ，　ｔｈａｔ　ｏｎｅ　ｌａｙ　ｄｏｗｎ　ｏｎｅ'ｓ　ｌｉｆｅ　ｆｏｒ　ｈｉｓ　ｆｒｉｅｎｄｓ.』ね。で、意味は『人がその友のためにいのちを捨てるという。これよりも大きな愛はだれも持っていません。』ね。ただ、何のために書いたかまでは分からないわね……」

「さっすが御坂さん。でも、一体何の意味が込められているんでしょうね？」

「聞いてる限りではお友達を救うために命をかけるって感じに聞こえるけど……」

三人揃って頭を悩ます。

書かれている文の意味が分かっても、それをわざわざ手紙に書いた理由が分からない。

一難去ってまた一難という訳である。

「いらっしゃいませー、何名様でしょうかー？」

「一名じゃ。出来れば静かな場所を所望する」

「わかりましたー。では、こちらへどうぞー」

ふと佐天は視線を店員の方に向ける。

その後ろにいる人物を見て、驚きのあまりに大声を上げる。

「あー！　あんたは！」

「ん？　貴様、何故ここにいる！？」

佐天の声に反応した人物。
それは身長が１２０ｃｍを下回る明らかに赤いランドセルを背負っても違和感がない少女。
金髪を左右で結っているツインテール、少し勝ち気な蒼い眼をした西洋人。
常に優菜が第一のアリシアであった。

「それはこっちの台詞よ。ここで会ったが百年目！」

「ふん、店の迷惑を考えないような小娘なぞ相手しておれるか」

アリシアを睨む佐天だが、反対にアリシアはつまらなさそうな表情をしていた。
実際、アリシアの方が常識的な発言なのだが佐天はそこに気付かなかった。
店員もオロオロとしていたが、二人の雰囲気に当てられたのかそれ以上は何も出来なかった。

「言ってくれるわね、ちびっ子のくせに」

「貴様も早く妹の座を諦めろ。慕うのは構わんが、貴様如きに姉上の妹は全うできん」

「うがー！　最近、お姉様と出会わないのはあんたが何かしてるでしょう！」

「やれやれ、負け惜しみとは醜いのぅ」

「はんっ！　会う事は出来なくても、おはようとお休みのメールは毎日しているわ！」

「うつけが、貴様と違って妾は面と向かって言っておるぞ？　勿論、学校ではなく姉上のベットの中でな！」

「なんですってー！」

「ナメるなよ、新参者。聖カトリーヌ女学院時代に、姉上の妹になりたいと言った連中は何人いたと思う？　百人以上はいたのだぞ。その中から選ばれた妾以外に、姉上の妹を全うできる訳がなかろう！！」

「絶対にその座から引きずり下ろしてあげるわ！」

「やれるものならやってみろ！　妾が姉上の妹というのは絶対的法則だ。貴様如きにどうにか出来るわけがなかろう！！」

二人揃って醜い争いをしているのだが、その点は二人とも気付いていないらしい。
ぎゃあぎゃあとわめき散らす二人は、一向に止める気配がない。
だが、ふとアリシアが何かを感じ取ったような表情で御坂を見る。
正確には手に持っている手紙をだが。

「……おい、その手紙は一体誰の持ち物じゃ？」

喚く佐天を無視して、アリシアは真剣な顔で尋ねてくる。
その真剣さに、御坂と紗月は首を傾げながら答えた。

「わ、私のだけど……」

恐る恐る手を上げた紗月を見て、アリシアは少しだけ眼を細める。
佐天も何かを感じたのか、喚くのを止めてアリシアを見ていた。

「その手紙を貸せ」

「え？　う、うん……」

アリシアの雰囲気に気圧されたのか、御坂はおっかなびっくりな感じで手紙を渡す。
差し出された手紙を無造作に奪い取ると、アリシアは手紙に視線を落とす。

「（文字から感じる魔力はやはり……）ヨハネの福音書　第十五章十三節か」

「は？　あんた意味がわかるの？」

「新約聖書の一節だ」

アリシアは心底つまらなさそうな表情で御坂の問いに答える。
手紙をペラペラと振りながら、アリシアは視線を紗月の方に向ける。

「おい、貴様。ここ最近で銀髪に赤い瞳をしたゴスロリ少女と会話した記憶はないか？」

「え、ええっと……」

「覚えていないのか？　まぁ覚えていなくとも契約を交わした後のようじゃな」

「一体何なの？　その手紙は……」

要領をえないアリシアの言葉に周りは困惑する一方だった。
だが説明するのが心底面倒臭いと言いたげに、アリシアはため息を吐きながら言った。

「簡単に言えばその娘はマヌケって事じゃ。大馬鹿と言ってもいいな」

「……え？」

アリシアの言葉の意味が全くわからない紗月だが、当のアリシアは全く気にする事なく言葉を紡ぐ。

「この手紙は代価の請求書。そして書かれている文から、要求しているものは一つ」

アリシアは紗月を見下したような嘲笑いを浮かべて言った。
しかし紗月はアリシアの笑みを見て妙な胸騒ぎを覚えた。

「契約の代価。それは貴様の友人の命。それも一番大事な友人の……な」

そして紗月の悪い予感は的中した。
それもとびっきり最悪な方向で。

不可解

「見つかりませんねー」

気怠そうな声で初春は呟いた。

ぐったりと机に突っ伏しており、一目でやる気がないのが伺えた。

「範囲が広すぎますの。能力者、大型の獣、その他色々とバリエーションが豊富ですの」

「目撃証言もゼロ……確かに警備員が風紀委員に協力を依頼した理由も頷けるわ」

黒子も目の前の書類を見てげんなりしながら呟いた。

そして監督役の固法ですら、疲れたようなため息を吐いていた。

彼女たちが頭を悩ます原因、それは能力者大量殺人事件の調査であった。

犠牲者はレベル４が十一人、レベル３が八人の計十九人である。

年齢も性別もバラバラ、しかし犠牲者たちは『無能力者狩り』という事に手を染めていた。

当初は逆恨みの路線も考えられたが、それにしてはおかしい点が色々とある。

レベル４が十一人もいるのだから、相手もそれなりの人数が要求される。

なのに、そんな大人数があの日、あの現場付近にいたという証言も証拠もない。

その上、被害者の殺され方が人というより、獣に襲われたという方が的確な点もおかしかった。
しかし獣の体毛などは一切見つかっていない。
大暴れしたとしか見えない現場だったのに、体毛一つ見つからなかったのだ。
被害者の噛み跡からも、ＤＮＡなどは検出されなかった。

被害者の殺され方と加害者と思わしき相手が全く未知な事件。
不可解すぎる事件に、警備員は人員増員のため風紀委員への協力依頼を行った。

そして風紀委員の黒子たちは、早速調査に乗り出したのだが。

「いきなり壁にぶち当たりましたねー」

「というより、不可解な事が多すぎて何から手をつければいいか分からないわね」

早速挫折しそうになったのである。
事件の内容は単純だが、解決に至る道が途中でぷっつり切られている。
だから不可解な事が分からず、結果的にヒントすら見つからない状況となっていた。

「まるで底なし沼みたいですの。探せば捜す程深みにハマっている気がするんですの」

黒子の言葉が今の三人の心理状態を的確にあらわしていた。
あきらめムードが漂い始める。

「ええい！　離せ、離さんか！　このうつけがぁ！？」

「いいから来なさい！　あんたの知ってること全部話してもらうわよ！？」

「なんで妾がそんな事せねばならん！」

そこへ外から言い争う声が扉越しに聞こえてきた。
三人は小首を傾げながら扉を見ていると、突然扉が勢い良く開け放たれた。

「黒子！　証言者を連れてきたわよ！」

「……お姉様？」

扉を開けて入ってきた人物は御坂であった。
その顔は心なしか焦っているようにも見えたが、三人はそれより後ろの方が気になった。

「佐天さんと……誰ですの？」

そこには佐天と紗月、それから佐天に後ろから羽交い絞めされているアリシアがいた。
アリシアの顔は物凄く不機嫌そうな顔をして膨れていたのは言うまでもない。

「事件を解決する情報を持った人間よ」

アリシアを指さしながら御坂は周りにそう告げた。

当然ながら無理やり連れてこられたアリシアが素直に口を開くわけがない。

「相手は何処にいるの？」

「知らん」

「……壁に大きなひっかき傷があったけど、アレは何なの！？」

「犬でも暴れたんじゃないか？」

「……あの手紙はフザケてるの！　人の命を代価ってあんたはどう思ってるのよ！？」

「客人に茶も出さないとは、一体どういう教育を受けたか知りたいのぅ」

御坂が何を言おうが適当に答える、もしくは小指で耳をほじって鼻で笑う始末。

余りの態度に御坂の怒りが爆発しそうになったが、周りが何とかそれを宥めて事無きを得た。

「申し訳ありませんが、事件解決のために協力してくれませんの？」

「協力して妾にメリットがない。よってお断りじゃ」

取り付く島もないとはこのことを言うのだろう。
黒子だろうが御坂だろうが、誰が何を言ってもアリシアは口を割る気がない雰囲気であった。

「じゃあどうすれば協力してくれるの？」

初春が出した紅茶を優雅に飲んでいるアリシアに、固法は真剣な目をしながら尋ねた。

「（ふむ、頃合いかな？）……どっちの事件を指している。それによっては考えよう」

「ええと、御坂さんが連れてきた子については詳細が分からないの。だから、私が言う事件ってのは能力者大量殺人事件の方よ。そっちについて何か知っている事があれば、協力してほしいわ」

「……まずは事件現場の写真でも見せてくれ。それでないと協力するかしないかは答えられん」

「そう……結構グロテスクな写真だけど大丈夫？」

「問題ない」

アリシアの言葉を聞いて、固法は黒子に目配せする。
黒子は軽く頷くと、近くにあった封筒を手にとった。

「これが事件現場の写真ですの」

そう言うと黒子は封筒からいくつかの写真を取り出す。
その写真を見て、御坂たちは思わず目をそらす。

生々しいスプラッタ写真など、普段お目にかからない彼女たちは全く耐性が無かった。

「……」

だがアリシアは写真を手に取ると、真剣な目をして写真を見る。
その顔に嫌悪感は全く無かった。

「（やはりな。オートクレールとフラガラッハの仕業か）……なるほど。こちらの事件なら協力してやろう」

「なら、犯人に近づく情報を教えて頂戴」

少しだけ安堵した顔をして固法はアリシアにそう言った。
反対に、アリシアは楽しそうに笑っていた。

「犯人か……あはは、犯人かぁ」

何がおかしいのか分からない固法たちはアリシアに訝しげな視線を向ける。
だが、アリシアは全く意に介さず笑っていた。

「なるほど、合点が言ったわ。どうして、あんな雑魚にあの手紙が届いたのか不思議ではあったが、確かにこれなら話が通る」

「……何の事？」

「くっくっく、愉快すぎるわ。おい、そこで呑気に呆けている小娘」

「え？」

突然話をふられた紗月がビクっと反応する。
しかしアリシアは気にせず写真をぺらぺらと振りながら言った。

「何をボケッとしておる。お前の望んだ結果が写真にのっているんだ。しっかりと見てやるのが、弔いになるだろうが」

アリシアの言葉に全員が絶句する。
彼女の言葉のとおりなら、能力者大量殺人事件を起こした人物は紗月。
しかし、それはすぐに否定される。なぜなら、彼女は無能力者だから。

「馬鹿を言わないで下さいですの。相手は能力者が十九人もいるんですのよ？　失礼ですが彼女一人では……」

「直接手を下した訳ではない。手を下した存在は別にいる、ただ能力者たちを殺せと命じたのは……」

アリシアはそう言うと腕をゆっくりと紗月の方に向ける。

「その女じゃ」

「！」

御坂たちは驚きのあまり声を失う。
アリシアの話は筋が通っていた。
紗月が無能力者でも、手を下した人物が別にいれば可能だ。
だが、その人物も紗月が命じなければ動かなかった。
そう考えれば、紗月が殺したも同然と考えられる。

「なるほど、そして親友を犠牲にして貴様は生き残るという訳か。
ははっ、合計二十人も殺しているじゃないか。中々出来る事ではないぞ？」

「そ……んな……」

紗月は頭を抱えながらふらふらと後ろに下がる。
その足取りはおぼつかない感じで、今にも床に崩れ落ちそうな雰囲気であった。

「んー、まぁ手遅れじゃし諦めろ。どうあがいた所で……」

呆れた顔をしながら言うアリシアだったが、最期まで言う前に横から手が伸びてきた。
その手は彼女の襟首を掴み、そのまま強引に宙へと持ち上げた。

「……！」

アリシアを持ち上げた人物は御坂であった。
奥歯を噛み砕きそうなぐらい、歯を強く噛みながらアリシアを睨んでいた。
しかし、その視線を受けてもアリシアは全く動揺しなかった。
むしろ見下しているような雰囲気すらある。

「そいつは何処にいるのよ」

御坂は静かにアリシアへ問いを投げた。
怒声でも罵声でもなく、ただ平坦な声で言った。

「さっきから言っただろう？　妾は知らんと。まぁよしんば知っても教える事は不可能だがな」

「そぅ……もう一度言うわ。そいつは何処にいるのよ」

「しつこいな。知らんと言ったら……」

その瞬間、バチっと何かが弾ける音がした。
音に気づいた黒子たちが御坂に視線を向ける。
よく見れば、御坂の全身はバチバチと放電を繰り返していた。

「三度目はないわよ」

ともすれば脅迫にしか聞こえない御坂の言葉。

「ほほぅ、流石は第三位様じゃな。言う事を聞かないなら、力で言う事を聞かすと？　まー好きにしろ。どうしようと言える事はただ一つ、知らんという単語なだけじゃからな」

「……そいつを庇うなら、あんたも同類ね」

御坂の腕に電撃が集まるかのように、腕が急激に放電し始める。
周りの人間は近づくことさえ出来なかった。
下手に止めようとすれば、御坂がもたらす数億ボルトの電撃を食らうからだ。
黒子たちはただ黙ってみている事しかできなかった。

「庇う？　そんな理由で口を開かないわけではないがな。ま、子供には分からんか。頭の回らない馬鹿に言ったところで無駄じゃし……」

アリシアが言葉を発してた時、突然パンっと風船が割れるような音が部屋に響いた。

絡みあう思惑

「次はもっと痛いわよ」

「……電撃……そうか、スタン……ガンの……要領か」

先ほどまでの冷静な顔は消え、アリシアは今苦痛に歪んだ顔をしていた。

御坂が掴んでいる襟首には、少しだけこげ跡があった。

アリシアに対して強力な電撃を瞬間的に流して、御坂は即席のスタンガン攻撃をしたのだ。

「ふん……おおうつけ者だな、貴様は……」

明らかに怒りで我を忘れている御坂に対して、アリシアは悪態をついた。

もはやアリシアの口を割る事しか頭にない。

そんな雰囲気すら感じる御坂を見て、黒子たちは薄く恐怖の色を浮かび上がらせていた。

「お、お姉様。落ち着いてくださいまし！　それ以上やったら危険ですの！」

「だそうよ、おチビちゃん。早めに白状してくれれば、病院まで運んであげるわ」

黒子の声が届いていないのか、御坂はアリシアから視線を外す事なく言葉を紡ぐ。

「……どうされようと、何を言われようと、答えられる言葉は一つじゃ」

「強情ね。素直に吐けば楽になるわよ？」

「何ともまぁ……悪役の台詞だのぅ。そこまで意固地になる理由などなかろうに」

「フザケてるの？　人の命がかかってるのよ！？　よくも抜け抜けと言えるわね！？」

「あの娘は契約を交わした。そして契約通りに代価を請求された。だから、あの娘はそれを支払わなければならない」

「あんたっ！」

「代価を知ってから、その契約はなしとか都合のいい事など許されぬ。それが分からぬなら、貴様はガキだという事だ」

「減らず口もそれぐらいにしておきなさいよね」

再び御坂の腕が放電し始める。先ほどと違い、放電の量が桁違いであった。

明らかに威力は倍以上にしか見えなかった。

だが、御坂の腕がどれほど放電しようとアリシアの表情は変わらなかった。

「はい、そこまでぇ」

御坂が放電しようと考えた瞬間、横合いから声が飛んできた。
と同時に御坂だけが吹き飛ばされて壁に激突していた。

「おっそい……のじゃ。って、何で垣根殿が……」

「ロリコンは後ろだ。あいつがやると死ぬからな」

御坂を壁に叩きつけた人物は垣根であった。
その背中からは六枚の翼が生えていた。
明らかに戦闘スタイルの垣根は、面倒臭い雰囲気を漂わせていた。

「はン、メルヘンよりはうまくやンよ」

垣根の背後には、現代風の杖をついた一方通行が立っていた。
チョーカーのスイッチはオフだが、いつでもオンにして動けるよう構えていた。

「頭は冷えたか？　第三位よ。カッカすんのは勝手だが、テメェの馬鹿な行動で俺らの評判まで落とすなや」

「……うっさいわね。そこをどきなさいよ、そいつには聞きたいことが山ほどあるのよ！？」

ふらふらになりながらも、御坂は立ち上がる。
だが、その足は既に笑っており、立つのすら精一杯に見えた。
そんな御坂を見て、一方通行は軽く舌打ちをする。

「携帯に救難のメールが来た時は笑ったが……あンまり愉快な状態じゃねェな……」

「ま、妾にも……つぅ……色々とあるのじゃ。どうやら、第三位様は……気に入らないらしいがな」

「背負ってやれや、ロリコン。どうやら第三位は頭に血が上って全く冷静じゃないみたいだしな」

「メルヘンに言われたらお終いだなァ。まァ第三位如き、テメェで十分だろう」

「もやしっ子の一方通行殿だと、少々不安を感じるぞぉ……」

「よォし、俺は帰る。クソガキは歩いて帰れ」

そう言うと一方通行はそのまま立ち去ろうとする。
アリシアはそれを見て、慌てて一方通行に声をかける。

「ま、待ってくれ。悪かった、妾は電撃で痺れて歩けないのじゃ」

「最初から素直にそう言えよ」

焦るアリシアを見て垣根は冷静に突っ込む。
本当に痺れているのか、アリシアは体を小刻みに震わせていた。

「ま、待ちなさい。まだ聞きたい事は……」

そう言った瞬間、御坂の姿は地面から掻き消えていた。

「お前は黙って寝てろ」

垣根の背中から生えている六枚の翼。

そのうちの一つが御坂を天井に叩きつけていたのだ。
その攻撃に反応すら出来なかった御坂は、そのまま地面へ叩きつけられる。
地面に倒れ伏した御坂は、もはや立ち上がる事すらしなかった。
完全に気を失っていたのである。

「アリシアにこれ以上の行為は許さねぇ。そっちの馬鹿はお前らで病院に運んでやれ。言っとくがこれはお願いじゃない、命令だ。逆らえば俺に喧嘩を売る気だと判断する」

普段のおちゃらけた雰囲気はなりを潜め、獰猛な雰囲気を漂わせながら垣根は周りに警告した。
誰もが頷く以外になかった。
御坂すら倒せない黒子たちに、更に上をいく垣根たちの相手など出来るわけがなかった。
アリシアは一方通行に抱えられながら、風紀委員支部を後にした。

後に残されたのは呆然とする黒子たちと、床に倒れ伏して気絶していた御坂だけであった。
黒子たちは否応なく理解した。
アリシアに協力を依頼するのは、今後不可能だという事に。

「しかし第三位を挑発とか……お前は死にたいンですかァ？」

あの後、一方通行は能力を使いアリシアの容態を見た。
強力な電撃だったが幸いにも軽いケガですみ、しびれも暫くすれば

取れるだろうとの事。
一方通行がそう言うと、垣根は一方通行にアリシアの世話を押し付けてそのまま立ち去った。
そして今、一方通行はアリシアを背負いながら帰宅中という訳である。

「そんな気は……毛頭ない。ヤツラが関わろうとした事件が……不味すぎるのじゃ」
僅かに体を震えさせながらアリシアは一方通行に反論した。
その態度から、一方通行はある事に考え至った。

「……まさか魔術関係か？」
アリシアが御坂たちの協力依頼を頑なに拒否した理由。
それは能力者が魔術関係の事件に関わろうとするのを止めるため。

「そうじゃ、魔術師と能力者が激突してはマズイ。特に短髪女はレベル5じゃ、その影響度は計り知れないじゃろ？」
「確かになァ……最悪は戦争へ発展するンだろ？　たかだか激突ぐらいで」
「うむ……妾が悪役に徹してそれが回避出来るなら……安いものじゃろ？」
「……」
「妾は別に人が沢山死ぬとか……そういうヒューマニズムをだす気

はない。姉上が戦争で傷つくのを見たくない。ただそれだけだ」

「はァ……テメェ一人で抱え込んでるンじゃねェ。戦争を避けたいのは俺だって一緒なンだよ」

アリシアを背負い直しながら、一方通行は視線を僅かに逸らしながら言った。

明らかに照れている雰囲気だが、アリシアは何も言わず朗らかに笑った。

「一度動き出してしまえば、戦争はもはや止められないだろう。ならば、妾たちがするのは、その戦争を避ける為に動き続ける事。大切な人が傷つかないように……」

「それで電撃を喰らってりゃ世話ないな」

「ふふふ……短髪女があそこまで短気だとは……少々予想外だったのじゃ」

アリシアは愉快そうに笑った。

予想より低い御坂の沸点がこの上なく愉快であった。

だが、その顔には侮蔑など一切なかった。

「真っ直ぐだった。眩しいぐらいにな……見知らぬ他人の命なのに、一生懸命になって妾に迫ってきた。まぁ、多少行き過ぎな感はあったがな」

「……」

「それ故に、あの程度の小細工に引っかかるのじゃがな。これで短

髪女は暫く動けんじゃろう。その間に魔術師が事件を終わらせるのを祈るしかないかな」

（あの場にいた全員に『狩りの印』はなかった。ならば、あの場にいる連中らが対象にはならんだろう……）

（だが、一体誰に『狩りの印』を与えたのじゃ……それだけは調べておく必要があるな）

（あの御方の事だ。絶対にこのままで終わらせる気はないだろう。もう一波乱……考えられるな）

一抹の不安を覚えつつアリシアは瞳を閉じた。

同時刻、アクゼリュスは楽しそうな顔をしながらあるモノを飲んでいた。

『ワインとは珍しいですね。普段はお飲みになられないのに』

それはワイン。優雅に飲むアクゼリュスに、オートクレールは素朴な疑問を口にした。

「ふふふ、気分がいいからね」

その顔からは、美味いと思っているのか不味いと思っているかが分からなかった。

唯一わかるのは飲酒による浮ついた雰囲気が全くないという事だけ。

「アリシアは、どう動く気かな。もしかしたら私に剣を向けるかも知れないわねぇ」

『それはありえないかと。アクゼリュス様に剣を向ければ、命がなくなるという事が、分からないほど無知ではないでしょう』

「剣を向けても殺す気はないわ。むしろ喜ばしい事ね」

『何故……でございますか？』

オートクレールは軽い驚きと同時に疑問を口にした。

彼女へ剣を向けた相手は、例外なく殺された。

それはコルネリウス家も例外ではなかった。

過去に彼女へ反逆の意を示した人物は、問答無用で殺されたのだから。

「分からぬか？　今、私が楽しんでいる物語の主人公は紗月だ。それ以外は全て主人公を彩る存在でしかない」

『はい……』

「紗月が私に剣を向けるのなら、喜んで相手をしよう。だが、それ以外の存在が剣を向けてこようが、殺す気も起きないし殺す必要もない。逆に殺してしまって、物語がつまらなくなる可能性もある」

くいっとワインを飲み切るアクゼリュス。

「私は物語が楽しめればいい。アリシアが私に剣を向けると言うの

なら、それはとても喜ばしい事だ。決められたシナリオから外れたイレギュラーがあるからこそ、物語はより一層引き立つのだから」

空になったワインカップをテーブルに置くと、アクゼリュスは愉快そうな表情をして言った。

「ワインを飲んでみたが、私には味がわからぬようだ。どうにも、この体は十代の味覚で止まっているようだな」

指でワインカップをつつきながら、アクゼリュスは愉快そうな声で言った。

味を楽しむ、というより飲む行為自体が楽しいと言いたげな雰囲気である。

「それより『人形』の調整はどうかしら？」

『はい、九割は完成しております。後は痛覚共有（シェアリングペイン）を組み込めば完成かと……』

「んーもう少し細工が欲しいわね……希望（ボックス・オブ・ホープ）の箱は用意できるかしら？」

『希望（ボックス・オブ・ホープ）の箱ですか？　断言は出来ませんが、可能だと思われます』

「無理なら構わぬ」

そう言うと、アクゼリュスはある方向に視線を向けた。

視線の先には一つのマネキンが置かれており、あちこちに奇妙な紋様が描かれた紙が貼られていた。

ある種の不気味さを醸し出しているマネキンを見てアクゼリュスは小さく笑っていた。
これを使って何かをする気なのか、はたまたその光景を想像しているのか。
それはアクゼリュス以外分からなかった。

「さて、紗月はどんな物語を描いてくれるのかな？」

楽しそうに喉を震わせながらアクゼリュスはそう呟いた。

増える謎

病院に運ばれた御坂は、そのまま一日入院という診断が下された。
怪我自体は大した事ではなかったが、ショックが強すぎて意識がまだ戻っていない。
だから安静にする必要があり、御坂は病室のベットに寝かされる事となった。

黒子たちは御坂を心配したが、面会時間は過ぎておりそのまま帰宅する事となった。
最も、最後まで黒子は渋っていたが。

そして数時間後、御坂は意識を取り戻す。
ゆっくりと目を開いた彼女の視界に入ってきたのは、白い天井と白い壁であった。

「おー姉貴。目が覚めたか？」

朦朧とする意識の中で、横から誰かの声が聞こえた事に御坂は気付く。
首だけ動かして、声の主の方に視線を向ける。
そこには、カルテ片手に美鶴がたっていた。

「……私は……」

病院にいると理解した瞬間、何故運ばれたかまでを思い出す。
怒りで我を忘れた自分は、垣根の攻撃によって意識を刈り取られたのだという事に。

「あー、色々と話は聞いたさ。とりあえず、落ち着いたか？」

「……うん」

そう言うと御坂はゆっくりと起き上がる。

起き上がった瞬間、軽い頭痛に襲われた御坂は軽く顔をしかめる。

だが、軽く頭を振って目を覚ますと頭痛は不思議と治まった。

「メルヘンは加減してくれたからさ。明日には退院できるってさ」

「そう……」

「ま、もう二十二時だしさ。今日はゆっくりと寝てろや」

苦笑しながら美鶴は御坂にそう言った。

御坂を再びベットに寝かしつけると、シーツを肩までかける。

まるで子供のような扱いだが、美鶴にとってはいつもの事なのだろう。

ベットに御坂を寝かしつけると、美鶴はそのまま病室を出ていこうとする。

何も聞かないのか、と美鶴に尋ねかけたが、その背中を見て理解した。

言いたくないのなら言わなくてもいい。

美鶴の背中からそう読み取った御坂。

「ごめんね」

だから一言だけ謝った。

その言葉を聞いて、美鶴は振り返らず片手を上げて返事を返す。

そのまま部屋の電気を消すと、美鶴は病室を後にした。
視線を扉から天井に変えた御坂は、昼間の自分を思い返す。
（今日のは幾ら何でもやり過ぎだった。全面的に私が悪い、明日になったら謝りに行こう……）
冷静になればやり過ぎだったのは、誰が見ても明らかだった。
もし垣根が止めなければ、彼女を黒コゲにするまで電撃を浴びせていただろう。
それほど御坂は我を忘れていた。
アリシアの言葉に、幾分の挑発が混じっていたのは御坂も理解していた。
だが、それが言い訳になるかと言えば答えはノーだ。
相手はレベル０、対して自分はレベル５。
どんなに言葉を並べても、周りにはレベル０を嬲るレベル５にしか見えないだろう。
御坂は今日の行動を後悔しながら眼を閉じる。
許してくれるか分からない、だけど自分が悪いのだから謝ろう。
そう思い至った御坂は、眠るために意識を深い闇に沈めていく。
だが、そんな御坂を邪魔するかのように、病室に突如としてパサリと何かが置かれる音がした。
音にビックリした御坂は、慌てて体を起こして辺りを見る。
しかし病室には誰もいなかった。扉が開いたような形跡もない。
そもそも電撃使い（エレクトロマスター）の自分に気付かれないように近づくのは不可能だ。
突然その場所に出現でもしなければ。
「……？」

視線をサイドテーブルに向けると、その上にＡ４サイズの封筒が置かれていた。

（あんなのってあったかしら？）

記憶をたどるが余りはっきりとは言えなかった。
だが、美鶴が指摘しなかった事を思い出すと、先程までは無かった物なのだろう。
そう思うと、御坂はその封筒を手に取る。
暗くて良く見えなかったが、糊付けはされていなかった。

「……写真？」

封筒の中を覗き込んでみると写真が数枚入っている。
写真を取り出し手にとった瞬間、御坂は驚愕の声を上げた。

「こ、これ……黒子？」

写真に写っていたのは黒子であった。
しかも顔には赤いマジックでバツ印が書かれていた。
写真を裏返すと、裏にはいくつの情報が書かれていた。
黒子のフルネーム、電話番号らしき数字、そして代価という固定単語。

「まさかっ！？」

慌てて別の写真を見る。
そこに写っていたのは佐天、黒子と同じようにバツ印がつけられていた。

裏に書かれていた情報も黒子と同類であった。

「黒子、佐天さん、初春さん、固法先輩、紗月さん……五人の写真がどうしてここに……」

封筒から出てきた写真は全部で五枚。
全ての写真は同じような手が加えられていた。
顔に赤いマジックでバツ印。
裏にはフルネームと電話番号らしき数字と『代価』という単語が書かれていた。

「……どういう事よ……」

写真を見た御坂は頭の中が混乱してしまった。
アリシアの言葉では代価になるのは紗月の親友。
佐天は辛うじて対象になるかもしれないが、全く接点がない固法や黒子が選ばれるのはおかし過ぎる。
少し考えたが、結論は全く出なかった。

「とにかく、全員に連絡してみよう」

御坂はそう思い至ると、ナースコールを押して美鶴を呼んだ。

（悪い予感がする……）

胸の中が不安で一杯になるのを感じながら、御坂は写真を眺めていた。

夜中にも関わらず全員が御坂の呼び出しに応じてくれた。
その事に感謝しながら、写真について御坂は全員に語る。

「わたくしたちの写真？」

「うん、この写真を見てくれないかしら……」

そう言うと御坂は各個人に写真を渡す。
夜中に近いので、病室ではなく病院の関係者が使う休憩室に場所を変えた。
快く貸してくれた美鶴に御坂は心の中で感謝する。

「あら？　裏に書いている番号……わたくしの番号とは違いますの」

「私も違うわね」

「私も違いますねー」

各々が写真と写真の裏を見るが、数字については全員が携帯番号と違うと言い出す。
その事が御坂を更に混乱させる。
番号はデタラメか、と御坂が思った時、黒子がある事に気付く。

「……ん～？　よく見れば、特定の場所に点が振られていますわ」

「あ、白井さんの言う通りです。私のにも点が振ってあります」

黒子の言葉に反応した初春が、自分の写真の裏を確認する。

そこには、ある数字の間に小さな点が打たれていた。
部屋が暗い時に見た御坂は、その点に気付いていなかったようである。

「……並べてみると、バラバラな位置ね。何か意味が込められていると思うけど……」

テーブルに並べてみると、点が打たれている位置が写真ごとに違っていた。
何か意味があるだろうと考えていたが、何の意味が込められているかまでは分からなかった。

「……」

じっと見つめてみるが答えが一向に浮かばない御坂であった。
周りも全く分からず、足がかりすら分からなかった。

「とにかく、この数字を並べてみましょう。何か答えが見つかるかも知れないしね」

黒子たちは笑顔を浮かべながら頷く。
昼間のような自分を見失った御坂ではない。
いつもの御坂に戻ったことが、彼女たちにとって嬉しかったから。

「今夜は徹夜ですの」

少しだけ苦笑しながら黒子はそう呟いた。

「あ、別にいいのよ。私一人でやるから」

「ご冗談を。ここまで来たら、最後までお付き合いしますの」

御坂が慌てて手を振りながら言うが、黒子はそれを一蹴する。

佐天も初春も固法も紗月も、黒子の言葉を聞いて頷く。

「水くさいですよ、御坂さん。やれる所までやって見ましょうよ！？」

「そうそう、こういうのは人数がいたほうが早いのよ」

「皆……ありがとう」

少し涙ぐみながら御坂は黒子たちに頭を下げた。

そんな御坂たちを外から眺めるオートクレールとアリシア。

アリシアは銀髪に赤い瞳をしており、明らかに魔術師の顔であった。

『手伝ってやらんのか？』

「冗談を言うな。何故に妾が手伝わねばならぬ」

オートクレールの疑問にアリシアは鼻で笑いながら言った。

だが、オートクレールは愉快そうな雰囲気を漂わせながら更に言った。

『では、貴様がここにいる理由はなんだ。心配だから様子を見にきたのではないのかね？』

「……違う」

頬を少しだけ赤くすると、アリシアはそっぽを向く。
アリシアの行動を見て、オートクレールは愉快そうに喉を震わせた。

『アクゼリュス様からの伝言では、貴様が手伝おうと、私たちの情報を流そうと構わぬという話だが……？』

「馬鹿を言うな。科学世界の人間、それも表の住人が教会世界を知る事の危険性は知っておろうが。能力者であろうと、連中らはただの学生だからな」

『やはり心配しているのではないか』

「……叶わぬな、オートクレールには」

負けだと言いたげに、アリシアは肩をすくめる。

『貴様が生まれた時から私は見ているからな。貴様ぐらいだろうな、私の背中に平気でよじ登ってきたのは』

「子供の頃の話だろう。今はよじ登る気はないぞ？」

『登ってきたら叩き落すわ、馬鹿者』

軽口を叩きあう二人。
種族も立ち位置も違う二人だが、長年の付き合いはそれを感じさせ

る事はなかった。
まるで数十年来の友人と会話するかのように見えた。

『さて、私はもう行く。アクゼリュス様の伝言は伝えた。どう動くかは貴様次第だ。そのままじっとしているのもよし、アクゼリュス様に剣を向けるのもよし、好きにしろ』

アリシアに背を向けると、オートクレールの姿は空気に溶け込むように薄くなっていく。
やがてその姿が完全に消えてしまったが、アリシアがオートクレールに視線を向ける事はなかった。

「ああ、好きにさせてもらうさ」

薄く笑いながらアリシアはそう呟いた。

解への道

朝日が昇るか昇らないかぐらいの時間。
徹夜に近い形で数字とにらめっこした御坂たちだが、結果は芳しくなかった。
限界に達した人物から、崩れるような格好でソファーに寝そべっていた。
最後まで頑張った御坂だが、それでも疲労からくる眠気には抗えなかった。

（……何が……答えなのよ……）

机に突っ伏してほとんど寝かかった頭で御坂は考える。
写真、バツ印、数字、代価という文字、写真に写っている人物のフルネーム。
それぞれを考えられる限り組み合わせてみたが、答えには辿りつけなかった。

（ちくしょう……）

心の中で悔しそうに呟くと御坂はそのまま眠りにつこうとした。
だが、その耳にゆっくりと扉が開く音が届く。

（美鶴？　まぁいいわ……眠たいし……）

部屋の扉を開けた人物を美鶴と判断した御坂はそのまま目を瞑る。
徹夜明けで思考が鈍っていたのだろう。
その足音が妙に小さい事に御坂は気付かなかった。

入ってきた人物はテーブルに置かれている写真を手に取る。
全部に軽く目を通すと口もとに手を当ててくすくすと笑った。

「これは能力者だと無理だろう。契約者様も随分と酷い事をするものじゃ」

そう言うとテーブルの上に載っていたペンを手に取り紙に何かを書いていく。
御坂はその音を聞いていたが、確認するのすら億劫に思っていた。
ただ、どこかで聞いた声だなぁと漠然と思っていたが。

「ふん、貴様たちの根性に免じて、今回だけは手助けしてやろう」

ペンをテーブルに置きながらその人物は呟く。
コロコロとペンが転がる音を聞くと同時に、御坂はその人物が立ち去る気配を感じていた。

（誰……？）

起き上がって確認しようとした御坂だが体は正直だった。
全く起き上がれず、目を開くことすら出来なかった。

「おおうつけ者どもが」

どこか楽しそうな、嬉しそうな声色が御坂の耳に届く。
やがて扉の閉まる音と同時に、御坂の意識は闇の底へと落ちていった。

柔らかな朝日を瞼の裏に感じた御坂はゆっくりと目を覚ます。
もぞもぞと体を動かしながら、ゆっくりとテーブルから起き上がる。

「ん、ん～～～」

大きく伸びをして息を吐くが、疲れがとれた気は一向にしなかった。
働かない頭を起こすように頭を軽くふる。
辺りに視線を向けてみると、まだ誰も起きていないようだった。

「ふぅ……」

視線をテーブルに落とすと、そこで御坂はテーブルに紙が置かれている事に気付く。
美鶴の置き手紙かなと思い手に取って内容を確認する。
だが、御坂の予想は外れた。それは、別の人間が書いた手紙であった。

「……これ……」

内容を見て御坂は驚愕する。
手紙を書いた人物の名前はアリシアであった。
だが、驚いたのはそこではない。書いている内容に御坂は驚いたのである。

「黒子！　黒子起きて！」

一人では判断出来ないと理解した御坂は寝ている黒子たちを起こそ

うとする。

「ああん、お姉様ったら……あ、そんな、いや～～～ん」

「何気色悪い夢を見てるのよ！？」

「びぶるちゅ！」

黒子の寝言を聞いた御坂は、体中に寒気を感じた。
秒を置かずに黒子へ鉄拳制裁した後、固法や佐天を起こしにかかる。

「皆起きて！　大変よ！」

静かな朝日に包まれた部屋に、御坂の切羽詰った声が響き渡った。

御坂たちはテーブルにアリシアの手紙を置いて、それを囲むように座る。
全員が手紙の内容を見て絶句した。
真新しい白い紙にはこう書かれていた。

『貴様たちの諦めの悪さは表彰ものだな。
素直に諦めれば危険から遠ざかれるものを……まぁよい。
貴様たちの諦めの悪さに免じて情報を提供してやろう。
まず、あの写真は貴様たちでは解読不可能だ。

能力者とは違う法則で作られた力で暗号が隠されている。
まぁ貴様たちだと、それを知りたいと言うだろう。
だが、その前に一つだけ警告をしておく。

この世には知らない方がよい情報が存在する。
もしこの事件にこだわり続けるのなら、その部類の情報を知ってしまう事になるだろう。
知らぬ者から知った者になるとどうなるか教えてやる。
学校に通えなくなり、親や友人と二度と会えない生活になるやもしれん。
最悪の場合は学園都市が貴様たちの命を狙う可能性もある。
ようするに今の生活が完全に壊れる場合もあるという事だ。
無傷ではすまされない。

だが、万が一にも貴様たちにその覚悟があるというのなら。
今晩二十二時に第五学区の第三資源再生処理施設にこい。
いつもは人がいるだろうが、今宵だけは無人だから安心しろ。
そこで妾は待っている。
もし来るというのなら、その時は教えてやろう。
学園都市にはない別の世界の事を。

ただし、何度も言うが警告は書いておく。
あの十九人のようになりたくないと少しでも思ったのなら。
今すぐこの紙を破棄して、全てを忘れてしまえ。
その方が身のためだ。

言っておくが安っぽい脅しではない。
殺されるわけがないと甘い考えがあるなら、今すぐ事件の事を記憶から消せ。

例え怖くなっても、誰も貴様たちを非難する事などない。
もう一度言う。自分の大切な人を思い浮かべて考えろ。
後悔のない選択をしろ。

追伸：写真は妾が預かっておる。盗まれておらぬから安心しろ』

協力がえられないと思っていたアリシアからの、まさかの情報提供であった。
書いている内容も驚きだが、その内容は恐らく真実だろうと御坂は思っていた。
嘘を書く必要がない、こんな回りくどい方法を取るメリットが彼女にはないはず。
むしろデメリットしかない。

「皆、先に言っておくわ。この場で答えは言わなくてよいわよ」

「それはどういう……」

御坂の言葉に佐天が疑問を口にする。
佐天の方に視線を向けると、御坂は朗らかに笑いながら言った。

「この事件は強制じゃない。だから、皆が自分で考えた答えで行きましょう。誰かが行くから私も……なんて事は止めましょう」

「お姉様……」

「恐らくこの手紙は真実なのでしょう。オチビちゃんが手紙を書いてまで警告する必要はないはず。だから本当に危険がいっぱいだと思うの。命すら危うくなるほどの……」

御坂はそこで言葉を区切ると、何かを吐き出すかのように息を吐く。
目を閉じ胸に手を当てて深呼吸をする。
再び目を開くと、御坂は周りを見渡しながら更に言葉を発する。

「この事は、この場にいる全員だけの秘密。とりあえず、学校に行かない？」

そう言うと御坂は周りの返事を待たずに椅子から立ち上がる。
黒子たちは困惑したが、時間は待ってくれない。
ひとまず学校に行こう。それがその場にいる全員が出した考えである。

病院の責任者と話がある、そう言って御坂は黒子たちと別れる。
黒子たちが立ち去ったのを確認した後、御坂はポケットから『二枚目の手紙』を取り出す。

「あのオチビちゃん、短時間でここまで調べ上げるとは……」

二枚目の手紙、それは御坂宛に書かれた手紙であった。
実は御坂が起きた時、テーブルには合計で三枚の手紙が置かれていたのだ。
しかし内容を見た御坂は、その内の二枚をポケットに隠した。

その内の一枚は、短いながらも何が言いたいかすぐに分かる。
御坂宛の手紙にはこう書かれていた。

『貴様の答えなどすぐに分かるからあえて書いておいてやる。
二十二時に第三資源再生処理施設に来るつもりだろう？
代価を聞いて、貴様が黙っているとは思えないからな。
せいぜいコインを大量に持ってきて、超電磁砲を大量に撃てるよう

に準備しておけ』

アリシアの文を読み直した御坂はくすりと笑う。
そしてポケットから『三枚目の手紙』を取り出す。

「確かにこれだと……行かないって選択肢はないわよね」

手紙に視線を落した御坂は、薄く笑いながら言った。
三枚目の手紙、それにはこう書かれていた。

『代価は竜童紗月のルームメイト。今宵二十四時に彼女は殺される』

「フザケてるわね。代価が人の命なんて……」

手紙を握り潰しながら、御坂は心の中で叫んだ。

（上等じゃない。そんな事、絶対にさせないわ！！）

一蓮托生

その日の学校は何事も無く平和だった。
連絡なしで寮へ朝帰りしたのだが、不思議と寮監からお叱りを受けることはなかった。
御坂たちは普通に生活し、普通に友達と学園生活を楽しんだ。
しかし御坂は心の何処かで思っていた。
この生活が今日で終わるかもしれないと。

見納めかもしれない、そう思った御坂は真っ直ぐ寮に帰らず街を歩いていた。
最後という気持ちがあるのか、街の風景がとても輝いて見えた。
普段は五月蝿い通行人の集団も、少しだけ眩しく感じる電光掲示板も。

「センチメンタルになる気はないんだけどねぇ……」

白い息を吐きつつ御坂はそう呟いた。
冬の寒さが少しだけ身に染みたが、それすらも今は心地良いと思っていた。

「……」

呟いた後はただ無言で街を歩いた。

地下街やセンター街など色々な場所をまわった。
しかし、ただ無計画にまわったわけではない。
彼女は最後に訪れるべき場所を心の中で決めていた。

「……やっぱここしかないか……」

それはただの公園。
だけど御坂の中では思い出のつまった公園。

「あの馬鹿とよくおいかけっこしたけど……決まってここがスタート地点だったわね」

今は違うが、昔は顔をあわせば勝負勝負と言いながらその人物に掴みかかっていた。
十億ボルトの電撃の槍を、まるでシャボン玉を割るかのように消してしまう力を持った男。

「当麻……」

幻想殺しを持つ少年、上条当麻の名前を御坂は口に出す。
言って何かが変わるとは思えない、だけど呟く必要があると御坂は感じていた。
視線を空に向けた御坂の顔は、少しだけ頬が赤かった。
当麻を思い出したためか、それとも寒さで赤くなっただけなのか。
それは彼女にしか分からない。

「当麻、私はね」

空から自動販売機に視線を変えた御坂は、胸に手を当てながら呟いた。

大切な思い出を胸にしまいこむかのように。
大切な言葉を口にする勇気をえるために。

「　　」

御坂が呟くと同時に、その声をかき消すかのように突風が吹いた。
彼女の言葉は風の音でかき消されてしまい、誰の耳にも届くことはなかった。
だけど御坂は気にせず言葉を紡ぐ。
気持ちを風に乗せて届けと言わんばかりに、彼女は歌うように言葉を紡いだ。

二十一時四十五分。
御坂はアリシアに指定された場所へと来ていた。

第五学区の第三資源再生処理施設。
およそ二キロ四方にわたる巨大施設の用途はゴミの再利用。
日本は元々資源が乏しい、それは学園都市でも変わらなかった。

そこで学園都市ではゴミの再利用に力を入れた。
基本的な紙資源から、鉄やアルミなどの金属、ゴムやプラスチックなどの石油製品。
その他にも多くの物品を再利用して再び使っている。
何ともエコな考えをしていると思われがちだが、言い換えればそれ

は資源を再利用する処理能力が高いという事だ。
学園都市の外では捨てられる物でも、学園都市では再利用が可能な物がある可能性が出てくる。
それは外部からゴミの山を買い取った後、再利用処理を行えば格安で資源が手に入る事を意味する。

「後十分ちょいね……」

どこか海岸の石油化学コンビナートを連想させる施設を眺めながら御坂は呟いた。
アリシアの指定した時刻は二十二時。あと少しで時間になるのだが……。

「やっぱり誰も来ないわね」

その場に現れたのは御坂だけであった。黒子たちの姿は全く見当たらなかった。
しかし御坂は落ち込むどころか、むしろ喜ばしい事と考えていた。

「こんな事に黒子たちを巻き込めないしね」

「見くびらないで欲しいですの」

御坂の言葉に重なるように羽音のような音色が響く。
音と同時に、暗闇を引き裂くかのように黒子が御坂の前に姿を現す。

「時間には間に合っていますから問題はありませんの」

まるでこれから花を摘みにいくかのように、黒子は気楽そうな声でいった。

対して、突然現れた黒子に御坂は完全に動揺していた。
御坂の中では黒子は来るはずがないと決めていたからだ。

「それより、お姉様は早く帰ってくださいまし。これは風紀委員の管轄ですの」

「……ごめんね、黒子。それだけは聞けないわ」

「どうしてもですの？」

真剣な目をして黒子は御坂を見つめる。
それに答えるかのように御坂は黒子と向き合い、その真剣な眼差しを受け止める。
御坂は視線を逸らすことなく、ただ真っ直ぐに黒子を見つめ返した。

「はぁ……」

少しして黒子は疲れたようなため息を吐いた。
その顔には、呆れの色がありありと浮かんでいた。

「お姉様の説得は無理のようですの」

「そう、残念ね」

「白井さんの事だから、何か策があると思ったのですが期待して損しました」

黒子の言葉を皮切りに何処に隠れていたのかと言いたくなるぐらい他の人間が姿を現す。
よく見れば、それは初春、佐天、固法、紗月の四人であった。

「皆……どうして……」

呆然とした御坂は黒子たちを見て疑問を口にする。
黒子たちは一度目配せすると、優しい笑みを浮かべながら言った。

「お姉様一人だけ辛い重荷を背負わせませんの」

「ここまできたら一蓮托生ですよ！」

「こ、今回は私の事情だし……ここで逃げたら一生後悔する」

「無茶をしちゃう御坂さんを誰が止めるの？」

「前にも言ったじゃないですか。水くさいですよ、御坂さんって」

全員が口々に来た理由を語る。
驚きに目を見開いた御坂だがすぐに困ったような笑顔を浮かべる。

「皆、あり……いえ」

一瞬お礼を言いかけた御坂だが、それを言い切る前に言葉を切る。

彼女たちはお礼なんて望んでいない。
一緒に肩を並べて進もうとする態度の方がいい。

「それじゃあ行きましょうか！」

その事に気付いた御坂は、少しだけ涙を浮かべながら片腕を上げて叫んだ。

黒子たちも御坂に倣って、真っ直ぐに天に向かって突き上げるように片腕を上げた。

二十二時、指定の時刻になった御坂は少しだけ緊張しながら考えていた。
これから知ろうとする事は、普通の生活をしていれば知る事は出来ない。
学園都市の闇に触れるより更に深い闇に落ちるかもしれない。
だけど、私は後悔したくない。
ここで彼女を見捨てたら、きっと一生後悔する事になる。
進むべき道を決めた御坂の瞳に迷いはなかった。

「貴様たちは馬鹿だ。揃いもそろって馬鹿だな」

突如、闇の向こうからアリシアの声が聞こえてきた。
声のした方に全員が視線を向ける。
地面を踏む足音が何度か聞こえた後、闇の中からアリシアが姿を現した。

「！」

その姿を見て全員が驚きに目を見開いた。
全てが違っていた。外見も雰囲気も何もかもが。
声を聞かなければ彼女がアリシアだと判別する事は出来なかっただろう。

彼女の髪は月の光を浴びて銀色に輝いていた。
ツインテールを下ろした彼女の瞳は、血を連想するぐらい深紅であった。

雰囲気も陽気で少し勝ち気だったのが嘘のように鳴りを潜めていた。
まるで血に飢えた肉食獣のような雰囲気を纏っていた。

御坂は無意識のうちに手にコインを握る。
一瞬でも気を抜いたら、そのまま頭から喰われるような感覚に囚われた。

そんな御坂を見てアリシアは薄く笑った。

「ほぅ……ここで腰を抜かしたら追い返すつもりだったのだがな」

「……あんた……何者なのよ……」

額に汗を滲ませながら御坂はアリシアに問う。
黒子たちも同様に、額に汗を滲ませながらアリシアを警戒していた。

「さて、妾が何者かは……これから説明してやる。まずは妾についてこい、嫌なら帰れ」

そう言うとアリシアは御坂たちの返事を待たず、銀髪を靡かせながら再び闇の奥へと歩き出す。
御坂たちは一度顔を見合わせると、軽く頷いてからアリシアの後を追った。

しかし一人だけその場に立ち止まっていた人物がいる。

「……まさか……」

紗月の胸には一抹の不安が芽生えていた。

あの姿、以前にどこかで見た覚えがあると紗月は思っていた。

だが思い出そうにもうまく思い出せない。

結局、誰にも不安を打ち明ける事なく、紗月は不安を胸の中に隠したまま御坂たちの後を追った。

一変する世界

ついてこい、そう言ったきりアリシアは無言で歩く。
御坂たちはアリシアから一メートルほど後ろを歩いている。
しかしアリシアは気にする事もなく、ひたすら暗闇の道を歩き続けていた。

「……」

御坂たちは訝しげに思いながらも、ただ黙ってついていくしかなかった。
手紙の書き方からしても、アリシアは事件の核心を知っている。
だから下手に機嫌を損ねても困るので、強く出る事が出来なかった。
早く終わってほしい、そう願う御坂たちだった。

それから十分ほどしてアリシアは細い通路に入ると、そこで今までと違う行動に出始めた。
壁に手を触れ、何かを確認している素振りを見せていたのだ。

「ここか」

何度か繰り返した後、アリシアはある場所で手を添えたまま呟いた。
一連の行動の意味が分からなかった御坂たちは、ただ首を傾げるしかなかった。
だが、アリシアはそんな御坂たちを無視して何かの言葉を紡ぐ。

「ｒｑガｗｓｔ……ｖｂｃｋｊレｗｒｔｇ……アｑｚｖｍｓｑｌ……」

不思議な発音の言葉だと御坂は思った。
知っている限りの言語と比較したが、どの言語とも一致しなかった。
そもそも言葉なのかと疑えるほど、その言語は発音自体が変であある。
まるで発音できない言葉を、無理やり発音したかのように思えた。

「……最後にもう一度聞く。後悔はないのだな？」

壁に手を添えたまま、視線だけ御坂たちに向けたアリシアは尋ねるように言った。
その視線を受けて、御坂たちは力強く頷いた。

「……分かった」

そう言って再び視線を壁に向けると、アリシアは最後の言葉を紡ぐ。

「開」

瞬間、壁が薄く光りだす。同時に奇妙な紋様が滲み出すように壁に浮かび上がった。
扉のような文様以外は書きなぐったように法則性がない模様であった。
やがて文様が浮かびきったのか、光が徐々に強くなっていく。

「新しい世界の入口へようこそ」

あまりの強い光に目を開けられなくなった御坂たち。
そんな六人の耳に、アリシアの声が届く。
その声は嘲笑のようにも、憐れむようにも、楽しそうにも聞こえた。

もしかしたら全てが綯い交ぜになった末の言葉なのかもしれない。

「科学世界の住人よ」

その言葉と同時に、光が一層強くなったと思うと、御坂たちはそこで意識が途切れた。

「っつぅ……」

意識を取り戻した御坂は、軽い頭痛に呻き声を上げながら目を開く。
視界がひらけた瞬間、御坂は頭痛すら忘れて目の前の光景を疑った。

「な、何よこれ……」

そこは一面赤い世界だった。
可視光線が全て赤の波長しか存在しないかのように見えた。
なのに御坂には、可視光線の電磁波が感じられなかった。

「そ、そうだ！　黒子たちは！？」

慌てて辺りを見渡すと、黒子たちは御坂と同じように地面に倒れ伏していた。
御坂は全員の肩をゆすり起こしにかかる。

やがて全員が意識を取り戻すと、御坂と同じように周りの景色に絶句する。

無理もない、世界の全てが紅く染まっていたのだ。
空に浮かぶ月も、周りに見える建物の壁も、辺りに発生している薄い霧も。
何もかもが紅一色だった。

「魔女が住む世界へようこそ。科学世界の少女たちよ」

御坂たちから少し離れた所に立っていたアリシアが、御坂たちにそう告げる。

「来たか」

椅子に深く腰掛けていたアクゼリュスが、突然楽しそうな声でそう言った。
側にいたオートクレールとフラガラッハも、その気配に気付く。

『アリシア……それから、例の六人ですか』

目を細めながらオートクレールは呟く。
対してフラガラッハは楽しそうに口もとを歪めていた。

『やっぱジャリガキは剣を向けたか。くぅ～、楽しみだぜぇ』

今すぐにでも暴れたいという雰囲気がフラガラッハから感じられた。
それをつまらなさそうな表情をしながら、オートクレールは見てい

た。
だが久々にアリシアを鍛えるのもよいかという思いも同時に考えていた。
オートクレールとフラガラッハは無言で立つ。
侵入者たちを歓迎すると言いたげに。

「待て」

そこへ二匹を咎めるかのようにアクゼリュスが言葉を発する。

「貴様たちが動いてはゲームにならんだろう。ゲームは両者に勝利を掴む確率があるからこそ成り立つ」

『御意』

『えー、アクゼリュス様。それはないですぜー』

すぐに理解したオートクレールと、不満たらたらのフラガラッハ。
最も、アクゼリュスが一睨みするだけでフラガラッハは口を閉ざしたが。

「今回は諦めろ、フラガラッハ。貴様が暴れられる機会はまた設けてやる」

『了解ー』

なおも不満を漏らすフラガラッハに、アクゼリュスは意地の悪い笑みを浮かべていた。
子供のような感情を時として出すフラガラッハだが、アクゼリュス

は不愉快になる事はなかった。

「さて『人形』の調整は終わったな？」

オートクレールを見ずにアクゼリュスは尋ねる。

『はい、全ての調整は終わりました。ただ、残念な事に希望の箱（ボックス・オブ・ホープ）は用意できませんでした』

「構わぬ。あのような連中なら、例え用意できても使わなかっただろうな」

眼を閉じ歪んだ笑みを浮かべながらアクゼリュスは言う。

用意できても使う気が起きなかった、という言葉にオートクレールは疑問に思う。

だが、希望の箱（ボックス・オブ・ホープ）は使う相手を選ぶ。

恐らく今回の人物では、希望の箱（ボックス・オブ・ホープ）を使う対象（オモチャ）にならないと判断したのだろう。

オートクレールはそう納得する事にした。

「希望にすがるような連中ではない。あれは希望がなくとも前へ進むような連中だ」

禍々しい笑みを浮かべながら、不要な理由の答えだと言わんばかりにアクゼリュスは告げた。

「さて、何から話せば理解が追いつくかな？」

未だに呆けた顔をする御坂たちにアリシアはつまらなさそうな声で言う。

その声で理解が追いついた御坂は、頭を軽く振って気を静める。

「一体何が起こったのよ」

ここが学園都市ではない事を薄々理解した御坂だが、アリシアに尋ねずにはいられなかった。

今までの常識が根底から崩された気分だった。

「手紙に書いてただろう？　この世界には学園都市とは違う法則の力があるという事を」

「違う法則？」

「そうじゃ。異世界の法則を無理矢理現世界に適応し、様々な超常現象を引き起こす技術。科学的に開発された能力者とは全く別の存在」

そこでアリシアは僅かに黙り、次に話す内容を考える。

その言葉をすぐに思いついたのか、再び口を開く。

「技術の名前は魔術。そしてそれを使う人間を魔術師と呼ぶ」

「はぁ？　魔術（オカルト）？」

いきなり胡散くさくなったなと御坂は思った。

黒子たちも同様と思ったのか、困ったような顔をしていた。

「ふむ、まぁ科学世界の人間だとそう感じるだろうな」

しかしそんな御坂たちを見ても、アリシアは単に小さなため息を吐きながら呟くだけであった。

ただその顔はとても面倒臭いと言いたげな顔であった。

「いきなり魔術とか言われても……ねぇ？」

「大体オカルトとかインチキ臭い事を言われても困りますの」

黒子の言葉にアリシアは少しだけ眉を動かす。

が、何かを思いついたのか歪んだ笑みを浮かべ始めた。

「インチキ臭い……か。ならば、その辺りを探索してみればよい」

「そう言えばここはどこなのよ？」

「だから、探索すればわかる。言葉より体験のほうがよかろう。満足がいったら戻ってこい。その時に感想を聞かせてくれ」

そう言うとアリシアは御坂たちを無視して霧の中へ歩いていった。

霧の中に消えていったアリシアに御坂たちは慌てて追いかける。

だが、アリシアの姿は忽然と消えていた。

「いない！？」

「いつの間に……」

霧の中に消えて十秒も立っていなかった。

しかし、アリシアは空気に溶け込んだかのように存在自体が消えてしまった。

「ひとまず……この辺りを探索してみましょう」

アリシアの言った『体験すれば分かる』という言葉が胸に引っかかったが、御坂はそれを無理矢理無視して黒子たちに提案した。

「そうですわね。とりあえず探索してみますの」

「はー、白井さんの言葉でへそ曲げちゃったのに、何をサラっと纏めているんでしょうかねー？」

黒子へ毒を吐く初春は呑気な顔をしながら言った。
しかし黒子は初春の言葉を無視して周りを観察していた。

「仕方ないわね、探索と行きましょうか」

やれやれと言った感じで御坂はそう告げる。

この時に御坂は知る。
後悔先に立たず、黒子が放った言葉を止めさせていれば、どれほど良かったか。
後の御坂はこう語る。

――――　この時は、あんな事になるとは夢にも思わなかった。

紅魔世界

御坂たちは赤一色の世界を探索し始める。
探索して分かったことは、ここが学園都市の第七学区という事だ。
いくつもの見覚えのある建物や、通り道などがあったが違う点がいくつも見受けられた。

まず、一人として人が存在していない。
夜という事を考えてもおかし過ぎる。

次に電気などのライフラインが全く稼動していない。
なのに街はうっすらと明かりが灯っていた。

空に浮かんでいる赤い月も変だ。
現実に赤い月が発生する事はありえるが、それは決まった時期にしか発生しない。
今の時期に発生するとは思えない。
それに色にもムラがあったりするのに、夜空に浮かんでいる月は綺麗な赤一色だった。

最後に驚きなのが、第七学区の中心と思われる場所に巨大なねじれ双五角錐が七つ浮かんでいる事だ。
かなり遠くから見ているのに、その姿が肉眼ではっきりと分かる。
色も赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七色であった。
世界は赤いのに何故かねじれ双五角錐の色だけははっきり色が分かった。
そして、その中央に巨大な神殿のようなものが存在するが、周りのねじれ双五角錐の方が大きすぎて小さく見えてしまう。

いくつもの疑問点や謎が御坂たちの頭の中で浮かぶ。
しかし同時に理解した。確かに探検したほうが早く理解が追いつくと。

「説明がつかない点がいっぱいね。特にあのねじれ双五角錐なんて、サイズ的にありえない大きさだわ」

遠くに見えるねじれ双五角錐を見ながら御坂は言った。
ひとつの大きさが横幅だけで数キロにも達しており、高さは天を貫くほどの大きさであった。
更に時計回りの回転をしており、物体がただ鎮座しているだけではないようだ。

「あんな巨大な物を回すなんてあえりえませんの……」

「でも、私たちはそれを見ている。信じられないかもしれないけど、受け止めるしか無いわね」

未だに信じられないといった雰囲気の黒子に、御坂はため息を吐きながらそう諭した。
理解出来ない、と言っても現実に動いているものが存在している。
不可能な事ではないという証明になっているのだ。

「巨大な物体を回す力って何なのかしら」

「電気を利用してるのかしら……でもそれだけじゃ無理な点がいくつもあるわね」

そもそもあれほどの巨大な物体を、微速とは言え回すような力の時点で疑問符がつく。

「あんまり遠くに行くのは得策じゃないわ。付近を探索するだけにしましょう」

「そうですわね」

御坂の提案に黒子たちは軽く頷いた。

「ふむ、そのまま無謀にも神殿まで行くかと思ったが……案外慎重だな」

御坂たちより少し離れたビルの屋上で、アリシアはそう呟いた。
ビルの端で腰掛けているアリシアは、その背をフェンスによからすと眼を閉じる。

「低級の思念体で死ぬとは思わぬが……よい経験となろう。魔術とちょっと違うがな」

息を軽く吐き出すとアリシアは再び目を開く。
既にその瞳は蒼くなり、髪も銀から金へと戻っていた。
しかしツインテールにはしておらず、下ろされた髪が風によってゆらゆらと揺れていた。

「しかし何もしてないのはよくないな。万が一に備えて白騎士（ライン・ヴァイスリッター）を用意しておくか」

そう呟くアリシアの少し上に、何か黒いモヤのようなものが浮かんでいた。
やがてそれは形となったが、地球上に存在する生命体のどれにも当てはまらなかった。
能面のような顔が、卵の形をした体にぺったりと貼りつけられていた。
腕も足もなく、奇妙な蔦のような腕をもち、背中にはトンボのような羽がついていた。

「……これで本当にあの御方は代価の再考を行うのだろうか……」

奇妙な生命体もどきは一つ、また一つと数が増えていく。
対してアリシアは全く意識を向けず、ただ何かを考えているようであった。

「いや、あの御方だからなぁ。きっと楽しい事を思いついたとか言って……何かゲームを始める気が……」

気付かないアリシアを他所に、その数がドンドンと増えていく。
そして数が三十を超えた時、生命体は一斉にアリシア目がけて襲いかかった。

「甘い物を持っていけば、ごまかしが出来ないかなぁ……」

羽音を響かせて襲ってくる生命体だが、一メートル付近までアリシアに接近すると突然爆ぜた。
外からというよりは、内側から破壊されたかのような光景であった。
次々と爆発し、当初いた三十の生命体は一つも残っていなかった。

「ふん」

つまらないと言いたげな表情でアリシアは息を吐いた。
勝負というより、一方的な状況であった。
そもそもアリシアが勝負と思わなければ、果たして勝負と言えるのかと思えるぐらい。

「さて、そろそろあちらもお出迎えがあるだろう」

立ち上がって服についた汚れを払い落とす。
下を見下ろすと、先ほどと少し違うが同じようなものがわらわらと湧いていた。

「防衛機能が動いたか……やはり黙認はされなかったか」

そう言ったアリシアだが顔は笑っていた。
無尽蔵に沸くと思えるぐらい湧いた黒い生命体だが、その中で一際大きな生命体が産まれていた。
それは四肢を持ち、顔を持っていた。
背中には直径十センチほどの突起が無数に生えていた。
顔は愉快そうな表情だけしており、その他に表情が変化するようには見えない。

『侵入者、確認。殺す』

くぐもったような声でそれは言葉を発した。
それを聞いたアリシアは歪んだ笑みを浮かべて言った。

「やってみろ、雑兵どもが」

タンっと音がしたと同時に、アリシアはビルの屋上から飛んでいた。
そして重力に従って、速度をつけて下へと落下していく。

「妾に剣を向けた事を後悔せよ！」

叫ぶアリシアに向かって、黒い生命体は一斉に襲いかかった。

一方、御坂たちはどうなっているのか。
それはアリシアの言葉通り、侵入者に対する迎撃システムと対峙していた。

「薄気味悪いわね……こいつら」

「こちらの攻撃が全く効果なし……唯一お姉様の電撃のみですわ」

壁を背に出来たのが、御坂たちの不幸中の幸いだった。
三方を囲まれたが、それでも一方を気にしなくていいというのは精神的な負荷が下がる。
とはいえ、いつまでもこの状況を続けれるわけではない。

「確かに経験すれば分かるわね……アレは生き物じゃないわ」

「そうですわね。空間移動も効果が出てませんし……何より触ったとき奇妙な感触でしたの」

うぞうぞと動く生命体を睨みながら黒子は喋る。

形あるように見えて、触れたとき霧の中に手を入れたようにすり抜けていた。
だから何処かに飛ばそうにも、演算に失敗してうまくいかない。

それは同時に固法も攻撃方法が失くなった事を意味する。
レベル３の透視能力（クレアボイアンス）である彼女は、能力を使って相手の動きを先読みする。
しかし霧のように形があって形がないものでは、どれほど能力を使おうと察知は出来ない。

残りの三人は言わずもがな戦闘に役立つ訳がなかった。

ようするに、今は御坂以外が全て攻撃方法を失っている状態である。
御坂は五人を背に守りながら戦わなくてはいけない。

「くっ……ナメるんじゃないわよ！」

御坂は叫びながら電撃の槍を三方に撃つ。
幸いな事に知能はかなり低い、もしくはないに等しいので簡単に敵を倒せれる。
しかし数が多い。有に百以上は存在していた。

「数が多すぎるわね……これじゃキリがないわ」

「おチビちゃんの方も気になりますの」

「……そうね。でも今はこっちも大変だし、助けに行くのは……」

御坂がそう言いかけた時、言葉を遮るように目の前を何かが飛来した。

レーザーのように見えたそれは、生命体をなぎ払い更には建物の壁を破壊した。

「だーれが助けなどいるか。この程度などすぐ終わるわ」

声のした方に御坂たちは一斉に振り向く。
そこには銀髪を靡かせたアリシアが立っていた。

「どうじゃ。これで理解したか？　世の中には学園都市とは違う法則の力があるという事が」

「……そうね。いやって言うほどね」

アリシアの問いに御坂は冷や汗をかきながら笑って答えた。
その顔を見てアリシアは満足気に笑う。

「理解が早くて助かるのじゃ。やっぱり体験させた方が早いの……」

うんうんと頷くアリシアに向かって、黒い生命体が一気に襲い掛かる。

「邪魔だ」

しかしその一言で黒い生命体は、始めから存在していなかったかのようにかき消えた。
一部始終を見た御坂たちは呆然とする以外なかった。
アリシアが何か行動を起こしたようには見えなかったし、彼女は一言呟いただけであった。
なのに黒い生命体をいとも簡単にかき消した。

（あれが……魔術……なの？）

腕を組んで立っているアリシアを見ながら御坂は考える。
魔術を教える、そう言ったがまるで説明はなかった。
逆に体験すれば分かると言っていた。
ならば今のが魔術というモノだと思えば一番説明がつく。

「招かれざる客なんかのぅ、妾たちは」

『そうではない。防衛機能というものがあるのを忘れていただけだ』

『一緒に行動するからいいかなと思ったが、まさか別行動に出るとは思わなかったぞ』

アリシアの言葉に反応するように、彼女の後ろにオートクレールとフラガラッハが姿を現す。
空間を引き裂くようにして現れた二匹を見て、黒い生命体は一切の行動を停止させた。
下手に動けばその場で消されると思っているのだろうか。

『消えろ。この者たちはアクゼリュス様の客人だ。これ以上の狼藉は許さぬ』

オートクレールが喋ると同時に、黒い生命体はわれ先にと逃げ出した。
その姿は焦っているようにも見える。
一分も立たず、この場に黒い生命体は一匹もいなくなっていた。

御坂たちは驚きの連続で、オートクレールとフラガラッハが喋る事自体普通に受け入れていた。

もはや驚くのも馬鹿らしく思えたのだろう。二匹の獣のサイズも普通に受け入れていた。

『ん？　ん～～～～？』

フラガラッハが御坂たち、正確には御坂をじっと見ながら唸っていた。

『どうしたフラガラッハ。まさかとは思うが、貴様はアクゼリュス様の客人に手を出すつもりか？』

『んにゃ、どっかで見たような……あぁ！』

目を細めながら見るフラガラッハに、体を抱きしめて警戒する御坂。

オートクレールの言葉を軽く受け流しながら、なおも何かを考えていたフラガラッハだが、やがて何かに思い至った。

『お前って確か幻想殺しにベタボレな奴だよな！？』

「ぶふぅ！？」

予想だにしなかった言葉に御坂は息を吹き出してしまった。

一瞬で顔は真っ赤に染まり、耳まで赤くなっていた御坂であった。

「な、なななななな何を根拠にっ、むぐっそそそ、そんな事を言うのよ！？」

『ぎゃはははは、テレるなよ。公園で一人ポツンとしながら、告白の言葉を言ったぐらい惚れてるんだろ？』

「なぁ!?　どうしてあんたがそれを!?」

顔を真っ赤にしたままフラガラッハを指さして御坂は叫ぶ。
しかし肝心のフラガラッハはニヤニヤと笑みを浮かべながら御坂を見ていた。

『やめんか、フラガラッハ。お前はどうしてそう俗物臭い事に興味を示す』

そんな一匹と一人に、ため息を吐きながらオートクレールは間に割って入る。
フラガラッハもそこまで深い興味はなかったのか、その言葉に舌打ちしながらも引き下がった。
唯一、御坂だけが顔を真っ赤にしたまま口をパクパクとさせていたが。

『フラガラッハが失礼をした。我が名はオートクレール、この世界の主に仕える者だ。主人の命により、お前たちを迎えに来た』

「む、迎えにですって!?」

『そうだ。案内しよう……この世界、紅魔世界にある我が主人が住む神殿へ』

第七学区の中央に鎮座している神殿を見ながらオートクレールは御坂たちに告げた。

交渉

アクゼリュスが住む神殿まで、距離で言えばそこまで遠くなかった。
御坂たちの足で歩いて、大体三十分ほどである。

しかし神殿までの道のりは、もしオートクレールとフラガラッハがいなければかなり厳しい道のりだったであろう。
何故なら、道中に所々関所のようなものが存在していたからだ。
そこにいた生命体も、醜悪な姿からまるで宗教絵画に出てくる悪魔のような姿をするモノまでいた。

だがそのどれもが御坂たちに襲いかかる事はなかった。

『退け』

オートクレールの一言によって、神殿までにあった十近い関所はトラブルなく通過出来た。
そして遂にアクゼリュスが住まう神殿へと辿りつく。

「お、大きいんですの」

神殿を見上げながら黒子はそう呟いた。
他の人間も同様の感想だったのか、ただ神殿を見上げながら呆けた顔をしていた。

「ねじれ双五角錐も浮いてるし……何なのよ、これは……」

そして周りにあるねじれ双五角錐は、驚いたことに地面から少しだけ浮いていた。

重量が推測でも数百トンありそうな物体を回すだけでも恐ろしいのに、さらにそれが宙に浮いているのだ。
驚くなと言われても無理がある。

『中で主がお待ちだ』

呆けた顔をする御坂たちを無視して、オートクレールは先に進み始める。
その足音で理解が追いついた御坂たちは、慌ててオートクレールの後を追う。

『代価の再考ねぇ……アクゼリュス様の事だから、すんなり通るとは思わねぇなぁ』

オートクレールを追いかける御坂たちを見ながら、フラガラッハはぽつりと呟く。

「だろうな。さて、短髪女があの御方の言葉に耐え切れるかな？」

『耐え切れなかったら代価の再考が終わるだけだ。どっちにしろ俺には関係ねぇ』

「まぁ短髪女は短気だが、あの眼鏡女はそれなりに冷静だ」

『あー、あのおっぱいねーちゃんか。確かにそんな雰囲気はあるな』

「……たまに思うのだが、フラガラッハはどうしてそう親父臭いのだ？」

アリシアは額に手を当てながらため息を吐く。

隣にいる獣は神の末席に連なる存在だが、話をすると大体は俗物臭い台詞ばかりである。
神の性格など、人が理解するのは不可能なのかと本気でアリシアは思ったぐらいだ。

『良くも悪くも、神様ってのそんなものなんだよ。戒律とか馬鹿くさいモノなんて守らないっての』

「……それと親父臭いのが繋がらないのだが」

もう一度ため息を吐いた後、アリシアはフラガラッハと共に御坂たちの後を追った。

建物のサイズも規格外なら、中に施されたモノも規格外であった。
大理石のようなモノで作られた壁に、所狭しと壁画の装飾が施されていた。
禍々しい絵柄から、神聖な雰囲気を漂わす絵柄まで、あらゆる種類が混沌と描かれていた。

通路自体も幅が広く六人が横一列に並んでも、なお余裕があるほどであった。
天井は照明自体が薄暗いので見えないが、かなり高い位置にあるのが伺える。

そんな通路を先頭がオートクレール、その後ろに御坂たち、一番後ろにアリシアとフラガラッハという順で歩いていた。

御坂たちはオートクレールの後を無言でついて行く以外出来なかった。
オートクレールが纏う雰囲気は、明確に会話の拒絶を示していた。
十分ほど無言の歩行をした後、オートクレールはその足を突然止める。

『着いたぞ』

御坂たちはその声にハッとなると、オートクレールの先の方に視線を向ける。
そこには巨大な扉が鎮座していた。
ギギっと地面と擦れるような音を立てながら、扉は勝手に開きだした。

『お連れして参りました』

頭を垂れながらオートクレールは扉の向こうへ話しかける。
それなりの広い空間に、ポツンと置かれたテーブルと椅子以外は何もなかった。
そのテーブルにある椅子に座った少女は、薄く笑いながら言った。

「ようこそ、無知で愚かな科学の子供たち」

銀髪に赤い瞳のアクゼリュスは、御坂たちにそう言って歓迎の言葉を述べた。

促されるまま御坂たちは席に座る。
豪奢な装飾が施された椅子は、座り心地もよくかなり快適であった。

「ふかふかですー」

呑気に初春が座り心地の感想を述べる。
何を呑気な、と思う御坂たちだが感想自体には否定の言葉を述べなかった。

「気に入ってなによりよ。この神殿に客を迎えるのは数百年ぶりでね。その椅子も使えるか最初は疑問だったのよ」

優雅に紅茶を飲むアクゼリュスは、初春の感想にくすりと笑いながら語った。

テーブルの中央にアクゼリュス、両脇にオートクレールとフラガラッハ。
反対側に、御坂、黒子、固法、初春、佐天、紗月、アリシアの順に座っていた。
各自の前にはいつ用意したのか分からない紅茶とお菓子が置かれていた。

「毒なんて入れてないわ。飲んでも平気よ」

そう言われても呑気にお茶など飲める気分ではない御坂たちであった。
ただしアリシアは気にしないのか、普通に紅茶を飲んでお菓子を食べていた。

「夜中に食べると太りますよ、契約者様」

「それはアリシアも同様でしょう。最も、私の体は固定されているから太るも何もないわよ」

「……インチキ体質ですぞ、それは……」

唇を尖らせて攻撃するアリシアだが、それを見たアクゼリュスはくすくすと笑っていた。

「よく呑気に紅茶が飲めるわね」

紅茶や菓子を食べ、更にはアクゼリュスと呑気に会話をするアリシアに御坂は呆れながら呟いた。

「毒とかを疑っているな見当違いだ。そもそも契約者様がその気なら妾たちは０．０１秒で死んでおるぞ」

「……」

「せっかちな子は嫌いよ。まずはお茶を飲んでリラックスしてほしいわね。下らない感情をぶつけられて物語がつまらなくなったら最悪ですもの」

アリシアの言葉にアクゼリュスは付け足すように言葉を発する。

一度顔を見合わせた御坂たちだが、これ以上は話が進まないと理解すると各自紅茶を飲み始める。

といってもこの状況で味など分かるはずもなく、ただ流しこむような感じではあった。

「紅茶が終われば、話を聞いてくれるの？」

カップを受け皿に置きながら、固法はアクゼリュスに問いかける。

「ええ、代価についての話でしょう。聞いてはあげるけど、望んだ答えが出てくるかは別の話よ」

「わかったわ」

アクゼリュスにそう言うと、固法は再び紅茶を飲むことに集中する。

固法は理解していた。既に交渉は始まっていると。

下手な言葉で、アクゼリュスの機嫌を損ねては不味い事になる事も。

やがて紅茶の時間が終わり、アクゼリュスは少しだけ息を吐く。

「さて、待ちわびている子もいるし。代価の話だったわね、一体何が疑問なのかしら？」

視線を御坂たちに向けながら、アクゼリュスは全員に問いかける。

「単刀直入に言うわ。紗月さんのルームメイトを返して」

「ストレートな子ね、もう少し頭を使うという行為は出来ないのかしら？　駆け引きのない交渉なんてつまらないわ」

御坂の言葉にアクゼリュスはやれやれと言いたげなポーズを取る。

更には呆れたようなため息を吐いていた。

「くあぁ～、無理ですぞ契約者様。こいつらは契約の意味がどれほど重いか理解してないし、理解しようともしてませんから」

頬杖をついてあくびをしながらアリシアはアクゼリュスにそう言った。

「そこから説明するなんて面倒ね。契約の成立がどういう事で成立するかは知っているかしら？」

「契約は当事者の申込みと承諾の合致によって成立、って意味なら知っているわ」

アクゼリュスの問いに固法が答える。

御坂よりは幾分まともな話が出来ると理解したアクゼリュス。

「紗月は私の助けて欲しいかという申し込みを承諾した。その時に私は言ったわよ、代価は頂くと。犠牲なくしてこの手を取る事は叶わないと」

「じゃあどうしてそれが人の命なんですか！？」

「私が決めたからだけど？」

佐天の激高の問いをアクゼリュスは心底つまらないという表情で答えた。

つまらなさすぎて退屈という雰囲気であった。

「人の命が代価なんてふざけた事を言うの、あんたは！」

「私と紗月との間に契約は成立済だ。そして代価を決めるのは私。だから私は代価の請求書を送った。ただそれだけよ」

アクゼリュスの冷酷な言葉に、御坂は奥歯を噛み砕きかねないほど強く噛んでいた。

退屈だ、つまらないといった雰囲気を漂わすアクゼリュスは、御坂の睨みすらつまらないと言いたげな顔をしていた。

「つまらない、つまらないわぁ。人情に訴えかけるなんて、低俗すぎて呆れちゃうわ」

その言葉と同時にアクゼリュスは席を立つ。

「五分だけあげるわ。その間にもう少しマシな交渉を考えなさい」

そしてアクゼリュスの姿が空気に溶け込むように消え始める。

同時に、オートクレールとフラガラッハもその姿を空気に溶けこませ始めた。

「アリシア、貴方もいらっしゃい」

「はい」

アリシアもアクゼリュスに倣って席を立つ。

二人と二匹の姿が、もう殆ど消えかかっている状態になった時、御坂の頭は理解が追いついた。

「ま、待ちなさっ！？」

しかし最後まで言い切る前に、二人と二匹の姿は完全に消えてしま

った。

後に残された御坂たちは、ただ呆然とするしかなかった。

「五分以内に彼女を説得しないと……終わりって事ね」

重苦しくいう固法の言葉が、今の御坂たちの現状を的確に表していた。

再交渉の末

「ふざけた子ね……」

忌々しげにアクゼリュスが座っていた席を御坂は睨む。
明らかに冷静さを欠いた姿であった。

「落ち着いて御坂さん。怒った所で何も解決しないわ」

冷静になれと御坂を嗜めるが、残念ながら固法の声は全く聞こえていなかった。
ただ怒りに任せてテーブルを叩くだけであった。

（不味いわね。今の御坂さんは何をしでかすか分からない……下手にあの子の機嫌を損ねても、ただ無意味な時間が過ぎるだけだわ）

今はアクゼリュスの方が優位なのだから、うまく会話の応酬をしなくてはならない。
だが、冷静さを欠いた御坂ではむしろ会話の邪魔をする障害にしかならないと固法は考えていた。

（会話の内容から考えると、彼女は代価に全く興味を示していないわ。むしろ、会話の応酬を楽しもうとしている）

固法は先ほどの会話をもう一度思い返す。
更に事件の始まりからを思い返し、アクゼリュスが何を語りたいのかを導きだす。

（契約は重要とアリシアって子もアクゼリュスって子も言った。だ

から契約を破棄するような言動は受け付けてくれない）

そこで固法はある事に気付く。

代価の破棄が出来なければ、その代価を別の事に切り替える事は出来ないのかと。

（もしそれが可能なら、彼女たちの言う契約を破棄せずにいけるんじゃ……）

しかし確証は無い。

契約や代価に詳しいアリシアはアクゼリュスと共にいなくなった。

だから自分の答えが正しいかどうかは、はっきりと自信が持てない。

（だけどそれ以外に方法はない……か。問題は他の事を要求された時、一体何が要求されるかが分からない点ね）

だけどやるしか無い。

それに気付くと固法はどういった会話の応酬をするかを考える。

その応酬に全ての望みをかけて。

アクゼリュスに別室へ連れていかれたアリシアは沈痛な顔をして立っていた。

「アリシア、アレは何？」

其の部屋は先ほどの無機質な部屋と対極をなしていた。
高級な絨毯が部屋全てに敷き詰められ、部屋のあちこちに調度品が幾つも置かれている。
また、化粧箪笥やロイヤルベットなどもの生活道具も置かれている。
ここがアクゼリュスのプライベートな部屋だと思わせるに十分な雰囲気であった。

「貴方がお願いするから、わざわざ会話のセッティングまでしてあげたのに……とてもつまらないわ」

「……申し訳ありません」

「謝るのならもう少しマシな連中を連れてきなさい。あんな馬鹿では話にならないわ」

ロイヤルベットに腰掛けたまま、アクゼリュスはアリシアに話しかける。
どちらかと言えば叱咤しているという表現が当てはまるが。

「もう少し冷静に話すかと思っていましたが……過度の期待のようでした」

「人の見る目を養いなさい、アリシア」

「はい」

アリシアは頭を垂れてアクゼリュスに言った。
そんなアリシアをつまらない表情で見ながら、アクゼリュスは言葉を発した。

「オートクレール、フラガラッハ。お前たちの目で見て、あの六匹はどう感じた？」

『はい。小娘六人ですから、アクゼリュス様の望むような会話の応酬は不可能かと。ただ、固法という小娘は比較的マシかと思われます。あくまであの六人の中でなら……の話ですが』

『御坂ってガキは無理ですね。レベル５って言われてますが、単純で馬鹿で最後には何でも力に頼るタイプですね。アクゼリュス様の望むような会話の応酬は不可能だと思われます。ただ、オートクレールも言ったように、あのおっぱいねーちゃんならマシだと思われますぜ』

オートクレールとフラガラッハの言葉を聞いて、アクゼリュスは顎に手を当てて考える。

二匹の言葉通り、御坂の言葉でつまらないと感じたアクゼリュスは交渉の席を立ったのだ。

そこへ二匹とも固法を推薦するような形である。少しは期待できるかとアクゼリュスは考え至った。

「ふむ……貴様たちが推薦するのなら、彼女と会話をしてみるか。それが駄目なら、アレはこの世界より追放する」

アクゼリュスの言葉にアリシアはピクリと反応する。

反応したアリシアを見て、アクゼリュスは冷徹な目をしながら語った。

「分かっているわね、アリシア。私が満足いかなかった時は……きつ～いお仕置きよ」

「……分かっています」

歯を噛みながらアリシアは搾り出すように言う。

「さて時間ね」

手に持っている懐古時計を見てアクゼリュスはアリシアたちに告げた。

硝子が砕け散るような音が御坂たちの耳に届く。

慌てて音の方に視線を向けると、そこには先程と変わらずアクゼリュスが席に座っていた。

オートクレールとフラガラッハも、最初からそこにいたかのように自然と立っていた。

（空間移動？　それにしては変な感じね……）

音と同時に現れたアクゼリュスを訝しげな目で御坂は見ていた。

消えた時もそうだったが、現れたときも奇妙な方法で現れたのだ。

魔術、とも御坂は考えたが今はそんな事を考えている暇はないと思考を頭から追い出す。

（まぁいいわ。とにかくこのフザけた話をチャラにしてしまえばいいのよ）

「さて、五分たったわけだが……これ以上は時間の無駄をしたくない。だから、私は私と会話できる人間を指名する」

御坂はどうやって行動を起こすか考えていたが、それを遮るようにアクゼリュスは御坂たちに告げる。
その顔は無表情であり、何を考えているかは読めなかった。

「それ以外の者が私に話しかければ、代価の交渉は打ち切らせてもらう。ただし、その者が私の満足行く答えを出せれたなら……代価については考えてやろう」

「……ふざけんな！　交渉も何もっ……！」

「御坂さん」

アクゼリュスの言葉に激昂した御坂は食って掛かろうとする。
しかし、それを固法は咎める。
固法の言葉には妙な迫力があり、御坂は一瞬で動きを止めていた。

「さっきの繰り返しになるわ。今は落ち着いて彼女の言葉を聞く時間よ」

「固法さん！　でも、コイツの……！」

「落ち着きなさいと言ってるの！」

アクゼリュスから固法に食って掛かる御坂を、固法は大声で叱咤する。
あまりの迫力に、御坂は完全に口を閉ざす以外なかった。

「ごめんね、会話を遮っちゃって。どうぞ、続けていいわ」

「……なるほど……なる、ほど……」

しぶしぶ座った御坂を見て固法はアクゼリュスに向かって言葉を発する。

だが、アクゼリュスは薄く笑いながら何かを呟いていた。

「くっくっく、確かに良い頭をしている。本当は貴様がレベル5ではないのかな？　そこの雑兵よりよっぽど頭が切れるぞ」

「誰が雑兵ですって！？」

「落ち着いて！　そんなわけないわ。私はただのレベル3よ……」

喉を震わせて笑うアクゼリュスに、固法はあくまで冷静に回答を口にする。

しかし、それがかえってアクゼリュスに気に入られる言動だったのを、固法は気付いていなかった。

「中々だな。合格だ、私は貴様と交渉の会話をさせてもらおう。小娘、名前は何と言う？」

「固法、固法美偉（このりみい）」

「光栄に思え、固法。私が人の名前を尋ねるなど百年に一度あるかないかだぞ」

「そう……ありがとうね」

あまり嬉しくなさそうな声で固法はアクゼリュスの言葉に答えた。

「さぁ、始めようか」

先ほどと違い、とても愉快だと言いたげな笑みを浮かべてアクゼリュスは言った。

「さて、固法よ。お前はいかにして私を説得するというのか？」

「説得はしないわ。私が出すのは提案よ」

「……ほぅ」

小さく感嘆の息を漏らしたアクゼリュスは、固法の眼をじっと見る。少しだけ怯えながらも、固法はアクゼリュスの視線を真正面から受け止める。

「提案か……よい、言ってみろ」

薄く笑いながらアクゼリュスは言った。
どうやら正解のようだった、と固法は胸をなで下ろす。

「……先ほどの会話から導き出した答えだけど、貴方は代価についてそれ程こだわりがあるわけではないわね」

「何故そう思った？」

「軽すぎたからよ、貴方の言葉が。本当に大事ならもっときつく斬り捨てるのに、貴方は何かを期待するような言動で私たちに話かけていた。違う？」

今度は固法がアクゼリュスに問いかける。

最も、彼女はその問いに肯定も否定もせず、ただ薄く笑っていたが。

「貴方は何か別の案があるのでしょう？　まずはそれを教えてくれないかしら」

「ふ」

「？」

「中々鋭いな、固法は。確かに貴様たちが私を満足させる交渉をすれば、代価は別の事でまかなって貰おうと考えていたさ」

軽い拍手をしながらアクゼリュスは告げた。

アクゼリュスが求めた交渉は、あくまで楽しめる言葉の応酬。

御坂のように、ただ感情的になって喚く事は求めていなかった。

そして固法はその点をいち早く察知し、見事アクゼリュスの希望を叶えたという事になる。

「色々と不満点もあるが……まぁ及第点としてやろう」

「……それで、別の事って何をすればいいの？」

額に汗をかきながら固法はアクゼリュスに問いかける。
この先は全く予想がつかない、何が飛び出してくるかが分からない。
緊張で汗が吹き出しても、それを拭う事はしなかった。
余計な事でアクゼリュスの言葉を聞き漏らしたくない、という気持ちの現われだろうか。
固法は真剣な目をしてアクゼリュスをじっと見る。

「何、至極単純だ」

禍々しい笑みを浮かべてアクゼリュスは語る。
その顔を見て固法は嫌な予感を感じていた。

「魔女がもたらすゲームをしてもらう。ただ、それだけさ」

「ゲーム？」

「そのゲームで見事私を楽しませれば、代価は支払った事にしてやろう。紗月のルームメイトの命も不要だ」

「肝心のゲームは何をすればいいの」

一番重要だと言いたげに固法はアクゼリュスに次の言葉を促す。

「魔女に囚われたお姫様を救出するゲーム……さ」

これから起こる事が楽しいと言いたげな表情でアクゼリュスは御坂たちに告げた。

魔女のゲーム

「お姫様を救出するゲーム……ね。それに参加すれば代価はなしにしてくれるの？」

「参加だけじゃ駄目よ。ちゃんと私を楽しませてね」

固法たちにそう告げると、突然アクゼリュスは席を立つ。
そして、そのまま御坂たちを無視して部屋の奥へと歩き始めた。

「ついてこい、って事かしら」

オートクレールとフラガラッハがアクゼリュスについて行くのを見て、御坂たちは彼女の言いたい事を理解する。
すぐに席を立つと、御坂たちはアクゼリュスの後を追った。

「……ここまで来てあの娘が無事に済むとは思えないな」

ポツリと呟いたアリシアは、ため息混じりに席を立つと御坂たちの後を追った。

隣の部屋に移動した御坂たちは、部屋の中を見て驚きに声を失った。
まるでＲＰＧゲームのダンジョンを彷彿とさせる部屋だった。
コロシアムのように、中央に闘技場のようなものがあり、石段のような観客席があった。
北側に位置する場所に奇妙な小島のようなモノが見える。
周りは水ではなく、マグマのような液体がボコボコと泡立っていた。

「ここであんたと決闘でもするのかしら？」

理解が追いついた御坂は、アクゼリュスを睨みながらそう言った。
だがアクゼリュスは愉快そうに笑うだけであった。
それが御坂の心を苛立たせるのだが、今は怒鳴っても意味が無いと御坂は心に言い聞かす。

「貴方たちの相手はアレで十分よ」

そう言ったアクゼリュスが指さした先、闘技場の真ん中にはポツンと誰かが立っていた。
先ほど見た時にはいなかったその人物は、頭のてっぺんから全身を覆う布をかぶっていた。
それは、酷く人間味を感じさせない雰囲気を纏っていた。
ピクリとも動かず、ただじっと真正面を向いていた。

「あいつを倒せば終わりなの？　なら、さっさとやらせて」

「せっかちな子は嫌いと言ったわよ。ゲームの説明をするから大人しく聞いていなさい」

「くっ！？　あんた……！」

歯ぎしりしながらアクゼリュスを睨む御坂だが、アクゼリュスはどこ吹く風のようであった。
むしろ楽しそうな表情で、今にもスキップをしても不思議ではなかった。

「アリシア以外はあの闘技場に移動しなさい」

そう言うとアクゼリュスは御坂たちの返事を待たず観客席へと移動

する。
アリシアとオートクレール、フラガラッハはその後を無言でついて行った。

「……移動するしかないわね」

その事を理解した固法は、御坂たちを闘技場に移動するよう促す。
悔しそうな顔をする御坂だが、今は固法の言葉が正しいと理解するとしぶしぶ移動を開始する。
しかしそれは黒子たちも同様であった。
手の平で弄ばれている感じがする現状で大人しくしろというのが無理がある。
今は御坂が代弁していたからよかったが、もし御坂が何も言わなければ代わりに黒子たちの誰かが言っていただろう。
それほど黒子たちは腹に据えかねていたのだ。

やがてアクゼリュスたちが観客席、御坂たちが闘技場まで移動する。
全員が移動したのを確認したアクゼリュスは、軽く腕を上げながら指を鳴らす。
瞬間、闘技場の中に七つのねじれ双五角錐が出現する。
最も外にあるのとは比較にならないほど小さく、幅と高さはほぼ人と同等であった。

「ゲームのルールを説明するわ。ちゃんと聞いてないと、後で痛い目を見るわよ」

アクゼリュスと御坂たちの距離はかなりある。
なのに、アクゼリュスの声は御坂たちの耳にはっきり届いた。
まるで近くで語りかけてくる錯覚に御坂たちは戸惑う。
だが、アクゼリュスは御坂たちの戸惑いを無視して言葉を発する。

「さぁ魔女に囚われた哀れなお姫様を救出するゲームの始まりよ。勿論、お姫様の役をするのはぁ」

そこでアクゼリュスは指を鳴らす。

すると、小島のような場所にかかっていた布がハラリと地面に落ちる。

「なっ！？」

「う、うそ……」

そこにあるものを見て紗月と佐天が同時に声を上げる。

他の面々も声を失ったのか、呆然とそれを見ていた。

「紗月のルームメイトよ」

小島にあったもの、それは紗月のルームメイトが十字架に磔にされていた姿であった。

「あ、なぁ……！」

磔の刑にされている人物を見て声を失った御坂たちを、アクゼリュスは楽しそうな表情で見ていた。

「哀れな囚われのお姫様を守る存在は目の前の子」

その言葉と同時に、闘技場に立っていたフードの人物が自身を覆っている布を剥ぎ取る。

フードが地面に落ちその素顔を御坂たちの前に晒す。

「漆黒の騎士とでも言いましょうか。私が作った『人形』よ」

それは奇妙な形態をした人形だった。

頭の先から足の裏まで全てが黒色で覆われていた。

全身鎧のような物を着ており、顔はヘルムと仮面が一体型のようなものをつけていた。

性別は分からないが、鎧の形からして恐らく女性の形をしているのだろう。

「そして、貴方たちに必要な武器はこれよ」

御坂たちの前に装飾が施されたレイピアが出現する。

どちらかと言えば、貴族用の飾剣に近いそれは地上から十センチほどふよふよと浮いていた。

微妙な上下移動をするそれを見て、御坂たちはハテナマークを浮かべる。

「武器……ってどういう意味よ」

「んふ、これから説明するわ。まず貴方たちの前に漆黒の騎士、飾剣と七つの水晶が見えるわね。水晶は剣でしか破壊できないわ。そして、七つのうちの一つがお姫様を救うキーになっているわ。見事当たりをひけば、あの子は磔の刑から救われるわ」

やたら上機嫌で説明するアクゼリュスを見て、アリシアとオートクレールとフラガラッハは互いの顔を寄せ合う。

「なぁ……妾の目には契約者様がノリノリに見えるのだが……」

『この日のために色々とセッティングしてたからな。久々の物語だし、気合が入ってるんじゃね？』

『こういう事には労力を惜しまない御方だからな。最初は物語を見るだけだったのが、今ではやる気満々という訳さ』

「そこの三人、ヒソヒソとうるさいわよ」

ヒソヒソと会話する三人にアクゼリュスは冷静なツッコミを入れる。一つ咳払いをすると、アクゼリュスは御坂たちを見下ろしながら説明を続ける。

「ハズレの水晶をひくと十字架は少しずつ傾く。六個間違えると骨すら残さない溶液の中に彼女が落ちる寸法よ」

「……つまり場合によっては全員がハズレを引く可能性もあると」

眉をひそめながら固法はアクゼリュスに問いかける。

明らかにゲームという範疇を越えている。

しかし選択肢は一つしかない、そうゲームに参加するという選択肢しか。

「正解よ。そして、漆黒の騎士と十字架は特殊な魔術で繋がっていてね。漆黒の騎士が受けた痛みは、そのまま紗月のルームメイトにも与えられるわぁ」

「なっ！？」

アクゼリュスの言葉に驚き目を見開いた御坂たち。
だが、彼女は気にする事なく歪んだ笑みを浮かべていた。

「いかに漆黒の騎士を傷つけず、正解の水晶を破壊するかがゲームの醍醐味よ。さぁ、私を楽しませて頂戴ね。一分後に開始するわよ」

説明し終えたアクゼリュスは、あ然とする御坂たちを無視して指定席まで移動する。
豪奢な椅子に座ると、サイドテーブルにのっている紅茶で喉を潤す。

「ふ、ふざけんじゃないわよ！？　なんだってそんな事を！？」

「流石に信じられませんの。こんな人の命を弄ぶ行為など、到底受け入れられませんの！？」

御坂と黒子が揃って抗議の声を上げるが、アクゼリュスはどこ吹く風であった。
むしろ心地良いＢＧＭと思っているのかゆったりと椅子にもたれかかっていた。

「くっ……こ、のぉ！？」

御坂の腕が放電したかと思った瞬間、レーザーのようなモノがアクゼリュス目がけて飛び出した。
超電磁砲、御坂を象徴する必殺技。
コインをローレンツ力で加速して音速の三倍以上のスピードで撃ち出す。

最ももっぱら使われるのは、専用の弾丸ではなくメダルゲームのコインだが。

数秒で自身を撃ち抜く超電磁砲を見ても、アクゼリュスはただ薄く笑うだけであった。

終わりだ、御坂は勝利を確信した。

だが彼女はアクゼリュスという存在を甘く見すぎていた。

「なっ！？」

アクゼリュスは何かをしたわけではない。

むしろ何もしていない。なのに超電磁砲はまるで風船が弾けるような音と共に消えた。

その光景が信じられなかった御坂は、ただ呆然とアクゼリュスを眺める事しか出来なかった。

「アリシア、オートクレール、フラガラッハ、手を出すな。これからゲームが始まるのだ、駒を痛めつけてゲームがつまらなくなっては困るではないか」

その言葉にハッとなった御坂だが、その場から動くことは出来なかった。

御坂の正面にはフラガラッハ、そして背中にはアリシア。

アクゼリュスを守るようにオートクレールがたつ。

各自が計り知れないほどの純粋な殺気に溢れていた。

「短髪女、命拾いしたな」

聞く者全てを凍り付かせるような冷たい声でアリシアは言葉を発する。

あまりの冷たさに、御坂だけではなく黒子たちすら軽い恐怖を覚えたぐらいだ。

『主に剣を向ける愚か者を打ち滅ぼすのは我らの務め』

『アクゼリュス様に剣を向けるとはいい度胸だ、クソ雌が』

『今回はアクゼリュス様のお言葉により手を引くが……次はないと思え』

アリシア同様、オートクレールとフラガラッハも恐ろしく冷たい声で御坂に警告の言葉を述べる。

「短髪女、妾はお前たちに協力するとは言った。だが、我らが主に刃を向けるのなら容赦はしない」

三人の殺気による重圧に屈した御坂は、呆然としながら首を縦に振るしかなかった。

御坂だけではない。その場にいた黒子たちも、部屋に充満する計り知れない殺気に飲み込まれていた。

「雑兵の児戯如きに怒る気にもならん。お前たちは足元で喚く虫ケラを敵として見るのか？」

つまらなさそうな表情でアクゼリュスはアリシアたちを叱咤する。

その姿を見て御坂たちは理解した。

軽い言動に騙されていたがアクゼリュスは底知れぬ実力を秘めた存在である事が。

例え天地がひっくり返っても、彼女に傷ひとつ負わす事は不可能だと。

ここに来て御坂たちは本当の意味で理解する。
魔術という力を。魔術師の強さを。
彼らの強さはレベル5を凌ぐという事を。

「さぁて、ゲームを開始するわよ」

あ然とする御坂たちを無視して、楽しそうな声でアクゼリュスはゲームの開始を宣言した。

悪戦苦闘

アクゼリュスの合図と共に、漆黒の騎士は御坂たちに襲いかかる。
手に持っているのは鎧と同じように全てが黒に染まったハルバード。
無造作に振るうが、そのスピードは重量級の鎧から想像つかないほど速い。

「くそっ！」

振り下ろされる攻撃を、御坂は横に転んで避ける。
ドンッ！と岩を叩きつけたような音を響かせて、漆黒の騎士はハルバードを地面に叩きつける。
その威力を見て御坂たちはゾッとする。
一撃でも当たれば大怪我は免れない。
即死してもおかしくない威力であった。

幸いなことに漆黒の騎士の動き自体はとろかった。
攻撃スピードが速い反面、その他に関する動作はノロノロと亀のようであった。
地面に突き刺さったハルバードを引き抜こうとしている様は隙だらけに見えた。
だが、御坂たちは攻撃に転じる事は出来ない。
漆黒の騎士を傷つければ、紗月のルームメイトも傷つける事となる。

『ごぎぎぎぎぎ』

奇妙な声を漏らしながら漆黒の騎士はハルバードを構える。
キョロキョロと辺りを見渡している様は、まるで獲物を探しているかのようだった。

「……不味いわね。私や白井さん、御坂さんは問題ないけど……」

チラッと固法はある方へ視線を向ける。
そこには初春、佐天、紗月の姿があった。
彼女たちでは漆黒の騎士の動きに対応できない。
狙われたら一瞬で終わりだ。

「どうするべきか……」

三人を守りながらどうやって水晶を破壊するかを考える。
しかし漆黒の騎士は、考える時間を与えてはくれない。
次に狙うターゲットが決まると、その人物目がけて一直線に走りだす。

「黒子！」

狙う人物は黒子。
ハルバードを頭上高く掲げると、そのまま一直線に黒子へ振り下ろす。

「甘いですの！」

振り下ろされる瞬間、黒子は能力を使って漆黒の騎士の背後に立つ。
突然ターゲットが消えたことに驚いたのか、漆黒の騎士は慌てたような感じで辺りを見る。

「今のうちに水晶を破壊するんですの！」

「！」

黒子の言葉に理解を示した初春は、ふらふらとしながらも剣を大きく振りかぶる。

「ええいっ！」

腰の入っていない振り下ろしだが水晶はいとも簡単に破壊された。
まるで薄い氷で出来た細工のように、粉々に砕け散ったのだ。

「結構簡単に壊れますよ！」

水晶の破壊と同時に、手に持っていた剣も破壊されたが初春はとても楽しそうに言った。
だが突然初春の姿が掻き消える。

「言い忘れていたけど、ハズレの水晶を引いた子は退場よ？」

楽しそうなアクゼリュスの声が御坂たちの耳に届く。
その声と同時に、漆黒の騎士が動きを完全に停止させる。
アクゼリュスの言葉が聞こえるときは、全ての動作を完全に停止させているのだろうか。
とにかく石像のように固まって動かなくなった。

「別の部屋に幽閉されているわ。当たりの水晶をひけば戻ってくるけど……全員が外れた時は仲良く溶液風呂コースね」

「なん……ですって……」

アクゼリュスの言葉を借りれば、水晶の破壊でハズレを引いた場合はこの場より退場させられる。

そして、全員がその部屋に幽閉された時、あの小島の周りにある溶液が満たされた所に放り込まれる。
つまりそれは全員の死を意味していた。

御坂は奥歯を噛み砕きかねないほど強く噛む。
命を弄び、それを見て楽しむアクゼリュスの行為に、御坂は怒りを胸に抱く。
余りにも非道、余りにも冷酷な思考に、黒子たちも怒りを覚える。

「……冷静に考えれば、これはチャンスね」

だが固法だけは怒りよりも冷静な思考を優先した。
静かな怒りを胸に抱き、それでもこの場で最適な選択肢を探す冷静さを併せ持とうとした。

「御坂さん、白井さん。貴方たちは漆黒の騎士を足止めして。その間に佐天さんと紗月さんは水晶を破壊して」

「ど、どうしてですか？」

余りにもあっさりと破壊を言う固法に佐天は戸惑い疑問を口にした。
残りはたった五回。そのうちの二回をまるで捨てるかのように軽く言ったのだ。

「悪いけど佐天さんと紗月さんが、あの漆黒の騎士の動きについていけるとは思えない。だから、先にこの場から退場した方が逆に安全なの」

「幽閉先が安全って保証はないわよ」

「そうね、それは私も思うわ。でもね、こっちは明確な危険があるのよ。二人を守りながら水晶を壊すのは……正直厳しいわ」

固法の言葉に全員が黙る。

彼女の言う通り、二人を守りながら水晶を破壊するのはかなり厳しい。

特に誰を狙うかがハッキリしない漆黒の騎士は、その行動の読めなさが頭を悩ます原因になっている。

「当たればこのゲームは終わり。外れても漆黒の騎士に狙われなくなる。これしか方法はないのよ。お願い、私を信じて」

悲痛な声で固法は言葉を発する。

その声から彼女も苦渋の決断だというのがうかがい知れた。

少しだけ悩んだ御坂たちだが、やがて互いの顔を見て軽く頷く。

「固法さん、あなたの言葉を信じます！」

佐天と紗月は剣を両手で持ち上げると、各自水晶目がけて走りだす。

幸いにも漆黒の騎士のターゲットは固法だったために、横を通り過ぎる紗月に何かする事はなかった。

そのまま無視して、ハルバードを固法目がけて振り下ろす。

「甘いっ！」

振り下ろす動作『だけ』速い漆黒の騎士など固法の敵ではなかった。

「ていっ！」

「えいっ！」

佐天と紗月が掛け声で水晶を同時に破壊する。
瞬間、二人の姿が虚空に消えた。
どうやらふたりともハズレを引いたようである。
軽く舌打ちをする御坂だが、嘆いても仕方ないと気持ちを切り替える。

「残りは……四つね」

両肩に重圧を感じながら御坂は呟いた。

「ほぅ、そういう手でくるとはな」

初春、佐天、紗月が素早く退場になったのを見てアクゼリュスは愉快そうに言った。

『……なるほど、足手まといになる三人をあえて幽閉させて人形から守る。合理的な思考を、あの感情的な小娘たちが実行できるとはな』

「固法だろうな。冷静さを保てているのは……しかし奴がいなくなった時はどうなるか……だな」

薄く笑いながらアクゼリュスは言う。
その声、その表情、雰囲気から闘技場で行われている事に心底楽し

んでいる様子であった。

「ふふふ、素敵ね。虫ケラが地面に這いつくばって足掻き、嘆き苦しみ、苦悩の末に希望を掴もうとする。ある意味ではその純粋さがとても輝いて見えるわ。物語を盛り上げる最高のスパイスね」

「……」

「あら、アリシア。貴方は闘技場の光景を楽しまないの？」

「今日は姉上と一緒に寝る予定でしたが……それがパァになったので。ちょっとショックでして……」

一瞬キョトンとしたアクゼリュスだが、すぐにくすくすと笑い出す。先ほどの禍々しい笑みと違い、幾分和らいだ笑みであった。しかしアリシアは、アクゼリュスの笑みを気にせず深い溜め息を吐く。

「甘えん坊ね、アリシアは。学園都市に来るまでは毎日のように一緒に寝ていたクセに」

「過去は過去ですぞ、契約者様。妾にとっては今日それが味わえないのは一大事なのですぞ」

アリシアの言葉を聞いて更に笑い出すアクゼリュス。
喉を震わせて笑うアクゼリュスの瞳には少しだけ涙が溜まっていた。つまりそれほどおかしいと思ったのだろう。

「くっくっく、それは悪かったな。今度からは考えておいてやろう。最も考えた末に期待の言葉が出るかは別だがな」

腹を抱えて笑い出しそうなアクゼリュスを見て、アリシアは深い溜め息を再度吐く。
期待できない所か、逆にその日を狙って何か言ってきそうな予感すらある。
アクゼリュスとはそういう性格なのだから。

「期待はしておきますぞ、契約者様」

心にもない言葉をアリシアは述べる。

「ああ、期待しておけ」

とても愉快そうな笑みを浮かべながらアクゼリュスは言った。

「しかし、それほど上条優菜が大事なのねぇ、アリシアは。どんな時でも彼女の味方であろうとする。そう……たとえ私に剣を向ける事になってもね」

「……」

「んふふふ、隠さなくても分かるわよ。貴方の事は幼少の頃から見ているもの。ある意味では娘みたいなものよ」

「申し訳ありませんが、こればかりは……」

苦渋の決断と言いたげな表情でアリシアはアクゼリュスの問いに答える。
コルネリウス家の力は、アクゼリュスがいて初めて成り立つ。
故に彼女はコルネリウス家では絶対的な支配者として君臨していた。

始祖の時代から現代に至るまで。
だからこそ、コルネリウス家にとってアクゼリュスへ弓を引くのは許されない行為であった。

「よい、私は気にしない。お前は自らの意思に従って上条優菜の味方でいるのだろう？　ならばその意志を貫き通せ」

「……はい」

「まぁ私と敵対すると、とぉ～～～っても痛いけどね」

くすくすとアクゼリュスは笑いながら言った。
そしてアリシアも幾分和らいだ笑みを浮かべながら頷いた。

二分の一

御坂、黒子、固法の三人だけになった時、漆黒の騎士に変化が起こった。
もたついたような動きがなくなり、動きに洗練さが出始めた。
ターゲットを選ぶ時間の感覚も短くなり、御坂たちは激しい攻撃の手に晒される事となった。

「さっきより時間の感覚が短くなっているわ！」

漆黒の騎士からの攻撃をぎりぎりで回避しつつ固法は叫ぶ。
その攻撃も一度ではなく、運が悪ければ二度三度連続で来る時もある。

「これじゃあ！　水晶を狙う事すら難しいんですの！」

「スタミナを浪費するだけだわ！　どうにかしないと！！」

ハルバードを振り回して、漆黒の騎士は御坂たちを狙い続ける。
常人なら体力の消耗ですぐに動けなくなるが、人形に体力というものは存在しない。
故に漆黒の騎士はどれほどハルバードを振り回しても、そのスピードと破壊力が落ちる事は無かった。

もはや漆黒の騎士が繰り出す攻撃をただ避けるしか出来なくなった三人。
その三人は気付いていなかった。
固法は初春たちを安全な場所に逃がすために、あえて水晶を破壊させて退場させた。

場外ならば安全、そう考えたのだろう。
しかしそれに伴って、闘技場にいる人間の危険度が上がる事には気付いていなかった。

そもそも漆黒の騎士の思考ルーチンはかなりいい加減な作りであった。
高度に最適化すると、ゲームがつまらなくなるというアクゼリュスの考えによりわざとそうなっている。
だから攻撃の速度は速くても、その他の動作がもたついたりしていたのだ。

しかしターゲットの数が減れば、漆黒の騎士の攻撃ルーチンは次第に簡素化されていく。
六人の中から一人を選んで攻撃をするという複雑な思考から、三人の誰かを狙えばいいという簡単な思考へと。
人が半分に減るだけで、ルーチン処理にかかる時間も半分となる。

つまり冷静に考えれば漆黒の騎士は対象の数が多ければ多いほど動きが鈍くなる。
よって、六人で一気に水晶を割っていればこれほど窮地になる事はなかっただろう。
御坂たちは自らの手で、敵である漆黒の騎士の性能を上げてしまったのだ。

「……御坂さん、一つ提案があるわ」

肩で息をしながら固法は言葉を発する。
汗がポタポタと地面に落ちており、彼女の体力が限界に近いことを示していた。
黒子は固法ほど汗はかいていなかったが、体力が著しく消耗してい

るのか肩で息をしていた。

「何ですか……固法さん」

呼吸を整えつつ御坂は固法に問う。

彼女たちが呼吸を整えられる理由、それは漆黒の騎士は攻撃の手を休めているからだ。

まるで頭の中を整理して思考を最適化している雰囲気だと御坂は思った。

そして御坂の読みは当たっていた。

漆黒の騎士は己の思考ルーチンを更に最適化処理していたのだった。

より精密に、より正確に。

ダイヤモンドの原石を研磨して、輝く宝石に進化させるように。

漆黒の騎士は思考ルーチンをより高度化させていく。

「……水晶は北、南西、西、東の残り四つ。私は南西、白井さんは北を狙うわ。御坂さんは西か東だけに集中してほしいの」

「わたくしは北の所にある水晶ですか」

「ええ、空間移動出来る白井さんなら一番遠い場所を狙えると思ってね。本当は私が行ければいいんだけど、残念ながら体力が限界に近いから」

「構いませんの。これ以上は無駄に時間をかける余裕もありませんの」

固法と黒子は互いに頷くと呼吸を整え始める。

御坂は二人を見ながらどちらを狙うかを考え始める。

（……私の狙うべき水晶は左か……右か……）

確率は二分の一。もしかしたらどちらも外れで固法か黒子が正解を掴むかもしれない。

だけど御坂は何となく理解していた。

確証はないが、自分の選ぶ水晶のどちらかが正解だと。

だけどどちらが正解か分からない。御坂の心は焦りと迷いに支配される。

（こんな時……当麻ならどうするんだろう……）

最後かもしれないと思ったせいか、当麻の顔が心の底から急激に浮上してきた。

自分の心の一番大事な部分に堂々と居座っている人物の顔を。

そして当麻の事を思うだけで、御坂は鼓動が早くなり顔があつくなるのを感じる。

トクトクと自分の心音を聞きながら、御坂はもう一度水晶を見据える。

（そっか、そうだよね）

当麻の事を強く思った瞬間、御坂はふっと自分の心が軽くなるのを感じた。

同時にアレだけ乱れていた思考がゆっくりと落ち着いていく。

目を瞑り深呼吸を繰り返す。

（うん、もう迷わない。私が狙うのは……）

勢い良く目を開くと、狙うべき水晶を見据えて剣を構える。

呼吸が整った黒子と固法も、御坂にならって剣を構えた。
同時に漆黒の騎士も準備が終わったのか、ハルバードを構えて御坂たちを見据える。

「さぁ……とっとと終わらせて帰りましょう」

体に一本芯が通ったような心地よさを感じながら御坂は告げる。
馬鹿げたゲームを終わらせるための言葉を。

「皆一緒にね！」

御坂の声と同時に三人は走りだす。
同時に漆黒の騎士もターゲット目がけて地面を蹴りつける。
漆黒の騎士に選ばれたターゲットは……御坂であった。

地面を蹴りつける音に爆発のエネルギーでも帯びているのか、爆音を立てながら漆黒の騎士は突撃してきた。
しかし横合いから急に誰かの腕が伸びてくる。

「お姉様だけではありませんの！」

その腕は黒子の腕。
そして黒子が狙ったのは漆黒の騎士ではなく、その手に持っているハルバード。

「！」

幸いにも限界重量を超えていなかったのか、ハルバードは漆黒の騎士から離れはるか後方に飛ばされていた。
そこは御坂が狙うべき水晶からかなり遠い位置であった。

「いつまでもやられっぱなしの黒子ではありませんの！」

「ナイスよ、黒子！」

突然武器が消失した事に思考が固まったのか、漆黒の騎士はその場で石像のように固まった。

漆黒の騎士の横をすり抜け、自分が壊すべき水晶目がけて御坂は走り続ける。

途中パキンという音を聞いたが、十字架が傾いたままを見て外れた事を理解する。

「後は任せたわ……」

固法の声が御坂の耳に届く。

手に持っている剣に力を込めると、走るスピードを更に上げる。

「お姉様、しっかりと決めてくださいまし」

黒子の声が固法と同じように御坂の耳に届く。

何も変わらない事から黒子もハズレを引いた事を理解する。

残る水晶は二個、正解を引く確率は二分の一。

その事が恐ろしいまでの重圧となり、御坂の肩にのしかかっているはずだった。

しかし走る御坂の瞳に迷いはない。

何が起ころうと狙うべき水晶は初めから決まっているという雰囲気だった。

「私たちが全員死ぬ未来（げんそう）なんて存在しない！　私たちが掴むのは誰

も死なず生きて帰る未来(げんじつ)よ！」

御坂は剣を持つ『右』腕に力を込める。
ミシミシと剣の柄が悲鳴を上げたがそれらを無視して大きく振りかぶる。

「これで終わりよ！！」

そしてそのまま勢いをつけて東にあった水晶に剣を叩きつける。
そう、御坂から見て『右』側にあった水晶へと。
パキンと音を立てて水晶が破壊される。
それは今までと違い、壊れた破片がキラキラと光っていた。

「……」

輝きが消えたと同時にドシャッと何かが崩れ落ちる音が聞こえた。
御坂がそちらに視線を向けると、漆黒の騎士がボロボロと崩れていくのが目に入った。

「勝った……のね」

その姿を見て御坂は勝利を確信した。
右腕を天高く突きあげると、勝利の言葉を大声で叫ぶ。

「私たちの勝利よ！！」

御坂の言葉と同時に漆黒の騎士はポンっと小さな音を立てて完全に消滅した。

変化はすぐに起こった。
御坂の前に紗月のルームメイトが現れると同時に、あちこちに黒子たちの姿も現れる。
十字架からルームメイトを掬い出すと、御坂はアクゼリュスの方に視線を向ける。

「終わりよ。この子は返してもらうわ」

意識のない紗月のルームメイトを抱えながら御坂は力を込めて言う。

「約束を違える気はない。お前たちは私を楽しませた。約束通り代価は支払った事にしてやろう」

御坂を見下ろしながらアクゼリュスは楽しそうに言った。
短い決闘だったが彼女は満足していた。
結末は全員が助かるという結果だったがアクゼリュスにとってはどちらでも良かった。
つまり御坂たちが死のうと生きようと彼女にとってはどちらでもよかったのだ。

「そしてそしてお姫様は救出され無事に家に帰りました、か。使い古された結末だがたまには悪くないな」

指をくるくると回しながらアクゼリュスは物語の結末を呟く。
視線も自分の指を見ており、既に御坂たちを視界にすら収めていなかった。

「さて気分も良いし、そろそろ就寝に入る。オートクレール、フラガラッハ、後片付けをしておけ」

『御意』

『へーい』

「……待ちなさいよ」

部屋から立ち去ろうとするアクゼリュスに御坂は声をかける。
その声はのっぺりと平坦な声であった。
怒りも、憎悪も、何もかもが綯い交ぜになった声にも聞こえた。
声を聞いてアクゼリュスは歩を止める。
しかし御坂たちの方に視線を向けず背を見せたままであった。

「なんだ？　舞台の幕が降りた今、お前たちの役目は終わった。ああ、帰り方が分からないのか。ならばアリシアに聞け。私が答える義務はない」

「一つだけやり残した事があるのよ」

俯いたまま言葉を発する御坂の表情は前髪に隠れて良く見えない。
彼女が今、どんな表情をしているのかは誰にも分からない。
しかし御坂が纏う雰囲気で、どの様な感情を抱いているかは分かる。
溜め込んだ怒りが、我慢の限界に達したという事に。

「……んふふ、なるほど。オートクレール、フラガラッハ、アリシア、手を出すな。どうやら小娘は私に何か言いたいらしい。普段なら虫ケラの戯言など聞く気など起きないが……今は気分がよいので許そう」

御坂と違い愉快そうな声で喋るアクゼリュスは歪んだ笑みを浮かべていた。
オートクレールとフラガラッハは、軽く頷くとそのまま数歩後ろに下がる。
アリシアは一度つまらなさそうに欠伸をした後に下がった。

「話してみろ小娘」

「……確認だけど命を弄んだ事を謝る気はないのね？」

「謝る？　誰にだ。私が謝るという行為に出なければならぬ理由などないが？」

「イカれているわね、あんた」

冷たい表情をして御坂はアクゼリュスを罵る。
その顔は怒りを超えた先の感情が表にでたかのようであった。
だが、アクゼリュスは愉快そうに笑いながら御坂を見ていた。

「イカれている？　これは面白い。私がイカれているのはお前が保証してくれるのか。では逆に質問をしよう、お前が正気である事は一体誰が保証してくれるのだ？」

「何ですって？」

ピクリと反応する御坂を見て、アクゼリュスはお腹を抱えながら笑った。

愚かすぎて笑える、そう顔に書いていた。

「私を誰だと思っている。私は三千年以上の時を生き続けている世界最古の魔女だぞ。人類と同等の精神構造をしていると思ったのか？」

「随分とメルヘンチックな事を言うのね」

明らかに信じていない顔をしている御坂は、アクゼリュスを可哀想な子を見るような目で見ていた。

「くっくっく、学園都市だから穏便な言葉を使ったのだが、やはりｗｚｌｋｍｚｏｔｗｅｒｍと言った……」

アクゼリュスの声に奇妙なノイズがのる。

その言葉だけ聞こえ方がおかしく、まるで乱反射しきった後にブレが入ったかのように聞こえた。

だが、アクゼリュス自身が意図的に出したわけではなく、怪訝そうな表情をして喉に手を当てていた。

「……ふん、やはり表現は出来なかったか」

つまらなさそうに呟くアクゼリュスだが、音を聞いた御坂たちはひどく混乱していた。

人間には発音不能な名称を、無理矢理表現しようとして失敗したよ

うな感じだった。
音の聞こえ方や、音の流れる方向すら狂っていた。

「まぁいい。お前たちは一つ勘違いをしている」

「勘違い？」

「お前たちの感情は、人が人にぶつける感情であろう。しかし私にぶつけるのはお門違いだ」

「？？？」

「分からぬか？　『この世界』における生物の頂点は人類だ。だが位相が違えば、人類より更に上位の存在がいるという事だ」

「……何よそれ」

当初抱いていた怒りは鳴りを潜め、御坂たちはただ困惑する一方であった。
しかし理性で理解しなくても本能は違った。
彼女は人とは何かが違うと、人という枠からズレた存在だという事が。

「科学世界の貴様たちには理解が難しいか」

どこか達観したような笑みを浮かべたアクゼリュスは御坂たちを見ながらそういった。
馬鹿にした様子も、見下したような様子もない。
ただ彼女が纏う雰囲気は、何もかもが人と一線を画す存在であると如実に語っていた。

「オートクレールとフラガラッハは神獣だ……神の末席に連なる存在。お前たちは不思議に思わないか？」

教師が生徒に教えるかのように一つ一つ丁寧に言葉を紡ぐアクゼリュス。

「何故、人如きに神を従える事が出来るのか、と」

その言葉を聞いて御坂はある事に気付く。

慌ててアクゼリュスの方を見ると、彼女は察しのついた御坂を楽しそうな表情で見ていた。

「……あんた、まさか……」

科学世界に生きる御坂でも宗教などの知識は有している。

普段は馬鹿馬鹿しいと断じて切り捨てている知識が、ここに来て初めて活用される事となった。

「少々喋り過ぎたな。お前たちはこれより元の場所に戻る。ああ、心配するな。ここでの記憶は全部なくなる。紗月も私に関する記憶は消えるから安心しろ」

「精神攻撃！」

瞬間、御坂と黒子は思わず身構える。

だがアクゼリュスは愉快そうな笑みを浮かべたまま言った。

「構える必要はない。どうあろうと『結果』は変わらん」

アクゼリュスはただ静かに言った。そう、彼女はただ静かに呟いただけである。
なのにその声の後、御坂の後ろからゴトンという鈍い音が聞こえた。

「？」

音が気になって思わず御坂は振り返る。
そこには御坂以外の全員が倒れていた。
すぐに起き上がる様子もなく、完全に意識を奪われている事がうかがい知れた。

「く、黒子！　固法さん!?　初春さん!?　皆！　どうしたの！？」

慌てて近寄り肩をゆするが反応は全くなかった。
秒もたたず、一瞬にして六人の意識は刈り取られた。
原因不明の恐ろしい攻撃に、御坂は冷や汗をかきつつアクゼリュスを見た。

「安心しろ、別に傷つけてはいない。ただ喚かれると面倒だから意識を刈り取らせて貰っただけだ」

「意識を刈り取っただけ……ですって……」

「そうだ。お前以外の全員が意識をなくすという『結果』が現出しただけの事……」

ピシリという硝子が割れるような音が聞こえる。
音の方を見ると、地面がまるで地割れするかのようにあちこちひび割れていた。

「魔術世界の人間は私の力を『説明できない力』と言っているが。何、案外簡単な話なのだよ」

薄く笑いながらアクゼリュスは一人語る。

力に絶対の自信があるというより、その力すらたかが知れた力と言いたげであった。

「単に事象の『結果』のみを現出させているに過ぎないだけさ」

「な！？　そんな物理法則も何も無視した力なんて！？」

万物にあまねく存在する理を一切無視し、その事象の「結果」のみを出現させる力。

余りにも異質な力であり、人間には絶対不可能な力だという事は魔術を知らない御坂ですら理解できた。

「だから言っただろう？　神獣を従える存在が、ただの人間だと思ったのか？　と」

ビシリと大きな音と同時に地面が砕け散る。

足場を失った御坂たちは、そのまま重力に従って下へと落下していった。

（どうして地面の下が暗闇なの！？　本当にこいつは……！？）

落下していく感覚を味わいながら、御坂は黒子たちと同じように突然意識を刈り取られた。

御坂たちを飲み込んだ後。
地面はビデオの巻き戻しのように、割れた部分が元通りになっていく。

「物語は終わった。私の出番はこれで終わりのようだな」

『全てに終わりはあるものです』

「ああ、そうだな。だが、一つだけ終わらないモノがある」

オートクレールの言葉にアクゼリュスは愉快そうな笑みを浮かべて言った。

「私の終わり。私が死ぬ時とはいつなのだろうな」

『……』

その問いにオートクレールは答えることが出来なかった。
アクゼリュスの死、それが訪れる時とはいつの事なのだろうか。
神に連なる存在のオートクレールですら、それは全く予想がつかなかった。

「ふふふ、まぁよい。アリシア、お前も帰って良いぞ。私はこれから就寝にはいる」

「はい」

アクゼリュスに一礼すると、アリシアの姿はノイズの音と共に虚空に消えた。
それを見届けると、アクゼリュスはそのまま部屋を後にする。
残されたのは後片付けを命じられたオートクレールとフラガラッハのみである。

『アクゼリュス様の死……か。我らすら屈服させる御方の終わりなど本当に来るのだろうか？』

『んー、その時はそん時じゃね？　今から先の事なんて考えてもつまらんだろう』

オートクレールの言葉にフラガラッハはつまらなさそうに答える。

『ふん、貴様は気楽でいいな』

『逆に言うとお前は考えすぎなんだよ。あの御方が死ぬ事なんて今から考えてもどうしようもないだろ』

『……仮にだ。あの御方が死なれた時、貴様は一体どうするつもりだ』

『んー』

オートクレールの問いにフラガラッハは少しだけ考える。
だが、余り考えるのが得意ではないのかすぐに考えることを放棄した。

『俺はあの御方に出会うまで楽しいという事すら知らなかった。た

だ、飢えた獣のように喰らい、全てを破壊するだけだった』

『手の付けられない存在だったな。貴様は』

『ああ、余りの傍若無人っぷりに呆れてお前が俺の前から消えるぐらいな』

懐かしい過去を楽しむかのように、フラガラッハは口を歪ませながら言った。

『そんな時さ、あの御方が俺の前に現れたのは』

『たまたま私もいたがな。今思えばあれは運命だったのだろう。神といえど運命に逆らう事は出来ん』

『……そうだな。だからよぉ、あの御方が死ぬ時は、たぶん俺も一緒に死んでるんじゃないかなと思う』

『そうか』

アクゼリュスがいた場所へオートクレールは視線を向ける。

心の中で「同じ考えだな」と呟きながら。

物語の終わり

第五学区の第三資源再生処理施設に戻ってきたアリシアは、少しだけため息を吐く。
時刻は二十三時。
あれだけの戦闘と会話の応酬をしていたのに、この世界ではたった一時間しか経過していなかった。
まるでアクゼリュスが住む世界だけ、時間の流れが変わっているかのようである。

（契約者様が住まう世界だ。この世界の常識が通じるとは思えないが……やはり慣れる事は不可能か）

コキコキと肩を鳴らしながらアリシアは辺りに視線を向ける。
そこには御坂たちが地面に倒れ伏していた。

「ふん、手間のかかる小娘たちだ」

頭をかきながらアリシアは思った。
アクゼリュスに敵対しながら全員無事だった事は奇跡だと。
下手をすれば学園都市が火の海になってもおかしくないはずなのに。

「さぁて、こいつらを運んだなら終わりだな……って待てよ。今からでも間にあうのではないか？」

ポケットから携帯電話を出すとすぐさまある人物に電話をかける。
登録件数は一件、その人物との会話の為だけに用意した専用の携帯電話である。

「はっはっは、姉上の事だ。きっと大丈夫さ！」

ニ、三回のコールの後、相手の携帯に電話が繋がった。
しかしそこから聞こえた声はアリシアが望む人物の声ではなかった。

『あ、あの……上条……です？』

その瞬間アリシアはまるで石膏で固められたかのように固まった。
聞き覚えのある声、最近は突然現れては優菜にベタベタとひっつく人物。

「……風斬殿。何故に貴様が姉上の携帯電話を取っておる」

『え、えーっと。今日ね、街を歩いていたら優菜さんに誘われてね。それで今は優菜さんお風呂なの。で、電話の着信があったんだけど……その、アリシアちゃんだからいいかなって』

電話の向こうから風斬がしどろもどろになりながら説明する。
しかしアリシアは全く聞いていなかった。

「ふ、ふふふ」

『？』

「姉上はなぁ……モテるんだよ。それはもう聖カトリーヌ女学院時代からなぁ。弾丸小娘が『無垢なる魅了（イノセントチャーム）』とか揶揄するぐらいになぁ」

『あ、あの？』

「しかし、しかしだなぁ。新参者の風斬殿に一言言っておく……」

『ア、アリシアちゃん？』

「姉上の妹は妾だぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！！」

ベキリと携帯電話を握り潰すと、アリシアは全速力で走りだす。
地を踏む蹴りは、恐ろしいまでの爆発エネルギーを帯びていた。
それは倒れていた御坂たちを軽く浮かせ、壁に叩きつけられるほどであった。

「くっははは。待っておれ、風斬殿ぉ！　今すぐ叩き出してくれるわぁぁぁ！！！」

静かな夜の街にアリシアの叫びが木霊する。

その後、どういう結果になったかはアリシアの名誉を守るために割愛させて頂く。
ただ言えるのは、翌日学校に来たアリシアはひどく頭を痛がっていたぐらいである。

アクゼリュスの事件から数日後、窓のないビルに土御門はやってきた。

「魔術を知った能力者に、第三位が追加された。一体どういうつも

りだ、アレイスター」

理由は勿論、魔術の存在を知った能力者についてである。
当麻と優菜はインデックスの護衛役をしている。
沈利は暗部組織『アイテム』のリーダーであり当麻の姉である。
故に当麻や優菜と共に行動する機会が多い。
一方通行は暗部組織『グループ』の一員であり、インデックスと同じ家に住んでいる。
それぞれが魔術師に関わる機会があると、かなり無理矢理で強引だが一応の説明がつけられる。

しかし御坂にはそれが一つもない。
魔術師が身近におらず、また教会世界に関わるような事などない。
アレイスターの意向も何もない。
言ってしまえば、全くの後ろ盾がない状態なのだ。

「何が言いたいのだ？」

「とぼけるな、お前の意向がなければ第三位が魔術を知る事など不可能だ」

「報告は受けている。しかし知ったからといってそれがどうかしたのかね？」

無表情のままアレイスターは土御門に問いかける。
一体何を問題にしているのだ、と言いたい事を土御門は理解する。

「このままじゃ第三位は魔術師に命を狙われると言ってるんだ。そうなれば第三位は魔術師を打ち倒す、それが泥沼の戦争を引き起こす鍵とも知らずにな」

「愚か者の考えだな」

土御門の心配をアレイスターはばっさりと斬り捨てる。

「何？」

「第三位の件は理解している。だが、今は下手に動くより静観する方が余計な波を作らなくていい」

嘲るようにも、つまらないというようにも見える表情をしながらアレイスターは語る。

「科学世界である学園都市で魔術という非現実（オカルト）の話をしてみたまえ。誰も彼女の言葉など信じない。だが彼女の命を狙えば魔術という存在がある事の証明になる」

「……」

「その時に困るのは教会世界である君たちだろう？　だからこそ、私は何もせず放置する。無論、余りにも目に余る行為をすれば別の話になるがな」

あくまで淡々と状況から導き出した答えを口にするアレイスター。

「だからローマ正教のシスターが学園都市に入る事を認めたのか……？」

「断る方が余計な疑念を生み出す。今回の事件もあるから特にな。無論、監視はつけさせてもらう」

「……」

「話はそれだけかね？」

「ああ……」

結局土御門の懸念など、アレイスターにとっては影響が出るような事柄ではなかった。

その事を理解した土御門は、結標にエスコートされて窓のないビルを後にする。

「くそ、一体どういうつもりだ」

窓のないビルを立ち去ってから、土御門はあてもなく街を歩いていた。

深夜のためか寒気がするほど人がいなかった。

そう、誰一人として。

「……」

土御門はおかしいと思った。

学園都市が学生の住む街で、深夜になればほぼ誰もいない事を考慮しても、人一人としてみないのは変だと。

道路には車一つ走らず、歩道には誰一人としていない。

酔っ払った大人が寝ている様子もない。
本当に静かな、ある意味では死んだような街の光景であった。

「驚くことはないわよ。少々人払いをしただけよ」

背後から人の声を聞いた土御門だが、振り返る事は出来なかった。
振り返らなくても、一体誰が土御門には分かっていた。

「……出来れば出会いたくなかったぜよ、夜の魔女」

夜の魔女、アクゼリュスは土御門の言葉を愉快そうな表情で聞いていた。

「何のようだ」

「御坂美琴たちの件」

「……」

「彼女たちが魔術を知った、そう思っているでしょうが少しだけ違うから訂正に来てあげたわ。正確には知っていたけど、その記憶は消えたという『結果』になったわよ」

少しだけ土御門は驚く。
あの夜の魔女が、たかだが学園都市のレベル５一人程度に動いたという事が。
ローマ法王の言葉すら意に介さなかった彼女が、自らの意思でわざわざ土御門に教えに来る。
教えなかったからといって彼女にマイナスが発生するわけでもない。

「素敵な物語を提供してくれたからね。少々サービスをしてあげたくなったのよ」

まるで土御門の考えを読んだかのように、アクゼリュスは楽しそうな声色で言った。

「記憶を消すとか……恐ろしいな。だが、幻想殺しが触れば壊されるんじゃないか？」

「無理よ」

「……何だと？」

アクゼリュスの言葉に土御門は驚き目を見開く。

記憶を消した、そう彼女は言った。だから魔術を使ったと土御門は読んだ。

だから幻想殺しが触れれば、その記憶消去は消されてしまうのではないかとも。

だがアクゼリュスは土御門の言葉を秒も置かず否定した。

「幻想殺しは異能の力を問答無用で破壊する。だが、異能の力より生まれた二次災害は防げない」

「……」

「同様に、既に『結果』として成り立っている事象を破壊する事は不可能だ。まぁこの力は膨大な質量を扱わないといけないから、私とて使うのは少々疲れる。出来れば連発はしたくないものだ」

アクゼリュスの言葉の半分も理解できなかった土御門だが一つだけ分かったことがある。
御坂には魔術に関する記憶がない事が。そして彼女を狙った場合、非があるのは教会世界になる事も。

「気付いたようね。御坂美琴を狙っても意味はない。彼女たちは魔術を全く知らないからな」

「何故、わざわざ記憶を消した」

「彼女たちが知るには時期が早いと判断したまでさ。いずれ御坂美琴は知る事になる、だが今はその時ではないって訳さ」

「……今回は随分と饒舌なんだな。いい情報をタダで教えてくれるなんてな」

「言っただろう？　御坂美琴は素敵な物語を提供してくれたと」

くすくすとアクゼリュスは笑う。

「そうか……」

「そういうことだ。お前に必要な情報は与えた。それをどう扱って戦争を回避するかは……お前次第という訳さ」

アクゼリュスが言い切ると同時に、彼女の気配が突如消失する。
土御門がゆっくりと背後に視線を向けると、そこには誰もいなかった。
まるで最初から誰も存在していなかったかのように。

「ちくしょうが」

忌々しげに土御門は言葉を吐き捨てた後、何も出来ない自分を腹立たしく思いながら帰宅の途についた。

「しっかし、何であんな所で寝てたんだろうね？」

放課後、喫茶店でお茶を飲みながら御坂はポツリと呟く。

「分かりませんの。何かあったような気もしますが……まぁいいのではありませんの？」

御坂の疑問に黒子は適当に答える。

黒子自身も記憶にないが、あまり深く考えても意味はないと思っているようだ。

「そうそう、白井さんみたいに脳天気に……痛い痛い、痛いですよ白井さん！」

笑顔で毒舌を吐いた初春に、黒子は両拳でこめかみをはさんでぐりぐりし始める。

あまりの痛さに初春は悲鳴を上げるが、誰も助けようとはしなかった。

コントを広げる二人を苦笑しながら見る佐天と紗月。

命をかける非日常から、普通の生活をする日常へと彼女たちは帰っ

てきた。
たとえ非日常の記憶がないとしても。

「そうね、それじゃ今日はパーッと遊びましょうか！」

そう言うと御坂は勢い良く席を立つ。

「そうですよ。忘れたものは仕方ありません、パーッと遊びましょう！」

佐天は御坂の言葉に同意すると、同じように勢い良く立つ。

喫茶店を後にした御坂たちは、そのままセブンスミストまでやってきた。
色々と服を見ていると、御坂の耳に見知った声が聞こえた。

「最愛、フレンダ。そろそろ上条さんの体力は限界なのです。だからもう許して！」

「おいおい、当麻。まだあたしとの買い物が終わってないぞ」

「沈利姉ちゃんまで！　フラフラの上条さんに何と言うご無体な言葉！」

「大丈夫だよ、とうま。わたしが膝枕してあげる」

声の方に視線を向けると、そこには当麻たちが歩いていた。
当麻の左腕には最愛が、右腕にはフレンダが。
背中には理后、後ろを沈利と優菜がつきそうように歩いていた。

（うわぁ……）

何となく声をかけるのを躊躇う光景であった。
歩くのに必死なのか、当麻は御坂に気付くことなく向こうへ歩いて行く。
だが一瞬、ほんの一秒程度だが御坂は当麻の顔を見ることができた。

その顔はとても幸せそうな顔であった。
瞬間、御坂は理解する。
彼らの時間に自分が入り込める余地はないと。
だから、ただ呆然と当麻たちが立ち去るのを見るしかなかった。

しかし当麻が立ち去った後、御坂の心に情念の炎が激しく燃え盛る。

（今は家族という存在に勝つ事は出来ない。だけどね、立ち塞がる壁を全て乗り越えた私に諦めるって言葉はない。いつか絶対当麻の心を掴んでみせるんだから！）

「お姉様？」

怪訝そうな黒子の声で御坂はハッとなる。
頭を軽く振ると御坂は笑顔を浮かべて黒子の方に顔を向けた。

「何でもない。ちょっとぼーっとしちゃったわ」

「体調が優れないのなら言ってくださいまし。この黒子が……うへ、うへへへへへ」

途中からよだれでも垂らしそうな顔をして黒子が奇妙な笑い声を上げる。

御坂のまゆがピクピクとしている事にも気付かず。

「あんな所や、こんな所まで、あん、お姉様ったらばしゅっ！」

背中に悪寒を感じた御坂は、気付いたら黒子にゲンコツを振り下ろしていた。

能力を使えば周りの品物がこげたりするという配慮である。

潰れたヒキガエルのように地面で痙攣する黒子を放置して御坂は呟く。

「さって、今日は何を買おうかしら」

垣根の企み

「遂に……遂に舞台は整った！」

目の前に置かれている白いダンボール二つを見下ろしながら垣根は叫ぶ。

隣人の迷惑を考えずに叫ぶ垣根だが、彼に文句を言える人物はそう多くない。

レベル5という肩書きは、とても便利な効果を発揮する。

「後はこれを……」

力みすぎたせいか、思わず垣根の背中から六枚の翼が出現する。

しかし垣根は気にする事なく、両腕に力を込めて更に叫ぶ。

「くっくっく、待っていろよ！」

数日後、優菜と心理定規は垣根の呼び出しに応じて『スクール』のアジトまで来ていた。

だが、肝心の垣根が今だアジトまで来ていなかった。

「呼び出した本人が遅刻とか……どうなんでしょうか」

「さぁ？　帝督だからこの程度で怒ってちゃやってられないわよ」

そういう心理定規は面倒臭いと言いたげな表情をしていた。
彼女は経験から理解していた。
こんな呼び出し方をする垣根は大概碌でも無い事しかやらないと。
普段の心理定規なら無視するのだが、今回は優菜も一緒という事でしぶしぶ了解した。
それが罠とも知らずに。

「おー、すまん。ちょっと遅れた」

指定の時間から十分ほど遅れて垣根はアジトに姿を現した。
明らかに謝罪する気のない顔に、優菜と心理定規は揃ってため息を吐く。

「で、一体何の用よ。言っておくけど私も忙しいのよ」

「学校では話せない事……とは何ですか？」

早く終わらせたいのか二人は揃って垣根に要件を尋ねる。
それを見た垣根は、にんまりと笑みを浮かべながら白いダンボールを机に置く。

「要件は簡単だ。まずはこいつを見てくれ」

「「？？？」」

頭にハテナマークを浮かべつつ、垣根に言われるがままダンボールを開ける。
どうやら指定があったらしく、箱の上に『優菜』と『心理定規』という名前が書かれていた。
不思議に思いながらも、ダンボールを開けた二人は驚きに目を見開

く。

「くっくっく、わざわざイギリスから取り寄せた最高のセレクトだ」

そんな二人を他所に、垣根は自分に酔ったような雰囲気で語る。

「優菜の為に『女神様ゴスメイド』、心理定規の為に『小悪魔ベタメイド』を手に入れてきた！　さぁこれを着てクリスマスをごぶはぁ！！」

最後まで言い切る前に垣根の顔面に二つのダンボールが飛んできた。

勿論、投げたのは優菜と心理定規である。

「心理定規さん、バットみたいなものはありませんかね？」

「あるわよー。こっちは軽めの木材でいかさせて貰うわ」

物騒な発言を繰り広げる二人に、流石の垣根も恐怖を覚えたのかすぐにその場から飛び退く。

ダンボールによって塞がれていた視界が開けると、そこにはにっこりと笑顔で立つ二人がいた。

だが、顔は笑顔でも明らかに目が笑っていなかった。

「ま、待て！　話を聞いてくれ！」

両手を振って二人を止めようとするが、聞こえてないのか二人はゆっくりと垣根に近づく。

「うおぉぉ！！」

心理定規が振り下ろした木材を横に転んで避ける。
余り力がないのか、コンっと軽い音が部屋に響いた。
しかし、しっかりと角で垣根の頭を狙っていた。

「っつー、結構力がいるわねぇ」

反動で手が痺れたのか、心理定規はぷらぷらと手を振りながら愚痴る。
ほっと安堵の息を吐いていたが、まだ危険は去っていなかった。

「はっ！　アブねぇ！！」

第六感が働いたのか素早くその場から後ろに転がる垣根。
かなりアクロバティックな動きだが、本人は気付いていなかった。
後ろに避けた瞬間、垣根がいた場所に何かがめり込んでいた。
物凄い風切音を立てて、その何かは床に激突する。
余りの威力に、床に大きな穴が出来るほどであった。

「惜しいですね。もうちょっとだったのですが……」

「うおおおおい！！　俺を殺す気かぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

床に大穴をあけたモノの正体は優菜が持っていたバット。
ちなみにこのバット、垣根が面白半分で未元物質を混入したせいで愉快なスペックとなっていた。
音速レベルでの物体も打ち飛ばせれる性能を誇るバット。
何故、そのようなモノがアジトに置かれていたのか。
それは垣根が『頑張ればコレは売れるんじゃない？』と思い、アジトに置きっぱなしにしていたのだ。
まさかそれが自分の命を脅かすものになるとは、流石の垣根も思わ

なかったが。

「貴方が変なことを言うから悪いのです」

「変な事とはなんだ！　俺は真剣に考えたんだぞ！？」

優菜の言葉が気に入らなかったのか、垣根は優菜に喰ってかかる。
だが再び優菜がバットを構えると、目に見えない速度でその場から下がる。

「待て、頼むから話を聞いてくれ！」

「……時々ですが、垣根さんがレベル５第二位だと思えなくなるんですよね」

「まー優菜は『スクール』に入って期間が短いからね。付き合いが長くなれば慣れるわよ」

ソファーの後ろから顔だけ覗かせつつこちらを伺っている垣根。
そんな垣根を見て二人は深い溜息を吐いた。

「判りました、お話を伺いましょう」

「……バットで殴らない？」

「殴りません」

「……いきなりダンボール投げない？」

「投げません」

「おっぱい揉ませてくれ」

「……」

優菜が無言でバットを構えると、垣根は慌ててソファーの後ろに隠れる。

そんな垣根の姿を見て、そろそろ本気で付き合いを考えるべきかと心理定規は思っていた。

「悪かった。ちゃんと話すから威嚇しないでくれ」

「最初から素直にそう言えばいいのです」

暗部組織『スクール』のリーダーのはずが、完璧に立場が逆転している垣根と優菜であった。

ここで彼らの関係を簡単に説明しよう。

垣根と優菜は言わずと知れたクラスメイトであり、レベル5同士でもある。

垣根と心理定規は幼馴染。

そして優菜と心理定規だが、どういう訳か初顔合わせ時に意気投合した。

以来二人は垣根が少しだけ嫉妬するぐらい仲良しとなる。

そんな三人は、部屋を整理して再びソファーに座る。何故か垣根だけ正座で。
垣根は真剣な目をして二人を見ながら、何故にゲテモノメイド服を用意したか語る。

「あれはそう、先日の話だ。俺は親友と友人と仲間とある事について白熱していた」

目を瞑りながら語る垣根は、早速二人が呆れ顔をしているのに気付かなかった。
心理定規に至っては額に手を当てながらため息を吐いていた。

「そしてふと身近な女性の話になってな。まぁ友人だけいなかったが……」

「……はぁ」

気のない返事をする心理定規だが、垣根の語りを止める気はないようである。
むしろさっさと終わらせて帰りたいという雰囲気であった。

「そして話してるとふと気になった。お前らの格好ってあんまり変わらないよな」

そう言うと垣根は目を開いて二人に視線を送る。

「別にいいじゃない」

「私が何を着ようと垣根さんには関係ありません」

さっきまでのやり取りのせいか、二人は無情にも垣根の言葉を斬り捨てる。
しかし垣根の指摘通り、心理定規はいつも似たようなドレスを着ている。
優菜も服装自体は少ないので、同じような服ばかりであった。

「特に優菜は何だ。その体のラインを隠すような服装は！　お前は強大な武器があるのに勿体無い！！」

白熱したせいか垣根はソファーから立ち上がり優菜を指さす。
正確には優菜の胸辺りを。
危険を感じたのか、優菜は思わず胸を両手で覆うようにして体を逸らした。

「友人のスカウターでは、お前の武器は８５から９０の間のはずだ！！！」

「……」

「心理定規が逆立ちしても勝てない程の武器なのに！！　どうしてラインを隠すような服装をぉぉぉぉぉ！！！」

熱弁していた垣根だが、最後まで言い切る前に再び優菜のバットが襲いかかってきた。
思わず奇声を上げて避ける垣根だが、体勢が悪かったのかそのまま後ろに転んでしまう。

「いつつ、いきなり……」

垣根は頭を抑え痛みをこらえながら立ち上がろうとした。

だが目の前に立っている二人を見てその動きを止める。
そして体中からブワッと嫌な汗が吹き出し、だらだらと顔から流れ落ちていく。

「ねぇ帝督。言い残す事はある？」

「遺言があるのなら聞きましょう」

黒い笑みを浮かべた優菜と心理定規。
特に心理定規は何だか妙にスワッた目つきであり、垣根は内心焦りまくっていた。

（これは……殺られる！？）

二人の顔が黒い笑みから、あらゆる感情が消えたフラットな表情になっていく。
しかし間近にいる垣根には分かる。二人は物凄い力で獲物を握っているという事が。

「三十六計逃げるに如かず！！」

命の危険を感じた垣根は未元物質を展開して小規模の爆風を引き起こす。
突然の風に二人は思わず構えてしまい、垣根から一瞬気を逸らしてしまう。
その隙に垣根は壁を破壊して外に逃げていった。

「……ふぅ」

心底呆れたのか優菜は深い溜息を吐いてバットを手放す。

心理定規も同様に木材をその辺にほうり投げて、ソファーに座ると軽い伸びをする。

「ん～～～～、馬鹿馬鹿しくなったわ」

「そうですね。垣根さんも逃げましたしこれで解散しましょう」

「じゃあ一緒に服でも見に行かない？」

「いいですね。セブンスミスト辺りでいいでしょうか？」

「いいわよー」

一緒に買い物する事が決まると、二人は荷物を片手にアジトを後にする。

その後、二人は楽しく買い物に出かけた。

色々な服やアクセサリーを見て周り、楽しい一時を過ごしたのである。

だが逆に問題を起こした垣根はホテルの一室で怯えながら引き篭っていた。

勿論、垣根が本気を出せば二人を倒すことなど容易い。

しかしどういう訳か、尻に敷かれてしまう事が多い。

威厳を取り戻したいと思ったが、二人の黒い笑みに敗北し続ける垣根であった。

（あ、そうか。後一人追加すれば俺たちも『アイテム』みたいな事が出来るぞ！？）

暗部組織は仲良しグループではない、と最初に言った人物が真っ先

に仲良しグループを目指している。

（男は却下だ。まずは可愛い子……そうだな、大人しめな子がいい。この際、レベル0でもいい。あーでも結標見たいな変態は勘弁だ。おいおい、ちょっと楽しくなってきたぞ！？）

その事に本人が気付くのはいつだろうか。多分、永遠に来ないだろう。

少なくともホテルで一人、次に入れる女の子（メンバー）を考えている間は。

後方（親馬鹿）のアックア

神の右席。ローマ正教禁断の組織。
ローマ正教の中でも闇の最深部に位置し、十字教社会のピラミッド内には存在しない。
名前を知るに値しないものは、相応しくない者として処断されてしまう。
それほど秘匿された機関である。

そんな組織に所属するウィリアム＝オルウェル。
二つ名を後方のアックアとも言われる彼は、比較的新参の立ち位置である。
数年ほど前に加入したばかりで、ローマ正教の暗部の最深部までは聞かされていない。
しかし強さは折り紙付き。神の右席ではナンバー二に位置するだろう。
そんなアックアには、あまり知られていない事があった。
聖人であり神の右席でもあるアックアには一人の弟子が存在していたのだ。

圧倒的な能力を持つ聖人は単独行動を好む傾向があり、組織に属する聖人は稀である。
その上、弟子を持つという行為など例を見ないだろう。
何故なら聖人とは生まれた時からの才能で決まる。
故にその力を継承しようとしても、同じような聖人でなければ意味はない。
常人なら継承する事など不可能と言えるだろう。
それ故にアックアが教え込んだのも、聖人の力ではなく傭兵の流儀（ハンドイズダーティ）

の方である。
しかし弟子は僅かな期間で傭兵の流儀（ハンドイズダーティ）を完全にモノにしてしまった。
傭兵時代の経験から培ってきた戦闘技術を、こうもあっさりモノにされた事に軽いショックをアックアはうけた。

しかし同時にアックアは弟子を本当の意味で弟子と認めた。
何故なら、傭兵の流儀（ハンドイズダーティ）を完全にモノにしながら弟子は驕り高ぶる事はなかった。
純粋に気高くい続け、その力を己の為ではなく他人を助ける時だけに使用した。

そして別れの時、アックアは弟子にある魔法名を授けた。
しかし魔術を知らない弟子が見知らぬ魔術師に狙われる事を懸念したアックアは魔法名を別の名前にして授ける事とした。
その名は『誓いの名』、そしてその名は『我が力は守るべき人の為だけに行使する』。

勿論、本来の魔法名も存在する。
それは『Ｄｅｆｅｎｄｅｒｅ１０５』。
今もアックアの胸の中にだけ存在する幻の魔法名。
それは例え弟子が科学世界に行こうと捨てる事は出来なかった。

それほどアックアが大事に思っている弟子の姿を見たら誰もが驚くだろう。
何故なら、その弟子は齢が十代後半の女の子だからである。

アックアは聖ピエトロ大聖堂のとある部屋で待機をしていた。
その姿は傍目から見てもそわそわしているのが丸分かりであった。

「なぁ、本当にアックアはどうしたんだ？」

「知らねーよ、降誕祭日まで一週間切った頃からあーだよ」

「普段の寡黙なアックアはどこに行ったんでしょうねー」

そんなアックアを遠巻きに見るフィアンマ、ヴェント、テッラ。

「それよりも俺様はアックアの服にかけられている術式が気になるぞ」

アックアを見ながらフィアンマは呟く。
優菜が送ってきた服一式は本人も意識せずに奇妙な術式を組み上げていた。
しかし奇跡の産物に近い術式なので、本人は疎か誰一人として術式を解析する事は出来なかった。

「現存の魔術で説明できる所と、何の術式かさっぱり分からない部分が混ざっている」

「ひとまずアックアに害があるわけではありませんが、一体どのような効果が出るかわかりませんねー」

アックアに視線を向けつつ唸る三人。
だが三人の思考を遮るかのように、突然慌ただしい足音が聞こえてきた。

すぐに扉が勢い良く開け放たれ、足音を立てていた人物が部屋に入ってくる。

「き、貴様。いきなりアニェーゼ部隊を連れていくとはどういう了見だぁ！？」

部屋に入ってきた人物はビアージオ＝ブゾーニ司教だった。
息を荒らげながらビアージオはアックアに食って掛かる。
しかしアックアは気付いていないのか、やたら頑丈にコートされている写真のようなものを見ていた。

「おい、聞いているのか！？」

イライラの頂点に達しているビアージオは、アックアが手に持っている物を叩く。
それがアックアの手から滑り落ち、地面にコトンと音を立てて落ちた。

瞬間、部屋の温度が零下状態になった感覚をフィアンマたちは感じた。
同時にあたり一面に膨大な殺気が充満する。
常人なら死を覚悟するほどの、悍ましい殺気であった。

ヴェントとテッラは疎か、神の右席のリーダーであるフィアンマすら寒気を覚えるほどであった。

「お、おい……何だこの殺気は」

「どう考えてもアックアから発せられていますねー」

「ブゾーニの馬鹿が……死んだな」

殺気を放つアックアの顔は全ての感情が削り取られたような表情をしていた。
七つの罪の一つである『怒り』など全く感じさせない顔であった。

しかし激昂しているせいかビアージオは全く気付いていない。
ただアニェーゼ部隊を返せとアックアに喚くだけであった。
そして更にやってはいけない事をしてしまう。
一歩前へ歩を進めた時、地面に落ちている写真のようなものを踏んでしまったのだ。

「おいおい。ブゾーニの馬鹿は自殺志願者なのか。普通は気付くだろう」

「七つの罪の一つである『怒り』を出していますねー。信徒としては駄目ですねー」

ピクピクとこめかみに血管を浮かび上がらせているアックアを見ながら、ヴェントとテッラは呑気に言った。
この後、一体どんな事態になるか既に見えているのだろう。

「ビアージオ＝ブゾーニ司教」

「ぬ、なんだ」

アックアの平坦な声を聞いて流石に危険を感じたのか、ビアージオは少しだけ後ろに下がる。
足元に落ちている写真を拾うと、アックアは汚れを手で払う。
ゆっくりとテーブルにそれを置くと、そのままビアージオの両肩に

手を添える。

「最近、私はマッサージに凝っているのである」

「な、何を……！？」

訝しげに思っていたビアージオだが、少ししてどこから何かが砕けるような音を耳にする。

おそるおそる視線を下げると、それは自分の両肩がアックアによって破壊された時の音だった。

「ぐ、ぐおおおおおおあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

激痛の余りにビアージオは大声で叫ぶ。

しかし地面をのたうちまわる事などはなかった。

何故なら、アックアがビアージオの両肩を握ったままだからだ。

「いけないのである。これはこりすぎなのである。マッサージ棒でほぐしてあげよう」

「がぁぁぁぁ！！　ふ、ふざけ……！？」

アックアが両手を離しながらそう呟く。

痛みに耐えながらビアージオは叫ぶが、目の前の光景を見て絶句した。

「安心するのである。私のマッサージ棒は結構キクのである」

そこには五メートルを超す巨大なメイスを肩に担いでいたアックアが立っていた。

逃げ出そうとしたビアージオの襟をアックアは片手で掴み上げると、そのままビアージオをズルズルと引きずって行った。

「ま、待て！　お、落ち着いてだな！？」

必死にアックアを止めようと躍起になるビアージオだが、残念ながらアックアの耳には届いていなかった。

「遠慮は無用である。ビアージオ＝ブゾーニ司教にはとっておきのコースで歓迎するのである」

「た、助けっ……！？」

今更ながらアックアの異変に気付いたビアージオが、周りに助けを求めるが既に手遅れであった。
無常にも扉は閉められ、アックアとビアージオは二人揃って部屋を出ていく。

「……」

呆気に取られたフィアンマたち。
だがすぐに理解が追いつくと、テーブルの前に集まる。

「これが地面に落ちてからアックアの態度は変わったな」

「豹変と言ってもいいですねー」

「つまりこれを見れば、アックアが最近変な理由が分かるってか」

三人は揃ってテーブルの上に置かれたモノに視線を落とす。

それは専用のケースに収められた一枚の写真であった。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

扉の向こうでビアージオの悲鳴が聞こえるが、三人は全く意に介さず写真を見る。

写真は裏面を向いていたので、何が写っているかは分からない。

それが三人の好奇心を駆り立てた。

「よし、俺様が直々に見てやろう」

そう言ってフィアンマは写真を裏返す。

少しだけドキドキしたのは秘密なフィアンマであった。

「……なんだこりゃ？」

「アックアと……東洋人ですねー」

「小娘と写っている写真が地面に落ちただけで、アレだけ殺気をまき散らしたのか？」

その写真とは、優菜とアックアが写っている写真であった。

アックアはどちらかと言えば居心地が悪い感じで、反対に優菜はとても朗らかな笑顔を浮かべていた。

何の変哲もないただの写真、それが三人が抱いた感想である。

「東洋人……あぁ、そう言えば少し前にアックアへ手紙と荷物が届けられましたねー」

「手紙と荷物？」

「はい、確か日本人で……名前はカミジョーユーナとか言いましたねー」

元々、荷物と手紙をアックアに届けたのはテッラである。

少し前のことを思い出したテッラは、フィアンマとヴェントにそう言った。

「一体何者なんだろうな。アックアがあそこまで豹変するなんて……」

「俺様は女と予想する」

身も蓋もない発言をフィアンマはする。

ヴェントとテッラは幾分不思議そうな顔をしたが、すぐに理解が追いつく。

アックアは神の右席に入るまであちこち動乱を収めるための活動をしていた。

女の一人や二人出来ていてもおかしくない。

その事を理解した二人は、フィアンマの言葉に同意する。

「しかし随分と若いな。実はアックアってロリコンなのか？」

「いや、東洋人って年齢の割に幼いからな。俺様は案外年を取っていると見ている」

「それ以前にこの娘はローマ正教徒なのでしょうかねー」

「そうだろう。そうでなければアックアと出会う機会なぞゼロに等

しいな」

「いや、アックアの事だから傭兵時代の恋人って路線もあるぞ」

各自が好き勝手にアックアと優菜の関係を言い合う。
そのせいか三人は気付いていなかった。
ビアージオの悲鳴が止まったという事に。

「……何をしているのである」

突然聞こえたアックアの言葉に三人はビクッとする。
後ろを振り返ると、そこには先ほどと変わらないアックアが立っていた。
返り血の一つもなく。

「ビアージオ＝ブゾーニ司教はご満悦だったのである」

ニゲルナヨと言外に宣告したアックアを見て、三人は背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

「（おい！　なんだ、このアックアは！　この俺様が寒気とかありえないぞ！）」

「（し、知るかよ！　感情を表に出すアックアなんて初めてだぞ！）」

「（優先する。――――アックアの怒りを下位に、逃亡できる事を上位に）」

「（おい、テッラ！　何ちゃっかり逃げようとしてるんだ！）」

「（今のアックアに私が勝てるはずがありませんからねー）」

ぎゃあぎゃあと言い合う三人を無視して、アックアは無表情のまま手を差し出す。

三人は何の意味があるか分からなかったが、アックアの一言によって理解する。

「写真」

アックアが求めているのはフィアンマが持っている写真。

その事に気付いたフィアンマは、すぐさまアックアに写真を返す。

受け取ったアックアは、それを大事そうに懐にしまう。

「な、なぁ。一応確認なんだが、その娘とアックアの関係は何だ？」

部屋から出ていこうとするアックアの背中に、フィアンマは質問をぶつける。

足を止めたアックアは、少しだけ思案するかのように視線を天井に向ける。

「……彼女は私の最初で最後の弟子である」

その言葉と同時にアックアは部屋を後にする。

弟子という単語が理解できなかった三人は、暫く呆けた顔をしながら扉を見ていた。

ルチア冒険記

学園都市のゲートに黒い修道服に身を包んだ二人の女性が立っていた。

「これが学園都市ですか。なんとも廃頽的な場所ですね」

「見た事もないようなのがいっぱい見えます……」

片方の背の高いシスターは、僅かばかりの見下した感じで。
もう片方の背の低いシスターは、物珍しそうに辺りをキョロキョロと見ていた。

「シスター・アンジェレネ。神の教えを知らぬ者たちを見てはいけません。貴方も心が廃頽的になりますよ」

「シ、シスター・ルチア、分かりましたからもう少し声のトーンを下げてくださいっ……」

ルチアとアンジェレネ、ローマ正教のシスター。

周りを全く気にせず罵るルチアに、アンジェレネは半分涙目で抗議の声を上げる。
だがルチアは全く意に介さず、むしろ堂々と立っていた。

「こんな場所に聖母様がいらっしゃると思うとゾッとします。早くあの御方に心変わりをしていただきたいものです」

さんざん学園都市をこき下ろす一方であった。

そんなルチアを奇妙に思ったのか通行人は彼女たちに視線を送る。
学園都市は敵地のど真ん中、きっと警戒されているのだろうとルチアは思った。
実際は単にシスター服が珍しいので視線を送っているだけだが。

「行きますよ、シスター・アンジェレネ。聖母様に『コレ』をお渡しせねばならぬのですから」

「は、はいー」

ルチアは片手に持っている荷物を持ち直すと、アンジェレネに声をかけながら歩き出す。
慌ててアンジェレネもルチアの後を追う。

しかし彼女たちは忘れていた。
アポ無しで来たから、どうやったら優菜に会えるのだという事に。

ルチアとアンジェレネが無謀にも歩きまわっている頃、優菜はというと。

「クリスマスデート？」

「そ、クリスマスデートしようぜ」

垣根と一緒に街を歩いていた。

今、二人は学校からの帰り。
普段の優菜はアリシアと共に帰っている。
だが運悪くアリシアは小萌から呼び出しを食らってしまった。
最近夜にあちこちで目撃情報が寄せられた為に、ひとまず軽い事情聴取を行うそうだ。
よって垣根が変わりにと言って、強引についてきたのだ。

「はい、お断りします」

少しの思案もせず、優菜は問答無用で垣根の提案を蹴る。

「えー、冷たいなぁ。いいじゃねぇか、別に」

垣根もその答えを予想していたのか、軽く肩をすくめながら言った。

「その台詞、以前に心理定規さんにも言っていた気がしますが？」

「んー、まぁあいつには一応って訳だ。毎年のように断られているが、最後にはいつもクリスマスデートしてるぜ？」

「可愛い彼女ではありませんか。そんな彼女のためにも、私は参加できませんね」

「ま、今回のはデートっつーより『スクール』でのパーティみたいなものと思ってくれ」

その言葉に優菜はピクリと反応する。
暗部組織『スクール』に関しては、殆ど何もしていない優菜である。
たまに姿を現しても事務処理関係を手伝うのみ。
だが不思議と垣根は何も言わなかった。

『お前がアレイスターから何か仕事を請け負わされているってのは聞いている。その内容は知らねぇが、それなら仕方ないだろう？』

一度だけ確認したとき、垣根は肩をすくめながらそう言った。

何を考えて優菜にそう言ったかは分からない。

だが、何となく『スクール』の仕事をさせたくない匂いを漂わせていた。

「……そう言われると断りにくいですね。でも、他の方にも誘われているのですよね」

「お前はモテるからな」

意地の悪い笑みを浮かべながら垣根は言った。

優菜が同姓からかなりモテる事は垣根も知っている。

「私をずっとナンパする物好きなんて、垣根さんぐらいしか知りませんが？」

「ナンパねぇ……お前って男から見れば高嶺の花過ぎて、却って声をかけにくい奴に見えるからな」

「何ですか、それは……」

垣根の言葉に呆れる優菜。

美少女の部類に入る優菜だが、その上にお嬢様な雰囲気を漂わせている。

余りに高嶺の花過ぎて、男たちは自分が優菜と釣り合うはずがない

と思い至ってしまう。
結果、優菜はナンパされるという経験が少なかったりする。
それを乗り越えた人物が少しいたが、あえなく撃沈は当然の結果であった。

「まー、他の連中を混ぜてパーティってのもいいぜ？　クリスマスなんだし、こうパーッと騒ぎたいんだよ」

「つまり『スクール』でのパーティにかこつけて、騒ぎたいだけって事ですか」

「ぶっちゃけるとそうなる。ま、クリスマスを一人で過ごしたくない、男のワガママって思ってくれてもいい」

教科書なんて入ってないカバンを持ち直しながら垣根は言う。

垣根はレベル5だから、パーティを開くのですら何か思惑があると考えられるかもしれない。
だが、逆に優菜はレベル0扱いで通されている。ならば、そこまで強く見られる事もない。
垣根を誘う理由も、学友だからという理由が少し強引だが通る。
結論に至れば後は単純だった。

「……そう考えると、逆に私が主催者をすれば問題がないかもしれませんね」

手を顎に当てながら優菜は呟く。
その方が対外的にも影響度は少ないと優菜は考えた。

「そっちでもいいな。場所借りとかは俺がやるし」

「垣根さんが主催者の場合、多分ですが誰も参加しませんしね」

「ひっどいなぁー。俺は女には優しいぜ？」

軽く笑いながら優菜の言葉に突っ込む垣根。
反対に、優菜は少しだけ目を細めながら垣根を見ていた。
その顔は、どの口がそれを言うの、と言いたげであった。

「どうせならクラスメイトの皆さんでパーティというのも良いかも知れません」

「えー、アレらを誘うのかよ」

「人数が多いほうが楽しいと思いますよ。それに、クラスメイトの皆さんなら気軽に参加していただけると思いますから」

「殆ど男しか来ない気がするがなぁ……」

垣根はそう呟きながら考える。
優菜がやるといえば、それなりの人数は参加するだろう。
だが、殆ど男しか参加しないと思っている。
特に青髪ピアスなんて喜んで参加するだろうと垣根は踏んでいた。

「ああ……それと二十五日、私はイタリアにいますのでパーティは二十四日しか出来ません」

「イタリア？　何しに行くんだ？」

「恩師と友人へ会いに。既に学園都市総括理事長様の許可も頂いて

います」

「アレイスターもよく許可したなぁ」

垣根の言葉に優菜は苦笑しながら同意した。
半分は期待していなかったが、アレイスターは思いの外すんなりと優菜に外出許可を出した。
視線を空に移しながら、優菜はその時の会話を思い出す。

『ふむ、二十五日にイタリアへ行きたいと？』

『そうです。そのためには外出許可が必要ですので、是非許可を頂きたいと思い参りました』

『私へ直接言わなくても、きちんと申請すればよいのではないかね？』

『申請して不許可を貰うと困るから、こうしてわざわざ出向いたわけです』

『一理あるな』

『場所はイタリアのヴァチカン。これを聞いて総括理事長様の判断が欲しいと思ったまでです』

『一応尋ねるが、ヴァチカンがどういう場所か知ってて行くのかね？』

『そうですね。ローマ正教の総本山と言う事と、ローマ正教お抱えの魔術師が沢山いるという事ぐらいは知っています』

『それを知ってて行くのかね？』

『ええ、恩師と友人へ会いに行きます』

『ふむ……まぁよいだろう。イタリアへの外出を許可する』

『……少々驚いています。こうもすんなりと許可されると、何か裏があるのではと疑ってしまいます』

『君は特にワガママを言わずに私のために働いてくれている。有能な部下のワガママぐらい、少しは聞き入れるのも上司としては大切な態度ではないかね？』

『世間一般ではそうかも知れませんが、総括理事長様の口から出ると、少々違和感を感じます』

『私とてそのような考えもあるという事だ。それに禁書目録の招集話もきている。どちらにしろ、君が外出する必要はあるという訳だ』

『インデックスさんの招集話？』

『二十五日に禁書目録をイギリスへ呼び戻す話だ。正式にはまだだが、ほぼ確定と言っていいだろう』

『そうなると当麻もイギリスへ行く必要がありますね』

『その通りだ。幻想殺しもイギリスへ行く必要がある。今回は魔術

師との対決も何もない。安心してイギリスを堪能したまえと幻想殺しに伝えてくれ』

『わかりました。当麻には私から伝えておきます。インデックスさんの方にもお伝えする必要がありますか？』

『そちらはイギリス清教から連絡が送られる。私たちが関与する必要はない』

『了解しました。では、外出の件宜しくお願い致します』

『確認しておくが、説得が必要なのは私が最後ではないのを理解しているかね』

『はい？』

『まぁよい、君もそのうち気付くだろう。一番説得に苦労する人物が誰かを』

今思いかえしても優菜には不思議であった。

ローマ正教、学園都市と最も仲が悪い教会世界の組織。

その総本山に行くと言って、アレイスターがすんなりと許可を下ろしたことに。

そして最後の言葉に。

「……あら？」

ふと前を見ると見知った顔が二人いた。

優菜の視線に気付くと、垣根もそちらの方に視線を向ける。

「ん？　なんだありゃあ。コスプレでもしてんのか？」

「そうではありません。どうやら垣根さんとは、この場でお別れのようですね」

何やら二人で言い合いをしている二人は、こちらの様子に気付くことはない。

優菜は少しだけ苦笑しながら、二人のもとへ走りだした。

「シ、シスター・ルチア。あ、足が棒のようです。休憩したいです……」

「シスター・アンジェレネ。そんな軟弱な事ではいけません。これも神の試練、私たちは乗り越えなければなりません」

「も、もうヘロヘロです～」

その言葉通りアンジェレネはその場に座り込んでしまった。
しかしルチアは容赦しなかった。

「ほら、立ちなさい。シスター・アンジェレネ」

そう言ってアンジェレネを掴みあげようとしたルチア。
そんなルチアの肩に、誰かの手が置かれた。

「本当に辛そうですよ？　少々休憩させた方がいいのではないですか？」

「異教徒が私の肩にふれぶふぉぁ！」

激昂し叫ぶルチアだが、最後まで言い切る前にその人物の顔を見て吹いてしまった。
肩に手を置いた人物は彼女たちが探していた優菜であった。

ルチアの行動に少し首を傾げた優菜だが、その顔は笑みを浮かべてたままだった。

「学園都市へようこそ。一体何の目的で来られたのですか？」

「せ、せせせせ聖母様！　こ、これは大変失礼を！！」

そういうや否や、ルチアは姿勢を正すと頭を下げる。

「そう畏まらなくてもいいですよ。私とルチアさんは友達でしょう？」

少し困ったような顔をしながら優菜はルチアに言う。
しかしそれはルチアを余計畏まらせるだけであった。

「勿体無きお言葉、聖母様のお心遣いに感謝いたします」

優菜としてはここまで畏まられると背中にむず痒いものがある。
しかしルチアは止める気がないのか、ずっと畏まった態度のままであった。

「せ、聖母様。足がパンパンです、休憩できる場所を教えてください～～」

今まで放置されていたアンジェレネが泣き言を口にする。

「シスター・アンジェレネ。聖母様の前でみっともない格好をしないように」

だがルチアは無常にもアンジェレネに立ち上がる事を要求する。
流石に可哀想だなと思った優菜は、ルチアにある提案を持ちかける。

「ひとまずその辺りの店でよいでしょうか。何しに学園都市へ来られたのか聞きたいです」

「はい、分かりました」

優菜の言葉に、一瞬の迷いもなくルチアは賛同した。
余りの即答ぶりに少しだけ顔がひきつった優菜であった。

やっと休憩できると思ったアンジェレネは、最後の力を振り絞って立ち上がる。
やがて彼女たちは近くの喫茶店に入った。
時間的に学生が多い時間だが、運良く席に座る事が出来た。
そしてルチアの口から、彼女たちが学園都市に来た理由が語られる。

「修道服のサイズを調べに来た？」

「はい。聖母様もご存知だと思われますが、ヴァチカンはローマ正教の総本山です。様々なシスターや司教様、枢機卿様がいらっしゃる為に普通の服では却って目立ってしまいます」

「そこで修道服なら目立たないだろうという判断です……むぐむぐ……」

「シスター・アンジェレネ。物を食べながら喋ってはいけません。というか、貴方は甘いものへの執着を断てとあれほど……」

まるで出来の悪い妹を叱りつける姉のような雰囲気でルチアはアンジェレネを叱る。
はたから見れば仲の良い姉妹に見えるだろう。

「そこで修道服のサイズを調べに来た、という訳ですね。なるほど、了解しました」

「サンプルとして修道服は持ってきています。サイズ的に合うとは思われますが、細かい点で調整が必要かもしれません。その辺りの調整として、私たちはヴァチカンよりやってまいりました」

「ごめんなさいね、わざわざ遠いところから来てくださって」

そう言って優菜はルチアとアンジェレネに頭をさげる。

ルチアは両手をぶんぶんと振りながら、慌てて優菜の頭を上げさせようとした。

「いえ、とんでもありません！　聖母様が気に病む必要は全くありません。私たちも好きでやっている事ですから」

「本当に凄かったんですよ。部隊の全員が手を上げてそれは一種のお祭り騒ぎダギュッ！！」

何故か自信満々に語るアンジェレネの頭を、隣にいるルチアが上から押さえつけた。

「と、とりあえずまずは着用して頂けないでしょうか。聖職服に使える色は、白、赤、黒、緑、紫の五色と装飾用の金糸のみと決められております。聖母様には白の修道服を基本に金糸で装飾された物をお持ちしました」

「あら、何か豪華な感じがしますね。私なんかには勿体無い気がしますが……」

「いえいえ、部隊の皆も期待……こほんっ、部隊の皆も揃って声を上げたのです。聖母様には純白の修道服が似合うだろうと」

顔を真っ赤にしながらルチアは力説した。
実際、修道服を着てもらうというのも、彼女たちが勝手に考えて行動した結果だったりする。
そんな事を知らない優菜は、少し困ったような顔をしながらルチアを見ていた。

「私に似合うかしら。でも、皆さんの好意を無駄に出来ませんね」

そう言うと優菜は席をたった。
既にパフェを食べ終えて満足気のアンジェレネ、そしてうっすらと顔が赤いルチアは、優菜の行動に疑問を持った。

「着替えたり、寸法を計ったりするのですね。でしたら、そういう店に行ったほうが早いかも知れません」

「はい、分かりました。それではお手数ですが、ご協力お願いします」

ルチアも優菜に続いて立ち上がる。
残されたアンジェレネだけが、少しだけ不満そうな顔をするが、ルチアに睨まれてすぐに立ち上がる。

「では、行きましょうか」

伝票を片手に、優菜は二人に向かってそういった。

優菜が向かった店は学園都市の中でも少々特殊な部類に入る店であった。
様々なサービスを取り扱う店のために店舗名はないが、利用者からは『派遣屋』という名称で呼ばれていた。

傍から見れば企業ビルにしか見えるその店は、『派遣屋』があると知らなければ、知らない内に素通りしてしまう。
ある意味で灰色のような店であった。

そして店へは簡単に入ることが出来ない。
まず店の会員登録をしなくてはいけないのだ。
しかし会員になるにはある程度の地位と、店側の審査をクリアする必要がある。

見事会員になった人物は、様々なサービスを受けられる事となる。
専用の担当者が割り当てられ、店が持つ専用のスタッフを自由に扱う事が出来る。
中には非合法の専門スタッフもいる。しかしそれが一定のお子様に人気らしい。
何故なら『火遊び』をする時に、専門家が入ればそれなりに楽しめるからという理由だ。
第三学区にある個室サロンのような部屋もあり、監視の目が完全に無い場所の一つとして数えられている。
違う点と言えば、会員でなければ利用できないという点であろう。

勿論、会員の紹介であれば、非会員の人物でも入店を許される。

「裁縫に詳しいスタッフを。出来れば、ローマ正教の修道服に関する知識が高い者をお願いします」

「かしこまりました。すぐに用意致しますので、こちらの席でお待ちください」

硬いスーツ姿の女性が優菜に一礼すると、店の奥へスタッフを呼びに行った。

学園都市で宗教関係の服に関する知識などないと思われがちである。しかし、この店のスタッフは外部の、それこそ科学世界とは違う教会世界の知識を持つ者もいる。

誰がいつ何を要求するか分からない。答えられないというのはプロとして恥。

そのような教育方針のためか、噂ではオカルト関係のスタッフもいるとか。

勿論、教会世界にある魔術ではなく、世間一般的なオカルトの方だが。

十分もかからず先ほど店の奥に消えた人物が戻ってきた。

「お待たせしました。五番部屋にてスタッフを待機させております。お手数ですが、移動の方をお願い致します」

丁寧なお辞儀をしながらその人物は言った。

優菜はそれを確認すると、店に入ってからずっと固まっているルチアとアンジェレネに声をかける。

「それでは行きましょうか」

「はい」

「は、はい！」

優菜に連れ添われてルチアとアンジェレネは五番部屋を目指す。
二人が緊張している理由を、初めて学園都市に来たからと優菜は思っていた。
しかし実際は違う。
二人は学園都市に来たぐらいで緊張するという事などない。
緊張というより待ち遠しかった時間が遂にやってきたという方が正しいかも知れない。

「（シスター・アンジェレネ。いよいよ聖母様にこれを着ていただけます）」

「（ドキドキです。シスター・ルチア）」

「着きましたよ」

こそこそと話していたルチアとアンジェレネだが、優菜の声でハッとなる。
どうやら話しているうちに目的の部屋に着いたようである。

三人は揃って五番部屋に入る。
そこには待機していたスタッフの女性と機材があった。
それ以外にソファーなどの家具や、冷蔵庫といったキッチン機材まで備えられていた。
勿論、会員であれば冷蔵庫の中にある物は基本的に飲み食い自由である。

「お待ちしておりました、優菜様。本日はローマ正教の修道服とお聞きしましたが、お間違いはないでしょうか」

「ええ、間違いありません。それでは早速着替えましょう」

「かしこまりました。では……」

「ちょっと待ってください」

優菜が修道服に着替えようと準備をし始めた時、ルチアは二人を遮るかのように声を発する。

ルチアの声に反応した二人は、そのまま視線をルチアに向ける。

「聖母様の修道服は準備しております。この服を聖母様に着ていただいた後が貴方の出番です」

「……だ、そうです。申し訳ないですが少しだけ席を外して頂けますか？」

困ったような笑みを浮かべる優菜だが、反対にスタッフは先ほどと変わらぬ表情で言った。

「構いません。修道服は宗派によっては大事な意味を持っています。おいそれと異教徒が触ってはいけない事も。私が必要になりましたら、お呼びください。では」

優菜に一礼をし、更にはルチアとアンジェレネに一礼をした後スタッフは部屋を出ていった。

扉の閉まる音を聞いた後、ルチアは手に持っていた袋からひとつの

箱を取り出す。

「これが聖母様に着ていただきたい修道服です」

箱を恭しくテーブルに置くと、ゆっくりと箱を開けるルチア。
何か仰々しいと優菜は思ったがルチアは至って真面目であった。

「では聖母様。お召し物を脱いで、こちらにお着替えください」

衣服、という事で既に着替え用のカーテンが準備されていた。
優菜は修道服を片手にその中へ入っていく。
ルチアとアンジェレネからはシルエットしか見えない。
しかし今か今かと心待ちにしていた。

そして数分後、カーテンが再び開けられる。
着替え終わった優菜の姿を見て、ルチアとアンジェレネは声を失った。

小さな謎

ルチアとアンジェレネは声を失った。
否、声を発するという事すら忘れ、ただ目の前の光景に見入っていた。

「どうでしょうか？」

優菜が修道服のことを尋ねていても、二人は全く反応しなかった。
まるで魂が抜き取られたかのように。

「よく見ると腕の長さとかがあっていませんね」

そう言って両手を広げるようなポーズを取る優菜。
単に袖が長いから調整しようとしただけ。
しかしルチアたちから見れば、聖母が手を広げている姿に見えた。

気付いたらルチアとアンジェレネは膝をついて祈りを捧げていた。
無理矢理押さえつけられて、強制的に祈りを捧げたのではない。
まるでそれが自然と言いたげな、そうするのが当然という気持ちで祈った。

「あ、あのー？」

いきなり祈られて困惑する優菜だが、ルチアとアンジェレネの耳には届いていない。
困ったような顔をしながらこの時間が終わるのを待つ優菜であった。

それから十分近く真剣に祈りを捧げたルチアたち。

二人の顔はとても満足気であり、何かを成し遂げたかのような雰囲気であった。
最も、優菜の方は困ったような顔をしていたが。

（聖母と祭られるのは、とても背中がむず痒くなります）

二人とは十一月の法の書事件で出会ったが、勿論こんな出会いではなかった。
最初は外部協力者（ゲスト）、次はオルソラを助けるために敵同士。
戦いの後、傷ついた彼女たちを助けて今度は一転して聖母扱い。
めまぐるしい扱いの変わり方である。

（アニェーゼさんは何か妹っぽい感じがしますが、ルチアさんは本気で信奉している雰囲気がありますね）

ここにはいないアニェーゼは、優菜を姉として甘えている感じがある。
優菜もそういう娘の扱いは慣れているし、とても好ましいと思っている。
しかしルチアは違う。
どうやらアリシアが『何か』をした後に助けたことで、彼女の中で優菜は特別な人物となってしまった。
その上、あの様な救済を見せたのだから、優菜に対する信奉がルチアの中で出来上がってしまったのは必然である。
一神教だからその辺はどうなんだろう、と思った優菜だがルチアの中で何かが自己解決しているのだろう。
突っ込むと何か嫌な予感がするし、そのまま放置がいいという結論に優菜は至った。

そんな事を考えている優菜の横でルチアとアンジェレネはひそひそ

と話していた。

「（シスター・アンジェレネ！　想像以上です！　私は今、とても幸せです！！）」

「（お、落ち着いてください。シスター・ルチア）」

頬を真っ赤に染めてまくし立てるルチアであった。

そのノリについていけないアンジェレネは、何とかルチアを宥めようと努力する。

最も、無駄な努力に終わったが。

「（科学世界は嫌いですが、この場にカメラがあれば……そうです！）」

突然何か思いついたのか、ルチアは姿勢を正すと恭しく片膝をつく。

「聖母様。私のお願いを聞いて頂けないでしょうか？」

「お願い？　はい、構いませんよ」

「寛容な御心に感謝致します。実は聖母様の御姿を写真に収めたいのですが、生憎と私たちは科学に疎くカメラ等は持ちあわせておりません。ですので、こちらの店にいるスタッフを呼んで頂けないでしょうか？」

「その程度でしたら構いませんよ」

何を言い出すのかと思ったが、記念撮影ぐらいなら構わないと考えた優菜である。

本来なら学園都市側から色々と制約がつく能力者たちだが、優菜はある程度学園都市の規約から外された存在である。
よって、通常の学生よりある程度の自由はえられるのだ。
勿論代わりに優菜は、自分が監視されている事を知っている。
そして今現在、特に介入がないという事は問題ないと見なされていると理解している。

「カメラマンのスタッフを。学園都市から持ち出せれる技術で撮影を希望します」

『お承りました。十分以内にスタッフを派遣します』

部屋に備え付けられている電話を通して、優菜は担当者に連絡をとる。
担当者は恭しく返答すると、すぐにスタッフの手配を確約してくれた。

「十分もすれば、部屋にカメラマンがやってきます。その後で寸法ですかね？」

「はい。お手を煩わせて申し訳ありません」

「いいのですよ。私とルチアさんの仲ではありませんか」

にこっと屈託なく微笑む優菜。
ルチアは顔を赤くしながら俯くが、反対にアンジェレネは少しだけ冷静な気持ちになり始めた。
それはある意味でルチアが反面教師になっているからだろうか。

（少し疑問を感じましたが……何故、聖母様は『聖女』ではなく『

聖母』と呼ばれるのでしょうね）

それは小さな疑問、もしルチアが知れば烈火の如く怒るだろう。

（聖母……『神の子』を産むという十字教史上最高の偉業を成し遂げた人物……）

しかし一度疑問に思えば次々と謎が浮かび上がってくる。

（敬虔な人物であり、神の寵愛を受けた人物の呼び名は『聖女』。慈愛に満ちた女性でも呼び方は『聖女』。決して『聖母』と呼ばれる事はない）

（何故私たちは疑問も抱かず『聖母』と呼んでいるのでしょう。まるでそれが当然の如く……）

うんうんと唸りながらアンジェレネは部屋に備え付けられている冷蔵庫を開ける。

思考と行動が見事に不一致であった。

少々呆れ気味に見ているルチアの視線にすら気付かず、アンジェレネは再び思考の渦に沈む。

（優菜様はかつてコルネリウス家にすら神の愛を説いた御方と噂された人物。その時の二つ名が『慈愛の聖母』……最も、余りにも『嘘臭い』ためにすぐに掻き消えた噂ですが……）

（それが嘘ではない事は既に知っている。あのコルネリウス家の者が、優菜様を慕っている姿を見たのですから）

ゴソゴソと冷蔵庫をあさって何か甘い物がないか探すアンジェレネ。

ようやく見つけたそれは、とても高級そうなプリンであった。

（……うーん）

プリンを片手に目を瞑って考えるアンジェレネ。

だが、封を切ってプリンの匂いを嗅いだ瞬間、そんな考えはどこ吹く風のように掻き消えた。

（ま、私が悩んでも意味はありませんね。今はこのプリンを頂くだけです！）

そう結論に至ると、今までの真面目な思考は掻き消え頭の中はプリンでいっぱいになった。

「いっただきまダギュ！」

今からプリンを食べようとしたアンジェレネの頭をルチアは無言で押さえつけた。

「シスター・アンジェレネ。だから甘い物への欲求はアレほど絶てと……」

相変わらずなアンジェレネにため息を吐きつつルチアは言った。

その後、カメラマンによる写真撮影が行われた。

ルチアは優菜に見えない位置でカメラマンに警告、もとい脅迫まがいの台詞を吐く。

『貴方が持てる最高の技術で聖母様を撮影しなさい。もし下手な事をすれば、その瞬間に二百五十二人からなる部隊が貴方を襲うでしょう』

そんな重圧に晒されている事を知らない優菜は、カメラマンの焦りに少しだけ首を傾げる。

被写体が珍しいからかな、とあまり深く考えない事にした優菜であった。

実は『派遣屋』が用意する個室部屋には、ある意味が込められていた。

部屋の数は合計で五十個の部屋が用意されている。

しかし、番号が一桁の台は、ほぼ特定会員の専用部屋と言っても過言ではない。

つまり『派遣屋』にとって重要な人物と見なされている事になる。

勿論、優菜がその位置にいるのは暗部組織の人間であり、持っているコネクションの質によるためだ。

特にレベル５への太いパイプを持つ優菜は、『派遣屋』にとっては魅力的な人物なのである。

だから優菜は『派遣屋』からＶＩＰ待遇の扱いを受けている。

最も第一位を打ち倒し、第二位を尻に敷いている事は『派遣屋』も知らないが。

カメラマンの重圧以外は特に何もなく、撮影は滞り無く終わった。

寸法についても同様で、最初だけが騒がしかっただけである。

すぐさま寸法のデータが取られ、的確なサイズが打ち出された。

「聖母様が着用される修道服は、二十五日までに必ず用意致します」
修道服に関するデータを片手にルチアはやる気満々な雰囲気で言い切った。
「無理をしなくてもよいのですよ」
降誕祭日が間近に迫った今、無理をして修道服を着る必要もない。
最悪は目立ってもいいから普段着でいいかなと優菜は考えていた。
しかし修道服姿の優菜を見たルチアは、逆に俄然やる気が出た。
全ての作業が終わった優菜たちは『派遣屋』を後にした。
ルチアの予定を聞いた所、一時間後には飛行機でヴァチカンに戻るとの事。
元々学園都市にも数時間しか滞在できなかったようである。
アポ無しでよく出会えたなと呟く優菜だが、ルチアに言わせれば『神のお導き』らしい。
回答に苦笑しながら、優菜は自らの連絡先をルチアに手渡した。

公私混同

優菜に見送られてルチアとアンジェレネは学園都市を去った。
僅かな滞在であったが、ルチア的には大満足のいく結果であった。
そしてヴァチカンに戻った時、彼女たちに待っていたのはアニェーゼ部隊からの妬みであった。

「ちくしょうです。早く仕事に戻りやがれです」

妬みの筆頭であるアニェーゼが、ルチアたちに悪態をつきながら言う。
誰もが優菜の元に訪れたかった為に今回の仕事は大人気であった。
当然ながら誰もが行きたかったのである。

「シスター・アニェーゼ。そんな事を言っていいのですか？」

「あん？」

しかし妬みを受けながらもルチアは余裕の表情であった。
優菜の写真を取り出すと、無言でアニェーゼの前に差し出す。

「こ、これわぁ！？」

訝しげに思いながら写真を受け取り、それに視線を落とすアニェーゼ。
見た瞬間、アニェーゼは驚きの余り奇声を上げる。
写真の中で優菜はお腹辺りで両手を組み、優しげな微笑を浮かべている。

あまりの神々しさに、アニェーゼは思わず写真を持ち直したぐらいである。

「聖母様の御姿です。せっかく皆の為に手に入れてきたのですが、どうやらいらないようですね」

やれやれといったポーズでルチアはため息を吐く。

言葉に詰まったアニェーゼたちだが、すぐに思考を切り替えるとルチアに向かって手を挙げる。

「私二枚」

「あたしは一枚ー」

「私は三枚かなー」

「テメェらは甘っちょろいです。あ、私は五枚でよろしくです」

次々と好き勝手言い始める。流石に二百五十人もいればかなりの騒ぎになってしまう。

そして運悪く、それをある人物たちに見られてしまった。

「何を騒いでいるのである」

「聖ピエトロ大聖堂の前で騒がないでほしいね」

豪奢な礼服に包まれた老人と、青系のゴルフウェアのような衣装を纏った男。

つまりローマ教皇マタイ＝リースと、神の右席アックアであった。

「ローマ教皇様！　これは申し訳ありません！」

突然のローマ教皇出現に驚いたアニェーゼたちだが、すぐに姿勢を正して頭を下げる。

「派手な騒ぎは控えていただきたい所だな」

ローマ教皇は軽く手をふり、アニェーゼたちにそういった。
余り気にしてないのか、ローマ教皇は気軽そうな雰囲気であった。

「写真？　何が写っているのである」

アックアがアニェーゼの手にある写真を目聡く見つける。
一瞬ビクッとなったアニェーゼだが、アックアに逆らう事など出来ず大人しく写真を差し出す。

「……」

写真を見た瞬間、アックアは頭をハンマーで殴られたような衝撃を受けた。
何とか顔に出さずにすんだが、それでも直視をし続けるのは難しかった。

それは、まるで後光すら見えそうな写真であった。
優しげに微笑む姿は慈愛を体現していると感じられた。
緩む顔を無理矢理引き締めたせいか、アックアの顔は不機嫌そうな表情になってしまった。

「写真一枚で騒ぐとは言語道断である。同じ過ちを犯さない為にも、ネガは没収である」

「！　そ、そこを何とかお願いします！」

驚愕の事態にルチアは焦りまくる。

ネガを没収されたら、どんなに考えても処分される以外思いつかないからだ。

それだけは何としても避けたい事とルチアは思った。

「ならぬ。一度冷静に考えるのである」

「……」

「安心しろ。別にネガを破棄したりなどしない。しかし神の御前で騒いだ罪は償う必要がある」

「分かりました……」

どんなに言葉を並べても、聖ピエトロ大聖堂の前で騒いだ罪は消えない。

その事を理解したルチアは肩を落としながら搾り出すように言った。

ネガをアックアに渡すとルチアは更に意気消沈した。

「……最初の焼き増しなら許可しよう。後で正確な枚数を教えろ」

そう言うとアニェーゼたちの返事を待たずにアックアはその場を立ち去った。

ローマ教皇を放置して。

「……」

「どうしたのだ？」

アニェーゼたちと会って以降、ずっと無言なアックアに疑問を持つローマ教皇。

しかしアックアは全く答えようとしなかった。

「散歩の護衛を頼んだのだが、こうも上の空だと意味はなさないな」

余りに反応がないため、呆れたようなため息を吐くローマ教皇であった。

「すまないのである」

「それほど気になるなら、自分の元へ連れてくれば良いのではないかね？」

ローマ教皇はアックアの態度を見てそう思った。

だがアックアは軽く首を横に振る。

「それは無理だろう。あの娘は己の信ずる道を歩む。そこへ他人が意志を介入する事は出来ない」

「師であるアックアの言葉でもか？」

ローマ教皇の問いにアックアは迷いなく頷く。

「私が言った程度で変わる訳もない。あの娘は昔果たせなかった事を果たそうとしている」

「果たせなかった事？」

「家族を不幸から救う」

「……」

アックアの言葉が余り理解できなかったローマ教皇。
不幸から救う、その言葉にどんな意味が込められているのかも。
空に視線を向けると、アックアは昔を思い出すかのように言葉を発した。

「覚えているかな。数年前、日本という極東で大規模な魔術が発動した事を」

「誰が何の目的で発動させたか、一体どんな効果が生まれたかまるで分からなかったあの事件だな」

「全世界に発動が伝わったのにも関わらずな」

複雑な防御魔術を組み立てているヴァチカンの聖ピエトロ大聖堂。
その最奥にいても魔術の発動が伝わるほどであった。
しかし発動が伝わっただけで、何がどうなったのか何もかもが不明であった。
世間一般は勿論、魔術的に何かが変わった様子もない。

「アックアを連れて一年近い調査をした。しかし何の成果も出なかった」

「術式自体が創作魔術過ぎたのだ。その上、複雑怪奇な魔術の組み合わせであった」

「確かその時拠点にしていた施設で出会ったのだな」

無言でアックアは頷く。

「最初はあの娘に噛み付かれてばかりであった」

優菜とアックアの出会いは決して穏やかなものではなかった。どちらかと言えば優菜がアックアを毛嫌いすると言ったほうがいい。しかしアックアの言葉が、硬い優菜の心の壁を次第に破壊していった。

「そこから師弟の中にまで発展したのか。中々凄い事ではないかね」

ローマ教皇は素直にアックアを褒める。

聖人に弟子などと思ったが、そこはアックアに何か考えがあると思い至った。

「そして別れ際の時、あの娘は私と約束をした」

「約束？」

「そう、約束である。あの子はこんな事を口にした」

視線を空に向けたままアックアは、その時優菜が語った言葉を口にする。

一字一句全てを。

『弟を不幸から守れなかった。逆に私が彼を不幸にしてしまった』

『だから上条優菜はウィリアム様と約束します。今度こそ彼を不幸から守ってみせると！』

『例え誰もがいつもの事と言って、彼が理不尽な目に遭う姿を指さして笑おうと！』

『神が彼を救えぬ者として見捨てても！』

『私はずっと彼を愛し理不尽な事から守りたい』

『私は彼の姉だから……』

『未熟な私の力がどこまで及ぶか分からない』

『だけど決して諦めない。最後まで彼を守り続ける』

『彼が幸せになるその日まで！』

『ウィリアム様、身勝手な約束をして申し訳ありません』

『だけど、貴方様との約束なら……今度こそ私は果たせるような気がするのです』

「それで『家族を不幸から救う』か……」

「あの娘から弟の話は少しだけ聞いている。やはり弟もあの娘と似たような人物だなと思った。だから私は言った、『その男は、果たして貴様に守られるだけの生を望んでいるのか？』と。その弟が科学世界の住人なのは、流石に予想外だったのである」

「今では無理だが、十八歳を迎えた時に魔術世界へ連れてくる気だったのだろう？　自分の片腕にするために」

「彼女とならば世界の動乱を最小限に食い止める事が出来る」

「ほぅ……それほど強い力の持ち主なのかね？」

「違うのである」

ローマ教皇の言葉にアックアは否定の言葉を述べる。
しかしローマ教皇の言葉は、アックアの存在を知っていれば当然の発言になるだろう。
聖人であるアックアが認めるなら、それ相応の力の持ち主だと。

だがアックアはその言葉を否定する。
彼は知っている。
優菜が持つ本当の力とは、そんな見た目の力ではないという事を。

「あの娘は普通である。博識であり武術も人より優れている。しかし、一般の人より優れているというだけである」

「……」

「本質はそこではない。どの様な事にも屈せず前へ進もうとする、決して折れる事のない鋼の意思。それがあの娘の持つ本当の力であ

る」

どこか自慢気な顔をしながらアックアは告げた。

「……自慢の弟子という訳か。しかしその子が来るからと言って、あちこちで公私混同をされるのは困るのだがね？」

ローマ教皇の睨みにアックアはやや身を退く。

少しだけ自覚があったのか、バツの悪そうな顔をしていた。

「それは気のせいである」

「ビアージオ＝ブゾーニ司教の入院も気のせいかね？」

「あれはマッサージである」

「アニェーゼ部隊が降誕祭日にあちこち待機するのも気のせいかね？」

「ちょっとした訓練である」

「アックア……私がとやかく言える訳ではないが……弟子に甘すぎではないかね？」

「そんな事はないのである」

アックアの言葉を聞いてローマ教皇はある結論に達した。

自覚症状なし、と。

だが同時に思った、それ程アックアが惚れ込む人物はどの様な子なのだろうと。
少しだけ優菜に興味を持ったローマ教皇である。

後日、とある写真屋の店主は語る。

「化物が……化物が店に来た。そいつはとんでもない数の焼き増しを要求してきた。そして恐ろしいほどの威圧感を放ちながら『貴様が持てる最高の技術を持って焼き増しをするのである』って言いながら俺の肩に手を置いたよ。その瞬間、俺は理解したさ。手を抜いたら殺られると」

不機嫌な妹

その日、優菜と一方通行は揃って実験のため学校を休んだ。
普通に考えればレベル0とレベル5が一緒に実験とは奇妙である。
しかしクラスメイトたちは何となく理解していた。
きっと優菜は一方通行のお目付け役なんだろうと。
いつもの事、と思っていがその日はある人物だけいつもと違っていた。

「……」

それはイライラした様子を隠そうともしないアリシアであった。

「（なぁ……アリシアちゃんはどうしたんだ？）」

「（知らないにゃ～。あそこまで不機嫌なのは初めて見たにゃ～）」

「（上条当麻、貴様は何かしたんじゃないだろうな！？）」

「（するかよ！　ていうか何で俺が真っ先に疑われるの！？）」

「（貴方は時々デリカシーがない。だから疑われて当然）」

「（姫神まで！？　上条さんは紳士ですよ？）」

「（生殺ししてて紳士とかねぇよ）」

そんなアリシアを遠巻きに、当麻たちはひそひそと話し合う。
まだ話せる方はいい方だ。

彼ら以外のクラスメイトたちはもっと酷かった。
まるでお通夜のように、無言で下を向いていたのだ。

それほどアリシアの放つ雰囲気は恐ろしかった。
もうすぐクリスマスとか浮かれた雰囲気を一蹴するぐらい。

「（もしかして二十五日の事が影響しているのか？）」

ポツリと垣根は呟く。
その事に目聡く気付いた当麻たちは揃って垣根に視線を向ける。

「（二十五日って？）」

「（何でも優菜は二十五日にイタリアへ行くとか言ってたが……もしかしてアリシアはついて行けなかったのか？）」

「（可能性は大だにゃ～。アリシアちゃんは優菜ちゃんにベッタリだしにゃ～）」

そこで全員揃ってアリシアに視線を向ける。
アリシアは視線に気付いていないのか、何かブツブツと口ずさんでいた。
何かがやばい、それが当麻たちの抱いた感想である。

「（しかしどうするよ。小萌先生は出張でいない、黄泉川先生も警備員の仕事でいない。他の教師は恐怖にかられて逃亡。見事にやばい状態だぞ）」

アリシアを宥めれる人物が尽くいない。
だからこそアリシアは普段見せないほどのイライラを出しているの

だろう。
もし仮に優菜がいれば、間違いなくゲンコツが振り下ろされているだろうから。

「（やはりここはカミやんの出番だな）」

青髪ピアスが当麻に視線を向けつつ言葉を発する。
他の面子もそう思っていたのか、青髪ピアスの言葉に無言で頷く。

クラスのために死地へ行って来い。
無常にも垣根たちは当麻にそう告げた。

「（上条さんが犠牲になれと！？）」

当然ながら当麻は抗議の声を上げるが誰も聞き入れなかった。
現状でアリシアから一番好感が高いのは当麻である。
ベストとは言わずもベターな選択肢であった。

「……そうか、イタリアを消せばいいのだ」

当麻たちがこそこそと言い合っている時、ポツリとアリシアが言葉を発した。
小さな声なのに何故か教室全体に響き渡っていた。
当麻たちは勿論、他のクラスメイトたちも軽い恐怖に襲われた。

「（マズイ……今のアリシアなら本気でやりかねないぞ）」

「（どどどどどどうするんだよ。言っておくが俺が出てもアリシアが止まるようには思えないぞ！？）」

動揺してパニックを起こしている当麻たちを他所にアリシアはノートを広げる。
何かをカリカリと書いてるようだが、その内容までは分からない。
というより、誰もがアリシアから視線を逸らしているし、誰も内容を確認しようとしないからだ。

「……」

シャープペンの走る音だけが教室に響く。
一文字一文字に殺気が篭っている気がするのは、きっと当麻たちだけではないだろう。

「（ええい、上条当麻！　貴様が犠牲になれ！？）」

「（無茶言うなぁ！！　絶対不幸な目にしか合わないぞ！？）」

「（上条、安心しろ。墓はしっかりとたててやる）」

いよいよバイオレンス的な状況になってきた教室だが勿論奇跡など起きない。
仮に奇跡が起きても当麻の幻想殺しで破壊されてしまう。
つまりこの時間が終わるのを待つという選択肢しか彼らには存在していなかった。

「クックック、そうじゃそうじゃろう。何故今まで気付かなかった」

何やらドリップしたような声でアリシアが呟く。
教室の温度が急激に下がる感覚を味わいながら当麻たちはどうするべきか悩む。
しかし今のアリシアには関わるのすら怖い。

「（そうか！　優菜から電話してもらえれば何とかなるな！）」

当麻の発言に全員が「それだ」と言いたげな顔で頷く。

早速当麻は優菜に電話をかけるが、その間にもアリシアのバイオレンス発言は続く。

「あの男め……いつまで姉上の心に居座るつもりだ」

（あの男？）

何やら聞き捨てならない台詞を聞いた垣根だが、それ以上の事をアリシアは語らなかった。

当麻たちも聞いていなかったのか、その事に関して話題には上がらなかった。

むしろ早くこの時間が終わって欲しいという態度がありありと浮かんでいたのだ。

結局疑問のまま垣根の心に残っただけである。

当麻が連絡をとってから十分後、結局アリシアは優菜に説得されてしぶしぶ大人しくなった。

しかし機嫌が悪いのは変わらなかった。

最も、前みたいに殺気をまき散らしているわけではないので一応安全だが。

「（流石優菜ちゃんやな。あれだけ不機嫌やったアリシアちゃんが大人しくなるなんて）」

「（しかし何があったんだ。幾ら何でもあれほど激昂した所は初めて見たぞ）」

「（うーん、ここ最近は普通だったんだけどにゃ～。特にカミやんが何がした訳でもないしにゃ～）」

「（だからどうして上条さんが疑われるんですか！？）」

「（だって……ねぇ？）」

「（ああもうちくしょう！　不幸だー！）」

ぎゃあぎゃとあと喚く当麻たちは、結局アリシアの不機嫌な理由を知る事が出来なかった。
そして、アリシアから発せられる無言の重圧は学校が終わるまで続いたのであった。

放課後、アリシアが教室の扉を閉じた瞬間、教室に蔓延していた重圧が無散した。
それはクラスメイトたちに安息の時間が訪れた事を意味する。

「やっと終わったね。これが毎日続くのは勘弁願いたいわぁー」

青髪ピアスは背伸びをしながら言葉を発する。
その発言にクラスメイトたちは無言で頷いた。
滅多に見せないから忘れていたが、あの体躯でアリシアはかなり強いのだ。

流石優菜の妹と言うべきか。
以前、レベル5たちがいない時に優菜へ接触してきた学生を、ボコボコにしたのは記憶に新しい。
みるも無惨な姿に変わり果てたその男は、長期入院コースという悲惨な結末であった。
最も、後にアリシアは優菜から折檻されたのは当然の結果であるが。

「もうすぐ終業式の日だ。それが終わればクリスマス……その辺りまで続くのかねぇ？」

「勘弁願いたいにゃ～。カミやん何とかしてにゃ～」

「無茶言うな。あの状態のアリシアだと優菜ぐらいしか説得できないぞ」

「ま、何とかなるやろう。帰ろうぜ、カミやん」

自分じゃどうする事も出来ないと理解したのか、気楽そうに青髪ピアスが当麻を放課後の遊びに誘う。

「そうだな。アリシアの事は優菜に頼むしかないしな」

「今日はゲーセンでもいかないかにゃ～」

「俺はちょっと野暮用があるから無理だ。また今度なー」

結局、優菜に何とかしてもらうしかない。
それが彼らの出した結論である。
だから今はアリシアの事を忘れて、各自思い思いの放課後を過ごす事にした。

放課後、早々に教室を後にしたアリシアは一直線に優菜の家へ向かった。
勿論、実験や何やらで優菜が家にいない事をアリシアは知っている。

「……」

教室の時と打って変わって、アリシアの表情は消沈した感じであった。
何かに疲れたような顔をしながら、アリシアは優菜が住むマンションまで辿り着く。
セキュリティを解除して優菜の家に入るが勿論誰もいなかった。

「クソ……」

悪態をつきながら鞄をソファーに投げる。
クッションの反動で鞄が開き、中身が床にぶちまけられるがアリシアは気にしなかった。
そのままソファーに座り深いため息を吐く。

「姉上」

最愛の人物の名前をアリシアは呟く。
その声は誰の耳にも届かず、ただ虚しく部屋に響くだけであった。

「妾は姉上の一番になれぬのか……」

呟きながらアリシアは考える。

（姉上の中で、家族として最も大事に思っている相手は兄上。そして、他人だと姉上の師であるあの男）

疲れたような表情でアリシアはソファーに体を預ける。

（魔術師との戦いでも、日常の生活でも、どこまで行っても妾は単なる妹でしかないのか）

まるで捨てられた子猫のように、打ちひしがれた雰囲気であった。
沈みきった瞳は泣いているかのようであった。

（どんなに頑張っても……妾が姉上の一番になる事は不可能なのか？）

体を横にすると、アリシアは急激な眠気に襲われる。
不安な気持ちのせいで、不眠に近い形のアリシア。
彼女は襲ってくる眠気に逆らえずすぐに意識を手放した。

再び意識が戻ったとき、アリシアはある場所に立っていた。
漠然とだが、これは夢だと理解した。

アリシアが今立っている場所、それは学園都市ではなく聖カトリーヌ女学院のある場所。
そこでアリシアは優菜からある事を言われた。
自分は学園都市へ行く、だけど貴方は来てはいけないと。
それはアリシアにとって別れの言葉と同等であった。

少しすると目と鼻の先に、過去の記憶が映しだされた。
まるで傍観者のようにアリシアは強制的に記憶を見せられる。

『姉上！　何故だ！　何故転校するのが駄目なのだ！？』

『……』

見たくない過去の記憶を強引に見せられている気分になる。
胃液が逆流して吐き出しそうになるのを我慢しながら、アリシアは目の前の光景を見る。

『妾が妹として不出来だからか？　そうなら教えてくれ。絶対に克服してみせるから！？』

『違うのよ、アリシア。貴方は不出来な妹なんかじゃない。私には勿体ないぐらい良く出来た妹よ』

『なら、どうして！』

『……私にはなすべき事があるの。それをするためには、どうしても学園都市に行く必要があるの。でも……貴方を連れて行く事は出来ない』

『そ、そんな……誓ったじゃないか。妾と姉上は生涯共に歩むと！　どうして妾にもその道を歩ませてくれない！？』

『これは私とあの子の問題。それに貴方を巻き込みたくないの』

『そんな心配なら無用だ。妾はどんな道であろうと……』

『アリシア！？』

『ッ！？』

『私の我侭で貴方に傷ついて欲しくないの。お願い、分かって頂戴』

『……らぬ』

『アリシア？』

『分からぬ！　妾は分からぬ！』

『アリシア！』

そこで不意に映像がかき消え、目の前が真っ暗となる。
そして、水の中を漂うような感覚に切り替わった。
上も下も右も左もわからない。そんな暗闇の中での漂い。
だがアリシアは驚きも恐怖もせず、無抵抗のままゆらゆらと揺られていた。

（そうだな、妾は分からなかったな。全くなにもかも……）

（姉上がどれほど苦悩した上で出した結論かも知らず、ただ姉上から捨てられたと思ってしまった）

（涙を流し、姉上の口から聞かされた「あの子」である兄上を酷く憎んだものだ）

そこでアリシアは頬に何か暖かい水が流れている事に気付く。
なんて事はない、単に自分が涙を流しているだけであった。

（だからこそあの男に会いに行く現状は、あの時と似すぎている。
妾は怖い……再び姉上が妾の前から消える事が）

ゆらゆらと揺れている中、何かを求めるようにアリシアは右手を前に突き出す。
当然ながら何も掴めず、ただ虚しく空を切るだけであった。

（姉上……）

呟いた瞬間、突き出した手に暖かな感触が広がる。
それは瞬く間に全身に広がり、心地よい気持ちにさせてくれた。
まるで優菜に抱かれた時のようだなとアリシアは思った。

「アリシア……ごめんなさいね、貴方には淋しい気持ちにさせてばかりで」

優菜の声が聞こえる。
はっきりしない頭に聞こえる優菜の声はとても悲しい声音だった。

（悲しまないでくれ、姉上。妾は姉上の優しい声が好きなのだ）

「アリシア……」

思った事を口にしたら返事が返ってきた。
随分と都合のいい夢だなとアリシアは思って、ついつい苦笑してしまった。
そっと頭が撫でられる感触を感じる。
優しくてどこまでも暖かい優菜の手。

（のぅ姉上。妾は姉上の一番に成れぬのか？）

「貴方は一番の妹よ。それだけは、どんなに時間がたっても変わらないわ」

（だけど姉上は学園都市に来た。姉上は妾より兄上をとった）

「……」

（すまぬ姉上。夢の中でも姉上を困らすつもりはない。だけど、姉上の心には妾の他に兄上とあの男がいるじゃろう？）

「？　アリシア？」

一瞬、優菜の声に戸惑いの色が浮かび上がった。
しかしアリシアはそれらを無視して、ただ自分の心の中にある言葉を紡ぐ。

（妾は自信がない。姉上の一番であるという事に……それは妾の勝手な思いこみではないのかと）

「……アリシア」

（聖カトリーヌ女学院の時は自信があった。どんなに姉上がモテても『ソロル』という事実があった）

「……」

（だけどここは聖カトリーヌ女学院ではない。あの『ソロル』は何の意味もなさない）

（妾は案外矮小なのかもしれない。何か証のようなものがほしいのかも知れん）

（どんな場所でも姉上の一番である証が……）

そこでアリシアはぎゅっと抱きしめられた感触を味わう。

「私は姉失格ですね。アリシアにそこまで思い詰めさせるなんて」

それは優菜の包容。まるで母親に抱きしめられるような感覚に、アリシアは自然と笑みを浮かべた。

「貴方に甘えてばかりでした。貴方なら理解してくれると……そう勝手に思いこんでいた」

「淋しいという貴方の思いに気付かず……」

「なんて酷い姉なんでしょう。救えない馬鹿ですね、私は」

自嘲気味な声で優菜は自分を罵る。

（さっきも言ったが悲しまないでくれ、姉上。妾は姉上の優しい声が好きなのだ）

「不出来な姉を許してくれますか？」

（妾の姉は姉上以外に考えられぬ）

「ふふふ、ありがとうね」

（いつも笑顔でいてくれ、姉上。大好きな姉上の悲しむ姿など見たくないからな）

「私も大好きよ、アリシア。貴方は私の最愛の妹……」

「貴方のお陰で私は師の問いに答えられそうね」

少しだけ楽しそうな優菜の声を聞きながら。

暖かな気持ちに包まれて幸せを噛み締めながら、アリシアは意識を再び手放した。

貧困な浜面

「腹減った……」

腹を押さえつつ浜面は呟いた。

彼は今、空腹に耐えつつ町を歩いていた。

「ちくしょう……しくじったなぁ」

忌々しく言葉を吐き捨てるが、それで空腹がなくなるわけではない。

「暗部でのお金は来週にならないと入らないし……奨学金はまだまだ先だし」

そう言いながら財布の中身を確認する。

とてもではないが人に見せれない金額しか入っていない。

「はぁ～、車の修理代が結構高かったのが痛いよなぁ。借金もあるし、今月はカツカツだったんだが……」

巨額ではないが決して軽くない借金。

流石に車二台分とその他諸々のパーツ代はレベル０である浜面には辛すぎた。

利子なしで貸してくれる友人がいたのが、浜面にとって不幸中の幸いである。

返済はいつでもよい、と言ってくれたが余り甘えるのもよろしくない。

だから少しでも早く完済するために毎月返済をしている。

「うぅ、腹減った……」

いつもカツカツの生活で、常にギリギリであった。
当然ながら何かよけいな出費が増えれば、即危険な領域に入るぐらい。
そして彼は今月その不幸な出費をしてしまったのだ。
と言っても出費の理由は浜面の仕事ミスだが。

ぐうぅと腹の虫が鳴く。
思わずその場にしゃがみ込んで浜面は腹を抱えた。
いっそどこかで食い逃げでもするかと本気で思うぐらい空腹だった。
空きっ腹状態が数日も続き、彼の思考は完全に麻痺していた。
食い逃げなどすれば、某巨乳警備員から鉄槌が振り下ろされる事になるのに。

「あの？　大丈夫ですか？」

どの店に行くべきかと考えていた浜面の頭上から声が聞こえた。

「あぁ？」

呆けた顔をしながら視線を上に向ける。
その瞬間、彼の思考は停止した。

「具合が悪いのでしょうか？　救急車を呼びましょうか？」

心配そうな顔をして浜面を見ている人物、それは学校帰りの優菜であった。
朦朧とする意識の中、浜面は全力を振り絞って言葉を口にした。

「腹減った……」

「す、すまないね。ご馳走になっちゃって」

「いえ、構いませんわ」

あれから浜面は優菜に引きずられる格好でファミレスにやってきた。
男としてそれはどうなのか、と思った浜面だがそれより食欲が優先されていた。
出された料理を悉く平らげていき、更にはデザートまで食べる始末。
料理の中に浜面の苦手な食べ物があったのにも気付かず。
そして満腹になって意識がはっきりした頃やっと現状を理解したのだ。

「それにしても浜面さんはよく食べるのですね」

浜面の食べる姿を見て目が点になっていた優菜。
しかしすぐに苦笑しながら浜面にそう言った。
対して浜面は恥ずかしいのか、頭をカリカリとかいていた。

「いやぁ、普段はここまでじゃないんだが……ちょっとしたハプニングでね」

「ハプニング？」

「ちょっとねー。っと、そう言えばあんた……」

「上条優菜です。十一月に一度お会いしていますが、覚えていらっしゃるでしょうか？」

「いやー、覚えているよ。確か上条の従姉妹だっけ？」

「はい、彼の姉です」

そう言って紅茶を上品に飲む優菜。
その姿を見て、浜面はふと暗部組織の某人物たちを思い出した。

（似てねぇ……）

彼女たちと優菜は品というものがけた違いだと思った。
とりあえず怖い上司を思考から追い出すと、浜面は一つ咳払いをした。

「一度自己紹介したけど、改めて。俺の名前は浜面仕上、好きに呼んでいいよ」

「これはご丁寧に。私の名前は上条優菜、私もお好きなようにお呼び下さい」

「じゃー優菜ちゃんって呼ばさせてもらうね」

「私も浜面さんとお呼びさせて頂きます」

互いに自己紹介が終わると、共通の話題である当麻の話へと移った。
最初は美人な優菜を意識していたが、彼女のフランクな態度で次第

にリラックスしていった浜面である。

「へー、それじゃあ上条って最近補修受けてないんだ」

「学校での補修が、単に私の家庭教師に変わったという感じですかね」

「結局補習生活は変わらないのね」

単に補修が家庭教師の勉強にすり替わっただけ、その事に苦笑した浜面である。

最も、彼も頭の事に関しては当麻とどっこいどっこいだが。

「それにしても上条に勉強教えるなんて、優菜ちゃんって頭いいんだね」

素直に凄いと思った浜面は、素直に優菜を誉める。

「そんな事ありません。私より頭のいい人なんて沢山いますよ」

しかし優菜は両手を振りながら否定の言葉を述べた。

（なんて奥ゆかしい娘！　あいつらも見習ってほしいな！）

優菜の態度に思わず感動を覚えた浜面は、心の中で某上司たちを罵る。

しかし彼は忘れていた。その某上司たちと優菜は仲良しである事を。

「あ、あの……浜面さん」

無類の感動に浸っていた浜面だが、ふと優菜の声に気付いてそちらに視線を向ける。
優菜は先ほどと変わって、両手をモジモジとしながら視線をあちこちさまよわせていた。

（うっ！　ちょ、ちょっと照れるぞ。美少女って何でも絵になるな……）

優菜は顔を赤くさせながら、視線をあちこちに向けていたが、やがて浜面の方に視線を向ける。
少しだけ言いよどみながら優菜はある言葉を口にする。

「と、当麻の事は、どう思っていらっしゃるのでしょうか？」

「……はい？」

（何で上条がここで出てくるの？）

不思議に思った浜面は首を傾げながら優菜を見る。
対して優菜は伏し目がちな表情でぽつりと呟いた。

「あの子はとても不幸な体質です。今では、心ない人たちが彼の不幸を指さして嘲笑うぐらい……」

「……」

「その為、友達になってくれる人もいませんでした。彼の不幸を気味悪がって」

優菜の言葉を聞いて、浜面はあることに気付いた。

自分の上司である沈利たちは当麻を男性、つまり異性として見ている。
しかし優菜はそうではなく当麻を弟、家族して見ているのだと。

「今の学校は多少イジられていますが、当麻の友達だと言ってくれる人はいます。でも……」

そこで優菜は一息と言いたげに言葉を区切る。
紅茶で喉を潤すと、再び言葉を発する。

「彼らもある意味で特殊な方々なのです。だから、本当に普通の人である浜面さんの思いを聞きたいと……」

「それで上条をどう思っているかって質問なのか」

「いきなり失礼な質問をして申し訳ありません」

浜面は腕を組んで考える。自分にとって当麻はどんな位置なのだと。

（確かにあいつとは最初の出会いが最悪だった。だけど、今じゃ普通に会話したりする。それじゃ友達って事か？）

だが何となくしっくりこない。
何かぴったりな表現があるのに、それが何か思い出せない。
喉から出掛かっているのに、それが出ない事に浜面は少しだけイライラとする。

「上条ねぇー。うーん、友達というより……そう、親友。それだ！
親友って感じだな！」

パズルのピースがかっちりとはまった感覚を浜面は感じる。
最初はキョトントした顔をしていた優菜だが、浜面の言葉を聞いてふっと笑った。
それはとても朗らかで、心からほっとする感じの笑みだった。

「親友……とても素敵です」

豊かな胸に片手を当てながら優菜は呟く。
少しだけ手が沈んでいく様子を見て、浜面はもの凄い勢いで顔を逸らした。
ゴキッと首から異音が聞こえたが、それらを完全に無視した浜面である。

（あの時も思ったが……俺の目に狂いはなかった）

何故か感動を覚えた浜面は心の中でガッツポーズをする。
当然ながら全く自覚していない優菜は、浜面の奇妙な動きに首を傾げるだけであった。

「浜面さん、これからも当麻をお願いします」

そう言って優菜は浜面に手を差し出す。
それが握手を求めている事に気付くと、浜面は慌てて優菜の手を握る。

「お願いされなくても、俺はこれからも上条と親友でいるつもりだよ」

にぃっと笑いながら浜面は言う。
優菜もつられて朗らかに笑う。

とても穏やかな時間が流れていた。
しかし浜面の幸運はすぐ終わりを告げる。

「はーまづらぁ。な～にをやってるのかにゃ～ん」

「おいおいテメェ、人の女の手を気安く握るなよ」

その声にゾクッと背筋に寒気が走る。
全身から嫌な汗が吹き出し、だらだらと流れ出す。

「ご機嫌よう、沈利姉さん。それからついでに垣根さん。後、私は貴方の女ではありませんよ」

「俺はついでかよ！」

「よ、優菜」

優菜に声をかけてきた人物、それは沈利と垣根であった。
二人は器用に浜面にだけ殺気を向けつつ席に座る。
沈利、優菜、反対側は浜面、垣根であった。
つまり浜面の逃げ道は完全に塞がれた訳である。

「それにしても珍しい組み合わせだなぁ。はーまづらぁ？」

笑顔を浮かべながら浜面を見る沈利だが当然ながら目は笑っていなかった。
今からブチコロシ確定と言われても信じられるぐらい殺気満載である。

「それを言えば沈利姉さんと垣根さんも珍しい組み合わせですよ」

「ん、そこでバッタリな」

「所でそこの半端なく三下臭の漂う奴は誰なのかな……！？」

垣根が浜面の事を聞きかけている途中、不意に言葉が途切れた。
理由は簡単である。垣根は左足のある場所を抱えていたのだ。
そこは弁慶の泣き所という、蹴られたらとても痛い場所であった。

「さ、最近……優菜は俺にだけ冷たい」

薄く涙を浮かべながら優菜に抗議の声を上げる垣根。

「当麻の友人は私にとっても友人。友人を馬鹿にされたら怒るのは当然です」

「悪かった。悪かったよ」

明らかに反省の色がない垣根を見て、優菜は深くため息を吐いた。

「本当に貴方はレベル５なのか、とても疑問に感じます」

（はい？　レベル５？）

何やら聞き捨てならない台詞を聞いた浜面。
沈利と肩を並べている時点で高レベル能力者と思っていた。
だがレベル５とは聞いてない。浜面はとても嫌な予感を感じていた。

（何か死亡フラグがたった気がするー！）

当麻のように不幸だと叫びたくなった浜面だが寸での所で思い止まる。
そこから借りてきた猫よろしく状態になった浜面であった。

予想外

十二月二十二日。
この日まで心理掌握こと食蜂操祈は全く動かなかった。
例年なら何か当麻にアプローチを仕掛けてきた。
それが今年に限って全く動こうとしない。
その事に沈利たちは最初訝しげに思っていた。
だが、徐々に「心んは今年は諦めた」と思い始めていた。
それが操祈の罠とも知らず。

当麻が一人ボケッと漫画を読んでいると不意に携帯が鳴る。
着信音で誰がかけてきたか分かるように、当麻はある程度の人間に固定着信音を設定している。

（操祈？　一体どうしたんだろう）

そして今鳴っている音は食蜂操祈という当麻の幼なじみからだった。
夜には滅多に電話してこないので、操祈の意図が分からなかった。
しかし悩んでもしかないと思い当麻は携帯をとる。

「もしもし、心ん？　こんな夜にどうしたんだ？」

『夜分に失礼します、当麻先輩。実はお願いがあって、こんな時間にお電話させていただきました』

「お願い？　俺に出来る事なら言ってくれ。出来る限りの事はするから」

滅多にない操祈のお願いに当麻は少しだけ胸を張りながら言う。
不安げな操祈の声を和らげようと思った末の行動である。

『あの……ですね。当麻先輩は今年も沈利さんたちとクリスマスをお祝いするのですよね？』

「んー、そうだな。今年も沈利姉ちゃんたちと一緒だね。でもそれが？」

『それでお願いというのはですね。私もそのパーティに参加させて貰えないかという事なのです』

「ん？　確か心って」

『操祈』

「……あー悪い。電話の時はそうだったな」

『そうです。ちなみに二回目ですよ？　当麻先輩』

「悪い悪い。部屋だと最愛がたまにいるからさ。今日は何か研究所に用があるからいないが」

『それは都合が……こほん。それで、お返事はどうでしょうか？』

「んー、俺は構わないけど。一応、姉ちゃんたちにも聞いておかな

いとね」

ポリポリと頬をかきながら当麻は考える。
毎年のように家族でクリスマスを祝っているが、何故か友達を呼ぶのすら嫌う沈利たちである。
家族で祝いたいと沈利から聞かされているが、やはり友達も混ぜたいと思っている当麻であった。

「よっしゃ、ここは上条さんに任せなさいー。操祈を家に呼べるように頑張ってみるよ」

『本当ですか！　ありがとうございます。当麻先輩』

電話の向こうから操祈の嬉しそうな声を聞いて、当麻も嬉しい気持ちになる。
常盤台に進学してから余り遊べなくなったが、操祈とは学園都市に来てからの顔なじみである。
もはや家族に近い存在だと当麻は考えていた。
最も、当麻がそう思っているせいで操祈の好意も「妹が兄に甘えている」という勘違いをしているが。
救えない鈍感さである。

『それじゃあお願いしますね。急ぎませんけど、出来るだけお早い返事をお願いします』

「まっかせなさーい。二十四日を楽しみにしてな。あ、悪いけどさ。二十五日はちょっと野暮用で家にいないんだ。だから二十四日だけになるけどいい？」

『構いません。当麻先輩も何かと忙しい身でしょうし、余り我が侭

を言って嫌われたくないですしね』

「ははっ、嫌う訳ないって。俺は操祈の事（家族として）好きだぜ」

『！』

突然、電話の向こうで何やら軽快な破壊音が聞こえる。
その音にびっくりした当麻は、慌てて操祈の様子を確認する。

「お、おい！　大丈夫か、操祈！」

『だ、大丈夫です！　何でもないですよ！？』

何やら盛大なパニックを起こしたかのように操祈は一気にまくしたてる。
少しだけ引いた当麻だが、当然ながら自分の発言が原因とは思っていない。

『と、とにかくお願いしますね！　そ、それじゃあおやすみなさい！』

「おう、お休みな操祈」

『当麻先輩……わ、私も……』

電話を切ろうとしたら操祈のか細い声が聞こえたため、当麻は再び携帯を耳に当てる。
すーはーと呼吸音が何度か聞こえた後、操祈のはっきりとした声が聞こえた。

『私も当麻先輩の事、大好きですよ！　おやすみなさい！！』

それだけ言って操祈は当麻の返事を待たずに電話を切った。

呆けた顔で無機質な電子音を聞きながら、当麻はぽつりと呟く。

「全く……素直で可愛い妹ですね、操祈は」

やはり鈍感な当麻はどこまでいっても鈍感であった。

「……と言う訳なので、心んも二十四日のパーティに参加させます。これ、決定事項ね」

研究所から帰宅した沈利たちを前に、当麻は珍しく強気な雰囲気で爆弾を投下した。

妙なやる気を出している当麻に、沈利たちは最初訝しげに思う。

しかしすぐにある事に気付く。

「（しまったぁ！　心んの奴、コレを狙ってたのかぁ！？）」

「（しずり、落ち着く。心んの狙いって？）」

沈利たちは固まってひそひそと話し始める。

当麻は首を傾げるが、とりあえず言いたいことを言ったのでそのまま放置する事にした。

部屋の扉が閉まる音を聞くと、沈利たちは声のトーンを落として話

し合う。

「（やられたな、心んには。これは断るのは不可能に近いぞ）」

「（どうしてって訳よ？）」

「（いいか、当麻は珍しくやる気を出している。ここであたしらがごねると当麻は心んの方に肩を持つだろう？）」

「（（（あ））））」

沈利の言葉にはっとなる三人。

そして、それが何を意味しているのかも同時に理解した。

「（心んはどっちでもいいんだ。もし当麻がすねて心の所に来たらなおよし、駄目でも当麻とクリスマスを祝える）」

「（当麻お兄ちゃんも、クリスマス目前で頼まれたら超断りにくいでしょうし……超やられました！）」

「（下手に心んをのけ者にすると、当麻は私たちに怒るかもしれない）」

「（さ、流石学園都市最高レベルの精神系能力者って訳よ……）」

沈利たちは重いため息を吐く。

見事に操祈の策略に敗北した沈利たちは、がっくりと肩を落とした。

「ふふふ、心理戦で私に勝つのはちょっと難しいわよ」

沈利たちの耳に勝ち誇ったような操祈の声が聞こえたのは、きっと気のせいではないだろう。
こうして、操祈は大した犠牲も払わず当麻たちのパーティに参加する権利をえたのである。

十二月二十三日。
この日、当麻の学校は終業式であった。
体育館に集まり、恒例のありがたい校長話を長時間聞かされる。
それが終われば晴れて自由の身になる。
最も、一部の人間はクリスマスも補修という地獄が待っているが。

「それじゃあホームルームを始めます。このクラスで補修者は……」

補修者が大量に出る小萌クラス。
当麻、土御門、青髪ピアスなどを筆頭に、あちこち補修者リストに名を連ねる人物がいる。

「なんと！　補修者は一人もいませーん！」

しかし今回は補修者ゼロという偉業を成し遂げたのである。
小萌は嬉しさの余り、少しだけ涙目になるがすぐに笑顔を浮かべる。

「先生は信じていました。皆、頑張れば出来る子だって！」

少し涙ぐみながら生徒を誉める小萌。
勿論、クラスメイトたちもほっと息をなで下ろす。

それは安堵からくるものであった。

小萌は生徒が頑張ったと思っているが、少しだけ違う。
正確には頑張らないといけないという脅迫観念からであった。
そんな脅迫をする人間といえば、一人しかいない。

「小萌ェ……泣くンじゃねェ。こォいう時、先生はしっかりするンだろう？」

小萌先生の白騎士、白い悪魔こと一方通行である。
クリスマスを楽しみにしている小萌を知っていた一方通行は、一つだけ問題がある事に気付いていた。
補修である。当然ながら先生にクリスマス休みなどない。
成績の悪い人間が出れば、必然的に学校へ出勤する必要がある。
表面上はにこにこしながら出勤する小萌だろうが、きっと心では残念な気持ちも出るだろう。

何せ今年は賑やかなクリスマスなのだ。
二年以上前は一人、それから一方通行と二人のクリスマス。
しかし今年は小萌、一方通行、打ち止め、インデックス、アリシアと賑やかなパーティになるのだ。
楽しみに思うなと言う方が無理がある。

そこで一方通行はクラスメイトたちにある『お願い』をした。

『よォし、テメェら。よっく聞け。今回のテストで赤点を一つも出すな』

『あァ！？　無理だとォ！？　まァ構わねェ……赤点とったら俺と一緒にサンタクロースの真似事するだけだしなァ』

『ちぃっと空中散歩って奴さ。まぁ時速千キロちょっとだぜェ』

『……で、改めてお願いするぞ。全員赤点を取るな』

それは脅迫と言わないか、という垣根のつっこみを無視した一方通行であった。

「そうですね。一方ちゃんの言うとおりです。皆さん！　思い思いの年末を過ごして下さい！　そして来年、先生に元気な顔を見せて下さいね！」

よほど嬉しいのかいつもよりテンションが高い小萌であった。
勿論、これから冬休みという事を理解している生徒たちも同様であったが。

「それじゃあこれでホームルームを終わります。皆さん、よい年末を！　それでは、さようならですー！」

元気な小萌の声が教室に響きわたる。
それは冬休み開始の合図、生徒たちは小萌に挨拶をすると次々と帰宅の途についた。

「さて、それじゃあ優菜。帰ろうぜー」

「姉上ー、帰ろう」

鞄の中に教科書をしまっている優菜に、垣根とアリシアが声をかけてくる。

「ええ、帰りましょうか」

教科書をしまい終えると、優菜は微笑みながら二人にそう言った。

「しかし今年ももう終わりかぁ。少しだけ『濃い』生活だったのじゃ」

下駄箱から下履きを取り出しながらアリシアが呟く。

その意味を知っている優菜は、少しだけ苦笑しながらアリシアの言葉に頷く。

「確かに聖カトリーヌ女学院では味わえない生活でしたね」

「うむ、まぁあちらはあちらでのほほんと出来てよいのだがな」

「まぁ学園都市の外の生活とは違うだろう？」

少しだけずれた発言をした垣根。

それに対して二人はくすくすと笑いながら頷いた。

「……ん？　なんか校門前が騒がしくないか？」

優菜とアリシアは揃って校門前に視線を向ける。

確かに遠巻きからも分かるほど、大きな人垣が出来ていた。

男子生徒ばかりであるが。

訝しげに思いながら垣根たちは人垣に近づく。

「あら、当麻。貴方はこの人垣が何か知っていますか？」

「ん？　ああ、優菜か。いや、俺もさっき来たばかりでな」

「何でも凄い美少女が二人いるって話にゃ～」

「見たこともない制服着とるって話やでー」

近くにいた青髪ピアスと土御門が興奮気味に話す。

「ごめんねー、ちょっと通してくれないかなー？」

「だから前もって連絡をしようって言ったじゃない」

「いやー、驚かそうと思って？」

土御門が言った美少女たちの声が優菜たちの耳に届く。

その声を聞いた瞬間、優菜とアリシアは揃って顔がひきつった。

「まさか……」

嫌な予感を覚えつつ優菜はある人物の名前を口にした。

弾丸小娘

優菜は顔をひきつらせた後、何とも疲れた顔をしながらある人物の名前を口にした。

「まりな！　それから静華！　何をしに来たのです」

良く通る声で優菜は二人の名前を告げる。

「お、その声は優菜ー。はいはーい、ごめんね、ちょっと退いてねー」

優菜の声に気付いた二人は、人垣をかき分けて優菜の方に向かう。
少しして人垣から二人の少女が姿を現した。

「いやー、ちょっと困ってたんだよね。やっぱ外部の人間って珍しいのかな？」

「やれやれ、貴方といると退屈しませんわね」

片方の少女はゆるくカールしたショートカットの少女であった。
全体的にスポーティなスタイルの少女は、かなり大雑把な性格をしている雰囲気であった。
反対の少女は、よく手入れの施されたセミロングの黒髪少女であった。
大人と色気と少女の可憐さを絢い交ぜにした感じの少女は、少しだけ呆れ顔をしていた。

「はっはっは、まぁ優菜と出会えたからいいじゃん」

「脳天気すぎます」

「おい、弾丸小娘に黒髪小娘。おまえ等何しに来たんじゃ？」

ぴくぴくと眉を動かしながらアリシアは二人に質問する。

明らかに苛々を我慢してるのが分かる雰囲気であった。

「まりなですから、きっと深い意味はないのでしょう。そうですね、多分休みだから遊びに行こうってレベルの話でしょう」

深いため息を吐きつつ優菜は言った。

優菜の言葉を聞いてアリシアも何か納得したような、ある意味小馬鹿にしたような顔になった。

「なー優菜。二人は知り合いか？」

「聖カトリーヌ女学院時代の知り合いです。片方は当麻も知っているでしょう？」

「ん？　もしかして黒髪の子？」

当麻の言葉に優菜は頷く。

優菜に言われるまでもなく、当麻は静華をどこかで見たような気がしていた。

しかしそれがどこかは思い出せなかった。

少しだけ考えた当麻は、やがてある答えに辿り着く。

「あー、もしかしてメロンの子！」

思い出した、と言いたげに手をぽんと叩く。
その回答を聞いて静華は顔をひきつらせていた。
反対にまりなは腹を抱えて笑っていた。

「た、確かにメロンのＣＭに出てたけど……ぷくくくく、そんな覚え方する人初めてだよ。あっはははははは！」

「もう少しマシな覚え方はないのですか」

「当麻に少しでも期待した私が馬鹿でした」

優菜と静華は揃って深いため息を吐く。
自分の回答が何かまずいと理解した当麻だが何が悪いか分かってない顔であった。

「まぁカミやんだからにゃ～」

「静華って言ったら今話題のお嬢様アイドルやん！　僕は幸せものやなぁー」

理解の追いついた土御門と青髪ピアスが揃って感嘆の息を漏らす。
垣根も理解が追いついたが、余りアイドルとか知らないのか反応は薄かった。

（アイドルとか知らないけど……結構有名人なのかな？）

ある意味では自分も有名人なのだが、余り意識していなかった垣根である。

「いやー、そこのウニ頭の子は面白いよ。名前なんて言うの？」

「ウニ違うから！　上条さんの名前は上条当麻ですよー」

「上条？　もしかしてステラ様の親類か何かかしら？」

「ステラ？」

「その辺りも含めて話してあげます。いきますよ、アリシア。そろそろふてくされるのはやめなさい」

「妾を無視しおってからに……後で覚えておれ」

無視された事を根に持っているのか、アリシアはブツブツと呟いていた。

「なー優菜ちゃん。僕も付いていっていいかな？」

「お前は本能に忠実だにゃ～。あ、勿論オレも付いて行きたいにゃ～」

優菜たちが歩き出した瞬間、土御門と青髪ピアスは揃って手を挙げる。

何となくそんな予感をしていた優菜は、少しだけため息を吐きつつ頷いた。

「こっちの優菜を知りたいから大歓迎だよー」

ケラケラと気楽そうにまりなは言った。

見た目通り余り人見知りをしないようである。

「で、誰が優菜の彼氏なの？」

あれから優菜、アリシア、まりな、静華の女性四人と、当麻、土御門、青髪ピアス、垣根の男性四人は学校の近くにある喫茶店に入った。

ウェイトレスに案内されて各自席に座った瞬間、まりなはとんでもない爆弾発言を投下した。

「全員クラスメイトだ。兄上だけ唯一肉親って所だ。姉上の彼氏を名乗るなど一億年早いわ」

ピクピクと眉を器用に動かしながらアリシアはまりなに告げる。

明らかに面白くないと言いたげな顔をしたまりなであった。

優菜は額に手を当てつつため息を吐き、静華はやれやれと肩をすくめていた。

「ふふん、土御門程度なら無理だが俺ならベストカップルになれるぜ」

「あっははは、面白い事言うね。エセホスト君」

ニヒルな笑みを浮かべた垣根に、まりなは大爆笑しながら言った。

「誰がエセホストだコラァ！」

「かっきーはん、落ち着くんやでー」

まりなのストレートな物言いについつい怒った垣根だが、青髪ピアスに宥められてしぶしぶ矛を収める。

「静華、貴方は仕事関係でこちらに来たのでしょうか？」

「その通りです、ステラ様。今回、クリスマスのＰＲイベント関係の仕事でこちらに来ました」

「それにかこつけてまりながついてきた……と」

なるほどと優菜は思った。

何故、二人が自分の情報網に引っかからず学園都市に来たか納得できたのである。

正面玄関を単独で入ってきたならわかるが、表関係の仕事に紛れて入ってこられては分からない。

もっと細かく調べればわかるが、優菜としてはそこまで調べる必要はないと判断していた。

「気になったんだが、静華ちゃんが優菜ちゃんをステラ様って呼ぶのはなんでかにゃ～？」

「正式名称はマリス・ステラ。聖カトリーヌ女学院最上位の生徒に付けられる称号だよん」

土御門の疑問にまりなは何でもないと言いたげに答える。

だがそれは更に疑問を産むだけであった。

「最上位？　でも優菜ってまだ……」

「年が最上位って意味じゃないのよ。文字通り聖カトリーヌ女学院の中で一番優れた人物って事よ」

「そー、初等部、中等部、高等部の三部全てを合わせた中でね」

当麻たちの疑問にまりなと静華はどことなく自慢気に答えていた。最も、その称号を持っていた人物は酷く困ったような顔をしていたが。

「もう私は聖カトリーヌ女学院の生徒ではありません。ステラの称号も何もかも過去の話ですよ」

ある意味では投げやり的に優菜は告げた。
しかしそれに反応したのはまりなではなく静華であった。

「ステラ様がどこに行かれようと、私にとってのステラ様は貴方様以外にいません」

優菜の瞳を見据えながら静華ははっきりと断言した。
その瞳には一切の迷いもなく、彼女が本気でそう思っている事を窺わせた。

「なぁ……今更なんだが俺たち自己紹介って全くしてないよなぁ？」

「なし崩し的についてきたしにゃ～」

「そやねぇ、僕は青髪ピアス。青ピーって呼んでや」

当麻の言葉に土御門は適当に答え、青髪ピアスは自己紹介をいの一

番にした。
それに倣って他の人間も次々と名前を名乗る。

「土御門元春、つっちーって呼んでにゃ～」

「さっきも言ったけど、上条当麻。優菜とは従兄弟にあたるよ」

「垣根帝督、俺はエセホストじゃねぇ。学園都市レベル5第二位だ」

実はホストと言われるのを気にしていた垣根。
しかし彼は見た目がホスト風なのは否定できない事実であった。

「鳳凰院（ほうおういん）　静華（しずか）と申します。学生をやりつつアイドルをやっています」

「矢吹（やぶき）　まりなー。優菜とは幼馴染よー。まぁよろしくね。えーっと、当麻君？」

人懐っこい笑顔を浮かべながらまりなは当麻に視線を向ける。
しかしその口から出た言葉はある意味で当麻の期待通りだった。

「本当に優菜の従兄弟？」

「ひっさびさの疑問符来ましたよ！」

何となくそう言われる予感がしていた当麻は、まりなの言葉に思わず叫ぶ。
やるせなさに涙を流す当麻だが、勿論誰も助けの船は出してくれない。

「ええとですね、当麻さん。恐らく貴方を聖カトリーヌ女学院に連れていけば、百人中百人が同じ反応をするかと思います」

フォローのようでトドメを刺した静華であった。

まりなは腕を組んで頷いた後、にぱっと笑いながら言う。

「あっはは、優菜は凄かったからねぇ。まさに生ける伝説って奴なのよね」

「容姿端麗、品行方正、学力優秀、運動神経抜群。数えたらキリがないですしね」

「恥ずかしいので、出来れば止めてください……」

余り過去の話をして欲しくないのか、まりなたちの言葉に優菜は困ったような顔をして言った。

「お前たち浮かれるのもいい加減にしろ。姉上が困っているではないか」

それまでまりなたちのやり取りを黙って見ていたアリシアが言葉を発する。

優菜は褒められる事に余りなれていない。だから、過去の逸話をあれこれ言われるのは苦手。

その事が分かっていたアリシアは、優菜の過去について最低限しか語らなかったのである。

「にゃっはは、ごめんね。でも優菜はウチらの代表だったからねー。どうしても自慢しちゃうのよ」

手を軽くふりながら答えるまりな。
あまり反省の色が伺えない表情であった。

「あら、もう時間。申し訳ないけど、そろそろ仕事場に戻らないといけないわね」

ふと時計を見た静華が申し訳ない顔をしながら言う。
談笑をしていたので忘れていたが、静華は学園都市に仕事でやってきたのだ。
仕事をすっぽかして遊ぶことは出来ない。

「ざんねーん。もうちょっと話したかったんだけどね」

少し残念そうな表情でまりなと静華は席を立つ。

「送って行きますよ、静華、まりな」

「姉上が行くのなら妾もついて行く」

席を立つ二人を見て、優菜とアリシアも同様に席を立った。

「名残惜しいけど、ここでお開きやな」

残念そうな表情で青髪ピアスが、この時間の終わりを告げた。

平和だね

当麻たちと別れた優菜たちは、そのまま静華の仕事場まで移動した。
特に寄り道をしなかったせいか、予定より早くついてしまったが。

「結構早くこれたねー。何で早く出たの？」

「まりなの事ですから、あれが見たい、これが見たいと言い出すと思いましたので」

「何だとー」

静華の毒舌にまりなは両手をぶんぶん振って抗議する。
しかし静華はどこ吹く風なのか、まりなに視線を向けずに明後日の方を向いていた。
まりな自身も本気で怒っている訳ではないようだが。

「あー、あそこにクレープ屋がある。ちょっと興味があるー」

「貴方の食べた栄養はどこに消えてるのでしょうね」

ちょっと遠くに移動型のクレープ屋を発見したまりなは、目をきらきらさせながら周りに提案をする。
それを見た優菜たちは、苦笑しながらもまりなの提案を受け入れる。
クレープ屋に近寄ってみると、少しだけ人が並んでいたが特に苦になるような人数ではなかった。

「にゃっはは、どんな味があるんだろう。学園都市だから奇抜な味があったりして？」

「そんな訳あるか、至って普通だ」

「まりなの頭の中で、学園都市ってどんな存在なのでしょうね」

「年がら年中お花畑なまりなですよ、ステラ様。それだけでわかるかと思います」

静華の突っ込みに優菜とアリシアが「あぁ……」と納得して呟いた。
しかしまりなはクレープにご執心なのか三人からの生暖かい視線に気付く事はなかった。
そんな会話を続けていると、順番待ちはすぐに終わりを告げた。

「いらっしゃいませー。何にしましょうかー？」

「妾はバナナチョコクレープ」

「私は……カスタードクレープ」

「静華はカロリー計算が必要だから大変ですね。私はイチゴクレープでお願いします」

それぞれがクレープを注文する中、まりなだけがメニューとにらめっこしていた。
そして少しだけ頷くと、注文するクレープを口にした。

「生クリームとキャラメルをベースに、イチゴとバナナとピーチとカスタードをトッピング！！」

（甘っ！！）

まりなの注文に思わず三人は心の中で突っ込んだ。
甘過ぎというレベルを超えた激甘クレープであった。
店員もにこにこと笑顔だが、心なしか少しだけひきつっているように見えたのは気のせいではないだろう。

「注文を確認します。バナナチョコクレープがお一つ、カスタードクレープがお一つ、イチゴクレープがお一つ、生クリームとキャラメルをベースにイチゴとバナナとピーチとカスタードをトッピングがお一つ。以上でよろしいでしょうか？」

「問題ないでーす」

微妙にひきつりながら注文を繰り返した店員に、まりなはこれ以上ない笑顔で答えた。
出来れば冗談であってほしい、そう言いたそうな顔の店員であった。

「毎度ありがとうございまーす。ただ今クリスマス限定のクジを行っております。お客様、お一人お一つ引いてくださいー」

そう言った店員がカウンターの下からクジボックスを取り出す。
手を入れる場所を優菜たちに向け、にこにこと笑顔で優菜たちに催促する。

「姉上、持ち上げてくれ。妾は手が届かない」

「はいはい」

「ありがとうじゃ」

後ろから抱っこのように持ち上げられたアリシアは、優菜に礼を述べるとクジボックスに手を入れる。
少ししてクジボックスから手を抜くと、何か紙のようなものを一枚手に握っていた。

「他の方もお願いしますー」

店員に促されるまま優菜たちはクジボックスに手を入れて紙を取り出す。
全員が取り出すと、店員はショーケースのようなものをカウンターの下から取り出す。

「クジの説明をしまーす。クジには月日が書かれています。本日の日付が書かれていれば、クリスマス限定のゲコ太ストラップをプレゼント！　なお、外れてもケロヨンかピョン子のストラップをプレゼントしますー」

「ゲコ太？　とりあえずこの紙に書かれた内容を見ればいいのじゃな」

アリシアはそう呟くと持っていた紙を開く。

「ぬぅ、三月二日」

「私は十二月十日ー」

「あたしは四月一日だよー」

「姉上はー？」

レジで支払いをしている優菜にアリシアは声をかける。
促されて優菜は持っている用紙を開く。

「十二月二十三日と書かれていますね」

「おー！　当たりが出ましたー！　おめでとうございますー！」

どこから取り出したのか、カウンターの店員がハイテンションでベルを鳴らす。
しかしすぐに止めると、カウンターの下から少し大きめの箱を取り出す。

「こちら、学園都市内にあるラブリーミトン製の限定ゲコ太です。いやー、お客様。運がよいですねー、これ最後の一個なんですよ」

「はぁ……」

どう対応していいのかわからない優菜は、気の抜けた返事をしつつ箱を受け取る。
その間にアリシアたちはクレープを受け取っていた。
そしてどこかで食べようかなと優菜が考えていた時、見知った声が耳に届く。

「きゃー！　御坂さーん！　気をしっかりー！！」

「お、お姉様ー！　気を確かに！　これは黒子の愛がぐふふふふふべらぁ！」

「ゲコ太が……ゲコ太が……」

声のした方に視線を向けると、そこには虚ろな目をしてブツブツ呟く御坂と。
それを後ろから必死に支えて声をかける佐天と初春。
何故かヒキガエルのように地べたで痙攣している黒子が目に入った。

「あ」

見なかったことにしよう、そう考えた優菜だがそううまくはいかなかった。
視線に気付いた初春がこちらをばっちり視界に収めていたのだ。

「はぁ……何やら波乱の予感がしますね」

「いやー、ほんっと目の前が真っ暗になっちゃったわー」

極上の笑顔を振りまきながら御坂はクレープを食べる。
その手には、先ほど優菜が手に入れた限定ゲコ太が入っている箱があった。

「にゃはは、面白い子だねー、優菜」

激甘クレープを苦もなく食べ続けるまりなは、御坂を愉快な子と見ていた。
静華は見るだけで胸やけするのか、激甘クレープを視界に入れないようにしていた。

「姉上、こちらのバナナチョコクレープは美味しいぞ」

「お姉様、こちらのピーチクレープはとっても美味しいですよー」

そして優菜はというと、さっきからアリシアと佐天に挟まれていた。

アリシアも佐天も優菜の腕をがっちりと組んでいた。明らかに対抗意識から来る行動である。

「むむむ、お姉様！　わたくしたちも負けていられませんの！　ここは一つ対抗するべきですの！」

「対抗って何をよ！　そもそも黒子とは何でもないわよ」

黒子の言葉を遠慮なしに一刀両断する御坂。

「ん～？」

ふと優菜が視線を横に向けると、クレープをかじりながら静華を見ている初春がいた。

何かを思い出しそうな、それでいて思い出せない感じの顔であった。

「どこかで見たような……？」

その言葉で優菜は納得した。

静華は鳳凰院グループの総帥の孫娘であり、生粋のお嬢様である。

が、どういう理由か不明だがアイドルをやっていたりもする。

そのためメディアへの露出はかなり高い。

初春がどこかで見たような気がするのは決して気のせいではないのだ。

（まぁあのまりなも一応お嬢様ですからね。どう見てもお嬢様には見えませんが）

「ん～、まさか……ですね」

「どうしたんですの？　初春？」

うなっている初春を見て黒子が怪訝そうな顔をしながら聞く。

「んー、あの人どっかで見たような気がします。どこだったかなー」

「ん？」

流石に視線に気付いたのか静華が初春の方を向く。
それを見て黒子もどこかで見たような感覚に襲われた。

「確かにどこかで見たような気がしますの。優菜さん、あちらの御方は何て名前ですの？」

「そう言えば自己紹介をしていませんね」

「はいはーい、あたしは矢吹まりな。優菜とは幼なじみだよん」

優菜の声にいの一番に反応するまりな。
だが、黒子たちはどちらかというと静華の方を気にしていた。

「にゃははー、やっぱ知らない人よりアイドルの方が気になるみたいねー」

しかしまりなは特に気にする様子もなく、逆にあっけらかんとしながら笑っていた。

「アイドル？」

まりなの言葉に疑問を抱く黒子。
その答えを探すより早く静華が自分の名前を名乗る。

「初めまして、鳳凰院　静華です」

にこっとマスメディア御用達の写真用笑顔を作り上げた静華。
それを見て初春が驚きに目を見開く。

「あー、貴方はお嬢様アイドルの静華さん！？」

思わず指さしてしまった初春だが、すぐに手を引っ込める。
静華は特に気にもせずにこにこと笑顔を浮かべていた。
といっても写真用笑顔ではあるが。

「っと、いけませんね。そろそろ時間ですよ、まりな」

「んー、そう？　それじゃあ後でね、優菜ー」

そう言うと全員の返事を待たず二人は立ち去る。
颯爽と立ち去る二人の背中を見て、優菜はある事に気付く。

「後で？」

まりなの言葉に首を傾げる優菜だが、勿論答えは出ない。
二人を呼び止める事もなく、ただ呆然としながら見送るだけであっ

た。

それから数時間後。
肩をがっくりと落とした優菜と、至って脳天気なまりなは肩を並べて歩いていた。

「ああ、時間が戻るならあの時の私に言い聞かせたい……」

「にゃはは、気楽に行こうよ、優菜」

まりなが昼間「後で」と言った理由を理解した優菜。
それはまりながホテルをとっていなかったからだ。
学園都市に入るには、行動予定表のような物の提出が求められる。
何やらまりなは宿を優菜の家にしていた様子。
何故、それで通したとゲートの警備員に突っ込みたい気分であった。

「貴方もお嬢様なのですから、宿を取れない事はないでしょう？」

「そうだけどねー。お金を持ってるのは父様であって私じゃないよー？」

「だからといって私の家を宿にしないで下さい」

「いいじゃない。久々に優菜と夜通し語りたいのさー」

何やらまりなの中では既に夜通し語ることが決定済のようだ。

（どうせ時間になったら寝ると思いますがね。まりなは寝付きはいい方ですから）

「はいはい、夜通し付き合ってあげますね」

「む、その顔は信じてないな。あたしは夜更かし出来るようになったんだぞー！」

「十二時を越えて起きていたら信じてあげます」

「言ったなー」

優菜を捕まえようとしたまりなだが、それより早く優菜が数歩後ろに下がる。

「ふふふ、甘いですよ」

「ちくしょー、少しは加減してよー。それでそのおっぱいを揉ませろ！」

「疑うまでもなく馬鹿ですよね、まりなって」

「にゃははは、今頃気付いたか！」

明らかに馬鹿にされているのに何故か自信満々で胸を反らすまりなであった。

呆れ顔の優菜であったが、心の中では楽しい気持ちで一杯であった。

（本当にまりなはいつも突然ですね）

くすくすと笑いながら優菜はまりなと共に家へ帰る。
これから楽しい時間が待っている、そう思いながら。

その日、まりなは十一時五十分まで起きていた。
しかし十二時を越える前に、ぐっすり眠りにはいったのは言うまでもない。

そしてついに運命の日はやってきた。

クリスマスの始まり

クリスマス。
それは本来、主の誕生を祝う記念日・祭日である。
しかし日本では単にお祭りと化していた。
友達とパーティをしたり、恋人と甘い時間を過ごす。
教会世界の人間からすれば笑えない話である。

それはここ学園都市でも同じであった。
オカルトが全く信じられていないが、何故かクリスマスを祝う。
何とも愉快な状態であったりする。

例年通りなら、ある少年を巡って一部の人たちが学園都市を賑やかにするだろう。
しかし今年は違う。
何故なら、ある少年と同じ……否、それ以上に周りから慕われている少女がいる。

彼女の友人は殆ど彼女に恋慕を抱いているのではないかと噂されるほどの人気。
しかしそれは彼女が意識してしたのではなく、無意識の行動から来ていた。
そんな彼女を見てある友人は二つ名をつけた。
――『無垢なる魅了（イノセントチャーム）』と。

今年の学園都市でおこるクリスマスイベントはひと味違う。
そして賑やかなイベントの中心には、きっととある少年と少女がいるだろう。
そう……上条当麻と上条優菜という名前の子が。

時刻は六時半。
少しだけ寒さが身にしみる時間だが、優菜の部屋は温度から湿度まであらゆるものが完璧に管理されていた。
故に冬を感じる寒さが全く味わえない。ある意味ではうらやましく、ある意味では風情がない。

「おふー、冬の寒さが感じられなーい。ちょっと風情ないよー」

少し不満そうな声でまりなは布団の中から呟く。

「人の胸に顔を埋めながら言う台詞ではありませんね」

「にゃははは、あたしなりの愛情表現だよん」

深いため息を吐きながら叱咤する優菜だが、残念な事にまりなには全く効果がなかったようである。
それ所か今以上に優菜と密着しようとしていた。

「なーんか優菜って落ち着くんだよねー。アリシアが毎日のように、優菜と一緒に寝てたのがわかるよ」

「やれやれ」

そう言いながらも優菜はまりなの頭を優しく撫で、時々指で髪をすいたりする。

髪をすく度に、まりなはくすぐったそうに目を細めた。

（やんちゃな子猫ですよね。まりなって）

脳裏ににゃあにゃあ鳴く子猫まりなを思い浮かべる。

余りにも似合いすぎていたので、優菜は思わずくすくすと笑ってしまった。

いきなり笑い出した優菜に小首を傾げるまりなだが、特に何か聞いたりしてこなかった。

「ふにゃ～、満喫した。そろそろ起きて朝ご飯だ！」

「勿論用意するのは」

「優菜！」

ですよねー、と言いたげな顔をして優菜はベットから出る。

まりなも優菜に倣ってベットから出ると、おもむろに脱ぎ始めた。

「着替えるなら、せめて一声かけてください」

いきなり脱ぎだしたまりなに呆れる優菜。

「いいじゃん、別に。ここにはあたしと優菜しかいないじゃーん」

「恥じらいの問題です。本当に貴方は昔から大雑把というか何と言うべきか……」

「にゃははー、あたしにも恥じらいはあるよ。流石に男の子の前で脱いだりしないもん」

「それをすれば間違いなく露出狂ですよ」

だよねーと言いつつまりなは着替えを続ける。

本当に無頓着のようで、下着から上に着る服までかなり適当であった。

だが、それでまりなの美しさが損なわれる事はなかった。

何か理不尽な気持ちになった優菜である。

勿論優菜も着替えようとしたが、まりなのように突然脱いだりはしなかった。

着替えが終わると優菜は早速朝食の準備に取りかかる。

基本的に優菜は和食を作るのだが、今回はまりながいるという事で簡単な洋食に切り替えた。

焼いたパン、それから簡単なサラダ、それからベーコンエッグ。

それらを「五人前」作っていく。

丁度五人前出来上がると同時に、来客者を知らせるチャイムが鳴る。

しかし優菜は玄関に向かおうとしない。それは来客者が誰か知っているからだ。

暫くすると部屋の扉があけられ、来客者が中へ入ってきた。

「メリークリスマスっ！なんだよ」

「クリスマスなんだよってミサカはミサカは口まねしてみたり！」

「おはよう姉上。それからついでに弾丸小娘もな。メリークリスマス」

入ってきたのはインデックス、打ち止め、アリシアの三人であった。

何故三人が朝から優菜の家に着ているのか。

それは一方通行と小萌のためである。

二人で甘い昼を過ごして貰おうと企んだアリシアは、すぐにインデックスと打ち止めに打診。

すぐに了解がえられると、三人は揃って優菜の家にやってきたのである。

「甘い時間を堪能するのじゃ」「弟か妹がほしいー」「頑張るんだよ」と好き勝手言った挙げ句に。

本人たちは悪意のない応援のつもりだったが、その発言故に小萌と一方通行が絶賛気まずい状態なのを三人は知らない。

「朝食なんだよ！」

「待て禁書目録殿、食事の前には手を洗うのだ」

「了解であります大佐ってミサカはミサカは言ってみる」

すぐさま朝食にありつこうとしたインデックスを止めるアリシア。

アリシアの言葉にノリノリで答える打ち止めだが、インデックスはどことなく不満そうであった。

しかし二人はアリシアの言葉に従って洗面台まで移動し手を洗う。

こうして見ると、アリシアはとても面倒見がよくお姉さんのようだった。

一番身長が低いけど。

「にゃはは、アリシアもちゃんとやってるんだね」

「待て、ちゃんととはどういう意味だ。妾は昔から下級生には優しかったぞ」

「そうかなぁ？　優菜目当ての子を追い返していたイメージしかないや」

「それはそれ、これはこれじゃ。姉上の隣を歩けるのは妾以外におらん！」

ふんすっと胸を反らしながら言い切るアリシア。
しかしそれを見たまりなは、意地の悪い笑みを浮かべていた。

「でも朱莉様とか、香奈枝とかあたしとか、静華も隣を歩いていたよー？」

「むぐっ！　それは例外だ」

「にゃははー、アリシアったら無理しちゃってー」

けらけらと笑いながらアリシアの頭を撫でるまりな。
当然ながらアリシアから見れば、馬鹿にされていると考える。
その手から逃れようとしたが、それより早くまりながアリシアを後ろから抱きしめる。
羽交い締めともいうが。

「離せ！　離さんかぁ！」

「よいではないかぁ、よいではないかぁー」

ジタバタと暴れるアリシアだが、如何せん体格差はどうにもならない。

まりなはアリシアの暴れを意に介さず、頭を撫でながらほっぺたをすりすりとする。

「手を洗ったんだよ……って何やっているの？　アリシアは」

洗面台から戻ってきたインデックスが、まりなとアリシアのじゃれあいを見て首を傾げる。

しかしすぐに食欲が優先され、インデックスは椅子に座った。

気がついたら打ち止めも戻っていたが、インデックス同様アリシアを助ける気はないらしい。

「二人とも助けんかぁ！」

薄情な二人に抗議するアリシアの声を聞いて、二人は視線をアリシアに向ける。

どこか達観したような表情で二人はアリシアへ告げた。

「お腹すいたんだよ。それに、そのお姉さんに関わると危ない気がするんだよ」

「何か生け贄の代わりにされそうってミサカはミサカは自分の身を守ってみたり」

「薄情者がぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

無情な言葉にアリシアは絶叫する。

「馬鹿やってないで朝食を食べてください。食器が片づけれません」

流石に可哀想と思った優菜が助け舟を出す。

まりなも本気でなかったのか、優菜の言葉に素直に従う。

「それもそうだね。優菜のご飯なんて久々だしー」

あっさりとアリシアを開放して席につくまりな。

何か理不尽だと思ったアリシアだが、これ以上何かいっても面倒な事が増えると思いしぶしぶ席に座る。

「いただきますなんだよ！」

「いただきますってミサカはミサカは言ってみたり」

「いただきます」

「いっただきまーす」

「にゃははー、優菜のご飯なんて久しぶりー。いただきますー」

五人は席に座ると手を合わせて食事の挨拶をする。

「相変わらず優菜の腕は凄いんだよ」

小さな体に似合わず大食漢のインデックスは、もの凄い勢いで食べていく。

慣れた優菜たちは苦笑ものだが、初めてのまりなにはかなり驚きの

状況だった。
それもそのはず、インデックスの前だけ常人の六倍はあったのだから。

「あー、やー、よ、よく食べるねー」

顔を少しだけ引きつらせながらまりなは言った。
流石の脳天気頭も、インデックスの食欲の前には無意味であった。

「禁書目録殿は成長期だからな」

「いや、成長期ってレベルじゃないよ」

アリシアの発言に思わず突っ込むまりな。
しかしインデックスはそんな二人のやりとりに気付く事なく食事を続けていた。

平和である。
しかしこの平和は朝だけという事を、彼女たちは理解していなかった。
二十四日と二十五日は、好意を持つ人に振り向いて貰おうと考えている人物が沢山いる。
彼、もしくは彼女たちにとってこの二日間は別の意味が込められている。

そう、恋の戦争という意味が。

上条家最強の襲来

優菜の家で楽しい朝食の時間が流れている頃。
同じ姓を持つもう一つの上条家では、沈利たちがある部屋に集合していた。
下では暢気に当麻が朝食の準備をしている。
しかし沈利たちは当麻の暢気さと正反対の位置にいた。

「いいか、今日が勝負の日だ。明日は当麻がイギリスに行くから手が出せない」

フレンダの部屋に集まった姉妹を見て、沈利は重苦しい雰囲気の中言う。
今まで攻防してきた当麻のデート阻止作戦の最終日が今日に当たる。
それは最も攻撃の手が激しい事を意味していた。
最後の日だから諦める、なんて甘い考えを沈利たちは持っていない。
逆に最後の日だから、多少手荒な真似すらしてくる。
そう考えていた。

「当麻が外出しそうになったら、誰かがついて行く。その時は誰でもいい、忘れてないよな？」

「大丈夫だよ、しずり。当麻は私と出かけるから」

「理后姉ちゃん、超何言ってるんですか？　当麻お兄ちゃんと出かけるのは私と超決まっています！」

「こらこら、喧嘩はなしよ。今日だけは誰が一緒になっても文句なし」

いきなり亀裂が生まれそうになったが、沈利がフォローに入って事なきをえる。
流石にいきなり奪い合いはまずいと思ったのか、理后と最愛はおとなしく沈利の言葉に従った。

「結局さ、当麻お兄ちゃんの予定は未定って訳よ」

ベットに腰掛けて足をぷらぷらさせているフレンダがぽつりと呟く。
それは沈利たちも認識していた懸念事項であった。
今日この日まで、当麻は己の予定を全く沈利たちに教えていなかったのだ。
あれこれ聞こうとした沈利たちだが、今回に限って全く聞き出す事が出来なかった。

「誰かと会うような感じがするんだよな。だって当麻の口座から、かなりの額が引き落とされていたから」

「心お姉ちゃんか……第三位か……それとも妹達の誰かか……全く読めないって訳よ」

「今回は超手強いです。やはり優菜お姉ちゃんからの教育の賜物ですね」

去年までの当麻ならあれこれボロを出して勝手に自爆していた。
しかし今年は違う。
当麻は、補修と称して優菜からみっちり教育を受けていた。
それは学校の勉強から、全く関係ない雑学まで幅広い学習であった。
そのためか当麻は知らず知らずのうちに、頭を使って行動をするという事を身につけたのである。

元々頭の出来が悪いわけではない当麻。
単に覚えるための時間がなく、集中できなかった事が成績の悪化を招いていた。
しかしそれらを一つ一つ取り除き、短時間で密度の高い学習をさせる事で成績が向上したのだ。

成績がよくなって補修が減れば当麻との時間が増える。
当初はそう考えていた沈利たちだが、その思惑がここにきて思わぬ罠へと変貌したのだ。

「おーい、朝食が出来たぞー」

あれこれと悩んでいる沈利たちの耳に当麻の暢気な声が届く。

「とにかく……今日から二日。私たちに負けることは許されない。いいか、絶対に全員で勝ち抜くぞ！」

「超了解です！」

「了解って訳よ」

「大丈夫だよ、しずり。とうまは誰にも渡さない」

沈利の発破に理后たちは元気よく答える。
それぞれ互いの顔を見合わせて小さく頷くと、沈利たちはフレンダの部屋を後にした。

これから二日間、そのうちの一日は絶対負けられないと決意を固めて。

当麻はおかしいとすぐに気付いた。
普段からべったりしてくる最愛だが今日は特にひっつきの時間が長い。

（きっと最愛はクリスマスプレゼントをねだりたいんだなぁ……素直に言えないなんて可愛い奴）

壮絶な勘違いをした当麻は、最愛の頭を優しく撫でる。
時々髪を指ですいたりして可愛がりの強弱をつけていた。
何処で身につけたテクニックなのか疑問に思った最愛だが、その心地よさについつい顔が緩んでいった。

「超もっとですー、当麻お兄ちゃんー」

背中を完全に当麻へ預け、頭をつきだしてねだる最愛。
最愛の態度に気をよくした当麻は、多少強引に見えるほど最愛の頭を撫でる。
しかしそれを面白くないと思う人物が三人いた。

「最愛の妹ねだりが作戦としても……こう、何というか蹴り飛ばしたくなる」

「落ち着くって訳よ、沈利姉ちゃん」

「そういうふれんだも、爆弾を持っていたら危ないよ？」

「理后姉ちゃんも、その手に持った鈍器をしまう必要があるって訳よ」

沈利、理后、フレンダの三人である。

まずは軽いジャブとして、最愛が当麻にべたべたと必要以上に甘える事で当麻を拘束しようとした。

幸いにも当麻は全く疑っておらず、最愛を可愛い妹として愛でていた。

しかし作戦といっても面白くないものは面白くない。

沈利たちは作戦の成功による喜びと、最愛への嫉妬という二重の感情に支配されていた。

そこへ沈利たちの考えを吹き飛ばすように電話が鳴る。

機嫌の悪い沈利は電話の受話器を力強くとると、ドスの利いた声で電話相手に話しかける。

「誰だよ、こんな朝っぱらから」

「あらあら沈利さんったら。お母さんへの反抗期かしら？」

今にも原子崩しを打ち出しそうな雰囲気の沈利だったが、電話相手が誰かわかった瞬間背筋をピンとのばした。

顔から嫌な汗が浮かび上がり、だらだらと流れ出していた。

「か、かかかかか母さん！？　ち、違うのよ？　これはやむを得ない事情が！？」

「あらあら、沈利さんったら。そんなに怯えてどうしたの？」

電話相手は沈利たちの母親、詩菜であった。
その事を理解した沈利は慌てて先ほどの暴言を謝罪する。
しかし詩菜は特に気にしていないのか、さらっと受け流していた。

「所で沈利さん。クリスマスだからといって当麻を甘やかしていないでしょうね？」

「はい！　勿論ですよ、母さん。当麻にはきちんと言い聞かせていますよ！？」

普段の沈利を見ていたら、母親にここまで恐縮する沈利は目を疑うほど信じられない光景であろう。
しかし上条家では、例え全員がレベル５になろうと、刀夜の稼ぎを軽く突き破るほど稼いでいても。
絶対的に守らなければならない不文律が存在した。

それは『詩菜を絶対怒らせてはいけない』という事。

過去に沈利はその意味を正しく理解せず、詩菜の逆鱗にふれてしまった。
その後、詩菜曰く『折檻部屋』と呼ばれる部屋に拉致された沈利は、そこで己の行動を激しく後悔する。
僅か数時間の折檻だったが、出てきた沈利は見違えるほどやつれていた。
気になった当麻たちは、沈利に中で何があったか聞いたが沈利が呟いたのは一言だった。

『母さんを絶対に怒らせちゃ駄目よ』

その時のトラウマがあるのか、沈利は今でも詩菜に頭が上がらない。
これから一生あがらないだろうと漠然と理解していた沈利である。

「所で母さん。電話してきた用件って何？」

早く終わらせたい沈利は、詩菜に電話をかけてきた理由を尋ねる。
それに気付いた詩菜は、電話の向こうから「そうだわ」と呟いた。

「母さんね。今日、刀夜さんと一緒に学園都市に行くのよ」

「……は？」

「あらあら、刀夜さんから聞いていない？」

「キイテナイヨ」

詩菜の発言にカタコトで答える沈利。
当然ながら寝耳に水であった。両親は学園都市に滅多にこない。
それは刀夜が休みを取りにくいのもあるが、なるべく子供たちの自主性を尊重する教育方針だからだ。

しかし連絡した当日に来るという事は、今まで一度としてない。
必ず数日前には連絡が届けられていた。

「あらあら、刀夜さんったら。実は秘密にしていたのね」

「は、ははは。父さんったらお茶目なんだから（父さん……ブチコロシ確定ね）」

それが今回ないということは、刀夜は何か秘密にする事があるとい

う事だ。
こういう時、大概禄でもない結果を産む。
嫌な予感を感じていた沈利だが、当然ながら来るなとは言えない。
何故なら詩菜は学園都市に来る事を、楽しみにしている雰囲気が感じらたのだ。
ここで「迷惑だからこないで下さい」と言えば、どんな結果が待っているか。
その事を理解している沈利は、とてもその言葉を告げる事など出来なかった。

「それじゃあ母さん、これから準備して向かうから。夜には着くと思うからよろしくねー」

「うん、待ってるよ母さん」

勿論本心は来ないでくれだが、命が惜しい沈利は口が裂けても言わない。
詩菜が電話を切った後、沈利は盛大にため息を吐きながら受話器を置いた。

「理后、フレンダ。予定変更よ……」

疲れきった表情のまま沈利は理后たちに告げる。

「母さんが今日こっちに来るわ」

沈利が告げた内容は、上条家を震撼させるに十分な理由となった。

一方さんの覚悟

一方通行は死ぬことを酷く怖がる。
理由は彼にとって大切な存在が自分の死を悲しむからだ。
もはや自分は学園都市最強の椅子に座っていないと感じていても。
その人の前では、常に学園都市最強であり続けなければならない。
最強とは死ぬ事がない。
故に彼女の前で一方通行は常に演じる。
学園都市最強のレベル5第一位　一方通行を。

一方通行は彼女を傷つける存在を許さない。
以前彼女を傷つけたスキルアウトは、全員を『行方不明扱い』とするぐらい。
巻き添えのスキルアウトも、大半が病院で長期入院を強いるぐらいに。

一方通行はためらわない。
彼女が光り輝く世界で幸せに生きていけるのなら。

例え己の幸せが全てなくなろうと。
例え己の最後が惨めな路地裏で終わろうと。
例え己の両手が拭えないほど血に染まっていようと。

彼は彼女の為なら、全て受け入れるだろう。
かつての自分を救ってくれた彼女を守れるのなら。

それを理解しているからこそ、学園都市も一方通行の大事な存在に手を出さない。
もしも手を出せば手酷い損害を被るからだ。

彼を暗部に堕とせたのも、偶然に偶然が重なった奇跡と言えただろう。
だが一方通行は後悔しない。彼女を守るためならば。
だが一つだけ、そう一つだけ一方通行は彼女に問題があると思っている。
それは彼女の身長が低すぎて、自分がロリコン扱いされる事だった。

一方通行は自宅で小萌と一緒に遅めの朝食をとっていた。
しかし普段の明るい雰囲気は霧散し、慎ましやかな食器の音だけが食卓を支配していた。

（どうすればいいンですかァ！？）

勿論、一方通行も小萌もそうしたいからしているわけではない。
理由は朝早く家を出ていった三人組のせいである。

アリシア、打ち止め、インデックスの三人は、朝早くから優菜の家にお邪魔しにいった。
朝食後に、少し休憩したら皆で買い物の予定だった為に寝耳に水であった。

『今日は小萌殿とクリスマスデートしてこい』

『あくせられーたー、ファイトだよ！』

『弟か妹が欲しいってミサカはミサカは言ってみる！』

そして三人は約束を破った事を悪びれる事なく、好き放題言って出て行ったのだ。

お陰で小萌は瞬間湯沸かし器のように顔を真っ赤にさせて倒れてしまった。

その後何とか復帰した小萌だが、当然ながら一方通行との間に微妙な空気が出来てしまった。

それが現在まで続いている。

（くそゥ……あのガキども好き勝手言いやがってェ！？）

イライラを誤魔化そうと多少強引にご飯をかきこむ。

しかしその程度で消えるなら、はじめから苦労しないという事に彼は気付いていなかった。

（この気まずい雰囲気は勘弁だなァ……）

一方通行は学園都市最高の頭脳を駆使して現状打破を試みる。

しかし事女性の気持ちという最も不得意な部類に入る事だ。

明確な解決策など、一方通行には全く思いつかなかった。

「あー、小萌？」

だがこのままでは何も進展しない。

意を決して一方通行は小萌に声をかける。

「は、はい。何でしょうか？」

ビクッと反応した後、小萌は一方通行の方を向く。

小萌の頬は今でも赤く染まっており、まるで茹でたこ状態であった。

「あ、あのよォ……今日の買い物……中止にするかァ？」

「……え？」

自分と買い物に行くのが恥ずかしいと考えた一方通行は、小萌に今日の買い物のキャンセルを提案する。

しかしそれを聞いた小萌は、まるで世界が終わったかのような表情をしていた。

「俺みたいな奴なンかと一緒だと、小萌には迷惑だよなァ……今度から」

「ち、違います！　違いますよ、一方ちゃん！」

呆然と一方通行の言葉を聞いていた小萌だが、理解が追いつくと慌てて一方通行の言葉を否定する。

両手をぶんぶんと振って否定する姿を見て、一方通行は首を傾げる。

「……嫌なンじゃないの？」

小萌が嫌がっているのは自分という存在、そう考えていた一方通行である。

とんでもない勘違いをしている一方通行だった。

やはり彼に乙女心を理解しろというのは、今は難しいのかもしれない。

「違います。ただ、ちょっと恥ずかしかっただけです。それに……一方ちゃんこそ私なんかでいいんですか？　私より若い子なんてそ

れこそ一杯いますよ？」

「それこそありえねェ。俺の隣を歩けるのは、いつだって小萌だけだァ」

そう言ってから一方通行はある事に気付く。
何か互いに言いたい事がずれていないか、と。
そして一方通行の予感は当たっていた。

「はうぅ～」

小萌が顔を真っ赤にしてうつむいたのを見て一方通行は確信した。
絶対二人のいいたい事はずれていると。
だが今更それを指摘するのは不可能であった。
何故なら、小萌は顔を赤くしながらも頬に両手を当てて少しだけはにかんでいたからだ。
ここで「いや、互いの認識ずれているよな？」と言えるほど一方通行は無神経ではなかった。
しかし何か言わないと、このまま泥沼にはまっていく予感もしていた。

何を言おうとした一方通行だが、それより前に小萌が少し真面目な顔で言葉を発した。

「一方ちゃんの気持ちは嬉しいです。でも、一方ちゃんはもっと先に進めるはずです。先生はそれを導かなければなりません」

その言葉の意味を一方通行はすぐに理解する。
一方通行はもっと先の世界、誰も到達できなかった世界を見れる人物だと。

自分では一方通行の足かせになってしまう、それはとても辛い事だと。
だから自分などに構わず、進めるならもっと先に進んで欲しいと。

「馬鹿言うンじゃねェ」

しかし誰も到達出来なかった世界を見れたとしても。
そこに誰も……小萌がいないのでは意味がない。
それがわかっているからこそ、一方通行は小萌の言葉を否定する。

「例え俺がどンなに上へ行こうとだな。俺が帰ってくるべき場所は『ココ』だ。小萌がいるこの家が俺の帰るべき場所なンだよ」

「一方ちゃん……でも」

「決めてンだよ。小萌が自分の幸せを掴むまで、俺はお前の側にいて守るってな。例え誰が敵になろうと、どンな奴がこようとだ」

それは一方通行が絶対に破らないと決めた約束。
例え誰が敵になっても、自分が救えないほど腐りきっても、それでも小萌だけは守る。
自分が小萌から嫌われようと、どんなに罵られようとも。

「馬鹿な心配してねェで、小萌はどっしり構えていればいいンだよ」

「……でもそれじゃあ一方ちゃんの幸せはどこにあるんです？」

小萌は真剣な目をして一方通行に尋ねる。
今の言葉は小萌の幸せを願う言葉だが、それではそれを実行している一方通行の幸せはどこにあるのか。

他人の幸せを犠牲にしてまで己の幸せを掴もうとするほど、小萌は非道な人間ではない。
一方通行が不幸せでは、小萌も自分が本当に幸せだと思えないのだ。

「決まってンじゃねェか」

だが一方通行は簡単に答える。
まるで考えるのが面倒な、考えるのすら必要がないと言いたげに。
何気ない表情で一方通行は告げる。

「小萌が幸せになる、それが俺の幸せだ」

自分のような悪党ではなく、光り輝く世界に生きる誰か。
いつか小萌を本当に幸せにしてくれる人物。
そんな奴が現れるまで、一方通行は小萌を守ろうと考えた。

自分のような悪党では、小萌を本当に幸せにする事は出来ない考えているから。

『違うだろう！！　お前は本当にその子の幸せを願っているのかよ！？』

『単に事件に巻き込まれた「不幸」をその子のせいにしているだけだろ！！』

『なら守ってやれよ！！　誰がお前では守れないなんて言ったんだよ！！　始める前から諦めるんじゃねぇ！？』

『逃げるなよ「最強」！！　お前が自分で決めるんだよ！　その子を守るか、それとも見捨てるのかを！』

『お前が見捨てるというなら、俺がその子を守ってみせる！』

『だけどお前は納得できるのかよ！！　自分の一番大事な存在を、大して事情の知らない人間に預けて、お前は本当に満足出来るのかよ！？』

『決めろよ……お前自身が胸を張って選んだと言える選択を！！』

しかしそう考えると、決まってある男の言葉が脳裏に浮かぶ。
一年前、人の事情も知らずに好き放題言ったツンツンヘアーの少年の言葉を。

（チッ、三下の言葉を思い出すなんて……）

当麻が一年前に一方通行へ言った言葉。
そのせいで彼は完全に悪党を演じきれていなかった。
悪党だと思いながら、同時に本当に悪党でいる必要はあるのかと。
そのせいで一方通行はただ悪党という仮面を被っているだけの状態になっていた。

「一方ちゃん……」

「だから早く見せてくれよ、小萌が本当に幸せだって胸を張れる時を……」

その言葉を呟いた瞬間、一方通行は心にチクリと痛みを感じる。
彼はその痛みの理由を知らない。
そしてその痛みが産まれる元となる感情の名前を。

しかし時がたてば彼は知るだろう。
その感情の名前を、心が痛んだ理由を。
そう遠くない未来に。

超電磁砲のキモチ

御坂は朝から街をうろうろとしていた。
勿論、そんな事をしているのは偶然を装って当麻に会うためだ。
電話で呼び出せば早いのだが、御坂はその方法を取ると何か嫌な事が起こる。
そう予感していた。
実際御坂の予感は正しく、もしも当麻に電話をしていれば必ず姉妹の誰かがついてきただろう。

「やっぱり狙って出会えるもんじゃないわねぇ」

ヤシの実サイダーを飲みながら御坂は呟く。
かれこれ一時間近く歩いてみたが、一向に出会う気配はない。

「寮監と一緒にあすなろ園に行くのはお昼から……午前に出会えなかったら終わりね」

空っぽになった缶を握り潰すと、お掃除ロボット付近に投げる。
ゴミに気付いたお掃除ロボットは、御坂の捨てた缶を吸い上げる。

「はぁ……今年も無理なのかなぁ……」

そう言いながら御坂は空を見上げる。
少しだけ曇り空だが、雨などが降る様子もない。
雪でも降ればロマンチックかなと思える天気であった。

「失礼、御坂さんですか？」

空を眺めているとふいに誰かから声をかけられる。
御坂は慌てて視線を声の主の方に向けた。

「おはようございます、御坂さん」

御坂に声をかけてきた人物は優菜であった。
彼女は人の良い笑みを浮かべながら、御坂に小さく手を振っていた。

「あ、優菜さん。おはようございます」

「こんな所で何をしていらっしゃるのですか？」

「んー、ちょっとね。優菜さんは？」

「私は静華を迎えにいく途中です」

「あー何かお嬢様アイドルとか言われている人？」

御坂の言葉に優菜は頷いて答える。
先日ゲコ太の方に集中していたから殆ど覚えてない御坂だが、確かに可愛い人だなとは思っていた。
最も、アイドル事態余り興味がない御坂では、どれほど静華が人気かはわからないが。

「予想より早く仕事が終わったそうで。先ほど電話で迎えにきて欲しいと頼まれました」

「ふーん。あの年で既に働いているなんて凄いね」

御坂は静華が働いている事に素直な感想を述べる。

あの年ならまだまだ遊びたい盛りだと御坂は思っていた。
それなのに既に手に職を持って働いている。

「色々と苦労しているそうですがね。っと立ち話も何ですしベンチに座りませんか？」

「あ、いいですよ。静華さん迎えにいかないと」

「あの子は多少依存症があるので、ある程度突き放した方がよいのです」

少しだけ意地悪な顔をしつつ優菜は言った。

「それに、当麻を探している御坂さんとじっくり話してみたいとも思いましたからね」

「なぁっ！？　ど、どどどどどどどうしてそう思ったの！？」

いきなり図星をつかれて動揺する御坂。
しかし優菜は逆に悪戯を楽しむような表情で笑っていた。

「クリスマス、そして御坂さんは一人で公園にいる。色々と推測するには十分な材料ですよ」

「～～～～～～～っ！？」

「しかし残念な事に、恐らく当麻には出会えないでしょうね」

「な、何で！？」

「その辺りも詳しく教えてあげます。あちらのベンチでよろしいですか？」

完敗である。
ここまで読まれると薄ら寒いものがある。
しかし嫌な気持ちにはならなかった。
逆に思い切って相談してみようと思った御坂である。

手頃なベンチに座った優菜と御坂。
少しだけひんやりするベンチだったが、嫌になるほど冷たいわけではなかった。

「さて、当麻と出会えない理由ですが……恐らく沈利姉さんたちが、当麻の行動を監視しているからでしょう」

ホット紅茶のプルタブをあけながら優菜は爆弾発言をする。
事実当麻は沈利たちから、あれこれ策を受けていて未だに外出出来ていない。

「監視って……そこまでするものなの？」

「……そうですね。沈利姉さんたちは、当麻に特別な感情を抱いています。きっと当麻を誰にも渡したくないのでしょう」

「そうなんだ……」

妙に納得した御坂である。
最初はそこまでするものかと思った御坂だが、もし自分が当麻の家族ならと仮定して考えてみた。
結果、きっと沈利たちと同じ行動を自分もとるだろうと思った。

大好きな人を誰にも渡したくない。ずっと自分だけを見て欲しいと思ってしまったから。

「でも御坂さんも、沈利姉さんたちも一つだけ気付いていない事があります」

「え？」

優菜は妙な思わせを言った後、ホット紅茶を一口飲む。
喉を潤すと、少しだけため息を吐きつつ優菜は言った。

「今のままでは、当麻を振り向かせるなんて誰も出来ないのですよ」

先ほどの朗らかな笑みはなりを潜め、優菜は真剣な表情をしつつ言った。
少しだけ思い詰めたような雰囲気に御坂は思わず唾を飲み込む。

（分かってはいたけど……恐らく当麻を一番理解しているのは優菜さんね……）

そう思うと同時に恐怖を抱く。
そこまで当麻を理解している優菜が、もしも当麻を好きになったら。
恐らく誰もが勝てなくなるだろう。
現に彼女は当麻が振り向いてくれない理由を知っているから。

「……御坂さん。軽はずみな事と思わないでください。私は貴方を信頼しているからこそ、この話を打ち明けるのですから」

「……」

「もしも私の勝手な信頼が、邪魔と仰るなら言って下さい。二度とこの話はしませんから」

そう言って優菜はホット紅茶を飲み干す。
御坂は優菜の言葉を聞いて試されていると思った。
だけど嫌な事だと思わなかった。
何故なら、それをするほど優菜は当麻を大事に思っているから。
そして自分は優菜に認められたのだと思えたから。

「正直な所、私は当麻を何処まで好きなのか分からない。恋なんてしたのは初めてですし……」

「……」

「だけど……ううん、だからこそはっきり言える事が一つだけある。この気持ちは一時的な物なんかじゃないって」

自分の精神の制御法を完璧に熟知していると考えていた。
だけどその感情は、それら全てを簡単に粉砕するほどの圧倒的な力を持っていた。
そして垣根に指摘されて、初めてその感情と向き合った。
そうしたら簡単に理解できた。

当麻が好きだという事が。
理論も理性も体面も世間体も捨てる事になったとしても、それでも好きなんだって事が。
醜く惨めったらしいと言われても、誰にも当麻を渡したくないんだって事が。

理解した瞬間、誰にも見せた事のない御坂の心の最深部に、どっし

りと当麻が居座っていた。
これ以上ないぐらい深いところに。

「ふふふ、ちょっとだけ試しました。ごめんなさいね」

そんな御坂を理解したのか分からないが、優菜は真面目な顔から一転朗らかな笑みを浮かべた。

「御坂さん、貴方は不幸って信じますか？」

視線を御坂から空へ向けると、優菜はぽつりと呟いた。
不幸、自分の思い人が癖のようにいう言葉。

「当麻が不幸なのはご存じでしょうね。あの子は口癖のように言っていますから」

「確かにいつも『不幸だー！』って叫んでいますね」

「そうですね……でもその不幸が、誰にも彼を振り向かせる事が出来ない理由となっているのです」

優菜の言葉に御坂は首を傾げる。
不幸だからといって、それが当麻を振り向かせられない事と何が関係するのか。
その事が分からなかった御坂だが、答えはすぐに優菜の口から語られた。

「あの子は自分を不幸だと思っています。だから人の好意を無意識のうちに否定するのです。不幸な自分が好意など向けられるわけないって」

「そんなっ！？」

「本人も気付いていないのでしょう。だから御坂さんが好意を向けても、それに気付かないのです。まぁ多少の鈍感もありますがね」

御坂はハンマーで殴られたような痛みと共に大きなショックを受けた。当麻の言葉にそんな深い意味が込められたなんて全く気付きもしなかった。

「だから、何もしないで自分の都合の良い事なんて起きない。マイナスがゼロになったらそこで終わり、それ以上はないと考えています」

「つまり……好意とかプラスの事なんてないと思い切っている」

「そうです。沈利姉さんたちの好意も『家族だから好かれている』と、そう思いこんでいるのでしょう」

何て寂しい考えなのだ、それが御坂の感想であった。

「……あの子が自分を不幸だと、思いこんでしまった理由は……私のせいなんです」

グシャリっと手に持っていた缶を握り潰す優菜。

「酷い姉ですよね、私は。あの子を守ると言いながら、逆にあの子を辛い世界に追い込んでしまった」

「優菜さん」

「だから今度こそあの子を守ってみせます。でも……あの子を本当の意味で幸せにするのは私じゃない」

そこで優菜は御坂の方に視線を向ける。

真剣な表情をして見つめる優菜に、御坂は目を逸らさず同じように真剣な表情で見つめ返す。

「御坂さん、貴方のように本当に当麻を愛している人です」

「……」

「使い古された言葉ですが……当麻を愛する心が、彼の幻想をうち殺せるのです」

ふいと優菜は視線を御坂から再び空に向ける。

「だから……当麻を振り向かせたいのなら、彼にまとわりつく不幸を倒して下さい」

「……うん」

優菜の言葉に御坂はしっかりと頷く。

それを見た優菜は、ふわっと朗らかな笑みを浮かべた。

とても安心する、優しい笑みを。

「焚きつけておきながらごめんなさい。私は誰か特定の人を贔屓目で見たり出来ないのです」

「大丈夫です。これ以上甘えるわけにはいきません。私は私の手で

当麻を振り向かせてみせます！」

「そうですか、頑張って下さいね。おっと、そろそろ行かないと、静華がすねてしまいます」

そう言うと優菜はベンチから立ち上がった。

御坂に軽く頭を下げると、そのまま立ち去ろうとした。

「優菜さん！」

そんな優菜の背中に御坂は声をかけて呼び止める。

顔だけ御坂の方を向けた優菜は、疑問符の顔をしながら御坂を見ていた。

「優菜さんは、当麻の事が大好きなんですね」

「ええ、好きですよ」

体を御坂の方に向けた優菜は一瞬の迷いも見せず断言した。

そして、とても優しく暖かな気持ちにさせてくれる笑顔を浮かべながら更に言った。

「ちょっとやんちゃだけど、とっても大好きな弟です」

家族の絆

当麻は普通の表情をしながら内心焦りに焦っていた。
彼にはクリスマスの日にある予定が存在した。
当初は午前中に片づければ問題ないなと考えていた。
しかし両親が今夜訪問するという話で、余裕は一気になくなってしまった。
家族総出で準備にてんてこ舞いである。

（やばい……時間がだんだんとなくなっていく！）

時計を見て時間を確認する。
リミットまで後少ししかない。
これ以上無駄な時間は浪費させる事が出来ない。
多少強引にでも外出するべきだと当麻は思い始めていた。

「当麻ー、そっちの飾り付け終わったー？」

強行突破を考えた矢先に、まるでそれを読んでいたかのように沈利が現れる。
いきなりゲームオーバ状態に陥ったが、それでも当麻は諦めなかった。

「あのー、沈利姉ちゃん？　ちょっと用事があるので、外出したいのですがー？」

しかし相手はレベル５の姉、下手な策などすぐに見抜かれる。
よって当麻は下出に出て何とかやり過ごそうと考えた。

「んー、どこ行くの？」

「ええっと、そう！　ちょっと友人とだね」

「ど・こ・い・く・の？」

何とか誤魔化そうとしたが、そうは問屋が卸さないであった。
しかし当麻には行き先を知られるわけにはいかない理由があった。
特に家族である沈利たちには。

「あ、あのですね……」

他に何か方法はないのかと当麻は考えていた。
そんな当麻を見た沈利は、とても寂しそうな表情になっていた。

「そっか……うん、いいよ」

「うえぇぇ！？　いいの、本当に！」

いきなりの態度豹変に驚いた当麻だが、沈利の表情が今にも泣き出しそうな事に気付く。

「ちょっ！　どうしたの！？　沈利姉ちゃん！？」

「ううん、いいのよ。当麻は悪くない、悪いのは頼りないお姉ちゃんだから」

そう言うと沈利は当麻に背中を向ける。
その肩が僅かに震えている事に当麻は気付く。

「ち、違うよ!?　そうじゃない!!」

「慰めなんていいわ。よけい惨めに感じちゃうし」

「慰めなんかじゃねぇ！　沈利姉ちゃんは俺には勿体ないぐらい最高の姉ちゃんだよ!?」

沈利の肩が一瞬ビクッとなる。
その後、両手で顔をこするような動作をしていた。
恐らく泣き顔を見られたくない、そう当麻は考えていた。

しかし事実は全く逆であった。

（かかったぁ……）

沈利は最初から泣いてなどいなかったのだ。
それどころかニヤリと意地の悪い笑みすら浮かべていた。

そう……当麻の行き先を聞き出すため、泣き真似の演技をしていたのだ。
多少悪いかなと思った沈利だが、当麻がどこに行くかを聞き出す方が優先された。

（第三位と最近仲良しになったと聞く。あんなクソガキに当麻を取られてたまるかよ）

これだけ外出をしたがるのは、きっと女に会いに行く。
そう考えていた沈利である。

「……じゃあどこに行くか教えてくれる?」

「分かった。じゃあ御免だけど、理后姉ちゃんたちを呼んできてくれる？」

「？　最愛やフレンダも？」

「うん……」

訝しげに思った沈利だが、三人を連れてくれば理由が分かると思い深く考えないことにした。
沈利は理后たちを呼びにいくため部屋を後にした。

暫くして沈利は三人を連れて戻ってくる。
三人とも何で呼び出されたか分からず、ずっとハテナマークを浮かべていた。

「呼んできたよ、当麻」

「うん、ちょっと待ってね」

そう言うと当麻は机の中をゴソゴソと漁り始める。
少しして当麻はその手に大きな箱を一つ持っていた。

「本当はもう少し雰囲気を作ろうと思ったんだけど……仕方ない」

「？？？」

ますます当麻のいいたい事が分からなくなった沈利たちである。
だが当麻は沈利たちを無視し、おもむろに箱を開けた。

「これは……」

沈利たちが中を覗き込んで感嘆の息をもらす。
箱の中、そこには小さなラッピングが施されたものが五つ入っていた。

「俺さ……今年の七月に記憶が全部無くなったじゃん」

当麻の言葉に沈利たちはピクリと反応する。
今年の七月、当麻がインデックスを救うために己の記憶を犠牲にした事件。
そこで当麻は家族との思い出を全て失った。
沈利たちにとって忌まわしい過去の話。

「それからずっと必死だったけど……ある時ふと思ったんだ。忘れられるってどんな気持ちになるんだろうって」

「……」

誰も声を発する事が出来なかった。
自分が忘れられる。
たった一言で心がズタズタに引き裂かれるよな痛みを覚える。
それはどんな事よりも恐怖を覚える事だと思った。

「辛い、泣きたい、誰かを憎みたい。そんな気持ちになる……それはとても悲しい事……でも自分の心を守るためにそうしないと耐えられない」

実際沈利たちは泣き叫んだ。どんなに辛い事が起ころうと、必死に耐えてきた。

暗部での仕事で心を引き裂かれても、ぐっと耐えてきた。

「確かにそこにいるのに、まるで存在していないかのようになる」

だけど、耐える理由の人から他人扱いされる。
それは耐えきれないほど心に衝撃を与えたのだ。
心の堤防は一瞬で決壊し、沈利たちは人目も気にせず泣き叫んだ。

「だからさ。例え記憶が無くなろうと、俺たちが家族だって事を認識できる物があればいいんじゃないかって思ったんだ」

そう語った当麻は、大きな箱を机におくと包装されたプレゼントを一つ手に持つ。
まるで壊れ物を扱うかのように、丁寧にそれを持つと沈利に差し出す。

「受け取ってくれ、沈利姉ちゃん。俺からのクリスマスプレゼントだ……」

「う、うん……」

当麻と同じように、まるで壊れ物を扱うかのように丁寧に受け取る沈利。

「開けて……いい？」

丁寧に確認する沈利に、当麻は小さく笑いながら言った。

「開けてくれないと、ちょっと困る。皆も渡したら箱を開けて欲しい」

大きな箱からプレゼントを取り出し、一人一人手渡していく当麻。
プレゼントに視線を落とした沈利は、梱包を綺麗に剥がしていく。
ゆっくりと、丁寧に。

そして全ての梱包が剥がれおちると、小さなケースが姿を現す。
開けてみると、中にはピースのようなものがつけられたネックレスが入っていた。

「沈利姉ちゃん、そのままじっとしててね」

「え？」

沈利の返事を待たず、当麻は箱の中にあったネックレスを取る。
そして硬直したままの沈利の首にネックレスを巻きつける。

「これでよしっと」

そう言った後、沈利と同じように当麻は理后たちの首にもネックレスを巻きつける。
全員に巻きつけ終わると、当麻は自分の分であろう小さな箱を開ける。

「見て気付いたかもしれないけど、これってピースになっているんだよ」

梱包を解き、小さな箱からネックレスを取り出した当麻は、それを沈利たちに見せながら呟く。

「皆のピースを組み合わせると」

全員でスクラムを組むような格好で、当麻は沈利たちのネックレスを組み合わせていく。
パチパチと小さな音を立てて、ピースが一つずつかみ合っていく。

「ほら、全員で一つのものになる」

当麻の言うとおり、ネックレスについていたピースが全て繋がった。
単純な丸い円盤のようなものの中心に何かが書かれていた。

『家族と共に生きる』

短いながらもそれにどれほどの意味が込められているか、沈利たちには分かった。

「沈利姉ちゃん、理后姉ちゃん、フレンダ、最愛……誰一人かけても駄目だ。全員が揃ってこそ家族なんだからな……」

「当麻」

「とうま」

「当麻お兄ちゃん」

「当麻お兄ちゃん」

沈利たちのつぶやきに当麻は小さく笑いながら言った。

「本当は他にも色々と買おうと思ったんだけど……ははは、予定変更って奴だよ」

苦笑いを浮かべながら、当麻はパチパチとピースの結合をはずしていく。

沈利たちは気付く。
当麻が口座から大金をおろした理由を。
この日のために、当麻はあれこれ考えてくれたのだと。

限界だった。
沈利たちはピースが全て外れると同時に当麻に抱きついていた。

「うわぁ！？」

突然の沈利たちによる抱擁に、当麻は為す術もなく姉妹たちと一緒に倒れこむ。
背中を強打したが、それ以上に沈利たちからの抱擁で当麻は頭が一杯になった。

「皆、どうしたの！？」

「どうしたもねぇ」

「嬉しいんだよ、とうま」

「当麻お兄ちゃんが私たちを」

「超大事に思ってくれている事が超分かったので」

沈利たちは更に強く当麻を抱きしめる。
最初はパニックを起こした当麻だが、次第に落ち着きを取り戻して

いった。
完全に落ち着くと当麻は優しく、だけど力強く沈利たちを抱きしめ返す。

「家族皆、ずっと一緒にいよう」

「勿論！」

当麻の言葉に沈利たちは最高の笑顔で答えた。

道の途中

垣根は朝から大忙しだった。
早朝に散髪屋へ行き、開店前の店主を脅して髪を切る。
その後に行きつけのブランドショップへ行き、今日のパーティに着ていく服を吟味する。

無駄に気合いが入っている。
それもそのはず、今回は色々な人間が集まったパーティに参加出来るのだ。
友達と呼べる人物が少ない垣根にとっては、とても楽しみだったりする。

レベル5ともなれば、おいそれと簡単に付き合ってくれる人は少ない。
高レベルの代償として人間らしい付き合いが出来なくなるのだ。
面倒なしがらみが色々とつき、うんざりするような書類に目を通さなければならない。
その分メリットも自分に返ってくるが、やはり息苦しく感じるのは否めない。

レベル5だろうと、誰の目も気にせず気兼ねなく馬鹿をやりたい時だってある。
そして今日はそんな馬鹿な事を行える日なのだ。
だがそれだけではない。
垣根がやる気を出している理由が他にもう一つある。
それが優菜の存在である。

彼にとって優菜はとても大事な存在である。

暗部に堕ちた時、垣根は迷わず優菜を暗部の仕事から外そうと考えた。
だから心理定規と同じで優菜は暗部の仕事を殆ど知らない。
優菜自身も、垣根が何かを思っているのに気付いているようだ。
だから暗部の仕事について何も言ってこない。
垣根もそれでいいと思い、全く何も言おうと考えなかった。

（汚れるのは俺だけで十分さ）

着ていく服も選び終え、垣根は少し早めの昼食をとろうと考えた。
歩きながら考える。自分は優菜の事が好きなのかと。

（好きか嫌いかで答えるなら迷わず好きだ。だけどその好きってどんな好きなんだろうな？）

ナンパをしてあれこれ女性の事に詳しい垣根だが、本当に人を好きになった事は一度としてない。
だから自分の気持ちが、どういった部類の感情なのかが分からない。

（超電磁砲に偉そうに言っておいて、俺はこの様かぁ？）

分からないけど、優菜と一緒にいるととても楽しい。
それだけは理解している垣根である。

（心理定規と同じだな……俺はあいつをどう思っているんだろう？）

（好きと言えば好きだ。だけどその好きが最近分からない……）

（恋愛なのか……単に人間的に好きなのか……それとも）

（あーやめやめ！　あんまり深く考えないでおこう！）

そう思うと強引に思考を中断する。

コキコキと肩をならすと、垣根は食事をするために付近の店を見渡す。

結果、どれもこれも余り興味がわくような店ではなかった。

（なーんか微妙な店ばっかだなぁ。しゃーねぇ、少しだけ歩くか）

そう思うと垣根はふらふらと歩き出す。

正直腹は減っていたが、微妙な食事すら我慢できないほどではない。

垣根は気の向くまま道を歩き出す。まるでそれだけで楽しいと言いたげに。

浜面は周りの景色を恨みがましく思いながら歩いていた。

辺りはクリスマス一色、そしてカップルだらけである。

独り身の浜面としてはとても居心地が悪い。

「まぁ我慢しろ、浜面。俺たちはモテないんだしさ」

そんな浜面の隣を歩く人物が気楽そうに言葉を発する。

少年をジロリと睨むと、浜面は深いため息を吐く。

「ちげぇって……クリスマスってのに俺は何も出来ないなぁって思っただけだ」

「借金満載ってかぁ？　少しは返済出来たのかよ？」

「まぁな、少しずつ返している。その煽りを受けて俺の食卓はいつも質素さ」

「質素なのはいいじゃないか。元々豪華な食事なんて食ったことないくせに」

「うるせぇ半蔵。お前だって食った事ないだろうが」

浜面の言葉に隣の少年、半蔵は「確かに」と呟いた後に笑った。

「ああ……一回でいいな。豪華な飯を食ってみてぇー」

「ぼやくな浜面。望みのない事ほど言ってて虚しいものはないぞ」

「だよなー……ん？」

ふと浜面は視線を遠くに向ける。

はっきりと分からないが、向こう側から見知った顔の人物が歩いてきていた。

しかし一人ではない。見知らぬ女性と歩いていた。

「どうした？　お、すげぇ美人じゃないか。でも俺たちなんて相手にしてくれないよ」

「そんな訳ねぇって」

半蔵の言葉に浜面はニヤリと笑いながら言った。

訝しげな表情をしている半蔵を無視して、浜面は向こうから来る人物の名前を呼ぶ。

「おーい、優菜ちゃーん」

浜面の声で向こうから歩いてくる人物、優菜も浜面の存在に気付く。
朗らかに笑った後、優菜は小さくお辞儀をした。
隣の女性も、優菜がお辞儀したせいか同じようにお辞儀してきた。

「浜面……」

隣にいた半蔵が心持ち真剣な表情で言葉を発する。
そして、そっと浜面の肩に手をおいた後、深くため息を吐いた。

「遂に幻覚まで見るようになったか。いい病院を知っている、少し頭を見てもらえ」

「ちっげぇぇーーー！！」

思わず大声で叫ぶ浜面だが、半蔵は達観したような表情で微笑んでいた。
まるで「分かっている、お前がいいたい事は分かっている」と言いたげであった。
実際、それに近いことを言っているが。

「ごきげんよう、浜面さん。そんな大きな声を出してどうしました？」

半蔵と馬鹿をやっている間に優菜が浜面の元にたどり着く。
優しく微笑む優菜を指さしながら浜面は半蔵に言う。

「ほら見ろ！　俺の幻覚なんかじゃない！　ちゃんと俺の名前を呼んだぞ！？」

浜面の言葉を聞いて、半蔵は顎に手をおいて考える素振りを見せる。
そして優菜の方に視線を向けると、真剣な表情で優菜に問いを投げる。

「お嬢さん、こいつにどんな弱みを握られました？　申し訳ない、こいつがそこまでゲスになっていたとは」

「待てやコラァ！　何で脅迫前提なんだよ！？」

「浜面……安心しろ。お前ならやり直せる、きっとあの人もそう言ってくれるさ」

「何達観した表情してるの！？　違うつってるんだろう！？」

優菜を無視して浜面は半蔵と即席コントを繰り広げる。
その光景を見て思わず優菜はくすくすと笑う。

「ごめんなさい、でもつい可笑しくって」

悪いと思いながらも優菜はくすくすと笑う。
隣の女性はオロオロとしながら優菜を見ていた。

「あ、あの優菜さん。お、お知り合い……ですか？」

「ごめんなさい、風斬さん。こちら当麻の知り合いで浜面仕上さん」

「あ、どうも」

優菜に紹介されたため浜面は頭に手をおいてお辞儀をする。

「こちら私の友人で風斬氷華さん」

一瞬ビクっとなった風斬だが、うつむきながらも浜面に頭を下げる。

「こいつは俺の友達で服部半蔵。まぁ見ての通りお調子者だ」

「誰がお調子者だ」

浜面の言葉に突っ込む半蔵。

半蔵の攻撃を器用に避けると浜面は優菜に話しかける。

「所で何してるの？」

「これから友人を迎えに行く所です。その途中で風斬さんと出会いました。浜面さんたちは？」

その風斬はさっきから優菜の背中に隠れたままである。

時々浜面たちを伺うが、目が合うと慌てて優菜の背中に隠れていた。

「俺たちは虚しく野郎二人でぶらぶらと歩いていただけ。まぁ今日だけ麦野たちの無茶に付き合わさなくてほっとしてるが」

「あらあら、大変ですね。沈利姉さんは人使いが荒いのですか？」

「……大変荒いです……」

乾いた笑みを浮かべながら浜面は答える。
実際何度も死にかけたし、愛車も何台か犠牲になった。
最も、大半は自分のミスから繋がる事なので沈利たちに強く言えない浜面であった。

「あ、そうです」

何か思い出したような表情で両手をぽんと叩くと、優菜はポケットから一通の封筒を取り出す。
そしてそれを浜面に向けると、小さく笑いながら言った。

「もしお暇でしたらでいいのですが」

首を傾げながら浜面は優菜から封筒を受け取る。
妙に質感のいい封筒に視線を落とすと、それはクリスマスパーティの招待状であった。

「今晩知り合い同士でクリスマスパーティをするのです。もしよろしかったらご参加ください」

「うえぇ！　いいの!?」

優菜の言葉に思わず仰天する浜面。
言ってしまえば優菜とは顔見知りというレベルで、こんなパーティを招待されるほど仲が良いわけではない。
街で数回顔を合わせたが、だいたいが情けないシーンだったような気がする。
招待状と優菜の顔を浜面は交互に見る。
その顔は信じられないと言いたげな表情であった。

「ご予定があれば無理にとは言いません。服部さんもよろしかったらどうぞ」

「ん？　俺もいいの？　いや、言っちゃ悪いけど会ったばっかりだよ？」

「これでも人を見る目はあるつもりです。それに浜面さんのご友人なら大丈夫と思っていますから」

「まー俺は異論ないね。浜面と二人で虚しくクリスマス過ごすより百万倍マシだし」

「即決だな、お前は」

余り考えずに決めた半蔵を浜面は呆れ顔で見ていた。
と言っても半蔵の言葉を否定するつもりはなかった。
浜面も半蔵と二人で虚しくクリスマスを過ごす気はなかった。
だが一つだけ問題点があった。

「あーもしかしてこの前会った垣根って人も来る？」

そう、記憶に新しいある事件を思い出しながら浜面は問いかける。
ある日空腹で倒れていた所を、優菜に助けられた。
その後食事を奢ってもらい談笑していた所に沈利と垣根が現れたのだ。

レベル５二人に睨まれるという希少な経験をした浜面。
当然、その後二人から散々脅されたのだ。
優菜が立ち去った後に。

「はい、来ますよ。元々パーティの発案者は垣根さんですから」

「そ、そうなんだー（やべぇ……パーティ参加したら地獄、でも断ったら地獄……どうしよう！？）」

このままパーティ参加すれば、当然ながら垣根と顔を合わせると浜面は思っていた。
その場合、どうやって招待状を手に入れたかすぐにバレる。
しかし断った場合でも結末は一緒だ。
何せ優菜が悲しむ、それは垣根を怒らすのに十分な理由となる。

「ま、まぁ予定はないし参加するよ。ありがとうね、優菜ちゃん」

どっちも地獄なら、せめて旨い物を食べておこうと浜面は考え至った。

「そうですか、ありがとうございます」

満面の笑みを浮かべながら優菜は両手をあわせて言う。
とても人の良い笑みに、浜面は思わず見惚れてしまう。

（本人はいい娘なんだけどなー。周りにいる人物が……）

「あ、すいません。随分と長い間、お引き留めしてしまいまして」

「いやーいいよ。どうせ大した用事ないし」

「あ、あの優菜さん。そろそろ行かないと……」

浜面の言葉に今まで大人しくしていた風斬が言葉を発する。

「あら、大変ですわね。そろそろ静華が拗ねてしまいます」

「友達迎えに行ってるんだったね。ごめんよ、こっちこそ長く引き留めちゃって」

「大丈夫です。では、これで失礼します」

優菜は浜面と半蔵に頭を下げると、二人の横をすり抜けて歩いていく。

風斬も小さく頭を下げたが、下げ終わるとすぐに優菜の右腕に抱きついていた。

「いい娘じゃねーか。お前には無理だから諦めろよ」

立ち去っていく優菜たちを見ながら半蔵が浜面を茶化す。

「バーカ。最初から土俵にたてる訳ねぇだろ」

浜面自身も分かっているのか、半蔵の言葉に笑いながら同意した。

「そういやぁ何処でやるんだ？」

招待状の裏をめくる。

そこには今夜のパーティ場所が書かれていた。

が、その場所を見て浜面は目を疑う。

「……」

何度か目をこするが一向に視界に変化は訪れない。

そんな浜面の行動に半蔵は訝しげに思いながら招待状を覗き込む。

「……なぁ……ここって第三学区だよな……」

「学園都市最高ランクのホテルとかある第三学区だよな……」

「俺たち普段着でいいのかな？」

半蔵はぽつりと疑問を呟くが、その問いに答えられる人物はこの場にいなかった。

昼ご飯

街を無言で歩いていた垣根は気付かないうちにかなりの距離を歩いていた。
しかし未だに目にかなう店を、彼は見つけられなかった。

（なーんか微妙なのが多い……）

しかし腹の虫がそろそろ鳴りそうなぐらい、垣根は腹をすかせていた。
妥協も必要かなと思い立った彼は、ふとある店に目を止める。

（ま、もう食えりゃ何でもいいや）

こだわりすぎた自分に後悔しつつ垣根は店へと入っていった。
店の入り口で立っていると、すぐさまウェイトレスが垣根の元に歩み寄ってくる。

「いらっしゃいませー、何名様でしょうか？」

何とも間延びするような声の持ち主は、垣根に向かって営業スマイル満点で話しかける。
面倒くさいなぁと思いつつ垣根は指を一本立てて一名だと伝える。

「一名様ですねー。ただ今の時間ですと相席となってしまいますがよろしいでしょうか？」

「構わねぇ」

どっちにしろ食べたらすぐに出て行くつもりの垣根。
相席だろうが何だろうが特に気にしなかった。

「了解しましたー。では、こちらへどうぞー」

小さく頷くと垣根はウェイトレスに席へと案内される。
そして案内された席を見て後悔した。
もし時間が戻せるなら、少し前の自分に止めろと言いたくなるぐらい。

（甘いものばっか……）

相席の相手はテーブルに所狭しと甘い物ばかりを並べていた。
ケーキからパフェ、果ては大食いチャレンジしそうなものまで。
甘い物だけをメニューの端から端まで選択しました。
そんな馬鹿な事を言われても納得しただろう。

そしてそのテーブルには、相席の相手が二名いた。
一つ一つ味見しながら食べているゴスロリ風の少女と珍妙な服装をした女性。
どちらも学園都市では余り見ない服装である。
その少女と女性は垣根に全く気付かず会話をしていた。

「ふむ……これはイマイチね。貴方も味見してみなさい、オートクレール」

「……申し訳ありません、アクゼリュス様。私は胸やけで喉を通りそうにありません……」

「そう？　まだほんのちょっとだと思うけど？」

「フラガラッハは耐えきれずに倒れたではありませんか」

「あの馬鹿は一気に食べ過ぎなのよ。甘味物は神への献上品よ、ゆっくり味わないと駄目なのに」

「まぁホールケーキを一気食いしておりましたからね。調子にのり過ぎだったのです」

謎の会話を続ける二人に垣根もウェイトレスも割って入る事が出来なかった。

ウェイトレスなど営業スマイルが崩れ、微妙に顔がひきつってすらいた。

しかしこのままでは問題だと思い、ケーキを味見するアクゼリュスに話しかける。

「あ、あのーお客様。少しよろしいでしょうか？」

「んー？　何よ」

ウェイトレスの言葉に気付いたアクゼリュスが、億劫そうな声をあげながら顔を上げる。

アクゼリュスの紅い瞳に垣根とウェイトレスの姿が映る。

「申し訳ありませんが、こちらの方と相席させてもらってもよろしいでしょうか？」

「相席？」

「はい、現在席に余りがありませんので……よろしいでしょうか？」

ウェイトレスの言葉を聞いてアクゼリュスは垣根に視線を向ける。
垣根は視線がかみあった瞬間、ゾクッと背筋が凍る思いをした。

（……こいつ、普通の人間じゃないな）

垣根の直感が告げた。この女どもは危険な存在だと。
何とか顔に出さずにすんだ垣根だが、手の中は汗でぐっしょり濡れていた。

「ふぅん……いいわ」

アクゼリュスは薄く笑いながらウェイトレスの言葉に同意する。
その言葉にほっとしたウェイトレスは、垣根が席に座るのを待つ。
しかし垣根は一向に座らなかった。

「？　お客様？」

「あ、ああ……すまない。ちょっとぼーっとしていた」

ウェイトレスの言葉にハッとなった垣根は、頭を軽く降りながら席に座る。
その様子をアクゼリュスは愉快そうな笑みを浮かべながら見ていた。

「お客様ー、ご注文はお決まりでしょうかー？」

「ああ、チーズハンバーグセット。ライスは大盛りで頼む」

「ご注文を承りましたー。チーズハンバーグセットお一つ、ライス大盛りで。以上で間違いはないでしょうか？」

垣根はコクリと頭を下げてウェイトレスの問いに答える。

「了解しましたー。では、少しだけお待ち下さいー」

そう言うとウェイトレスはそのまま立ち去る。

ウェイトレスが立ち去った後、アクゼリュスはケーキを食べる事を再開した。

暫くして料理がテーブルに届けられると、垣根は無言のまま食事を取り始める。

アクゼリュスも先ほどのように会話をせず、一人黙々とケーキを食べていた。

垣根はチラリとアクゼリュスとオートクレールを盗み見る。

ゴスロリの少女と、少し豪奢な服装をしたぎりぎり十代女性。

先ほどの会話からゴスロリの少女の方が立場は上のようだと垣根は理解した。

（服装から何から何まで学園都市とはミスマッチ過ぎる）

アクゼリュスが着ているゴスロリ服は、大量のフリルレースがつけられていた。

スカートや裾などの場所にこれでもかというぐらいに。

限りなく黒に近い灰色のゴスロリ服は少女にぴったり似合っていた。

そしてもう一人、隣に忠犬のように座っている女性。

顔からもうすぐ二十歳に見える女性はもっと奇抜な格好をいていた。
白衣に朱色をした緋袴という、いわゆる巫女装束である。
緋袴はズボンのように股から左右に分かれた襠高袴であった。
その上に、千早という神楽や神事の際に身につける衣装を羽織っていた。
ある意味神々しい雰囲気を漂わす女性は、銀色に輝く髪を後ろで一つに束ねていた。

（何こいつら……めちゃくちゃ浮いてるぞ）

巫女装束の女性とゴスロリ少女。
アンバランスというレベルではなかった。
思わず目を疑って何度か見直す事をしてしまう。
それほど異端過ぎたのだ。

（やべぇ……俺もお仲間だと思われたら大変だ）

流石にこんな連中たちと一緒にされるのは嫌だ、そう思った垣根は食事のペースをあげる。
殆ど流し込むような感じになったが、元より食事などどうでもよい垣根である。
構わずドンドンペースをあげていった。

しかしふと視線に気付いて垣根は顔を上げる。
視線の主はアクゼリュスであった。
彼女はケーキを食べるのを止め、垣根の食事を薄く笑いながら見ていた。

「……何だ」

「そこまで急いて食べる事もなかろう。ゆっくり味わったらどうだ」
スプーンをくるくると回しながらアクゼリュスは言う。
テーブルにはあれほどあった甘い物が大半無くなっていた。

「俺の勝手だろ、テメェには関係ねぇ」

垣根の言葉にオートクレールがピクリと反応する。
しかしオートクレールが動く前に、アクゼリュスが手で制す。

「お前は黙っていろ、オートクレール」

「御意」

オートクレールは少しの迷いもなくアクゼリュスの言葉に従う。
しかし視線は常に垣根へと向けており、いつでも動ける体勢であった。

「確かにそうだな……不要な発言であったな」

「……」

「何、単に相席になった相手が奇妙な言葉を発しただけと思ったらいい。何も気にするな」

そう言うとアクゼリュスは垣根の返事を無視して、再び甘い物を食べ始める。
あれだけの甘い物がどこに入っているんだと思ったが、どうでもいいかと思った垣根。
再び自分の食事に集中していく。

（何なんだ、こいつは。マジで分からん……全うな部類の人間でない事は確かだ）

（暗部の人間？　いや……こんな存在感を放つ奴がいたら一発で情報が入る）

（となれば学園都市の外？）

（こいつの素性を調べ上げておかないとな。敵か味方か……）

「アクゼリュス」

アクゼリュスの事についてあれこれ考えていると、ふいにアクゼリュスが名前を名乗る。
最初は意味が分からなかった垣根だが、それが自身の名前を名乗っている事に気付く。

「私が何者か気になるようだな。それでいい、それぐらい警戒心がある方がよい」

「精神系能力者か……」

「そうではない、私の力を『能力』程度と一緒にしないで欲しいな」

心が読まれた事を精神攻撃と読んだ垣根だが、アクゼリュスは薄く笑いながら否定する。

「ふむ……まぁよい。私の正体が知りたいのなら、そうだな……土御門元春、もしくはアリシア・フォン・コルネリウスに『アクゼリ

ュスとは何者か？』と問えば分かる」

「……ふん」

「ふふふ、期待通りだ。君との会話はとても楽しい、素敵で愉快な時間だ」

「それはどーも。俺はテメェが不気味で怖いぜ」

「しかし残念な事にこの時間はもう終わりを告げる」

そう言うとアクゼリュスはスプーンをテーブルに置く。
どうやら食べ終えたらしく、実際に彼女の前にあったケーキ類は全て無くなっていた。

「残念、実に残念だよ」

本当に残念そうな表情でアクゼリュスは席を立つ。
オートクレールも席を立つと、二人は出口に向かって歩き出す。

「機会があれば次も私と会話して欲しいものだ」

レジで精算しながらアクゼリュスは愉快そうに言う。
精算を終えると、アクゼリュスは垣根の方を向いて笑いながら言った。

「なぁ……レベル５　第二位、未元物質の垣根帝督」

「なっ！？　テメェ、何で俺の名前を！」

自分の名前を呼ばれた垣根は、アクゼリュスに問い詰めようと席を立つ。
だが問い詰める前に、彼女の周りに大きな亀裂が生まれる。
それは一瞬で辺り一面に広がり、最後に大きな亀裂が走った。
その瞬間、無数の氷片が舞い散るかのように砕け散った。

「消えた……空間移動能力？　いや、違う……クソッ」

そして砕け散った後、その場にアクゼリュスとオートクレールの姿は消えていた。
残された垣根は、ただ呆然とアクゼリュスが消えた場所を見ている事しか出来なかった。

「何故、あのような真似を？」

「あのような真似って？」

「垣根帝督の事です。何故、力を使ってまであの者を呼び寄せたのですか？」

オートクレールはアクゼリュスの行動が理解できなかった。
最近のアクゼリュスはよく表に出て、色々な能力者と相対している。
いつもは裏から手を回すアクゼリュスには見られない行動であった。

「んー。そうねぇ……強いて言うなら仕込みの時だからよ」

「それだけの為に？」

「家畜は太らせてから食べるに限る、人間の言葉だが言い得て妙ではないか」

「……」

よく分からないと言いたげな表情でオートクレールはアクゼリュスを見る。

その視線を受けて、アクゼリュスは愉快そうに笑いながら言った。

「ゲームの駒はそのままではツマらないだろう？　それなりの餌やりが必要なのだよ」

「しかし、それをわざわざアクゼリュス様がする必要はないかと。私かフラガラッハに命じれば良いではないですか」

仕込みの時、確かにアクゼリュスはそう言った。

しかしその仕込みを、アクゼリュス自身が行う必要はない。

何故、自分たちに命じないのか。それもオートクレールには疑問だった。

「お前たちを信用していない訳ではない。仕込みを自分でするからこそ、それを刈り取る時は何倍も楽しいのだよ」

オートクレールの不満を理解したのか、アクゼリュスは少しだけ慈しむような表情で言った。

深いため息を吐くと、オートクレールは少し疲れたような表情をしていた。

「今度から出来ればご説明をお願いします」

オートクレールが心配そうに言ったが、それを聞いたアクゼリュスは楽しそうな表情をするだけだった。

優菜と別れた御坂は、そのまま常盤台の寮まで戻る。
時間はまだ余裕があったが、御坂はそれどころではなかった。
当麻と会えない事が分かったのもあるが、それ以上に優菜から聞いた話が衝撃的過ぎたのだ。

（とりあえず心の整理をしないと……）

当麻の不幸体質が思ったより根深いものだった事に御坂はショックを受けていた。
確かによく不幸な事に巻き込まれているとは感じていた。
しかしそれが当麻に幸せを感じる事すら奪っているとは思ってもいなかった。

（優菜さんにはあー言ったけど……実際どうすればいいのかしら）

「……か」

（そもそも見えない不幸って……どうやれば倒せられるんだろう）

「……さか」

（電撃でも打てば消える？　そんな訳ないかー）

「おい、御坂！」

「うひゃい！」

思考の渦に陥っていた御坂に、耳元で大声を上げる人物がいた。
肩に置いた手には微妙に力がこもっており、少しだけ怒っている事が伺えた。

「誰よ、五月蠅いわね！　人が考え……ごと……してる……」

いきなり思考を中断するかのように声をかけた人物に怒鳴り散らす御坂。
しかし言い終える前に、言葉が少しずつ尻すぼみしていく。
最後の方には言葉になっておらず、口がパクパクと動いているだけであった。

「ほぅ……人の事を完全に無視しておきながらその態度か？」

「りょ、りょりょりょりょりょ寮監様！」

御坂に声をかけてきた人物は寮監であった。
いつもの様に少しきつめの表情をしていたが、今回だけは少し違っていた。
こめかみに血管が浮かび上がっているのが御坂には見えた。

「御坂、私は考え事をするなとは言わん。しかし、これからあすなろ園に行くのだ。悪いがその考え事は後にしてくれないか」

「は、はい！　申し訳ありません！」

「すまないな。子供たちもお前たちと遊べる事を期待している。心ここにあらずの貴様だと子供たちが不安がるからな」

寮監の言葉で御坂はハッとなる。

元々昼からは寮監と黒子と一緒にあすなろ園に行く予定だ。

（いけないわね。ここは気持ちを切り替えないと）

ひとまず当麻の事情は後にして考えよう、そう結論に至った御坂である。

切り替えが終わると、御坂は準備をするために自分の寮室へと移動した。

気持ちを切り替えた後はすぐだった。

元々準備自体は昨日にすませておいた御坂は、単に鞄を手に持つだけであった。

黒子と部屋で合流し、そのまま寮監に連れられてあすなろ園へと向かった。

「パーティと言っても肩肘をはる必要はない。子供たちと一緒になって楽しんで欲しい」

「はいですの。了解しましたわ、寮監様」

寮監の言葉に黒子は元気よく返事を返す。

御坂を合法的に拘束できて嬉しいのか、それとも御坂と二人だという事が嬉しいのか。

どのように取ればよいかは黒子しか分からない。

しかし傍目から見ても、とても嬉しそうな表情の黒子であった。

（な～んか企んでるわね）

長い付き合いの勘で御坂は黒子が何か企んでいる事に気付く。
嬉しそうな表情も、よく見れば自分オンリーの、涎でも垂らしそうなぐらい恍惚した表情であった。
背中に寒気を感じたが、今日の御坂は気楽に構えていた。
黒子は忘れている、今日のパーティに招待した人物は誰だったのかを。

（子供たちの前で寮監が優しくしてくれるわけないのにねぇ～）

何かすれば寮監から制裁が待っている。
その事が御坂の心を幾分気楽にさせていた。

そして御坂の予感は当たる。
早速馬鹿をした黒子は、寮監からきつい折檻を貰っていた。
黒子を締め落とす寮監を、子供たちはショーか何かかの一環だと思い特に怖がったりしなかった。

「不幸ですのーーーーーーーーー！！」

パーティ自体はそこまで豪華ではなく、それなりに質素な感じであった。
飾り付けも歪であり、所々外れていたりもしていた。

しかし子供たちはとても楽しげにしていた。
皆で笑い、皆で楽しんでいた。
思わずこちらが笑顔になるぐらい、純粋に楽しそうな表情を浮かべていた。

（当麻とクリスマスデートは出来なかったけど……これもありっちゃーありね）

子供たちと一緒にパーティを楽しんでいた御坂。
その表情は童心に帰ったかのように子供っぽい表情をしていた。

（ぐふふふ、お姉様の可愛らしい表情。黒子がメモリーに残さない理由はありませんの！）

そんな御坂を写真に収める黒子。
欲望丸出しの黒子は一心不乱に、御坂にカメラを向けたままシャッターボタンを押す。

（おほほほほ、これで暫くは）

「白井」

しかし黒子は写真を撮る事に集中しすぎた。
一人に向かってずっとカメラを向けていれば怪しまれて当然である。

黒子はシャッターに指をかけた状態で固まった。
否、固まる以外の選択肢など黒子には存在しなかったのだ。
寮監はその手を黒子の肩におくと、黒子に聞こえるだけの声量で囁いた。

「次はないぞ」

頷く以外に選択肢はない黒子であった。

「ふぅ……」

少しだけ疲れた御坂は、外の空気を吸うといって席を外した。

楽しいパーティだが、子供たちは御坂の想像を超えるほどパワフルだった。

無尽蔵にわいているのではと疑えるほどの体力ではしゃぎ楽しんでいた。

（子供って凄いわぁー）

「あのー」

子供のパワフルさに感心していた御坂に、突然横合いから声が飛んできた。

御坂がそちらに視線を向けると、そこには三十代後半の男性が困ったような表情で立っていた。

「申し訳ないんですが、園長室ってどこかご存じですか？」

「あ、ええ、知っていますけど」

無精髭を生やしていたが、その男性はどこか理知的な雰囲気が漂っていた。
その男性を見た御坂は、何ともいえない感覚に囚われる。
一度も会った事がないのに、何故か何処かで見たような奇妙な感覚。
誰かに似ていると思ったが、それが誰かハッキリ思い出せない。

（何か……どっかで見たような気がするのよねぇ……）

御坂は目の前の男性をじっと見つめる。
その視線に気付いた男性は、どこか気恥ずかしい表情をしていた。

「若い子に見つめられるのは悪くないけど、ちょっと恥ずかしいね」

「あらあら、刀夜さんったら。またですか？」

じっと見つめていると男性の背後から若い女性の声が聞こえた。
声が聞こえた瞬間、男性は傍目にも分かるほどビクッと背筋を伸ばしていた。

「か、母さん！　これはだね！」

「あらあら刀夜さんったら。そんなに若い子がいいのかしら？」

無精ひげを生やした人物、刀夜は慌てて詩菜の言葉を否定する。
しかし黒い笑みを浮かべた詩菜は、刀夜の言葉を全く聞いていなかった。

「あらあら刀夜さんったら。病室は洋室がいいですか？　それとも和室がいいのかしら？」

「いきなり入院コース宣言!?　待って、母さん！　落ち着いて話を聞いて！」

このまま放置しておくとバイオレンスな光景になるかもしれない。
そう思った御坂はおそるおそる二人に声をかける。

「あ、あのー？　お取り込み中申し訳ありませんが……」

「は、はい？」

「どっかで会った事ありません？」

フォローのつもりがトドメであった。
恐ろしく大事な部分が足りない御坂の言葉に、詩菜は更に笑みを深くさせていく。

「待って!?　明らかに何か大切な部分が抜けている気がしますよ、お嬢さん!?」

「あらあら、刀夜さんったら。やっぱり若い子がいいのね」

「ち、違う！　私が愛してるのは母さんだけだぞ!?」

この場でなければ愛のささやきだっただろうが、今は状況が悪すぎた。
詩菜は表情を変えずに刀夜に近づいていく。
死のカウントダウンが開始されている感覚になった刀夜は、必死になって詩菜をなだめようと考える。

「おや、上条さん。もう到着されたのですか？」

そこへ場の雰囲気をぶち壊すほど暢気な声が響きわたる。
声の主の方へ全員が視線を向ける。そこにはあすなろ園の園長が立っていた。

「もう少し時間がかかると思っていましたが……」

「は、ははは。ちょっと早く着いたのですよ!?」

園長の登場を思わぬ援軍と感じた刀夜は、必死に園長の言葉に食らいつく。
そんな刀夜を見て、詩菜は大きなため息を吐いた、

「か、上条……?」

御坂の中でピースが一つずつはまっていく。
しかし肝心な部分のピースがなく、御坂は決断を下すかどうか迷っていた。
だが手をこまねいていても始まらない。
意を決して御坂は刀夜に問いかける。

「あ、あの！　えっと……違ってたらごめんなさい」

「は、はいっ!?」

「もしかして……当麻の親戚ですか?」

「……何故息子の名前を?」

刀夜の言葉が耳から脳に入り、そして脳が処理を終えた頃。

御坂の頭の中でぴったりとピースが埋まった。
驚きの余り御坂は大声で叫んでしまった。

「え、えええええええええええええええええええええええええ！？」

「あー当麻を知っているのか。それで何処かで見た事あると言ったのか」

「は、はい」

混乱から戻った御坂は、刀夜から一通りの説明を受ける。
今日当麻の家に行くこと、その前にここに用があるので訪れた事など。

聞いてもいないのに刀夜はあれこれ喋ってくれた。
そして御坂は知った。何故、これほど多くの情報を御坂に教えたのかを。

「当麻の奴、こんなチャーミングで可愛い彼女を放っておいて何をしてるんだ。全く……」

「うえぇ！？　か、かかかかかかか彼女！？」

御坂が瞬間湯沸かし器のように顔を真っ赤にさせる。

口をパクパクさせながら、何か喋っているが残念ながら声にはなっていなかった。

「おっと、ここでいいよ。ありがとうね、お嬢さん」

「あらあら、刀夜さんったら。息子の彼女にまで手を出すのですか？」

「ちょ、待って！　私はそんなつもりは！」

御坂を無視して刀夜と詩菜は園長室へと入っていった。

「ありがとうね、御坂さん。もう、ここでいいわよ」

園長が労いの言葉を御坂に言う。

その園長も固まった御坂を放置して園長室へと入っていった。

残された御坂はただ呆然と立っている事しか出来なかった。

（ど、どどどどどどうしよう！？　で、でも当麻の彼女……）

その瞬間、御坂の顔はだらしなく緩む。

ニヘラと笑う彼女を見たら、誰だって彼女をレベル５だと思わないだろう。

照れと幸せが綯い交ぜになった表情をしながら両手で頬を抑えていた。

頬も赤く染まっており、御坂はその場でくねくねと謎の踊りを披露していた。

後の御坂は語る。
この時に刀夜たちの誤解を解いていれば、あんな事にはならなかったんだろうと。

暴走一方さん

一方通行は頭を抱えて唸っていた。
今更ながら朝食時の台詞を思い返して、恥ずかしさに悶えていた。
その言葉は本心から出た言葉だが、今の一方通行は気付く余裕すらなかった。

（なンか色々と恥ずかしい事ばっかり言った気がするンですがァ！？）

一方通行の考えは正しく、彼は小萌にプロポーズレベルの発言を繰り返していた。
既に言ってしまったし、もはや発言を取り消す事すら不可能だが。

「えへへ～」

何故なら、目の前で幸せそうな表情をしている小萌に、「実はあンまり考えていませンでした」という台詞など言えるはずもない。
言ったらどれほど悲しむか、想像ですら心に痛みが走るのに、まして実際に口に出せるはずなどない。

（うン……もう開き直ってしまえ！）

考えに考えて思考が無限ループに陥った頃、一方通行は考える事を放棄した。
もう思うがまま言えばいいのだ、それなら少しは恥ずかしさも紛れるとの結論に達する。
それは更に恥ずかしい台詞も言える事を意味するのだが、残念ながらパニックを起こしている一方通行は気付いていなかった。

「小萌！」

そして開き直った一方通行は文字通り『最強』だった。
彼は真剣な表情で小萌に向かって告げる。

「クリスマスデートしよう」

（どうしてその台詞なンだァ！）

自分の口から出た言葉が信じられない一方通行は、心の中で頭を抱えながら更に唸っていた。

いきなりの一方通行からデートへ誘われた事に、小萌は何度か視線をさまよわせた後。

「はい」

と殆ど聞き取れないレベルの声量でデートの誘いに応じた。
そこは「先生をからかっているんですかー」とでも言って欲しかった一方通行である。
しかし既に後の祭り、一方通行はデートの誘いをし小萌はそれに応じたのだ。

最初より更に頭を悩ます一方通行。

何だろう、悩めば悩むほど次々にドッキリイベントが開催されている気がする。
そんな思いをしつつ、一方通行は街を歩いていた。
当然小萌と一緒に。

「……」

「……」

（話題が出ない……）

気まずさを漂わせつつ一方通行は小萌と歩く。
気持ちを変えようと、一方通行は周りの景色を視界に入れる。
だが、それは余計な思考に陥らせるだけであった。

煌びやかな街のクリスマスイルミネーションが目にまぶしい。
街を歩いている人間の殆どが、何も知らず平和に過ごしている人間。
そんな中に、真っ黒に染まった自分がいる。
綺麗な水の中に濁った液体が一滴入っている感じに思えた。

（羨ましいのか……俺は）

時々だが一方通行はある事を思う。
もしも自分に能力がなく、ただの無能力者で小萌と出会ったならと。
あり得ない話。だけどそれでも想像してしまう。

（クソ、考え過ぎなンだよ）

（どうなろうと過去は変えられねェ……だったら今をどうするか考えるンだ）

最近陥りがちな心情的思考を一方通行は頭から追い出す。

（それより小萌とのデートをどうするか……デート？）

そこで一方通行はふと気付く。

プランなど考えていたっけと。

そもそもデート目的で小萌を誘ったことなど一度としてない。

買い物に付き合う、酒の晩酌に付き合うなどはしている。

しかしそれは、最初から小萌の手伝いをするという目的があった。

しかしデートはそれがない。

正確にはデートを楽しむという目的があるが。

（どどどどどどどうするンですかァ！？）

冷や汗が一方通行の頬を伝う。

一方通行は学園都市最高レベルの頭脳を持つ。

しかしこの手の知識は余りなく、当然ながら経験などゼロだ。

同年代の女性と接した事も、実は小萌の学校に行くまで一度としてなかった。

それまでは特別教室という名の隔離場所で常に一人の世界だったのだ。

そんな一方通行が、デートという青春真っ只中の事など知る由もなかった。

（三下……は駄目だ。青髪ピアスも土御門も駄目だ……垣根……は死んでも嫌）

誰かにアドバイスを、と考えたが頭に浮かんだ男性陣は尽く駄目であった。
鈍感、そもそも彼女がいない、死んでも頭を下げたくない。

（男が駄目なら女からのアドバイスを考えよう）

（姫神は駄目だ、何か地味な事しか言わなさそう。吹寄は健康デートとか言い出しそうから却下）

（クソガキ共は後でからかうだろうから死んでも嫌だ）

（……駄目だ、どいつも使えねェ……）

八方塞がりとはこの事だ、そう思った一方通行は自嘲気味に笑った。
そんな一方通行を見て、小萌は少しだけ考えた後、彼の手を握った。

「一方ちゃん、深く考えなくていいのです。こういうのは楽しんだものが勝ちなのです」

頬を赤く染めながら小萌は一方通行を諭すように言う。

（……そうだな）

微笑みながら言う小萌を見て一方通行はうだうだ悩むのが馬鹿らしくなった。
考えたって答えはでない、ならば楽しむための行動に出た方がいい。

「そうだなァ……考えたってつまンねェしな。俺たちは俺たちの楽しみ方で行こうかァ」

「そうですー。普段通りが一番ですよ、一方ちゃん」

分かってしまえば後は簡単だった。
何か特別な事をしようと考えず、ただ普段通りの事をすればいい。
それが一番なのだと。

肩への力を抜き気持ちをリラックスさせる。
そうすると、今までパニックを起こしていた一方通行の心に余裕が生まれる。

一方通行は小萌の手を少しだけ強く握ると、頭をフル回転させてデートのプランを考え始める。

「おや、小萌先生じゃん」

「あ、黄泉川先生。こんにちわです」

あてもなく街を歩いていると、二人は黄泉川とばったり出会った。
その黄泉川は普段の緑ジャージではなく、警備員のプロテクターを身につけていた。
恐らく見回りをしていると一方通行は読んだ。

「よゥ、こンな時までお勤めご苦労さン」

こんな時期でも仕事とは警備員も大変だな、そう思った一方通行は労いの言葉を黄泉川に言う。
その言葉を聞いた黄泉川は、目を丸くして驚きの表情をしていた。

「あン？　なンだよ、黄泉川」

「いや、一方通行から労いの言葉なんて貰えるとは、予想外だったじゃん」

その時、何かに気づいた黄泉川が驚きの表情からニヤニヤと意地の悪い表情に変わる。

訝しげに思った一方通行は、黄泉川が向けている視線を追う。

その視線は一方通行と小萌が繋がっている部分、つまり手であった。

「あっはっは、小萌先生も大胆じゃん」

「???」

今だ分からない小萌に黄泉川は指をさして答える。

その指摘で小萌も黄泉川が何をいいたいのか気付く。

しかし頬を赤くするが、繋いだ手を離す事はなかった。

むしろ更に強く握る一方だった。

「えへへー、今日は一方ちゃんとデートなのです！」

何処か誇らしげな表情をしながら小萌は言い切る。

その表情を見て、黄泉川は少しだけ驚きながらも笑っていた。

「ほほぅ……流石一方通行。クリスマスデートとはやるじゃん」

「なンで俺が誘った事だと断言出来るンだ？」

実際一方通行が誘ったのだが、それをサラっと見抜かれた事に驚く。

しかしあくまで平静な顔をしながら黄泉川に疑問を投げる。

「小萌先生から誘ったならもうちょっと言い方が違うじゃん。となれば一方通行の方からだと思うのは当然じゃん」

「……あァ、クソッタレが！　そうですよ、俺から誘いました。なにか悪いか！」

「誰も悪いとは言わないじゃん。むしろ喜ばしい事じゃん、あの朴念仁の一方通行がデートに誘えるなんて凄いじゃん」

「テメェ喧嘩売ってるンですかァ？」

ピクピクとこめかみに血管を浮かび上がらせながら、一方通行は手をチョーカーのスイッチに持っていく。

「あわわー、喧嘩は駄目ですー！」

「……チッ」

慌てて止めに入る小萌を見て、一方通行はチョーカーに当てている手を下ろす。

黄泉川は最初から一方通行の行動を読んでいたのか、最初からニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「悪かったじゃん」

「ふン」

「いやぁ、小萌先生と酒を飲んでると『一方ちゃんが～』とか、『一方ちゃんはですね～』とか、惚気話ばっかりだったじゃん。その

幸せをこちらにおすそ分けしてもバチは当たらないじゃん」

「よ、黄泉川先生ー。それは内緒のはずですー！」

「そうだったかな？　お酒を飲んでたから全然覚えていないじゃん」

絶対嘘だ、一方通行は黄泉川の表情からそう思った。
しかしそれを突っ込む気力は一方通行になかった。
むしろ早く黄泉川の話から解放されたい、そういう思いが一方通行にはあった。

「おっと、これ以上からかっては怖い人が出てきそうじゃん。それじゃ小萌先生、また今度飲みにいくじゃん」

そう言うと黄泉川は手をヒラヒラと振りながら立ち去った。
残された二人は、言いたいだけ言って去った黄泉川を、呆然と眺める以外出来なかった。

「……小萌」

「う、は、はい」

嘘がばれた時のように罰が悪い表情をしている小萌へ、一方通行は視線を向けずに告げる。

「行こうか」

「！　はいです！」

一方通行の言葉に、小萌は満面の笑みを浮かべながら答えた。

退屈を持て余す人たち

一方通行が幸せを満喫している頃。
暗部組織『グループ』の残りの面子は仲良く街を歩いていた。

といっても元から仲良く歩いていたのではなく、街を歩いていたら自然と集まったという方が正しい。
土御門はサングラスとアロハシャツ、そしてその上に学生服を羽織っていた。
海原は至って普通のスーツを着用していた。

しかし結標だけ普段の格好ではなかった。
桃色の布と短いスカートという格好ではなく、ジーパンにTシャツ。
そしてその上にキャミソールを着ているという、いかにも普通な格好をしていたのだ。

「退屈ね」

結標の言葉が全員共通の意識であった。

土御門は妹の舞夏とクリスマスを過ごす予定だったが、何やらメイドの仕事が入ったと言われてご破算。
我侭を言ったら、華奢なグーから想像できないほど暴力的な音を出しながら殴れられてしまった。

海原は毎度ながらストーカーまがいの事をしていたが、御坂があすなろ園に行ってから出来なくなった。
下手にあすなろ園まで入ったら、ロリコンの汚名を貰ってしまう。
自分はノーマルだと、意味不明な供述をする彼は今日も御坂一筋だ

った。

そして結標は同居人とクリスマスを祝う予定だった。
しかし同居人が体調を崩してしまい緊急入院コース。
元々体が強いわけではないが、何もこんな時にと嘆く結標だった。

つまるところ、突然暇を持て余す事になった三人が偶然にも集まったわけだ。
何か予定があるわけでもなく、当然の如く退屈を持て余していた。

「オレは舞夏がメイドの仕事、海原は超電磁砲があすなろ園にいる、結標は同居人が入院。見事に不幸だらけだにゃ～」

「おや、また彼は入院しちゃったのですか」

「そうなのよねー。ここの所調子が良かったから油断していたわ……」

盛大なため息を吐いて、結標はがっくりと肩を落とす。

「難病だからにゃ～。冥土帰しも頭を悩ますぐらいだし、相当辛いんだろうにゃ～」

気楽そうに肩をすくめながら土御門は言う。
こういう場合、無駄に周りが心配そうにしても結標は喜ばない。
その事を知っている彼は、あえて気楽そうに言うことを心がけている。
結標の内心は、同居人が心配で心配でたまらないという事も知っている。

「まぁ明日にでも病室にお見舞いへ行きましょう」

「ん、そうね。あんたたちの面でも見せて、あの子を笑わさせてあげなさい」

「酷いにゃ～。歩君はオレたちを見て笑ったりしないにゃ～」

「じゃあ愉快な芸でもしなさい」

「あの病院にはこわーい看護婦さんがいますからね。下手に騒いだら追い出されてしまいますよ」

下らない会話を続けながら三人は街を歩く。
目的もなくただ歩いていたら、繁華街の方まで来ていたようだ。

「所で」

繁華街をだらだらと歩いていると、突然海原が口を開いた。
なお、土御門は繁華街でチラシを配っているアルバイトのメイドさんにご執心であった。

「結標さんはもう歩君を襲ったんですか？」

「ぶふっ！！　ゲフゲフ！！　お、おおおおおおおおおお襲うって何よ！！」

慌てふためく結標に、いつの間にか結標に視線を向けている土御門と、発言者・海原は適当に首を横に振った。
ジェスチャーは告げる。ショタコンの貴方が何を動揺しているんですか？　と。

「変な事なんてしてないわよ。ただ、ちょっと一緒にご飯食べたり、一緒にお風呂に入ったり、一緒の布団で寝たりしてるだけよ！」

それを聞いた土御門と海原は、傍目からも分かるほど驚愕の表情をしていた。

わなわなと震えながら後ろに数歩下がると、海原はクワッ！！と目を見開いて言う。

「土御門さん、これは事件ですよ。ショタコンの結標さんが手を出していない？　そんな馬鹿な話はありません！」

「同感だ、海原。ここにいる結標は偽物だ！」

「くっ！　自分と同じ術を使うとはやりますね！」

「ちょ、ちょっと？」

何やら結標を放置して盛り上がる土御門と海原。

唖然とする結標を無視して、更に二人はまくし立てる。

「いかん、歩君が危険だ！　海原、ここはオレに任せろ！」

「そうですね。ショタコンの結標さんのためにも歩君を守らないと！」

「ああ、そうだな。ショタコンの結標のためにも」

「誰がショタコンだぁぁぁぁ！！！」

我慢の限界に達した結標は、大声で吠えると軍用ライトをかばんから取り出す。

「いいわ、あんたたち……ちょぉぉぉっとフラストレーションが溜まっていた所なの。少しばかり付き合ってくれないか・し・ら？」

ニコっと満面の笑みの結標だが、その額には青筋がビキビキと浮かんでいた。

やばい、からかい過ぎた。

そう思った土御門と海原だが、気付いた時には既に遅かった。

「（あははは～、逃げるぞ海原！）」

「（言われなくても！）」

今だブツブツと言っている結標を放置して二人は全力で走りだす。

「ふ、ふふふふ。久々に燃えてきたわ、能力の全開放って……っていない！？」

慌ててあちこちに視線を向けると、遠くの方で走って逃げる土御門と海原を見つける。

彼女は座標移動（ムーブポイント）能力者、しかしこんなに人通りの多い所では利用が難しい。

下手に他人を巻き込んで厄介ごとを抱えたくない、その結論に達すると結標は自らの足で追いかける事を選ぶ。

「待てや土御門ぉぉぉぉぉ！！！　それから海原ぁぁぁぁぁぁ！！」

およそ女とは思えないほどの怒声で叫びながら追いかける。
当然そんな状態の結標に捕まりたくない二人は、全力全開で結標から逃げ続ける。
海原はともかく、土御門は全く懲りていなかった。

命をかけた鬼ごっこ開始から三十分。
結果は当然ながら土御門たちの敗北であった。

「全く失礼するわね。誰がショタコンなのよ、私は単に可愛い男の子が好きなだけよ」

それをショタコンと言わないか、と突っ込みたくなった土御門だが止めておいた。
下手にこれ以上機嫌を損ねてデッドレースをしたくなかったのだ。
それは海原も同様の考えであった。

「はぁ……今更ながらだけど、あんたたちと歩を会わせるんじゃなかったわ。私以外に知り合いが出来れば、少しは元気になってくれると思ったんだけど……」

「失礼だにゃ～、海原と違ってオレは悪い影響なんて与えていないぜい？」

「そうですね、土御門さんは悪影響を与えるかも知れませんが、自分は悪影響など与えませんよ？」

どちらもダメ人間なのだが自分には甘いようである。

「ほほぅ……メイドの良さを教え込もうとした土御門と、御坂美琴の素晴らしさを教え込もうとした海原が？　へぇ～、どの口が言うのかなぁ？　分からないから、ちょ～っと色々移動させちゃっていいかしら？」

「「ごめんなさい、もうしませんから許してください」」

まるで示し合わせたかのように二人揃って結標に頭を下げる。
特別な打ち合わせなどなくとも、彼らは息ぴったりであった。

全てが終わると三人は繁華街をゆっくりと歩く。
あれだけ喧嘩しあっても、全てが終われば仲良く街を歩いていた。
喧嘩出来るほど仲がよい三人であった。

「一方通行のお宅に邪魔してもいいけど、行ったら間違いなく息を吸って吐くだけの肉塊にされそうだにゃ～」

「自分は食肉加工品に成形される気がしますね」

「猛獣が住むオリに入るなんて自殺行為に等しいわよ」

三者三様、言いたい放題であった。
しかし言っている事は正しく、今日の一方通行は別の意味で危険であった。
下手に家族パーティみたいなのを邪魔すれば命が幾つあっても足りない。

「そう言えばさ、学園都市の噂なんだけどあんたたち何か知っている？」

繁華街をもう少しで抜ける場所まで来た頃、ふいに結標が何かを思い出したかのように口を開いた。

「どんな噂だにゃ～？」

どうせ碌でも無い噂だと思っていた土御門は適当に答える。

海原はそもそも興味はないのか、何やら電子機器をカチカチと弄っていた。

「学園都市にはどんな病気も治せる治癒の能力者がいるって話」

「へー、そんな能力者がいるんだにゃ～」

碌でも無いどころではない。

学園都市でも最高機密にあたる情報の話であった。

おいそれと知れば学園都市から抹消されるぐらいの。

「その腕は冥土帰しを超え、現代医学ですら治療不可の病気を治したって噂話よ」

「おやおや、そんな人がいれば冥土帰しの仕事がなくなってしまいますね」

「九月頃にその手の実験が色々行われたそうだけど、そっからプッツリ情報が切れているのよね」

「もしいたなら、病院側が諸手を挙げて確保に走りそうだにゃ～」

「まぁね、噂の出所も病院からだし。どうせ死を待つ病人が妄想を流したのかもね」

肩をすくめながら結標は気楽そうに言う。
彼女は最初から信じておらず、単なる噂話だと思い込んでいた。
だが、土御門たちが何か知っていればもしかしたら、という望みも僅かばかりあった。

（妄想じゃなくて本当の事なんだけどにゃ～。しかもお前はよく出会っていたりするんだがにゃ～）

（だけどこればっかりは言えない。教えればお前も歩君も俺も海原も誰もが不幸になるだけだにゃ～）

（彼女がお前の事情に気付いて手を貸す以外にないんだにゃ～）

（すまん、結標）

心の中で謝罪の言葉を述べると、土御門は心情と反対に笑みを浮かべた。

「退屈だしクラスメイトのパーティにお邪魔するかにゃ～。海原と結標もどうだにゃ～？」

優菜の能力は秘匿扱いにされているが、一つだけ例外が存在している。
彼女が信用に値すると踏んだ人間にはその話が適応されない。
だから何人か彼女の能力を知っている人がいる。

勿論、学園都市から監視下におかれるが、今の所問題が出た事は一度としてない。
ならば結標が優菜と強い信頼関係を築けられれば可能かもしれない。
そう思った土御門は、結標と海原を優菜が開くパーティに誘ってみる。

「いいわよ、どうせ退屈だし」

「自分も構いません。と言ってもそう簡単に入れるのですか？　自分たちはそのクラスメイトさんと面識がありませんし」

「問題ないにゃ～。きっと彼女なら気軽に迎え入れてくれるにゃ～」

心配する海原に土御門は極めて気楽に言った。

2023

パーティ

学園都市は学生の街である。
基本的に完全下校時刻を過ぎれば家に帰らなくてはならない。
それは冬休みだろうが、クリスマスだろうが。
例えパーティの主催者がレベル5であろうが。
全ては公平に扱われ特別扱いはなかった。

しかし何事にも例外はつきものである。
子供だけで夜まで遊んではいけないが、大人が監視していれば辛うじて許される。
当然ながら、優菜が主催するパーティも夜遅くまでやるので大人が監視する事となった。
普通ならレベル5が存在するパーティなど、怖くて監視など不可能だがこの人物だけは違った。

緑色のジャージを着た黄泉川と、地味っぽい服装をした鉄装は目の前のホテルを見上げていた。

「先輩、ここってホテルですよね」

「見りゃ分かるじゃん。それがどうしたじゃん？」

鉄装の言葉に黄泉川は面倒くさそうな雰囲気で答える。

2024

「どうしたじゃありませんよ、先輩！　このホテルって一番安い所でも一泊すれば、私の給料が一ヶ月丸ごと消えるような場所ですよ！？」

ホテルを指さしながら黄泉川に食って掛かる鉄装。
だが何を気にしているか分からない黄泉川は、呑気な表情をしながら言った。

「別に私らが払うわけじゃないじゃん。今回は子供たちが馬鹿やらないように監視するだけじゃん」

「で、でしたら場所ぐらい教えて下さいよ！　そうすればこんな普段着で来なかったですよ……」

「だーれも気にしないじゃん。招待状にも普段着でオーケーって書いているじゃん」

黄泉川の言葉に鉄装は頭を抱えて唸った。

『この後、子供たちのパーティを監視するんだが、鉄装もどうじゃん？』

『何、気楽に構えていればいいじゃん。いるだけで旨いものが食えて、旨い酒が飲めるじゃん』

数時間前、黄泉川が言った台詞を思い出す。
懐が厳しめだった鉄装は、黄泉川の言葉に深く考えずオーケーを出した。
ちょっとした店で、ちょっと良い物が食べられる。

その時の鉄装はそう考えていた。

まさかこんな所に連れて行かれるとはつゆ知らず。

開催場所に到着し、ホテルを見て真っ青になった鉄装。

そして現在のように黄泉川に食って掛かっていた。

「ほれ、とっとと入る。ここで喋っても邪魔なだけじゃん」

「うわぁ！　ちょ、ちょっと先輩！？」

面倒に思ったのか、黄泉川は鉄装の襟首を掴むとズルズルと引きずりだした。

慌てて逃げようとした鉄装だが、思いの外黄泉川の力は強く問答無用で引きずられていった。

「ようこそ、当ホテルへお越しいただきました」

ホテルに入るとすぐにボーイが黄泉川たちに声をかける。

「これに招かれたじゃん」

「拝見させて頂きます」

招待状を恭しく受け取ると、ボーイはその招待状に視線を落とす。

何度か手紙を確認すると、それを恭しく黄泉川に返す。

「ご確認させて頂きました。こちらへどうぞ」

招待状を受け取ると、黄泉川はボーイの後について行く。

鉄装も諦めがついたのか、大人しく黄泉川の後をついていった。

この時、鉄装はカチコチに固まっていて気付いていなかった。

なぜ、普通のエレベータを無視して、その奥にあったエレベータを利用したのか。

そのエレベーターは階を示すボタンがなく、開閉ボタンしかなかったのを。

「……」

「……」

ホテルを見上げた浜面、半蔵の二人は硬直し固まっていた。

招待状を受け取った後、二人は時間潰しと街をブラブラと歩いていた。

そろそろ時間かな、と思った後着の身着のまま開催場所にやってきたのだ。

その時の二人はこう思っていた。

『まぁ開催場所が第三学区ってだけで、そこまで豪華なホテルとか利用してないだろうな』

『単に広い場所が欲しかったから、どっかのホテルを利用しただけさ』

パーティをするぐらいだから、どこかのホテルを利用した。

その程度の気楽さで構えていた二人は、開催場所のホテルまで来てから後悔する。
ちゃんと調べておけよ俺たち、と。

「なぁ……どうするよ」

「どうすると言っても……入らないわけには行かないよなぁ？」

互いに顔を見合わせながら言う。
確かにここで唸っていても、何も解決しない事は明白だ。
結論に至ると、浜面と半蔵は内心ビビリながらホテルへと入る。

「うぉぉ……」

「すげぇなぁー」

二人は感嘆の息を漏らす。
外装も立派だったが、内装も負けず立派だった。
明らかに豪華さの質が他と違っていた。

「ようこそ、当ホテルへお越しいただきました」

呆けた顔をしている二人にボーイが歩み寄る。
その声でハッとなった浜面は、慌てて招待状をポケットから取り出す。

「お、俺たちこれに招かれたんだけど！」

近寄ってきたボーイに、浜面は少しだけパニックを起こしながら招待状を渡す。

半蔵は浜面を無視して、辺りをキョロキョロと忙しなく見ていた。

「拝見させて頂きます」

招待状を浜面から恭しく受け取ると、ボーイはその招待状に視線を落とす。

「ご確認させて頂きました。こちらへどうぞ」

浜面へ招待状を返すと、ボーイは二人を案内する。
二人は一度顔を見合わせると、おっかなびっくりな表情でボーイの後へついて行った。

「（なぁ……さっきエレベーターを無視したけど何でだ？）」

「（実は階段で上がれるとか？）」

ボーイがエレベーターを無視して更に奥へ移動したことに疑問を持つ二人。
その疑問はすぐに解消された。
エレベーターより更に奥へ進むと、明らかに専用のエレベーターが見えたのだ。

「（何やら嫌な予感がするが、大丈夫かな半蔵？）」

「（奇遇だな浜面。俺も嫌な予感がプンプンしているんだ）」

ヒソヒソと話し合いながらエレベーターに乗り込む。
開閉ボタンしかない事が、彼らに嫌な予感を感じさせるのを増幅させていた。

そして二人の嫌な予感は的中する。
エレベーターから降りるとそこは別世界だったのだ。

「お、おおぅ……」

「浜面、この場合なんて言えばいいか分からん」

「俺に聞くな。素直にスゲェとしか言えんわ」

「だなぁ……あそこが受付のようだ。とりあえず移動しよう」

キョロキョロと辺りを見渡していると、半蔵が受付場所を見つける。
二人は周りに視線を向けながら近づいていった。

「いらっしゃいアルよー。招待状はお持ちアルかー」

「あ、これ……」

受付に座っている人物に促されて、浜面は持っていた招待状を手渡す。
それを受け取ると、受付の人間は招待状を奇妙な機材の中に入れる。
数秒後、ディスプレイが緑色に輝き出した。

「問題ないアルねー。悪いけど氏名をこちらに書いてほしいアルー」

そう言うと氏名を記入する用紙を浜面たちに向ける。
ちらっと見てみると、既に何人か記入されていたがどれも知らない名前であった。
しかしよく見ると、一人だけ知っている人間の名前が書かれていた。

「（うぼっ！　黄泉川の名前がある！？）」

「（何ぃ！　あの人がいるのか！？）」

浜面の言葉に反応した半蔵は、浜面が手に持っている用紙を強引に奪い取る。
そして記入者リストをじっくりと上から順に見ていった。

「（マジだ……）」

下から数えて数個上の欄に『黄泉川愛穂』の名前が書かれていた。
心の中でガッツポーズをした半蔵だが、当然ながら顔には出さなかった。

「名簿眺めていないで早く書いてくれアルよー」

その言葉にハッとなった半蔵は、慌てて自分の名前を記入する。
半蔵から名簿を受け取ると、浜面も自分の名前を記入した。
その後、名簿を受付の人物に渡す。

「汚い字アルねー。まぁ読めない事もないしいいアルかー」

「余計なお世話だよ！」

受付嬢の毒舌に思わず突っ込む浜面だが、受付嬢はどこ吹く風であった。
名簿に視線を落とすと、二人の名前を読み上げる。

「服部半蔵に……えーと、馬面仕上アルかー？」

「浜面だよ！　どう見ても馬に見えないだろう！？」

「アイヤー、ウチは日本語読めないアルねー」

「テメェ思いっ切り日本語喋ってるじゃん！？　というか日本語読めなかったら、受付嬢出来ないじゃねぇか！？」

「ワタシニホンゴワカリマセンアルネー」

「カタコトで言っても日本語だよ、それ！」

「Ｉ　ｃａｎ'ｔ　ｓｐｅａｋ　ｔｈｅ　Ｊａｐａｎｅｓｅ」

「何で英語なんだよ！　もう日本語から離れすぎてるだろテメェ！」

受付嬢がからかい、それを浜面が突っ込む。

即席のコントを受付で繰り広げる二人だが、何事もやりすぎはよくない。

その罰と言いたげに、突然受付嬢の頭に何かが振り下ろされた。

「あいたっ！？」

スパーンと小気味良い音を当てたそれは厚紙で出来たハリセンだった。

浜面が驚いてそちらに視線を向けると、蒼色を基本としたアオザイを着た女性が立っていた。

受付嬢が赤色を基本としたチャイナドレスだったので、まるで正反対の格好だなと浜面は思った。

「何するアルねー！」

「関西人、突っ込み必要、言ったのは貴方」

そう言うともう一度ハリセンを受付嬢の頭に振り下ろす。
スパーンっ！！　と、かなり暴力的な音が辺りに炸裂した。
盛大なコントを繰り広げる二人に、浜面と半蔵はただ唖然とする以外なかった。

「受付、仕事する、遊んだら、主様、迷惑かかる」

「わかったアル！　でもそのハリセンの使い方はよくないアルー！」

「？？？」

受付嬢の言葉にアオザイを着た少女は首を傾げる。
それらを無視して、受付嬢はハリセンをアオザイ少女から奪い取る。

「こうやって手首を使うアルー」

「……了解、理解した」

何度か振り方を受付嬢が実演すると、アオザイ少女はコクリと小さく頷いた。
ハリセンを受け取ると、アオザイ少女は秒の迷いも見せずそれを振り下ろした。
受付嬢の頭に。

ズバァーン！！　と、受付嬢の頭蓋骨が深刻な事態になりそうな音が炸裂する。

喰らった受付嬢は恥も外聞もなく両手で頭を押さえてのた打ち回っていた。
チャイナドレスがとんでもない事になっていたが、彼女はそれに気付くほど余裕がなかった。

「うん、いい」

反対にアオザイ少女はとても満足気な表情でハリセンを見ていた。

初めてのクリスマス

第七学区のとある病院には妹達が十二人いる。
本来なら学園都市には数人程度のはずだったが、彼女たちにはとある特殊な技術が使われていた。
それはＤＮＡ型人格プログラムというシステムである。

本来の人格プログラムは決まった性格しか形成できない。
十二人いれば、全員が同じ性格になるのが基本だ。
しかしＤＮＡ型人格プログラムは、小さな人格プログラムをＤＮＡのように組み合わせている。
数十万、数百万とも言われる膨大なデータの、その一部を書き換えるだけで全く違う性格を形成できるのだ。
故に試験的に学習装置（テスタメント）でインストールされた、十二人の妹達は他とは全く違う性格をしていた。
その技術を盗まれないよう、学園都市で十二人を保護する事にした。

確かに書き換えるだけで、全く違う性格を生み出せるのは画期的であった。
一見便利に見えるプログラムだが、ある一つの問題を抱えている。
それはインストールしなければどんな性格になるか、全く予想がつかないという問題であった。

「ん～、仕事終わりっと」

美鶴は椅子に持たれながら背伸びをする。
肩をコキコキと鳴らすと、周りの機材に影響がでないよう注意しながら電気を体に流す。
筋肉に電気を流してほぐす、所謂電気マッサージである。
電撃使いの特権（エレクトロマスター）だな、と美鶴は思っていた。

「ったく上条の奴、まさか一万枚のクリスマスカードを送ってくるとは思わなかったぞ」

中身のない段ボールを眺めつつ美鶴はぼやく。
数日前、何の前触れもなく段ボールが数箱この病院に送られてきた。
宛先が美鶴宛だったので、最初は何か分からず訝しげに思っていた。
その段ボールにはクリスマスカードが入っていた。
それも一つ一つ、当麻が書いたメッセージ付きの。

不器用ながらもそれに一つ一つの気持ちが込められている事ははっきりと分かった。
おそらく何度も何度も考えては、書くメッセージを決めていったんだろう。
数日、もしかしたら一週間近くかかっているかもしれない。

「ったく、こんな『重い』もん用意しやがって」

そう言いながらも、どこか嬉しそうな表情を美鶴はしていた。
予想外も予想外だった。よくて気合いの入ったクリスマスカードが用意されるだけ。
悪くて自分たち十二人にしか用意されない。
当麻の財政を考えれば、どういった結果になるかは火を見るより明

らかだった。
なのにその幻想をぶち壊してくれた。それが美鶴には嬉しかったのだ。

（私も頑張ったぞ、上条）

届いたクリスマスカードだが、全てのカードには送り先が書かれていなかった。
当然だが、当麻は妹達の誰が何処の研究所にいるか知らない。
そこで最も知っていると思われる美鶴に、全てのクリスマスカードを送ったのだ。

（サービス残業とか、味な真似してくれるじゃない。今度、何か奢ってもらうかね）

恐らく「不幸だー！」とか言いながらも付き合ってくれる当麻を想像する。
そこそこ愉快な光景になるかもな、と思ったら美鶴は自然と笑みを浮かべていた。

「あ、姉御……ってミサカは……姉御を呼んでみる」

机を片づけて最後に冥土帰しの所に挨拶へ行こう。
そう考えていた美鶴の背後から、誰かが声をかけてきた。

「んあ？　なんだ美静か」

美静と呼ばれた人物は、どこかビクビクと怯えながら美鶴に声をかける。
辺りをキョロキョロと忙しなく確認してから、小動物を思わせるよ

うな動きで美鶴に近づく。

「ここまで出てくるとは珍しいな。どうしたぁ？」

「……準備が出来たから……呼びにきたって……ミサカは理由を説明する」

「あー分かった。こっちもボスに挨拶したら終わりだ」

「ん……じゃあミサカもついて行く……ってミサカは姉御の裾を掴む」

「構わんが結構人とすれ違うぞ？」

美鶴の言葉に美静は少しだけ視線をさまよわせた後、もう片方の手でぐっと力拳を作った。

「頑張る……ってミサカは気合いを入れる」

「ほほぅ、人見知りの美静がねぇ。これは明日雹でも降るかぁ？」

冷やかす美鶴の言葉に、美静は頭をぶんぶんと降って否定する。

「昨日の美静……とは違うって……ミサカは言ってみる」

小さくガッツポーズをしながら言う美静だが、その瞳に小さな涙が溜まっていた。

美鶴はそれを敢えて無視し、小さく笑いながら言った。

「じゃあ見せてもらおうかぁ？　美静」

数十分後、冥土帰しに挨拶をした美鶴は半泣きの美静を慰めながら歩いていた。

「もう泣きやめよ」

「グズッ……ン……頑張る……ってミサカは……グズッ……言ってみる」

「ほらほら、これからパーティなんだから。そんなしみったれた顔してんじゃねぇ」

多少強引にガシガシと頭を撫でながら美鶴は言った。
美静を慰めていると、美鶴の目に走りながらこちらに向かってくる人物が見えた。

「おっほーい、姉御ーってミサカは大声で呼んでみ……ひぐっ！」

「病院では静かにな、美冬ちゃ～ん」

両手をブンブン振ってアピールする美冬に、美鶴は器用に襟首を掴むとそのままズルズルと引きずり始めた。

「姉御っ！　マズイ！　スカートの中が世間様に公開される！ってミサカは必死に逃げようとする！」

「どうせガキの縞パンなんぞ、特殊な趣味を持った人間しか興味ないだろう。例えば白もやしとかなぁー？」

「恥じらいの問題である！　私はクールビューティーなのだっ！　世間様にパンツ公開なぞクールビューティーの名が泣くってミサカはジタバタと暴れてみる！」

言葉通りジタバタと暴れるが、それが余計スカートを凄い状態にしているのだが、残念ながら美冬は気付いていなかった。
面倒に思った美鶴は、小さくため息を吐くと予告なしにその手を離した。

「おぐふぁっ！」

ゴンッと美冬の脳に深刻なダメージを与える音が廊下に響く。
両手で頭を押さえて悶絶する美冬に、美静はオロオロとしながら言った。

「み、美冬ちゃん……だ、大丈夫？……ってミサカは尋ねてみる」

「おおぉぉぉ……姉御の一発はキクぜ……とミサカはクールビューティーのように決める」

ニヒルに笑いながら親指を立てている美冬は、言っては悪いがクールビューティーと対極の位置にいた。

（こいつ絶対にクールビューティーの意味を履き違えているよなぁ）

美静とコントを続ける美冬を、美鶴は生暖かい目で見ていた。

その後、美冬をたたき起こすと、美鶴はクリスマスパーティ会場に向かう。
会場といっても病院内の一角で行うので、それ程時間はかからず到着した。
そして扉を開けると、呆れた光景が目に入った。

「ふふん、貴方たちと違うのですよっとミサカは某赤い人の台詞を言ってみる」

「くっ、上ちゃんからプレゼント貰ったからと言って、調子にのるなよっとミサカは吠えてみる」

「美月ー、アレは本当に上条からのプレゼントなのか？　とミサカは疑問を口にする」

「本日の上条当麻は午後に一度外出している。その時に御坂妹と出会い『たまたま』露天商の商品を買ってやっただけだ。よって意図的なプレゼントとは言えない、とミサカは事実を口にする」

「何故それを知っている！　とミサカは驚愕を顕にします」

「ふふん、美月にスネークを依頼したのさーっとミサカはねたばらしをする」

「美月ー、お姉様の痴態写真はまだかよーってミサカは不満を口にする」

「前回の失敗が痛手だった。姉は私を警戒しているのでなかなか近づけない、とミサカは現状報告をする」

「姉様は漫画読んでる時は隙だらけだぞっとミサカは情報を提供してみる」

「このスクラップ獣をボコボコにしてやるっとミサカは今度こそリベンジをすると誓う」

「美空がまたゲームに熱中して違う世界に飛んでいるんだが、誰か何とかしてやれっとミサカは他人に丸投げしておく」

「では、オレが命をかけて手に入れた一方通行のシャツでも被せてやろう、とミサカは懐からシャツを取り出す」

カオスであった。

表情は違うが同じ顔の人間が、それぞれ好き放題に喋っていたのだ。

人によってはショックで固まってしまうだろう。

事実、美冬と美静はショックで固まっていた。

二人とも妹達が沢山いるのは知っていたが、十人以上が集まった経験など一度としてない。

二、三人ならギリギリ一卵性と言い訳が出来るのだが、それが十人もいればその言い訳は通用しない。

その為に外出は難しく、また病院内でも数人を一グループとして部屋割りされている。

よって学園都市にいる妹達が全員集合するのは、これがほぼ初めて

と言えた。

美冬と美静は呆然と、目の前の光景を見ていた。

しかし、妹達の中でも上位個体である打ち止めにつぐ権力を持つ人物。

美鶴だけは肩をプルプルと震わせながら、下を向いていた。

その事に気づいた美冬と美静は、肩を寄せ合ってヒソヒソと話しあう。

「（マズイ、姉御はご立腹だぞってミサカは言ってみる）」

「（皆……好き放題やってるもんね……ってミサカはこの後の光景を想像して涙目になる）」

自分たちの会話に熱中しているのか、他の妹達たちは美鶴たちに気付いていない。

そのせいか、部屋の飾りつけを微妙に破壊していたのだ。

勿論、クリスマスに向けて部屋の飾りつけをしたのは美鶴である。

仕事の合間を縫って、少しずつ整えていたのだ。

そんな妹達たちに向かって、美鶴は息を大きく吸うと大声を上げた。

「全員！　整列しやがれぇー！！！」

その声に妹達たちはビクッと反応する。

おそるおそる声の方を向くと、そこには怒りメーターマックスの美鶴が立っていた。

「あ、姉御……とミサカは……」

「い・い・か・ら・整列しろ！」

美鶴がそう言った瞬間、妹達たちは軍隊仕込みのように綺麗に整列する。

「ミサカ００００１号　美冬！」

「ひゃい！ってミサカは返事をする」

美鶴の声に美冬は背筋を伸ばして答える。
ここで下手に機嫌を損ねると、美鶴から痛いお仕置きが待っている。
誰もがそれを回避しようと思い、極力美鶴の機嫌を損ねないようにしていた。

「ミサカ００００２号　美静、ミサカ００００３号　美秋、ミサカ００００４号　美夏、ミサカ００００５号　美春、ミサカ００００６号　御坂妹、ミサカ００００７号　美月、ミサカ００００８号　美里、ミサカ０００１１号　美空、ミサカ０００１２号　美朱。ちょっと頭・冷・や・し・て・み・る・か？」

美鶴の言葉を聞いて、全員が一斉に首を横に振る。
しかし美鶴は額にビキビキと青筋を立てながら告げる。

「全・員・お・仕・置・き・だ」

美鶴の宣言と同時に妹達の悲鳴が木霊した。

グループとスクール

「凄いホテルだにゃ～。流石にレベル5は資金力が違うにゃ～」

優菜の招待状を片手に、土御門はホテルの内装を見る。

学園都市の中でも最高ランクに位置するホテルは、外見も内装も豪華であった。

元々は、学園都市外にいるＶＩＰなどを対象としているので当然と言えば当然だが。

「レベル5？　一方通行が借りているの？」

土御門の言葉に結標は疑問を口にする。

レベル5と言えば、結標や海原が思いつくのは一方通行ぐらいである。

あらゆる意味で金の使い方が狂っている一方通行は、グループ内でもかなり有名であった。

例えば一方通行が住んでいる高級マンション。

キッチンやバスルームは平均的な大人の身長に合わせているので、当然ながら小萌では使いにくい。

そこで一方通行が何をしたかというと、全て小萌が問題ないように部屋を大改造してしまった。

当然ながらマンションの管理人が文句を言うが、一方通行は管理人を説得（きょうはく）した。

そして、すぐに使えるように超特急で突貫工事をしたのだ。

勿論かかった資金は半端なく巨額だが、一方通行は何事もなく「カードで」の一言で片づけてしまった。

そう、一方通行は小萌が絡めばお金の使い方が限りなく狂っているのである。
今回もその手の物だと結標や海原は思っていた。

「違うにゃ～。今回は垣根が借りているにゃ～」

「ちょっと!?　垣根って言ったら!」

「スクールのリーダーで、レベル5第二位ですね」

さらっと言う土御門に、結標と海原はぎょっとした。
暗部組織同士、仲がいいかと言えばそうではない。
個人個人の繋がりはあるが、組織同士で言えば仲は結構悪い方だ。
それはやはり組織的な思惑が絡んでしまうからだろう。

「問題ないにゃ～。今回は個人的な関係で入るしにゃ～」

「……組織間のもめ事に発展しないでしょうね」

「そこまで垣根もアホじゃないにゃ～。スクールとグループが紛争しても、お互いにメリットはゼロにゃ～」

その言葉に海原は納得したように頷いた。
結標も言われてみれば、といいたげな表情をしながら納得した。
しかし万が一、という言葉がある。
その辺りをどう考えているか、二人は土御門に質問してみた。

「まぁスクールは今ちょっと変わっているにゃ～。お前たちの情報はちと古いにゃ～」

「？？？」

「ま、すぐに分かるにゃ～。おっと、こっちから入るようだぜい」

目の前の扉を土御門は警戒心ゼロで開ける。
ココまで来た以上、覚悟を決めるかと二人は思った。
そして土御門が扉を開ききると、二人は目の前に広がる光景に目を見開き驚いた。

結標と海原が目を見開いて驚いた光景。
それは、額が床につきそうなほど平伏して土下座している垣根と、その垣根の頭を踏んづけているドレス姿の少女、心理定規であった。

「で、誰の胸が慎ましやかですって？」

「いえ、そんな事は申しておりませぬ」

「へー、ほー、優菜の胸と私の胸を指さしながら言っていた人がぁ？」

「な、何でそれを！」

心理定規の言葉に驚いた垣根は、思わず驚きの表情を心理定規に向ける。
それを見た心理定規は、眉を大きく釣り上げながら言った。

「やっぱり言ったじゃない！」

「しまったぁ！？　誘導尋問とはやるな、心理定規！」

「うっさい、このスケベ！」

その瞬間、垣根の首からゴキッと聞こえてはいけないレベルの音が発生する。
どうやら心理定規がかなり強めに垣根の頭を踏んづけた様だ。

「いってぇ！？　お前手加減しろよ！　俺じゃなかったら死んでるぞ！？」

「うっさい、女心が分からない馬鹿には丁度いい罰よ！」

「いやだってよ、お前この中で一番ごはぁっ！」

何か言い掛けた垣根だが、言い終えるより早く心理定規の蹴りが顔面に飛んだ。
綺麗に決まった蹴りは、垣根の顔にクリーンヒットしていた。

「かっきーはん、幼なじみがいる上にツンデレとかどんだけ勝ち組やねん！」

「いてて、でも結構痛いんだぞ」

「垣根君。破廉恥すぎる。その怪我は自業自得」

「全く垣根は……もう少し言葉を選べ。女性にとって胸のサイズはコンプレックスになりやすいんだぞ」

「吹寄が言うと嫌みにしか聞こえないんだが……」

目の前の光景に理解が追いつかず、海原と結標はその光景を呆然と眺めていた。

しかし理解が追いつくと、思わず土御門の方に視線を向ける。

その視線は「何なの？　あれが第二位なの？」と言いたげな視線であった。

「あれが今の垣根だにゃ～」

二人の視線を余裕で受けながら土御門は言った。

「信じられないわ。一年前……かしらね。一度第二位を見たけど、はっきり言って凶暴な獣にしか見えなかったわよ」

「それが今ではアレですか……一体何があったんでしょうね？」

その答えが分からない二人は終始首を傾げるだけであった。

土御門は答えが分かっているが、教える気はないらしく二人を見ながらニヤニヤと笑っていた。

「だから！　今日はちゃんと招待されたんだって！？」

二人が呆然と垣根を眺めていると、少し奥の方で誰かが言い争っていた。

そちらに視線を向けると、緑色のジャージ女とチンピラ臭漂う人物が口論していた。

「浜面ー、それを信じろって言われても無理があるじゃん。お前と

優菜の接点がゼロなんだからじゃん」

「いやいや、気持ちは分かりますがね。俺もあんな美人と知り合いになれるなんて、人生に一回あるかないかの奇跡だしさ」

「……言ってて虚しくならないかじゃん？」

「少し……と、とにかく俺は招待されたの。嘘だと思うなら優菜ちゃんに確認してくれよ」

そこで浜面は気付く。黄泉川は浜面をニヤニヤしながら見ていたのだ。

からかわれていた、その事に気付くと浜面は思わず叫ぶ。

「テメェ最初から分かっていたんだろう、このクソババァ！」

「いやぁ必死に否定するお前が可愛いからついじゃん」

「うがぁぁぁぁぁぁぁ」

浜面が叫んだ瞬間、メキャッ！　と危険きわまりない音が響く。

よく見れば、浜面の頭に木刀がめり込んでいた。

「うるさい、主様、お耳が汚れる、お前、そろそろ黙る」

がに股状態でプルプルと震えている浜面。

何か言いたそうにしていたが、襲ってくる痛みに耐えるので精一杯のようである。

「アイテムの下っ端もいるし……暗部組織の人間がオンパレードね」

「自分たちがいても大丈夫なんでしょうか？」

「気にするな。今日の主催者は垣根だが、本当の主催者は別にいるにゃ～」

そう言うと土御門はコントを繰り広げる二組を無視して、会場の奥にいる三人組に歩み寄る。

「いよう優菜ちゃん。今日はお邪魔するにゃ～」

気楽そうな表情で土御門は優菜に声をかける。
声で気付いたのか、優菜は小さく頭を下げ会釈してきた。

「こんばんわ、土御門さん。後ろの方はお友達ですか？」

「ちょっとにゃ～。まぁショタコンとストーカーだが悪い奴じゃないにゃ～」

土御門がそう言った瞬間、左右から土御門の顔面に向けて拳が飛んでくる。
グシャッと何かが潰れるような音を出した後、土御門の顔が愉快な状態となった。

「いい加減懲りなさい」

「土御門さん、そろそろ学習しましょう」

結標と海原の拳が土御門の顔にめり込む。

「にゃはは～、仲がいいのね。三人はー」

そんな三人を見ながらまりなが言う。

実際、土御門たちはまるで十年来の友人のような雰囲気であった。

「いつつつ、こいつら冗談が通じないにゃ～。おや？　アリシアちゃんがいないにゃ～。どうしたんだにゃ？」

「アリシアなら少し後で来ます。同居人とクリスマスを祝った後に、こちらに参るようです」

「なるほどにゃ～。ま、適当に楽しまさせてもらうにゃ～」

「ええ、どうぞ。今日ぐらいは『組織』を忘れて下さいね」

『組織』という言葉に海原と結標はピクリと反応する。

「そうさせて貰うぜい」

しかし土御門は特に気にする様子もなく、ニヤリと笑っていた。

「バレています？」

優菜と別れて少しした頃、海原が少し小声で土御門に尋ねる。

「最初からバレバレだにゃ～。ちなみに海原の素性も知っているから諦めるにゃ～」

「……何者なんですか、彼女は」

海原の問いに、土御門は何でもないと言いたげな表情で爆弾発言をした。

「彼女は暗部組織スクールの人間で、アレイスターと直接交渉権を持つ人物にゃ～」

「なっ!?」

「ちなみに結標は何度か彼女を窓のないビルに案内してるにゃ～」

「まぁ顔を見た瞬間ね。でもスクールのメンバーとは聞いていないわよ」

「知ってても意味ないからにゃ～」

肩をすくめながら言う土御門だが、反対に海原と結標は気が気でなかった。

アレイスターと直接交渉権を持つ人物など滅多にいない。

土御門ですら基本的には命令を受けるだけ、交渉ごとを行える事など滅多にない。

その事に、二人は愕然となる。

「よぅ、グループが揃って参加とは愉快な状態だな」

驚愕している二人の横から、場の雰囲気を破壊するほど陽気な声が

飛んできた。

垣根のクリスマスパーティ

土御門たちに声をかけた人物は、先ほどコントを繰り広げていた垣根であった。
さっきまでの愉快な表情は消えており、暗部の人間を思わせる表情をしていた。

「一方通行はいないぜい。だから一同に集まったわけではないにゃ～」

「あーロリコンがこないのは当然だろう」

土御門の言葉に垣根は薄く笑いながら答える。
そのまま二人は、暫く視線を交わしあう。
だが、ふっと表情を和らげると突然肩を組みだした。

「土御門ー、冷たいぞ。来るなら連絡ぐらい寄越せよー」

「すまんにゃ～。舞夏が突然仕事でパーティがご破算になったんだぜい」

「そうかー。まぁ今日はゆっくり楽しんでいけや」

バシバシと互いの背中をたたき合う二人。
友人同士の語り合いを繰り広げる垣根と土御門に、結標と海原は呆けた顔をしながら見ていた。
しかし理解が追いつくと、頭をぶんぶんと降って目の前の光景を眺める。

「ちょ、ちょっとあんたら。何でそんなに仲がいいのよ！？」

「ん～、俺たちクラスメイトなんだぜい？」

「俺たち仲間だからなー」

なーっと互いの顔を見ながら言う二人は、まるで親友同士のように見えた。

先ほどの暗部の顔はなんだったんだ、そう思わずにはいられない二人であった。

「所で結標よ、先に言っておく」

土御門と互いに笑い合っていた垣根だが、突然真剣な表情をしながら結標を見る。

その視線に思わず後ろに下がった結標だが、睨むような表情で垣根の視線を受け止めた。

結標の視線に垣根はニヤリと笑みを浮かべる。

「お前好みのショタ子はこないから諦めろ」

「……はい？」

何を言われたか理解できなかった結標は、ぽかーんと口を開けて垣根を見る。

だが徐々に理解が追いつくと、ふつふつと怒りが沸いてきた。

「あ、あんたらぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「うおぉ！　ショタコンがキレたぞ。逃げるぞ土御門！」

「待つんだぜい、垣根！　俺は全く関係ないぞー！」

愉快そうにケラケラと笑いながら土御門と垣根が結標から逃げ出す。
軍用ライトをぶんぶんと振り回しながら、結標は逃げる二人を追いかける。

「ぶっ飛ばす！」

「この俺に常識は通用しねぇ！　未元物質バリアー！」

奇妙なポーズを取って両手を広げると、垣根の周りに何か妙な物が見え始めた。
見えそうで見えないほど小さな物質。
まるで垣根を守るかのように、それは絶えず垣根の周りを漂っていた。

「未元物質で作った壁だ。お前の能力じゃ俺を飛ばす事なんて出来ねぇ」

「くっ！　腐っても第二位って事ね」

悔しさを顔に滲ませながら結標は言う。
垣根は結標の睨みを軽く受け流し、その上ニヤニヤと笑っていた。

「だいたいよ、自他共に認めるショタコンなんだから怒るなよ」

「私は可愛い男の子が好きなだけであって、ショタコンじゃないわよ！」

だからそれがショタコンなんだよ、と言いたかった垣根だが既の所で抑える。
からかうのもいいが、これ以上怒らせてもメリットはない。
むしろ嫌な予感しか出てこない、そう判断した垣根は肩を軽くすくめながら笑った。

「まぁパーティを楽しんでいけ。こっちは別にとって食おうとか考えてないしな」

「……ふん」

今までの垣根の言動のせいか、結標は素直に頷かず頬を膨らませてそっぽを向く。
それを見た垣根は小さく笑うと、結標たちの返事を待たず手を振りながら立ち去っていった。

「あれが第二位……ねぇ。本当に変わったわよね」

立ち去っていく垣根の背中を見つつ結標は呟く。
明らかに一年前と違う、少なくともこんな馬鹿な騒ぎをするような人物ではなかった。
研ぎ澄まされた刃物のような雰囲気は全くなく、どこにでもいそうな普通の学生のような雰囲気であった。

「どうよ、愉快な奴だろう？」

「……確かにそうですね。自分は前の第二位を知りませんが、少なくとも友好的な感じですね」

結標に変わって海原が土御門の問いに答える。
その答えに、結標は否定の言葉を述べなかった。

そしてパーティ参加者が全員揃った。
時刻は十九時を過ぎた頃、そろそろ参加者のお腹も空腹を訴え始めた。

「帝督、そろそろ始めましょう」

「そうだな、もう良い時間だろう。始めるかー」

周りを見ながら垣根はパーティ開始の言葉を告げる。
お預け状態を避けるため、料理はまだどこにも並べていない状態だった。

「おい、料理を並べろー」

「了解アルー」

垣根の言葉に受付をしていた少女が元気よく答える。

料理の準備が開始された事を確認すると、垣根は改めて参加者の顔ぶれを眺める。

（名簿名簿っと）

参加者が揃った時点で名簿を受け取っていた事を思い出した垣根。
名前を上から順に眺めていくと、それなりの参加人数であった。

主催者が垣根、参加者は上から順に心理定規、優菜、まりな、静華、固法、佐天、初春、紗月、青髪ピアス、姫神、吹寄、土御門、結標、海原、浜面、半蔵、黄泉川、鉄装の計十九名。
これに後々アリシアとインデックス、打ち止めの三名が追加される。
合計で二十二名という大人数でのパーティとなった。

（少し前ならこんなパーティすら開かなかったよなぁ）

色々な人物が集まっていた。
風紀委員を手伝った時に知り合った連中を誘った。
学校のクラスメイトたちを誘った。
世話になった先生に、ほんの少しだけ恩返しのつもりで誘った。
誘ってない奴が来たけど、それでも悪い気はしなかった。

垣根はこれだけ集まった事が嬉しかった。
本人も気付かないうちに笑みを浮かべるほど。

「おー、旨そうな料理がいっぱいやなぁー」

「こら青髪、意地汚い真似をするな！」

「摘み食い。これぞパーティの醍醐味」

料理を見て馬鹿みたいに騒ぐクラスメイトたち。
くだらない事でも、嫌がらずに付き合ってくれる。

「うはー、凄い料理ですよ佐天さん！」

「こ、こんな料理見たことないよー」

「タッパで持って帰ったら駄目かな？」

「それをしたら佐天さんは伝説になれるわよ」

風紀委員の時に知り合った連中。
クラスメイト以外でも馬鹿みたいな会話が出来た。

「ほー結構な数だにゃ～」

「サラダはないかしら？」

「あちらにサラダの盛り合わせがありますね」

クラスメイトで暗部組織の人間。
でも今はそんな下らない事は関係ないと垣根は思った。

「うおおお、豪勢な食事だぞ半蔵！」

「和風家庭料理はないかな？」

「鉄装！　この酒は凄いじゃん！　一本で六〇万するそうじゃん！」

「ぶふぅ！　そんな高価な物を気軽に持って来ないでくださいー！！」

（アイテムの下っ端を呼んだ覚えはないんだけどなぁ……）

馬鹿のように騒いでいる浜面を眺めていた垣根の肩を誰かが叩いた。
視線をそちらに向けると、そこには優菜と心理定規が立っていた。

「帝督、始めるわよ。最初の挨拶をしっかりとね」

「料理は全て出揃いましたよ。まぁインデックスさん用のは出ていませんが」

「……そうだな、始めるか！」

そう言うと垣根は手をパンパンと二、三回叩く。
その音に気付いた周りの人間は、一斉に垣根の方を向く。
全員からの視線を受け止めた垣根は、ニヤリと笑いながら言った。

「始めるぞー。全員グラスは持ったかー？」

「大丈夫やで、かっきーはん」

垣根の問いに青髪ピアスが代表して答える。
周りに視線を向けると、青髪ピアスの言うとおり全員にグラスが行き渡っていた。
一つ咳払いをすると、垣根はグラスを高々と上げながら告げた。

「俺は長ったらしい話なんざする気はねぇ。言いたいことはなぁ…
…今日は飲んで食って騒いでいってくれ。今日のパーティが楽しい思い出になってくれたら最高だ！　んじゃ、メリークリスマス！！」

「「「メリークリスマス！！」」」

垣根の掛け声と共に、全員がグラスを高々と上げてクリスマスを祝った。

こうして垣根が主催するクリスマスパーティは開始を告げた。

一方通行のクリスマスパーティ

恥ずかしがりながらも一方通行と小萌はデートを満喫した。
玄関に罠が仕込まれているとはつゆ知らず、二人は手を繋いだまま玄関の扉を開く。
開けた瞬間、シャッター音が一方通行の耳に届く。

「あァ？」

何が起きたか分からない一方通行は呆けた声を上げる。
視線を音の方に向けると、そこには意味ありげな笑みを浮かべている三人の同居人が立っていた。

「証拠写真ゲットってミサカはミサカは言ってみる」

「あつあつなんだよ！？」

「ほほぅ……これは予想外だったのじゃ」

カメラ片手に三者三様好き放題言っていた。
理解が追いついていなかった一方通行と小萌だが、三人の言葉で理解が追いついた。

「クソガキどもがァ！？　一体なァにをしているンですかァ！？」

ひくひくと顔をひきつらせながら一方通行は三人に食ってかかる。
しかし頬が少し赤みをさしているせいか、いつもの凄みはなりを潜めていた。

「二人のラブラブ写真をゲットなんだよ」

薄い胸をそらしながらインデックスが一方通行の問いに答える。

二人も同意見なのか、無駄に偉そうな態度で頷いていた。

「好きあっているのに、一方通行殿は何を遠慮しているのやら。全く小萌殿に手を出そうとしなかったしのぅ」

「少し嫉妬しちゃうけどお似合いだよ！　ってミサカはミサカは胸を張って言ってみる」

小萌からの反論が無いせいか、三人はからかうターゲットを一方通行に定めていた。

何とか反論する一方通行だが手を繋いだ場面を写真に収められたが痛手だった。

何を言っても「照れ隠しだね」と言われる始末。

「年が明けたら婚約かな？　その時は良い神父を教えるんだよ！？」

「こっ！？」

インデックスは全く悪意のない発言を二人に言う。

しかし、そのぶっ飛んだ発言は二人の頭をショートさせるのに十分だった。

驚きの表情をしたまま、一方通行と小萌は固まってしまった。

「学園都市に教会はないから聖ジョージ大聖堂を使ったらどうだ？」

「いいアイデアなんだよ。早速すているに話を通して……」

意識が大宇宙の彼方に飛んでいた一方通行だが、理解が追いつくと慌てて三人を止めに入る。
これ以上放置していたら、自分の預かり知らぬ所でとんでもなく話が進みそうな気がしたからだ。

「ま、待てクソガキどもォ！？　こ、こここここ婚約って気が早いンじゃないですかァ！？　だいたい小萌の返事も聞いていませンよォ！？」

一方通行がそう言った瞬間、三人はその言葉を待っていましたと言いたげな表情を浮かべる。
そしてニヤニヤと笑いながらある場所を指さす。
訝しげに思った一方通行だが、その指の先を目で追っていく。

「え、えへへへー。一方ちゃんと婚約……やっぱりドレスは白色が良いのでしょうかねー」

そこには耳まで真っ赤にしながら頬に手をあて、くねくねと謎のダンスを披露する小萌がいた。
明らかに意識が別世界に飛んでおり、全員の視線に全く気付いていなかった。

「子供は最低二人ですー。あ、でも娘二人に息子一人の方がいいかもしれませんー。先生、迷っちゃいますよー」

更には将来の人生設計まで繰り広げる始末。
何がどう良いのか一方通行には理解できないが、このままでは年始まで弄られる材料が出来てしまう。
その事を想像して顔を真っ青にした一方通行は全力で小萌の肩を掴む。

「小萌ー！！　頼むから帰ってきてくれー！！」

ガクガクと肩を揺さぶる一方通行だが、別世界に意識が飛んだ小萌には効果がなかった。

「一方ちゃんは裸エプロンが好きですからねー。フリル付きエプロンを沢山買わないといけませんー」

「ちょっと待てェ！？　いつから俺はエプロン属性が付いたンですかァ！？」

知らない内に変なレッテルが貼られていた一方通行。

見に覚えのない事ばかりを口から漏らす小萌を止めなければならない。

その時の一方通行はかなり必死だった。

しかしその奮闘も虚しく、それから三十分近く小萌の意識は戻ってこなかった。

「不幸だァーーーーーーー！？」

アリシア、打ち止め、インデックス、小萌の四人はテーブルに料理を並べていく。

クリスマスを祝うための料理だが、量は少々控えめとなっていた。

これはアリシア、打ち止め、インデックスの三人が途中で抜けるた

めである。
元々は五人で祝う事となっていたが、突然アリシアが優菜のパーティにも行くと言い出した。
垣根が主催者と知った一方通行は、底意地の悪い笑みを浮かべながらインデックスの参加を促した。
そしたら打ち止めも参加する事となったのである。
四人は料理を並べる傍ら、チラチラとある場所に視線を向けていた。
「……」
その視線の先には、真っ黒いオーラを漂わせながら座っている一方通行がいた。
どんよりな空気を漂わせる一方通行に、学園都市最強の面影は微塵も感じさせなかった。
「（ヤバい、ちょっとからかい過ぎたな）」
「（正直あそこまで燃え尽きるとは思わなかったんだよ）」
「（身に覚えねェ！？　って必死になって否定していたってミサカはミサカはさっきのやり取りを思い出す）」
流石にやりすぎたと思った三人は、燃え尽きた一方通行を見て深々と謝罪をした。
しかし燃え尽きた一方通行は、既にどうでもよいと思ったのか何も言ってこなかった。
（ど、どうしましょう！　何か色々と恥ずかしい台詞を言っていた気がしますー！）

そして小萌は先ほどの事を思い出してはパニックを起こしていた。
瞬間湯沸かし器のように顔を真っ赤にしては、両手で頭を抱えて唸っていた。
傍から見ると不気味であり、三人はドン引き状態だったが。

（い、一方ちゃんは勿論好きですよー。そ、それは母親が息子を好きになるような……感覚ですー？）

小萌の中で整理がついていないのか、色々な考えが浮かんでは消えていった。
心理学の専門家である小萌も、自分の心は全く制御できていなかった。

（あれー？　もしかして違うんですかー？　せ、先生は教師ですよー、そんな生徒に恋し……）

「恋！？」

「うひゃぁ！？　び、びっくりしたんだよ」

驚きのあまり思わず素っ頓狂な声を上げる小萌。
意外と声量が大きかったのか、近くにいたインデックスが両手を上げてびっくりしていた。
しかし小萌は全く気付くことなく、更に思考の渦にはまっていく。

（あわわわわー、も、もしかして先生は一方ちゃんを異性として……好きなんですかー！？）

（デ、デデデートは単に息子が可愛いからついって気持ち……じ

ゃないー！？）

「小萌殿ー」

「ふひゃい！　何ですかー！？」

「……そんな大声を上げなくても……料理が並べ終わったからそろそろアレをどうにかしようと」

そう言ってクイクイと一方通行を指さすアリシア。

視線を向けてみると、さっきより更にジメジメしており、きのこでも生えそうな雰囲気であった。

目の錯覚なのだろうか、一方通行の体から黒い靄のようなものが湧き出てるように見えた。

「あァ……ベクトル宅急便ですゥ」

今度は一方通行が違う世界に意識を飛ばしていた。

何やら奇妙な事をブツブツと口の中で言っては、不気味な笑みを浮かべていた。

「（これはかなり酷いんだよ）」

「（どうすればいいのかな？　ってミサカはミサカはアリシアお姉ちゃんに視線を向けてみたり）」

「（あーなると厄介だのぅ。やっぱりここは古典的な方法でいくか）」

そう言うとアリシアは小萌に向かって手招きをする。

首を傾げながら小萌は近寄る。
四人は一方通行に背を向け、ヒソヒソと内緒話をし始めた。

「（……やっぱ……だろ？）」

「（えー！　で……よー！）」

「（でも……果……だよ）」

「（いい案……って言ってみたり）」

アリシアの言葉に小萌が驚き、インデックスがしたり顔で頷く。
打ち止めが悪意のない笑みを浮かべて、アリシアの言葉に賛同する。

「よぉし、小萌殿。頑張るのじゃ！？」

「うーうーうー！　恨みますよーアリシアちゃん」

親指をたてるアリシアを、小萌は顔を真っ赤にしながら睨んでいた。
しかし一方通行を正気に戻す代案を出せない小萌は、しぶしぶその案にのるしか無かった。

一方通行の近くまで歩み寄った小萌は、何度か視線を彷徨わせる。
しかしぐっと拳を作ると、意を決して一方通行の耳に口を近づける。

「い、一方ちゃん。料理が出来たから食べてくれひゅと！」

台詞の途中で盛大に噛んだ小萌。
気不味い雰囲気が辺りに漂い始める。
涙目をしながらアリシアに視線を向ける小萌に、アリシアはぐっと

親指をたてて答えた。

「い、痛いですー。やっぱり先生は恥ずかしくて言えないですー！？」

「まだ序の口であろう」

「もっと甘く囁くように言うんだよ！？」

「ファイトだよ！　ってミサカはミサカは応援してみる」

もはや一方通行を正気に戻す事など忘れ、三人は一斉に小萌をはやしたてる。

「……はァ」

それを見て一方通行は盛大にため息を吐いた。

何だか不貞腐れているのが馬鹿らしくなった一方通行。

頭を軽くかくと、三人に視線を向けながら言った。

「あンまり小萌を困らせるンじゃねェ」

三人の頭に軽く拳骨を振り下ろす。

コンっと小気味良い音が聞こえた。

「すまん、からかい過ぎたのぅ」

「ごめんなんだよ、あくせられーた」

「ごめんなさいってミサカはミサカは頭を下げて謝る」

一方通行に怒られると、三人は素直に一方通行と小萌に頭を下げた。
もう一度ため息を吐いた一方通行は、面倒臭いと言いたげな表情をする。

「ほら、料理が冷めるだろゥ。さっさと座るぞ」

「「「はーい」」」

三人は素直に返事をすると、各自自分の席に座る。

「座りましょうか、一方ちゃん」

「ン、そうだなァ」

そう言って二人も自分の席に座る。
それぞれが所定の位置に座り終えると、小萌は一つ咳払いをした。

「それじゃあクリスマスパーティを始めますー。乾杯の前に皆一言をお願いしますー」

「はァ！？」

小萌の言葉に思わず素っ頓狂な言葉を漏らした一方通行。
しかしそんな一方通行を無視して、小萌は宣言通りに一言を口にする。

「アリシアちゃん、打ち止めちゃん、インデックスちゃん、一方ちゃん……こんなにも可愛い生徒たちに囲まれて、先生はとっても幸せ者ですー」

言葉通り小萌はニコニコと幸せいっぱいの笑顔を浮かべていた。
それを見たアリシアは、次は自分の番と言いたげに咳払いをする。

「正直姉上の所に行ってばかりだ。しかしここでの生活は楽しく、そしてとても心地いい。妾は自信を持って言える、皆との生活が大好きだと」

「皆とはまだ短い付き合いだけど……こうやって皆で一緒に生活するのは好きだよ！」

「ミサカもこの生活が大好きってミサカはミサカは胸を張って言ってみる！」

そして四人は同時に一方通行へ視線を向ける。
顔がひきつった一方通行だが、逃げることが出来ないと分かると小さくため息を吐いた。

「……俺はァ小萌と出会ってから二年程度だァ……その間に色々とあった。そうだなァ……語るのも面倒なぐらい色々とな」

一方通行の言葉に誰も茶化したりしない。
全員真剣な表情で、一方通行の言葉を聞いていた。

「最初は一人で生きていける、なンて考えていた。けどよォ……違ったんだよ。朝、誰かに起こしてもらうって事が、帰ったら『ただいま』って言葉がどれほど心地良いか、気持ちの篭ったメシがどれほど旨いか」

「一人で生きていたンじゃァ絶対に分からねェ……誰かと一緒に語

り合い、誰かと一緒に道を歩いて行く。それが出来る今の環境は……手放したくねェほど大事な場所だ」

そこで言葉を区切ると、一方通行は手に持っているコップをかかげる。

周りもそれに習うように各自のコップを手に持つと、一方通行と同じぐらいの高さにかかげる。

「出来れば来年もこうやって祝おうじゃねェか……メリークリスマス」

「「「「メリークリスマス」」」」

一方通行の音頭と共に、全員がクリスマスを祝う言葉を述べた。

カチンっとコップがぶつかる音が部屋に響き渡る。

（やっぱり『ココ』が、俺の帰ってくる場所だなァ）

コップを傾けながら、一方通行はふとそんな事を思った。

妹達のクリスマスパーティ

「ふんふんふーん、とミサカは歌声でパーティ会場に向かいます」

妹達の一人である美咲は鼻歌を歌いながら廊下を歩いていた。
今日の仕事が終わり、これから妹達と全員でクリスマスパーティを開くのだ。
それが美咲にとってどれほど楽しみにしていたかは語るまでもない。
今にもスキップをしそうな雰囲気の美咲であった。

同じ病院内で行うからそれほど歩くことはなかった。
しかし会場に近づくにつれて、美咲はある一つのことに気付いた。
全く騒がしくないのだ。
今日のパーティは十二人全員集合である。
いつはミサカネットワークで騒ぐ連中が実際には大人しめな娘とは思えない。
なのに談笑も何も聞こえてこないのだ。

（実は私をからかおうと思っている？、とミサカは予想してみたり～）

静かなのは何かドッキリを他の妹達が考えているからだ。
そう予測した美咲は、あえてその罠に乗ろうと考え控えめな足音をたてながら廊下を歩く。
びっくりさせようとした所を、あえてこちらからびっくりさせてみせる。
その時の美咲はそんな悪巧みを考えていた。

（ミサカを騙そうなんて甘いってミサカは威張ってみたりー）

徐々に足音を消しながら美咲は意地の悪い笑みを浮かべる。
忍び足でパーティ会場の扉前までたどり着くと、中に誰がいるか調べる。
微弱な電磁波を十一人分観測すると、美咲はいよいよ持って何かたくらんでいると確信した。

（その前に～ミサカはこの扉をあける！ってミサカは勢いよく扉を開ける～）

スパーンっと小耳良い音を立てながら美咲は目の前の扉を開く。
きっと何かをしてくる、そう思っていた為か美咲は少しだけ身構えていた。
しかし中の様子は美咲の予想を遙かに上回っていた。

「人の飾り付けを破壊しておいて、お前等は仲良く男の話かぁ？随分とメデてぇなぁー？」

「い、いえ、ミサカは決して乗り気では……」

「あぁ゛！？」

「な、何でもありません……とミサカはガクガクと震えながら言います」

「あ、姉御……ミサカはそろそろ足がしびれてきたンですが……とミサカは痺れた足をさすりながら言う」

「美朱ちゃんよぉ～、何で正座させられているか理解してる？」

「何故でしょう……とミサカは冷や汗を流しながらとぼけます」

パーティ会場の隅っこで、妹達のうち十人が並んで正座させられていた。

それを美鶴が腕を組んで見下ろしていた。

「わー悲惨な光景だねってミサカは現状を確認する」

どことなく暢気そうな声で美咲は言う。

現状はかなり悲惨なのだが、彼女が言うとちっとも悲惨そうに聞こえなかった。

「ん？　あぁ美咲か。随分と遅かったな」

「冥土帰しさんからプレゼントを貰ったの～ってミサカはニコニコと笑顔で遅れた原因を言う」

「ボスから？」

美鶴の言葉に美咲は頷くと、その手に持っていた物を掲げる。

その袋はそこそこ大きめのケーキ箱が二つ入っていた。

「クリスマスケーキなんだよ～ってミサカは胸をはっていってみたり」

全く悪意のない笑顔で笑う美咲を見て、美鶴は小さく溜息を吐いた。

何だか一人カリカリするのが馬鹿らしくなった、そう思った美鶴である。

「まぁお前ら反省しているようだし……もう正座崩していいぞ」

ニ、三回手を叩きながら美鶴が言うと、美咲を除く妹達全員がほっと胸をなで下ろす。
しかし長時間の正座を強いられていた妹達たちは、そのまま素直にたてなかった。

「お、おおぅ……足が痺れて……立てぬっ！　とミサカはわぁぁぁーーー」

「愚か者め、こういう時はゆっくりと脚を伸ばすのだよ、とミサカはビリビリと痺れる足をのばす」

「でも正座に慣れてないと膝枕出来ないな、とミサカは旦那様を想像しながら言う」

「上条の事なンですかァ？　旦那様ってのはァ、とミサカは周りに茶々を入れます」

ガクガクとしながら立とうとするが、数人はそのままコテンと床に崩れ落ちた。
正座に慣れていない妹達なら、当然と言えば当然の結果だが。

「さぁさぁ、皆パーティの準備をしようね、とミサカは場を取り仕切ってみたり」

軽く手を叩く美咲の声に、周りの妹達は素直に返事をして作業に取り掛かった。

「姉御ー、この飾りは何処に置くんだ？　とミサカは姉御に質問をする」

「あーそいつは扉用だから後だ」

「了解、ってミサカは敬礼ポーズで姉御に答える」

足の痺れがとれた人間から、各自パーティ部屋の飾り付けを直していく。

傷んだ飾り付けは応急処置を施し、完全に駄目になっているものは飾り付けを外す。

そんな手順を踏んで、妹達たちは飾り付けを直していった。

「所で美朱、お前は何でワイシャツ一丁なんだ？　とミサカは卑猥な格好をしている美朱に質問を投げる」

「一張羅なンですよォとミサカは質問に答える」

妹達たちの服装は基本的に常盤台中学校の制服に合わせている。

しかしまともに着ているのは御坂妹だけであり、その他は思い思いの服装をしていた。

最新の流行ファッションを追いかけた服装から、迷彩服という何に使うか分からない服装まで。

ありとあらゆる格好をしていたのだ。

妹達の格好は、あくまで世間一般様から見てもある程度普通と見られるレベルだった。

しかし妹達の中の一人、美朱の服装だけは別格だった。

男物と思われるワイシャツにパンツ一枚という、どこか特殊な性癖の持ち主が喚起する格好だった。

「また一方通行の服ですか？　とミサカは犯罪に走る美朱を咎めながら尋ねる」

「愛の為なら犯罪上等なンですゥ、とミサカは余裕の笑みを浮かべて答えます」

「駄目だこいつ、早くなんとかしないと、とミサカは某漫画の台詞を口にします」

美朱の格好を見てため息を吐く妹達たちだが、当の本人はワイシャツの匂いを嗅いで恍惚の表情をしていた。
ちょっと恥ずかしげな表情ではなく、邪な考えが顔に出ている表情であった。

「ごるぁ！？　テメェら遊んでる暇があるなら早く直せやぁ！？」

しかし美朱だけの至福タイムはすぐ終わりを告げた。
美鶴の一喝が飛んできたためだ。
その場にいた妹達全員は、美鶴の雷を避けるために蜘蛛の子を散らすように逃げる。

「ふん」

腕を組んで仁王立ちする美鶴の両頬にニュッと誰かの手が伸びる。

「姉御ー、怒ってたら怖いよーってミサカは姉御の頬をぷにぷにするー」

「ひゃめんか！」

ニコニコと悪意が全くない笑を浮かべる美咲に、少しだけ怒り顔をしながら言う美鶴。
しかし本気で嫌がっていないのか、それほど邪険な扱いをしていなかった。

（さすが癒し担当の美咲……あの姉御すら攻略するとは、とミサカは驚きながら思います）

二人を遠巻きに見ていた妹達たちは、改めて美咲の凄さに感心したのだった。

それから三十分ほどかけ妹達たちはパーティ会場の飾り付けを直した。
最初はグダグダな雰囲気であったが、飾り付けを直したせいかそんな雰囲気は霧散していた。
ノンアルコールのジュースが入ったコップが一人一人に手渡されていく。
全員に渡りきったのを確認すると、美鶴は一つ咳払いをした。

「んんっ、まぁ最初がグダグダだがどうにか形になったな」

周りに視線を移しながら美鶴は言う。

いつもははじけている妹達たちだが、流石に空気を読んだのか黙って美鶴の言葉に耳を傾けていた。

「スンスン、やはり一方通行の匂いはいいです、とミサカはワイシャツの匂いを嗅ぎまくり」

最も一人だけ読めてない人物がいたが。

顔をひきつらせた美鶴だが、今に始まったことではないと思い生暖かい目で見ることにした。

「今日が産まれて初めてのクリスマスだ」

「私たち妹達はクローン体だ。だから後何回クリスマスを祝えるか分からない」

「だけど悲観する必要はない。数が少なければその分一回の密度を上げればいいだけさ！」

「下らない事にマイナスな思考をする暇があるなら、前へと進んで生きていこうぜ」

「今日という日を明日への糧に」

「姉貴と上条とその他すべての人たちに感謝の気持ちを込めて！」

そう言うと美鶴はコップを高々と上げて告げる。

他の妹達たちも、美鶴にならってコップを天井に向けて上げる。

それを視界に収めた美鶴はニヤリと笑いながら言った。

「派手に楽しもうぜぇ！　メリークリスマス！！」

「メリークリスマス、とミサカはクリスマスを祝う言葉を口にします」

美鶴の音頭に合わせて妹達全員がクリスマスを祝う言葉を述べる。

「上条からクリスマスカードが届いている。お前ら全員分があるから後で渡すぞー」

「上ちゃんから!?　とミサカは突然のサプライズに驚きを顕にします」

「きっと私のカードには愛を囁く言葉が書かれているのですよ、とミサカは勝ち誇った笑みを浮かべます」

「カルピス……カルピス原液……一方通行の……とミサカは禁則事項だらけを想像してニヤリと笑う」

「おい、美朱が本気で変態っぷりを発揮し始めたぞ、とミサカは美朱から距離をとりつつ言う」

「時代は上条と一方通行、異論は認めない、とミサカははっきり言い切る」

「変態同士仲良くしててくれ、とミサカは変態な妹達から距離を取る」

先ほどと変わらず馬鹿な話ばかりをする妹達。
だが誰もが笑顔を浮かべており、そこにクローンという事への悲壮感は微塵も感じられない。

（ふふふ、馬鹿ばっかりだけど悪くないな）

そんな事を思いつつ、美鶴は優しい笑みを浮かべながら妹達を見ていた。

当麻は現在危機的状況に陥っていた。

何故だ、どうしてこんな状態になったのだ。

頭の中でパニックを起こしていた当麻は、答えの出ない思考のループに陥る。

「……」

そんな当麻に無言の視線を送ってくる十個の眼。

沈利、理后、フレンダ、最愛、操祈の五名からの視線だった。

しかしよく見ると当麻を睨んでいるわけではなかった。

当麻より少し下にある『とある存在』を睨んでいるようだ。

「あらあら当麻さんったら。刀夜さんの血を引いちゃったのかしら？」

そんな沈利たちを見て、詩菜は両手をポンと叩きながら呑気な事を言う。

詩菜はニコニコと笑っているが、その笑顔には陰影が刻まれていた。

それを間近で見ていた刀夜は、ガタガタと震えながら言う。

「か、母さん。父さんは母さん一筋だぞ？」

腰が引けた状態で言ったせいか、刀夜の発言は詩菜の中にある何かのスイッチを入れてしまった。

詩菜の笑顔にある陰影が更に濃くなっていき、背後に効果音でも聞こえそうなほどの威圧感が発生した。

「あらあら刀夜さんったら。ではこの前の女性は何だったのでしょうか？」

「あれは部下がお茶をこぼしたから……や、やましい事は何もないぞ！？」

「刀夜さん？　言い訳のように聞こえますが？」

夫婦喧嘩を始めた刀夜と詩菜だが、残念ながら刀夜には一パーセントの勝利も存在していなかった。
刀夜には、ひたすら詩菜に謝罪するという父親として情けない姿を晒す以外になかった。
最も娘たちである沈利たちは、全く興味がなかったのか一度として視線を向けたりしなかったが。

当麻は小さくため息を吐く。
そして、沈利たちが睨んでいる『とある存在』に視線を向ける。
これだけの視線を受けながら、ソレは全く意に介さず当麻の膝の上で丸まっていた。

「くー、すー……にゃーにゃにゃにゃにゃー……」

まるで子猫のようにゴシゴシと顔をこすりながら丸まっている『とある存在』。
それは十歳前後の小さな少女であった。

（どうしてこうなった……）

当麻は呆然としながらこの少女が来た時の事を思い出す。

午後から外出した当麻は、操祈を迎えに行く途中で御坂妹とばったり出会った。
話しながら歩いていると露天が目に入った。
当麻はそれを見て、何となく御坂妹にプレゼントを送る気持ちになった。
送ったのは千円程度のハート型ネックレス。
顔を赤くして喜んでいる御坂妹を見て、当麻は満足気な気持ちになった。
後に妹達たちで醜い争いに発展するという事も知らずに。

御坂妹と別れた当麻は、そのままの足で常盤台の寮まで移動する。
操祈は外で待機していたので、当麻は何の苦もなく操祈を発見する事が出来た。
毎度ながら常盤台の制服は来ておらず、明らかに私服姿の操祈であった。
守る気ゼロの操祈は、当麻を見つけると全力ダッシュをした後、当麻の腕に抱きついた。
とても中学生とは思えないほどの、巨大な質量を持ったソレの感触が当麻の肘あたりに襲いかかった。
姉妹がいるとはいえ、操祈のストレートな好意行動に一瞬ショックで呼吸困難に陥りかけた当麻。
何とか離してもらおうとしたが、その度に操祈に言いくるめられてしまった。
結局街を歩く男性学生たちの嫉妬の視線をチクチクと味わいながら

帰宅した当麻である。

しかし家の前に立つと操祈は当麻の腕をあっさりと手離し、そのまま行儀よく上条家に上がった。
家に上がってからも、操祈からのスキンシップは完全になくなり、当麻は盛大な肩透かしを食らった気分になった。
沈利たちも操祈を警戒していたが、特に何も起こさないと分かると幾分リラックスしていった。

勿論、これは操祈が油断を誘う罠であった。
しかし学園都市最強の精神系能力者である操祈も予想できなかった、ある事態が発生する。
それはパーティを開始した直後に起きた。

パーティを開始して少しした頃、突然玄関のチャイム音が部屋に響き渡った。
当初は訪問客を不審に思った沈利たちだが、ふと今朝の詩菜の言葉を思い出す。

「あーきっと母さんたちね。当麻、お願いできるかな？」

「問題ないよ、沈利姉ちゃん。ちょっと行ってくるね」

そう言うと当麻は玄関へと向かった。

沈利たちがわざわざ当麻に依頼した理由、それは操祈から切り離すためである。
常に一定の距離感を保っている操祈は、毎度ながらかなりの強敵であった。
常に強く思われていないが、全く忘れ去られるという位置でもない。
微妙な心の機微を掴み、あらゆる行動でその位置を維持する操祈であった。

そんな操祈に対抗するには、まず状態をリセットする方がよい。
そう判断した沈利は、当麻に詩菜たちを迎えに行かせた。
最も、これが後に大きな痛手となった訳だが。

玄関のセキュリティを外すと、当麻は全く警戒せず玄関を開ける。

「父さん、母さん。遅かったね、今クリスマス……」

「にゃ、にゃあ。大体、初めまして」

労いの言葉を口にしていた当麻だが、全く聞きなれない言葉を聞いて固まった。
油のキレた機械のように、ギギギと音を立てながら声の主に視線を向ける。
そこには十歳前後の小さな女の子が立っていた。
勿論、その背後に刀夜と詩菜が立っていたが、パニックを起こした当麻はそこまで目がいっていなかった。

「……君、誰？」

毎度ながら嫌な予感を感じつつ、目の前の少女に当麻は尋ねてみた。
ああ、神様。出来れば不幸を持って来ないでください、そう神様に

祈りながら。
当然ながら神様は『お前に不幸をプレゼントしよう』としたり顔で言ってきたが。

目の前の少女は時々唇をモゴモゴと動かしながら視線を彷徨わせていた。
しかし意を決したのか、突然当麻へ強い視線を向ける。

「フレメア」

そして少女は言った。
とんでもなく驚かされる台詞を。

「フレメア＝セイヴェルン。大体、フレンダ＝セイヴェルンの実妹です。にゃあ」

その言葉を聞いた当麻は、当然ながら処理が追いつかず頭がショートした。
そして呆けた顔をして視線を、フレメア、刀夜、詩菜の順に移す。
当麻の視線を受けた刀夜はニヤニヤと笑いながら、更に混乱する言葉を発した。

「フレンダの妹フレメアだ。今日からお前の妹になる子だよ」

思考が滅茶苦茶になっている所へ、更に滅茶苦茶になる事を聞かされた当麻。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

時間もご近所さんも気にせず、当麻は本能のままに大声で叫んだ。

素っ頓狂な大声を上げた当麻に、流石の沈利たちも何かが起きた事に気付く。
慌てて玄関までやってきた沈利たちの目に、飛んでもない光景が広がっていた。

なんと呆けた面をした当麻に、何やら何処かで見た事のある顔の少女が抱きついていたのだ。
これには流石の操祈でも予想外だったらしく、沈利たちと一緒に口をぽかーんと開けて当麻を見ていた。

「とりあえず入っていいかな？」

刀夜の言葉に生返事を返した沈利たちは、そのまま言われるが如く刀夜と詩菜を家に上げる。
フレメアは緊張して疲れたのか、それとも遊び疲れていたのかすぐに船を漕ぎ始めた。
眠たそうにしているフレメアを抱え、パーティ部屋に戻ってきた当麻たち。
部屋に入ると、眠っているフレメアを詩菜に預けて当麻は床に座った。

すると何かの違いに気付いたフレメアは、もぞもぞと動いた後当麻の膝の上に寝転んだ。

「定位置」

そう言った後、十秒を待たずしてフレメアすやすやと寝息を立て始めた。

フレメアは当麻がいたく気に入ったみたいだ。

そう思った刀夜は、当麻たちにフレメアを預けても特に問題はないだろうと思っていた。

だが、それは誤りである。

フレメアが現在眠っている場所。

当麻の膝の上は、当然ながら最愛が常にキープしている特等席である。

最愛にとって、よく分からないうちに新参者に取られるのは酷く不愉快であった。

フレンダも理后も沈利も、よく分からない人間が当麻にベタベタしているのは気に入らなかった。

当然ながら当麻に恋心を抱く操祈も同様の気持ちだった。

五人は示し合わせたかのように、当麻の膝の上で寝ているフレメアに視線を向ける。

そして冒頭のような状態になったという訳である。

「超気に入らないです。そこは私の超特等席なのですー！」

今にも噛み付きそうな勢いでフレメアに噛み付く最愛。
しかし危機管理能力が平均以下のフレメアには全く効果はなかった。

「父さん、話してくれるよね？」

チンピラも裸足で逃げるほどの凄みで刀夜に迫る沈利。
理后やフレンダも無言で重圧をかけており、一般人の刀夜がそれに耐え切れるわけはなかった。

「は、話すよ！　まずは落ち着いてね！？」

「十分落ち着いているよー。ちょーっとイライラしてて、誰かを殴りたい気持ちがあるけども？」

「あははは、出来れば父さんに向けて欲しくないな……」

嫌な汗をダラダラと流しながら後ろに下がる刀夜。
場を誤魔化そうと、一つ咳払いをしたが当然ながら効果はなかった。
ちなみに詩菜は、どうやら刀夜の説得が功を奏したのか今は落ち着いていた。

「えーっとフレンダ、落ち着いて聞いてくれ」

「……一応落ち着いているって訳よ」

「あの子の名前はフレメア＝セイヴェルン。お前の実の妹だよ」

「……は？」

一瞬何を言われたか分からないフレンダは、凄い間抜けな声を上げた。
フレメアと刀夜を交互に見た後、首を傾げながら言った。

「私に妹とか意味が分からないって訳よ」

「詳しい事情は私も知らないのだよ。聞いた話では赤子の時にお前たちの両親が離婚した。その時にフレンダを父親、フレメアを母親が引き取る事となった」

さっきまでのビクビクした表情ではなく、真剣な表情をして刀夜は語り始めた。
その表情を見て、全員が刀夜の言葉に耳を傾けた。

「それから色々とあったようだが、フレンダは最終的に私が養子に迎える事となった。しかしフレメアの方は、母親がフレメアを学園都市に預けた後に蒸発した」

「フレメアは学園都市における社会問題の一つ『置き去り（チャイルドエラー）』となった。今まではあすなろ園にいたが、その情報を知った私が今日引き取った訳だ」

「勿論、フレメアにはきちんと説明し選択して貰った。もしあすなろ園が良いというなら、私は二度とフレメアを引き取る話はしないつもりだと」

「正直十歳前後の子供に迫る選択肢ではないと分かっていた。だが、フレメアの意思を無視して、話を進めてはいけないと思った」

「だから私はあえてフレメアに選んでもらった。今までの生活がい

いか、それとも実姉のいる私たちの家族になるかを」

そこで刀夜は言葉を一旦区切る。

小さく息を吐き出した後、フレメアの説明を続けた。

「今日まで全く連絡がなかったのは、フレメアが決断した日が今日だったからだ。急な連絡になったのは申し訳ないと思っている」

そう言った刀夜は娘たちである沈利たちに頭を下げる。

数秒後、頭を上げた刀夜は更に言葉を発した。

「色々思う所はあるだろうが、この子を家族として迎え入れてくれないか？」

「……駄目だよ、父さん」

刀夜の言葉に沈利は無表情で答える。

その言葉を聞いた刀夜は、何とも悲しそうな表情をしながら沈利を見ていた。

一瞬当麻が何か言いかけたが、それを理后が咎めた。

それら全てを無視して、沈利はポツリと呟いた。

「父さんが言っても意味が無い。フレメアが『家族』って思わないと意味がないよ」

「沈利……」

「正直色々とパニックを起こしているのは自覚している。だけどフレンダと血の繋がった妹を拒否する気持ちは微塵もない」

「でもね、父さん。フレメアが私たちを家族って思わないと、何もかもがぶち壊しなんだよ」

「だから私はフレメアに選択してもらう。『心の繋がった家族』となり一緒に住むか、それとも『戸籍上だけの家族』になり学生寮に住むか」

そこで沈利はチラリとフレメアに視線を向ける。
だがすぐに視線を刀夜に戻すと、こう呟いた。

「まぁ答えはすぐに出そうだけどね」

考えるまでもない、そう言いたげな表情を沈利はしていた。

垣根パーティ　その一

垣根が主催のパーティが始まって少し時間が経過した。
元からグループ単位で誘ったせいか、最初からある程度のグループで固まっていた。
垣根は少し離れた所から、参加者のグループを一つずつ見ていく。

垣根のクラスメイトである青髪ピアス、吹寄、姫神は料理を摘みつつ談笑していた。
というより青髪ピアスが一人で騒いでいるという方が正しい。
時々吹寄から制裁を貰っている青髪ピアスだが、それでも楽しそうに笑っていた。
混ざりたい気持ちを抑えつつ、垣根は別のグループに視線を向ける。

垣根の目に大量の花を頭に乗せた少女が写る。
遠くから見れば殆ど花瓶のように見える少女は、グラウンドを半壊させた罰として風紀委員を手伝った時に知り合った。
初春、それから佐天、後二人については垣根は見たことがない。
名簿から名前は固法と紗月だとは分かっているが。
だからといってどうこうする気もなかったが。

そんな初春たちは料理を一つ一つ食べては感動に震えていた。
何やらタッパにでも詰めそうな勢いだが、それをした場合は証拠写真を撮って初春をからかおう。
そう考えていた垣根である。最もタッパ詰めをやりそうなのは、隣にいる佐天の方だが。

わいわいと騒ぐ初春たちから、今度はクラスメイトであり他の暗部組織に所属する土御門たちに視線を向ける。

未だに海原と結標は警戒心を解いていないが、土御門は全く警戒心を出していなかった。
やはり他の暗部組織に所属する人間がいると簡単にはなじまないか。
その事に苦笑した垣根は、サラダばかりの結標と肉ばっかりの土御門、無難な料理を食べる海原を眺める。
談笑しているわけではないが、何やら楽しそうな雰囲気は遠くにいる垣根にも感じられた。

更に別の方に視線を向けると浜面と黄泉川が何か言い合いをしているのが見えた。
黄泉川はすでに酒が大量に入っているのか、酔った顔をしながら浜面をイジっていた。
後輩の鉄装は全く黄泉川を放置して、一人料理を堪能しては瞳を輝かせていた。
浜面の連れである半蔵は、何か尊敬のまなざしをしながら黄泉川を見ていた。
多分黄泉川に惚れているのだろう、あまり興味がないのか垣根はそう結論を出すと視線を別に向ける。

最後に向けた視線には、大事な存在である優菜と心理定規。
それから優菜の友人であるまりなと静華がいた。
やはり一番華がある、そう思わずにはいられない垣根であった。
心理定規を除く三人がお嬢様教育を受けているお陰か、他の女性より気品が感じられた。
何よりスタイルがよい、アイドルである静華は当然としても。
まりなも美少女の部類に入るし、スタイルもそれなりに悪くなかった。
こうなると心理定規の胸が少々寂しいなと垣根は思ったが、口に出して言えば今度こそ命が危険に晒されるので思うだけにした。

今はいないがこの後に三人が追加される。
一方通行の家に住んでいるアリシア、インデックス、打ち止めの三人である。

インデックスの参加を聞いた垣根にはある一つの悩みが発生した。
それは食事である。インデックスはその見た目とは裏腹にかなり食欲旺盛である。
一度だけ見たことはあるが、垣根はインデックスの食事量に心底驚いた。
あれだけ食べて成長しないのは何でだろうな、と思った垣根だが第六感が働いたのか思うだけで言葉にはしなかった。

当然ながら量を増やせば見た目が美しくない。
その上、食べる前から満足という感覚に陥ってしまう。
それを懸念した垣根は、結局インデックスのみ別の料理を用意しておくという結論に達した。
しかし量を増やせば、当然ながら費用は莫大になってしまう。
この場合、質を落として量を確保するのだが、垣根はそれを敗北と思い質を一切落とす事をしなかった。
信じられない程の巨額を投じた垣根である。
しかし本人はあまり気にする事もなく、一回払いで片づけてしまった。

今参加している全員を見ながら思う。
やはりパーティを開いて正解だったと。

「感傷的になるのは早いな」

まだパーティは始まったばかり。
感傷的になるならパーティが終わった後に飽きるまですればいい。

そう思った垣根は、参加者を眺めるのを止め手身近なグループに歩み寄った。

「いよぅ、楽しんでいるか？」

「お、かっきーはん。めっちゃ楽しんでいるでー」

青髪ピアスが垣根の言葉に笑顔で答え、近くにいた吹寄や姫神も同意見と言いたげに頷いた。

「それにしても随分と豪華。かなりお金がかかったんじゃない？」

「はっはっは、まぁな。だがお陰でここまで豪勢にいけたぜ。凄いだろう？」

「調子にのるな、垣根」

腕を組んで大威張する垣根に吹寄が冷静な突っ込みを返す。

「あぁ！？　うっせぇな！？　お前と違って俺は友達が少ないから、こういう時に頑張らないと調子に乗れないんだよ！？」

「……ごめんね」

吹寄の言葉に凄みを出しながら言い返した垣根。

その言葉を聞いた吹寄は、とても悲しそうな表情をして垣根を見て呟いた。

「やめて！　冗談を真剣に取らないで！　俺のガラスハートが傷つくから！！」

「未元物質で出来たハート。……ふっ」

「かっきーはんだから、そのハートには羽が生えてそうやなー」

「……キモッ」

悲しそうな表情から一転、吹寄は冷たい眼光で垣根を見ながら低めの声で呟いた。
その瞬間、ビシィッ！！と空気が割れるような音が響く。

「うわぁぁぁぁん。吹寄の意地悪！　健康オタク！　巨乳！　お前なんか今度からおっぱい要員として呼んでやる！？」

涙を流しながら走り去る垣根。
その姿はとてもレベル５には見えなかったが、本人は全く気にする余裕がなかった。

「待て！　途中から全然違うことを言っているぞ！？」

最後まで垣根の言葉に突っ込む吹寄の肩に、青髪ピアスと姫神が優しく手を置く。
それはまるで「垣根だから」と言っているかのようだった。

「よし、次こそは……よう花瓶、楽しんでるかー？」

「垣根さん！　だから私の名前は初春飾利だって言ってるじゃないですかー！？」

花瓶と呼ばれた事に怒る初春だが、残念ながら凄みが全く無いので垣根には露程も怖くなかった。
それどころかニヤニヤと意地の悪い笑みすら浮かべていた。

「んだよ、可愛い愛称（ニックネーム）で呼んでるんだから喜べよ」

「全然嬉しくありませんー！」

ポカポカと垣根の肩を叩く初春。
残念ながらその攻撃に、垣根はマッサージ程度の感覚しかなかった。

「あはは、垣根さんは相変わらずだね」

二人のコントに佐天は思わず笑ってしまった。

「貴方が垣根さん？　このパーティの主催者の」

「おう、俺が垣根帝督だ。そっちは……えっと固法さんに竜童だっけ？」

「レベル５に覚えてもらえるなんて光栄ね。私の名前は固法美偉。

初春さんと同じ風紀委員支部に所属しているわ。今日はパーティに呼んで頂いてありがとうね」

「は、初めまして！　竜童紗月です！　きょ、今日はお招き頂きありがひょ！」

冷静に答える固法だったが、反対に紗月はパニック状態であった。
そのためか、挨拶を述べている途中で盛大に舌を噛んでいた。
辺りに静寂が漂う。顔を真っ赤にしながら口もとを抑える紗月。
それを見た垣根は、とりあえず何も見ていなかった事にしようと結論に達した。

「えーと、固法さんに紗月ちゃんね。今日は遠慮せずパーティを楽しんでいってね」

「ふ、ふぁい……」

「ええ、そうさせてもらうわね」

大人な笑顔で答える固法と、目に涙を浮かべながらも辛うじて答える紗月。
そんな二人を見て垣根は薄く笑った。

「ちょっと待ってください、垣根さん。この人の名前は？」

すると突然初春が佐天を指さしながら垣根に質問を投げた。
初春以外全員が首を傾げる。

「えーと佐天ちゃん」

とりあえず答えておこうと思った垣根は素直に佐天の名前を口にする。
すると初春の指が佐天から固法の方に向いた。

「固法さん」

「では、この人は！？」

「紗月ちゃん」

何が言いたいのか分からない垣根は、頭にハテナマークを浮かべながら答える。
反対に初春はプルプルと震えながら最後に自分を指さした。

「じゃあ私は！？」

「花瓶」

秒の迷いすら見せず垣根は即答した。
自然と、まるでそれが正しい答えなのだと言いたげに。

「ど・う・し・て・私だけ名前じゃないんですかー！？」

再び顔を真っ赤にしながら垣根をポカポカと殴る初春。
必死に殴る初春だが、垣根はそれら全てを無視してポケットからあるモノを取り出す。

「そう言えばオセロにプレゼントがあったんだ。悪いけど渡してくれないか？」

「オセロ？」

「あー白井さんの事ですね。どんなプレゼントなんです？」

固法の疑問に佐天が笑顔で答える。

何をプレゼントする気なのか興味が湧いた固法は、垣根の手にのっているモノをよく見る。

「ふっふっふ、驚け。超電磁砲ですら壊れない俺特製の『ですの人形付きストラップ』だぁ！？」

垣根の手に乗っていたもの、それは小さな人形がついたストラップであった。

紐にはご丁寧に『風紀委員ですの』という文字が書かれていた。

しかし問題はそこではない。ストラップに付いている人形が問題であった。

「これ……どう見ても白井さんですよね？」

「ですねー」

垣根命名の『ですの人形付きストラップ』の人形は、どう見ても黒子にしか見えなかった。

常盤台の制服、ツインテール、風紀委員のワッペン。

どれもこれも完璧なまでに再現しており、かなり精巧な作りをしていた。

「驚くのはまだ早い……こうしてツインテールを引っ張ると」

『風紀委員ですの！』

垣根が人形のツインテールを引っ張ると、それに合わせて誰かの声が聞こえた。

「どうよ？　完成度が高いだろう？」

胸を張って威張る垣根だが、反対に回りは反応に困っていると言いたげな表情だった。
実際なんとコメントすればいいのか誰もわからなかった。

「と、とても精巧な作りですね……」

紗月が辛うじてコメントを出したが、それ以上の事は何も言えなかった。
反対に垣根は上機嫌で笑うと、ストラップを半分硬直している固法の手に乗せる。
そして固法たちの反応を待たず、その場を立ち去った。
残された固法たちは一同に思った。

どうすればいいの、このストラップ？　と。

もう一つ問題を抱えていたのだが、残念ながら硬直状態の固法たちは気付く事が出来なかった。

垣根パーティ　その二

初春たちと別れて垣根が次に向かった場所。
それは他のグループから少し離れてた位置にいる土御門たちであった。
まだ馴染めない感覚があるのか、結標や海原は常に周囲を警戒していた。
だが垣根はそれらを無視して、片手をあげながら歩み寄った。

「いよぅ、楽しんでいるか？」

「舞夏の料理には劣るが、それなりに美味しいにゃ～」

垣根の問いに土御門が笑いながら答える。
やたら高級そうな肉だけ狙っているのか、土御門の周りには肉料理しか置かれていなかった。
反対に結標はサラダばかりで、菜食主義者のような雰囲気であった。

「んだぁ、結標。お前サラダばっかりかよ」

「栄養考えて食べないと、早死にするわよ」

とりつく島もないとはこの事である。
流石に最初からかったせいか、結標は垣根を酷く警戒していた。
といっても危険を警戒しているのではなく、からかわれないかを警戒しているようだが。

「自分は普通に食べていますがね。ある意味で結標さんも土御門さんも極端なのですよ」

「土御門は肉ばっか、結標は野菜ばっか。本当に極端な連中だなー」

「ほっといてよ。人が何を食べようと勝手でしょう？」

「垣根ー。結標は歩君が入院したので、少々イライラしてるにゃ～。程々にしないと危険だぜい？」

「歩？」

土御門の言葉に聞き慣れない人名が聞こえた垣根は、そのままオウム返しのように質問を投げる。

「結標の同居人にゃ～。まぁ何も言わなくても、どんな奴かは想像つくだろう？」

「……あぁ」

その言葉で納得した垣根は、歩と呼ばれる人物の姿が想像できた。
きっと結標好みのショタコン男なんだろうなぁ。
そう思った垣根は、何か可愛そうな人を見るような目で結標を見る。

「な、何よ……」

垣根の視線に思わず後ずさった結標。
これから来るからかいの言葉に警戒心を最大まで高めた。

「いや……うん。俺はお前を侮っていた」

「？？？」

言葉の意味が分からず頭にハテナマークを浮かべる結標だった。
そんな結標を見て、土御門は口元を抑えて笑いを堪えていた。

「まぁ……頑張れ？」

「は？　う、うん」

何に頑張るのか分からなかった結標だが、とりあえず無難な返事を返した。

「あーそうだ、土御門。ちょっと聞きたいことがあるんだけどいい？」

「むぐむぐ……何だにゃ～？」

高価な肉を遠慮なしに食べていく土御門。
結標はサラダがつきたのか、垣根との会話が終わるとそのまま立ち去った。

「自分も聞いていいのでしょうか？」

何やら大事な話だと雰囲気で感じ取った海原は、垣根に立ち去るべきか尋ねる。
垣根は首を軽く横に振り、海原の問いに答える。

「まー大丈夫だと思う。土御門かアリシアに聞けと言われたが、他人が聞いてはいけないとも言われてないしな」

「もったいぶらないで言うにゃ～。舞夏の事以外なら大抵は答えれ

るにゃ～」

「そっか、じゃあな。アクゼリュスって何者か知ってるか？」

小さな疑問だと考えていた垣根は、呑気な表情をしながら質問を投げる。

だが、それを聞いた土御門と海原は、ゼンマイが切れたように手が止まった。

「あん？　どうした。何か変なことを聞いたか？」

その様子を訝しげに思った垣根はのんきな声で土御門たちに尋ねる。

土御門は一度小さくため息を吐くと、手に持っていた箸をテーブルに置いた。

さっきまでの呑気な雰囲気は霧散し、ただ無言で垣根に視線を向けていた。

「一つだけ聞くぜい。その名前をどこで知った？」

「（あん？　一体何なんだ？）今日の昼間、喫茶店で同席した奴がそう言ったんだよ」

「ソイツは銀髪に紅い瞳、それから黒、もしくはそれに近い色のゴスロリ服を着ていたか？」

「よく知っているな。ぴったりその通りだったぜ。何か巫女装束を着た奴も一緒にいたが……」

「垣根」

言いかけている垣根の言葉を遮るように土御門は冷たい言葉で言う。
その雰囲気から、何か重大な情報を聞き出そうとしたことに今更ながら垣根は気付いた。

「悪いがそれは教えられない」

「……そっか。分かった」

これ以上は踏み込めない。そんな予感にも似た考えが浮かんだ垣根は、土御門の言葉に素直に従った。
土御門はサングラスの位置を直した後、テーブルに置いた箸を再び手に持つ。

「友人としての助言だ。そいつには関わらない方がいい」

「向こうが関わらなければな」

垣根の言葉に、土御門は笑いながら違いないと呟いた。
場の雰囲気が変わったせいか、それ以上誰も何も言葉を口にしなかった。
しばらく無言状態で、土御門が箸を動かす音だけが聞こえる。

「変な事聞いて悪かった。ま、パーティは楽しんでいってくれ」

「もちろんだにゃ～。垣根の財布が悲鳴を上げるぐらい、高価な肉を食いまくってやるにゃ～」

しかし数分もすれば雰囲気は元通りになっていた。
土御門に小さく手を振ると、垣根はそのままグラス片手に立ち去っていった。

垣根が立ち去って少しした後、土御門は盛大に息を吐き出した。
まるで心の中に何かがたまっているのを、すべて吐き出すかのように。

「参ったぜい。あの魔女、かなり好き勝手に学園都市を闊歩しているようだ」

「あの魔女にとって、科学世界と教会世界にある暗黙のルールなど関係ないのでしょうね」

「余計な動乱を生み出して欲しくないんだがな。残念ながらあの魔女はそう思ってくれないようだ」

そうボヤく土御門は、まるで上と下から同時に責め立てられる中間管理職のような雰囲気であった。
疲れたようなため息を吐くと、近くにあったグラスを手に取る。

「噂だけは聞いていたが、やはり使い魔も学園都市に入り込んでいるか」

言葉を吐き出すと同時に、土御門はグラスの中身を一気に飲み干す。
その姿は、まるで嫌なことを洗い流すかのように見えた。
空になったグラスを置くと、土御門はもう一度ため息を吐く。

「まぁオレたちが何を言っても止められないからな。あの魔女の行動は……」

「ええ……そうですね」

周りは陽気な空気だが、土御門の周りだけはどんよりした空気であった。
それから暫くした頃、戻ってきた結標は土御門たちの様子に首を傾げた。

「（何かマズい情報なのかな）よっす、黄泉川先生。楽しんでいるかー」

「おおぅ、垣根ぇー。楽しんでいるじゃん」

ベロンベロンに酔った顔で笑っている黄泉川を見て、垣根は内心苦笑いしていた。
元々はパーティの監視込みで来ているはずだが、今の黄泉川はただの酔っ払いであった。
後輩の鉄装は飲みに付き合わされたのか、目を回して床に寝転んでいた。

「先生、飲み過ぎると後に響くぞ。別に持って帰っても構わんから、程々にしとけよ」

よく見れば黄泉川の足元には酒瓶が何本も転がっていた。
サイズも大小で、小さな瓶から明らかに一人で飲むには多い量の大瓶まで。
一体いくら飲んだんだと思わずにはいられない垣根であった。

「こういうのは、こういう席で飲むから旨いじゃん。家で飲んでも美味しくないじゃん」

「まぁ一理あるけどさ……後輩さんなんて潰れてるぞ」

「お、おお……鉄装。潰れるにはまだ早いじゃん～」

「先輩～もう飲めません～」

鉄装のギブアップ宣言を黄泉川は軽く笑い飛ばすだけであった。
容赦なく鉄装のグラスに酒を注いでいく。
酔っぱらいの相手は嫌なのか、垣根はただ見ているだけで何もしなかった。

「人生初の高級お肉……」

「食べてみると洋食も悪くないな」

そんな絡み合いをする黄泉川と鉄装の近くで、浜面と半蔵は黙々と食事をとっていた。
浜面は肉を食べる事に感動に打ち震えていたが。

「よう馬鹿面と服部半蔵だっけ？」

「むぐっ！？　浜面ですって！？　どうして皆俺の名前を間違えるの！？　わざとなの！？」

「きったねぇなぁ。物食いながら喋るな」

「あ、すまん」

名前間違いに激昂した浜面だが、垣根の一睨みですぐに大人しくなる。
何やら肩身の狭い感じで、モソモソと肉を食べていた。

「気になっていたんだが、鼻面は誰から招待状を貰ったんだ？」

「浜面です……えーと、今日の昼間に半蔵と街を歩いていたら優菜ちゃんから貰ったんだよ」

「……へぇー、そうなんだー」

浜面の答えを聞いて、最初から険しかった顔がますます険しくなっていった。
どちらかと言えば浜面を睨んでいるという方が正しいが。

（あれ？　俺何か地雷を踏んだ！？）

危険な雰囲気をいち早く察知した浜面は周りに助けを求めようとする。
しかし半蔵は素知らぬ顔、黄泉川は鉄装と絡んでこちらを全く見ていない。

（ひぃぃぃ！？　絶体絶命じゃねぇか！？）

崖っぷちに立たされた浜面は、体中から嫌な汗が吹き出してくる。

「こんな小物の何が気に入ったのかね、優菜は」

浜面の百面相を一部始終見ていた垣根は小さくため息を吐きながら

言った。
何か言いたかった浜面だが、垣根の逆鱗に触れたくないと思い、引きつった笑みを浮かべるだけであった。

「ま、いいや。テメェが優菜と仲良しこよししてもいいがよぉ……」

垣根は言葉と同時にずいっと浜面に一歩迫る。

「あいつを傷つけた時は決して許さねぇ。どこに逃げようと、必ず見つけてぶっ殺す」

浜面のみに聞こえる程度の声量、だがそこに冗談は微塵も感じられなかった。
垣根の目を見た浜面は、彼が本気である事を理解する。
同時に、それほど垣根が優菜を大事に思っているという事も。

「俺はレベル0だ。だから超能力者(あんたら)みたいな強さも何もねぇ。けどよ、女を傷つけるようなクソッタレな男になるぐらいなら、死んだほうがマシだと思ってる」

だから浜面も冗談や愛想笑いなどを浮かべず真剣な表情で返事を返した。

「はん、中々の根性じゃねぇか」

それを見た垣根は、何処か満足気な笑みを浮かべながら言った。

一方通行パーティ　その一

垣根がパーティを楽しんでいる頃、一方通行も同じようにパーティを楽しんでいた。
といっても垣根ほど弾けているわけでもない。
時折人の話に相づちを打ちつつ、料理を食べている程度だ。

「うー、量が足らないんだよ」

「後で腹一杯食えるンだろ？　お楽しみは後に取っておけ」

「そう言われると我慢できるんだよ！？」

普段より少量の食事に、インデックスはうなり声をあげながら不満を口にする。
その言葉に突っ込みを入れながら、一方通行は手短にある料理を食べる。

「何時頃でる予定なンだァ？」

三人の予定を聞いていなかった一方通行は、上品に食べているアリシアに質問を投げる。

「そうだな。後十分もしない内に向かおうと思う」

アリシアは箸をテーブルに置き、口もとを拭った後で答えた。

「タクシーはいるか？」

一方通行の問いにアリシアは少しだけ考える。
だがすぐに答えがでたようで、少しだけ苦笑しながら言葉を口にする。

「そうだな……すまんが呼んでくれないか？」

「分かった」

「あまり遅くなるようなら、優菜ちゃんの家に泊めて貰ってくださいですー」

その言葉をアリシアが聞いた瞬間、何か意地悪な事を考えている笑みを浮かべた。
嫌な予感を感じた一方通行だが、心のバリアを張る猶予は貰えなかった。

「そんなに二人きりになりたいのか。わかった、たっぷり遅くなるから安心しろ」

「ぶふっ！？」

「待てェ！？　そう言うンじゃねェよ！？」

「まぁ冗談だ、ムキになるな。禁書目録殿のイギリス行きもあるから、恐らくは泊まりになると思う」

「あァ……確かになァ。そう言う意味でいえば、クソガキ共は優菜の家に泊まる方が良いのか？」

「うむ、そう言う事だ。安心しろ、ちゃんと宿泊と帰宅時には一報

を入れる」

「そ、それはお願いしますー。連絡がないと心配しますからね」

それで会話は終わりと思ったのか、アリシアは再び箸を手に持ち料理を食べていく。

三人ともあまり食べていく気はないのか、普段よりも小食であった。

それでも一つ一つ味わって食べていたが。

「ていとくが開くパーティの料理が楽しみなんだよ」

「すっごい豪華なんだってミサカはミサカはわくわくしながら言ってみたり」

「メルヘンは無駄に気合が入ってるからなァ」

「ははは、ここでの暖かいご飯も素敵なのだが、やはり豪華な料理にも惹かれるのだよ」

「垣根ちゃんは無駄使いしすぎです」

「ま、経済的にはいいのではないか？　金持ちがお金を使わないと金が循環しない」

そこでふと何かを思い出した一方通行。

少しだけ罰が悪そうな顔をしながら、一方通行はアリシアに尋ねる。

「……所でアリシアよォ。お前メルヘンが優菜に惚れているのは知っているンですかァ？」

「むぐっ！」

その言葉に思わず吹きだしそうになったアリシアだが、既の所で耐えきった。

グラスに入っている飲み物を一気に飲み干した後、盛大に息を吐き出した。

「……タチの悪い冗談は止めてくれ」

「うン、冗談ですめばよかったンだけどな」

「は、ははは、まさかそんな。だがだな、わ、妾は姉上の恋愛事情には口を出さない。だ、だだだだだいたいだな、姉上もとと年頃だし、男の一人ぐらいか、かか軽く扱えないとな。は、ははははははは」

明らかに無理して言ってるのがバレバレであった。

ひきつった笑みを浮かべ、手はプルプルと震えていた。

「お、落ち着けアリシア。手が震えているぞ」

「おおおおおお落ち着いているぞ。わ、わわわわわ妾が、そ、そそそんな程度で動揺するなど、あ、あり得ぬではないかぁぁぁ！」

パニック状態のアリシアは目を泳がせながら一方通行の問いに答える。

明らかに言動と一致してない態度に、全員が苦笑していた。

「全く落ち着いていないんだよ」

「うん、誰が見ても動揺しまくりだねってミサカはミサカは事実を突き詰めてみたり」

「アリシアちゃんは優菜ちゃんが大好きですからねー」

「まぁ頑張れ？」

四人はアリシアに何か微笑ましい視線と笑みを向けつつ頷いた。
ひきつった笑みを浮かべたアリシアだが、突然盛大なため息を吐いて下を向いた。

「姉上は女人にモテるから殿方の方は警戒していなかったのじゃ」

「でもあれだけ器量がよいのですから、男性からの告白がかなりあったんじゃないですかー？」

小萌は首を傾げながらアリシアに尋ねる。

最初はお嬢様教育からか、それなりに気品のある所に惹かれていると思われていた。
しかしそれでは説明がつかない場面を、クラスメイトたちは多く目撃する事となる。

そしてクラスの大半はある事に気がつく。
優菜には男性にモテるという場面が少なく、どちらかと言えば同姓にあたる女性にモテている場面が多い。

とは言え男性が好意を寄せていないと言えば否になる。
クラスの大半は好ましく思っているし、上級生にもかなりの人気を誇る。

垣根などは筆頭にあたり、何か機会があれば優菜とよく喋っている。およそ悪意と呼ばれる感情を彼女に抱いている人間はいないのだ。

「聖カトリーヌ女学院は基本的に殿方禁止だ。教師から掃除員まで全てな。だからよっぽどの理由が無い限り、殿方が女学院内にまで入り込む事は出来ん」

「それは徹底してるんだよ」

アリシアの説明に感嘆の声を漏らすインデックス。
それで気をよくしたアリシアは、尋ねられていない事まで口にし始める。

「学園都市より少し警備を下げた程度だと思ってくれればいい。外からの来客者も基本的には監視されている。その上姉上は少々特殊な立場にいたのでな。近づこうにもあちこちから横やりが入るわけだ」

「横やりって？」

「取り巻きと言えばいいのか？　姉上は取り巻きなんぞ作っておらぬが、自然とそれが出来てしまうほど姉上はモテていたのだ」

「ほえー、優菜お姉ちゃんって凄いんだ、ってミサカはミサカは素直に感心してみたり」

「姉上自身は普段通りにしていたのだがな。気付いたらそうなっていた訳じゃ」

モテる事自体は気にしていないのか、アリシアは誇らしげな口調で

語る。
平らな胸の前で腕を組み、鼻を鳴らしながら笑っていた。

「女性受けがいいってかァ？　確かにそンな感じがするンだが……あァ、そう言えば一度だけ男の服を買っていたなァ」

「確か恩師に送るとか言っていましたねー」

しかしアリシアの上機嫌も、一方通行と小萌の何気ない一言で霧散する。
笑顔のまま硬直すると、眉をピクピクと器用に動かす。

「恩師……じゃと？」

油の切れた機械のようにギギギと音を立ててアリシアは尋ねる。
顔は笑顔だが、内心は物凄く怒っている事が傍目から見ても理解できた。

「その服は青色を基本とした服ではなかったか？」

「……確かに青ばっかりだったなァ」

「青色ばかりでしたねー」

一方通行と小萌の言葉に、青筋をビキビキと立て始めるアリシア。
明らかに対象の人物に怒っている事が分かる。
しかしそれを見ても周りの人間は首を傾げてしまう。

優菜は誰であろうと基本的に同一の扱いをする。
場末のスキルアウトからレベル５まで、全ては均一な扱いだった。

無論家族である当麻たちは別格の扱いだが。

「クソッタレが、やはり一度姉上と接触したのか、あの男は」

吐き捨てるように言ったアリシアは、思い出すのも忌々しいと言いたげな表情であった。

恩師の事を知らない一方通行たちにとって、アリシアの怒りはイマイチわかりにくいものだった。

何をそんなに毛嫌いしているのか、そう思わずにはいられなかった。

「そンなに嫌うって事は……何か理由があるンですかァ？」

「あの男は妾の一族の敵であるローマ正教の者にて、唯一姉上が好意を持ってる奴だからじゃ！」

わなわなと震えながら絶叫するアリシアだったが、周りの反応はかなり薄かった。

と言うより、どういう反応を示せばいいか分からないという方が正しかった。

「姉上をあれだけ放置した挙げ句に、しれっと再会しているのが気に入らん！　やっぱりあの男は数年前に始末するべきだったのじゃあ！？」

「お、落ち着くのですよー」

「落ち着いてられるかー！　やっぱりイタリア半島をこの惑星から消し飛ばしてやる！？」

何やら危険な事を叫び続けているアリシアを後ろから羽交い締めに

する小萌。
インデックスと打ち止めは、二人のやりとりをただ呆然と眺めているだけであった。

（ふゥン、あの優菜が好感を抱く人物……か）

一人別のことを考えていた一方通行は、二人のやりとりを眺めつつ見知らぬ恩師とやらを想像する。
硬い信念を持ち、その信念を叶えるほどの強さを持つ人物だと一方通行は思った。
優菜が師と仰ぎ好感を持つ人物、それが腐りきった人物とは思えないからだ。
もしそんな人物が優菜に近づけば周りの者、特にアリシアが許しはしないはずだ。

（そう考えると、アリシアもある程度認めているって事か）

認めてなければその人物は、今頃土の下で眠っていると思えたから。

「離せぇ！　やっぱり妾は認めないのじゃー！？」

「落ち着いたら離してあげます。だから冷静になってくださいー！」

（認めている……ンだよなァ？）

アリシアの態度に若干不安を感じた一方通行だが、その不安を払拭する材料は手には入らなかった。

一方通行パーティ　その二

毎度ながらひたすら暴れるアリシアを宥める小萌の図が出来た。
暫く押し問答をしていた二人だが、徐々にアリシアが冷静になっていく。

「ぜー、はー……お、落ち着いたから離すのじゃ」

最後にはどんよりした空気を纏いながら大人しくなった。
疲労困憊なのか肩で息をしていたアリシアである。

「アリシアちゃんは、優菜ちゃんの事となると冷静を失いすぎです。
もう少し落ち着かないとダメですよー」

「うぅ……無自覚な姉上だから心配なのじゃ」

がっくりと肩を落として、盛大に息を吐き出すアリシア。
その姿は、何やら分からない所で苦労しているように見えた。

（苦労してるンだなァ）

哀愁漂うアリシアを見て、何か達観したような感覚になった一方通行。
しかしそれ以上は何もせず、ただアリシアが復帰するのを見ているだけであった。

「ふ、ふふふ……」

突然アリシアが不気味な笑い声をあげる。

前髪で顔が隠れており、どんな表情をしているかは分からない。
しかし歪んだ笑みを浮かべているのだけは、はっきりと見て取れた。

「負けぬ、妾は負けぬぞぉ！　絶対に誰にも姉上は渡さーん！」

アリシアは近所迷惑も考えず、周りにいる人間の鼓膜に盛大なダメージを与えるほどの声量で叫ぶ。
耳がキーンとなった一方通行たちは、両耳を押さえながらしかめっ面をする。

「何やら一周回って何かを悟ったみたいなんだよ」

「悟ったっていうより暴走している感じがする、ってミサカはミサカは素直な感想を述べてみる」

呆然とアリシアと小萌のやりとりを見ていたインデックスと打ち止めが、ぽつりと感想を口に出す。
結局アリシアは優菜に限った事だけは冷静になれないようであった。

それから暫くした頃、一方通行が呼んだタクシーがやってきた。
アリシアの暴走で予定より十分近く遅くなったが、元々余裕があったので問題になる時間ではなかった。

「じゃあ行ってくるんだよ」

「楽しんでくる、ってミサカはミサカは笑顔で手を振る」

「はい、行ってらっしゃいですー」

いち早くタクシーに乗り込んだインデックスと打ち止めが窓から顔

を出して叫ぶ。
そんな二人に苦笑しつつ、小萌は小さく手を振っていた。

「気をつけろよ」

「ん、分かっておる。多少問題児がでても平気じゃ。妾の強さは知っておろう？」

「世の中には、それが理解出来ない馬鹿がいるンですよォ」

違いない、そう呟いた後アリシアは助手席に乗り込む。
一方通行と小萌は、二人並んでアリシアたちを見送る。

「何かあったら電話しろ。まァメルヘンもいるし、問題なンて起きないと思うがな」

「心配性だのぅ、一方通行殿は。いい父親になれるかもな」

「うっせェ」

言葉と同時に一方通行が片手をあげると、アリシアたちは素早く車の中に顔を引っ込める。
本気ではなかった一方通行も、その姿にため息を吐きつつ腕をおろした。

「第三学区のホテルまで頼む」

アリシアの言葉を出発の合図と取った運転手は、左右の安全を確認した後に車を発進させる。
軽快な音を立てたタクシーは、あっという間に一方通行たちの視界

から消えていった。

「はン、やっと五月蠅いのが消えたか」

「そう言って本当は寂しいのでしょう？」

「……違う」

一方通行の返答を聞いた小萌はくすくすと笑った。
本当の答えはそれでないと明らかにバレバレだった。

「寂しくなンかねぇ」

それでも気恥ずかしさからか、一方通行は少しだけ拗ねたような表情で否定の言葉を述べる。

「本当にですか？」

一方通行の顔を覗き込みながら、小萌は同じ事をもう一度尋ねる。

「あァ……あいつ等の帰ってくる場所はココだからなァ」

その視線から逃げず一方通行は告げる。
彼女たちが帰ってくる場所は、小萌が住むここだ。
だから離れ離れになっても、最後は一緒になるのだと。

「そうですねー」

一方通行の思いを感じ取った小萌はそれ以上何も聞くことをしなかった。

ただ、同意の言葉を述べただけ。それだけで、二人は阿吽の呼吸で分かりあえたのだ。

「パーティの続きをしましょうか」

「だなァ」

どちらからともなく二人は家へと戻っていった。
二人は気付いていなかった。
互いの温もりを求めるかのように手を握りあっている事に。

タクシーを走らすこと二十分弱。
途中インデックスが盛大に腹の虫を鳴かせたが、概ね何事もなく指定の場所へと着いた。

「着いたな」

「さっさと会場に向かうんだよ！？」

空腹のためか殺気立ちながらインデックスは歩く。
放っておけば甚大な被害が発生すると思ったアリシアは、インデックスを宥めつつホテルへと入る。

「豪華！？ってミサカはミサカは感嘆の息を漏らしてみたり」

「見学もいいが、早くしないと禁書目録殿が飢えで倒れそうだ」

アリシアはその辺にいるボーイを捕まえ、垣根が開くパーティ会場まで案内を頼む。

歩く獣と化したインデックスに怯えながらも、ボーイは的確にアリシアたちを案内していく。

「ここか」

「で、です。それでは、私はこれで失礼します」

逃げるように立ち去ったボーイを無視して、アリシアたちは扉の前で唸る。

「むぅ、このまま普通に入るのは癪だ」

「どうするの？ってミサカはミサカは首を傾げてみたり」

「いいから早くはいるんだよ！？」

血走った目で叫ぶインデックスを無視して、アリシアは何か悪い企みを思いついた顔をする。

嫌らしい笑みを浮かべたアリシアに、少しだけひいた二人だがアリシアを止めようとは考えなかった。

「よし、二人とも……耳を貸せ」

その言葉に従った二人は、耳を素直にアリシアの方に向ける。

「くっくっく、よいかおまえたち。今から……」

垣根はゾクリと背筋に寒気が走るのを感じた。
暗部で培った経験からか、危険を察知する能力は人一倍高かった。

（何だ？　この胸騒ぎは）

その察知能力が告げる。これから危険が迫ってくると。
心が怯えるほどの尋常ではない危険が。

（くそっ、何だ？　今から……）

「ていとくっ！？」

危険を知ろうと辺りに視線を向ける垣根の耳に、小さな女の子の声が聞こえた。
何故か頭上から。

「あぁ？」

呆けた声を上げて垣根は視線を上に向ける。

「がおーなんだよ！？」

そこにはギラリと歯を輝かせたインデックスがいた。
そのままインデックスは、垣根の頭に容赦なく噛みつく。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああ！！！？？？」

突然の事で何も予防できなかった垣根は、痛みのあまり大声で悲鳴を上げる。

思いっきりふりほどこうとしたが、インデックスの噛みつきは強力でありおいそれと外すことは出来ない。

「にゃはは、負けたのっじゃあ！？」

「にゃおーんってミサカはミサカは言いながら噛みつく」

そんな垣根に新たな噛みつきが追加される。

アリシアと打ち止めである。アリシアは当然ながら本気で、対して打ち止めは軽く噛みつく程度であった。

「いってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」

噛みつきが追加されると思っていなかった垣根は、またもや大声で悲鳴を上げる。

頭蓋骨と右腕がミシミシと悲鳴を上げる。

そろそろ外さないと、垣根の頭蓋骨は木っ端微塵に砕け散る所であった。

突然の事に周りは呆然と眺めていたが、やがて理解が追いついた優菜が三人を止めようと駆け寄る。

「三人とも何をしているのです！？」

その言葉にビクっと反応した三人は、素早く垣根から離れる。

「予定と違うんだよってミサカはミサカは優菜お姉ちゃんがご立腹なのを見て怖がったり」

「お腹がすいたんだよー！？」

「ちょっとやりすぎたのじゃ。まぁ姉上を誑かす奴にはちょうど言い罰じゃ」

反省の色ゼロである三人に、優菜は問答無用でげんこつを振り下ろす。

インデックスと打ち止めは少し強めだが、アリシアのみ頭蓋骨が危険な状態になった事を伝える音が響く。

「ぐおおおおおおおおお！？」

あまりの痛さに恥も外見も捨ててアリシアは頭を両手で抱えながらのたうち回る。

インデックスと打ち止めも、涙目で頭を押さえていたが優菜は三人を無視して少し強めに睨む。

「ごめんなさいは？」

「ご、ごめんなさいなんだよ」

「ごめんなさいってミサカはミサカはしょんぼりしながら言う」

二人ともシュンとして垣根に謝罪の言葉を述べる。

そんな二人に、優菜は今度は優しく頭を撫でる。

「うん、よろしい。二人ともよく言えましたね」

優しく撫でられて心地良いのか、少し顔を赤くしながらもされるがままの二人であった。

「あ、姉上……妾はもっと酷いのじゃが……」

「どうせ貴方が二人をけしかけたのでしょう？」

「い、いや……この手紙通りにしただけなのじゃが」

そう言うとアリシアは小さな手紙を優菜に差し出す。

その手紙に訝しげな視線を向けながらも、優菜は手紙を受け取ろうとした。

「いつつ、ひどい目にあった」

そこへ頭を押さえつつ垣根が復活する。

その顔には綺麗に歯型が浮かんでおり、かなり間抜けな顔になっていた。

何人かが声を殺して笑っていたが、残念ながら垣根は気付いていなかった、

「あん？　この手紙は何だ？」

優菜が受け取ろうとした手紙を、垣根は真横から無造作に奪い取る。

そしてそのまま文面に視線を落とす。

『メルヘンは噛まれるのが好きだから、盛大に噛ンでやれ』

この文面は誰が書いたかを理解した。

同時に三人から噛まれた理由も理解した。

「あんのクソロリコンがぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？？」

ビリビリと手紙を引きちぎっていく。

脳裏にニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべた一方通行が浮かんだ垣根であった。

上条家パーティ　その一

色々あったがフレメアは上条家の家族として迎え入れられた。
最も戸惑ったフレンダだが、冷静になった今は落ち着いて受け入れられる事が出来た。
沈利も理后も、そして最愛もフレメアが家族になる事には反対しなかった。

寝ていたフレメアも、そこまで眠くなかったのか十分もしないうちに起きた。
最初は少し緊張していたが、すぐに沈利たちと打ち解ける。
沈利の問いにも、フレメアは迷うことなく答えた。

家族となって一緒に住むと。

フレメアと沈利たち、互いに何もかもが受け入れられたと思えた。
しかし一つだけ、そうたった一つだけ沈利たちには受け入れられない事が発生した。

「にゃおーん」

「おいおい、くすぐったいぞフレメア」

それはやたらと当麻にベタベタする事である。
刀夜曰く、何やら当麻が気に入った様子ですぐに懐いたとの事。
今も子猫の泣き真似をしながら、当麻の膝の上をごろごろと回っていた。

「にゃーにゃにゃー」

「すまん、フレメア。流石にその言葉は理解できない……」

「大丈夫かも。当麻お兄ちゃんなら大体、理解できるようになる。にゃあ」

そう言ったフレメアは、当麻の右手をその小さな口でカプリと噛む。
子猫が遊んでほしくて噛むような感じであった。

甘噛みに対してフレメアの髪の毛を優しくなでる当麻。
ほのぼのとした光景である。

「ははは、痛いぞフレメアァッ！！」

しかし、そこまでであった。
彼女たちの限界点は。

当麻が最初に理解したのは殺気。
次に分かったのは自分がかなり危険だという事。
選択肢を誤れば一瞬でバットエンドコース。

「とうまぁ～」

地獄の底から響くような声が当麻の耳に届く。
手はフレメアの頭に乗せたまま、当麻は首だけを器用に動かし視線を声の主に向ける。

「は、ははは。し、沈利姉ちゃん……こ、怖いですよ」

そこには嫉妬の炎を燃やした沈利がいた。

沈利だけではない、理后もフレンダも最愛も、そして操祈も同様であった。

「あらあら、当麻さんったら。誰かみたいにとってもモテるのね」

唯一呑気な位置にいる詩菜が現状を的確に現した言葉を発する。

頬を手に添えて喋るその姿は、とても高校生レベルの子供がいる風貌には見えない。

「当麻お兄ちゃんー。フレメアばっかり構ってずるいって訳よ！」

「そもそも当麻お兄ちゃんの膝の上は、私の超特等席です！　フレメア、そこを超どくのですー！」

「にゃあ！」

フレメアを無造作に掴むと、最愛はそのままフレメアを思いっきり横に放り投げた。

そのままの勢いで最愛は当麻の膝の上に素早く座り込む。

「ふふん、ここは私の超特等席です。末っ子如きに明け渡す理由はないのですー！」

特等席の上でふんぞり返った最愛は、床に転がっているフレメアを見ながら言う。

「にゃああ！？　大体、こうなったら勝負なんだよ！？」

「超かかってくるのです！」

特等席から立ち上がった最愛が、突撃してくるフレメアと取っ組み合いをする。
どうやら相撲のようだが、それにしては髪を掴んだりと色々と反則的な技を使っていたりする。

「大体、負けられない！」

「妹に負けるわけにはいきません！　超本気で行きます！」

（え、最愛ってまさか能力使う気なの？）

一瞬焦った当麻だが、よく見れば最愛は能力を使わず純粋に身体能力だけでフレメアと相撲をしていた。
おそらく放り投げる時も、能力を意図的に切っていたのだろう。
そうしなければ、フレメアは今頃壁に穴をあける程の威力で投げられていただろうから。

何やらよく分からない内に姉妹喧嘩が始まった。
止めようと考えた当麻だが、その前に片づけなければならない問題が発生した。

「どこにいくのかなぁ？　とうま？」

ぽんっと当麻の肩に誰かが手を置く。
軽い音に反して、手からかかる圧力は凄まじくミシミシと肩が悲鳴を上げていた。

「り、理后お姉ちゃん？」

激痛のはずだが当麻は痛みを感じていなかった。

痛みより体を支配する恐怖の方が勝っていたからだ。

「私もナデナデしてほしい。とうまの膝の上で寝転がりたい」

「えーっと、あのですね。あれはあくまで子供が……」

最後まで言い終える前に、ミシミシミシミシミシミシミシっと当麻の肩から危険な音が発生する。

恐ろしいまでの握力で当麻の肩を握る理后は、何か感情が抜け落ちた感じであった。

「とうま、私も頭ナデナデしてほしい」

「いてえええええ、骨！　骨が折れるぅ！」

「とうま、私も頭ナデナデしてほしい」

「わかりましたぁー！　頭ナデナデさせていただきますから力を抜いてくださいー！」

当麻の言葉で気をよくした理后は、肩を掴んでいた手をはなす。

そのまま無言で当麻に頭を向けると、体を微妙に揺すって催促をした。

早く撫でないとヤられる、そう感じた当麻はフレメアと同じ様な感じで理后の頭を撫でる。

「ほふぅ」

心地よい声を上げて理后はうっとりする。

少しだけ目が潤んでいるが、当麻はそれを思考から全力で追い出し

て頭を撫で続ける。

「も、もういい？」

暫く理后の頭を撫でていたせいか腕が疲れてきた当麻は、やんわりと理后に終わりにしていいか尋ねる。

だが今日の理后に、容赦という言葉は存在しなかった。

「ダメ」

秒の迷いすら見せず当麻の願いを却下する理后。

下手に頭から手を離そうとすると、理后は恐ろしいスピードで当麻の腕を掴む。

骨が悲鳴を上げるほどの握力で握られては、当麻に出来る事はただ一つ。

腕が疲れようが、ひたすら理后の頭を撫で続けるという事だけだ。

「当麻お兄ちゃん！？」

理后は満足げだが、当然ながらあぶれた人間は不満たらたらだ。

頬を膨らませたフレンダが、突然当麻の背中に乗りかかった。

「私もいるって訳よ。仲間外れは嫌って訳よ！？」

「ちょ、フレンダ！　危ないって！？」

「当麻お兄ちゃんが頑張れば大丈夫って訳よ」

何やら背中が気に入ったのか、フレンダは当麻の背中にスリスリと

頬をすり寄せる。
フレンダの妙に甘い匂いや、理后の髪から匂う香りに当麻の理性は瓦解寸前であった。

（上条さんの理性がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？）

背中から感じる薄い胸の感触と手から味わう柔らかい髪の感触というダブル攻撃。
普通の高校生である当麻にはかなり酷な状態であった。
ぎりぎりの所で理性を保つが、それもいつまで持つか分からない。

（こ、こういう時は垣根を数えるんだ！　垣根が一、垣根が二……）

既に錯乱状態だった当麻は、何故か垣根を頭の中で数え始める。
パニックの当麻は忘れていた。
後二人、そう強大な存在である後二人の事を。

「当麻先輩」

「とうま」

序列第五位の操祈と序列第四位の沈利。

「私たちだけダメって言いませんよね？」

「だよなぁ？　とうまー」

にじりよる二人に、嫌な予感を感じた当麻。
だがフレンダが背中に乗っており、片手は理后の頭で固定されていた。

つまり、絶体絶命の状態である事は誰が見ても明白だった。

「当麻先輩、覚悟！？」

「何を！？」

操祈の声に思わず突っ込んだ当麻だが、すぐにその理由を知ることとなる。

まるで事前に打ち合わせていたかのように、フレンダがするりと当麻の背中から降りた。

だがそれは諦めたわけではなく、ただ位置を変えただけのようだ。

「当麻先輩の背中頂きましたー」

その声と同時にフレンダでは絶対に味わえない柔らかい感触が当麻の背中に二つ襲いかかる。

その感触は、極上のマシュマロを人肌ぐらいに温めたような感じだった。

ちょっと背中を動かせば、それに呼応してぐにぐにと形を変えていく。

感触も何もかもが、フレンダとは別格であった。

「み、みみみみみみみみー！！！」

もはや言葉にすらなっていない言葉を口にする当麻。

勿論、これで終わりという訳ではない。

「右腕ゲットだぁ！？」

「じゃあわたしは左腕」

「真正面をいただきって訳よ」

右方、左方、前方の三つからそれぞれ沈利、理后、フレンダが当麻に襲いかかる。

体全体をぶつけるかのようにすれば、当然ながら母性の塊は当麻と強く接触するだろう。

「お、おおおおおちっちちちちちつけぇー！」

「とうまの腕、暖かい」

うっとりとした表情で理后は当麻の腕を抱きしめる。

どちらかと言えば、しがみついているという方が正しいが。

「背中も快適です。あれ？　ちょっと位置が悪いのかな？」

その声と同時に操祈は当麻の背中でもぞもぞと動く。

当然密着状態で動けば、色々な所の感触が当麻に襲いかかるのだが、操祈は全く気にせず動いていた。

（いやぁぁぁぁぁぁぁ、理性がぁーー）

色々な所の感触と、脳を刺激する香りに当麻はくらくらとしていた。

あちこちから当麻の鼻を、気持ちすら溶かすような甘い香りがくすぐる。

「おい、とうま。腕がガチガチだぞ。ちょっとほぐしてやろうか？」

貴方が腕をがっちり掴んでいるせいです、とはいえない当麻は無言で首を横に振る。
当然ながら答えはイエス以外に受け取られず、当麻は更に追いつめられる事となった。

「当麻お兄ちゃんの胸板は、なかなかの感触って訳よ」

当麻の胸板をスリスリと頬をすりよせながら、フレンダが恍惚の声を上げた。

どんなに頑張っても、その隙間を縫うように別方向から理性を崩す攻撃が当麻に襲いかかってくる。
四種類の甘い匂いと四種類のある感触、純情な当麻には一分も持てばいい方であった。

「も、もう駄目……」

脳の処理能力が限界を超えた当麻は盛大に鼻血を噴出す。

「あらあら、当麻さんったら。鼻血なんて出してどうしたのかしら？」

周りの慌てた声と共に、詩菜の呑気な声が耳に届いた当麻だが、それを頭で処理する前に意識を手放した。

上条家パーティ　その二

当麻が鼻血を吹いて倒れている頃、隣では熾烈な戦いが続いていた。

「大体っ！　負けないよっ！？」

「超！　望む所です！？」

当麻の膝の上を賭けて、最愛とフレメアが取っ組み合いをしていた。

もはや相撲の原形すら留めておらず、単なるキャットファイトに変わっていた。

互いに服が盛大にめくれて大変な事になっているが、彼女たちはそちらに気を回すほど余裕がなかった。

不幸にも一瞬見てしまった刀夜は、詩菜から常人では反応すら不可能のパンチを喰らって沈んだ。

「ぬぐぐぐぐ、超ッ！　負けるかァァァァ！！？？」

一瞬の隙をついた最愛が、絶叫と共にフレメアにジャーマンスープレックスを仕掛ける。

勿論能力は使っていないが下手な事にならないよう、最愛はフレメアをソファーの上へと叩き落した。

「ふぎゃあああああああああ」

「私の超勝ちです！」

ソファーの上に倒れ伏しているフレメアを見下ろしながら、最愛は

勝利宣言を告げる。
腕を胸の前で組むと、勝ち誇ったような笑みを浮かべる最愛。
対して、フレメアは悔しそうに涙を滲ませていた。

「大体、次は負けないよ！？」

「くっくっく、末っ子とひとつ上の姉では、絶対に超えられない壁があるという事を超教え込んであげます！」

一度の勝負で終わりではないのか、フレメアはソファーから立ち上がる。
そのまま勢いをつけて、最愛へとタックルを仕掛けようとした。
最愛も、フレメアの行動に驚かず、むしろ迎え撃つ構えをとっていた。

「あらあら、二人とも。そこまでよ？」

激突寸前、最愛とフレメアの耳に誰かの声が聞こえる。
その声を聞いた二人は、何かに押さえつけられたかのようにピタリと動きを止めた。

「折角のパーティですから、楽しまないと損ですよ？」

詩菜はニコニコと人の良い笑みを浮かべつつ二人を嗜める。
流石に詩菜に逆らう気はない最愛と、短いながらも詩菜が一番上だと理解したフレメア。
彼女たちは大人しく矛を収める以外になかった。

「さぁパーティを続けましょう」

詩菜の一言でパーティに漂っていた修羅場の空気が霧散した。

あれからフレメアと最愛は乱れた服装を直し、鼻血を吹いて倒れた当麻を詩菜が介抱した。
詩菜が介抱した理由は、当麻の介抱を巡って沈利たちが火花を散らしたせいだ。

『当麻さんの介抱は私がします。異論がある人はいますか？』

詩菜の一言が全てを決めた。
反論する事すら不可能な沈利たちは、大人しく詩菜の言葉に従う。
しぶしぶパーティのセッティングを直したり、詩菜と刀夜の席を用意したりしていた。

全てが完了すると、詩菜と刀夜、それからフレメアを混ぜてパーティの仕切り直しをする。

「んっ、さて父さんと母さん、それからフレメアを混ぜての乾杯をしたいと思いますー」

一回咳払いをすると、沈利はグラスを片手に言葉を発する。
本来なら刀夜や詩菜が行う挨拶だが、この家では沈利が家長である。

「新しい家族も増えて、上条家はますます賑やかになったな。まぁ予備情報すら与えなかった父さんは、後でブチコロシ確定として」

「ちょっ！　沈利今サラっと危険な台詞を言わなかったか！？」

沈利のブチコロシ宣言に焦る刀夜だが、沈利はそれを無視して更に語る。

「今年も皆お疲れ様ー。今日は楽しもうじゃないか！　メリークリスマス！」

「メリークリスマス！！」

互いのグラスをぶつけあう音が部屋に響く。

その音は、聞いているだけで楽しい気持ちにさせてくれる音色であった。

「大体、これからも宜しく。にゃあ」

楽しそうなフレメアの声が聞こえる。

こうして、上条家クリスマスパーティ二回戦が幕を上げた。

最初と違い、二回目は比較的大人しめでパーティは進行した。

両親と近情を交換しあったり、料理を片手に談笑しあったりと。

平和なパーティだが、勿論それが長く続く事はなかった。

「そういえば当麻、お前水くさいじゃないか」

勿論きっかけを作る人間は刀夜だった。
刀夜の言葉に首を傾げた当麻は、何を言っているのか分からなかった。
しかし、次の瞬間刀夜から恐るべき言葉が発せられる。
「彼女が出来たんなら父さんにも教えてくれよ」
「ぶふぅ!?」
思わず吹き込んでしまった当麻は、飲んでいたサイダーを盛大に噴出す。
運悪くグラスの中に吹き出したせいで、盛大に逆流してきたが。
一方の沈利たちも思考が硬直していた。
奇妙な状態で体が停止しており、傍から見ると変な格好をしていた。
「ゲホッ！　ゲホッ！　おいこらクソ親父！　万年彼女なしの上条さんを嬲って何が楽しいのですか!?」
見に覚えのない事を指摘されてかなりむせた当麻だった。
こぼれたジュースを拭きつつ、刀夜に向かって反論する。
少しだけ涙目になりながら。
「あれ？　当麻の事を名前で呼んでいる子がいたからてっきり」
「アホか！　それだけで彼女なら上条さんは両手の数近く彼女がいる事になるじゃねぇか!?」
「そうかあ？　何やら当麻の名前を言う時、かなり親しみを込めて

言ってたような気がするが……」

なおも首を傾げる刀夜であったが、当麻がかなり必死に否定するのでしぶしぶ納得する事にした。

「（おい、最近父さんと接触した奴っていたか？）」

「（超知らないです。大体父さんはこっちに来た事って超数えるほどしかないかと）」

一部始終を聞いて、当麻に彼女がいない事にホッとした沈利たち。しかし刀夜の言葉に出てきた『彼女』の位置にいた女はかなり気になった。

既に刀夜は興味を失っているのか、別のことを当麻と語り合っていた。

話を蒸し返すのが怖い沈利たちだが、ここは確かな情報を手に入れる必要があると考え至った。

「ねぇ父さん。さっきの彼女モドキなんだけどさ、どんな奴だったぁ？」

「ん？　そうだなぁ……えーっと、肩まで届く短めの髪で、色は茶色。それからヘアピンをつけていたな。年齢的には……中学生ぐらいかな？」

刀夜の言葉を聞いて、沈利と理后、フレンダと最愛と操祈はある人物を思い浮かべる。

（あの野郎（みさか）かぁ！？）

ビキビキと青筋を額に浮かび上がらせた沈利だが、すぐに冷静になる。

（当麻は全力で否定している。ならばここで私が怒っても理不尽な怒りになる。落ち着け、落ち着くんだ沈利！）

怒っても意味が無い、冷静になろうと考える沈利。

しかし片手でグラスを握り潰した事は気付いておらず、それを見た当麻と刀夜は顔を真っ青にして怯えていた。

「落ち着くんだよ、しずり。今怒っても意味はない」

そう言って沈利を宥める理后だが、勿論彼女も自分が握っているグラスからの悲鳴は聞こえていない。

ビキビキと音を立てて亀裂が入るグラスを見て、刀夜は今更ながら失言だった事に気付く。

刀夜は忘れていた。

親の目から見れば依存とも取れるほど、沈利たちは当麻に対して愛情を持っている事を。

そんな沈利たちだから、当然ながら当麻の彼女話など面白いと思えるはずもない。

逆にフラストレーションが溜まる一方だった。

（は、はははは）

心の中で乾いた笑いをする刀夜。

沈利たちがフラストレーションを溜めるとどうなるか。

当然ながら解消しようと、そのフラストレーションをどこかに向けて発散しようとする。

問題はその『向き』がどこへ向けられるか不明な点だ。
当麻に向けられる事もあれば、全く違う方向へ向かう事もある。
唯一の安全圏と言えば詩菜だけである。

過去に一度だけ詩菜に怒りを向けてしまい、沈利たちと詩菜は親子喧嘩へと発展した。
それに気付いた刀夜は慌てて当麻に仲裁してもらおうと思い呼び寄せた。
数分後、戻ってきた当麻と刀夜は、信じられない光景を目にした。
それは頭を押さえながら正座させられている沈利たちの姿。
その前に仁王立ちする詩菜の姿だった。

詩菜の『折檻』は、その後数時間続いた。
終わった後、やつれた表情をしながら沈利たちは安堵の息を漏らしたという。

（どうするべきかっ！？）

親の詩菜に向けられないからといって、刀夜に向かないという保証は何もない。
頬に嫌な汗が一筋流れるのを感じた刀夜は、この場を乗り切るために必死に頭を回転させる。
そして刀夜はある事に閃く。思いついた時が実行の時、そう思った刀夜は早速ある事を当麻に質問する。

「ふと気になったんだが、当麻ってどういう娘が好みなんだ？」

それは当麻の女性に対する好み。
案の定、沈利たちはその答えに対して異常なまでの執着を見せた。

「んー？　そうだなぁー」

呑気な当麻の声に一喜一憂しながら答えを待つ沈利たち。
何やらフラストレーションが別方向に向いたことを自覚した刀夜は、心の中でガッツポーズを取る。
だがここで終わる刀夜ではなかった。
ある意味では余計な事とも取れる内容を口にする。

「実は既に意中の異性がいるとか？」

「いたら苦労しませんよ！？」

当麻の言葉にがっくりする沈利たち。
だが一つ有益な情報を手に入れる事が出来た。
当麻に意中の異性はいない、沈利たちを異性として見ていない事にもなるのだが。
取り方によっては、当麻には好きと思える子がいないとも言える。

「でも好みぐらいあるだろう？　ちなみに父さんは母さんが好みだ」

「それで逃げるのかよクソ親父！？」

「何を言う、母さん以外の好みなどある訳がなかろう？」

「ドヤ顔で語ってんじゃねぇ！？」

その後もあーだこーだと言い合う刀夜と当麻だが、結局当麻の好みは分からず仕舞いだった。

上条家パーティ　その三

色々とパーティが進行している中、表面は平静だが内心は焦っている人物がいた。

（色々と予想外で、当麻先輩へのアピールが不足していますね……）

それは操祈である。

十徳ナイフに例えられるほど幅広い精神系能力を行える操祈は、実験に付き合わされる日々が多い。

実験が多くなればなるほど、それに比例して当麻と出会える日は少なくなる一方だ。

とはいえ、操祈は何もしていないわけではない。

実験に付き合うの度に、報酬の他にもう一つある事を要求していた。

それは当麻の近情を教える事。

長引けば一ヶ月近く実験生活を送る操祈にとって、当麻の現状が分からないのは死活問題だ。

その上、派閥によって常盤台中学学生寮の中に篭りやすい操祈だから、ますます当麻と出会う時間が減る。

そんな状態だからか、月に一度は必ず当麻と出会う事を心掛けている操祈。

これについては派閥も取り巻きも何も言わない。

言わないというより、言ったら非道な仕返しが待っている為とも言えるが。

過去に何か言ったり邪魔をした子たちは、皆一同に操祈から非道かつ陰湿な仕返しを貰っている。

『ジャンボパフェの早食いにレッツ・チャレンジ☆』

『今からグラウンドで百メートル全力疾走を二十本こなそう♪』

『ゲコ太ストラップを使って御坂美琴をフィッシュ！』

などなど微妙に後々響いてくるものばかりであった。

この仕返しにたまに巻き込まれる御坂は、この辺の事情もあって操祈が嫌いであった。

当麻以外に言ってはならない操祈の本名を口にするのは、御坂からの地味な仕返しであろうか。

そんな操祈曰く当麻と出会う日はデートだと言い張る。

だが当麻から見れば可愛い妹兼幼馴染が甘えている程度の認識だった。

このズレをどうにかしようと頑張る操祈だが、残念ながら今まで成果が出た試しはない。

「当麻先輩、これ美味しいですよ」

しかしその程度で諦める操祈ではない。

むしろこれが恋の壁、と思って更に燃え上がっていた。

最も、その壁は演算型・衝撃拡散性複合素材（カリキュレイト＝フォートレス）で出来ているが。

「ん、じゃあ頂くよ」

「はい、あーん」

操祈の持っている皿の料理をとろうとした当麻だが、その前に当麻の口元へ操祈の箸が伸びてきた。
その瞬間、ガタッと椅子が五つ動いた音がしたが、操祈はそれらを無視しておく事にした。

「……あの……」

操祈の箸に困った当麻だが、当然ながら操祈はニコニコ笑顔で箸を差し出していた。
玲瓏な笑顔の操祈に逆らえないと思った当麻は、一度だけ小さくため息を吐いた。

「……あーん」

覚悟を決めた当麻は、操祈の箸にある料理を口に含む。
曇のない澄み切った笑顔で見守る操祈の前で、当麻は厳かに咀嚼を続けた。

「どうですか？」

「うん、美味しいよ」

正直な所、緊張感のせいで味なんて全くわからなかった。
自分が何を食べているのかすら理解していない当麻。

そんな当麻が辛うじて分かったのは二つ。
視界の隅で沈利たちが当麻を見て固まっているのと、両親がニヤニヤと笑っている事だけだった。
全員が見守る中、当麻は咀嚼を止め料理を飲み込んだ。
ゴクリという音が無駄に大きな音だなと思った当麻だが、とにかく

これで終わりだろうと思っていた。
しかし、それは甘い考えであった。

一息ついた瞬間、四方向から当麻の前に箸が伸びてきた。
その先には、少しだけ怒り顔をしている沈利、フレンダ、最愛、フレメアの四名であった。

「まさか私たちのは駄目っていわないよなぁ？　当麻ー」

「当麻お兄ちゃん、この料理も超美味しいですよ？」

「大体、当麻お兄ちゃんはこの料理を食べる必要がある」

「結局さ、当麻お兄ちゃんはこの料理を食べる必要があるって訳よ」

まるで示し合わせたのように、リレー形式で喋る沈利たちであった。
そんな沈利たちを見ても、操祈は特に何も言わなかった。
こういう行為は一番最初に行った人間が、相手の印象に残りやすい。
以降の人間は、一番目の人間の真似事をしているだけと思う。
そんな心理を計算していたので、当然ながら最初に当麻が料理を食べさせた時点で、操祈の勝利は揺るがないものであった。

しかし一つだけ、この状況を覆せれる方法がある。
それは操祈の行為を塗り潰すほどの、更なるインパクトを与える事。

そして、その行為は意外な人物が起こしたのだ。

姉妹からのあーん攻撃にどうするべきかと考えていた当麻は、その肩を誰かに叩かれた事に気付く。
その方向に視線を向けて、当麻はショックの余り呼吸困難に陥りか

けた。

「ひょうは、はーん（とうま、あーん）」

そこには、料理を口に咥えている理后の姿があった。
これには沈利たちのみならず、操祈すらも動揺の色を隠せなかった。

「り、理后姉ちゃん！　それはマズイですよ！？」

当麻の言葉に首を傾げる理后。
その表情は、何を気にする必要があるの？　と言いたげであった。
思考フリーズして固まっている沈利たちを他所に、理后は当麻に顔を近づけていく。

「ひょうは？（とうま？）」

「ちょ！　本気ですか！？」

「？？？」

（そこで首を傾げないで！？）

箸はまだいい、操祈も妹みたいなものである。
だから間接キスという意識を無理矢理追い出すことに成功した。
が、これはマズイ。何がマズイってとりあえずマズイ。

そんな思考がぐるぐると頭の中を回っていた当麻だが、当然ながら理后は待ってくれない。
徐々に顔を接近させると、口に加えている料理を当麻の前に持って

くる。

視線で当麻は助けを求めたが、沈利たちは呆けた顔をして固まっている。

本来止めるべき両親は、ニヤニヤと笑っていて止める気配はゼロ。

むしろ親指を立てて捲したてる始末。

（こらクソ親父！　姉弟でこんな事をしていいと思っているんですか！？）

（漢を見せろ当麻。お父さんは温かく見守っているぞ！）

（当麻さん、女性に恥をかかせてはいけませんよ？）

一瞬のアイコンタクトで会話が出来た両親と当麻。

その会話から、両親は全く止める気がないとハッキリ突きつけられた。

絶体絶命、覚悟を決める以外にない。

その結論に達した当麻は、意を決して理后の口から料理を受け取ろうとする。

「……ま、待てやゴルァァァァァァ！！！」

しかし寸前の所で、理解が追いついた沈利が絶叫を上げて二人を止める。

良い所で止められた理后は、不満たらたらの表情をしながら沈利を見ていた。

反対に沈利は、肩で息をしながら当麻と理后を睨んでいた。

「ソレ以上は不許可だ！　それをやっていいのは私だけって決まってるんだよ！？」

後半、自分の欲望がダダ漏れな沈利だが、興奮状態の彼女は気付いていなかった。

理后が咥えている料理を問答無用で口の中に押し込むと、容赦なく咀嚼させて飲み込ませた。

（た、助かった……のか？）

沈利と理后が言い争っている横で、当麻は盛大に安堵の息を漏らした。

あの後、結局どういう結論に達したか分からないが、とにかく当麻は六人から盛大にあーん攻撃を貰った。

味も何もへったくれもないので、何を口に含んでどんな味がしたか分からなかった。

いい加減お腹が悲鳴を上げたので、当麻はギブアップ宣言をして席を外した。

「げっぷ、し、死にそうです……」

パーティをしている部屋から離れ、ベランダに出た当麻はため息混じりに呟く。

「実に疲れた……」

楽しいのだが胃は重いし心労はくるし、何だか凄い状態になっているなと当麻は思った。

冬だから外は肌寒いが、今はその寒さが心地よかった。

「夜風に当たり過ぎると風邪をひくわよ、幻想殺しの坊や」

暫く空を眺めていた当麻の耳に少女の声が届く。

呆けた顔をして声の方向を向くと、そこにはアクゼリュスが立っていた。

絶妙なバランスでベランダの柵の上に立つアクゼリュスは、何か愉快そうな表情をしていた。

「えーっと、確かアクゼリュスだっけ？」

「あら、覚えていたなんて意外ね。幻想殺しの坊やの事だから、貴方誰？って来ると思っていたわ」

「そこまで馬鹿じゃないですよ！　いやまぁ、それはいいや。何の用なんだ？」

「ふふふ、楽しませてくれた幻想殺しの坊やにプレゼントを贈ろうと思っただけよ」

そう言うとアクゼリュスは右腕を上げ指を鳴らす。

パチンと小さな音が辺りに響く。

だがそれだけで周りに変化は発生しなかった。

「？　一体何をしたんだ？」

首を傾げなら尋ねる当麻に、アクゼリュスは愉快そうに笑うだけで答えは語らなかった。

（事前に準備していたとはいえ、やっぱり発動まで時間がかかるわね）

「流石に天候を操作するのは面倒ね。とはいえ、もうすぐ結果が出るから待ちなさい」

その言葉と同時に、当麻は頬に何かが当たるのを感じた。
思わず頬を触るとそれは小さな水であった。

「上を見なさい」

その言葉に従って当麻は空を見上げる。

「お、おおぅ……」

当麻の頬にあたったもの、それは雪であった。
降り注ぐ雪を見て、当麻は感嘆の息を漏らした。

「すげぇ……」

「人間、特に日本人はホワイトクリスマスってのを喜ぶようね。私には何がいいのか分からないけども」

感動している当麻と反対に、アクゼリュスは降り注ぐ雪を見ても無表情だった。

彼女にとって雪とはただの自然現象であり、それ以上でもそれ以下でもなかった。

「大寒波なら楽なんだけどね。やっぱりそれぐらいにしてもいい？」

「いや死ぬから！　色々と危険な事は止めてください！？」

「大丈夫よ、ちょっとマイナス百度レベルの寒さが来るだけだから」

「死ぬわぁぁぁぁぁ！？」

当麻の突っ込みにくすくすと笑うアクゼリュス。
意地の悪い笑みを見て、当麻は自分がからかわれているのだと気付く。

「くっくっく、やはり幻想殺しの坊やは楽しいね」

「上条さんは女の子から弄ばれるか、からかわれるかどっちかなんですね」

がっくりと肩を落とす当麻を見て、アクゼリュスは更に声を殺しながら笑う。
ひとしきり笑うと、アクゼリュスは腰に手を当てながら語った。

「まぁプレゼントは渡したわ。暫く雪は降っているから、誰かと楽しみなさい」

「お、おう。ありがとな」

「礼には及ばないわ。来年も『色々』と楽しませて貰うから」

その言葉の後、当麻の返事を待たずしてアクゼリュスは消えた。
まるで空気に溶けこむような感じだったので、当麻は何かの魔術だと思った。

「あれ？　よく考えたら天候を操るとか凄い事じゃね？」

今更ながらアクゼリュスって凄い奴なの？　と思った当麻である。

垣根パーティ　その三

インデックスは料理を前にして目をきらきらと輝かせていた。

「これ全部食べていいの!?」

ただ目を輝かせているだけで、どの料理にも手をつけていない。
それは垣根が食べていいと言っていないからである。
流石に礼儀は弁えており、いきなり食べ始めるような事はしない。
だが、それも時間の問題である。
インデックスの理性は、そろそろ限界であった。

「おう、これはお前用だ。全部食っても構わないぞ」

そんなインデックスの様子に苦笑しながら垣根は言った。

「ありがとうなんだよ！　ていとく！」

待ってましたと言わんばかりに、全力で料理を食べ始めるインデックス。
凄い勢いで料理が消えていく様は、ある意味で気持ちのよい食べっぷりだと垣根は思った。

「すまんのぅ、垣根殿。気を使わせてしまって」

「気にするなよ。バンバン食って飲んで騒げばいいんだよ」

礼を述べるアリシアに、垣根は笑いながら言った。
なんて事はない、ただパーティを楽しんでほしいのだ。

垣根が色々と頑張っているのは、ただそれだけの理由だから。

「そうか。ではそうさせて貰う。礼と言ってはなんだが……」

「あん？」

「パーティで姉上の気を惹こうとしても無理だから諦めろ」

胸の前で腕を組みながらアリシアは断言した。

一瞬アリシアの言葉に驚いた垣根だが、すぐに冷静な表情を作る。

「それは分からないのじゃないか？」

「忘れたか？　垣根殿。妾たちが過去にどこで生活していたか」

優菜もアリシアも、元はお嬢様学校に通っていた。

それはこの程度のパーティを何度も経験しているという事になる。

その事をすっかり忘れていた垣根であった。

「姉上が金や地位で靡くような女でない事は知っておろう」

「ぐっ、確かにな」

「くっくっく、姉上の本質を知らねば、垣根殿に勝機はないだろうな」

喉を震わせて笑うアリシアを見て、垣根は少しだけばつの悪い表情をする。

確かに優菜の気を惹こうと考えたから、以外と豪華になったのはある。

勿論、周りを楽しませるという事も考えていたが、一番最初に浮かんだのは優菜だった。

「協力してくれよ、アリシアー」

「断る」

一刀両断であった。何かすれば考えが変わるとかそんなレベルではない。

その意見が覆るのは、決してあり得ぬ事だと思えるぐらい。

「垣根殿が姉上を好いているのは分かった。とはいえ、姉上は誰にも渡す気はない」

「そうか……」

「まぁ半端な考えで姉上を好きだと思っている訳ではないのは理解した」

「へーへー、ありがとう」

投げやりな感じで答えた後、垣根はふと視線を優菜の方に向けた。

まりなや静華、それから心理定規。後は佐天とそれに付き添った紗月。

優菜は常に輪の中心に立っていた。

「……やっぱり異性として好きなのかなぁ」

「それは垣根殿しか分からん。妾からは何とも言えん」

「わーってるよ。それにしても、優菜を好きだと知った割には冷静だな」

優菜が最も大事だと公言しているアリシアが妙に冷静なのが気になった。

最初の噛みつきは威嚇行為だと思っていたが、それ以降は特に何もない。

現在も、普段通りに会話している。

それが垣根にとって奇妙であり、疑問であった。

「色々と考えたのさ。で、結局はいつもと同じ答えだった」

「ほぅ？」

「周りが姉上をどう思っていようと、妾は姉上と共に道を歩くための力を手に入れる。自己を高め、姉上に守られるだけではなく、その背中を預けてもらえるパートナーとして……な」

視線を優菜の方に向けながら語るアリシアは、一片の迷いすらなかった。

自分の人生は、優菜と共に歩み優菜と共に終わる。

既にその覚悟が出来ているアリシアに、迷いなど微塵も生まれるはずもない。

アリシアの覚悟を見た垣根は、素直に凄いと思った。

誰かを守りたいから力を手に入れるのではなく、守りたい人と共に歩むから力を手に入れたい。

共に歩む事は、守りたい人を危険に晒す事になってしまう。

だが、彼女は信じている。最後は二人揃って危険を乗り切れる事を。

（強いな、コイツも）

正直今の自分にそこまで覚悟があるかと問われたら、答えはノー以外にないだろう。

アリシアのように、固い意志を持っているわけでもないのだから。

「俺はお前ほど覚悟が出来ている訳でもない。だけどよ、初めてなんだよ。優菜の顔を見るだけで安心するんだ、笑顔を見るだけで心が暖かくなるんだ。だから、お前の姉上は俺が貰うぜ」

だからといって引き下がる理由など一つもない。

自分の気持ちをはっきりとさせ、アリシアを超えるほどの覚悟を持てばいい。

それが垣根の出した答えであった。

「ふふん、甘いぞ垣根殿。姉上の心に深く居座っていない垣根殿では、まだ勝負にもならんわ」

「この俺に常識は通用しねぇ」

「なら、その非常識もまとめて叩き潰してくれるわ」

不適な笑みを浮かべて笑いあう垣根とアリシア。

この瞬間、アリシアの中で垣根はクラスメイトから恋敵（ライバル）へとチェンジした。

垣根もまた、アリシアと同様の考えであった。

そんな二人の共通の思い相手、優菜は何をしているのかというと。

「お姉さま！　この料理美味しいですよー」

「むっ……ステラ様、こちらの料理は如何でしょうか」

「はい二人とも、どちらも頂きますから睨み合ってはいけませんよ」

垣根とアリシアに全く意識など向けておらず、友人たちと仲良く談笑していた。

パーティも中盤を過ぎ、料理もそこそこなくなりかかった頃。

土御門、海原、アリシア、インデックスの四人は、ある事に気付いた。

それは魔術の発動、それも広範囲と思わしき術式。

術者は隠す気がないのか、偽装も何も行っていなかった。

だが、分かったのは発動だけで、それが何の魔術かまでは分からなかった。

「アリシア……」

インデックスは箸を止めアリシアの方に視線を向けた。

無言で歩いているアリシアは、インデックスの問いに答えず窓側へ近寄った。

下ろされているカーテンを無造作にめくる。

「天候の術式か」

ちらほらと振る雪を見ながらアリシアは言う。
今日の予報では、雪が降るなど一言も出なかった。
術式の発動を検知しなければ、たまたまの異常気象と思えただろう。
それを聞いたインデックスは、少しだけ悩むような表情をしながら尋ねる。
「魔女は天候すら操作出来るの……？」
「妾とて契約者様の全容は知らん。何せ契約者様はオリジナルの術式が多いのだ」
アクゼリュスと交流があるコルネリウス家でも、魔女の全容は知らない。
わずか一部分しか分からないのだ。
「まぁ大寒波という感じでもない」
「ならいいんだよ、こんな日に恐い事をして欲しくないんだよ」
「同感だにゃ～。でも出来れば術自体止めて欲しい所だぜい」
アリシアとインデックスの会話に、土御門と海原が料理を片手に参加する。
「天候……雪ですね」
カーテンを少しだけめくった海原が、外の様子を見てぽつりと呟く。
首を傾げた土御門は、海原と同じようにカーテンをめくって外の様子を見る。

海原の言うとおり、外は小さな雪がぱらぱらと降っていた。
豪雪でもなく、大寒波のような感じでもない。
世界を優しく白に染めるような、そんな雰囲気であった。

「ホワイトクリスマスを演出か？」

「真っ白なんだよ！」

「綺麗ですね。魔女が故意的にやったと知らなければ、感動ものの光景です」

世界は小さな雪で白く染められていた。
儚く降ってくる小さな雪を見ながら、四人はアクゼリュスが降らした事も忘れて見入っていた。

「ま、何か悪巧みしている訳じゃないし、いいかにゃ～」

「……そうですね。わざわざ何かをいう必要もないでしょう」

土御門と海原はそう結論づけると、片手をあげた後その場を立ち去る。
興味を失ったのか、インデックスは席に戻って料理を平らげていた。

「雪……か」

一人残ったアリシアは外の雪を見てポツリと呟く。
その言葉にどんな感情が込められていたのか、それは彼女にしか分からなかった。
カーテンを元に戻すと、アリシアも外の光景を忘れて自分の席へと戻った。

雪の話が終わって更に時間が経過した頃。
垣根は頭を抱えて酷く困っていた。

パーティで問題が起きたわけでもない。
インデックスが料理のお代わりを要求してきたわけでもない。
では一体何が問題かというと。

「ステラ様。来年二月のお話なのですが……」

「私は既に生徒ではないのですよ？　あの式に参加する資格などありません」

「にゃははは、だけどアンケートを取ったらさ。なんと九割近くが優菜に代表を務めて欲しいって書かれているのよ」

「残り一割は何て書いてたのじゃ？」

「最初っから誰もやらなくていい、つまり代表なしだよん」

「実質ステラ様に代表を務めて欲しいという、生徒たちの提案ですね」

「影響力を誇示するような真似はしたくないのですがねぇ」

「まぁまぁ、可愛い後輩たちの思い出作りに協力してくれよぅ」

彼が困っている理由、それは優菜と会話するタイミングが全くつかめない事だ。

とにかく輪の中心にいる事が多い優菜なので、二人になるタイミングなど皆無と言っていい。

パーティの話にかこつけて、と企んだが全ては空振りだった。

（焦るなというが……優菜は明日イタリアに行ってしまう。だから、今日しかないんだよなぁ）

無駄に時間を浪費するだけの状態に、垣根はもやもやとした感情を抱く。

どうするべきかと思っていた垣根だが、最後とも言うべき絶好のチャンスが訪れた。

「帝督ー、何か支配人が話あるってさ」

「あぁ？　面倒だなぁ。でも無視する訳にもいかないし……」

（まてよ？　これを利用しない手はない！）

瞬間、垣根の脳裏にある事が閃く。

チャンス到来と思ったためか、本人も気付かないうちに薄く笑っていた。

「あーそうだ、優菜も呼んでくれ。あいつも大半は関わっているからな」

「そうだね、ちょっと呼んでくるわ」

あくまで自然体を心掛けていたので、垣根が優菜を呼び出しても違和感は全くなかった。

心理定規が優菜を呼んできたが、特に誰も引き留めたりしなかった。

（うっしゃぁ！　これで時間は手に入れた。後は……）

「何を笑っているのです、垣根さん」

後のことを考えていた垣根は、目の前まで優菜がいる事に気付かなかった。

優菜の声に思わずビクっとした垣根だが、何とかポーカーフェイスだけは保てた。

「いやパーティが順調でよかったなと」

「そうですね、皆さん楽しんでいらっしゃいますね」

特に気にしていないのか、それ以上聞いてくるような事を優菜はしなかった。

待たせるのは悪いと思った優菜は、すぐに支配人が待っている場所へと向かう。

これで片道十分程度、往復で考えれば二十分の猶予が垣根に与えられる事となった。

（この二十分が勝負だ！）

右手を小さく握り締めながら、垣根は優菜と共にエレベーターへ乗

り込んだ。

垣根パーティ　終幕

「さて、アレだけ意気込んだかっきーはんですが」

「結末はどうなかったというと、勿論失敗で……」

エアマイクを片手にナレーションのような語りをする青髪ピアス。

「人の不幸を語るんじゃねぇぇぇぇ！　スーパーカキネキィィィックー！！」

だが、垣根の全力飛び蹴りを喰らい、言葉途中で盛大に吹っ飛んでいった。

数メートルは飛んだが、幸いにもテーブルを破壊するような事はなかった。

「いったいなぁ、かっきーはん！　何するねん！」

序列第二位からの攻撃なのに青髪ピアスは無傷だった。

どういう体をしているのだ、思わずそう思ってしまった結標である。

「うるせぇ！　人の不幸がそんなに嬉しいのかコラァ！」

「クラスの至宝を取ろうなんて考えたかっきーはんには丁度いいぐらいやで！」

「本音は？」

「こんな楽しいこと、語らないとやってられんわ！」

「やっぱそういう事かよぉ！　超垣根パーンチ！」

謎の技名を口にしながら青髪ピアスを殴る垣根。
傍目からはただの右ストレートなので、何が超垣根パンチなのか誰も分からなかった。
恐らく駄目な病気を発動させたのだろう、皆一同考えるのが馬鹿らしいと思いそう結論付ける事とした。

涙目になりながら床にのの字を書く垣根。
そんな垣根に、心理定規は小さくため息を吐いた。

「アホやってないでパーティのシメをして頂戴よ」

「うぅ……支配人コロス」

物騒な事を口にした垣根だが、勿論本気で言ったわけでもない。
そもそも本気なら、今頃支配人は肉食加工品（ミートパティ）になっている。

「落ち込むならパーティをシメた後でお願いね」

「わーったわーった。よーしお前ら、全員コッチ向けー」

手を軽く叩きながら垣根は全員の視線を自分に向けさせる。
二名ほど酔っぱらいがいるが、概ね全員の視線を集める事が出来た。

「しんみりと語るのは得意じゃねぇ。とりあえずパーティを楽しんでくれたかー？」

「勿論なんだよ！」

垣根の問いに、いの一番に答えるインデックスであった。

（そりゃアレだけ食って満足じゃないって言われたら逆に恐怖だよ）

心の中で突っ込んだ垣根だが、インデックスには薄く笑うだけだった。

余計な事を言えば、あの歯の餌食になる。短い間でそれを理解した垣根である。

「人生初の高級お肉、大変美味しゅう御座いました」

謎の敬語を使って垣根に平身低頭する浜面。

彼の人生の中で、これほど食事が豊かになったのは一度としてない。

遠巻きとはいえ美少女たちを見ながら、美味しい料理が食べられる。

これぞ至福、そう言いたげな感じであった。

「よっしゃ満足したな。んじゃ後でぶち殺すから体育館裏な」

「なんでよ！？」

「俺の未元物質が唸るぜ！！」

「死ぬからぁぁぁぁ！」

「んじゃ今日は名残惜しいが、これでパーティは終了だ。皆、お疲れ様だー！」

一通り浜面をからかうと、垣根はパーティのシメを宣言する。

半泣きになりながら、肩を落とす浜面だが勿論誰も慰めてくれなか

った。

「もう夜遅いから、タクシーを寄越すよう支配人に言っておいた」

「そういう所は徹底してるなぁ、かっきーはんは」

「何事も最後までしっかりとしとかないとな」

ニヤリと笑う垣根だが、勿論支配人にタクシーを寄越すよう進言をしたのは優菜である。
その事を知っている優菜だが、単に苦笑するだけでそれ以上は何も言わなかった。

「んじゃ俺たちは帰るぜい。垣根ー、またにゃー」

土御門の言葉を皮切りに、各自垣根に礼を述べた後で帰宅の途についた。

「ふぅ、終わったな」

全員の感謝の言葉に対応した後、垣根は酔っ払いの黄泉川と鉄装をホテルの一室に放り込んできた。
二人の一ヶ月分給料でも支払えないような部屋に放り込んだのは、垣根なりのサプライズなのだろう。
最も、朝起きてパニックを起こすのは確定だろうが。

そして全てが終わり、残っているのは垣根と。

「終わったねー」

「そうですね、とても楽しいパーティでした」

心理定規、それから優菜であった。

元々主催者側に近い二人は、パーティの後片付けを行わなければならなかった。

その後、帰宅しようとしたが垣根によって引き止められたのだ。

一緒に帰れない事を不満に思ったアリシアたちだが、三人で話す事があると言う垣根は頑として譲らなかった。

結局アリシアたちが折れ、優菜の家に宿泊する人たちは、家主より先に家へと向かった。

「あのクソガキ、容赦なく食いきったよ……」

「あれだけ食べてお腹が膨れないなんて、どんな身体構造してるのかしらね？」

インデックスは用意された料理は勿論、残っていた料理も全て平らげたのだ。

『食べ物を残すなんて、神様に失礼なんだよ！？』

最もらしい理由を付けて食べていたが、勿論本音はただ食べたかっただけである。

常人には理解できないスピードで食べていくインデックスは、知っ

ている人間からすればいつものこと。
ただし、知らない人間から見れば、常軌を逸した行為に見える。
ただ唖然とするか、それともドン引きするかどちらかであった。

「支配人が真っ青になってたがいい気味だ」

「そりゃそうよ。っと、グラスはこれね」

「おーあんがと」

心理定規からグラスを受け取ると、垣根は中身のにおいを軽くかぐ。
少しだけ甘い、だけどアルコール特有の匂いがする液体。
いわゆる酒であった。

「流石に黄泉川がいる時にこれは出せないな」

「そもそも何故お酒を？」

パーティは終わり、参加者の殆どは帰宅の途についた。
何故、この三人だけでグラスを再び持つ必要があるのか。
その辺りを詳しく言わない垣根だったので、優菜たちはただ首を傾げるだけであった。

「まー俺たちだけの乾杯があってもいいんじゃないと思ったわけだ」

「だからってお酒を用意する必要はないんじゃない？」

「景気付けつったら酒だろう？」

グラスを軽く回しながら笑う垣根を見て、優菜と心理定規は困った

ような表情をする。
時に発揮する垣根の行動力は、長い付き合いのある心理定規でも予測不可能なのだ。

「分かったわ。じゃあ帝督、任せたわよ」

ただ、こうなった時の垣根は意外と頑固なのは知っていた。
小さくため息を吐いた後、心理定規は優菜にグラスを手渡す。

「普通にお願いしますね」

心理定規の様子から諦めを感じた優菜も、小さくため息を吐いた後にグラスを受け取る。

「この俺に常識は通用しねぇ！」

威勢をあげる垣根だが、女性陣から視線は生暖かかった。。
一つ咳払いをすると、グラスを掲げながら垣根は言葉を紡ぐ。

「今年もお疲れさまだ。色々とあったがお前たちと一緒に過ごせて最高だった」

「暗部組織にいる以上、安易な気持ちで来年も祝おうとか言えねぇ」

「だけどよ、それでも言わせてくれ。来年もお前たちと一緒に祝いたいって」

「来年も色々とよろしくな、心理定規、優菜。メリークリスマス」

三人は互いにグラスを軽くぶつけ合うと、中身を一気に飲み干す。

酒の味など分からない三人だが、不思議とこの時飲んだ酒は美味しいと感じられた。

「ふふふ。垣根さんの思い、しっかりと聞き届けました」

グラスをテーブルに置きながら優菜は優しく笑った。
優菜だけではない、心理定規も同じだった。

「ま、最後は普通に終わらせた帝督に、クリスマスプレゼントを進呈しよう」

「あら、もう少し引っ張るのかと思いました」

「さっきからそわそわしているしね。いい加減出さないと拗ねそう」

「そわそわしてねぇ！」

そう言った垣根だが、心理定規が何か袋を携えていた時から、それにチラチラと視線を向けていた。
本人は気にしてない風を装っていたが、二人からはバレバレであった。

「定番だけどマフラーと手袋よ。マフラーは優菜、手袋は私が選んだわ」

「お、おおぅ。ありがとうな」

心理定規から恭しくプレゼントボックスを受け取る垣根。
よっぽど嬉しかったのか、そのまま小躍りを始めた。
その様子に苦笑する二人だが、あそこまで喜んでくれると悪い気は

しなかった。

「大事に使うぜ！」

言葉通り大事そうに箱を抱える垣根は、心の底から嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

「うむ、やはり泊まる事となる」

タクシーの中で、アリシアは小萌に電話をかけていた。
その横では、幸せそうな表情ですやすやと眠る打ち止めとインデックスの姿があった。

「もう食べられないんだよ、ていとく」

「お魚さんが美味しいってミサカはミサカはぁ～」

夢の中まで食べ物の事か、と思ったアリシアは思わず苦笑した。
ひとしきり笑った後、電話を耳に当てて会話を再開する。

『了解ですー。まぁ予定通りですから、何も問題はないですねー』

「うむ、まぁ小萌殿も頑張れ」

『頑張るって何をですかー？』

小萌の言葉に、アリシアは薄く笑う。
彼女の顔を見たら誰もが同じ感想を抱くだろう。
間違いなく何か企んでいる、と。

「勿論、一方通行殿との仲だろう？」

『だ、だからそれは違いますー』

「妾から見れば、明らかに好意を抱いているようにしか見えんのだが？」

『い、一方ちゃんは好きですよ。でも……』

「その好きがどんなレベルか分からないと」

『うー』

「悩むな、小萌殿。素直な気持ちになればいいのだ」

『素直……ですか？』

「そうだ。悩んで迷うより、全身全霊でぶつかればいいのだよ」

そう言うと、電話の向こうで小萌が唸り声を上げ始めた。
普段と立場が逆だな、その事に苦笑しながらアリシアは待つ。

『まだ答えは出てませんけど、頑張ってみますー』

「おーその意気じゃ。とりあえずだな」

そこでアリシアは言葉を区切ると、ニヤァと意地の悪い笑みを浮かべる。
ロクでもない事を思いついたのだろう、そう思えるほど彼女は悪巧みな表情をしていた。

『とりあえず、何ですかー？』

何も知らない小萌は、アリシアに言葉の続きを催促する。
そしてアリシアは言葉を紡ぐ。とんでもない言葉を。

「とりあえず子種でも要求してみろ」

『なっ！？』

「おっと、家に着いたようだ。また明日、帰る時に電話する」

そう告げるとアリシアは小萌の返事を待たず電話を切る。

「さて、賽は投げられたな」

アリシアは携帯をポケットにしまうと、明日が楽しみだと言いたげな表情で笑った。

一方通行パーティ　終幕

アリシアたちが垣根のパーティに移動した後、一方通行と小萌は二人だけでクリスマスパーティを続けていた。
二人の間に特別な言葉など不要、そう思えるほど特別な事はなかった。
一つだけいつもと違う点を上げるなら、二人は対面ではなく隣同士に座っていた。

「そうなんですかー。あの時はそういう事だったんですね」

「あァ……別にどうって事はねェ話だったンだ」

くだらない日常と切り捨てられるぐらい他愛のない日々の話。
小萌が話せば一方通行が聞き、反対に一方通行が語れば小萌が聞く。
口に出して言わなかったが、二人は共通の思いを抱いていた。

こんな時間をもっと味わいたいと。

しかし二人の思いも空しく、暖かな雰囲気の時間は終わりを告げる。
いたずら娘の一人であるアリシアの電話によって。

パーティを静かに終わらせた後、二人は片づけと寝る準備に取り掛かった。

片づけをしている途中、電話がなったので小萌が電話をとる。

『もしもし、小萌殿か？』

「あーアリシアちゃん。どうされました？」

電話の相手は垣根のパーティに参加するといって外出したアリシアだった。

小萌たちの予想通り、アリシアは優菜の家に宿泊する旨を連絡してきた。

ただそれだけなら連絡して終わりだ。

しかし、最後にアリシアはとんでもない台詞を残していった。

『とりあえず子種でも要求してみろ』

「なっ！？」

電話の向こうから聞こえた言葉が信じられず、小萌は目を見開いて驚く。

口をパクパクとさせながらも、何とか言葉を発しようとするがうまく言葉にならなかった。

「ア、アリシアちゃん！？　何を……」

『おっと、家に着いたようだ。また明日、帰る時に電話する』

小萌が小言を言い終える前に、アリシアは問答無用で電話を切る。

呆然と電話を片手に立ち尽くす小萌。

「い、一方ちゃんの子種……？」

口に出した瞬間、小萌の脳裏にある光景が浮かび上がった。
とてもピンクな光景であり、当然ながら小萌と一方通行は裸であった。

『小萌……』

『一方ちゃん……』

そうして二人の顔がほぼゼロ距離になる寸前、小萌はピンク色の世界から戻ってきた。

「わーわーわー！　駄目です！　駄目ですよー！？」

顔を真っ赤にしながら、慌てて脳裏の光景を追い出そうと手を振り回す。
端から見ると、何か暴れているようにしか見えないが、本人は至って真面目であった。

「風呂が沸いたぞー、って何してるンですかァ？」

そこへ風呂場から戻ってきた一方通行が、小萌の奇行を見て首を傾げる。
背中を強張らせた後、おそるおそるといった感じで小萌は一方通行の方に顔を向ける。

「い、一方ちゃん？」

「どうしたンだァ？　あァ……やっぱりクソガキどもは泊まりかァ？」

「そそそうなんです。全く困ったものですねー。あはははー」

微妙に顔をひきつらせながら答える小萌は、何かに動揺しているのがバレバレであった。

だが、一方通行は首を傾げるだけで、特に何か聞いてくる事はなかった。

「そっかァ、じゃあ今日は小萌と俺だけかァ」

知らないからこそ、無自覚に危険な単語を口にする一方通行だった。

瞬間湯沸かし器のように、真っ赤な顔を更に真っ赤にさせた小萌は、またもやぶんぶんと手を振り始めた。

「駄目ですー！　それは駄目なんですよー！？」

「お、おおゥ？」

一方通行から見れば、単に家にいる人間が二人だけ。

特に何の意味も含んでいなかったが、アリシアの言葉を受けピンク世界に突撃した後の小萌には危険な台詞だった。

「そ、そそそそういうのはもっと大人になってからですねー！」

顔を真っ赤にしながら説教をし始めた小萌を見て、一方通行は大人しく説教を受けようと考え至った。

（こういう場合、何か言うと更に混乱しそうだしなァ）

何故こんな説教をし始めたか分からない一方通行は、小萌の「そも

そも雰囲気というものが」とか「もっと段階を踏んでから」という台詞がいまいち理解できなかった。

「聞いているのですか、一方ちゃん!?」

「はい、聞いています。けどよぅ……風呂が冷めるぞ?」

「お風呂で何て……だ、駄目です!?　そんな世界に目覚めてはいけません!?」

駄目だ、会話が全くかみ合っていない。
その事を理解した一方通行は、それ以降ただ頷くだけしかしなかった。

あれから数十分後、一通り言い切ったためか、小萌は冷静さを取り戻していった。
冷静さが戻ってくると、今までの台詞に頭を抱えて唸り身悶えし始めた。
最後には壁に向かって体育座りで落ち着いたが。
その一部始終を困惑な表情で一方通行は見ていた。

「あの……」

「お願いです、そっとしておいてください」

パーティ開始前の一方通行と同じように、どんよりした空気を纏いながら小萌は言った。
意識を違う世界に持って行こうとしたが出来なかったようである。
普段ですら小さい小萌が、更に小さくなっている様子に一方通行はどうしようかと迷う。
慰めるべきだろうが、どうやって慰めるべきかが分からない。
（キノコが生えてきそうな雰囲気だなァ）
目の錯覚だろうか、なにやら小萌の周りにきのこがにょきにょきと生えているように見えた。
頭を軽く降ると、一方通行は小萌の頭に優しく手を置く。
「何に恥じているのか分からねェけどよォ、その……元気出せや」
「……」
「小萌がそンな感じだと、その……俺も困るし」
優しくするよう注意しながら頭を撫でる一方通行。
元々こんな行為自体滅多にしない彼だから、どれぐらいの力加減ですればいいか分からない。
だから優しく、壊れ物を扱うかのように小萌の頭を撫でる。
「……もっと」
「？？？」

小萌が反応したため一方通行は思わず手の動きを止めた。
それに頬を膨らませながら、小萌は再度言葉を紡ぐ。

「もっとです」

頬が赤いのは恥ずかしさなのか、それとも怒っているからか。
とにかく小萌は一方通行に頭を撫でる事を要求した。

最初は面を食らった一方通行だが、薄く笑うと先ほどと同じように小萌の頭を撫でる。
目を閉じて一方通行の腕に身を委ねる小萌は、まるで小動物のように見えた。

「二年」

暫く小萌の頭を撫でていた一方通行が、ふいに言葉を口にする。
何かを語りたい、それを理解した小萌は、口を挟むときではないと理解する。

「出会って二年……口で言えば短いけどよォ、今までの人生で最高にいい二年だ」

「最初は一方ちゃんの我が儘に手を焼きましたー」

口を挟まない、そう思った小萌だが、昔を思い出して懐かしさが溢れたのか。
ついつい一方通行に、意地の悪い事を言う。
案の定、ばつの悪そうな顔をした一方通行は、頬を少しだけ赤くした後そっぽを向いた。

「仕方ねェだろ。誰も生活の事なンて教えてくれなかったンだから」

くすくすと笑う小萌に反論する一方通行だが、その顔は優しく笑っていた。

「教えようとして『ンな事覚える必要ねェ』と言った人は誰でしょう？」

「メルヘンです」

「私の記憶では、この家に垣根ちゃんが訪れた事って一度もないのですよー？」

「知らない間に上がったンですよォ」

「だったらさっきの台詞を、私が知る機会がありませんねー？」

「ぐっ……」

それが決着の言葉だった。

それ以上は何も言い返せず、一方通行は押し黙る以外になかった。

「能力はレベル５でも、生活はレベル０でしたねー」

「今はもうレベル５だぜ」

「先生から見れば、良い所レベル３止まりですー」

「なンだと……」

小萌の厳しい判定に思わず驚愕する一方通行。
掃除や片づけ、洗濯や料理まで。
およそ家庭スキルと思わしきものは、全て覚えきった一方通行である。
今では打ち止め曰く、ベクトルクッキングを披露する毎日であった。
最も、これはアリシアと打ち止めとインデックスが家庭スキル全滅のせいでもあるが。

流石に下着類は恥ずかしいのか、これだけは一方通行が片づけるわけにはいかなかった。
といっても一方通行から見れば小萌を除く全員がガキレベルなので何が恥ずかしいか分からない。
ただ首を傾げて謎に思うだけであった。

「全体的に一方ちゃんは扱いが荒いのです。もう少し丁寧に扱うべきですー」

「善処します」

性別の違いだろうか、自分では丁寧に扱っていると思っていた一方通行である。
しかし小萌から見れば、手荒に扱っていると見えるようだ。
今度から、もうちょっと丁寧に扱おうと考えた一方通行だった。

「そんな一方ちゃんは、まだまだ私の頭を撫で続けなければなりませんー」

その宣言通り、一方通行は暫く小萌の頭を撫で続ける事となった。

妹達パーティ　終幕

妹達が開いたクリスマスパーティ。
色々な性格のミサカたちだが、司令塔に当たる美鶴がいるので平和なパーティだった。
しかし誰かが美鶴の飲み物にアルコールを混ぜた時、その平和なパーティは終わりを告げた。

美鶴はアルコールに弱かったようだ。
コップ一杯を飲んだだけなのに、完全に酔いが回ってしまった。
そして全身にアルコールが行き渡った時、妹達の地獄は始まったのだ。

「聞いてるのか御坂妹」

「はい、ちゃんと聞いています、とミサカは怯えながら頷きます」

困った事に美鶴は絡み酒であった。
手当たり次第に絡む美鶴だが、当然ながら誰も拒否は出来なかった。

「お前よぅ……もっと上条と絡まないと駄目だろう」

「しかしミサカたちが外出し過ぎると危ないのでは、とミサカは正論を言います」

「ばっかやろうがぁ！」

わしゃわしゃと御坂妹の頭を撫でくりながら、美鶴は妙に据わった目つきで語る。

その様子から逆らえば後が酷いことを理解した御坂妹は、ゼンマイ仕掛けのように頭を縦に振った。

「恋にルールなんてねぇんだよ。そんな理性なんか捨てちまえ」

「お、おおうっとミサカは姉御のチョークがががががが」

何やらバタバタと暴れ始めた御坂妹だが、勿論美鶴は全く気付いていなかった。

美鶴は軽く首を抱えている感覚だが、御坂妹からすれば完全にチョークが決まっている状態だった。

「全身全霊でタックルして、さっさとホテルにでも拉致しちまえ。あの馬鹿、恋愛に関しては絶対能力者なんだからよ」

「ミ……ミサカは……」

その言葉を最後に御坂妹の意識は完全に落ちた。

全身から力の抜けた御坂妹を見て、美鶴は寝てると勘違いして頭をペシペシと叩き始めた。

「おらおら、恋する乙女ちゃんよぉ。な～に人が真面目に語ってる時に寝てるんですかー？」

（完全に気絶しているんですが、とミサカは恐いので心の中で思うことにしておきます）

「しゃーねぇなぁ……とぅ！」

美鶴の声と同時に、バチッと電気がはぜる音が響き渡る。

御坂妹をたたき起こすために、強制的に電気を彼女の体に流したようである。

「げほっ……ごほごほっとミサカはぼんやりした意識の中で咳き込みます」

むごい、と妹達は思ったが当然ながら誰も助けにはいかなかった。むしろそのまま生け贄となってくれ、そう願わずにはいられないほど美鶴の暴君っぷりは凄かった。

（姉御だけ『欠陥電気（レディオノイズ）』ではなく『暴君電気（タイラントノイズ）』では、とミサカ００００１号は思わずにはいられません）

（待て、そんな事を言うと姉御がこちらに反応する、とミサカ００００８号はミサカ００００１号を窘めます）

（暴君姉御……愉快なあだ名ですなァ、とミサカ００００１２号は薄く笑います）

愉快なあだ名を思いついた、そう思った美朱は馬鹿にしたような感じで笑う。

声を殺して笑っていたが、突然彼女の頭を誰かの手が掴んだ。

「愉快なあだ名をつけてありがとうよぅ」

勿論、美鶴（よっぱらい）である。

頭を捕まれた美朱は、顔から嫌な汗をダラダラと流していた。

何か言いたいのにうまく言葉にならない。パクパクと口を開けるだけで、言葉は喉から出てこなかった。

「おーおー、口をパクパクあけて何ですかぁ？」

美鶴は美朱の頭を掴んでいる手に力を入れながら言った。
ミシミシと頭蓋骨が悲鳴を上げ始めると、同時に襲ってきた痛みに美朱は悶絶し始める。

「痛い、痛いです姉御っとミサカは姉御の馬鹿力に驚愕してみたァァァァ」

「だぁぁぁれが馬鹿力の変態だってぇぇぇぇぇ！？」

「変態は言っていない、とミサカは全力で逃げようとしてみるがうまくいかねェェェェェェ！！」

「駄目な子にはオ・シ・オ・キだなぁ！？」

「いやァァァァァ、とミサカは悲鳴を上げるから誰か助けろー！」

頭を掴むのをやめた美鶴は、そのまま美朱の襟首を掴むとズルズルと引きずっていく。
美朱はシャツ一枚なので、シャツを脱げば逃げきれる。だが美朱にはソレが出来なかった。
今着ているシャツは、美朱が全能力と気合と命をかけて手に入れた一方通行のシャツ（着用済かつ未洗濯）。
脱いで逃げれば間違いなくシャツは御臨終されるだろう。
その上、シャツを脱げばほぼ全裸になってしまう。流石に妹達の前で全裸は避けたい美朱であった。

「まぁ諦めろ、とミサカは美朱に向かって言います」

「助けたら私たちまで被害を貰います、とミサカは美朱に向かって宣言します」

「大人しくお仕置きを受けろ、とミサカは美朱に向かって告げます」

「ようするに助ける気はない、とミサカは美朱を放置して料理を食べます」

まるで示し合わせたかのように、リレー形式で次々と語る妹達。
結局誰も助ける気はない、大人しくお仕置きを受けておけ。
それが残った妹達の総意であった。

「ちくしょうォォォォ、っとミサカは断末魔をあげまァァァァァァァ！！」

美朱が最後まで言い切る前に、彼女は美鶴によって隣の部屋へと連行されていった。
美鶴へのお仕置きはこの後数十分間続き、その間に妹達は平穏なパーティを楽しんだ。

「くかー」

散々暴れた美鶴だったが、今は可愛らしい寝息を立てていた。
どうやら説教と暴れによる疲労から、脳が休眠を要求したようだ。

「豪快な格好です、とミサカは大の字で寝る姉御に驚愕します」

「とりあえずベットに運ぶべきです、とミサカは他を見ながら言います」

「布団の用意はしてくる、とミサカは部屋から出ようとします」

「まてソレは私がやる、とミサカは逃げようとする御坂妹の肩を掴みます」

いくら寝ているとはいえ、何時起きてくるか分からない。
それが妹達に美鶴を運ぶ事を躊躇わせた。
強烈な絡みはもうごめんだ、誰しもが同じ思いであった。

「は～い、皆片づけお願いね～、その間に姉御を運んでくる～、とミサカは姉御を背負ってみたりぃぃぃ～」

そうこうしている内に、美咲が美鶴を背負っていた。
ふらふらと危ない足取りだったが、途中で体力切れを起こすような心配はなかった。

「お任せしました、とミサカは美咲に敬礼しながら言います」

「じゃあちょっと行ってくるねー、とミサカは皆に手を振りながら立ち去るー」

バランスを崩していたのに、美咲は器用に手を振りながらパーティ会場を後にした。
残った妹達は一同笑顔で美咲を送り出していった。

「さて、これを片づけますか、とミサカは腕まくりをします」

美咲を送った後、御坂妹は部屋の惨状にため息をつきながら腕まくりをする。

部屋はもうぐちゃぐちゃで、最初の面影はどこにもなかった。

それぞれが片っ端から暴れた上に、最後は美鶴の飲酒暴走である。

部屋が破壊されなかっただけでも奇跡であった。

「所で誰が姉御に酒を入れたのです、とミサカは今更ながら責任者を追求します」

「そもそもアルコール類は学園都市で御法度です、とミサカは正論を述べます」

「大半が学生ですから、入手するには大人の協力が必要です、とミサカは床を拭きながら考えます」

「つまり大人、もしくは大人と同居している人間と接触する事が出来る人物、とミサカは具体的な犯人像を描きます」

「む、限りなく絞れましたな、とミサカは犯人特定にわくわくします」

「つまり犯人は美朱です、とミサカは美朱を指さしながら告げます」

「なンで俺なンですかァ!?、とミサカは犯人扱いに憤慨します」

妹達から犯人扱いされた事に憤慨する美朱だが、その顔は幾分焦りが見えていた。

それを見て御坂妹は冷静に事実を告げる。

「何故、それは簡単です。姉御に酒を飲まそうと考えるのは美朱以外いないからです、とミサカは某探偵のように決めます」

「アルコールを入手できる大人、あのロリ教師の家に侵入出来る美朱なら可能、とミサカは御坂妹の言葉に付け足します」

「と言うわけで、とミサカはモップを床に置きます」

その言葉に美朱以外が反応したかと思うと、素早く扉の前に移動した。

そして呆然といている美朱を放置して、次々と部屋から退出していった。

「その惨状は責任を持って片づけなさい、とミサカは扉の電子セキュリティを改竄して扉を閉めます」

バタンと扉が閉まる音がする。残された美朱は理解が追いつかず呆然としていたが、やがて徐々に理解が追いついていく。

プルプルと体を震わせた後、モップを天高く掲げながら叫んだ。

「チクショウー、不幸なンですよォ！！！、とミサカは泣きながら叫びますー！」

「姉御ーをベットに投げるー、ってミサカは鼻歌交じりに言うー」

言葉通り、美咲は美鶴をベットに放り投げた。

「はぐっ！　もう少し優しく扱えー」

いくらベットとはいえ、放り投げればそれなりの衝撃が背中にくる。
痛みに顔をしかめながら、美鶴は美咲に文句を言う。
しかし美咲はどこ吹く風であった。

「酔っぱらいにはこれが一番ー、ってミサカは水を差し出しながら言う」

「すまんな、美朱に一杯盛られたようだ」

美咲から水を受け取ると、美鶴はそれを一気に飲み干した。
少しだけ冷たい水が体をひんやりと冷やしてくれる。
心地よい感覚を味わった後、美鶴は小さなため息を吐く。

「はー、生き返ったー」

「お疲れさまー、普段の疲れがでたのかな?、とミサカは姉御の体を労る」

仰向けに寝ている美鶴の背中を優しくマッサージする美咲。
心地よい感覚に身を委ねながら、美鶴はぼんやりと近くのモノをみる。

「なんか色々とあったが、楽しかったなー」

「うん、皆ミサカネットワークで自慢しまくってるよー、ってミサ

カは姉御に報告するー」

「あー分かってるよ。本当に五月蠅いほどだ」

妹達が形成するミサカネットワークは、現在学園都市在住の妹達で大騒ぎだった。

今日のパーティがいかに楽しかったかを語る様を見て、美鶴は薄く笑う。

「姉御頑張ったもんねー、とミサカは姉御の背中を入念にマッサージする」

「おー心地いいけど、後一つやり残した事があるんだ」

そう言うと美鶴はベットから起きあがる。

美鶴のやり残した事が分からない美咲は顎に手を当てつつ首を傾げる。

衣服の乱れを直した後、美鶴はニヤリと笑いながら言った。

「勿論、一服盛った美朱(ばか)を締め上げるんだよ！」

酒を飲んだとは思えないほど、元気よく部屋を飛び出す美鶴。

そんな美鶴の行動が理解できなかった美咲は、やっぱりただ首を傾げるだけであった。

十分後、パーティ会場で美朱は三度目の絶叫を上げる。

この声をもって、妹達によるクリスマスパーティは幕を閉じた。

上条家パーティ　終幕

色々と当麻へのアピール合戦を続けた沈利たちだが、後半になった頃にはすっかりなりを潜めていた。
何事もやりすぎては、かえって逆効果を生む。
長い間、当麻と一緒に住んでいる沈利たちにはそれが分かっていた。
ようするに当麻がギブアップを上げる、ぎりぎりのラインを知っているのだ。

「所で父さんたちはいつ帰るの？」

「今日はここに泊まって、明日の朝早く学園都市を出る予定だ」

「おっけー、じゃあ後で客間に布団だしておくね」

ほのぼのとした雰囲気であった。
当麻へのアピール合戦も発生しないし、発生する予兆すらない。
ただパーティを楽しんでいる雰囲気だけがそこにあった。

しかしこの時間を誰よりも待ち望んでいた人物がいた。

（チャーンスタイム到来ってかぁ？）

それは上条家家長の沈利である。
今まで他の人物によるアピール合戦を見ても、ただ堪え忍んでいたのには訳がある。
沈利は、理后たちですら知らない当麻の秘密をいくつも知っていた。
それを有効活用しない手はない。

「あーそうだ。それなら今日は皆で川の字で寝ない？」

「全員はきついんじゃない？」

「客間からなら可能って訳よ」

流石に両親を合わせて八人もいるが、客間から隣の部屋までを使えば可能であった。

しかし謎なのは、全員で川の字に寝るという提案である。

当然ながらこんな提案をすれば、全員が当麻の隣を要求するのは目に見えている。

操祈は寮に戻らないといけないが、それ以外を数えれば家族全員が隣を要求するだろう。

「じゃあ……」

「はいまったー」

当麻の隣を要求しようとした理后を、沈利は手で制しながら言う。

沈利の発言に全員が疑問を感じ、視線を沈利へと向ける。

「当麻の隣を要求するのは駄目よー」

全員の視線を受け止めながら、沈利は薄く笑いながら言った。

沈利の言葉に驚いた理后たちだが、何か不満を言う前に沈利が告げた。

「客間は当麻と父さん。隣の部屋は母さんと私、理后、フレンダ、最愛、フレメアよ」

「性別で分けるって訳ね」

「そういう事よ、これなら全員不満はないわよね？　勿論、川の字に並ぶから一応繋がってはいるけど」

そう言いながら沈利は当麻をチラッと盗み見る。
当麻は沈利の提案にほっと胸をなで下ろしていた。
僅かな時間だったが、当麻の態度を沈利は見逃さなかった。

当麻からすれば、当然誰が隣に来ても困っただろう。
しかし沈利の提案であれば、部屋を挟む上に片方は父親だ。
当麻としては願ったりかなったりである。

（とうまぁ～、安心するのはまだ早いわよー？）

しかし当麻が安堵感をえるのも、川の字で部屋を挟むのも全て沈利の計画通りであった。
順調に計画が進むのを感じ、思わず下唇を舐める沈利。

「さて、順番だけと父さんと当麻。隣は私と最愛、母さんに理后、フレンダとフレメアね」

「まって、それだけは認められない」

理后が沈利の提案に反論を口にする。
他の面子も同じ思いなのか、言葉にはしなかったが微妙に眉をひそめていた。

当麻の隣に沈利が来るのだけは認められない姉妹たち。
だがこれも説得する言葉を用意していた沈利にとっては、「やはり

きたか」程度であった。

「まずフレンダとフレメアは姉妹なんだから水入らずに過ごしたいわよね。理后は母さんが隣にいれば急な事になっても安心。最愛は甘えん坊だから母さんが隣にいればいいでしょう？　後、私は今日あまり当麻に絡めていないんだから、これぐらいの役得は欲しいわねー」

「うー」

「ぐぅの音も出ないって訳よ」

沈利に言われたとおり、彼女は今日のパーティであまり当麻に絡んでいなかった。

時々アピール合戦に参加していたが、大体はただ見ているだけであった。

最も、この時の為にあえてそうしていたのは、沈利だけの秘密だが。

「じゃ、いいわね？」

反論できない姉妹たちに楽しそうな笑みを向けながら沈利は告げた。

概ね予定通りいって沈利は満足であった。

一番懸念していた両親からの苦言だが、思いの外反論などはなかった。

刀夜の笑みを見た限りでは、むしろはやし立てる方のようだ。

（両親が味方だったのは幸いね）

ほくそ笑む沈利だが勿論計画はこれで終わりではない。
むしろここからが大変である。
なぜなら、当麻にあるものを飲ませなければならないのだ。

（ただ飲ませればいいって訳じゃない。ちゃんと加減して飲ませないと）

そう思いながら懐からある小瓶を取り出す。

（入手にちょーっと手がかかったにゃ～ん）

小瓶に入っているのは透明な液体。
危険な薬品ではないのは、傍目から見ても分かるが正確な中身は分からない。
ただし沈利の計画の要になっているのは間違いない。

（ったく外なら入手しやすいんだろうなぁ……度数の高いお酒）

小瓶に入っているモノ。
それはアルコール度数の高いお酒であった。

上条家パーティも後半をすぎた頃、まず最初にフレメアが眠気を訴

えた。
こっくりと船を漕ぎだし、時々額をテーブルにぶつけていた。

「に〝ゃあ！」

一際大きな音が聞こえたと同時にフレメアが鳴き声を上げた。
どうやら結構な勢いでテーブルに頭を叩きつけたようだ。

「当麻お兄ちゃん、大体、痛いよ。にゃあ」

「あー真っ赤だなぁ。大丈夫か？」

「大体、かなり痛いかも、にゃあ」

そう言うのと同時にフレメアは当麻の膝の上に座る。
真っ先に反応した最愛へ、フレンダが少し焦りながらも両手で最愛を宥める。

「まぁまぁ、フレメアも眠そうだしいいじゃないって訳よ」

「ぐっ……超仕方ありません」

フレンダの説得に渋々納得した最愛は、膨れ顔をしながらも腰を下ろす。
納得してくれた事にほっと胸をなで下ろすフレンダは、既に寝息を立てているフレメアの頭を優しく撫でる。

「不思議な感じって訳よ。妹がいるって分かるとお姉ちゃんしたくなるって訳よ」

「良い事じゃないか。フレンダは良いお姉さんだよ」

当麻はフレンダの頭を優しく撫でる。

少しだけくすぐったそうにしていたが、フレンダは当麻の腕に身を委ねていた。

「超ずるいです。私も当麻お兄ちゃんに撫で撫でしてほしいです！」

いつの間にか当麻の背後に移動していた最愛は、ずずぃっと自分の頭を当麻の前に突き出す。

最愛の頭を撫でろと言う催促に苦笑しながら、当麻は最愛の頭に手を乗せる。

そして優しく、髪をすくような感じで最愛の頭を撫でる。

「ほふぅ」

最愛は奇妙な声を上げながら恍惚の表情をする。

完全に当麻に身を委ねている彼女は、撫でによって体が左右に揺れていた。

「ふーん、そんなに心地いいんだ」

それまで三人の様子を見守っていた操祈が言葉を発する。

顎に手を当て、何やら思案をしている様子の操祈。

「当麻先輩、私も後でお願いしますね☆」

「駄目」

「超却下」

操祈の提案に即座に反応する妹たち。

「こらこら、操祈だけ仲間外れはよくないぞ？」

しかしそんな妹たちの態度を、当麻は困ったような表情をしながら窘める。

女心が分からない当麻からすれば、頭を撫でるのは別に苦ではない。

「うぅ……超納得がいきませんが、超納得するしかないようですね」

当麻の鈍感さにため息を吐いた後、最愛とフレンダは当麻の前から数歩下がる。

操祈の為に場所をあけたようだ。

そこへスキップでもしそうな勢いで操祈が入ってくる。

「当麻先輩♪　よろしくお願いします」

さっと座り当麻の前に頭を突き出す操祈。

今更ながら緊張し始めた当麻だが、今この場で引き返す事など出来ない。

覚悟を決めて操祈の頭に手を置く。

「んっ……」

くすぐったかったのか、操祈は小さなうめき声を上げた。

それがまた当麻の劣情を刺激するのだが、鋼の理性でそれらを抑えこむ。

（何だろう……最愛とかフレンダとかと違ういい匂いがする）

操祈の頭を撫でる度に髪からいい匂いが漂う。
その匂いにやられたのか、当麻は無意識のうちに操祈の髪をすく。
さらさらと指の間をすり抜けていくやわらかい髪の感触。

気がついたら当麻は操祈の頭を撫でつつ彼女の髪をすいていた。
微妙な、僅かな動作でそれを成立させていたために周りの人間は気付かなかった。

ただ髪をすかれている操祈だけは、当麻が微妙に変化をつけているのに気付いていた。
だがそれを止めようとは思わない。思うことすらありえない。
むしろこの時間を長く引きとめようと、操祈は全身全霊を持って心を平静に保つ。
僅かな心の機微に気付く恋敵（ライバル）たちの目を欺くために。

（何かが違う……なんか女の子って感じだなぁ……）

だが操祈の心を知らぬ当麻は、その後もツボを抑えた撫で方で操祈の頭を撫で続けた。

その後は特に何かイベントもなく、上条家のクリスマスパーティは静かに幕を閉じた。

二十五日が待ち遠しい者たち

学園都市でのクリスマスパーティ。
盛大かもしくは厳かに開き、誰もが大成功を収めた。
その中で、ある意味で主役の当麻と優菜。
そんな二人のクリスマスは二十四日で終わらない。
後半戦である二十五日に、もう一つの世界でクリスマスを祝う。

では、二十五日に出会う人たちはどうしていたのだろうか。
イギリス精教とローマ正教。それぞれに所属する彼らは、何を思い何をしていたのだろうか。
それぞれの組織に所属する彼らの、二十四日を覗いてみよう。

ローマ正教の総本山であるヴァチカン。
聖ピエトロ大聖堂には、様々なシスターや司祭、枢機卿で溢れかえっていた。
二十四日は主の生誕を祝う大事な日。とはいえ派手に何かをする訳ではない。
粛々と厳かに祈りを捧げ主の生誕を祝う。
派手さはなくとも、厳粛な雰囲気が醸し出す世界がヴァチカンを支配していた。

しかし聖ピエトロ大聖堂の一角。
選ばれた者しかいる事が許されないエリアにある一室で、亜麻色の

髪をした女性が座っていた。
十九世紀のフランス人に見られた格好だが、色は全て真黄色で統一されていた。
本来はフードも被るようだが、室内のためかフードは被っていなかった。

「どうかしましたか、ヴェント？」

ヴェントに声をかけた人物、テッラは呑気そうな表情で話しかける。
テーブルで頬杖を突いているヴェントは、テッラの質問に答えずある方向に顎をさした。
それを見て、テッラはヴェントが指した方を向く。

「ふむ、このルートだと時間が……」

そこにはテーブルに地図を広げて何やらブツブツと言っているアックアの姿があった。
地図だけではない、よく見れば陸路、海路、空路の時刻表もあった。
おそらくヴァチカンにある情報部署から手に入れたのだろう。

「二日前からあーなってるんだけど、そろそろウザったいんだよね」

「あー、お気持ちは分かりますねー」

聖人、神の右席、後方のアックア。
様々な通り名を持つアックアは、無類の強さを誇っていた。
真正面から戦えば、ヴェントやテッラでは勝ち目などないだろう。
恐らくアックアを倒せるのは、右方のフィアンマを除いていない。
それほどの強さを誇るのに、今のアックアはまるで引率の先生のよ

うな感じであった。
どうすれば最短ルートをえられるか、どうすれば安全にヴァチカンへ来れるか。
次々に考えてはそれを否定し、また次に考えるという事ばかりだ。

「フィアンマも何か思いついたのか、アックアを止めないし……」

「何やら教皇と話しておりましたねー。まぁ彼の思いつきは今に始まった事ではないですしねー」

「きっと二十五日はロクでもない事が起こる。ヴァチカンにいたくないわー」

「残念ながらフィアンマの命令で、待機していないといけませんがねー」

「ちくしょう」

悔しそうに呟きながらヴェントはテーブルに突っ伏す。
全く持って面倒だ、いっその事二十五日は姿を消しておきたい気分のヴェント。
しかしフィアンマはあれでかなり頑固な面があり、二十五日にヴァチカンにいないと分かると地の果てまで追いかけてくるだろう。
結局ヴェントに残された選択肢は、愚痴をテッラに言いつつ待機する以外になかった。

「所でフィアンマが言ったアレ、本当に実行するのかしら？」

自信の髪をくりくりとイジりながらヴェントはテッラに尋ねる。
どちらかというと、否定して欲しい感じで言ったようだが。

「アックアの弟子をここに連れてくる、でしたねー」

しかしヴェントの希望はあっさりと崩れ去る。

テッラはフィアンマより命令された台詞の一字一句、寸分違わず口にした。

「そうよ、何を考えているのかしら。一介の修道女をローマ正教最深部にあたる場所に連れてこいだなんて」

「こちらの娘ですねー」

そう言うとどこからかテッラが問題の少女に当たる人物の写真をヴェントに差し出す。

「……何で写真を持っているの？」

何故そんなモノを持っているのか疑問に思ったヴェントは若干引き気味に尋ねる。

「アックアが以前段ボール数箱に入っている写真を運んでいたので、一枚失敬しましたねー」

「バレたら殺されるわよ。具体的に言えば腰の辺りから横一文字」

「止めてください。何か嫌な予感しかしませんしねー」

想像して寒気を覚えたのか、テッラは少しだけ震えていた。

ヴェントは再びアックアの方に視線を向ける。

「……」

無言で紙に何かを書き、時々写真を見てしかめ面をする。
ある意味で愉快、ある意味で不気味な挙動のアックアだった。

これ以上不気味なアックアを見たくないヴェントは、視線を再び手に持っている写真に落とす。

「んー？」

「どうしました、ヴェント？」

写真を見ながら唸り声を上げるヴェントに質問を投げるテッラ。

「何か……コイツを見ていると親近感が沸くというういうか……同類？」

「意味がわかりませんねー。ヴェントが親近感を沸くとなると……弟好きって奴ですかねー？」

「弟好きで悪いか！？　あの子はとっても可愛かったんだぞ。クソッ、その弟は科学に殺された！？　あー思い出したら腹立ってきた」

テッラの言葉に思わず逆上したヴェントは、顔を歪めながら大声で叫ぶ。
その顔には、憎しみの感情しか映し出していなかった。

「まぁ科学が憎い気持ちは分かりますがねー。あの猿どもは聖書を冒涜で塗り潰そうとしてますしねー」

そんなヴェントを咎める所か、同調するテッラもまた憎しみの表情を浮かべていた。
二人、否、ローマ正教の誰もが救いの術だと思っている聖書を、科学世界は侵害し冒涜し犯しつくそうとする。
信仰という精神的な支えを作り出す聖書に、そのような事をされて気分が良いわけがない。
故に、二人が科学を憎むのは至極当然の事なのだ。

「よし、完璧である」

テッラとヴェントが会話している間に、アックアはどうやあら結論を出したようだ。
一枚の紙を見て非常に満足げに頷いていた。どうやら会心の出来と言えるモノらしい。

「終わったのか、アックア。随分と弟子にご執心だねぇ～？」

「これぐらいは普通である」

（いや普通じゃねぇよ）

アックアの言葉に思わず突っ込んだヴェントだが、口に出して言うとややこしくなるため心の中だけに留めた。
その後、アックアは満足げに出来上がった計画書もどきを手に、どこかへ移動していった。
言わなくても二人には分かる。きっとアニェーゼ部隊の所に行ったのだと。

（神の右席にまともな奴はいないのかしら？）

そう思わずにはいられないヴェントだった。

一方、イギリス清教の恋する乙女たちはというと。

「いよいよ明日でございます」

「あまり気合を入れると上条当麻が気を使ってしまいます。普段通りで行きましょう」

「といいつつ風呂で二時間も体を磨いていた奴はどこのどいつだぁ？」

「何故それを！？」

シェリーの突っ込みに驚愕する神裂だが、当のシェリーはニヤニヤと笑うだけだった。

「さ、流石です女教皇（プリエステス）様！　細かな所に気を使ってらっしゃる！？」

「いや、そこ感心する所違うから」

「所で明日のお料理はどうしましょうか？」

「いきなり話題変更は止めてください」

仲良くガールズトークをしながら明日の事を話す。
この場にいる全員、当麻に好意を抱く恋敵（ライバル）だ。
最も、シェリーは当麻への好意を全力で否定するが、顔を赤くしながら言うので説得力はなかった。

そんな彼女たちからは他人を出し抜こうとする気配はない。
全員の思いを理解した上で、真っ向から勝負をする気のようだ。

「まーまー、なのですよ」

「何がまぁまぁなんですか！？」

「おい、五月蠅いぞ。夜なんだし少しは声のトーンを落とせ」

「お部屋の飾り付けをしなければなりませんね」

「オルソラさん、飾り付けは明日の朝からですよ。そこまで派手にしませんから、数時間で終わると思います」

支離滅裂なのに何故か会話が成立している摩訶不思議空間である。
会話が戻ったりするオルソラに誰かが答え、時々シェリーが突っ込みを入れる。
五和がたまに連絡事項を口にするが、大体は神裂のせいで台無しだった。
その哀れっぷりに、シェリーすら思わず心の中でエールを送ったとか。

そしてそんな四人とは別に、一人の女性が悪巧みを考えていた。

「くっくっく、このセットが手に入ったるは幸運といふもの」

『必要悪の教会（ネセサリウス）』を含むイギリス清教全体のトップ、ローラ＝スチュアート。
彼女は今、衣装を片手にいたずら心満載の笑みを浮かべていた。
明らかに悪巧み、もとい混乱の種を蒔く気満々である。

「恥ずかしゅうて恥ずかしゅうて仕方がなしなのだけれど、ここは一肌脱がねばならぬ」

その言葉通り、ローラの頬は少しだけ赤みがさしていた。
だが、その恥ずかしさを我慢して彼女はこの衣装を着ることを選んだ。

「日本流の『オン＝ガエーシ』を返すと決意を固めたなりよ。待っておれ、幻想殺しの少年」

ローラの瞳が怪しく輝く。
もしこの場にステイルがいたら、思わず幻覚だと思って炎剣を叩きつけただろう。
何故なら、寂しそうな女が奇妙な衣装片手に高笑いしているのだから。

沈利が仕組んだ罠

パーティが終了し、それぞれが片付けや寝る準備にとりかかった。
当麻は操祈を送り出し、沈利たちは皿などを片付ける。
刀夜や詩菜も何か手伝おうかと言ったが、沈利たちはそれをやんわりと断った。

「父さんと母さんは超気楽にしててください」

最愛の言葉が沈利たちの総意であった。
全て自分たちが行いたい。
ある意味では自立した行動に刀夜は思わず感動を覚える。
娘たちはここまで成長したのだと。

「布団の準備、完了したって訳よ」

「大体、完了したかも。にゃあ」

客間に布団を敷き終えたフレンダとフレメアが楽しそうに言う。
その様子から若干不安を覚えた沈利だが、たぶん大丈夫だと思うことにした。

「人数が多いから、終わった人から風呂に入ってねー」

「了解って訳よ」

「フレンダお姉ちゃん、大体、一緒に入ろう」

「おー、いいね。一緒に入ろうって訳よ」

布団を敷き終えたフレンダとフレメアは、姉妹仲良く風呂場へと移動しようとする。
しかし当麻を見つけたフレメアは、ニコニコと笑顔を浮かべながらとんでもない発言を口にする。

「大体、当麻お兄ちゃんも一緒に入る。にゃあ」

「ぶふぅ!?　女の子がそんな事言っちゃいけません!」

フレメアの悪意なき発言に吹き出す当麻。
顔を赤くしながら説教をしたが、当のフレメアは首を傾げるだけであった。

「当麻お兄ちゃん、大体、一緒に入るのは嫌?」

「いくら家族でも節度という物が……」

「嫌なんだ……」

当麻の言葉を聞いてショボリとするフレメア。
落ち込むフレメアを見て、当麻は正論を言っているのに何故か自分が悪いと思い始めた。

(いやいやいや!　いくら何でもこの年の娘と一緒に入るなんて!?)

当麻は両親に助けを求めようと思い、刀夜の方に視線を向ける。

「所で学園都市のお土産って何がいいかな?」

「あらあら、刀夜さんったら。お土産を買って誰に送るのかしら？」

「い、いや……会社の部下に……待って、母さん！？　どうして拳を握っているの！？」

（駄目だ、全然役に立たない）

心の中で両親に見切りをつけると、当麻はフレメアと視線を合せるように屈む。

「いいか、フレメア。お兄ちゃんは決してフレメアが嫌いで入らないんじゃないよ？」

「にゃあ、だったら……」

「でもね、今日はフレンダと一緒に過ごして欲しいんだ。折角出会えた実の姉妹なんだから」

優しくフレメアを撫でながら当麻は言う。

当麻の言葉にしぶしぶ納得したフレメアは小さく首を縦に振った。

「よし、いい子だ。じゃあフレンダと一緒にお風呂行ってきなさい」

「うん」

完璧だ、完璧に説得できた。

心の中でそう思いながら拳を握った当麻だが、残念ながらそうは行かなかった。

「じゃあ今度は一緒に入ってね、当麻お兄ちゃん」

それだけ言うとフレメアは当麻の返事を待たず風呂場に向かう。

「え゛？」

思考が固まった当麻は、奇妙な声で言葉を発する。

だが、すぐに理解が追いつくと慌ててフレメアを引きとめようとする。

「ちょ！　フレメアさーん!?　お兄ちゃんの話を聞いていましたかー!?」

だが、その前にフレメアは脱衣所に入っていった。

思わず駆け出そうとしたが、その前にある事に気付く。

（あそこを開けたら、フレメアとフレンダの裸を見ちゃうじゃないかぁぁぁぁ!?）

脱衣所に突撃すれば何が待ち構えているか。

過去に何度もその手のイベントを経験してきた当麻。

ラッキースケベの称号を貰った挙句に、色々と買い物などに付き合わされる。

財布が悲鳴をあげようと、レシートだけになろうと容赦なしだった。

（不幸だぁぁぁぁ！）

頭を抱えて心の中で叫ぶ当麻には、当然ながら解決策など浮かんでこなかった。

その後、フレンダとフレメアを皮切りに、全員が順番に風呂を済ます。
失意の当麻は、呆然としていたために最後となってしまったが。

フレメアは風呂から出てすぐ眠気を訴え、すぐに布団に潜り込んだ。
そんなフレメアに苦笑しつつ、フレンダもまた布団に入る。
最愛や理后もパーティではしゃぎ疲れたのか、フレメアと同じように布団に入った。

つまり起きているのは両親と沈利、そして風呂に入っている当麻だけである。

（多分、今頃シャンプーの匂いとかで悶々してるんだろうなぁ）

その事を想像して一人笑う沈利。

「どうかしました？　沈利さん」

「何でもないよ、母さん」

詩菜は一人一人の布団をかけ直していた。
そしてポンポンとニ、三回布団を優しく叩く。
その姿を見て、沈利は漠然と思った。

（母は偉大……ね）

姉妹が能力者であろうと、自分がレベル5であろうと。
当麻に幻想殺しの力があろうと。
詩菜が態度を変えた事は一度としてなかった。
いつも優しい笑みを浮かべて、娘や息子に愛情を注ぐ。
そして時々刀夜の事で怒る。

息子や娘がどれほどの力を持とうとも、世間一般的な母親の詩菜は、
誰よりも強い存在だと沈利は思った。

「ふぃー、いい湯だったぁ」

詩菜が最愛たちを寝かしつけて少しした頃、当麻が風呂から出てきた。
軽く肩をコキコキ言わせると、当麻は自分で自分の肩を揉み始める。

「随分と遅かったじゃない、とうまぁ～」

「い、いや。ちょっと湯加減が良くて……ははは」

微妙に引きつった笑みを浮かべて沈利の問に答える当麻。
その顔を見て、沈利はニヤァといやらしい笑みを浮かべる。

「そう、てっきり風呂場で処理してるのかと思ったわ」

「ナ、ナニヲデショウカ」

「え？　それを私に言わせる？」

「ち、違いますよ！？　上条さんは紳士ですよ！？」

思わず大声を上げる当麻の口を、沈利は問答無用で塞ぐ。

「大声出さない。妹たちが起きるでしょう？」

「ふぐ、ふん」

沈利が口を塞いでいるため、うまく言葉になっていない当麻だった。
しかし首を縦に振っていたので、言わんとする事は沈利に伝わっていた。

「まぁこれでも飲んで落ち着きなさい」

「ん、ありがとうね。沈利姉ちゃん」

当麻は沈利が差し出したグラスを受け取る。
風呂上りで喉が乾いていたのか、グラスの中身を一気に飲み干した。

「ぷはぁ、何かちょっと匂いがキツイジュースだね？」

「まぁね。それは研究所からの『特別』な試供品だからね」

飲み干した事を見届けた沈利は思わずニヤリと笑う。
首を傾げた当麻だが、すぐに体の異変に気付く。

「な、何か体があひゅい？」

体が熱く、呂律が回らない状態。
所謂酔った状態と同じである。

沈利がジュースに混入させた液体は、ただのアルコール度数が高い酒ではない。
ちょっとだけ改良が入っているのだ。
それは、とても酔いやすくするように出来ているのだ。
どんなに酒が苦手な人でも、酔いの感覚が味わえる液体。
何でそんな物が作られたのか経由は不明だが。

「う～」

そして当麻は酔うと、ある事が顕著化してくる。

「しずりおねえちゃーん」

そう言うと当麻は躊躇いも何も見せず沈利に抱きつく。
普段の当麻を知ってる者なら、驚きに目を見開いていただろう。
だが沈利は今の当麻に驚かずむしろ優しく頭を撫でていた。

「あーら、お姉ちゃんが恋しいのかな？」

「うん、お姉ちゃん大好きー」

これこそが沈利しか知らない当麻の秘密の一つ。
アルコールが入って酔った当麻は甘えん坊になる。
幼児退行、とも言えるが沈利にはどっちでもよかった。

あの当麻が、恥も照れも見せず沈利に甘えているのだ。
沈利にとっては至福の時間である。

「でも夜遅いし、そろそろ寝ないと駄目だよ？」

「じゃあ一緒に寝よう？」

「いいわよ、じゃあ布団にいこうか？」

「うん」

少しだけ足取りが不安定な当麻だが、沈利がサポートして何とか布団まで連れて行く。

「父さんー、ちょっとごめんねー」

「ん？　ふあぁ……どうした沈利」

「当麻がさぁ『誤って』お酒飲んじゃって。離してくれないから一緒に寝ようと思うんだ」

「あー、そっか。んじゃ父さんは移動するわ」

寝ぼけているのか、沈利の言っている事に深く考えず刀夜は場所を開け渡した。
のそのそと移動した後、本来沈利が寝るべき布団に入った。

余りにも話が簡単に進んだことに肩透かしを喰らった沈利。

「まぁ……いっか」

そう言うと、沈利は当麻と一緒に布団へと入った。

優菜の家に着いたアリシアたちは、パーティの疲れが出たのか強い眠気に襲われた。
インデックスと打ち止めが、その眠気に抗えるはずがなかった。

「こんな所で寝ると風邪を引く。寝るなら布団で寝ろ」

そう言うとアリシアたちは打ち止めとインデックスを布団に寝かしつける。
アリシアは身長差から運搬が出来ないので、もっぱら着替えを手伝うだけだったが。

「お前たちも寝ておけ。姉上の出迎えは妾がする」

「にゃはは～、それじゃーお言葉に甘えるわね」

「くっ、明日の事がなければ私もお出迎えをしたものを」

楽しそうな笑みを浮かべるまりなと、反対に悔しそうな表情をする静華。
二人ともアリシアに後を任せ、割り当てられた部屋へと姿を消した。

「ふぅ」

一人残ったアリシアは、小さくため息を吐くとソファーに座る。
すぐ帰ってくる、そう思っていたアリシアだが予想に反して優菜は中々帰ってこなかった。

「もう一時間近くたっておる」

時計を見れば時刻は二十三時。既に夜中と言っても差し支えない時間だった。

もう少しすれば日付が変わってしまう。

「流石に心配だ。電話でもするか……」

そう思いポケットから携帯を取り出し、着信履歴から優菜へかけようとする。

だが通話ボタンを押す直前、部屋の扉が遠慮がちに開けられた。

「あら、アリシア。まだ起きていたの？」

扉を開けた人物は優菜だった。

遠慮がちにあけた理由は、恐らく全員が寝ていると思ったのだろう。

アリシアが起きている事に少しだけ驚いた優菜だが、すぐに笑みを浮かべた。

「姉上、帰ってきたらただいまだ」

「そうね。ただいま、アリシア」

「お帰り、姉上」

そう言うと、優菜はアリシアの隣に座る。

その事にアリシアは首を傾げる。

普段の優菜は、滅多なことでアリシアの横に座ったりしない。

いつも対面で座っている。

といっても、これは互いが見えないのが嫌というアリシアの我侭が

あるからだが。

「時間的にはまだ間に合いますね」

そんな事を考えているアリシアを余所に、優菜は鞄の中から何かを取り出す。

鞄を退け、それだけを手に持つと優菜は真剣な表情をしてアリシアの方を向いた。

「アリシア、これを受け取ってくれますか？」

そう言って優菜が差し出したモノ。長方形でそこそこの長さがある四角い箱。

赤いリボンがつけられ、真っ白な包装紙に包まれていたソレは、プレゼントにしか見えなかった。

「わ、妾に……か？」

「ええ、貴方にですよ」

優菜とプレゼントを交互に視線を向けるアリシア。

その表情はまるで信じられないモノを見たかのような表情だった。

「あ、ありがとう」

呆けた顔をしながらアリシアはプレゼントを受け取る。

受けとった後も、それが夢なのではと思えるぐらい現実感が得られなかった。

プレゼントのリボンにそっと触れる。

リボンの手触りを感じたアリシアは、これが夢でないと理解する。
紛れも無い現実だと。

「開けて……いいか？」

「ええ、どうぞ」

優菜の許可を得ると、アリシアはリボンを丁寧に解いていく。
ビニール製のリボンも、機械で量産された包装紙も全てが尊いモノに見えた。
全てが捨てられない、全てを残すべきだ。
そう思ったアリシアは、リボンから包装紙を止めるテープに至るまで丁寧に剥がしていった。

やがて全ての包装紙が外されると、中から小さな長方形のケースが出てきた。

「こ、これは……？」

サイズからしてネックレスかペンダント類と思われるソレは、シンプルなケースだった。
上が白色、下が青色をしたケース。
蓋を手に取り、開けようとしたところでアリシアは気付く。
自分の手が震えていてる事を。

（落ち着け、妾。まだ何も始まっていないではないか！）

数度の深呼吸を繰り返した後、アリシアは意を決して蓋をあけた。
ただプレゼントが入ったケースを開けるだけ。
それだけなのにアリシアは額に汗を滲ませていた。

荒い呼吸をしながらアリシアはケースに視線を落とす。
中にはシンプルなチェーンと、ペンダントトップが一つ付けられたシンプルなペンダントだった。
ペンダントトップも、コイン型と言われる丸い形をしただけで、凝った形はしていない。

だがシンプルというのは、付けていても余り気にされない。
だから常につけたままでいられる。それを計算しているのかどうかは分からないが、とにかくアリシアはそう思うことにした。

ペンダントを手に取り、ペンダントトップをじっと見る。
こちらもシンプルに一輪の花と、その下に優菜の名前がフルネームで刻まれていた。
花に詳しくないアリシアには、刻まれている花の名前と意味が分からない。

「花のは名前はシザンサス。花言葉は『よきパートナー』『あなたと一緒に』です」

「！」

「どういう意味で私がそれを選んだか……分かってくれましたか？」

そう言うと優菜は自分の首にぶら下げているものをアリシアに見せる。
形は同じで、花の形も一緒。
ただ違うのはアリシアの名前がフルネームで刻まれている事。
二つはペアだという事に気付いたアリシアは、同時に花言葉の意味を理解する。

自分は認められたのだと。
互いに背を預けて、共に道を歩くパートナーとして。
心の友、戦友、親友といくつもの言葉がアリシアの頭に浮かぶ。
だが、やはり一番しっくりくるのは姉妹だった。

「分かるとも、分からないわけがない！」

気がつけばアリシアは両目からボロボロと涙を零していた。
単純な感動や嬉しさではない。
心の奥底からわき上がる感情が、そのまま表情に浮き出たような感じだった。

「泣かないで、アリシア。私は貴方を泣かせたくて渡した訳ではないのよ？」

「無理……だろっ。これっ……で泣くなと……か無茶を言うな……あね、姉上」

嗚咽を漏らしながらも言葉を発するアリシア。
だが、まともな言葉が口にできないほど彼女は涙を流していた。
透明で美しい涙を。

「アリシア」

優菜はアリシアを迎え入れるかのように両手を広げる。
それで感極まったのか、涙を零しながらアリシアは優菜の胸に飛び込んだ。
飛び込んできたアリシアの頭を、背中を優菜は優しく撫でる。

涙を止めようとして撫でたのだろうが、それは逆にアリシアの涙を誘う行動であった。

「……アリシア、覚えていますか？」

「何っ……を……」

「私と貴方が初めて顔を合わせた時の事を」

「……ああ、覚えている。もし……過去に戻れるなら、全力で自分を殴っているだろう」

優菜とアリシア。元はこれほど仲が良かったわけではない。
むしろ険悪といっても差し支えはなかった。
もし、その時だけの関係しか知らない人物が、今の二人の関係を見れば驚愕しただろう。
それほど互いに、というよりはアリシアが一方的に優菜を嫌っていた。

「ふふふ、でも貴方の憎しみの奥底に、愛される事への渇望が見えていましたわ」

「愛される為には憎まれるしかない。コルネリウス家はそうやって生きてきた」

「愛と憎しみは紙一重……だから貴方は私に憎しみをぶつけてきた」

「今思えば究極のツンデレだな」

昔を思い出したのかアリシアは乾いた笑いをする。

アリシアの力なき笑いを聞いて、優菜は少しだけ抱きしめる力を強める。

「妾たちはローマ正教から何度も迫害を受けてきた。何もしていないのに『神の敵』だの『危険な異教徒』だの散々酷いレッテルを貼られた」

「自分を守るために戦っても厄災だと風潮された。だから妾たちは諦めた、どんなに声を荒げて訴えても駄目なら、逆に憎まれながら世界を生きていこうと」

「憎しみという愛情を一身に受ける存在になろうと」

「だから愛される為には、自分に憎しみを向けられなければならぬ。そうしなければ、誰も妾たちを見てくれないのだと……」

そこでアリシアは言葉を一旦区切る。

優那がくれたペンダントを強く握り、数回深呼吸をした後言葉を発した。

「だがそうではない、と姉上は教えてくれた。姉上の愛は暖かく、そして心地良かった。思わず心が溶けてしまいそうなほど……な」

「貴方の硬い殻を壊すのに、とても苦労しましたがね」

「素直じゃなかったのだ、昔の妾は」

「先ほどの言葉で例えるなら、そうね……確かにツンデレ娘でしたね。アリシアは」

笑いながら語る優菜を見て、アリシアはどこかバツの悪そうな表情をする。
その頃を思い出して恥ずかしくなったのか、それとも余り触れてほしくない事なのか。
思わずそっぽを向くアリシアに、優菜は少しだけ愉快そうな表情をしながら頭を撫でた。

「アリシア、私の話も聞いてくれますか？」

「勿論だとも。姉上の話を聞かない事などありえぬ」

「……ありがとうね」

そう言うと今度は優菜が何度か深呼吸をする。
胸に顔を埋めているアリシアには、優菜が深呼吸を何度も繰り返している事が丸分かりだった。
だからこそ、これから語られる言葉がいかに重要かをアリシアは知る。

「十一月、法の書事件の時に私は恩師と再会しました」

恩師、という単語を聞いてアリシアがピクリと反応する。
優菜はそれを無視して更に言葉を紡ぎ出した。

「そして一つの宿題を渡されました」

「私はいつか選ばなければならない時が来ると」

「アリシア、貴方たちが生きている教会世界か、それとも当麻たちが生きている科学世界のどちらかを」

「悩みました。それこそ一生分の思考能力を使ったのではと思えるぐらい」

「だけどね、学園都市に住む沢山の人の生き様を見て……そしてアリシアの剥き出しの想いを聞いて……私は驚くほど簡単に答えが出たの」

「答えが出た後は簡単でした。何故、こんなに簡単な答えが浮かばなかったのか」

「きっと私の腕に貴方や当麻の存在が当たり前過ぎたのですね。人は当たり前過ぎる存在が腕の中にいると、その大事さが中々分からないのでしょう」

そこで、何かを吐き出すかのように息を吐く優菜。
心の奥に溜め込んだものが、その息と同時に吐き出される錯覚を覚えた。
きっと気のせい、そう思った優菜だが反対に気持ちはだんだんと軽くなっていった。

「当麻とアリシア、どちらかを選べという問いへの答え」

今なら言える、優菜はそう思った。

出した答えにアリシアは呆れるかもしれない。
もしかしたら見限るかも知れない。
そんな臆病な事で語れなかった自分の答えを。

「私はね……当麻とアリシア、貴方たち二人とも『選ぶ』という答

えを出すわ」

アリシアは自分の呼吸が止まったことを自覚する。
優菜の語った言葉が部分的にではなく、単語の一つまでも理解できなかった。
どちらかを選べという問いに、どちらも選ぶという答え。
聞き様によっては問いを出した人間を馬鹿にしている答え。
それを優菜は大真面目に口にしたのだ。

「私の腕からアリシアが落ちるなら、私は貴方を掬い出すために手を差し伸べましょう」

「私の腕から当麻が落ちるなら、私は当麻を掬い出すために手を差し伸べましょう」

「二人が同時に腕から落ちるというのなら、私は両腕を使って貴方たちを掬い出してみせましょう」

「貴方たち二人が諍いを起こしたのなら、私は両腕を使って貴方たちを止めてみせましょう」

きゅっとアリシアを抱きしめる腕に更なる力を入れる優菜。
少しだけ苦しかったアリシアだが、それに反して心はとても暖かい気持ちになった。

「だけど、姉上。科学と教会世界は不可侵だ。どちらをもという事は……」

「それが貴方か当麻を見捨てていい理由になるのですか？」

アリシアの懸念を打ち消すかのように、優菜ははっきりと力強く断言した。

「そんな『下らない事情』で貴方たちを見捨てる事など私には出来ない」

「もしも世界が科学、それか教会のどちらかしか選べないと言うのなら」

「まずはその幻想（ルール）をぶち殺す」

遠くを見据えながら優菜は告げた。
優菜の力強い瞳には一片の迷いすら見えなかった。

本気だ、本気で姉上はそう思っている。
とても正気の沙汰じゃない。狂っているとしか言えない。

だけどどうしてだろう。

正気と思えないのに、何故こんなにも頼もしく聞こえるのだろう。
狂ってるとしか思えないのに、何故こんなにも暖かい気持ちになるのだろう。
馬鹿げていると思えるのに、何故その言葉に一片の疑いすら浮かばないのだろう。

（ああ……そうか）

そこまで考えてアリシアは気付く。

なんだ、とても簡単じゃないかと言いたげな表情をしながら答えを心の中で紡ぐ。

（妾は姉上と共に歩むと決めた。ならば信じて共に歩めばいいじゃないか）

（最初から無理だ、不可能だと思ってしまうのなら、妾は姉上の妹など名乗る資格はない）

（姉上の本当の強さは、どんなに絶望的な状況でも決して諦めない意思なのだから）

（だったら自分がする事は一つしかないじゃないか）

優菜の胸の中に顔を埋めながらアリシアは誓う。

誰が諦めろと言っても。
その先に絶望しかないと言われても。
明日を信じて、優菜と共に道を歩いて行くと。

仕込みは上々

（ワタクシ、上条当麻は現在人生の危機に瀕しています）

（今日は二十五日、本当なら優菜と一緒にインデックスをイギリスへ送り出すだけでした）

（あわよくばちょっと観光出来たらなーと思っていました）

（そう思っていたのに）

「むふふん、とうまにゃ～ん」

（どうして上条さんは沈利姉ちゃんと一緒の布団で寝てるのですかぁ！？）

思わず叫びそうになったが、叫んだら最後本当に人生が終わると思い我慢した当麻。

当麻と沈利の現状はどうなっているかというと。

昨日沈利が『仕込み』をしたので当麻と一緒に寝ている。

しかしそれだけではない。

沈利のパジャマは全部ボタンが外れていた。

へそが丸見えであり、ちょっと服がめくれれば胸も全開フルオープンである。

勿論、寝間着なのでブラジャーなどしているはずもない。

下が何も起きていなかったのが当麻的には救いだった。

更に沈利の首筋と左胸あたりに何かのアザらしきものが見えた。
よく見ると唇の形にも見える、いわゆるキスマークだと当麻は理解した。

（じょ、冗談だと言ってーーーー！！）

記憶にない当麻は、全部夢だと思おうとした。
しかし右手から感じる感触が、それが現実だと教えてくる。

当麻の右手は何を掴んでいるか。
それは沈利の左胸である。それも服の上からではなく直接掴んでいた。
寝ぼけてやっていたとか言い訳が通用するレベルではない。

普通の高校生ならここまでの状態で我慢など出来るはずもない。
しかし、当麻には沈利の怖さが何よりも分かっているので、この場合とるミッションは一つだった。

沈利の胸から手を離して、パジャマのボタンを全て止める。
その後何事もなかったかのように起床した後、全力で感触とか色々な事を頭の中から消し去る。
頑張れば簡単だが、このミッションを困難にしている理由が一つある。

「母さん、荷物とか忘れ物ない？」

「あらあら刀夜さんったら。娘たちが起きちゃいますよ？」

「あ、ごめん」

それは刀夜と詩菜が起きている事。
昨日は川の字に寝たために、当麻や沈利からフレンダたちまで同じ部屋で寝ている。
幸い布団が完全にかぶせられていたので、布団の下の惨状に両親たちは気付いていない。
しかし動けば布団が動いてしまうので、当麻が起きている事に気付かれてしまう。

（どうしよう、どうするべきかっ！？）

刻一刻と時間は過ぎていく。下手に待っていても解決はしない。
もしかしたら沈利が起きてしまうかもしれない。
時間が過ぎていく中、当麻の頭の中にはマイナスイメージばかりが浮かんできた。

「あ、母さん。ちょっとこっちに来てくれー」

「どうしました刀夜さん？」

「荷物の整理をしたいんだ。そっちの部屋だと無理だからこっちでしよう」

「わかりました」

そう言うと詩菜は部屋から出ていった。
かすかに当麻の耳に刀夜と詩菜の声が聞こえる。
何か話し合っており、当分こちらの方を気にする感じはしない。

（もう今しかない！）

今に全てをかける、そう思った当麻は素早く沈利の胸から手を離す。
布団を軽くめくると、外れているボタンを一つずつ付けていった。
しかし当麻は集中しすぎたせいか、足音がだんだんと自分に近づいてくる事に気付いていなかった。

「いや、こっちに忘れていたようだ」

二つ目のボタンに手をかけた時、閉めてある扉が無遠慮に開けられた。

「「あ」」

入ってきたのは勿論刀夜である。
刀夜は当麻と沈利と布団を順番に視線を向けた後、静かに扉を閉めつつ言った。

「ご、ごゆっくり」

パタンと扉が閉められた後、当麻は刀夜の言葉を理解する。
今の状況を第三者の目で見ればどう思うか。

眠っている沈利の服を脱がして襲おうとしている構図にしか見えない。

「ごゆっくりじゃねぇぇぇぇーーーー！！！！」

思わず大声を上げた後、当麻は刀夜を全力で追いかける。
沈利たちが起きなかったのが奇跡なぐらいの声量だった。

「どうした、当麻。父さんはちゃんと理解があるから安心しろ！」

無駄に爽やかで達観したような笑みを浮かべる刀夜を見て、当麻は血管が何本かブチブチと切れた音を耳にする。

詩菜は何のことか分からず、ただ笑顔を浮かべながら首を傾げていた。

「孫はせめて高校卒業してからだぞ。ああ、その時は盛大に祝わないとなぁ」

「あらあら、私はおばあちゃんになっちゃうのかしら？」

「それを言うなら、私だっておじいちゃんだな」

「話聞けやコラァ！　ていうか何でそんなに平静なんでせうか！？」

沈利と一緒に寝ていた事もさながら、さっきの現状を見ても刀夜は全く動じていなかった。

詩菜は何の事か分かっていない様子だったが、何となく刀夜に合わせている感じに見えた。

「何だ、覚えていないのか？　昨日お前は間違って酒を飲んでしまったんだよ」

「は？　酒？」

「そうだ。その後は沈利にべったりだったからな。一緒に寝たいとお前が我侭言っていたんだぞ？」

当麻の全身から嫌な汗がダラダラと吹き出し始める。

刀夜の様子から、彼が嘘を言っているようにも見えなかった。
だから事実とすれば大変危険な事が一つある。

（昨日……昨日何があったんですかぁ！？）

それは昨日の記憶がすっぽり抜け落ちている事である。
風呂から出た辺りから今朝までの間、一体自分が何を言って何をしたのか全く覚えていない。

「にゅふふん、とうまぁ～。逃げちゃ駄目だぞぉ」

そこへ当麻の背後からにゅっと誰かの両腕が伸びてきた。
声からして当麻には、背後に立っている人物が誰か分かった。

「し、沈利姉ちゃん！？」

「んふふん、とうまぁ～」

当麻の背中にしなだれかかった後、沈利は当麻にだけ聞こえる声量で囁いた。

「昨日は（ものすごく甘えられて）とても激しかったわ」

何やら大事な部分を隠して囁いた沈利の言葉。
しかし当麻には記憶がないため、彼女から紡ぎ出される言葉が全てであった。

「ふ、不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁーーー！！！！」

最愛たちが寝ている事も、早朝だという事も忘れて当麻は全力で叫

んだ。

その後、当麻は終始ビクビクしながら朝食を食べた。
反対に沈利は、ともすればツヤツヤしそうなぐらい元気であったが。
当麻の態度に幾分の心配と疑問を抱いた理后たちだが、その事を尋ねると。

『止めて!?　俺みたいなゲス条さんを心配なんかしないで!?』

と、このように謎の発言をして取り付く島もなかった。
刀夜と詩菜は、朝食前に出ていったので当麻の様子を聞けるのは沈利しかなかった。
しかし沈利が何か意地の悪い笑みを浮かべながら口を開こうとすると、決まって当麻が止めに入ってきた。

（怪しい）

その様子から沈利が当麻に何か罠を仕込んだ事を理解した理后たち。
当麻が全力で止めに入るので、尋ねるのは当麻が外出した後と結論に至った。

そして迎えに来た優菜とインデックスに、当麻が連れていかれた後理后が最初に口を開いた。

「しずり、とうまに何かしたでしょう」

「ん～？　私は何もしてないわよ。私はね」

理后の睨みもどこ吹く風で受け流している沈利だが、当然ながらそんな答えで理后たちが納得するはずもない。

「嘘よ、とうまのあの態度。絶対何かあったとしか思えない」

「借りてきた猫超よろしく状態でしたね」

「結局さ、沈利姉ちゃんが怪しいって訳よ」

「大体、沈利お姉ちゃん以外に当麻お兄ちゃんに何かする事は出来ないかも。にゃあ」

ぎゃーぎゃー喚く姉妹を見て、沈利は少しだけ面倒臭いと言いたげな表情をする。

しかし、黙っていても事態は好転しないと理解したのか、小さなため息を吐いた後に語りだした。

「わーったよ、昨日当麻に何をしたか教えてやるよ」

元よりタイミングを見計らって言うつもりだった沈利。

勿論、色々と事実をぼかすように言うつもりである。

恋にルールなど存在しない。

非人道的でなければ、沈利はあらゆる方法を使う。

今回のような心理作戦も、当麻を取られないように出来ると分かると躊躇いなく使ってくるのだ。

最も、この手の心理作戦は操祈が抜きん出ているが。

「昨日は当麻が『間違って』お酒を飲んだのよ。でだ、お前たちは知らないだろうが、当麻は酒が入ると甘える癖が出てくる」

「ほほぅ」

「超知らなかったです」

「当然よ、当麻は未成年だからお酒を飲むなんてしないしね。馬鹿面がそそのかして一度だけ飲んだ事があるけど」

「浜面後で超死刑です」

何人の兄を悪の道に染めようとしたんだ、と最愛は思った。
実際は、ちょっと大人の気分を味わいたかった当麻が、逆に浜面に頼み込んだだけだが。

「まぁそれで当麻と一緒に寝たわけよ」

「？　それだったら当麻お兄ちゃんが、あんなに慌てたりする理由がないって訳よ」

「ああ、そりゃそうさ」

そこで沈利はニヤリと笑う。
その表情は悪戯がうまくいって喜んでいる子供のようにも見えた。

「当麻は私を襲った」

「！」

「ように見えるよう細工したからな」

「？？？」

いまいち沈利の言葉の意味が分からず、理后たちは揃って首を傾げた。

そんな理后たちを見て、沈利は教師のように一から説明し始める。

「当麻は今日何処に行く？」

「えっと、イギリスだね」

突然の沈利の問いに驚きながらも理后は答える。

「そうだ、イギリスだ。私たちじゃあっちで何が起きても手出しが出来ない。じゃあどうするか？　答えは簡単だ。当麻にどんな事が起きても動けないようにすればいい」

「ますます意味が分からないって訳よ」

「にゃあ～」

フレンダとフレメアは揃って頭を悩ませる。

沈利の説明は漠然としていて、何が言いたいのか要領をえなかった。

「つまりだ。当麻に誰か色仕掛けをしても、私との事があるから当麻は絶対に手を出さないって訳だ。当麻は女を取っ換え引っ換え出来るほど器用じゃないしな」

「旗立男（フラグメイカー）だけじゃなかったら、今頃当麻お兄ちゃんはハーレム構築済って訳よ……」

「とうまは鈍感だけど、だからといって普通の高校生だしね」

「つまり色仕掛けで落ちる可能性も超あるって事ですか」

「大体、それは大問題かも。にゃあ」

「だからこその仕掛けだ。アレが発動している間は、当麻は絶対に他人に手を出さないだろう？」

沈利の言葉に全員が納得する。

相手が沈利だと言う事が微妙に不満だったが、それでも他人に取られるよりマシだった。

（まぁ実際キスマークつけられたし、胸も随分と揉まれたけどね）

（実は当麻って大きな胸が好き？　物凄くご執心だったし）

（でも揉まれている間は幸せだったわー。あの当麻が私しか見てないわけだし）

（アレが他人だったら素粒子レベルまで分解してる所よ）

（当麻って酒に酔うと理性も一緒に消し飛ばすようね）

（とはいえ、この手は何度も連発出来ないわね。ここぞって時に使うようにしないと）

（こいつらも知っちゃったしなー。まぁまだまだ当麻には秘密があるけどもん♪）

昨日の事を思い出して幸せに浸る沈利。
酒の力とはいえ、当麻は沈利だけをずっと求めた。
それが男女の愛情ではなくとも、当麻に求められたという事実が何より嬉しかった。
流石にあの状態で何もされなかったら、ショックは免れなかったから。

（まだまだチャンスはある。いつか絶対当麻を手に入れてやるんだから）

麦野沈利、学園都市序列第四位。
レベル５として恐れられている彼女も、当麻に恋する一人の乙女なのだ。

そわそわアックアさん

（どうも当麻の様子がおかしい）

当麻の家から第二十三区にある国際空港、果てはイギリスに到着する間まで。
ずっと当麻は何かを考え込んでいた。

（何か事件に巻き込まれた？　しかしそうなら当麻がここで大人しくしているはずもないですね）

考えても埒があかない。もう少ししたらイタリア行きの飛行機に移動する必要がある。
その前に、この状態を打破しておかないと何か大変な事になる。
そんな予感めいた考えが浮かんだ優菜は、一つ咳払いをした後当麻の背中に声をかける。

「当麻、一体何を考えているのです？」

「い、いやいやいや。なななな何も考えていないぞ！？」

軽く聞いただけで激しく動揺する当麻を見て、優菜はますます怪しいと思い始めた。
しかし、このままでは話をはぐらかすだけで何も進展しない。
どうしようかと思ったその時、優菜の頭の中にある事が思い浮かぶ。

（一応それっぽく見えるようにしないとね）

咳払いをした後、優菜は当麻に慈しむような視線を向ける。

実は優菜、自宅からずっとルチアから送られてきた修道服を着ていた。
修道服の色は白で更に金糸を使った装飾が施されている。
インデックスと似た感じがあるが、こちらはローマ正教の特色が色濃く出ていた。
といっても素人から見れば、単なる白い修道服にしか見えないが。
魔術に詳しい人間が見れば、それなりの防御術式が組まれている事が一目でわかる。
勿論、インデックスは簡単に見抜き、当麻に壊さないように注意した。

『ゆうなを公衆面前の前で素っ裸にしちゃうから、とうまは絶対に触っちゃ駄目』

その事を瞬時に理解した当麻は、右手をガチガチに体へ固定した状態で飛行機に乗った。
その上、受付嬢に全力で土下座して席を離してもらった。

恥も外見も捨てた当麻だが、優菜を公衆面前で素っ裸にするよりはマシと思っていた。
鈍感な当麻だが、優菜が同性から非常にモテる事は知っていた。
御坂曰く『三日あれば常盤台中学学生寮に住む全員が堕ちるわ』との事。
その時は冗談だと思ったが、後日当麻は思い知る事となる。

喫茶店で優菜の授業を終えた後、ぼーっと外を見ていた時だった。
気が付いたら、空力使いの大能力者と水流操作の強能力者二人が目の前に立っていた。
そして驚く暇も与えてくれずに散々優菜との仲を問い詰められた。

ガラの悪い男なら何とか出来るが、女性の上に中学生では手も足も出ない当麻。
結局誤解が解けず、全力で逃げきる以外になかったが。

そんな優菜を、もしも公衆面前で裸にすればどうなるか。
学園都市にいる沢山の乙女（いもうと）から狙われ続ける上に、変態野郎（ぬがしおとこ）の烙印は免れない。
特にアリシアの存在が恐怖であった当麻なので、念には念を入れる徹底した対策を取った。

そんな事を全く知らない優菜は、聖書を片手に持ちながら朗らかな笑みを浮かべた。

「迷える子羊よ。主は貴方の全てを見ています。悩める事をお話しなさい」

修道女の真似事をして当麻の口を割る計算だったが、当麻は別のことに感動を覚えていた。

「スゲェ！　どこぞの食欲魔神（おおぐいシスター）と違ってちゃんと修道女にぎゃあああああああああああああああああ！！！」

「とうまぁ！　誰が食欲魔神（おおぐいシスター）だってえええええええええ！！」

当麻の余計な一言に怒ったインデックスが、当麻の頭を容赦なく噛み砕こうとする。
ピシピシと嫌な音が聞こえるほど、インデックスの咬筋力は凄まじかった。

「誰もお前の事って言っていないじゃないかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

ぁぁぁ！！」

「あからさまにこっちを見ながらとうまは言ったじゃない！！」

「だってお前食う寝る食うしかしてないって聞いてるし！」

「失礼なんだよ！　私だってらすとおーだーと一緒にゲームしたり、超機動少女カナミン見たりしてるもん！」

「寝る食う遊ぶだけかよぉぉぉぉぉぉぉ！！」

迂闊に二人へ触れられない優菜は、現状にただ乾いた笑いをするだけしかなかった。
しかし当麻の表情が幾分和らいでいるので、これはこれでヨシとしようと思った。

「さて、二人とも。私はそろそろ行きますが、大丈夫ですか？」

「いつつ、まぁ大丈夫だろ。ステイルと神裂が確か迎えにくるし」

体中にインデックスの歯型を刻まれた当麻が答える。
噂をすれば影、との言葉通りに当麻が答えた時、向こうからステイルと神裂が姿を現した。

「予想より早かったね、インデックス。後ついでに上条当麻」

「俺はついでかよ！　まぁ確かに役目から見ればついでだが」

ステイルの毒舌に突っ込む当麻だが、ステイルはそれを無視して当麻の後ろを見る。

当麻の後ろにいるのは、修道服を着た優菜が立っていた。

「後ろの女性は誰かね？　僕たちはローマ正教の人間に知り合いなんていないんだが？」

「ああ、優菜の事？　テメェも一回会っただろう、オルソラの時」

「……おかしいね。僕の記憶が確かなら、彼女は学園都市の人間だったはず」

「ヴァチカンへ向かうからですよ、ステイルさん」

ステイルの疑問に優菜は淀みなく答える。

ヴァチカン、ローマ正教の総本山。

そこへ向かうと言った優菜に、ステイルと神裂は微妙に警戒心を出す。

当然の態度、そう思っていた優菜は全く気にしていなかったが。

「すているもかおりも、ゆうなを疑っちゃ駄目」

「……しかしだね、インデックス。ローマ正教の人間をおいそれと信じられ……」

「わたしの言葉を信じてくれないの？」

捨てられた子犬のように、上目遣いにステイルを見上げるインデックス。

その瞬間、ステイルが取るべき行動は決まった。

「いや、すまない。最初から疑ってかかるのが僕の癖でね。勿論、

インデックスの言葉を信じるよ」

（コイツ相変わらずだな）

一瞬で態度を変えたステイルに呆れつつ当麻は神裂の方を見る。
神裂は神裂で優菜を真剣な瞳で見ていたが、それは疑ってかかるとかそういう雰囲気には見えなかった。

「神裂、お前も疑っているのか？」

「いいえ、私は疑っていません。インデックスの護衛は学園都市側が選んだ人物。その学園都市がローマ正教の人間を選ぶような真似をするとは思えませんから」

しかし、と神裂は心の中で付け加える。

（彼女は何者ですか。重心が全く読めません……それにヴァチカンへ向かう？　学園都市の人間が何故そこへ向かうのでしょうか）

（スパイ？　しかしそれなら学園都市から監視されてもおかしくない筈）

（修道服にも術式が組まれていますね。様子から彼女が組んだと思えません。ならば魔術師が彼女のためにわざわざ作って送ったという事でしょうか）

（法の書事件とオルソラたちの評価を聞いた後、実際に会ってみたいと思ったので、ステイルに同行したのですが……予想以上でした。彼女の底が全く見えません。不思議な女性です、上条優菜……）

「そう言えばこちらの女性とは初めてですね。初めまして、上条優菜と申します」

「……神裂火織です」

深く考えていたので、神裂は少し低い声で自分の名前を名乗った。しかしそれを知らない周りから見れば、とても冷たいような声に聞こえただろう。

「それでは飛行機の時間がありますので失礼します」

しかし優菜は全く気にせず、全員に軽く頭を下げるとそのまま立ち去った。

優菜が立ち去った後、当麻は頭をかきながら神裂に言う。

「……なぁ、お前らから見れば敵のローマ正教だけどよ。優菜は俺たちの仲間なんだ、出来れば疑うのは止めてほしい」

「最初にも言った通り彼女を疑っていません。ただ、武術の嗜みがあるのかと思っただけです」

「あーあるよ、優菜は。色々とやってるけど、得意なのは棒術だって言ってたなぁ」

「……そうですか」

もう一度視線を優菜の方に向ける神裂。

遠ざかる優菜を見て、神裂は何とも言えない表情をしていた。

結局神裂は、優菜が見えなくなるまでその背中を見続けていた。

アックアは空港のロビーで時計をチラチラと見ながら立っていた。
傍目からも分かるほど、そわそわしているのが丸分かりだった。

「あの……少しは落ち着いたらどうですか？」

「そういう貴様も、さっきから視線が定まっていないのである」

「落ち着きましょう二人とも。こんな時こそ聖書を読むのです」

「シ、シスタールチア。聖書が逆さまですよ」

アックアの近くにいるアニェーゼ、ルチア、アンジェレネの三人も同様だった。
それもそのはず、今さっき優菜が乗っている飛行機が空港に到着したのだ。
あと少しで出てくると思うと、四人の心は冷静など保てなかった。

「むっ！」

「ど、どうしました！」

突然アックアがある方向に視線を固定する。
アニェーゼたちもアックアに倣って、そちらに視線を向けたが何も見えなかった。

「あの……何もいませんけど？」

「よく見るのである。あそこに彼女がいるのである！」

「どんな目ぇしてんだよ、あんた……」

思わず突っ込むアニェーゼは勿論、ルチアとアンジェレネもアックアが聖人だという事を知らない。

優菜の師匠という事だけしか知らないので、当然ながら神の右席についても知らない。

やがてアニェーゼたちにも優菜の姿がはっきりと見え始める。

といっても距離があるので、向こうはこちらの存在に気付いていない。

アンジェレネが手をふろうとした所で、ある異変に四人が気付く。

優菜の通り道を塞ぐように、二人の男が立ちはだかったのだ。

旅行かばんにメモを片手にあちこちを見る、いくら修道服を着ても旅行者と分かる行動だった。

「あの……あれは何て会話しているのですか？」

もしかしたら道を聞いているのかも知れない、そう思ったアニェーゼだがコメカミには青筋がびっしりと浮かんでいた。

ルチアなど今から殴りにかかろうという勢いだった。

だが、二人が動くより前にアックアが動いていた。

凄まじい爆発音が聞こえたかと思うと、二人のナンパ男（だと思われる）が宙を舞っていた。

全力で距離を縮める、ナンパ男の肩を掴む、思いっきり放り投げる。

以上の動作を一秒以下で行ったアックアであった。

いきなり二人が消えたことに驚いた優菜だが、目の前に立っているのがアックアと分かるとほっと息を吐く。

「迎えに来たのである」

「ありがとうございます、ウィリアム様」

二人は互いに笑みを浮かべて再会を喜ぶ。

周りから『人が降ってきたぁぁ！』『おい！　こいつ肩の骨が砕けているぞ！』という叫び声が聞こえたが、残念ながら二人の耳には届いていなかった。

「聖母様、お久しぶりです！」

「お荷物をお持ちします、聖母様」

「お久しぶりです～、聖母様」

アニェーゼたちも優菜に歩み寄ると、各々が挨拶を口にする。

その間にも『コ、コイツ！　脳震盪起こしてるぞ！？』『なんだ、この陥没痕は！？』とか聞こえたが、やはりアックアたちの耳には届いていなかった。

「アニェーゼさん、ルチアさん、アンジェレネさん、お久しぶりです」

微笑む優菜を見て思わずルチアは祈りを捧げようとしたが、既の所でアニェーゼが止める。

「（ここで祈って聖母様の時間を減らしてどうするのです！？）」

「（し、しかしシスターアニェーゼ！　これは祈らずにいられませんよ！？）」

「（気持ちはわかりますが、少しは冷静になってください！？）」

流石に二人から説得されたせいか、ルチアはしぶしぶ祈りを諦めた。

「さて、ここで立ち話も何である。そろそろヴァチカンへと向かおう」

「よろしくお願いします」

ルチアに荷物を渡した後、優菜は小さくお辞儀をする。

「歓迎する、上条優菜」

それに応えるように、アックアは薄く笑った。

悪巧みフィアンマさん

国際空港で優菜と合流したアックアたちは、そのままヴァチカンへと直行した。
ヴァチカンへ入るには、それなりの手続きが必要だがアックアは神の右席の権限をフル活用した。
面倒な手続きは全て省略し、優菜は特別扱いでヴァチカンへと入る事を許された。
勿論、優菜はそんな事が裏で動いてる事などつゆ知らずだが。

とはいえ、ヴァチカンで先にやらねばならない事はいくつかある。

「さて、色々と手続きを……」

「その必要はないぞ！」

アックアがそう言いかけた時、彼らの背後で誰かが叫んだ。

「全て俺様が片づけておいた」

後ろを振り返ってみると、そこには頭のてっぺんから足の先まで全て赤で統一された人物が立っていた。

「フィアンマ……何故ここにいるのである？」

「愚問だな、アックア。お前の弟子を見にわざわざ俺様が出向いたまでの事！」

（アックア？）

聞き慣れない名称に優菜は首を傾げたが、きっと役職か愛称のどちらかだろうと思うことにした。
優菜はハイテンションな人物、フィアンマの方に視線を向ける。
その視線に気付いたフィアンマは、何故か奇妙なポーズをとった。

「そこの白修道女が弟子か。貴様、名前を何という？」

「は、はぁ……上条優菜です」

フィアンマのテンションについていけない優菜は、困ったような表情でフィアンマの問いに答える。
実際フィアンマのテンションについていけないのは、アックアたちも同様であったが。

「日本人か。うーむ……」

顎に手を当ててフィアンマは優菜を上から下まで見る。
舐めるような視線に思わず数歩下がった優菜だが、視線から敵意は感じられなかった。

「随分と若いな、アックア。俺様はもう少し年が近いのかと思っていたぞ」

「まぁ……そこそこ離れているのである」

「ま、問題はない。アックア、後でちゃんと連れてくるのだぞ」

「貴様、何かよからぬ事を企んではいないだろうな」

なにやら自分の知らない所で話が進んでいる、そう思った優菜だが話には割り込まなかった。
下手に割り込むと訳が分からない状態になると思ったからだ。

「なぁに、ちょっとお願いがあるだけだ。貴様の思うような事などありはしない」

「ならいいが……」

睨みながら尋ねるアックアの視線を、フィアンマは薄い笑みを浮かべながら受け止める。
それだけで二人の力量関係がはっきりと分かった。
明らかにフィアンマの方が上、そう思わずにはいられない優菜であった。

「くっくっく、また会おう」

最後まで自分の言いたいことだけを言って、フィアンマはその場を立ち去った。
当然他人の返事など聞く耳持たず。

「な、中々個性的な方ですね……」

顔をひきつらせながら優菜はフィアンマの事をそう評価した。

しかしアニェーゼやルチア、アンジェレネから見ると、フィアンマの存在は異質というレベルではなかった。
とにかく何もかもが規格外、魔術師の枠に収めていいかどうか迷うぐらいだ。
細目の体すら鋭利な刃物のような雰囲気を醸し出していた。

その後、アニェーゼたちは仕事（優菜を陰から護衛）に戻ると言って、優菜たちと別れた。
何も知らない優菜はアニェーゼたちに『頑張ってください』と励ましの言葉を述べる。
それが彼女たちのやる気を鰻登りに上げるとも知らずに。

西洋人は別れる時抱擁をする、という事を思い出した優菜は近くにいたルチアを優しく抱きしめた。
予想していなかった優菜の行動に、ルチアは一瞬で脳の処理限界を突破した。
頑張って抱擁し返そうとしたようだが、その前に頭と心が耐えきれずに意識が違う世界へと飛んでいった。
世界で一番の幸せを味わいました、そんな表情をしながら。

ルチアの行動の意味が分からず、優菜は人の良い笑みを浮かべながら首を傾げた。
だが疑問を解消する前に、アニェーゼとアンジェレネから抱擁の催促がきたので、それ以上は考えないことにした。
二人はルチアと違って気絶はしなかったが、やはりルチア同様に幸せそうな表情をしていた。
その表情のまま、二人は一度礼を述べた後ルチアを引きずりながら立ち去った。

「ルチアさん、大丈夫かしら？　やっぱり急な事したからイヤだっ

たのかな？」

一人全く違う事を懸念していた優菜に、アックアは少し困ったような表情をする。

（この娘の好かれ具合は相変わらずだな）

「気にしなくて問題ないのである。さて、そろそろ……」

「おや、アックア。そんな所で何をしている？」

移動しようと言いかけたアックアだが、それを口にする前に横から声をかけられる。

優菜とアックアは声のした方に視線を向ける。そこには腰が少し曲がった老人がたっていた。

しかし着ている服は豪奢な感じであり、それなりの身分である事が一目瞭然だった。

老人を見て、アックアは少しだけ眉をひそめる。

「護衛も付けないとは不用心である」

「私とてたまには一人で歩きたい時もあるのだよ」

「しかし……」

「それにお前たちがいるし、今日のヴァチカンはアニェーゼ部隊が監視しているだろう？　頭の固い護衛などいらぬのだよ」

そこまで言われてしまっては、アックアに言葉を述べることなど出来るはずもない。

ある意味では高い信頼、それなくしては出てこない言葉だからだ。

「そちらがアックアの弟子か」

アックアの隣にたつ優菜を見ながら、老人はアックアに質問をする。

「初めまして、上条優菜と申します。えーっと……」

「マタイ、マタイ＝リースだ」

「よろしくお願いします、マタイさん」

そう言って優菜がお辞儀をすると、教皇とアックアは揃って驚いた表情をする。

仮にもローマ正教二十億人のトップである教皇を『さん』付けで呼ぶのだ。

驚くなという方が無理がある。

最も、そこまでローマ正教に詳しくない優菜にとっては、それなりの身分である老人だという認識だが。

「はっはっは、さすがアックアの弟子。中々個性的ではないか」

驚いた表情から一転、教皇は人目も気にせず大声で笑った。

反対にアックアは何か困ったような表情をする。

「え？　ええ？」

「よろしくお嬢さん」

そう言うと教皇は手を優菜に差し伸べる。

握手を求めているのだと気付いた優菜は慌てて教皇の手を握る。
瞬間、教皇の顔にはとても意地の悪い笑みが浮かぶ。
何故そんな表情を、と優菜が疑問に思ったのを見計らったかのようなタイミングで教皇が口を開く。

「私はローマ正教の教皇を務めている。何か分からぬ事があれば聞いてくれたまえ」

「……はい？」

教皇はいたずらが成功したと言いたげな表情で優菜の手を握った。

アックアと教皇の数歩後ろを、優菜は顔を真っ赤にして俯きながら歩いていた。
穴があったら入りたい、まさにこの一言が優菜の心情を完璧に現していた。
恐れ多くもローマ正教トップの人間をフレンドリーに呼んでしまった。
その上、教皇の顔すら知りませんでしたというのがバレてしまった。
道を歩いている老人が教皇だと思う方がおかしいだろう。
学園都市に例えるなら、たまたま席を同じにした人が学園都市統括理事会の人間でしたレベルである。

本当に『まさかそんな』という話であった。
反対に悪戯が成功した教皇はとても楽しそうな笑みを浮かべていた。
そんな教皇を、アックアは困ったような表情で見ていた。

「教皇、あまり悪戯をしては可哀想である」

「いや何、ついな。教皇以外で呼ばれたのは久々でなぁ。老人のちょっとした悪戯という事で許してくれ」

反省の色が全く見えないほど教皇は楽しそうに言った。

「相手が教皇では、冗談も冗談ですまされないのである……」

「ふーむ、少し刺激が強すぎたか？　もっとフレンドリーに話をしたかったのだがな」

「自分で機会を潰していては、世話がないのである」

「はっはっは、確かにな」

アックアと教皇の会話を聞きながら優菜はずっと考える。
何故、教皇と気軽に話せるのか。何故、神父服などを着ていないのに咎められないのか。
色々と疑問に思ったが、全てに対して答えが出ることはなかった。

やがて三人は聖ピエトロ大聖堂へ到着する。
歴史的価値の高い世界最高峰の建造物は、中に入るだけで厳粛な気持ちにさせてくれた。
完全に学園都市の人間になりきっていない優菜には、その雰囲気が

とても心地よいと思えた。

「聖ピエトロ大聖堂は初めてかね、お嬢さん」

「は、はい。写真では何度か拝見しましたが、実際に来たのは初めてです」

「はっはっは、別に緊張などしなくてもいい。主の前では、全て等しく平等なのだから」

「はい……」

幾分緊張を和らげながら優菜は言った。
しかし完全にリラックスは出来ておらず、どこか余所余所しい感じでもあった。
その状態のまま暫く歩くと、少し開けた場所に出る。

「お嬢さんもお祈りをしていっては如何かな？」

教皇の言葉通り、その場所は祈りを捧げる場所であった。
何人かの修道女や司教が、主へ祈りを捧げていた。

「は、はい」

教皇に求められては嫌とは言えず、優菜はおっかなびっくりな感じで広場に歩み寄る。
基本的に修道服は黒が多いので、白色の優菜は少しだけ目立っていた。
何人かがジロジロと視線を向けてきたが、その視線に対処できるほど優菜に精神的なゆとりはなかった。

（聖カトリーヌ女学院時代を思い出すのです）

そう思った瞬間、優菜の脳裏に奇妙な光景が浮かび上がる。
全く知らない風景が浮かび上がったのに、何故か懐かしいと思えた。
時間にして僅かな時間、しかしその風景を見た後の優菜の心は驚くほど平静であった。
一切の迷いや邪念が消え去り、明鏡止水のように心を澄ませていた。
その状態で優菜は祈る。

その姿を見て誰もが息を飲んだ。
今までの自分の祈り方が恥ずかしいと思えるほど、完璧にそして美しい祈り方だった。
祈りという基礎的な事なのに、どうしてこれほど差が生まれるのだろう。
一流の芸術家が書き上げたと言っても頷けるほど、祈りの姿は一枚の絵として成立していた。
そんな優菜を遠くから見ている人物が二人。

「中々様になっているではないですかねー」

「はん、学園都市の人間にしちゃーやる方だね」

テッラとヴェントであった。
アックアが連れてくるといって出て行ってから、それなりの時間がたった。
もうそろそろと思い、ヴェントとテッラは聖ピエトロ大聖堂から出ようとした。
そこへ、たまたまこの場面に出くわしたという訳である。

「そうですねー。祈りが無様でしたら異教徒として処断した所でしたねー」

「学園都市にいるけど、異教徒ではないからな。あのガキが神の教えに反さないと処断出来ねぇっての」

「それにフィアンマがえらくご執心ですからねー。何かに利用しようと考えているのでしょうねー」

「科学の者なんて全部殺せばいいんだよ」

吐き捨てるように言うヴェントだが、反対にテッラはどこか楽しそうな表情であった。

「『使えるモノ』と『使えないモノ』。それぞれを取捨選択した後でも問題ないのです。フィアンマが利用価値があると見たなら、それは『使えるモノ』という事ですしねー」

「……ふん」

テッラの言葉を頭の中で理解していながらも、ヴェントの不満気な表情は変わることがなかった。

実は同志なヴェントさん

祈りを捧げている優菜は、周りが見えないほど完全な瞑想状態だった。
真横を誰かが通り過ぎようと、司教や枢機卿の十字架が耳障りな音を立てようと。

その姿を見たアニェーゼ部隊の一人が、まるで吸い込まれるかのように優菜の元へと歩み寄る。
歩み寄った修道女はそのまま膝をつくと、優菜と同じように祈りを捧げる。
一人、また一人と、誰も命令されていないのに。

その姿を見たら、同じように祈らずにはいられないという強制力があるかの如く。

気が付いたらアニェーゼ部隊の全員が集まっていた。
流石に二百五十人も入れば窮屈だが、そんな些細な事を気にする様子は全く見受けられなかった。

この光景を目撃した人物は後に語る。
これ以上にないほど純粋な祈りを見た、もしカメラを持っていたら写真に収めようと考えただろう。
だが、きっと収める事など出来はしない。何故なら、シャッターを切る時間すらもったいないからだ。
そんな時間があるなら、もっとこの光景を目に焼き付けようと思うだろう。

永久に続くと思った時間、だが永遠に続くことなどない。
いつかは終わりがくるように、優菜もまた瞑想状態が解け始めていた。
はっきりと意識が戻ってくると、まず最初に気付いたのは自分が囲まれているという事。
だがすぐに気付く。周りを囲まれているのではなく、単に一緒に並んで祈りを捧げているだけだという事に。

（アニェーゼさん？）

チラリと横を見ると見知った顔のシスター、アニェーゼが一心不乱に祈りを捧げていた。
反対側に視線を向けると、同じような感じでルチアが祈りを捧げていた。
そこで優菜は気付く、自分の周りにいるのはアニェーゼ部隊だという事を。

（ええと、どうしましょう……）

気が付いたら何か大変な事態になっている事に、優菜は軽いパニックを起こす。
例えるなら目が覚めたら見知らぬ土地に放り出されていた気分だ。
そろそろ終わりにしたいと思った優菜だが、残念ながらそのタイミングは一向に掴めなかった。

どうしようかと何度か思案した後、普通にたてばいいのだという結論に至る。

そうすれば、祈りは終わったと思ってくれるだろうと優菜は考えた。
急に立って立ちくらみを起こさないよう、優菜はゆっくりと静かに立ち上がる。

優菜が立ち上がった事に気付いたアニェーゼたち。
何人かが優菜へ視線を向けていたが、それらを無視して優菜は片手をかざす。
その瞬間、まるで示し合わせたかのように、アニェーゼ部隊全員が優菜の方に体を向けた。
その光景を見て優菜は背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

（いえ、別に何もしませんから～）

本人は『祈りは終わりました』というつもりだった。
なのに気が付いたら、何か一言を言わなければならないような雰囲気になっていた。

優菜が腕を少しだけ動かす。
それに呼応するかのようにアニェーゼ部隊の視線が動く。
絶体絶命、ある意味究極のピンチ。

（教皇様ならこのような騒ぎを許さないはず！）

一類の望みをかけて優菜は教皇を盗み見る。
しかし先ほどまでいた場所に、教皇の姿はなかった。
逃げられた、援軍の期待が出来ないと理解した優菜は孤立無援状態だった。
パニックが優菜の思考を支配しかけた時、ある一つの事が脳裏に浮かび上がった。

（そう！　来年の抱負を述べればいいのです！）

何故そんな考えが思い浮かんだのか、おそらく本人すら理解していないのだろう。

しかし方向性が見えたせいか、優菜は先ほどのパニック状態から幾分平静を取り戻していた。

「私は主に誓います」

内心冷や汗ダラダラ状態だったが、何とか落ち着いた雰囲気を出せた優菜。

ゆっくりとだが確固たる意志を持って言葉を口にする。

「主にも見放された『不幸な弟』を、今度こそ救ってみせる事を」

胸の前で十字架を切りながら、優菜は当麻の事を思い浮かべていた。

「よし、あいつ気に入った」

「おやおや、先ほどとえらく態度が違いますねー」

テッラの言うとおり、先ほどまでは優菜をそれこそ親の敵のような視線で見ていたヴェント。

しかし誓いの言葉を聞いた後では、その態度は百八十度変わっていた。

「自分じゃなくて弟の為に、か。なるほど、どことなく私に似ていると思ったのはそのせいか」

（ああ、そういえばヴェントは弟好き（ブラコン）でしたねー）

腕を組んで笑みを浮かべるヴェントは、何を隠そう大の弟好き（ブラコン）である。

その辺りに共感を得たんだろうとテッラは思うことにした。

それ以上は、流石のテッラでも理解が出来ないからだ。

理解したいとも思っていないが。

「まぁアックアがすぐに『奥』へと連れてくるでしょう。その時にでも語り合ってくださいねー」

これ以上ここにいても無駄と判断したテッラは、優菜を一瞥した後くるりと背を向ける。

ヴェントも同様だったのか、テッラ同様その場を立ち去ろうと考えた。

「さて、フィアンマは一体どんな『お願い』をするんでしょうねー」

そちらの方が興味があると言いたげなテッラであった。

フィアンマのお願いはすぐに知る事となる。

しかしそれはテッラの予想を遙かに越えた『お願い』であった。

優菜の言葉に感動したアニェーゼ部隊は、ますます優菜への信奉を高めていった。
最早信仰といっても差し支えないほどである。
そんなアニェーゼたちに、優菜は困ったような表情で対応するしかなかった。
護衛する人間が、護衛対象を疲労させるとは何とも皮肉だ、そうアックアは思った。

「さて、申し訳ないがちょっと付き合って欲しいのである」

全員への対応を終え、一息ついた優菜にアックアはそう声をかける。

「出来れば静かな所をお願いします……」

満身創痍の優菜は、盛大にため息を吐きながら愚痴をこぼした。
優菜はこの日はちょっとお祈りして、ちょっとアニェーゼたちと会話して、ちょっとアックアと話し合う。
その程度のことだと思っていたが、予想に反してかなり濃い時間ばかりだった。

熱烈な歓迎を受ける、教皇とばったり出くわす、何故か聖ピエトロ大聖堂で誓いの言葉を述べる。

どれもこれも、優菜からすれば予想すらしていない事ばかりだった。

「静かと言えば静かである」

そう言うと、優菜の返事を待たずしてアックアは歩き始めた。
慌ててアックアを追いかける優菜。

暫く無言で歩いていた二人だが、ふとある扉の前でアックアが歩を止める。

「ここである」

「ここ……ですか？」

奇妙な扉だと思った。
芸術的な扉だがそれだけではなく、模様字体に意味を求めているようにも見えた。

「まぁ語るより見た方が早いのである」

そう言うとアックアは扉を開ける。
重苦しい音を立てながら、扉はゆっくりと開き始めた。

そして開ききった時、優菜は中の光景を見て驚きに目を見開く。

「遅かったな」

右側にいるフィアンマが扉の音に反応したかのように視線を向ける。
しかし、そこにいたのは彼だけではない。

「おっせぇっての」

「全くですねー」

左方にテッラが、手前側にはヴェントがいた。
『前方のヴェント』『左方のテッラ』『右方のフィアンマ』。
三人はそれぞれの二つ名に対応した場所に座っていた。

当然、この場合後方……つまり奥側にアックアが座る事となる。

「……何をしているのである」

アックアの声色には驚きの色が込められていた。
それもそのはず、聖ピエトロ大聖堂の『奥』。
その場所に居座る神の右席のメンバーが。

「何ってこたつでみかん？」

即席の畳の上にあるこたつに足を突っ込んでいるなど誰が思うだろうか。

アックアと優菜は目の前の光景にたっぷり十秒は硬直していた。

「あ、俺様もみかんを食うぜ」

「これって手が汚れるから嫌だな」

「はー、お茶が美味しいですねー」

そんな二人を放置して、三人はとても和気藹々な感じであった。
やがて理解が追いついたアックアだが、目の前の光景を幻覚だと思い頭を軽く振る。
しかし、何度やっても目の前の光景は変わらなかった。

「誰の仕業である」

「俺様だぜ！」

重苦しくため息を吐いたアックアに対して、自信満々にフィアンマは答えた。

アックアはもう一度部屋の中を見る。

西洋風の建物にミスマッチすぎる畳とこたつ、その上にみかんかごが置かれていた。

どこから用意したのか、こたつより少し後ろには壁紙らしき紙がつり下げられている。

富士山の上に『忍』と書かれている壁紙は、激しく間違っている気にさせてくれた。

その他にも微妙な間違いがあり、全体的に日本文化を勘違いした西洋人という印象を与えてくれる。

「は、はは……ウィリアム様。こういう時はどう言えばいいのでしょうか」

「……私に聞かないで欲しい」

はぁっと二人揃ってため息を吐く。

「おい、寒いから早く中に入れ」

そんな二人の気持ちも知らず、フィアンマはみかんを食いながら苦言を口にした。

その後、結局全員がこたつに入るという事で落ち着いた。
こたつ自体はそれなりのサイズがあり、一方に三人ぐらい入ってもかなり余裕があった。

「さて優菜よ、俺様がお前を呼んだのは他あちぃ！」

薄く笑いながら語るフィアンマだったが、最後まで言う前にお茶をかぶった。
勿論、かぶせたのはアックアであるが。

「今のはフィアンマが悪いですねー」

「ダメダメだな、フィアンマ」

二人からもだめ出しをもらったフィアンマだが、本人は余り気にしていなかった。

「俺様にお茶をかぶせるとはいい度胸だアックア」

「……下の名前を呼ぶのなら、せめて一言断りをいれるのである」

「あ、あの……私は別に気にしませんから」

一触即発になりかねない二人に、優菜はおずおずとした雰囲気で声をかける。
二人も本気でなかったのか、その言葉で大人しく引き下がった。

「まぁいい、呼んだのは他でもない。ここで『あるモノ』を作って欲しい」

「あるモノ？」

優菜の言葉にフィアンマはその通りと頷く。

「ある文献を読んだ時、俺様は酷く感銘を受けた」

「それはとても素晴らしき姿、そしてとても心に響く形だった」

「是非、それを貴様に作ってもらいたい」

有無を言わせない瞳をしながらフィアンマは語る。

その表情から、答えはイエスの一択しか許さないという事が読みとれる。

その視線を受けて優菜は思わず唾を飲み込む。

ゴクリという音がやけに大きな音と思えるほど、優菜はフィアンマの空気に飲まれていた。

「そんなモノを私如きが作れるのでしょうか？」

ともすればとんでもないモノを、作らされるかもしれないと思った優菜。

そんな優菜を見てフィアンマはニヤリと笑いながら言った。

「何、貴様……というよりは日本人じゃないと作れないな」

「日本人でないと？」

「そうだ」

満足げに頷いたフィアンマは、薄く笑いながら優菜に作って欲しい『あるモノ』の名を告げた。

「上条優菜。貴様……鍋料理を作れ」

意外と常識派なテッラさん

「上条優菜。貴様……鍋料理を作れ」

フィアンマがそう言った瞬間、三方からフィアンマめがけてものが飛んできた。

湯飲み、みかん、せんべいらしきモノ。

別の意味でダメージを受けそうなものばかりだった。

「いってぇ！　貴様ら、俺様に向かって何てモノを投げる！」

流石に至近距離でそんなモノを投げられるては、フィアンマも対処が出来なかった。

盛大にみかんを顔面にもらい、せんべいらしきモノが顔にへばりつく、

最後のトドメといわんばかりに、湯飲みが顔面に叩きつけられた。

「そんな下らない理由で彼女を呼んだのか？」

「日本人と言えば鍋だろ？」

何故か自信満々に答えるフィアンマに、アックアは自分の血管が何本か切れる音を耳にした。

「鍋料理とか何考えているの？　つーか材料とかねぇだろうコラ」

「今年の献金は一ドル多めにいれるよう教皇に言っておいた」

「そのお金で材料購入ですか。信徒のお金をなんと考えているので

すかねー」

「俺様は二十億人の最終兵器だからな！」

一体何処からその自信が生まれてくるのか。

激しく謎に思った優菜だが、答えを知ろうとも思わなかった。

何となく知ったら知ったで余計に疲れそうだと思った。

「あの……フィアンマさん？」

「俺様の事はフィアンマ様と呼べ。もしくはご主人様でもいいぞ。個人的にはフィアンマお兄ちゃんを所望する」

「は、はぁ……えっと、フィアンマ様？　先に申しておきますが鍋料理と言われましても何をご所望なのです？」

「何故疑問形が入る。まぁいい、何をと言うのはどういう意味だ」

言葉の意味が分からなかったフィアンマは優菜の言葉に首を傾げる。

その姿を見て、優菜はフィアンマが鍋について何も知らない事を理解する。

「日本の鍋料理は代表的な物から地方を合わせて百種類以上あります。更に各家庭で味付けや食材もバラバラですので……」

「つまり？」

「……鍋料理だけでは、漠然としすぎて作れません」

その瞬間、フィアンマはおもちゃを取られた子供のような表情をす

る。
何故か正論を言った優菜が悪いことをいった気分にさせるほど。
しかしショックを受けたのはフィアンマだけで、他の三人は特に影響は出なかった。

「流石食べ物に関しては世界でもトップクラスの日本人ですねー」

みかんを食べながらテッラが呑気にそう言う。
ヴェントとアックアは元から興味がなかったのか、せんべいらしきものを食べていた。
ちなみにアックアはうまくみかんが剥けなかった。
『聖人』の力のせいで、力加減が上手くいかずみかんを握り潰してしまうのである。

「出汁をとったりする時間もありませんから、水炊きが一番ベターですかね」

「何でもいい、俺様は鍋料理が食べたいのだ。貴様に全権を委ねる」

気持ちを切り替えたフィアンマは、髪をかきあげつつそう言った。
フィアンマの全権を委ねるというのは、教皇すら顎で使える事を意味する。
しかし優菜にはフィアンマの立ち位置が分からないので、単に鍋奉行に選ばれただけと思っていた。

「材料や調理場は隣の部屋にある。何でも好きに使っていい、旨い鍋料理を頼むぞ」

親指を立てつつフィアンマは告げた。

優菜が隣の部屋へ移動して暫くした頃、おもむろにフィアンマが口を開いた。

「さて、ここで『神の右席』緊急会議を開く」

だがフィアンマの言葉に反応する人は誰もいなかった。

「アックア、そこのせんべい取って」

「それぐらい自分でとるのである。これでいいか？」

「緑茶も捨てがたいですねー」

「テッラ、すまないがみかんを剥いてほしいのである」

「もぐもぐ……せんべいって案外歯ごたえがあるわね」

各自が好き勝手な事を喋り、誰もフィアンマの話を聞こうとは考えていなかった。

「おい貴様ら！　俺様が会議を開くと言ってるんだぞ！」

「私、欠席で」

「同様である」

「私も同じでお願いしますねー」

取り付く島もないとはこの事を指す。

余りの冷たさに少し涙が流れそうになったフィアンマ。

しかし自分は『神の右席』のリーダーだ、そう思って既の所で耐え切る。

「俺様はリーダーだぞ、貴様らはもっと俺様を敬うべきだろ」

「多分、今日の発言でフィアンマの威厳は地に落ちたと思うわ」

「世界恐慌並に大暴落である」

手加減なしに追い打ちをされた事に、フィアンマは本気で涙が流れそうになった。

壁に向かって体育座りをして、のの字を書きつつ涙をこらえる。

「お前たち冷たいよ」

そんなフィアンマに慰めの言葉をかける人物はやはり誰もいなかった。

一方、隣の部屋に移動した優菜は、部屋に並べられている食材を見

て驚いていた。
世界の珍味と思える物から、小国の小さな村にしかなさそうな食材まで。
どうやって手に入れたと思えるほど、食材がところ狭しに並んでいた。

（何やら色々とありますが、使えそうな食材は少ないですね）

水炊きといっても、何でも入れてはいいわけではない。
下手をすれば食材同士の味が衝突して酷い味になる事もある。

食材が沢山あるから冒険的な鍋もありだったが、失敗すれば目も当てられない。
それにアックアに下手なモノを出す事など優菜には出来ない。
美味しい鍋を味わってほしい、そう考えて材料は定番な物ばかりを選んだ。

（水菜、白菜、長葱、それからしらたきと春菊。肉類は鳥、豚、牛でいいでしょう）

（豆腐は……まぁ大丈夫でしょうね）

（出汁はなし……もしくは昆布だしで問題ないですね。さすがに鶏がらのだし汁は時間が厳しいです）

（小皿にはポン酢、味噌ダレ、胡麻ダレで問題ないでしょう。あ、でも味噌って平気なのかな？）

半分が野菜だが、その辺りは問題ないだろうと考えていた。
食材を集めた優菜は、まず全ての食材を綺麗に洗っていく。

「～♪」

作る理由は色々とアレだが、料理自体は嫌いではない優菜。
楽しそうに鼻歌を歌いつつ材料を切っていく。

（ウィリアム様が多く食べそうですし少し多めにしましょう）

そう言って優菜は材料を少し多めに持ってくる。
但し増えていくのは野菜であって肉ではない所がポイントであった。

「……カセットコンロ。何かとてもシュールに見えるのですが、我慢するしかないですね」

「ここは学園都市じゃないからな」

突然背後から声をかけられた優菜は驚きながら後ろを振り返る。
そこには真黄色の服を着た女性、ヴェントが立っていた。

腕を組みながら背中を壁に預けているヴェントは、優菜をじっと見つめる。
学園都市の住人なのに、何故か完全に憎しみを向けることが出来ない。
幾分、教会世界の住人の匂いもする。
それが優菜に対するヴェントの認識だった。

「何、あんた自分がどこの人間かバレてないとでも思ってた？　あっは、馬鹿じゃねーの」

警戒心を出す優菜に、ヴェントはどことなく楽しそうな口調で言う。

ヴェントは優菜に少しだけ興味を持っていた。
フィアンマが利用を考えてるほどであり、アックアは妙に彼女を気に入っている。
『神の右席』の二人が気に入ってる優菜は一体どんな人物なのか。
少しだけ期待を込めつつ、ヴェントは楽しそうに楽しそうに言葉を発した。

「まぁ警戒するな、と言っても無駄か」

「学園都市の住人と知られて平静を保てるほど私は神経が図太くありません」

「あはっ、じゃあここが『どういう所』か知っていて来たんだ」

「教会世界、十字教最大宗派で世界のトップ。二十億人の信徒を持ち、魔術界の中で最大最強の戦力を持つローマ正教、その総本山であるヴァチカンの聖ピエトロ大聖堂」

自分の事を知っている以上、隠すことに意味はないと理解した優菜は、ローマ正教について知っている情報を口にする。
隠そうとすれば、何をされるか分からないという考えもあった。

「魔術師の存在は知っているのか。ま、アックアの弟子なら知っていて当然か」

「知ったのは最近の事ですけどね」

「それを知っていてなお来たか。無謀というか何というか……だな！」

その言葉と同時に、ヴェントの手に何かが姿を現す。
それは有刺鉄線つきのハンマー。
いつの間にどうやってと、優菜に思考する時間も与えず、ヴェントはハンマーを容赦なく優菜めがけて振り下ろした。

常人では反応すら許さない速度。
しかし体に染み込んだ危機回避能力が思考するより早く体を動かしていた。
グシャッ！　と全てを叩き潰す音が聞こえた後、優菜が立っていた場所が無慈悲に破壊される。

ギリギリの所で避けれた優菜の顔には冷や汗が流れていた。
後コンマ一秒でも反応が遅れれば、グチャグチャの肉塊になっていただろう。
それほどの破壊力だったのだ。

「あらん。回避できると思ってなかったから意外だなオイ」

「……殆ど無意識のうちに……ですけどね」

「それで避けれるんだから大したタマだっつーの」

ハンマーで肩をトントンとしつつヴェントは楽しそうに応える。
その様子から手心が加えられている事を理解する優菜。

「まーいいや。あんたに聞きたいことがあるのよ」

「……それなら普通に尋ねていただければお答えしますよ」

「はん、気に入らなかったらこれで叩き潰すって訳だよ。調子にのるなよ科学側のクソ人間が」

『科学』という単語の時だけヴェントは妙に憎しみを込めている事に優菜は気付く。
まるで科学など消し潰したいと思っているかのように。

「学園都市に住んでいるなら分かるだろが……科学は聖書を冒涜と穢で塗り潰そうとしている」

「聖書を救いの術だと思っている信徒たちの心を嘲り、笑い、そして見下す」

「『そんな書物（フィクション）に固執する奴は馬鹿だ』とな」

「科学は人を守るだぁ？　よく言うよなぁ、破壊しか生まない癖に」

吐き捨てるように言うヴェントの瞳には、科学に対する憎しみの他に何かが宿っていた。
それが何か分からない優菜には、何故ヴェントがここまで科学に憎しみを持つのか分からなかった。

「貴女の言う通り、科学には破壊を生み出す力があります。しかし、それは何処の世界でも変わりません」

「魔術も使い方を誤れば、ただ破壊を生み出すだけの力」

「結局、世界がどうとかではなく、それを使う人の『心』が問題なのです」

「……ふん、口だけは立派だね」

少しだけ気に入らない、だけどとても楽しい。
そんな表情でヴェントは笑った。

「テメェの祈ってる姿を見た時、ニワカ程度の信徒でないのは理解できたよ」

「明らかに弟のために日常的に祈っている、それが私に分かるほどな」

「アックアに聞いた所、あんたが学園都市に移動したのはココ最近の話」

「遠回しになっちまったが、結局聞きたいことは一つだ」

「何で主の教えの対極にいる世界に身を委ねたんだ？」

ヴェントの瞳から、生半可な理由ならこの場で叩き潰す。
そう優菜は読み取った。
だけどそれがなかったとしても、優菜はこの問いに対する答えを適当な気持ちで答える気はなかった。

「……仰るとおり、私が学園都市に来たのは今年の九月です」

「数年前、あの人と出会ってから私はよく祈りを捧げていました」

「弟のためにとずっと……」

ハンマーを肩に預け、ヴェントは黙って優菜の言葉を聞いていた。
その様子から、優菜の回答にどういう思いを抱いているは分からない。

「しかし気付いたのです」

「どれほど祈ろうと、どれほど救いを求めようと」

「結局、救われるのは弟ではない。私の『心』だったのです」

「私はこれだけしている、これだけ祈っている。だから弟は幸せなはずなのだ」

「そうやって自分の心を納得させ、慰めていただけなのです」

テーブルの上に乗っている食材を指でつつきながら優菜は言った。

「だから私は決めました」

「どれほど自分が汚れた存在になろうと、人から蔑まされ続けようとも」

「自らの手で弟が抱えている問題を取り除いてやりたい」

「目に見えない相手であろうと、決して挫けず最後までやり抜こう」

「そう決めたから、弟が生きている科学世界に足を踏み入れました」

「唯一平和に生きていける学園都市に」

「勿論、弟を救える心技体の全てが手に入ったという事もあります」

少しだけ俯いているだけで、ヴェントは何も言わない。

ずっと黙って優菜の言葉に耳を傾けている。

「学園都市に来てから、私は弟を危険から遠ざけるために、色々と手を出し続けました」

「自分に都合のいい道筋を作り、弟にその道筋を歩かせる」

「今思えばなんと傲慢、なんという偽善」

「弟は籠の鳥ではないのに、私は弟をずっとピエロのように扱っていた」

「学園都市に来て間近で見ていたのに、私はまた同じ過ちを繰り返してしまった」

「今までの考えを全て捨てて、自分が本当にするべきことは何かを考えました」

「そしてひとつの結論に達しました」

「私は弟が進む道に対して、時に説教し、時に手助けし、時に支えてあげる」

「それだけでいい。それが私のするべきこと」

「だから私は今も学園都市にいます」

こんな愚痴みたいな回答が気に入らず迷惑かな、そう思いながらも優菜は黙れなかった。

「私は科学が憎い」

暫く静寂が続いたが、ふとヴェントがポツリと呟いた。
囁くような感じだったが、ありったけの憎悪を込めて呟く。

「弟は科学によって殺された」

「だから私は科学を潰したいほど嫌いだし憎んでいる」

「全部ぶち壊して、もっと温かい法則で世界を満たしてやる」

「それが弟を救えなかった私の義務だ」

ヴェントの顔には怒りが刻まれていた。
その表情から、彼女が底知れない憎悪を科学に抱いている事を優菜は知る。
同時に弟への深い愛情も。

「だから私は学園都市を滅ぼすつもりだ」

「残念だよ、折角似たような境遇の奴と知り合えたのにな」

「根底にある想いは一緒なのに、このままじゃ私たちはぶつかり合うよなぁ」

学園都市を滅ぼす、それは当麻が生きていける世界を消し去る事。
ならばヴェントと優菜が激突するのは必須である。
片方は弟の為に学園都市を消し去る、片方は弟の為に学園都市を守る。
破壊と防衛、想いは同じなのに立ち位置は対極であった。

「悲しいことです。でも……」

悲しみに目を伏せた優菜だが、次の瞬間しっかりとヴェントを見据えた。

「貴女が生きてきた間、味わった絶望、悲哀、苦痛、嘆き、支払ってきたモノ、そして滅ぼしてきた敵」

「それらを全てを抱え込んでも、決して譲る事の出来ない信念が貴女の心の中にある」

「それと一緒で、私にも決して譲る事の出来ない信念がある。ただ、それだけ……ただそれだけなのです」

優菜の問いのような言葉に、ヴェントは薄く笑う。

その表情からは、優菜の言葉に満足しているようにも見えた。

「残念だ、実に残念だよ。こっち側に来れば死なずに済んだのになぁ」

とても残念には見えない表情でヴェントは言った。

ヴェントは手に持っているハンマーをしまうと、そのまま部屋の扉の前まで移動する。

「貴女なら分かっていただけると思います」

「……ああ、そうだな」

ニヤリと笑いながら言うヴェントに優菜も薄い笑みを浮かべ返す。

「私の名前はヴェントだ。覚えておきな」

「上条優菜、と言っても既にご存知だと思われますが」

それ以上の言葉は不要、そう言いたげにヴェントはそのまま部屋を出ていった。

扉が閉まる音を聞いた後、優菜はある方向に視線を向ける。

「どうしましょうか、この惨状」

鍋は木っ端微塵、材料を置いていたテーブルは材料ごと破壊されている。

ヴェントの破壊の痕を見て、優菜は小さくため息を吐いた。

隣の部屋で優菜とヴェントが言い争いをしている間、フィアンマは終始薄い笑みを浮かべていた。

元々ヴェントが学園都市の住人である優菜と同じ部屋にいれば、こうなる事は予測済みであった。

それを知っていても尚、フィアンマにはある事を確認する必要があった。

最もアックアがいると面倒な事になると思い、フィアンマはアックアに命を下してあるモノを取りに行かせている。

（ふふん、あの娘。面白い逸材だな）

ヴェントの攻撃を避けた時、優菜の体からはある力が漏れ出していた。
間近にいたヴェントは勿論の事、同じ部屋にいるテッラも気付いた様子はない。

（初見の時に感じた奇妙な力はこれだったのか）

しかしフィアンマはその力を検知していた。
といっても、検知しただけで何の力までは分からなかったが。

（普段は何かで封じ込めているようだな。自覚していないとすると、無自覚のうちに封じ込めているのか）

その時、扉が開く音がフィアンマの耳に届いた。
どうやらヴェントが戻ってきたようだ、そう思ったフィアンマはヴェントの方に視線を向ける。
どことなく満足気なヴェントに、フィアンマは少しだけ驚いた表情をする。

（ほぅ、あのヴェントが殺さなかったか）

（アックアの事があっても、あいつの科学に対する憎悪は相当な物だからな）

フィアンマの視線に気付いたヴェントは、どことなく嫌そうな表情をフィアンマに向ける。
だがフィアンマの表情は、ヴェントの視線を気にしている様子が見受けられなかった。
それもそのはず、フィアンマが見ているのはヴェントではなく、ヴ

エントから感じられる力なのだから。

（くっくっく、しかし凄い逸材だ。あの様な力を持って生まれた事自体、奇跡の産物に等しいだろう）

（魔術業界の学者が知れば、諸手を上げて研究しようと考えるだろうな）

フィアンマは己の右腕を少しだけさすりながら、視線を優菜の方に向ける。

無論、壁があるので姿は全く見えない。

だが彼の目は、優菜の姿がはっきりと見えているかのようだった。

（今はまだ時期早々だ。しかし時期が来たなら利用させてもらおう）

（貴様の『性質がない天使（テレズマ）の力』をな）

愉快だと言いたげな笑みをフィアンマは浮かべていた。

しかし彼の笑みを見たヴェントとテッラはこう評価を下す。

そんなに鍋が楽しみなのか、と。

観光でも、と考えていた当麻だが、よく考えれば言葉の壁がある事に気付く。

（よくよく考えれば、上条さんは英語がさっぱりなのですよ……）

優菜のように何種類もの言葉を駆使する頭脳は、残念ながら当麻にはない。

インデックスとはここでお別れなので、結局当麻はそのままUターンしか選択肢はなかった。

「さって、上条さんは学園都市に戻りますよっと」

「え？」

「インデックスも無事合流できたしな。俺の役目はここで終了って訳だ」

元々観光も出来たらいいぐらいの認識だったので、当麻は観光が出来なくて残念だと思う程度だった。

だが、反対に神裂は内心焦りに焦りまくっていた。

（そうでした。上条当麻の役目はインデックスを無事送り届ける事！　それが終わった今、彼が帰ると言っても何ら不思議ではない）

「お待ち下さい、上条当麻。時間があるのでしたら、オルソラたちに会ってはくれませんか？　彼女たちも貴方と会える事を楽しみにしていますので」

「ん？　でも今日って忙しいんじゃないの？　そんな時に会いに行っても悪いだろ」

何とか引きとめようとする神裂だが、朴念仁の当麻は遠慮するだけであった。

どうするべきか、そう考えたがうまい考えなど浮かぶはずもなかった。

そんな神裂を見てステイルは小さくため息を吐く。

「上条当麻、悪いけどこのままハイさよならは無理だよ。君には少しだけ僕たちに従ってもらう義務がある」

「なんだよ、義務って」

「やれやれ、そんな事もわからないのかね。君は相変わらず頭が弱いようだ」

まるで可哀想な子を見るような目でステイルは当麻を見る。

その視線にイラッと来た当麻だが、無闇矢鱈に怒っても意味はないと思い我慢した。

「インデックスの言葉を疑うわけではないけどね。それでも君たちを調べる必要があるのだよ。ローマ正教と繋がりがある女が護衛を務めているのに、何も調査せずはい終わりはいかないんだよ」

「テメェ！」

激昂する当麻だがステイルはあくまでも冷静だった。

冷静に、だけど有無を言わさない迫力を込めて言葉を口にする。

「これは君たちとインデックスの為でもあるのだよ。この話を『上』が知ったら、インデックスはイギリスに強制送還されてしまう。学園都市での生活は突如として打ちきられてしまうのだよ」

「！」

「何も不思議な事ではあるまい。危険から遠ざけようとするのは、上層部としては当たり前の考え。だからこそ、君たちを調査して問題ないという結論を出さなければならない。まぁ君がインデックスの生活などどうでもいい、というなら調査などしないがね」

「代わりにここで灰になってもらう」

言葉は悪いがステイルはインデックスを思って言ってる事は十分理解できた。

自分の身内を疑われるのは頭にくるが、かといってステイルの考えも理解できる。

結局、反論する言葉を失った当麻は、ただ黙って俯きながら歯を食いしばる以外になかった。

「何、すぐに終わるよ。僕だって君と長く一緒にいたいとは思っていないからね。念のため、インデックスへの尋問も行おう。それは僕がする、神裂は上条当麻の方を頼むよ」

「む～、すているの言葉は理解できるけど、私はお腹がすいたんだよ！」

「なら食事も兼ねて尋問といくがいいかね？　勿論、お金は大丈夫だよ。何せ」

その言葉と同時にステイルはカードを取り出す。
といってもルーンが刻まれたカードではない。
世間一般的にはクレジットカードに分類されるカードだ。

「イギリス清教が支払う事になっている。だから、君は遠慮する事はないよ」
注）ローラからカードをくすねました。支払うのはあの馬鹿女だから遠慮することない☆

「ほんと！　すている大好きなんだよ！？」

満面の笑顔でステイルの手を握りながらインデックスは言った。
不意をつかれた言葉に、ステイルは自分の顔がだらしなくなっている事を理解する。
その上、インデックスの笑顔が眩しすぎたステイルは、直視する事が出来ずに顔を背ける事しか出来なかった。

「ま、まぁそういう事だ。尋問場所は特に指定はない。神裂は君が一番いいと思っている所へ連れて行くがいい」

「（まさかステイル、そこまで計算して！）分かりました。これも上条当麻への疑いをなくすため。あらぬ誤解を『上』が持つ前に、貴方の身の潔白を証明してみせましょう」

「……分かった」

従うほかない当麻には、もとより選べれる選択肢は存在しなかった。
悔しそうに顔を滲ませながら、神裂に付き従う。

この時、当麻の頭がもう少し回れば、ステイルの真意が理解できただろう。
インデックスの護衛を取り決めた時期は、もう数カ月前の話の事だ。
その時に『二人の経歴』を、イギリス清教が全く調べていない事がありえるだろうか、と。
何故、今の時期になってわざわざそれを問題視したのか。
結局最後までステイルの手のひらで転がされた当麻であった。

（これで女子寮に連れていっても問題ありません）

心の中でステイルに感謝しつつ、神裂は己の拳を力強く握った。

当麻、優菜の二人がそれぞれ動いている頃。
上条家では、何もせずただぼーっとする沈利たちの姿があった。

「退屈だねー」

やる気なさげにだらけている沈利がポツリと呟く。
理后など目を開けたまま寝ているし、フレンダはフレメアの髪を弄りたおしているだけだった。
最愛は映画のパンフレットを見ているが、さっきからページが全く動いていない。

「当麻お兄ちゃんが家に一日いない状態なんて、超ありませんでし

たしね」

「あのお仕事って意外と報酬が多いって訳よ」

インデックスの護衛を務める当麻には、仕事の報酬が学園都市から支払われている。
無論、超能力者である沈利や大能力者である最愛から見れば雀の涙程度の額である。
しかし奨学金が少ない当麻にとってはかなりの金額であり、現金な当麻は護衛だけは喜んで仕事をしていた。
最も、そのついにで魔術事件に巻き込まれるのでたまったものではないが。

「暇ならフレンダお姉ちゃんに、大体、この街を案内して欲しいかも。にゃあ」

「ん～？　フレメアもこの街に住んでたんでしょう？」

「大体、あすなろ園からそんなに出れなかったの」

「あーなるほどね」

「よっし、じゃあフレメアにこの街を案内しましょうか」

やる事が見つかった沈利は、少しだけ気合を入れながら立ち上がる。

「足はどうするって訳よ？」

「用意するわ、ちょっと待ってなさい。貴女たちは外出する準備でもしてなさい」

そう言うと沈利は携帯電話を取り出し特定の番号をコールする。
しかし五コールしても、相手には繋がらなかった。
イライラとし始めた沈利だが、フレメアが怯えるので我慢我慢と自分に言い聞かせた。
そんな沈利を嘲笑うかのように、相手は十コール目でやっと電話を取る。
その頃には沈利の怒りメータは完全にレッドゾーンへ突入していた。

「はーまづらぁ！！　ぶち殺されたくなかったら五分以内にうちに足持って来い！！」

電話の向こうから浜面の泣き言が聞こえた沈利だが、全部無視して問答無用で電話を切る。
一つ小さなため息を吐いた後、沈利は時計を見て時間を確認する。

「昼前かー。どうせなら外で御飯食べる？」

「超賛成です」

「大体、問題ないかも。にゃあ」

「よっしゃ、それじゃあ各自準備するように」

沈利の言葉に従い、全員が各自外出準備にとりかかった。
最も、あまりめかしこむ必要もない沈利たちなので、それほど準備に時間はかからなかった。

その後奇跡的に五分以内到着を果たした浜面。
だが、シャケ弁がない事と三コール以内に出なかった（トイレにい

っていた）事に沈利からの鉄拳制裁を貰う。
更には当麻に酒を飲ませたことに、最愛から同じように鉄拳制裁を貰った。
心と体がズタボロの状態で沈利たちをファミレスに送る。
その後、浜面はフレメアの存在を知っていた事が発覚した。
名前は知らなかったという浜面の理由は当然ながら却下され、フレンダから盛大に制裁を貰うはめとなる。

「不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

哀れ浜面、頑張れ浜面。いつか君にもいい事があるさ、多分。

クリスマスイルミネーションに彩られた大通りを一人の女性が歩いていた。
街を歩く人の殆どがその女性に視線を向けている。
しかし女性は気にする様子もなく、我が物顔で道を歩いていた。
ギリギリ十代に見える顔、巫女装束と千早という衣装姿、銀色に輝く髪。
つまりオートクレールであった。

「どこに逃げたのです、フラガラッハ」

そう呟くオートクレールだが、勿論本気で探すつもりは毛頭ない。
そもそもフラガラッハが逃げた原因は、二人の主人であるアクゼリュスにあった。

二十四日に甘味ツアーと言う名の拷問を受けた二人。
フラガラッハは倒れ、オートクレールも胸やけコースという凄惨たる結果であった。
もう百年は甘いモノを見たくない、そんな気持ちの二人にアクゼリュスは笑顔で告げた。

『今日は今日で限定甘味モノがあるから行くわよ』

オートクレールは思考硬直したが、フラガラッハは行動が早かった。
敵前逃亡、つまり全力で逃げたのである。
その逃亡姿を見たオートクレールは、すぐさま追いかける事をアクゼリュスに告げる。
勿論、本気で捕まえる気などなく、甘味モノから逃げるための口実であった。

そして現在街を歩いているわけである。
薄く笑って送り出すアクゼリュスを見て、全て見抜かれている事は理解していた。
多分、こんな反応を示す二人を楽しんで見ているのだろう。
その事にため息を吐きつつ、オートクレールは道を歩いていた。

「初春！　あの人すごいよ！」

「さ、佐天さん！　指を指しては失礼ですよ！」

「でも綺麗だと思います」

「綺麗ですが珍しい格好ですの」

「いや、珍しいというか……正直浮いている？」

何やら自分の格好で盛り上がっている少女たちの声がオートクレールの耳に届く。
どうでもいいと思ったので、オートクレールは声の主に視線を向ける事なく歩を進めた。

（フラガラッハの反応から、学園都市の外には出てないはず。アレは馬鹿ですが、アクゼリュス様から遠く離れるほど愚かでもない）

所在はずっと検知しているが、なるべく時間を稼ぐつもりでいた。
フラガラッハを捕まえれば、自動的に甘味（ごうもん）ツアーへ参加しなければならなくなる。
とにかく一日、最低でも半日は潰すつもりでいた。

（恐らく私の動きから、フラガラッハは私の思惑を理解しているはず）

（さて予定調和で動きますか。最も、アクゼリュス様の事ですから、私たちの考えなど見抜いているでしょうね）

「おっひょー、姉ちゃん。一人で寂しく歩いているのー？」

「暇なら俺たちと遊ばないー？」

歩を進めるオートクレールの前にガラの悪い男たちが道を塞ぐように立つ。
数にして八人、恐らくスキルアウトの部類に入る連中と思われた。
進行が塞がれたので、オートクレールは歩くのを止める。

（しかしフラガラッハは少々頭が弱い。実は本気で逃げている可能

性も捨て切れない）

オートクレールは進行が塞がれたから止まったわけではない。
単に考えるために足を止めただけだった。

「姉ちゃんにもいい思いをさせてやるからよー」

「そーそー、俺たち実は大能力者なんだぜ？」

オートクレールが歩を止めた事に気を良くしたスキルアウトたちは口々に言葉を発する。

（と言っても下手な事をして、捕まえては元も子もない。加減を考えなくてはいけないとは……）

流石に全く反応を示さないオートクレールを見て、スキルアウトたちは眉をひそめる。
やがて一人が気付く、そもそも自分たちを目の前の女は認識すらしていないという事に。

「おいおい、ネーちゃん。ガン無視ってのは酷くない？」

「あぁ？　無視してるのかよ、コイツ」

次々とスキルアウトたちに怒りの表情が刻まれていく。
無視されて平静を保てるほど、スキルアウトたちは心にゆとりがあるわけではなかった。

（どう動くか見てみたいので、フラガラッハを少しだけ追い詰めてみますか）

「ちょ、あれってまずくないですか！？」

「そうですわね。婦女にあの様な行為は見過ごす訳にはいきませ…」

少女が言葉を口にする途中、突如として何かが目の前に落ちてきた。
落ちてきたものは、先程オートクレールを囲んでいたスキルアウトの一人であった。

「おぐっ……あが……」

口から盛大に血の塊を吐き出して悶え苦しむ姿は尋常ではない。
慌てて視線を現場に向けると、そこにオートクレールの姿はなかった。
代わりに、足元にいるスキルアウトと同じように、血を吐き出して倒れているスキルアウトの姿があった。

「と、とりあえず救急車を呼ぶんですの！」

倒れているスキルアウトの位置を確認しつつ少女は叫んだ。

その後、運ばれた病院先の医者は奇妙な事に気付く。
外傷が一つもないのに、臓器が無残に破壊されている事を。

女子寮という隔離場所

当麻は神裂に案内された場所で呆然としていた。
当麻の意識では、調査と言うからにはそれなりの施設で行うと思っていた。
しかし目の前の建物からそんな雰囲気は感じられない。
どちらかというと寮向けの建物に見えた。

「えーっと、神裂さん？　上条さんの目にはこの建物は寮のように見えるのですが？」

「間違っていません。ここは『必要悪の教会（ネセサリウス）』の女子寮です」

「……ナゼニジョシリョウナノデセウカ？」

「尋問を受けてもらうためです」

「いやいやいや、女子寮って女の子ばっかりだろう！？　そんな所に上条さんみたいな男が混じったら問題なのではないでしょうか！？」

まさか女子寮に連れてこられるとは思っていなかった当麻は、神裂と女子寮を交互に見る。
その顔は、冗談ですよね？　と尋ねているようにも見えた。
しかし神裂はあくまで冷静に言葉を口にした。

「貴方の右手のせいです。貴方は知らないかもしれませんが、大聖堂などは基本的に術式が組み込まれています」

神裂は冷静な表情をして最もらしい事を口にする。
単に女子寮のパーティに招こうとしただけだが、そのままでは納得してくれなさそうであった。
そこで、幻想殺しの事やその他の理由をつけて招こうと考えた。

「当然、高価な霊装が使用されています。誤って幻想殺しで破壊すると、とんでもない賠償金を請求されますが？」

「……具体的にいくらぐらいでせうか？」

顔をひきつらせながら当麻は神裂に確認する。
神裂は顎に手を当てて少しだけ唸りながら答えた。

「そうですね。一生聖ジョージ大聖堂で、陽の光を浴びずに働き続ける事になりますね」

「はい！　ここでお願いいたします！」

聖ジョージ大聖堂などイギリス清教の重要な拠点は、各自防衛魔術が組み込まれている。
しかし幻想殺しは、どんな強固な防衛魔術も簡単に破壊してしまう。敵味方関係なく破壊してしまう幻想殺しは、こういう時には不便な能力なのである。

「まずはここでお待ち下さい。言っておきますが、逃げたら余計な疑いがかかりますよ」

「いや、逃げないけど早めにお願いします……」

女子寮の前で一人放置される事は、当麻の精神的にきついモノがあ

った。
そんな男心がわからない神裂は、少しだけ首を傾げた後女子寮へと入っていった。

「ああ、不幸だ……」

残された当麻は空を見上げながらポツリと呟いた。

「……という理由をつけて連れてきました。少々面倒ですが協力お願いします」

女子寮に戻った神裂は、パーティの飾り付けをしているシェリー、オルソラ、五和の三人に事情を説明した。
最初は意味が分からなかった三人だが、最後まで聞いて後小さくため息を吐いた。

「面倒な男だな、上条は」

「まーまーなのです。あの方は遠慮深いところがあるのでございます」

「どうするおつもりですか　女教皇（プリエステス）様？」

全員が神裂に視線を向ける。
その視線を受けている神裂は、目を瞑って何か思案しているかのよ

うだった。
やがてゆっくりと目を開けると、全員を見据えながら口を開いた。
「まず……」

聖ジョージ大聖堂の近くにあるランベスの宮。
テラスに設置されたテーブルの椅子に、ローラは優雅に座っていた。
「幻想殺しの少年が到着したか」
部下からの報告を受けたローラはニヤリと笑みを浮かべる。
その笑みを見た部下は、当麻に少しだけ哀れみの気持ちを抱いた。
こういう顔をする時、相手はロクでもない事に巻き込まれるからだ。
（幻想殺しの少年……せめて生きて帰るのだぞ）
部下を放置して高笑いをするローラを見ながら、部下はそう心の中で祈った。
「さぁ！　あれを持ってくるのよ！？」
呆れている部下を無視して、ローラはあるモノを持ってくるよう部下に要求した。

「うっ！？」

背中に寒気を感じた当麻は、思わず自分の体を抱きしめる。

（なにやら不幸の気配がしましたよ！？）

長年不幸まみれの当麻は、多少なりとも不幸の気配を感じられるようになっていた。
最も、感じられてもロクに回避出来ないが。

「お待たせしました、上条当麻。どうぞ入って下さい」

暫く辺りを警戒していると、神裂が扉を開けながらそう言ってきた。
一瞬ビクッとなった当麻を訝しんだ神裂だが、理由を聞くと嫌な事が起こると思い何も尋ねなかった。

「さぁどうぞ」

「お、お邪魔します」

おそるおそる当麻は女子寮へと入る。
当麻が入ったのを確認した神裂は静かに扉を閉める。
しかし次の瞬間、メキメキメキと危険な音が扉から聞こえた。

（これで外敵からは安心です。後は上条当麻を説得するだけですね）

物理的に扉を破壊して機能しないようにしたのだ。
魔術的なロックは幻想殺しで簡単に破壊されるためであろう。
だから物理的な防御で対応したようだ。
全てが終わった後の神崎の目は、さながら獲物を追いつめた猛獣のようだった。

「へー、結構シンプルな作りなんだな」

女子寮というからにはもっと華やかなものをイメージしていた当麻。
だが、実際は普通の寮と殆ど大差がなかった。
学園都市と違い、随分と古い感じがしたが、これはこれで味があると思った。

「こんにちはでございます」

ぼーっと辺りを見ていると後ろから声をかけられた。
その声から、一体誰かわかった当麻は笑みを浮かべつつ振り向いた。

「おう、オルソラ。こんぶはぁ!?」

「昆布？　でございますか？」

警戒なしに振り向いた当麻だが、オルソラの格好を見て思わず噴き出した。
前と会った時同様、全身ぴっちり着込んでいるオルソラだが、一つ

だけ違うことがあった。
オルソラは今、修道服を脱いでインナーだけで立っていたのだ。
ウィンプルもフードも付けておらず、オルソラの綺麗な金髪がよく見えた。

インナーは白色でオルソラによく似合っていると思ったが、ある危険な事があった。
修道服を着ていれば、ある程度スタイルが隠される。
それでも豊満な体から発される色気は隠し切れないが。

しかしインナーは体にぴったりとフィットしているので、オルソラのスタイルが一目瞭然であった。
特に上半身が危険で、動く度に色々な物が色々と揺れていた。
つまり修道服を脱ぐだけで、オルソラの破壊力は格段に向上したのだ。

「あーやっと到着したんだ」

オルソラの格好に驚愕（当麻的には大ダメージ）していた当麻に、さらに別の人物が声をかける。
一刻も早くオルソラから視線を外したかった当麻は、これ幸いと声の主の方に視線を向ける。

「お、おう。やっととうちゃがはぁ！」

話を合わせようと適当な事を口にした当麻だが、最後まで言う前にやはり噴き出してしまった。
当麻の奇妙な言葉に眉をひそめる人物はシェリー＝クロムウェルだった。
しかしやはり格好が危険だった。

スケスケのシースルーを二重に着ているだけの格好。
大事な部分が見えないのである意味鉄壁ガードなのだが、普通の高校生である当麻には目に毒すぎた。

「おまっ！　何て格好してるんだよ！？」

「うるせぇなぁ。ここは女子寮だぞ、どんな格好しようと勝手だろ」

言われてみれば、と思った当麻だがすぐに頭を振ってその考えを消し去る。

「いやいやいやいやいや、いくら女子寮でもその格好はないだろ！？」

「楽なんだよ、色々と」

自信満々のシェリーを見ていると、何か自分が間違っている気になってきた当麻。
これ以上言っても受け付けてくれなさそうだし黙ることにした。

「尋問はこちらで行います」

そう言って神裂は当麻をある部屋へと招き入れた。
そこは小さな飾り付けが施された部屋だった。
華やかさも豪華さもないが、一生懸命飾り付けをしたという感じがあった。
とても家庭的で思わず気持ちが暖かくなる。

「この席に座っていて下さい。何、尋問といっても書類確認と軽いアンケートだけですよ」

当麻を席に案内すると、神裂は対面側に座る。
だが、何故かシェリーとオルソラも神裂と同じように席に座った。

「あのー、何故お二人は当然のように座っているのですか？」

「私たちも尋問するからでございます」

「神裂だけだと色々とアレだからね。私たちがクロスチェックするって訳だ」

ニコニコと後光が見えそうなぐらいの笑顔を浮かべるオルソラと、どこか悪戯を企んでいる感じのシェリー。
嫌な予感が段々と現実的になった当麻に、横から誰かの手がにゅっとのびてきた。

「使います？」

声の方に視線を向けると見知らぬ女性がおしぼりを手に笑顔を浮かべていた。

「あ、ああ……」

何故おしぼりなのか疑問に思った当麻だが、聞いてはいけない気持ちになり黙って受け取った。
おしぼりを受け取ると、女性は頬に片手を当てながら立ち去った。
どことなく嬉しそうに見えたのは、気のせいかなと思った当麻である。

「んっ、では尋問を始めます。まずこの資料に目を通して下さい」

一つ咳払いをした後、神裂は当麻に書類を手渡す。
書類を受け取った当麻は、それに視線を落として中身を確認する。

「これ、俺の情報……？」

「イギリス清教が貴方について調べた報告書です」

書類の内容は当麻に関する個人情報であった。
身長、体重や家族構成、住所、学歴、現在通学している学校名。
友好関係、一日の平均タイムスケジュールなど、これまでの経歴がびっしりと書かれていた。

「この情報に誤りがないか見て下さい。自己申告制ですが、私たちに嘘は通じませんよ」

「いや……嘘を言っても仕方ないけどよ……この彼女の有無とか女性経験は何かの嫌がらせですか？」

両方ともゼロという事に心の涙を流した当麻は、思わず愚痴を口にする。

「し、仕方ないでしょう！　そういう事にも注意を払う必要があるのですから！？」

「俺が悪かったから、落ち着いて！」

ぜーぜーと肩で息をする神裂を何とか宥める当麻。
神裂が過剰に反応したせいで、却って冷静になる事が出来た。

（何で慌てるんだ？　はっ！　もしかして上条さんをからかうおつもりか！？）

あり得ないほど勘違いした当麻は、書類を隅から隅までチェックする。

間違った情報が書かれていた場合、それが正式採用されてしまうのだ。

不名誉な事が書かれていないか、細心の注意を払って内容をチェックする。

「アンケートはこちらでございます」

じっくり見ているとオルソラがボードに張り付けたアンケート用紙を手渡してきた。

「ありがとう、オルソラ」

礼を述べつつ受け取った当麻は、アンケート用紙に書かれている内容を確認する。

「えーっと『大きな女性は好きか』、『宗教やっている女の子は大丈夫？』、『私、地味じゃないですよね？』……」

上から三つ見ただけで、とんでもない内容のアンケートだと理解した当麻。

しかし神裂たちはアンケートを受け取った、当麻の回答に期待で胸一杯の様子であった。

「おい！　なんだこりゃあ！　これのどこがアンケートなんだよ！？　特に最後の方はアンケートじゃねぇだろう！？」

「やかましいこのド素人が！！　さっきから聞いてりゃベラベラと！！　黙って書くって出来ないのかよ！！」

「ゴチャゴチャ言ってねぇでさっさと書けよこのクソ野郎！！」

思わず突っ込んだ当麻だが、それが神裂とシェリーの何かに触れたようだ。

当麻以上に大声で怒鳴り出した二人を見て、当麻は即効でヘタレモードにチェンジした。

（ああ、不幸だ……）

どうしてこうなった、そう思いながらペンを走らす当麻だった。

愛されたい気持ち

何か色々と精神的ダメージを受ける報告書だった上に、アンケートを朗読される始末。
笑いを堪えつつ読む神裂、何故か嬉しそうな表情のオルソラ、ニヤニヤしながら聞くシェリー。

年上のお姉さん好きな当麻でも、流石にこんな羞恥プレイは御免被りたいと思っていた。
青髪ピアスなら喜んで変われと叫ぶだろうが。

「不幸だ……」

三人からの攻撃に当麻は完全に参っていた。
しかし当麻の不幸は、本当の不幸という訳ではない。
世間一般的には幸運（ラッキースケベ）と呼ばれていた。

「……以上です。じ、尋問の……くく……結果から貴方は無害……です」

何が楽しいのか問いただしたかった当麻だが、問いただせばもっとダメージを受けると思い黙って聞いていた。

「うぅ……上条さんはライフゼロですよ」

「なんだよ、別にいいじゃねぇか。あーそうだな、女性の好みが『エプロンが似合う寮管理人』だもんなぁー」

「ぎゃー！　もうやめて！」

頭を抱えてうなる当麻をシェリーはニヤニヤしながら見ていた。
オルソラから渡されたアンケート、それには八割、否、九割九分が女性の好みなどについてであった。
最初は嘘を書こうとした当麻だが、それは許されなかった。
神裂は七天七刀を、シェリーはオイルパステルを手にして当麻を見ていたのだ。
嘘を書けばここで斬る、無言の威圧を感じた当麻は、結局全部素直に答える他なかった。

「あらあら、大変でございます。お詫びに夢を一つ叶えて差し上げます」

そう言うとオルソラは自分の膝や太股部分をはたく。
その行動から、オルソラが何を言い出すか理解した当麻は、逃亡を試みようとした。
しかし、行動に移る前にオルソラが当麻の夢を口にした。

「夢に『膝枕を経験してみたい』と書かれていたのでございます。私の膝でよろしければどうぞご堪能下さい」

両手を広げて迎え入れるポーズを取り、後は当麻の頭を置くだけの状態でオルソラは言った。

（はい、拒否権が消えましたー！　拒否すれば二人から叩き斬られるー！）

アンケートに書いた事を実行できなければソレは嘘を書いたことになる。
そう読みとられる事を恐れた当麻は、冷や汗を流しつつオルソラの

隣へ移動する。

「オ、オルソラさん？　嫌でしたらやめて頂いて結構でせうよ？」

オルソラ本人から断りの言葉を引き出そうとした当麻だが、当の本人は後光すら見えるほどのまぶしい笑顔を浮かべるだけであった。催促なのかわからないが、時々自分の太股をぽんぽんと軽く叩いていた。

「どうぞでございます」

背後からの殺気めいた視線二つと、オルソラからの無言の微笑み。進退窮まった当麻は、おそるおそるといった感じでオルソラの太股に頭を乗せる。

（おっしゃ、これで追いつめるためのの材料は揃った）

（ええ、これで私たちの時も拒否は出来ませんね）

（五和に準備させておいて正解だったな。あいつはこんな光景みたらパニック起こしそうだしな）

（奥手なのが五和の魅力ですが、奥手すぎるのも問題ですね）

（しかし神裂、お前妙に冷静だよな？）

（ええ、覚悟を決めました。私は私が出来る最高の恩返しをするだけです）

（それって開き直ったって言わないか？）

ヒソヒソと当麻の背後で会話しあう神裂とシェリー。
だが、緊張のメーターが振り切れている当麻には二人の声など全く聞こえていなかった。

（やばい！　すげぇ甘くて良い匂いがする。それにめちゃくちゃ柔らかい！　なんで女の子ってこんなに柔らかいの！？）

「うふふ、どうでございますか？」

「ひゃい！　と、とても素敵でございます！？」

「そうでございますか」

パニック気味の当麻は舌を噛みながらも答える。
そんな当麻の頭を、オルソラは優しく優しく撫でる。

（何この魔術……上条さんの幻想殺しでも殺せませんよ……）

オルソラが髪をすいたり頭を撫でたりする度に、当麻の心はとても穏やかになっていく。
その感情に逆らわず身を委ねた当麻は、うっつらと船をこぎ始めた。

「オ、オルソラ……す、すまん。上条さんは……」

最後まで言い切る前に当麻の口から寝息が聞こえ始めた。
完全に眠った当麻からは、少しの事で起きるような気配は感じられなかった。

「あっはっは、寝ちまったようだな上条は」

オルソラの膝の上で寝ている当麻を見ながらシェリーは笑う。
だが、そこに侮蔑や意地の悪い感情は一つも感じられなかった。
ただ愛おしい、それだけが感じられる笑みだった。

「無茶をさせてしまいましたからね。さて、ここはオルソラに任せて私たちは私たちの準備を進めましょう」

神裂もまたシェリーと同じで慈しみが感じられる笑みを浮かべていた。

「ここはオルソラに譲るが、パーティではそうはいかないわよ？」

「あらあら、この方も大変でございます」

「こんなに女から言い寄られて大変な訳ないだろう。男なら役得って奴だよ」

そう言いながらシェリーは部屋から出ていった。
神裂もまた、当麻を一瞥した後に部屋から出ていく。
残ったのは眠っている当麻と、その当麻に膝枕をしているオルソラだけであった。

「うふふ、絶好のチャンスでございます」

そう言うオルソラの笑みは、どことなく悪戯を仕掛ける子供のようにも見えた。

完全に開き直った人間は怖い。なぜなら怖いモノが全くないからだ。
そしてオルソラは今、完全に開き直っているといっても良い。

（膝枕の感触は捨てがたいのでございます。しかし、ここは一計を入れておくべきでございます）

愛する人の重みを感じられる膝枕は、オルソラに恐ろしいほどの中毒性をもたらした。
一生手放したくないと思えるほど、その重みは心地よい感触であった。
悪魔の囁きともとれるその感情を押さえ込み、オルソラは当麻を抱き起こした。
幸いにもぐっすり眠っているので、ちょっとやそっと動かした程度では起きる気配はなかった。
ソファーに座らせた後、当麻の顔がオルソラの胸に埋まるような感じで抱きしめる。

（逞しい体でございます）

当麻のがっしりとした体を、自分の体で感じているオルソラの心臓は五月蠅いほど高鳴っていた。
このままでは当麻を起こしてしまうのではと思えるほどだった。
だけどオルソラはその音に心地よさを感じていた。

（落ち着くのでございます）

そっと当麻の頭に顔を埋めるオルソラ。
トレードマークのツンツンヘアーらしく、少しだけ肌に刺さるよう

な感じだった。
だが当麻の匂いがオルソラにそれらの感覚を麻痺させる。

（贅沢を言えば、貴方様に抱きしめられとうございます）

当麻と出会い心奪われてから、オルソラは日々当麻に会いたい気持ちを募らせていた。
神に仕える身の自分には許されない感情、そう自分に言い聞かせていたが無駄な努力であった。
言い聞かせれば言い聞かせる程、それに反比例して会いたいと思う感情は爆発的に膨れ上がっていくのだ。

会いたい、会って声を聞きたい、その腕に抱きしめられたい。
遂には夢にまで見るほどになってしまい、もはやオルソラ自身ですらその感情が制御が出来なかった。
しかしその感情は、当麻を抱きしめた瞬間影も形もなくなった。
代わりに生まれたのはある気持ち。
もっと抱きしめたい、もっとぬくもりを味わいたい。そんなちょっとした我が侭。
神に仕える身なのにと思ったが、考えに反して体は正直であった。

（神よ、お許し下さい。私はまだまだ半人前でございました）

ずっとこんな時間が続いて欲しい、そう思えるほどオルソラの心は満たされていた。
幸せすぎて明日が怖いとさえ思っていた。

「私の気持ちも知らないで、貴方様は明日には帰られる」

わかっている、これは我が侭な感情だ。

そう理解しても想う気持ちは止められない。
その想いを口にする事を止められない。

「分かっているのでございます。今の私は想いを押し付けようとしているだけ……とても醜い行為でございます」

当麻の頭から顔を離し、オルソラは再び当麻の頭を撫でる。
一回一回丁寧に、愛おしさを込めながら。

「だけど私は決めたのでございます。後悔のないように今日を過ごす事を」

少しだけ頬を赤くしながらオルソラは当麻の体を抱き起こす。
何度か視線を彷徨わせた後、意を決してオルソラは行動に出た。

「ふふふ、唇は貴方様からしていただきとうございます」

その言葉を言い終えた後、オルソラは当麻の頬に軽くキスをする。
そっと触れるだけの挨拶のようなキス。
たったそれだけなのに、オルソラの心は激しくかき乱された。

潤んだ瞳をしながら、恥ずかしそうにはにかむ。
そんなオルソラを当麻は突然抱きしめた。

「きゃっ！」

当麻の思わぬ行動に驚いたオルソラだが、振りほどこうとは思わなかった。
そもそも振りほどくという考えすら浮かばなかった。

「オル……ソラ……」

「は……はい」

動揺しながらも返事を返すオルソラに、当麻はゆっくりと口を開く。
その様子から寝ぼけている事は一目瞭然であった。
しかし当麻の力強い抱きしめに心踊っているオルソラに心の余裕など一つもなかった。

「お前が……不安なら……まずはその幻想を……ぶち殺す……ぐぅ」

一瞬きょとんとした後、オルソラはくすっと笑った。
そしておずおずと当麻の背中に手を伸ばして抱きしめる。

（暖かいのでございます）

一時の夢と言われようとも、当麻の気持ちからきた行動でないと言われようとも。
オルソラには全く関係がなかった。
ただ愛おしいと想い、ただ優しく抱きしめられ、抱きしめ返す。
たったそれだけなのに、驚くほど心が暖かくなる。

「口づけは……俺から……だっけ？」

「え？」

頭を当麻の肩に預けていたオルソラの耳に信じられない言葉が届く。
呆然としているオルソラの顎に手をかけ、当麻はオルソラの顔を無理矢理起こす。

「あっ」

当麻の顔を見た時、オルソラは当麻が寝ぼけている事に気づく。
目を閉じ、時々寝息のような音が聞こえてくるのだ。
これで気付かないというのはありえない話だ。

（駄目……これは卑怯な私が貴方様の行為につけこんでいるだけ…
…だから駄目……だけど……だけど……）

徐々に近づいてくる当麻の顔をオルソラは止める事が出来なかった。
むしろ、そのキスを受け入れるかのような感じですらあった。

夢の中で雰囲気を出しているのか、当麻が顔を近づけてくるスピー
ドはゆっくりだった。
近づいてくる当麻の顔を見て、オルソラは心臓が激しく音を立てて
いる事を理解する。
五月蝿いほどの心音に、耳がそれ以外聞こえないかのようだった。

やがて二人の距離がほぼゼロになりかかった時、オルソラはそっと
瞳を閉じた。

ローラ流オン＝ガエーシ

オルソラと当麻の顔がゼロ距離になる瞬間。
ズバァン！！　という轟音が聞こえたかと思うと、当麻の体が宙を舞っていた。
綺麗な弧を描いて壁に激突した当麻は、そのまま壁に沿うように落ちていった。

余りの展開にオルソラは何が起きたかわからず呆然とする。
その近くに肩で息をしている神裂の姿があった。

「かかかかかか上条当麻！！　貴方はオルソラにいっいいいいい一体何を！？」

「おいこらオルソラ！　そこまでは見過ごせないぞ！」

「は、はわわわわわわ！！」

神裂の後ろに怒り心頭のシェリーと、顔を真っ赤にしてオロオロとしている五和。
よく見れば神裂も耳まで真っ赤に染まっており、恥ずかしさで胸が一杯のようであった。
何か一つでも余計な事が起これば、その瞬間彼女たちはパニック一直線だろう。

「その通り！　幻想殺しの少年は私が貰うなりけり！」

「「「は？」」」

そこへ空気を読まず部屋へ乗り込んでくる人物がいた。
場にそぐわない明るい声に、神裂たちは思わず呆けた声を出す。

「ふふん」

全員がそちらに視線を向けると、そこにはサンタクロース衣装を身に纏ったローラの姿があった。
しかも普通のサンタクロース衣装ではない。
下着が見えるか見えないかのギリギリのラインを維持したスカート。
上半身は殆ど裸と思えるほど肩は完全に露出しており、ヘソも丸見えであった。
申し訳ない程度に胸部と下半身を隠している格好は、普段のローラからは想像すら出来なかった。
顔を知らなければ、はっきり言って痴女にしか見えない。

「ア、アアアアアア最大主教（アークビショップ）！！　貴女は何という格好を！？」

「いや、恥ずかしゅうて恥ずかしゅうて仕方がなしだけど、そこはほれ幻想殺しの少年にオン＝ガエーシをするために一肌脱いだのよ」

「物理的に脱がないで下さい！　というか仮にもイギリス清教のトップがそんな格好をしないで下さい！！」

「はっ！　まさかこの程度の格好でお寒い旬過ぎたる女とでも言うの！？」

くねくねと謎のダンスを披露するローラを見て、神裂は血管が何本か切れる音を耳にする。
だが相手はイギリス清教のトップ、ここは冷静になるべきだと自分に言い聞かせた。

「所で上条が気を失っているが、放置してていいのか？」

「え、えぇー！！」

オルソラと当麻の姿を見てパニックを起こした神裂は、手加減を考えずに当麻を殴った。

世界に二十人もいない『聖人』の力で殴られたら、いくら頑丈の当麻でも耐えきれるはずなどない。

寝ぼけた状態から完全に意識をとばした当麻は、それから暫く起きる事はなかった。

当麻が気絶して一時間が経過した頃、ようやく当麻の意識が戻り始めた。

（あれ？　俺って確かオルソラに膝枕して貰ってたはず……）

あれだけ柔らかかった感触が、今はゴツゴツした感じの感触に変わっていた。

勿論、今のもそれなりの感触なのだが、オルソラと比べた場合天と地ほどの差があった。

というか比べる事自体失礼な気がしてきた当麻だった。

（オルソラー？　いないのかー？）

近くにあるモノを掴もうと思った当麻は、右腕を延ばしてあちこち掴もうとする。
と、突然むにゅうっと何かマシュマロのようなモノを掴んだ。

「ひぃっ!?」

（何だこれ？　餅でも掴んだのか？）

なにやら心地良い感触に当麻は思わず何度も握ったり離したりして揉んでみる。
そこそこのボリュームを感じるソレに、当麻はクッションか何かだと思った。

「このっ！　いつまで揉んでいたるのよ！」

そんな声が聞こえたのと同時に、自分の頬に強烈な痛みが襲ってくる。

「いってぇ!?」

一瞬で覚醒した当麻は、殴られた場所を押さえながら起きあがる。
すると、そこには体を抱きしめるようにして震えているローラの姿があった。

「も、揉まれた」

「はい？」

事態がうまく飲み込めていない当麻は、ローラの言葉に思わず素っ頓狂な返事を返す。

それがローラの何かにふれたらしく、突然両腕をぶんぶんと振りながら叫んだ。

「誰にも触れさせてはなしにつきの私の体を！　そなたは無遠慮に触ったのよ！？」

涙目で訴えるローラだが、勿論当麻にそんな覚えはない。
そもそもローラの顔すら知らない当麻から見れば、ローラの言葉は単なる言いがかりにしか聞こえない。
しかし涙目の女性というのは破壊力が尋常ではない。
特にローラは外見が美人であり、言いがかりと分かっていても、当麻は自分が悪いのではと思い始めた。

「これにサインするのよ」

未だ唖然としている当麻を後目に、ローラは何かが書かれた羊皮紙を当麻に突き出す。
ローラの圧力に押さえた当麻は、呆けた顔をして羊皮紙を受け取る。

「まてこらぁ！　英語で書いてるものなんて読めるか！」

羊皮紙に視線を落して内容を見た瞬間、当麻は驚愕の余り叫んだ。
そこには流暢な英語でびっしり文字が埋められていた。
内容も何も分からない羊皮紙を怪しんだ当麻は、投げ捨てるように突き返す。

「なっ！？　そこまで頭が悪い少年だったのか！？」

「うっせぇ！　バカみたいな口調で喋る女に人の頭をどうこう言われたくねぇ！？」

「なっ！　なっ！　なんたる無礼!?　いいから書類にサインするのよ!?」

「だから内容がわからんって言ってるだろ!?」

「やれやれ、仕方なし。いいか幻想殺しの少年、その羊皮紙に書かれているのは」

なにやら優越感たっぷりの表情で語るローラ。
言い返せない事に悔しさを滲ませる当麻だが、それより羊皮紙の内容が気になったので黙る事にした。
押し黙った当麻を見て、ローラは気をよくすると自分に酔ったような感じで口を開く。

「夫、上条当麻は妻、ローラを生涯支え馬車馬のように働き、妻の為に命を投げ捨てる覚悟を持つと書いているのよ」

「はぁ!?」

「まぁ簡単にいうと婚姻届よ。ささ、スパーンと名前をか……」

その瞬間、スパーンと小気味よい音が部屋に響く。
その音は当麻がローラの頭をひっぱたく事により発生した音だった。

「いったぁ!?　な、何するのよ!?」

「うっせぇ!?　おまえは新手の結婚詐欺師かよ!?　上条さんはまだ高校生ですよ?　何でこの年で結婚しなければならん!?」

「私の体に触れたのよ！　それぐらい当然の結果なりけり！」

「お前はいつの時代の人間だよ！？」

「ええい！？　良いから書く！？」

無理矢理でも書かそうと思ったのか、ローラが体を乗り出して当麻に襲いかかる。

腕をがっちり握ると、ペンを持たせて羊皮紙にサインさせようとする。

「させるかぁ！？」

ローラの行為に抵抗する当麻だが、ローラの力は予想より遙かに強かった。

細い体のどこにそんなパワーが生まれるのか疑問だったが、当麻はそれらを無視して抵抗をし続ける。

「ぬぐぐぐぐ、い、いい加減諦めたるわね！」

「ふ、ふざけん……なぁ！？」

渾身の力を振り絞ってローラをふりほどいた当麻だが、余りにも無理矢理すぎたので盛大にバランスを崩した。

「うおっ！？」

「きゃあ！？」

二人は揉みあうような形で床へと倒れこむ。

「何事ですか！？」

軽快な音に、外で待機していた神裂たちが部屋へと雪崩込む。
しかし部屋の惨状を見て三人はピシリと硬直する。

「ひゅ～、流石上条。中々手が早いなー」

一人シェリーだけ楽しそうな口調で口笛を吹いていた。

「いたたた、ひぃ！？」

「くそ……ん？」

体を強く打ちつけた当麻は、体を床から起こそうと考え腕を強く押す。
しかし手から感じる感触はマシュマロのような柔らかい感触だった。
軽く握ってみると、ぐにぐにと手の中で形を変えた。

（あれ？　何か魔術でも使って床を軟化させてるの？）

ぐいぐいと押すが一向に手の感触に変化はない。
そもそも幻想殺しで魔術が破壊できない事に疑問を抱いた当麻は、
自分の手に視線を向ける。

「……は、はははは」

当麻は一体どこを掴んでいるか理解する。
光り輝くような白い肌、清楚さと可愛らしさが同居したような下着。
つまりローラのお尻を当麻は掴んでいた。

ローラ曰く『鼻血必至の悩殺ミニスカサンタセット』だったのが、当麻の不幸を加速させていた。
ミニスカなので、当然ながら布面積は少ない。
そんな衣装で暴れて動けばどうなるか簡単に予想はつくだろう。
そう、思いっ切りめくれているのであった。
その上に、当麻の両手が乗っていると言えば想像がつきやすいだろう。

存在自体が胡散臭い、己の利益は必ず手に入れると評されるローラの、意外とも言える可愛い乙女の一面であった。

「きゅぅ……」

二度に渡る当麻の幸運攻撃（ラッキースケベ）に、ローラは可愛らしい悲鳴を上げて気絶した。

「わー！！！　ア、最大主教（アークビショップ）！！」

目を回して倒れたローラに、神裂は絶叫に近い悲鳴を上げながら駆け寄ってきた。

「は、ははは。不幸だ……」

一部始終を思い返して当麻はがっくりと肩を落としながら言った。

意識を取り戻したローラは即効で『悩殺ミニスカサンタセット』を脱ぎ、本人曰く地味な装束というベージュの修道服に着替えた。
当然、着替える前に体を清め、髪やお肌の手直しをしたのは言うまでもない。
そんなこんなをしつつ待つこと数時間、やっと全ての作業が終わったローラが再び部屋に姿を現した。

「うぅ……不幸だ……」

ローラを待つ間、正座プラス神裂の説教という拷問を受けた当麻は身も心もズタズタだった。
足が痺れて痛覚すら感じなくなってきたので、そろそろ足が危険なのではと思い始めたぐらいである。
しかしここで無理に立てば、一体どういう結果を招くか理解した当麻は、結局正座を続けるより他なかった。

「ふー！」

優雅に部屋へ入ったローラだが、当麻を見た瞬間扉の後ろに隠れた。
その上、猫のような威嚇声をあげる。
傍から見ると、まるで警戒心だけ出す臆病な子猫のようである。

「上条当麻、貴様は二度も私に屈辱を与えたのよん？」

「はい、すいません」

「一度目は胸！　二度目は尻！　何てピンポイント！？」

「わざとじゃないんですよ、本当に！　ていうか狙って触りたいとも思っていませんよ！？」

「ぬっ！　幻想殺しの少年！！　それは私に魅力なしと言うなりけり！？」

「ちっげぇぇぇぇぇぇぇ！？」

ローラの言葉に突っ込みを入れる当麻。
神裂たちの目には何故か仲良しな二人に見えた。
実際は互いに喧々諤々な状態だが。

「まぁいい……幻想殺しの少年」

「……何ですか」

涙目で腕をぶんぶんふって威嚇していたローラだが、ふと真剣な表情をして当麻を見る。
そして、修道服の胸元から何かを取り出すと、ローラはそれを広げて当麻の眼前にかざした。

「さぁこれにサインするのよ！？」

それはローラが先ほど当麻にサインさせようとした婚姻届もとい奴隷宣言書。
それだと当麻が理解した瞬間、本日二度目になる当麻からのローラの頭をひっぱたく音が部屋に炸裂した。

上条姉妹　対　超電磁砲

「どうしてこうなった」

「それはこっちの台詞なンですがねェ……」

とある喫茶店の一角に座る垣根と一方通行は、疲労感がうかがえるほどのため息を漏らす。

実際精神的疲労がかなりきており、さっさと席を離れたい気持ちで一杯だった。

しかし二人が席を離れる事が出来ないのは、とある理由があったのだ。

「おいクソ売女（ビッチ）、人の弟に手を出すとは良い度胸だな」

「嫉妬は醜いわよ、ブラコンのオバサン面」

沈利と御坂が対面に座りながら互いに罵り合っているのだ。

レベル５同士がテーブルを挟んで喧嘩一歩手前という、割としゃれにならない状態を放置する訳にはいかない。

そんな思いがあるからこそ、垣根と一方通行は席を立つという事が出来なかった。

スーパー麦野（オトメモードムギノ）と帯電御坂（ビリビリミサカ）の喧嘩は怖い。

店員も怯えて全く近づこうとしない。

近くの席の客は、逃げるように店を出ていくばかりだ。

もしこの場に垣根と一方通行という序列一位と二位がいなければ、もっと悲惨な状況だっただろう。

勿論、最初はこんな状態だったわけではない。
最初は御坂たちと垣根しか座っていなかった。
そこへ一方通行が追加されたが、ここまでは良かった。
何だかんだで仲が良い（絶対に認めないけど）二人だから、罵り合いもいつもの事だった。
しかしここへ沈利こと上条姉妹が追加されたのが問題だったのだ。
御坂と沈利という水と油のような関係の二人が同じ席に座れば、冒頭のような事になるのは簡単だった。

その煽りを受けて、御坂についてきた黒子たちは苦笑いを浮かべるしかなかった。
最も、反対の上条姉妹はいつも通りだったが。

「浜面、メロンソーダーを超用意するです」

「私はコーラって訳よ。フレメアはどうする？」

「大体、フレンダお姉ちゃんと一緒でいい。にゃあ」

「理后姉ちゃんは……って目を開けながら超寝ないで下さい。超怖いですよ！」

「すぴー……」

良くも悪くもこんな沈利は見慣れているのだろう。だから普段通りで動くことが出来るのだった。
そして浜面の扱いもいつもと同じだった。
毎度ながらのドリンクバーとの往復コースが始まったのだ。

「胃に穴が空きそう……」

沈利に怯えつつ浜面はドリンクバーへと移動した。その背中は可哀想なぐらい哀愁が漂っていた。

「お、お姉さま？　周りの迷惑になるので控えめに……」

「黒子、黙ってて」

「……はいですの」

何とか御坂を宥めようとした黒子だったが、御坂からの一喝ですぐ大人しくなった。

その光景を何度も見ている垣根だが、この雰囲気で黒子をからかう気持ちは少しもわかなかった。

「あ、あははは－」

乾いた笑いをしつつ佐天はどうしようかと考える。

はっきり言ってレベル５二人が喧嘩状態の上に、更に上位の二人は全くアクションがない。

絶体絶命とも思える状態で、佐天が思いついた事は一つだった。

「か、垣根さん！　ドリンクいらないですか！？」

「ん？　あぁ……抹茶ラテ」

それは敵前逃亡、ドリンクバーへの移動ならこの空気から逃げられる。

そう考えた佐天は奥の席にいる垣根に声をかける。

涙目の初春と紗月が睨んできたが、佐天はそれを全力で無視した。

「抹茶ラテですね！　私隅っこなんで取ってきます！」

「あー、慌てたら危ないしゆっくりね」

垣根も佐天の思惑がわかったのか、時間をかけておけという言葉を口にする。

ひきつった笑みを浮かべつつ、佐天はそのままドリンクバーへと移動した。

（佐天さん！　逃げましたね！？）

（涙子ちゃんヒドいよー）

ドリンクバーへ移動する佐天の背中を、初春と紗月は恨めしそうに視線を送った。

佐天が立ち去って少しした頃、ふいに沈利がふっと笑みを浮かべる。

人をバカにしたような笑みに御坂は思わず眉をひそめる。

「私としたことが……ついガキにムキになっちゃったなぁ」

「ガキで悪かったわね、オバサン」

売り言葉に買い言葉を返した御坂だが、そんな御坂の言葉を聞いて

も沈利は薄く笑みを浮かべるだけであった。

「（あ、沈利お姉ちゃんが超冷静になりました）」

「（終わったわね、超電磁砲）」

「（大体、どういう事？）」

「（あーなったしずりは怖い。精神的にくる攻撃に切り替えるから）」

「（フレメアも当麻お兄ちゃんを超電磁砲に超とられたくないでしょう？）」

「（大体、当麻お兄ちゃんが構ってくれなくなるのは嫌かも。にゃあ）」

「（なら沈利姉ちゃんと超連携しますよ。ここで一気に超畳みかけます）」

「（結局さ、かなりエゲツない攻撃になるって訳よ）」

「（……あの時のようにとうまを失う気持ちを味わうぐらいなら、それぐらいかまわない）」

「（り、理后姉ちゃんが超燃えてます！）」

次に何が行われるか理解した理后たちは、少しだけ御坂に哀れみの視線を向ける。

だが御坂はそれをバカにしている視線と受け止め、逆に睨み返した。

「まーまー、おまえら。こんなガキにムキになるなよ。昨日は当麻と夜まで楽しんだだろ？　こいつ如きで気分を害するのはよくないな」

沈利の言葉に御坂はぴくりと反応する。昨日の夜といえばクリスマスだ。

そんな時に沈利たちは当麻と一緒に楽しんだ、その事が御坂の心に僅かばかりの動揺を生む。

「そうでしたね。心お姉ちゃんも一緒に超楽しみました」

「舞い散る雪を一緒に見たって訳よ」

ポーカーフェイスを維持する御坂だが、上条姉妹からの言葉で徐々に仮面が剥がれ落ちていく。

「プレゼント渡すときのとうま、とってもかっこよかったね」

「大体、私はプレゼント貰えていない。にゃあ」

「フレメアは昨日うちの子になったからね。当麻お兄ちゃんが帰ってきたら買って貰おう？」

「超そうですね。なんたってあの『鈍感な当麻お兄ちゃん』が『自分から買って』きて『自分の手で』私たちに超つけてくれましたからね」

未だポーカーフェイスだと思っている御坂だが、すでに顔はひきつっており完全に剥がれ落ちていた。

クリスマスの日、御坂だけが当麻と顔合わせが出来ていないのだ。
その事が御坂の心に大きな不安を植えつけていた。

「（エゲツねぇなぁ麦野は）」

「（というかアイテム連中らだよなァ……）」

心にナイフをザクザク刺すような口撃に男性陣である垣根と一方通行は寒気すら覚えた。
全く容赦なし、手加減ゼロ、完全にここで潰す気でいる沈利たちだった。
黒子たちも何か言い返そうと考えたが、沈利たちから発される威圧にただ圧倒されるだけだった。

「ふ、ふぅん。だから何？　クリスマスは家族で過ごす日だから当然じゃん」

気になって仕方ない、そんな表情をしながらも御坂は口では強気にでる。
しかしその強気は自分が劣勢ですと認めているような物だった。
勿論、それが分かっている沈利たちだが、当然手を緩める気などない。
ひび割れているなら再生不可能なぐらい木っ端微塵に粉砕するのが沈利たちである。

「まー私はもっと『特別な』プレゼントを貰ったけどなぁ」

「と、特別！？」

「当麻じゃないと絶対に渡せないプレゼントだな」

沈利のニヤニヤする表情を見て我に返った御坂だが、時すでに遅し。
すごく気になって仕方ないという事が完全に露呈してしまった。

「なんだよ、知りたいのか？」

「し、知りたくなんてないわよ！？」

「我慢するなよ、超電磁砲。さっきの食いつきは何だったんだよ？」

「ぐぅ！」

悔しさに顔を歪める御坂を見て沈利はますます気分が高揚していった。
そもそも最初から劣性の御坂には、よくてイーブンに持ち込むぐらいしか出来ない。
それに御坂の味方は一人もいないが、沈利には理后たち姉妹がついている。
あらゆる方向からフルボッコの御坂には、最初からガードし続ける以外に選択肢はないのだ。
だが、愚かにも御坂は攻撃しかしていなかった。これでは勝ち目などあるわけがない。

フレメアを除く上条姉妹が、御坂をここまで毛嫌いするにはある理由がある。
それは今までの御坂の行動に起因していた。
会えば勝負、気に入らない事があれば電撃か超電磁砲コース。
最近では素直になり、その行為が無くなったとはいえ過去まで消すことは出来ない。

いくら幻想殺しがあるとはいえ、基本的に当麻は無能力者なのだ。
その事を沈利たちは誰よりも理解していた。
だからこそ、大能力者や超能力者の力がいかに当麻にとって危険かも理解していた。
その力を無遠慮に振りかざす御坂に良い感情など抱くわけもない。
操祈が御坂を嫌う理由も、名前の他にこの行動が起因している。
だからこそ、常盤台で慕われる御坂を嫌うツートップが操祈と最愛だったりする。

「まぁお前には『特別に』見せてやるよ」

「け、けけけけ結構よ！？」

全力で否定する御坂を無視して、沈利は首もとが見えるように上着を脱ぐ。
ニヤニヤと笑いながら沈利は、自分の首のある場所を指さす。

「お子ちゃまな超電磁砲にはまだ早いかにゃ～ん」

「な、何を……言って……」

そう言い掛けたが沈利の首もとを見て徐々に声がしぼんでいく。
首もとにある小さな赤いアザ、人の唇にも見えるそのアザを見て御坂は顔を青くする。
まさかそんな、そんな思いを抱きながらも、同時に否定の考えが頭の中を駆けめぐる。

「これはだなぁ～」

御坂にダメージが浸透するのを見ながら沈利は、御坂にとって最悪

の言葉を口にする。

「当麻につけられたキスマークだにゃん♪」

その瞬間、勝敗は完全に決まった。

呆けた顔をして天井を見ている御坂。

真っ白に燃え尽きており、明らかに盛大なダメージを受けている事が理解できた。

口から何かの煙を吐いているようにも見えるその姿に、レベル5の威厳など微塵も感じられない。

「（これが女の戦いか。すげェ怖いンですが……）」

「（恋の戦争に禁じ手なし……か。恐ろしいもんだな）」

敗者しかいないテーブルで、垣根と一方通行は冷や汗をかきながら思った。

「（麦野たちは楽しそうに帰ったよなぁ）」

勝者の沈利たちは、勝利の笑みを浮かべつつ喫茶店を後にした。

ちなみに佐天は余りの修羅場に、恐怖で体が硬直していた。

燃え尽きた御坂を黒子がオロオロとしながら宥める。

初春は我関せずといった感じでパフェを食べており、紗月は苦笑い

を浮かべていた。

「（まァ……三下が早く誰か決めればこンな現場には出くわさないかもなァ）」

「（いや、それはそれで凄い戦争になりそうだろ）」

だよねー、と思いながら二人はため息を吐いた。

冗談ですよね？　フィアンマさん

ヴェントによる破壊を片づけた後、優菜は鍋作成を再開する。
といっても始めたばかりだったので、特に手戻りなどは発生しなかった。
しかし一つだけ問題が出来てしまった。

「どうしよう……野菜が少ない」

最初に野菜を処理していたため、犠牲となった食物は殆どが野菜だった。
しかも多く入れるために、かなりの量を集めていたので無事な野菜は残り少ない。
今の状態でいけば比率八対二という鍋になる。
勿論、八の方が肉なのは言うまでもない。

「えーっと、野菜のお代わりがなし……って言って大丈夫かしら？」

謎の食材は使う気が起きない、そして日本の野菜はすぐ手にはいるか解らない。
そうなると野菜のお代わりなしになるが、それは大丈夫なのかと優菜は思っていた。
何となく全員菜食主義者のように見えたというのもある。

「し、仕方ないです。とりあえず大丈夫かフィアンマ様？に聞くしかないですね」

ため息と共に優菜はそう言いながら扉の前に移動する。
そして扉をそっと開け、中をのぞき見してみる。

すると、すごい光景が優菜の目に入ってきた。

フィアンマは何故か段ボール箱を頭にひっつけたまま床に倒れていた。

テッラは緑茶が気に入ったのか、まったりと飲んでいる。

アックアとヴェントは、こたつの上でチェスを興じていた。

（……何か声をかけにくいです）

第六感が告げる、間違いなく今入るとロクな目に遭わないと。

しかし野菜について尋ねないといけないと、優菜は自分に言い聞かせる。

意を決して扉をあけると、優菜は倒れているフィアンマの方へ歩み寄る。

「あ、あのーフィアンマ様？」

優菜はフィアンマに声をかけてみるが、フィアンマは床に寝ころんだまま全く反応しない。

そもそも段ボールを頭にめり込ませている時点で、かなりやばい格好なのだがその辺りは触れないことにした。

「フィアンマは放置してよいのである。で、どうしたのだ？」

「いいのでしょうか……あ、あのですね。事情により材料が少々足りなくなってですね」

その瞬間、ヴェントがピクリと反応する。

さっき問答無用で優菜に殴りかかった時、材料がのったテーブルごとぶち壊したのを思い出したのだ。

そもそも優菜はアックアの大のお気に入り。
ヴェントに攻撃されて材料が減ったと言われたら、アックアによって殴り殺されてしまう。
その事を想像して、背筋に冷や汗が流れたヴェントだった。

「事情？　一体どうしたのである？」

「えーっと、笑わないで下さいね？　テーブルをひっくり返してしまったので……」

「それで材料をダメにしたのか」

「はい……」

だが優菜はその点には全く触れず、違う理由をつけて材料をダメにしたと言った。
何故自分を庇う、驚いたヴェントが優菜に視線を向ける。
その瞬間、二人の視線は交差しあう。
小さく笑う優菜を見て、ヴェントはぷいっとそっぽを向いた。

（ふん、借りとは思わないぞ）

少々面白くないと思ったヴェントだが、下手に何も言えないので結局黙ってそっぽを向くしかなかった。

「まぁそれは仕方ない。それで、何が足りないというのだ？」

「あ、はい。えっとですね……」

そう言って顎に手を当てて考える優菜を見て、アックアたちはある

一つの事に関して懸念が浮かんだ。

（まさか肉が足りないのか？）

その事に動揺したアックアたちは、優菜の次の言葉を黙って待つ。
肉が足りなければ問題である。野菜など腹のたしにもならないアックアは特に。
もし肉が足りないのなら、それは鍋戦争になる。

「あの、ですね。野菜が少々足りないのです」

「……野菜？」

「はい……比率で言うと肉八割という肉だらけの鍋……になります……」

顔を赤くしてもじもじしながら語る優菜。
特に最後の方は尻すぼみになり、よく聞き取れなかった。
しかしアックアたちは、肉が足りないという状態が回避されたのでほっと胸をなで下ろした。

「……ふ、ふふふふ」

すると突然フィアンマが不気味な笑いをしはじめる。
未だ段ボールが頭に刺さっているので、ある意味シュールさもあったが。

「エンダァァァァァァァァァァァ！！！！」

大声を上げたフィアンマは、両腕を上に突き上げながら立ち上がっ

た。
その勢いで段ボールは後ろに飛んでいったが、本人は全く気にしていなかった。

「これが……これが日本の兵器『萌え』か！」

「「「「……はい？」」」」

全員がフィアンマの言葉に首を傾げる。
しかし何となくダメな事を言っている事だけは理解できた。
ヴェントなど『神の右席抜けようかしら』と思ったほどである。
しかし全員の冷たい眼差しを受けても、フィアンマは全く気にしていなかった。

「ふっ、ネットで知り合ったＢｌｕｅＨａｉｒ（ブルーヘア）なる人物に教わったが……確かにこれは凄い。俺様のハートをぶち抜いたぜ」

何だかフィアンマがどんどんダメな方向に壊れていると思ったアックアたち。
全員が『ダメだこいつ、早く何とかしないと』と共通の思いを抱いたぐらいである。

「赤くした顔でもじもじする姿！　申し訳ない程度に修道服を握るその手！　恥じらいながら語る言葉！　全てがパーフェクトだ！？」

優菜の一つ一つを指さしながら叫ぶフィアンマ。
なにやら酷く興奮状態のようだが、反対に周りは冷静どころか冷淡であった。

「……フィアンマ。病院でも行った方がよくないか？」

「俺様は正常だ。何も問題ない」

（ダメだこいつ、自覚症状がない）

自覚症状がないフィアンマにアックアたちは頭を痛める。
知らない間に謎の世界の扉を開いたフィアンマだが、勿論神の右席としての実力は折り紙付きだ。
癖のあるメンバーを纏め上げているし、神の右席の最終決定権はフィアンマにある。

だが今のフィアンマに神の右席としての面影はない。
まるでどこかの大学生のようなノリであった。
「世界を動かすために存在する」という神の右席の存在理由など、道端のポリバケツに捨ててきたように見えた。

「ヴェントには不人気だったが、貴様ならこれが似合うだろう」

そう言って自分の頭に突き刺さっていた段ボールを優菜に手渡す。
頭の理解が追いついていない優菜は、ほぼ反射条件のように段ボールを受け取る。

「ふふふふ、俺様がチョイスしたその名も！」

フィアンマの言葉と優菜が段ボールをあけるのはほぼ同時であった。
そして優菜が中身を見て驚愕に目を見開くのを見た後、フィアンマは中身の名前を告げた。

「日本が誇るネコミミメイド服　ＩＮ　にくきゅうバージョンだがはぁ！」

まるで舞台俳優が観客に語るように言葉を紡ぐフィアンマの顔に、真横から拳が飛んできた。

「貴様、人の弟子に何てモノを着せようとしているのである」

メキィと骨が砕けるような音と同時にフィアンマは床を転がっていく。

しかし壁に激突した後、何事もなかったかのように立ち上がった。

「痛いじゃないかアックア。俺様じゃなければ死んでいたぞ」

「……殺す気で殴ったのである」

「そういって、本当は見たいんだごはぁ！」

今度はヴェントからのハンマーがフィアンマの腹を打ち抜く。

だが、相変わらず何事もなかったかのようにフィアンマは立ち上がった。

「貴様ら、俺様に何て事をするんだ！」

「……お前を見ていると悩むのもバカらしくなるよ」

「ふふん、褒めても何もでないぞ」

皮肉のはずだが残念ながらフィアンマには効果がなかった。

そもそも悪意や敵意すらねじ曲がった解釈をする人物だ。

皮肉など効果があるはずもない。

（本当に神の右席を抜けようかしら？）

何だかこのままいると自分まで危険な色に染まるのではと思ったヴェント。

だが、結局いつもの『染まらなければいい』という結論に達する。

それがすでに染まっている証であるとも知らずに。

「あ、あの……ウィリアム様」

「ぬ、何だ？」

「あの……その……」

段ボールを持ったままもじもじする優菜を見てアックアは首を傾げる。

何か言いたそう、だけど言うべきかどうか迷っている、そんな雰囲気であった。

だが、意を決した優菜は真剣な表情でアックアを見つつ言った。

「ウィリアム様は……その、こういう衣装は好きですか？」

言葉の内容を理解した瞬間、アックアは全力で否定の言葉を並べた。

デビルフィッシュ

色々なハプニングがありつつも、何とか鍋料理が完成した。

「鍋料理が完成しました」

「色々とありましたねー」

「主にフィアンマのせいである」

チラリとアックアはフィアンマに視線を向ける。

どういう誤解をしたか謎だが、アックアの視線を受けたフィアンマは笑みを浮かべつつ口を開いた。

「肉がいっぱいとか気にするな。むしろ野菜が多い方が困る」

あれだけボコボコにされたのに怪我一つないフィアンマが薄く笑いながら言う。

一体どういう身体構造をしているのだと、アックアたちは謎に思った。

優菜が用意したのは至ってシンプルな水炊き。

砕け散った野菜をフィアンマが補填（どうやって補填したかは謎）したので、野菜と肉の比率はちゃんと正常に戻った。

その後、小皿を何品か作った後にこたつの上に並べたのである。

「ふむ……至って普通の家庭鍋料理だな。よいチョイスだ、俺様がほめてつかわそう」

どうしてお前はそこまで偉そうなんだ、そんな視線をフィアンマに向けるアックアたち。
勿論、フィアンマはそんな視線を軽く受け流していた。

「では頂きましょう」

そう言って優菜は食前の祈りの言葉を口にする。
日本人の優菜は本来『頂きます』だが、ここはローマ正教の本拠地。
当然作法などもローマ正教に従ったのだ。
優菜の姿を見て四人もまた食前の祈りを捧げる。

「さて食うか」

こうして神の右席プラス優菜による鍋パーティが始まった。

「タレって奴が三種類か……ん？　なんだこの赤い固まりの奴は」

「ああ、それはタコときゅうりの酢の物ですね。一匹丸ごといたので作ってみました」

その瞬間、フィアンマを除く三人が凄い勢いで後ろに下がる。
三人とも肩で息をしており、激しく警戒しているのが目に見て解った。

「タ、タコってデビルフィッシュの事かよ！？」

「……あの海の魔物か」

ヴェントとアックアが苦虫を噛み潰したような表情をする。
恐ろしいものを見る三人の視線に、優菜はただ困惑するだけだった。

「あー、お前は日本人だから知らないが、タコは結構嫌われてるんだよ」

「……あー」

三人が怯えている理由をフィアンマは優菜に説明する。
その言葉で優菜は思い出す。西洋人はタコを激しく嫌っている事を。
フィアンマは平気なようだが、どうやら他の三人は激しくダメなようだ。

「ふふん、臆病風に吹かれた奴など放置しておけ。俺様はさっさと鍋が食いたいのだ」

「……何だと、フィアンマ」

「聞こえなかったのか？　デビルフィッシュ如きに怯える奴など放置しておけといっただけだ」

フィアンマの安い挑発に反応したヴェントは、敵意向きだしでフィアンマを睨む。
だが、その視線を薄く笑いながら受け止めるフィアンマは、これ見よがしにタコを食べていた。

「わーった。わーったよ！　喰ってやろうじゃないかゴルァァァ

！！！」

こたつをバンッ！！と両手で叩きつけると、ヴェントはタコが入った小皿を手に持った。
その顔は苦悩と恐怖に満ちており、幾筋の冷や汗が流れていた。

「ぐぎぎぎぎ……」

歯ぎしりするだけで一向に手が動かなかったヴェントを、フィアンマはニヤニヤとしながら見ていた。
しかし次の瞬間、ヴェントが目を大きく見開いたかと思うとタコの切れ端を口に放り込んだ。

「……ん？」

凄い表情で咀嚼していたヴェントだが、ふと表情が変化する。

「……んー……」

「どうしたのである？」

ヴェントの様子がおかしい事にアックアは首を傾げる。
アックアの言葉が耳に届いていないのか、ヴェントはただ首を傾げながら疑問符を浮かべていた。

「いや……普通に旨い」

「……何？」

その言葉に反応してアックアとテッラもタコを口に入れる。

そしてヴェント同様、何度目かの咀嚼で表情が変化する。

「……確かに美味しいですねー」

「むぅ……」

今まで海の魔物と嫌悪していたタコだが、食べてみればそれなりに美味しい事に三人は気付く。

そんな三人の様子をフィアンマは小さな笑みを浮かべて見ていた。

「くくく、どうだ海の魔物の味は」

「クソ……フィアンマの言う通りだよ」

フィアンマの言葉を嫌味と受け取ったヴェントは、嫌そうな表情で問いに答えた。

タコ騒動が終われば後は至って普通だった。

肉ばかり取るフィアンマ、ずっとマイペースで食べるテッラ、やたらとタコが気に入ったヴェント。

特に喧嘩もなくそれぞれが思いの食べ方をしていた。

しかし一人だけ、そう一人だけまだまともに食べていない人物がいた。

「……箸が使いにくいのである」

アックアである。
フィアンマとテッラは即箸を諦めてスプーンやフォークを使っている。
ある意味シュールなのだが、どちらもマイペースなので気にする様子はない。
だが一番驚いたのはヴェントである。
何故か器用に箸を使いこなす。その姿は優雅さすらあった。

「別に箸なんざ普通に使えるだろ？」

そう言うが西洋人が箸を使う機会など限られている。
何故使えるのだ、そう問いたいアックアだったが聞けば更に負けると思い黙った。

「……む、また折れた」

ペキィと割り箸がへし折れる音が耳に届く。
絶妙な力加減が必要で、かつソフトな力が要求される箸にアックアは苦戦を強いられる。
常人には何でもない事でも『聖人』の力を有するアックアにはかなり厳しい。
同じ『聖人』である神裂は、単に使い慣れているからこそ力の制御が可能だがアックアはそうはいかない。
何せ箸を使うのは今日が初めてに近いのだから。

「箸を使わないとヴェントに負けた気分になるのである」

「くだらねぇ事に拘るなよ、おい」

ヴェントの突っ込みを無視してアックアは再び新しい割り箸を手に取る。
しかし加減を間違えたのか、握った瞬間ベキィとへし折れた。

「……」

「あー、スプーンなら慣れているだろ？」

「……嫌である」

なおも箸に拘るアックアを見てヴェントは小さくため息を吐く。

「おいテッラ。それは優菜が俺様の為に用意した肉だぞ」

「いえいえ、それはありえませんねー」

「何を根拠に！」

「彼女は普通に肉を入れていましたしねー」

ヴェントとアックアなど見えないかのように、テッラとフィアンマは鍋の具取り戦争をしていた。
今はどうやら肉の取り合いで互いににらみ合っているようだ。

「……そうかもしれん。だが、その肉はやらん！」

「優先する。――――フィアンマのスプーンを下位に、私のフォークを上位に」

フィアンマのスプーンがテッラのフォークの少し手前で、壁にぶつ

かったかのように停止する。

「貴様！　下らない事に『光の処刑』を使うなよ！？」

「下らないとは失礼ですねー」

そう言って肉を食うテッラはどこか誇らしげであった。
何故そんな下らない事に執念を燃やせるのか甚だ疑問のヴェントであったが、巻き込まれない為にあえて無視した。

「あらあら、喧嘩はよくありませんよ」

「喧嘩ではない。これは戦争だ」

そこへ肉を取りに行った優菜が戻ってきた。
愉快なぐらい肉の消費が激しいので、元々用意していた量では足りなくなったのだ。
だから隣の部屋から肉を調達し、こうして戻ってきたのだ。

「程々にしてくださいね……あの、ウィリアム様？　背後の山は何でしょうか？」

肉をこたつに置いた後、優菜はアックアの背後に奇妙な山が出来ている事に気付く。
だが、今のアックアはその声に反応する事なく手元を見ながらプルプルしていた。

「あー察してやれ。何か今格闘中なんだよ」

「？？？」

頬杖をついて応えるヴェントの言葉の意味が分からず優菜は首を傾げる。
おそるおそるアックアの背後に近づくと、箸を持って何やらブツブツと言っていた。

「私は『神の右席』で後方のアックア。『神の力（ガブリエル）』の性質を持ち『聖人』でもある。この程度の事など……」

言っている事の九割は分からなかったが、何やら箸で困っている事だけは理解した。
くすくすと笑った後、優菜はそっとアックアの右手に自分の手を添えた。

神の右席としての顔

集中して箸と格闘しているアックアの右手に、そっと優菜の手が添えられる。
突然の事にびっくりするアックアだが、優菜は全く気にする様子はなく言葉を口にする。

「ウィリアム様、親指と人差し指はこうです」

そう言って優菜はアックアの指を丁寧に操っていく。
何げなしにしているようだが、反対にアックアは気が気でなかった。
優菜はアックアの手全体を後ろから操作しているので、自然と体が密着する形になる。
首筋に優菜の息があたり、僅かにくすぐったさを感じるが決して嫌ではない。

（むぅ……）

手から感じる暖かさと、首筋から味わうくすぐったさ。
気恥ずかしさを感じていたアックアだが、何とかポーカーフェイスは維持できていた。
そこへピローンと軽快な音がする。
その音は小さかったので、アックアしか気付かなかった。
音のする方へ視線を向けると、フィアンマが携帯をアックアの方に向けていた。

「……何をしているのである」

「愚問だな」

親指を立てながらも携帯を向ける事を止めないフィアンマを見て、アックアは嫌な予感を覚える。
今日の付き合いで理解したが、フィアンマは科学に対する意識をかなり変えている。
ヴェントほどではないがフィアンマも科学世界に嫌悪感を感じていた。
だが、今は世界が平和になるなら科学世界の道具すら利用する。
言ってしまえば考えが柔軟になったという事だ。
こうなったフィアンマはある意味恐ろしい物がある。

「お前たちのラブラブ行為は俺様が永久保存しておいてやる」

ビキビキと自分のコメカミに血管が浮かび上がるのを感じたアックア。
そろそろ本気で殺害するべきか考えたが、フィアンマなら何度殺しても平気で生き返ってきそうだと思った。

「おいおいアックア。もっと笑顔を浮かべろよ」

「その携帯を粉砕されたくなければ、今すぐその行為を止めるのである」

「それにお喋りしてていいのか？」

「何？」

フィアンマに言われてアックアは何をしていたか思い出す。
そこで気付く、先ほど感じていた暖かさもくすぐったさも感じないということを。

慌てて背後をむくと、そこには富士山の壁紙に向かって体育座りをする優菜がいた。
膝に頭を埋めて、この世の終わりのような空気を醸し出していた。

「す、すまないのである」

アックアのために箸の使い方を教えていたのに、無視した挙げ句に他人と会話しているのだ。
ここまで完全に無視の態度をとれば、いくら優菜といえども落ち込まないわけがない。

「いえ、私のお節介ですし気にしないで下さい」

少しだけ涙声で言う優菜の姿を見て、アックアは激しく動揺する。
『涙』とはアックアにとって魔法名にこめるほど重要な意味を持つ。
その涙を自らの手で出させてしまった、これでアックアに動揺するなというのは無理がある。

「アックア、ちゃんと謝れよー」

原因を作ったフィアンマがのんきな声でアックアに言う。
フィアンマの顔に小皿を叩きつけると、アックアは優菜の背中に声をかける。

「すまなかった、そなたの好意を無碍にしてしまって」

「……」

「もし、もし私を許してくれるのなら、もう一度箸の使い方を教えて欲しい」

「今度は無視しません？」

膝から顔を上げた優菜はアックアを見ずに尋ねる。
その問いにアックアは小さく頷くと、優菜の頭を優しく撫でながら言った。

「無視しないのである」

「……分かりました。後……食後に少々付き合って下さい」

「分かったのである」

アックアの返事を聞いた優菜は、そこで初めて顔をアックアの方に向ける。
その顔は優しくも嬉しさを滲ませていた顔であった。

「ふふん、優菜。そこはアックアお兄ちゃんというべぎゃ！」

余計な事を言おうとしたフィアンマは、毎度ながら誰かに殴られていた。

箸の使い方を教えて貰いつつ食事をとるアックア。
必然的に優菜が横につくことになるが、その事について誰も何も言わなかった。
フィアンマなど時々携帯をアックアの方に向けて写真に収めていた

が。
しかし毎度アックアから折れた割り箸（尖っている方）を投げられていた。

「そういえば優菜、貴様今日の宿はどうする気だ？」

毎度ながら肉ばかり取るフィアンマの皿に、問答無用で野菜を入れる優菜に問いかける。

「本日の夜には飛行機にのる予定でしたので、宿などは手配していませんが？」

「なん……だと……」

宿を取っていないという優菜の回答に、フィアンマは驚愕した表情をする。

「宿を取っていると思ったが……なんと日帰りだったか」

「無理を言って出てきましたので、宿を取るのは難しいのですよ」

「ほほぅ、面倒なのだな」

野菜を避けつつ肉を食うフィアンマだったが、ついには野菜しか皿に入っていない状況となった。
我慢して野菜を食べつつ、フィアンマはある事を考える。

（贅沢を言えば一日、最低でも半日近くかけて調べたい所だが……下手な事をして学園都市に気付かれるのも問題だな）

いかにして優菜を足止めし、その力を調べる時間を確保するかフィアンマは考える。
今の時期に気付かれて彼女をほぼ監禁状態にされては問題がでる。出来れば学園都市が成長させて、良い所で横合いから奪い去る。それがフィアンマにとってベストのシナリオだ。

（他のメンバーも今は気付いていない。だが、何れ気付くことになる。そうなった時にこちらの陣営にいるのがベストだ。俺様の考えが正しければこの者は『神の右席』にとって重要な戦力強化の力を持っている）

嫌そうな表情で野菜を食べるフィアンマに、優菜は苦笑しながら見ていた。
他のメンバーも、フィアンマがまたくだらない事を考えていると思い特に気にしなかった。
だが、今のフィアンマは誰よりも真剣に物事を考えていた。

（『性質がない天使の力（テレズマ）』と表現したが、言葉からしておかしいのだよ。何故、属性がキッチリ決まっている天使の力（テレズマ）ではないのだと）

（保有する性質が最初から定められているし、属性に対応した用途でしか使えないのが天使の力（テレズマ）だ）

（なのにこの娘はその『常識（ぞくせい）』を無視している）

（分からない、これ以上は調べてみないとな）

（だが学園都市にいらぬ警戒を抱かれるのも厄介だ。消されては折角の逸材が勿体無い）

（慎重に事を進め、奴らからこの娘を奪還する必要がある）

（ふむ……そうか。この娘が足止めされる理由を作れば問題ないのだ。それも致し方ないと思ってしまう方法で……）

その結論に至ると、フィアンマは自分の小皿をこたつに置く。
そして立ち上がった後、全員に聞こえる程度の声量で呟いた。

「そう言えば教皇に話があったのだ。ちょっと行ってくるが、肉はちゃんと残しておけよ」

「嫌だ」

「断るのである」

「残念ですねー」

フィアンマの問いに、事前に打ち合わせしたかのように三人は揃って否定の言葉を述べる。
あいも変わらず仲が良いのか悪いのか悩む神の右席メンバーであった。

話がある、そう言って教皇を半ば強引に連れ去ったフィアンマ。
そしてそこで恐るべき事を教皇に言う。否、言うというより命令するという方が正しい。

その話を聞いた教皇は我が耳を疑った。
目の前の男は一体何を言っているのだ？　と。

「貴様……それを本気で言っているのか？」

「わざわざ俺様が冗談を言いに、こんな所まで来ると思っているのかね？」

驚愕しながら尋ねる教皇に、フィアンマは軽い口調で答える。

「そんな事が許されると思っているのか！？」

「異教徒の猿如きどうなろうと俺様の知ったことではない」

「馬鹿な……ありえない」

かろうじて絞り出すように告げる教皇を見ても、フィアンマの態度は全く変わらなかった。
あっさり返すフィアンマには、罪悪感も何もかもが見受けられなかった。

「んん？　何がありえないんだ」

嘲弄するような雰囲気でフィアンマは言葉を口にする。
しかし教皇はその言葉に反論する所ではなかった。

フィアンマが口にした話が余りにも恐ろしく、そして理解の範疇を超えていたのだ。
それを何とか理解しようとしたが、それは無駄な努力であった。

「そんな話……私が聞き入れると思っているのか！？」

絞り出すように言う教皇の言葉を聞いて、フィアンマは軽い口笛を吹いた。

「拒否するというのかな？」

その瞬間、フィアンマの纏う質が変わる。

鍋パーティで馬鹿やっている時でも、普段のおちゃらけた時の質でもない。

『神の右席』右方のフィアンマ、その二つ名を体現する質であった。

「くっ……」

その質を受けて教皇は苦悶の表情をする。

顔から幾筋もの汗が流れ落ち、呼吸も荒々しくなっていた。

そんなローマ教皇の顔を見て、フィアンマは緩やかな表情をしながら告げた。

「なぁに、お前次第では誰も傷つかずに済むよ」

この話はこれで終わり、そう言いたげに教皇へ背を向ける。

「必ず実行しろ」

最後に釘を刺す言葉を告げた後、フィアンマのシルエットは闇に消えた。

本当に姿を消したのか、あるいはそういう風に見せかけているのか教皇には分からなかった。

だが、フィアンマの姿が消えた事を認識した瞬間、教皇は膝から崩れ落ちた。

「何故だ、何故そんな事を考えついたのだ……一体何の目的があって……」

両手を床について肩で息をしながら教皇は言葉を発する。
その姿は二十億人のトップとは思えないほどであった。
だが、今の教皇はそれを気にするほどの心の余裕がなかった。

その状態のまま教皇はフィアンマが語った言葉を口にする。
口にするのも忌まわしいと思える命令を。

「ローマ正教徒ではない犯罪者を使って国際空港にテロを仕掛けろ……など」

宿題の答え

フィアンマが教皇の元に移動している間、アックアたちは遠慮なしに鍋を食べていた。
最も顕著だったのがアックアであり、次にヴェントであった。テッラだけ全くペースが変わらなかったが。

「鍋というのはいいものである」

満足げな表情で語りながら箸を置くアックア。

「まぁ否定はしませんねー」

「これでフィアンマのバカがなければな」

同様の思いだったのか、テッラとヴェントもアックアの言葉を否定しなかった。
若干嫌そうな表情をしていたヴェントだが、おそらく照れ隠しなのだろう。
口元に笑みを浮かべているのを、彼女は気付いていない。

「最初は鍋料理など馬鹿な、と思ったのである」

フィアンマの思いつきから始まった鍋料理は、最初から波瀾万丈であった。
ヴェントと優菜の想いのぶつかり合い、フィアンマが用意したアホな衣装。
テッラとフィアンマの肉の取り合い、箸に悪戦苦闘するアックア。
主にフィアンマしか馬鹿をやっていないが、終わってみればそれも

良い事と思えてきた。

「しかし見事に野菜しか残っていないな」

「フィアンマは肉ばかりでしたからねー。まぁバランスという訳ですねー」

『肉を残しておけ』そういったフィアンマだが、当然ながらアックアたちは守る気などなかった。
おまけに嫌がらせと思えるほど、肉だけを食したので、既に鍋からも予備からも肉は消えていた。

「さて食後のお祈りをして終わりとしよう」

アックアの言葉に従い、ヴェントやテッラ、優菜もまた食後の祈りを捧げる。
捧げ終われば食事は終了だ。そこでアックアは思い出す、食後に付き合ってくれと言われた事を。

「さて、私に話があると言ったな。ここで出来る話か？」

「えーっと、出来れば二人だけで話したいです」

「分かったのである」

そう言ったアックアはこたつから足を出し立ち上がる。
優菜もまたそれに従って立ち上がると、二人はそのまま部屋を後にした。

「なーに話すんだろうね」

「気になる所ですが、盗み聞きは出来ませんからねー」

「多分ブゾーニの馬鹿みたいに病院送りだ」

二人揃って笑う、それが開始の合図と言いたげに二人は暫く談笑をしていた。

優菜たちが立ち去って少しした頃、戻ってきたフィアンマは語る。

「俺様の肉がない」

二人で話したい、そういう事だったのでアックアは聖ピエトロ大聖堂から出る。

外に出れば厳密的には二人ではないが、アニェーゼ部隊の監視が入るので誰かから聞かれる心配がない。

「いい風ですね」

風にはためくフードを手で押さえながら優菜は口を開く。

二人で話す、そう言った優菜だがアックアには話のネタが全く分からなかった。

何しろ会ったのは法の書事件以降まるでないのだ。だから、二人で話すような内密の話などないと思っていた。

「……懐かしいですね。昔もこうやって二人で夕日を見ていた時が

ありましたね」

「あの時は修行の時間だったのである」

「ふふ、そうでしたね」

昔を懐かしむような表情をして優菜は夕日を見る。
アックアもそれに倣って同じように夕日を見ていた。

「法の書事件の時、ウィリアム様は私に宿題を出されました」

「……」

宿題と言われてアックアは初めて優菜が語りたい事を理解する。
アックアは確かに宿題ともいえるべき事を語った。科学世界、教会世界どちらを選ぶのだと。
おそらくその答えが今日聞ける、その事に僅かばかりの緊張をアックアは感じた。

「当麻、アリシア。どちらも住んでいる世界が違う住人。さて、私はどちらを選べばいいのでしょうか」

歌うように語る優菜からは、その問いに対する答えを聞いているようには見えない。
むしろ、今から答えを自分の口から言うのだと語っているかのようだった。

「……答えを聞こうか」

「あら、残念。こんな単純な罠にはひっかかってくれませんか」

くすくすと笑った後、優菜はアックアの瞳を見る。
アックアもまた優菜の瞳を見つめ返す。

用意された言葉に真実などない、そんな考えがあるアックアだが事
優菜だけは違うと理解していた。
彼女は言ったのなら、例えどれほど苦難の道でも必ず実行する。
九十九パーセントの確率で実現出来ないと言われても、残り一パー
セントを掴もうとするのだ。
だから彼女の言葉を一字一句聞き漏らさないよう、アックアは細心
の注意を払っていた。

「ウィリアム様、私は案外我が侭で欲張りなのですよ。だから、ど
ちらかを捨てるなど私には出来ません」

どちらも捨てない、言うなればどちらの世界の人間とも縁を切らな
いという事だ。
予想していた答えより遙かに違う答えに、アックアは一瞬面を食ら
っていた。
だが、すぐに彼女らしい答えという事に気付く。

「……アリシア、そして上条当麻。どちらにも等しく手を差し伸べ
るという事か」

「私はアリシアの姉であり、当麻の姉でもあります。姉が妹を、弟
を見捨てると思っていたのですか？」

「……」

何でもないように答える優菜に、アックアは語る言葉を失う。

本音を言えば教会世界に足を踏み入れる事を望んだが、それも答えを聞いた今では無理だと分かった。
彼女の中で魔術だの能力だのという世界は『小さい』のだ。
目に見える人を救う、そこに善悪の感情は存在しない。ただ助けたいという気持ちだけだ。

「もしも、例えばの話だ。アニェーゼ部隊が不条理な暴威に晒され、危険な作業を強いられていると知れば……貴様はどうするのだ？」

「助けるに決まっています」

優菜はさらりと答える。その言葉からいっぺんの迷いすら見受けられない。

「アニェーゼ部隊を助ければ、貴様は二十億人、百十三カ国から狙われるのである。それでも助けるのか？」

「それが何か問題なのですか？」

「……」

両手を広げて何かを受け入れるポーズをとりつつ優菜は言葉を紡ぐ。
その姿は、聖母マリアの像にそっくりだとアックアは場違いな考えが頭に浮かんだ。

「彼女たちは、こんな私を慕ってくれます。もし本当に彼女たちが不条理な暴威に涙を流しているのなら、私は手を差し伸べて掬い上げたい。例え傲慢だと言われても、例え二十億人が敵になるとしても」

その時、アックアの耳に何人か倒れるような音が聞こえた。
恐らくアニェーゼ部隊の誰かが喜びの余り気を失ったのだろうと理解した。

「倒れようとも、何度でも立ち上がってみせます」

「……ふっ」

気付いたらアックアは深い笑みを浮かべていた。
二十億人が敵になるという問いの答えが、余りにも自分の予想通り過ぎた為だろうか。

「貴様らしい答えだな」

「ご期待には添えられませんでしたか？」

「……本音を言えば、今でも私は貴様に教会世界へ来て欲しいと思っている」

もう夕焼けから夜へと変わりつつある空をアックアは見上げる。
その瞳は驚くほど優しく、そして暖かい色を宿していた。
普段のアックアを知る者なら、彼がそのような表情を出来る事すら驚きに値するだろう。

「傭兵時代、私はいくつもの戦場を渡り歩いていた」

「そして戦場の動乱を収めた時、私はいつも同じ事を思っていた」

「弱き者の心を癒してくれる人物がいれば……と」

理不尽な暴威を前にして屈する弱者が流す涙。
その根源を消し去る役目は、同じ暴威たる己の力であると信じている。

だが、悲劇に見舞われて心が傷ついた者たちを癒す事は出来ない。
兵士である自分では、所詮暴威を消し去ったらそこで終わりだ。
人々に安息を与え、心を安らかにする事など出来はしない。

それが出来るのは弱き者の為に涙を流し、その手でぬくもりを与え、人々を守るために立ち上がれる者だけだ。

アックアが優菜にこだわっている理由はここにある。
彼の中でこの条件をクリアしているのが、今だ優菜以外いないというのだ。

「私のような者では、人の心を癒せないのである」

「だから貴様がいれば、弱者の心を救えると思っている」

「……ウィリアム様」

ぽすんと気の抜けたような音がする。
遠くを見ているアックアの胸に向かって優菜が拳を打ち込んだのだ。
全く力の入っていない撫でるような拳なので、アックアは痛みなど感じていなかった。

「人は私たちが思っているよりずっと……ずっと強いのです」

俯きながら語る優菜は、前髪で目元が隠れておりどのような表情をしているか分からなかった。

「確かに弱者は暴威の前にただ理不尽に、無意味に嬲られ涙を流すでしょう」

「でも、それでも立ち上がる者はいるのです」

「無力感に苛まれ、涙を流し、血を流し、ボロボロになりながらも明日への希望を掴もうとする」

「それをひと括りに『弱者』と断じてしまうのは、いささか乱暴だと思います」

優菜の心に『不幸』という暴威に負けず屈せず、ただひたむきに生きている当麻の顔が浮かぶ。

何故、当麻の顔が浮かんだのか優菜自身分からなかったが。

「……そうか」

アックアは一言そういっただけで、それ以上は何も語らなかった。

「んん？　お楽しみだったかな？　二人は」

そんな二人に横合いから遠慮無く声をかける人物がいた。

全身が赤で統一されているフィアンマであった。

「フィアンマ、どうしたのである？」

「あー話の途中なら俺様は席を外すが？」

「いえ、問題ありません。何か御用でしょうか？」

薄く笑うフィアンマを見て、アックアは何か嫌な予感を覚えた。

「今夜の飛行機で帰ると言っていたからな。俺様がわざわざ時刻を調べておいてやったのだ。そしたら残念なお知らせが一つ見つかったのだよ」

「残念なお知らせ？」

抽象的なフィアンマの言葉が理解できず、優菜は首を傾げながら尋ねた。

優菜の言葉を聞いて、笑みが深くなったフィアンマ。

その姿を見たアックアは、無意識のうちに優菜を守るように前へ出る。

警戒するアックアの視線を受けながら、フィアンマは『残念なお知らせ』を告げた。

「国際空港がテロリストに占拠されたそうだ」

最大主教は偉いのよん

当麻がローラの頭をひっぱたいたせいで、二人の言い合いは更にヒートアップした。
サインしろと迫ってくるローラに、当麻は頑なに拒否の態度をとる。
流石に喧嘩状態を放置しておくわけにはいかないが、片方は何と言っても自分たちの上司である最大主教（アークビショップ）。
おいそれと止められない上に、こちらの様子に気付く様子もない。

「私はイギリスの重鎮である最大主教（アークビショップ）なのよ！」

「こんな奴が重鎮……だと。イギリスは大丈夫なのかよ」

「なっ！　なっ！　こんな奴とはどういう意味！」

「我が侭だし、子供っぽいし、口調はおかしいし、胡散臭さが漂っているし、それになによりさ」

そう言うと当麻はローラをじっと見つめる。
自分から見つめる事はあっても、相手からまっすぐ見つめられる事は数少ないローラ。
当麻の視線に思わず腰が引けてしまった。

「それになにより……？」

「お前ってさ、絶対人望ないだろ？」

当麻はさらっと、とんでもない爆弾発言を口にした。
しかし日頃から思っていたのか、神裂たちは無意識のうちに心の中

で同意していた。

「なっ……！」

思わぬ事を言われて、ローラは顔を真っ赤にしながら震える。

「し、失礼なのよ。私は人望が凄くあると分かっての狼藉なの！？」

「本当かぁ？　神裂？」

当麻とローラ、二人は同時に神裂へ視線を向ける。

その視線を受けた神裂は、何度か目を泳がせた後、静かに顔を背けた。

「こ、こら！　神裂！　どうして視線を避ける！」

「申し訳ございません、最大主教（アークビショップ）。私にはこれが限界です」

いきなり部下に裏切られた（当然の結果だが）事に、ローラはショックの余り呆然と立ち尽くす。

そのローラに、当麻はぽんっと優しく肩に手を置きながら言った。

「最大主教（アークビショップ）ちゃんは、超人望があるって訳ね」

自分の姉妹たちの口調を微妙に真似る当麻。

その言葉に思わず堪忍袋の緒が切れたローラは、当麻の手を払うと両腕を上げて攻撃し始めた。

「おっと、やべぇ！　逃げないと絞首刑ですなー！」

ローラの怒りをみた当麻は、ローラに背を向けると全力で逃げ始める。

「待つなのよ！　幻想殺しの少年！？」

「待たないなのよ！」

「人の口調を真似するなー！」

ドタバタと軽快な足音を立てながら二人は追いかけっこを興じる。展開についていけない神裂たちは、ただ呆然と見ているだけしか出来なかった。

「いいぜ、テメェが俺に追いつくというのなら……まずはその幻想をぶち殺す！？」

「何かっこつけてるなり！」

片方は幻想殺しという魔術師にとって最悪の部類に入る能力を持つ少年。
片方はイギリス清教『必要悪の教会（ネセサリウス）』のトップにして最大主教（アークビショップ）。

なのに今の二人は単なる馬鹿をしあう学生にしか見えなかった。
もっと変な目で見れば、恋人同士がじゃれ合う姿に見えない事もなかった。
ひたすら放置された神裂たちは、どうするべきか迷いに迷っていた。

「お前って体力ないよなぁ……」

「わ、私は、イ、イギリス清教の最大主教（アークビショップ）なりけり。た、体力は神

裂で、じゅ、十分なのよ」

ケロっとしている当麻だが、反対にローラは肩から息をしながら当麻を追いかけていた。
足下は危なっかしいほどふらふらしており、今にも床に座り込みそうな感じだった。
ローラの姿を見た当麻は、心の中に小さな悪戯心が沸き上がった。

「そういえばこの奴隷宣言書にサインすると、俺とお前は夫婦になるんだよな？」

「？？？　何を当たり前の事を」

夫婦という単語に吹き込んだ神裂たちだが、当麻とローラはそんな神裂たちに気付かず会話を続けていた。

「ふぅん、よっと」

そういうと当麻は契約書に『サインするふり』をする。普通ならバレバレだが、今のローラは疲労困憊状態だった。
本当にサインしていると思ったので、自分の計画の成功にローラはほくそ笑んだ。

（これで幻想殺しという『兵器』は我が手中に落ちたなりけり）

（禁書目録の囲い込みだけでは弱い。イギリス清教を裏切らないほど、もっと強固な絆が必要なのよん）

（ステイルが何か言ふと思うが、その辺りは適当に押さえ込めば良い。アレは禁書目録にゾッコンなのだから）

色々と考えていると当麻が羊皮紙にサインし終えたようだ。
これで完璧、若干道がそれたがイギリス清教は大きな戦力を得る事が出来た。
そう思っていたローラの幻想（おもわく）は見事にぶち殺された。

「さて、夫婦になったんだから夫に奉仕して貰わないとなぁ」

羊皮紙を懐に仕舞い込みながら当麻は言う。
その言葉の意味が分からないローラは呆けた声を上げた。

（奉仕？　何の……）

その時、当麻が両手をわきわきとさせながら近寄っている事に気付く。
何かしら嫌な予感を感じたローラは、数歩後ろに下がった。

「た、尋ねるが……その手は何の意味があるといふのよ？」

「さーて、何だろうなぁー？」

ニヤニヤと嫌らしい笑いをする当麻を見て、ローラはその手の動きが何を意味するか理解する。
そして理解したと同時に、その顔が真っ青に染まっていった。

「逃げないと奥さんを食べちゃうぜぇぇーーー！！」

「きゃあああああああ！！！！！　よ、寄るなぁーーーーーー！！！」

攻守交代、今度はローラが逃げ、当麻が追いかける番となった。

「いいぜ、お前が逃げるというのなら！　まずはその幻想をぶち殺す！」

「だからかっこつけるなぁー！」

ドタバタと軽快な足音をあげつつ逃げるローラ、そして追いかける当麻。

最も、当麻は全くその気がなく、単にローラをからかっているだけだが。

女性にはとんでもなくウブな当麻だが、なぜかローラとはこういう関係じゃないとダメだと思っていた。

むしろこれが、二人の関係上一番しっくりくるやりとりだと考えていた。

それはどちらも中心に立つような人物、だからだろうか、対等に互いを見ているのは。

「待てやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーー！！」

否……考えすぎかもしれない。

運動して気分爽やかな笑顔の当麻と、肩から息をして完全にへばっているローラ。

「つ、疲れた……のよ……」

「ふっふっふ、それじゃあ上条さんが素敵愉快なマッサージをしてあげましょうか」

「け、結構……なのよ……」

本当にへばっているのか、ローラは当麻の冗談にも軽口で答えようとはしなかった。

（おかしいのよ……この男と会話すると調子が狂い過ぎたるわね……）

ローラは自分の行動に今更ながら疑問を抱いていた。
いつもの人を喰ったような態度を取れない。
会話のペースが当麻のペースにぐいぐいと引きずられていき、気付いたら今のような惨状だった。

（本気で……いく必要があるかもしれぬ）

幻想殺しの力は強大だ、使い方を誤らなければ恐ろしい兵器と化す。
どんな強固な結界も、恐ろしい攻撃も、それが異能の力なら打ち消す事が出来る。
処理が間に合わない攻撃もあるが、そんな攻撃はかなり限られている。

だが、もしもその力を持つ当麻が敵になったら？
味方では頼もしさを出す幻想殺しだが、敵になればこれほど厄介な力はないだろう。
だから幻想殺しの力を持つ当麻を、常にローラの駒として縛りつける何かが必要と感じた。
それが夫婦という強固な絆である。

部下を使う、という手もあったが、部下がいつまでも部下の状態でいる保証はなかった。
だからローラは、己の身を使って夫婦という絆を作ろうと考えたのだ。

（しかし、神裂たちは幻想殺しの少年を好いている）

だが、イギリス清教の面子は当麻に恋愛感情を抱いている。
夫婦が強固な絆を生むとしても、それで部下が離反しては意味が無い。
そこは言葉巧みに言いくるめておけば良いとローラは考えていた。
あくまで夫婦という形さえ取っていれば、当麻がどのような女と情事をしようが構わない。
むしろ戦力になる人間を引き連れてくるという可能性もある。
現にオルソラや、天草式十字凄教という駒が簡単に手に入った。
おまけに天草式十字凄教は、『聖人』の神裂に対して足枷の機能を果たしていた。
更に当麻を縛りつければ、当麻を好いている人間はイギリス清教を裏切らない。
例えローラの言葉でも、当麻の口から言えばプラスの感情で受け止

めてくれる。
神裂たちも、適当なタイミングで『夢』を見せればよいとローラは考えていた。

「おいおい、本気でへばってるのか？　ちょっとからかい過ぎたな、すまん」

ぐったりとしているローラはしっとりと汗をかいていた。
当麻は自分の汗をふいたタオルで、同じようにローラの汗を拭きとっていく。

（この男……苦手かも）

からかったかと思えば、急に優しさを出して接してくる。
今までローラが接したことのないタイプの人間だった。

「……怒るのも馬鹿らしいのよ……」

そう言ってタオルを強引に奪うと、ローラは自分の手で汗を拭きとっていく。
そんな態度をとる彼女に当麻は苦笑しつつそばを離れた。
立ち去る当麻の背中を見て、彼女は心の中で毒づく。

（……ふん、今日は調子が悪しきだけ）

そう思いながら汗を拭きとるローラの頬は、少しだけ赤みがかっていた。

「最大主教（アークビショップ）のせいで私たち空気化してない？」

「……まだ時間はあります」

「そ、そうです！　きっと大丈夫です！？」

当麻とローラのやり取りを見た神裂、五和、シェリーの三人は小さくため息を吐きながら思った。

何だかどんどんおかしな方向に話が進んでいないか、と。

当麻とローラのコントに微妙な危機感を抱いた神裂たちだが、ひとまず当初の目的を果たそうと考えた。

「おい上条、ちょっと顔貸せ」

「何でしょうかシェリーさん…って痛い！痛いですよ！？」

間抜けな返事を返す当麻に、シェリーは問答無用でヘッドロックをかける。

そして間抜けな顔をしている当麻を適当な部屋に連れ込んだ。

「これからパーティするんだけど、お前も参加していけよ」

ギリギリと頭を締め付けつつ当麻に言うシェリーはどこか楽しそうな笑みを浮かべていた。

その笑みに危険を感じた当麻は、冷や汗を流しつつ尋ねる。

「こ、断れば……？」

「エリスでヘッドロックするだけさ」

何でもないと言いたげにシェリーは答える。

むしろそっちをやりたいのかと尋ねたいぐらい意地の悪い笑みをシェリーは浮かべていた。

「死ぬわ！」

「じゃあ参加だな？」

「うぅ……不幸だ」

ヘッドロックの状態のまま当麻は肩を落とす。

「なんだぁ？　あたしの体じゃ不満ってかぁ？」

「誤解されるような事を言うなよ！？」

ニヤニヤと笑いつつ言うシェリーを見て、当麻はわざとシェリーがそういう風に言った事に気付く。

出来れば断りたかった当麻。

同姓のシェリーたちは気付かないが、男性である当麻はさっきからずっと匂いを気にしていた。

特に異臭とかそういう類ではない。どちらかというと女性特有の甘い匂いであった。

脳をくらくらとさせ、思考を麻痺させるような匂いなので大変危険な匂い。

理性が破壊されて、本能がむき出しになりそうなのを、なけなしの理性が押さえ込む。

いくら幻想殺しのある当麻といえども、その他は単なる高校生。

美少女や美人と一緒にいて平然と出来るわけがない。

「ていうかお願いだから服を着て下さい。上条さんのお願いです」

その上、オルソラやシェリーなどは普段よりかなりラフな格好をいていた。

寮なのだから当然だが、当麻から見れば普段見慣れない服装はとても違和感を感じる。
というかムラムラとしてしまうと言えば正しいだろうか。

「楽なんだよ。でもまぁお前がそんなに興味深そうにチラチラと見ていると……」

「きょ、興味深く見ていませんよ!?」

当麻も普通の高校生、やはりシェリーのような格好は気になって仕方がない。
だがじっと見るのは悪いと思ったり、理性がそれを押さえ込もうとする。
しかし本能は強く、時々チラリと見ては慌てて視線をそらす事を繰り返していた。

一瞬バレたと思った当麻は、ドキッとしながらも誤魔化そうとする。
実際は最初からバレバレだったが。

「もっと脱いでお前をドキドキさせたくなる」

「止めてお願い！　上条さんをいたぶってそんなに楽しいの!?」

「楽しいねぇ上条ー。思わず私の物にしたくなるぐらいになー」

ニヤァと意地の悪い笑みを浮かべたシェリーを見て、当麻はここに悪魔がいると思った。
だがその時、当麻の頭にある閃きが浮かんだ。
それをすれば間違いなくシェリーに意趣返しできると思った。

「……じゃあ俺も脱いでやるよぉ！？」

「……は？」

呆けた返事をするシェリーを後目に、当麻は自分が着ていた上着を無造作に脱ぐ。
脱いだ服を床にたたきつけた後、勝ち誇ったような笑みを当麻は浮かべた。

「さぁ次はシェリーの番だぜ？」

これこそが当麻の作戦。
やられて困る事なら、逆にやり返してやれば相手は困惑するはず。
おまけにシェリーは絶対脱がないだろうと踏んでいた。
何せ、それを脱いだら後は一枚しかない。そんなデンジャラスな事をシェリーがするはずがない。
そう読んでいた当麻だが、残念ながらそれは間違いだった。

「なんだ、そんなに女の裸がみたいのか……よっと」

そう言うとシェリーは着ていたシースルーをためらい無く一枚脱いだ。
パサッという音がする、それはシェリーが脱いだ証拠の音。

（な、なななななな何で！？）

当麻の予定ではここでシェリーが恥ずかしがる、もしくは怒るで有耶無耶になると踏んでいた。
だが、実際はシェリーが迷い無く脱ぐという予想すらしなかった結

果だった。
その事に当麻はパニックを起こして、視線をあちこち彷徨わせる。

「ほら、次は上条だぜ？」

（ぶふぉ！？）

シェリーが無警戒に腕をあげたせいで、シースルーが少しだけ上に上がる。
ただでさえ薄く短いシースルーだから、当然腕をあげたりすると大事な所が見えそうになる。
だが、最愛のようにギリギリ見えそうで見えないラインを維持していた。

「それとも脱がして欲しいのか？　ん？」

「け、けけけけけけけけけけ結構です！？」

そう言って当麻は自分のシャツを脱ごうとする。だが、服に手をかけたままの状態で固まっていた。
そんな当麻をシェリーはニヤニヤと楽しそうな笑みで見ていた。

（あっれぇ！？　気付いたら上条さんが追いつめられていますよ！？）

自分の作戦が穴だらけだという事に気付かない当麻は、今の状況にただ首を傾げるだけであった。
そもそもシェリーはズボラなので、そのような格好をしている事にすら当麻は気付いていないのだろう。
おまけに当麻はシェリーが心許した数少ない異性。照れや恥ずかし

さなど沸き上がるわけもない。
むしろ自分の虜にしようと考えても不思議ではないのだ。

「ほらほら、早く脱げよ」

脱ごうとしない当麻にシェリーはしびれを切らしたのか催促の言葉を投げる。
しかしここで服を脱ぐと、何か大事な物を捨てる予感が当麻の中にあった。
その予感を信じるか、それとも開き直って服を脱ぐか。
当麻の中で究極の選択がぐるぐると回っていた。

「ぬぐぐぐぐぐおおおぉぉぉぉ！！！！」

ぐるぐると思考が巡り続けてパニック状態の当麻は、ついに決断を下す。
それはシェリーすら予想しなかった行動だった。

「はい？」

当麻は自分が着ているシャツを脱ぐと、そのままそれをシェリーに着せたのだ。
これは流石に予想外だったらしく、シェリーも呆けた顔をして見ていた。

「女の子がそんな格好しちゃダメーーーーーー！！！」

絶叫した後、当麻は呆けた顔をしているシェリーを放置して部屋を出ていった。
バタバタと慌てた足音を聞いて、シェリーは残念そうな声色で呟い

た。

「ヘタレめ……だけど、暖かいな」

服を抱きしめるようにして呟く彼女は、どこか嬉しそうな表情を浮かべていた。

その後、当麻が薄着に対してシェリーが明らかに男物のシャツを着ている光景を神裂に見られる。

色々と問いつめられたが、当麻はそれを何とか逃げ切った。

服装にズボラなシェリーが、シャツだけはしっかり着こなしている事に疑問を感じた神裂。

しかし時間も押している今は、問い詰める事も出来なかった。

こうして、様々な思惑が絡んだ『必要悪の教会（ネセサリウス）』女子寮のパーティはよく分からないうちに始まっていた。

ちゃっかり最大主教（アークビショップ）も参戦という異例のパーティだが。

「使います？」

「頂くのよ」

五和はおしぼり作戦二号を発動するも、何故か当麻の隣に座っているローラに妨害されてしまった。

遠慮なしに奪い取るローラに、五和は何も言えず結局泣き寝入りするしかなかった。

「五和……頑張るのです！？」

ぐっと拳を握りながら神裂はこれからどうするか考える。
当麻の両隣は既に占拠されていた。左側にローラ、右側にオルソラ、何故か背中にシェリーがいたが。

このような時、日本人の神裂と五和は奥ゆかしさが足枷となる。
人前でベタベタするのは恥ずかしいと思っている。
だが、西洋人であるローラたちはそんな感情など道ばたのポリバケツに捨ててきている。
好きだからもっと触れあいたい、そう考えるのが自然と思っている。
最も、ローラは腹に一枚なにかありそうだが。

「箸とはまこと使いにくいのよ」

「いやいや、だからってグーで握るなよ！？　それは幼児握りっていって子供しかしないんだぞ？」

「面倒だから手で掴めばいいだろう？」

「パスタは流石に手で掴めないのでございます」

「誰がそんなのを手で掴むか！？」

ローラは一歩引いているが、オルソラとシェリーは自分の体をこれでもかと言うぐらい当麻に押しつけている。
オルソラから見れば貧相に見えるかもしれないが、シェリーもあれ

で中々スタイルがよい。
そのせいか当麻の顔は終始赤かった。
もし沈利の事がなければ、いかに当麻でも理性が吹き飛んでいただろう。

（何ですかこのおっぱい天国（パラダイス）は！　上条さんは理性崩壊突入（リーズンブレイカー）ですよ！？）

惜しみなく体と体を密着させてくるオルソラたちに、当麻の理性は崩壊寸前だった。
むしろこの状態でも、紳士たろうとしている当麻には賞賛を送りたいぐらいだ。

「こちらの料理はどうでございましょうか？」

そう言ってオルソラが当麻の口元まで料理を運ぶ。
密着したせいか、当麻の腕がオルソラの胸の中にずぶずぶと沈んでいく。
柔らかく、そして暖かいものに包まれる感触に、料理の事など頭に入ってくるわけがなかった。

「おっと、この料理を頂くぜ」

パニックを起こしている当麻の背中から、シェリーが皿にのっている料理を取るために腕を伸ばす。
当麻の背中によかっているので、料理を取ろうとすると当然ながら背中と密着する。

（いやぁぁぁぁぁぁーーーー！！！）

暴れ狂う本能が、強固な理性という鎖を食いちぎっていく。
超電磁砲や原子崩しなんて目じゃないほどの破壊力に、当麻はただ全力で本能を抑えこむだけしか出来なかった。

「んー、人差し指と親指を……」

一人箸と格闘しているローラを見て当麻は思わず叫ぶ。

「よかった！　隣が馬鹿口調のローラで!?」

「なっ！　馬鹿口調とか失礼なり！　それに呼び捨てたるは無礼よ!?」

突然馬鹿にされた事に、ローラは唇を尖らせて文句を言う。
年齢不詳なのに、何故かその仕草が妙に可愛らしくい当麻は思わずドキッとする。

（よくよく考えればコイツ中身は残念だけど見た目は美人じゃねぇかぁ!?　そんな仕草されたら上条さんもトキメイてしまいますよー!?）

三方からの攻撃に、当麻はタジタジになりながらも耐えるしかなかった。

イギリス式色気作戦

女性三人からの猛攻は当麻のライフをゴリゴリと削り取っていった。
既に理性のヒットポイントはゼロ付近であり、反対に本能はヒットポイントがマックス近くであった。
誰か助けて！　そう心の中で叫ぶ当麻だが、当然ながら味方は誰もいなかった。

「こちらの料理も美味しいのでございます」

「あー上条、その料理取って」

「当麻、私に箸の使い方を教えたまえなり」

今日に限ってものすごく積極的にアピールをしてくるオルソラ。
それに当てられたのか、同じようにアピールするシェリー。
部下に負けるのが尺なのか、妙に絡んでくるローラ。

神裂と五和は、そんな三人を顔を赤くして見ているだけであった。
特に五和は視線をずっと下に向けているだけで、全く動こうとしなかった。
天草式十字凄教の中でも、ダントツで奥手の五和だ。
こういった色気を使ったアピールなど、彼女では到底出来そうにもない。
それは神裂も同様で、色気アピールは彼女の性格上不可能であった。
最も、神裂と五和も参戦したら当麻の理性はゼロ所かマイナス値をぶっちぎりで爆走しただろうが。

ある意味ではギリギリのラインを保てている当麻だが、それがこのまま続くとは思えない。
むしろ時間が過ぎれば過ぎるほど、三人の大胆さが増していくと思っていた。

（あぁ……天国なのに地獄だ）

当麻の右腕はオルソラががっちり掴んでおり、彼女の胸の中に完全に埋没していた。
無自覚なのかわざとなのか、当麻には分からなかったが、とにかく恥ずかしくて何とかしたかった。
しかし離そうとすると、オルソラがとても寂しそうな表情をして見上げてくる。
その顔を見てオルソラの行為を止められなくなった当麻である。

背中はシェリーが寄りかかっており、時々彼女は肘をぐりぐりとしていた。
だが大抵直後に体を密着させたりする、いわゆるアメとムチのような攻撃を仕掛けていた。
明らかに楽しんでおり、当麻が顔を真っ赤にすればするほど彼女は積極的だった。

ローラはローラで、何故か当麻の呼び方を『幻想殺しの少年』から名前の『当麻』に変えていた。
何か心境変化でもあったのか、そう神裂たちは訝しげに思ったが事実は違った。
彼女は本気で当麻の『心』すら陥落させる気でいたのだ。
だからまずは呼び方から変えたローラである。
最も、何か腹に二枚や三枚ぐらいあくどい事を考えているようだが。

（ステイルでもいいから、誰かこの状況を破壊してー！）

そう願う当麻だが、勿論ステイルはここに来るわけがない。
教皇代理の建宮斎字も勿論来るわけがない。
そもそも建宮は、とある事情により目下療養中であった。

当麻が来る、その事で頭が一杯の五和だったが、何とかちゃんと話せるよう色々と練習をしていた。
時々告白の練習をしては、一人悶えていたりしたのだが……。
その一部始終を、実は興味本位で見ていた建宮以下数名の男陣に見られていたのだ。

その事を知った時、五和の中で何かがブチリとキレた。
部屋に戻り、芋焼酎をラッパ飲みして気合を入れた後、槍と腰に模造刀二本を携えて建宮たちのいる部屋を強襲した。
扉から一番近い場所にいた建宮の頭に容赦なく模造刀を叩きこむ。
グシャァッ！？と凶悪なまでに危険な音を部屋に響き渡らせた後、彼女はすわった目をしながらこう言った。

『あっははー、私が怒っている理由は分かっていますよねぇ？』

『言い訳なら聞きますよー。さんざんグチャグチャにブチのめした後に、まだ喋る元気があればの話ですけどねー！』

言葉通り散々ブチのめした後に、約束通り建宮たちの言い訳を聞いた五和。
だが、覗き見をした理由が『面白そうだから』という理由に更にキレてもう一回制裁を下したのは言うまでもない。
いらぬバイオレンスに付き合わされた天草式十字凄教の面子は、五和を止めようとはしなかった。

というよりブチ切れた五和を止める勇気がなかっただけだが。

そんな事情を知らない当麻は、建宮とか来ないかなというありえない願いを心の中でする。

最も、建宮どころか天草式十字凄教の全員が『必要悪の教会（ネセサリウス）』の女子寮に近づこうとしない。

誰もキレた五和の相手などしたくないから。

「そうでございます。お祝いの席ではアレがないと始まらないのでございます」

当麻があらぬ願いを心の中でしていると、突然オルソラが当麻から離れて両手をぽんと叩いた。

何かが足りない事に気付いたようで、オルソラは急々と部屋を出ていった。

「アレって何だ？」

「さぁ……」

オルソラが指しているモノが分からず、当麻は背中に寄りかかっているシェリーに尋ねる。

だが、シェリーも何の事か分からないようで、当麻の問いに首を傾げながら答えた。

「んん？　ああ……成る程」

「ローラは何か分かるのか？」

「だから呼び捨てするなと言ふと……んっ、多分だが葡萄酒だと思

うなのよ」

ローラの言葉にシェリーが気付く。

葡萄酒と言えば『神の血』にあたる重要なアイテムである。

オルソラはそれを持ってこようとしているようだ。

（酒か……酒！？）

呑気に構えていた当麻だが、ここに来る前にお酒を飲んで一体何をしたのかを思い出す。

刀夜や沈利の言葉を総合すると、やたらと沈利にベタベタした。一緒の布団で寝るよう駄々をこねた。

上着を脱がして胸を激しく揉んだ、首筋と胸の二箇所にキスマークを作った。

ようするに、本能むき出しに近い状態だったのだ。

全力土下座と買い物付き合いでギリギリ許してくれた沈利（実際はそれをネタにデートを要求しただけ）が、オルソラたちだとそうは行かない。

おまけにさっきまでの色気攻撃で、当麻の理性はほぼ瀕死状態なのだ。

ここでアルコール摂取という攻撃を理性にしては、当麻は本能を押さえられなくなる。

何としても葡萄酒の摂取を回避しなくては、そう決意した当麻であった。

「あのー、俺は未成年だからお酒はちょっと……」

「なんだ上条、神裂みたいな固い事言うなよ」

「別に飲むなとは言いません。派手に飲まなければ問題ないのです。それに私も未成年ですしね」

そう言って当麻の右側に座った神裂は、五和に手招きをしながら告げた。

「余り派手な飲酒をされても困ります。よって私が注がさせて貰います」

「そう言って、上条の隣に座る機会を狙っていたんじゃないの？」

ニヤニヤと笑いながらシェリーは神裂を茶化す。

幾分下心があったのか、神裂は頬を赤らめながら否定の言葉を口にした。

「べ、べべ別にそんなつもりはありません！」

「そうかぁ？　五和なんて凄く嬉しそうにして座ってるけどなぁ～？」

シェリーの言葉通り、五和は顔を赤らめながらも嬉しそうな表情をしていた。

「あのですね、飲まないって選択肢は……」

「ないな」

当麻の提案にシェリーは速攻否定する。

そもそも酒で理性を壊して、それなりの『状況』を作るのがシェリーの目的だ。

当麻が察しのいい人間なら回りくどい事をしないが、生粋の鈍感である当麻には言葉や態度では気付かれない。
むしろ理性が邪魔して、そういう事を意図的に避けようとする傾向すら見受けられた。

そこでオルソラたちはお酒で理性を弱めてみたらどうか、という考えに至った。

葡萄酒もクリスマスなら怪しまれないという計算だ。
但し、搦手のような手法は神裂と五和には伝えてない。
二人とも正攻法で攻めるタイプに見えたので、反対されるとシェリーとオルソラは考えていた。

「パンに葡萄酒。ミサの仕組みですね」

「主の誕生を祝う日には外せない作法だな」

「俺はイギリス清教の信徒じゃないんだけど……」

何だか話がドンドン進んでいる事に危機感を覚えた当麻だが、流れを変えれそうにもないと思い始めていた。
とにかくお酒の摂取を控えめにしようと思い、一類の望みを神裂に託した。

「あら、私の夫になったのなら既にイギリス清教徒なのよん？」

「ん？　ああ、お前まだ気付いていなかったの？」

「は？」

呆けた言葉をしたローラへ、当麻は懐に隠していた羊皮紙を投げつける。
羊皮紙を受け取ると、それを広げてサインする場所にローラは視線を向ける。

「く、空白!?」

上条当麻と書かれていると思ったが、実際は全く何も書かれていない空白だった。
その事にローラは驚愕し、驚きの声を上げる。

「そっ、俺がサインしたと思っているけど、実際は単にサインしたフリだったてわけだ」

「だ、騙したのね!?」

「騙される方が悪いんだよ。そもそもソレにサインさせようとしたお前だって、俺が英語読めないの分かっててあえて英文で書いたんじゃないのか?」

「な、何を根拠に!?」

当麻の指摘に思わず冷や汗が出たローラ。
確かに当麻の言う通り、報告書に上がっていた成績から英文は読めないとローラは読んでいた。
だから英語、それもイギリスが使う英国式で文を組み上げた。
日本語でも地方で発音が変わるように、英語も国によって微妙に発音や文法の組み方が違う。
その辺りも計算に入れて、誤読を誘発させたりしようと考えていた。

だがまさかその事に当麻が気付くとは思わず、ローラは内心焦りに焦っていた。

「いやな、ステイルが俺をもっかい調べるからって言ってな。まぁ俺に関する報告書を読まされた訳だ。そこに学歴とか色々のっていたから、俺が英語読めないのも分かるだろ？って事だ」

（ス、ステイルー！　余計な事をー！）

思惑が尽く外れていき、ローラは口を開けて呆然としていた。
羊皮紙に興味をもったシェリーが、ローラから羊皮紙をさっと奪い取る。

「何々……英国英語だね、これは」

「やっぱ日本で習う英語と違ってたのかよ！？　どうも微妙に文法が違うかな？　とは思っていたんだけど」

「あっは、面白い内容だな。えーっと『私、上条当麻は妻、ローラ＝スチュアートを愛し、生涯裏切らず、馬車馬のように働き、妻が困ったら躊躇いなく駆けつけて問題を解決する事を誓います』だってさー！」

一文を読み上げたシェリーが楽しそうに笑う。
その笑い声に気付いたローラが、慌ててシェリーから羊皮紙を奪い取るが既に遅かった。

「やっぱ奴隷宣言書じゃねぇか！　どこが婚姻届なんだよ！？」

「つ、妻の為に尽力するは夫の務めなり！」

「いや待て！　じゃあ妻は一体何をしてくれるんだよ？」

その問いにローラは思わず視線を逸らしてしまった。

実際、ローラが当麻に何かする事なんて一つも書いていない。

否、書いてはいるが全ては『努力義務』であり、実際はローラの気分一つで終わるのだ。

対して当麻のは全て『義務』であり、書かれている事を必ず遂行しなくてはいけない。

「夫に愛情を注ぐ？」

そんな事を書いていると言えないローラは、当麻から微妙に視線を逸らしながら言葉を濁した。

「待てコラァ！　俺の方は死ぬまで働けって書いておいて、お前はそれだけかよ！？　ていうか何で疑問形！？」

「つ、妻の務めは家を守る事にあるのよ」

「お前自分で守る気ないだろ！？　絶対人をそそのかして自分はぐーたらしそうだよ！？」

「し、ししし失礼なのよ！？」

次々に思惑を言い当てられてローラは背筋に冷や汗が流れているのを感じた。

このままでは何か嫌な事が起こる、そう思ってローラはその場から逃げ出そうとした。

「あっ！　待てや！　そんな危険な羊皮紙なんて燃やしてやる！？」

ローラが逃げようとしている事に気付いた当麻は、羊皮紙を掴もうと手を伸ばす。

だが、その手は羊皮紙ではなくローラの腕を掴んでいた。

「うひゃあ！？」

「うおぉ！？」

急に腕を掴まれた事にびっくりしたローラが、その手から逃げようと体を変な方向へひねる。

そこまで強い抵抗をされると思わなかった当麻は、そのまま体のバランスを崩す。

ドシーンっと軽快な音を立てて、もつれるように倒れた二人。

ちなみにシェリーは当麻が倒れる事をいち早く察知し、倒れる前に当麻の背中から離れていた。

「イテテ……あれ？」

「ひゃあ！　……んっ……」

起き上がろうと思って手に力を入れると、妙に柔らかい感触だという事に気付く当麻。

しかもローラの声が、頭の方から聞こえてきた。

（まさか……）

冷静になって今の状態を把握しようとする。

両手には凄く柔らかな感触、だけどどこかで経験したような感触だ

った。
そして倒れこんだはずなのに、体が感じるのは暖かさと甘い匂い。
絶対に床では味わえない感触に、当麻は一つの考えが浮かぶ。
「か、かかかかかか上条当麻!?　貴方という人は!?」
「あっはっはー、上条は胸好きなのかぁ?」
「わわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわっ!?」
神裂の焦ったような声、シェリーの楽しそうな声、五和の凄くテンパってる声。
その事から当麻は浮かんだ考えで間違いないという結論に達した。
そう、簡単にいえば当麻はローラの上に倒れこんだのだ。
おまけに両手は胸を鷲掴み、その上顔を胸の間に埋めるという超幸運(スーパスケベ)っぷり。
傍から見ると当麻はローラを襲って胸の間に顔を埋めている変態にしか見えなかった。
「ひぃやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
一際大きなローラの絶叫と共に、大きな平手打ちの音が部屋に響き渡った。

日本語教えて下さい

部屋の隅っこでローラは鼻を鳴らしながら膝を抱えていた。
その姿は一言で世界を動かすと言われた、イギリス清教のトップである最大主教（アークビショップ）には見えなかった。
まるで酷い目にあった少女のようだ。実際、かなり酷い目にあった訳だが。

「あのー……ローラさん。ほんっっっとうに申し訳ない」

そんなローラに当麻はお得意の土下座で謝罪をしていた。
しかしその姿をローラは一瞥しただけですぐそっぽを向いた。

「当麻、貴方は私の胸を揉んだのよ」

「はい揉みました。すげぇ柔らかかったです」

「だ、誰が感想など聞いておるか！」

「しまった！　つい本音が！」

当麻の言葉にさっきの光景を思い出して、ローラは頬が熱くなるのを感じた。

「淫靡なる私の肢体を弄びおって……」

「本当に申し訳ございません」

再び深々と土下座をする当麻を見て、ローラは小さくため息を吐い

た。
どういう力が働いているのか知らないが、当麻に何か策を実行しようとすると決まって幸運攻撃（ラッキースケベ）にローラは襲われていた。
さっきもイギリス清教に取り入れようと策を実行したが、結果はうまく行かない所か散々な目にあった。
既に胸を二回揉まれ、下着をばっちり見られ、尻を一回揉まれ、数回押し倒された所だ。
それが短時間で発生したのだ、もはや見えない力が働いているとしか思えないローラだった。

おまけに今ここにいる神裂やシェリーたちには全く発生しない。
何だかローラ一人にすべて吸収されているのでは、と疑いたくなるぐらいだった。

「本当に申し訳ない。何でも言う事を聞くから許して下さい」

当麻の言葉にローラがピクリと反応する。
そして神裂たちも、当麻の言葉に問題がある言葉が含まれている事に気付いた。

（最大主教（アークビショップ）にそのような言葉は身の破滅を招きますよ、上条当麻！）

ローラに対して『何でも言う事を聞く』は危険極まりない言葉である。
何しろ当麻がどうなろうと、その結果で自分に利益が得られるなら平気で命じる、それがローラ＝スチュアートという人物だ。

「……その言葉、嘘偽りはなかろうね？」

「お、おう……出来れば穏便な命令をお願いしたい所です……」

しかし分かっていてもローラを止めようとなれば、ローラは平気で相手がためらうように仕向ける。
神裂なら天草式十字凄教を使い捨てるとか、五和なら当麻と出会えないようにするとか。
その手のえげつない事もしてくる。だから神裂たちはローラを止める事が出来ない。

「では、一つだけ命じる。当麻……」

体育座りから立ち上がると、ローラは土下座している当麻を指さしながら命令を告げた。

「日本語を真面目に教える人物を紹介するのよ！」

「……は？」

ローラの言っている意味が分からず、当麻は呆けた表情をしながら顔を上げる。
同様に、神裂たちもローラの命令の意味が分からず、ただ呆然とローラを見ていた。

「つちみかどもとはるのやつのせいで……こんな口調なのよ！？
どうにかして正常にしたもうと思ふのだが、中々難しいなのよ」

「え？　それって素じゃなかったの？」

てっきり素の口調だと思っていた当麻はローラにそう尋ねる。

だが、それがローラの何かに触れたのか、急に両腕を振り回しながら叫んだ。

「違うのよ！？　わ、私はもっと優雅に日本語を駆使したもうのよ！　なのにもとはるのせいで……部下には馬鹿にされるし、馬鹿口調って言われるし、散々なのよ……」

ローラの言葉を聞いて当麻は何となく納得した。

土御門は時々イタズラを人に仕掛ける。

大抵は痛い目を見ているのだが、当の本人はまったく懲りる様子がない。

「（案外気にしていたんだ）あー分かった。といっても日本語教えれる奴って……」

そう言いながら当麻は該当しそうな人物を思い浮かべる。

何せ条件が厳しい、まずローラたちイギリス清教を色目無くみれる人物でないといけない。

学園都市は科学の街だ、宗教に関してはまともに取り合わないし馬鹿にする人だっている。

その上、魔術を知ってしまうのでかなり危険な事にもなる。

そう考えていると当麻の脳裏に一人だけ該当する人物がいた。

頭脳明晰で、言葉使いが丁寧な人（御坂はお嬢様だけど口が悪いのでＮＧ）。

その上魔術を知っていて、イギリス清教などの宗教を色目でみない。

余りに身近にいすぎて忘れていたが、該当する人物は優菜一人しかいない。
アリシアも該当するのだが、妙に古くさい口調で喋るので当麻的には却下の扱いだった。
何より優菜はインデックスの護衛の一人だ。いくらでも理由をつけてイギリスに連れてこれる。

「該当する奴が一人だけいた。そいつに頼み込んで見るよ」

「本当か！？」

自分の馬鹿口調を直せると思ったのか、ローラは目をキラキラとさせながら叫んだ。

「でも毎回イギリスに来るのは重労働だよな」

しかし問題がいくつもある。まずイギリスと日本では距離が遠い。第二に本人たちに全く面識がないのも問題だ、出来ればどこかで顔合わせぐらいはしたい所だ。

「ふふん、それは心配に及ぶなし」

しかしそれら全てを理解していそうなローラは、問題なしと言いたげに不適な笑みを浮かべる。
どういった策があるのか分からない当麻は、ただ首を傾げるしかなかった。
遠巻きに見ている神裂たちも、ローラが何を言い出すか少し不安そうな感じで見ていた。

「私が学園都市に行けばよいのよん」

何でもないと言いたげな表情で、とんでもない事を口走ったローラだった。

「「「「「はい？」」」」」

ローラの言葉を聞いて五人は目が点になった。
仮にもイギリス清教のトップが、その椅子を放置して学園都市に行くと言い出したのだ。
彼女でなければ『何を馬鹿な事を』と一笑されただろう。

「そうすれば問題はない。みっちりと勉強が出来ようが」

「いやいやいやいや、お前一応イギリス清教のトップだろう！？そのトップが組織をほったらかしってどうなのよ！？」

「大丈夫、一ヶ月もあれば十分なのよ」

ダメだこいつ、人の話を聞く気が全くない。その事が分かった当麻は、誰か別の人に説得して貰おうと考えた。
だが、その言葉を口にする前に、ローラがある言葉を呟く。

「護衛として二名ほど連れて行くのよん。勿論、その間は学園都市に住む事になろうが……ああ、ステイルは却下よ」

その瞬間、神裂たちはローラの味方に回った。
勿論、その護衛に任命されたいからだ。
もし任命されれば他よりアドンバンテージが大きくもてる。
何せ、気軽に会いに行けるのだ。

「んん、仕方ありませんね。一度言い出すと聞かないのが最大主教（アークビショップ）」

「まぁいいんじゃない。最近は事件もなく平和だしさー」

「そうと決まれば早速準備するのでございます」

「おしぼりを準備しないと……」

（あれぇ!?　何で皆乗り気なの!?）

いきなりやる気を出した四人に当麻はただ困惑するだけであった。
最も、この鈍感男が自分に会いたいからという理由など気付くはずもないが。

「そうと決まれば早速かけあうのよ!?」

『ふむ……学園都市に一ヶ月ほど滞在したいと?』

「そういう事なのよ、総括理事長アレイスター」

あれから学園都市にかけあうと言ったローラは、当麻たちに二、三言葉をかけた後パーティを抜け出した。
そうして即学園都市側にコンタクトをとり、現在アレイスターと会談中という訳だ。

『解せないな、何故貴女が直接学園都市に来るのかね？』

今まで部下に当たる神裂やステイルが学園都市に来る事はあっても、ローラ自身が出てくる事は全くなかった。
それが急に学園都市を訪問すると言いだし、二名の護衛とローラの滞在許可書を発行しろと言ってきたのだ。
突然の事に、流石のアレイスターも疑問だらけであった。

「ふふん。色々事情がありけるのよ、色々とな」

『……』

自らの真意や本音を伏せるローラだから、問いただしても本当の答えを聞けるとは思えない。
その為、アレイスターはしばし思考に入る。

『（ローラ＝スチュアートがイギリスを離れ、わざわざ学園都市に来る理由は何だ）』

『（期間は一ヶ月、連れてくる人材は二名の護衛のみ）』

『（まぁよい。わざわざ突っぱねてプランに影響を出しても問題だ。監視を強めておけばいい）』

「答えを頂きたいな」

沈黙に嫌な予感を感じたのか、ローラはアレイスターに答えの催促をする。
それから暫く無言だったアレイスターだが、ふいに薄く笑うとローラの問いに答えた。

『分かった。ローラ＝スチュアート及び二名の護衛に対して滞在許可書を発行しよう』

「話が分かってありがたいのよ」

『申し訳ないが居住地はこちらで決めさせて頂く』

「構わぬ、それなりの広さがあればそちらで選ってもよいなのよ」

ローラは自分の口調を直すのがメインなので、その他については特に気にしていなかった。
正直監視はされるだろうと踏んでいたが、その辺りは問題なかった。
いくらでも監視を欺く手法があるのだ、いちいち気にしていては気分が滅入る。

『では後日正式な書類を発送しよう』

「ありがたや、それから幻想殺しの少年……上条当麻を借りたいのよ」

『……アレを借りたがる理由はなんだ。こちらは答えていただこう、理由無き事で能力者を借用は出来ない』

幻想殺しを持つ当麻は、魔術師にとって天敵と言えるモノの一つだ。

その力を持つ少年を、ローラは貸せと言い出したのだ。アレイスターが警戒するのも無理はない。
しかしローラの口から出た理由は、アレイスターすら驚愕する理由だった。

「ふっ、未来の夫を鍛え上げる為なのよ」

『……すまない、ノイズがのったようだ。もう一度理由をお答えいただきたい』

「だから未来の夫を紳士に鍛え上げる為なのよ」

『……』

想像していたより馬鹿な答えにアレイスターはどう答えるべきか迷ってしまった。
まるで酷いバグが発生したかのように、彼の思考はかき乱されていた。

『確認するが本気か？』

「イエーッス、本気も本気なのよん」

『……』

どこか夢見るお姫様みたいに目をキラキラさせながら語るローラに、アレイスターは心底どうでもいいと思ってしまった。

『分かった、貴女がこちらに滞在している間、幻想殺しを借用しよう。但し、余計な真似をした場合は即返却してもらう』

「ありがとうなのよん」

それで会話は終了と言いたげに、アレイスターは通話を切ろうとする。

だが、切れる直前にとんでもない発言を残していった。

『ああ、それから国語の教材は貴女が住む家に発送しておく。安心してその口調を直すがいい』

「え？」

その瞬間、ブツンという音がしてアレイスターとの通話が切れた。

理解が追いついていないローラは、呆けた顔をしていたが、やがて顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「余計なお世話なのよぉぉぉぉぉ！！！」

葡萄酒の力

当麻は非常に困っていた。
最初は葡萄酒など飲んだら、自分の理性が危険だと思っていた。
だが実際は、当麻の理性ではなく別の物が危険な状況となっていた。

「む～、上条がしかめっ面だぞー」

ケタケタと笑いながら葡萄酒を飲むシェリー。
明らかに酔っており、褐色の肌でも分かるほど顔が赤くなっていた。

「お酒が足りなかったのでございましょうか」

そう言って頬に手を当てるオルソラもまた顔が赤くなっていた。
両人とも完全に酔っており、明日は二日酔いになるコース一直線だった。
だが問題は酔っている事ではない、二人の格好が問題なのだ。

（トイレ行ってる間に何があったのですかー！？）

女子寮なので基本的にトイレは女性用しか存在しない。
しかし、本日はオルソラ、神裂、五和、シェリーの四人しかおらず、またローラの一言により他の面子は全て外出していた。
よって特別に女性用トイレを利用した当麻だが、当然ながら入るのに勇気が必要とされ長い時間トイレの前にいた。
そして戻ってきたら、オルソラとシェリーの格好に吹き出してしまったのだ。

まずシェリーはシースルーの上に当麻のシャツを着ていたが、戻っ

てきたらシースルーを脱いでいた。
シャツの下には申し訳ない程度の下着を着ており、はっきりいって当麻には目に毒過ぎた。
更にその格好はシェリーが意図的に考えており、当麻がチラチラと見る度にニヤニヤと笑みを浮かべていた。

オルソラはオルソラで、インナー服を着崩しており普段の肌隠しなど見る影もなかった。
胸元はサービス精神でも芽生えたのか、谷間がくっきり見えるほど広げていた。
大腿部なども露出しており、普段から色気を醸し出している姿が更に凶悪なまでにパワーアップしていた。

そして二人とも葡萄酒を水か何かと勘違いしてるのか、異常なスピードで飲み干していた。
既に中身が空の瓶を数本ほど床に転がせていた。
それでも二人の飲むスピードは落ちなかい。

「あのー二人ともその辺にした方が……」

「大丈夫でございます。このぐらい普通でございます」

酔っぱらい特有の言葉を口にしながらオルソラはグラスに入っている葡萄酒を飲む。
はっきり言って信用出来ないのだが、当麻にはオルソラの行動を止められない理由があった。

「所でいつまで上条さんはこの格好なのでしょうか？」

「貴方を放置すると色々と危険です。ですので私がしっかりと見張

っておかないといけません」

「そ、そうです。仮にも最大主教（アークビショップ）にあのような行為をしたのですから」

今の当麻の格好、それは神裂に膝枕され、五和の膝に足を置くという奇妙な格好であった。

二人の言い分だとこれで身動きが取りにくいから、さっきのよな幸運（ラッキースケベ）攻撃が起こせないだろうとの事。

とはいえ、妙な体勢なので時々頭の位置を神裂から五和に、五和から神裂に変えたりしていた。

当麻を二人が独占している事に不満げなオルソラとシェリーだが、今まで散々独占していたのでここは黙る事にしていた。

といっても不満が消えるわけではないので、アルコールによるストレス発散をしているのだが。

（神裂と五和はこういった事には参戦しないと思っていたのだが……）

今まで神裂も五和も、オルソラやシェリーみたいに色気作戦に参加はしなかった。

それは奥ゆかしさを持つ日本的な心なのだが、ここにきてそういった言動が消え去っていたのだ。

（恐るべし葡萄酒）

勿論、理由は葡萄酒によるもの。

神裂と五和も、基本的には十字教の信徒なので葡萄酒に関しては違う認識でいた。

だから未成年だと分かっていても、『神の血』に当たる葡萄酒を拒まなかった。
しかし二人とも酒はあまり強い方ではなく、少し飲んだらすぐに酔ってしまった。

そして酔ったせいで、本人たちが持っていた理性や恥ずかしさは遙か彼方に消え去った。

おまけに神裂は絡み酒、五和はブツブツと何か言っており危険な香りを漂わせていた。

不幸な予感がした当麻だが、運悪く神裂に絡まれてしまい、最後は膝枕をする始末となった。
ここで終わりかと思われたが、酔いによって普段の奥ゆかしさを失った五和が神裂に抗議。
結果、代わり代わりに膝枕をする事となった。当然、当麻の意志など無視して。

（ローラでもいれば何とかなるんだろうが……学園都市と交渉するって言ったから帰ってこないかも）

ここにいないローラを思いつつ当麻はため息を吐く。

「うひゃあ！？」

すると突然神裂が奇妙な叫び声をあげた。
顔が動かせないので視線だけ上を向けると、神裂が顔を真っ赤にして震えていた。
うっすらと目に涙を浮かべており、微妙に睨んでいるようにも見えた。

「か、上条当麻。いきなり息を吹きかけないで下さい」

「あ、あー」

そう言われて当麻は気付く。
神裂は術式を組みやすくするという理由で、片方の裾を根本までぶった切ったジーンズをはいている。
ぶった切っているので、当然ながら太股は露出しているのだ。
膝枕の体勢で当麻が息を吐き出せば、当然神裂の太股に息が当たってしまう。

（あれ？　でも最初の方は何も言っていなかったぞ？）

神裂の膝枕はこれが初めてではなく、何度か五和と交代しつつしていた。
だが今までそんな事は言われていないので、突然の指摘に困惑するばかりだ。
事実は単に神裂が我慢していただけだが。

「と、とにかく注意して下さい」

「わ、分かったよ」

そんなに気になるならジーンズを変えればいいのでは、と思ったがあえて指摘はしなかった。
言ったら言ったで、また絡まれそうだなぁと思っていたから。

「でもさ、そろそろ体勢が苦しいので止めにしていただくとありがたいのですが……」

実際奇妙な体勢なので結構腰にきたり、肩が痛かったりする。
その上気軽に体勢変更が出来ない。動いたりすると神裂がびっくりしたりするのだ。
おかげで息苦しく、体が固定された感じがして違和感を感じる。
勿論、膝枕自体は心地良いのだが。

「私の膝枕では不満と言うのですか」

だが止めて欲しいという意向を伝えると、決まって神裂は不満そうな表情をしながら絡んでくる。
それを見ると何だか申し訳ない気持ちになり、結局当麻が折れている結果となる。
今回もそうだと思っていた。

「神裂のは息苦しいんだよ。膝枕してるんだから、もっと上条を受け入れてやれよ」

しかし、今まで黙って葡萄酒を飲んでいたシェリーが突然神裂に絡む。

「息苦しいとは？」

まさかシェリーから言葉が飛んでくるとは思っておらず、むっとしながら神裂は尋ねる。
そんな神裂を見て薄く笑いながらシェリーは答える。

「上条が動くとお前は無駄に何か言うだろ？　自由に動けないってのはそれはそれで息苦しいんだよ」

「しかし、それでは的確な膝枕が出来ません」

神裂の言葉にシェリーは呆れた表情をしてため息を吐く。

生真面目とは思っていたが、こんな時まで生真面目にならなくてもとシェリーは思った。

「完璧じゃなくていいんだよ。ようは上条が気持ちいいかどうかだろう」

「ですが……」

なおも不満を口にする神裂を見て、シェリーは顎に手を当てて考える。

少しして当麻を見ながらニヤァと笑みを浮かべ始めた。

（あ、なんか嫌な予感が）

「よし、私が手本を見せてやろう。上条、こっちにこい」

自分の膝をぽんぽんと叩きながらシェリーは告げた。

「考えてみれば私がまだ上条を膝枕してないんだ。このままだと機会が失われるから、ちょうどいい」

「あの……上条さんに拒否権は」

「ない」

おずおずと言う当麻にシェリーは問答無用で切り捨てる。

「まぁ手本って奴だから、上条が満足したら解放してやるよ」

「本当ですかね……」

ケラケラと笑うシェリーを見て一抹の不安を感じていた当麻。
その上、シェリーの格好は他の誰よりも危険であった。

（男のロマンである裸ワイシャツ……上条さんは耐えきれますかねぇ！？）

当麻が着ていたシャツに下着という、当麻にとってはとても危険な格好のシェリーであった。
シャツから見える肌からして、上（ブラ）はつけていない。おそらく下（パンツ）のみである。

「むぅ……そこまで言うのでしたら、是非お手本をお願いします」

どうやら神裂も当麻が何かに不満げだったのは気付いていたらしい。
だが、それを膝枕が完璧でないと考えていたようだ。

「お願いします」

五和もまた膝枕をした時、神裂同様だったので同じように当麻が不満を感じている事に気付いていた。
しかし五和の方は、いったい何が不満になっているのかさっぱり分からず、ただ困惑するだけであった。

「ほらほら、上条。さっさとこっち来てスパーンと寝てしまえよ」

毎度ながら拒否権なし、選択肢は一つしかない状況の当麻は大人しくシェリーの元に歩み寄る。

「本当にいいのか？」

「くどいなぁ、私がいいって言ってるんだからいいんだよ」

なおも確認する当麻に苛ついたのか、シェリーは強引に当麻を自分の膝に寝ころばす。

いきなりだったために、当麻は抵抗らしい抵抗が出来ずにシェリーのなすがままであった。

「うおっとと！」

衝撃に備えて目を瞑った当麻だが、予想に反して強い衝撃はこなかった。

（ああ、シェリーも女の子なんだなぁ）

見た目からは少々予想外なシェリーの膝枕はとても柔らかかった。

しかし位置が悪かったのか、当麻は頭をもぞもぞと動かす。

シェリーはそれを見て、くすぐったそうな表情をするだけで何も言わなかった。

そうして当麻が最適な位置を見つけると、シェリーの指が当麻の髪を撫で始めた。

オルソラと違うが、それでもゆったりと心地いい気持ちにさせてく

れる撫で方だった。

「ふふふ、意外と髪が柔らかいんだな」

そう言って笑うシェリーの表情はとても朗らかだった。
シェリーの表情と、撫でる指の感触から当麻はすぐに瞼が重くなっていった。
体中から力が抜けていき、徐々に意識が遠のいていく。

「何だ、もう終わりか。あっけないぞ、上条」

楽しそうなシェリーの言葉を聞いた後、当麻は口元に笑みを浮かべつつ意識を完全に手放した。

一歩先をリード

一瞬で当麻が寝た事に神裂と五和は衝撃を受けていた。
どこかもどかしい表情をしていた自分たちと違い、今の当麻はとても満足げな表情をしていた。

元々神裂たちの膝枕は休憩とは言えず、当麻は絶えず疲労を蓄積していた。
嫌とは言えずにずっと我慢していた訳だが、シェリーに対してはその必要がなかった。
だから体が休眠を訴え、すぐに寝てしまったという訳である。

「二人のはやり方が悪いのよ。恥ずかしいならそもそもしない方が賢明よ」

当麻の髪を撫でつつシェリーは言葉を発する。
その言葉に神裂と五和は反論する事が出来なかった。

「お恥ずかしいという気持ちはわかるのでございます」

今まで黙っていたオルソラがグラスをテーブルに置きながら言う。

「しかし、膝枕をする理由は当麻様を気持ちよくするのがメインでございます。ですので、私は当麻様の動きを全て受け入れているのでございます」

「上条に無理を強いてちゃあ意味がないのよ。こういうのは恥ずかしいのを我慢するもんさ」

もはや反論する言葉すら浮かばなかい二人は、悔しそうに唇を噛む以外になかった。
確かに二人の言うとおり、心地よくして貰おうと思っているのに却って無理を強いては本末転倒だ。
しかしどうしても恥ずかしいという気持ちが前にきてしまう。
その辺りは考え方の違いなのだろうかと神裂は思った。

「まーこういうのは難しく考えちゃ駄目だろ。全て上条に任せるんだよ」

そう言った後、シェリーは意地の悪い笑みを浮かべた。
その表情は、とても意地悪な言葉を思いついた表情であった。

「まぁこれで私たちは一歩リードって奴かな。膝枕は第一印象が大事だしなー」

「なっ！？」

シェリーの言葉に神裂と五和はギョッとする。
確かに彼女の言うとおり、神裂たちの膝枕に対して当麻の印象は余り宜しくない。
次にする時、オルソラやシェリーと神裂や五和を比べられたら当然シェリーたちを選ぶだろう。
しかも第一印象というのは中々拭えないのでかなり厄介である。

「私たちは仲間（おなじ）と同時に恋敵（ライバル）でもあるからな」

「正々堂々と当麻様の心をとってみせるのでございます」

シェリーとオルソラ、二人とも笑みを浮かべているが目は全く笑っ

ていなかった。
神裂と五和同様、シェリーとオルソラも当麻に愛されようと必死なのだ。

「次は負けませんよ……」

「ま、負けません！」

二人のやる気に当てられたのか、神裂と五和も不適な笑みを浮かべる。
この瞬間、一人の男を巡って四人の女たちは火花を散らす。
男の当麻はシェリーの膝でぐっすり寝ているが。

すぐに起きると思っていたが、当麻は案外長く眠っていた。
主賓がお眠りなので、クリスマスパーティは始まり同様よく分からないうちに終わっていた。
そして終わった頃にちょうどローラが戻ってきたのだ。

「話があるのよん」

そう言ってローラは三人の片付けを止める。
シェリーは未だ膝枕状態なので、片付けには参加していない。
当麻はぐっすりと眠っており、そもそも参加も何もない。
心なしか、シェリーの足を撫でているようにも見える当麻に、ローラはイラっときた。

「……起きるのよ、当麻！」

未だに眠りこけている当麻を問答無用で踏むローラ。

人の話を聞かないからか、それともシェリーの膝枕で満足げなのが気に入らないのか。

どういった理由かは本人しか分からないが、とにかくローラは当麻を強引に起こそうとした。

「いてぇ！？」

「起きた？」

いきなりの痛みに当麻はびっくりして声を上げる。

そんな当麻に、ローラはしれっと声をかけた。

「何か踏まれたような気がしたが……」

「気のせいなのよ。それから、話があるから聞く聞く」

「へいへい」

面倒くさい表情をしながら当麻は体を起こす。

起こすとき、微妙にシェリーが残念そうな表情をしていたが当麻は気付かなかった。

「さて、学園都市と話をつけてきたなり。今すぐは無理なので、おそらく年始から少しした後なのよん」

「つー事は大体年始から六ー七日後かな？」

「そうなのよん、『王室派』と『騎士派』を説得するのが面倒なりけり。ま、あっちは適当でいいわ」

「？？？」

ローラの言葉に聞き慣れない単語が出たが、余り自分には関係ないと思い無視する事にした。

神裂たちも特に気にしていないのか、目立った反応はなかった。

唯一シェリーだけが、何か嫌な事を思い出したような表情をしていたが、当麻にはその原因が分からなかった。

「まっこと面倒だけど、説得は早めにしないと。それで、護衛の事なのだけれど」

その瞬間、オルソラ、シェリー、神裂、五和がローラに視線を向ける。

ここで名前が挙がった人物は、一ヶ月という短い間だが学園都市に公式扱いで滞在できるのだ。

イギリスと日本では、どうしても遠距離になってしまう以上、この期間は重大な意味を持つ。

（神に純潔を捧げたのでございますから、恋は許されない感情と言われています。ですが、私はこの感情を無理に押さえ込むことなど、出来ないのでございます。むしろ当麻様から愛されたいという気持ちが沸き上がってくるのでございます）

（なんだろうなー、最初は憎い奴だと思っていたけど……一緒にいると妙に居心地がいいんだよな。上条を物にして、この居心地がいい空間をずっと味わいたい）

（最初は恩返しだと思っていました。ですが、それでは説明がつかない感情が私の中に渦巻いています。この感情をはっきりとさせるためにも、上条当麻の側にいなくてはいけません）

（法の書事件の時に立ち向かう姿を見て、ドラマみたいに一目惚れしちゃった。まさか自分が、と思ったけど……だからこそこの感情を大事に育てたい。上条さんと一緒に……）

全員が全員、思い思いの言葉を心の中で呟きながらローラの言葉を待つ。

やがて彼女の小さな口がゆっくりと動き、護衛者の名前を告げる。

ローラの口から告げられた人物名は。

「テロリスト？」

フィアンマの口から発せられた言葉に優菜は全く理解できていなかった。

それはアックアも同様であり、全く予想すらしなかった事態だ。

「そ、さっきニュースでも流れていたぞ。俺様の膝元でテロ行為とは図太い神経の持ち主だ」

自分が教皇を使って起こしたテロを、さも知らないように呟くフィアンマ。

だが、優菜とアックアはその事を知らないので、単純にフィアンマが憤っているようにしか見えなかった。

「他の空港も厳戒態勢に入っているから、しばらく空港は機能不全状態だ」

「……困りましたね」

優菜は外出許可書の帰宅時間欄を今日の日付で記入していた。
学園都市に着くのは深夜になるが、その辺りは別段問題ではなかった。
しかし、こうなっては帰宅時間を守る事が難しくなる。

アレイスターとの交渉用に使う小型端末は、例によって学園都市で厳重に保管されている。
棒やナイフも同様で、今の優菜は武具がない状態であった。
武具がなくても戦えるが、あるとないでは優菜の場合かなり違う。

「……」

自分は学園都市の人間、対してここは教会世界の中でも最大勢力を誇るローマ正教の本拠地。
この状態で襲撃でもされれば結果は明らかだ。
顎に手を当てて考えてみるが、どう考えても不利な立場にしかならない。

（恩師だから、という甘い考えは捨てるべきですね。そもそも彼なら、そんな甘い考えなど一笑するでしょう）

アックアやアニェーゼたちに会うという事は、敵の本拠地に単身向

かうという事だ。
日帰りにしたのも捕縛などを回避する為。
だが、ここに来て帰宅するための足を失ってしまった。非常にまずい状況と優菜は考えていた。

「フィアンマ、すまないが宿を手配してくれ」

「そう言うと思ったぞ、アックア。俺様が完璧に安全な宿を提供してやろう」

そう言うとフィアンマは後ろをくいくいと指さす。
その行動の意味が分からず、優菜とアックアは揃って首を傾げる。

「ちょうど近くに完璧で安全な宿があるからな。有効活用しないわけにはいかないだろ？」

「……まさか」

フィアンマが指さしている場所、そこは聖ピエトロ大聖堂の入り口であった。

ローマ正教のトップである教皇が住まう場所、聖ピエトロ大聖堂。
そんな場所をあろう事かフィアンマは宿だと言い出したのだ。

「そ、それはいくら何でも無理かと……」

「なぁに、鍋のお礼だ。折角の機会だから聖ピエトロ大聖堂で大の字に寝てみろ。きっと自慢できるぞ！」

自慢所か不敬罪で捕まりそうです、そう思った優菜だが勿論口には出さなかった。
出したら出したで、間違いなくフィアンマはもっと悪のりすると思ったからだ。

「あー、そうだ。優菜、貴様の番号とメールアドレスを教えろ！」

そう言いながらフィアンマは懐から携帯を取り出す。
それは世界的に有名な企業が出している最新の携帯であった。
学園都市ほどではないが、それでも世界から見れば最高の機能を誇る。

「あ、あのー」

勿論何かのためといって個人的に使っている携帯はある。
そもそも優菜は携帯といっても複数を持ち歩き、用途によって使い分けている。
まるで世界を駆け巡るビジネスマンだと苦笑しながら使っているが。

「待てフィアンマ。貴様、いったい何を企んでいる」

「ふふん、アックア。知ってるぞ、俺様は！」

そう言いながらフィアンマはアックアを指さしながら言った。

「お前は！　優菜と携帯番号の交換が済んでいない事を！　ならば俺様が先にすもばはぁ！？」

最後まで言い切る前にフィアンマがはるか彼方に吹き飛ぶ。
勿論、アックアが手加減なしに殴ったからだ。

ノーバウンドで数メートルは飛んでいき、強烈に地面へと叩きつけられていた。
地面が蜘蛛の巣のようにひび割れていたが、あいも変わらずフィアンマは無傷だった。

「痛いじゃないか、アックア」

「……どういう体をしているのだ」

常人ならミンチ肉になってもおかしくないぐらいの威力を放ったアックア。
だが、フィアンマは服が多少汚れた程度で、まるで何もなかったかのようにケロッとしていた。

結局フィアンマに押し切られる形で、優菜はフィアンマと番号を交換する。
勿論、フィアンマより先にアックアが番号交換したのは言うまでもない。

聖ピエトロ大聖堂での一夜

結局一夜を聖ピエトロ大聖堂で過ごした優菜。
勿論、普通に寝る事など出来ずフィアンマがアレをしようコレをしようと言い出したのだ。
その言動から放置できないと思ったアックアたちは、仕方なしにフィアンマのゲームに付き合った。
当然だが三人は寄ってたかってフィアンマをフルボッコにしたのは言うまでもない。

フィアンマの言動に乗せられて、結局四人は明け方近くまでゲームに興じる羽目となった。

「ふふ……俺様のカードは……最強だぜ」

疲れ果てて眠ったフィアンマは、とても満足げな表情をして眠っていた。
優菜が寝るべきベットを占拠して。
ヴェントやテッラも、流石に疲労が溜まっていたのでそれぞれの場所で眠っていた。
しかしアックアだけは今もなお眠ることが出来なかった。

「すー……そのカードは駄目です……」

優菜がアックアの肩に寄り添っており、その緊張からアックアは眠りなど吹き飛んでいたのだ。
しっかりとシャツが握られており、簡単には引き剥がせそうにもない。

「困ったのである」

どうするべきか、何度もそう考えたが結局答えは現状維持以外になかった。

（修行の時も時々あったが……今と昔では色々と違うのである）

数年というのは少女を変貌させるのに十分な時間だ、そう思ったアックアである。

腕に感じる感触は、出会ったときとまるで違っていた。

「ウィリアム様……それはハンバーグ……です」

「……どんな夢を見ているのである」

謎の寝言に少しだけ不安を感じたアックアだが、それもすぐに心の中から消え去っていた。

今はこの心地よい空間を出来るだけ感じていたい、そう思っていたからだ。

（きっと私と彼女はぶつかり合うだろう。お互いの信念に従って）

近い将来、互いの剣に信念を込めて戦う日が来るだろうとアックアは思っていた。

それは予感ではなく確信めいた考えだった。

むしろそうならなければおかしいとさえ思えるぐらい。

優菜との激闘、それは嬉しくもあり悲しくもある。

出来れば戦いを回避したい、だが反対に己の全てをかけて戦いたいとも思っている。

どのような戦いになり、どのような結末になるかさえ分からない。

（恐らく戦いの原因は上条当麻にあるだろう。法の書事件のような事を繰り返せば、いずれ我らは潰さねばならないのである）

法の書事件で幻想殺しの力を持つ当麻が担った役割はかなり高い。
彼以外は全てわき役であり、あくまで彼がアニェーゼを倒す為に動いたに過ぎない。
当麻からすれば一笑しながら否定するだろうが、ローマ正教から見ればそうにしか見えないのだ。

今のまま余り目立った動きをしなければ、ローマ正教も本腰を入れて排除には動かないだろう。
だが、もしもローマ正教の策略を邪魔し続ければ何れ排除をしようと考えるだろう。

（そうなったら『神の右席』として、誰がでる……まずはヴェントあたりか）

しかし当麻がただ黙ってやられるとも思わない。
そして優菜も黙って見ているはずなどない。
恐らく二人は死に物狂いで抵抗をするだろう。
そして、確実に二人を慕う人間もまた抵抗するだろう。

（ローマ正教は再びコルネリウス家と刃を交えるのか）

常に優菜の側にいるアリシアもまた黙ってみているとは思えない。

アリシア・フォン・コルネリウス。
コルネリウスの名を冠する人間。

コルネリウス家。
千五百年続く単一一族にして教会世界でも異端中の異端児扱いの一族。
過去に何度も十字教の討伐隊を尽く退けた力を持つ。
それはローマ正教も例外ではなかった。
彼らは敵対する相手には、一切の例外なく力をふるっていた。

その力は一言でいえば『説明出来ない力』だ。
誰もがその力に理解を示せないし、解析する事すら出来なかった。
現存の魔術知識では説明できないのだ。

その力をふるわれれば、多くの人間が例外なく傷つく。

（彼女は優菜を傷つける人間を絶対に許さない。それが彼女の絶対的な法となっているのである）

アリシアの行動原理は単純だ。
優菜が戦うなら自分も戦う。反対に戦わないなら自分も力を使わない。
全ては優菜がどこに味方し誰と戦うかで決まるのだ。

（戦争は起こさせてはならない。ならば、私がするべき事は何なのである）

上条当麻を説得する？　否、その程度で止めるなら最初から法の書事件のような事などしない。
ならば彼を討つ？　これもまた、不可能だ。学園都市の監視をかいくぐって彼一人を打ち倒すなど。

どのような考えも浮かんでは否定の言葉が同時に浮かび上がる。
結局は、上条当麻が静かに大人しくしている事を期待するという希望的観測しかない。

（『聖人』と言われても、結局は無力なのである）

アックアは小さくため息をつくと、視線を優菜の方に向ける。
優菜の表情は、完全にアックアを信じきっており全く警戒心を出していなかった。

（……誰も戦いなど望んでいない。誰も傷つかずにすむなら、それが一番なのである）

優菜の頭を優しく撫でるアックア。
その表情は滅多に見せる事のない、どんな肩書きも捨てた一人の男の顔であった。
『神の右席』でもなく『聖人』でもなく、ウィリアム＝オルウェルという男の顔。

彼らが纏う雰囲気は、師と弟子というより父と娘という関係に見えた。

「……」

そんな雰囲気をぶち壊すかのように、フィアンマが携帯をずっとアックアに向けていた。

「……何をしているのである」

今まで気付かなかった事に少しだけ後悔しつつ、優菜を起こさない

よう小声でフィアンマに問いかける。
だがフィアンマは問いに答えず、ただずっと携帯をアックアに向けるだけであった。

「ふっ、そうしているとまるで父と娘だな」

「余計なお世話なのである」

「誉めているんだがな、それにしても無防備な寝顔ではないか」

優菜の寝顔をカメラに収めようとしたフィアンマだが、その前にアックアが手元に落ちていた何かを携帯に投げる。
奇しくもそれは銀で出来たチェスの駒であり、それを手加減なしに投げたのだから結果はいわずもがなであった。

「ぎゃー！　俺様の携帯がぁ！？」

フィアンマの携帯は駒の威力に耐えきれず、そのまま携帯を突き破っていったのだ。

「貴様は礼儀という物を知らんのである」

木っ端微塵に砕けた携帯を見て涙を流しているフィアンマを一瞥しながら言う。

「アドレスはバックアップしてるが、俺様がとったカメラデータが藻屑じゃないか」

「どうせロクでもない物である。世のため人のためになったのである」

心底下らないと思ったアックアはフィアンマの抗議を右から左に聞き流す。

「まぁ今度、信徒の金で新しいのを買おう。それよりもだ、アックア……貴様にだけは教えておこう」

「信徒の献金を何だと思っているのである。それで、教えるとは？」

何やら喚いていたフィアンマだが、突然声質を変えた後薄く笑いながらいった。

馬鹿をやっている顔ではなく、その表情は『神の右席』としての顔であった。

その表情から、これから語る事は冗談でも何でもないのだとアックアは理解した。

「勿論、優菜が持っている力についてだよ」

「……この娘が珍しい力を持っているのは知っている。だが、取り立て騒ぐ事でもないのである」

「ふふふ、治癒なんてどうでもいいのだよ。それではなく本来の力の方だ」

「……本来の力？」

優菜が治癒の力を持っている事はアックアもフィアンマも知っている。

法の書事件の後に、彼女が一度見せた奇跡の力はフィアンマすら驚かせた。

だが、取り立てて騒ぐ力でもなく、何より『神の右席』の目的には余り必要性を感じない。
それ故に何もアクションを起こさなかったわけだ。
だが優菜がヴァチカンへ来ると知った時、フィアンマは一度は見る価値ありと判断した。

そうして実際優菜を見たわけだが、それからフィアンマの様子がおかしくなった。
『神の右席』の名前は伏せているとはいえ、『奥』に連れてきたり絡んだりとしている。
いくらアックアの弟子とはいえ、フィアンマの絡み具合は異常だった。

「気付かなかったか？　彼女から僅かに漏れている奇妙な力に」

アックアは指摘されたとおり、優菜の体に流れる力を注意深く観察する。
注意深く観察する事数分、指摘されて注意深く見て初めて気付く程の小さな力だが、確かに奇妙な力を感じ取った。

「……何だこれは」

「んん？　答えはすぐに分かるだろう？」

フィアンマの言葉にアックアは理解出来ないまま質問する。
だが、何の事はないと言いたげにフィアンマは答えた。
むしろ何故分からないとまで言いたそうだった。

「どうにも『封印』が強固すぎて分からんか。『治癒』もそれ以外の力も全て『ソレ』を隠す為なのだろう」

「しかし彼女が気付いている様子はない。ならば隠蔽しようと考えるはずはないのである」

アックアの問いにフィアンマは薄く笑った。そして簡単に言葉を吐き出していく。

「違うなあ。そいつは違うんだよアックア。優菜ではない、『彼女』が隠したいんだろう」

今度こそアックアは頭の理解が追いつかなくなった。
前から大事なことは漠然というフィアンマだったが、こうまで大雑把に答えた所を見たことはない。
つまりそれだけ重大な情報という事なのだろう。

「『彼女』とは一体何者なのである」

「ふっ」

頬に汗を流しながら尋ねるアックアの問いに、フィアンマは簡単に口を開いた。
そこから出てきた言葉は――――。

「

」

言葉の内容を理解した瞬間、アックアは声を上げて反論しそうになった。
既の所で押さえ込み、冷静にフィアンマの言葉を理解しようとする。
しかしどれだけ考えようと、どうしても信じられなかった。

「馬鹿を言うな。もしそれが本当なら、『彼女』を取り込んだ瞬間、優菜は確実に命を落としているのである！」

「それだけ特殊な『質』の持ち主って事だ。喜べアックア、貴様の弟子は世界でも類を見ないほどの『質』を持っている」

「信じられないのである……」

アックアは優菜に視線を向ける。

眠っている表情から、フィアンマが語った力の持ち主には見えなかった。

もしかしたら心のどこかで違って欲しいと願っているのかもしれない。

「俺様がわざわざ気をきかせて、カードゲームやその他のもので調べたのだからな」

「……何故、私に教えたのである」

「遅かれ早かれお前なら気付くと思ったからさ。それなら、早めに教えておいてやろうかと思ったまでさ」

「貴様がこの娘を利用しようとするなら、私が止めようと動く事を分かった上でか？」

今にも武器を取り出して戦おうと意気込むアックアに、フィアンマは薄く笑いながら答えた。

「何、利用しようとしても無理だよ。何しろ『彼女』が作っている

『封印』は解除の糸口すら見つからないからな」

フィアンマの言葉が信じられないアックアは、構えを解かず言葉に耳を傾ける。

もし、何かをしようと考えているなら、例え刺し違えようともここでフィアンマを倒すつもりでいた。

「そう睨むなアックア。俺様は貴様を敵に回してでも『彼女』の『封印』を解こうとは思っていないさ」

そう言って笑うフィアンマは、誰が見ても信じるに値しない表情を浮かべていた。

天使喰い（エンゼルイーター）

アックアの動揺が予想以上だったのか、それともヴェントやテッラに聞かせたくなかったのか。
理由は不明だが、フィアンマはアックアを連れて別の部屋に移動していた。
移動先は『奥』の中でもフィアンマが利用する個室。
例え『神の右席』のメンバーでも、おいそれと入る事が許されていない場所。

「秘密の話をするには十分な場所だ」

そう言うフィアンマは何処か楽しそうだった。

「数年前、日本で起きた事件を覚えているか？」

その言葉にアックアは少しだけ懐かしさを感じながら思い出していた。
アックアにとってあの事件は二つの意味を持つ。
一つは今も尚不可解な事件という事。
もう一つは優菜と出会うきっかけを作ったという事。

アックアが『神の右席』に入り少しした頃、極東の日本という国で大規模な魔術が発動したと報告があがった。
当初は奇妙な術式だがそれほど騒ぎ立てるものでもない、そうローマ正教は判断を下した。
まもなく、それは誤りである事に気付かされた。

「俺様も最初は驚いたさ。術式を解析すればするほど、どうして発

動したかが分からないからな」

「直接出向いた私でも、あの術式は理解できなかったのである」

発動して少しした後、余波と思われる力ががヴァチカンまで届いた。
だがその余波から計測できた魔力の量は文字通り桁違いであった。
余りの量に世界中の組織や魔術師たちが、緊張を強いられたぐらいである。

あくまで魔力や『天使の力（テレズマ）』が波のように吹き荒れただけで、破壊などは発生しなかった。
だが、それを生み出した原因を放置するわけにはいかない。
そう考えた『神の右席』は当時新参のアックアを日本に派遣した。

そして日本に到着したアックアは発動した術式について調べ始める。
だが、調べれば調べるほど奇妙な事に気付く。

「最初に調べたとき、術式の『本体』が見つからなかったな」

「……」

まずは術式の儀式場が全く見つからないのだ。
あれほどの大規模な術式を発動させた以上、それ相応の場所を利用したと考えられた。
だが、それに該当する部分はあれど、術式に関しての残滓などは全く見当たらなかった。

次に術者、もしくは術者集団の存在。
全世界に広がるほどの術式を発動させたにも関わらず、日本にはそれに該当する個人または組織が見つからなかった。

その当時滞在していた関係者全員を洗ってみたが、どの人物も発動させるような条件を満たしていなかった。

「まさに謎が謎を呼ぶ術式だった。でも分かれば簡単だ」

「そうだな、確かに原因は至極簡単だったのである」

フィアンマはどこか楽しそうに、アックアは辛さを耐えるような表情をしていた。

やがてフィアンマが口を開く。とても簡単に、あっさりと。

「気付かないはずだ。何せ術式を発動させたのが、当時はただの一般人である優菜なのだからな」

数年前の事件、教会世界に緊張を強いた犯人は年端もいかない少女だったのだ。

分かってしまえば簡単、だけどそれでも解明されていない部分がある。

「術者が優菜なのは確定である。だが、儀式場はどこにあった。当時の優菜は上条家に滞在していた。何の知識もない優菜が、あれほどの術式を発動させるなど不可能である」

「忘れたのか、アックア。かつて『天使堕とし（エンゼルフォール）』という事件があったのを」

「それがどうしたのである？」

フィアンマの言葉が理解できないアックアは素直に質問をする。

そんなアックアを見て、フィアンマはとても楽しそうな笑みを浮か

べながらいった。

「それを発動させた奴の名前は誰だ？」

「上条……刀夜！」

最後まで言ってやっとアックアは理解が追いついた。

『天使堕とし（エンゼルフォール）』、かつて上条刀夜が起こした『神の力（ガブリエル）』を堕とした術式。

その影響で人の外見と中身が入れ替わるという珍妙な現象が起きた。

結果的に『天使堕とし（エンゼルフォール）』は解決し、世界は平穏無事に戻った。

この時、刀夜が適当に並べたお土産で儀式場が構築された訳だが……。

「まさか優菜の時も、同じようにお土産で構築したというのか！？」

「それ以外に説明が出来ないだろう。『彼女』の存在が何よりもそれを証明している」

「……」

目の前が真っ暗になりそうだった、危険な情報をシャットアウトしたいという脳からの防衛策なのだろうか。

そんな場違いな事を考えながらアックアはフィアンマの言葉を思い出す。

上条優菜が発動させた『天使堕とし（エンゼルフォール）』、否、『天使堕とし（エンゼルフォール）』ではない。

もし名前を付けるとすれば。

『天使だよ、それも大天使とは別の異形の天使だ。だから『彼女』と言っていいのかわからん。もしかしたら『彼』かもな。それが優菜の中にいるんだよ』

『天使喰い（エンゼルイーター）』、そう名付けるのが一番だろうとアックアは思った。

全てを理解したアックアは、この時初めて神を呪った。
余りに非情な運命を辿る優菜は、これからも非情に危険な運命と共に歩み続けるだろう。
その非情の運命を、アックアには心の底から憎んだ。そしてそれを与える神も。

両親を失い、さらには自らの命すら失いかけたのに、それでも弟を心配した優菜に。
自らの夢を捨て、ただひたすら弟の為だけに道を走り続けた優菜に。
平和に生き、笑顔で満たされた人生を歩むと信じていた優菜に。

（そんな彼女に、貴方はまだ過酷な試練を与えると言うのか！）

（ただ弟を心配し可愛がっていた優しい少女に、この仕打ちは余りに非道ではないのか！？）

爪が食い込むほどの力でアックアは拳を握る。
普段は寡黙なアックアだが、この時ばかりは怒りの形相を顔に刻んでいた。

「さてアックア、貴様はどうする？」

「……何をである」

「おや？　分からないのか？」

アックアの言葉にフィアンマは少し意外そうな表情をする。

「俺様は手を出さないが、それが他の者にも適応されるかどうかは未知数だぞ？」

その言葉にアックアはハッとなる。

フィアンマの言う通り、もし優菜が天使を内包しているのなら、諸手を上げて欲しがる下種（クズ）は山ほどいる。

今は学園都市という場所、そして力が『封印』されているから殆どの人間は気付かない。

だが、もしも『封印』から漏れる僅かな力に誰かが気付いたなら。

たとえ学園都市にいようとも、確保に走ろうと考えるだろう。

学園都市側も優菜個人を守り切るとは思えない。

むしろ教会世界の力を持った人間を、排除に走ろうと考える可能性もある。

「今は気付かれないだろうが、それが今後続くとは思えない。なら、貴様はどうする？」

「……例え全てを説明した所で彼女が意思を変えるとは思えないのである」

「ほぅ？　じゃあ放置するというのか？」

「勘違いするな、私は彼女を信じている。だから……」

そこでアックアは言葉を区切ると、体中に溜め込んだものを吐き出すかのように息を吐く。

何かが抜けていく感覚を味わいながら、アックアは目を瞑って考える。

（……）

何を考えいるのか、本人にしか分からない。

だがフィアンマはアックアの姿を見て小さく笑っていた。

やがてアックアはゆっくりと目を開く。

「近い将来、我らは学園都市に侵攻するだろう。その時、優菜と戦いそしてここに連れて帰ってくる」

「素直に言う事を聞くのか？」

「優菜はああ見えて意外と頑固な部分があるのである。ならば、約束を取り付ければ問題ないのである」

「くっくっく、そうか」

アックアの答えが余程面白かったのか、フィアンマは喉をふるわせていた。

「まぁ俺様も優菜は嫌いではない。あの者が何処ぞのクズにいいようにされるのは、いささか尺というものだな」

「……」

「おっと、怖い目で見ないでくれよ。さっきも言ったとおり、俺様は何もしない」

フィアンマの言葉を信じ切れないアックアだが、これ以上話しても無意味と思い部屋から出ようとする。
そして扉に手をかけた時、フィアンマが不意に問いかけてきた。

「アックア、優菜をここに連れてきた後、一体どうするつもりだ？」

声から興味半分、面白半分で聞いているのだろうとアックアは思った。
だからこそ、その問いに真剣味を込めて答えた。

「『神の右席』後方のアックアの右腕に任命する。意を唱えるならフィアンマ、貴様とて容赦はしない」

隠そうともしない明確な脅し、異論を唱えるなら力でねじ伏せる。
普段のアックアらしかぬ言動に、少しだけ驚いた表情をフィアンマは浮かべた。

「なぁに、異論は唱えないさ」

だが、すぐに薄い笑みを浮かべると、少しだけ砕けた口調で言葉を発した。

ローラの小さな口から護衛の人物名が告げられる。

「護衛に連れて行くのは、オルソラ＝アクィナス。そしてシェリー＝クロムウェルの二名なのよん」

ローラの言葉を理解した神裂と五和は、床に膝をついて崩れ落ちた。
その姿はこの世の絶望を体現しているかのようで、理由が分からない当麻ですら罪悪感に襲われた。

オルソラいつもの笑顔だが、物凄く喜んでいるのか後光すら見えそうだった。
シェリーもまた薄く笑っていた。だが、その笑みは何故か嬉しさを含んでいるように見えた。

（何だか対極的な感じだなぁ）

当麻は四人を見て漠然と思っていた。
頬をかきながら四人を見ている当麻に、ローラは一枚の用紙を突き出す。

「ん？　なんだコレ」

突き出された用紙を受け取り内容を読もうとする。
しかし英語で書かれているので、やはり内容は全くわからない。
今回も怪しげな書類かと思った当麻は、ローラに訝しげな視線を向

ける。

「オルソラ、シェリー、ちょっとちこう寄るのよ」

だがローラは当麻の視線を無視して、オルソラとシェリーを手元に招き寄せる。

首を傾げるオルソラとシェリーに、ローラはヒソヒソと何かを話し始めた。

「……」

「……！」

「……！」

英国英語なのか、とにかく日本語ではないので当麻には何を話しあっているかさっぱり分からなかった。

だが驚いた表情をするオルソラとシェリー、反対にあくどい事を企んでいるかのような表情のローラを見て、当麻は何か嫌な予感を感じていた。

やがて話し終えたのか、ローラとオルソラとシェリーが互いの手を握り合っていた。

「何かとんでもないぐらいに不幸の予感が……」

不幸の予感をひしひしと感じている当麻に、シェリーは歩み寄ると当麻が手に持っている用紙を奪い取る。

「ふーん、何何……なんだ、こんな事か」

シェリーは用紙をピラピラと振りながら当麻に言った。

「これは単なる同意書だよ。学園都市にいる時、上条当麻に頼る旨が書かれている。英語なのはイギリスで保管する書類だからだよ。まぁ学園都市にも提出するようだけどな」

シェリーは手に持っている同意書を当麻に突き返す。
それを受け取った後、当麻は首を傾げながら尋ねた。

「同意書？　また何でそんなのがいるのだよ？」

「大人の事情ってやつだよ。書類面で何か残しておきたいって事だろ」

シェリーの事に当麻は「そんなものか」と呟いた後、何も考えずに同意書にサインした。
サインし終えた後、当麻はその書類をローラに手渡す。

この時、当麻が注意深くローラの表情を見ていたら気付いたのかもしれない。
何故なら、この時のローラは悪戯が成功して喜んでいる子供のような表情をしていたからだ。
葡萄酒による思考能力の低下と、寝起きに近いという事が不幸といえば不幸だっただろう。

当麻がサインした同意書。その同意書の最後の方を訳すとこう書かれていた。

――　緊急時を除いて上条当麻はローラ＝スチュアートを可能な限

りサポートする事をここに誓う。
――　上条当麻はローラ＝スチュアート及び護衛者のオルソラ＝アクィナスとシェリー＝クロムウェルの三名と一緒に住む事を承諾する。
――　上記の同意が効果を得る期間は、ローラ＝スチュアートが学園都市に滞在している間。
――　なお、上記に記載されている約束を、理由なき事で破った場合は罰を受け入れる事をここに誓う。

自棄酒と祝いの酒

他にする事がある、そう言ったローラは必要悪（ネセサリウス）の教会の女子寮を後にした。
ローラが出て行ってしばらくした頃、もはやパーティは摩訶不思議な世界を演じていた。
終わったと思っていたが、ローラが護衛者の名前を挙げたせいで再開したのだ。
ある意味では地獄図絵のパーティで、当麻はまともに思考出来ない頭で考える。

（どうしてこうなった）

目の前に広がる光景、それは自棄酒の神裂と五和、反対に祝杯の酒を上げるオルソラとシェリーの姿があった。
もはやどれだけ飲んでいるか分からないほど、彼女たちの足下には所狭しと中身のない瓶が転がっていた。

「う～、ちくしょう。つちみかどコロス」

物騒な事を言いながら日本酒らしきものをイッキ飲みする神裂。
ちなみにお猪口とかではない、本来ならノンアルコールを入れるコップでイッキ飲みだ。

「アーツチミカドサンッテイウンデスネ。コロスゼッタイコロス」

神裂と同じコップで五和も焼酎をイッキ飲みしていた。
普通ならいい飲みっぷりとでも言えるが、流石に殺気をまき散らしながら飲まれてはそうも言えない。

下手な事を言えば、その殺気が自分に向けられると思い、当麻は戦々恐々としながら遠巻きに見ていた。

何故、二人が土御門に恨み言を言っているのか。
それは、ローラが護衛者を決めるとき、土御門の意見を参考にしたせいだ。

『つちみかどもとはるの奴に言わせると、神裂と五和では問題があるそうなのよ。だから、あやつの意見を取り入れてシェリーとオルソラを選んだなりけり』

土御門曰く、神裂は機械が苦手だ。だから学園都市では生活すら危ぶまれるだろう。
それに『聖人』をおいそれと連れていけないだろうとの事。
五和は学園都市の空気にとけこめるが、他の面子と比べて戦力的に見劣りしてしまう。
天草式十字凄教は集団戦闘を得意とするので、個人戦闘での経験が薄い。

なら、仕事でコンビを組んでいるオルソラとシェリーの方が、阿吽の呼吸で対応できるのではないか。
オルソラは交渉に関して強いし、シェリーはゴーレムを使えるために戦力は神裂とまではいかぬともそこそこある。
何より学園都市を侵攻した時、当麻と優菜が出てくるまではかなり優勢だったのだ。
それを考えるとシェリーは護衛として合格点だろう。

土御門はローラにそう進言したそうだ。
曲がりなりにもローラはイギリス清教のトップなので、土御門もこの時は冗談を控えめにしていた。

最も、オルソラたちの方が後々面白いからというのも多少あったらしいが。

しかし、真剣に考えて答えたのだが、神裂たちからは『邪魔する奴』という認識をもたれてしまったらしい。

何とも哀れな土御門だった。まぁ、そう仕向けるようにしたのはローラなのだが。

『日本語の恨み、この時に晴らすのよん』

意外と口調を気にしていたローラは、ここぞとばかりに土御門へ恨みを返すつもりのようだ。

問題はちょっと痛い目を見て貰おうと考えたローラの思惑は、確実に想定外の状況になっている事だ。

「五和、後で土御門に『お礼』を言いに行きましょう」

「でしゅねー、ちゃぁぁぁぁぁぁんと『お礼』しないとですねぇぇぇぇぇ」

顔を付き合わせて飲んでいた神裂と五和が、突然不気味な笑いと共に言葉を発した。

そしてまたイッキ飲み、もはや二人には互いの顔しか見えてないかのようだった。

（土御門、いい友達だったよな）

どこか遠くを見るような表情で当麻は土御門の冥福を祈った。

あれは間違いなく逃げられない、絶対に殺られる。

本能が訴える、絶対に彼女たちが土御門を狙っている時、近づいて

はならぬと。
神裂と五和の様子から、当麻はそう理解した。

「お～い、上条よぉ。シケた面してないで飲めやぁ」

土御門の冥福を祈っていた当麻の背中に、シェリーが勢いよくのし掛かる。
その勢いでシェリーが持っているグラスから酒がこぼれたが、当の本人は全く気にしていなかった。

「あのーシェリーさん？　上条さんは未成年ですよ」

「んなもんクソ食らえだ。いいか上条、私が飲めっていったら飲むんだよ」

「なんつー絡みっぷり！」

「それとも口移しで飲ませてやろうかぁ？」

駄目だ、完全に酔ってやがる。そう思った当麻は小さくため息を吐いた。
だが、その態度がシェリーにはイラッときたらしい。
むっとした顔をした後、グラスに入っている酒を一気に飲み干す。

「ぷはぁ」

体の奥がぽかぽかする感覚を味わいながら、シェリーはグラスに酒を継ぎ足す。
並々と注ぐ姿はある意味酒豪にしか見えなかった。

「……あぁ」

その時、シェリーの視界の隅にあるものが見えた。
それを見た瞬間、シェリーの頭にはある考えが浮かんだ。

「くっくっく」

ニヤァと笑うシェリーはどう見ても危険な匂いしか漂わせていなかった。

「かっみじょう～」

再び当麻の背中にのし掛かったシェリーだが、今度は前回と違い何か楽しそうな表情をしていた。
だが不幸の予感をヒシヒシと感じた当麻は、シェリーが笑顔の裏に何か企んでいる事に気付く。

（嫌な予感しかしない……）

そう思いながらも結局は付き合うのだから当麻は人がよい。だが、その人の良さが時として仇になる事もある。
シェリーは当麻の体をまさぐっていたが、突然当麻の両腕を後ろに回して拘束した。

「お、おい。何するんだよ」

痛みは感じないがそれでも両腕が動かない事に不安を感じる当麻。
しかし当麻の目に映ったシェリーは、意地の悪い事を企んでいる表情をしていた。

（あ、なんか不幸の予感が）

「おいオルソラ、当麻が股の間に酒をこぼしちまったから拭いてくれ」

そう言いながらシェリーは器用にグラスに入っている酒を、当麻の股あたりにこぼす。
すぐに酒が服に染み込んで、下着までぐっしょりと塗れてしまった。

「それは大変でございます。すぐに拭きますのでお待ちください、当麻様」

そう言って現れたオルソラの姿を見て当麻は瞬時に吹き出した。
そして首から奇妙な異音を立てながら、当麻は視線を別の方に向ける。

「どうされたのでございます？」

「どうって……な、なんで下着姿なんだよ！？」

そう、オルソラは今下着姿なのだ。
はっきり言って当麻には目に毒過ぎてまともに見ることなど不可能だった。

（やっぱオルソラってすげぇ胸持ってるよなぁ……）

それでも若い力を持て余す当麻は、本能からくる欲求には逆らえなかった。
チラチラとオルソラを見ては、すぐに頭をふって違う方向を見る。
その繰り返しだった。シェリーに全部見られるとも知らずに。

「ほらほら、教えた通りにすれば上条は喜ぶぞぉ」

「犯人はテメェかよ!?」

オルソラの奇抜な格好の犯人は、今当麻を押さえ込んでいるシェリーだった。
睨む当麻の視線を受けても、シェリーはニヤニヤと笑うだけでいっこうに反省する様子はなかった。
しかしすぐに膝辺りに、何かもぞもぞと動いている感触に気が付く。
当麻はおそるおそる、自分の膝あたりに視線を向ける。

「???」

そこには四つん這いで当麻の股辺りに座っているオルソラの姿があった。
はっきりいって視覚効果は先ほどと桁違いであり、一瞬で当麻の理性が構築する第三防壁まで崩壊させた。

「ほら、台詞台詞」

「そうでございますね。えっと……」

シェリーの言葉に反応したオルソラは、その小さな口にハンカチをくわえる。

ただハンカチをくわえただけなのに、何故かエロさを感じた当麻は思わず唾を飲み込む。

「ご主人様、ご奉仕するのでございます」

半分当麻の理性を壊した所へ、オルソラのさらなる攻撃に当麻は理性が九割ほど破壊されてしまった。

（オオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォ！！！！！）

奇妙な雄叫びを心の中で上げながら、当麻はオルソラに視線を向ける。

勿論、当麻の視線は胸に集中しておりもはや隠す様子もなかった。

「（ヤバイ、白い肌に少し赤みがさしてて……上条さんはもぅ！）ご、ご奉仕！？」

理性などあって無きの状態の当麻は、オルソラの言葉に期待を込めながら尋ねる。

思わず唾を飲み込んだが、その音がやけに大きく自分の耳に聞こえた当麻であった。

「えっと、その……」

だが流石に恥ずかしさがあるのか、オルソラは視線をさまよわせながら言いよどむだけであった。
そんなオルソラに、シェリーは相変わらずニヤニヤと笑いながら語りかけた。

「ほら、ババーンって言っちまいな。テメェの無自覚な胸は、こういう時に使うもんだろう？」

「やっぱテメェかよ、そそのかしたの！？」

シェリーの言葉に思わずつっこんだ当麻は、少しだけだが理性を取り戻していた。
だが、なけなしの理性などオルソラの一言で木っ端微塵に打ち砕かれた。

「えっと……ご、ご主人様のあつぅいモノにわ、わたくしが、ごご、ご奉仕、させて頂き……ます」

最初から小さい声だった上に最後の方は尻すぼみ状態だった。
だから当麻にはオルソラが何を言っているのか全く聞こえてなかった。
しかしオルソラが顔を真っ赤にして俯いているのを見て、明らかに危険な台詞を言った事を理解した当麻。

「あっはっは、どうよ上条？　そそるだろう？　んん？」

「だ、だだだだだだ誰が！？」

「興奮しただろう？　オルソラの胸を貪り尽くしたいって思っただろう？」

はい、すいません。滅茶苦茶興奮しました。そして滅茶苦茶思いました。ごめんなさい。
と心の中でオルソラに謝った当麻。

「無理するなよ、上条」

当麻の顔を撫でながらシェリーは笑った。

「ほら、素直になれよ。オルソラを抱きたいってなぁ」

「お、おおおおおおおお女の子が、そんなはしたない言葉を使ってはいけません！」

「オルソラを抱くなら、私も混ぜろよぉ」

「聞けよテメェ！　こうなったら……」

理性が崩壊して何か吹っ切れたのか、当麻はシェリーの拘束から逃げると酒瓶を手に持つ。
行動が読めないシェリーたちが首を傾げるのを横目に、当麻は酒を一気飲みし始めた。

（酒を飲んで潰れるに限る！　間違いがあったら傷つくのは彼女たちなんだからな！？）

好きだから盛大にアピールしているのだが、やはり当麻は分かっていなかった。
女心が分からない当麻には、まもなく当然の結果がおとずれる。

「ゲホッ！　ガハッ！　グボッ！」

突然口から酒を吐き出すと、当麻はむせながら床に崩れた。
むせるのも当然だ、当麻が飲んでいたのは度数の高いお酒なのだから。
急性アルコール中毒にならなかっただけ、奇跡というものだ。

「おいおい、無理に飲むなよ。ったく、ヘタレだなぁおまえは」

苦笑いを浮かべるシェリーの顔を見た後、当麻の意識は深い闇の底に沈んでいった。

夢のような現実

朝の日差しを瞼に感じた当麻は、ゆっくりと意識を覚醒させた。
しかし心地よい感覚に、当麻の瞼は重たく全く開かなかった。

（はぁ～、何か気持ちいいなぁ）

柔らかい何かに包まれている感じに、当麻は全く抗えずなすがままだった。
手に触って撫でてみると、マシュマロのような感触だった。
自分の体温で暖まっているのか、ほのかな暖かさを指先から感じる。

（あぁ……昨日はいい夢見たし、今朝はこの感触だし……上条さんは幸運ですよー）

あまりの心地よさに、当麻の意識は再び深い闇の底へと沈んでいった。

女子寮のキッチンでオルソラは朝食の準備をしていた。
随分と手間をかけているのか、あちこちに移動しては調理を行っていた。
だが、オルソラから疲れなどは見受けられない。
むしろやる気しか感じられなかった。

「元気ねぇ……」

テーブルに突っ伏しながらシェリーはぼんやりと呟いた。
理由は軽度の二日酔いである。酷い頭痛などはないが、倦怠感がとても酷かった。
最も、神裂と五和は重度の二日酔いであり、今も尚布団の上で唸っていた。
そう考えると、これでもマシなのかなと思うシェリーだった。

「お水でございます」

シェリーの様子に気付いたのかオルソラがコップに水を注いで持ってきた。
しかし水を飲むのすら億劫なのか、シェリーはコップを眺めるだけでそれ以上は何もしなかった。

「あんたは平気なの？」

オルソラもシェリー同様かなりのペースで酒を飲んだはずだ。
しかしオルソラから二日酔いなどの様子は見られず、いつもの人の良い笑顔を浮かべていた。

「お水は飲まれないのでございますか？」

「はぁ？」

いつものマイペース会話のオルソラに思わず眉をひそめる。
だが、普段はこんな感じだったなと思いだしたシェリー。

「まぁいいか、水を貰うよ」

「大丈夫でございます。私は元気を頂いたのでございます」

何か良いことでもあったのか、凄く喜んでる笑顔を浮かべていた。
常人では分からないが、仕事でコンビを組むシェリーだからこそ気付く小さな変化だ。

（上条と何かあったのか？　しかし、昨日は潰れた上条を寝かしつけただけ……）

何が起きたか考えようとしたが、二日酔いから来る倦怠感がそれを邪魔する。
ほどなくして、面倒に感じたシェリーは考えることをやめた。

「もう少ししたら当麻様を起こしてくるのでございます」

「あーいってら。私はここでだらけているわ」

幸せ笑顔のオルソラの相手が面倒になったのか、シェリーは水を飲み干すと再びテーブルに突っ伏した。
そのまま寝そうな勢いだったが、あちこち動くオルソラの足音で眠る事は出来なかった。

（あーダッリィ……これは上条をからかうべきだなぁ）

どういう理論の飛躍かは本人しか分からないが、ニヤリと笑みを浮かべたシェリーの表情はとても楽しそうだった。

「うっ！？」

不幸の予感を感じた当麻は、寒気を感じながら目を覚ます。
思わず辺りをキョロキョロと見て、何もない事に安堵の息を漏らす。

「ふぅ……」

ぼーっとする頭を軽く振って眠気を追い出す。
しかしアルコールは抜けておらず、軽度の疲労感を感じた。

「だるぅ……」

出来ればもう一度寝たいが、今日は学園都市に帰る必要がある。
眠りたい欲求を抑えこんでベットから降りる。

「うぅ～～ん、今何時なんだろうなぁ～？」

伸びをしながら当麻は時計を探す。
しかし時計らしきものが見当たらないので、結局携帯で時間を確認した。

「今のイギリスの時間はっと……」

どうやらいつも学園都市で起きる時間帯だ。
そう思った当麻は、微妙に空腹を訴える自分のお腹をさすりながら部屋を後にした。

廊下を歩いている途中、昨日の記憶が途中から欠如している事を思い出す。
何があったか思い出そうとするが、まるで霧がかかったかのようにはっきりとしない。

（な～んかオルソラに色々した夢を見たのは覚えているが……）

酒を飲んで倒れる前のオルソラの姿が、余りにも官能的だったせいか妙な夢を見てしまった。
夢の中でオルソラは自分のモノであり、しかもベットでいちゃつくという状況。
そこで繰り広げられる臭いセリフと、普段の自分からは想像もつかないほどの荒々しい行為。
現実にやれば確実に変態野郎の汚名が来るほどの行為だったのは、欲求を持て余したせいだろうとの結論に至った。
思い返せば虚しさが漂う夢であり、当麻は思わず苦笑してしまった。

（まー夢なら『アレ』ぐらい許されるでしょう）

思い返せば欲求に素直だった夢。
流石に経験がゼロのせいか、ある行為の最後まではなかったが。
当麻も普通の高校生だからオルソラみたいな美人と恋人になれれば嬉しいだろう。
そんな考えが、あんな夢を見せたのだろうなと当麻は漠然と思っていた。

（『オルソラ、お前の身と心は俺のものだ』ってないわぁ～！　青髪ピアスじゃあるまいし、あいつの影響でも受けたのかな？）

夢を思い返して現実を理解してため息を吐く当麻。

（まぁ現実は俺みたいな奴なんて、オルソラは相手すらしてくれないだろうな～。いや、そう考えるとシェリーとかもか。神裂や五和も美人だしな）

（年上好きの俺にとっちゃ、今の状況って実は凄く素敵な状態？）

思わず四人の顔を思い浮かべる。

だが、頭の中に思い浮かべた後、またもや疲れたようなため息を吐く。

（ははは、上条さんみたいな普通の男に、あんな美人が相手してくれるわけないない。夢なら昨日のので我慢しろよな）

手をパタパタと振りながら当麻は食堂らしき部屋に入る。

そこで見た光景とは。

「おはよう」

「おはようございます！」

扉を開けて中に入ると、ちょうど料理を並べているオルソラが当麻に気付く。

しかしその表情は、物凄く笑顔でありもはや光すら放っていないか？　と疑えるほどだった。

「お、おう……」

オルソラの元気さに思わず面を喰らった当麻は、若干引きつつも適当な席に座る。

目の前にシェリーが潰れているのが気になったが、どうせ二日酔いと思い余り心配はしていなかった。

むしろ絡んだら、またもや弄られると思って黙っていたのもあるが。

「ん？　おぅ、上条か。おはよう」

「おはよう、シェリーは二日酔いか？」

当麻の気配に気付いたのか、シェリーが体を起こしながら朝の挨拶をしてきた。

手入れを怠って荒れた金色の髪が、心なしかもっと荒れている様に見えた当麻。

だが、その辺りは突っ込まず普通に挨拶を返した。

「あー神裂や五和ほどじゃないがな。アイツらはもう駄目だ、今日はベットの上で唸る一日確定だ」

「……そりゃあアレだけ飲めばな……」

昨日の様子を思い返して当麻は若干顔をひきつらせる。

どちらも未成年なのに、まるで往年の酒豪家に見えるほど飲んでいた。

「大丈夫なのか？」

「さぁなぁー。こればっかりは時間が経過して治るのを待つしかないなー」

心配する当麻だが、反対にシェリーはどうでもよさそうな表情をしていた。

「朝食でございます、当麻様」

シェリーとあれこれ雑談していると、オルソラが当麻の前に朝食を置く。

しかしその朝食は、ただの朝食ではなかった。

「すげぇ豪華ですよ……」

「……いつもより倍は気合いが入ってない？」

「スペシャル朝食でございます」

オルソラ特製朝食、全てに手間がかかっており簡単に作れるようなものじゃない。

豪華さは控えめだが、一つ一つが相手の為を思って作ったのは傍目から見ても分かるほどだ。

おそらく朝早くから準備して作ったのだろう。そう思うと、当麻は少しだけ嬉しくなった。

何故なら当麻はいつも沈利たちに料理を振舞うが、沈利たちから料理を作って貰った事が余り無い。

料理を作るのは嫌いではないが、時には人の料理を食べたいとも思うのだ。

「旨そうだなー」

「召し上がれでございます」

そして料理を食べようとした時に気付く。

「あの……オルソラさん？　どうしてそんなにぴったりと、上条さんにくっついているのでしょうか？」

オルソラが当麻の隣でニコニコと笑顔で座っているのを。

まるで、その場所が自分の居場所と言いたげに。

「まーまーでございます」

「いや誰に言ってるの！？」

オルソラに困惑しつつも料理を食べようとフォークを手に取る当麻。

そして料理を口に入れようと手を動かしている時、オルソラから信じられない発言が飛んできた。

「そもそも私は当麻様の『モノ』でございますから」

その瞬間、当麻の動きがピタリと止まる。

シェリーは訝しげな表情をしていたが、いつもの事かなと思い何も言わなかった。

そしてオルソラは真っ赤な頬に手に当てながら口を開く。

「昨日の夜、当麻様が私の耳元で囁かれたのでございます。『オルソラ、お前の身と心は俺のものだ』と」

手に持っていたフォークが、手から滑り落ちた当麻。
カランと乾いた音が食堂に響く。

（まさか……）

全身から嫌な汗が吹き出してくる。
ポタポタと顔から落ちた汗が、テーブルにシミを作り上げいく。

（もしかして……昨日の夢って）

「昨日の当麻様は素敵でございました」

真っ青な顔をして驚愕している当麻を横目に、オルソラはモジモジしながら次々と爆弾発言を投下する。
あまりの爆弾にシェリーは呆けた表情をしながら当麻を見るしか出来なかった。

「『オルソラ、お前が神様に純潔を捧げたというのなら、まずは神の幻想(たわごと)をぶち殺す！』」

「『お前の体に俺のモノだという証を刻み込んでやるよ』」

「私の心を鷲掴みする言葉に、私はただ圧倒するだけでございました」

そう言いながらオルソラはウィンプルとフードを外し、首元を当麻とシェリーに見えるよう広げた。
そこには……。

「しっかりと刻み込まれたのでございます。私の全てが当麻様のモ

ノである証を」

当麻によって刻まれたキスマークがいくつもあった。
しかも一つ二つではなく、無数にありよく見れば鎖骨辺りまで刻まれていた。

「あ……あははは……不幸だ」

そう呟くと同時に、目眩を感じた当麻は料理に顔を突っ込む。

（最近俺って気を失いすぎじゃね？）

その原因を考える前に、当麻の意識は真っ暗な世界へと沈んでいった。

学園都市への帰還

イギリスの空港に降り立った優菜は、当麻とインデックスを探し始めた。
結局イタリアのテロは、僅か数時間で鎮圧されたのだ。
何が目的かも分からないテロだったが、ひとまず誰も傷つかず解決する事が出来たそうだ。

（……）

万々歳で終わった結果、なのに優菜にはとても奇妙に思えていた。
タイミングが良すぎたのだ、テロが起きた時間と終わる時間が。

（私の行動を見計らったかのように始まり、そして都合良く鎮圧できた……）

考えすぎかもしれない、そう思いこもうとしても駄目だった。
何かが引っかかっていると思い、どうしても偶然だと思いこめなかった。

（ひとまず考えるのは後にしましょう。当麻とインデックスさんと合流しないと）

考えを強引に頭の隅に追いやると、優菜は辺りを見渡す。
ほどなくしてステイルが見えたので、優菜はそちらに足を向けた。
こういう時、身長が高い人間は目印になりやすいな。
少しだけ失礼な事を考えつつ、優菜はステイルの元に歩み寄る。

「おはようございます」

「……あぁ、君か」

優菜の声に反応したステイルは、億劫そうに言葉を返す。
本当に面倒と思っているのか、それとも今優菜が身につけている衣装が気に入らないのか。
あるいはどちらもかも知れない。

「当麻とインデックスさんは？」

「インデックスは野暮用だ。上条当麻は知らない」

「そうですか」

それっきり会話が止まる。
元々面識が薄い上にステイルはインデックス以外に余り興味を示さない。
更に優菜がローマ正教の修道服を着ているのが、ステイルには気に入らないようだ。
会話をしようとしないばかりか、返事も一言二言程度だった。
しばらく沈黙の時間が続く。
別に優菜もステイルも沈黙が不快ではないので、全く気にしていなかった。

「……先に断っておくけど」

しかし突然ステイルは口を開く。

「もし君がインデックスをローマ正教に売り飛ばすような真似をしたら殺す」

インデックスに害をなすなら、何が何でもそれを止めて優菜を殺す。
単純明快な脅しをステイルは言う。

「……」

「謝れば許してくれるとか甘い考えは持つなよ。僕は殺るといったら殺るからね」

そう言うとステイルは優菜の表情をチラリと盗み見る。
優菜の表情は驚くほど冷静な表情をしていた。明確な脅しも何も気にしていないかのように。
その表情がステイルの心を酷く不快な気持ちにさせてくれた。

「それともインデックスが庇ってくれると……」

「くすっ」

ステイルが最後まで言い終える前に、まるで嘲笑うかのように優菜が笑い声を上げた。
その行動に眉をひそめたステイルは目を細めながら優菜を見る。
しかし殺気のこもった視線を受けても尚、優菜は薄く笑みを浮かべるのをやめなかった。

「随分と大事なのですね。貴方にとってインデックスさんという『道具』は」

「……『道具』だと？」

気安い挑発だと分かっていても、ステイルには我慢が出来なかった。

インデックスはローラから魔導図書館という名前の『道具』として扱われている。
裏切りを防止する為、一年間のサイクルで記憶を消さなければならない仕掛けを施した。
まるで人間ではなく『道具』のような扱いに、ステイルは心底怒りを覚えた。

「違うのですか？　まるで自分の『道具』を心配しているかのように聞こえましたよ」

「本気でそう思っているのなら今すぐその考えを改めろ」

「私は『貴方の言葉』を聞いて判断しただけです」

挑発の上に挑発を返され、ステイルはつい優菜の胸ぐらを掴む。
それでも優菜の表情に変化は出ず、ずっと薄い笑みを浮かべていた。

「僕を挑発して何がしたい」

「私は思った事を口にしただけですよ。挑発などしておりません」

もしステイルが優菜の事を深く知っていれば、彼女の態度がおかしい事に気付いただろう。
優菜は考えもなく人を挑発したりしない、何か理由があるはずだと。
だが優菜とステイルは面識が薄いので、その事にステイルが気付く事はなかった。

ステイルは手に少しだけ力を入れる。
そのせいで少し苦しそうな表情をした優菜だが、ステイルは全く気にする様子はなかった。

「貴方にとってインデックスさんはどんな存在なのです？」

「……」

「友達？　それとも大事な人？　最初にいった通りただの道具？」

ステイルは考える。自分にとってインデックスとは何だと。

（彼女の為に生き、そして彼女の為に死ぬ。それが僕の信念だ）

だけど、それだけなのか。ステイルは自分の心に問いつめる。

いったいどういう気持ちでインデックスを見ているのか。

「どうやら宿題のようですね」

薄い笑みを浮かべていた優菜が、突然優しげな笑みに表情を変えた。

その表情を見てステイルは一杯食わされた事に気付く。

「……はめたね」

「あら、私はただ尋ねただけですよ」

「食えない女だ」

そう言ってステイルは優菜の胸ぐらを掴んでいた手を離す。

「私の周りにいる人は、随分と素直じゃない人ばかりなので、思わず背中を押したくなるのですよ」

胸ぐらを掴まれた事によって乱れた服装を直しつつ優菜は言った。
ステイルはここにきてやっと自分が不快な気持ちになっていた理由に気付く。

（認めたくないが、目の前の女は『自分より切れ者』だという事だ）

認めてしまえば楽なのだが、ステイルにあるプライドがそれを許さなかった。

それから少ししてインデックスと合流し、更に何故かこの世の終わりのような表情をしている当麻と合流する。
ドンヨリした雰囲気に、インデックスと優菜は首を傾げたが尋ねる事は出来なかった。
反対に付き添いできたオルソラは、ニコニコと楽しそうな表情をしていたが。

そしてステイルとオルソラに別れを告げ、当麻たちは学園都市行きの飛行機に向かった。

「帰宅は何でも０００１便というモノらしいですが」

「帰りの機内食も楽しみなんだよ」

「いや……もう眠いから何でもいいや」

いつも通りの優菜、自分に素直なインデックス、疲れ切った表情の当麻。
それぞれが旅を思い返しながら、それぞれの思いを胸に抱く。

（ウィリアム様の仕事の同僚さんでしょうか。中々濃い面子と知り合いになった気がします）

（すているにご飯をご馳走になったけど、なんだかイギリスの食事ってあんまり美味しくなかったんだよ）

（あぁ……どうしよう。俺、オルソラに凄い事しちゃった……んだよねぇ）

「もうすぐですね。さて、学園都市に帰宅しましょう」

とても濃密な一日を心に秘め彼らは飛行機に乗り込む。
まもなく、心に秘めた思い出は時速七千キロという暴力で木っ端微塵に粉砕される事となった。

そうしてイギリスから僅か一時間ちょっとで学園都市にたどり着いた当麻たち。
だが、インデックスは完全にグロッキー状態であり、当麻も足下がおぼつかないほど危険な状態だった。

「流石学園都市製の超音速旅客機ですね。まさか機内食が吹き飛ん

でいくとは思いませんでした」

インデックスを背負いながら優菜は笑っていた。しかし、その笑みはひきつっていたが。

「し、信じられねぇ……大型旅客機であの速度はねぇだろ……」

「学園都市の科学の力を垣間見ましたね」

「……あの、優菜さん。何故貴女は平気な顔をしているのでしょうか？」

「お姉ちゃんですから」

答えになってないよ!?　と当麻は全力で頭を抱える。

もしかして自分の体が軟弱なのか、そう思った当麻だったが余計な事を考える体力はなかった。

すぐに考えを捨て、今は家に帰る事だけに集中した。

「おーい、当麻ー」

ロビーに出ると当麻を待っていた沈利が声をかけてくる。

よく見れば沈利だけではなく、理后やフレンダ、最愛にフレメアまでいた。

「当麻、沈利姉さんたちの元に行きなさい。私はインデックスさんを送ってきます」

「わ、悪い……俺はもう限界だわ。さっさと寝たい……」

そう言った当麻は本当に辛いのか、ふらふらした足取りで沈利たちの元に向かう。
そんな当麻の背中を、優菜はとても優しげな瞳で見ていた。

（ウィリアム様、私は必ず守ってみせます。例え貴方様と戦う事になったとしても）

（当麻、そしてアリシア。二人は私の可愛い弟と妹ですから）

家で待っているであろうアリシアの顔を思いながら、優菜はゆっくりと歩き始めた。

嵐の前の静けさ

当麻と優菜にとって、とても濃密な二日間は終わりを告げた。
しかし当麻だけ、普通に終わることは出来なかった。

まず当麻は一日近く女子寮にいたため、香水や化粧の匂いが完全に染み込んでいた。
学園都市は学生の街なので、化粧や香水を利用する大人が極端に少ない。
だから当麻から漂う化粧の匂いを理解した瞬間、沈利たちの態度は豹変した。

香水の事を問いつめられた当麻は、全身から嫌な汗が吹き出していた。
『年上のお姉さんがベッタリとひっついていたせいです☆』などと語れるわけもなく。
オルソラ、シェリーやローラの事を説明する訳にもいかず。
残った選択肢はただ一つ、眠たい体に鞭をうって全力で逃げるしかなかった。

しかしこういう行動をとると、当麻は決まって不幸を招いていた。

全力で逃げ出した当麻だが、何故か御坂とばったり出会してしまう。
よほど珍しい匂いなのか、御坂も沈利同様すぐに当麻から漂う香水の匂いに気付く。
運悪く御坂妹も一緒だったので、同じ顔で問いつめられるというレアな体験を当麻はした。
当然こちらも理由を話せず、当麻は全力で逃げ切る以外に方法はなかった。

久しぶりに御坂から電撃をぶつけられながら逃げる事態になってしまった。

「あーもう、不幸だぁぁぁぁぁ！！！」

この後、更に青髪ピアスと出会ってしまい、嫉妬に狂った男たちに追い回される事になった当麻だった。

『神の右席』、二十億人の最終兵器である四人。
その内の三人は、フィアンマに命じられてある部屋に集う。
そこである作戦について話し合っていた。
といっても、殆どはフィアンマが決めた事であり、残りの三人はただ聞くだけだったが。

「……今なんつった、フィアンマ」

「聞こえなかったのか？」

苛立っているヴェントにフィアンマは気軽な態度で答える。
テッラは思惑を聞くまで黙っているつもりなのか、ヴェントのように口を挟まなかった。
しかし表情から何故そのような事を行う必要があると思っているようだ。

「二度は言わないぞ」

心底面倒臭そうにフィアンマは口を開く。重大な事をあっさりと。

「ローマ正教は学園都市を侵攻する。これは俺様が決めた決定事項だ、異論は認めない」

「学園都市に攻め込むのは構わない。私が気にしているのは、侵攻する時に実行する作戦なんだよ！？」

テーブルを両手で叩きながらヴェントは叫ぶ。

だがフィアンマは薄く笑うだけで取り合うつもりもなく、アックアもまた目を瞑って腕を組んでいるだけであった。

「そこは私も聞きたいですねー。何を考えているのですか、フィアンマは」

そこへテッラが横から言葉を挟む。

フィアンマはテッラを一瞥した後、小さくため息を吐いた。

「何が不満なんだ、言ってみろ」

「じゃあもう一度聞くぞ？　学園都市を侵攻する時、実行する作戦は二つだよな？」

「ああ、そうだな。二つを実行しろ。一つはどうでもいいが、もう一つは絶対に完遂する必要がある」

「……何でそこまで拘る。私にはそれが分からないんだよ」

問い詰めるヴェントだが、フィアンマは薄く笑うだけで答えようとはしなかった。

「ふむ……フィアンマ、それは使える材料だからですかねー？」

「まぁそういう事になる。だから回収する、何もおかしくはないだろう？」

「なら、私に異論はないですねー」

反対にテッラはフィアンマの言葉に満足したのか、椅子に深く座るとそれ以上尋ねようとはしなかった。

異論を唱えているのは既にヴェントだけという状況だった。

これ以上、口論する事も出来ないと理解したヴェントは、椅子に座ると盛大にため息を吐いた。

「ヴェントもいいな。では、決定だ。時期については別途決める」

「……あぁ」

けだるさそうに答えるヴェントが見えてないのか、フィアンマは他の返事を無視して部屋から出ていった。

アックアやテッラもまた、各自する事があるのか彼に続くように部屋を後にした。

残ったのはヴェントだけであり、彼女は一人ポツンと椅子に深く腰掛けていた。

「フィアンマの野郎、いったい何を企んでいるんだ」

そう呟く彼女の前には一枚の紙が置かれていた。

紙にはこう書かれていた。

『学園都市侵攻時に行う作戦は以下の二つ』

『一つ、幻想殺しの力を持つ上条当麻に神罰を下す事』

『一つ、上条優菜を回収する事。手段は問わないが、必ず生きたまま回収する事』

「戻ったか」

「はい。アクシデントがありましたので、帰宅の時間だけは守れませんでした」

「連絡は受けている。取り立てて問題にするほどの事ではない」

窓のないビルで優菜はアレイスターと会談をしていた。

家に戻った瞬間、まるで見計らったかのようなタイミングで呼び出してきたのだ。

疲労気味だったが、既に迎えまで寄越していたので断る事は不可能だった。

「それで、呼び出した理由は何でしょうか？」

「まずはこれを見たまえ」

そう言ってアレイスターは空中にモニターを写す。
よく窓のないビルを訪れるが、未だに内部がどういう構造をしているかさっぱり分からなかった。
最も、最高機密の塊であるビルだから、分かるはずもないが。

「これは……」

「君が現在研究している『未元物質（ダークマター）』に関する報告書だ」

「確かに『未元物質（ダークマター）』は研究していますが……それでも素人に毛が生えた程度ですよ？」

「私としては君の報告書は、とても素晴らしい物だと思っている。
短期間でよくここまで研究できたものだ。感心するよ」

優菜が作った報告書には、どの素粒子と混合すればどのような物質が出来るかが詳細に記載されていた。
『未元物質（ダークマター）』は文字通り常識が通用しない物質だ。
よってうまくすれば現存の物質では不可能な事が可能になる。
だが『未元物質（ダークマター）』は垣根でしか生成出来ず、入手が困難な物質だった。
優菜が気軽に研究できたのも、垣根が惜しみない協力をしたのが一番の理由となる。

「片っ端から試して記録しただけです。『未元物質（ダークマター）』があれば誰でも出来る事ですよ」

勿論、優菜もまた『未元物質（ダークマター）』を簡単に研究できた訳ではない。

完全に未知の物質なので、現存の科学では太刀打ちすら出来なかった。
余りにも不明瞭な物質だったが、他の研究報告書を読んである作戦を思いついた。

『未元物質（ダークマター）』を考えられる限り組み合わせるという方法だ。

『この世のものでない性質を物質に付与できる』という点を利用した、所謂数打てば当たる理論である。
余りにも非科学的な思考に、話を聞いた垣根ですら絶句したぐらいだ。

それからは時間との戦いだった。とにかく現存の素粒子と片っ端から混合してみた。
百ある組み合わせのうち、九十九個が使い物にならなくても、優菜は粘り強く研究を続けた。
その成果あってか、『未元物質（ダークマター）』と良い組み合わせがいくつか発見できた。
現在優菜が使っている武具にも、その研究結果が使われている。

「本題に入ろう。君には学業の合間を縫って私の研究を手伝ってほしい」

「総括理事長様の？」

「そうだ、いくつか研究を並行しているが中々進んでいなくてね。それを君に手伝ってほしいわけだ」

総括理事長の権力を持つアレイスターが、わざわざ一学生を使ってまで研究を進めたい。

それが一体なんなのか、少しだけ興味を持った優菜であった。

「内容によります。流石に殺人兵器とかはご勘弁願います」

「そういうのではない。手伝って欲しいモノは主に能力者用だ」

「能力者用……？」

アレイスターの言いたいことがよく分からず、優菜はただ首を傾げるだけであった。

「概要を外部メモリーに入れている。それを見て返事を貰いたい」

「……分かりました。お返事は明日まで待って下さい」

「良い返事を期待しているよ」

それで会談は終わりと言いたげに、突如として結標が部屋に現れる。結標にエスコートされ、優菜は窓のないビルを後にした。

ランベスの宮でローラは旅行かばんに色々と詰め込んでいた。

理由は勿論、年明け早々に学園都市へ乗り込むからだ。

「ふんふんふ～ん。私の美しさに見惚れて、篭絡するがよいのよ」

鼻歌交じりに色々と入れていくローラの表情は楽しそうだった。
下着類や衣類などの生活必需品から、どうしてそれを持っていくという謎なものまで。
よく分からない選考理由で、ローラは大型の旅行かばんにモノを詰め込んでいった。

「しかし相変わらず小さし男なのよ」

ローラが言う『男』とは、イギリスの『騎士派』を統べる騎士団長だ。
三十代半ばで金髪の美男子だが、職業意識がかなり高く融通がきかない。
立場上ではローラと同列だが、騎士団長は快く思わないだろう。

「あっちの説得が面倒だったのよ」

『清教派』トップのローラがイギリスを離れるには、『王室派』と『騎士派』を説得する必要があった。
『王室派』のトップである英国女王エリザードは簡単だった。
話を聞いたら豪快に笑いながらこう言った。

『あっはっは、まぁ好きにしろ。その代わり世間様に恥を晒すような真似はするなよ？』

エリザードとローラは旧知の仲であり、彼女の真意を理解した後はせいぜい形式張った小言を述べる程度だった。
しかし逆に『騎士派』を統べる騎士団長は、小言どころか『騎士団』を使ってでも止めようとしてきたのだ。
結局エリザードが代わりに説得し、『禁書目録への手出しを牽制する為にローラを使う』という話で落ち着いた。

それでも騎士団長は納得していなかったが、自身が忠誠を誓う英国女王にそこまで言われては渋々納得するしかなかった。

「ふぅ、今日はこれぐらいでよいのよ」

旅行かばんを閉じると、ローラはそれを適当な場所に置いておく。使うのは年明けなのだが、何故か準備するのが楽しくついついやってしまう。

「さて、次は部下の説得なのよ。何だか説得ばかりで大変」

そう言いながらもローラはとても楽しそうな表情を浮かべていた。

とある男達の大馬鹿話

第七学区にある喫茶店で、当麻と土御門、それから青髪ピアスに垣根と浜面が一つのテーブルに座っていた。
ある意味珍しい組み合わせだが、全員が共通しているのは当麻の知り合いという点だ。

最初は当麻だけだったが、散歩をしている途中で浜面と出会う。
互いに暇なので、何かしようと歩きながら考えていた所を土御門と青髪ピアスと垣根の三人と出会った。
時間も丁度昼頃だったので、これから昼食にしようという流れになり現在に至る。

そんな暇を持て余した五人は暫く馬鹿トークに花を咲かせていたが、ふと土御門がある疑問を口にした。

「所で気になっていたんだが、カミやんは姉妹の中で誰が一番好きかにゃ～？」

「んー……難しい話だな。誰もが上条さんにはもったいないくらい可愛いしな」

「はっはっは、ほんとカミやん死んでほしいわぁ」

「ナチュラルに物騒な発言してるんじゃねぇ！？」

サラッと物騒な発言をする青髪ピアスに、当麻は全力で突っ込む。
アホな会話を繰り広げる三人を、垣根は愉快そうな表情で見ていた。
肩書きさえなければ垣根も普通の高校生、なので男同士の馬鹿話は

嫌いではなかった。

「そんなに難しいかにゃ～？」

「じゃあ逆に聞くけどよ。舞夏が二人いて片方しか選べないとすると、土御門は選ぶ事が出来るか？」

「人の妹を呼び捨てにするとは良い度胸だにゃ～、カミやん。まぁそう言われると悩む所だにゃ～」

舞夏が二人いる所を想像したのか、土御門は腕を組んで悩んでいた。その表情は真剣そのものであり、いかに土御門がシスコンかを如実に現していた。

「じゃあ上条よ、姉妹の良い所を上げるとしたら何だ？」

話半分に聞いていた垣根が、突然ニヤニヤしながら聞いてきた。何やらある方向に視線を向けながら聞いてきたが、当麻の目には只の視線避けの壁しか見えなかった。

「んー、そうだなぁ……沈利姉ちゃんはすっげぇカッコいいんだよな。こう……レベル５としての風格があるしね。家では時々困った事をするけど、それでも大好きなお姉ちゃんだな」

「レベル５なら超電磁砲も同じじゃないかにゃ～？」

「あっちはまだ中学生だろ。それにスカートの下に短パンはくような、色気がゼロ所かマイナスな奴ですよ？」

その瞬間、何か電気の爆ぜる音が響き渡ったが当麻たちの耳には届

いていなかった。
しかし唯一垣根だけ、一体何が起きたかを理解していた。

「理后姉ちゃんは、何か癒されるんだよね。時々ビックリする事もあるけど」

「バニースーツ着たら似合いそうだよなぁ」

「ほほぅ……浜やんはバニーガールがお好みか。さて、色は何色が好みや！」

独り言のように呟く浜面の発言を、目聡く聞いた青髪ピアスは眼を輝かせながら尋ねた。

「やっぱ白だがほぅ！」

適当に色を呟いた浜面だが、最後まで言い終える前に青髪ピアスの拳が飛んできた。
ノータイムでの攻撃だったので、浜面は全く防御が出来なかった。

「いってぇ！　テメェ何しやがる！」

「馬鹿野郎！　バニーガールって言ったら赤やないか！？」

「おい待て、バニーガールは黒が最強だろう。全く常識がない奴らだな」

「アホかおまえ等は。バニーって言ったら白うさぎに決まってんだろうがボケが」

「人の姉で変な想像してるんじゃねぇ、浜面！」

浜面と青髪ピアスの会話を起点に、五人がいきなり取っ組み合いを始めた。

端から見ると何でそんな事に白熱出来るのだ、と近くの席の人はなま暖かい目で見守っていた。

「お客様？　周りのご迷惑になりますのでお辞めいただけますか？」

「「「「はい、すいません」」」」

程なくしてウェイトレスに怒られた五人は、しょんぼりしながら頭を下げた。

とりあえずバニーガールの話は危険と理解した五人は、その話に触れない不文律を作り上げる。

「さて、カミやんの姉妹自慢はまだまだやな～。ほれほれ、この際やから白状しいやー」

「くそう、兄弟がいない奴はこういう時強いな。んー、次はフレンダだよなぁ……なんつーか年が近いから気軽に付き合えるのがいいな。少しそそっかしいけどそこが可愛い」

「よっし、カミやん。ぶっ殺してやるからちょっと表でーなー」

「何でだよコラァ！？」

影の濃い笑みを浮かべながら青髪ピアスがファイティングポーズを構える。

それを見て、当麻は思わず突っ込んでしまった。

「いやぁカミやんの突っ込みはいい感じやわー」

「俺は疲れるけどな……最愛はまぁ純粋に可愛いな。甘えてくる所が保護欲を誘う。なんつーか抱きしめて頭ナデナデしたくなる誘惑が出てくる。まぁやったらドン引きされそうだけどなー」

「ついにカミやんも義妹の良さに目覚めたかにゃー？」

「最愛が彼氏を連れてきたら、俺は間違いなく全力で殴るだろうな」

「おめでとう、君も立派なシスコンだにゃー」

当麻と土御門の二人は互いを見ながら笑いあう。

そのせいか、付近で『今日からでも超問題ないですよ！』とか『それは許されない』という会話は聞こえていなかった。

最初からわかっていた垣根は、当麻の言葉をニヤニヤとしながら聞いていた。

（こりゃあ気付いていないなぁ）

「最後がフレメアだな。なんつーか容姿が人形のような感じだ、ふわふわしてて可愛いよ。あの服装はフレメアの趣味ってより、周りが着させたんだろうなぁ」

「こう見るとカミやんは上から下まで幅広い属性をカバーしているにゃ～。さて、それでは本題だにゃ～」

「本題？」

サングラスの位置を指で直しながら土御門は言葉を発する。
どうやらその発言は前もって考えていたのか、他の面子も土御門を茶化そうとする気はないようだ。

「ずばりカミやんにとって優菜ちゃんってどういう存在だにゃ～？」

「優菜？　どういう存在も何も家族じゃないか」

「いやいやカミやん。そういう話じゃないにゃ～。ストレートに言うとカミやんは優菜ちゃんをどう思っているかって話だにゃ～」

土御門に言われて当麻は考えてみる。
よくよく考えれば、そんな事を一度も考えたことがないな、そう思いながら。

「うーん」

腕を組んで考える当麻を見て、垣根は少しだけ緊張を感じていた。
クリスマスの日に気付いた事だが、自分は優菜を好いている。
友人や仲間としてではなく女としてだ。
だから当麻の答えによっては、この場でライバル宣言が必要かもしれない。
そう考えていた垣根を余所に当麻は唸りながらも答えを口にする。

「悪い、わからん」

「分からないとはどういう意味だにゃ～？」

「俺にとって優菜は時に姉であり、時に母親であり、時に親友でも

ある奴なんだ。なんだかこれって感じの表現が出来ないんだよ」

「上条にとって優菜ちゃんは色んな風に見えるって訳か？」

「はっきりしないなー」

「……まぁ上条らしいな。一番しっくりする表現として家族ってわけか」

垣根の言葉に当麻は頷くと、喉を潤すためにコップの水を飲む。飲んでいる間、周りから漂う緊張感が一気に霧散したのだが、残念ながら一息吐いていた当麻は気付かなかった。

（まぁ周りもホッとしてるだろうな。あいつがライバルだと正直厳しいだろうから……）

「なら、次はイギリス自慢いってみようかにゃー？」

ホッとしている垣根を余所に、土御門がニヤニヤ笑いながら言った。当麻のイギリス行きを知らなかった周りは、土御門の言葉に思わず首を傾げる。

「何で上条がイギリスに行ってるんだ。お前外国に知り合いでもいんの？」

浜面が疑問を口にしながら当麻の方を見たが、彼の表情を見て浜面はギョッとした。

当麻の顔は真っ青になっており、心なしかガクガクと震えているようにも見えた。

「つ、土御門さーん、出来ればそれにはふれない方が……」

「どうしたかにゃーカミやんは。そんなにビビって……まさか金髪お姫様の胸でも揉んだかにゃ～？」

ケラケラと笑いながら言う土御門だが、反対に当麻は気が気でなかった。

噂をすれば影あり、そんな言葉が当麻の脳裏に浮かび上がる。

そしてこういう時は必ず不幸がふりかかる事も。

その時、喫茶店に二人組が入店する。

ウェイトレスは二人を案内しようと近づくが、その姿を見て思わず固まってしまった。

その二人は、まるで今から討ち入りでもする格好だったのだ。

よく風紀委員や警備員に捕まらなかったなと感心できるほど。

そしてその二人組を真っ先に視界に収めてしまった当麻。

全身から血の気が引き、ない頭でこの後に行うべき最適な行動を考える。

答えはすぐに出た。

即時離脱、全力逃亡。

「ちょ、ちょっとトイレ！？」

そう言って慌ててこの場から立ち去ろうとした当麻。

だが、当麻が座っている横には浜面が座っていた。

当麻の慌てっぷりに思わず意地悪な事を考えた浜面は、両手を広げて通せんぼをした。

「ここを通りたかったら俺を倒しごはぁ！？」

浜面が最後まで言い終える前に、当麻は全力で浜面を殴って席を移動した。

その行動力に思わず呆けた顔をした周りは、ただ首を傾げるだけだった。

ちなみに浜面は手加減されなかったせいか完全に気絶していた。

「……ん？」

当麻が立ち去ってすぐに垣根もある異変に気付く。

長い暗部生活によって磨かれた危険回避能力が全力で警戒を発している。

ここにいては危ない、即時立ち去れと。

（上条はこれから逃げたってか。なら俺も逃げるべきだな）

瞬時にどうするべきかを理解した垣根は、気絶から復帰した浜面を問答無用で蹴り飛ばす。

「邪魔だ」

「いってぇ！？　言えば退いてるよ！？」

喚く浜面を無視して垣根はお金をテーブルに置く。

「ちょっと野暮用を思い出した。今日はここでお別れだ」

「なんだ、ナンパでも思い出したのかにゃ～？」

「まぁそんな所だ。んじゃまたなぁー」

そう言って垣根はさっさと立ち去っていった。
不思議なのは、特定のルートを避けるような道筋だった事だ。

「どうしたんだにゃー……！？」

ぼーっと垣根の道筋を眺めていた土御門だが、突然底冷えする殺気を感じた。
余りの威圧感に冷や汗を流したが、体が硬直するほどではなかった。
だが、浜面と青髪ピアスは体が完全に硬直しており、真っ青な顔をして小刻みに震えていた。

「お、おい……後ろ……」

その時、浜面が何かを見たのか、体を震わせながらある方向を指した。
浜面が指した方向、それは奇しくも土御門の後ろだった。

「ツチミカド」

ボソリと囁くような声、なのに心臓を鷲掴みされたかのような恐怖に襲われた。
怯えながらも、土御門はゆっくりと後ろを振り返る。

「ブチコロス」

そこには鬼も裸足で逃げるほどの殺気を纏った悪魔が二人いた。

【番外】オリキャラ設定（竜童　紗月）

竜童　紗月についての設定を以下に記載します。

・容姿

髪は肩までの長さで、毛先だけはねる癖っ毛。色は茶色。
眠たそうな、ぼーっとしているような表情をいつもしている。
身長は佐天と同じぐらい、体重は最重要秘密なので非公開（らしい）。
着痩せするのでぱっと見分からないが、実はかなり良いスタイルを持っている。
モデル体型に近く、一部の男子から『将来有望株』との事。

・性格

容姿通り大人しめな性格をしている。
自分から意見を言うより他人の意見を聞く方が得意。
物事を余り深くとらえず、気楽な方向に考える。

端から見ると不思議ちゃんな雰囲気を漂わせている。
間延びした口調で、滅多な事では動じない。
但し、許容量を越えるとパニックになって涙目になる。

頭脳に関しては佐天と同じぐらいで、余り宜しくない。
運動神経はそこそこだが、こちらも至って平凡。

男性が苦手で、近くにいると緊張の余り声が出なくなってしまう。

（クラスメイトたちはギリギリ耐えている）
どちらかと言うとカッコいい女性に憧れるタイプ。

お嬢様学校に憧れており、常盤台中学を妙な方向で美化している。
本来は自分を「ボク」と呼んでいたが、お嬢様に憧れて「私」に変えたぐらい。
話を聞いた御坂は、乾いた笑いをして聞いていた。
その余りの夢見る姿に否定の言葉が述べれなかったらしい。

・家族構成
商業サラリーマンの父親、専業主婦の母親。
兄弟は弟が一人、兄が一人いる。
但し学園都市に来ているのは紗月のみ。

・所属
柵川中学一年生、佐天や初春とはクラスメイト。

・能力
発火能力（パイロキネシス）系統の能力が計測されているが、数値が低いために無能力者。
破壊力に特化した能力らしいが、本人が気弱なので演算失敗が多発する。
その辺りをクリアすれば、一気にレベル2か3まで上がるらしい。
だが、その時は永久に来ないだろうと言われている。

・友好関係
元はクラスメイトである佐天や初春、その他程度だった。
だが、ルームメイトの事件を期に御坂や黒子とも付き合うようになる。

ルームメイトとは学園都市に来てからの仲。
その他にも寮で仲のいい友達は沢山いる。
超電磁砲組の中では、友達がかなり多い方。

・その他
これといって特徴のない平凡な子。
但し家事は得意であり、中でもスイーツ系はプロ級の腕前を誇る。
スイーツ作りの腕前から、一部では『体重破壊（ダイエットブレイカー）』の異名を持つ。
本人は甘いモノを食べての太らない体質（むしろ一カ所に集中している）。
なので、同じように甘いモノを食べると悲劇が舞い降りる。

無能力者狩りにあったり、アクゼリュスに絡まれたりと散々な目にあっている。
でも気楽な性格からか「そんな事もあるさ」の一言で片づけている。

【番外】第七章を終えて判明した原作と相違点

第七章を終えて判明した原作との相違点。後、その他諸々。

・上条当麻

1. 酒に酔うと甘える癖が出てくる。
2. 実は胸好き。酔うとかなりの確率で胸を揉む。
3. 時々ラッキースケベ攻撃を発動させる。
4. ローラから求婚されるという凄い事をあっさり蹴り飛ばす。
5. なんだかんだで姉妹が大好き。

・上条優菜

1. アリシアに世界で一つしかないペンダントを渡す。
2. ヴェントとはある意味で同じような存在と認め合う。
3. 神の右席と知り合うという、ある意味凄い事をする。
4. ローマ教皇にからかわれるというレアな体験をする。
5. フィアンマ曰く『体に天使を封じ込めている』との事。

但し本人は気付いていない。

・アリシア・フォン・コルネリウス

1. 優菜よりたった一つしかないペンダントを受け取る。
これは『優菜の妹』と優菜が認めた事を示す唯一の品物。
2. 男性陣の優菜に対する好意には、余り気にとめていなかった。

よって、垣根が優菜を女として好いている事に気付いていなかった。

3. 面倒見はいい、常識的な発言もする。

但し、優菜が絡むと瞬間的に暴走する。

・アクゼリュス

1．人ではない事を自白する。

2．三千年所か、もっと長生きしている事を匂わす。

3．超電磁砲を指を動かすだけで霧散させる。

4．万物にあまねく存在する理を一切無視し、その事象の「結果」のみを現出せしめる超物理的力を使える。

本人曰く操作する情報量が多いから回数制限があるとの事。

・一方通行

1．重度の小萌依存症にかかる。

一緒にいられない日が出来ると、精神不安定になるほど。

2．実は料理や掃除が出来る。しかし腕前は小萌曰く『レベル3程度』との事。

・垣根帝督

1．優菜を一人の女として好いている事に気付く。

2．スクールのリーダーだが、実態は心理定規と優菜の尻に敷かれている。

3．御坂をあっさり撃退出来るほど、第三位と垣根の間にある壁は絶対的。

・フィアンマ

1．科学をある程度認め、利用できるなら科学でも利用する。

2．優菜の力に気づき、学園都市より回収する必要があると判断する。

3．アックアが全力で殴っても怪我一つ負わない謎の体を持つ。

4．ブルーヘアーなる人物と知り合い。

そのせいで日本の戦略物資（オタクぶんか）に詳しい。

5．異教徒所か自分以外はどうなろうと全然オーケーな思考の

持ち主。
　自分が知りたいからという理由で、犯罪者使ってテロを起こし
　優菜を調べ上げるのだから。

・アックア
　1．優菜との写真を未だに大事に持っている。
　　下手な事をすると、相手が誰でも平気で病院送りにする。
　　その殺気はフィアンマすらビビるほど。
　2．今でも優菜を教会世界に連れてきたいと思っている。
　3．フィアンマの言葉を聞いて、優菜がかなり危険な立場にいる事を理解する。
　4．柔らかいモノ（みかんとか箸）が苦手で、よく破壊する。

・テッラ
　1．神の右席の中で最も常識人。
　2．マイペースで、どんな時でも自分のペースを崩さない。
　3．外見に似合わず肉をよく食べる。
　4．異教徒が嫌い。でも同じ信徒には案外優しい。

・ヴェント
　1．重度のブラコン。
　　そのせいで弟好きの優菜に対して変な所で共感を覚える。
　2．科学は憎い、科学は壊したい。でも、案外冷静な思考も出来る。
　3．テッラと同じで異教徒嫌い。但しこっちは同じ信徒にも優しくない。

・ローラ＝スチュアート
　1．当麻をイギリス清教の駒にするため求婚する。

しかし今まで一度も成功していない。

2．当麻から胸を二回、尻を一回、押し倒される事数回、下着を見られるのを一回。

等々、散々な目にあっている。

3．日本語が不自由なのを気にして、学園都市で直す計画を立てる。

しかしそれをアレイスターから突っ込まれて顔を真っ赤にする。

4．自分の利益のためなら、どんな時でも合理的な判断を下せる。

・オルソラ＝アクィナス

1．神様と当麻、どちらをとるか悩むが、クリスマスは当麻をとった。

2．色気作戦で一番頑張った人、だから一番ご褒美がもらえた。

3．当麻とベットで何があったかは二人の秘密。

とりあえず『本番』だけはないが、それでも相当凄い事を当麻からされた。

4．自称『当麻のモノ』、当麻が望むなら何でもすると宣言した。

・シェリー＝クロムウェル

1．当麻からシャツ（脱ぎたて）を貰える地味にいいポジションを維持していた。

2．オルソラをそそのかしたりと色々とイタズラを実行する。

3．当麻を自分のモノにしたいと思っている。

4．パジャマがスケスケの二枚重ねから、当麻のシャツに変わった。

5．色気作戦では当麻の背中にずっとよかっていた。

・その他

1．御坂は優菜から助言を貰ったり、刀夜たちから彼女と思われたりと、地味に味方が強い。

2．超電磁砲組は沙月が追加され五人組となる。

3．浜面は相変わらず貧乏。

4．神裂と五和は現在イギリス組では負けている方。その内追いつく。

5．建宮は色々なトラウマが出来てしまった。

第八章予告

ひとつは白い少年の昔話。

『傘をささないと風邪をひきますよー？』

――――――――――――――――――――学園都市の七不思議　月詠小萌

『……俺に構うンじゃねェ』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第一位　一方通行

それは一つの出逢いから始まった。

『ロリじゃないです。私の名前は小萌ですよー！』

――――――――――――――――――――学園都市の七不思議　月詠小萌

『……はン、馬鹿らしい』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第一位　一方通行

少しして少年は、この出逢いを授けてくれた運命に感謝した。

『いえいえ、先生ですから当然ですよ。一方ちゃんも私の生徒さんです！』

――――――――――――――――――――学園都市の七不思議　月詠小萌

『食い物なンざ、どこで食っても一緒だと思うンですがねェ』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第一位

一方通行

何故なら、この出逢いが少年の欲するものを手に入れるキッカケとなったからだ。

『まァ世話になってンだし……なァ……クソッタレ……』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第一位

一方通行

『何だかお肉が凄くいい色をしている気がしますー？』

――――――――――――――――――――学園都市の七不思議　月

詠小萌

学園都市で第一位の称号を持つ少年が欲したものは、本当に些細なモノだった。

『今の不抜けた第一位なら楽勝さ』

――――――――――――――――――――？？？？　？？？？

『……一方ちゃん……無事で……よかったですー』

――――――――――――――――――――学園都市の七不思議　月

詠小萌

『ア〝ア〝ア〝ーーーーー！！！』

――――――――――――――――――――学園都市レベル５第一位

一方通行

突如狂った歯車。欲したモノを壊された時、少年の中で何かが壊れ

た。

『一方通行を襲撃したスキルアウト。組織は勿論の事、友好関係があった者まで全員『行方不明』です』

――――――――――――――――？？？？　？？？？

『ふむ……プランより早いが軌道の修正は可能だ』

――――――――――――――学園都市総括理事長　アレイスター・クロウリー

『チッ、モルモットが余計な手間をかけさせやがって』

――――――――――――――猟犬部隊　木原数多

『決めろよ……お前自身が胸を張って選んだと言える選択を！！』

――――――――――――――幻想殺し　上条当麻

少年を止めようとする者。
完全に壊そうとする者。
破壊する姿を見て笑う者。
右手で立ち向かい救おうとする者。
だが全ては遅すぎた。
少年は既に人の心を失い『暴威の塊』へと豹変していた。

『ｂａｗｉ殺ｗｑ……ｂｌ愚者ｑｍｚｃ』

――――――――――――――『暴威の塊』　一方通行

『危険じゃん！　今のアイツがどんな存在か分かっているかじゃん！？』

――――――――――――――――――――警備員　黄泉川愛穂

『一方ちゃんは泣いているのですよ！　そんな彼に銃を向けないでください！？』

――――――――――――――――――――学園都市の七不思議　月詠小萌

『暴威の塊』となった少年には、どんな力も言葉も届かなかった。
全ては目に見えるモノを破壊し尽くす存在だった。

しかし世界に一人だけ少年の心を癒せられる人がいた。
その者は己の体を顧みず、泣き叫ぶ少年の全てを優しく受け止めた。

もう一つは常識が通用しない少年の昔話。

『はっはー、この俺の能力に常識は通用しねぇ！』

――――――――――――――――――――？？？？　垣根帝督

『帝督は全てにおいて常識がないよね？』

――――――――――――――――――――？？？？　心理定規

『ムカついたぞ、垣根』

――――――――――――――――――――？？？？　？？？？

『むー、垣根に勝てないのが何か悔しいよね』

――――――――――――――――――――？？？？　？？？？

よくある昔話。
親に捨てられた少年は、自分の大切な人たちが全てだった。
自分を含めて四人だけの小さな世界。

それはこれからも続くと信じたくなるほど暖かい世界だった。

『実験に失敗はつきものだよ』
――――――――――――――――――？？？？　？？？？

『人殺しっ！？』
――――――――――――――――――？？？？　心理定規

『……あァ……俺が殺した……』
――――――――――――――――――？？？？　垣根帝督

『ふふ……こんな……時に言うのは……卑怯よね……』
――――――――――――――――――？？？？　？？？？

ずっと続くと思っていた。
これからも四人仲良く過ごしていくと信じていた。
どんな事でも四人なら乗り越えられる。
そう……明日を信じて生きていた。

だけどそれは、あっけないぐらいあっさりと崩壊した。
明日を信じていた少年は、崩壊で全てを失った。
そして崩壊を境に、少年は全てに期待を持つ事を止めた。

『オイ糞ガキ、テメェ誰に向かって口聞いてるんだコラ？』
――――――――――――――――――暗部組織『スクール』

垣根帝督

『て、帝……督……？』
――――――――――――――――――暗部組織『スクール』

心理定規

『実験事故』から数年後、生き残った少年と少女は再会した。
褒められるような世界ではなく、暗い闇に沈んだ世界で。

あの時と変わらぬ少女、だが反対に少年は変わってしまった。
別人、そう表現する方が楽なほど。

『随分と探したぜぇ……』

――――――――――――――――――――暗部組織『スクール』
垣根帝督

『私を殺せるものか。私を失えば、学園都市に多大な損害が出るのだぞ？』

――――――――――――――――――――？？？？　？？？？
いくつもの血を浴び、いくつもの屍を築き上げて数年。
やっと少年は見つける事が出来た。崩壊の原因を作った人物を。

研究者たちは安心していた。
自分たちを失えば、学園都市は多大な損害が出る。
だから絶対に守ろうとするはずだと。

だが全てを失い、全てを捨てた少年には、学園都市の威光など紙クズ同然だった。

『あれから数日……俺を消そうとする動きはなし……か』

――――――――――――――――――――暗部組織『スクール』
垣根帝督

『第二位が派手にやったそうだが、放置しててていいのか？』

――――――――――――――――――――ダブルスパイ　土御門元春

『補充の利くモノの為に何故動かなければならない』

――――――――――――――――――――学園都市総括理事長　アレイスター・クロウリー

怒りと憎悪を抱いて復讐を胸に生きてきた数年が終わりを告げた。

少年は何をするべきか迷っていた。

何もかもが虚空……しかしその時、たった一つの『約束』を思い出した。

そして残りの人生全て、『約束』を守る為に生きようと決意した。

『絶対能力進化実験？』

――――――――――――――――――――暗部組織『スクール』

垣根帝督

『そうだよ。これをクリアすれば君は無敵の力を手に入れられるんだよ？』

――――――――――――――――――――学園都市　とある研究者

『当麻がマズイ奴と知り合った。皆、当麻の行動に注意よ』

――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』

麦野沈利

『場合によっては、当麻お兄ちゃんを超倒す必要があります』

――――――――――――――――――――暗部組織『アイテム』

絹旗最愛

『何してやがんだよ、テメェ！？』

――――――――――――――――――――幻想殺し　上条当麻

『約束』を守るには、学園都市第二位では駄目だと理解した少年。
そんな少年に、絶対能力進化実験の誘いが舞い込んでくる。

拭えないほどの血に染まっていた少年には、その実験は魅力的にうつった。
同時に、絶対能力者になれるはずはないとも思っていた。
期待を持たない少年は、話半分でその実験に参加する事を決めた。
その一方で、実験で使用されるクローンの一人が、ある少年と出逢う。

そして二つの事が絶対能力進化実験を大きく歪める。

その歪みが、悲しい過去によって立ち止まっていた少年の心を揺り動かす。

失ったものは取り戻せない。
過去を覆す事は出来ない。

世界に失望し、全てを諦めていた。
しかし一人の主人公（ヒーロー）が現れた事によって、少年は再び歩き出す決意をする。
そんな最後はハッピーエンドで終わるお話。

第八章予告（後書き）

第七章　完結です。
次話から設定集にあたる第七・五章に突入。

登場人物【上条家】

○上条当麻（かみじょうとうま）

・容姿

ツンツンした短めの黒髪がトレードマーク。
しかしそれ以外は特筆するような箇所がない至って平凡な容姿。
身長は１６８ｃｍ。スマートな筋肉がついている。

・性格

面倒くさがりで無気力かつ飄々とした性格。
本人が面倒だと感じると、全力で逃げようとするので大体相手の怒りを買う。
その一方で、他人が困っていると躊躇いなく首を突っ込む。
目の前で助けを求められると、過去の経緯を全部無視して助けに入る。
その時、自身の危険は顧みないほど無鉄砲さを発揮する。
誰が止めようとも、己の感情に従って真っ直ぐ進もうとする。
その反面、女性問題に対してはデリカシーがない行為を繰り返す。
所謂『生殺し』を繰り返す、ある意味エゲつない性格。

・能力

幻想殺し（イマジンブレイカー）という特殊能力を持つ。
これは能力でも魔術でもない。原石かどうかすら怪しい謎に包まれた能力。

それが異能の力なら、どんな力でも問答無用で破壊する事が可能。
但し、効果が当麻の右手首から先しかない、また触れないと効果が発揮しない。
本人の有益無益の判断がないため、プラスの恩恵も受けられない。
学園都市の身体検査（システムスキャン）には反応しない（＝永久無能力者扱い）。
絶対的な効果を持つが、弱点や欠点も盛りだくさんの能力。

・家族構成
父親に刀夜、母親に詩菜を持つ。
沈利、理后、フレンダ、最愛、フレメアと五人の姉妹がいる。
従姉妹に優菜がいるが殆ど姉と弟の関係。

・友好関係
学園都市ではレベル5全員と顔見知り。
第一位である一方通行、第二位の垣根、第三位の御坂、第四位で姉の沈利。
第五位で幼馴染の操祈、第六位で姉の優菜、第七位の軍覇。
その他では土御門（兄妹）、青髪ピアス、吹寄、姫神、小萌。
打ち止めや妹達の御坂妹、美鶴、美咲、その他の者たち。
白井黒子、アリシア、インデックス等幅広い友好関係を持つ。
その他にも助けた人たち（主に女性）もいる。

魔術側ではイギリス清教のローラ、オルソラ、シェリー。
それからステイル、神裂、五和や天草式十字凄教など。
イギリス清教に対して太いコネクションを持つ。
反対にローマ正教やロシア成教の知り合いはいない。

例外的な位置にいるアクゼリュスとは顔見知りレベル。
殆どが女性なのは当麻だからとしか言えない。

・その他
非情に姉妹（家族）を大事に思っており、家族に危害を加える存在を許さない。
料理洗濯後かたづけなど家事全般が得意である。
上条家の食卓は当麻が一任している。
臭い台詞を臆面もなく言って女性の好感度を無自覚で上げる。
その様から『フラグ建築者』と言われている。
但し本人はモテてないと思い、その言動からよく嫉妬の的にされている。

○麦野沈利（むぎのしずり）
・容姿
年齢の割に落ち着いた雰囲気を漂わせており、黙っていればお嬢様に見える。
実年齢より上に見えるので、よく大学生と思われがち。
（指摘した奴はだいたい地獄をみる）
手入れの行き届いた髪と、スタイルのいい体をしている。
しかし足が太いのを気にしており、必ずストッキングやタイツ、
ニーハイソックス等を着用して細く見えるようにしている。

・性格
高慢なお嬢様タイプの女学生。
気性がかなり荒く、逆上すると口調が酷いほど悪くなっていく。
但し沸点が低くなるのは、沈利にとってどうでもいい相手だ

けである。
　反対に家族には良き姉であり、面倒見の良い性格をした姉でもある。
　だが、シャケと当麻に関してだけは、家族といえどもシビアな性格になる。

　身内以外は容赦しない酷薄かつ残虐な性格。
　特に当麻に影響を与えるなら、相手が誰であろうと立ち向かう。

　立場を利用して、当麻にはあの手この手でアピールする。
　しかし小出しにせず、ここぞというタイミングで動く。
　ひたすらタイミングを待つ、普段の行動とは逆の思考で動いている。

・能力
　レベル５で序列は第四位の「原子崩し（メルトダウナー）」。
　正式な分類では粒機波形高速砲で、見た目は白く輝く光線。
　事破壊に特化した能力で、本気を出せば第三位を瞬殺出来る。
　だが、同時に自分も消滅するので意味がない。

　照準の演算に時間がかかる欠点があったが、ある事件を境に能力の強化を図る。
　その結果、理后の『体晶』を使用せず照準があわせられようになった。
　つまり欠点を克服する事ができた。
　反対に威力が強くなりすぎて、全力で使用イコール自滅コースとなってしまった。
　いつもは威力を半分、本気で戦う時も七割レベルまで制限している。

出力を抑えれば連射が可能であり、面の攻撃が可能となっている。
なので攻撃パターンは以前より格段に増えている。
しかし依然として失敗すると自滅する可能性はなくならない。

・家族構成
当麻と同じ。

・友好関係
第一位の一方通行、第二位の垣根、第五位の操祈とは仲がいい。
反対に第三位の御坂とは険悪な関係。
その他目立った知り合いはいない。浜面は犬レベルの扱い。

・その他
上条家長女で、頼れるお姉ちゃん担当。
幼少の頃は孤児院で過ごしていたが、ある時刀夜に引き取られる。
上条家に一番最初に来た人。
今でも旧姓の『麦野』は利用できる時には利用する。
部屋割りは一人部屋。
トラウマを抱えており、当麻が理不尽な暴力に晒されると精神不安定になる。
実はいい所のお嬢様だったかもしれない。
だが出生に関しては分からないので不明。
正式な名前は上条沈利。麦野という姓は厄介ごとを回避する為に利用。

○滝壺理后（たきつぼりこう）

・容姿
肩の辺りできりそろえられた黒髪。
ピンクのジャージという姿が基本的なスタイル。
ジャージから分からないが、胸は沈利が驚くほどデカイ。
所謂脱いだらすごい人。

・性格
ぼーっとしている天然系、もしくは無表情癒し系な性格。
普段は温厚であり、姉妹の中では最も優しい性格をしている。
逆に怒ると凄く怖い。この辺りは詩菜の血を引いていると言われている。
見た目に反してかなり計算高い行為をする。
姉妹の中では一番策士的な行動で、当麻をゲットしようとする。

・能力
レベル４の「一能力追跡（ＡＩＭストーカー）」。
現在は脳に損傷があるので、殆ど使用できない状態。
優菜の治療によって徐々に回復している。
だがそれでも二、三回使えればいい方。

・家族構成
当麻と同じ。

・友好関係
姉妹と当麻以外に明確な友人はいない。

・その他

上条家次女で、癒し系担当。
幼少の頃は孤児院で過ごしていたが、ある時刀夜に引き取られる。
上条家に二番目に来た人。
今でも旧姓の『滝壺』は利用できる時には利用する。
部屋割りは一人部屋。
特に理后の部屋は、体調の事もあり緊急コールが数カ所設置されている。
空調設備も整っているので、ある意味クリーンな部屋。
正式な名前は上条理后。麦野と同じで滝壺は厄介ごとを回避する為に利用。

○フレンダ＝セイヴェルン
・容姿
金髪碧眼の女子高生、しかしスタイルは中学生並。
いつも可愛らしい外見に見せるため、見えない所で気を配っている。
しかし、スタイルが半分ぐらいぶち壊しにしているが、本人は気付いていない。

・性格
軽い性格で、当麻曰く気軽につき合える人。
面倒事を避けて、楽しく気楽に暮らしたいと思っている。
学校に行っていない理由も、その辺りの性格のせいかも知れない。

但し軽い性格が災いして口が軽い、そしてよくポカミスを連発する。
余りにもミスが多いので、重要な事は任せられないと言われるほど。

サバ缶が好物で、よく当麻を連れてサバ缶漁りに走る。
しかし缶切りが使えないので、よく爆破で蓋を開けている。

・能力
無能力者と思われているが、実はれっきとした能力者。
それもレベル４の空間移動能力を保持。能力はアポート系列に属している。
但し、どういう原理か不明だが自分の物だけしか手元に呼び寄せられない。
能力開発系の科学者も匙を投げるほどの意味不明な力。

距離は最大十三キロメートルと、他の空間系能力者と比べて群を抜いている。
重量も１０００ｋｇまで可能と、距離と質量に関しては黒子を遥かに上回る。
自分の物以外も飛ばす事が出来たならレベル５も夢ではない。
といっても、フレンダは能力を余り利用しないので意味はなかったりする。
（レベル５の肩書きが面倒臭そうという理由）
せいぜい自分のトラップを回収するのに使うぐらい。
あくまで珍しい効果なのでレベル４であり、本来ならレベル２扱い。

・家族構成
当麻と同じ。

・友好関係
姉妹と当麻以外に明確な友人はいない。

・その他

上条家三女で、お馬鹿担当。

幼少の頃は孤児院で過ごしていたが、ある時刀夜に引き取られる。

上条家に三番目に来た人（最愛と同じタイミング）。

フレメアが来るまで一人部屋だったが、フレメアが来てから二人部屋になった。

学校にはいっておらず基本的にニートのような生活をしている。

それでも当麻より頭はよく、高校生卒業レベルの頭脳を持つ。

戦闘スタイルは、「アイテム」内では唯一能力には頼らず、リモコン式を始め、

時限式・着火式の爆弾を武器に用いる方法で、心理戦も併用する。

格上の美琴を翻弄させるしたたかさを見せたが、詰めが甘い。

正式な名前はフレンダ＝上条。でも面倒なのでフレンダで統一してもらっている。

○絹旗最愛（きぬはたさいあい）

・容姿

見た目は十二歳ぐらいの大人しそうな少女。

フレンダよりはスタイルがいいらしいが、それでも五十歩百歩。

ふわふわしたニットのワンピースを愛用。

ギリギリパンツが見えそうで見えない角度を常に計算しているとか何とか。

・性格
怪しげなB級、C級クラスの映画を好んでみたりする。
今まで見た映画の使用済みチケットを集めたりと、ある意味では変人の部類。
男に触られるのを非常に嫌い、心許した相手でなければ容赦なく殴る。
現在は当麻、とギリギリ許されている浜面ぐらい。
非常に当麻に懐いており、沈利曰く『当麻に依存している』との事。
当麻の膝の上を『自分だけの特等席』と言う辺り、その燐片が伺える。
それはフレメアが来ても変わりがなかった。
面倒見はいい方だが、甘えっぷりの方が酷いので余り目立たない。
頭はキレるが活躍するシーンがないので、こちらも目立たない。
ある意味、不当な評価が下されている。

・能力
能力はレベル４の「窒素装甲（オフェンスアーマー）」。
上条家の殆どが特殊もしくは破壊に特化している。
なので、防御力に特化した能力は珍しい方。

・家族構成
当麻と同じ。

・友好関係

姉妹と当麻以外に明確な友人はいない。
学校では数人いるが、どれも顔見知りレベル。

・その他
元末っ子の上条家四女（フレメアが来て昇格）で、甘えん坊担当。
幼少の頃は孤児院で過ごしていたが、ある時刀夜に引き取られる。
上条家に三番目に来た人（フレンダと同じタイミング）。
常盤台中学にいながら、寮生活をパスしている。
よく実験と称して学校に行ってないが、成績は上位に食い込むほど偉い。
部屋割りは二人部屋で、当麻と一緒である。
非常に当麻に甘えており、ある意味依存症とも取れる。
正式な名前は上条最愛。麦野と同じで絹旗は厄介ごとを回避する為に利用。

〇フレメア＝セイヴェルン
・容姿
ふわふわした金髪に細い手足、色の白い肌に透き通った青い瞳。
まさしく人形のようなという例えが似合う風貌をしている。
白やピンクを基調としたフリルやレースで膨らんだ上着。
ミニスカートとワインレッドなタイツで下半身を覆う。
まるでゲームの中に出てくるアイドルのような格好をしている。
但し当麻に言わせると『他人が似合うと思って着させた』との事。

・性格
猫みたいな性格をしており、年上の当麻に懐く。
血がドバドバでるようなB級ホラーゲームが好き。
嫌いなものはグリーンピース。

歳相応に当麻に甘えるが、これが最愛の嫉妬心を燃やした。
フレンダと違って比較的大人しめな雰囲気がある。

・能力
無能力者。

・家族構成
当麻と同じ。
元はあすなろ園の皆が家族だった。

・友好関係
姉妹と当麻、それからあすなろ園に少しだけいる。
スキルアウトの駒場、半蔵、浜面とは知り合い。

・その他
誰かから「にゃあ」と語尾につける癖を移されたが犯人は不明。
かつて無能力者狩りに襲われたが、その時は駒場の手によって救われた。
以来、駒場に懐いており、その経由で浜面や半蔵とも顔見知りになった。
正式な名前はフレメア＝上条。

○上条優菜（かみじょうゆうな）

・容姿
腰まで届く美しい黒髪、整った顔立ち、色白で肌理細かいハリのある肌。
均整のとれた体つき、気品ある佇まい。
世間一般的に認知されてるお嬢様のような感じである。
スタイルは良いが非公開状態、某青髪から見ればバストは８５－９０の間。

意識していないが、スタイルが隠れるような服装を好む。
また、お嬢様風の服装も好んで着ている。

・性格
自身に非常に厳しいが、他者には意外と甘い。
基本的にクールで沈着冷静がモットーな人。
しかし心を許した人の前では意外とお茶目な面も出す。

怒ると結構暴力的になるが、大体は暴力を受ける方が悪い落ち。

いつもは凛々しい雰囲気だが、アックアにだけは歳相応の表情を見せる。

・能力
レベル５で序列は第六位の「天上霊薬（エリクシール）」の力を持つ。
治癒と肉体強化という二面性の使い方が出来る非常にレアな力。

特に治癒の力は、現状医学では不可能と言われる病気も完治出来る。
この力を応用させると、相手の体を完全に支配できる。

接触している事が条件な上に対象は一人限定というデメリットがあるが。
それでも『生物』であれば、どんな異能の力で防御してても関係なく支配できる。

肉体強化は『聖人』の六、七割ほどまで身体能力を高められる。
『聖人』の弱点がない代わりに『天使（テレズマ）の力』などの破壊力を生み出せない。
あくまで武術の破壊力を極限まで高めた程度しか行えない。

しかし対外的には無能力者で通されており、優菜の能力を知る人間は数少ない。

・家族構成
当麻と同じ。

・友好関係
第一位の一方通行、第二位の垣根、第三位の御坂、第四位の沈利。
第五位の操祈とレベル5の殆どと知り合い。

他では土御門（兄だけ）、青髪ピアス、吹寄、姫神、小萌。
打ち止めと妹達、インデックス、黒子、初春、佐天、風斬。
その他助けたりした人たち（数が多すぎて割愛）

魔術側ではイギリス清教のステイル、シェリー。
ローマ正教では『神の右席』のフィアンマ、アックア、テッラ、ヴェント。
アニェーゼ、ルチア、アンジェレネ等のアニェーゼ部隊の面

子。

ロシア成教に知り合いはいない。

アリシアとは義妹という関係。

まりなや静華等の聖カトリーヌ女学院の面々。

こちらも女性が多いのは優菜だからとしか言えない。

・その他

当麻の従姉妹だが、一人暮らしをしている。

住んでいるのは学生寮ではなく、４ＬＤＫレベルのマンションに住んでいる。

（寮に住んでいたが、後にアレイスターが移動させた）

学園都市の中と外両方に広大な友好関係を持つ。

暗部組織「スクール」の一員。

といっても殆ど暗部での仕事はせず、アレイスターの手伝いをしている。

但し単なるメッセンジャーではない。

アレイスターと直接交渉権を持っている。

『未元物質（ダークマター）』の加工に成功し、それで作った棒と大型ナイフ二刀を所有。

レベル５の中で唯一武具を利用する。

利用できる物は何でも利用するタイプなので、能力だけで闘う事は滅多に無い。

当麻の家庭教師を務め、当麻を補修地獄から救い出した人。

医者であり科学者の側面があるが、どちらも余り人には見せていない。

当麻の無自覚なフラグ建築を尽くへし折り、あくまで家族的な好意を崩さない、

その様から、クラスの男子たちは「カミジョーフラグ完全建築不可」と崇めている。

通称『クラスの至宝』（当麻がフラグ建築できない人なので）

本人は同性である女性へのフラグ建築能力を保持。

無自覚に当麻以上の早さで建築するので『無垢なる魅了（イノセントチャーム）』と揶揄されている。

御坂曰く『三日あれば常盤台中学学生寮に住む全員が堕ちるわ』との事。

アックアとは師弟の仲で、彼から『傭兵の流儀（ハンドイズダーティ）』を受け継いだ。

その他にもアックアの思考が優菜の中に息づいている。

○上条刀夜（かみじょうとうや）

・容姿

当麻によく似た顔立ちをしているが無精髭を生やしている。

精悍だがどこか理知的な雰囲気を漂わせている。

所謂『カッコいいおじ様』みたいな容姿。

・性格

当麻並に臭いセリフをポンポンと言う。

妻である詩菜を愛しており、生涯愛し続ける存在と公言している。

しかし反面、当麻以上にフラグ体質でありよく詩菜を怒らしている。

喧嘩など一切出来ない性格だが、闘う必要があるなら立ち上がる等、
当麻と同じで、自分の感情に従って真っ直ぐ突き進む。

・能力
学園都市に住んでいないので能力者ではない。
だが、仕事はよく出来る方で海外出張を月に三回はしている。

・家族構成
妻の詩菜、息子の当麻。
娘の沈利に理后、フレンダ、最愛、フレメアと子供が多い。
といっても自分の血を分けた存在は当麻だけ。
優菜も娘と思っており、ある意味で美人娘一杯な父親。

・友好関係
目立った友好関係はないが、御坂旅掛とは面識がある。
過去にフラグ建築した女性とは付き合いがあるが、あくまで友人同士の関係。

・その他
家族の大黒柱だが、家では詩菜筆頭に女性陣の力が強いので立場は低い。
よく娘にいじられているが、これも娘からの愛情と思って受け止めている。

○上条詩菜（かみじょうしいな）
・容姿
どう見ても二十代前半にしか見えないが、実年齢は刀夜と同じく三十代中盤。

肌に気を遣っているわけでもないのに若く瑞々しい肌を保っている。
スタイルもよく、年齢を聞かなければ女子大生にしか見えない。

・性格
いつも優しい笑みを浮かべるが、キレると辺りの物を手当たり次第投げる。
機嫌が悪くなると、沈利たちも吃驚な陰影を強調した笑みを浮かべる。
実はある意味アブない人。

娘たちを非常に愛しており、沈利たちを本当の娘として接している。

・能力
能力ではないが、怒った時は沈利すら恐怖に硬直する程怖い。
通称『折檻部屋（オシオキ）』と呼ばれる行為がある。
食らった人間は、一同口を閉ざしてしまうので内容は全く不明。

・家族構成
夫の刀夜、息子の当麻。
娘の沈利に理后、フレンダ、最愛、フレメア、優菜。
といっても血を分けているのは当麻のみ。

・友好関係
夫と同じで御坂の姓を持つ美鈴と知り合い。
その他ご近所付き合い程度の知り合いはいる。

・その他

上条家最強の人。

学園都市でレベル５の沈利や優菜ですら詩菜には逆らわない。

『アイテム』の四人全員を一度に相手して、返り討ちにした凄い人。

趣味は原動機付パラグライダー。

その姿は『お嬢様姿の人妻が空を飛んでいる』と言われている。

現在も続く刀夜のフラグ体質に振り回されている苦労人。

刀夜も愛しているが、実は当麻も大好きな息子好きの一面がある。

登場人物【月詠家】

○月詠小萌（つくよみこもえ）

・容姿

童顔と身長１３５ｃｍの容姿からどう見ても小学生にしか見えない。

外見年齢十二歳、ジェットコースター使用を身長面から断られた伝説を持つ。

だが、これでも大学を卒業しているれっきとした成人女性。

園児服にしか見えないピンクの服と、ピンクの髪が特徴である。

理論数値的にありえないほどの肌の瑞々しさを保っている。

一方通行曰く『不老不死実験被験者一号』との事。

・性格

その外見に似つかわしくないほど私生活はずぼらでビールを嗜む。

過去に喫煙をしていたが、一方通行の手により喫煙しなくなってしまった。

これは、一方通行が小萌の体を気にした為である。

部屋に時計が必要ないほどの、秒刻みで時間を観測する事が出来る。

異常に正確な体内時計の持ち主。

説教をスルーするような人物でも粘り強く説得を試みたりする。

また、卒業式で号泣したりするなど典型的な熱血教師。

出来の悪い生徒ほど可愛く、あれこれ世話を焼こうとする。

心理学を応用して家出少女を見つけ、自分のやりたい事を見つけるまで、
仮の場所を作ってやる事が趣味。
ちなみに、男を拾ったのは後にも先にも一方通行のみ。

・能力
大人なので能力はない。そもそも学園都市に来たのは大学卒業後。
専攻は『発火能力』、だが最近は一方通行の事も色々と知ろうとしている。

また、社会心理学や行動心理学等の心理学の専門家でもある。

・家族構成
一方通行、インデックス、打ち止め、アリシアと一緒に住んでいる。
立場上家長だが、全員が並ぶとどう見ても家長には見えない。

・友好関係
学園都市に住む研究者に幅広い顔を持つ。
隣のクラスの担任の黄泉川とその後輩の鉄装とは酒飲み仲間。

・その他
月詠家の家長にて一方通行の責任者。
また、書類上はインデックスの管理者とされている。
一方通行が借りた超高級マンションに住んでいる。

当麻、一方通行、垣根、優菜が在籍するクラスの担任教師。

何気にレベル5数人と問題児たちを纏め上げる凄い教師。
垣根が『先生に何かあったら手を貸す』と言うほど生徒から慕われている。
足が車のペダルに届かないため、障害者用の車を使っている。

酒が入ると耳にタコが出来るぐらい一方通行の事で惚気る。
その様は黄泉川も対応に困るほど。

一方通行の事は息子として愛情を注いでいたが、最近違う事に気付いた模様。
それが男女の愛情と気付くのはまだ先の話。

○一方通行（アクセラレーター）
・容姿
短髪で白く、肌も白いが瞳だけは爛々と紅い。
外見は男なのか女なのか分からなくなっている。
身長は当麻と同じ。

その容姿から一部では『セロリ』だの『白インゲン』だの『もやし』だの
散々な言われ様。

淡々とした無愛想な物やしかめっ面が多く、嗜虐的な笑みをよく浮かべる。
反面、小萌にだけは年頃の少年のような笑みを見せる事もある。

・性格
他者へ感情を向ける事には非常に消極的で、ついぶっきらぼうに言ってしまう。

周りを拒絶しやすく、無関心で傍若無人な性格をしている。
口には出さないが、知り合いには思いやりを示すような言動をたまに言う。
（指摘すると怒るが）

非常に小萌を大事に思っており、彼女を傷つけるなら学園都市すら牙を向ける。
それが愛情なのか、それともただ救われた恩を返すためなのか。
それは本人も分かっていない。
言えることは一方通行の心に、小萌の占める割合はかなり大きいという事だ。

コーヒーが大好きで、気に入った缶コーヒーを大量に買い漁る癖がある。
但し飽きたら新しい銘柄を探すなど、特定のメーカーには拘っていない様子。

・能力
レベル5で序列は第一位の「一方通行（アクセラレータ）」。
全てのベクトルを操作出来るので、幻想殺し等の力でなければ攻撃が届かない。
その他にも方法はあるが、基本的に『反射』で攻撃を防がれる。

現在は脳に損傷を負っており、能力はフルタイム三十分。
通常生活は四十八時間という制限がついている。
しかし優菜から前頭葉の治療を受け、消費電力を減らそうとしている。
最終的には元の状態に戻る事が目的。

だが、学園都市側からの介入によって未だ達成出来ていない。

戦闘になればこれほど強い能力はない。
だが、現在はもっぱら料理や掃除などの家事に利用している。
衝撃ベクトルを操作したり、浸透圧を操作したりと。
いわゆる能力の無駄使いを乱発している。
打ち止め曰く『ベクトルクッキング』との事。

・家族構成
小萌、インデックス、打ち止め、アリシアの四人。

・友好関係
レベル5では第二位の垣根、第三位の御坂、第四位の沈利。
第五位の操祈、第六位の優菜。

クラスメイトである土御門、青髪ピアス、姫神、吹寄。
海原、結標とは仕事仲間。

風紀委員の黒子、初春は顔見知りレベル。
佐天は違うが、ちょうど遊びに来たので知っている。

・その他
元は極普通の少年だった。
しかしとある事件をきっかけに、他人との関わり合いを極力減らそうと考えた。
（この時期に小萌と出逢う事になる）
後にこの考えは捨て去り、もう一度他人と関わろうとする。

本名不明。暗部組織「グループ」の構成員。
学園都市最強の超能力者（即ち最優秀生徒）で、非常に高い

演算能力を持つ。
幼少期から様々な研究機関を転々としていたが、どこも最後は厄介払い扱い。
二年前に小萌に拾われて以来、ずっと一緒に住んでいる。
高い技術と豊富な知識があり、複雑な計算も瞬時にやってのける。
語学も堪能で流暢に喋る事が出来る、所謂万能の天才である。
過去に様々な研究所に体を貸していたのでお金は凄くある。
一度も使用していない口座がいくつもあり、総資産は膨大な金額になる。
現在は暗部以外では研究所に協力していない。
料理をするようになってから、料理に関する知識を幅広く持つようになる。
和洋中は勿論、マイナーな国の地方料理まで記憶している。
理由は『小萌が欲しがった時、すぐ作れるように』との事らしい。

○インデックス
・容姿
腰まで届く程の長い銀髪（ストレート）。
エメラルドのような緑色の瞳に白い肌。
整った顔立ちと、小柄で華奢な体格をしている。
金刺繍の真白い修道服『歩く教会』を普段着にしている。
幻想殺しによって破壊されたが、後々優菜によって見た目だけ直してもらう。
寝る時は着おらず、猫パジャマを愛用している。

・性格

天真爛漫かつ若干わがままな性格、というか見た目より子供っぽい。

しかし、誰かが傷つくのを嫌い、人を守るためには己の身を顧みない。

「禁書目録」という壮絶な宿命を笑って受け入れる程の芯の強さと優しさを持つ。

また献身の心もあり、大切な人が傷つくなら己の身を傷つけるほど。

シスターらしかぬ振る舞いが多いが、篤い信仰心や深い慈悲の精神はある。

・能力

完全記憶能力を持つ。

その為、頭脳に十万三千冊の魔導書を保管している。

・家族構成

正式な家族構成は不明。

現在は小萌と一方通行、打ち止めとアリシアを家族と思っている。

・友好関係

優菜や垣根、当麻と友人同士の関係。

それ以外は風斬だけで、余り顔は広くない。

イギリス清教ではステイルだけが友人。

一方的な関係であれば教会世界ではかなり有名な人物。

・その他

魔道書図書館としての正式名称は「Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ」。
食欲旺盛であり、食費が尋常じゃない程かかっている。
但し一方通行から見ればそれすらも捨て値同然である。

実年齢と本名は不明。
本人がインデックスと名乗っているがそれも怪しい。
ただし誰も気にしていない、ある意味空気っぷりを発揮している。

ステイルを『同僚であり仲の良い友達』と思っている。

科学オンチ。何度か家電製品を破壊する前科あり。
但しテレビ等はすぐ覚えた。つまり興味があるとないで変わる模様。

○打ち止め（ラストオーダー）
・容姿
御坂美琴の外見年齢を十歳程度にした容姿を持つ。
肩まである茶色の髪と同様の瞳、頭頂部に大きなアホ毛がある。
意図的な未完成のためか、他の個体と違って最初から感情表現が豊か。

・性格
インデックスと同じで、天真爛漫かつ明るい性格をしている。
他の個体と違い、裸を見られると恥ずかしいという感情がある。

自分の記憶をミサカネットワークに共有させバックアップを

取る癖がある。

未完成のまま培養機で保管されていたせいか、若干一般的知識がない。

たまに飛んでもない発言をして、回りを驚かせたりする。

と思えばなかなかシビアで賢い面も持っている。

・能力

レベル４に近い『欠陥電気（レディオノイズ）』

ある程度のハッキングなら可能。電子ロックも即解除出来る。

また、ミサカネットワークに直接命令を下す事が出来る。

・家族構成

小萌、一方通行、インデックス、アリシアの四人。

妹達とはある意味で家族。

御坂美琴は姉と慕っているが、当の美琴は打ち止めを知らない。

・友好関係

家族を除けば当麻と優菜、後は垣根ぐらいしかいない。

生い立ちの都合で友人を簡単に作れないから、友好関係は狭い。

・その他

一万体いる妹達の上位個体。

補佐役で美鶴がいるが、殆ど立場は逆転している状態。

アリシアをお姉ちゃんと慕っている。

曰く『お姉様（御坂）よりお姉ちゃんっぽい』との事。

○アリシア

・容姿

年齢は優菜と同じだが、身長１１８ｃｍとどう見ても６か７歳の子供にしか見えない。

一方通行曰く「不老不死実験被験者二号」との事。

日本人ではなくドイツ人。金髪碧眼だが中身は殆ど日本人。

整った顔立ちと白い肌、足の膝まであるほど長い金髪を左右で結っている。

髪を結う為に使うリボンは優菜が上げた物を使用。

勝ち気な表情を常にしているが、端から見ると背伸びしてるようにしか見えない。

魔術の力を発揮すると髪が金から銀、瞳の色が青から赤に変化する。

その時はリボンをはずすので、ツインテール状態ではない。

・性格

一に優菜、ニに優菜、三に優菜という思考の持ち主。

自他共に認められている優菜の義妹。

妹の座を脅かす存在は、赤子でも平気で喧嘩を売る。

無駄に偉そうな年寄りくさい喋り方をする。

だが常識は弁えているので、あまりマイナスイメージにとられない。

面倒見はよく、打ち止めやインデックスの相手をよくする。

知り合いが傷つくなら、喜んで悪役すら演じる程の献身の心を持っている。

反対に優菜を傷つける存在は絶対に許さず、残虐非道な行為

も平気で行う。
阻止する時に他人がいくら傷つこうと気にもとめない。
時と場合によって善人とも悪人とも取れる性格を演じる。

英名の呼び方をする人物も、平気で漢字読みに変換する。
（例：インデックス→禁書目録、ラストオーダ→打ち止め）
その他人に珍妙なあだ名を付けたがる癖がある。
（例：建宮→鍬形頭、ステイル→香水神父）

日本史が好きで、特に好きなのが時代劇。後は侍や忍者も好き。
戦略物資（オタクぶんか）ではなく、純粋に歴史として好き。
ただ所々勘違いしており、微妙に違った方向の知識も有する。
誰も共感してくれないのが悩み所。
（回りは日本人なので当然と言えば当然だが）

魔術関係の知識は豊富。
場合によってはインデックスより詳しい事もある。

十字教が嫌いで特にローマ正教を毛嫌いしている。
知識として十字教の教えは知っているが、忌々しい知識と断じている。

・能力
能力はなく無能力者だが、魔術師としての才能はピカイチ。
普通と魔術師のスイッチを切り替えるのはリボンのありなしである。

十代でコルネリウスの『当主』まで上り詰めた。
おまけにコルネリウス家で唯一『外出』が許されている。

（アクゼリュスに何か思惑があったかもしれないが）
魔術師としての力は相当なものがあり、一介の魔術師では歯がたたない。

アクゼリュス曰く攻撃と攻撃の間にタイムラグがあるとの事。
基本的に一対複数系統の魔術ばかりなので、ワンマンアーミー型の部類。

様々な魔術が使え、攻撃型の魔術は勿論、防御魔術や回復魔術なども使える。
中にはイギリス清教すら躊躇うような拷問魔術も存在する。
ある意味で一方通行並に万能の天才と言えるだろう。

よく利用する魔術は『説明できない力』を一閃のように撃ち出す『抜刀』。
侍の抜刀術みたいなのは、アリシアの趣味が入っている。

・家族構成
ドイツでの家族構成は不明。
弟や妹がいそうな雰囲気だが詳細は誰も知らない。

・友好関係
学園都市では小萌、一方通行、打ち止め、インデックスの四人。
更に学校でのクラスメイトである当麻や垣根、姫神や吹寄などなど。
魔術師である土御門とも友人。
風斬は友人だが同時に警戒する人物との事。
佐天は敵、遺伝子レベルで噛み合わないとの事。

・その他
月詠家へ最後に参加した人物。
フルネームはアリシア・フォン・コルネリウス。
ドイツ語で「Ａｌｉｃｉａ　ｖｏｎ　Ｃｏｒｎｅｌｉｕｓ」と書く。
元聖カトリーヌ女学院の生徒であるが、優菜を追って学園都市に転校。

魔術知識が高いので、オリジナル魔術を作り出す事が可能。
但し、作ってイマイチな感じがしたら、そのまま術式ごと闇に葬る。
（多大な苦労を支払っているのだが）

どんな敵でも恐怖を感じないが、唯一優菜からの拳骨は怖い。

登場人物【超電磁砲組】

○御坂美琴（みさかみこと）

・容姿

茶色のショートヘアにヘアピンをつけている少女。
常に常盤台中学の制服を着ている（校則で外出時には着用義務）。
スカートの下には短パンを履いている。
身長は１６１ｃｍ、体重は４５ｋｇ。スリーサイズは７８・５６・７９。
化粧がいらない程度に整った顔立ちをしている。

・性格

正義感が強く勝気で頭より先に体が動くタイプ。
時々超独善的な理論で周りを巻き込みながら突っ走る。
しかし一方で後輩の黒子には「優しすぎる」とも評される。
多くの後輩や同輩に羨望の眼差しを向けられている。
漫画の立ち読みを日課にしており、よくコンビニで目撃される。
また、年上にもタメ口を聞いたりと上品とは言い難い面が多い。
当麻曰く『お嬢様学校に行ってるけど一般人臭い』との事。
しかしバイオリンの演奏を得意とするお嬢様らしい一面もある。
服装や下着は少女趣味な面があり、キャラクターのパンツを持っている。
ぶっちゃけた言い方をすると子供っぽい服装が好み。

ラブリーミトン製の「ゲコ太」というカエルのキャラクターに執着している。
ただし「ゲコ太」に関しては周りからは壮絶に不評である。
未だ「ゲコ太」の良さを理解してくれる人に出会わない。

努力でレベル5になったので、その事自体が一種のパーソナリティとなっている。
よって幻想御手（レベルアッパー）などの道具を毛嫌いする。
ある意味では「ちゃんと頑張れば結果はついてくる」という根性みたいな思考。
そういう意味では軍覇の考えに近いものがある
但し人によっては上から目線にしか見えず、反感や陰口を叩かれる事もある。

自分のスタイルにコンプレックスがあり。
後輩や友人のスタイルと比べては一人勝手に落ち込んでいる。
母親の遺伝子（ナイスバディ）を受け継げなかった事を激しく後悔している。
御坂にとって理想のスタイルは、実は優菜である。
（全体的にバランスが取れてて素敵との事）
彼女を目指して涙を誘う努力を続けている。
が、それが結果として出てくるかは不明。

他のレベル5と違い、本当の敗北を経験した事がない。
よって負ける事を非常に嫌い、勝つまでは相手の都合を考えずに追い回す。

暗部組織に所属している一方通行、垣根、沈利と比べて非常に甘い。
だが、御坂はあくまで学園都市の『表』の住人である。

よってその甘さは彼女の魅力となり、信奉者を生み出す源泉となっている。

・能力

レベル５で序列は第三位の「超電磁砲（レールガン）」。

発電能力系の頂点に立ち、最大電圧は十億ボルト。

電撃の放出や落雷、電撃の槍などの攻撃技を持つ。

後述のように多彩な攻撃技や様々な応用が出来るオールラウンドな能力。

その手数の多さは、他の同系統能力者の追随を許さない程。

中でも物体に電磁加速を加えて放つ「超電磁砲（レールガン）」が決め技であり異名。

（主にゲームセンターのコインを用いる）

空気との摩擦熱で溶けてしまうため射程は５０ｍ。

弾丸の質量を変えれば威力や射程は伸びる。

他にも磁力を操作して金属を思いのまま動かせれる。

自身に電磁加速を与える事での一時的な走力向上も可能。

またスタンガンや同系統の能力をある程度無効化できる。

直接的に電子機械を操っての高度なハッキング（クラッキング）なども行える。

磁力線を目視できるので電磁気関連においては高い知覚能力を有する。

電磁波からの反射波を感知して周囲の空間を把握する事も可能。

（常に自身から周囲に放出しているのをよく使う）

所謂レーダーのような機能だ。

ただ常に微弱な電磁波を発しているので、それによる弊害も多い。

まず、本人の意思に反して動物に嫌われるという面がある。

それにちょっとでも怒ると、周りの電子機器が酷い目に合う人災を起こしてしまう。

このように派手な技の数々で隠れがちではあるが、彼女の真の強さは別にある。

それは電磁波を自由自在に操り、複数の用途で多角的に敵を叩ける事。

その手数の多さが、彼女の強さを支えている。

・家族構成

父親の旅掛に母親の美鈴。

姉妹はおらず一人っ子。クローンは一万一体いる。

・友好関係

当麻と優菜、理后、フレンダ、最愛と知り合い。

とはいっても当麻と優菜以外はとても友好的とはいえない関係。

ルームメイトの黒子、風紀委員の初春と固法、普通の友達で佐天や沙月がいる。

レベル5は第一位の一方通行、第二位の垣根、第四位の沈利、第五位の操祈。

但し沈利と操祈からは壮絶に嫌われている。（本人も余り好きじゃない模様）

『妹達』の中では美鶴が一番の仲良し。

ただ、時々どっちが姉か分からなくなるのが悩み所。

・その他

学園都市内での知名度は高く、「（常盤台の）超電磁砲（レールガン）」と呼称される。

だが、見知った人間からは変なあだ名を付けられる事が多い。

当初はレベル1だったが、数年で才能を開花しレベル5まで上り詰めた為

学園都市ではレベル5の広告塔のようなポジションにいる。

学舎の園の外の学生寮の２０８号室に黒子と共に住んでいる。

個性的（へんたい）な妹達がいるのを、どうするべきか悩んでいる。

特に学園都市にいる十二人のうち、三人ほどが悩みの種だったりする。

『妹達』には奨学金の中から小遣いを少し融通している。

但し管理は美鶴に一任しており、どういう分配が行われているかまでは知らない。

金銭感覚は結構いい加減で、ホテルをコインロッカー代わりに利用したりする。

といっても他のレベル5達が所帯じみているせいで目立つだけだったりする。

本当の意味で超能力を封じられる状況になった場合は脆さが出る。

頭の良さはレベル5らしく優秀で、当麻の宿題程度はいともたやすく解いてしまう。

記憶力も高く、十八ケタの符号を一度聞いただけで暗記して

しまうほど。

身体能力も女子中学生にしてはかなり高い。
スタミナに関しては女子中学生の枠を超えて驚異的な持久力を持つ。
格闘技術も高く、風紀委員で鍛えられた黒子を簡単に返り討ちにする程。

垣根の事は出来のいいお兄さんみたいに思っている。
しかし妹達には『あのメルヘンが兄貴とかねーよ』と壮絶な不評を貰っている。

○白井黒子（しらいくろこ）
・容姿
茶髪ツインテールの少女。鈴のような声をしている。
一部では「ババァ声」とも言われているが、それを言うと本人は烈火の如く怒る。
胸はＡＡだが本人は『これから増量するからいいんですの」との事。
身長は１５２ｃｍ。スリーサイズは悲惨の一言で片が付く。

黙っていれば可愛らしい容姿をしているが、中身はただの変態という落ち。

・性格
語尾に「―ですの」をつけるなどお嬢様口調が特徴。

御坂の「露払い」を自称しているほど、御坂に心酔し「お姉様」と慕う。
だが当の御坂には、恋愛に基づく過激なアプローチしかしな

い。
セクハラをしては電撃などの反撃を受けるが一向に懲りる様子はない。
むしろ段々と快感に変わっている様を見せている変態。
集中力を高めるために布地がかなり少ない下着を好んでいる。
御坂の事となると暴走して汚い言葉を平気で使いくる。
むしろこっちが素では、と疑われるほど。
変に色気を出そうとするがスタイルが付いてきていない。
センスが激しく酷く、周りに説明不能の破壊力をまき散らす。
御坂を初め周囲の人間は誰一人理解を示す事が出来ない。
お馬鹿な未来が好きで、透明なチューブの中を走る電車に乗りたいらしい。
意外にも普通の未来感を持っている。
その関係で携帯電話もＳＦっぽさを重視している。

・能力
レベル４の『空間移動（テレポート）』。
自身を転移させる際の移動速度（但し直線）は約２８８ｋｍ／ｈ。
能力の限界値は、距離が８１．５ｍ、質量が１３０．７ｋｇとである。
フレンダと比べてショボイが、フレンダのは距離と質量『だけ』狂っているから。
なお、双方が限界値に近いほど精度は落ちる。
物質を自動的に押し出して転移しているので、物質を『切る』事が可能。

制限としては転移対象が皮膚上に触れているいるもの限定。

・家族構成
不明。描写から姉妹等はおらず一人っ子と思われる。

・友好関係
ルームメイトであり尊敬する御坂。
風紀委員の初春、それから固法。
他では佐天と紗月が知り合い。
一方通行、垣根、優菜、当麻とも知り合い。

他にも婚后や湾内、泡浮とも知り合い。
但し婚后に関しては色々とソリがあわない模様。

・その他
その名前から一方通行や垣根から『オセロ』とあだ名をつけられた。
本人は激しく嫌っているが、第一位と第二位に勝てず悔しい思いをしている。
口調も同様で、どうやら一方通行や垣根から随分といじられていた様子。

何気に第一位と第二位に平気でブチキレて喧嘩を売ったりする凄い子。

能力を組み合わせた変幻自在の格闘術を駆使するが御坂には一蹴されている。
その他にも金属矢を利用したりする。

悪名が轟き渡っている様で、不良や軽犯罪者からは酷い評価

を貫っている。
暴走すると山賊的な笑みが溢れる事もある。

○初春飾利（ういはるかざり）
・容姿
黒髪のショートヘアに飴玉を転がすような甘ったるい声色が特徴。
頭に造花の飾りがついたカチューシャをつけている。
季節に合わせて花が変わるあたり、それなりにお洒落さんのようだ。
身長１５３ｃｍ、体重４３ｋｇ、スリーサイズは７５・５８・７６。

・性格
天然系な所がある。だが洞察力は高く、正義感も人一倍強い。
常盤台中学や御坂に憧れを抱いているが、若干偏見も混じっている。

パフェやクレープ等、甘いものが好き。好物はいちごおでん。
耳年増であり、いろいろと想像力（もうそうりょく）が高かったりする。

時々笑顔で毒を吐いたり、平然と冷たいジョークを言ったりする。
但し相手は大体黒子であり、他の人間には余り言わない。

情報処理系では性格が変わるのか、構築するセキュリティは大体攻撃型。
「防護」より相手を「攻撃」する構成を好む。
度が過ぎて黒子に怒られる事もある。

・能力

レベル1の『定温保存（サーマルハンド）』。

ただ演算能力は非常に高いので、能力に関する特別な才能があれ上を狙える。

『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』を組み立てれば、強大な力を発揮するかも……。

と言われているが定かではない。

・家族構成

不明。家族構成に関しての描写はなし。

・友好関係

御坂、黒子、佐天、紗月とは仲良し。

固法とも仲が良いが、御坂ほどではない。

一方通行、垣根、優菜と知り合い。

・その他

見た目から想像できないが超一流のハッカーである。

二つ名は『守護神（ゴールキーパー）』。

過去に御坂（とは知らなかったが）のハッキングすら退けた事もある。

暗号の解析は御坂より得意。

御坂でも時間と手間がかかるものを十秒以内にこなしてしまう程。

垣根から壮絶にいじられている。

一応反撃のつもりで殴っているが、垣根からは肩たたきレベルでしかない。

どうにも垣根から妙な気に入られ方をされている。

頭の造花の飾りが本体とネタにされている。
そのせいか垣根から『花瓶』、一方通行から『花』とあだ名をつけられた。
アリシアからは『その花は成長するのか？』と本気で疑問に思われたぐらい。
しかし本人は全力で否定。

○佐天涙子（さてんるいこ）
・容姿
セミロングの黒髪に白梅の花を模した髪飾りをつけている。
身長は１６０ｃｍ、体重は４６ｋｇ、スリーサイズは７９・５８・８０。

数ヶ月前まで小学生だったとは思えないほどの美貌の持ち主。
ノンメイク状態で御坂に引けを取らないほど可愛らしい顔立ちをしている。
成長すれば恐ろしく化けると思われている。
しかし本人は全く自覚しておらず、宝の持ち腐れ状態。

・性格
能力者へのコンプレックスがあるが、それ以外は至って一般的な性格。
但し、初春にだけはスカートめくりを挨拶としている。
（親友として初春が毎日パンツをちゃんとはいているか気になるため）
友人が風邪を引けば見舞いに訪れて看病するなど面倒見の良い性格。

闘う優菜の姿を見て一目惚れするが、その毛は全くない。

助けてもらって以降、優菜を「お姉様」と慕う。
でも黒子のような変態行為は一切ない。
モーニングとお休みメールは欠かさないマメな一面もある。

都市伝説や噂話を追求する事が趣味で、色々なウワサを追いかける。
たまに噂にあたる人と対面するが、本人は全く気づかずスルーしている。

空想を否定するような思考があったりする。
能力は憧れているが、現実には出来ないと心の何処かで思っている。
これが『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』の組み立てを阻害している。

・能力
レベル０の『空力使い（エアロハンド）』

・家族構成
母親と弟がいるが父親は不明。

・友好関係
御坂、黒子、紗月と友人同士。
初春は親友と思っている。

一方通行と垣根とは顔見知り程度。
優菜は知り合いで尊敬する人。
アリシアとは知り合いだが、犬猿の仲。

・その他
優菜を「お姉様」と慕っているが、どちらかというと憧れの

人に近い。
ただアリシアにとっては妹の座を奪う奴と思われている。
せめてレベル１にはなりたいらしく色々と奮闘中。
優菜とは数ヶ月近く直接出会えていないので不満との事。
とはいえ優菜が忙しいのは知っているので、強くは言えない。
母親から貰ったお守りをいつも持っている。

○竜童紗月（りんどうさつき）
・容姿
髪は肩までの長さで、毛先だけはねる癖っ毛。色は茶色。
眠たそうな、ぼーっとしているような表情をいつもしている。
ベースはいいが、本人が見た目に余り気を使っていない。
可愛いとも綺麗とも取れる顔立ちをしている。

身長は１５９ｃｍ、体重は４７ｋｇ、スリーサイズは８２・５７・８０。
モデル体型に近く、一部の男子から『将来有望株』との事。

・性格
容姿通り大人しめな性格をしている。
自分から意見を言うより他人の意見を聞く方が得意。
物事を余り深くとらえず、気楽な方向に考える。

端から見ると不思議ちゃんな雰囲気を漂わせている。
間延びした口調で、滅多な事では動じない。
但し、許容量を越えるとパニックになって涙目になる。

頭脳に関しては佐天と同じぐらいで、余り宜しくない。
運動神経はそこそこだが、こちらも至って平凡。

男性が苦手で、近くにいると緊張の余り声が出なくなってしまう。

（クラスメイトたちはギリギリ耐えている）

どちらかと言うとカッコいい女性に憧れるタイプ。

お嬢様学校に憧れており、常盤台中学を妙な方向で美化している。

本来は自分を「ボク」と呼んでいたが、お嬢様に憧れて「私」に変えたぐらい。

話を聞いた御坂は、乾いた笑いをして聞いていた。

その余りの夢見る姿に否定の言葉が述べれなかったらしい。

・能力

無能力者。

発火能力（パイロキネシス）系統の能力が計測されているが数値が低い。

・家族構成

商業サラリーマンの父親、専業主婦の母親。

兄弟は弟が一人、兄が一人いる。

但し学園都市に来ているのは紗月のみ。

・友好関係

元はクラスメイトである佐天や初春、その他程度だった。

だが、ルームメイトの事件を期に御坂や黒子とも付き合うようになる。

ルームメイトとは学園都市に来てからの仲。

その他にも寮で仲のいい友達は沢山いる。
超電磁砲組の中では、友達がかなり多い方。

・その他
柵川中学一年生、佐天や初春とはクラスメイト。
これといって特徴のない平凡な子。
但し家事は得意であり、中でもスイーツ系はプロ級の腕前を誇る。
スイーツ作りの腕前から、一部では『体重破壊（ダイエットブレイカー）』の異名を持つ。

本人は甘いモノを食べての太らない体質（むしろ一カ所に集中している）。
なので、同じように甘いモノを食べると悲劇が舞い降りる。

無能力者狩りにあったり、アクゼリュスに絡まれたりと散々な目にあっている。
でも気楽な性格からか「そんな事もあるさ」の一言で片づけている。

登場人物【妹達】

○ミサカ００００１号

・容姿

ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまですべて同じ。

軍用ゴーグルはつけており、下着は青白の縞パンを穿いている。

服装は常盤台中学の制服を着用し、滅多な事で私服は着ない。

・性格

一言で言えばお馬鹿な子。

明るくハキハキしており、表情豊かで喜怒哀楽をはっきりと表情に出す。

自分をクールビューティと思っているが、実は全くの正反対な性格。

学校に通えば間違いなくムードメーカのポジションに収まる。

大雑把であっけらかんとしているので、あんまり怒らない。

むしろ怒られる方が多いぐらい。

軍用ゴーグルを愛用しており、いつも頭にゴーグルをつけている。

とはいっても利用する訳ではなく、ただ単にアクセサリーとしてつけている。

下着が見えるのを恥じらい、いつもガードしているが大体は結果が伴わない。

・能力
レベル３の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。
一般的な妹達と遜色がない程度の電圧出力しか出来ない。
（妹達の平均電圧は１０万ボルト）

・家族構成
クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係
当麻以外は明確な友人はいない。

・その他
検体番号は００００１号、名前は美冬（みふゆ）。
絶対能力進化実験の為に最初に作られた個体。

知らなかったとはいえ、初対面の一方通行を後ろから蹴り飛ばした凄いアホ。
（対小萌用の反射膜だったので、普通に蹴りは入った）

脳天気な性格なのでクローンという事を余り気にしていない。
どんな時でも楽しくがモットーの人。
検体番号００００２号の美静（みしず）とは大の仲良し。

クールビューティを盛大に勘違いしている。
だが、本人が満足気なので誰も突っ込みを入れない。

○ミサカ００００２号
・容姿
ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまで

すべて同じ。
軍用ゴーグルはつけておらず、下着は可愛い系を穿いている。
常盤台中学の制服が普段着なのは変わらず。

・性格
御坂美琴のクローンかと疑われるほど大人しめな性格。
普段はオドオドしていて、よく美冬（みふゆ）や美鶴（みつる）の背中に隠れている。
内向的で気弱な性格。

人混みが苦手で外出は余りしない方。
相手が傷つく事を非情に怖がり、滅多な事では能力を使わない。
どんな時でも他人を思いやる心優しい子。

反面、自分の事に対して無頓着である。
他人が傷つくなら自分が、という献身的な思考はあるが度が過ぎている。

物事を強く言えないので、自分の考えを押し殺す傾向がある。
妹達の中では珍しく犬が大好き。
（大体は姉にそっくりで猫好きである）

・能力
レベル３の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。
一般的な妹達と遜色がない程度の電圧出力しか出来ない。
（妹達の平均電圧は１０万ボルト）

・家族構成
クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家

族といえる。

・友好関係

当麻以外は明確な友人はいない。

・その他

検体番号は００００２号、名前は美静（みしず）。

検体番号０００００１号の美冬（みふゆ）とは仲良し。

美鶴（みつる）は尊敬している。

○ミサカ００００３号

・容姿

ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまですべて同じ。

軍用ゴーグルはつけており、下着は黒子と同じようなのを穿いている。

つまりセックスアピールが激しい下着を好む傾向。

常盤台中学の制服ではなく、最新の流行を追いかけたような服装を着ている。

・性格

変態性格三人衆のうちの一人。

男と男の絡みが好物（つまりＢＬ好き）だが、女と女の絡み（百合）もいける変態。

危険なカップリングも好む、ぶっちゃけてしまえばカップリング変態。

頭の中は危険なぐらいピンクで、御坂より将来を心配されている。

ありとあらゆるカップリングを脳内でしては鼻血をふいて倒れている。
周りがドン引き状態でも、全く歪まず己の欲望を曝け出す。
よく打ち止めより制裁を食らっているが、それでも諦めない
ある意味生粋の変態。
最近ではスルーされる事が多く、誰からも相手されていない。

・能力
レベル３の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。
一般的な妹達と遜色がない程度の電圧出力しか出来ない。
（妹達の平均電圧は１０万ボルト）

・家族構成
クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係
当麻以外は明確な友人はいない。

・その他
検体番号は００００３号、名前は美秋（みあき）。
自身の欲望をオリジナルの前でも平気で曝け出す。
悪い意味で欲望に忠実な個体。
時々ミサカネットワークで、周りを恐怖と驚愕に陥れるような妄想を垂れ流す。

○ミサカ００００４号
・容姿
ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまで

すべて同じ。
　軍用ゴーグルはつけておらず、下着は普通のシマパンをはいている。
　常盤台中学の制服が普段着なのは変わらず。

・性格
　機械関係や情報処理関係が好きな個体。
　能力と相まって高度なクラッキングを得意とする。

　喜怒哀楽はあまり無いが、好きな事をしている時は終始笑顔。
　でも口元だけつり上げた不気味な笑い方なので結構怖い。

　家電製品をこよなく愛し、愛用の電子機器に名前をつけるぐらい。
　その為、人に愛機を触られるのを嫌う傾向がある。

　ハッカーとしての腕はまだまだ半人前。
　能力でブーストかけてギリギリ一人前な事が出来るレベル。
　それでも、一介のハッカーよりは凄腕。

　電磁波を吸収するコーティングを施したカバンに小型端末を入れている。
　かなりの重量があるが、手元にある方が重要なので我慢している。

・能力
　レベル４に近い電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。
　電気信号や電子を操作出来るが、フルタイムで二時間程度しか出来ない。
　それを超えると御坂と同じで「電池切れ状態」になってしま

う。
反面、電撃に関する攻撃パターンが他の妹達より少ない。
せいぜい電撃を撒き散らす程度。基本的に後方支援型に特化している。

・家族構成
クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係
当麻以外は明確な友人はいない。

・その他
検体番号は００００４号、名前は美夏（みなつ）。

電子機器に関する造詣が深く、趣味の事になると人が変わる。
お小遣いの大半は趣味に費やし、女の子らしい事には全く使っていない。
プログラム知識があるので変なアプリを作って小遣い稼ぎをしている。
でも、そのお金は単に設備投資に使われるだけであった。

○ミサカ００００５号
・容姿
ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまですべて同じ。
軍用ゴーグルはつけておらず、下着は白色かピンクのどちらかにしている。
色が決まるのはその日の気分なので、結構ランダムである。
常盤台中学の制服が普段着なのは変わらず。

・性格

威勢の良い性格の持ち主で、ある意味男勝りな性格をしている。

昭和の下町気質な考えを持っており、何事にも特攻精神で当たる。

その結果、周りに甚大な被害を与えるが、本人はまるで反省していない。

学園都市に住んでいながら機械が結構苦手。

パニックを起こすと、対象のものを殴る癖がある。

よく美夏（みなつ）のデバイスを触っては最後にぶっ壊している。

その他考えが昭和臭く、いつか夕日をバックに友と殴りあいたいと思っている。

その夢が叶う日は残念ながら来ないだろう。

人の苗字を短縮＋ちゃん付けで呼ぶ事が多い。

（例：上条→上ちゃん　垣根→垣ちゃん）

・能力

レベル３の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。

一般的な妹達と遜色がない程度の電圧出力しか出来ない。

（妹達の平均電圧は１０万ボルト）

自分限定で体内の電気信号を操作して一時的な身体能力向上をする事が可能。

ただ、こちらも他の妹達同様時間制限がついてくる。

ブーストするレベルによって変わるが、基本的には四時間程度。

御坂のような電磁加速を自身に与える事は出来ない。

・家族構成
クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係
当麻以外は明確な友人はいない。

・その他
検体番号は００００５号、名前は美春（みはる）。

得意技は電気信号を操作して打ち出すハイキック。
ただしパンツが見えるので乱用はしない。

一度美鶴（みつる）となら夕日で殴りあう事が出来ると思い打診。
但しやったら一撃でノックアウトされるという結末。
それ以来美鶴（みつる）とは殴り合わない事にしたそうだ。

以前黒子に発見されて一日中追い回された過去を持つ。
そのせいかツインテールにトラウマがある。
後に黒子は御坂からの鉄拳制裁と寮監の罰。
それから一週間の別部屋生活という制裁コースを受けたが。

○ミサカ００００６号
・容姿
ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまですべて同じ。
軍用ゴーグルはつけており、下着は青白のシマパンを穿いている。

常盤台中学の制服が普段着なのは変わらず。
妹達に支給されたデフォルト装備の格好を常にしている。
当麻からプレゼントされたハートのネックレスを常につけている。

・性格
何事も淡々とこなす本当の意味でのクールビューティな性格。
ただ妙に毒舌な時もあり、冷たい表情で冷たい突っ込みをする時がある。

羞恥心はないに等しく、当麻にパンツを見られても気にしない。
全裸を見られても全く表情が変わることはない。

当麻の前では子犬っぽい言動を取る事もあり、控えめな甘えを見せる事もある。
（人によっては御坂妹の腰に尻尾が見えるとか何とか）

御坂と同じで可愛い物が好きな傾向がある。
が、何故か御坂の趣味を全力で否定するという言動を取る。

当麻の言葉なら例え公衆面前で脱げと言われても平気で脱ぐ。
自称『当麻の愛玩奴隷』。

・能力
レベル３の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。
一般的な妹達と遜色がない程度の電圧出力しか出来ない。
（妹達の平均電圧は１０万ボルト）
これといった特技みたいな使い方はなく、至って平凡な能力者。

・家族構成
　クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係
　当麻以外は明確な友人はいない。

・その他
　検体番号は００００６号、名前はあるが最初に名付けられた御坂妹（みさかいもうと）の方を好む。

　当麻に淡い恋心を抱いており、御坂にライバル宣言をしたりと行動的。
　だが、当麻には中々出会えず悶々とする日々を過している。

　猫が大好きで黒猫を飼っている。
　名前は『トーマ』。ちなみに冥土帰しはどうしようか困っていたりする。
　（病院なので本来はペット類禁止）

　沈利に当麻を狙う人物として名前が上がるなど、意外と名前は知られている。

○ミサカ００００７号
・容姿
　ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまですべて同じ。
　軍用ゴーグルはつけており、常に装着している。
　迷彩服を着ており、気分だけはどこかのスーパー工作員風味。

但し下着は可愛らしいものをつけるなど歳相応の事もあったりなかったり。

・性格

寡黙的で無表情か淡々とした表情で物事をこなす高貴な愚鈍さを持つ。

何事にも動じないほどの胆力はあるが、美鶴（みつる）だけは怖い。

フルネーム＋呼び捨てで言う癖がある。

独自に軍用ゴーグルを改造するなど、高い技術力を有している。

『仕事』と『プライベート』という切り分けをしている。

仕事は特定人物の監視（ストーカー）が多い。

一旦仕事をし出すと完全に感情面が欠落する。

プロ意識が高く、相手が第一位でも怯まず仕事を淡々とこなす。

背後に立たれる事を嫌い、いつも壁際に立つ癖がある。

見知らぬ部屋に入ると、逃走ルートを計算し出す。

しかも出し終えないと落ち着かず、常にソワソワとする。

・能力

レベル４に近い電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。

常に周囲に微弱な電磁波を放出しており、それでレーダー機能を作っている。

生体電気を操作して、肉体性能を一時的に上げる事も可能。

特に監視方面の技術に特化しており、彼女の監視能力は文字通り桁違い。

・家族構成
クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係
当麻以外は明確な友人はいない。

・その他
検体番号は００００７号、名前は美月（みつき）。

能力をフル活用して特定の相手の追跡、監視、工作作業などをこなす。
その腕前は病院に潜入した土御門を発見するほどの腕前。

自分が放出する電磁波からの反射波を検知するデバイスを持っている。
（これにより二重のレーダー機能を有している）
自分の電磁波を吸収するコートを有している。

主な監視対象は当麻、一方通行、御坂、打ち止めの四人。
他もいるが大体は上記の四人のうち誰かを依頼される事が多い。

一度監視された御坂が『黒子を使わないと逃げ切れなかった』と語る所から
彼女の監視能力がレベル５ですら驚愕する程の能力である事が窺い知れる。

○ミサカ００００８号

・容姿

ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまですべて同じ。

軍用ゴーグルはつけており、下着はピンクと白のシマパンをはいている。

常盤台中学の制服が着ておらず、微妙にゴシック系の服装を着ている。

オーバーニーを着用したりと意外と可愛らしい服装の模様。

・性格

変態性格三人衆のうちの一人。

女性だが何故か幼女がとても好き。可愛い男の子も好き。

つまり全体的に年下好き。だが、その思考は常軌を逸している。

可愛い男の子を見ると女装させたがる性癖を持っている。

それを写真に収めるのだから、やられた相手はたまったものではない。

服装はフリフリつきを好む傾向がある。

一度見た御坂は「私だと絶対に着れない」と言い切るほど。

普段は丁寧に喋るが、たまにさらっと毒を吐く。

眼鏡にかなう子を見ると欲望丸出しの笑みを浮かべる。

それも自分オンリーの笑み。

・能力

レベル３の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。
一般的な妹達と遜色がない程度の電圧出力しか出来ない。
（妹達の平均電圧は１０万ボルト）
これといった特技みたいな使い方はなく、至って平凡な能力者。

・家族構成
クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係
当麻以外は明確な友人はいない。

・その他
検体番号は００００８号、名前は美里（みさと）。

その性格からか冥土帰しから『外出はちょっと控えてね？』と言われる程。
但し、そんな事で止まるような彼女ではなかった。

Ｓッ気があり幼女やショタを言葉責めしては越に入る変態。
部屋に今までの戦果があり、秘蔵写真として保管している。

○ミサカ００００９号
・容姿
ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまですべて同じ。
軍用ゴーグルはつけておらず、下着も至って普通の女子中学生レベル。
普段着がナース服であり、私服は余り持っていない。

ウィッグをつけており、他の妹達より髪が長い。

・性格

マイペースかつのんびりとした性格。
どんな状態でも自分のペースを崩さないので、人によっては対応に困る事もある。
ぽやぽやした感じを漂わせており、目が離せない危なさがある。

独自の癒し空間を作るなど、相手を落ち着かせる雰囲気がある。
その空間にあてられて猫たちが集まるので、他の妹達から羨ましがられている。

誰に対しても優しく接する慈悲深い性格。
また患者に対して献身的に世話をする。

・能力

レベル2の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。
一般的な妹達より能力が低く、最大電圧も5万ボルト程度。
ミサカネットワークに繋げるだけで精一杯。

言ってしまえば学園都市にいる妹達の中で一番能力が弱い。
だが本人は気にしていない。

・家族構成

クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係

当麻以外は明確な友人はいない。

・その他

検体番号は００００９号、名前は美咲（みさき）。

冥土帰しの病院で内科勤務のナースをしている。
ただ御坂に見えないようウィッグをつけて勤務している。
ちなみに彼女が着ているナース服は冥土帰しが用意したもの。
内科勤務だがその他の場所でも活躍できる万能ナース。

美鶴（みつる）とは仕事柄とても仲がいい。
怒っている美鶴（みつる）を宥められる唯一の個体。

冥土帰しの病院で非公式アンケートを取った所『癒し系ナンバーワン』に選ばれた。
ファンになる患者も多いが、告白するような人物は今だいない。
ただ本人は当麻が好きなのでまず玉砕決定だろうが。

○ミサカ００００１０号

・容姿

ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまですべて同じ。
軍用ゴーグルはつけておらず、下着は動きやすさ優先。
普段着がナース服であり、私服は余り持っていない。
ウィッグをつけており、他の妹達より髪が長い。
伊達メガネもつけているので、よく見ないと御坂のクローンとは分からない。

・性格

口は悪いが竹を割ったような性格。
面倒見もよく、かつ世話焼きだったりする。
学園都市外にいる妹達に色々と援助をしている。
男勝りな感じがするが、猫が好きと女の子らしい一面もある。
妹達を非常に大事に思っており、常に妹達の為に活動をしている。
ナースをしているのも妹達の活動資金を得るという献身的な心からくるもの。
勿論、世話になっている冥土帰しへ恩返しの心もある。
クローン体のせいか「生きる」という事を非常に重要視している。
しかも惰性で生きるのではなく、誇れる人生を歩もうと考えている。

・能力

レベル４の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。
妹達の中では唯一最大電圧が４億ボルトの能力者。
打ち止めや他の妹達と違って『レベル４に近い』ではない。
完全に大能力者クラスの力を有している。
レーダー機能から生体電気操作など、オールラウンドに能力を使える。
電磁力線を目視出来る上に、直接的に電気信号や電子を操作する事も可能。

御坂と違って医療関係の現場にいるので、電磁波の放出を止める事が出来る。
但し美鶴(みつる)曰く『疲れる』との事なので、仕事中しか止めていない。

・家族構成
クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係
当麻以外は明確な友人はいない。

・その他
検体番号は００００１０号、名前は美鶴(みつる)。
美咲(みさき)同様、こちらも冥土帰しの病院でナースをしている。
席は外科勤務だが、病棟管理も出来る等かなり優秀だったりする。
彼女が着ているナース服も冥土帰しが用意したもの。

冥土帰しを「ボス」と呼ぶ。
馬鹿にしている訳ではなく美鶴(みつる)なりの親しみを込めた呼び方。

外見も美咲(みさき)同様、ウィッグをつけている。
ただ、美鶴(みつる)は伊達メガネも着用していたりする。

当麻の事は好きだが、他の妹達と違って一歩引いた感じで見ている。

他の妹達から敬愛の情を込めて「姉御(あねご)」と呼ばれている。

知能は高く勉学は非常に優秀。既に高校生卒業レベルの頭脳はある。
特に医療関係の知識が豊富で、生半可な医者では太刀打ち出来ない程。

身体能力も優れており、美咲（みさき）を除く妹達十人を一人で制圧するなど、全てにおいて妹達の頂点に立つ人。

打ち止めからミサカネットワークの管理を任されていたり、御坂からお小遣いの分配を一任されたりと、かなり信頼されている。

悪い事だと理解したら、相手が上位個体である打ち止めだろうが
オリジナルで姉の御坂だろうが叱りつける。

褒められる事になれておらず、褒められると恥ずかしさから逃げる事が多い。

妹達の中では唯一「～と、ミサカは（精密描写）」を言わなくなった個体。

○ミサカ００００１１号

・容姿
ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまですべて同じ。
軍用ゴーグルはつけておらず、下着もかなりいい加減で適当に穿いている。
病院にある入院着を適当に着用している。

髪も手入れを怠っておりかなりボサボサな状態。
やる気のなさそうな表情を常にしており、片目は髪で隠れている。
パッと見かなりみすぼらしい女の子に見える。

・性格
非常にめんどくさがり屋。常に無気力で面倒事から逃げまくる性格。
ただゲーム好きの一面があり、その時はやる気を発揮する。
運動もしておらず、殆どニートのような生活スタイル。
おっちょこちょいなのか、よく勘違いをしては勝手に自己解決する。
会話は自分の口よりミサカネットワークの方でよく行う。

・能力
レベル３の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。
一般的な妹達と遜色がない程度の電圧出力しか出来ない。
（妹達の平均電圧は１０万ボルト）
これといった特技みたいな使い方はなく、至って平凡な能力者。

・家族構成
クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係
当麻以外は明確な友人はいない。

・その他
検体番号は０００１１号、名前は美空（みそら）。

ゲームをすると熱中して周りが見えなくなる。
妹達はそれを『意識が別世界に飛んだ』と表現している。
ゲームにのめり込んでいると、時々ブツブツと独り言を言う。

当麻の事は好きだがアプローチが面倒との事。
本当に好きなのか、周りの妹達は甚だ疑問のようだ。

○ミサカ００００１２号
・容姿
ベースは御坂美琴と同じ。身長から体重、スリーサイズまですべて同じ。
軍用ゴーグルはつけておらず、下着はセクシー系を好んでいる。
普段着は常盤台中学の制服。一張羅は一方通行のワイシャツ（未洗濯）。

・性格
変態性格三人衆のうちの一人。
一方通行が好きだが、そのアプローチ方法が変態じみている。
脱ぎたての下着を一方通行の枕元に置いたり。
犬の首輪を自分の首につけて、一方通行に鎖を持たそうとしたり。
一方通行が着用していた服や下着を盗んだりと。
殆ど嫌がらせにしか見えない行為でアプローチをしている。

目的の為なら犯罪上等な性格で、様々な犯罪に手を染めている。

といっても不法侵入とか、一方通行の衣服強奪ぐらいだが。

口調も一方通行を真似ているので、同じような喋り方をする。

妹達の中でも突出して変態的な思考を持つ。

御坂は勿論、美鶴（みつる）や打ち止め、他の妹達もドン引きする程。

それでも彼女が止まることはないだろう。

・能力

レベル３の電撃使い（エレクトロマスター）。能力名は「欠陥電気（レディオノイズ）」。

一般的な妹達と遜色がない程度の電圧出力しか出来ない。

（妹達の平均電圧は１０万ボルト）

電子ロック系統の解除が得意。

・家族構成

クローンなのでなし。強いて言えば打ち止めと他の妹達が家族といえる。

・友好関係

当麻以外は明確な友人はいない。

・その他

検体番号は０００１２号、名前は美朱（みあか）。

説明不要の変態。正常な思考より、己の欲望を優先する。

一方通行限定で殴られても快感に変えれる。

一方ではＳッ気を出したりと、ＳとＭの両属性を持つ。

一方通行がアナログ的なセキュリティに頼るほど、不法侵入の回数が多い。

これは打ち止めがいくら言っても止まらなかった。

過去に一度本気で一方通行から脅されたが全く効果なし。

むしろ「さっさとぶち込め」と嬲られる事を望む言動をいう始末。

それ以来一方通行は、どうにもならないと思って諦めたとか。

登場人物【スキルアウト】

○服部半蔵（はっとりはんぞう）

・容姿

パッと見不良少年にしか見えない風貌。
しかもそれ以外これといって特徴のない雰囲気をしている。

バンダナとも帽子とも取れそうなものをいつも被っている。

・性格

性格は結構軽めでお調子者っぽい。
計画担当なポジションを好む。
何時も「自分はリーダーに向かない」と思っている。

どんな所でも庶民派の和風家庭料理を頼む傾向がある。
中華料理屋で野菜炒めを頼む辺り、その傾向が伺える。

・能力

無能力者。ただし後述するように身体能力は高い。

・家族構成

不明。

・友好関係

今は引退した駒場、「アイテム」の構成員である浜面。
他のスキルアウト組織のトップとは顔見知り。
特に黒妻とは親友。その他にもフレメア、郭と友好関係は広い。

・その他
第七学区を根城とするスキルアウトのリーダー。
学園都市最大のスキルアウト組織であり、構成員の人数はかなり多い。

警備員である黄泉川愛穂に捕まったとき一目惚れをしてまった。
それ以来彼女に恋をしている。

実は今は凋落した忍者の末裔である服部家の子孫。
超有名な忍者である『服部半蔵』の名を継ぐもの。
もちろん忍びとしての技術も習得している。
『打ち根』の扱いをはじめとする超一流の戦闘技術を持つ。

「最初の一撃で確実に敵を殺せる戦闘以外は一切参加しない」というポリシーを持つ。
それは忍者としての生き方から、導き出した考えかもしれない。

○駒場利徳（こまばりとく）
・容姿
ゴリラのような大柄な体躯をしているがれっきとした少年。
コピー用紙を吐き出すような陰鬱な話し方をする。
安物のジャケットで厳つい筋肉を覆っている。

・性格
見た目に反して性格は優しい。情に厚く、不要な争いを好まない。
スキルアウトではあるが比較的モラルがある人物。
沈着冷静で、スキルアウトの活動時には襲撃の支持を担当。

・能力
無能力者。
・家族構成
不明。
・友好関係
浜面と半蔵。それから半蔵の友好関係で黒妻とも友人。
『舶来』と呼ばれているフレメアには懐かれている。
その他第七学区のスキルアウト達と仲が良い。
・その他
第七学区のスキルアウトたちを取り纏めていた男。
現在は引退気味で、殆ど半蔵に引き継いだ状態。

一年前フレメアを助けた事を発端に起きた『無能力者狩り』に心を痛めた。
その結果、能力者を粛清しようと計画を立てたが運悪く一方通行の事件と重なる。
あちこちにいる仲間たちの被害と、超能力者の危険度から計画を断念。

後に偶然にも一方通行が起こした事件の真相を知る事となる。
その時、駒場がどう思い何を考えたかは本人以外には分からない。

ちなみにこの時『正当な報復』を騙る能力者も騒ぎに乗じようとした。
が、一方通行から見ればどちらも同じに見えたので一緒に粛

清された。
残った『無能力者狩り』の連中は、学園都市側が邪魔者と判断。
『スクール』によって全員粛清される事となった。
フレメアとは今でも仲良し。フレメアも駒場に懐いている。
周りから『外見からは想像できない』と言われているが保父を目指し中。
浜面や半蔵にからかわれるなど、散々な状態だがどうやら本気のようである。

○黒妻綿流（くろづまわたる）
・容姿
赤茶色の癖がかかった長髪、ジーパンに黒い革ジャンを羽織っている。
背中には大きな蜘蛛と蜘蛛の巣の入れ墨を彫っている。

・性格
女性の胸について話してもいやらしさを感じさせない好人物。
好物は牛乳で、よく「ムサシノ牛乳」を飲んでいる。
スキルアウトでありながら筋の通った行いをする人物。
本気になると服を脱いで上半身裸になる癖がある。
一部では別の意味で『脱ぎ癖』があるのでは、と囁かれている。
「やっぱり牛乳は、ムサシノ牛乳！」が口癖。
喧嘩する時でも、何故かムサシノ牛乳片手に颯爽と登場する。

・能力
無能力者。

・家族構成
不明。

・友好関係
第七学区の半蔵とは親友。その関係で浜面とも知り合い。
駒場とは色々とあったが今では友人。

・その他
第十学区を根城にするスキルアウト「ビックスパイダー」のリーダー。
常にムサシノ牛乳を飲んでいる。

過去の固法美偉にビッグスパイダーという居場所を提供した人物。

スキルアウト内では、駒場に匹敵して名前が上がるなどかなり有名人。
喧嘩も強く、複数人に囲まれても圧勝してしまう。
異能力者を拳だけで倒すなど、時々意味不明な強さも発揮する。

女性がチンピラにからまれている所に登場したりする。
が、何故かいつもムサシノ牛乳片手に現れる。
チンピラ共をボコボコにした後は、いつもムサシノ牛乳をラッパ飲みする。
しかしその牛乳が何処に置かれていたかは誰も分からない。

一年前の一方通行事件で大怪我を負ったが見事復活した。
その時のムサシノ牛乳消費量は、伝説になるほどの量だったとか何とか。

登場人物【暗部組織】

○垣根帝督（かきねていとく）

・容姿

髪は茶色。ヤクザ予備生＋新人ホストのような風貌。
黙っていればイケメン。身長は土御門と同じぐらいで１８０ｃｍ前後。
一方通行ほどではないが、こちらもかなり細身の体型。
ホストっぽくオシャレ。でもチンピラみたいな雰囲気をしている。

オシャレさんなのでよく身なりには気を遣っている。
基本的にスマートさを感じさせる服装を好む。

・性格

基本的にきまぐれで、善人とも悪人とも思えない性格。

頭脳は学園都市第二位に相応しく優秀。
科学技術品を一発で見抜いたり、分析出来たりと技術開発にも優れている。

洞察力も優れており、相手の心の機微を敏感に察知する。
胆力と冷静さを持ち危険な状況でも瞬時に的確な判断を下せる。

常識がまるでないのか、と問いたくなるほど破天荒な行動が多い。
と思えば、相手を諭すような言動や行動を取ったりする。

口癖は「ムカついた」「この俺に常識は通用しねぇ」など。

真面目な時は、理論的かつ対象の感情を考えて人を導く。

当麻の鈍い性格や、御坂の問題点を指摘しアドバイスをしたりと。

意外と面倒見もよい方である。

一部メルヘンな思考がある。だが、内容は全く不明。詳細は誰も知らない。

顔は広いが友達がすくない事を非常に気にしていたりする。

甘いモノが好物で「抹茶ラテ」が好物。

気にった相手をからかう癖がある。

今の所ターゲットになったのは初春のみ。

年下は好みではなく、自分と同等か自分より上が好みのようである。

この辺りは年上好きの当麻と同じかもしれない。

当麻と出会うまでは、まるで研ぎ澄まされた刃物のような性格だった。

・能力

レベル5で序列は第二位の「未元物質（ダークマター）」。

この世に存在しない新しい物質を作り出す能力。

さらにそれらを活用することで既存の物理法則を塗り替えることも可能。

更に天使の翼のような六枚の翼が背中に形成される。

翼自体に応用性があり、飛行、防御、烈風、打撃など利用方

法は多岐に渡る。
数ある超能力の中でも類を見ない異質な能力。
その強さは折り紙付き。
第三位の御坂を一方的に打ち倒し、一方通行とも喧嘩しあえる。
過去に沈利とも戦ったが、その時は赤子の手をひねるより簡単に退けた。

・家族構成
両親はいるが置き去り（チャイルドエラー）なので詳細は不明。
今は暗部組織『スクール』が家族みたいなもの。

・友好関係
第一位の一方通行とは、互いに文句を言いながらも友人同士。
第三位の御坂、第四位の沈利、第五位の操祈（但し少し苦手）
第六位の優菜とは友人同士。
但し優菜のみ垣根にとっては位置が少しだけ変わる。
学校では当麻に土御門、青髪ピアス、吹寄、姫神などなど。
クラスメイトたちとは良好な関係を築けている。
その他先生の小萌、黄泉川とも仲良しなど先生受けもよい。
心理定規とは幼馴染という関係。

・その他
暗部組織『スクール』のリーダー。
但し心理定規と優菜の方が強く、大体は尻に敷かれる。

六枚の翼とたまにするメルヘン言動で、周りからメルヘン扱いを受けている。
本人も自覚しており、「心配するな、自覚はある」とよく切り返す。

心理定規の好意には気付いている。
だが、理由があるのかその好意を受け止めようとしない。

女性の胸が大好きで、胸を強調する服装が好み。
ただし、エロさ満載で言うので周りからは壮絶に不評を貰っている。

ナンパが得意、但し深い関係にはならずあくまで軽い関係にとどめている。
元々イケメンなので、成功率はかなり高い。青髪ピアスが嫉妬するぐらい。
とはいえ、実際はキスもした事がないウブな人。
当然肉体関係など一度もないが、その辺りは知識とハッタリで誤魔化している。

家をいくつも持ち、あちこちに移動しながら生活をしている。
その一つに、土御門が住む学生寮がある。なので土御門と仲がいい。
暗部組織のリーダー同士なのだが問題ないようだ。

吹寄より当麻、土御門、青髪ピアスの三馬鹿デルタフォースに追加された人。
四馬鹿デルタフォースと呼ばれたりと、結構散々な扱いをクラスから受けている。

相手のスタイルを瞬時に見抜く、とても使えないスキルを有している。
優菜みたいなスタイルが隠れる服装では精度が下がる。
だが、それでもある程度は把握できる。

自分を「最低の人間」と称する時がある。
だが無意味に能力を使わないし、一般人に極力被害が及ばないようにしている。
言動とは裏腹に、かなり高潔な行動を取ろうとする。

見知った人間には的確なアドバイスを送る等「兄貴」的な行動をたまにとる。
そのせいか御坂から「頼れるお兄さん」と思われている。

○心理定規（メジャーハート）
・容姿
１４、５歳の外見をしており、小柄で華奢な体付きをしている。
胸は垣根曰く「貧乳」との事。スタイルは年齢よりはいい方である。。
ホステスが着るような赤い派手なドレスを着ている少女。
それも背中の開いた丈の短いドレスだったりする。
メイクが不要なぐらい可愛らしい顔立ちをしている。

・性格
素直で可愛らしい性格をしている。
垣根の呼び出しを疑いながらも、結局最後は呼び出しに応じる所からも伺える。

怒ると暴力的になり、相手に対して殴る蹴る等の攻撃をする。

一度垣根に胸を揉まれた時も、垣根の息子（おとこのシンボル）を蹴り飛ばした。

スタイルにコンプレックスがあり、ナイスバディになりたいと常日頃思っている。

ホテルに男性と会う（本当に会うだけ、体は売らず）のに意外とウブ。

派手なドレスを着ているが、胸を見られたりするのは嫌というよく分からない人。

・能力

レベル４の「心理定規（メジャーハート）」

標的の他人に対して置いている心理的な距離を読み取る事が出来る。

また、標的と自分の間に存在する心理的な距離を自由に操る事が出来る。

所謂「人の心の距離を自在に調節出来る」能力。

本人曰く「本物の感情を偽りで塗り潰す」事が出来る哀しい能力との事。

心の距離は数値化して認識するようで、『距離単位（数値）』と呼称している。

相手の居場所は関係なく、互いに離れていても能力を仕掛ける事が出来る。

が、遠距離の場合は本人曰く「失敗する事もある」との事。

自分と他人だけでなく、他人同士にも能力を仕掛ける事も可能。

その時は、相手の名前を知る事が出来る。

名前を知る事が出来る原理は不明。

・家族構成
両親はいるが置き去り（チャイルドエラー）なので詳細は不明。
今は暗部組織『スクール』が家族みたいなもの。

・友好関係
垣根と優菜以外は明確な友人がいない。
これは自身の能力によって「友達」と呼べる距離が分からないとの事。
（能力の「距離」ではなく、一般的な心の「距離」という意味）

なお、上記二人は能力云々を考えなくていいようだ。

・その他
暗部組織「スクール」の構成員。

プライベートでの垣根の暴走や破天荒の被害に巻き込まれる苦労人。

ホテルで男性と会うなど、いわゆるホステスのような仕事もしている。
だが身体は売らず、単に話を聞いてあげるだけという仕事内容。
垣根曰く「よくわからん世界」。

垣根とは恋人のような夫婦のような長年連れ添った感じの行動を取ることもある。
ただ明確な好意を向けていても、垣根はその好意に答えよう

とはしないが。

○浜面仕上（はまづらしあげ）

・容姿

ぼさぼさの髪で茶色、服装はジャージの上にジーパンというラフな格好を好む。

それ以外はこれといった特徴はない。

ぶっちゃけた感じ半蔵と同じで、普通の不良少年にしか見えない。

体を鍛えているので筋肉質だが、マッチョという訳でもない。

どちらかと言えば細身に少し肉がついた程度。

・性格

基本的にヘタレで、不良にしては臆病な面が多い。

自分の力の無さを卑下するような一面もある。

だが、人望はそこそこあり今でもスキルアウトたちとは仲がいい。

といっても本人は転落人生まっしぐらと思い込んでいるが。

臆病だが根性はあり、地べたに這いつくばってでも前に進もうとする。

本当の意味で何の資質もない人間。

パンチラやバニー姿を想像しただけで鼻血をふくほど純情。

ピッキングの腕前は神業的で盗難車を確保するのは朝飯前。

運転技術もあり、乗用車から建設重機などありとあらゆる乗り物を乗りこなす。

ただネーミングセンスは最悪で、愛車には「仕上ＵＳｘｘ号」とつけている。

周りから不評だが、本人はかなり気に入っている模様。

「例え何の力が無くても、大切な人の為に最後まで諦めず闘う」

それが理想の男性像だと考えている。

仲間には優しいが敵には容赦がない。

特に仲間を傷つける存在は、一切の慈悲も容赦もなく徹底的に叩き潰す。

頭はよろしくないが、判断力や行動力に優れている。

特に周囲の状況を最大限に利用したり、ハッタリ等の心理的な罠も使いこなす。

・能力

無能力者。

・家族構成

不明。

・友好関係

当麻とは親友。優菜とは友人同士（だと思っている）。

その他土御門と青髪ピアスと垣根とも顔見知り。

黄泉川とは逮捕された関係から一応知り合い同士。

スキルアウトでは半蔵、駒場、黒妻と知り合い。

その他のスキルアウトにも一応顔がきく。

・その他

黄泉川に何十回と捕まり留置場にぶち込まれた過去を持つ。
そのせいか、黄泉川には好意的な感情を抱いてはいない。

「アイテム」の下部構成員だが、実質沈利たちの奴隷（パシリ）。
消耗品のように扱われないだけマシだが、それでも扱いは酷い。

昔からポカミスが多く、ここぞというタイミングででっかいミスをする事がある。
黄泉川に捕まった理由も大半がミスをしたから。
ただ、運転だけはどんな時でもミスをすることはない。

借金を抱えており、長いスパンでの返済をしているので常に貧乏。
といっても友人同士なので、利子等はないからかなり良心的な借金状態。

○土御門元春（つちみかどもとはる）
・容姿
身長は１８０ｃｍ前後で、逆立たせた金髪にアロハシャツ、サングラスをつけている。
更に金色のネックレスといった派手な風貌で長身の少年。

普段は不思議な訛り口調で軽めの言動を取る。
だが、真面目な場合は普通の口調に戻る。

・性格
一言で言えばシスコン。
ステイルから「義理の妹にメイド服着せて悶絶している危険人物」と評されている。

友人からは「ロリコンでメイド好きで義妹好きのシスコン軍曹」と評されている。
身も蓋もない評価だが、本人が否定しないので事実なのだろう。

自身を「ウソツキ」と評するほど、相手を惑わす巧みな話術に長けている。
なので彼の本音がどこにあるのかは、誰も分からない。
唯一「舞夏だけは絶対に裏切らない」が嘘偽りない彼の本音である。

メイドが大好きで、部屋にある本棚の一つはメイド関係の書物で埋まっている。
ただ義妹の舞夏には不評で、よくぶん殴られている模様。

青髪ピアスと会話できるほどの同レベルのオタクでもある。

・能力
レベル０の『肉体再生（オートリバース）』。
ただレベル０なので、応急処置程度の割の合わない微弱な能力。

陰陽博士として最高位であり、特に風水を得意とする天才魔術師。
しかし能力と魔術を両立する事は出来ず、殆ど使うことの出来ない状態。

・家族構成
義妹の舞夏。ただ一緒には住んでいない。

・友好関係

当麻や青髪ピアス、垣根とは親友。

特に垣根とは部屋が隣同士な事もあり、よくつるんでいる。

クラスメイトの吹寄や姫神とは友人関係。

一方通行や海原（エツアリ）、結標とも仲良しで友好関係は広い。

魔術世界では上司のローラ、神裂やステイルとは知り合い。

その他イギリス清教には顔がきくようだ。

・その他

三日に一度位は舞夏に肩を揉ませており、膝枕で耳かきもやってもらっている。

舞夏には兄妹の愛情以上の感情があり、既に手を出している模様。

部屋にはジムトレーニングに使われるような機材があちこちに置いている。

本棚は壁際に二つあり、一つがメイド関係の書物用だがもう一つは不明。

イギリス清教のスパイだが、逆に学園都市のスパイという顔も持つ。

更には学園都市とイギリス清教の情報を、別の組織や団体に流したりもする。

二重スパイ所か、多角スパイだったりする。

全ては何も知らずに学園都市で暮らす舞夏の平穏の為。

教会世界と科学世界が全面戦争を起こさない様、必至に立ち回っている苦労人。

アレイスターの代行者として、彼のプラン成就を支える立役

者ともなっている。
　また、アクゼリュスから色々と『お願い』されたりと体の良い駒扱いを受けている。
　まるで上と下から同時に責め立てられる中間管理職のような状態。

　最大主教（アークビショップ）に変な日本語を教えたりと遊び心を忘れない。
　が、これが原因でよく他人からボコボコにされる結末を迎えている。

　暗部の仕事中でもメイド関係の書物を持ち歩く生粋の人間（メイドスキー）。
　でもよく趣味で海原と結標（ストーカー　ショタコン）と乱痴気騒ぎを起こす。

　魔法名は『背中刺す刃（Ｆａｌｌｅｒｅ８２５）』。
　一応魔術を使うことは可能。
　だが使用すると身体に高負荷がかかり、即死する可能性がある。

○海原光貴（エツァリ）
・容姿
　常盤台中学の理事長の孫の顔を常にするアステカの魔術師。
　変身魔術を常時使っているが、素顔は黒髪に褐色肌の容姿をしている。
　ただオリジナルの顔が女性受けのいい顔なので、よく逆ナンパされている。

・性格
　一言で言えばストーカー。
　普段は爽やかで物腰柔らかい印象だが、腹黒い一面もある。
　年下にも敬語を使うなど丁寧な口調で話す。

ただ、本性は単なるロリコン変態ストーカー。

御坂好きが高じて組織を平気で裏切るぐらい一途だったりもする。

ただ一途すぎて、相手の全てを知りたいという思考が一部あったりする。

その結果、完全にストーカーと化していた。

御坂の行動記録をノートに残すなど、物凄くマメな一面がある。

内容は褒められたものではないが。

普段は大人しめだが、御坂の事になると性格が一変してしまう。

魔術と科学両サイドに跨っており、超能力と魔術両方にかなり詳しい。

当麻の宿題を難なく応える辺り、普通の勉学に対しても優れている。

・能力

能力はなし。

黒曜石のナイフを用いた魔術トラウィスカルパンテクウトリの槍を使う。

他にも変身魔術など、魔術に関しては多彩。

・家族構成

不明。

・友好関係

土御門、結標、一方通行とは仕事仲間であり、友人同士。
その他の友好関係はなし。

・その他
御坂好きで、彼女の行動を常にノートに記録している。
十月の時点で１４５６０冊ある事を考えると、行動記録以外も残してる予感。
真相は海原しか分からない。

妹達には興味がないらしく、あくまで御坂だけが好きのようである。

行動記録書の情報源は不明。どういった手法で情報を集めているかも不明。
突然書きだす所を見ると、危険な毒電波でも受信しているのではと専らの噂。

元いた組織「翼ある者の帰還」を裏切り、暗部組織『グループ』の一員となる。
裏切った理由は「御坂さんをずっと見ていられるから」という理由らしい。
それを聞いた一同は、何とも海原らしい答えだと思ったとか何とか。

爽やかイケメンで丁寧口調だが、本来の性格はそんなのではないらしい。

暗部の仕事中でも御坂の行動記録書を持ち歩く生粋の人間（ストーカー）。

○結標淡希（むすじめあわき）

・容姿

髪型はお下げで耳より低い位置で左右に結っている。
それを自分の背中の方へ流している。
冬服のミニスカートに金属製のベルトをつけ、桃色の布で胸を隠している。
上半身にブレザーを引っ掛けているだけという結構露出度の高い少女。
可愛らしい顔立ちをしており、特にメイク等はしてなくても美少女に見える。

普段着は別にあり、ジーパンにTシャツとその上にキャミソールという普通の格好。
別にサラシスタイルは好みではなく、戦闘服だとかその手の位置らしい。

・性格

一言で言えばショタコン。
平時は少しだけ我侭っぽいが、至って常識人の部類に入る思考をしている。

しかし好みの子を見ると性格は一変する。
表情も変わりギラついた目付きと、恐ろしいぐらい黒いオーラを纏う。
口元を歪めて不気味な笑いをする等、欲望丸出しの状態となる。
その様は一方通行を持って「出来れば関わりたくない」と言わしめるほど。
自身の能力と相まって非常に危険な存在と化す。

同居人に対してはこれでもかというぐらい世話を焼く。

何やら邪な考えもあるそうだが、土御門と違い明確に手を出していない。
それでも時々、人様に言えない行為をするほど変態（ショタコン）ではある。

・能力
レベル４の空間移動系「座標移動（ムーブポイント）」。
「空間移動（テレポート）」と違い、直接物体に触れずとも物質を転移させることが出来る。
距離は８００ｍ以上、質量は最大４．５２トン。但し１トン以上は身体に悪影響が出る。
同系統の黒子に比べて距離は十倍、質量は三十倍以上という性能差を誇る。
空間移動能力者の中では最強クラスの性能。

本来はレベル５クラスの性能だが、色々と事情がありレベル４止まり。
とはいっても、本気で計測すれば直ぐにでもレベル５認定される状態。

テレポートとアポートの両方が出来るので、端的に言えば上位互換の能力。
ただし便利ではあるが、演算負荷もまた他の能力者より桁違いに高い。

余りにも自由度が高いので、能力の基準をつけるために軍用懐中電灯を使う。

・家族構成
歩と呼ばれる年下の少年と同居している。

・友好関係
一方通行、海原、土御門たちとは友人同士。
それ以外に明確な友人はいないが、それなりに能力者の仲間はいる。

・その他
暗部の仕事中でもショタコン関係の書物を持ち歩く生粋の人間（ショタコン）。
暗部以外でも土御門たちとつるむなど、結構仲が良かったりする。
ただ互いの趣味だけは認められないらしい。

見た目に反して炊事掃除などの家事は得意。
初期の頃は悲惨だったらしいが、現在では普通に食べられるものを作れる。

同居人を非常に溺愛している。
何よりも同居人の事が優先されるので、暗部での仕事も平気ですっぽかす。
ただし、他の面子は事情を理解しているので何も言わない。

ＶＩＰ連中を窓のないビルの内部に運ぶ『案内人』を務めている。
その関係でプランに関わる情報も幾つか知っている。

特に運搬回数の多い優菜に疑問を抱いている。
土御門が一回呼び出される間に、優菜は多ければ十回以上呼び出されたりする。
が、会話中は結標も中にいる事を許されていないので、理由

はわからずじまい。
（対外的に優菜は無能力者なので、それが結標には不思議に見えるようだ）
過去に垣根と面識があり、その時の垣根をこう評価している。
『まるで研ぎ澄まされた刃物よ。常に獰猛で危険な雰囲気を纏っている』
『彼に対する選択肢を一つでも間違えたら、その場で嬲り殺されてもおかしくない』

登場人物【クラスメイト】

○青髪（あおがみ）ピアス

・容姿

その名の通り髪は青色で耳にピアスをしている。
身長は１８０ｃｍを越えている。
世界三大テノールもびっくりの野太い男ボイスの持ち主。
細目で大体はお調子者っぽい笑みを浮かべている。

・性格

お気楽でお調子者。かつＭでオタクでストーカーでロリコンという救えない変態。

女性の好みが多岐に渡り、文庫本の一ページを使うほど守備範囲が広い。
つまり女なら可愛ければ何でもいいらしい。
一部女を表していない属性があるがそれもご愛嬌。

似非関西弁を駆使するが実際は米どころ出身。
なので関西人ではないし関西圏内出身でもない。
成績は悪いが小萌の補修を受けたいがためにしているので本当の所は不明。

いつも冗談を言い、行動は全て『ギャグ』で片付けられる。
ただそのせいか本音が分からず、土御門並に本音が読めない人物。

・能力

不明。

・家族構成
不明。

・友好関係
当麻、優菜、土御門、吹寄、姫神、垣根、一方通行、アリシアとは友人同士。
特に当麻と土御門、垣根とは親友クラス。
またクラスメイトとも良好な関係を持っている。
ただし殆どが男性で女性の知り合いは数少ない。

どういった経由か不明だが、フィアンマとは（互いに名前知らず）オタク友達。

・その他
クラスの学級委員を勤めている。
が、小萌と絡む作業は大体一方通行に横から奪い取られている。

当麻や土御門よりオタク知識が豊富。
バニースーツは赤が好み、別の色を言うと怒る。

寮には住んでおらず、パン屋に下宿している。
理由は制服がメイド服に酷似しているからという理由。

幻想殺しという異質な能力を持つ当麻。
アレイスターの補佐や、プラン成就のために駒として動く優菜。

多角スパイで天才魔術師の土御門。
学園都市最強の一方通行。

学園都市第二位にて暗部組織のリーダーである垣根。
ローマ正教最強にて最終兵器のフィアンマ等。
何気に『一般人』としてのカテゴリーにいながら凄い人脈を持っている。

フィアンマの思考を変えた凄い功績を持つ。
が、他の『神の右席』が困っている所を見ると、良かったのかは迷う所。

一方通行から殴られても、垣根からフルボッコを喰らっても平気。
ある意味では当麻を超えるタフネスな体をしている。

○姫神秋沙（ひめがみあいさ）
・容姿
黒髪ロングで巫女服を着ている少女。
ただ普段は学生服を着用している。
巫女服は彼女のアイデンティティらしく一張羅との事。

寡黙なので表情は読みにくい。また表情の変化が乏しい。
但し無表情という訳ではなく、攻撃性を感じさせない安心感を与える顔立ち。

・性格
一言で言えば地味、というか普通。
ただ周りが濃すぎて空気キャラな状態となっている。
しかし家庭的で昼食は手作りのお弁当である。

モブキャラ的な自分の立ち位置にかなり不満を持っている。
が、存在感がない事で自虐的なネタをたまに言う。

その他これといって特徴のある性格をしていない。
以下の言葉は短いながらも彼女の全てを表す言葉。
「我スルーされる。ゆえに我在り」

・能力
無能力者。
原作にあった吸血殺し（ディープブラッド）の能力はなく、どこにでもいる無能力者。

・家族構成
至って普通の家族構成。

・友好関係
当麻、土御門、青髪ピアス、垣根、一方通行、アリシアとは友人。
優菜と吹寄は親友。クラスメイトたちとも良好な関係。
学校以外の友人はいない。

・その他
影が薄いと言ってはいけない。それを言うと姫神は泣くので。
存在感がないと言ってはいけない。それを言うと姫神は泣くので。
出番がないと言ってはいけない。それを言うと姫神は泣くので。
本人は影が薄いと言っているが、三馬鹿と普通に会話できる。
レベル5たちと普通に会話出来たりと、何気に濃いキャラである。

但し、やはり周りが濃すぎるので、彼女の存在感が薄まるようだ。

お色気イベントなどを起こしても何故かすぐに出番が無くなる人。

クラスの三美人（男子生徒による非公式アンケート）の一人。
残りの美人は吹寄と優菜。
つまり仲良し三人をそのまま三美人と呼んでいる。

本作のヒロインの一人……ヒロインだよ？　疑っては駄目。

巫女服だが決してオートクレールと被ってはいない。
何故ならオートクレールの服は『巫女装束』だから。
対して姫神のは『巫女服』。混合してはいけない。

○吹寄制理（ふきよせせいり）

・容姿

黒い髪、それを耳に引っ掛けるように分けた髪型をしている。
背は高く巨乳、更にはスタイルがいいと良い事尽くめ。
但し「美人なのにちっとも色っぽくない鉄壁の女」の異名を持つ。
つまり色気がない。
規則にうるさそうな雰囲気を醸し出している。

服装は定規で測ったように見えるほど規格統一されている。
ただスカートだけ若干短め。

・性格

典型的な仕切り屋タイプで男勝りな性格。

そして通販好きの健康オタク。
そのせいか怪しい健康グッズや健康食品を大量に持っている。
仕切り屋だがノリはいい方。
意外とお茶目な所があり、通販の商品でよく痛い目を見ている。

普段は落ち着いているが意外と短気。
但し短気になる相手は四馬鹿限定だったりする。

・能力
無能力者。

・家族構成
至って普通の家族構成。

・友好関係
姫神、優菜とは親友。
四馬鹿デルタフォースとは、クラスメイトでかつ友人。
一方通行とアリシアも友人。
その他、クラスメイトたちとは良好な関係。

学校外にも友達はおり、一般的な友好関係がある人物は多い。

・その他
委員長ではないのだが、周りからは委員長と思われている。
クラスの三美人（男子生徒による非公式アンケート）の一人。
『巨乳の双璧』の片割れ。これも男子が勝手につけた仇名。
「対カミジョー属性完全ガードの女」とも呼ばれている。

その他色々と変な通り名をつけられる事が多い。

健康のせいか身体能力は高い。

大柄の青髪ピアスと筋肉質な土御門をそれぞれ正拳一発で沈めたり。

更に異常なタフネスを誇る当麻を頭突き一発で沈めたり。

学園都市第二位の垣根を同じように一撃で沈めたり等。

明らかにオーバースペック気味。

ムサシノ牛乳を愛飲しているが黒妻とは知り合いではない。

当麻には高頻度で健康食品を勧めている。

だが、聞き入れられた事は一度としてない。

当麻のフラグ立てイベントに巻き込まれても平気でフラグをへし折る。

それどころか粉砕するぐらい豪快な行動をとる事もある。

ただ何故か桃色イベントが高確率で発生する。

登場人物【その他学生たち】

○固法美偉（このりみい）

・容姿

黒色の髪をし長さはセミロング。メガネをかけている。着痩せするプロポーションの良い容姿を持つ『巨乳』女子高生。

身長は１６３ｃｍ、体重は５０ｋｇ、スリーサイズは８５・６０・８１。

・性格

面倒見の良さと厳しさを併せ持つクールビューティ。ただ若干空気が読めない時もある。

頭脳明晰で危険な状態でも冷静に状況を分析できる。洞察力も高く、幼少の頃の黒子の問題点をずばり分析した事もある。

ブランド品には目がなかったりする。またムサシノ牛乳の愛飲者。

・能力

レベル３の「透視能力（クレアボイアンス）」。相手が隠し持っている武器などを発見できる。

・家族構成

不明。

・友好関係

超電磁砲組とは仲良し。ルームメイトとも何だかんだで仲良し。
その他学校での友人もいる。

・その他
黒子が唯一頭が上がらない人物。
また御坂が頼りにしている人物でもある。

過去にスキルアウトの「ビックスパイダー」に所属していた。
その時に黒妻に惚れ、組織を離れた今でも想いを寄せている。
（黒妻と同じ型のバイクを持っていたりする）
その影響でバイクの運転テクニックはかなり高い。

黒妻とお揃いで仕立てた赤い革ジャンを持っている。

黒子と初春の先輩かつ上司的立場。
ある意味で風紀委員第一七七支部のボスにあたる人。

着痩せするので、途中まで御坂たちには普通のスタイルと思われていた。
が、ジム通いのその身体ははっきりいってナイスバディ。
市販の水着がギリギリ入るという圧倒的な破壊力（バスト）を持つ。
対照的に細いくびれ。
水着姿を見た御坂たちは、開いた口がふさがらない状態になった。

○風斬氷華（かざきりひょうか）
・容姿
長いストレートヘアだが、一房だけ束ねられた髪が伸びている。

知的な眼鏡をかけているが、多少ずり落ちている。
霧ヶ丘女学院の制服を着ているが、目撃された事は一度としてない。
かなりの巨乳の持ち主で、作中一位か二位になれるほどの魔乳。

・性格
温厚かつ引っ込み思案な性格。
臆病な性格でもありよく涙目になる事もある。
反面、自分の大切な人の為には躊躇いなく闘う勇気を持ち合わせている。

自分のスタイルに無自覚な所があり、無意識に色気を振りまく時もある。
おっかなびっくりに喋る癖がある。

・能力
レベル不明の「正体不明（カウンターストップ）」。
常人では不可能な身体能力・再生能力を持つ。
更にある程度の力を加えられると大きく力が増加するらしい。
ただ、どの程度かは不明だし、大きく増加する力もどの程度か不明。
ゆえに「正体不明（カウンターストップ）」と称される。

・家族構成
なし。

・友好関係
優菜とインデックス、アリシアと当麻のみ。

・その他
人間ではなく虚数学区の一部で、ＡＩＭ拡散力場の集合体。
つまりＡＩＭ拡散力場が人の形になったもの。

当麻と友達だが「幻想殺し」のせいかとても苦手。
面と向かって喋る事が出来ないので、よく人の背後から話しかけている。
ある意味シュールな光景だが、本人は至って真面目らしい。

優菜から強く存在を認識され、その想いに応えようと自覚されている。
そのせいか昔は立体映像に見えたが、現在はきちんと固定化している。
（誰が見ても立体映像ではなく普通の女の子に見える）
但し中身が空洞なのは変わらず、食事や入浴は基本的に不要。
服もＡＩＭ拡散力場なので洗濯不要だったりする。

優菜へ懐いており、その姿は親に構ってもらいたい子猫。
ただ、抱きついたりすると巨乳が押しつぶされて凄い光景になる。
当麻曰く「桃源郷（パラダイス）」、浜面曰く「挟まれたい」。

アリシアより危険人物二号（妹的な意味で）と思われている。
何故なら、佐天より接触回数が多いから。

その出生のせいか、学園都市内では何処にでも現れる。

○食蜂操祈（しょくほうみさき）
・容姿
星の入った瞳に背に伸びるほどの長い金髪。

そして中学生とは思えないほどの巨乳の持ち主。
髪には必ず花がワンポイントの髪飾りをつけている。

常盤台中学の制服を着用している他、レース入りのハイソックスを着用。
更にレース入りの手袋も着用。レースは蜘蛛の巣を連想させる模様。

常に星のマークが入ったバッグを下げている。

・性格
お淑やかで理知的な性格。とても丁寧な口調で喋る。
が、単に猫を被っているだけで本当は「女王サマ」のような性格。

レベル５としてのプライドはあるのか、自分の能力に自信がある。
甘いモノが好きだが、太るほど食べるので毎度のように後で後悔している。
ちょっぴりお茶目さん。
（ただ太るといっても５００グラムとかいうレベルだが）

当麻に対してだけ一途。当麻の為ならレベル５の地位すら迷いなく捨てれる。
反面、敵対者や嫌いな相手には非道かつ陰湿な一面がある。

・能力
レベル５で序列は第五位の「心理掌握（メンタルアウト）」。
学園都市最高の精神系能力者。応用性が高く以下のような事が出来る。

記憶の読心
人格の洗脳
念話
想いの消去
意志の増幅
思考の再現
感情の移植

など精神に関する事なら何でも出来る。
その手数の多さから「十得ナイフ」に例えられる事が多い。

・家族構成
不明。

・友好関係
第一位の一方通行、第二位の垣根、第四位の沈利とは友達。
常盤台中学という関係からか、最愛とも仲良し。
フレンダと理后も面識があるが、こちらは接触が薄いので顔見知り程度。

御坂とはとても友好的ではないが一応顔見知り。

・その他
沈利たちから一番警戒されるほど当麻の心に深く入り込んでいる。
が、当麻からは「可愛い妹みたいな子」と思われている不憫な子。

垣根らほどではないが、ある程度学園都市の『闇』へ関わり

を持っている。

当初は派閥など作るつもりもなかったが、お遊びで作ってみた。

そして彼女の思惑とは反対に常盤台中学の最大派閥まで膨れ上がった。

今絶賛後悔中で、どうやって終わらせようか悩み中。

能力のせいか心理的な事には滅法強い。

殆ど苦労せず当麻のクリスマスパーティに参加出来た所からも伺える。

精神系能力者の頂点のせいか、能力に対する実験が多い。

時々何ヶ月にも渡って実験に付き合わされる事もある。

月に一度だけ当麻とデートはする。

これは操祈の中で絶対的な事になっており必ず実行する。

邪魔する者には、この時ばかりは容赦も手加減もしない。

○削板軍覇（そぎいたぐんは）

・容姿

白い学ランに鉢巻、旭日旗Tシャツ着用という少年。

白い特攻服のような服装にも見える。

傍から見ると田舎のヤンキー？に見えない事も……。

・性格

一言で言えば熱血漢。二言で言えば熱血馬鹿。

他にも根性馬鹿などはっきりいって暑苦しい性格をしている。

愛と根性の戦隊ヒーロ的好青年。

他人が困っていたり傷ついていたりしたら迷わず助ける。
その時、自分の損得勘定や危険度などは一切考慮しない。
ある意味で当麻に似た性格だが、こちらは無駄に熱い性格をしている。

口癖は「根性」。

完膚なきまで敗北しても希望を失わない。
むしろそれを糧に再び立ち上がり、更に前へと進もうとする。
かなり前向きな性格をしている。

根性を見せたら例え相手が女子中学生でも「男」として賞賛する。
つまり馬鹿。

頭の出来はよくないので、自分の能力についても勘違いしていた。
が、結局わからないので後回しにしたぐらい。

「弱きを助け強きを挫く」を地で行くヒーロー的な性格。

・能力
レベル5で序列は第七位。能力の正式名称は不明。
学園都市の学者さえも匙を投げるほどの複雑かつ繊細な力。
そもそもレベル5とか以前に本当に超能力者なのか疑われている。
それほど謎にみちた力を使う特殊能力者。

一応レベル5に分類されるので出力・応用性ともに高い。

が、科学知識が高い能力者には珍妙不可思議にしか見えない技を使う。
具体的には。

謎の力で遠距離攻撃をする「すごいパーンチ」（必殺技らしい）
背後から赤青黄色のカラフルな煙が出る爆発を起こす（戦隊物？）
自身を中心に謎の爆発を起こして人を吹き飛ばす（爆発の原理不明）
心臓に銃弾を撃ちこまれても痛いですむ（規格外の防御力）
戦闘行動を音速の二倍で行う（規格外の速度）
何かしら得体のしれない力で体を包む（オーラ？）
超電磁砲のメダルを歯で噛んで受け止める（規格外の馬鹿）
電撃の槍を謎の波動を纏った拳で地面に叩き落す（原理不明）
咆声とともに口から謎の波動を放つ（案外迷惑な力）
一蹴りで数十メートルの距離を移動出来る（理解不能）

等、人間かどうか疑うレベルの怪しい能力満載である。
この辺りが科学者も匙を投げる原因となっている。

・家族構成
不明。

・友好関係
当麻以外には明確な友人はいない。
付き合わされる方はたまったものではないが。

・その他
能力名がないので通称は「ナンバーセブン」。

が、大体は「根性馬鹿」の方で覚えられる。

真っ向から挑んでくる相手には、レベル関係なく全力で迎え撃つ。

その時は相手を称えながら戦う。

「バトルにおいて反則級」の強さを持っている。

が、本人が理解していないので、その強さが分かっていない。

当麻のヘアスタイルに根性を感じるなど、変な所にも根性を感じる。

ＡＩＭ拡散力場が正確に観測出来ない。

観測しようとすると、妙なノイズがのったような感じになるとの事。

技術転用するには余りにも謎が多い為、第七位との事。

一見お気楽に見えるが、学園都市の闇を知っているようなそぶりがある。

一方通行同様、地獄をたらい回しにされた過去があるかもしれない。

○歩（あゆむ）

・容姿

一方通行ぐらいの短髪で色は金色。

瞳の色は吸い込まれそうになるほど、綺麗なビー玉を連想させる蒼色。

ただ外国人ではなく日本人。

病弱で線が細く儚げな容姿をしている。
男より女といった方がいいぐらい中性的な容姿にも見える。
そのせいか幼い女の子に見えない事もないとか。

顔つきも男というより女に近い。全体的に女性的な印象を抱く体つき。
性別だけ間違って生まれたのではというぐらい。

身長は１５２ｃｍと年齢の割に低い方。体重は病気のため３５ｋｇと軽い。

・性格
礼儀正しく大人しい性格。体が弱いのでよく体を壊している。
何事にも一生懸命に取り組む。
誰に対しても丁寧な口調で喋るとても可愛い子。

地獄を経験しながらも全くスレずに純粋さを保っている。

強い漢に憧れており、当面は土御門が目標と考えている。
（単に知り合いの中で一番筋肉質だからだが）

基本的に苗字＋さん付けで呼ぶ。
但し土御門だけ「土御門のお兄さん」という呼び方をしている。

また結標は「淡希お姉ちゃん」と呼んでいる。

・能力
レベル１の「涼風発生（リラクセーション）」。
単にリラックス効果のある風を起こすだけ。
それも範囲が狭いので、結構至近距離にいないと意味が無い。

イメージとしては弱レベルの風で1／fゆらぎを作っているようなもの。

・家族構成
元は置き去り（チャイルドエラー）なので両親、兄弟共に不明。
金髪と蒼色の瞳のせいか、外国人と思われるが日本人。

現在は結標を姉と慕っている。

・友好関係
土御門、海原、一方通行の三人のみ。
学校には満足に通えないので、同世代の友達はいない。

・その他
二桁ぐらい非道な実験に利用された過去を持つ。
その影響により免疫力が著しく低下して体が弱くなってしまった。
更には難病を患い、現在も入退院を繰り返している。
（恐らくこの時に髪や瞳の色が変色した模様）

外見年齢１０歳程度だが、れっきとした中学二年生。
つまり結標のギリギリ範囲である１４歳だったりする。

救ってくれた結標には非常に感謝している。
その為、結標のしたい事はなるべく叶えてあげたいと思っている。

結標が暗部にいるのは歩の治療費を稼ぐ為。
それと歩のような子を二度と生み出さない為。

ただ、それを歩は知らない。
（結標が重荷になると思って言っていない）

登場人物【学園都市の大人たち】

○黄泉川愛穂（よみがわあいほ）

・容姿

尻まで届くロングヘアを後ろに結っている。

冴えない緑色のジャージだが抜群のプロポーションが映える大人の美女。

しかもジャージ姿すら色っぽく見せるほど。

そして巨乳、下手すると片方のサイズが小萌先生の頭サイズとか。

・性格

大雑把でかなり雑な性格。

多方面からあらゆる意味を込めて「勿体ない女性」と言われている。

普段は飄々と振る舞っているが、警備員などの熱い側面も持つ。

ただし同僚に言わせると「シリアスをコミカルに始末する女」との事。

レベル４の発火能力者でも、子供に銃を向けないポリシーを持つ。

一方で子供を守るためには銃をふるうことを厭わない。

教師としては優等生より手間のかかる生徒の方が好きらしい。

そういう意味では小萌クラスには羨望の眼差しを向けている。

（学校では小萌クラス＝問題児の塊クラスだから）

「～じゃん」という口癖が特徴。

何か問題があると後先考えずに整理整頓を始める癖がある。

・能力

大人なので能力者ではない。

・家族構成

芳川と一緒に住んでいる。

・友好関係

小萌とは親友のような関係。

芳川とは一応幼なじみ。

生徒では四馬鹿こと当麻、土御門、青髪ピアス、垣根とは知り合い。

また一方通行とも仲良し。

警備員では部下で後輩の鉄装。

また超電磁砲組とも知り合いという結構顔が広い人。

・その他

子供に銃を向けないが、代わりにヘルメットや盾で殴る。

本人曰く「あくまで防具」らしい。

半蔵に惚れられているが、本人は全く気付いていない。

電磁炊飯器であらゆる料理が作れる「炊飯ジャーマニア」。

焼き魚まで作れるのだから驚きだ。

過去に幾つもの非道な実験・研究所を潰してきた。
その為か、置き去りがどの様に扱われているかよく理解している。

○芳川桔梗（よしかわききょう）

・容姿
肩に届くぐらいの髪の長さで色は黒色。
知的で落ち着いた表情を常にしている。
少し眠たそうな眼をしている。
そこそこ美人と言える顔立ちをしている。
小さいわけではないがそれなりのバストを持っている。
大体は白衣を着ており、私服姿はあまりない。

・性格
一言でいえば甘い性格。それも自分にだけ。
絶対能力進化実験までは優秀な遺伝子関係の研究者だった。
が、今では絶賛ニート生活まっしぐら。

科学者ながら怪しげなグッツや非科学的なものに飛びつく。
働かないために労力を費やす何とも謎な性格。
とはいえ大事な時にはきちんと動く人。

とにかくだらけて生きる事を常に考えているようなニート。
ただ世渡りの方法は心得ている。

・能力
大人なので能力者ではない。

・家族構成
不明。現在は黄泉川と一緒に住んでいる。

・友好関係
黄泉川と一方通行のみ。
他はネットでの知り合いだけというダメニート。

・その他
黄泉川の家にはきちんとお金を振り込んでいる。
が、それを理由に手に職を持とうとしない。

黄泉川とたまに仕事で喧嘩をする。
しかし話は平行線で、決して決着はつかない。

肉体を変質させる機器を集める趣味がある。
コンプレックスなのか、特に豊乳マシンを集めている。
他にもダイエットマシンや小顔になるベルトなど。

過去最高の失態は研究所を一つ潰した事。
過去最高の功労は妹達に縞パンを履かせた事。

絶対能力進化実験に参加していた。
その関係か一方通行と知り合い、垣根とも面識あり。
ただ垣根には完全に忘れられている。

◯鉄装綴里（てっそうつづり）
・容姿
気の弱そうな表情で、メガネをかけている。
黄泉川と一緒で髪を後ろで結っている。
が、長さは黄泉川と違い肩ぐらいの長さしかない。

スタイルは標準的で、これといって特にいい訳ではない。

（悪いわけでもないが）

・性格
教師として学生たちを守るという気概と使命感をもっている。
ただ真面目で控えめな性格で、気弱な所がある。
修羅場にも普通に弱い。

よく悩むがそれが仕事にまで影響してしまうちょっと駄目な教師。

・能力
大人なので能力者ではない。

・家族構成
不明。学園都市では一人暮らし。

・友好関係
黄泉川は先輩であり飲み仲間。
同じく小萌も飲み仲間。
一方通行とは面識がある程度。
その他の警備員とも仲の良い人物はいる。

・その他
警備員としては経験不足な所がある。
おまけによくドジをして足を引っ張る事もある。

黄泉川が酔いつぶれた時は鉄装がいつも介抱している。
ちなみに小萌の場合は、必ず一方通行を呼んでいる。
（そうしないと一方通行が怒るから）

若いころはゲーマーだった。
「大宮ジェイミー」の異名を持つぐらい。
だからどうしたと言ってはいけない。

○寮監（りょうかん）

・容姿

ストレートヘアで腰ぐらいまでの長さ、色は黒色。
鋭い眼光をしており、教育ママみたいな三角眼鏡をかけている。
スタイルは良いが、特別良いともいえない。
スーツをぴっしり着ており、規律厳守の雰囲気を醸し出している。

一言で言うと紺色のスーツに身を包んだ眼鏡の女性。
ただ化粧をして着飾るととても美人。

・性格

寮内の寮則や規則を何よりも厳守している。
その為、それに反する生徒は例え高位能力者でも一切の容赦がない。
0．1秒の遅れも許さない鉄の女だったりする。

礼儀正しい子は好きで、そういう子にはちょっと甘い。

料理に関してはあまり上手ではない様子。

・能力

大人なので能力者ではない。

・家族構成

不明。

・友好関係
あすなろ園のボランティアとは顔見知り。
また、寮に遊びに来た優菜とは知り合い。
（当麻は忘れられている、哀れ）
その他、謎の友好関係を持つが詳細は不明。

・その他
学園都市最強のレベル０以下（能力者ではないので）。
その強さは素手で暗部組織「猟犬部隊」の三人を瞬殺したり。
レベル５の御坂を眼光だけで萎縮させたり。
また同じレベル５の軍覇もまた眼光だけで萎縮させたり。
テレポーターである黒子にテレポートされる前に瞬殺したり。
レベル４を三人一度に相手して返り討ちにしたりと。
もはや人類とは思えない２９歳の女性。

木原一族の裏の顔を知っていたり、学園都市の闇を知っていたり。
もはや単なる寮監ではない事を匂わす美人。
ただ、どこまで知っているかは不明。

優菜とは年齢を超えた友人同士。
たまに会っているらしいが、どれぐらいの頻度かは不明。
なお、盗み聞きしようとした某ツインテールは瞬殺されたとか。
なので互いに何を話しているか全く不明。

とんでもない過去を持つ女性らしいが、真相は定かではない。

○冥土帰し（ヘブンキャンセラー）

・容姿

カエルに似た顔つきをしている初老の男性。
それ以外は至って普通の医者にしか見えない。

・性格

例えどんな相手でも生きているなら必ず完治させる信念を持っている。
また何があっても患者を見捨てないとの信念もある。
ずば抜けた医者の腕を持つが、ナース服が好きという一面も。
「ーね？」など疑問形になる語尾が特徴。
ただ、真面目な場合はその限りではない。

・能力

大人なので能力者ではない。
ただ、その医療技術はもはや能力者といってもいいぐらいの腕前。

・家族構成

不明。

・友好関係

殆どが謎に包まれている。

・その他

イギリスの片田舎で瀕死の状態だったアレイスターを治療したのは彼。
また英国から匿い、日本に逃したのも彼。

アレイスターが学園都市を作る時に手伝いをしたのも彼。
何気に物語の根幹に関わる黒幕的な存在だったりする。
当然、アレイスターが用いている生命維持装置も彼の作品。

ナースフェチで美咲と美鶴のナース服を用意したのも彼。
他、優菜用も用意するほどだったりする。
何故寸法がぴったりなのかは、絶対に突っ込んではいけない。

優菜の医療方面の師。
しかし、師と仰いでくれるならナース服を着て欲しいと不満が。
（今の所、優菜は白衣を着るだけなので）

御坂から「リアルゲコ太」呼ばわりされている。

風紀委員が使う対外傷キットや『負の遺産』などの薬も開発した。
一方通行のチョーカーを開発したのも彼。
医者でありながら、高度な科学技術の知識も有している。

妹達の親代わりであり、妹達に協力を求める時は彼の許可がいる。
その他にも妹達の調整や治療を行なっている。

以前は不老不死の研究を行なっていたらしい。
その時の遺産が、今も学園都市の暗部で利用されていたりする。

○木原数多（きはらあまた）
・容姿

顔の左半分に刺青がある。
両腕にはマイクロマニピュレータを装備している。
髪は金髪でオールバックのような髪型。
カジュアルな服の上に白衣を着用。

・性格
一言で言えばクズ。
人間として終わっている部分をかき集めたような性格。

雑草を抜くような感覚で躊躇なく人を殺す。
残虐で悪辣の極悪人で、完全に腐りきってる。
良心の呵責という言葉とは完全に無縁。
研究のために平気で人を使い捨てるほどである。
その辺りは、木原一族の共通点だったりする。

そもそも一部の者以外は人として扱っていない。
たいていの邪魔者は敵ではなく単なる殺害対象という認識。

ただ超能力者の能力開発をしていたぐらい頭脳はよい。
頭のキレや回転も早いので、状況判断能力に優れている。

・能力
大人なので能力者ではない。

・家族構成
木原幻生、テレスティーナ＝木原＝ライフライン。
ただ家族とは全く思っておらず、単なる道具扱い。

・友好関係
性格上友人といえるものはない。

・その他
かつてレベル５の能力開発をしていた。
それも一方通行の能力を。

猟犬部隊のリーダーを務めている。
アレイスターから時々直接指令を受けている。
ただし面と向かってではなく、一方的な命令でだが。

天才科学者だが小物臭が凄くする。

登場人物【人外的存在】

○アレイスター・クロウリー

・容姿

男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』。

人間として可能性を全て内包しているかのような雰囲気を持つ。

緑色の手術衣を着て巨大ビーカーの中に常に逆さまに浮いている。

ビーカーの中身は弱アルカリ性培養液との事。

・性格

一言で言えば謎に満ちた性格である。

人としての感情を全て内包しているかのように感じる事もある。

時々『人間』らしい言動をするが、本当に稀である。

ある目的の為に動いている。

『プラン』と呼ばれる手順に従って目的を達成しようとしている。

その全容は誰も知らない。

・能力

不明。

・家族構成

不明。

・友好関係
不明。

・その他
教会世界で有名な魔術師と同姓同名だが偽名だと思われている。
だが、一部の人間には本人だと考えられている。
学園都市の最大権力者にあたる学園都市総括理事長を務めている。
同時に世界最高の科学者という側面も持つ。
基本的に表には出ず、部下や駒を使って物事をなす。
生命活動を機械に委ねているので推定寿命は１７００年ほど。
その機械をどうやってメンテナンスしているかは不明。
霊装と思しきねじくれた銀の杖『衝撃の杖（ブラスティングロッド）』を所有。
手持ちで一番の駒は優菜と土御門でよく使っている。
が、最近は学園都市内を土御門、学園都市外（魔術関係）を優菜と分けている。
よって土御門は、アレイスターが魔術関係で何をしているかが分からない。
大雑把には分かるだろうが、詳細な部分は完全に不明。

〇アクゼリュス
・容姿

輝く銀色の髪に赤い瞳が特徴の少女。
ストレートヘアで、髪の長さは腰に届くほどある。
身長は１４５ｃｍ、体重は３４ｋｇ、スリーサイズは８２・５７・８３。
見た目年齢１５歳程度で、スタイルはいい方。
可愛らしい少女の顔立ちをしている。
声は超一級品の楽器が奏でる音のような美しい声音をしてる。

常にゴスロリ服を着ており色は黒か黒に近い灰色が基本。
着方やアクセサリーに拘っている所を見ると意外とオシャレさん。
ゴスロリもフリルが多いのを好んで着ている。
後は黒いブーツが多いが、勿論服に合わせて靴も変えている。

・性格
非情に気紛れ、気分屋とも言う。
楽しいと感じた事は周りを全く考慮せず楽しもうとする。
その時に、どれほど被害が出ようと全く意に介さない。

はっきりいってドSで相手の嫌がる事を平気でする。
しかも的確な嫌がらせをするので、かなりタチが悪い。

気に入った相手や認めた相手には寛容な態度を取る。
命が危ぶまれたり、危険に巻き込まれたなら助ける事すらする事も。
反面、敵対者には残虐な行為を平気で行う。
敵対者は簡単に死ねない事が多いので、かなり非道な事が行われている。
時々、精神と肉体の両方を殺し尽くす事もする。

甘い物が好きでよくお供を連れて食べ歩いている。
その量は意外と多く、一般人からすれば食べ過ぎの域に入るとか。

頭脳もずば抜けてよく、魔術や科学に関係なく豊富な知識を持つ。
洞察力や観察力にも長けており、たいていの事はすぐ見抜く。
心を全く理解しない言動をするが、相手の心の機微を敏感に見抜く。

・能力
魔術ならおよそ何でも出来る。
四属性の魔術から、それを応用した魔術。
十字教以外の魔術も広い範囲で知っているし使える。
天候操作や防御系の魔術、果ては回復魔術まで使いこなす。

飛行魔術らしきものを使う。
だが、停滞から何までしているので系統が違うかも。
『飛行の妨害』がきくかは不明。
よしんば効いてもその程度で魔女が死ぬとは思えない。
よって相手の結末は地獄の苦しみを味わいながら死ぬ以外にない。

一説では天使の術式すら行使可能との事。
また、オリジナルの術式や『説明できない力』をも使う。

万物にあまねく存在する理を一切無視し、
その事象の「結果」のみを現出せしめる超物理的力を使える。
これに関しては回数制限があり、おいそれと使えない。

また魔術的な武器（霊装）なども作り上げる事が可能。
ただし、大体はロクでもない力を持つ武具を作り上げる。

一人で様々な力を行使出来るので万能を越えた存在。

・家族構成
不明。
現状ではアリシアを娘のように可愛がっているぐらい。

・友好関係
性格上友人というものはない。

・その他
作中でぶっちぎりの最年長者。正確な年齢は不明。

世界最古にして最悪の魔女として教会世界ではかなり有名。
過去幾度となく討伐隊が組織されたが、どれもが成果を上げる事はなかった。
その時の犠牲者の数は、イカレたぐらいの数だったとか。

その他能力者も倒しており、彼女の強さは能力者や魔術師など関係ない。
教会世界と科学世界が取り決めたルールも、彼女の前では紙屑同然。

そもそも魔術師として分類していいのかすら不明。
かといって原石でもない。かなり謎の部分が多い魔女。

コルネリウス家に自分の力の一部を授けている。
が、それすらも彼女の全力から見れば数パーセントレベル。

『人間』を捨てた魔女。悠久の時を生き続けている。
一説では３０００年以上生き続けているとの話も。

いつからかオートクレールとフラガラッハという神獣を連れて歩くようになった。
ただ、どういった経緯があったかは誰も知らない。

普通の状態で『魔神の力』と呼ばれるものを行使している正真正銘の化け物。
ただ、これすら彼女から見ればおもちゃのような力だとか何とか。

指先一本で星を滅ぼせれる規格外の力を持っているが殆ど封印状態。
その他の力も自らの手で封じ込めており、全力がどの程度かは全く未知の状態。

楽しい騒動を『物語』といい、主人公に当てた人物の動向を見て楽しむ。
時には介入するが、基本的にはただ傍観するだけのようだ。

好き勝手やるかと思えば、コンビニできちんと支払いして買い物をしたりする。
また、喫茶店で普通に注文したりもする。
現代における一般的な常識を理解し、それに準じて行動する事がある。

支払いはいつもカード。でもその財産はどこから出てきているのか。

また、どういったカードなのかは誰も分からない。
現金も持っているが、基本的には使わない。

幾つもの居住地を持ち、かつ結界をはって簡単に入れないようにしている。
その内の一つに『紅魔世界』というものがある。

○オートクレール
・容姿
全身の毛が銀色をしている狼。しかし体の大きさは水牛並のサイズである。
全体的に引き締まった感じの体つきをしている。
知的な雰囲気をしており、高潔さを伺わせる顔つきをしている。

人の姿に変身した時はギリギリ１０代に見える顔立ちをしている女性。
髪は銀色で、こちらもアクゼリュス同様ストレートヘア。
長さは腰に届くぐらいで、それを後ろで一つに結っている。
身長は１５８ｃｍ、体重は４７ｋｇ、スリーサイズは８３・５９・８６。

服装は白衣に朱色をした緋袴（ひのはかま）という、いわゆる巫女装束。
緋袴はズボンのように股から左右に分かれた襠高袴（まちだかはかま）。
その上に、千早（ちはや）という神楽や神事の際に身につける衣装を羽織っている。
全て天然素材で作っており、ある意味神々しい雰囲気を漂わしている。
ただ、学園都市では相当浮く服装。

・性格

沈着冷静で参謀的な性格をしている。
時には寒気すら覚える程の冷徹さを持っており、どのような状況でも狼狽えない。
アクゼリュスを主人と思っており忠誠を尽くしている。

基本的に無益な殺生は好まず、言葉で相手が投降するならそれですますタイプ。
但し、アクゼリュスが命じれば、例え相手が命乞いをしようと関係なく殺す。

言ってしまえば番犬のような性格。
常にアクゼリュスを第一と考え、彼女のサポートを行うよう徹底している。

常に冷静なオートクレールだがフラガラッハの前では感情的になる事もある。
それと、アクゼリュスを馬鹿にする輩には怒りを滲ませる。

大狼の時は雄々しい口調で喋るが、人間の時は妙齢の女性のような口調になる。

・能力

一般的な魔術は標準で使える。
アクゼリュスが使う魔術もある程度使う事が可能。

その他色々使えるが、殆どは持っている力だけで対処が出来てしまう。

・家族構成

不明。フラガラッハとは対になる存在だと言われている。
関係としては夫婦、もしくは兄妹かもしれない。

・友好関係
不明。

・その他
力量関係でいけば、単純な戦闘能力はフラガラッハの方が上。
ただし戦闘能力を含めた総合力はオートクレールの方が上。

常にアクゼリュスの事を第一と考えるが、甘い物に関してだけは駄目らしい。

スマートさからは想像もできない程の腕力を持っている。
その力は人間を簡単に引き裂けるぐらい。

幼少の頃からアリシアを知っている。
そのせいか、彼女とは親友のような会話をする事もある。

○フラガラッハ
・容姿
全身の毛が金色をしている狼。
オートクレール同様体つきは水牛並みのサイズをしている。
だが、フラガラッハの方がオートクレールより若干大きい。
およそ四十センチに及ぶ短刀状の牙を持っている。
体つきも筋骨隆々といった感じで、王者の威風を漂わせている。
オートクレールと違って、獰猛さを伺わせる顔つきをしている。

人の姿に変身した時はギリギリ１０代に見える顔立ちをしている男性。
髪は金色で、髪の長さは短髪より少し長めぐらい。
少しだけ癖っ毛で、ストレートヘアではない。
身長は１９２ｃｍ、体重は１０４ｋｇとまさに大男といっていい体格。

筋肉質だが暑苦しさを感じさせない。
見せるだけの筋肉ではなく、闘争の中で研ぎ澄まされた筋肉という感じ。
鋭い目つきをしており、相手を常に威圧するような表情をしている。
また、顔の左半分に謎な文様を刻んだ刺青みたいなのがある。
左肩、左肘、左手の甲にも同じような感じで刺青みたいなのがある。

服装は季節関係なくシャツとジーンズという格好。
稀にカッターを着るが、大体はシャツ姿しか見ない。
シャツやジーンズもバーゲンセールで売ってるような安っぽい感じのもの。
全体的にファッション等は気にしていない感じの服装をしている。

冬だとシャツ一枚は凄く寒そうだが本人は全く気にする様子がない。

・性格
全く神様らしさを感じさせないほど俗物くさい性格をしている。
喋り方は下品で、親父臭い思考をする時がある。

外見は神様、中身はまるっきり人間という言葉がぴったりあう。

口調は大狼の時も人間の姿の時も変わらず下品な口調である。

下品な口調だが唯一アクゼリュスに対しては丁寧に喋ることがある。

だが、慣れていないのでよく間違った敬語を使っている。

オートクレールと違って頭が若干弱い。

そのせいで、時々アクゼリュスからお仕置きを貰っている事がある。

一方でかなり残虐な思考を持っている。

相手を殺すだけでは飽きたらず、死者に鞭を打つような行為すらする。

その現場は凄惨過ぎて、まともな人間なら反射的に顔を背けるぐらいだ。

ただそのような行為をするのは、アクゼリュスが許可をした時のみ。

それ以外の時は、そのような『お遊び』をする事はない。

人間を喰らう事があり、中でも生娘の肉が好物らしい。

学園都市の人間はお好みではないらしく、余り喰らう事をしない。

・能力

オートクレール同様大体の事は出来る。

ただ、頭が弱いので使える魔術がかなり偏っている。

・家族構成
不明。オートクレールとの関係は対になる者らしいが。

・友好関係
不明。

・その他
過去にオートクレールとは決別してたらしく、一時期一緒にいなかった。
現在はアクゼリュスの元で二人一緒にいる。
また、決別の理由がフラガラッハの暴走に近い状態にある。
オートクレールをして手の付けられない存在だったらしい。
一度暴れ始めると手がつけれない。
唯一アクゼリュスだけが、暴走したフラガラッハを止められる。

ルールや戒律とかは守る気が全くないらしい。
人間臭い神様といういい見本。

アリシアとはそれなりに仲の良い関係を築けている。
軽口を叩ける時点で、フラガラッハもアリシアをそれなりに認めているようだ。

登場人物【イギリス清教】

○ローラ＝スチュアート

・容姿

身長の2．5倍位ある長い金髪を折り畳むように髪止めで束ねている。

金髪は宝石店にそのまま売られてもおかしくない程美しい金髪。

見た目18歳ぐらいだが、実年齢は見た目と離れている。

スタイルもいい方で、可愛いというより綺麗な少女。

ベージュの修道服を着ているが、修道服に使っていい色ではない。

・性格

見た目とは裏腹に非常に狡猾で計算高い。

ただ普段は穏やかかつのんびりとした物腰の柔らかい感じである。

敵対する者には一切の容赦がない腹黒い性格。

また、自己や組織の利益の為なら多少の犠牲（当然人の命も）も厭わない。

人道的な倫理なども一切差し挟まない。

その辺りは徹底して『合理主義』な思考をしている。

ただ悪行だけするかと思いきや、同じぐらい善行も行なっている。

『合理主義』の考えからすれば『何の利益にもならない善行』のはずなのだが。

そのせいで、善人か悪人かわからない性格。

土御門より教えられたエセ古文のような口調が特徴。
本人はかなり気にしており常々直したいと思っている。
ただ、話術は『出来れば会話を避けたい』と言わしめるほど達者。

女狐とも言われている。

・魔術

魔術師としての実力は不明。
曲者揃いの魔術師たちが集う『必要悪の教会（ネセサリウス）』のトップ。
なので魔術師としての実力は相当あると見られる。

・友好関係

『王室派』のトップであるエリザードとは旧知の仲。
それ以外はいなさそうな感じ。

・その他

イギリス清教の『最大主教（アークビショップ）』。
そして『必要悪の教会（ネセサリウス）』のトップ。
つまり英国の三大派閥「清教派」のトップである。

当麻と絡むと何故かほぼ１００％の確率で桃色イベントに巻き込まれる。
それも尻揉まれたり、胸を揉まれたり、パンツをばっちり見られたりと。
殆どエロの方向に走れるようなイベントばかりである。

当麻ががっちり掴むぐらいなので、それなりに巨乳だと推測される。

頭の切れが良いのだが、おふざけ要素もありギャグパートも平気でこなす。
なので、頭がいいかそれとも単なる馬鹿なのか判断がつかない。

普段から馬鹿な態度を取っているせいで、部下から結構ぞんざいに扱われる。
燃やされそうになったり、馬鹿女呼ばわりされたりと。
地位や身分などお構いなしである。
ある意味では『誰であろうが平等に接する』と言える人物。

幻想殺しの当麻を心身共に手に入れる為、政略結婚を持ち出す。
ただ、当麻からあっさり看破されて失敗に終わる。
その他にも、色々と手を使って当麻を自分に惚れさせようとしている。
……あれ？　政略結婚じゃなかったの？　とは言ってはいけない。
これもローラに考えがあっての行動。決して疑ってはならぬ。

綺麗な笑顔を見せたり、見た目年齢相応のすね方をしたり。
普通の女の子の表情も出来る。
（当麻がクラっときそうになったとか何とか）

○ステイル＝マグヌス
・容姿
身長は２ｍを超え、右目の下にはバーコードの刺青を入れている。
髪も赤く染めており、長さは肩まで届く程度。

耳には大量のピアスをつけ、香水の匂いが常にする。
左右十本の指には銀の指輪をつけ、神父服を常に着用している。

でも見た目がアレなので、どう見ても神父には見えない。
唯一顔立ちだけは実年齢っぽい。

・性格

インデックスの前だけでは、優しく紳士的な性格となる。
それ以外の相手では、大体傲慢さが見え隠れする性格となる。
かなり大人びてはいるが、時々歳相応の反応を見せる事もある。

タバコ好きで相当な数のタバコを持ち歩く。
禁煙の場所では噛みタバコで我慢するという重度のヘビースモーカー。

インデックスの事は大事に思っており、彼女に害をなす存在を許さない。

・魔術

ルーン魔術、それも炎系に特化している。
拠点防衛を主とするが、自ら攻めこむ事も可能。
魔法名は『我が名が最強である理由をここに証明する（Ｆｏｒｔｉｓ９３１）』。

得意なのが教皇級の威力を持つ『魔女狩りの王（インノケンティウス）』。
他に十字教の要素を併せた摂氏三千度の炎で作る『吸血殺しの紅十字』。

人払いや神隠し、特定の人間を精神的に拘束する事も可能。

・友好関係
性格上、友人と呼べるようなものを持たない。
といっても土御門や当麻とは知り合いだし神裂も同様。
優菜には不信感を持っているので友人とは呼びがたい。

・その他
その体躯から想像つかないが実年齢は十四歳。
なので幼女を助けてもロリコン扱いをするのは間違い。

尊敬する女性はエリザベス一世。好みのタイプは聖女マルタらしい。
愛と慈悲の祈りのみで悪竜を退治した逸話が痺れるとか何とか。

現存するルーン二十四文字を完全に解析した。
加えて新たに文字を六つも生み出した、ルーンを極めた天才魔術師。

膨大な魔力生成のための作業から体力の消耗が早い。
なので体術は不得意。その手の人間には滅法弱い脆さがある。

自分にとってのインデックスは何かわかってなかった。
なので、インデックスをどう思っているか現在悩み中。
（ステイル自身がどういう感情を抱いているか）

○神裂火織（かんざきかおり）
・容姿
Tシャツにジーンズが基本スタイルの女性。

しかしジーンズの片方は太股の際どい部分まで切断して露出させている。
また、シャツも片方の裾が根本まで切断されている。
腰のウェスタンスベルトには二メートル級の刀を帯刀している。

長い髪をポニーテールで括り、大人の女性を感じさせる顔つきをしている。
ただし、未成年なので実際は大人の女性ではない。

・性格
厳格な武人タイプの性格をしている。
だが、世間知らずなお姉さんのような時もある。
義理堅く、受けた恩は絶対に忘れない。
年下の相手でも敬語を使うが、激高すると荒っぽい口調になる。

仕事にも真面目な部分が強いので、完全無欠という面が強い。
ただ普段の生活では周りに流されて右往左往する事がある。

・魔術
基本的には魔術を使うというより白兵戦タイプ。
愛用の武器は二メートルを超える長さの日本刀。
名前は七天七刀（しちてんしちとう）。

その強さはロンドンでも十指に入り、また世界でも２０人といない『聖人』。

七閃など鋼糸を駆使した技や肉体強化魔術を使った白兵戦を

得意とする。
が、その一方で炎や氷の魔術攻撃もバカスカ放てる凄い人。
魔法名は「救われぬ者に救いの手を（Ｓａｌｖｅｒｅ０００）」。

・友好関係
必要悪の教会メンバーであるオルソラ、シェリーとは仲良し。
五和とは過去の事があるが、一応友好関係を築けている。
ステイルとは仕事仲間であり、かつ相棒的な存在。

土御門、当麻は学園都市にいるが顔見知り。

・その他
「ねーちん」という愛称がある。
だが、基本的に土御門しか言わず、他の人間がいう事はない。

土御門には恩を感じているが、最近恩より恨みが多くなってきた。
そのため、土御門に容赦なく鉄槌を振り下ろす事も。

十八歳なのだが、どう見ても十八歳には見えない。
当麻曰く「結婚適齢期をすぎた女性」との事。

格好はウェスタンルックサムライガールにしか見えない。
一応左右非対称のバランスが術式を組むのに有効との理由があるが。
当麻曰く「単なるエロい格好」にしか見えないらしい。

当麻に惚れているがいまいちうまく行っていない模様。

本来の生真面目な性格も相まって、オルソラたちのように動けなかったり。

機械が苦手で据え置きの電話や携帯電話ならギリギリ可能。
ただ、最新式の機器は全くもって使えない程メカオンチ。

○シェリー＝クロムウェル

・容姿

手入れを怠って荒れた金色の髪と、別の国の血を引いたような褐色の肌。
擦り切れたゴシッククロリーターを着用している。
かなり異様な外見をしているが、これはあくまで魔術師としてのスタイル。

普段着はかなりラフな格好をしており、下着姿で歩くほど。
但し露出趣味があるわけではなく、単にズボラという理由だが。

スタイルは必要悪（ネセサリウス）の教会に所属する中では普通の部類。
それでも学園都市に住む学生たちよりはかなりいい。

・性格

割と短気で、よく簡単にブチ切れている。
根は結構なズボラさがあり、身だしなみに全く気を使わない。

そこそこＳッ気があり、当麻をよくからかっている。

行動指針がコロコロ変わりやすい性格的問題のある人。
ただ「友を失いたくなかった」という根本の考えだけはずっと変わらない。

芸術品には目がない。
出会った際には、色々と性格が変わってしまう。

英国にある派閥の一つ「騎士派」の騎士団を嫌悪している。
名前を聴くのすら嫌というぐらいだから、相当な嫌悪っぷりなのだろう。

・魔術
オイルパステルを用いたゴーレム作成や浮遊術式等の土属性の魔術が得意。
魔法名は『我が身の全ては亡き友のために（Ｉｎｔｉｍｕｓ１１５）』。

その他魔術ではないが寓意画・紋章などに隠された意味を読み取る事が出来る。
つまり暗号解読のスペシャリスト。

・友好関係
学園都市に侵攻する事件まではろくに友人などいなかった。
故人でエリスぐらい。

「寛大な処分」後は、オルソラ、神裂、五和と仲良くしている。
特にオルソラは仕事関係でよくコンビを組んでいる。

・その他
実はインデックスに貴重な出番を提供した人。
更に「そういえば、インデックスって十万三千冊の魔道書持ってたね」

と割と重要なことを思い出させてくれた人。

学園都市への襲撃で途中まで強かったけど、後半からは悲惨の一言。

反撃できずにボコボコにされ、強さを見せつける場を完全に失った。

殆どいいサンドバック状態。

最後はアリシアから圧倒的力量差を見せつけられるという落ち。

でもズボラなので、あんまり気にしている様子はない。

王立芸術院で美術教師をしている。

その為、、芸術家としても高い能力を持っている。

彫刻家としてはその世界では有名人。

案外ゴシックが好きで、変なゴシックを出してくるとキレる。

乱暴な男言葉と丁寧な女言葉が混じる。

実は乱暴な男言葉はエリスの言葉使いで、

反対に丁寧な女言葉は事件前までのシェリーの言葉使いなのでは？

という噂があるが、真相は完全に闇の中。

オルソラの天然ぶりにほとほと手を焼いている。

どうにかならないかと思っているが、どうにもならないだろう。

当麻の事は好きというか独占したいという気持ちがある。

その為オルソラをけしかけて、その後美味しい部分を取ろうとする。

色気を使うことも気にせず、結構過激な事もする。

○オルソラ＝アクィナス

・容姿

ミディアムヘアの金髪に巨乳を持つ美少女。
普段は髪が全く見えないほど修道服のフードを深く被っている。

また、いつでも真っ黒い修道服を着ている。
手袋もしており、肌の露出は顔が出ている程度というぐらい。

必要悪(ネセサリウス)の教会の女子寮ではある程度ラフな格好。
とはいえ、修道服のフードを脱いでいるぐらいだ。
たまにインナー姿で歩くが、この時は凶悪な破壊力(バスト)が顕になるとか。

・性格

マイペースと言えば聞こえはいいが、実際は単に人の話をロクに聞かない。
おばーちゃん的な思考回路の持ち主である。

会話も行動もマイペースで、のんびり屋な人格である。
なので急を要する用件には向いていない。

口調は穏やかで物腰は柔らか。その上人当たりのいい性格。
一般ウケのいい性質ではある。

・魔術

明確な魔術師ではないので、これといった魔術は使えない。
だが、魔術関連の暗号解読を得意とする情報解析のエキスパート。

応急措置程度の回復魔術ならこなせる模様。

・友好関係

ローマ正教時は不明だが、イギリス清教に改修してからはシェリーと仲良し。

神裂や五和とも仲良く、よく四人でガールズトークをしている。

・その他

話の内容がよく前後してしまう為、会話しづらい印象を抱かせる。

ただ、本人は一定のルールに基づいて会話している。

喜怒哀楽の「楽」しかないのではと思えるぐらいいつもニコニコしている。

見た目や言動とは裏腹に高度な交渉術を持っている。

その為、戦闘は苦手だが交渉ごとには滅法強い。

シェリーとよくコンビを組んでいる。

元はローマ正教のシスター、なのでイタリア人。

元々はイタリアのキオッジアに居を構えていた。

現在はイギリスの女子寮にいるが、完全な引越しはまだ終わっていない。

料理は上手でかなり美味しいとの事。

ただ隠し味が全てオリーブばかりだという落ちがある。

クリスマスの時、当麻から一番肉体的にエロい行為をされた人。

残念ながら『最後』まではされていない。

が、それでも首の周りに大量のキスマークを作られていた。

どこまでされたかというと、以下の一文で説明が出来る。

『男子高校生がエロ本で仕入れる普通の行為は全てヤラれたしヤッた』

なお、当麻はアブノーマルな趣味を持っていないので悪しからず。

この時、酔った当麻はオルソラに対してかなり強い独占欲を出したとの事。

『オルソラ、お前の身と心は俺のものだ』

『お前が神様に純潔を捧げたというのなら、まずは神の幻想(たわごと)をぶち殺す！』

『お前の体に俺のモノだという証を刻み込んでやるよ』

などオルソラに対して心身共に自分のモノだと意思表示をした。

これによってオルソラが吹っ切れてしまったのは言うまでもない。

シスターとしての教えより、自分の愛する人を選んでしまったからさぁ大変。

今後、オルソラからのアピールはより多くなるだろう。

自身を『当麻のモノ』と意識している。結構従順思考があったりなかったり。

○五和（いつわ）

・容姿

二重まぶたとショートヘアが特徴。

しかしそれ以外は普通で、かなり地味な子だったりする。

「隠れ巨乳」と言われるほど、歳の割に結構豊かな胸を持っている。

天草式十字凄教に所属しているので服装は何でも着れる。

・性格

普段は大人しめで奥手。ただキレると人格が変わる。

オルソラほどではないが天然な一面がある。

奥手なので当麻へのアピールは、おしぼりを渡す事しか出来てない。

（通称「おしぼり作戦」）

しかし、名前も言っていないので当麻からは覚えられてすらいない。

とはいっても神裂よりは行動力があるので、アプローチは続けている。

前述でも紹介したがキレるとかなり危険な台詞を多発する。

また、かなり暴力的になり、その様は鬼や悪魔を連想させるとか。

一度見た建宮たちは戦慄したとか何とか。

・魔術

攻撃型の魔術というよりは肉体強化魔術や治癒魔術を得意とする。

魔法名は不明。

・友好関係
神裂とは色々とあるが仲良し、というか慕っている。
その関係でシェリーやオルソラとも面識がある。

・その他
天草式特有の戦闘技術を習得しているので戦闘力は高い。
また自動車、大型自動二輪、小型船舶やヘリコプターの操縦も可能。

料理の腕前はかなりのもの。オルソラに引けを取らないとか。
ただ、女子寮に住んでいないので、どっちが上かは不明。

前述のように必要悪(ネセサリウス)の教会の女子寮には住んでいない。
実際は日本人街の一角に天草式の面子と一緒に住んでいる。
ただ、女子寮にはよく遊びに行っている。

恋する乙女なので、当麻の事となると精神状態が激しく乱れる。

その時、暴走状態の五和を止めるのは大体建宮の仕事。

法の書事件で優菜にコテンパンにのされた為、トラウマを抱えている。

名前を聞いただけで気絶するぐらいだからかなりの状態。

アリシアから「地味子」と言われた事を気にしている。

○建宮斎字(たてみやさいじ)
・容姿
クワガタのように光沢があるツンツンの黒髪が特徴。

髪型もクワガタのような髪型をしている。
イギリス清教の象徴である赤十字が入った白Tシャツを着用。
首からは小型の扇風機を幾つもぶら下げている。
靴紐は一メートル以上あるなど、かなり奇抜な服装をしている。

Tシャツはぶかぶかで、ジーンズもだぼだぼとサイズが合っていない。
隠密を基本とする天草式の中では異質な格好。

・性格
見た目とは裏腹に実直。とはいえ軽い部分もあったりする。
五和の恋をサポートするかと思えば、それをネタにからかおうとしたり。
また、神裂の恋愛について余計な噂を流したりと。
意外とお節介でユーモラスな一面も持つ。

闘いの局面に置いては非常に理知的で頭の回転が早い。
その上、常に仲間に対しての気遣いを忘れない。
実質リーダーに相応しい思考をしている。

当麻同様、かつて敵対した者でも助けを求める者には手を差し伸べる。
損得勘定など考えない優しさを持つ。

「〜よな」という語尾が特徴。

・魔術
日常的な仕草に含まれる儀式的動作を組み合わせて術式を練り上げる。

天草式の魔術を象徴している偶像のスペシャリスト。
魔法名は不明。

状況に合わせて即興で作り出す魔術を得意とする。

・友好関係
天草式の面子とは友人のような仲間。
当麻やステイルとは戦友といった感じ。

・その他
おちゃらけた感じで忘れがちだが実力はかなり高い。
当麻とステイルを同時に相手して、互角の戦いを繰り広げたほど。

草式十字凄教メンバーの個人データを事細かに把握している。
ただし、このデータは余計な情報も含まれている。

天草式の「救われぬ者に救いの手を」の理念を体現したような人物。
オルソラに信じて貰えていないと分かっていても、最後まで助けようとした。

本来は両手持ちの長剣「フランベルジェ」を片手で軽々と扱う腕力を持つ。
また、武器の扱いにも精通している。

年末に五和をからかって酷い怪我を負った。（自業自得だけど）
それ以来五和にビビっている。

登場人物【ローマ正教　神の右席】

○フィアンマ

・容姿

赤を基調としたスーツ系の服装を着用している。
また、あまり鍛えているようには見えない体躯をしている。
髪の長さはセミロングぐらいで色は赤。
外見はさわやか且つ癖のある美青年に見える。

だがその印象以上に不自然で異様な威圧感を与えてくる。
また、一見爽やかな雰囲気だが、目は常に笑っていない。
瞳には「歪んでいる」世界に対する強い憎悪が宿っている。

とはいえ、これは『神の右席』の時の顔である。
それ以外の時は、外見通り爽やかな好青年の雰囲気を醸し出している。

・性格

『神の右席』としての顔では、性格は傲慢不遜。
己の目的を達成する為なら他人の命など全く省みない冷酷無慈悲さがある。
自分の行動が絶対的な善の到来を意味するものであると信じている。
かなり独善的な行動や理念が垣間見える。
常軌を逸した人間性を指摘されているが本人は気にも留めていない。

ただ『神の右席』以外の性格もある。
こちらは単なるお馬鹿キャラで、全体的にギャグパートな性

格をしている。
信徒の金を平気で戦略物資（オタクグッツ）に浪費する傲慢さがある。
コスプレ服を用意するぐらいだから相当なものである。

魔術関係に関しては洞察力が高い。
強固な隠蔽が施されている優菜の力を即見抜いた。
その他、魔術に関しての知能も高い。

・魔術
『神の如き者（ミカエル）』の性質を持っている。
『神の右席』の能力として奇跡の象徴たる「聖なる右」を持っている。
この腕は、様々な十字教的超常現象を行使できる。
姿は右肩から不格好な巨人の腕のような歪で禍々しい光の塊。
別名「第三の腕」とも言われている。

その威力は、本人が大天使に正面から勝てると豪語するほど圧倒的な物。
倒すべき敵の強さに応じて必要な出力を自動的に発揮してくれる性能がある。
つまり、この腕を振るうだけであらゆる条件を無視して一瞬で敵を倒す事が可能。
言ってしまえば極めて強大かつ万能の能力。

欠点は自動で強さが調整される為、相手が弱いと同じように出力が低下する。
また非常に不安定で長時間維持できず、一振りするだけで空中分解しかける。

他にも火属性に限って通常魔術も行使できる。

直線でのｋｍ単位での瞬間移動も可能。
３０－４０ｋｍもある巨大な剣を行使するなど多種多様な魔術を扱うことが可能。
大規模魔術すら立て続けに行使でき、魔術師としての実力は極めて高い。

・友好関係
性格上友好関係というものは少ない。
せいぜいオタク時に青髪ピアス（ブルーヘア）が友達なぐらい。

・その他
アックアがフルパワーで殴っても怪我一つ負わない謎の能力を持っている。
それでも痛いらしく、よく悲鳴を上げながら飛んでいっている。

力云々を抜いても優菜をいたく気に入ったらしく色々とちょっかいを出している。
ただ、大体はアックアによる制裁コースという落ちだが。

行動力が無駄にあるので、それでよく『神の右席』を変な事に巻き込む。

日本文化を盛大に勘違いしている。
しかし誰も突っ込んで上げない。だから本人はアレが日本文化と思っている。

好きなアニメは『超機動少女カナミン（マジカルパワードカナミン）』。
よく仕事をサボって『奥』にあるオタクルームで見ている。
勿論グッツも沢山ある。フィアンマ曰く『神の王国（パラダイス）に通ずるルーム

部屋』。
当然、その購入資金は信徒の献金からなのだが……。

〇アックア
・容姿
青系の長袖シャツを中心にゴルウェアを連想させる格好をしている。
スポーティな格好の茶髪白人だが、歴戦の猛者を思わせる体躯をしている。
その体躯・格好と合わせて静かで揺るぎない雰囲気を放つ。

・性格
普段は無骨な武人のような性格。
無口なので言葉で己を語らず、武器に魂を込めて語るような人物。

反面、弟子であり娘とも思っている優菜には滅法甘い顔をする。
なので優菜の事になると、普段の寡黙さも何もかもなくなり人格が豹変する。
その姿や言動、性格はまるで娘を心配する父親のようにも見える。

体躯と力の安定方法のせいか細かい作業がちょっと苦手。
後は繊細な力加減を要求される事も苦手。

真面目な部分があり、フィアンマの破天荒な行動に頭を痛めている。
語尾に「～である」を多用する口調が特徴。

・魔術
世界でも数少ない『聖人』の一人。
主に使う武器は全長五メートルを超える巨大な金属棍棒（メイス）。
その身体能力だけでも相当な強さを誇る。

魔術師としては水系統の術式を主に使用する。
『神の右席』の能力としては『神の力（ガブリエル）』の性質を持つ。
受胎告知の関係から『聖母の慈悲』を行使できる。
魔法名は「その涙の理由を変える者（Ｆｌｅｒｅ２１０）」。

聖母の慈悲の効果により、本来は使用できない通常の人間用魔術も使用可能。

・友好関係
イギリス三大派閥の一つ『騎士派』の騎士団長とは親友。
その他、色々な友好関係を築いている。
アクゼリュスとは過去に何かあったのか、顔見知り程度の関係。

優菜とは弟子であり娘でもある。

・その他
優菜が十二歳の時に出会った。
その時、優菜に優しくした理由は単純に魔法名からきている。
（アックアには優菜が心の中で泣いていると感じたから）

元々は数ヶ月滞在の予定を、優菜の為に一年近くまで伸ばした。

その間に、アックアは様々な事を優菜に教え込んだ。
『傭兵の流儀（ハンドイズダーティ）』や戦闘に対する思考など。

また平時での行動や思考など、一般的な事なども教え込んだ。
およそウィリアムとしての力は、全て受け継がせたと言ってもいい。

反面、魔術などの技術は一切伝授していない。
これは当時の優菜が若すぎて危険だとウィリアムが判断したせい。

優菜用の魔法名を心の中にしまっている。
ただ、それに近い名前を『誓いの名』といって授けている。

優菜を鍛え上げたのは僅か一年程度。
その後数年間、一度も手紙を寄越さなかったし顔も見せなかった。
理由は、単に『神の右席』の関係者と思われて狙われる事を危惧したから。
なのでフィアンマすら優菜とウィリアムの関係を知らなかった。

優菜には恋愛的な感情は抱いていないが、父親的な愛情を持っている。
そのせいか他の人物と比べて、優菜に甘い顔をする時がおおい。

○テッラ
・容姿
緑色の修道服を着ており、白人にしては背の低くかなり痩せている。
爬虫類を思わせる風貌と全身を包み込んだ緑色の装飾が特徴。

・性格

自分のルールに従って一定のペースで物事をなす性格。
マイペースとも言うが、本人は一応普通のつもり。
異教徒は嫌いだし冷たくするが、同じ信徒には優しい。

見た目に反して高度な科学知識を有している。
「軽蔑すべき味方よりも、尊敬すべき敵を見よ」
という言葉に感銘を受けたからという理由。
また「人は差別によって幸福を得る」などの言葉に感銘を受けている。
つまり、異教徒でも尊敬すべき言葉を受け入れる度量がある。

意外とノリのいい面も持っている。
フィアンマのお馬鹿に黙って付き合ったりもする。

語尾に「ねー」を多用している口調が特徴。

・魔術

神の右席の能力は物の優先順位を自由に変えられる『光の処刑』。
『神の薬（ラファエル）』の性質を持つ。

また副産物である小麦粉をギロチン状にしたものを使う。

・友好関係

友好関係はなし。

・その他

『神の右席』の中で一番常識人の思考をする。

フィアンマはオタクで変態的な言動が多い。
アックアは弟子に滅茶苦茶甘い。
ヴェントは重度のブラコンが入っている。
という濃い面子にも対等に会話できる凄い人。

過去は人間的に問題がありまくった人。
ただ、どういった事で考えを変えたかは分からない。

『神の右席』の窓口。
よく荷物を受け取ったり、伝言を頼まれたりしている。
殆ど小間使いだが、本人は文句を言うだけでそれ以上は何もしない。

見た目に反して肉をよく食べる。

最終目的は『神聖の国』において正しく人を導く方法・方向の探究。
つまり『人々を平等に救うこと』が目標である。

○ヴェント
・容姿
ワンピースの原型となったカートルという女性衣類を着用。
腰には細い草のベルト。
手首から二の腕にかけてスリーヴという脱着可能な袖が取り付けられている。
頭には一枚布のフードを被っている。
髪は全て被り物の中に隠されている。

その格好は十五世紀前後のフランス市民の格好をしている。
基調となっている色は派手な黄色。

少女のような痩身をしている。

魔術的な都合で顔にいくつものピアスをつけている。
耳はもちろん、鼻、唇、まぶたにまで穴があけられている。
舌にはネックレスのような細い鎖を舌先のピアスと連結させている。
長さは腰のあたりまで伸び、先端には十字架を模したアクセサリーがついている。

ピアスなどのせいで顔が崩れているが、これには理由がある。
ただ、ヴァチカンの『奥』にいる時は外しているようだ。

フードとピアスを取り除くとかなりの美少女だったりする。
スタイルもいい方で、フィアンマ曰く「ギャップ美人」との事。

・性格
粗暴で荒っぽい性格をしている。
かなり短気で、小さなことでプッツンいったりもする。

結構エキセントリックな話し方をする。
術式の為かと思ったが、結構頻繁にいっているので素なのだろう。

弟が大好きなブラコンな性格。
弟は科学に殺されたと思ってから、反対の魔術世界に行くぐらい。

・魔術
牽制用であるハンマーを利用した風の術式。

神の右席としては『神の火（ウリエル）』の性質をもっている。

最大の武器は『天罰術式』。
舌につけている鎖と十字架の霊装、『神の火（ウリエル）』の性質が必要。
その三つがあって初めて扱えるという厳しい条件がある。

その効果はヴェントにわずかな敵意でも持ったものを気絶させるというもの。
脳内イメージのヴェントでも、その姿を捉えて警戒を抱くと発動してしまう。
「コイツやべぇ」程度の警戒心でも発動してしまう。
ヴェントの顔ピアスも、視覚的な嫌悪感を誘う用途を含んでいる。

後遺症も無く大量の敵を無力化出来るので、大規模制圧には理想的な術式。
デメリットは「敵味方関係なく、誰だろうが許さない」というもの。
つまり範囲の指定や対象の選択をする事が出来ない。
場合によっては味方にまで被害が及ぶ可能性もあるとか。

・友好関係
性格上友好関係はなし。

・その他
服装からスレンダーな体型かと思いきや、意外とグラマーな体をしている。
そのせいか、フィアンマによくメイド服を勧められている。
そして大体ハンマーでフィアンマをぶっ飛ばしている。

時々『神の右席』を抜けようかどうか真剣に迷う。
が、完全に染まっているので思うだけで行動に出ない。
（本人は染まってないと頑なに否定）

同じ弟好き（ブラコン）である優菜に一定の共感を得ている。
とはいえ、科学嫌いなので仲良しという事はないが。

タコが苦手だったが、鍋の一件以来好物に変わった。

科学大嫌いッ娘。
でも多少の科学知識は有しているお茶目さん。

登場人物【ローマ正教　その他】

○マタイ＝リース

・容姿

豪奢な服装を纏った、腰の曲がった老人。
厳格で真面目な表情をしているが、目は優しさを宿している。
立派な髭を生やしているが、色は白い。
同様に髪も白く、また老人なのでかなり短い。

・性格

良くも悪くも善良。人間としての器も大きい。
信徒と自身の間に壁がある事を気にしている。
また人の票によって教皇に選ばれた事を気にしている。

教皇の顔を外すと、中身は単なるいたずら好きのおじいちゃん。
何も知らない信徒をよく驚かせている傍迷惑な癖がある。
ただ、これも信徒と自身の間にある壁を壊そうとしているのかも？

まさにローマ正教のトップに相応しい能力と人格を持っている。

・魔術

教皇なだけあって魔術の腕は達人級。
様々な魔術を行使できる。

・友好関係

不明。

・その他
アックア以外の『神の右席』からは軽んじられている。
『神の右席』後方のアックアを護衛として連れて歩く事もある。
その時は、アックアに対して軽口も叩くようだ。
実は散歩が趣味、よくヴァチカンを歩いている。
その時、いたずらをする事が多いらしい。

○ビアージオ＝ブゾーニ
・容姿
４０代の男性で豪奢な法衣を身に包んでいる。
首にはそれぞれ数十の十字架を取り付けた四本のネックレスをしている。
（ネックレスの名前は「メノラー」という）
狡猾さを窺わせる顔つきをしている。

・性格
一言で言えば典型的な小物悪役な性格。
面倒な事が大嫌いで、周囲を無能と罵る事が多い。
狡猾さは枢機卿を超え、複数を動かす事に特化している。
ただ、破綻に対する能力はない。
いつもは慇懃無礼な口調だが、キレると粗雑な口調に変わる。
典型的な原理主義者な性格。
主の威光の下にいない者は全て人間ではないという認識。
また、世界はローマ正教で埋め尽くされるべきだと考えている。

・魔術
十字架が持つ複数の意味を解放する事で様々な力を振るう。
・友好関係
性格上友人などいない。
・その他
何かミスがあるとよく部下か上司を無能と罵って責任転嫁する小物。
ブツブツと文句をいい、下に当たったりする。
過去に二度アックアから制裁を貰って入院した。
それ以来は何も言わなくなった。
小物なのでよく周りから馬鹿にされている。
〇アニェーゼ＝サンクティス
・容姿
インデックスよりも少し幼くした感じの風貌。
背中までの赤毛を鉛筆くらいの太さの細かい三つ編にわけている。
ミニスカ状態の修道服にチョピンという厚底靴という姿が基本。
・性格
一言で言うならドS。
自身が踏みにじった人間の苦悶の表情に恍惚を覚えるタイプ。
これを止めるには、彼女のスカートをめくる事が推奨されている。

何故なら、スカートめくりが大好きだが、めくられるのが大嫌いな人間だから。
なんというか、色々と人として駄目な部分が多い。
わりと汚い口調が端々に出てくる。

・魔術
蓮の杖を武器に戦う。
基本的に武闘派シスターの集団なので、厳密には魔術師ではない。

・友好関係
アニェーゼ部隊の全員とは仲良し。
特にルチアとアンジェレネが大の仲良し。
優菜は彼女の中では聖母と母と姉という混合した認識。

・その他
隠密行動担当武闘派シスターの集まり「アニェーゼ部隊」のリーダー。
部隊の数は２５２人。
眠たくなると下着姿になる癖がある。つまり色気担当。

優菜の中に聖母という母を見て以来、優菜にだけ甘える癖が出来た。
幼少のせいか、まだまだ母に甘えたいざかりだったり？
両親を殺害された為に路上生活を強いられた事がある。
その時、ローマ正教に拾われたようだ。

ちなみに父親は神父だったとか。

見た目年齢が１２－４歳だが、頭の出来は当麻よりいい。
日本語も堪能で、複数の言語を喋れるようだ。

仕事の報酬を聖書の印刷代に当てている。
そして印刷された聖書を古びた教会に手渡しで配り回っている。

ルチアから「寒気を感じさせたほどの信仰心を持つ」
といわしめるほど、敬虔なローマ正教徒である。

○ルチア
・容姿
他のシスターより背が高く、やや猫目な顔つきをしている。
アニェーゼ部隊の中では巨乳でスタイルがいい。
潔癖症なのだが、修道服はミニスカ状態のを着用している。

・性格
かなりの潔癖症かつ几帳面、そして禁欲的な性格。
更に度を越した十字教至上主義者。
野菜中心の食事で必要以上の栄養摂取をしないなど、かなり禁欲的な生活。
仕事のないときでも教会の鐘楼に登って非常時に備えるほど仕事熱心。

法の書事件以降、優菜には完全に心酔している。
起床時と就寝前に彼女の写真に対して祈りを捧げるぐらいお熱状態。
故に彼女の事になるとキャラが変わる。

・魔術
聖カテリナの『車輪伝説』をモチーフにした物。
木製の車輪を爆発させて散弾銃のように鋭い破片を飛ばすという代物。
また、破片を号令一つで元の車輪に再生させる事が可能。
特定の車輪でなくても、魔術の行使は可能。

・友好関係
アニェーゼ部隊の全員とは仲良し。
アンジェレネとは姉妹みたいな関係。
リーダーのアニェーゼは尊敬している。

優菜は彼女の中で聖母で、絶対的な位置にいる存在である。

・その他
主以外を信奉しているのだが、彼女の中では何故か問題にならないらしい。
でも異教徒に触れられるのは大嫌いらしい。

法の書事件時にフラグを立ててられてた。
どこに立つ要素があったか不明だが、とにかくフラグがたったらしい。

優菜の言葉には無条件で従う。
その時、自分の意見はまるでないものになってしまうとか。
その代わり身の早さには、周りが驚くほどのレベルだったり。
スタイルがいいのでよくスカートめくりの被害にあっている。
アンジェレネを一人前のレディにしようと日夜奮闘中。

でも、中々成果は上がらない。
また優菜の事になると、アンジェレネとルチアの立ち位置が逆転する。

アニェーゼ、アンジェレネとの立ち位置は基本的にツッコミ役。
暴走しがちなアニェーゼを諫め、お子様のアンジェレネのマナーを正している。

別の意味で優菜と接触が出来ない人。
触れられると顔などの体温が上がってしまい、更には心臓がドキドキしてしまう。
抱きしめられると脳の処理が限界を超え、そのまま気絶してしまう。
その時の顔は、とても幸せそうな表情をしているとか。

○アンジェレネ
・容姿
背が低い金髪の三つ編みな髪型をしたそばかす少女。
修道服は他と違いロングスカートで、腰にベルトを巻いている。
ベルトには、硬貨の入ったソフトボール程の革袋を４つ提げている。

・性格
基本的に気弱で臆病で引っ込み思案。
見知らぬ他人と話すのは苦手という筋金入りさ。
よくルチアの後ろに隠れている。

若干どもりながら話す癖がある。

しかしアニェーゼに昔助けて貰った事をいつまでも恩義に思っている。
また芯の強さも持っており、単なる臆病なだけとは違う。
その他、仲間思いな性格をしている。

・魔術
『十二使徒マタイの伝承』を基にした、硬貨袋を触媒とする魔術を使用。
ただ、まだ修行中なので結構大雑把な術式らしい。

・友好関係
アニェーゼ部隊の全員とは仲良し。
ルチアとは姉妹みたいな関係。
リーダーのアニェーゼには恩を感じている。
優菜は彼女の中で聖母で姉という位置。

・その他
フランス人だが、両親にミラノまで連れてこられて捨てられた過去を持つ。
大の甘党で好きな飲物は激甘のチョコラータ・コン・パンナ。
そして野菜などが大嫌いという、シスターにあるまじき生活を送っている。
この件はよくルチアより「甘いものへの欲求を絶て」と怒られている。
アニェーゼ、ルチアよりは冷静に優菜の事を見ている。
といっても信奉しているのは変わらない。

優菜の事で興奮するルチアを宥めるのは彼女の役目。

スカート捲りが得意で、かなりの荒業を持っている。

登場人物【その他魔術師】

○サーシャ＝クロイツェフ

・容姿

見た目はインデックスぐらいの小柄な少女、年齢は１３歳ほど。

緩くウェーブのかかった長い金髪と月明かりを反射するかのような白い肌が特徴。

ワンピース型の下着にも似たスケスケの素材と黒いベルトで構成された拘束服。

その上から赤い外套を羽織り、リード付きの首輪をしている。

腰のベルトには金属ペンチや金槌、Ｌ字の釘抜きやらノコギリをぶら下げている。

外見からは真っ当な部類の人間には見えない格好をしている。

・性格

大人しめかつ理論的な思考をする性格。

「第一の質問ですが、～」「第一の解答ですが、～」「私見ですが、～」

等、文章の趣旨を予め説明するという形式的な独特の口調が特徴。

セクハラが大嫌いで、上司のセクハラには拷問道具で応える一面も。

また、セクハラの基準が上司という考えを持つ。

着ている衣装は大嫌いで、出来れば普通の服装をしたいと常

々思っている。

・魔術

一介の魔術師で特にこれといった特徴はない。

・友好関係

不明。上司には常に死んでほしいと思っている。

・その他

大天使の「天使の力」を全て取り込む事が出来る。
その許容量は世界でも類を見ない程の極めて稀な資質である。

「御使堕し（エンゼルフォール）」の影響を受け、精神が大天使「神の力（ガブリエル）」と入れ替わっていた。
その時にはミーシャ＝クロイツェフと名乗っていた。
ただ、「御使堕し（エンゼルフォール）」の時の記憶はない。

服装について散々な評価を貰って、上司に殺意を覚えたとか何とか。

○闇咲逢魔（やみさかおうま）

・容姿

全身を覆うような真っ黒なスーツを着用し、またネクタイも黒色。
強面でまるでマフィア関係者のような外見だが、純粋な子供の様な目をしている。
感覚を研ぎ澄ます為に平時は目を閉じている。
右腕に「梓弓（あずさゆみ）」を取り付けた仕込み籠手を装備している。

・性格

寡黙的で自分をあまり語りたがらない性格。
大切な人を助けるために、己の命を賭して魔道書の原典を手に入れようとした。
殆ど無謀といってもいい行動力がある。

多少ツンデレな性格で、大切な人の為にひたすら自分のせいにする一面も。

・魔術
梓弓を用いた風の魔術と縛縄術を得意とする。
魔術師としては日本神道系に属する。

・友好関係
不明。とりあえず大事にしている女性とは結構仲がいいようだ。
恋人？かどうかは分からない。

・その他
呪いを解くため、魔道書「抱朴子（ほうぼくし）」の知識を求めていた。
結局魔導書の毒に体が耐えきれずコピーに失敗した。
その時、全身から血を吹き出して瀕死の状態となった。
が、これは後に優菜から治療されて事無きを得た。

人生で三度の挫折を味わう。
だが、それでも大事な人の為に再起を決意するほど精神的にタフな人。

当麻の協力もあって、女性にかけられた呪いを解くことは出来た。
また、呪いをかけていた呪術師を撃破する事も成功。

本人の目的が達成された訳だが、その後女性とどうなったかは想像に任せる。

単身で学園都市に潜入するなどかなりの手練。

だが流れの魔術師だからか、魔術の腕は余り強くない。

登場人物【既に死亡している者たち】

○天井亜雄（あまいあお）

・容姿

手入れの怠ったようなボサボサな髪をしている。
色は黒で、長さは耳が隠れるほど。
研究者らしく常に白衣を着用しておりネクタイの色は赤色が多い。

・性格

人格はとても褒められたものではない。
手に染めていた実験が全てを物語るほど。
携わっていた実験は以下の二つ。
『量産型能力者計画（レディオノイズけいかく）』
『絶対能力進化計画（レベルロクシフトけいかく）』

スキルだけ見れば一流の科学者だが、それ以外は抜けている。
利権関係で責任者に噛み付いたが、さらっと説得されてしまった。
責任者いわく「研究者としては優秀だが与し易い」。

追い詰められると後先考えずに行動する事がある。
最後は血迷った挙句、外部組織と破壊工作の取引をした。
これが原因で学園都市が抹消するべき対象として暗部組織を派遣した。

・能力

大人なので能力者ではない。

・家族構成
不明。

・友好関係
不明。

・その他
木原の手で粛正された為、現在は肉片すら残っていない。
何故木原かというと『天井如き、レベル5を動かすまでもない』という判断。

実は『量産型能力者計画（レディオノイズけいかく）』中にあるモノを作り上げた。
が、何を作ってどこに何を残したかは天井しか知らない。
記録も抹消済なので、誰もその遺産については分からない。
何故記録を消したかというと、単に天井が後で有効活用しようと考えたから。
だからそれまで秘密にし、研究成果を誰にも見せないようにした。

○アウレオルス＝イザード
・容姿
緑に染めたオールバックに白いスーツを着た長身の男。
年齢は１８歳だが、落ち着いた雰囲気が彼をそれ以上の年齢に見えさせてしまう。
良くも悪くも神裂と同じ外見と年齢が一致しないタイプ。

・性格
寡黙だが不幸な人々を救う事を心よりを願う心優しい人物。
「隠秘記録官」になったのも魔女の驚異から人々を救う為だった。

一途な部分があり、インデックスの為に世界を敵に回す覚悟を決めたぐらい。
ただ全体的に小物臭っぽい言動がある。

・魔術
魔法名は『我が名誉は世界のために（Ｈｏｎｏｓ６２８）』。
錬金術を用いて『黄金練成（アルス・マグナ）』という魔術を使えた。
この魔術はアウレオルス以外、未だ使うことは出来ない。

『黄金練成（アルス・マグナ）』とはこの世界の全て物質を呪文として唱える事で発動する
錬金術の到達地点とされる魔術である。
この世界の全てをシミュレーションする事で神や悪魔を含めた世界の全てを自分の思った通りに使役し、歪めるという効果を持つ。

つまり何でも思った通りになる魔術の中でもチート中のチート。

フィアンマの「聖なる右」と同レベルのインチキ性能を持っている。

しかしフィアンマの「聖なる右」と違い大きな欠点がある。
自分が不安に思った事等のマイナス要素までそのまま実現してしまう。
相手に対して「コイツ無理」とか思った時点で自滅確定。
心の奥底のどこかで少しでも「無理だ」と思っている事は実行出来ない。
つまり使用者の精神面にかなり影響される魔術でもある。

・友好関係
全世界を敵に回したのでゼロ。

・その他
パラケルススの末裔たるチューリッヒ学派の錬金術師。
インデックスの為に世界を敵に回した重症レベルのロリコン。
（出会った当時、インデックスは１２歳程だから）

元ローマ正教の『隠秘記録官』。
そして隠秘記録官中最速筆だったとか。
不眠不休で書けば薄い物なら三日、分厚くても一ヶ月で書き上げられた。

魔女の脅威から人々を救うために「隠秘記録官」となったはず。
なのに世界最悪の魔女と恐れられているアクゼリュスと取引しようを考えた。
何とも皮肉な話である。

アクゼリュスは無限の生命力と無限の記憶を保つ術を持っていると考えた。
その術を使ってアウレオルスはインデックスを救おうと考えた。

上記の理由でアクゼリュスに接触した。
彼女を『完全なる知性主義（グノーシズム）の完成型』と見なしたから。
つまり『人でありながら神の肉体を手に入れ神の業を自在に操っている』
と見なした。

ただ、アクゼリュスはそんな術など使ってはいなかった。
更に『黄金練成（アルス・マグナ）』すら効かない謎の化物だった。
（『黄金練成（アルス・マグナ）』は神や悪魔すら思った通りに使役する事が可能）

結局最後は『狂炎乱舞の舞踏会』という魔術でじわじわとなぶり殺しにされた。
これは、コルネリウス家始祖がよく使っていた拷問魔術の一つである。
効果は６％の皮膚を焼き、２％の皮膚を再生させる。単にその繰り返し。
皮膚がある程度焼けると今度は肉が焼かれていく悪辣非道な魔術である。

ちなみにアクゼリュスは、単なる小物にチョッカイだされて不愉快だったらしい。
だから問答無用でアウレオルスをこき下ろした後、なぶり殺しにした訳である。

○ゲハイムニス
・容姿
コルネリウス家にある始祖の石像から推測すると。
長い金髪を左右に結っており、その長さは結った状態で足元に届くほど。
身長は１６０ｃｍほど、体重は不明。スリーサイズは９５・５９・８７だと思われる。
ただその石像を見て、アクゼリュスが大笑いするので誇張が入っているかも。

・性格

コルネリウス家に保管されている歴史書から推測するに相当イカれた性格。
アクゼリュスから「人格破綻者」と評されていた。
それほどまでに、常軌を逸した人間性を持っていたとの事。

現代風にいうと以下のような感じらしい。
ヤンデレと狂戦士状態と破壊衝動の権化を練り混ぜて濃縮した感じ。

生涯ただ一人を愛した一途な人。
といえば聞こえはいいが、愛する人の為にした行動が破天荒すぎた。
その人の為に国に単身喧嘩を売ったり、魔術結社を滅ぼし尽くしたりと。
破天荒というかキチガイじみた行為を平気でしていた。

愛する人以外には滅茶苦茶厳しく、一切の慈悲を見せなかった。
彼の為なら女子供、老人を笑顔で大量虐殺するヤンデレっぷりを発揮した。

笑顔で子供の頭を踏み潰せるネジの飛びきった状態が平時の精神状態。
戦闘になると更に悪化してしまうから、当時は悪名を轟かせていただろう。

口癖は「焼き殺すよ?」だったとか。
(その後本当に炎の魔術で焼き殺していたとか何とか)

ただ、愛する人には滅茶苦茶甘くそして甘えまくっていた。

・魔術
破壊に特化しており、その威力は桁外れな威力を誇っていた。
底なしの魔力を誇っており、それを単純な破壊に変換する魔術が得意。
ちなみに、この魔術は未だ彼女以外使えた試しはない。
使い方も術式の組み方も滅茶苦茶で、どうやって制御出来ていたのか不明。
そもそも始祖の精神状態すら、誰もが理解できていないのだが。

四属性の魔術も使えたが、中でも得意なのは『炎』と『風』の二属性。
理由は焼き殺しが出来て便利だから、という狂った考えからきている。

・友好関係
ゼロ。

・その他
コルネリウス家始祖。Ｇｅｈｅｉｍｎｉｓとはドイツ語で「秘密」を意味する。
フルネームはゲハイムニス・フォン・コルネリウス。
ドイツ語で「Ｇｅｈｅｉｍｎｉｓ　ｖｏｎ　Ｃｏｒｎｅｌｉｕｓ」と書く。
だがこの名前もコルネリウス家を作り上げた後に名乗った名前。
その為、別の名前があった可能性もある。
（最も彼女はその名前を捨てたようだから真相は闇の中だが）

凶暴な化物扱いを受けていたが、本人は気にも留めていたなかった。

アクゼリュスと知り合った経由は不明。

ただ、契約を結ぶ程の関係はあったようだ。

といってもアクゼリュス曰く、契約を結んだのは気紛れらしいが。

愛する人の子供を八人産んだ。

うち一人が契約を結んだアクゼリュスと外見がそっくりだった。

その為、その者を支配者という当主に割り当て、残りを補佐役に割り当てた。

現代のコルネリウス家が、管理者を必ず七人にするのはここからきている。

年を取って落ち着くかと思いきや、逆に酷くなる一方だった。

彼女が死んだ時、コルネリウス家の人間ですらホッと胸を撫で下ろしたとか。

つまりそれほど手がつけられない生涯じゃじゃ馬娘だった。

家庭設定

○上条家

当麻と六姉妹の七人家族。

沈利たちは全員刀夜が孤児院から引き取った為に血のつながりはない。

優菜は従姉妹にあたり、僅かながら血の繋がりがある。

フレンダとフレメアのみ、互いに血の繋がりがある。

基本的に皆仲良しだが、当麻の事に関してだけは誰も引こうとしない。

但し、優菜のみ当麻への愛情は家族愛に固定されている。

フレメアを除く姉妹は能力者であり、暗部組織『アイテム』に所属している。

優菜は暗部組織『スクール』に所属している。

この辺りが問題で、優菜のみ当麻と一緒に住んでいない。

家計については、基本的に沈利が全責任を負っている。

電話では基本的に「上条」で統一されている。

家族構成は以下のとおり。

長女：沈利
次女：理后
三女：優菜
長男：当麻
四女：フレンダ
五女：最愛
末っ子：フレメア

学校については、フレンダ以外は何かしら所属している。
しかし、殆どは好き勝手な通学状態である。
在籍についてはは以下のとおり。
沈利：当麻と同じ学校
理后：霧ヶ丘女学院（但し休学中）
優菜：当麻と同じ学校
当麻：とある高校
フレンダ：所属なし
最愛：常盤台中学校
フレメア：とある小学校

理后が霧ヶ丘女学院に所属する理由はその能力ゆえ。
最愛が常盤台中学に所属する理由は、共用地帯『学舎の園』への侵入経路確保。
これはなるべく『裏』の手口で入るのを極力避ける為。
何故なら、裏の方法で動くとイチイチ首を突っ込んでくる奴が一人いるから。

○月詠家
全員が全て血の繋がりがない家族。
月詠小萌、一方通行、インデックス、打ち止め、アリシアの五人家族。
通称『ロリハウス』。
家長は小萌、家計は殆どが一方通行のポケットマネーから出てる。

二年前に一方通行を小萌が拾った時から始まった。
インデックス、打ち止めは一方通行が、アリシアは小萌が連れてきた。

最も、アリシアは殆ど帰っていない。
大体は敬愛する優菜の家に入り浸りであったり。
しかし外泊時はきちんと連絡を取っている。
電話は基本的に「月詠」で統一されている。

学校については、一方通行とアリシアが小萌の学校に通っているのみ。
インデックスは基本的に学校へ通う必要はない。
打ち止めも、その生い立ちからおいそれと学校に通わせられない。

料理や掃除などは基本的に一方通行が担当。
稀に小萌が料理を担当するが、基本的には一方通行が一任している。

組織設定【暗部組織】

○全体の概要

暗部組織とは、学園都市の『闇』に位置する組織の名称。

その存在は公にされておらず、一般人は噂レベルでしか知らない。

学園都市の裏組織なので当然ながら非合法な事も行う。

中には学園都市統括理事会の直属組織もある。

だが、基本的には依頼を電話してくる「電話相手」が直属の上司になる。

以下の組織が存在している。

『グループ』

『スクール』

『アイテム』

『メンバー』

『ブロック』

『猟犬部隊』

○暗部組織『グループ』

・概要

暗部組織の一つ。学園都市最強の一方通行が所属する組織。

学園都市の組織だが魔術師が二人も所属している。

また全員が年下好きという性質を持っている。

（小萌のみ年上だが、見た目は十二歳程度なので）

結束力も高く、メンバーの誰かが危機に瀕したら迷わず助けに向かうほど。

表の顔の時もつるんでいる事が多い。

・リーダー

土御門　元春

・構成員
一方通行
海原光貴（エツァリ）
結標淡希

・上司
男性の電話相手。基本的に冷徹な口調で話す。
時々アレイスターが直接土御門に仕事を斡旋する場合がある。

・主な業務
学園都市にいるクズの始末。また、学園都市にテロ行為を行う組織の抹消。
基本的に学園都市に歯向かう連中のゴミ掃除係。

・その他
バックアップする下部組織が多数存在する。
その数は、現在確認されている暗部の中で一番多い。
故に備品の開発・整備、人員の輸送、証拠隠滅等をこなす人員が膨大にいる。
活動資金は一学区分のアンチスキルの予算を得ている。
それをフルに使い装備を開発しているらしい。

○暗部組織『スクール』
・概要
暗部組織の一つ、全員が能力者で構成されている。
レベル５が二人所属している事が特徴。

・リーダー

垣根帝督

・構成員
心理定規
上条優菜

・上司
男性の電話相手。上司だが基本的にビビリ性格なのかオドオドしながら話す。
心理定規曰く「オドオド君」。過去の垣根に対するイメージが拭えず怖いらしい。
マネージメント能力がないのか、偶に手遅れ直前な状態の仕事を持ってくる。

・主な業務
学園都市の問題児を暗殺。また、外部に繋がるスパイの処分。
主業務は暗殺だが、その他の業務も行うことは可能。

・その他
リーダーの垣根は心理定規と優菜から尻に敷かれている状態。はっきり言うと立場が完全に逆転している。

優菜は書類上に存在するだけで、殆どの仕事に携わっていない。

基本的にアレイスターから直接仕事を斡旋されている。

グループほどではないが、下部組織も活動資金も豊富にある。
但し、グループのような技術部は存在しない。
基本的に人員の輸送と証拠隠滅をこなす組織しかない。

○暗部組織『アイテム』

・概要

暗部組織の一つ、全員が上条一家で構成されている点が特徴。
団結力と互いの意思疎通能力が他の組織と桁違いに高い。

・リーダー

麦野沈利

・構成員

滝壺理后
フレンダ＝セイヴェルン
絹旗最愛
おまけで浜面仕上

・上司

女性の電話相手。沈利曰く「キンキン五月蝿い女」との事。
口ぶりが凄くハイテンションで喋る。口癖が「こいつと来たら」。

・主な業務

学園都市総括理事会を含む上層部や、暗部組織などの極秘集団の暴走の阻止。
また、外部機関と連携する組織の監視も行なっている。
必要になれば、スパイ組織の壊滅も担当する。
『スクール』と一部かぶるが、対処の系統が違うようだ。

・その他

バックアップをする下部組織はそれなりに存在するが、ほとんどが証拠隠滅担当。
人員もそこそこレベルでしか持っていない。

活動資金はそれなりにあるが、『グループ』や『スクール』ほど潤沢にはない。
言ってしまえば、レベル5が存在する暗部組織の中で一番活動資金が少ない。

人員の消耗が激しい事で有名で、下部組織に所属イコール死という噂がある。

浜面は下部組織だが、基本的に沈利たちの輸送担当。
それ以外はドリンクバーの往復。

○暗部組織『メンバー』
・概要
暗部組織の一つ。科学兵器を利用する事が多い組織。
また、アレイスターの直轄部隊。

・リーダー
博士

・構成員
馬場芳郎
セーラ服(ショチトル)の女
査楽

・上司
アレイスター・クロウリー

・主な業務
基本的にアレイスターの命令なら何でも行う。
組織としての活動方針は不明。

だが反乱分子鎮圧も行うことがある。

・その他
個人個人の目的があり、構成員の繋がりは限りなく薄い。
下部組織はなく、電話相手もいない組織。
活動資金はアレイスターの直轄部隊のためか結構な資金を持っている。

○暗部組織『ブロック』
・概要
暗部組織の一つ。
技術関係の監視のためか科学技術に対しての知識が高い組織。

・リーダー
佐久辰彦

・構成員
手塩恵未
山手
鉄網

・上司
男性の電話相手。無骨な大男のような声で喋る。
少しだけ軽い雰囲気を感じさせる男。

・主な業務
学園都市にある技術関係の監視、情報漏洩に対しての措置をとる事など。
学園都市の外部協力機関との連携を監視・対応する事が主任務。

・その他
手塩恵未は『警備員』に所属している。
情報関係を扱うせいか、戦闘能力を持つ人材が少ない。
確認されている暗部組織の中では最弱の組織。
でも『グループ』と同等の機密と権限を有している。

○暗部組織『猟犬部隊』
・概要
暗部組織の一つ。アレイスターの直轄部隊。
男女問わず、軽蔑に値するクズばかりを集めた部隊として有名。
・リーダー
木原数多
・構成員
他の組織とは違い、固定メンバーはいない。
・上司
アレイスター・クロウリー
・主な業務
基本的にアレイスターの命令に従って動く。
部隊名の通りアレイスターの『犬』のような組織。
・その他
基本的に重武装でさっさと殺す事が得意。
が、逆にそれ以外なれていないので、想定外の状況に弱い。

部隊のコードネームは一般的な英名で統一されている。
しかし、その英名には特に意味はない。

木原が容赦なしに殺すせいか、固定メンバーがいない状態。
なので、各個人が持つ戦闘能力はかなり低い。

組織設定【聖カトリーヌ女学院】

○概要

明治時代から続く超お嬢様学校。世界でもトップクラスの教育現場として有名。

なので日本は問わず海外からも入学を希望する生徒がいる。

中には王族の娘や多国籍企業の会長の令嬢が在籍していたりする。

とはいえ、それだけではなく一般家庭に生まれた生徒も在籍している。

○外見

１８，９世紀の高級レンガ造りの建築物をモチーフにしている。

パッと見は少しだけ古臭い西洋のお城みたいな感じ。

なので沈利が言った「すげぇでかい門」というのが校門にある。

○特徴

入学するのは簡単だが、卒業するのが鬼のように難しい事で有名。

途中入学も可能だが、この場合は厳しいテストに合格する必要がある。

設備が他の学校とは桁違いに良い。

例としてプールを上げよう。学校が所持するプールは一つだけではない。

プールのサイズも、日本大会設定、世界大会設定、オリンピック設定がある。

それが屋内と屋外に両方用意されている。

このように、プール一つとっても環境が全く違う。

但し良い設備だけではなく、悪い設備も同様に用意している。
この理由が「設備の違いだけで結果がどの様に変わるかを理解させる為」らしい。

学校の一部（トイレや更衣室）を除き、全ての場所に監視カメラが存在する。
これは生徒の安全の為と同時に、風紀を乱していないか監視する為。

基本的に学校が「評判を落とすような生徒は不要」というスタンス。
なので留年などの考えは基本的にない。
成績を含む総合結果が悪ければ容赦なしに退学処分となる。
勿論、風紀を多大に乱したり、目に余る事件を起こした場合も同様の処分となる。
処分は平等で、例え王族の娘でも退学処分をしっかり叩きつける。

○教育理念
『どこに出しても恥ずかしくない淑女を送り出す』
その理念通り、あらゆる場所に送られても対応出来る人材教育を行なっている。

○教育システム
お嬢様としての礼儀作法は勿論、歩き方などの必要なスキルを教えている。
日本にあるので義務教育は教えているが初等部で完了させている。

更に特殊な教育システムが聖カトリーヌ女学院にはある。

中等部からは徹底して合理化された教育を行なっている事。
更に生徒が学習する科目を選択できるという事。
幅広い学科が存在し、その中から選ぶというシステム。
なお、学科は担当する教師が『卒業』を認定したら他の学科に移動しても良い。
掛け持ちする事も可能で、人によっては複数の学科で学んでいる事もある。

またお嬢様には似つかわしくないと思われがちな武術方面も教育している。
日本の武術は勿論、海外の武術も幅広く取り入れている。

心理学や話術などの交渉術も教えている。

言語関係も教えており、英語とラテン語が標準となっている。
一部の広告紙には英語だけ、もしくはラテン語だけで書かれているモノもある。

この様に単なるお嬢様学校とは一線を画す教育を行なっている。
拉致などの荒事に対応する能力を身につける、という教育がなされるのがいい例。

○在籍年数
初等部六年、中等部三年、高等部三年が基本在籍年数。
尚、優秀であれば途中をすっ飛ばせる飛び級システムが存在する。
但し申告制なので、優秀でもそのまま規定年数まで在籍する場合もある。

○イベント

五月に『マリス・ステラ』予備選がある。
六月に『マリス・ステラ』選別選がある。ここで『マリス・ステラ』が決まる。
九月に合同体育祭というイベントがある。
十月に学術イベントがある。これは、担当する学科の発表会みたいなもの。
十二月にクリスマスパーティーがある。
二月に七日間続く『大文化祭』というイベントがある。

娯楽が少ないせいかイベント事が多い。

○規則
一度入学すると、学園都市同様安易な外出は許されない。
外出とは聖カトリーヌ女学院がある街を出ていく事。
勿論、街を歩く事については基本的に問題なし。

もし外出する場合は分厚い規則書の黙読と数枚の書類にサインが必要。
ようするに、面倒この上ない方法を取らないと出られない。

一部の例外を除き寮生活を義務としている。
また、外（親など）からの援助は公平さを出すために禁止。
女学院内部に親の影響力を持ち込む事を阻止する為でもある。

○マネーシステム
上記のように金銭面の持ち込みが禁止されている。
なので、聖カトリーヌ女学院には独自の決済システムを導入している。
簡単に言えば電子マネー決済である。

まず基本として年齢にあった一ヶ月分の給付金が渡される。
これは王族の娘だろうが一般家庭の娘だろうが金額に差はない。

ついでに言うとおかわり（前借り）は禁止。
他人への借用も基本的に禁止。学校が許可した場合のみ他人へ借用可能。

給付金を増やす方法は以下の二つ。
一つ、学校が行うテストにて秀でた成績をおさめた場合。
二つ、学んでいる学科で聖カトリーヌ女学院にメリットを享受させた場合。
（例えば世に認められるような功績を生んだとか、新たな学説を作ったとか）

なお、支出に関しては『財務部』による徹底した監視が行われる。
もし不正と見咎められた場合は理由を問わず退学処分となる。

○クラス構成
入学する生徒の数によるが、基本的には三クラスが標準。
クラス名は『月組』か『光組』のどちらかが使われる。
後は各学年のトップクラスだけを固めたクラスを『聖組』と呼ぶ。
尚トップとは成績だけではなく、総合結果によるトップクラスである。

○組織
聖カトリーヌ女学院には三つの組織（役職とも言う）が存在する。

生徒から代表が選ばれ学校の運営を担当する『生徒会』
部活・生徒会から一般生徒まで全ての財務関係を一手に担当する『財務部』
全ての生徒の風紀や揉め事の取り締まりを担当する『風紀委員』

基本的には三組織が聖カトリーヌ女学院を運営している。
なお、生徒会のみ教師から選ばれた人員が五名ほど入っている。

その他では学校の総合管轄を行う『総理事会』が存在する。
なお『総理事会』は対外関係を主な業務とする。
なので女学院内部には、基本的にノータッチ。

○称号
聖カトリーヌ女学院に存在する称号は以下のとおり。

聖カトリーヌ女学院最上位の生徒に付けられる『マリス・ステラ』。
全生徒の八割近い支持があって初めて手に入れられる称号。
選ばれる理由は大体が「私はこの人のようになりたい」という目標意識。
つまり例外を除けば支持する人は大体が憧れからくるもの。

姉妹の契りを交わした人に与えられる『ソロル』。
なお姉の方を『マグヌス・ソロル』、妹を『ミヌートゥス・ソロル』と呼ぶ。
だが、大体は短縮して『ソロル』と呼ぶのが恒例。

○女子寮
聖カトリーヌ女学院に通う生徒や教師が住む寮。
寮は全部で五つある。

教師用に一つ、初等部、中等部、高等部にそれぞれ一つある。
残り一つは予備寮であり、基本的に使用されていない。
生徒用の寮全てに『マリス・ステラ』用の部屋が存在してる。

各寮には寮長と副寮長の二名がいる。
基本的には二人が寮の運営の全てを行なっている。
生徒の方は大体が『風紀委員』のメンバーから選ばれている。
といっても規則ではないので、他の人間が担当しても何ら問題ない。
教師の方はかなり大雑把で、大体は新米教師に押し付ける事が多い。

○宗教
ローマ正教から公認を受けており、その関係から教会が存在している。
とはいえ、正式な神父がいないので洗礼などは行なっていない。
本格的な人間から見れば、かなりお粗末な状態だとか何とか。
状況を聞いたインデックスからは「よく公認が貰えたね」レベルだとか。

○聖カトリーヌ女学院がある街
聖カトリーヌ女学院が存在する街は、基本的な店が出揃っている。
中にはアミューズメント施設も存在している。
何故あるかというと、娯楽の少ない事による鬱憤を回避する為の措置。

但し対象が聖カトリーヌ女学院の生徒だけなので、店が閉まるのは早い。
また、開いている時間も短いが、何故か店は潰れる事がないと

か。

○街全体のサイズ

学園都市の第七学区と同等の広さ。

○街の警備体制

専用の警備会社と契約、及び街の周りに多数のトラップがある。

流石に学園都市のように衛星監視はないが……。

○その他

優菜とアリシアは途中入学。

静華とまりなは初等部から在籍している。

『マリス・ステラ』時代の優菜は絶大な影響力があった。

生徒だけでなく、教師の中にも彼女を信奉する人物がいた為である。

『生徒会』が運営に使う予算は小国の国家予算並。

また、女学院に寄付される金額も桁違い。

教育費が莫大な費用の為、奨学金制度が存在している。

学園都市同様、生活必需品は安く娯楽品は他より高い。

組織設定【その他】

○派遣屋

・概要

様々なサービスを取り扱う店舗。
幅広く取り扱うために店舗名がない。
一応『人材派遣サービスセンター』という偽の企業名を持っている。
利用者からは『派遣屋』という名称で呼ばれている。

・場所

本拠地は第七学区のオフィスビルの一角。
また支店は第四、第十、第十八、第二十三の四学区に存在する。

・特徴

単なるオフィスビルの一角で店を構えているから通常の人は気づかない。
宣伝も行なっていない為、『派遣屋』から店を連想できる人間はいない。

最大の特徴は「顧客（会員）情報の秘守義務能力」であろう。
『派遣屋』が持つ会員情報はおいそれと見る事は出来ない。
学園都市にある警察機構の『風紀委員』はほとんど門前払いを食らう。
『警備員』でも学園都市統括理事会のサインがなければ閲覧をさせない。
無理に閲覧すれば、『派遣屋』はあらゆる手段を使って顧客情報を守る。

このあらゆる手段は表手段、裏手段問わず行なってくる。
場合によっては『風紀委員』の友人関係から攻め始める事もある。
『警備員』でも『派遣屋』は一切手段を選ばない。
このように会員情報に対して異常とも取れる秘匿性を保っている。
その信頼と実績があるからこそ、会員は『派遣屋』を利用する。
なお、統括理事会が許可した場合は会員情報の閲覧は可能。
しかしこの時でも対象の会員情報以外の閲覧は許していない。

・会員数
正確な人数は不明だがおよそ数百人程度は存在していると思われる。
生徒は殆どが裏に関わりを持つ高レベル能力者。
大人はそれなりの権力を持つ人間。
またその子供たちも会員になる場合がある。

・会員に対するサービス
ＶＩＰ会員十名のみ専用に近い個室が割り当てられている。
この個室は、耐衝撃など通常兵器に対する防御を施している。
部屋の数は全部で五十個ある。
なお部屋が存在するのは本店の第七学区のみである。
その他ＶＩＰ会員には専属のスタッフが割り当てられる。
これは一般会員にはつかないサービスである。

一般会員でもスタッフのレンタル、部屋の借用は可能。
ただしスタッフは一度に一種類の人材しか借りる事が出来ない。

・会員が支払う費用
会員になる時に八桁クラスの入会費を支払う。
また、三ヶ月ごとに利用率に応じた金額を請求される。
（つまり利用が少なければ少ない金額で会員を維持することが可能）

なお、ＶＩＰクラスの人間は基本的に入会費のみである。
これは会員から得られる利益が莫大な為である。

例えば会員が関係する研究施設への優先的な派遣などがあげられる。
また、仕事によって得られる報酬も基本的に高い。
その為にＶＩＰ会員からは利用料金を基本的に請求する事はない。

・『派遣屋』が抱えるスタッフ
言ってしまえば『何でも取り揃える』がモットーなので種類は豊富。
優秀な遺伝子科学者から保父、果ては詐欺師やペテン師も抱えている。
学園都市には必要とされないであろう宗教関係者も存在している。
テロリスト教育官までいるから驚きである。

・非会員について
基本的に入店自体をお断りしている。

ただ、会員の責任の下でなら非会員でも入店は可能。
といっても出来るのは本当に『入店のみ』である。

・その他
優菜は『派遣屋』から五番目のＶＩＰ会員に設定されている。
会員になるのはお偉いさんの子供や、色々と曰くつきの高能力者ばかり。
理由は秘密基地のようになっているから。
学園都市にあるので、当然ながら対能力者の装備も整えている。
能力開発の研究者も抱えているので、能力者に対する知識も豊富である。
組織として世渡りがうまいので、今まで問題が起きたことはない。
一応高級人材派遣会社なので、スタッフの給料はアホみたいに高い。
ただ、この中に「口を割るなよ？」という金額も含まれている。
後スタッフにはプライバシーがない、常時監視されている状態である。

武具・小道具

○未元物質武具　【折りたたみ式長棒】
未元物質と他の素粒子を混ぜて作り上げた武具。
強度を重要視して作られている。
棒術用のため直径三センチ、長さ六尺（約１８０ｃｍ）が基本。
ただし、部品を増やせば長さの調節は可能。
両端のみ特殊な加工がされた部品を使用する必要がある。

折りたたみ式は接合部が弱くなる欠点が存在する。
しかし、未元物質により接合すると特殊な接着が行われる。
これが力の負荷を減らし、接合部からの破損を防いでる。

両端の部分にのみルービックキューブのようなギミックがある。
このギミックは特殊な仕掛けで、かつ面倒な方式である。
壮絶な数の組みわせがあり、正解に辿り着くまで正解かわからない。
常人には法則すら掴むのは不可能。

正解に辿り着くと、後述にあるナイフの接合が可能。
また、接合可能な武具なら他も組み合わせられる。
（１ｍほどにして球体をくっつけてモーニングスターなども可）

優菜はこの棒を使って『雷閃』を打ち出している。

○未元物質武具【大型ナイフ】
未元物質と他の素粒子を混ぜて作り上げた武具。
鋭利さを重要視して作られている。

本来は両立しない刃物の強度と練度が両立している。
また、見た目に反して軽量。
刃渡りは４２０ミリ、全長は５００ミリという大型。

金属質に見えるが金属ではない。
よってどの空港の金属探知機にも引っかからない。
通常は専用のアタッシュケースに入れて運んでいる。

熱・寒さ・サビ・刃こぼれに無縁。
ノーメンテナンスで十年以上の運用が可能。
でもメンテナンス時に未元物質が必要とされる。

○未元物質武具【アタッシュケース】
未元物質と他の素粒子を混ぜて作り上げた武具。
頑丈さを重要視して作られている。

見た目はゴツイアルミケースのカバン。
銀行で使われるジュラルミンケースにも見える。

折りたたみ式長棒、大型ナイフ二刀、小型端末。
少額の現金、着替え、その他色々な工作キットが入っている。
相当な重量があるが、優菜は鍛錬変わりに持ち歩いている。

見た目通り軽い銃弾なら傷ひとつつけられない。
バズーカーすら耐え切るという意味不明な性能を持つ。
但し一方通行のベクトルパンチには負ける。

○小型端末
アレイスターから支給された優菜専用のアクセス端末。
見た目はスマートフォンのような携帯電話。

学園都市にある全ての端末にアクセスする事が可能。
この端末からの接続を拒否する事は不可能。

全てとは文字通り全て。
流石に特定（アレイスターが持つ情報）とかは無理。
それでも警備員や風紀委員の端末にアクセスは可能。

初春が構築するネットワークも普通に侵入可能。
（外部からの不正アクセス行為ではないので）
なので第一七七支部の情報も閲覧可能。

監視カメラや監視衛星の情報もリアルタイムで取得可。

殆どアレイスター並の権限を有する。
なので使用時は統括理事会が許可した時と同等の扱い。

故に拒否をした場合は、問答無用で犯罪者扱い。
風紀委員なら一年の活動停止、及び一ヶ月の支部閉鎖。
警備員なら三年の活動停止という判決が下る。
（名目上は統括理事会への反逆罪）

端末の強制停止権はアレイスターが保持。
名目上統括理事会も持っているが、殆ど意味なし。

垣根の独白

暗部組織『スクール』のアジトの一つ、第七学区にあるオフィスビルに三人は集まっていた。
リーダーの垣根帝督、構成員の上条優菜に心理定規。
勿論、呼び出したのはリーダーの垣根だ。
二人はそれに応じてアジトに着たが、そこで見た垣根を見て困惑した。

いつものおちゃらけた表情の垣根ではない。
かといって暗部の時にしている表情の垣根でもない。
どこか悲壮感が漂っているような、何かしら思いつめたような表情をしていた。

二人は困惑しながらもいつもの席に座る。
垣根は二人が座ったと同時に、ぽつりと言葉を呟いた。

「……さて、どこから話せばいいのかな」

そう言った垣根の顔はどこか遠くを見るような表情をしていた。
彼の足元には二つの花束。
だがその花束は誰かにプレゼントするような代物ではなかった。
どちらかといえば、そう墓参りに使うような花束だった。

「どこから……と言われましても私には判断できないです」

「……どうしたの？」

二人の言葉を聞いていないのか、垣根は遠くを見る表情のまま目を

閉じた。
何か考えているようにも見え、二人は垣根が口を開くまで待つことにした。

「……俺はこの組織が好きだ」

しばらく目を閉じていた垣根だが、やがてぽつりと言葉を紡いだ。
二人に聞かせるというより、自分に言い聞かせている感じがする言葉だった。

「正確にはお前たち二人が好きだ。だからよぉ……失いたくないんだよ、もう二度と」

「……」

「この想いは黙っているつもりだった。だけど、それじゃあ駄目だ。お前たちを信じていないって思ったんだ」

目を見開いた垣根は、優菜と心理定規を見ながら言葉を発する。

「少しばかり長い話になるが付き合ってくれ」

自分の想いを言葉に乗せて、相手に届くよう願いながら。

「まずは昔話から始めるか。そうだな……あれは――」

――――　今より七年近く前の学園都市

その少年は少しだけ目立つ風貌だった。
小学生なのに甘いマスクをしており、ほとんどホスト予備生にしか見えなかった。
子供の割に鍛えられている雰囲気が漂う体躯だったが、肉のつき方はスマートであった。

彼の名前は垣根帝督、後の学園都市レベル5第二位になる人物の幼少の姿だった。

最もこの時は大能力者であったが。
そしてそんな彼の周りには常に三人の仲間がいた。
垣根と少年、そして少女二人の四人。
それが幼い頃の垣根にとって世界の全てだった。

「よっし、垣根。次の場所までジャンケンだ！　負けた方が荷物持ちだぜ」

垣根の隣を歩くやんちゃそうな表情をする少年が言葉を発した。
スポーツ刈りの黒髪に、どこかガキ大将を思わせる雰囲気が特徴に見える。
服装も動きやすい格好をしており、所々泥がついていた。

「甘い、甘いぞぉ。この俺に勝てると思っているのか！　影花(えいか)ちゃんよぉー」

「名前で呼ぶんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

影花(えいか)、と呼ばれた少年は垣根の言葉に激怒して大声を上げる。

しかし垣根はどこか楽しそうな表情をして笑うだけであった。
その様子から、影花の言葉を聞く気は毛頭ないらしい。

「俺の親もどうかと思ったが、お前の親は更に輪をかけて酷いな」

「うるせぇ！　俺を捨てた親なんざ知るか。でも出会ったら名前の事で絶対殴る！」

「男なのに女みたいな名前を付けられたもんねー」

影花と垣根が馬鹿をやっていると、垣根の背後から少女が顔を出しながら言った。

「その点紅音（あかね）の方はいいだろう！？　兄妹なのにこの差は何！？」

「多分だけど両親は娘が欲しかったんじゃなーい？」

ケラケラと笑うと、少女が左側で結っている髪が一緒に揺れる。
少女は茶色っぽい髪を腰まで伸ばしており、一房を左の側頭部辺りで結っていた。
スポーティな服装をしており、どちらかと言えば少年の中に混じって遊ぶ少女に見えた。

「つまり両親はお前を女の子にするつもりだったんだよ！」

「な、なんだってー！」

垣根の言葉に紅音（あかね）は心底驚いた表情をしながら後ずさる。
しかし口元は笑っており、明らかに垣根のノリに乗っているだけとわかる表情をしていた。

「ムカついたぞ、垣根」

「ふふん、怒るという事は事実をつかれたという証明になるぞ？」

「よっし、分かった。この俺の能力でテメェを叩き潰す！」

「はっはー、この俺の能力に常識は通用しねぇ！」

道の真中で周りの迷惑も考えずに少年二人は取っ組み合いをしはじめる。

ただ、通行人の殆どは微笑ましい光景だと思って眺めていたが。

「二人とも喧嘩しないー」

「止めるな心理定規、男には戦わないといけない時があるんだ！」

心理定規と呼ばれた少女が頬を膨らませながら二人に抗議を上げる。

だが、垣根は小さく笑うと親指を立てながら言葉を発した。

つまり辞める気はないらしい。

「無駄無駄ァ！　お前の能力は全て見切ったわぁ！」

「異物の混じった世界、ここはテメェの知ってる世界じゃないゼェ！？」

「今日こそテメェをぶっ飛ばす！」

「上等！　かかってこいやぁ！？」

まるで昭和のノリに見える二人は、口では能力と云いながら実際は単に殴り合いをしていただけだった。
紅音と心理定規は二人のアホさ加減に、手を額に当てながら盛大に溜息をついた。

「帝督は全てにおいて常識がないよね？」

「疑っちゃダメよ、ここちゃん。あのバカ二人は常識がまるで無いのだからね」

「おとちゃんはお兄さんには特に冷たいよねー」

「馬鹿を馬鹿といって何が悪いの？　あれで大能力者なんだから世も末よねぇー」

喧嘩（おおばかふたり）してる二人を放置して紅音と心理定規は歩き出す。
当然ながら二人は互いしか見えていないので、二人が歩き出している事に気付いていなかった。

「オラオラァ！　俺のパンチを喰らいやがれぇ！」

「無駄無駄ぁ！　テメェのメルヘン攻撃げふぅ！」

パンチすると思ってガードをした影花だが、実際垣根は蹴りをしてきたのだ。
ガードしていないので当然ながらモロに蹴りを食らってしまった。

「てめえええ、男の癖に卑怯だぞ！」

「騙されるのが悪いんだよ！？」

「くそ……あ！　あんな所に巨乳のお姉さんが！？」

「なにぃ！　どこだがはぁ！」

影花の言葉に反応した垣根が思わず辺りを見渡す。
だが、その隙に影花は垣根を後ろから殴り倒した。

「いってぇ！　テメェこそ卑怯じゃねぇか！？」

「騙されるのが悪いって言ったのは垣根だぜ！」

「ぶっ飛ばす！」

もはや喧嘩の理由すら忘れている彼らは、道の真ん中で懲りずにファイトを続ける。
その付近には、紅音と心理定規がいない事も気付かず。

「これで止めだぁ！」

垣根が叫び声と同時に右ストレートを繰り出す。
それに呼応するかのように、影花もまたストレートパンチを打ち出した。

ゴキャッと骨がぶつかる音がする。

奇しくもどちらの拳も相手の顔を打ち抜いていた。
二人は互いを見てニヤリと笑った後、同時にその場へ崩れ落ちた。

「へへ……やるな垣根」

「テメェこそな……」

互いが互いを褒め称える言葉を口にする。
それがこの喧嘩の終わりを告げる合図となった。

「馬鹿……」

遠巻きに見ていた紅音がため息と共にポツリと言葉を漏らした。

「いっつつ……流石に痛いぞ」

「我慢するー」

「おい、もうちょっと優しくしてくれよ」

「お馬鹿な二人にはこのぐらいがちょうどいいでしょうね」

あの後、道端で倒れていた垣根と影花を二人は適当な場所に運んだ。
あのまま放置していると、通行人の迷惑になるという極めて常識的な判断のためだ。

そして影花を心理定規が、垣根を紅音が治療している所だ。

「無理だ、垣根。ガサツな紅音が女の子らしく治療出来るわけが」

ニヤニヤと茶化しながら紅音をからかう影花だが、最後まで言い終える前に石が飛んできた。

メキィッと音を立てながら影花は後ろに倒れる。

「死にさらせ！　クソ兄貴！」

肩でゼーゼー息をしながら紅音は倒れている影花を睨んだ。

「まーまー、心理定規みたいなフリフリの服なんて紅音には似合わないしなー」

垣根の言葉通り、心理定規はどちらかと言うとフリルが多めの服を着ていた。

ゴスロリというレベルではないので、なんとなく中途半端さを感じさせる服装だった。

対して紅音はスポーティな動きやすい格好をしている。

悪く言えば男女、よく言えば活発なスポーツ少女にしか見えない。

「あんたも石を投げられたいようね」

ギロリと睨むように垣根へ視線を向けると、紅音は言葉通り石を握りながら呟いた。

が、垣根は手を振りながら屈託の無い笑顔で言葉を発した。

「違う違う、お前はそうやって元気な笑顔をしてる方が可愛いって事だよ」

「……ふん！」

垣根の言葉に思わず驚いた表情をした紅音だが、すぐに不貞腐れたような表情をしてそっぽを向く。
その頬が僅かに赤みを指しているので、おそらく恥ずかしさから視線を逸したのだろう。

「……」

そんな紅音をどこか羨ましそうに見る心理定規。
更にその心理定規を、幾分の寂しさを込めた瞳で見る影花。

「さって帰ろうぜ」

どこか遠くを見るような表情で垣根は三人に声をかける。

「そうね、帰りましょうか」

そんな垣根を眩しそうに見ながら紅音は答える。
心理定規と影花もまた、無言で頷いた。
そして四人は並んで帰宅の途につく。四人の並びは紅音、垣根、心理定規、影花という並び。

「今日の晩飯は何だろうなー」

少しだけ赤みが差し始めた空を見上げながら、垣根は呑気に呟いた。

仲間

学園都市に住む学生は、寮生活が基本的な生活スタンスとなっている。
例外的にどこかへ下宿する事もあるが滅多な事では許可が降りない。
故に置き去り（チャイルドエラー）だろうが何だろうが、帰宅と言えば自分の住む寮に帰るという事になる。
例え小学生で大能力者の垣根や影花、強能力者の紅音に心理定規でもそれは変わらなかった。

とはいえ、大能力者ともなれば色々と特典がついたりもする。

まず部屋が他の学生より広いという事だ。
普通の学生なら１Ｒよくて１Ｋ程度だが、垣根たちは２ＤＫクラスの部屋に住んでいる。
なにしろ垣根たちが行っている学校は、学園都市ではよくある低能力者や無能力者ばかりがいる学校だからだ。
そんな学校に大能力者が二人、強能力者が二人もいれば当然ながら学校はご機嫌を取ろうとするだろう。
更に大能力者二人はもしかしたら超能力者になれるかもしれない、と研究者の間で囁かれている。
これで学校側が歓喜しない理由はない。

「おー帰ったな、悪ガキどもが」

そして特典がもう一つ、寮管理人がいるという事だ。

ちなみに垣根と影花は、寮管理人について学校側に以下の要望を出したらしい。

『エプロンが似合う和服美人かつ巨乳のお姉さんがいい』とは垣根の要望。
『男前な性格をしたスポーティなスタイルのお姉さんがいい』とは影花の要望。

二人の要望に悩んだ学校側だが、なんとかそれっぽい人材を見つける事は出来た。
それが『エプロンが似合ってて男前な性格をして、そこそこスタイルがいい和風的なお姉さん』というごちゃ混ぜ状態の女性だったが。

その女性は、学園都市ではレトロに入る箒を持っていた。
服装は下にジーンズを履いており、上はカッターという姿。
動きやすそうな格好で、スポーティな雰囲気を感じる。

しかし、その上に昭和臭いエプロンを着るという謎のファッションを展開していた。
長く綺麗なストレートの黒髪は、どこか和風美人を彷彿とさせる。
顔つきは化粧が不要なのでは、と思えるほど良く口元に薄い紅をしている程度だった。

その女性は、垣根たちに手を上げながら気さくに話しかける。

「何だ？　また喧嘩でもしたのか？　懲りないわねぇアンタたち」

アチコチ汚れた垣根と影花を見て、女性は困ったような表情を浮かべる。
その表情は「手間のかかる子供ね」と言いたげな表情だった。

「男には戦わないと……」

「あーはいはい、分かったからさっさと着替えてきなさい」

垣根がポーズを決めて何か語りだすが、女性はひらひらと手を振って適当に流した。

当然ながら、台詞を止められた垣根は酷くご立腹だった。

「うぉぉぉぉい！　最後まで言わせろよ！」

「あんたのその台詞。一体何回聞いたと思ってるのよ？」

怒っている垣根に女性は酷く面倒臭そうな表情をしながら答える。

寮管理人、というよりは気さくなお姉さんのような感じだった。

「畜生、俺はもっとこう大人しめで巨乳のお姉さんを希望したのに」

女性の貧、否、大きくはないが小さくもない普通のサイズの胸を見ながら垣根はため息をつく。

これもまた、いつもと同じやりとりだった。

そしてこの後垣根の身に起こる事もまた、いつもと同じだった。

「だ、れ、が、慎ましやかな胸ですって？」

目にも止まらない速さで、垣根にヘッドロックを仕掛けながら女性は言う。

顔は笑顔だが、その目は全く笑っておらず、更には濃い影が顔に刻まれていた。

「痛い！痛い！痛いぃぃぃ！　ちょ、ギブギブゥ！！」

ミシミシと自分の頭から危険な音が発生しているのを聞いて、垣根

はジタバタと暴れながらヘッドロックから逃れようとする。
だが、女性の力は思いの外強いのか、垣根がいくら暴れても外れる様子はなかった。

「おねーさん、聞こえなかったなー。なーんて言ったのかにゃ～」

少しだけヘッドロックを弱めながら女性は気楽そうに言う。
汗を流し、肩で息をしながら垣根はボソッと呟いた。

「言ったかのかにゃ～とか痛すぎるぞ、歳考えろよババァ」

その時、ブチンと何かが切れる音がした。

「ぎゃあああああああああああ！！！！　痛い痛い痛い痛い痛い痛いぃぃ！？」

先ほどの数倍の力でヘッドロックを食らう垣根。
骨が変形するのでは、と思えるほどの激痛が彼に襲いかかる。
いくら大能力者でも痛いものは痛いのだ。
あまりの痛みに垣根は恥も外見も捨て、人目も気にせず大声で悲鳴を上げた。

「まーた、紫穂（しほ）姉さんとやってるわね」

「毎日懲りないわねー、帝督は」

紫穂（しほ）と呼ばれた女性と垣根のコントを見て、紅音と心理定規は同時にため息を吐く。
しかしすぐに紅音は眉間にシワを寄せながら、唸るような声を上げた。

「むー、垣根に勝てないのが何か悔しいよね」

馬鹿をやっている垣根を見て、紅音は突然ボソリと呟いた。

「え、何で？」

余りに突然の発言だったために、心理定規は思わずオウム返しのように尋ねる。

「だってアレだけ馬鹿なのに、結局は負けちゃうのよ！？　悔しいじゃない」

「でも帝督は大能力者だし……」

「私の『ＡＩＭ保護（アビリティキーパー）』なら例え大能力者でも何とかなるのよ！」

「うーん、そうなのかなぁ？」

「そうなのよ、私がそうだって言ったらそうなのよ！」

「う、うん」

負け続きが悔しいのか、それとも単に垣根を簡単にあしらう紫穂に嫉妬したのか。

少々ヒステリック気味に紅音は叫んだ。

その様子に驚いた心理定規は、少しだけ怯えながら返事をする。

しかし影花のみ、紅音のヒステリックに物怖じせずじーっと垣根の顔を見ていた。

「くっそぉ！　何で垣根だけ紫穂姉さんと、そんな素敵なイベント（おっぱいイベント）が出来るんだよ！？」

垣根を睨みながら影花は叫ぶ。

瞬間、影花の頭が決して曲ってはいけない方向に曲がったような錯覚が起きた。

実際錯覚ではなく、ビキィと異音を立てて首が曲がっていたが。

「このバカエロ兄貴！」

肩で息をしながら紅音は崩れ落ちた影花を睨む。

心理定規は目の前の光景についていけず、ただぼーっと見ているだけであった。

「皆、楽しそうだなー」

少しだけ天然っぷりを発揮しながら、心理定規は場違いな台詞を呟いた。

アレから暫くした後、垣根は口から泡を吹きながら気絶した。

その様子を見て、すっきりしたのか紫穂は爽やかな笑顔をしながら垣根を解放する。

そして薄汚れた垣根（とおまけで影花）を風呂場に放り込んだ。

意識を取り戻した垣根は、影花から話を聞いた後おとなしく風呂に

入った。

「死ぬかと思った」

体の汚れを落とした垣根と影花は、揃って風呂に浸かる。

垣根たちが住む寮には、各部屋の他にもう一つ大きな浴場があった。
大きさは十人程度が入っても少し余裕が持てるほど。
これもまた垣根が通う学校側が用意した特典だ。

寮もまた他と違い、殆ど人が住んでいない状態である。
建物自体は四階建てと小さく、また一階にある部屋の数も少ない。
ワンフロアに五部屋しか存在せず、全部で二十部屋しかない。
垣根たちは、この建物の三階に住んでいる。

ここまで至れり尽くせりの状態だが、勿論学校側には垣根たちを手放せない理由があった。
当然ながら大能力者として垣根たちは勿論、学校側にも実験に対する報酬が大きい。
更に影花と紅音は、特殊な部類の能力を抱えており、それが更に学校側が受け取る報酬を巨額にしているのだ。

影花、苗字は月森（つきもり）。
能力は大能力者の『ＡＩＭ神槍（ゲイ・ボルグ）』。
能力者が微弱に放っているＡＩＭ拡散力場に、特定の方向性を与える事が可能な能力。
簡単に言えばＡＩＭ拡散力場を操作して、攻撃に使えるという便利過ぎる力だ。
学園都市には二百万人近いＡＩＭ拡散力場が満ちている。
故に影花の武器は、学園都市ならばそこら中に落ちている事になる。

槍型に固めるのが得意なのか、影花はよく槍のようにＡＩＭ拡散力場を固めて投げる。

この能力には特定の使い方が出来、まるでホーミングのように相手を追尾させる事が可能。
相手のＡＩＭ拡散力場を操作して槍を作った後、そのＡＩＭ拡散力場を相手に戻るように設定する。
そうすると危険な塊になっているＡＩＭ拡散力場が、能力者の元に戻ろうとする。
この辺りの特性を見た影花が、能力名を神話からとって名付けたわけである。

一見便利に見える影花の能力だが、勿論欠点がない訳ではない。

まず演算が非常に複雑だという事。
場合によっては空間移動能力者より複雑な演算を行う事もザラである。
故に連発すると脳が悲鳴を上げオーバーヒートする。
頭が割れるような地獄の苦しみを、影花は数時間に渡って味わう事になる。
その為に一撃必殺に近い戦闘を要求されるのだ。

また、ＡＩＭ拡散力場を操作する機器・能力には滅法弱いという点。
ＡＩＭジャマーなどの前には、影花は単なる子供に成り下がる。

その辺りの欠点を克服すれば、影花は大能力者から超能力者にランクアップする事が可能、と言われている。

「おっぱいアタックとは羨ましいぞ、垣根」

しかしそんな強大な力を持っていても、精神年齢はやはり子供である。
いつも年上のお姉さんである紫穂と、毎日イチャついている垣根が羨ましかった。

「そんなの堪能している暇はない。川の向こうで見知らぬお爺ちゃんが手を振っている幻覚が見えたぞ」

「おい、それって三途の川……」

垣根の発言に思わず突っ込む影花。
だが、その突っ込みを無視して垣根は悔しそうにボヤく。

「つーかよ、俺はもっとこうバインバインの巨乳が好きなんだ。数値で言うと87から94あたりがいい。それ以上のおっぱいはお化けだ」

「お前は美乳という言葉が理解できないようだな。まぁ俺的にはもっと慎ましやかな方が好きだが」

男二人(ヤロウ)しかいないためか、垣根と影花は下ネタトークを繰り広げる。
何しろこの二人、女性の胸がとても好きなのだ。
その為、無駄なこだわりが二人にはあったりする。

「貧乳とか女として終わっている。女はやっぱボンキュッボンだろ？」

「ない胸を恥ずかしそうな表情で気にする所がいいんじゃないか」

「大きいと色々と特典があるんだぞ？　まぁ経験なんぞないからわ

からんが」

最も、歳の割にはませている気がするが。
互いに胸トークで盛り上がったが、やはり最後は平行線となる。
それ以降は話題がないのか、二人は黙って湯に浸かっていた。

「……なぁ垣根よ」

暫く黙っていた影花が、ぷかぷか浮かぶお風呂用おもちゃで遊ぶ垣根に声をかける。

「あぁ？　何だよ」

お気に入りのワニおもちゃと戯れている所を邪魔されたせいか、垣根は少し不機嫌そうな表情をしていた。
しかし影花はそれらを無視して、真剣な表情をしながら垣根に尋ねる。

「お前さ、心理定規の事どう思ってるの？」

「はぁ？　どうもクソもアイツとは、こっち来た時に最初のクラスで隣だったって程度だぜ？」

「いいから答えろよ」

妙に絡む影花を訝しげに思いながらも、垣根は腕を組んで思い返す。
心理定規と出逢った頃の事を。

出逢い

初めて学園都市に来た頃の垣根はとてもテンションが高かった。
初めて見るようなものが沢山あったのだ。
子供心にあった未来感とは違ったが、それでも世界は一変したと思った。

ワクワクしながら眠り、その気持を持ったまま次の日学校に行った。
しかし案内された席に座った時、そのワクワク感に冷や水を浴びせられる。

（何だ？　このどんよりと暗い雰囲気の子は？）

隣に座っている女の子、その子はとても暗そうな雰囲気をしていた。
まるでそこだけ切り抜かれたかのように暗かった。

「よっす」

とりあえず挨拶だ、挨拶をすれば何とかなる。
子供心にそう考えた垣根は、極めて気軽に手を上げながら隣の子に挨拶をする。
しかし予想に反して女の子はビクッと肩を震わせただけだった。

「……は……う」

女の子はモゴモゴと口を動かすだけで全く言葉になっていなかった。
かろうじて聞こえた言葉で、挨拶を返してくれた事を理解した。

（人見知りが激しいのかぁ？）

普通ならここで気を悪くするだろうが、今の垣根は能力に対する期待感で一杯だった。
だから、無愛想に見える態度を隣の子がとっても気にすら止めていなかった。
その後は隣の子と会話するわけでもなく垣根はじっと待っていた。
先生がくるのを。

「よーし、皆席につけー」

そして遂に念願の先生がやってきた。
垣根は心の中でガッツポーズをしながら、自分の能力についてあれこれ想像する。

（きたぁ！　さて俺はどんな能力が手に入るだろうなー。かっこ良く飛びたいな……いや、でもヒーローっぽく変身かぁ？）

この時の彼は知らない。
自分が手に入れる能力は学園都市でも稀有に入る部類の能力だという事を。

その後、数人を一グループとし、順番に身体検査（システムスキャン）が行われた。
しかし途中で教師陣は困惑する事態に遭遇する。
一人だけ普通の身体検査（システムスキャン）では出ない奇妙な結果を出した人間がいたからだ。

「うーん、垣根って言ったか？」

検査を行なっていた教師が困ったような表情をして垣根に話しかける。

「ですよー。フルネームは垣根帝督っす」

何か結果が良くなかったのか？　と少し不安になった垣根だが、教師の表情を見て考えを変えた。

教師の顔は「この結果は何？」みたいな、よくわからない結果を見た時の表情をしていたのだ。

しばらく教師は頭をかきながら唸っていたが、やがて重苦しそうに口を開いた。

「お前の能力なぁ……分からんわ」

「は？」

「強度はレベル3ほどなのはわかる。でもなぁ……どういった部類の能力に振り分けられるべきか判断に迷うんだよ」

教師の言葉を聞いて、垣根はただ困惑するだけだった。

能力がわからない、それは能力に憧れて学園都市にきた垣根にとっては大きなショックとなった。

「お、おい！　わからないっていっても、ここの機材じゃわからないって事だ。もっと上の設備を持っている所に行けば、ちゃんとわかるから安心しろ」

俯いている垣根を見て、教師は慌ててフォローの言葉を述べる。

しかし教師の心配は杞憂だった。

「何それ！　俺の能力って特殊なの！？　くぅ～～～、ヒーローっぽくってカッコいいじゃん！」

俯いた状態から突然席から立ち上がると、垣根は周りも気にせず大声ではしゃいだ。
今にも小躍りしそうなぐらい、垣根の表情は明るかった。

「ビ、ビックリさせるな！　ちょっとは落ち着け」

「あ、すいません」

流石にはしゃぎ過ぎた自覚があったのか、垣根は教師の叱咤に謝罪の言葉を述べる。
そして、倒した椅子を立て直すと、その椅子にもう一度座る。

「……でだ。さっきも言ったが、お前の能力を調べるには設備の整った場所でやる必要がある。なので、お前の能力はそれまで分からん。まぁ何だか常識外の数値ばかりだし、きっと能力は規格外れの能力かもなぁ」

「俺専用の能力ってか。いいねぇ、カッコいいじゃん」

「常識外だったら決め台詞が必要だな。んーそうだな……「俺の能力に常識は通じねぇ」とかかぁ？」

「いやいやいや、こうだろう。うーんと「この俺に常識は通用しねぇ」……とか！？」

「おお！　それっぽいな。早速練習が必要だな！」

意外とノリのいい教師と一緒に垣根は、能力を出すときの決め台詞を練習し始める。

勿論、すぐに先輩教師にあたる人がやってきて、二人仲良く怒られたのは当然の結果だが。

身体検査（システムスキャン）後、垣根の事はすぐにクラスの中で話題となる。
といっても悪感情を抱かれたわけではない、むしろ逆の方の感情を周りは抱いていた。
顔立ちもよく、爽やかな雰囲気と愉快な言動をし、レベルを鼻にかける様子もない。
人気者になる要素を兼ね備えた垣根は、たちまちクラスの中心的人物へとなっていった。

「能力名が気になるなぁ……結局大学って所でもイマイチ分からないって答えだったし」

しかし人気者の垣根には二つの悩みがあった。
一つは能力名、クラスで能力がある人は大体能力名がわかっていた。
だが、垣根の能力名は依然として不明という扱いだった。
そのせいか『念動力系』とか『発火能力系』とか分かるクラスメイトたちが羨ましかった。

（俺もかっこ良く能力名を名乗りてぇ！！）

決め台詞まで考えており、後は能力名にあわせて修正するだけという状況。
この状況でお預け状態が続いているのだ。

いくら垣根でもフラストレーションがたまる一方だった。
そしてもう一つの悩み。
「あ、あのよぅ……その本、面白い？」
「……」
隣の無愛想マックスな女の子の扱いに悩んでいた。
暗くてジメジメした感じはないものの、前髪で目が隠れてて表情が全く読めない。
その上、常に本を読んでおり会話するタイミングが掴めないのだ。
（頼むから何か返事してよぉー！）
隣の奴と楽しく会話をしながら学校を過ごす予定が垣根の中にあった。
だが、蓋を開けてみれば隣の子は激しく無口。その上、会話のキャッチボールが全く出来ない。
本から趣味を推測しようとしたが、どうやら無造作に借りているらしく全く統一性がない。
普通ならここで諦めるが、生憎と垣根は諦めが悪かった。
（絶対こいつと会話してやる！）
もはや目的と手段が変わっているようだが、その辺りは気にしない垣根だった。
とにかく話題をふるべきだ、そう考えた垣根は毎日色々なネタ話をしていた。
ある時は自分の失敗、またある時はテレビで仕入れたネタ話。

クラスメイトたちには好評だったが、残念ながら隣の女の子はうんともすんとも言わなかった。

（くっそぉ！　絶対こいつを笑かす！？）

目的も手段も忘れた垣根。

もはや芸人の域まで達した彼は、能力名という大事な事すら忘れていた。

教師が「お前の能力名は『未元物質（ダークマター）』らしいぞ？」と言っても、垣根の中で能力名は既にどうでもいい事に成り下がっていた。

そして隣の女の子を笑わそうと頑張って一ヶ月がたった頃。

「……」

「きょ、今日もダメだった」

がっくりと項垂れながら垣根は両手を床につく。

時刻は夕方、クラスメイトたちには既に帰宅しており、教室には隣の子と垣根しかいなかった。

律儀にも付き合ってくれる事に感謝していたが、肝心の笑わせる事には大連敗中だった。

「……ねぇ」

すると余りにも滑稽だったのか、項垂れた垣根を見ながら女の子が話しかけてきた。

その声に反応した垣根は、思わず呆けた顔をしながら視線を上げる。

「どうして私に構うの？」

「は？」

言っている意味が分からなかった垣根は、呆けた声を上げながら首を傾げる。

「私の能力は精神系……あなたも私の話ぐらいは聞いてるでしょ？」

「いや、知らん」

片手をブンブンと振りながら否定の言葉を述べる。

すると、今度は女の子が呆けた顔をする番だった。

「し、知らないって……」

「だってさ、他人がどんな能力を持ってようが関係ねぇよ」

体についたホコリを払いながら、垣根は大した事がないという雰囲気で語る。

そこら辺に落ちている石を拾うかのごとく。

「この俺に常識は通用しねぇ！！」

ビシッとポーズを決めながら垣根は断言した。

そして更に言葉を発する。

「ここはお前の知っている世界ではない。この俺の能力『未元物質（ダークマター）』が作り上げた世界だ！」

何やらヒーローを気取っているかのように、様々なポーズをとりつ

つ垣根は叫ぶ。
傍から見ると滑稽だが、本人は至って真面目である。
「テメェの能力なんざ俺の前には無力だ！」
「え？　え？」
「なんたって俺は、この学園都市で最初の絶対能力者になる予定の男だからだ！　いや、予定じゃない。確定だ！？」
効果音が聞こえそうなほど、垣根は胸を張って断言した。
余りに自信満々にいうのでまるで本当にやり遂げるのでは、と思えるぐらい。
「……ぷっ」
少女は思わず吹き出してしまった。
ここまで自信満々に言う人は初めてだった。
ある意味では滑稽にも見えるその姿が、少女にはとても愉快に思えた。
だからだろうか、少女は自然と笑っていた。
「待てコラァ！　そこは笑う所じゃないだろう。この俺のかっこ良さを褒め称える所じゃねぇか！」
「だ、だって……レベル３の人が絶対能力者って……ぷくくっ……」
「こ、この野郎！」
思わず大声で怒鳴ろうとした垣根。

だが彼女の顔を見た瞬間、体は勝手に動きを止めていた。

「あ、あはははは。おっかしいー、はははははーーー」

楽しそうに笑う彼女の表情は、夕日に負けないほど明るく輝いていた。

垣根はその表情に心奪われ、魅入っていたのだ。

それがキッカケで隣の少女とは仲良しになった。

後に垣根と共に数奇な運命を辿る事となる彼女の名前は「心理定規」。

レベル２の精神系能力者だった。

崩壊を招く者

「そっからだよなぁ。アイツと仲良くなったのは」

湯を片手ですくってはこぼす動作をしながら垣根は語る。

今、思い返せば中々に滑稽な発言だ。

強能力者の人間が、絶対能力者になるって断言する辺りが。

「……そっか。お前って昔から芸人気質だったのかぁー」

「感動する所そこ！？　違うだろう、こうもっと……俺の素晴らしさを褒め称えろ！」

「馬鹿か、お前は。しっかし心理定規って昔は人見知りが激しかったのか」

のびをしながら影花は意外と言いたげな表情で呟く。

「まぁ俺らより酷い捨て子だったのと、施設で虐められていたからなぁー」

「名前すら不明ってなるとなぁ。だから能力名をそのまま自分の名前に使っているって訳か」

「そういうこった。まぁアイツは……そうだな、大事な仲間だ。紅音もそうだぞ？　まぁおまけでお前も入れてやるよ」

「（あー紅音、こいつ生粋の朴念仁だぞ）はん、相変わらずくさい台詞だけは、恥ずかしげもなく言えるんだな」

悪態をつきながら影花は垣根の顔に湯をぶっかける。
予想外の攻撃に、垣根は為す術もなく頭から湯をかぶる。

「ぶはっ、ゲホゲホっ……テメェ何しやがる！」

「メルヘンな貴様にはちょうどそれがいい」

「はぁ？　ったく、何だよもう」

つまらなさそうに鼻を鳴らす影花は、それ以降何か尋ねる事はなかった。
垣根もまた、ぶつくさ言いながらも悪態をつくだけだった。

風呂から上がった垣根と影花は、自分の部屋ではなく紫穂の部屋に移動した。
本来なら各自が食事を摂るのだがこの寮では少し違った。
全員が紫穂の部屋で取るという暗黙の了解が出来ていたのだ。

「いやーさっぱりしたぜー」

「あがったか。悪いが皿を並べてくれー」

「あいよー」

キッチンから顔を覗かせた紫穂が、垣根と影花に手伝いを要求する。
その要求に快く返事をすると、二人はテーブルの上に皿を並べ始める。

「あれ？　紅音と心理定規は？」

そこで気付く、女性陣の二人がこの場にいない事を。

「あーついでにアイツらも風呂に行かせた。もうちょっとしたら出てくるだろう」

「あぁ、そうなんだ」

「おぉ、今日はハンバーグかよ」

五人分の皿を用意しつつ垣根は適当に相槌をうつ。
と、その時影花が目を輝かせながら晩御飯のおかずを見ていた。

「紫穂様特製ハンバーグさ。今日は身体検査もあったしな」

「流石紫穂姉！　わかってるじゃねぇか」

身体検査とハンバーグに何の関連性が、と疑問に思った垣根だが、余計な事と思い心の中に留めておいた。

「お風呂から出たわよー」

皿の準備が終わった頃に、紅音と心理定規が風呂から出てきた。
どうやら風呂場からそのままやってきたらしく、二人共湯上りの格好だった。

心理定規はフリルが多いお人形のような格好の服装だった。
たまに寝間着か、と疑問に思ったが童話か何かに出るお姫様の格好だと、垣根は強引に納得する事にした。
そもそも心理定規は童話などの夢物語が好きなのだ。
だから自然と服装も、童話などの服装を真似る事が多い。

そして紅音は、タンクトップとショートパンツという格好だ。
全体的に動きやすそうな服装を好む彼女らしい服装だった。

「なんだ、パジャマに着替えなかったのか」

風呂に入ったはずなのに、紅音はパジャマに着替えていなかった。
心理定規は既にパジャマに着替えており、それが少しだけ垣根には疑問だった。

「どうせもう一回風呂に入るしね」

「うげ」

紅音の言葉を聞いて、とたんに垣根が嫌そうな表情をする。
その表情からは「今日もか？」と言いたげであった。

「ふっふーん、今日こそはコテンパンにしてやるんだから！？」

「０勝１６７敗のお前じゃ無理だろ」

明らかに面倒臭いと言いたげな表情で垣根は紅音の言葉に答える。
いつの頃からか暗黙のルールになった、垣根と紅音の晩御飯後の能力バトル。

紅音はいつもやる気だけはあるが、反対に垣根はそろそろ疲れ気味だったりする。
毎日懲りずに付き合わされればそうなるだろうが。

「今日こそ一勝する！」

「ぎゃー、やられたー。はい、一勝ね」

指さしながら力む紅音に対して、垣根はニヤニヤと笑いながら床に崩れ落ちる。
どう見ても小馬鹿にしているようにしか見えなかった。

「か・き・ねぇー！」

「んだよ。お前の勝ちだろう、もっと喜べよ」

「そんなニヤニヤ笑いながら言われても嬉しくなーい！」

両手を上げて抗議する紅音だが、垣根は終始ニヤニヤするだけだった。
どうやら本格的に面倒だと思っているらしく、何をいっても効果なしである。

「おいおい、垣根。付き合ってやれよ」

そこへ垣根と同じようにニヤニヤした表情の影花が口を挟む。
余計な事を言うな、そんな意味を込めた視線を垣根は影花に向ける。
しかし影花はわかっていながら、垣根の無言の訴えを全て無視した。

「絶対能力者予定の垣根なら紅音ぐらい楽勝だろう？」

「まぁな！　俺にかかれば紅音なんぞ楽勝だ！」

「じゃあ付き合ってやりな。どうせお前、夜はダラダラしているだけだろう？」

「……しゃーねぇなぁ。今日は特別に付き合ってやるよ」

流石にこれ以上駄々をこねても面倒臭いと思った垣根は、影花の言葉にのる形で紅音とのバトルを了承する。
すると、さっきまで不安そうな表情をしていた紅音がとたんに笑顔を浮かべる。

「よぉぉぉっし！　今日こそ勝つぞぉー」

両腕を突き上げながら紅音は決意を口にする。
そして、その勢いのままダイニングへと駆け込んでいった。

「そんなに戦えて嬉しいのか……」

「……お前って本当に鈍感だな」

「あ？　何でだよ」

「（紅音は負けて悔しいんじゃない。お前に勝って対等に立ちたいだけなんだよ）なんでもねぇよ、このニブチン野郎」

あほらしいと呟いた後、影花は紅音に続いてダイニングに入っていく。
ポツンと残された垣根はただ一人意味がわからず、ただ首を傾げる

だけであった。

「つーか防御系列の紅音が俺に勝つとか無理があるだろう」

そう言って彼は自分の能力『未元物質（ダークマター）』を展開する。

すると垣根の背中に、天使のようなメルヘンチックな『二枚』の翼が展開される。

「まぁ今日も軽く倒してやりますか」

翼をしまいながら言う垣根は、どこか楽しそうな表情を浮かべていた。

「ほぅ、この兄妹が例のＡＩＭ系列能力者ですか」

無機質な部屋に白衣をきた男性が二人いた。

マグカップからは高級なコーヒーの匂いが漂っており、身分の高い人間であることが窺える。

「そうです。兄は月森影花、ＡＩＭ拡散力場を使って槍のようなものを作り上げます。また、それを使って様々な攻撃方法を編み出しております」

「……」

「妹は月森紅音、ＡＩＭ拡散力場を使って盾を作り上げます。事、能力で作られたものなら何でも弾き返すとか」

事務的に淡々と説明する白衣の男が、影花と紅音のプロフィールを読み上げる。

椅子に座っている上司の男は、報告を最後まで聞くと薄く笑った。

「まるで中国の故事にある『矛盾』ですね。いや、素晴らしい。こんなモルモットが転がっているとは思いませんでした」

「はい、ＡＩＭ拡散力場を研究する我々にとっては最適な能力者かと」

オーバーに手を叩いて喜びを表現する上司だが、部下はあくまでも冷静に報告するだけであった。

冷静な部下に上司は少し困った表情をしながら肩をすくめる。

「君はもう少しユーモアというものを持ちたまえ。研究に必要な事ばかりでは視野が狭くなるよ」

「ご高説痛み入ります。しかし、私の性格上それは難しいと思います」

「生真面目過ぎますねぇ。まぁそこが気に入っている訳ですが」

「ありがとうございます」

上司が褒め言葉を述べても、部下は単に頭を下げて礼を述べるだけであった。

まるで教科書に書かれている事をそのまま実践するかのように、決

まった動きをする部下。

「それで、いつ実験を行いますか？」

「んー、そうですねぇ……」

デスクの上に乗っているプロフィールを眺めながら上司は考える。
と、突然上司は唇の端を歪めながら笑った。
目には狂気のような炎が宿っているようにも見え、一瞬部下は背筋に寒気を覚えた。

「どうせこの『モルモット』は『これ以上の成長が出来ないでしょう』。ならば、我々にショーを提供してもらいましょう」

「ショー？」

上司の言っている意味がわからず、思わずオウム返しのように尋ねる部下。
それが上司の気を良くしたのか、両腕を広げながら上司は語る。

「なんでも防ぐ『盾』、何でも貫く『矛』。この二つが揃ったならやることは一つでしょう」

「『矛盾』の再現……ですか？」

「正解です。滅多に見れるものじゃないですよ？　兄妹で殺しあうなんて」

つまりＡＩＭ拡散力場を調べるのに、手っ取り早く二人を戦わせるという事を上司は言いたいようだ。

何故その結論に至ったかよくわからなかい部下だが、それを実行するには一つだけ大きな問題があった。

「この二人は学園都市上層部が特に目をかけているはずですが……？　下手に『壊して』は、上層部から『お叱り』を受ける事となります」

「『モルモット』二匹程度で、喚くような上層部ではありません。それに私という優秀な研究者を消し去るほうが、学園都市にとって大きな損害だと思いますが？」

上司の断言を聞いて、部下は内心思わずため息を吐いた。
目の前の上司は確かに優秀な研究者である。
しかし、彼は自意識過剰のせいか気付いていない。
その優秀さは、単なる下っ端科学者と比べたなら優秀だと言える事が。

（やれやれ、お仕事が『もう一つ』増えそうですね）

楽しそうに笑う上司を見て、部下は内心苦笑する。

（この程度で、ここまで尊大に出来るのはある意味才能ですね）

（さて、命令通りに月森兄妹が戦う状況を作り上げましたが……問題の『彼』と『彼女』をどうやって呼び寄せればいいのでしょうかね）

（この男を使って、『彼』を成長させるのが今回の計画ですが……うーん、難しいですね）

（下手にこの男のせいで月森兄妹が死んだら面倒ですし……でもまぁ月森兄妹に関しては最悪死んでも構わないと聞いてますが……）

「実験の日は会議をして決めましょう。関係者への連絡をお願いします」

「分かりました、木原教授」

既に『本命』の仕事で頭がいっぱいの部下は、木原の言葉に適当に答える。

（まぁまずは計画を立てましょう）

そう結論づけると部下は木原にお辞儀をした後、部屋から出ていった。

ある夏の日

季節は夏真っ盛り、強烈な太陽の光がぎらぎらと降り注ぐ。
その光でアスファルトは熱せられ陽炎が見えるほどだった。
吹きつける風も生ぬるく、涼しさを微塵も感じさせてくれない。
むしろ余計暑く感じるほどだった。

そんな暑い日に垣根と影花は街を歩いていた。

「あっちぃ……」

「言うな、余計暑く感じる……」

理由は単純で、夏といえば女の子が薄着で素敵な季節だから。
そんなアホな理由で街の大通りを歩いている二人だが。

「数時間前のアホな俺に言いたい。部屋でゴロゴロしてる方がマシだったと」

「タイムマシンがあれば、間違いなく俺は自分を殴ってでも止めるね」

予想に反して街の大通りには人が少なかった。
否、少ないというより無人に近い状態だ。
誰もが今年の夏の暑さにへばり、外出を控えめにしていたのだ。

「おまけに紫外線を避ける為か、薄着のお姉さんがいない」

「スポーティなお姉さんはいないのかね」

己の欲望にだけは忠実なのか、暑さにへばりながらも標的（うすぎのおんな）を探す垣根と影花。
だが、結果は無駄に体力を消耗するだけであった。

「……なぁ」

「やめろ、余計悲しくなる」

ボソリと垣根が呟きながら尋ねようとしたが、最後まで言い切る前に影花が止める。
垣根が何を言いたいのか分かっている影花。
だが口にしたら最後、なけなしのプライドが木っ端微塵に粉砕されてしまう。
その事を理解していたのか、垣根もまた何も言わず口を閉じた。

「……暑い……」

「……だなぁ……」

だがここで引いたら負け。
そう思った二人は意地でも薄着の女性を見つけようとする。
といっても気温三十度を超える灼熱の日では少しばかり無理があるが。

ゾンビのように足を引きずりながら歩く二人、もはや体力も限界に近かった。

「……あんたら何してるの？」

そんな二人の背後から突然声が飛んできた。
振り向くのも億劫なのか、ダルそうな表情をしながら垣根と影花は声がした方に顔を向ける。

「帝督、汗だくだよ？」

そこには確かに薄着の女性がいた。
ただし、見知った顔二人というオプション付きだったが。

「抹茶アイスが体にしみるー」

結局、紅音と心理定規に会ったのが二人にとって止めであった。
もはや探すのも馬鹿らしいと思ったので、近くにあったコンビニでアイスを買ってきた。
そうして少し日陰のある公園で、四人仲良く食べているという訳だ。

「相変わらず抹茶好きだよな、お前はー」

緑色の棒アイスを咥えている紅音を見ながら垣根は呟く。

紅音は大の抹茶狂なのだ。
飲み物といえば大体は抹茶の名前がつくもの。
試験品の中に抹茶関係があれば、誰もが手に取らないような外れ品（ゲテモノ）でも手に取る。
一度『濃縮還元　１００％抹茶サイダー』という、もはや何を狙っ

ているのかさっぱりな物すら飲んでいた。
ちなみにこの時味見した影花は、一口飲んで悶え苦しんだ後に『形容しがたい味』という言葉を口にした。
同じく生贄となった垣根は『砂の食感と吐きそうな程の甘い匂いがする液体』と表現した。
もはや化学兵器（バイオテロ）レベルの飲み物すら、普通に飲んでいるのだから恐ろしい。
それほど抹茶をこよなく愛しており、抹茶商品といえば紅音という図式が三人の中で成り立っていた。

「あずきバーうめェ」

「それ最初がガチガチに硬いから苦手だぁー」

抹茶狂いの紅音とは違い、垣根や影花、心理定規は普通のアイスを食べていた。
垣根はチョコバーを食べており、影花はあずきバーというラインナップ。
心理定規がパイナップル味のアイスという果物系列だった。

「はむはむ……」

リング型のアイスだったせいか、心理定規は両手で掴みながら食べていた。
時々こぼれそうになりながらもついばむように食べていく。

（何かリスみたいだ）

豪快に食っている紅音とは違い、まるで子リスのように食べる心理定規。

何だか微笑ましいなぁ、と思った垣根は無意識のうちに笑みを浮かべていた。

「……う？」

じっと見ていたせいか、視線に気付いた心理定規が垣根の方を向く。

「いや、美味そうに食うなって思ってな」

「美味しいよ、帝督」

そう言った後、心理定規は再び食べる事に集中する。
その時、垣根の目に心理定規の口元から垂れている汁が見えた。
おそらくアイスが溶けたせいなのだろう、その事に心理定規は気付いた様子がない。

（ったく、しょーがねぇーなぁ）

服についたら大変だ、そう思った垣根は汁をふこうと手を伸ばす。
ハンカチでもあればよかったなぁ、と気楽に構えていた。

「……？」

垣根の手が心理定規の汚れを拭きとうろうとした時、おもむろに心理定規が垣根の方に顔を向ける。
そして垣根の手は狙いから外れて、別の場所に手が触れてしまった。

「ふぁ……」

垣根の手が触れた場所、それは心理定規の唇であった。

ぷにぷにと柔らかい感触を手から感じた垣根。
だが垣根はその感触よりも、口元の汚れのほうが気になっていた。

「あぁ、悪い。お前、口元が汚れてたからさ」

そう言って本来の汚れを手で拭き取ると、垣根は自分の手についた汁を舐めとる。
そして何事もなく自分のアイスを食べる。
しかし心理定規の方はさっきまでと変わって真っ赤になって下を向いていた。

「ん？　どうしたよ、お前」

心なしかぷるぷると震えている心理定規が気になった垣根は様子を尋ねる。

「……何でもない……」

「あぁ……そう」

だが、その言葉で興味を失ったのか、垣根は話半分に答える。
すると突然、下の方からゴキリッと何か鈍い音がした。

「いってぇぇぇぇぇぇぇーーー！！」

音の正体、それは紅音が垣根の足を思い切り踏んづけた音だった。
手加減なしに踏んでおり、異音からその威力が窺い知れる。

「なにするんだよ！」

「うっさい、馬鹿垣根！」

片足を抑えピョンピョンしながら紅音に抗議する。
しかし、ものすごく不機嫌な表情をした紅音に逆ギレをされてしまった。
その光景を眺めていた影花はニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべていた。

「おいおい紅音、ヤキモチはよくないなぁ」

「はぁ！？　だ、だだだだだ誰がヤキモチなんか！？」

顔を真っ赤にしながら紅音は影花に抗議の声を上げる。
だが口では否定しても態度で丸わかりだった。
気付かないといえば、未だ痛みに耐えている垣根ぐらいだった。

「まぁまぁ落ち着け。そんなに動揺してたらバレバレだ。ニブチンメルヘン以外は」

「～～～～～～～～ッ！？」

「え、ちょ！　紅音さーん。その拳は何ですかー！？」

「死にさらせぇー！」

恥ずかしさの頂点に達したのか、紅音は突然影花を殴りだす。
いきなりの事に、何も出来なかった影花は為す術もなくボコボコにされる。

「痛いって！　ちょ、もうやめてー！」

「うるさいうるさいうるさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁい！！！」

「ぐおぉぉ！！マジで足がいてぇ！？」

カオスだった。

紅音は馬乗りになって影花を殴り続け、垣根は痛みに耐えるかのように地面をゴロゴロと転がっていた。

「……はうぅ～」

唯一、心理定規だけ顔を抑えながら唸っていた。

その顔は誰が見ても分かるほど真っ赤に染まっていた、

カオスから脱却した三人。

だが何となく気まずい空気が漂っていた。

顔中傷だらけだけどニヤニヤ笑っている影花。

俯いているが未だ顔が赤い心理定規。

何でこうなったのかわかっていない垣根。

物凄く不機嫌そうな表情の紅音。

全員が心のどこかで「これからどうするべきか」考えあぐねていた。

だが、誰もが答えを見つける事が出来なかった。

（あーくそぅ……）

頭をガシガシとかきながら垣根は悩む。
どうしてこんな状況になったのだ、と。
朴念仁の彼では、紅音がヤキモチを焼いたとは気付かないだろう。
影花は分かっているようだが、教える気はないのかニヤニヤするだけだった。

「うぉぉぉっし、テメェらぁ！　ゲーセンいくぞぉ！」

いきなり立ち上がると垣根は大声で叫ぶ。
その声に反応した三人は、垣根の方に顔を向けた。

「ゲーセン？」

「そうだぁ！　紅音、テメェはゲームでケチョンケチョンにしてやるぜ！　心理定規、お前は俺とプリクラを撮るぞ！　影花はぁ！」

そこで垣根の勢いが止まる。
ポーズを決めたまま固まっており、ある意味では愉快な姿を晒していた。

「俺は何だ……？」

「……すまん、お前は思いつかなかった」

「おいコラァ！」

垣根の言葉に思わず突っ込む影花。
しかし垣根は影花を無視して、そのままゲームセンターがある方に

向かって走りだす。

「誰が一番か競争だ。一番ドンケツはジュースおごりな！」

「ちょっと、垣根ー！　あんたずるいわよ！」

言い出しながら走っている垣根に抗議の声を上げる紅音。
だが、垣根は紅音の抗議を無視して全速力で走り続けた。

「まちなさーい！　かーきーねーー！！」

「待ってー！」

垣根につられて紅音もまた、全速力で走りだす。
紅音が走りだしたのを見て心理定規も慌てて走りだす。

「なんつーか、定番だなぁ……」

一人残された影花は、走っていく三人を眺めながら楽しそうに呟いた。

崩壊の序曲

八月の初め、垣根が住む寮に二つの封筒が送られてきた。
宛先は影花と紅音、中身はある事に参加する旨が書かれていた。

「実験？」

封筒の中身を読み終えた影花が、一言ポツリと呟く。

「みたいねー」

封筒をペラペラとふりながら紅音がダルそうに答える。
実際、面倒だなと影花も思っていた。

「何故、夏休みにやるんだよボケナスー！」

そう、日程を見ると夏休みの中盤の日付だった。
まるでこっちの都合を無視した内容に、影花は酷くご立腹だった。
紅音もまた、やたら高圧的に見える文章に不快な気持ちを抱いていた。

「何この『私の研究に参加出来て喜べ』みたいな文章はー」

封筒をその辺に投げ捨てると、紅音はソファーにドカッと座り込む。
面倒な事この上ない実験だと思っていたが、不参加という事は既に選択できなかった。
学校への手回しなどもした後のようで、影花と紅音には参加する以外になかった。

「仕方ないなー。さっさと終わらせてしまおうぜ」

「そうねー。どうせ実験の日以外は何もしなくていいみたいだし」

「それが唯一の救いだな。こんな封筒よこす時点でろくな大人じゃないだろうし」

「なんか『小物っぷりを隠すために、あえて高圧的な態度をとる』という、漫画でよく見る下っ端の定番を地でやる大人なんじゃない？」

紅音の的確なツボを抑えた言葉に、影花は腹を抱えて笑った。

「確かに……くくくっ……」

影花もまた封筒をその辺に投げ捨てると、紅音の隣にドカッと座り込む。

「それよりさ、今日は何して遊ぶかなー」

「そろそろ夏休みの宿題を片付けなさいよ。大能力者が宿題をすっぽかしたなんて恥も恥よ？」

「俺は最後にやる気を出すタイプなんだ」

二人は既に封筒の中身に興味を失い、これから垣根と心理定規とどう遊ぶかが重要になっていた。

投げ捨てられた封筒から少しだけ紙がはみ出ている。

その紙にはこう書かれていた。

『ＡＩＭ拡散力場の探索機器に関する実験の参加』

後日影花と紅音は、垣根と心理定規に実験の事を伝える。
二人共一日か二日、二人が実験に取られる事を偉く不満に思っていた。
だが、拒否できるような状況ではないと理解すると、しぶしぶだが納得する事とした。

「ま、仕方ないか」

結局は従うしかない、子供ながら垣根はそう思った。
大能力者といえども学校側が認めた研究には参加する以外の選択肢はない。
もしかしたら超能力者なら違うかもしれないが、生憎と垣根たちの周りに超能力者はいない。

そもそも超能力者自体、滅多に見れるものじゃない。
学園都市にいる学生の中で、たった数名しかいないのだ。
子供だけで二百万人近く、総人口に至っては二百三十万人とも言われている。
その中から、たった数名を探しだせなど困難を極めている。

「まぁそんな事より、今日は何して遊ぶよ！」

「そうだな……今日は――」

この時の垣根たちは知らない。
実験の日、その日が全員の運命を大きく変える。

――　そう……影花が紅音を殺し、垣根が影花を殺す日だという

事に。

何も知らず、ただひたむきに『今日』を生きる彼らの運命は、ゆっくりと狂い始めた。

影花と紅音が実験の日、この日だけは珍しく三人だけで食事となった。

「なーんか盛り上がらないな」

ダルそうに晩御飯を食べながら垣根はボヤく。

彼の中では無意識のうちに五人で晩御飯を取る事と決まっていた。

だから、影花と紅音がいない今日は何かが足りない感覚に襲われていた。

「いなくなって初めて有難味が分かるってやつさ。お前も二人を大事にしろよー？」

嬉しそうな表情をして紫穂は垣根に語りかける。

彼女にとっては垣根も影花も、紅音も心理定規も可愛い弟か妹なのだ。

こうやっていない事を寂しがる垣根の姿は、紫穂にとってはとても喜ばしい事なのだ。

「うん、私と帝督、影花と紅音はずっと一緒……」

心理定規が少しだけ頬を赤く染めながら呟く。

「……ふん」

心理定規の言葉が恥ずかしかったのか、それとも紫穂の優しげな瞳を直視出来なかったのか。

それとも両方か分からないが、垣根は紫穂と心理定規の視線を直視出来なかった。

無愛想にそっぽを向くと、紫穂がどこか楽しそうに笑う。

「ま、アイツらが帰ってきたら出迎えてやろうよ」

紫穂の言葉を合図に、垣根たちは止まっていた食事を再開した。

食事が終わり、各人が部屋に戻って少しした頃。

突然、垣根の部屋に備え付けられている電話が鳴った。

「んあ？」

部屋でゴロゴロしていた垣根は、電話の音に呆けた声を上げる。

それもそのはず、備え付けの電話など一度も使った事はない。

殆ど部屋の飾りになっている状態だ。

そもそも垣根は、この部屋に繋がる電話番号すら知らない。

「んー？」

若干訝しげに思った垣根だが、無視する訳にもいかない。
垣根すら知らない電話番号を知っていて、なおかつそれを使って連絡を取ろうとする。
そう考えると、学校か研究所かどちらかという結論に至った。
しかしだらけている所だったので、少しだけダルイなと思いつつ受話器を取った。

「もしもーし、この電話を知っている貴方はどちら様ー？」

『夜分に申し訳ないね。垣根帝督君かね？』

受話器から聞こえた声は、垣根の知らない若い男の声だった。
知性的な男性の声だと思ったが、どこか冷淡でさめた感じもした。

「ああ、そうだけど？」

『見知らぬ男から電話がかかってきて警戒するのは当然だが、私の話を聞いて欲しいのだよ』

「聞くだけなら」

下手に弱気な所を見せるわけにもいかない。
そう考えた垣根は淡々と言葉を発する事に徹した。

『ありがとう。面倒な説得が必要なくて助かるよ』

「そりゃどーも」

『回りくどい事はしない。ストレートに言うね、今から私が教える第二三学区にある研究所に急いでくるんだ』

「第二三学区？　おいおい、あそこは一般学生立入禁止の特殊な学区だぜ。大能力者だろうがおいそれと入れるわけないじゃん」

一学区を丸ごと航空・宇宙開発分野のために占有させている学区であり、民間機は勿論の事、学園都市の制空権を守る為の戦闘機や無人ヘリの開発も行われている。
そのせいで機密度が高く、厳重な警戒体制が常に敷かれている。
数ある学区の中でトップレベルの警備を行なっているので、少し道を外れるとかそのレベルですら難しい。
そんな所にある研究所に、電話の男はこいと言ってきたのだ。
垣根が仰天してしまうのも無理はない。

『今日だけは問題ない。君一人が入り込んでこようと、警備網に引っかかる事はない』

「……そこまでして、その研究所に一体何があるんだ」

『ふむ、やはりこの言葉を言わないとダメかね。早くこないと『月森兄妹が死ぬぞ』という言葉を』

訝しげに思っていた垣根に対して、電話の男はサラっと気軽に爆弾発言を投下した。
言葉の意味が理解できなかった垣根は、ただ呆けた表情をするだけであった。

『驚いているのは分かる。だがね、これはれっきとした事実だよ。今も月森兄が妹を殺そうとしている。急がないとまずい事になるよ

？』

「おい……どういう事だよ……影花が紅音を殺す？　あの妹思いのアイツが……？　フザけんなよ、そんな戯言を」

『こんな戯言を君に聞かせて、私に何かメリットがあるのかね？』

電話相手から冷淡な言葉をつき付けられたが、垣根はその言葉に反論する事が出来なかった。

僅かな会話だけしかしていないが、電話相手が伊達や酔狂で馬鹿をやるような相手には思えない。

どちらかと言えば、何事にもビジネスライクな態度をとる人物、そう垣根は評価していた。

だから彼が事実だといえば、妙な説得力があり垣根は本当に影花と紅音が危険だという事を悟った。

「……一つだけ答えろ。何でわざわざ俺に連絡をした」

ただ一つだけ分からない事がある。それは、電話の男がわざわざ垣根に連絡を取った事。

伊達や酔狂の行為をしない男が、わざわざ垣根に危険を知らせる理由が一つもない。

そこが垣根には謎だった。

『……少し愚痴っぽくなるが構わないかね？』

「構わねぇ……答えろ」

今も影花と紅音が危険だという事に多少の焦りを感じていた垣根。

だが、目の前の男の問題を片付けないと、何かとんでもない事態に

なってしまう。
そう考えた垣根は、男の言い分を聞こうと考えた。

『私はね、今回の月森兄妹の実験が行われる研究所に所属している人間だよ』

「……」

『正確には研究を行うグループかな。まぁそんな事はどうだっていい。でだ、このグループの長がねぇ……どうしようもない馬鹿なんだよ』

いきなり自分の上司をこき下ろす言葉に、垣根は少しだけ驚いた。

（つまり自分の『本当の上司』ってのは別にいるって事か……）

だが、そもそも上司が別の人間なら話は変わる。

『言い方は悪いが、月森兄妹は特殊な能力者だ。学園都市の上層部も一目置いている。だが、この馬鹿は自分の方が上だと思っているんだよ。滑稽過ぎて、馬鹿が自信満々に語った時は吹き出しそうになったよ』

つまり自分の上司と認めていないから、電話相手は簡単に『書類上の上司』をこき下ろしている。
だから簡単に馬鹿扱いをするのだ。垣根はそう結論をつけた。

『馬鹿のせいで、私まで上層部に睨まれるのは御免だ。低能なクズはクズらしく隅っこで遊んでいればいいのにな。まぁ奴の一族が『特別に有名』だから、こんな立場につけるのだがね』

「……その一族ってのは……」

『ん？　君も聞いた事はあるかもしれないね。奴は木原一族の一員なんだよ』

狂う歯車

木原一族、垣根も耳にしたことはある。
そのほとんどが研究者である事と、クソッタレな信条を持っている事を。
研究者の中でも一部では有名な一族だ。

『その馬鹿の名前は木原正(きはらただし)。まぁ今回は流石にマズイ事だと理解しているようだ』

「……」

『だが上層部が小言を言った時、あの馬鹿は何て言ったと思う？』

心臓の音が妙に大きく聞こえた。
垣根はその心音を無視して電話の言葉に集中した。
心に覚悟を決め、どんな言葉を言われても動揺しないように精神を落ち着かせていた。
だが、結局は無駄な努力だった。

『実験に失敗はつきものだよ』

想像以上だった。信じられなかった。
あろうことか実験の失敗を上層部に向かって正当化したのだ。
余りの事に、垣根はただ呆然と息を飲むしかなかった。

『ここまでゴミだとね、愛想が尽きるのですよ。ですので、貴方に連絡をして月森兄妹を助けようとしているのですよ。それが君に連絡をした理由です』

「……別に俺じゃなくても警備員とかがいるじゃねぇか」

そう、電話男が垣根に連絡をとった理由は分かった。
だが何故真っ先に自分に来たのだ、その事が新たな疑問となる。
通常、学園都市の治安を守るのは『風紀委員』か『警備員』のどちらかだ。
今回のケースならば、確実に『警備員』に連絡するのが正しい。
なのにそれをすっ飛ばして、最初に垣根へ連絡したようだ。

『本当にそう思っているのですか？』

「何だと……？」

突然男の声が豹変する。
さっきまでは幾分の冷たさはあったが、殆どは事務的な口調だった。
だが、今の言葉は違う。声を聞くだけで寒気がする程の冷淡な声色だった。

『あのゴミが警備員に連絡を入れると思いますか？　殺し合いをショーといって眺めるようなゴミですよ』

「……」

『もし月森兄妹が死んでも、あのゴミは何とも思わないでしょう。
せいぜいモルモットが二つ減った……その程度ですよ』

「じゃあ……」

垣根の脳裏に嫌な想像が浮かぶ。

もし、予想通りなら電話男が言う男の行動は一つしかない。

『ええ、君の想像通りです。あのゴミは証拠隠滅に動いています』

その想像をあっさりと肯定する電話男。

冷徹な声が今はありがたい、そう思った垣根である。

お陰で現実として受け止めれたし、これ以上ない説得力もあったから。

「分かった。今から向かう」

もはや一刻の猶予も許されない状況だ、頭の中をそう切り替える。

はやる気持ちを抑えつつ、垣根は電話相手から有益な情報を引き出そうとする。

見た目は子供でも、大能力者である垣根の頭脳はそこら辺の大人より回転が早かった。

むしろ子供である分、思考能力が他の人間より柔軟であった。

『急いでください。上層部に連絡を取る、そう言ってあのゴミにショーを止めさせています。しかし、それも長くは持たないでしょう』

『何せ月森兄の力がこちらの想像以上だった為に、完全に拘束する事が不可能な状態ですから』

「時間にしてどのぐらいだ？」

『もって二十分。君が能力を使い飛ぶとして、こちらに来られるのが大体二十五分だと予想しています』

『それから月森兄には注意してください。彼は今、薬で精神を狂わ

されています。友人と思って接すると痛い目にあいますよ?』

「わかった。第二三学区だよな、詳しいポイントを頼む」

電話男は垣根に詳細なポイントを口にする。

後は二、三の言付けをした後、垣根の返事をまたず電話を切った。

「待ってろよ、影花……紅音。絶対にお前たちを助けてやるからな!?」

素早く着替えると、垣根は玄関の鍵も閉めず家を飛び出した。

予定より早く二十二分で第二三学区の研究所についた垣根は、早速研究所の中に侵入する。

(電話男の話では、警備体制を完全とは言えないがかなり低めに設定しているはず……)

自動の警備システムは見た目上は稼動しているが、電話男の話では完全にオフ状態になっているとの事。

その為に侵入は簡単に行え、気にするのは警備員のみという状況だ。

(早く影花と紅音を助けないと……!)

一般の研究員は殆ど退避しているのか、廊下で人とすれ違う事すらない。

所々の部屋が無造作に開けられているのを見ると、急いで逃げていった事が窺える。
つまり、それほど危険な状態に影花と紅音が置かれているという事だ。

（……！）

長い廊下を駆け抜けていると、通路の奥から足音が響いているのが聞こえた。
今誰かと鉢合わせはまずいと思った垣根は、手頃な部屋に隠れる。

（気にせずさっさと立ち去れよ……）

少しだけ緊張しながら、垣根は聞こえてくる足音に全神経を集中する。
すると、何やら会話しながら歩いているのか足音に混じって声が聞こえてきた。

「いや全く、あの程度で壊れるとは思いませんでしたよ。全然使えない『モルモット』ではないですか」

「しかし壊れたのは事実です。上層部はこの事にいたくご立腹です。お叱りを受けるのを覚悟しておいてください」

「この優秀な私にお叱りとか、全く何を考えているのですかねぇ」

二人の男が急いではいないがゆっくりでもない早さで歩いているようだ。
片方の声は見知らぬ男、おそらく年齢は四十代前半だと思われる。
しかしもう片方の若い男の声には、聞き覚えがある垣根だった。

（あの電話の男……！　どうやら研究グループに所属しているのは嘘じゃなかったんだ）

若い男の方は先程垣根に電話をかけてきた男の声だった。
遮蔽物がないので男たちの表情を覗くことは出来ない。
だが、電話男が微妙に怒っているのに対して、中年の男は何故そのように怒っているか分からないと言いたげな口調だった。

「我々が優秀かどうか、月森兄妹が必要か否かは我々が決める事ではありません。それを決定するのは上層部です」

「……ふーやれやれ。随分と小さい事に拘るのですね、上層部も」

「研究所一つを全壊、多数の研究員が負傷、月森兄を破壊……流石に上層部も目を瞑る事ができない状態です。これが『小さい』事かどうかは上層部と話し合ってください」

「え？　小さい事じゃないですか。研究所が一つ潰れようと、モルモットが二匹死のうと大した損害ではないかと思いますよ？　優秀な私が生きていれば、それぐらい挽回するのは朝飯前です」

「ですから、それを決めるのは貴方でも私でもありません。決定を下すのは上層部です」

「……ここで口論しても無意味です。さっさと移動しますよ」

それで口論は終わりと言いたげに中年の男、木原正は一人勝手に廊下を走っていった。
足音が聞こえなくなったと理解した瞬間、垣根は壁を全力で殴った。

子供の拳とはいえ、垣根の周りには未元物質が展開されていた。
だから壁がまるで砂糖菓子のように簡単にひしゃげた。

（影花を……紅音を……モルモットだとっ！？　あいつは絶対に殺してやる！？）

爪が食い込んで血が出てこようと垣根には関係なかった。

「落ち着くんだ……と言っても無駄かね、垣根帝督君」

そんな怒り心頭の垣根の耳に男の声が届いた。
誰、なんて判断は不要。先ほど木原と話していた電話の男だと瞬時に理解した。

「ご覧のようにクズの見本だよ、アレは。これほどの損害を出しておきながら、自分の方が上だとまだ思っている。優秀なのはアレではない。周囲にいる研究者たちだ」

「……これが終わったら絶対に殺してやる」

「アレは無能だが、事逃亡に関しては天才だ。だから、雲隠れしたら見つけるのは至難の業だ。早めに見つけるようにしたまえ」

そう言うと電話の男は垣根の返事を待たずに歩き出す。
しかし数歩歩いた所で、足を止めるとポツリと言葉を呟いた。

「月森兄は完全に我を忘れている。月森兄を助けたくば意識を完全になくさせろ。意識がある内はどんな状態でも動こうとするだろう」

「……分かった」

「それから月森妹はまだ生きている。D区画の三十六号部屋に潜んでいるはずだ。早く行って安心させてやれ」

「月森兄を気絶させたなら、第七学区にある病院に連れていけ。そこに学園都市一の名医がいる。彼ならば、月森兄を救う事が出来るだろう」

言いたい事だけ言った電話男は、返答すら期待していないのかそのまま全速力で走っていった。
すぐに電話男の足音も聞こえなくなり、廊下は無人状態へと戻った。

「ああ、助けてやるぜ。影花も紅音も……俺はあいつらを見捨てない！」

廊下を出て壁に書かれている区画の番号を見る。
そこにはC区画―十二号部屋と書かれていた。
そして幸運な事にD区画へいく方向も書かれていた。

「あの電話男が何を企んでいるかわからねぇ。だけどよぅ……あの二人を救えるなら俺は悪魔とだって取引してやるぜ！」

垣根は一直線に目指す、D区画の三十六号部屋に。
紅音と影花を助けるために。

「どうなってるのよ……」

紅音は部屋の死角に隠れていた。
所々汚れており、髪もボサボサの状態である。
彼女が命からがら逃げている事が一目見て分かる姿だった。

「どうして兄貴が……あんな……」

さっきまでの光景を思い出して紅音は肩を抱きしめる。
単なる実験だと思っていた、適当に付き合ってそのまま終わりだと思っていた。

なのにそんな考えは無残にも打ち砕かれた。

（どうしてよ、なんでよ……なんで兄貴はあんな風になっちゃったのよ！）

頭を抱えながら苦悩する紅音。
その目にはうっすらと涙が溜まっていた。
どれほどの恐怖が彼女に襲いかかっているか想像すら難しいだろう。

（助けてよ……お願いだから……）

心の中でひたすら助けを願う紅音。
だが、願い虚しく扉が突然破壊された。
その爆風の煽りを受けて、紅音は為す術もなく壁に叩きつけられる。

「グ……ガァ……」

痛みに耐えながら目を開くと、そこには目を真っ赤に充血させた影

花が立っていた。
もはや言葉すら話せないようで、口から出る言葉は獣のような声ばかりだった。

「……ガァァァァ」

咆哮を上げながら影花は片手を振り上げる。
影花の片手には半透明色をした一メートル近くの『何か』が握られていた。
それは先端が尖っており、まるで槍のようにも見えた。

恐怖と疲労、それから精神的ショックで立つことすら出来ない紅音は、ただ黙って影花の手を眺めていた。
その瞳は絶望に染まっており、もはや彼女が諦めの境地にいる事は確実だった。

「助けてよ……」

それでも彼女は願う。

「助けてよぉ！　垣根ぇぇ！！」

この土壇場で現れる垣根（ヒーロー）の登場をただ願う。

「待たせたなぁぁぁぁ、紅音ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

そして彼女の願いは叶えられた。
影花の体が残像を残すほどブレたかと思うと、思いっきり横の壁に叩きつけられていた。

「ガァァァァァァァァ！！！」

その威力は壁に激突しても留まることを知らず、壁を数枚突き破ってやっと止まるほどだった。

もうもうと立ち上がる粉塵の中に一人（ヒーロー）の男が立っていた。

背中にはメルヘンチックな二枚の天使の羽。

「お……」

紅音は知っている、その翼の持ち主の名前を。

誰にも見せる事のない紅音の心の最奥にあぐらをかいて座っている人物。

いつも一緒で、いつかその背中を自分に預けて欲しいと願う相手。

そう、いつだって自分のヒーローな人。

その名前は……。

「遅いんだよぉ！　垣根ぇ！」

二枚の翼を展開している垣根に、紅音は泣きそうな表情と嬉しそうな表情が混じった顔で叫んだ。

油断の代償

「ちょっと強すぎたかなぁ……」

崩れ落ちる壁を見ながら垣根は乾いた笑いをする。
原型を留めていないほど破壊された壁は、もはや壁の意味すらなしていなかった。
おまけに色々と高級そうな機材まで一緒に破壊してたようだ。

「あー……弁償出来ないぞコレ……」

修繕費が愉快な事になっていると思った垣根は、とっととこの場から逃げる事にした。
そう思った瞬間、垣根の背中に誰かが思いっきりタックルを仕掛けてきた。

「ぐあっ！」

予想外だったせいか、垣根は為す術もなくタックルを食らって床に倒れ伏す。
ビタンっと音がしそうなぐらい、床に思いっきり顔面を叩きつけた垣根。

「……マジで痛い……」

顔を抑えつつ背中の方に視線を向けると、紅音が垣根の背中に顔を埋めていた。
その肩は震えており、彼女がどれほど怖い思いをしていたのか一目で理解できた。

「遅いんだよ……馬鹿……」

どこか安心した感じの声色で紅音は呟く。

「そうか……だがとりあえず離れてくれ。このままじゃ動きにくい」

「あ……うん……」

今の自分たちの格好が恥ずかしいのか、紅音は少しだけ頬を赤くしながら垣根から離れた。

紅音が離れた事によって自由になった垣根は、汚れを払いながら立ち上がる。

「さて、さっさと影花を病院に連れて行くぞ。アイツは薬で精神が狂わされているらしい」

「そうなんだ……あのクソ野郎が……！」

影花の状態を知った紅音が顔に怒りの色を滲ませる。

紅音は何だかんだといって影花を非常に頼りにしている。

その上、たった一人の家族なのだ。

その影花を狂わせた研究者に、他人には想像すら不可能な怒りを紅音は抱く。

「あーあのクソ野郎は俺が殺す。影花と紅音の分も含めておくよ」

「一発ぐらい殴らせなさいよ。あーあの顔を思い出してきただけでムカムカしてきた」

よっぽど腹に据えているのか、紅音は倒れているテーブルをガンガンと蹴り飛ばす。
紅音が普段の調子を取り戻しつつあるのを見て、垣根は少しだけ苦笑した。

「……！」

だがそんなほのぼのした世界も長くは続かなかった。
突然、何かが飛んでくる音がしたかと思うと、半透明色の何かが垣根たちのすぐ側を通りすぎていった。
それは壁を粘土細工か何かかのように、いとも簡単に引きちぎり破壊していった。
見ただけで誰の仕業か垣根には分かった。
こんな事が出来るのは、たった一人しかいない。

「グルルルル……」

「おとなしくオネンネしとけや、影花ァ！」

あちこち血を流しながら唸り声を上げる影花。
すぐに二発目を撃とうと片手を振り上げたが、それより早く垣根の攻撃が飛んでいた。
その攻撃に気付いた時には既に遅かった。
影花は先程と同様、壁を数枚突き破るほどの衝撃を身に受ける。

「アホか。普段の影花ならいざ知らず、今のお前じゃ俺の足元にも及ばないよ」

そう言うと未だ呆然としている紅音の方に垣根は顔を向けた。
一瞬、そう……時間にして僅か数秒の間だけ、垣根は油断していた。

流石にあの二発を食らって立ち上がれるわけがない。
そんな考えが垣根の油断を誘っていた。

そしてその油断が、垣根に絶対的な隙を作り上げてしまった。
まるでそれを見計らっていたかのように、半透明色の槍が垣根の心臓めがけて飛んできた。

「……！　危ない、垣根ェェェェ！！！」

普通の能力者なら気付かなかっただろうが、紅音はＡＩＭ拡散力場を操る能力者。
よって流れの変わったＡＩＭ拡散力場の異変にいち早く気付いた。
その時の紅音が取った行動は、ごく単純な行動だった。

「……あ？」

その出来事は一瞬だった。
そしてその出来事を垣根は信じたくなかった。
何故なら……。

「……ゴホッ……」

自分がさっきまで立っていたところに紅音がいて。

――――　そして紅音の胸には半透明色の槍が突き刺さっているなん

て。

尻餅をついている事を理解して、初めて垣根は自分が紅音に突き飛ばされたのだと理解する。
情けない表情をしながら、垣根は紅音の姿をただ呆然と眺めていた。

「……垣根……だ……大丈夫……？」

そう呟くと同時に紅音は崩れ落ちた。
床に倒れ伏す音を聞いて、理解が追いついた垣根は震えながら叫ぶ。

「あ……紅音ェェェェェェェェェェェェ！！！」

慌てて紅音の元に駆け寄ると、ピシャリと水っぽい音がした。
恐る恐る足元をみると、垣根の視界いっぱいに真っ赤な液体が広がっていた。

「おい……ふざけんなよ……何かの冗談だって言ってくれよ。なぁ……紅音ェ！」

紅音を抱き起こしながら垣根は心の底から叫んだ。
嘘だと思いたかった、何かの間違いだと信じたかった。
だけど手から感じる温かい液体が、今の光景が現実なのだと教えていた。

「うる……さいわよ……ば……か」

どこかホッとしたような、嬉しそうな笑みを浮かべながら紅音は呟く。

「ア……ァ……あ……紅音……？」

その時、瓦礫の向こうから影花が姿を表す。
手には半透明色の槍を持っていた。
しかし紅音の姿を見た瞬間、真っ赤に染まっていた瞳に感情の色が灯る。

「……馬鹿……な……俺が……俺が……」

紅音の胸に深々と刺さっている半透明色の槍を見て、影花は全てを理解した。

――――自分が紅音を殺したのだと。

「そ……そんな……ウワァァァァァァァァ！！！！！」

頭を抱えて唸った後、影花はその光景を信じたくなかったのか逃げるように走り出した。
あちこち壁や瓦礫に足を取られながらも影花は走り続けた。
やがて足音が聞こえなくなった頃、紅音はボソリと言葉を口にした。

「馬鹿……兄貴の……せ……いじゃないって……」

その言葉が紅音の本心だと言えるほど、彼女の声には恨みや憎しみなど感じられなかった。
むしろこんな状態になっても、影花を心から心配しているかのように聞こえた。

「ね……ねぇ……垣根……お願いが……あるの」

「……何だ……」

紅音を抱きしめながら垣根は口を開く。

垣根はこの時ほど自分の頭がいい事を恨んだ。

紅音の怪我はもはや助かるとかそんな事を言えるレベルを超えていた。

彼女には明確な『死』がつきつけられている状態だった。

「兄貴を……助けてあげて……きっと……今も苦しんでいる」

「任せろ、紅音。絶対に影花を助けるから……だから……」

だから死なないでくれ、その言葉を言おうとしたが言葉にはならなかった。

しかし紅音には伝わったのか、嬉しそうな表情をしながら笑った。

「ねぇ……垣根……どうして私が……貴方と勝負……してたか……知ってる？」

「……いや」

「そっか……」

少しだけ寂しそうな声色で紅音は呟く。

紅音も薄々分かっていたけど、それでも知ってほしいなという願望があった。

そして紅音は自分の想いを口にした。

「貴方が……好きだから……どうしようもないぐらい……大好きだ

から……」

愛する心を、大好きだという想いをのせて紅音は言葉を発する。
もしも紅音が発した言葉を、他人が聞いていたらこう思うだろう。
どれほど愛していたのか、彼女の言葉を聞けばはっきり分かる、と。

「だから……貴方に勝って……対等に立てる……女になりたかった……貴方の背中を預けてくれ……る女になりたか……った……！」

「紅音……」

「ふふ……こんな……時に言うのは……卑怯よね……」

口から血を流しながら、それでも己の心を語りきった紅音は満足気な表情をしていた。

「心理定規が……羨ましかった……あの……子は……垣根の心に……深くいた……から」

ゴホゴホと咳き込みながらも、自分の心を最後まで吐き出そうとする紅音の姿を見て、垣根は言葉を失っていた。

「だから……せめて……」

その時、もはや死にかけの体とは思えない程の早さで紅音が垣根の頭を掴む。
そのまま自分の方に引き寄せると、垣根にそっと口づけをする。

「！」

それは触れる程度の口づけ。
時間にして数秒にも満たないほどの短い時間だった。

「垣根の……ファーストキス……頂いておくよ……」

もうすぐ死ぬのが嘘なほど、紅音は晴れやかな笑顔を浮かべる。
そして血で濡れた手で垣根の頬を撫でると、眩しい笑顔を浮かべて囁いた。

「かき……ね……わた……し……しあわせ……だよ」

「紅音ぇ！」

頬に当てられた紅音の手を、垣根はぎゅっと握り締める。
そこで気付く。顔がくしゃくしゃになる程涙を流していた事に。

「だって……好きな……人に……抱きしめ……られっ！……ゲホゲホ……て……しねる……か……ら」

紅音の瞼がゆっくりと閉じられる。

「あり……がと……う……か……きね……だいすき……だ……よ……」

そう呟いた後、紅音の全身から力が抜けていった。
頬に当てられた手もするりと床に落ち、コトリと小さな音がした。

その音は紅音が息を引き取った事を意味していた。
彼女の表情は、子供とは思えないほど晴れやかな笑みを浮かべた死

に顔だった。

「……おい、紅音……」

状況が理解できなかった垣根は紅音の体を軽く揺する。
その揺れで紅音の顔がカクリと横を向いた。
それだけで、紅音がどうなったか何て簡単に理解できた。

「なぁ嘘だろ……おい、冗談だと言ってくれよ！」

その意味を理解したくなかった垣根はなおも紅音の体を揺する。
しかし、彼女の口から言葉が発せられる事はなかった。

「何でだよ、俺たちはずっと一緒だろ！　ずっと四人一緒だろう！？」

力いっぱい紅音の体を抱きしめながら垣根は叫ぶ。

「なんでだよ！？　何でお前が死ぬんだよぉ！！！」

悲しみを全身で表現するかのように、人目も気にせず垣根は慟哭した。

「紅音エエエエエエエエエエエエ！！！」

垣根がそう叫んだ瞬間、不思議な光が紅音の体から発せられた。
その光に気付いた垣根が視線を向けると、彼女が光の塊となっていた。
そしてまるで溶け込むかのように垣根の体の中に吸い込まれていった。

光の塊が垣根の中へ完全に溶けこむと、さっきまであった紅音の体も血も、何もかもが消えていた。
そこにあったのは、ただの瓦礫の山だけであった。
余りに非科学的な現象に、しばし垣根は呆けた表情をする。

「……わかったよ、紅音……」

だが紅音が光の塊となったのも、その光が自分の中に取り込まれた理由も理解した垣根は、その場からそっと立ち上がった。

「お前は死んだんじゃねぇ。俺の中で共に生きてるんだな」

そう呟いた垣根の背中には『四枚』の翼が展開されていた。
その内の一枚、上部にある翼に垣根はそっと触れる。

指に触れた翼の感触は暖かく、そして優しい感じがした。
まるで紅音がその翼となって垣根の背中を守っているかのようだった。

「待ってろよ、影花！　テメェを必ず苦しみから救い出してみせる！」

拳に力を入れると垣根は走り出す。
今も苦しんでいる影花を救うために。

親友との別れ

長い通路を駆け抜けていく間に、あちこち破壊されている事に垣根は気付いた。
あちこちの壁や扉が崩れ落ちており、破壊力の凄まじさを物語っていた。
おそらく影花が暴走して破壊し続けているのだろう。

「くそっ！　影花の野郎どこに行きやがった……」

無差別に破壊されているので、それが影花の進行方向にあったせいか、それとも影花の力が撒き散らされて破壊されたのかが分からなかった。
一体どちらに進めばいいのか、垣根には全く判断がつかなかった。

（どっちに行けばいい！）

頭を掻き毟りながら垣根は考えを纏めようとする。
しかし、焦っているのかうまく思考が纏まらずただ時間だけを浪費するだけであった。

「……ん？」

すると上部にある翼が、まるで自らの意思を伝えるかのように、ある方向を指し示した。

「そうか……そっちに影花はいるのか、紅音」

紅音が示してくれた道に間違いはない、そう考えた垣根は翼が指し

示す方向に走り出す。
その足取りには迷いなど微塵も感じられなかった。

やがて部屋が沢山ある場所までやってくる。
壁を見るとF区画と書かれており、D区画から少しだけ離れていることがわかった。
そしてその区画は他の区画とある違いがあった。

「……これは影花の血か……？」

F区画の壁にはあちらこちらに血がこびりついていた。
まだ時間がたっていないのか、所々血が壁にそってたれていた。

「いや……量が多すぎる。こんだけ血が無くなっていれば影花は動く事すら出来ないはずだ」

一瞬影花の血かと思ったがすぐに考えを改める。
血の量が人一人分にしては多すぎるのだ。
その上、影花はまだ子供だから血液の量も大人よりは少ない。

「となれば……影花が殺した奴の血って訳か……」

忌々しい表情をしながら垣根は吐き捨てる。
今の影花が暴走している理由が、嫌というほどわかったからだ。

勝手に精神を狂わされ、その結果影花は紅音を殺してしまった。
こんなフザけた結末を招いた研究者たちが酷く憎いのだろう。
だから手当たり次第にいる人間を殺しているのだ。

（急がないと！　アイツは能力を乱発するような事が出来ないはず

だ。これ以上無理をすればアイツの体が崩壊しちまう！？）

影花の能力は複雑な演算をする事が多い。
だからスーパーコンピューターがフル活動する様な演算を行う事などザラだ。
いくら薬で精神を狂わされていても、元のスペックが上がる訳ではない。
過剰に能力を使い続ければ、待っているのは脳のオーバーヒート状態しかない。

つまりそれは、影花の脳が限界を超えて壊れる事を意味していた。

「間に合ってくれよ！」

先ほどよりも早く走り出した垣根の頬には、一筋の汗が流れていた。

「ぐぎゃあああああああああ！！！」

F区画にある一室で、男性の断末魔が木霊した。
その部屋は、他の部屋より少し広くまた沢山の機材が所狭しと置かれている、
だが、その殆どは破壊されており、もはや無用のガラクタになりさがっていた。

「……コロス……」

死んだ男性の近くに、先ほどと同様に目を真っ赤に充血させた影花が立っていた。
その表情は訓練された警備員すら恐怖に慄く程、憎しみと怒りの表情を刻んでいた。
誰もが逃げようと考えた。だが、入り口に影花が立っており逃げる事は不可能だった。

「今までのも全部データとして取っていたのか、あぁ？」

「そ、そうです。私たちは木原教授に言われて」

機材の近くにいる女性が悲鳴に近い声で叫ぶが、最後まで言い切る前にその顔が爆ぜた。
彼女が言い訳を述べる前に、影花の槍が女性研究員の頭を撃ちぬいていたのだ。

「言い訳なんぞ……俺の前では無意味だ……」

その声色は本当に子供が出したのかと疑えるほど、怒りと憎悪に満ちていた。
研究員たちはすっかり怯えており、呼吸するのすら躊躇うほどだった。

「その木原ってのはどこにいる？」

「し、知らないんだ！　木原教授は我々に行き先を教えずに立ち去ったのだよ！」

「へぇ……片足でも失えば白状するかぁ？」

そう言って本当に男性研究員の片足を消し飛ばす影花。
一連の流れに、影花が躊躇いや良心の呵責で動きを止める事はなかった。

「ぎゃあああああああ！！！」

足を失った痛みに研究員は血をまき散らしながら悶え苦しんだ。

「痛いか？　痛いよなぁ……片足を失えば痛いのは当然だな」

悶え苦しむ研究員を冷徹な目で見下ろしながら語る。

「でもよぉ……俺の心はもっといてぇんだよ……」

そう語りながら半透明色の槍を男性研究員に向ける。

「おいおい、そこまでにしとけよ」

槍を投げようとした影花の背後から誰かが声を投げる。
その声に影花は振り返る。
誰か、なんて考えるまでもないほど、そこには影花の予想通りの人間が立っていた。

「垣根……」

「そんな雑魚を殺しても意味がない。無駄にお前が罪を重ねる必要はねぇ」

「お前も俺を止めるのか？」

そう言うや否や、影花は半透明色の槍を躊躇いなく垣根に投げる。
だが、その槍が届く前に垣根の上部にある翼が、まるで垣根を守るかのように槍を弾き返す。

「！」

槍を弾かれた事により、動揺した影花は数歩後ろに下がる。
それに呼応するかのように、垣根が数歩前に足を進める。

「ああ、止めるね。お前を止めるって約束したんだ」

「……俺はもう汚れた存在だ。これ以上罪を重ねようと構わん」

影花は再び槍を作り上げると、今度は同時に二本の槍を投げる。
だが、やはり先ほどと同様で上部の翼が影花の攻撃を全て弾き返していた。

「……違うな、影花。紅音を殺したのはお前じゃない。この俺さ……」

「何……？」

再び槍を投げようとした影花だが、垣根の言葉に反応して体の動きを止める。
訝しげな視線を向ける影花の顔を見ながら、垣根は己の罪を告白するかのように語る。

「あの時、俺が油断しなければ紅音は死ななかった。全ては慢心した俺の弱さが招いた結果だ。全ての罪はこの俺にある」

「……」

「だからお前が紅音の為にその手を汚すっていうなら……この俺に怒りを、憎悪を叩きつけろ！」

両手を広げ、まるで迎え入れるかのような姿の垣根。

その場にいる誰もが、垣根の献身的な姿に目を奪われていた。

木原が憎いはずはない、なのに垣根はそれを押し殺して影花の為に憎悪を受け止めようとする。

「うぐっ！……」

呆然としていた影花だが、突然頭を抱えて苦しみの表情をする。

「か……きね……ぇ！　頼む！　俺を……俺をぉ！」

頭を抱えて苦しみながら影花は言葉を発する。

「俺を殺してくれぇ！」

垣根にとって最悪の結末を招く言葉を。

「……ふ、ふざけんなよ！　何でお前を殺す必要があるんだ！？」

余りの願いに垣根は声を大にして叫ぶ。
だが、影花はなおも苦しみの表情をしながら言葉を発する。

「もう……俺はダメなんだ……怒りが……憎悪が体を支配して……
今も全てを破壊し尽くしたい衝動に駆られるんだよ！」

「なん……だって……！」

その時、影花の表情を垣根は見た。
その表情は、憎悪と怒りと、苦しみと悲しみという色々な負の感情をねり混ぜた表情だった。

「頼む……このままじゃ……俺は罪のない人間まで巻き込んでしまう……ダカラァァァァ！」

一際大きな咆哮を上げたと思うと、影花を中心に半透明色の槍が吹き荒れる。
方向などデタラメで、あちこち槍が飛ばされていく姿を見て、垣根はある一つの結論に達した。

――――影花は能力を暴走させている、と。

その暴走の破壊力は凄まじく、電子機器や壁を紙くずのように吹き飛ばしていた。
当然、生身の人間など耐え切れる訳もなく、その場にいた研究員は全員死んでいた。

「……何でだよ……俺たちは……ずっと四人一緒だったのに……何でだよ！　どうしてだよ！？」

吹き荒れる槍を防ぎつつ垣根は大声で叫ぶ。

「紅音を失って！　更にお前まで失ってしまうのかよ！？」

こんな結末なんて望んでいなかった。

影花と紅音を助けて終わりというハッピーエンドな結末だと信じていた。

子供の頃から憧れていた、友が困った時に駆けつける主人公（ヒーロー）になれると信じていた。

なのに。

「ウガァァァァァァァァァ！！！　頼むぅ！　垣根ェェェェ！！　俺が完全に暴走する前にぃ！」

「誰も望んでいない結末なのに！　どうしてなんだよぉ！！　ちくしょぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

悩んで、叫んで、怨んで、憎んで、泣いて、そして後悔しながら垣根は影花めがけて一直線に飛んだ。

「影花ァァァァァァァァァ！！！」

「垣根ェェェェェェェェェェ！！！」

向かってくる垣根に対して、暴走した影花の槍が容赦なく襲いかかる。

だが、その槍は全て上部の翼によって叩き落されていた。

そして二人の距離がゼロになった時、垣根の右腕が影花の心臓を貫いた。

この世から音がなくなったのでは、そう思えるほど部屋は静寂に包まれていた。
聞こえてくるのは、ポタポタと何かが滴るような音だけ。

「ガハッ……垣根……ありがとうな……」

「ばっか……やろうが……」

滴る音は二つ、一つは垣根が流す涙が床に落ちている音。
そしてもう一つは、影花の胸から大量に流れる血が床に落ちている音だった。

「へ……へへ……これで俺の百二十勝百十九敗だ……俺の……勝ち逃げだな……」

「違う……だろうが。俺が百二十勝で……お前が百十九勝だろうが……」

「そっか……悔しいなぁ……お前に最後まで……勝てなかったな……勝負も……心理定規の事も……」

影花の表情は今から死ぬのが嘘なほど穏やかな表情をしていた。
反対に、垣根は涙でくしゃくしゃな表情だった。

「おいおい……男の泣き顔で見送られても……嬉しくないぞ……スポーティーなお姉さんじゃないと……嫌だぜ……」

「いや……巨乳のお姉さん……だろうが」

涙でうまく言葉が発せられないのか、時々つまりながら垣根は言葉を口にする。

そんな垣根を見て、影花は穏やかな笑みを浮かべていた。

「そうか……じゃあ……たまには……探してみるか……」

「ああ……そんで紅音に怒られてこい……」

その光景を想像したのか、影花はどこか楽しそうな困ったような笑みを浮かべた。

影花の顔を直視出来なくなった垣根は、思わず目を瞑る。

だが、目を瞑っても涙が止まる事はなかった。

「な……にを……して……るの……帝督」

そんな悲しみにくれる垣根の背中から、決してこのような所に現れるはずのない人物の声が聞こえた。

その声を聞いて垣根と影花はギョッとした。
そして同時に思った。

――――何故、心理定規がここにいるのだと。

垣根は恐る恐る後ろを向く。
そこには、呆然とした表情をしている心理定規が立っていた。
彼女の視線は、影花の胸に深々と突き刺さっている垣根の腕に集中していた。

「な……んで……？」

信じられないものを見たような表情をしながら呟く心理定規。
かすれるような声で呟く彼女は、遠くから見ても震えている事がはっきりとわかった。

「こ……れは……」

影花が何かを言おうとしたが、その前に口を垣根が強引に塞いだ。
そして泣きそうな表情と、無理やり作ったあくどい表情を浮かべながら言葉を発する。

「何を？　見て分からないのか？」

まるで小馬鹿にしたような口調で、垣根は心理定規を見ながら語りかける。
その瞬間、心理定規は目を見開いて驚愕する。

「見ろよ俺の背中を……俺は遂に手に入れた、超能力者の力を！」

四枚の翼を広げながら垣根は高らかに宣言する。

まるで自分に何かを言い聞かせるかのように。

（馬鹿……野郎……そんな泣きそうな声で言っても……説得力がねぇぞ……）

影花にはすぐに分かった。垣根が何をしようとしているかを。

だが、既に体はまともに動かず、唯一動かせれる口も垣根に塞がれている状態だ。

その為に彼は垣根の行為を止めることが出来ない。

「なぁ影花……紅音の敵を討てずに死ぬってどんな気持ちだ？」

「！　い、今……な……何て……」

先ほど垣根がいった言葉が信じられず、後ろに数歩下がる心理定規。

その背中が壁に接触した時、垣根はゆっくりと口を開いた。

「毎日毎日うっとおしかったんだよ。口を開けば勝負勝負って……余りにもうっとおしかったから、勝負してやったよ。殺し合いっていう勝負をな！」

「……！」

「そしてそれに逆上した影花は、ごらんの有様さ。所詮は大能力者、超能力者になった俺の敵じゃねぇ」

はじめは呆然としていた心理定規だが、徐々に怒りの表情を顔に刻んでいった。
その瞳はもはや幼馴染を見る瞳ではなく、親の敵を見るかのような憎悪の篭った瞳だった。
奥歯を噛み締めながら、心理定規は怒りを垣根に叩きつけるかのように叫ぶ。

「人殺しっ！？」

涙を流しながら心理定規は垣根を罵る。
その言葉を受けて、一瞬だが垣根は辛そうな泣きそうな表情をする。

「……あァ……俺が殺した……」

だが、それも一瞬。すぐに愉快そうな笑みを無理やり浮かべる。

「だからどうした？　超能力者を生む礎になれたんだ、むしろ喜んでほしいな」

「帝督……なんて……」

少しだけ俯いていた心理定規だが、やがてボソボソと声を震わせながら呟く。
そして顔を上げるとあらん限りの憎しみを込めて叫んだ。

「帝督なんて大っキライ！」

そう言うと心理定規は脇目も振らずその場から走りだした。
全速力で走っているのか、その足音はすぐに垣根たちの耳に届かなくなった。

完全に心理定規の足音が聞こえなくなったのを理解すると、垣根の体は自然と力が抜けていった。

「あぁ……俺を恨め……それでお前が生きてくれるなら……俺は十分だ」

「垣根ェ！」

影花は死ぬ体にムチを打って動かし、垣根の胸ぐらを掴む。
その瞳には怒りを滲ませていた。
垣根はその瞳を見ただけで、影花が何に怒っているかすぐに理解する。

「……ダメなんだよ。俺と一緒にいたら……アイツまで不幸になる」

「……それでも……！」

「全ての責任は俺にある。だから……お前が罪を感じる事はねぇ……」

もう一度声を荒げようとした影花だが、垣根の瞳を見て言葉を失った。
その瞳は、希望も夢も、輝く未来も、明日すらも完全に捨てた男の瞳だった。

「俺はお前たち二人を殺した最低の人間だ……」

全てを捨てた男の表情は、驚くほど無表情だった。

「……約束しろ、垣根！」

だが、それでも影花は納得しなかった。
垣根がどれほどの後悔を感じていようと、何もかも捨てようとしても。

だから影花は最後の力を振り絞って言葉を発した。

「絶対に心理定規を守るって……どんな事があろうと守ると誓え……」

「影花……」

「誓え、垣根！　それともお前は……親友と交わす約束すら捨て去るようなゲスな人間に成り下がるつもりか！？」

垣根は影花の瞳を見て、そして迷いなく答えた。

「あぁ……俺がどれほど汚れようと……心理定規だけは絶対に守る」

「男と男の……約束だぜ……」

脂汗を額に浮かべ、口から血を滴らせながら影花は笑った。
その表情を見て垣根は泣きそうになりながら笑った。

「垣根……俺は……俺たち兄妹は……お前と心理定規に出会えて……幸せ……だ……ったぜ」

そう呟いた後、垣根の胸ぐらを掴んでいた影花の手がするりと離れた。
力が抜けたような、だらりと下がった影花の腕を見て垣根は理解す

る。
影花は紅音の元に旅立ったのだと。
その影花の表情は紅音と同様、子供とは思えないほど穏やかな死に顔だった。

「……畜生……かっこ良すぎるんだよ、テメェ！」

ポタポタと涙を流しながら垣根は死んだ影花に向かって叫んだ。
すると影花も紅音と同様、体が急に光りだすと一つの光の塊になった。
そして紅音と同じように、垣根の中へと溶けこんでいった。

「お前たち兄妹は……ずっと一緒だ……俺の中で共に生きよう……」

影花の光が溶け込んだ場所を、優しく撫でながら垣根は囁いた。

「ちょっとばかり心理定規と離れるが……勘弁してくれ」

涙の後を残した顔を上げると、垣根は出口に向かって歩き出す。

「まずは……お前ら二人を弄んだあのクソ野郎に復讐だ」

そう囁く彼の背中には『六枚』の翼が展開していた。

影花と紅音の二人が死ぬという事件が起きた翌日。
人の気配を感じた紫穂は、ゆっくりと目を開く。
警戒しながら部屋を調べると、いくつか不可解な事がわかった。

一つ目は、彼女の部屋の近くまで血の跡がついている事。
二つ目は、このマンションに住む悪ガキどもが一人も帰ってきていない事。
そして三つ目は、いつも夕食をとっているテーブルの上にノートの切れ端があった事。

ノートの切れ端を手に取り視線を落とすと、書き殴ったような乱雑な文字はこう書かれていた。

『心理定規を頼む』

それだけで紫穂は何があったか理解した。だが、気付くのが遅すぎた。
慌てて垣根の部屋に駆け込んだ紫穂の目に、荒らされた後のような垣根の部屋がうつった。
調べてみると、垣根を証明するのに必要な書類と最低限のモノだけがなくなっていた。
だが紅音や影花、心理定規との思い出の品は一切手付かずで、何もかもが残されたままだった。

「あの……馬鹿……」

グシャリとノートの切れ端を握り潰しながら紫穂は呟く。
正確に何があったかなんて知るすべはない。
だけど、垣根が全てを捨てて何かをしようとしている事だけは理解した。

「……いつか、帰ってきなさいよ……馬鹿ガキども」

「あの非科学的な光景は何度思い返しても理解できねぇ……」

垣根はあの事件の事を包み隠さず心理定規に話した。

どのような気持ちで、何故そのような言葉を口にしたのか、何もかもを。

「やっぱり……あの時の言葉は嘘だったのね」

どこかホッとしたような、安心したような表情をしながら心理定規は言った。

「あぁ……あの時はお前が失意のあまり死んでしまうんじゃないかって……思ってな」

どこかバツが悪そうな表情で、垣根は心理定規に嘘をついた理由を答える。

心理定規もまた、何か思うところがあったのか、それ以上は何も尋ねなかった。

「だから……その花は紅音さんと影花さんに……？」

垣根が足元に置いている花束は、献花の為に用意した花束だったの

だ。

「あぁ……アイツらは今も俺の中で生き続けている。だけどよ……骨も何も残っていないけど、アイツらの墓は用意してるんだよ」

「第一〇学区ね……でも骨も何もないなら、一体何を入れているの？」

そう、垣根の言葉通りなら影花と紅音は光の塊となって垣根の中に溶け込んだはずだ。
その後に死んだ二人の体は残っていなかったというのだ。

「覚えているか、心理定規。俺と影花が大能力者になった時、四人でお揃いのジャケットを作ったのを」

「……ええ、覚えているわ。貴方と影花が背中につけるデザインで最後まで揉めていたわよね」

どこか懐かしそうな表情をしながら心理定規は語る。
その時は、こんな薄汚れた世界で生きていく事なんて想像すら出来なかっただろう。

「よく覚えているな。俺が星マーク、影花が変なひげの親父だったよな」

「影花は神話とかその手の話が大好きだったからね。アレは何でもゼウスっていう神様らしいよ？」

「そうなのか……っと悪い、優菜。つい懐かしくてな」

そこで話の輪に入ってこれていない優菜に、気付いた垣根は申し訳なさそうな表情をする。
だが、優菜は二人を見守るような優しげな表情をして微笑んでいた。

「いえ、気にしないでください。二人を見ているだけで、わかります。二人にとって影花さんと紅音さんが、どれほど大事な存在だったのかを……」

「……そっか……」

そう呟くと垣根は目を閉じてソファーに深く座った。
彼の瞳の裏には、子供の頃の光景が蘇っているのか幸せそうな表情をしていた。

「……さて、あの事件から数年。俺は暗部組織に身を堕としていた」

暫くそうしていた垣根だが、やがてゆっくりと目を開いた。
そして心理定規の方を向く。

「その時は二度と会う事はないと思っていた心理定規と……俺は再会した」

再会

影花と紅音の事件から数年後、当麻と垣根が出会う二年ほど前の頃。
学園都市は昨日と変わらず今日を過ごす学生で溢れかえっていた。
だがあの時と違うのは、学園都市には七人の超能力者が存在している事だ。
数すら不明だった昔と比べれば、それなりに情報が公開されていると言えよう。
と言っても本人の名前や能力名などは殆ど分からない。
一般の学生が知っているのは、次のようなレベルでの情報で通り名みたいなものだ。

最強と謳われている第一位。
常識が通用しない第二位。
努力を重ねて超能力者になった第三位。
学園都市最強の破壊力を誇る第四位。
女王サマと呼ばれる第五位。
存在自体が謎に満ちている第六位。
研究者すら匙を投げるほど謎の力を持つ第七位。

広告塔の第三位以外は、殆どが謎に満ちている超能力者たちだった。
しかし第二位のみ、他の超能力者たちと違って一つだけはっきりしている事があった。

――――第二位は他の追随を許さないほど研究者嫌いで有名だと。

そんな噂とは違う確定的な情報に、学生たちはあれこれ推測や憶測を口にした。
そのどれもが、単なる推測というよりは酷いレッテル貼りに近かっ

たが。

そして噂に興じる学生たちが普段通らない裏路地の場所や、監視の網を抜ける場所。

そこには『表』の平和な学園都市の世界とは違う、『裏』とも言える世界があった。

誰もが『表』で生きる事を放棄した者たちが存在する世界。

当然ながらそこに住む人間たちは、非合法な事に手を染めている者ばかりであった。

「た、助けてくれ……！」

そんな暗闇の世界に、一際目立つ風貌をした男がいた。

「……」

外見はチンピラと新人ホストみたいな顔つきをしていた。

だが、何よりも彼の風貌で一番目立つのは背中に展開されている『六枚』の翼だろう。

多少メルヘンチックにも見える六枚の翼を持つ男。

その男は目の前で命乞いをする人間を、ただ無表情に見下ろしていた。

「ぐぎゃぁ！」

命乞いをした男の頭を、男は下段にある翼で叩き潰す。

その表情は驚くほど無表情であり、まるで道端に落ちている空き缶を潰すような感じに見えた。

全てが終わると、男は懐から携帯電話を取り出し通話ボタンを押す。

「終わったぞ」

淡々と事務的に言葉を発する男。

『ご苦労様です、垣根帝督君』

そして電話の相手もまた、ただ事務的に言葉を発していた。

男、垣根もまたそれが普通だと思っているようで、特に何も感じていなかった。

「始末は下部組織の人間を使え。俺はもう帰って寝る」

『分かりました。まぁ分かっていると思いますが、道中関わってきた研究者を殺さないように』

「それはソイツ次第だ。俺が大丈夫でもアイツらがダメだったら死ぬだけだ」

背中に展開している翼をしまいながら、垣根は電話相手の言葉に返事をする。

すると、電話の向こうからため息を吐いたのか、疲れたような息を吐き出す音が聞こえた。

『やれやれ、昔から変わりませんね』

「アンタもな。あの事件の関わりがこういう繋がりを生むとは、人生何があるか分からんな」

『……そうですね。でもまぁ、出来れば穏便にお願いします。木原数多の時なんてあちこちに手を回して、何とか穏便に事を片付けれ

たのですから』

「あー、あの第一位を作り上げて、調子にのってたおっさんか。悪いな、木原って聞いて『二人』が暴走しちまったよ」

二人、という言葉を呟く時だけ垣根はどこか優しげな表情をしていた。

だがすぐに無表情の顔をすると、淡々とした口調で語った。

『あの時の君は輝いていましたからね。木原数多の返り血で、ですけどね』

「いやぁ何か『超能力者の思考なんて簡単に読める』みたいな発言をするのでね。ついつい鍛え上げた拳でボッコボコにしちゃったよ」

その光景を思い出したのか、垣根が少しだけ唇を歪ませながら笑う。

普通の人が見れば、腰を抜かすほど垣根の表情は歪んだ歓喜に満ちていた。

『第一位と違い、君は体を鍛えていますからね。木原数多も鍛えているようですが、どうやら君には叶わなかったようです。まぁ驚異的な身体能力と第二位の能力である『未元物質（ダークマター）』を持つ君相手では当たり前ですが』

「あいつは第一位に特化してるんだろう？　そもそも俺の事を全然知らない癖に勝てるわけねぇっつーの」

『だからと言って未元物質（ダークマター）を使って変な必殺技を撃たないでください。研究所にあった高価な機材が全壊したではありませんか』

「あー悪い……つい、な」

流石にやりすぎたと思ったようだが、その時は既に遅すぎた。
研究所が殆ど破壊されており、高級な機材もまた全壊していた。

『まぁ安心しなさい。修繕費は君の奨学金から引き落としておきましたから』

「おい！　それのどこが安心出来るんだよ！　ったく……でもまぁ、やっぱ止まらないわ」

しかし垣根には『木原』という姓を持つ相手に、冷静に対処する事は出来なかった。

『いえ、単に木原一族程度ならボコボコにするのは構いません。ただアレが統括理事長様直属の暗部組織に所属しており、尚且つリーダーなのが大きな問題になった原因です』

「……そこは止める所じゃないのかよ」

電話男の言葉に思わず突っ込む垣根。
彼の立場で言えば、垣根が極力問題を起こさずに暗部組織の仕事を全うするよう制御するのが役目なはず。
なのに、電話男はそれと反対の事を平気で口にしたのだ。

『無理に君を抑えこんで暴走されても困ります。それよりは、擬似的な餌をぶら下げて誘導した方が幾らかマシです』

「それを本人に言うのはどうかと思うぞ……」

『私は一向に構いません』

「俺が構うっつーの！？　ったく、それでよく『スクール』の制御役をやれるよな」

『人生経験の違いですよ、垣根帝督君』

垣根の突っ込みも、淡々と切り返す電話男。

二人の会話は上下関係というより、少しだけ歳の離れた友人という風にも見えた。

「あーはいはい、まぁ俺は帰って寝る」

『おや、残念ですね。まぁお休みなさい、垣根帝督君』

電話男はそう言った後、垣根の返事を待たずに通話を切った。

最後まで淡々と、一切の感情を感じさせない口調で。

「さーて、どのアジトで寝るかなぁ……」

そう呟いた垣根は、裏路地の更に闇の向こうに歩いていった。

すぐに彼の姿は暗闇の中に溶け込んでいく。

今日も学園都市は表の平和な世界と同時に、人が簡単に死ぬという裏の世界が存在していた。

「ちくしょう……寝ていた所を起こしやがって……」

適当なアジトの一つに戻って数時間後、電話の男が仕事の電話をしてきた。

今日はもう何もない、と言っておきながら舌が乾かないうちにこの有様であった。

「過労死するっつーの」

何かの嫌がらせなのか、垣根が寝ていたアジトとは正反対の方向にあるアジトに集合を命じてきた。

余りに面倒なので。サボろうかなと思った垣根であるが、電話男が最後に奇妙な事を言ったのだ。

『今回は必ず来なさい。でないと、君は後悔するでしょうね』

「……後悔……ねぇ」

垣根は電話男がいった後悔なんて味わう事ないと思っていた。

何にも期待を持たない彼には、信じて失敗したとか後悔したなんて感情すら沸かない。

事実、何度か無能力者が絡まれている現場を見たが、彼は風紀委員に通報する事も、また現場を止めるような事すらせず、ただ無関心に真横を通りすぎていった、

そうして歩き続けてアジトについた垣根。

「……ん？」

さっさと部屋に向かおうと廊下を歩いていると、途中で男女の姿が

見えた。
女の方は見覚えがないが、男の方には見覚えがあった。

「チャラ男君かよ」

暗部組織『スクール』のメンバーで、垣根いわくチャラ男君。
いつもヘラヘラしてて、明らかに強いものに媚びを売るタイプだ。
だが、自分が出世する為なら媚を売っている相手でも平気で背後から殺すような存在だとも見ていた。
能力は大能力者一歩手前らしいが、垣根は使えない粗大ゴミという評価だった。
そもそもチャラ男がどんな能力を使えるかすら知らないが。

（使えないゴミの上に、見知らぬ女を連れ込んでるのかよ）

影によって女の顔は見えないが、服装からホステスか何かだと思っていた。
近づいていくと、徐々に二人の会話が聞こえてくる。
どうやらチャラ男がドレス女をナンパしているようだが、ドレス女は明確に拒否の意思を伝えている。
だが、それでもチャラ男はしつこく食い下がっているようだ。

「チッ。おい、邪魔だ」

通行の邪魔だと思った垣根は、面倒くさそうに二人に声をかける。

「あぁ？　今いい所」

何か熱が入っていたのか、チャラ男は声をかけてきた人物が垣根だと気付かずに暴言を吐きながら振り向く。

「オイ糞ガキ、テメェ誰に向かって口聞いてるんだコラ？」

だが最後まで言葉を発する前に、彼はその命を落としていた。

向けられた敵意に反応した垣根の手によって。

断末魔も何もあげる暇すらなく、チャラ男の体は壁にシミを作る存在になり果てていた。

「面倒くせぇ」

目の前に転がる肉食加工品（ひとだったもの）を見下ろしながら、垣根は懐から携帯電話を取り出す。

そのまま通話ボタンを押すと、三コールもならないうちに目的の相手に繋がった。

『なんですか？　君のいうチャラ男でも殺してしまいましたか？』

「お前は精神系能力者か。あー、ついムカっと来てチャラ男を殺した。処分を頼みたい」

『まぁ予想はしていましたからね。『彼女』が相手となれば、貴方がそう動くと思っていましたから』

「『彼女』？」

電話男の言葉に垣根は眉をひそめながらオウム返しのように尋ねる。

すると、その答えが意外だったのか電話男は珍しく感情を感じさせる口調で語った。

「もうそちらに到着したと報告を受けていますが？」

そして電話相手は垣根にとって衝撃的な事実を口にする。

「君の大事な幼馴染である心理定規君が」

電話男の言葉を正確に理解できなかった垣根は、携帯を耳に当てたまま固まっていた。

そんな垣根の近くにいたドレス女が、躊躇いがちな表情をしながら口を開く。

「て、帝……督……？」

その声が決定打だった。

忘れられるわけがない、だが二度と会う事はない。

そう思っていた幼馴染との予期せぬ再会を果たした垣根だった。

困惑

心理定規とまさかの再会。
その事が、滅多な事では動揺しない垣根の心を激しくかき乱した。

「……」

「ひ、久しぶり……だね、帝督」

改めて垣根は目の前のドレス女、心理定規をよく見る。
顔つきはあの頃の面影を残しつつも、可憐な少女の顔立ちになっていた。
服装もフリル系というより、真っ赤で派手なドレスに身を包んでいる。
背中は分からないが、おそらく殆ど露出しているのだろう。
まるでホステスがするような格好だった。

「……」

「あ、あの……帝督？」

顔を近づけて、垣根は心理定規をじっと見つめる。
垣根の真剣な視線に心理定規は思わず顔を背ける。

「ひゃん！」

心理定規が顔をそむけるのと、垣根が心理定規の胸を鷲掴みするのは同時だった。
垣根の急な行為に、心理定規は思わず悲鳴に近い言葉を口にする。

垣根は手から感じる感触に全神経を集中した。
年齢の割に発育が悪いのか、心理定規から得られる感触は微々たるものだった。
とはいえ、全くないわけではない。僅かながら手に柔らかい感触を感じる。
手を動かしたり揉んだりすれば、きちんと感触が帰ってくるほどはあるようだ。

しかし集中しすぎたのが逆に問題だった。

「……うん、心理定規」

そこで垣根の言葉が不意に途切れる。
理由は単純で垣根の股の間に心理定規の足が食い込んでいたからだ。
それは男のシンボル（かきねのむすこ）を容赦無く叩き潰す勢いで蹴り上げられた。

「お……おぉぉ……おぅ！？」

いくら超能力者になろうとも、序列が第二位でもソコだけは急所だった。
正確に言うならば、男ならば誰でも急所といえる場所だった。

「こ、この変態！？　どこで判断してるのよ！？」

顔を真っ赤にしながら胸を抱きしめてガードする心理定規。
対して垣根は、股を両手で抑えながら床の上で悶絶していた。
その姿はとても超能力者には見えなかった。

「え……お前って体売（ばいしゅん）ってるんじゃないの？」

垣根の問いに、心理定規はヒールで垣根の顔を踏むという行為で答えた。

「はぁ……話を聞いてるだけ……ねぇ？」

「そうよ！　言っとくけどこの服装も理由があるの。どこかのホステスと一緒にしないで」

あれから首と股の痛みに耐えつつ垣根は、心理定規をアジトの一室に招き入れる。
そこで心理定規が真っ赤なドレスを着ている理由と、能力を使って副業をしている事を知る。

「よく分からん世界だなぁ……」

話を聞くだけでお金が貰えるなんて、何て楽な商売だと思った垣根だが、すぐにその考えを捨てた。
ぶっちゃけて言えば、見知らぬ相手から愚痴を何時間も聞かされる拷問タイムなのだ。
自分なら五分も立たないうちに、相手を殺して帰っている気がした。

「まぁいい、お前の副業に関しては何も言わない。だが、これだけは覚えておけ」

どこかフザけた雰囲気から一転して暗部組織の雰囲気に切り替えた垣根は、心理定規に冷たい視線を送りながら口を開いた。

「一つ、この組織はお仲間ごっこなんてしない。付き合いは全て仕事だけの関係だ。それから暗部の仕事は最優先で対応しろ。副業の途中だろうが、飯食っているときだろうがな」

垣根の言葉に心理定規はコクリと頷く。

少なくとも暗部にいるぐらいだから、それなりのルールぐらいは知っていると垣根は思っていた。

だが、自分に言い聞かせるように、垣根は改めて『スクール』のルールを口にする。

「主任務は暗殺。おい、暗殺の経験はあるか？」

「……ないわ。私は精神系能力者だから、基本的には後方支援だったわ」

心理定規の表情から、きっと人を殺した経験はないと睨んでいた垣根は、内心少しだけ安心した。

（まだ、こいつの手は汚れてない……ギリギリって所か）

「分かった。なら、お前には後方支援を任せる。基本的にターゲットの殺害は俺が担当する」

「……うん」

どこか苦しそうな、悲しそうな表情を心理定規は浮かべる。

しかし、垣根はそれらを無視して話を続ける。

「二つ、自分のミスは自分で拭きとれ。この世界じゃテメェで始末出来ないような奴は消えていく運命だからな」

「わかってるわ。いやって言うほど……」

「……三つ、これが一番大事だ。『スクール』を裏切るな、『スクール』は裏切り者に対して容赦しない」

「……」

少しだけ顔がこわばった心理定規は、口ではなく目で垣根に想いを伝えた。

――――それは私が裏切った場合でも同じなの？　と。

その無言の問いに、垣根は間をおかず首を縦にふって答えた。

「まぁ今はこんな所だ。今日はもう帰っていいぞ」

「……そう」

返事をした心理定規だが、その場から動こうとはしなかった。

何か言いたげな表情をしていたが、垣根はあえて気付かないふりをしていた。

（ここに来たのも恨みだろうな……はっ、俺の最後は幼馴染に殺されるって結末か。まぁ親友を、影花と紅音を殺した俺にはお似合いな最後だな）

どこか達観したような考えを持つ垣根は、これから心理定規が自分を殺そうとしても抵抗する気はまるでなかった。
正直に言えば、紅音と影花を殺した木原正を殺したかった。
だけど、もしも心理定規が恨みをはらしたいというなら、垣根はそれを叶えてあげる気でもいた。

「一つだけ教えて欲しい事があるの」

だから心理定規の口から出た言葉が、垣根には最初信じられなかった。

「紅音と影花を殺した本当の犯人は誰？」

「……」

何とか無表情を装う事が出来た垣根だが、内心は動揺で一杯だった。
憎んでいると思っていた。
それ以外に心理定規が垣根に対して抱く感情などないと思っていた。

「二人は俺が殺した。それが真実だ」

心を落ち着けて平静を保った後、垣根は冷徹さを感じる口調で語る。
心理定規の問いに答える、というよりは自分に言い聞かせるというように見えた。

「嘘ね」

ある意味では睨んでいるようにも見える垣根の視線を、真正面から受け止めながら心理定規は言葉を発する。

「帝督、自分で気付いていないかもしれないけど、貴方は嘘を付くときの癖があるのよ？」

「……そんな癖はない」

これは心理的な揺さぶりだ、そう考えた垣根は心の平静を保とうとする。

だが、一度疑問に思ってしまえば、それに対する明確な答えが無い限りずっと疑問を感じてしまう。

果たして、自分には嘘をつくときの癖など本当にないのか、と。

自分の事なのに、はっきりと答えが出せない事に多少のイラツキを感じた垣根。

とはいえ、ここで怒ってしまえば自分が癖など知らないと物語るようなもの。

結局は平静な状態を保って、心理定規と会話する以外になかった。

「帝督、私は貴方が憎い。殺したいほど憎いと思っていた」

「なら殺してみろよ。俺は二四時間いつだって受け付けるぜ。最も、墓の下で後悔したくなければ、そんな事は止めたほうがいいがな」

「思っていた、と言ったはずよ。今は違うわ」

わざわざ過去形だったのを強調する心理定規は、少しだけ昔を懐かしむような表情をする。
しかしすぐに表情を引っ込めると、垣根を見ながら言葉を紡ぐ。

「暗部に入ったのも最初は貴方を殺すためよ。でもね、貴方の事を調べれば調べるほどおかしな事に気付くの」

そう言って心理定規は、片手を上げると指を一本立てる。

「一つ目、貴方は事件後から大の研究者嫌いに変貌している。死傷者を合わせると、今まで犠牲になった研究者は三桁に上るそうね。貴方はいつから研究者嫌いになったのかしら？」

「……元からだよ。最初っから研究者は嫌いだった」

「そう……じゃあ事件前まで、貴方は研究者が出す結果レポートに一喜一憂していたのは何でかしら？」

その問いに対して垣根は答える事が出来なかった。
過去を消す事は出来ない。
だから垣根の過去を知っている心理定規が出す矛盾を、垣根自身が否定する事など不可能だ。

「二つ目、貴方の好物が変わった点。好物は抹茶ラテとハンバーグ類。抹茶といえば紅音の好物、ハンバーグといえば影花の好物だったはずよ。貴方はどちらかというと紅茶類を飲んでいたし、好きな食べ物はカレーだったはずよ？」

「……好物なんて数年も経てば変わるもんだよ」

「それも嘘ね。貴方の好物が変わったタイミングは事件後からすぐよ」

そして心理定規は三本目の指を立てる。

「三つ目、貴方の口癖に紅音や影花がよく言っていた口癖が混じっている点は、どう説明する気？」

「……」

「無言は二人の口癖を、真似ているのを認めたと取るわよ」

よく調べ上げている、素直に感心した垣根であった。

どこまで憎しみを抱かれていたのか、心理定規の言葉から理解できた。

それこそが、垣根の望みだった。しかし、暗部まで追ってくるのは少々予想外だったが。

「……四つ目、紫穂姉の部屋にあったあの置き手紙は何？」

「……」

「『心理定規を頼む』。たったそれだけが書かれていた。あんなのを頼む人は帝督以外にいないはずだけど？」

紫穂に残した置き手紙、ノートの切れ端で書き殴ったメモ。

それを紫穂はいつまでも残していたようだ。

「……それで？　お前は俺に何を望んでいるんだ？」

「最初にいった通りよ。影花と紅音を殺した本当の犯人を教えて」

「……」

じっと垣根の瞳を見ながら心理定規は垣根の言葉を待つ。
その視線を受け、垣根は少しだけ頭の中を整理する。

（心理定規は過去、俺の期待通りに俺を憎みながら生きていた。それで、こいつは生きていく事が出来た……ここまでは予定通りだ）

しかし、と垣根は思いながら情報を整理する。

（俺の事を殺そうとして、暗部組織にまでやってきたのは予想外だった。その上、俺の事を徹底的に調べ上げたようだ。正直、そこまで調べ上げているとは見上げた根性だぜ）

（……でも、あの二人を殺した木原の事を教えるわけにはいかねぇ。コイツがもしあの男を殺しにいこうとしたら間違いなく返り討ちだ）

「……ふぅ、いいか。その使えない耳を使ってよーく聞け」

テーブルを叩き壊すほどの勢いで叩くと、垣根は冷たい瞳をしながら言葉を発した。

「あの二人を殺したのは俺だ。真実も何も、それが事実だ」

そう言うと、これで話は終わりだと言いたげに部屋から出ていった。
扉を閉める直前、どこか寂しそうな表情をしている心理定規が目に入った。
しかし、それを切り捨てるかのように、垣根は扉を少しだけ強くし

める。

バンッと音が響いた部屋に、心理定規は呆然とした表情で座っていた。

「……帝督の……馬鹿……」

ボソリと呟いた後、少しだけ涙で濡れた目を拭う。

やがて涙を拭い終えた彼女は、ピシャリと自分の頬を軽く叩いた後立ち上がった。

「絶対に教えて貰うわよ」

そう呟く彼女の瞳は、諦めとは無縁の色を灯していた。

近づく一歩

アジトを後にした垣根は、そのまま街並みを眺めながら散歩をしていた。
だが一向に気分が晴れる事はない。
ナンパでもしようと思ったが、この時ばかりは気分がのらなかった。

「くそっ……」

イラつきが一向に消えず、少し大股で歩く垣根。
ズカズカと歩く垣根が怖いのか、道行く人は少し怯えながら道を開ける。
垣根自身も周りを気にする余裕がなく、その為に歩くスピードが変わる事はなかった。

やがて廃れたビル群があるエリアまで移動すると、そのうちにある一つのビルに入っていく。
再開発される場所だったが、予定変更されてほったらかしにされている区画。
当然ながら監視カメラ類はなく、学園都市側の監視はかなり弱かった。

普通の学生なら近づこうとすらしないエリアだが、垣根にとっては何も問題などなかった。
スキルアウトに絡まれても、一秒も立たないうちに全員をひき肉に変える事が出来る。
故にどんな障害が出てこようと彼が止まる事などありえない。

ビルの屋上まで辿り着くと、垣根は懐から携帯電話を取り出す。

暗部組織として使う携帯電話だから、繋がる相手は一人しかいない。

『おや、何かありましたか？』

「とぼけんな、どうして心理定規が『スクール』に入ってきたんだ」

『ふむふむ、君は思ったより鈍感なのですね』

珍しく感情的な言葉を口にする電話相手。

「俺が鈍感とかどうでもいい。どうしてだ、お前はいつから知っていた」

だが、垣根にとっては心理定規の事が一番優先されるべき事だった。
だから、何故心理定規が暗部組織にいるのかが気がかりだった。

『手元の資料によれば、心理定規君が暗部組織に入ったのは半年前。副業のコネを使って君を調べていたようですが、その時の一人が君の所在を漏らしたのでしょうね』

「半年前……か」

長い年月を暗部組織で過ごしたわけではない。
ならば、まだ暗部組織の最深部にある闇まで見ていない。

（まだ間に合う）

そう思った垣根はある言葉を口にしようとする。

『残念ですが、彼女を元の世界に戻す事は不可能です』

だが、それを予測していたのかその前に電話男が釘を刺す。

「……何」

『彼女を『スクール』に所属させるよう命じたのは上層部。まるで予定していたかのように、彼女は半年前からずっと保護されている立場にいました』

本来なら教えてはならない情報の部類なのだが、電話男は全く気にする様子もなく口を開く。

もしかしたら、これすらも予定された情報なのだろうか、その事に疑いを持った垣根。

『そして突然『スクール』のメンバーになりました。理由は一切不明です。私が知ったのもメンバーになる前日の夜ですね』

「かなり突然だな……そこまでして俺の元に心理定規を送ってきたのは何でだ」

『それも不明です。ただ、この事は上層部というより別の方の思惑が入っているようにも思えます』

「……統括理事会か」

上層部より上、そうなると一つしかない。

暗部組織の上層部の更に上にいる委員会、その名前は統括理事会。

統括理事長と十二人の人間だけで構成されている学園都市において最上位の権力をもつ人間。

彼らは学園都市における軍事や司法は勿論、行政から貿易に至るま

で掌握している。
言ってしまえば、学園都市の中において最も需要な人物たちだ。
だから、暗部組織も統括理事会が一番トップとなっている。

『可能性はあるかと思います。もしかしたら木原正が見つからないのも、上層部や統括理事会の思惑があるのかもしれませんね』

「……そこまでして木原を匿うものかぁ？」

『……そうですね。木原正を匿う、というより別のことに利用しようとしているから匿っている、が正解かと思います。つまり今は殺されては困る、なのでしょう』

「なるほど」

それなら理解できる、木原正が必要だから今の所は垣根に殺されないよう匿っている。
上層部が、統括理事会がそう考えているなら、四方八方に手を尽くしても見つからないわけだ。

「理解は出来る、が納得するかどうかは別問題だ」

『残念ながら君が納得する事も、理解する事も上にとってはどうでもいい事なのでしょう』

「……クソが」

錆びれた柵を蹴り飛ばす垣根。
随分と時間がたっているせいか、柵は本来の意味をなさず簡単にひしゃげた。

『荒れるものではないですよ。一応ですが、朝報もあるのですから』

「朝報？」

『ええ、木原正の居場所について、ですよ』

「……さっきは匿っているとか言わなかったか」

電話男の言っている事がちぐはぐで、垣根には少しだけ疑問だった。
木原正は何かに利用されている、だから垣根からは見えない位置に匿われていると。
だが、今の言葉が事実なら居場所について分かり始めた事を意味する。

『心理定規君がメンバーとなった為かわかりませんが、今まで見えなかった情報が閲覧出来始めました。おそらく、もうすぐ利用価値がないと判断されるでしょう』

「……」

『そうですね。この調子でいけば一ヶ月もあればはっきりするでしょう』

木原正の姿が見えた、近づく一歩を感じた垣根は思わず拳を作る。
だが、それに伴いずっと昔から思っていた疑問を口にした。

「……一つだけ聞きたい。あんたは何でそこまでしてくれるんだ？」

それは電話男の助力である。

彼にとって垣根との関係はあの事件の時以来だが、だからといってここまでしてもらう理由など一つもない。
下手をすれば上層部に睨まれるような事も、電話男は淡々と実行していた。

『ふふふ』

垣根が尋ねると、電話男は笑った。
それはどこか寂しさを感じさせるような笑いだった。

『理由……ですか。そうですね、木原正が見つかった時にお答えしましょう。今は……秘密です』

だがすぐにいつもの淡々とした口調に戻り、無感情的な声色になっていた。
あの寂しそうな笑いは何だったのだろう、そう思った垣根だが答えなど出るはずもなかった。

「分かった」

電話男が秘密といえば、どのような手段を持ってしても答えなど聞けないだろう。
ならば、木原正が見つかった時に答えてくれるなら、それを待つべきだ。
垣根はそう結論を下した。

『では失礼しますよ、垣根帝督君。これから一ヶ月は少しばかり忙しくなりますが、きちんと耐えぬいてくださいよ』

そう語った後、電話相手はいつものように垣根の返事を待たず通話

を切る。
無機質な電子音が耳に聞こえると、垣根もまた通話を切って携帯電話を懐にしまう。

「待っていろよ、木原正」

夕焼けになりかかっている空を見上げながら、垣根はポツリと呟いた。

垣根が探す木原正がどこにいるのか、その答えを知っている者は数少ない。
しかし彼が逃亡の達人でも、学園都市の中にいる以上ある者の監視から逃れる事など不可能だった。

「ふむ、未元物質と心理定規が接触したか。『第二候補（スペアプラン）』の成長は順当に行われているな」

第七学区にある窓のないビルにいるアレイスター＝クロウリーの前では。

「逆に『第一候補（メインプラン）』の一方通行がプランにはない人物と接触した。誤差の範囲だろうが、今しばらくは監視が必要だな」

空中に浮かぶモニターを眺めながらアレイスターは一人呟く。
その表情は、憐れむようにも、悲しむようにも、嘲るようにも、楽

しむようにも見えた。

「スクールの制御役もプラン通り。ふむ、『第一候補（メインプラン）』の一方通行にだけイレギュラーが混入したか。だが、騒ぎ立てるほどでもない」

そう呟いた後、アレイスターは空中にモニターを複数表示させた。
報告される内容を目で追いながら薄く笑みを浮かべる。

「幻想殺しは特に酷いな。しかし、この辺りも問題はない。『彼女』を呼び寄せれば一気にプランの短縮が可能だろう」

大事な『第一候補（メインプラン）』の一つである幻想殺しがプランより逸脱していようと、アレイスターにとっては問題にならないレベルだった。
むしろイレギュラーこそ最大の娯楽といって楽しむようにも見えた。

「時期は二年後……幻想殺しが一方通行と未元物質の二人と交友を持った後で問題ない」

いくつかの予備プランを修正しつつアレイスターは呟く。
修正が終えた後、アレイスターの口元には笑みが浮かんでいた。
喜怒哀楽の全てに当てはまり、同時にどれにも当てはまらないという相反する笑み。

「しかしここに来て『彼女』を利用する事になろうとは。一時期は幻想殺しのプランを破壊する者と思っていたが……こうもイレギュラーを生み続けてくれるとはな。愉快だ、これだから人生はやめられない」

口の中でいくつもの感情を弄びながらささやく『人間』は、言葉通りどこか楽しそうな笑みを浮かべていた。

心理定規が暗部組織『スクール』のメンバーになって一週間がたった頃。
その間は特に仕事もなく、心理定規は副業をしつつ日々を過ごしていた。
そんな彼女がどこで寝食を過ごしているか、それについては実に簡単だった。

「……で、お前は何でここにいるんだ」

「あら、メンバーがアジトをどう使おうと勝手でしょ？」

垣根が寝泊まりしているアジトで、同じように寝泊まりしていた。
どういう方法で垣根が寝泊まりしているアジトを調べているか、垣根には分からなかった。
答えは簡単で、電話男が口を割っているのだが。

「チッ」

舌打ちをするとソファーに寝転がる垣根。
ふて寝しているようにも見えるその姿を見て、思わず口元に笑みを浮かべる心理定規。

（アジトを変えても平気でついてきやがる。それに文句を言っても『こっちの方がよかったから』とか言いやがったし）

（時々飯を買ってきたりと、お前は通い妻かっつーの……まぁ楽でいいんだけどさ）

本当に嫌なら拒否すればいいのだが、それが出来ないから垣根は困っていた。

彼が心理定規に強く当たれない理由は至極簡単だ。

亡き親友、影花と交わした約束が今も垣根の心に深く刻まれている。

『心理定規を守れ』

平和な『表』の世界に生きているなら、垣根が特に目を光らせる必要もない。

逆に垣根のような『裏』で生きている人間が動けば、自ずと危険な立場に立たせてしまう可能性もある。

だが、『裏』の世界にいるなら話は別になる。

（暗殺が主任務の『スクール』だ。恨みを持っている人間はごまんといる）

恨み目的で心理定規が狙われる事が否定できない以上、逆に目に留まる範囲にいてもらう方が楽だった。

とはいえ、アジトまで一緒にいるのは垣根にとっては予想外だったが。

出来れば一緒ではなく、あくまで仕事だけの関係を貫きたかった。

そうしていれば、心理定規は垣根にとって有益な人物だと思われないだろうから。

（その為に色々としたんだがなぁ……）

口で大きく言えないなら、心理定規が嫌がるような行動をすればいい。
そう思った垣根は、心理定規が格好の割にエロい事に対して免疫が少ない事に着目した。

（でも効果なし）

普通なら『馬鹿な事を』と思うだろうが、垣根はそれが正解と思って本当に実行した。

トイレにいる事を知ってて入った。結果、心理定規にぐーでぶん殴られた。
シャワーを浴びている事を知ってて覗いた。結果、熱湯を頭から大量に浴びた。
後ろから胸を揉んでみた。結果、股の間にあるアレを容赦無く蹴られた。

そして最終手段として、ベットで寝ている所を襲ってみた。
しかし心理定規は嫌がる所か、顔を真っ赤にしてモジモジしながら囁いただけだった。

『や、優しくして……ね』

その言葉と潤んだような瞳をした心理定規の表情に、垣根の理性は木っ端微塵に粉砕しかけた。
かろうじて耐え切った垣根は、襲うどころかそのまま脇目もふらず部屋から全力で逃げた。

新人ホストのような顔つきを利用してナンパをよくするが、垣根は

まだ未経験（チェリーボーイ）だったりする。
その上、乙女チックというかメルヘンチックというか、初めては愛しあう者同士でという決まりが垣根の中にはあった。

結局、色々な手（アホなて）を使った垣根だが、全ては失敗に終わっていた。
そして失敗を重ねた挙句、垣根が出した答えは至極簡単な内容だった。

――――　心理定規の行動は諦める、と。

そして今に至るわけである。
期待も興味も持たない垣根だったが、やはり心理定規だけはそうはいかなかったようである。

動き出す歯車

垣根と心理定規が半同棲みたいな生活を続けて三週間後。
暗部の仕事をこなしつつ、垣根は木原正に関する情報を個人的にも集めていた。
情報屋の人間から情報を仕入れたり、木原関係の研究所にハッキング行為などを繰り返していた。

（木原の情報はある……ただ、大体は数多かテレスティーナという奴の事ばかりだ）

先ほど木原一族が使う私設研究所をハッキングし終えた垣根は、仕入れた情報を頭の中で整理する。
電撃使い（エレクトロマスター）の最高峰である超電磁砲ほどではないが、垣根もハッキングの腕はそれなりにある。
いくら木原一族が有名な研究者でも、全ての分野で上位に食い込むような優秀な研究者ばかりではない。
中には平凡な研究者止まりの人間もいるが、木原という姓が印籠の威光のように生きているらしく、無能でもそれなりの地位についていた。
そして、そういう連中は大抵セキュリティが甘い状態なので、簡単にハッキングを許していた。
中には垣根からハッキングを貰った事すら気付いていない者もいる。

そういう無能の上司に入る連中を足場に、木原正の情報を収集していた垣根。
しかしわかったことは、木原正が統括理事会肝いりの研究に関わっている事ぐらいである。
それ以外は、第一位を作り上げた木原数多か謎の薬を研究している

テレスティーナの事ばかりだった。
残りは絶対能力者に到達する為の研究しか見つからなかった。

（神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの、通称ＳＹＳＴＥＭ……か。どうやら木原一族はＳＹＳＴＥＭと絶対能力者を同一視しているが……本当に同一なのか？）

科学者は基本的にＳＹＳＴＥＭイコール絶対能力者と見ている。
だが、垣根にはそこが疑問だった。もしも同一なら、何故同じ言葉を使用しない。
単純だが、単純故に誰もが気にしない小さな疑問だった。

（神ならぬ身……つまり人の身って事だ。そして天上の意思に辿り着くものってのは、神様の領域に達する事……つまり神様じゃないけど、神様の領域に達する者をＳＹＳＴＥＭと呼ぶ。と昔影花が分析していたな）

神話などの書物をこよなく愛した影花が、学園都市で手に入れた知識と神話に関する知識を総動員してそう分析した。
その時は馬鹿っぽいと思ったが、木原一族の研究資料を見る限り影花の考えもそれなりに的を射ている考えであった。

（確かに研究レポートに神様とか書いてると、影花の考えがある程度正しかったのかもと思える）

木原一族はＳＹＳＴＥＭに関して一貫した考えを持っている。
連中は世界の真理を全て知っている者イコールＳＹＳＴＥＭ、そして絶対能力者こそＳＹＳＴＥＭだと結論を出している。
だから木原一族は、絶対能力者への道を開こうとかなり研究を繰り返していた。

（まぁ今はそんな事どうでもいい。問題は木原正の居場所だ。学園都市統括理事会肝入りの実験……それが何なのかを調べ上げないと）

かつては絶対能力者になると夢を語っていたが、今の彼には道端に落ちている石ころレベルであった。

更に、序列が第二位なのも垣根にとってはどうでもよかった。

普通なら数字のコンプレックスを感じる地位の二番だが、垣根にとって超能力者とは木原正に近づくための道具にしか過ぎない。

第一位が道具として使えるなら意地でも取りに行くが、第二位と第一位で明確なメリットの差がない以上、垣根には第一位を目指す理由など一つもない。

（今日はこれぐらいだな……あの男も調べていると言っていたが……明確な理由が分からない以上、警戒しておくべきか）

電話相手も木原正の事を調べているようだが、垣根には彼がそういう行動を起こす理由が不明だ。

だから、彼がどのように動いても対処できるよう、常に準備と警戒を怠らない。

（上層部とコネがあるから利用できるが……完全にこちらの味方とは言えない）

完全に味方ではないし、信用し切る訳にもいかない。

どれほど友好関係を築こうと、垣根は基本的に人を完全に信じるという事をしない。

（ふむ……とにかく奴が言っていた一ヶ月まであと少し。そこで何か情報が仕入れれるのならよし、なかったら別の路線から攻めるし

かないな）

椅子の背もたれに体重をかけながら垣根はこれからの事を計画する。
だが、それを遮るかのように突然扉が遠慮なしに開けられた。

「帝督、仕事よ」

「……分かった」

心理定規の言葉に反応した垣根は、目の前にある端末を閉じる。
一度だけ深呼吸した後、垣根はゆっくりと椅子から立ち上がった。
その表情は驚くほど冷たく、常人なら彼に言葉を掛けることすら躊躇うだろう。

「電話相手が待っているわ。早くしてね」

だが心理定規は気にする事もなく、そう告げると垣根の返事を待たず立ち去った。
立ち去る心理定規の足音を聞いて垣根は気持ちを切り替える。

（そろそろ知られるな。ここで作業するのも限界か……）

そう考えた垣根は、テーブルに置いていた端末を叩き潰す。

（データ類は全て頭の中にあるので特に問題はない。端末さえなければ心理定規が調べるのは不可能。特に記憶媒体には未元物質を使って変化させているから、データの復元も不可能だ）

叩き潰した端末を一瞥した後、垣根も部屋を後にした。

「はぁ、私を狙っている人間がいると？」

「ええ……相手については分かりませんが、先程そのような連絡を受けました」

第十七学区にある『とある私設研究所』の一室で、中年の男性と初老に差し掛かった男性が会話をしていた。

初老に差し掛かった男性のネームプレートには『木原正　研究開発責任者』と書かれていた。

しかし中年の男性には、ネームプレートがなかったので名前は分からない。

「いちいち相手にするのも面倒です。放置しておきなさい」

木原は面倒くさそうに呟くと、テーブルに置いていたマグカップを手に取る。

中にある黒い液体、ブラックのコーヒーを一口飲んだ後、マグカップを再びテーブルに置く。

そうしていると同じようにテーブルに備え付けてある電話が鳴った。

「はい、木原正です」

木原は電話を取ると、適当な口調で喋る。

だがニ、三ほど会話をすると、その表情が少しだけ変化する。

「なるほど、分かりました。情報をどうもありがとう」
そう言って笑みを浮かべたまま受話器を置く。
「相手がわかりました。どうやら垣根帝督という人物だそうです」
「垣根帝督というと、あの研究者嫌いで有名な第二位ですか？」
研究者にとって垣根帝督とはブラックリストのトップに来る人物である。
なにしろ垣根は超能力者に認定された後、自分の能力開発に携わっていた研究者を全員殺したのだから。
能力に関する情報も一緒に抹消したようで、学園都市に住む殆どの研究者は彼の能力について何も知らない。
『書庫（バンク）』にのっている情報すら不確定要素だらけであった。
つまり正確な事を知っている人間は、殆どいないと言える状態なのだ。
「ええ、私の一族も彼に随分と殺されました。まぁ数多は生き延びたようですが、それでも全治するまで相当長い間入院したそうですよ」
第一位である一方通行を開発した木原数多も、第二位である垣根帝督に目をつけて研究しようとしたが結果は散々だった。
木原数多自身は瀕死の状態、垣根用に使う予定だった研究所は全壊、優秀な研究者は殆ど血祭りに上げられた。
流石に木原一族は暗部組織の上層部及び統括理事会に抗議の声を上げた。
しかし、帰ってきた言葉は至極簡単な回答だった。

『垣根帝督の研究者嫌いは周知の事実。よって今回の垣根帝督の行動は、簡単に予想出来たはず。それを知っていてなお近づいた君たちであろう。だから何が起ころうと全ては自己責任の範疇であり問題にするに値しない』

つまり垣根の研究者嫌いは上層部と統括理事会も認識済である。
だから、垣根に近づいては困る研究者がいれば、その前に介入して会わせないようにする。
それ以外の連中が垣根に近づいて、よしんば殺されても上層部としては何も言わない。
研究者は自らに振りかかる危険を認識してて近づいたのだから。

要約するとそうような回答を木原一族は貰ったわけである。
つまり数多の怪我も、研究所の破壊も、ブレーンたちの死についても知ったことではない。
冷たく言うなら、突き放されたとも見える回答だった。

「しかし彼は基本的に受身だったのでは？　自分から研究者を狙うなど聞いたことがありません」

「さぁ、私には『モルモット』の考えなど分かるはずもありません」

垣根が研究者を嫌っているのは周知の事実だが、だからといって自分から狙うような事は滅多にしない。
大体は研究者が近づいて殺されるパターンだ。

「しかし相手が分かったのなら簡単です。面倒ですが上層部に止めるよう言えばいい」

「本当にそれだけで止まるのですか？」

相手がどんな立場にいようと垣根は一貫して研究者を殺していた。

「私を殺せるものか。私を失えば、学園都市に多大な損害が出るのだぞ？」

だが、木原正は何の問題もないと言いたげに笑っていた。

部下にそう言うと、木原はテーブルにある電話の受話器を取る。

「だから安心なのです。君たちも『モルモット』程度に怯えず本来の職務を全うしなさい」

「は、はい……」

部下はホッと胸をなでおろすと、木原に一礼をした後に部屋を立ち去った。

扉が閉まった後、木原は面倒くさそうなため息を吐く。

「やれやれ、相手が超能力者だからといって怯えすぎです。超能力者など、絶対能力者を作るためのサンプルにしか過ぎません」

小馬鹿にしたような口調で呟くと、木原は電話のボタンをリズミカルに押す。

押し終えた後、受話器からコール音が数回してから目的の相手に電話が繋がった。

『おやおや、この電話を知っているとはどちら様ですかな？』

「お久しぶりですね」

木原はかつての部下、今は暗部組織『スクール』の制御役に当たる人物へ電話をかけていた。

相手は木原が挨拶をしても、やはり何も感じさせない口調で言葉を発した。

『ご質問に答えてくれないなら会話をする必要はありません。もう一度尋ねますね、貴方はどちら様ですかな？』

「……木原正ですよ」

『おや、私のスケジュールに貴方と会話をする事は書かれていませんが？』

聞く相手によっては『君と話す必要はない』という風にも聞こえる電話相手の言葉。

だが、辛辣とか突き放すとかいう訳ではなく、本当に彼のスケジュールの中に存在しないからそう言っているだけなのだ。

「その時間を取って頂きたいのですがねぇ」

『少々お待ちください。スケジュールの確認をします』

電話相手がそう呟くと、受話器の向こうで紙をめくる音が聞こえてきた。

おそらく本当にスケジュールの確認をしているのだろうと木原は判

断した。

『ふむ、この後にお仕事がありますが二十分だけなら問題ありません』

「ではその二十分を私にくれないでしょうか」

『十分だけなら』

木原は内心舌打ちをした。

部下の時からそうだったが、相手の男は感情的になる事が滅多にない。

常に淡々と、必要な事だけを口にしていた。

ある意味では、余計な感情をおりまぜて語らないので便利だったが、今の場合ではそれが余計な事になってしまう。

「では十分でお願いします」

しかし、無駄に時間をかけるのも問題なので、結局木原は折れる事にした。

真実

『分かりました。それで、何の御用でしょうか？』

そう言った電話相手の口調は、やはり何の感情も感じさせない口調だった。

本当に淡々と、無駄な感情を見せない相手だと木原は思った。

「言わなくても分かると思いますが？」

『私は精神系能力者ではありません。ご用件はきちんと説明して頂かなければ、対応する事は出来ません』

「そちらの『モルモット』が私を狙っている、という話ですよ」

いちいち口にしないといけない事に、木原は少々苛立っていた。

しかし電話相手は正確に言葉を口にしないと、全く動こうとすらしない。

ならば、この時の面倒には耐えるしかないと木原は判断した。

『それが何か？』

「貴方の口から止めるよう言ってくれませんかねぇ？」

『何故？』

本当に疑問そうに答える電話相手。

余りに簡潔に答えるので、逆に木原が言葉に詰まったぐらいである。

『上司から命じられれば、私は命をかけても命令を実行します。しかし、今の私の上司は貴方ではない。よって貴方の命令も願い事も実行する必要性はありません』

呆然としている木原を無視して、電話相手はなおも辛辣な言葉を口にする。

『本来ならこの電話も問題なのをご理解していますか？　どうやって私への連絡先を入手したかは問いませんが、余り勝手な事をすれば垣根帝督君の前に、学園都市の手によって消されますよ』

余りにも感情を感じさせない理論的な言葉に、ある種の寒気すら覚えるほどだった。

本当に感情というものが欠落しているのではと思った木原である。

『ああ、優秀な研究者を消す事はないと思っているのなら大きな間違いですよ。所詮、学園都市から見れば私も貴方も、単なる駒の一つにしか過ぎませんから』

「私は今、統括理事会が命じた研究をしている。彼らが私を殺す必要性はないと思うが？」

木原正は現在学園都市の統括理事会からある研究を命じられている。その研究成果が出ていないのに、自分を殺すはずがないと木原は思っていた。

『勘違いもそこまでにしましょう。貴方が死んでも、後任が決められるだけです。当然ながら私が死んだ時でも同様です』

しかしその考えはあっさり否定された。

『おや、もう十分過ぎたようですね。では、私はこれで失礼します』

そう言って相手の返事を待たず通話を切る電話相手。

取り付く島もないというレベルではなかった。

「クソッ」

受話器を叩きつけると木原は悪態をついた。

どっかりと椅子に座り込むと、気分を落ち着けるためにテーブルにあるコーヒーを飲む。

「制御役程度が私に意見などふざけおってからに……」

悪態をつく木原だが勿論気分が晴れる事はなかった。

「……」

先ほど木原の電話を切った電話相手は、画面に浮かぶデータを見る。

「なるほど、木原正は木原幻生の私設研究所を利用していたのですか」

そこには先程の電話回線をハッキングした結果が表示されていた。

画面左上に地図が表示され、詳細な発信元に赤いマークが点滅して

いた。

「しかし、ここまで簡単に釣れると、ある意味つまらないものです。せっかく、人が危険を知らせる情報を流してあげたのに」

呟く電話相手だが、その言葉は喜びも悲しみも嘲りも感じさせなかった。

まるで電子音で作った音声ファイルを再生しているように聞こえた。

「予定では、無様に逃げ惑ってもらうつもりでしたが……仕方ありませんね」

モニターの近くにある携帯電話を手に取ると、電話相手は迷わず通話ボタンを押す。

「さて、この情報を流そうとしたら、上層部はどのように行動を取るでしょうね」

そう呟く電話相手だが、やはり表情は全く変化する事はなかった。

垣根と心理定規の半同棲生活が始まって一ヶ月がたった頃。

この頃には心理定規と一緒にいる事がすっかり馴染んでしまい、もはや部屋にいても垣根は気にすらしていなかった。

むしろいない事の方が変だと思い始めており、いない時には理解出来ない違和感をずっと感じていた。

そんな垣根に、一本の電話がかかってきた。相手は勿論電話相手。
だが、この時は仕事ではなく、指定の場所に行くようにとの事だけであった。

「何か今までの電話と違うな」

少しだけ違和感を感じた垣根だが、特に意味もない行為をするほど電話相手は暇ではない。
わざわざ呼び出してきたのだ。それ相応の話が絡んでいると思っていた。

「さて、ここだが……」

指定された崩壊寸前に見えるビルの一室に入る。
朽ち果てた部屋は、あちこちの壁が煤けていた。
天井から意味のなさない照明だったものがぶら下がっており、床のタイルは所々剥がれていた。

「おいおい、呼んだのに誰もいないのかよ？」

「いえ、いますよ」

誰もいない事に愚痴を漏らした垣根の背後から誰かの声が飛んできた。
しかし垣根は焦ることもなく、それどころか後ろすら振り向かずに声をかけた。

「ほー、いいのか？」

「何がですか、垣根帝督君」

ニヤニヤと笑いながら垣根はゆっくりと顔を声の主に向ける。

「電話相手が顔を見せていいのか？　という訳だよ」

入り口の前に立っている黒いスーツを着こなした男性を見ながら、垣根はどこか楽しそうに呟いた。

「ああ、そんな事は気にしなくていいですよ。どうせ、もう意味はなさないですから」

「あん？　どういう事だ？」

電話相手のどこか達観した笑みを見て、垣根は少しだけ訝しげに思った。

わざわざ姿を見せた所もそうだが、電話相手の姿もまた不思議だった。

はっきりいって暗部組織に所属しているとは思えないほど柔和な表情をしていた。

透き通った優しげな瞳をしており、殺気などとは無縁に見えるほど。

身長は大体１７０ｃｍ後半だが体つきはほっそりとしており、鍛え上げているようには見えない。

スーツの色を変えれば、その辺を歩いているサラリーマンに見えな

い事もない。

しかし特徴とも言える、感情を感じさせない口調はそのままだった。表情は優しげだが、口から出る言葉は全く感情を感じさせない。そんな器用で奇妙な事が出来る人物であった。

「それより、本題に入りましょう。木原正の居場所が分かりましたよ」

「……本当か？」

木原正の居場所が分かった、その事に一瞬喜びを噛み締めかけた垣根だが、すぐにその気持ちを捨てて冷静な気持ちに切り替える。

「どうやって分かった。俺も個人的に調べていたが、一向に見つける事が出来なかったぞ」

「んー、余りにも間抜けなのですが、木原正は私に電話をしてきたのですよ」

「電話を？　何故だ」

「簡単ですよ。ちょっと前に『木原正は垣根帝督に狙われている』という情報を流しました。そうしたらあら不思議、奴は私に貴方を止めるよう連絡してきた訳です」

「……そして逆探知か」

「正解です。電話相手への居場所を探ろうとした人間を、始末する為につけていた機能が役に立ったわけです」

どこかの教師風な感じで語る電話相手は、指をくるくると回しながら語った。
もしそれが本当なら、木原正はよほどの馬鹿だと垣根は思った。

「これに居場所を書いています。記憶したら処分してくださいね」

そう言ってカードのようなものを垣根に投げつける電話相手。
受け取った垣根は、手に取ったものに視線を落とす。
そこには、大人向けの店で使うようなカードが握られていた。
店に興味などない垣根は、すぐに裏を見る。

裏側の名前を書く欄に座標を示す数値が書かれていた。
それを数秒で記憶した垣根は、カードを未元物質で素粒子レベルまで分解する。
一瞬でカードは完全に形を失っていた。

「おや、あっさり記憶しましたね。流石は序列第二位の人です」

口調の割に全然驚いているようには見えない電話相手は、軽い拍手をしながら言った。

「さて、垣根帝督君。貴方には二つの選択肢があります。一つは真実を知って復讐を諦めるか、それとも真実を知らずに復讐を果たすか」

「……」

「さぁ、貴方はどちらを選びますか？」

謎かけを楽しむかのように電話相手は恭しく手を差し出しながら言った。

「真実を知って復讐をする。それ以外に俺の選択肢はない」

その答えに、垣根は秒の迷いすら見せず答えた。

ある意味では傲慢にも見える垣根の答えを聞いて、電話相手は薄く笑った。

「君らしい答えですね。ふふふ、約束もありますし全てをお話ししましょう」

そう言った電話相手は、一つ咳払いをするとさらっと爆弾発言を投下した。

「まず月森兄妹の実験ですが、アレを仕組んだのは私です」

敗者の末路

紅音と影花の実験を組んだのは自分。
その短いながらも衝撃的な言葉は、垣根の心を深く揺さぶった。

「……な……」

「おや、少々意外です。この言葉だけで私は殺されると思っていましたよ」

驚きで固まっている垣根を見て、意外そうな雰囲気を出す電話相手。
実際は、垣根の理解が追いついておらず単に固まっているだけだが。

「まぁ正確には、私はある組織から依頼されて実験を仕組んだわけですがね」

「……」

「もしかして理解が追いついていませんか？」

未だ何も言わない垣根を見て、単に理解が追いついてなくて固まっているのではと疑った電話相手。
しかし垣根は無言で首を横に振る。
どうやら続けろと言っているようだった、そう読み取った電話相手は説明を更に続ける。

「ある組織とは垣根帝督君、君を超能力者にした研究グループですよ」

「……あの連中か」

垣根が超能力者として学園都市に認定された時、彼が真っ先にやった事は研究グループの壊滅と自分に関する研究データの抹消。
今もなお研究者の間では不可解な事件だが、事実は実に簡単だった。
研究者は決して言ってはならない言葉を口にしたのだ。

『月森兄妹のような足手まといが消えたおかげだな』

おそらく垣根が超能力者になったことで気が緩んでいたのだろう。
聞かれていないと思ったのだろうが、その言葉はきっちりと垣根の耳に届いていた。
その後に起きた事は簡単である。
研究グループに所属していた研究者は全員死亡。
更に彼らが持っていた垣根の能力に関する研究データは、完膚なきまで破壊された。

「何故彼らが君に目をつけたか。それは君が超能力者になる事を知っていたからですよ」

「……何だと？　どういう事だ？」

「素養格付（パラメータリスト）、という言葉を聞いたことはありますか？」

「ないな。何だそれは」

「言ってしまえば身体検査をもっと正確にしたデータです。これを見れば能力開発を行う前から各々の素質が、事前に分かるようになっています」

幼少の垣根は、大能力者になった辺りで研究グループが一新された。
当時は大能力者だから、もっと上位の研究者に切り替わったのだ。
そう考えていた垣根だが事実は違うらしい。

「なるほど、そのデータを見た研究グループは俺に目をつけたわけか」

「学園都市の中でも最高機密に入る部類のデータです。基本的に閲覧は不可能です。おそらく研究グループの誰かが統括理事会にコネがあったか、それとも暗部関係の人間かどっちかでしょう」

「……という事は」

そこまで聞いて垣根はある事に気付く。

「そう、月森兄妹を殺した本当の犯人は君を超能力者にした研究グループ。つまり垣根帝督君、君は既に復讐を終えていたのですよ」

その事実を電話相手は気軽に口にした。
まるで、大したことないと言いたげに。

「何だっ……って……」

何かが足元から崩れ堕ちるのを感じた垣根は、ふらふらとしながら壁に持たれかかる。
足元はおぼつかない感じで、立っているのすらやっとと見えるほどだった。

「だから言ったでしょう。真実を知れば復讐を諦めると。少々語弊がありましたが、復讐を諦めるというより、既に終わっている事に

気付くですね」

そんな状態の垣根を見ても、電話相手は全く表情を変えず淡々と言葉を口にした。

「……ざけんな……ふざけんな！　だったら俺は一体！　何のために！」

復讐を胸にずっと生きてきた。必ず木原正を殺すと誓って生きてきた。

それなのに、事実は違っていた。

紅音と影花を殺した本当の犯人は、垣根の成長を邪魔していると見た自分の能力開発グループだったのだ。

その事を理解した垣根は、激しく心をかき乱された。

「……何の為に……復讐を誓ったんだよ……」

最後には全身から力が抜け、その場に崩れ落ちた垣根。

立つ力すら出ないのか、ただ床に這いつくばっている状態だった。

「今倒れられても困りますね。最後まで人の話を聞いて頂かないと」

そんな垣根を見ても顔色ひとつ変えず、淡々とした口調で電話相手は言葉を発した。

もはや聞こえているかどうかすら怪しい垣根だが、最後までいう必要が電話相手にはあった。

「どうやら誤解を与えるだけのようでした。君の頭がいいので、ついつい説明を省きすぎたようですね。もう一度、今度は詳細に説明をします」

そう言うと電話相手は一つ咳払いをした。

「まず垣根帝督君の研究グループですが、月森兄妹を殺すつもりは毛頭ありませんでした。必要なのは『垣根帝督の前に月森兄妹がいない状況』を作り上げる事でした。まぁ最悪死んでも構わないと言ってましたが、それが絶対ではなかったのです」

「……」

「素養格付（パラメータリスト）によると月森兄は大能力者で止まり、月森妹は強能力者止まりでした。つまりあの頃から成長する見込みはゼロだったのです」

「君は大能力者でも成長するにつれ無意識に彼らに遠慮したのか、なかなか超能力者になりませんでした。本来なら既に超能力者になってもおかしくない。そのはずだと素養格付（パラメータリスト）を見た研究グループは思っていました」

「様々な要因を考えて、研究グループはある結論を出しました。垣根帝督は月森兄妹、特に月森影花と共に超能力者になろうとしていると」

「成長する見込みのない者に邪魔されていると考えた研究グループは、ある一つの事を実行する事にしました」

そこで言葉を一旦区切ると、電話相手は垣根を一瞥する。

さっきと変わらず、垣根はずっと床に倒れ伏していた。

「月森兄妹を垣根帝督の前から排除する。場合によっては心理定規

も同様の扱いとする」

そこで垣根がピクリと反応する。

だが、電話相手はそれを無視して言葉を発し続ける。

「そして私が木原正に月森兄妹の事を進言しました」

「あの時あそこに心理定規君がいたのも、単に私が運んだからですよ」

「そして後は君の知るとおりの結果です。これがあの事件の背景ですよ」

これで説明は終わりらしく、電話相手は小さく一息ついた。

垣根はゆっくりと立ち上がると、頭をかきながら言葉を口にした。

「……わからねぇ……何が何だか分からねぇ」

「おや、至極簡単だと思うのですがねぇ？」

そう言うと本当に簡単そうに電話相手は言葉を口にした。

「月森兄妹が死ぬ原因を作ったのは君の能力開発グループ。木原正に月森兄妹を使うよう進言したのは私。そして殺したのは木原正。ほら、簡単じゃないですか」

「……」

「もし君が原因を作った相手に復讐すると考えているなら、既に復讐を終えています。ただし、全てを許さないというのなら、まだ相

手は残っていますよ」

そう言うと電話相手は自分を指さしながら簡単に淡々と言った。

「そう、私と木原正の二人が」

その呟きを聞いた瞬間、垣根は電話相手に襲いかかっていた。

「……君は随分と我慢強いのですね」

垣根の手は電話相手の数センチ手前で止まっていた。

そのまま攻撃を繰り出せば、確実に電話相手を殺せたはずなのに。

「違う、全ての疑問が解消されていない。だから貴様を殺すのはその後だ」

「疑問？」

「まず、何故あの時俺に電話してきた。本当に紅音と影花を排除するなら、あの時に俺へ電話する必要はない」

「後、何故俺の復讐を手伝った。さっきの内容なら最後は自分に辿り着くと考えるはずだ。普通なら逆だろう、なるべく自分に近づかせないようにするはずだ。この疑問に答えろ」

電話相手を睨みながら垣根は疑問を口にする。
そう、何故この男はあんな行為をしたのだ。その事が垣根には分からなかった。
本当に仕事を全うするなら、垣根をあの場所まで招き寄せる必要はない。

それに復讐を手伝う理由もない。
自分が関係していると思わせない為かと思ったが、それにしては全てをさらけ出し過ぎている。
もしもの拍子に、関係者と見なされても一向に気にしていないほど。

「ああ、その事ですか」

視線で人すら殺せそうな垣根を見ながら、電話相手は簡単だと言いたげに問いに答えた。

「私は月森兄妹を殺す気など最初からなかった。むしろ、彼らを殺さないようにするつもりだった」

「……」

「信じられませんよね、こんな戯言。でも私はあの時本気でそう思っていました。垣根帝督君、君に電話したのも二人を助ける為にです」

戯言を、と思った垣根だが電話した理由がそうなら理解は出来た。
納得するか、なら納得など出来なかったが。

「そして君の復讐を手伝っていた理由ですが……これには個人的な事情がありました」

「……」

「私には歳の離れた弟がいました。あの子は毎日超能力者を目指して頑張っていました」

どこか懐かしさを感じたのか、遠い目をしながら語る電話相手。

「そしてあの子はある日、ある実験に参加します。そして……それがあの子の最後の実験となりました」

しかしすぐに無表情に変わり、いつもの淡々とした口調で語った。

「その時に実験を主導していたのが、木原幻生の元にいた木原正です」

「私は復讐を誓いました。しかし、臆病な私は学園都市の闇に屈してしまい、結局は何も出来なかった。その時に私の感情は完全に壊れたのでしょうね」

「憎悪も、愛情も、楽しさも、悲しみも何もかも……」

「だからでしょうか、木原正の部下になっても何も感じなかったのは」

乾いた笑いをしつつ電話相手は語る。

やはり感情を感じさせない淡々とした口調であった。

「何故君の復讐を手伝っていたのかなんて簡単ですよ。私はね、敗者なんですよ。だからまだ勝者でも敗者でもない垣根帝督君にすが

ったのです」

「もしかしたら彼の手で木原正は殺されるのでは、とね」

「……テメェは殺す価値すらねぇ。ずっと後悔して生き続けろ」

そう言うと垣根は電話相手の元から離れる。

少々意外そうな表情の電話相手を無視して、垣根は今にも外れそうな部屋の窓の前まで移動する。

「垣根帝督君」

「あぁ？」

面倒くさそうに振り向くと、垣根の目に先ほどと違うあるものがうつった。

「そんなモノで俺は殺れねぇよ」

それは銃。普通なら人一人を殺すのに十分な殺傷能力を持つもの。

それが電話相手の手に握られていた。

「いえ、確かに殺しますが、その相手は君ではないですよ」

要領を得ない言葉に垣根は軽く首を傾げる。

だが、電話相手は垣根のことを無視して語り続ける。

「影花君と紅音君に謝らないといけませんね。こんな臆病者のせいで死んでしまいましたから。後あの子にも復讐が出来なかった事を謝らないといけません」

そう呟いた後、電話相手は自分のこめかみに銃口を押し付けた。

「垣根帝督君、これが敗者の末路ですよ。このようになりたくなければ、君は勝者になりなさい」

そして垣根に止める暇も与えず、電話相手は躊躇いすら見せず引き金を引いた。

乾いた銃声の音がした後、ドシャリと電話相手が地面に崩れ落ちる。

そして床に小さな血の池を作り上げた。

そんな電話相手を一瞥した後、垣根は小さく囁いた。

「あぁ……俺はテメェのようにならねぇ。木原正は、俺の手で絶対殺す」

ボロボロの窓枠を破壊して、そこから飛び降りる。

背中に六枚の翼を展開して、垣根はその場から飛んでいった。

目指すは、木原正がいる第一七学区にある木原幻生の私設研究所。

全てを知っても、垣根は復讐を止める気などなかった。

例え暗部組織の上層部や統括理事会でも、今の彼を止める事は不可能だろう。

「この時を待ってたぜぇ！」

空を飛びながら叫ぶ垣根の表情は、禍々しいほど歓喜の表情をしていた。

復讐

夜も更けた時間、普通の学生なら家に帰宅し、仕事をしている大人たちも一杯飲んでいる頃。
木原正は、今までの研究成果をレポートを纏めていた。

（やっと一区切りつきました。随分と遠回りしていたような気がします）

統括理事会宛なので、完璧なレポートに仕上げなければならない。
そう考えていた木原正は、レポート作成に全神経を集中していた。

しかし完成まで後半分という所で、ズドンと何かが爆発した音が耳に届いた。

（んー？　機材か何かが暴走して爆発でもしましたか？）

爆発音は一度聞こえたきり、特に聞こえなくなったので木原正は再びレポートに集中した。

もし彼がここで危険を察知して逃亡していたら、まだ生きていた可能性はあっただろう。
しかしレポート提出後の未来を想像して、彼は全てにおいてレポートが最優先だと判断した。
故に、手遅れになる頃にやっと気付いたのだ、自分が危険な立場にいる事を。

「し、失礼します！」

あと少しで完成という時に、木原正がいる部屋に一人の研究員が慌てて駆け込んできた。
その研究員は顔から大量の汗を流し、ゼーゼーと肩で息をしていた。

「何ですか、騒がしいですね。今は忙しいので、出来れば手短にお願いします」

入ってきた研究員を一瞥もせず、熱心に研究レポートをかき上げる木原正。
そんな木原正を見て研究員は慌てて言葉を発する。

「そ、そんな事をしている場合ではありません！　奴が……奴がここに来たのです！」

「奴って誰ですか？」

「垣根帝督ですよ！」

呑気な口調の木原正に、研究員はヒステリック気味に叫んだ。
入り口で叫んでいる研究員にやっと視線を向けた木原正は、それでもどこか呑気そうな表情をしていた。

「そんな『モルモット』はさっさと処分しなさい」

「出来るはずがないでしょう！？　ここには超能力者を止めるような設備などありません！　いえ、そもそも超能力者を完全に止める事など不可能です！」

「では、統括理事会に連絡をしなさい。それで『モルモット』を処分できるでしょう？」

木原正が呑気な理由。
それは電話相手が言った『自分たちの代わりはいくらでもいる』という事を正しく理解していなかったから。
彼はまだ『自分が有能だから、絶対に統括理事会が保護に回る』と考えていた。

「電話しても反応なしなんですよ!?」

だから最初、研究員が語る言葉が理解できなかった。

「……何ですって？」

「だから反応なしなんですよ!?　我々は捨てられたのですよ!」

「馬鹿な……この私を失えばどれほど損害が出るか、理解でいない連中らではないはず」

その時、電話相手の『代わりは幾らでもいる』を思い出した木原正。
初めて慌てたような素振りを見せた木原正は、乱暴に受話器を取ると電話相手へ電話をかけた。
既に予測していたのか、コールは一回が鳴り終える前に止まった。

『予想通り、ここにかけてきましたね』

「貴様、垣根帝督を止めろ!」

『ああ、先に申しておきます。これは録音です。貴方がこれを聞いている頃、私は自らの手で死んでいるか、垣根帝督君に殺されているかどちらかです』

「なっ！？」

驚きのあまり言葉に詰まる木原正。
そんな木原正を嘲笑うかのように、電話相手はいつもと変わらぬ口調だった。

『まさかここまで馬鹿だとは思いませんでした。暗部組織の制御役に接触してきた人物は、例外なく上層部へ報告されるのですよ。まぁ、これは自分の安全と共に、裏切りを防止する為ですが』

『あの日に電話をしてきた貴方も同様です。そして、それから二日後の事です。上層部は私にある命令を下しました』

そこで一呼吸おいたのか、ふいに言葉が途切れる。
しかしすぐに電話相手の言葉が木原の耳に届いた。

『二度目の接触をしてきた場合、木原正は理由を問わず裏切り者として処分しろ。手段については問わない』

「なん……」

『おめでとうございます。この二回目の連絡が、自らの死刑執行書にサインをした訳です。この事は上層部へ既に連絡がいっています。もはや、貴方は『有能な科学者』ではなく『学園都市にとって不要な存在』になったのですよ』

「貴様ぁ！？」

ここにきて初めて声を荒げる木原正。

だが、事態は木原正の預り知らぬ所で手遅れな状態まで進んでいた。

『きっと今は激怒している頃でしょうね。貴方のような馬鹿は行動が読みやすい、簡単な罠にひっかかる。とてもつまらなくて、人生最後の一勝負をかけるには物足りなかったですよ』

『さて、これで垣根帝督君は大手をふって貴方を殺せるわけです。ああ、逃げようとしても無駄です。貴方の位置は常に探知されていますから』

『まぁ残念な事に、垣根帝督君がどう動くか分からなかったので、この事を彼に連絡出来なかったのが心残りですが』

いつもの淡々とした口調で、ズラズラと事実を並べる電話相手。
この後自分が死ぬと分かっていても、それでも恐怖を感じていない口調で語っていた。
その事を理解した木原正は、薄ら寒いものを感じた。

『貴方は能力者たちを『モルモット』と称していた。そうでしょうね、貴方のような人物は、誰かを見下していないと、自分が維持できませんから』

そう聞こえた後、電話相手の言葉から聞きなれない名前が木原正の耳に届いた。
知らない名前に木原正は首を傾げる。

『この名前もきっと覚えていないでしょうね。貴方はそうだった、あの子も影花君も紅音君も、その他の子も実験動物としてしか見ていなかった』

そこで言葉が区切られると、電話相手は初めて感情を感じさせる言葉を口にした。

『どれほどの子供たちが、無能な貴方が有能だと自己満足する為に涙を流したか』

それは怒り、憎悪といった感情。
何も出来なかった自分への、そして木原正への怒りを感じさせる感情だった。

『どれほどの子供たちが、貴方の薄っぺらい名誉心というくだらないモノの為に死んだか』

『どれほどの子供たちが、貴方のせいで幸せを、輝ける未来を奪われたか』

『貴方はその罪を理解していますか？』

破壊の音が徐々に木原正がいる部屋に近づいてくる。
その音に混じって人の悲鳴が聞こえてきた。
声の主は老若男女問わずであり、例え女性だろうが老人だろうが例外なく悲鳴をあげていた。

「ひ、ひぃぃぃ！？」

部下が恐怖のあまり悲鳴を上げながら部屋から出ていった。
しかし、彼も例外なく最後は断末魔を上げていた。

『私は臆病者です。結局は統括理事会や暗部組織という壁に屈してしまった。負け犬で敗北者の私には、貴方を殺す資格などない』

『死ぬ必要のない子供たちを救えなかった愚か者の私には』

やがて廊下から絶叫や破壊音が完全に聞こえなくなった。

否、一つだけ聞こえる音がある。

それは人が歩く音、カツンカツンと廊下を歩く一人の人間の足音だけが聞こえていた。

『だから私は彼に全てを託した。どのような事が起ころうと、決して屈しなかった彼に』

『きっと勝手な期待を寄せるなと彼は怒るでしょうね』

その足音はゆっくりと木原がいる部屋に近づいてくる。

死へのカウントダウンを数えるかのように。

『さて、お喋りもここまです。そろそろ死への恐怖で心が一杯になり、私の言葉も聞いてないでしょうしね』

『先に待っていますよ。外道が堕ちる場所で』

そして電話はプツッと切れ、後には無機質な電子音だけが受話器から聞こえた。

呆然としていた木原だが、やがて怒りをぶちまけるかのように受話器を電話に叩きつける。

「ふざけるな！　モルモット程度に！　モルモット程度がこの私の邪魔をするなどあってはならぬ！」

普段の落ち着いた雰囲気など微塵も感じさせないほど、木原正は顔

に怒りを刻みながら叫んだ。
そして、荒い息を吐きながら逃げ道を探そうとする。
だが、そこで気付く。廊下から聞こえる音が全くない事を。

（音が聞こえなくなった？）

そう思った瞬間、マグナム弾すら防ぐ事が出来る頑丈な扉が、まるでプラスチックおもちゃのように吹き飛んだ。
その扉は弧を描いて木原正の後ろに飛んでいき、数メートル後ろにあった壁に突き刺さった。
吹き飛んだ扉からか、少しだけホコリが舞い散り辺りの視界を奪う。

「ゲホッゲホッ、な、何だ！？」

ホコリを吸い込んで咳き込んだ木原正は、目を細めながら扉があった場所を見る。

「随分と探したぜぇ……」

そこには背中に六枚の翼を展開した人物、垣根帝督がとても楽しそうな表情をして立っていた。

「あの時から何年たったかなぁ。三年？　四年かなぁ、まぁそんな事はどうでもいい」

ポケットに手を突っ込んだ状態で、木原正に大股で近づく垣根。
余りにスキだらけなので、思わず木原正が銃を取り出して撃ったぐらいだ。
だが、その銃弾は垣根に当たる事はなかった。

「なっ！？」

垣根の背後にある翼、そのうちの中段にある翼が銃弾を防ぐ。

「馬鹿か、銃程度で『俺たち』を殺せると思ったのか？」

上段にある翼が左右に軽く開かれる。
たったそれだけで、部屋の中に暴風を生み出した。
その風に、面白いように飛んでいった木原正はそのまま壁に叩きつけられる。

「ごはっ！？」

年齢的に初老に近い木原正は、たったそれだけで立つ力すら失った。
もとより研究職であり、体力は常人より低いというのもあるが。

「おいおい、これぐらいで死なないでくれよ。お前には、たっぷりと苦しみを味わってもらうのだからな」

歓喜の表情を浮かべながら垣根は木原に近づく。

「き、貴様分かっているのか。私は今、統括理事会から直接命じられた研究をしている」

「馬鹿か。その程度の事ぐらい知っている」

全身の力を使って立ち上がろうとする木原正を、垣根は見下ろしながら答えた。
その表情は「だからどうした？」と言いたげな表情だった。

「私に弓をひけば、統括理事会が黙っていない。貴様など、すぐに殺されるだろう。いや、殺されるならマシだ。脳だけ取り出され、電極を刺されて単なる能力を吐き出す塊となる」

木原正が強気な発言を出来る理由。
それは、統括理事会より見捨てられた事をまだ垣根は知らないと理解していたからだ。
ならばこの場は、何とか切り抜けられる。そう思っていた木原正である。
だがそれは垣根帝督という人物を、余りに知らなさすぎる故の愚かな行為だった。

「恨み程度で命を失いたくないだろう？　んん？　今からでも遅くない。私に謝って許しを」

そこでふいに木原正の言葉が止まる。
理由は単純で、単に木原正の体が横に数メートル飛んでいったからだ。
もっと簡単に言うなら、垣根が木原正を蹴り飛ばしたのだ。

壁に激突して一瞬息を吐き出しきった木原は、荒い呼吸をしながら息を整える。

「おい、なめてんのかテメェ」

そんな木原正だが、垣根の言葉を聞いた瞬間呼吸が止まった。
今まで経験した事がないほど、無条件で心が恐怖に支配される声色だった。

どうやれば人はここまで冷たい言葉を口から出せるのだろう。
そんな場違いな考えが浮かぶほど、垣根の声は冷たく、そして憎悪に満ちていた。

「恨みなんて生ぬるい言葉で片付けるんじゃねぇ」

四人分の怒り

「恨みなんて生ぬるい言葉で片付けるんじゃねぇ」

この言葉を聞いた木原正は、今度こそ呼吸が完全に止まった。
本当に人が出した言葉なのかと思えた。
まだ機械で言葉を作り上げたと言われたほうが、納得できるほどだった。
そんな思考停止状態に陥っている木原正の脇腹を、垣根は手加減など一切せず蹴り飛ばす。

「これは今までテメェに殺されたガキどもの分だ。後四人分、しっかり受け取ってもらうぜ」

「ゴホッゴホッ、アガッ」

口から血を吐き出しながら咳き込む木原正を見下ろす垣根。
木原正の襟首を持つと、垣根は強引に木原正を立たせた。

「紅音はよぉ、向日葵みたいな奴だった。輝くような、思わず見惚れてしまうような笑顔の奴だった。どんなにブルーになってても、アイツの笑顔を見るだけで元気が出た」

拳を握り腕を振り上げながら垣根は紅音の事を思う。
きっと、生きていれば今頃は明るいムードメーカーな奴になっていただろうと。
そんな今となってはありえない未来を想像しつつ垣根は言った。

「これはな、太陽のように暖かかった紅音の分だ！」

固く握りすぎてギリギリと音がする拳を、垣根は木原の顔面に振り下ろした。
ベキィッ！と何かを潰すような音が聞こえた後、木原正の体は先ほどと同じように吹き飛んでいた。
付近にあった物を吹き飛ばしながら、木原正の体は床を面白いように転がっていく。

「お前も、俺を研究していたグループも知っていたようだな。俺が超能力者になる事、影花が大能力者止まりだっていう事を」

「ひ、ヒィ！？」

半分意識を失いかけた木原だが、垣根が再び襟首を掴み強引に立たせた。
持ち上げられた事で木原は気絶する事が出来ず、痛みによって意識を保ったままの状態であった。

「テメェ影花をなめてんじゃねぇぞ。アイツは俺が認めた唯一のライバルだ。例え素養格付（パラメータリスト）がそうだとしても、影花はその常識をぶっ壊して超能力者になってたよ！」

襟首を掴んでいた手を離すと、垣根はそのまま回し蹴りを木原に叩きつける。
ゴキィっと骨が折れた音が部屋に木霊する。
折れた、と表現するより粉砕した、という表現のほうが正しいが。

「こいつはな、そんな超能力者への夢を奪われた影花の分だ」

「ッ！　ッ！？」

痛みの余り声すら出ない木原は、ただ苦悶の表情を浮かべながら腕を押さえていた。

「あんだけ大人しかった心理定規が、今じゃホステスみたいな格好で街を歩くんだぜ。流石に影花もショックだろうな、アイツは心理定規が好きだったから」

足をプラプラと揺らしながら垣根は、今もアジトで待っている心理定規を思う。

（あの時の俺は間違っていた。もっと心理定規を信用するべきだったのだ。あの時、影花が『心理定規を守れ』ってのは、絶対に離れるなって意味だったんだろうな）

ブラブラと足を揺らしていたが、やがて勢いをつけて木原の顔面を蹴り上げる。

蹴り上げで浮いた木原の体は、そのまま空中で二回転半した後に地面に叩きつけられた。

「これは突然幸せを手から叩き落されて涙を流した心理定規の分だ」

ゴシャッと何かが潰れたような音がする。

顎も砕けており、まともな言葉すら口に出来ない状態の木原正だった。

「最後の一人は言わなくても分かるよなぁ？」

そう言うと垣根は背中に六枚の翼を展開する。

翼は大きく左右に広がり、綺麗に六方向に広がっていた。

「囁かな幸せを胸に、ただひたむきに生きていたソイツから、テメェは全てを奪った」

翼を白く輝かせながら垣根は歌うように語る。
もはや喋る事すら出来ない木原は、単に怯えながら逃げようと床を這いつくばって移動するだけであった。

「並んで通学路を歩く事も、親友と夕食後の能力バトルも、たまにやる馬鹿な喧嘩も、それで管理人から怒られる事も、何もかもが出来なくなってしまった」

「仲間を、ライバルを、親友を、そして幼馴染との縁すらも奪われた」

「今までのソイツを構成する全てを奪い去った」

両手を広げて語る垣根の翼は、もはや直視が難しいほど光り輝いていた。
眩しさに思わず目を細めた木原だが、それらを無視して床を這いつくばって逃げようとする。

「た、たしゅけへ……」

それは命乞いの言葉だった。
木原正の人生で、最初で最後の命乞いだった。
しかし、既に遅すぎた。
その言葉を聞き入れるような人物は、この場に一人もいない。

「だから最後にこれは……テメェによって全てを奪われ、全てを失

った俺の……」

爪が食い込んで血が流れるほど、垣根は拳を握りながら最後の言葉を口にした。

「この俺の怒りだぁ！？」

そして垣根は未元物質を解放する。

そこから放たれるものは、全てを消し去るほどの膨大な力。

垣根を中心に四方八方へ広がる圧倒的な破壊力は、隕石の衝突すら凌ぐ威力だった。

その時、世界から音が消えた。

第一七学区に巨大なクレーターが出来たという不可解な事件話が、またたく間に学園都市中を駆け巡った。

全く関係ない学生たちは、その事件について色々な憶測や噂話に興じていた。

曰く、隕石を落とす兵器を作り上げた。

曰く、能力者が完全に暴走した。

曰く、衛星兵器の試射をしたのだ。

どれもこれも根も葉もない噂レベルの事で、学生たちは盛り上がっていた。

対して警備員や風紀委員は、無視出来ないレベルまで広がった噂話を沈静化しようと考えた。
それには事件解決が必須であり、その為に膨大な人員をさいて事件の解決を目指した。
勿論、解決する情報など一つも得る事が出来ず完全に迷宮入り状態だったが。

そんな状態の中、クレーターを作った張本人の垣根は一人街を歩いていた。

「あれから数日……俺を消そうとする動きはなし……か」

特に何かをするわけでもなく、ただ街を歩いている垣根だが、勿論警戒心は忘れていない。

木原正を殺して垣根の復讐は完了を遂げた。
しかし垣根が潰した研究グループと、木原正には決定的な違いがある。
研究グループはあくまで私的グループだったが、木原正は統括理事会から直接研究を命じられていた。
つまり木原正の背後には、学園都市統括理事会があった訳である。
彼を殺すという事は、統括理事会に弓を引くと同意義になるだろう。

（それなのに音沙汰なし。そろそろ暗部組織ぐらい派遣されてもおかしくないんだがな）

だが、それから数日垣根の周りに変化はなかった。
いつもと同じように、何の変化もなく、垣根はいつもの生活スタイルであった。

そんな何も知らない彼に届いた連絡は二つ。
一つ、電話相手が変更される事。
二つ、木原正抹殺の報酬を出す事。

この時になって彼は知る。
木原正は前任の電話相手によって、既に学園都市の統括理事会から見捨てられていた事を。
殺害しても、何の問題もないように。

（はん、あの野郎。最後に味な真似をしやがって）

そう思った垣根だが、顔は薄い笑みを浮かべていた。

「第二位が派手にやったそうだが、放置しててていいのか？」

第七学区にある窓のないビル、その内部にアレイスターと会談をしている人物がいた。
しかし髪は金髪で逆立てて、服装はアロハシャツ。金色のネックレスをするという格好だった。
とても学園都市統括理事長であるアレイスターと会う格好ではなかった。

「何か問題でもあるのかね？」

しかしアレイスターは特に気にする様子もなく、目の前の男の言葉

に答える。
少しだけ驚いた表情をしながら、金髪の男は更に質問を投げる。
「木原正は統括理事会から直接研究を命じられていたはずだが？第二位の行動は明らかに研究を阻害したと見えるぜ」
「あの様な無意味な研究など、元より有益な結果など得られるはずもなかろう」
「何だと？」
有益な結果が出るはずがないと分かっていながら、アレイスターは木原正に研究を命じた。
研究に割り振られた予算は膨大で、ドブに捨てる金額としては多すぎると金髪男は思った。
そんな金髪男を見て、アレイスターは薄く笑った。
「そんなに不思議かね、土御門元春」
「……アレだけの予算をさいておきながら、研究が成功する必要などないって言われれば、誰でも驚くぜい」
金髪男、土御門は真剣な表情をしながらアレイスターに尋ねる。
その言葉を聞いて、アレイスターは先ほどと変わらず薄く笑っていた。
「『損して得取れ』ということわざがあろう。あの程度の資金と木原正という存在だけで、未元物質は更なる成長を遂げた。普通に研究すれば、それ以上の資金と人材が必要だったろう」

「……」

「木原正の役目は未元物質の憎悪を受ける、ただそれだけだ。そして木原正はきちんと役目を果たした。だから何の問題もない」

（全てはプラン通りという訳か）

そう理解した土御門は、内心ため息を吐いた。

今回の事件は、全てはアレイスターの手のひらで演じられていたに過ぎない、と。

果たして、この『人間』を出し抜く事など出来るのか。

そう思わずにはいられない土御門だった。

「しかし、今回の事に木原一族はカンカンらしいな。いつもより激しく統括理事会に抗議しているらしいが？　ちったぁ動いている様子ぐらい見せてやれよ」

「補充の利くモノの為に何故動かなければならない」

その声は嘲るにも、憐れむようにも、楽しむようにも聞こえた。

一体どれが本音なのか、土御門にはさっぱり分からなかった。

「ほっといたら噛み付かれるかもしれないぜ？」

「ならば、その時は『躾』をすれば問題ない」

アレイスターは薄く笑いながら更に語る。

「それにこの街にいる能力者は私の所有物だ。勝手に破壊されても困るのでな」

「……なるほど、木原一族が暴走して垣根帝督を狙ったら、その時は色々とクビが飛ぶって訳か」

「必要のない物をゴミ箱に捨てるだけだ。ゴミはゴミ箱に捨てるのが常識であろう？」

笑えない冗談だ、そう思った土御門は内心ため息を吐いた。

「ま、オレには木原一族なんてどうでもいいがな。さっさと仕事の話をしようぜ」

「よかろう、ではーーー」

この日、学園都市の闇に身を沈めた人間が一人追加された。

区切り

「これが二年前の話だ」

垣根たちは第一〇学区にある、学園都市唯一の墓地に移動していた。

墓地といっても、その形状は一般の墓地とは違い、エレベーターを使った立体駐車場に似ていた。

中には射撃演習場のように、パーティションで区切られた『ブース』がある。

そこで暗証番号を入力したら、骨壷の入ったコンパクトな墓石が自動的に運ばれてくる。

リフトやエレベーターの力を借りて運ばれてくる様は、やはり学園都市と言えるだろう。

「アイツらの墓は……一つにしている。別々なんて寂しいからな」

「……そうね」

やがてコンパクトな墓石が、三人の前に姿を現す。

ここを利用する学生は極めて稀である。

引き取り手がいれば、徹底的な焼却処分によってＤＮＡマップを解析不可能な状態にした後で、骨は親元に帰される。

つまり、街の墓地を使いたいという希望者は殆どが『訳あり』の人間ばかりだ。

犯罪者や『置き去り（チャイルドエラー）』、そして暗部と関わるために『表』の身分を抹消した者たち。

そうした、学園都市の闇に関わっている者たちばかりだった。

「……話した通り、コイツらの墓に骨はない。だから骨壷すら墓石の中には入っていない」

「あのジャケットね……」

「ああ……」

コンパクトな墓石を見つめながら垣根と心理定規は、どこか懐かしそうな表情をする。

そうして二人は暫く墓石をじっと眺めていた。

二人の心にどのような言葉と感情が湧いているのか、それは二人にしか分からなかった。

しかし、ふと視界の隅で何かが動いている事に垣根は気付く。

そちらに視線を向けると、優菜がこの場から立ち去ろうとしていた。

「優菜？」

垣根の言葉に歩を止めた優菜は、振り返らずにただ簡素な言葉を口にした。

「久しぶりの四人なのです、語るべき事は色々とあるでしょう。私は下で待っています」

そう言うと垣根や心理定規の返事を待たず、優菜はその場から立ち去った。

カツカツと歩く音が垣根の耳に届いていたが、やがてそれも聞こえなくなり優菜は垣根たちの前から完全に立ち去った。

「……アイツもカッコつけすぎだろう……」

そう呟く垣根だが、どこか嬉しそうな表情をしていた。

垣根は再び墓石の方を見ると、どこか遠くを見る目をしながら笑った。

「本当はもっと前に報告するつもりだったんだが……随分と遅くなっちまったな」

そう呟くと垣根はそっと心理定規を自分の元に引き寄せた。

心理定規は特に抵抗もせず、まるでそれが当たり前かのように垣根の腕の中におさまる。

「影花、お前との約束通り心理定規は守り続ける。この約束は、俺の命が続く限り守る。だから、お前は安心しててくれ」

「帝督……」

垣根の言葉を聞いた心理定規は、その顔を垣根の胸に埋めた。

もしかしたら顔を見られたくなかったのか、それとも無意識からの行動か。

「紅音、正直あの時お前の告白に、俺は何て答えていいか分からなかった。今もお前を仲間として好きだったのか、それとも女として好きだったのかは分からねぇ」

だけど、と垣根は呟くと更に言葉を発する。

「お前は……最高の女だったぜ。それだけは、間違いない」

垣根がそう呟くと同時に、心理定規の頬にポタリと何かが落ちた。
心理定規がその何かに触れると、水っぽい何かだった。

「……クソッ……クソッ……止まりやがらねぇ」

それは垣根が流した涙。

「……チクショウ……カッコ悪いよなぁ、俺」

垣根がどんなに顔を拭おうとも、その涙は決して途切れる事はなかった。
そんな垣根の頬に、心理定規は優しく触れる。

「帝督、泣いていいのよ。その涙は紅音と影花の為に流しているのでしょう？」

「心理定規……」

「一人の人が流すべきものの内にね、友の為に涙を流すという言葉があるのよ」

垣根の背中に手を回した心理定規は、再び垣根の胸に顔を埋めた。
その肩は小刻みに震えており、彼女も泣いているのだと垣根は理解した。
そして、それが垣根に対して止めであった。

「……紅音ェ！　影花ァ！　俺たちはずっと四人一緒のはずだろう!?　そう言っていたのに……」

もはや止める気などないのか、垣根はその瞳からポタポタと涙を流し続ける。
視界が滲み、墓石すらまともに見えなくなるほどの涙。
そして涙と共に、心の奥底に押さえ込んでいた想いが言葉となって溢れ出す。

垣根はギュッと目を強く瞑った。それでも、彼の目から涙が止まる事はなかった。

「帝督……帝督……」

「そう誓ったのに！　何でお前ら二人が先にいっちまうんだよ！
俺と心理定規を残して！　何でだよ……何で二人になっちまったんだよ！？　チクショウ……チクショオォォォォォォォ！！！」

心の奥底から湧き上がった感情に従って垣根は叫ぶ。

穢れ無き純粋な想いが篭った涙を垣根は流し続ける。
亡き親友である影花と紅音の為に。

この時、垣根は今まで認めていなかった二人の『死』を受け入れた。

言葉通り『墓地』があるビルの下で待っていた優菜。
ビルの壁を背に、彼女はずっと空を見上げていた。

「……全てに決着をつけるのですね、垣根さんは」

多分だけどずっと二人の死を認められなかった。
二人がずっと自分の中で生きていると思っていた。
だから、何も語らずただ黙っていた。

だけど今は違うようだ。
二人は死んだ。
だけど二人の『意思』はずっと自分と心理定規の中で生き続ける。
そう考えるようになったんだ、と優菜は理解した。

どうしてそう思えたのか。
それは優菜自身もよく分かっていなかった。
だけど、そう思っているとしか優菜は思えなかった。

「大丈夫ですよ、垣根さん」

誰かがいるわけでもなく、まして垣根本人がいる訳でもないのに優菜は言葉を紡ぐ。

「その悲しみは、優しさに……そして力となるでしょう」

慈しむようにも、諭すようにも、優しく語るようにも聞こえる言葉。
慈愛が篭った表情をしながら、優菜は更に語り続ける。

「きっと二人も、今の貴方を見て微笑んでいるはずですよ」

しかし、そこへ場の雰囲気をぶち壊すような、デフォルトで入っている携帯の着信音が辺りに響き渡った。

涙を流し尽くしすかのように、垣根はその場でずっと泣き続けた。
その涙の量が、彼がどれほど二人を大事に思っていたか分かるほどに。

「……そろそろ戻るか」

「そうね……」

やっと涙が止まった垣根は、少し恥ずかしそうな表情をして言った。
友のため、といってもやはり涙を人前で晒すのは、垣根にとっては恥ずかしいのだろう。
その事を理解した心理定規は、特に何も言わず黙って垣根についていった。

「待たせたな、優菜」

墓地の下、つまり入り口で待っていた優菜に垣根は声をかける。

「もういいのですか？」

垣根の声に反応した優菜は、垣根の顔を見ずにそう尋ねた。

「ああ、もういいぜ」

「……そうですか」

どこか優しげな、慈しみを込めた感じの声で優菜は囁く。

「ところで、話はコレで終わりなの？」

「……いや、まだだ。最後に一つある。これは優菜に……いや、優菜にだけは絶対に聞いて欲しい話になる」

「私に……ですか？」

木原正に復讐をして、影花と紅音の話は終わりだと二人は思っていた。

だが、垣根が言うにはもう一つ二人に話す事があるらしい。

一体何なのか、二人には全く分からなかった。

（これを話せば最悪優菜は俺を嫌うかもしれねぇ。だけど、これは絶対に語らないといけねぇ……最悪何発か殴られるのは覚悟しておかないとな）

「不思議に思わなかったか、優菜。何故、暗部組織の俺と上条が友達なのか。普通に考えれば『まるで接点がない二人』にならないか？」

そう尋ねる垣根の言葉を聞いて、心理定規はある事を思い出した。

それは垣根の全てを変えたと言ってもいいほどの話。

「もしかして……帝督の言っている最後の話って」

心理定規の視線を受けて、垣根は無言で頷いた。

「ああ……俺と上条が知り合うきっかけを作った実験。その名前は……絶対能力進化実験」

「絶対能力……進化実験……」

その実験名なら優菜も知っている。

昔存在していた『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』というスーパーコンピューターが弾きだした結果を元に、絶対能力者を産み出そうとした実験。

被験者は一方通行、もしくは垣根帝督の二人のみ。

過去は一方通行のみ可能だったらしいが、一年前から第二候補として垣根帝督の名も上がるようになった。

その理由が垣根帝督の強さが、超能力者になっても進化し続けていた為である。

実験準備が整うと、研究者はまず一方通行に参加を打診した。

しかし一方通行が実験の参加を拒否、度重なる説得も効果はなかった。

そこで研究者たちは、垣根帝督を対象に絶対能力進化実験を行おうと考えた。

こちらの説得は文字通り『命がけ』であった。

何しろ垣根帝督は大の研究者嫌い。

超能力者の認定を受ける為だけの検査は、嫌々ながら受けているがそれ以外の事に関しては全て拒否している。

最も、超能力者認定の検査でも、研究者にとっては気の休まる時はなかった。

何しろちょっとでも変な事をすると、たちまち垣根の逆鱗に触れるからだ。

打診にいった研究者が『帰らぬ人』となる場合もあったが、諦める

わけにはいかなかった。
何しろ実験が行えないなら、路頭に迷う事は確定的なのだから。
結局、最後は交渉人を挟んで打診する事となった。
そして何度かの交渉の末に、垣根から承諾の言葉をもらう事が出来た。

しかしすぐに実験は行わなかった。
何しろ垣根の強さは殆どが未知数と言えたのだ。
コレに関して議論を重ねた結果、実験の前にテストを行う事で落ち着いた。

だが実験のテスト中に、『予定外の人物』が乱入し垣根帝督を撃破する。
そのせいで実験は疑惑を持たれ、再度『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』に演算させてみた所『垣根帝督は絶対能力者にはなれない』という結果が出た。
最終的に絶対能力進化実験は凍結され、関係した研究者は全員解散するという結末を迎えた。
これが優菜の知る『絶対能力進化実験の全容』である。

「まさか……実験のテスト日に乱入したという人物は……」

垣根を見ながら優菜は回答を口にしようとする。
だが、その前に垣根が頷き、そして回答を口にした。

「ああ、実験に乱入してきたのは上条と……麦野たち暗部組織『アイテム』のメンバー全員だ」

絶対能力者への道

今より一年前ほど前、既にクレーター事件も学生たちの記憶から忘れ去られた頃。
学園都市は相変わらず平和な世界と、簡単に人が死ぬ裏の世界が同居していた。

この頃になると裏の世界もある程度落ち着きを得ており、幾つかの暗部組織が群雄割拠のように存在していた。
『グループ』『スクール』『アイテム』『ブロック』『メンバー』『猟犬部隊』など、それぞれがそれぞれの役割を担いながら、学園都市を裏から守っていた。

「今日もお仕事終わりっと……」

そんな暗部組織のうち『スクール』のリーダーを務める垣根は、今日も電話相手から依頼された仕事をこなしていた。
付近に転がっている肉食加工品（ターゲット）を一瞥すると、面倒臭そうに電話相手に連絡を取る。

「仕事は終わった。さっさと処分しとけよ」

そう言うと、電話相手の返事を待たずに垣根は通話を切る。
切れる直前に何か言っているのが聞こえたが、どうせろくでもない事と思っていた。

「ま、どうせ『研究に協力しろ』って小言だと思うがなぁ」

昔から大の研究者嫌いで有名な垣根の戦歴を見れば、普通の研究者

は尻込みして全く接触してこようとしない。
だが中には賭けに出ているのか、それとも学園都市の裏に通じる者なのか、時々垣根へ研究の参加を依頼する人物がいる。
裏に通じるモノは直接交渉ではなく、電話相手や上層部などを経由して連絡を取る事が多い。
大体は垣根がＮＯと言って終わりになるが、中にはかなりしつこい部類の連中もいる。
だが、そういった連中が最後にどうなるかは一つしかなかった。

「もうちょっと愉快なオブジェでも飾ってやると、くだらない事をいう連中は減るのかなぁ」

自らの命が刈り取られる、それ以外に訪れる未来はなかった。

暗部組織には超能力者が複数おり、第一位と第二位、そして第四位がそれぞれの組織に所属している。
この中で、最も恐れられているのは学園都市最強の第一位ではない。
勿論、第四位でもない。
実際に一番恐ろしいのは、『未元物質（ダークマター）』を持つ第二位の垣根帝督である。

一番の原因は、やはりその能力が全く未知数という事になる。
能力の情報が手に入る第一位や第四位とは違い『常識破り』ということしか分からない。
また能力以外の性能も『常識破り』であった。

超能力者の殆どはその能力が強大故に、能力に頼り切った所が多い。
特に顕著なのが第一位で、彼から能力を奪えば普通より少し弱い学生にしかならない。
頭脳は桁外れに良いが、体がそれらについてこないのだ。

対して垣根は違う。
彼は能力がなくても素手で人を殺せる程の腕力や脚力、五感などの身体機能を有している。
第一位が学園都市の能力者の中でトップなら、垣根帝督は能力を含む総合力でトップに立てるほどだった。
実際垣根は能力を使わずに、電話相手より依頼された仕事をこなす事もあった。
たった一人で武装した集団を尽く撃破し、要塞化された施設を破壊する様を見れば、どう足掻いても勝てないと思わせるには十分だった。

「……復讐を成し遂げたのに、何でこんなに虚しい気持ちになるのかねぇ」

そんな暴力の塊である垣根は、少しだけ疲れたような表情をしていた。
ちょっとした過去、とは言えないが一年近く前の話。
垣根は長年探していた影花と紅音の敵である、木原正の粛清を成し遂げた。
復讐を成し遂げた時は、得も言われぬ高揚感を感じていた。
だが時間がたつにつれて、まるで心の中にぽっかり穴が開いたかのように、虚しさが心を支配するようになっていった。

「ふー……これから俺は何をして生きていけばいいんだろうな」

心の虚しさを吐き出すかのように、垣根は弱音を口にしながら空を見上げる。
その時、垣根の脳裏にある言葉が浮かんだ。

『心理定規を守れ』

それは垣根の心の奥底に刻まれた言葉。

影花と最後に約束した垣根にとって最重要の約束。

「そうだな……影花、お前もそう思うだろう」

垣根はそう呟くと、どこか嬉しそうな笑みを浮かべる。

その表情は、やるべき事が見つかった男の表情をしていた。

「俺の残り人生、アイツにやるのも悪くない」

そう語る垣根はそのまま夜の闇の中へ消えていった。

それから数日後、垣根は捨てたはずの夢を再び追い求める決意をする。

幼少の頃に夢見た絶対能力者への道を。

今度は自分のためではなく、たった一人の少女の為に。

垣根が決意してから一ヶ月後、学園都市の裏世界ではある噂話が流れていた。

その噂とは『第二位が自分の能力強化を行なっている』。

真相は定かではないが、何人かの能力研究者が垣根帝督らしき人物と接触をしていた。

無論、研究者からではなく垣根帝督からではあるが。

「その噂話、第一位様はどう思うかしら？」

そしてそんな噂話に興味を示したある人物が、第一位の一方通行に気持ちを尋ねてみた。

「あァ？　ンなのどうでもいいだろうがァ」

面倒臭そうな表情をして、目の前に立つ人物の問いに答える。

「そう？　何かこう感じるものはないのかしら？」

「いちいち三下の行動を気にしてどォする。お前はいつから噂好きのババァになったンだよ、結標」

お下げ髪の少女、結標はその答えを聞いて肩をすくめる。

傍から見れば単なる少年少女の二人、ただ談笑しているだけにしか見えないだろう。

最も二人の足元に大量の死体が転がっていなければ、の話だが。

「さて、ここの片付けを」

最後まで言い切る前に、結標は背筋に悪寒を感じた。

それと同時に、言葉に表せないような威圧感をヒシヒシと肌で感じていた。

一方通行も何か感じ取ったのか、辺りを警戒しながら見渡す。

「あぁ？　なんだよ、何で『グループ』が俺の仕事を取ってるんだよ」

その時、横合いから誰かの声が二人の耳に届く。

一斉にそちらを振り向くと、そこにはホスト風の男が一人立っていた。

「チッ、もしかして仕事がかぶったかぁ？　あの電話野郎、全く使い物にならねぇ」

その男の名前を二人は知っている。
先ほど噂話に上がっていた人物、学園都市第二位にて暗部組織『スクール』のリーダー。

「第二位……」

「俺の名前は垣根帝督だ」

結標の言葉に反論をした垣根は、懐から携帯電話を取り出す。
二人の事など歯牙にもかけていないのか、通話ボタンを押すと電話を耳に当てた。

「おい、ボケナス。『グループ』が先に仕事している理由は何でだ……あぁ？　今日、仕事をチェンジしただとぉ？　アホか、そういう事は早めに連絡しろっつてるだろうが」

その後も暫く電話のやり取りをしていた垣根。
その間、結標はまるで生きた心地がしなかった。

（何こいつ……相手に警戒心を抱かせない軽快なトークしてるけど……威圧感が桁違いだわ）

今もピリピリと感じる威圧を肌で感じているせいか、結標は垣根から視線を外せなかった。

むしろ、外した瞬間に自分の命がなくなるのでは。
そう思えるほど、結標は垣根の威圧感に飲み込まれていた。

（ナイフを首元につき付けられた状態ね。ちょっとでも選択をミスれば、即座に終わりって思えるぐらい）

（彼から感じる獰猛で危険な雰囲気……その存在自体が研ぎ澄まされた刃物と思えるわ）

そこまで考えて、結標は軍用ライトを握っている事に初めて気づく。
垣根の威圧を感じて、無意識に危険を察知したのだろうか。
しかしいつもは頼もしい軍用ライトも、この時ばかりは心許なく思えて仕方がなかった。

「あーあー、わかった、わかったよ。いちいちうるせぇんだよ、ボケナス」

最後まで悪態をつきながら電話を切ると、垣根は再び携帯電話を懐にしまう。
おそらく電話相手にかけていたのだろうが、傍目からは電話相手が上司とは思えなかった。

「手違いがあったみてぇだ。その仕事は昨日まで『スクール』の仕事だったが、今日になって『グループ』に切り替わっていたようだ」

「……そのようね」

「電話相手のボケナスが連絡漏れしてやがったんだよ。めんどくせぇ」

そう言うと垣根は二人に背を向けて歩き出した。
普通ならここで終わり、そのはずだった。
しかし、何を思ったか一方通行は足元にあった石を蹴り飛ばした。

普通なら常人の蹴りで飛んだ石など、大した威力にはならないだろう。
だが、一方通行は能力で石のベクトルを操作していた。
よってその石の威力は、殆ど銃弾と変わりがなかった。

垣根はその石に気付いた様子はない。
ずっと後ろを向いていて、一方通行が石を蹴った事にすら気付いていなかった。

「!?」

だが、突然垣根の背中から四枚の翼が展開されると、二枚が石を砕き、もう二枚が結標と一方通行めがけて襲いかかってきた。
その間も、垣根はスタスタと歩いており、翼の展開が彼の意思によるものではない事を物語っていた。

「突然何やってるのよ、一方通行!」

結標は空間移動で、一方通行はベクトル操作で翼の攻撃から逃れる。
だが、尚も翼は攻撃を仕掛けてきた。
更に防御をした翼も追加され、一方通行と結標は四枚の翼から狙われる事となった。

「ん?　おお、お前ら。落ち着け、落ち着け」

騒ぎに気付いた垣根が、振り返りながらそう言葉を口にする。

すると、さっきまで執拗な攻撃を仕掛けていた翼がピタっと止まった。
そしてするすると垣根の背中に吸い込まれていった。

「何をしたか知らねぇが、下手な事は止めておいたほうがいいぞ。内部粛清と見られてもおかしくないからな」

「……それは一方通行に言ってほしいわ。私は単に巻き込まれただけよ」

「あー、そうですか。まぁ一方通行君も馬鹿は止めたほうがいいぜ。争っても何もメリットないしよ」

気軽そうに手をパタパタと振りながら垣根は言う。
しかしその間、一方通行は一度として垣根から視線を外していなかった。

「野郎に見つめられてもキショイだけだぞ。俺にその手の趣味はないぜ」

「……よくペラペラ喋る奴だな、第二位ってのは」

軽快なトークをする垣根を睨みながら、一方通行はいつでも動ける体勢を取る。
何故だか分からないが、垣根を見た時から一方通行は常に臨戦態勢を取っていた。

「ん？　ちょっと待て、一方通行……あぁ、お前が『グループ』に所属している第一位か」

そう言って垣根は一方通行を頭のてっぺんから足の先まで見る。
まるで品定めしているようで、一方通行には不愉快だった。

「お前、細いなぁ。もうちょっと体を鍛えておけよ。今時男で病弱キャラは流行らないぞ」

「……余計なお世話だァ」

そう言って一方通行は再度地面にある石を蹴り飛ばす。
さっきより多めにベクトル操作した石は、一瞬にして垣根の顔面めがけて飛んだ。
結標が一方通行の行為に気付いた時は、既に石は垣根の目の前まできていた。

この時誰が豫想できただろうか。
一方通行が蹴り飛ばした石が。
ベクトル操作されて弾丸のように飛んでいた石が。

「おいおい、第一位様は随分と好戦的だな」

垣根の手によって粉砕されるなど。

「なっ！？」

一番驚いたのは結標であった。
何せ垣根は背中に翼を一枚も出していないのだ。
つまり、それは垣根本人の力だけで弾丸と化した石を粉砕したという事になる。

「……」

一方通行はいつもと変わらぬ表情だが、その頬に一筋の汗が流れていた。
それが、彼も内心では驚いている事を如実に物語っていた。

「何も驚く事はないだろう？　第一位の視線、蹴った角度、飛んでくる物体が出す音などを計算して、最終的に俺と石が接触する所を割り出せば後は簡単だ。当たる前に石を粉砕すればいい。たったその程度の事だよ」

「ああ、そこの空間移動能力者が何かしても無駄だぜ。お前の視線、動かす腕の筋肉、手に持っている軍用ライトの向きを見れば、大体どこに出してくるか分かる。後は『物体を空間移動される前に、その空間を避ければいい』。そうすれば攻撃などカスリもしねぇよ」

そう説明する垣根の表情を見て、一方通行と結標は初めて気付く。
どうして垣根に警戒心を抱き続けたか、どうして一方通行は無意識のうちに攻撃を仕掛けたか。
その答えが。

相手へ警戒心を抱かせないような、それでいて相手の懐に入り込むような話術。
物腰柔らかく、暴威的な雰囲気を抱かせない態度。
しかし、それらの印象を覆す場所が垣根にはあった。

それは瞳である。笑みを浮かべている時も、面倒臭そうな表情をしている時も。
垣根の目は一度として笑っていなかった。
鋭く尖った刃物のような、獰猛で危険な雰囲気を感じてしまう瞳。
結標が心の中で垣根に抱いた印象は、彼の瞳から感じる印象だった

のだ。

「まぁ俺は帰る。お前らも夜更かしするなよ」

そう言うと垣根は再び二人に背を見せて立ち去る。
今度は、一方通行も攻撃を仕掛ける事はなかった。
必要以上に垣根を警戒した為に、彼は一歩も動くことが出来なかったのだ。

「アレが……第二位……」

やがてポツリと結標が言葉を漏らす。
その時には、既に垣根の姿はこの場にはなかった。

絶対能力進化実験

絶対能力者になる、と言ってもそう簡単になれるはずなどない。
何しろ前例がないのだ。
その為に、どういった基準が絶対能力者と判断されるか不明瞭だった。
見えない壁がいくつも立ちはだかっている状態に、誰もが諦めの境地にいた。
だが垣根は諦めの感情が湧き上がるたびに、ある言葉を自分に言い聞かせていた。

『心理定規を守るだけの力を得る』

親友との約束が、一度失った繋がりを再び失いたくない心が、どんなに高い壁が立ち塞がろうと諦めるという選択肢を垣根に選ばせなかった。
そうして垣根が能力の強化を図り続けて一年がたとうとした頃、ふとした噂話を垣根は耳にした。

『絶対能力者を生み出す絶対能力進化実験というのが行われる』

最初は興味を示した垣根だが、内容を軽く知った後は興味すら失った。
何せ実験の内容が『二万通りの戦闘環境で量産能力者（レディオノイズ）を二万回殺害する』という内容だからだ。
たかだかその程度で、絶対能力者を生み出せれるなら苦労はしない。
おまけに被験者の名前は一方通行だけしか書かれていない。

（自分が対象じゃないなら、わざわざ興味を示す必要もない）

絶対能力進化実験の結果のみ分かればいい、そう垣根は判断した。

結果を知りたい理由。

それは万が一ここで絶対能力者が生まれれば、基準が作られるという事になる。

ならばその基準を満たすようにすれば、垣根でも絶対能力者へ進化出来る可能性がある。

垣根の中で一番目とか二番目というのは些細な事で、必要なのは『絶対能力者になる為の方法』だけであった。

しかし垣根の思惑は脆くも崩れ去った。

絶対能力進化実験に対して、一方通行は参加拒否の意向を示したのだ。

コレばかりは予想外過ぎたので、垣根も驚きを隠せなかった。

「てっきり第一位様は、絶対能力者になりたがっていると思ったんだがな」

「あら、貴方もそうじゃないのかしら？」

理由をあれこれ考えていると、垣根の背後から声をかける人物がいた。

相手は勿論、同じ『スクール』のメンバーである心理定規だ。

そもそも垣根が背後を許す事自体、彼女以外にありえないが。

「まぁそうだが、第一位様が絶対能力者になってくれた方が楽なんだよ」

「そうなの？　男って何でも自分が一番じゃないと気が済まないん

じゃないかしら？」

「馬鹿か、それは合理的に考えられない奴の意見だ。全く未知の状態よりは、既にある程度路線が確定している方が楽なんだよ」

実際垣根にとっては一番になるか、二番になるかなど些細なレベルであった。

彼にとって自分が得る富も名声も何もかもが不要だった。

たった一つ、どんな状態でも心理定規を守る事が出来る力さえあればいい。

だから絶対能力者で序列が二番、つまり後ろになっても彼にとっては気にするレベルではなかった。

「そうなの？　まぁいいわ。それより電話相手から仕事の連絡がきたわよ」

「……今度は仕事をチェンジしてたなんてヘマはないだろうな」

「それはないわ。今度はちゃんと調べたから」

垣根の問いに心理定規は答える。

それを聞いて、垣根は少しだけ前の事を思い返す。

（第一位は噂に違わず強い。何とかハッタリでカバーしたが、真正面から激突しても負けるだけだ）

垣根と一方通行は一年近く前に出会っていた。

僅かな時間の接触だが、一方通行がどれほど強いか垣根は嫌というほど理解した。

そして、その間にある巨大な壁も同時に理解した。

「今の俺じゃ、きっと第一位を倒す事は出来ないだろうな」

「珍しいじゃない、弱気なんて」

力量差を思い返したせいか、垣根はポツリと弱音を口にした。
それを聞いた心理定規は、少しだけ驚きの表情を浮かべた。

「弱気じゃない、事実だ。『第二位と第一位の間に絶対的な壁がある』、そう言われている理由が、あの時の接触で嫌というほどわかったよ」

「へぇ……貴方は壁があるって認めてるんだ、帝督」

プライドが高いと思っていた心理定規は、垣根があっさりと自分より強いと認めた事に驚きを隠せなかった、
自分は第一位より強い、そう思ってる方がまだしっくり来たのだから。

「俺を変なプライドがある第三位と一緒にするな。相手が強いってのを認めずに、ただがむしゃらに戦っても意味はねぇ。むしろ勝てる戦いも負ける可能性だって出てくる」

「……そうなんだ」

「無駄なプライドなんぞ、戦いにおいては糞の役にもたたねぇ。そんなものは犬にでも食わせてろ。戦いで必要なのは冷静な判断を下せる事だ」

「第一位の能力は分かっているの？」

「奴の能力はベクトル操作を行う能力だ。単純だが、これほど強い能力はない。おそらく俺の攻撃もベクトル変換されて弾かれるだろうな」

とても合理的な考えを持っている事に、心理定規は少しだけ寂しさを覚えた。

「一方通行の頭脳は学園都市最高峰だ。俺の能力も逆算される可能性が高い。そして逆算されてしまっては、俺の勝てる見込みはゼロに近くなる」

自分の知っている垣根は、誇大妄想に近い夢を大真面目に語るような人物だったから。

「可能性としては、奴のベクトル反射を受け付けない攻撃方法で、一撃必殺という短期決戦しかない。だがコレも、失敗すれば終わりというリスキーな方法だ。完璧に奴を倒すのは難しいだろうな」

だけど、再び出会った時の垣根は、夢を語る事もなくただ合理的な事しか言わなかった。

（夢を語る帝督って、本当に楽しそうに笑っていたから……ね）

「そう考えれば第一位と第二位の間に壁がある、というのは妥当な評価だ」

「そう、ね……」

「まぁ今はどうでもいい事だ。そんな事より、さっさと仕事の話を

しよう」

あの笑顔を見れなくなった事に、幾分の寂しさを覚えつつ心理定規は仕事の内容を説明しだした。

「……本気ですか？」

白衣を着た研究者の一人が、大きなテーブルにのった資料を見つつ言った。

「本気も何も、これを実行しないと我々は路頭に迷う事になるぞ？」

「だからといって、あの人物が素直に応じてくれるとは思えません」

また別の研究者が、中央に座っている研究者を睨みながら言う。

その様子は、会議というより中央に座っている人間を糾弾する場にも見えた。

実際、彼が言った言葉は研究者にとって危険極まりない事だったが。

「どんな説得をしても第一位は参加してもらえない。統括理事会も第一位の意思を尊重する、としか言わない。ならば、被験者を変えるのは当然の事であろう」

「しかし危険度は第一位と比較になりませんぞ。第一、どうやって彼を説得するのです？」

「私はお断りしたい。路頭に迷うか、それとも死ぬかなら、路頭に迷う方がまだマシだ」

「最悪、この研究所に本人が乗り込んでくる事もある。それに、彼は第一位と同じで統括理事会が動く事もない」

次々に不満を口にする研究者たち。

それも当然の事である、彼らが今から実験の参加を伝えに行く人物とは。

「そもそも、第二位が絶対能力者になれるのですか？」

大の研究者嫌いで有名な垣根帝督なのだから。

つまりこの場に集まっている人物たちは、絶対能力進化実験の研究者たちだった。

そしてこの集まりは、絶対能力進化実験の今後を決める重要な会議であった。

「樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）は、絶対能力者になれるのは第一位のみ。という演算結果を出したはずですが」

研究者の一人が中央に座っている人物にそう尋ねる。

その事は他の研究者も思っていたらしく、何人かの研究者が頷いて

いた。

「確かに過去の演算結果から、被験者は学園都市第一位である一方通行のみとなっていました」

しかし、と中央の研究者は言葉を続ける。

「第一位が参加を拒否した事により、私は実験の対象が他にいないか、樹形図（ツリーダイアグラム）の設計者に再度演算をして貰うよう申請しました」

「その結果、第一位の他に第二位が被験者としてリストに上がった……と」

近くにいた研究者の言葉に、中央の研究者は無言で頷く。

「一年近く前から、第二位が能力の強化を行なっている事は記憶に新しいかと思う。今まで学校に行かなかった第二位が、この春から長点上機学園に在籍する事となったからな」

つい最近、垣根は長点上機学園に籍を置くことになった。

学園側は第二位の在籍に、色々な思惑があったが一先ず喜んでいた。

最も、垣根自身は滅多な事で登校していなかったが。

「絶対能力進化実験を立案して、既に数カ月が経過している。その間、全くといっていいほど結果を出せていない」

突然襟元を正した中央の研究者が、一つ咳払いをした後に語りだした。

その場にいる人物は、既にその事を嫌と言うほど知っているのに。

「これ以上、無駄に時間を浪費するわけにもいかん。被験者は一方通行から垣根帝督に変更する」

「それに君たちは忘れているようだが、実験が行えなかったら路頭に迷う事はない」

そう言うと中央の研究者は、親指をくいっと自分の首に対して切った。

その意味はシンプル過ぎて簡単に分かるほどだった。

「既にクローンという国際法に違反している我々は、学園都市から消されるのみだ」

「結局、我々の取る道は実験を成功させる以外にない」

その言葉がとどめであった。

中央の研究者が語る言葉に、誰もが反論の言葉を述べる事など出来なかった。

「それを踏まえて、再度異論がある者は名乗りでたまえ」

その問いに答えられる人物は、一人として存在しなかった。

「そう、それは良かったわね」

豪華なバスルームで湯に浸かりながら心理定規はそう呟いた。

全体的にフローラルだが少しだけ大人っぽく感じるデザイン。
心理定規が一人で入っても、かなりの余裕があるほどの広い浴槽。
高価そうなシャンプーやコンディショナー類。
明らかに少女の風貌をしている心理定規では、とても揃える事が出来ない程のバスルームだった。

『まぁ面倒臭かったがな』

心理定規の近くにある壁から垣根の声が聞こえた。
浴槽の近くには、連絡用として設置した通信端末が嵌めこまれていた。
見た目は四インチほどの液晶ディスプレイで、そこに誰と通話しているか表示されていた。
表示名は『帝督』。最も、ここへの連絡方法を知っているのは垣根以外にいないが。

「良かったじゃない。念願の学生生活よ」

『まともに登校した覚えはないけどな』

「……それは意味あるの？」

思わずズッコケそうになった心理定規だが、浴槽の淵を持って何とか耐える。

『何というか……俺の肌には合わなかった。でも今更別の学校を探すのはダルイ』

「あ、そう……」

パシャパシャと湯で遊びながら心理定規は適当に答える。
学校に行く、と突然言い出して長点上機学園に籍を置いた垣根だが、数日で飽きたようだ。
既に籍があるだけで、全くといっていいほど登校をしていない。

『……なぁ心理定規』

「何？」

湯で遊んでいた心理定規は、億劫そうな声で言葉を発する。
対して垣根は、真剣な声色で言葉を発していた。

『お前、学校行ってみないか？』

その言葉を聞いて心理定規はピタっと動きを止める。
垣根が長点上機学園に在籍した頃から、時々垣根は学校に通う事を心理定規に薦めていた。

「嫌よ、今更学校に行ってどうするのよ」

学園都市の裏の人間が、呑気に学校生活を送るなどまずありえない。
何人かは学校に行っていると聞くが、大体はカモフラージュ用に通っているだけであった。

『……そっか。じゃあ後もう一つ、いつになったらこの電話にカメラが』

最後まで言い終える前に、心理定規はその細い指で通話終了のボタ

ンを押す。
ピッと短い電子音がした後、今まで聞こえていた垣根の声はプツッと途切れ、バスルームには僅かな水の音しかしなくなった。

「帝督の……馬鹿」

そう呟いた後、心理定規は顔の半分ぐらいを湯の中に沈めた。

交渉

「絶対能力進化実験？」

手に持っている資料を眺めながら垣根は言った、
垣根は、とある研究を行なっている場所から派遣された研究者と会談をしていた。
普通なら門前払いだが、統括理事会の紹介でやってきたので会わない訳にはいかなかった。
そうして研究者が開口一番にいった言葉が、絶対能力進化実験である。

「そうだよ。これをクリアすれば君は無敵の力を手に入れられるんだよ？」

少しだけ怯えながら研究者は垣根の言葉に答える。
しかし、垣根は研究者を見ずに手に持っている資料をずっと眺めていた。

（一方通行の時と変わらず、俺がやったとしても二万通りの戦闘を繰り返すだけ）

（クローン体のスペックをあげるから、ある程度時間がかかると言っている）

（だが一万体のクローンの内、大能力者相当が一つあるそうだが、他は全て異能力者か強能力者だ）

（超能力者のクローンで、能力者が作れるなんて話は聞いたことが

ない）

（これが、超電磁砲だからなのか。それとも何か別の要因があるのか）

（もしコイツらが俺のＤＮＡマップを狙ってるなら、その場合は危険極まりない）

（それにこの方法で本当に絶対能力者が生まれるのか？）

様々な疑問が頭の中で浮かんでは回答を出そうとする垣根。
だが、その殆どの問いに明確な答えを出す事は出来なかった。

「それで……返事はいかほどに？」

余りに無言が続くので、研究者はおっかなびっくりな様子で問いかける。

「……お前ら……本当にこれで絶対能力者が生まれるって思っているのか？」

垣根の言葉を理解できなかった研究者は呆けた顔をする。
だが垣根は研究者を無視して、尚も疑問を口にする。

「まず二万通りの戦闘だが……その程度で絶対能力者になれる？
お前はどっかの怪しげなセールスマンかよ。悪いが俺はこの中のうち、一万近くのパターンは既にクリア済みだ」

「実験も単に異能力者か強能力者を二万回嬲ってるだけじゃねぇか。
それで俺の能力が本当に成長するのかよ」

「それに戦闘だけしてどうする。『世界の真理』って奴は二万回戦えば理解できるようなちゃちなモノなのかよ」

些細な、それこそ小さすぎて誰もが見過ごすような事まで疑問を口にする垣根を見て、研究者は生きた心地がしなかった。
彼の頭の中では、多少の文句はあるだろうが最終的には参加するだろう、という楽観的な考えがあった。

普通なら絶対能力者になれる、とわかった時点で誰もが飛びつく。
その結果、両手が拭えないほど血に染まる事になっても。
名実ともに学園都市ナンバーワンの称号が手に入るのだ。
それは学園都市の中で特権階級を手に入れる事を意味する。

だが垣根は全く違っていた。
冷静に、それこそ臆病とも取れるほど細かい疑問の回答を求めてきた。
答えに詰まるたびに、垣根が不信感を募らせているのを研究者はヒシヒシと感じていた。

「た、確かに貴方の疑問にお答え出来ない部分はありますが、この実験は『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』の算出したプランですし、間違いなど起きるはずもありません。絶対に成功します」

この言葉を口にした後、研究者は幾分の安心を得ていた。
『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』という世界最高のスーパーコンピューター。
そのコンピューターが算出した結果に間違いなどない。
それは学園都市では『常識』に入る部類の事だと、研究者は思っていた。
幾分落ち着きを取り戻した研究者だが、それを叩き伏せるかのよう

に突然テーブルが爆ぜた。

「ひ、ひぃぃ！」

突然テーブルが爆発した事に研究者は驚き腰を抜かした。
軽い悲鳴を上げて椅子から転げ落ちる。

「おい、テメェ舐めてんのか？」

テーブルが爆発した理由。
それは、垣根が座った状態でテーブルを蹴り上げたせいだった。
テーブルが真っ二つに破壊される様は、彼の蹴りが恐ろしい破壊力を持っている事を物語っていた。

「『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』、世界最高峰の『超高度並列演算器（アブソリュートシュミレーター）』。確かに高スペックの演算器だろうな。だけどよ……」

椅子から立ち上がると、垣根はポケットに手を入れながら研究者に近づく。

「その演算結果が正しいなんて『誰が証明』するんだ」

パキパキと床に落ちている破片を踏みつぶしながら垣根は歩く。

「ああ、そうだな。お前らは演算結果が間違っててプランが失敗しても、リスクを背負わないよなぁ……」

恐怖の余りカチカチと歯を鳴らしながら、研究者はただ怯えるだけであった。

「そりゃそうだ。リスクを背負うのは被験者だけだもんなぁ。テメェらは安全な場所から、モニター越しに呑気な会話をするだけだ」

「し、しかし……『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』が今まで間違いなど」

そこで不意に研究者の言葉は止まる。
研究者の真横、距離にして一センチ程度の場所に垣根の足があった。
そこを中心にコンクリートで出来た壁が、ひび割れたガラスのように亀裂が無数に出来ていた。

「今まで間違いが起きなかったからといって、これからも起きないって証明にはならねぇ。リスク管理も出来てねぇ研究なんざ願い下げだ」

研究者の言葉を垣根はバッサリと切り捨てた。
再度何かを言おうとした研究者だが、垣根の視線を受けて言葉を飲み込む。
これ以上、無様な反論を繰り返しても機嫌を損ねるだけ。そう研究者は判断した。

「一分以内に失せろ」

短いながらも有無を言わせない垣根の命令に、研究者はただ黙って従う以外になかった。

普通ならそれで終わり、のはずだが絶対能力進化実験の研究者たちは思いの外しつこかった。
電話相手、暗部組織の上層部、統括理事会。様々なルートで交渉を繰り返してきた。
最初は相手をしていた垣根も流石にうんざり気味だった。
一度はアタッシュケースに研究者を詰め込んで送り返した事もあった。
だが、それでも彼らが交渉を止めようとする気配はなかった。

（ここまでするとなると……誰かの意向が入っているな）

交渉人と呼ばれる連中からの電話を切った後、垣根は少しだけ頭を冷やしていた。
余りにしつこい為に、研究所を片っ端から破壊してやろうとすら思っていた。
だが、少し心を落ち着けると逆に違和感が沸き上がってきた。

（俺が研究者を嫌っている事は周知の事実。これほど交渉してくる連中が、過去の俺の事を全く知らないとは考え難い）

冷静な思考を取り戻した垣根は、過去の交渉を思い返す。
それこそ冗談で呟いたと思われる言葉まで。

（国際法違反が怖いわけじゃない。表の研究者ならともかく、裏に近い研究者たちがソレを恐れるとは思えない）

（幼い子供で人体実験をした連中らすらいる。最も、最後は逮捕か俺らみたいなのから粛清を貰っていたが）

（ここまで執拗な勧誘の場合、後ろで誰かが糸を引いていると考える方が正しい）

軽く頭をかきながら垣根はさらに考える。
後ろで糸を引いている人物こそ、絶対能力進化実験を行なって一番得をする。
それは一体誰かを。

「あー……そうか。やっぱ一人しかいねぇよなぁ」

その答えは驚くほど簡単に出た。
この研究を行なって最大の得をする人間は、学園都市にたった一人しかいない。

「総括理事長のアレイスターか……」

元々学園都市は『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』を究極の目的としている。
ならば、それに近づく為の絶対能力進化実験を有効活用しない訳はない。

「あの野郎がやっている『プラン』が関係してるのかな」

詳細は垣根も知らないが、アレイスターは『プラン』と呼ばれる計画を実行している。
その内『第二候補（スペアプラン）』と呼ばれる物の主軸が自分である事も。

（マズイな、あの野郎が企んでいる事ならマズすぎる。アイツは俺にじゃなくて心理定規に何かするだろう）

そして垣根の予感は三〇分後、正解だった事を思い知らされる。
心理定規が住んでいるマンションに、どこかのスキルアウト集団が襲撃をしてきたと連絡を貰った時に。

『間一髪って所ね。買い忘れがなければ私は死んでいたわ』

「無事ならいい。それで、お前の家を襲った連中らは目星がついてるのか？」

襲撃された、そう連絡を受けて少しした後。
心理定規より直接連絡を貰った垣根は、胸を撫で下ろしていた。

心理定規は家に戻ってすぐ買い忘れに気付き、荷物を置いて再び外出をした。
そうして家を出て五分ほどした後、スキルアウト集団がやってきて部屋を爆破した。
それが事件の一部始終との事だ。
スキルアウト集団が使った爆弾は中々高性能だったらしく、文字通り木っ端微塵になっていた。
衣類は勿論、部屋にあった家具や電子機器に至る全ての物が粗大ゴミに変貌していたらしい。

『目星というか大体の予想はついているわよ』

「ほぅ……」

『私が副業をしているのは知ってるでしょう？　アレでどうやらスキルアウトのシマを侵食したようなのよ』

「副業に関しての恨みかよ」

恐らく暗部組織の事を知らないスキルアウトが、シマ荒らしに対しての示しとして爆破したのだろう。

心理定規はそう結論を下した。しかし、垣根はふとある疑問が脳裏に浮かんだ。

『そ、だから自分の方で何とかするわよ』

「いやちょっと待て……おい、そのスキルアウト集団の名前を教えろ」

『どうしたの帝督？　自分のミスは自分で拭う。それが暗部組織の掟だって言っていたはずだけど？』

「少しだけ気になる点がある。だから、そのスキルアウト集団を『尋問』しないといけない」

『そう……帝督がいいなら構わないけど。だったら処理班が必要ね。そっちは私が用意しておくわ』

「頼む」

それから心理定規はスキルアウト集団の組織名を垣根に伝える。

調べてみると、それほど大きい組織でもなく単なる中規模程度のグループだった。

だからこそ違和感が拭えなかった。

（何故、心理定規の居場所を知っていた。それに中規模程度の集団が、どうやって爆薬を手に入れた。手に入れるにしても、相当な資金が必要だ。シマ荒らしの報復程度でそんな浪費が出来るとは思えない）

心理定規も暗部組織に所属している身から、身辺情報はかなり高いセキュリティで保護されている。
後ろからつけていこうにも、その程度を見破れない心理定規でもない。

（ならば誰かが教えた。もしくはソレを手に入れれる人間が、あえて心理定規を襲わせた。そう考える方が妥当だな）

（そして俺の予想が正しければ、これを仕組んだのはあの野郎以外にいねぇ）

垣根はモニターに表示されている情報を再度見る。
スキルアウトの根城は第六学区、基本的には観光客を狙って資金を稼いでいるとの事。
端的に言えば今時流行らない『カツアゲ』とやらを行なっている連中だという事だ。

（外から来たおっさんの悩みでも聞いてやったのかよ）

心理定規は襲撃された理由を『シマを荒らした報復』と言っていた。
アミューズメント施設の多い第六学区なら、外から来た偉い人間を相手に副業をした可能性がある。
それが『たまたま』連中らの目に止まり、シマ荒らしと勘違いされ

た可能性がある。

「まぁどうだっていい。連中らにはちょっと人生の厳しさを経験してもらうか」

端末を閉じると、垣根はそのままアジトから第六学区を目指した。

それぞれの思惑

スキルアウトという存在を一言で表せば「人様に迷惑行為を行うモラルのない連中」である。
中には無能力者で居場所がなく、そういった連中が集まった集団もある。
だが、普通の学生たちの認識は「モラルの無い面倒な連中」という一括りな認識である。

そしてそれは間違っている訳ではない。
いくら居場所が欲しいとはいえ、彼らがやっている行為は褒められたものではない。
学園都市の治安を下げている一員に、スキルアウトの存在があるのだから。

更に中には本当に社会的迷惑を行う集団もある。
社会的なモラルに反したり、中には学園都市の法を犯す者たちもいる。
大体は風紀委員か警備員に逮捕されるが、中には裏道を使って巧みに逃亡する人物もいる。
そういった連中は、最終的にスキルアウトのリーダーを務める事が多い。

だが彼らが辿る道は最終的に二つしかない。
一つはスキルアウトから抜け、まともな道を歩むという道。
もう一つは学園都市に利用され、そのまま学園都市から消される道。

そして今宵、後者の道を進む者たちがいた。

第六学区にあるアミューズメント施設より少し離れた場所。
施設へ続く道は、少しだけ脇にそれる道があった。
それがいくつも絡むと、まるで迷路のような道が出来上がる。
そして、そういった場所は大体スキルアウトの溜まり場となる事が多かった。

「て、テメェ一体何者だ！」

その道に二人の影があった。
一人はいかにも不良学生といった風貌をした筋肉質の男。

「お前らにちょっと聞きたい事があるんだよ」

そしてもう一人はホスト風の風貌をした男、垣根であった。
垣根の近くには、スキルアウトの仲間らしき人物が地面に倒れていた。
しかし全員ピクリとも動かなかった。
地面に真っ赤な液体（けつえき）で池を描いている様は、彼らが死んでいる事を如実に物語っていた。

「今日、昼間の話だ。お前らはあるマンションを襲撃したな。誰に雇われてやった」

「はん、素直に口を割ると思って」

いるのか、そうスキルアウトの男は言葉を発するつもりだった。
だがそれが口から出る事はなく、代わりに出ていたのは苦悶の声だった。

「お前に与えられた選択肢は一つだ。素直に喋る、それ以外にない」

スキルアウトのみぞおちを靴で蹴り上げた垣根は、腹を抑えて悶え苦しむ男を見下しながら言った。

「ガハッ、ゴホッゴホッ」

内蔵に響いたダメージが酷かったのか、スキルアウトの男は嘔吐を繰り返していた。
それが器官に入ったりして、更に苦しんでいたが垣根はただ冷たく見下ろすだけであった。

「素直に吐けば、痛い思いをしなくてすむぞ？」

「ば、馬鹿野郎。吐けば俺らは絶対に殺される……殺されるんだよ！」

よだれを口からダラダラと零しながら、男は怯えた表情をしながら叫んだ。
その様子が、いったい誰から依頼されたか語っているとも知らずに。

（この様子なら学園都市……アレイスターだろうな。だが、アイツが依頼したという情報は、まず掴めないと見ていいだろう）

（いくつもの偽装がかけられているだろうし、最悪スケープゴートが出てくるだけだ）

（とはいえ、これでハッキリした。アレイスターは間違いなく絶対能力進化実験を進めようとしている）

（しかし何故だ。何故、アレイスターは一方通行ではなく、俺で強引に進めようとしているんだ？）

いくつもの疑問が浮かんでは、それに対する答えを頭の中で考える垣根。

その様子を見て、スキルアウトの男は垣根が何か考え込んでいる事に気付く。

そしてちょうど付近に、角材らしきものが落ちている事にも気付いた。

ニヤッと下卑た笑いをした後、スキルアウトの男はゆっくりと角材に手を伸ばす。

だがあと少しという所で、その腕は動きを止めた。

「あがっ！」

「ボケか。考え事してても、お前如きの考えなんざお見通しだ」

垣根のかかとが、スキルアウトの男の肩に食い込んでいた。

一体いつ食らったのだ、そう思えるほどのスピード。

そして折れる、ではなく粉砕していると表現が出来るほどの重い一撃だった。

「もう一回言うぜ。一体誰に頼まれた」

「し、知る……ぎゃあ！」

悪態を吐くスキルアウトの男だが、その瞬間もう反対側の肩にも垣根のかかとが食い込んでいた。

「次は右足がいいか？　それとも粉砕された肩に、もう一度食らってみるか？」

「くそ……テメェ一体」

今度もまたスキルアウトの男は台詞を最後まで言えなかった。
最後まで言う前に、垣根から蹴りを貰っていたのだから。

「俺が聞いているのは、誰に依頼されたか、それだけだ。それ以外は聞いてねぇし、テメェが俺に質問する権利もねぇ」

スキルアウトの男の顎を蹴り飛ばした垣根は、血を吐いて倒れているスキルアウトの男を見下ろしながら言った。
半分意識が朦朧としているスキルアウトの男は、意識を失う直前に依頼相手の情報を零した。
言えば助かる、そんな甘い考えで。

「アイツらは確か……研究服を着て……何かの実験の使い……とか何とか……言っていた」

そう言葉を口にした後、ゴキンと骨が折れる音がした。
その音はスキルアウトの男の首を、曲げてはいけない方向に曲げた時の音だった。

スキルアウトの男を殺した後、垣根はやってきた処理班に後を任せて立ち去った。
夜の道を歩きながら、垣根は先程の情報を頭の中で整理する。

（実験の使い、だと？　馬鹿か、連中らがそんな事をわざわざ教えるとは思えない）

（これはアレイスターが裏で糸を引いていると見ていい。あの野郎は、どうしても絶対能力進化実験を行いたいらしい）

（これ以上拒否する事はマズイ。俺が死ぬのは構わない、だが心理定規が死ぬのは駄目だ）

ふと立ち止まると、垣根は夜空に視線をうつす。
空は真っ黒な色をしており、星が一つも見えないほどだった。
見ているだけで気分が滅入る夜空だったので、垣根はすぐに視線を真正面に戻す。

「アイツを守るって言ったんだ。ちっぽけなプライドなんて、簡単に捨てられるだろう？　垣根帝督よぉ」

そう呟くと垣根は再び歩き始めた。
歩くたびに垣根は自分に言い聞かせた。
心理定規を守れと、己のプライドなど捨ててそれを実行しろと。
自らの心を黒く塗り潰すように、垣根はひたすら自分に語りかけた。

それから数日後、絶対能力進化実験の交渉人に対して、垣根は参加

の意向を伝えた。

「以上が実験の詳細になる」

参加の意向を伝えてから更に数日後、垣根は今回の実験を行う幹部たちと面談していた。
面倒に感じていた垣根だが、ある『一つ』の事を行う必要があるので参加した。

「それにしても参加を決めてくれて嬉しいよ、第二位」

「……」

肘をついてボケッとモニターを見ている垣根は、どう見てもダルそうな表情をしていた。
中央に座っている研究者の言葉すら、その耳に届いているのかすら怪しい。

「……で？」

「で？　とは？」

垣根の言いたいことが分からず、中央の研究者は首を傾げた。
肩や首をポキポキと鳴らしながら垣根はサラっと軽く言った。

「第六学区の連中を使った奴は誰だ、と聞いてるんだ」

「……何の事か分からないな。私たちがスキルアウトを使ったとでも？」

中央の研究者はかけているメガネを拭きながら答える。

その手が僅かに震えているのを、垣根は見逃さなかった。

「おいおい、俺がいつ『スキルアウト』って言ったぁ？　俺は『第六学区の連中』しか言ってないぜ」

「そ、それは……使うとなればスキルアウトが多いからつい」

自分の失言に気付いたのか、中央の研究者は額にうっすらと汗を浮かべる。

ポケットに手を突っ込み、中からハンカチを取り出すとそれで額を拭く。

だが、何度拭っても額の汗は止まらなかった。

「流石研究者は違うなぁ。荒事になると、スキルアウト頼みかぁ」

ガタッと音を立てて垣根は椅子から立ち上がる。

いつもの様にポケットに手を入れ、ここにいる研究者たちを一瞥する。

「どうせテメェ等も依頼されたクチだろうな。『本当の仕掛け人』が誰か、なんて聞いても分からんだろう。だけどよ……」

そう呟くと垣根は笑った。

その笑みは酷く楽しそうで、そして恐ろしさを感じる笑みだった。

「知らないからアイツを襲った罪が消える、なんて思ってないよなぁ？」

その瞬間、垣根の背中に六枚の翼が展開された。

一分後、面談が行われた部屋から出てきた人物は垣根以外にいなかった。

研究所から戻ってきた垣根は、持っている部屋のうちの一つに心理定規を呼んだ。

そして、絶対能力進化実験に参加する事を伝えた。

「実験に参加？　どういうつもり。アレほど嫌がっていたのに」

「ちょっと考えを変えたんだ。ダメ元でも何か見えるかなって思ってさ」

マグカップを手に持ちながら垣根は気楽に言う。

そんな垣根を見て、心理定規はどこか困ったような表情をする。

「そうなると暗部組織の仕事はどうするのよ？」

「その辺りは大丈夫だ。ちゃんと研究者どもが話をつけている。暫くは『アイテム』か『グループ』に仕事が回るってさ」

「そういう訳で、暗部組織の仕事は暫くなしだ。この部屋を貸してやるから、俺の実験が終わるまでに新しい部屋を探しておけ」

「分かったわ。次はもう少しセキュリティが高い場所を借りるわ」

「そうしておけ」

そう言うと垣根はマグカップをテーブルに置き、ソファーの上で横になった。

心理定規は、そんな垣根をどこか優しげな表情で見る。

会話はなかったが心は繋がっている、そんな雰囲気が二人の間にはあった。

「あ、シャワーを借りるわね」

「ん？　ああ、別に断りを入れる必要はないぞ」

「親しき仲にも礼儀あり、よ。言っておくけど覗いたら怒るわよ？」

ちょっとだけ睨みながら心理定規は垣根に釘を刺す。

「何言ってるんだ。覗くわけないだろう？」

しかし垣根は満面の笑みを浮かべながら言った。

「一緒に入るんだから」

その後、マグカップが垣根の顔面めがけて飛んできたのは当然の結果であった。

一つの出逢い

「ふんふんふ～ん、今日は特売で良い物が買えたー」

ツンツン頭の男、当麻は買い物袋を二つほどぶら下げながら鼻歌を歌っていた。

この春より高校生になったばかりで、制服にはまだ真新しさが感じられた。

「今日は姉ちゃんらが何か実験って言ってたな。まぁ夜には帰ってくるそうだし、美味しモノでも作って待ってるか」

主夫じみた台詞を零しつつ当麻は上機嫌で夕方の街を歩く。

既に完全下校時刻間近のせいか、道を歩いている人の数は少ない。

殆どいないと言ってもいいほどだった。

「ふーんふん……ん？」

今にもスキップしそうな勢いで歩いていると、少し先の道路脇で誰かがしゃがみ込んでいるのが見えた。

最初は気分でも悪いのかな、と思った当麻だがすぐに認識を改める。

しゃがみこんでいる人物は少女であり、その少女の前には小さなダンボール箱が置かれていた。

どうやら少女はその中身に視線を向けているようだ。

「あの制服……常盤台中学のか」

そう呟いた瞬間、当麻はある人物を思い出した。

電撃をまき散らして、いつも勝負を要求してくる好戦的な女子中学

生。
学園都市に七人しかいない、自分の姉である沈利より一つ上の序列である第三位の御坂美琴である。

（よし、ビリビリだろうが何だろうが、関わらないのが一番だ）

そう思った当麻は、先ほどと変わってコソコソとした歩きに変えた。
怪しさ爆発だったが、周りに人がいないのが救いだった。
そろーりと歩いて少女の背後を通り過ぎようとした瞬間、その少女が突然当麻の方に顔を向けた。

「うっ！？」

その顔を見て当麻は思わずうめき声を上げた。
茶色のショートヘア、そして常盤台中学の制服。
そしてこちらを凝視している少女の顔には見覚えがあった。

（はぁ……今日の特売は全滅か……）

おそらくこの後襲ってくる電撃を想像して、当麻は思わずため息を吐いた。
何故なら、ダンボール箱の前に座っている少女は、先ほど当麻が恐れた人物その人だったからだ。

「何故、コソコソと歩いているのですか？　とミサカは問います」

「い、いや！？　別にバレたくなかったとか、そういうのじゃないぞ！？」

慌てふためく感じで言い訳を述べる当麻。

勿論、それはマイナスにしかならないのだが、当の本人は必死だった。
そしてそれを聞いた少女は小さく首を傾げた。

「失礼ですが、ミサカとは初対面のはずですが？　とミサカはナンパではと警戒します」

「待て！　いくらモテない上条さんでも、女子中学生をナンパするほど飢えていませんよ！？」

「しかし貴方のような貧相な顔を持つ人物は記憶にありませんが、とミサカは述べます」

「貧相で悪かったな！？　えっと、御坂美琴じゃないの？」

「お姉様をご存知で？　とミサカはやっと合点がいきました」

そう言うと目の前の御坂もどき（？）は、視線を当麻からダンボール箱に移す。
余りに熱心に見ているので、当麻もダンボール箱の中身を覗き込む。

「……子猫？」

ダンボール箱の中には黒猫が突っ込んであった。
サイズ的に子猫と思えるほど、その黒猫は小さかった。

「黒猫です、とミサカはダンボールの中を指差します」

その時点で当麻は嫌な予感を感じていた。

「この黒猫はお腹を空かせています、とミサカは問いかけます」

そしてその予感は的中した。

「……分かった」

そう言って電話を切ると、沈利は盛大に溜息を吐いた。

その表情は、とても疲れたような表情をしており悩み事が増えたようにも見えた。

「超どうしました？　沈利お姉ちゃん」

「ちょっと厄介な情報が上がってきたのよ」

額に手を当てつつ沈利は最愛の問いに答える。

明らかに悩み事のように見えるが、その全容が分からない最愛は首を傾げるしかなかった。

「フレンダ、理后。ちょっと聞きなさい」

サバ缶を爆破で焼き切ろうとしているフレンダと、目を開けたまま寝ているのではと思えるほどぼーっとしている理后に沈利は声をかける。

「しずり、どうしたの？」

「さっき浜面から電話があってね。来るのが遅れるってさ」

「超使えないですね、浜面は」

「結局さ、浜面は役立たずって訳よ」

浜面が遅れる事に、容赦無く切り捨てるフレンダと最愛。
だが、すぐにその程度で沈利が頭を悩ます訳がないと思った。

「そして道中に当麻を見たらしいが……隣にいたのが暗視ゴーグルをつけた第三位似の奴だったという話だ」

「……それって超やばくないですか？」

少しだけ表情を曇らせた最愛に視線を向けながら沈利は頷いた。
理后やフレンダも、沈利の言いたい事を理解したのか表情を曇らせていた。

「当麻がマズイ奴と知り合った。皆、当麻の行動に注意よ」

「そうだね、とうまと第二位を出会わせちゃ駄目だね」

「場合によっては、当麻お兄ちゃんを超倒す必要があります」

「どうにかして当麻お兄ちゃんの意識を、別に向けるしかないって訳よ」

第二位の危険さは沈利たちも十分理解していた。
それぞれが当麻の危険を回避するためにあれこれ意見を出す。

「第二位だと第一位の時みたいに、能力は強いけど喧嘩は弱いって事にはならない訳よ」

「超そうですね。第二位の強さは超規格外過ぎるのです。噂では能力を使わずに素手だけで特殊部隊もどきを超潰したとか。本当に二つ名通り『常識が通じない奴』ですよ」

「だけど困っている奴を見て、当麻が見て見ぬふりをする訳ないよね」

「きっと私たちの制止を振りきって、第二位の元に向かうと思う」

結局どの意見も実現には難しく、最終的には当麻への監視を強める以外にないと判断した。
その程度しか出来ない事に、沈利たちの気持ちは沈む一方だった。

「す、すまん！　ちょっと道が混んでて遅れた！」

そんなブルー状態な四人姉妹の所に、のこのことやってきた浜面（カモ）。
当然、この後浜面に訪れる未来は一つしかなかった。

「はまづらぁぁぁぁぁぁ！！！　テメェ、一体何分遅れてやがるんだあ！？」

「ひ、ひぃぃぃ！！？　すいませーん！！」

沈利の八つ当たりに近い怒りを食らう、それ以外に浜面の未来はなかった。

「へー、お前ってビリビリの妹だったんだ」

「正確には違いますが、まぁそんなものです、とミサカは黒猫を撫でなら言います」

言葉通り腕に抱えた黒猫を撫でながら御坂もどき、改めて御坂妹は答える。

どこか嬉しそうな笑みを浮かべているが、無表情に近い顔で笑われてもちょっと怖い。

そう思った当麻だが、何か言えば電撃が飛んでくると思い黙る事にした。

「それにしてもビリビリに妹がいたとか、初めて聞いたよ」

同じ常盤台中学の制服を着ているが、当麻は御坂妹と出会った事など一度もない。

いつも出会うのは御坂の方ばかりだったし、妹がいるような素振りは感じられなかった。

（まぁ俺には関係ないけどな）

余り人様の家庭事情を探るのもよろしくない。

そう思った当麻は、御坂妹と別れるまで一度として家庭事情について尋ねなかった。

「んじゃ、俺はこれで」

「さようならです、とミサカは手を振ります」

またも言葉通り小さく手を振りながら御坂妹は当麻を見送る。
それに軽く手を上げて答えた後、当麻はそれっきり御坂妹の方を向くことはなかった。

「ふんふーん。しっかし姉に似てなかったなぁ」

御坂妹と別れた後、当麻は先ほどの事を思い返していた。
感情の起伏が乏しいのかと思えるほど、御坂妹は感情的になる事はなかった。
唯一ネコの時だけ楽しそうな笑みを浮かべていたが、どちらかと言えば不気味な笑みではあった。

「今度ビリビリに聞いてみるかな」

「おい、三下ァ」

気楽に思っていた当麻の背後から、誰かが声をかけてきた。
その声の主を知っていた当麻は、特に驚きもせず振り返る。

「よう、一方通行。奇遇だな、こんなところで」

「チッ」

「おいおい、いきなり舌打ちとはご挨拶だな」

軽く舌打ちをする一方通行を見て当麻は肩をすくめる。

「テメェは毎度ながら不幸って奴だなァ」

「は？」

一方通行の言葉が理解できず呆けた返事をする当麻。
そんな当麻を見て、一方通行はますます顔をしかめた。

「いいか。テメェの為に言ってやる。さっき会ったあの野郎の事は忘れろ」

「御坂妹を？　何で？」

「それを知る必要はねェ。いいか、今日の事は全て忘れろ。でないと、テメェだけじゃなく家族にまで不幸が訪れるぜ」

そう言うと当麻の返事を待たずして一方通行は立ち去った。
その間、一度として当麻の方を振り向く事はなかった。

「意味が分からん……」

一方通行が言った言葉が理解できず、当麻はただ唖然とする以外になかった。

テスト前の休憩

絶対能力進化実験の幹部が惨殺された事で、スケジュールに多少の遅れが発生した。
だが誰もがその原因について追求しなかった。
下手に追求すれば同じ道を辿る、その事が研究者の中で暗黙の了解となっていた。
素早く後任を決めた後、スケジュールの遅れを取り戻すべく徹夜を繰り返した。
そうして遅れを取り戻したがまたも問題が発生した。

「あぁ？　実験前にテストをする必要がある？」

垣根の強さが不明過ぎて実験体である『妹達』の調整が出来ない。
その事が問題となり、実験の進捗が停滞していた。

「そ、そうです。何せ数値も何もない状態ですので、実験を始める前に『妹達』の調整が出来ません。なので現在の数値を計測し、それに見合わせて『妹達』の調整を行う予定です」

怯えを隠そうともせず、研究者は時々つまりながら理由を説明する。
そんな研究者を垣根は冷たい目をしながら見ていた。

「先に言っておくが……コソコソと余計なデータを取るなよ」

「そ、それは勿論！　計測するデータは事前にご説明します」

明白な脅しを理解した研究者は、顔を真っ青にしながら言葉を発する。

早くここから立ち去りたい、それが研究者の頭の中で一杯だった。

「……ふん」

鼻を鳴らすと、垣根はつまらなさそうな表情をする。

（あわよくば俺のデータを取りたい、そんな考えもあるんだろうな）

（だが、これ以上の遅れを出してアレイスターが出てきても困る）

（今の状態で、あの野郎に勝つのは不可能だ。今は耐える時期……その時が来るまで……な）

「いいだろう。で、どうやってテストするんだ？」

今は大人しくする方が得策、そう考えた垣根は無駄に騒がない事にした。

「こ、これに記載しています。く、詳しくはこちらを御覧ください」

研究者は脇に抱えていた資料袋を手に取ると、それを垣根の前に差し出した。

無造作に受け取ると、垣根は封を破り中身の資料を取り出す。

中には四十枚ほどのＡ４サイズの紙が入っていた。

一枚一枚を適当にめくっていく垣根。

常人には適当に読んでいるように見えるが、恐ろしい事に垣根は全てを記憶していた。

わずか数分で全ての用紙を見終えると、垣根は資料をゴミ箱に捨てた。

「検体番号００００６号と戦闘だけか。そんな程度で本当にいいのかよ」

「だ、大丈夫です。問題など発生するはずもありません」

その言葉を聞いて垣根は内心ため息を吐いた。
やはりリスク管理が出来ていない、そう思わずにはいられなかった。

（科学に頼りすぎってのもアレだな。思考する能力を奪ってしまう）

（さて、妨害などは今の所ないだろうが……アレイスターが何を考えているかによるな）

（まさか俺と一方通行を戦わせる、なんて考えていないだろうな）

（そうなった場合、俺の力がどこまでヤツに通じるか……これは分からないな）

無言になった垣根を見て、研究者は少しだけ気を緩める。
何か考え事をしているように見えるので、こちらに意識を向けていないだろう。
そう研究者は思っていた。
実際は全くの逆で、垣根は考え事をしてても、周囲の警戒は怠っていなかった。

（……仕方ねぇ。気が進まねぇが、心理定規に第一位の動向を探ってて貰うか）

「いつまでそこにいるつもりだ。用がないなら失せろ」

追い払うようなジェスチャーをしながら、垣根は懐から携帯を取り出す。
その言葉を待ってました、と言いたげに、研究者はそそくさと部屋から出ていった。

「はぁ……何もないといいがな……」

そう呟きながら垣根は心理定規に通じる番号を選択し、通話ボタンを押した。

心理定規に第一位の動向を探るよう連絡した後、垣根は指定された部屋でまったりしていた。
テストが開始するまでこの部屋で待機して欲しい、研究者はそう垣根に言った。
研究者たちにとっては、いつどこで機嫌を損ねるか分からないので、出来るだけ部屋で大人しくして欲しい気持ちがあった。
実際垣根の機嫌を損ねた旧幹部たちは、軒並み惨殺されて見るも無残な姿に変わり果てたのだ。

（……暇だぁ……漫画でも持ってくれば良かったかなぁ）

無駄に時間が余った今、垣根は猛烈に暇を持て余していた。
この研究所を潰そうとしたら、いったい何分必要だろう。
そんな不謹慎な事を考えてシュミレート出来るほど。

暫くだらけていると、ふと部屋に備え付けてある電話が目に入った。
何か用があればそちらから連絡して欲しい、そう言われていた事を思い出す。

（あー、良い事思いついた）

そう言ってニヤニヤと笑いながら電話に近づいていく垣根。
彼が良い事という時、大抵ロクでもない事を思いついた事になる。
受話器を取ると、コール音が一度もならずに繋がった。

「あのよぅ……ちょっと『頼み』があるんだがよ」

楽しそうな笑みを浮かべながら、垣根はある頼みごとを口にした。
そしてそれは、研究者たちを別の意味で盛大に悩ませる事となった。

垣根が研究者たちに頼んだこと。
それは『暇だから暇つぶしの道具を持って来い』、ただそれだけであった。

「だからってコレはないと思うんだが」

その事を連絡して一時間近くたった頃、垣根が待機している部屋にきたのは。

「何か文句でも、とミサカは言います」

検体番号００００６号こと御坂妹と大量のボードゲームであった。
チェスやトランプ、花札からＵＮＯや麻雀やドンジャラなど。
二人でやる物から二人では出来ない物まで多種多様のボードゲームであった。

「人生ゲームファミリータイプとか何だよ……つーかレトロ過ぎて笑うに笑えない」

そして驚いた事に、用意されたのは全てアナログなゲームばかりであった。
最新式のゲーム機器を使ったゲームが、一つも用意されていない。
逆にどうやってこれだけのボードゲームを用意した、その事が気になった垣根である。

「まぁいいや。まずはチェスでもやろうか」

特にこだわりのない垣根だったので、アナログでもデジタルでも構わなかった。
ようは暇を潰せればいい、それさえクリアすればそれ以外の事は気にしない垣根であった。

「ミサカの腕前を見せてやる、とミサカは徒手空拳で構えます」

「はっ、言ってろ」

そう言ってチェスをテーブルの上に置くと、駒を配置していく。
全て並べ終えると、垣根は薄く笑いながら言った。

「五分で片付けてやる」

その言葉にムッとした表情の御坂妹。
勢い良く椅子を引くと荒々しく座った。

「吠え面かかせてあげます、とミサカはやる気満々をアピールします」

「んじゃ、勝負」

そして垣根と御坂妹のチェス対決が始まった。
それから五分後。

「チェックメイト」

「待つのです、それは反則です、とミサカはやり直しを要求します」

「おい、泣き言はもう二ケタ聞いてやってるぞ」

垣根の言う通り、きっちり五分後に片付けられた御坂妹。
しかも殆どの駒がないというおまけ付き。
よしんばあっても、垣根が構築した鉄壁の前に為す術もなく駒が死んでいくが。

「ホスト風の面の癖に頭が回りますね、とミサカは貴方の頭の良さを褒めます」

「……どう聞いても褒めているようには聞こえねぇ」

暇が潰せて機嫌がいいのか、多少の毒舌を気にする様子もない垣根。

だが監視カメラで動向を見ている研究者たちには、垣根の一言一言にハラハラしているが。

「仕方ねぇ。次はトランプでポーカーでもするか」

「やれやれ仕方ありませんね、とミサカは虚勢をはっておきます」

そう言いながら御坂妹は封の切られていないトランプを手に取る。
綺麗に封を切ると、中のカードをシャッフルし始める。
暫くシャッフルしていると、突然垣根が御坂妹の腕を掴んだ。

「何ですか、とミサカは言います」

「お前、堂々とイカサマするとはいい度胸してるよ」

そう言うと垣根はシャッフル途中のトランプを取り上げる。
トランプの模様と番号が見えるように、垣根はテーブルの上へカードを広げた。

「やっぱケツの方に強めのカードを集めていたか」

垣根の言うとおり、広げられたトランプの後ろの方には、ポーカーでは強めのカードが集まっていた。
しかも一番後ろからではなく、後ろから三一四枚目あたりに強めのカードがあった。

「バレなければイカサマではありません、とミサカは開き直ります」

「思いっきりバレてるじゃねぇか。つーかどこでこんな手法を覚えたんだよ」

明らかに絶対能力進化実験には必要のない技能。
それを持っている御坂妹に、垣根は思わず突っ込みながら質問をした。

「実験が始まるまで暇だったので、とミサカは経緯を語ります」

「……よほど素敵な研究者がいるんだな。ここには」

イカサマを教え込む研究者がいるとは、案外素敵な職場なんだな。
そう思った垣根だが、教え込んだ研究者（はんにん）を尋ねる気はしなかった。

「バレてしまっては仕方ありません、とミサカは服を脱ぎながら言います」

「待て、何で脱いでる。つーか俺を性犯罪者にするつもりか！？」

「イカサマがバレたら服を脱ぐ、とミサカは教えられた事を口にします」

「今すぐ服を着ろボケナス！　そんなルールがいつ決まった！？」

何やら納得がいかない表情をしながらも、御坂妹は言われたとおり服を着直す。
このやり取りで疲れた垣根は、少しして御坂妹を追い出すような感じで部屋から立ち去らせた。

激突前

垣根が暇を潰している頃、研究者たちは連日会議ばかり行なっていた。
とにかく垣根の強さが不明過ぎるので、一体何から計測するべきか。
その事から検討し始める。
テストを行うために検体番号０００００６号を使う事になっているが、最悪は大能力者の力を持つ検体番号０００１０号を使う事も考えた。
スムーズに進むかに思えた絶対能力進化実験だが、垣根を対象にした場合はそうではなかった。
結局何日も会議をして、最終的に今の状態の検体番号０００００６号を使ってテストをすると決定した。
確認項目は四百点以上あり、収集だけで一苦労する事が分かっていた。

最終的に絶対能力進化実験のテスト日は三日後と決定した。
場所は第一七学区で時間は二十時。
オートメーション化のお陰で、その時間でも人が滅多に現れる事がない。
広範囲な戦闘が予想されるテストには、うってつけの学区であった。

全てを書類にまとめ、垣根に伝わった情報は以下の通りだった。

『絶対能力進化実験における、被験者の能力測定に関して

日時：書類上記に記載されている日付より三日後
場所：第一七学区
時間：二十時
内容：検体番号０００００６号と指定パターンの戦闘を行う

確認項目：次ページを参照
予想時間：一時間程度

二日以内に連絡がない場合は、上記内容を承認したと判断する』

「はー、面倒臭いなー」

先ほど研究者が届けてきた書類を読み終えた垣根は、ダルそうな表情をして椅子にもたれた。
確認項目が多すぎるし、戦闘パターンもそれなりにある。
一時間もチマチマと計測に付き合うのは、結構疲れるしやる気も起きなかった。

「とはいえ、これをしないと実験が進まないんだよなぁ」

報告資料をゴミ箱に投げ捨てると、垣根はダルそうな表情をしてテーブルに突っ伏す。
その姿は本当にやる気がでていないようで、完全にだらけきっていた。

「あー、何かゲームでもしながらの方が楽だ……」

退屈な事だと分かっている内容を、必ずやらないといけないという事は結構なストレスになる。

「ま……いいか。寝よ寝よ」

そう言うと垣根は本当に備え付けのベットで寝始めた。
程なくしてやってきた研究者が、寝ていた垣根を無理に起こしたせいで、ボコボコにされたのはまた別の話。

そしてテスト実験が行われる日まで、特に何事もなく時間が経過した。
表面上は……。
垣根は知らない。
このテスト日こそが、彼にとって大事な日になる事を。

絶対能力進化実験のテスト日、時刻は十八時半頃の事。
家で留守番を命じられた当麻は、鼻歌を歌いながら晩御飯の調理を行なっていた。

「最近姉ちゃんら外出が多いなぁ。それだけ実験が多いって事なんだが……」

ここ最近外出が多い姉妹たちだったが、当麻は特に気にしていなかった。
大能力者や超能力者の姉妹たちは、実験に付き合う事がかなり多い。
時には連日実験漬けになる事も珍しくない。

「今日は遅くなるって言ってたからなぁ。晩御飯はどうしようかな」

基本的に上条家の食卓は全員で取ることになっている。
沈利たちがどんなに忙しくても、必ず晩御飯は一緒に取っていた。
それが取れない時は、かなり忙しい事を意味している。

「まぁ駄目だったら連絡があるし、ちゃんと作っておくか」

当麻はそう言うと小さく頷いた。
すると、まるで見計らったかのように当麻の携帯電話が鳴った。
嫌な予感がしつつも、当麻は通話ボタンを押すと電話を耳に当てる。

「もしもーし」

『……よォカミやん』

「あ、なんだ。土御門かぁー」

電話から聞こえてきた声が沈利たち以外だという事に、当麻はホッと胸をなでおろす。

『酷いにゃー、親友が電話してきたのに、その態度はないにゃ～』

「悪い悪い。で、俺に何か用か？」

学生だけの家にしては豪勢なシステムキッチンにある調理器を停止させる。
下手に放置してたら不幸な目にあう、当麻なりの自己防衛から来る行動だった。

『あー、えっとだにゃー。カミやん、ちょっと言いづらいんだがに

ゃー』

「???　土御門？　どうしたんだ？」

珍しく要領を得ない態度の土御門に、当麻はただ首を傾げた。

『……いいかカミやん。よっく聞くんだぜぃ』

何度か舌打ちが聞こえた後、土御門は冷たい感じの声色で呟いた。

『お前さんが出会った超電磁砲似の子だがにゃ～……今日死ぬぜぃ』

時刻は十九時半。

完全下校時刻をかなり過ぎているため、既に見回りの警備員の姿はない。

無人に近い道を、当麻は全速力で走り抜けていた。

「クソッ！　何であんな大事な事を、もっと早く言わないんだ！」

当麻は先程電話でした土御門とのやり取りを思い返す。

『あの子は正確には超電磁砲の妹じゃない』

『非道な実験で生み出された超電磁砲のクローン体だ』

『そしてあの子を使って、今日ある場所で実験が行われる』

『相手は超能力者で序列第二位の男だ』

『あの男相手にあの子が無事ですむはずはない。確実に殺されるだろう』

『……俺や一方通行では、この実験を止められない』

『勿論、嫌ならカミやんは断ってもいい』

『危険極まりないし、下手したら死ぬ可能性だってある』

『そんな所に親友を送りたくない……だけど、もうこれしか方法がないんだ』

そこまで聞いて当麻が下した決断は簡単だった。

「場所と時間を教えてくれ、土御門」

『……すまねぇ……カミやん』

そうして土御門は場所と時間を当麻に言った後、最後にこう言った。

『気を付けろよ、カミやん。第二位の二つ名は『常識が通じない奴』だぜい』

「ありがとうよ土御門」

そう言って通話を切ると、当麻は着の身着のまま家を飛び出す。

目指す場所は第一七学区の錆びれた場所。

過去に『とある事件』で更地になったという曰くつきの場所。

「待ってろよ、御坂妹！」

汗を流しながら当麻は夜の道をひたすら駆け抜けていった。

「全く……カミやんは本当にお人好し過ぎるにゃ～」

携帯電話を懐に仕舞うと、土御門はどこか誇らしげな笑みを浮かべていた。

自分が描いたシナリオ通りとはいえ、迷いを一切見せなかった当麻を誇りに思っていた。

「チッ、アイツじゃねェと駄目なのがイライラするなァ」

酷く不機嫌そうな顔をして、一方通行は吐き捨てるように言う。

そんな一方通行を見て、土御門は肩をすくめた。

「仕方ないにゃ～。アレイスターの野郎は、カミやんと第二位を戦わせる気らしいからにゃ～」

「……俺が行っても『第一位が勝つのは当然』とか言いそうだしなァ」

「どうあっても激突は避けられん。ならば、オレたちはオレたちの

出来る事をしようぜい」

内心では親友を死地へ送った事に、ひどく後悔をしている土御門。
だが、それをおくびにも出さない所か、酷く楽しげな笑みを浮かべていた。

「海原の野郎も張り切っているしにゃ～。オレたちも急ぐか」

「あァ、こンな馬鹿な事なンざ、さっさと潰すぜェ！」

一方通行と土御門、二人は互いの顔を見て頷いた後走りだした。
自分たちが出来る事を果たすために。

「先に言っておくよ、死ぬのが怖い奴は来ない方がいい」

沈利は理后、フレンダ、最愛を見ながら言った。
彼女の表情は普段滅多に見せる事がないほど真剣味を帯びていた。
それは、これから行く所が危険極まりない事を意味していた。

「よく考えなさい。例え行かないと言っても誰も責めたりしないし、出来ないからね」

真剣な眼差しで全員を見ながら沈利は語る。
言葉通り、その表情は責める様子も臆病者だと罵るようにも見えない。

ただ、真剣に全員の顔を見ていた。

「しずり、見くびらないで」

「そうです。当麻お兄ちゃんが超向かってるのに、躊躇ったりする理由は超ありません」

「結局さ、全員で行く事は確定って訳よ」

沈利に向かって笑いながら言う理后、フレンダ、最愛。
その表情に、迷いや躊躇いは一切見えない。
そんな妹たちに、沈利はどこか困ったような表情をする。

だが、すぐに真面目な表情をすると浜面の方を向いた。

「浜面、テメェは残れ。今から向かう所は、テメェみたいな無能力者じゃどうにもならない」

「ばっきゃろう。上条だって無能力者だろ」

浜面は笑いながら言った。
彼もまた、その表情に迷いや躊躇いは一切見えなかった。

「死ぬわよ、浜面。今回ばかりは冗談ではすまないわよ」

「……確かに俺が行っても役には立たねぇだろう。だけどよ、ダチが戦うってのに、自分は安全な場所にいる、なんてかっこ悪い事出来ないさ」

「バーカ。後悔するなよ」

そう言うと沈利は、付近に止まっている車へ向かう。
その車は浜面が運転していた車。

「さっさと行くわよ。んで、当麻と一緒に家へ帰宅さ！」

腕を天に向かって突き上げながら沈利は宣言した。
だが、理后だけ気付いていた。

沈利の腕は、少しだけ震えている事に。

「……だいじょうぶ、みんな一緒に家へ帰れる」

ジャージのポケットにある体晶入りのケースを握り締めながら、理后はポツリと呟いた。

第二位と幻想殺し

垣根は第一七学区のコンテナが積まれた場所を一人歩く。

（この場所が選ばれるなんて……なんか運命的だぜ）

第一七学区は殆どがオートメーション化されたビルだらけである。
たまに私設研究所や特別拘置所などがあるが、大半の施設は自動化されている。
よって他の学区と違い、人口が極端に少ない。
学生が気軽に来るような場所でもなく、人通りは殆どないに等しい。

更に輪をかけて、かつて起きた『ある事件』が自動化の施設のみにする理由となっていた。
その事件はとある私設研究所を中心に、広大な範囲にあったあらゆる物を消し飛ばした。
原型がかろうじて残っているとか、そんな期待など抱けないほど。

そしてその事件を起こした首謀者は垣根。
その垣根が、数年を得てこうして第一七学区を歩く。
何とも奇妙な因果だと垣根は思った。

（まぁいいや。まずは軽く超電磁砲のクローン体とどう戦えるか、だったな）

時刻は既に二十時、既に実験のテストは開始されている。
だが垣根は特に慌てる様子はない。
ただ、相手から襲ってくるのを待っていた。
それは王者の余裕とも言うべきものだった。

（さて、まずは攻撃に能力を使わずに……どこまでいけるかな）

自らの力に制限をかけて楽しむ、それほどの余裕が垣根にはあった。

彼には『金色の盾』と『破滅の槍』がある。

そう思った瞬間、風を切り裂くような音が垣根の耳に聞こえた。

それと同時に、垣根の背中から翼が六枚展開された。

翼は垣根の頭を狙った飛来物を弾く。

「流石に弾食らったら痛いからな。こればっかりは勘弁だ」

実際、垣根の周りには未元物質が展開されていて、対戦車ライフルでも弾き返せる。

だがそれに接触するより早く、背中の翼が危険を察知し展開された。

「面白そうな事になってくれよ」

銃弾の飛来角度から狙撃場所を特定した垣根。

彼は余裕の笑みを浮かべながら、御坂妹を目指して歩き始めた。

「！？」

銃弾を弾かれると思っていなかった御坂妹は動揺した。

しかしすぐに気持ちを切り替え、メタルイーターＭＸを捨ててその

場を立ち去る。
暫く走った後、御坂妹はカバンの中にあるアサルトライフルを取り出す。

「このポイントで待ち伏せし、相手が見えたら躊躇わず撃ちます、とミサカは作戦を立てます」

コンテナを影に向こうの様子を伺う御坂妹。
しかし垣根の姿は見えず、彼女の瞳にはコンテナしかうつっていなかった。

「あの翼はメルヘン過ぎます、とミサカは思った事を口にします」

「心配するな、自覚はある」

意識を道の向こうに向けていた御坂妹の背後から、突然ある人物の声がした。
とっさにアサルトライフルを盾に、御坂妹は声がした方を振り向く。
だが、御坂妹のした全ての行動は無意味だった。

「俺を待ちぶせなんて十年早い」

そう言うと同時に垣根は蹴りを繰り出していた。
バガァッ！　と音を立ててアサルトライフルは粉々に砕け散る。
更には、それを盾にしていた御坂妹も一緒に吹き飛んだ。
数メートルをノーバウンドで飛んだ後、御坂妹の体はコンテナの壁に激突した。

「ん？　いまいち力を入れたつもりはないんだが……？」

コンテナの壁から剥がれ落ちていく様子に、首を傾げながら垣根は言った。
本人は余り力を入れたつもりではなかったので、予想外に飛んだ御坂妹に驚いていた。

「メルヘンの癖にパワーがありすぎです……とミサカは悪態をつきます」

「余計なお世話だ。俺だって好きで翼を生やしてるんじゃねぇよ」

ポケットに手を突っ込んだ後、垣根は無造作に御坂妹へ近づく。
コンテナの壁を支えに立ち上がった御坂妹は、垣根に手のひらをかざす。

瞬間、細い青白い光の線が垣根に向かって飛んでいった。

（十万ボルトを直撃すれば、暫くは動けないはず！　とミサカは先手必勝を試みます）

垣根へ伸びていく電撃を見て、御坂妹は直撃したと確信した。
しかし垣根の五十センチ手前で、急に電撃がかき消されるように弾けた。

「何故電撃が、とミサカは突然の事に驚愕します」

弾け飛んだ電撃を見ても垣根の表情は変わらなかった。
むしろ『電撃がはじけ飛ぶ』事が当然と言いたげに。

「電気ってのは、電荷の移動や相互作用によって発生するさまざまな物理現象の総称だ。その程度の事ならガキでも知っている」

「それが何か、とミサカはメルヘンに問います」

御坂妹は垣根が言いたい事を理解できず、ただ質問を口にした。

「ならよ。電荷の物理現象を阻害する物質を作れば、電気なんぞ発生しない」

そんな御坂妹を楽しそうに見ながら、垣根は簡単に答えを言った。

余りに堂々としている為、最初御坂妹はそれが正しい事だと思ってしまった。

しかしすぐに頭を振り、その考えを追い出す。

「そんな物質などこの世に存在しません、とミサカは反論します」

「これが未元物質（ダークマター）」

御坂妹の言葉を聞いて、垣根は薄く笑う。

その笑みは楽しげな、それでいて恐ろしさを感じさせる笑みだった。

「異物の混じった世界。ここはテメェの知る世界じゃねえんだよ」

そう言って御坂妹に手をかざした所で、ふいに垣根の動きが止まった。

何か異変に気付いた、そんな表情をしながら垣根は周囲の気配を探っている。

「……おい、一般人が実験に乱入してきた場合、対策マニュアルには何て書いてる」

ある一方を見ながら垣根は御坂妹に尋ねる。

「この学区は無人に近いはずです、とミサカは一般人が混入する可能性が低い事を説明します」

「じゃあ今、こっちに向かっている足音の主は『誰なんだ』？」

垣根の言葉を聞いて御坂妹も耳を澄ます。

そこで気付く、僅かだが二人の呼吸音以外に別の音がある事を。

切羽詰っているような、焦っているような、そんな感じに聞こえる誰かの足音。

その音がまっすぐこちらに向かってきている。

「この実験中、私と貴方以外は近づけないはずです、とミサカは実験の障害になる人物が現れた事を危惧します」

「事前に発見するシステムぐらい入れておけよな、ったく。やっぱリスク管理出来てない研究者は駄目だ。帰ったら全員ぶち殺す」

やがて足音が耳を澄まさなくても聞こえるほど大きくなった頃。

その人物は闇を引き裂いて、垣根と御坂妹の前に現れた。

「御坂妹っ！？　無事かぁ！」

その場に不釣合いなほど、普段着の当麻が実験場に乱入してきた。

「何してやがんだよ、テメェ！？」

突如現れ更には睨みながら叫ぶ当麻に、垣根は内心驚いていた。
その理由は彼が先ほど口にした言葉にある。

（無事か……と尋ねている所を見ると、この実験について知っている奴）

（だが見たことない顔だ。新顔だろうが何だろうが、暗部の人間なら俺が知っていないはずはない）

（となればコイツは表の人間……どうやってこの実験を知った？）

垣根を無視して御坂妹の下に駆け寄る当麻を、ただ黙って眺めていた垣根。
いくつもの疑問が頭に浮かび、それに対する答えを探そうとする。
癖といってもいいほど、垣根は些細な事すら疑問に持ち答えを見出そうとする。

「御坂妹、大丈夫か？」

「何故……ここに来たのですか、とミサカは貴方に問います。いくらでも替えを作れる模造品のために、たった一人しかいない貴方が何しにきたのですか、とミサカは再三にわたって問いかけます」

チクチクと痛む胸を抑えながら、御坂妹は当麻を睨みつつ言う。
痛みの正体は分からなかった。だけど、当麻をここにいさせちゃ駄目だ。
その事だけが、御坂妹の心を支配していた。

御坂妹の体はボロボロで、ほとんど動かないに等しかった。
だから唯一動く口で、当麻へ言葉を紡ぐ。

「必要な機材と薬品があれば、ボタンひとつで自動生産されます、とミサカは説明します。作り物の体に借り物の心のミサカを助ける必要などありません、とミサカは更に説明します」

かろうじてコンテナの壁を支えにしているから立っていられる。
だが、腕の力を失えば御坂妹の体は、簡単に砂利の上に転がるだろう。

「実験に関係のない貴方は帰ってください、とミサカは説明します。貴方が余計な事をすれば、ミサカは勿論、他の『妹達』も迷惑を被ります、とミサカは言います」

御坂妹は自分の心理状態は正常だと思っていた。
体は動かなくとも、口調に乱れはないし台詞には迷いを感じさせない。
だけど言葉を紡ぐ理由だけは分からなかった。

「……うるせぇよ。うるせぇんだよ！　簡単に作れる模造品だとか、実験だとか、そんなもん関係ねぇよ！？」

突然烈火のごとく怒り出した当麻を見て、御坂妹は呆然とした表情をする。
当麻の言葉が理解出来ない、だけど御坂妹の中の何かがチクチクと痛む。

理論に矛盾はない、ウソも言っていない。

必要な薬品と機材があれば、ボタンひとつで自動生産出来る存在だ。
しかも、たった十四日で作り上げられる。
おまけに一体にかかる単価はたった十八万。
資金が潤沢ならいくらでも増やせられる。
一人かけたら一人補充、一万かけたら一万補充、二万かけたら二万補充すればい。
たったそれだけの存在。

「俺はお前を助けるために来たんだよ！　お前を助けるために戦うんだよ！」

痛々しいほどの叫びを上げながら当麻は言葉を紡ぐ。

「ボタンひとつで自動生産出来る訳がねぇだろうが！　お前は世界にたった一人しかいねぇだろう！　そんな簡単な事もわからねぇのかよ！？」

血を吐くように叫ぶ当麻の言葉を聞いて、御坂妹はふっと理解した。

「テメェには言いたい事が山ほどあるんだ。勝手に死ぬんじゃねぇぞ！」

自分の命は軽い、自動生産出来る存在だと思っていた。
だけど、そんな自分でも失いたくないと叫んでくれる人物がいる。
たった一人だけど確かに存在している。
その事を理解すると、御坂妹の中にある痛みはスッと引いた。
代わりに生まれたのはやはり分からない感情。
だけどその感情は心地よく、そしてとても暖かかった。

「説教は終わったか？」

当麻と御坂妹のやり取りが終わったと思った垣根は、気軽そうな雰囲気で尋ねる。
その表情は敵意も殺気も覇気も感じられなかった。

「ああ、テメェをぶっ倒してコイツを病院に連れていくってなぁ！」

わずかに見を低く沈めると、当麻は垣根めがけて勢い良く駈け出す。
距離は少し開いているが、全力で駆け抜ければすぐに詰められる距離でもあった。

「めんどくせぇ熱血だな。さっさとお眠りしとけ」

垣根は軽く手をふる。たったそれだけだが、その場に突如烈風が生まれた。

おそらく垣根は、二人を気絶させた後に他の連中に後始末をさせる。
そう考えていた。だから単に烈風を生み出しただけだった。

だが、その烈風は当麻が持つ幻想殺しにあっさりと破壊された。

「！」

パキンという音がした後、自分が産み出した烈風が消えた事に垣根は驚いた。

（能力者は自分の能力が破壊されると驚く！　そこが勝機だ！）

驚いた表情の垣根を見て当麻は右手を更に力強く握る。
既に距離は目と鼻の先、後は右腕を振り上げて下ろすだけ。

「いけません！　その男へ不用意に近づいては！　とミサカは叫びます！」

振り上げた拳を垣根めがけて振り下ろす直前、当麻にはそんな言葉が聞こえた気がした。
瞬間、当麻の体はコンテナの壁まで吹き飛ばされていた。

「いやぁびっくりだよ。まさかのまさか、噂の奴に出会えるとはな」

吹き飛んだ当麻を見ながら垣根は気楽な表情で語る。
その表情は当麻が能力を破壊した事など、どうでも良さげな感じであった。

「お前が一部では有名な『能力破壊の能力者』って奴か。噂だけは知っていたが、こうして会うのは初めてだな」

「ガハッ……ぐぼっ……」

重い一撃を貰った当麻は、胃の中を吐き出しながら立ち上がる。
信じられなかった。
あの瞬間に垣根は当麻の右手を受け止めて、カウンターと言わんばかりに掌底を打ち出したのだ。
全速力で突撃したのもあり、当麻の体は面白いように吹き飛んだのだ。

「能力破壊の能力者が現れたらどうするか、その答えは実に簡単だ」

言葉通り垣根は簡単に口を開いた。

「――能力を使わずに相手を倒せばいい」

そこから出てきた言葉は、学園都市に住む人間なら考える事すらしない言葉だった。

垣根は楽しそうに笑いながら、ゆっくりと両手を広げる。

「この俺に常識は通用しねぇ」

圧倒的な実力差

戦いは一方的だった。
当麻の攻撃は垣根に全く当たらない。
だが垣根の攻撃は人体の急所へ確実にヒットさせていた。

しかし、この結果は当然である。
元々ちょっと喧嘩が強い普通の高校生の当麻と、暗部世界で鍛え上げられた垣根では実力差は明白だった。

「いい加減倒れて気絶した方が楽だぜ」

「うる……せぇよ……」

満身創痍にしか見えない当麻を見ながら、垣根は涼しげな表情をしていた。
その顔に汗など一つもない、逆に当麻は全身から汗を流していた。

「分からねぇなぁ。何がお前をそこまで駆り立てる。お前とソイツの関係は何だ？」

「友達さ……そして、友達が不幸になるのを見過ごせるわけねぇからよ！」

ボロボロの体に鞭を打って当麻は拳を握る。
そして全速力で垣根へ詰め寄り、拳を振り下ろす。
ワンパターンすぎるが、当麻にはこの戦法しかなかった。

「ふんっ」

当麻の拳を難なく避けた垣根は、伸びきった当麻の腕をぐいっと引っ張る。
力の方向が狂った当麻は、バランスを崩して砂利へと顔から突っ込む。

「友達が不幸だから助ける。いいねぇ、ヒーローだよ」

地面に顔から突っ込んだ当麻を見下ろしながら垣根は薄く笑う。

「俺を倒してソイツを助けて、最後はハッピーエンドか。ははっ、俺よりメルヘンチックな考えじゃねぇか」

体力の限界なのか当麻は立ち上がってこなかった。
垣根の攻撃は、一見ダメージが薄いように見える。
だが一撃一撃がジワジワと体に蓄積していく。
その積み重なりが、当麻の体力をゴリゴリと削っていった。

「だがそれは理想だ。現実は悲しいよなぁ……お前は俺に敗れ、ソイツは実験で殺される」

「……そんな事……させねぇ……」

歯を食いしばって立ち上がろうとする当麻。
だが体は正直であり、当麻もその辺りに転がっているコンテナの壁を支えにしなければ立ち上がれなかった。
既に自らの力だけで立ち上がる事など出来ない状態なのだ。

「そんなにヒーローごっこがしたいのか。だがよ、仮にだ。仮にお前が俺を倒したとして、果たして『超電磁砲のクローン体は幸せに

なれるのか』？」

「……何」

ジャリジャリとする口の中に不快感を感じながら、当麻は垣根の言葉に耳を傾ける。

垣根は当麻の疑問そうな表情を見て、分からないのかという表情をする。

「いいか、ヒーローさんよ。クローン体は国際法違反だ。そんな危険な物を『学園都市が容認』すると思うか？」

生徒に教えるような、ある意味では小馬鹿にしてるような口調で垣根は語る。

その言葉の意味がわからなかった当麻は、垣根の言葉に素直な疑問をぶつける。

「容認しないって……どういう事だよ」

「学園都市に敵はいないと思ったか？　むしろ内外に敵はわんさかいるさ。そいつらが明確な国際法違反を見逃すはずはない。学園都市を叩く材料にするさ」

「そんなわかりきった事が起こるのを、学園都市が容認するとは思えない」

「……結局、なんだってんだよ」

当麻の問いに垣根は簡単に答えた。

「簡単さ。この実験が中止になっても、計画通り行われても、どっちにしろ超電磁砲のクローン体が辿る末路は一緒って事さ」

どこか楽しそうに、それでいてつまらなさそうな表情をして垣根は言った。

「連中らの言葉を借りれば、超電磁砲のクローン体は残らず廃棄処分されるって事さ」

垣根の言葉は当麻の心に深く突き刺さった。

しかし心のどこかで思っていたのか、当麻は焦ったような表情をして御坂妹の方を向く。

コンテナの壁に寄りかかっている御坂妹は、相変わらず無表情な顔で頷いた。

「メルヘンの言う通りです。私たちのたどる末路は変わりません、とミサカは貴方に辛い現実をつきつけます」

「まぁそういう事だ。『理想』のヒーローならハッピーエンドさ。でも『現実』にはヒーローなんていねぇ。結局は大切な者を失うだけさ……」

少しだけ寂しそうな声色で垣根は言葉を紡ぐ。

「……お前はあるのかよ、失った事」

「あん？」

「お前は大切な者を失った事があるのかって聞いてるんだよ」

僅かな時間だが垣根が寂しそうな表情をしたのを、当麻は見逃さなかった。
そして同時に気付いた。垣根は過去に何か不幸な目にあった。
その不幸が何かは当麻には分からない。

「そんな事聞いてどうする。お前には何の関係もねぇよ」

その言葉が答えだと当麻は確信した。

「俺はさ、カッコつけてテメェの命張って、死に物狂いで戦っても……御坂妹を守れないような負け犬だ。お前の攻撃に為す術もなく敗れるような弱者だよ」

目の前の男は過去に大事な人を失った事がある。
例え本人が否定しようとも、その態度と言動が失った辛さを経験した事を物語っていた。

「だけど、アンタは違うだろ？　大事な人を失ったから、力を手に入れたんじゃねぇのかよ。もう二度と失いたくないから、それだけの力を手に入れたんじゃねぇのかよ！」

今にも泣き出しそうな顔をしながら当麻は言った。
悔しかった。アレだけの力があれば、大事な人を全部守れるはずなのに。
何故、彼はそれを違う方向に向けているのか。
圧倒的な力を持つ人間が、何故女の子を嬲るだけにしか使ってないのだと。
そして、今の自分がそれ以下の人間だと言われているようで悔しかった。
悔しくて悔しくて、当麻は涙が出そうになった。

「誰かを失う辛さが分かってるアンタが！　どうしてこんな事をするんだよ」

「……もういい」

その瞬間、垣根の雰囲気がガラリと変わった。
今まではどこか面倒臭そうな、やる気のない雰囲気を纏っていた。

「説教野郎の言葉は聞き飽きた」

だが今は違う。冷たく鋭いナイフのような雰囲気。
情けや哀れみなど感じさせない、純粋に殺気を灯した瞳。
隙など一つもないほどの臨戦態勢。

「失う辛さ？　ああ、分かっているよ。それがどれほど辛いことかなんて」

「だったらどうして、こんな実験に参加するんだよ！」

向かい合うだけで屈しそうになるほどのプレッシャー。
一瞬でも気を抜けば、その瞬間に命を失いかねない。
そう思えるほど、今の垣根は危険な雰囲気を纏っていた。

「無敵の力を手に入れる為だ。最強じゃダメだ、最強ってのはいつか取って代わられる。だけど無敵は違う。絶対的な強さを、誰もがひれ伏す力を、俺は手に入れる」

「その為に人を殺しても平気だって言うのかよ」

「当然さ。お前みたいな偽善者とは覚悟が違うんだよ。例え俺の両手が汚れきっていても、もはや救いのないクズに成り下がろうとも、それで『アイツ』の幸せな人生を守れるならな！？」

実際、垣根は人生を全てを心理定規の為に使う決意を持っている。彼女を守って死ぬなら本望、守れる力が手に入るならどんな汚名も受け入れる。

それが選択を間違えて彼女の幸せを奪った、愚かな自分が行うべき贖罪だと確信していた。

「もう十分だろ？　説教ヒーローさん。オネンネの時間だぜ」

背中から翼を展開すると、下段にある白い翼が烈風を伴って当麻に襲いかかる。

かろうじて右手を上げてその翼を受け止めた当麻。

パキンっという音がして烈風は、最初から存在していなかったかのように掻き消える。

瞬間、今まで経験した事のない痛みに当麻は襲われた。

「テメェの能力、原理は不明だがどうやら『右手』しかダメなようだな。だから、それ以外の場所では能力を破壊する事は出来ない」

垣根の足が当麻の水月に容赦なく突き刺さっていた。

今まで拳で対応していた垣根が、初めて当麻に蹴りを繰り出していた。

「アガっ……うぐっ！」

水月という箇所に攻撃を貰ったせいで、当麻は呼吸困難に陥っていた。
まともに呼吸が出来ない当麻は、徐々に酸欠状態になる。
「未元物質（ダークマター）で生み出された烈風、それを防ぐには右手で防ぐしかないよなぁ」
フラフラとし始めた当麻を見ながら垣根は語る。
もはや自分がどこを見ているのか、何を考えているかも分からない。
それほど当麻は意識が混濁していた。
「だけど未元物質（ダークマター）を纏った蹴りは防げていないみたいだな。どうやら、ある範囲に入れば破壊する能力じゃない。右手に触れるような攻撃でないと破壊できない能力だな」
震えながら手のひらを垣根に向ける当麻。
「単に攻撃してるだけだと思ったか？　ちゃんとお前の攻撃を観察してたさ。お前の能力がどう使われているのかも」
まるで垣根を掴もうとする行動だが、それをなす前に当麻は地面に崩れ落ちた。
「鍛え上げられた足に未元物質（ダークマター）の薄い膜を張った。普通に蹴るより数倍の威力があっただろうな。いくらテメェがタフでも、これ以上立つ事は不可能だ」
もはやピクリとも動かない当麻を見下ろしながら垣根は言った。
「これが現実だよ。偽善者のヒーローさん」

戦闘の一部始終を見ていた御坂妹は、垣根の強さにただ驚くだけだった。
垣根の強さは想像以上、研究者たちが未知過ぎて計測する必要があると言ってたのも頷ける。

しかも恐ろしい事に、垣根は最後以外は全て『腕』で対処していた。
そして攻撃の殆どはカウンターという、当麻の力を利用した攻撃方法だった。
よって垣根の消耗は殆ど無い。
全ては当麻が産み出した力を利用しただけなのだから。

「本当に人間ですか、とミサカは驚きを隠せません」

「学園都市の能力馬鹿どもは、体を鍛える意味を理解してないようだな」

御坂妹の方を向きながら垣根は薄く笑う。

「世界は広い。俺たちの能力が最強だという事を、誰も証明していない。もしかしたら、俺たちの知らない力を持っている奴もいる可能性だってある」

「そういう意味では第七位がそうだな。アイツは研究者が匙を投げるほど未知の力らしい」

両手を広げて語るような雰囲気の垣根。
既に垣根は倒れ付している当麻に、全く意識を向けていなかった。

「『能力破壊の能力者』の噂を聞いた時、俺は素直に恐ろしいと思ったよ。俺たち能力者にとって一番怖い事をやってのけるんだからな」

「能力者同士の戦いで、一番怖いのは自分の能力を奪われる事だ。今まで信じていた力が、簡単に破壊されてしまう。そりゃあ誰もがショックで、そして信じたくないさ」

「だから体を鍛えている、とミサカはメルヘンの言葉につけたします」

御坂妹の言葉に垣根は小さく頷く。

「それも理由の一つだ。まぁ単純に能力を使う必要もない相手に、わざわざ能力を使うのも馬鹿らしいってのもあるがな」

「軍事訓練の全てを学習装置（テスタメント）でインストールされたミサカを、あっさり倒すほどの強さですね、とミサカは実力差に愕然としながらいいます」

「鍛え上げられた体は必殺の武器となる。武器は多いほうがいいだろう？」

そう語る垣根の背後で何かがキラリと小さく光った。

チープな悪党

小さな光が見えたかと思うと、その光は一瞬にして垣根へと襲いかかった。
それはまるで白い閃光のような光だった。
垣根がそれに気付いた様子はない。
ニヤニヤと笑みを浮かべながら御坂妹を見ていただけであった。

なのに、その白い閃光は垣根の背後に展開された翼によってあっさりと弾かれた。

一部始終を見ていた御坂妹は奇妙な事に気付く。
垣根の背後に展開される翼。
その翼は上段、中段、下段とあるがそれぞれに役割があるかのように動く。

圧倒的な破壊力を持つ攻撃を繰り出す上段の翼。
全ての攻撃を弾き、垣根の体を守る中段の翼。
小技に近い、小回りのきく攻撃に使われる下段の翼。

同じ翼ならどの翼を使おうと同じはずだ。
なのに、垣根はあえてそれをせずに『それぞれの翼』で『それぞれの役割』を果たしている。
更に奇妙なのが、上段と中段の翼の存在だ。
意志があるかのように、時々勝手に動いているように見える。
先ほどの閃光も、まるで翼が敵意に反応して動いたように見えた。

（メルヘンの近くにいるから、ミサカもメルヘンな思考になったのですか、とミサカは内心嫌だなぁと呟きます）

「ん？　さっきの閃光はなんだ……？」

そう呟きながら垣根は後ろを振り向く。

すると、さっきまで倒れていた当麻が、綺麗サッパリこの場から消えていた。

「誰かが回収したか？　いや……それなら俺たちに一言あってもおかしくない。となれば……」

そこで垣根は再び御坂妹の方に視線を向ける。

「どうやらお前を助けたい奴は、結構な数がいるようだな……いや、あの男かぁ？」

そして更に気付く。

コンテナを背に立っていた御坂妹も、当麻と同様にこの場から消えている事を。

「なんだ……？　一体何が起こっているんだ？」

突然二人が消えた事に、流石の垣根も異変に気付く。

未元物質を展開し、それを使ってレーダーのように周囲の状況を探る。

すると、近くのコンテナの上で二つの反応が検知された。

「ダサいなァ、ダサいよお前は」

「……第一位様の登場ってかぁ？」

御坂妹を小脇に抱えた一方通行が、コンテナの上から垣根を見下ろしながら言った。
その視線を受けて、垣根もまた一方通行を睨みながら見上げる。

「何という扱いをするのですか、とミサカは突然現れた白いもやし野郎に抗議します」

「……口の悪さは超電磁砲似ってかァ……？」

面倒臭そうな表情して御坂妹を見た後、一方通行は垣根に視線を戻す。

「随分とみみっちくなったなァ」

「あ？」

「チープなんだよ、『今』のお前は。悲劇を抱えたからといって、それを理由に何をやってもイイなンて考えた時点で、お前は安っぽいチンピラなンだよ」

「安っぽい挑発だし、説得力にかける言葉だな」

興味なさそうな表情をして垣根は答える。
彼はどんな汚名をも受け入れる覚悟が出来ていた。
例えチンピラと言われようと、チープな人間と言われようと。

「俺は無敵の力を手に入れる。それを手に入れる為なら、どんな汚名も侮辱も屈辱も受け入れるさ」

「無敵の力……なァ。三下だな、美学が足りねェからそンな台詞を

言えるンだよ」

一方通行は笑う。同時に理解する、垣根はかつての自分だという事も。

忌々しいと思ったが、それを否定する事は今の一方通行には出来なかった。

「誰かを傷つけて手に入れた力なンて、所詮たかが知れている。そンなンじゃ誰も守れねェ」

「……何だと？」

一方通行は御坂妹を地面に下ろす。すると、突然御坂妹の姿が消えた。

空間移動、垣根はそう理解すると同時に、一方通行が単独で動いていない事に気付く。

「無敵だろうが最強だろうが、今のテメェじゃ誰も守れねェって言ったンだよ」

「何かを守るための戦いに、無敵も最強もいらねェ」

「それが分からねェから、テメェはいつまでもソコで止まったままなンだよ」

「……よくペラペラと喋るな」

安い挑発、その事は十分に理解している。

なのにどうしてもイラついてしまう。

平静な心を取り戻そうとしても、一方通行の一言一言が神経を逆撫

でていく。
さっきまでとまるで違う心理状態に、垣根自身も驚いていた。
垣根の表情を見て一方通行は薄く笑った。
「褒められた人生を歩ンできたと思ってねェ」
「でもよォ……こンな俺でも守りたい者がいる」
「そばにいて守り続けたい人がいる」
「大切な、それこそ自分の全てを捨ててでも守りたいと思っている」
両手を広げながら一方通行は言葉を紡ぐ。
その一言一言を聞くたびに、垣根のイラつきは更にましていった。
「テメェによってんじゃねぇぞ、第一位！」
遂にはイラつきを抑えきれず、声を張り上げて垣根は吠える。
自らの感情を抑えるかのように。
「そンな台詞を吐く時点で、お前の力は終わってるンだよ」
「チンケな力に拘って、チンケな力を手に入れようとする。無様過ぎて鼻で笑うレベルだ」
「……いいぜ、ここではっきりしてやろうじゃねぇか。どっちが学園都市最強か」
頭が沸騰しかけた垣根だが、それを見た一方通行は小さく笑った。

「まだ分からねェのか。だったら教えて貰え、あの三下に」

「……どういう事だ」

「無敵をも超える力というのを、あのツンツン頭の三下に教えて貰え。そう言ったンだよ」

「はっ、あんな奴にそんな力があるかよ」

垣根はつまらなさそうな調子で答えた。

実際、さっきの戦いでは一方的に嬲るだけだった。

しかしその言葉を聞いても、一方通行は小さく笑っていた。

「お前を倒すのは俺じゃねェ、あの三下だ」

「アイツに敗れた時、お前は知るだろうな」

「本当の強さってのは何なのかを」

「それでも分からねェなら仕方ねェ。無様に地面を這いつくばらせてやるよ」

その言葉と同時に、一方通行もまた御坂妹と同じように消えた。

恐らくは空間移動能力者が、一方通行も同様に移動させたようだ。

「チッ、未元物質を展開しておくべきだったな。逆算を警戒して引っ込めたのがアダとなったか」

異物の混じった世界なら、空間移動能力者でも演算が狂う。

そうすれば、アレだけ言いたい放題言われる事もなかっただろう。
そのように思うと、垣根のイラつきは更にましていった。

「クソッ、クソッ、このイラつきは何だ、何なんだよ」

ガンガンと近くにあるコンテナを蹴り飛ばしながら怒りを撒き散らす垣根。
それでも怒りがおさまる事はなく、ただイラつきが心の中に広がっていくだけだった。

「あー、わかったよ。分かったよ第一位。テメェの言う三下に教えて貰おうじゃねぇか」

頭をガシガシとかきながら、垣根はある方向を向く。

「ムカついた」

背中に六枚の翼を展開すると、垣根は軽く地面を蹴る。

「簡単に死ねると思うなよ」

フワリと浮いた垣根は一直線に目指す。
一方通行が言った当麻の元へと。

沈利たちは、浜面に当麻を担がさせて垣根から距離を取る。

ある程度距離がとれると、当麻を地面に下ろして応急処置を施していく。

「ったく、アイツは化け物か。アレだけの距離から撃った原子崩しを防ぎやがった」

「背後から超仕掛けたのに、超あっさり防ぎましたね」

効果があるかも、という淡い期待を込めた原子崩しはあっさり弾かれた。

「トラップもどれだけ効果があるかって訳よ」

「悪いが効果はゼロだ。恐らく目眩まし程度にしか使えない」

「ふれんだ、とうまの手当は終わった？」

「結局さ、応急手当って訳よ。使ったのは風紀委員も使用している非常用の対外傷キットだから、ある程度の効果はあるけど……」

「アレじゃ臓器のダメージまでは回復しないな。つまり余程の深手……って事か」

沈利の問いにフレンダは力なく頷く。

塗るだけで消毒・止血・傷口を閉じるという三つの効能を発揮する対外傷キット。

一般には出回っていないが、暗部組織のコネを使って沈利たちは入手していた。

最も、使う相手は殆ど当麻に限られていたが。

「とにかく当麻の体力を回復させるのが最優先だ」

「……超逃げないんですか？」

最愛はおそるおそる沈利に尋ねる。

だが、沈利は小さく首を横に振った。

「ダメだ。当麻はもう関わっている……この実験を止めるためなら、当麻は何度だってアイツに立ち向かうでしょう」

未だ気絶している当麻の頬を撫でながら沈利は呟く。

幾分の悔しさを感じさせる声色に、最愛とフレンダはただ黙るしかなかった。

「むしろ救えなかった事を後悔するでしょうね。苦悩する当麻を見たくない、だからこの場合は、当麻と共に戦って……第二位を倒す。ソレ以外にないよ」

「！　みんな静かに！」

突然理后が小声だが力強く言う。

一瞬にして言いたい事を理解した沈利たちはすぐに口を閉じる。

「ったく、どこに逃げやがった……あーめんどくせぇ」

理后が言ってから十秒もしないうちに、上空から垣根の声が聞こえた。

恐らく飛んで探しているのだろうが、夜である事とコンテナの山という条件が当麻たちを見つけにくくしていた。

暫く沈利たちの上空を飛んでいた垣根だが、別区域を捜索するために飛んでいった。
バレなかった事に、沈利たちは少しだけ安堵の息を漏らす。
「とにかく、今は当麻が回復するまで動けないね……」
未だ気絶している当麻を不安そうに見つめながら沈利は言った。

全ては当麻の為に

暫く上空を飛び回っていたお陰か、垣根は幾分の冷静さを取り戻していた。

「第一位まで説教野郎とは思わなかったぜ」

当麻の言葉と一方通行の言葉を聞いて、垣根は説明のつかないイラつきを感じていた。
その理由を考えようとしたが、当麻を見つける方が優先だと考えを変えた。

「闇雲に探しても見つからねぇ……ならば、この時どうするか……」

この場合に最適な行動は何か、垣根は脳をフル回転させて考える。
すぐに答えは出た。そしてそれは、垣根でしか出来ない荒業でもあった。

「敵の能力を使うのも、アリっちゃーありだよなぁ」

そう呟くと同時に、垣根の翼が大きく展開する。
六枚の翼が綺麗な角度で広がり、そして淡い光を放ち始める。
時々放電に似た現象が、翼から発生していた。

「これが未元物質（ダークマター）。テメェ等はこの能力の前に為す術もなく敗れるのさ」

翼の輝きが一層増し、垣根自身が光っているかのようにも見え始めた。

見ようによっては放電する巨大な発光体である。
それは隠れている沈利たちからも、はっきりと見て取れるほどだった。

「何だ？　一体何を始めようとしているんだ？」

光り輝きだした垣根を見て、沈利は一瞬訝しげな表情をする。
だが垣根の姿を見た瞬間、背筋に嫌な予感が駆け登ってきた。
理由は不明だがアレはマズイ。どう考えたって危険過ぎる。
そう思うや否や、沈利は当麻の右手を垣根の方向に向けた。

「テメェら早く当麻の背後に！」

理解が追いつかなかった理后たちだが、垣根の光が凝縮し始めたのを見てすぐに理解する。
理后たちは転がるような感じで沈利の背後に移動した。

理后たちが移動するのと、収縮された発光と放電が垣根より放出されるのは同タイミングだった。
その瞬間、沈利たちの世界から音が消え去った。

過去、木原正を抹殺する時に使った垣根の技。
単純に未元物質を凝縮させ、高圧縮状態の未元物質を一気に解放する。
ただそれだけ、ただそれだけの事。

だがコンテナや砂利は素粒子レベルで破壊され、文字通り影も形もなくなっていた。
存在そのものを否定し尽くす、垣根が持つ究極の出滅技である。

「ぎ、ギリギリって……所よ」

「超……超何ですか……アレは」

だがその技も異能の力を使っている以上、当麻の幻想殺しの前には為す術もなく消え去った。
ただし、それによって発生した二次災害までは防げなかった。
爆発によって生み出された暴風が、沈利たちに容赦無く襲いかかった。
飛んできた破片が、沈利たちに容赦無く襲い掛かる。
無数の傷を受けながらも、辛うじて致命傷だけは避けられた。

やがて暴風が収まり、辺りに静寂が戻ってきた頃、沈利はポツリと呟く。

「クソッ……なんつー破壊力だ。当麻の幻想殺しがなかったら死んでいたぞ」

乱れた髪を直しつつ沈利は悪態をつく。

「それが目的だからな。お陰でどこに隠れているかハッキリしたぜ」

その声が聞こえた瞬間、全員の動きが完全に止まった。

「あの技でテメェらが死んだならソレでよし。よしんばダメだったとしてもその男の力を使うはず。どっちに転んでもテメェ等は、俺

に殺される以外はねぇ」

どこか楽しそうに、そして酷く危険な香りを漂わせつつ言った。

「なぁ……『アイテム』ご一行さん？」

「だ、第二位ィィィィィィィ！！！」

沈利は振り向き様に原子崩しを撃つ。

照準をつけなければ、自らも破壊する技だがこの時はそうも言っていられなかった。

幸い自らを傷つける事はなかったが、代わりに出力がとても弱かった。

「おっと、危ない危ない」

細い原子崩しを難なく回避する垣根。

幾分の冷静さと共に、僅かばかりの遊び心を持っていた垣根は、すぐに当麻たちを殺すつもりはなかった。

そしてその油断こそが、また当麻たちを逃がす理由ともなってしまった。

「あ？」

気付けばそこには沈利と理后しかいなかった。

最愛やフレンダ、浜面や当麻の姿はどこにも見えなかった。

「……ん？　待てよ。何でお前らが邪魔をする。一方通行も同様だな、何故『アイテム』と『グループ』がこの実験に対して動いているんだ？」

暗部組織『アイテム』と『グループ』。
二つの組織に所属している人間が、こうも垣根の邪魔をする。
場合によっては、内部粛清に動いていると思われてもおかしくない状況。

「はん、テメェに教える義理はねぇよ」

つまらなさそうな表情をしながら沈利は言った。
垣根が悩んでいる間に理后もどこかに移動したのか、既に姿は見えなかった。

「流石『アイテム』だな。何も言ってないのに、まるで打ち合わせしたかのように動く。テメェらの意思疎通能力は異常だぜ」

「それぞれが、それぞれの役割を行う。何も難しい事じゃないさ」

「おーおー、第四位ってのは冷酷って聞いてたんだがな。やっぱり噂は本当だったのか」

「噂？」

「テメェら『アイテム』は全員姉妹だって噂だ。血の繋がっていない義理だけどな」

その噂なら沈利も聞いた事がある。
暗部組織『アイテム』の結束力の高さ、それは全員がある一家の姉妹だからという話。
血の繋がりはなくとも、普通の姉妹以上に互いを信頼している。
その信頼が、全員の結束力と意思疎通能力を上げていると。

（理后が使える体晶の量は渡した分が限界。私が持っている分は使えない。ならば、やる事は一つ！）

「第二位が噂好きだとは思わなかったわねぇ。何？　そんなに自分の噂とかが気になるかにゃ～ん？」

沈利が選んだ選択、それはとにかく時間稼ぎをする。
無様だろうが、情けないと思われようが。
当麻が回復する為に一分でもいい、一秒でもいい。
時間を稼ぐ、それが沈利が担う役割。

「……んん？」

しかし態度を変えたのがいけなかった。
僅かな態度の違い、だがその僅かな違いは垣根に違和感を与えるに十分だった。

「ふっ……そうか。そういう事か」

「あ？」

突然薄い笑みを浮かべた垣根に、沈利は訝しげな表情をする。

「予想外だよ。まさか超能力者を使って『時間稼ぎ』をするなんてな」

「！」

いつかは気付かれると思っていたが、予想より早く気付かれた事に

沈利は動揺する。
その動揺を見て、垣根は自分の考えが正しい事を確信する、

「はん、何を企んでいるか知らねぇが残念だったな。さっさとあのガキを殺すから、そこをどきな」

「……せるかよ」

一瞬にして沈利から発せられる空気が変わる。
常人なら寒気を感じるほどの、冷徹で無情な表情の沈利。
しかしその瞳は、しっかりと垣根を見据えていた。

「やらせるかよぉ！　テメェなんかに！　私の大事な弟を！　私の大切な家族を！！　テメェみたいな奴に奪われてたまるかよぉぉぉぉぉ！！！」

咆哮と同時に沈利は垣根に向かって突進する。
作戦も何もない、ただ無謀に近い突進。
だが能力が効果ない以上、沈利もまた命をかけた戦いをするしかなかった。

「はっ、そういう事かよ！　なら、あのガキをブッ殺してやるよ！」

「させねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

垣根に向かって沈利は拳を振り上げる。

（お願い！　今だけでいい、今だけでいいから力を貸して！）

歓喜の表情を浮かべながら垣根もまた拳を構える。

明らかにカウンター狙い、でも今更沈利は自分の拳を止める事など出来なかった。

（私たちの当麻を失わない為に！）

「第二位ィィィィィィィ！！！！」

拳をさらに強く握ると、沈利は叫びながら拳を振り下ろした。

「俺に接近戦を挑むには十年早いぞ、第四位ィィィィィィィィ！！！」

垣根と沈利の腕が交差する。

勝ち目がない事は沈利も理解していた。
だけどそれでも沈利は退く事なんて考えていなかった。
ただ当麻を守る、それだけの為に。

（私にあんたの強さを貸してよ！　優菜！）

遠くで地面を揺らす轟音と、夜空を切り裂く閃光が見える。
沈利と垣根が戦っている事を、その光景を見て最愛たちは理解した。

「う……うぅ……」

「！　当麻お兄ちゃん！　超しっかりするです！」

当麻が意識を取り戻そうとしている事に気付いた最愛が、心配そうに覗き込みながら声をかける。
その声に反応したのか、当麻はうっすらと目を開いた。

「さ、最愛……どうして……ここに」

「それは超こっちの台詞です。何だって当麻お兄ちゃんは超いつもいつも」

「最愛、それぐらいにするって訳よ」

「フレンダ……お前まで」

「理后お姉ちゃんや沈利お姉ちゃんも超います。ああ、ついでに超浜面もいますけど」

家族がいる事に少しだけほっとする当麻。
だが、すぐにここがどこだったかを思い出した。

「マズイ！　あの野郎がいるから危険だ。最愛、フレンダ、逃げるんだ！」

危険な状態を思い出して立ち上がろうとしたが、その前に体が悲鳴を上げ当麻は激痛に襲われた。

「あぐっ！」

「わぁ！　いくら応急処置しても、完全に治っているわけじゃない

のよ。今動いちゃ危険って訳よ！」

苦悶の表情をして倒れた当麻に慌てて駆け寄るフレンダ。

「戻ったぞ……って大丈夫か！」

今までどこかに行っていたのか、コンテナの影から浜面が現れた。

「ちょっと車飛ばして薬を手に入れてきた。ないよりはマシだろ」

そう言うと浜面は当麻の手当を開始した。

その間当麻は痛みのためか、終始無言であった。

「これでヨシ……といってもまだ動けねぇな。お前が動けるようになるまで、あともうちょいかかりそうだな」

「浜面……お前も逃げろ。ここは危ないから」

そう言いかけた当麻だが、最後まで言う前に浜面が当麻の胸ぐらを掴んでいた。

「おい上条、テメェふざけてんじゃねぇぞ」

想いは一緒

ボロボロの当麻を睨みながら浜面は言葉を紡ぐ。

「危険だ？　んな事はここに来る前から分かってるよ。命をかける必要があるって事もな」

静かな怒りを感じさせる浜面の言葉に、当麻は勿論フレンダや最愛まで口を開けなかった。

否、浜面の言葉は他者の言葉を挟ませる事を許さなかった。

「麦野も滝壺もフレンダも絹旗も、一体何の為に来たか分からねぇのかよ」

「テメェを助ける為だろうが。上条が危険だから、俺たちは危険を承知でここに来たんだろうが！」

浜面の言葉に何も言えない当麻は、ただ黙って浜面の言葉を聞くしかなかった。

力なく項垂れている当麻を見て、浜面は当麻の襟首を掴む力を弱める。

「巻き込みたくないって気持ちは分かる。だけどよ、テメェは家族が危険に晒されても黙っていられるのかよ？」

「麦野に『家に帰れ』って言われて大人しく帰るのかよ？」

「滝壺が、フレンダが、絹旗が！　そう言ってきたらお前は黙って帰れるのかよ！？」

「できるなら今この場で言えよ！　お前たちの好意は迷惑だってはっきり突きつけてやれよ！」

「アイツらの想いを踏みにじって第二位と立ち向かえよ！？」

血を吐くかのように叫ぶ浜面。

大声を上げれば垣根に気付かれる。

その事を理解していた浜面だが、言葉を紡ぐのを止められなかった。

自分が理想とする男が、こんな情けない事を言う事に怒りを覚えた。

同時に悔しかった。自分はこんなにも惨めな事を言う奴を理想としていたのかと。

「ごめん……それでも俺はお前たちに傷ついて欲しくないんだ」

酷く悲しげな表情をして当麻は呟いた。

「馬鹿野郎……」

泣きそうになった浜面だがギリギリの所で我慢した。

人が不幸になるのを誰よりも嫌う当麻だからこそ、自らの危険を顧みずに立ち向かおうとする。

しかし他の人が関わろうとすると、当麻にとっては苦痛になってしまう。

自分の『不幸』が他人を巻き込んだと考えてしまうからだ。

その事は浜面も分かっていた。分かっていたけど、言わずにはいられなかった。

「……最愛」

「超分かっているです、フレンダお姉ちゃん」

フレンダと最愛は互いの顔を見て頷く。

「ごめんね、当麻お兄ちゃん」

当麻の耳にそう聞こえたと同時に、チクリと首筋に痛みが走った。

瞬間、当麻は視界がグラリと揺れた。

「あ……な……にを……」

「即効性の全身麻酔と睡眠作用のある薬だよ。まぁ元々は捕縛用の薬だけどね」

強烈な睡魔が襲ってくるが、当麻には何も出来なかった。

ボロボロの体の上に、全身麻酔がかかっているのだ。

動こうにも全く動けない状態だった。

「当麻お兄ちゃん、超気にしないでください。私たちは超『たまたま』この場にいただけです」

「そうだね……私たちは『たまたま』いたって訳よ」

「……フレ……さ……い……」

一層グラリと揺れたと思うと、当麻はそのまま地面に倒れ伏した。

完全に眠っており、ちょっとやそっとでは起きそうにはない。

「これで超オーケーです。後は時間になるまで、超時間稼ぎです」

「結局さ、当麻お兄ちゃんの想いと同じ想いを皆抱いているって訳よ」

最愛とフレンダ、それから浜面は眠っている当麻を見つつ思う。
誰かを守るのに必要なのは力じゃない、それを教えてくれた当麻を失いたくない。

「さて、いきますかね」

「浜面のくせに超生意気です」

「ちゃっちゃと片付けて、さっと家に帰るって訳よ」

空元気を得るかのように、なおさら明るく言う三人。
勿論、言葉通り気楽に事が進むとは思っていない。
むしろ逆で、限りなく死に近い場所へと向かうだろう。

「ちくしょう、こえぇぇなぁ」

「今なら超逃げても、誰も責めませんよ？」

「へっ、馬鹿言うなよ。逃げたらそれこそ上条に顔向け出来ねぇよ」

震える体に鞭を打つように、浜面は両手で頬を叩いた。

「うっしゃ、行くぜぇ！」

最愛、フレンダ、浜面。
三人は一度頷くと、垣根の元へ走り出す。
既に閃光は見えなくなった。沈利が敗れたと見ていいだろう。

超能力者の沈利が敗れるほどの強敵に、自分たちが叶うはずなどない。
だが、それでも三人は垣根の元に向かう。
全ては当麻の為に。

砂利を踏む音を立てながら垣根は沈利に近づく。
既に沈利は満身創痍であり、もはや自力で立つ事すら出来なかった。
頭から血を流し、左腕は明らかに曲がらない方向に曲がっていた。
服もあちこち破れており、更には血で赤く染まっていた。

付近に理后も倒れていたが、こちらは目立った外傷などは見当たらなかった。
だが、半壊したコンテナを背にしたまま、ピクリとも動いていなかった。
糸が切れたように下を向いたまま、理后はただ風に流されるまま髪を揺らしていた。

「随分と頑張ったが残念だったな。これが第四位と第二位の実力の差だ」

「……」

朦朧とした意識の中、沈利は垣根の言葉を聞いていた。
腕を動かすどころか口を動かすのすら一苦労。
それでもその瞳は未だ垣根に屈していなかった。

「なめ……んなよ……」

「この状態でまだ減らず口を聞けるとはな。中々の精神力だよ、第四位」

歯を食いしばって垣根を睨みながら沈利は悪態をつく。

「くそっ……たれ……」

足に力が入らず立つ事も出来ない沈利。

痛みによって演算も阻害され、原子崩しを撃つ事も出来ない。

何もできない自分が、無性に腹立たしかった。

「これでも褒めてるんだぜ？　この俺相手にお前は十分もったよ」

「やらせ……ない……ぜった……い……テメェに……」

演算に失敗して、また演算をして、ただそれを繰り返すだけだった。

それでも何とか垣根を止めようと沈利は必死に演算を繰り返す。

「超死ねぇぇぇぇぇ！！！」

幾度か繰り返すと、横合いから声が聞こえた。

その声を聞いた沈利は、どこか困ったような笑みを浮かべる。

「馬鹿……逃げろよ……な」

声と共に、垣根の頭上にいくつものコンテナが飛んでくる。

「チッ」

舌打ちをした垣根は、六枚の翼を展開しコンテナを切断する。
しかしコンテナを切り裂いた時、何かが一緒に落ちてくるのが垣根の目にうつった。

「コンテナだけじゃないって訳よ！」

それはいくつもの人形。
この場に不釣り合いな、ファンシーな人形がコンテナの切断面から落ちてくる。

「なめるなぁ！」

垣根は翼で更に人形を切り裂く。
だが、ただファンシーな人形を落としているわけではない。
勿論これはある仕掛けがある人形だ。

「！」

人形を切り裂いた瞬間、強烈な光が垣根の目にはいる。
その光は強烈で、一瞬だが垣根の視界を奪った。

「閃光弾入りって訳よ」

「超っ……まだまだぁぁぁ！！！」

何度も何度も最愛はコンテナを投げ続けた。
閃光弾程度で倒れる相手ではない事は、誰もが理解していることだった。

「大丈夫か、麦野！」

コンテナが投げられている間、浜面は滝壺を抱えて沈利の元にやってきた。

「この区域に集めた全部の爆弾を込めたって訳よ」

閃光弾や炸裂弾、その他色々な爆弾が入ったコンテナが垣根のいる場所に投げ込まれる。

やがて全てのコンテナを投げ終えた後、最愛とフレンダはすぐに沈利の元に駆け寄る。

「さぁ今のうちに離脱って訳よ！」

「ふ……ふざけんなぁぁぁぁぁぁ！！！」

傷ついた沈利と理后を連れて離脱しようとしたが、激昂した垣根の暴風に全員が吹き飛ばされる。

そして、いくつものコンテナの破片が沈利たちに襲いかかった。

「テメェらみたいな雑魚に！　この俺の力が負けるわけねぇだろうが！」

鬼の形相で叫ぶ垣根の翼にある異変が生じていた。

「これが未元物質（ダークマター）だ！　これが学園都市第二位の力だ！　テメェ等みてぇなカスに！　この俺が負けるかよぉぉ！！」

少しずつだが垣根の翼は大きくなり始めていた。

今までは人の身長程度のサイズだった。
だが、今では翼のサイズは一翼で有に数メートルはある。
場合によっては十メートルものサイズにも見えた。

「もういい。お遊びはここまでだ、テメェ等全員ブッ殺してやる！！」

地面を力強く蹴ると、垣根は数十メートル上空で停滞する。
そして翼を広げると同時に未元物質を翼に集め始める。

「この力の前に！　テメェ等は這いつくばって死ぬ以外にねぇんだよ！！」

「くそ……！　あの技かよ！？」

比較的軽傷だった浜面は、上空数十メートルにいる垣根を睨む。
先ほどとは比較にならないほど肥大化した翼。
恐らく翼のサイズが変わっている以上、あの技の威力も桁違いに上がっているはず。
その事を理解した浜面は、周りを見渡す。

そこで気付く。この場に立っているのは自分一人だけだという事に。

沈利や理后は元より、フレンダや最愛も地面に倒れていた。
フレンダは当たり所が悪かったのか、頭から血を流していた。
最愛もまた、うめき声をあげるだけで立ち上がる気配はなかった。

改めて浜面は垣根の強さにゾッとする。
たった一撃で大能力者二人を戦闘不能に追いやる強さは、もはや常識では語れなかった。

（クソッ！　何も出来ねぇのかよ！）

「は、浜面……」

上空で放電を繰り返す垣根を睨んでいると、側で倒れていた沈利が口を開く。

血を吐き出しながらも、沈利ははっきりと言葉を口にした。

「当麻を……頼む……」

「ば、馬鹿野郎！　全員で帰るんだろ！　全員で家に帰るって言っただろう！？」

浜面の言葉に沈利はただ笑みを浮かべるだけだった。

再度垣根の方に浜面は視線を向ける。

既に放電と光は収縮し始めていた。

残された時間はもはや極僅か。

「諦めないのが上条家じゃなかったのかよ！？」

「……ばーか……」

ブラックホールのように光と放電を吸収し続ける垣根。

放出まであと少し。それが浜面には嫌というほど分かった。

「終わりだ」

垣根がそう言葉を発すると同時に、六枚の翼から未元物質が解放された。

最後ぐらいはカッコつけよう、そう考えた浜面は沈利を守るように立つ。
意味のない事ぐらいは分かっている。
でも浜面にも男の意地があった。

そんな浜面を見て沈利は笑った。
少しだけ意地悪で、そして優しさを感じる笑み。

浜面もまた満足気な笑みを浮かべた後、ぎゅっと目を強く閉じる。
一秒、二秒が永遠に感じられた。
だが十秒たっても何も起きない事に、浜面は違和感を感じた。
恐る恐る目をあけると、先ほどと何も変わらない光景が目に入り込んできた。

「あれ……？」

何も起きていない事に浜面は動揺する。
すると、沈利も同じように動揺しているのか目を見開いて驚いていた。
しかし沈利のは、どちらかというと何かを見て固まっているようにも見えた。
浜面は沈利の視線を追うように、同じ方角に顔を向ける。

そこには右手を天に突き上げて立っている当麻がいた。

「おい」

当麻は沈利たちや浜面に視線を向ける事なく、まっすぐ垣根を見ながら言った。

「文句はねぇよな？」

決着

当麻の言葉を聞いた浜面と沈利は同じ事を思った。

誰の声だ？　と。

当麻と対決した事のある浜面も、家族である沈利でも聞いた事がないほどの怒声。

普段怒る事のない当麻が、沈利すら驚愕するほど怒りを滲ませている。

その怒りが、この場にいる全員の動きを止めた。

それは垣根も例外ではなかった。

（な、んだコイツ……）

初めは技が破壊されて唖然とした。

だが眼下に当麻がいる事に気付き、技が破壊された事の理由をしる。

しかし当麻が現れた事など、垣根にとってはさほど問題にはならないはずだった。

だが当麻の言葉を聞いた瞬間、垣根の中に説明のつかない感情が湧き上がった。

それが垣根の動きを止めていた。

（何故立っていられる！　アレだけの攻撃を受けて何故立っていられる！）

いくつもの致命傷を与えたはずだ。

ちょっと治療したぐらいで回復するようなダメージではないはずだ。

それなのに、どうしてあの男は立っていられる。
たかが高校生の体で耐えられるような攻撃をした覚えはないはずだ。

垣根はゴクリと喉を鳴らす。
その音でハッとなり、頭を軽くふる。

（所詮相手はたかだか『能力を破壊するだけ』の奴だ。もう一度叩き潰せばいい！）

そう思って垣根は地面へと降り立つ。
もう一度倒せばいい、そうすれば余計な奴の邪魔など入らない。
そのはずだ。たかがそれだけのはずだ。

なのに垣根の体は地面に縫いつけられたかのように、ちっとも動いてくれない。

まるで固定されているように、見えない縄で縛られているように。
垣根はただ当麻を睨むだけで戦うための一歩を踏み出せなかった。

『無敵をも超える力というのを、あのツンツン頭の三下に教えて貰え。そう言ったンだよ』

一方通行の言葉が垣根の脳裏に浮かぶ。
その言葉を思い出して、垣根はまさかと思う。
だが、それ以外に説明がつかない。

（あれが……無敵をも超える力とでも言うのかよ！）

「クソッタレ！　テメェ如き倒せなくて、何が『アイツを守る』だよ！」

自らを鼓舞するように、垣根はあらん限りの声で叫ぶ。
しかし当麻はその声を聞いても、ただまっすぐ垣根を見るだけであった。
その瞳は怒りを滲ませていながらも、真っ直ぐだった。
余りにも真っ直ぐな為に、垣根は眩しいと場違いな考えが浮かんだぐらいだ。

「お前が何を守りたいのか、どんな風に大事な人を失ったのか詳しくは知らない。だけどよ、今のテメェを見て、失った人はどう思ってるか考えた事あるのかよ？」

「何……だと？」

「誰かを守るために、ヒーローも特別な力もいらねぇだろうが！」

「泣いて欲しくない人が！　助けてくれって言えず唇を噛んで耐えていれば、それだけで十分だろう！！」

「特別なポジションも理由もいらねぇ！　それだけで立ち上がれるだろうが！」

弱い部分を抉られるかのような当麻の言葉が、垣根の心に深く突き刺さっていく。

「……うるせぇ……うるせぇんだよ！　大事な奴を失った事のない奴に！　表の世界でのうのうと生きてる奴に！　この俺の気持ちがわかってたまるかよぉぉぉぉ！！！」

垣根の胸の内から、どす黒い何かが噴き出す。

それは今まで溜まっていた学園都市への、不条理で理不尽な世界への憎悪や憤りであった。
それが言葉という形になって、垣根の胸の中から外へ出ていく。

「もう俺にはアイツしかいねぇんだよ！　例え誰を犠牲にしようとも、アイツだけは失うわけにはいかねぇんだよ！」

ゆらりと垣根の周りの空間が歪む。
咆哮と共に吐き出された未元物質が、垣根の周りにある世界を歪めていく。
吹き出される未元物質の暴風が、全てのものを吹き飛ばしていく。
辛うじて軽傷だった浜面も、地面へ倒れている沈利たちも。

だが、肝心の当麻だけは吹き飛ばせなかった。
憎たらしいぐらいにその場に立っていた。

「誰かを犠牲にして力を手に入れる事が本当に正しいのかよ！？」

「お前の願いは誰かを犠牲にしなければ叶わない事なのかよ！？」

当麻の言葉を聞くたびに垣根の心の中にある何かにヒビが入っていく。
それを防ぐかのように、更に大声を上げて垣根は叫んだ。

「それ以外に方法がねぇんだったら、それしかねぇだろうがよ！！」

「テメェの不甲斐なさを、ソイツに押し付けるんじゃねぇ！」

だがそれは無意味だった。
当麻の言葉が届くたびに、垣根の中にある何かが崩壊し始める。

「今のテメェを見て、お前の守りたい人が何も気付かないと思っているのかよ！？」

それにこの上なく恐怖を覚えた垣根は、頭を盛大にふって当麻の言葉を追いだそうとする。

「テメェは知ってるだろうが！　大切な誰かが傷ついている事の痛みが！　自分の大切な人が苦しんでいる姿を見て、でも自分は何も出来ない苦しみを知ってるだろうが！」

「そんな苦しい衝撃を、テメェは守りたい人に押し付けるつもりなのかよ！？」

「うるせぇって言ってるだろうがぁぁぁ！！！」

垣根の背中にある翼のうち二つが当麻に襲いかかる。
激昂した垣根が無作為に振り回す暴力の塊。
その翼が左右から当麻に襲いかかった。

垣根の翼がぶつかり合うと、爆音と衝撃波が生まれあたりに撒き散らされた。
地盤そのものにまで衝撃がいったのか、軽く地面が揺れた。

（これで死んだだろ。クソうぜぇ説教も終わりだ！）

時は少し戻る。
垣根と当麻が互いに想いをぶつけあっている頃、沈利は動かない体をどうにか動かそうとした。
半分意識を失いかけていたが、垣根の暴風を感じて何とか意識を取り戻した。

暴風によってコンテナに叩きつけられたフレンダたちは、その衝撃で意識をなくしていた。
沈利は元から背中がコンテナだった為、暴風で叩きつけられる事はなかった。

（クソ……私は当麻の姉だ。姉が弟を助けられないなんて……そんな情けない事出来るかよ！）

演算をしようとしても失敗してしまう。
元々、沈利の演算は高度かつ複雑な演算を要求される。
故にほぼ瀕死に近い状態では、演算がうまくいく事などない。

「し……ずり……」

動かない体で演算を繰り返していると、左側から理后の声が沈利の耳に届く。
這いつくばるように近寄ってきた理后を見て、沈利はどこかホッとした表情をする。

「理后……大丈夫かい？」

「何とか……しずりが守ってくれたからね」

「私は『アイテム』のリーダーで、そしてお前の姉だよ。姉が妹を守るのは当然じゃないか」

その言葉を聞いて理后は笑った。
普通に見れば、ただ笑っただけに見えただろう。
だが家族である沈利は一目見て分かった。

「お……い……理后。テメェ何する気だ」

理后の笑みは何かを覚悟し終えたかのように見えた。
沈利は嫌な予感を覚え、理后に何をするか尋ねる。
だがそれを無視して理后は、沈利のポケットに手を入れる。

「お……前……それは！」

「しずり……私がしずりの妹であると同時に、私はとうまの姉でもあるんだよ」

理后が沈利のポケットから取り出したもの。
それは体晶が入ったケースだった。

「やめろ……それ以上使えばお……前の体は！」

止めようにも沈利の体はピクリとも動かなかった。
無理に動かそうとしたが、体は正直でやはり指一本動かなかった。

「しずり……私はね。とうまと家族になれて幸せだったよ」

「こんな能力のせいで、私は親から捨てられた」

「一時期は能力を憎んだりもした。だけど、今はこの力があってよかったと思ってる」

「だって……とうまを救えるから」

ケースの蓋を外すと、理后は朗らかな笑みを浮かべた。
その言葉と笑みだけで、理后が既に覚悟を決めている事を沈利は理解した。

「どうして……だよ。私は……どうして妹も、弟も救えないんだよ。どうしてアイツみたいに、救う事が出来ないんだよ」

自分の不甲斐なさが情けなくて悔しくて、沈利は人目も気にせず涙を流した。

どうして自分はこんなにも無力なんだ。
どうして自分は家族を守れないんだ。

その想いが涙という形になって沈利の外へ溢れ出す。

「大丈夫だよ、しずり」

その涙を見て理后は笑顔を浮かべながら言った。

「私はね。もうとっくの昔にしずりに救われてたんだよ」

その言葉と同時に、理后はケースの中身を全て飲み込んだ。

「ば、馬鹿野郎ォォォォォォォォ！！！」

殺した。間違いなく奴は死んだ。
垣根はそう思った。そう思ったからこそ気付かなかった。
ある異変に。

「何だ……？」

呻くような感じで垣根は呟く。
使ったのは下段の翼のはずだ。
中段と上段の翼を操作した覚えはない。

「何で……何でだよ。お前たちまで俺が違うっていうのかよ！」

「な……にが」

垣根の翼は奇妙な動きをしていた。
下段の翼から守るために、中段の翼が当麻を守っていた。
そして上段の翼が、下段の翼を止めるように地面へと縫いつけていた。

一瞬、垣根が変な事をしているのかと当麻は思った。
だが焦っているような表情の垣根を見て、それが垣根の意志とは違う事に気付く。

（何か知らないが……今なら！）

そう思ったのと同時に当麻は駈け出す。
中段の翼が、垣根へ続く道を作っているかのように見えた。
まるで垣根を止めて欲しいかのように。

「どうしてだよ！　どうして俺を止めるんだよ！」

垣根は信じられないものを見たかのように叫ぶ。
今までこんな事など一度としてなかった。
どんな時でも守ってくれた紅音が、どんな時でも力を貸してくれた影花が。
今、この場だけは力を貸してくれなかった事に垣根は激しく動揺した。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ！！！！」

雄叫びを上げながら垣根への距離を縮める当麻。
そして当麻の拳が、垣根へ届く圏内まで飛び込んできた時、垣根の心にある言葉が聞こえた。

『俺が認めたライバルが、クズに成り下がるのを黙って見ていられねぇよ。心理定規を理由に何をしてもいい、なんて考えてるテメェは一発殴られて目を覚ませボケナス』

『際限なく周りを傷つけてまで手に入れた力で、私は守って欲しいと思わないわよ。きっと心理定規もそう思うでしょうね。垣根、今のアンタはすっごく情けないわよ』

その言葉は恐ろしいぐらい破壊力があった。
当麻や一方通行の言葉とは比較にならないほどのダメージを垣根は

味わった。

「犠牲なしで力なんて手に入らないだろう！　それがダメなら……ダメならどうしたら良かったんだよぉぉぉぉ！！！」

垣根は泣きそうな子供のような表情をして拳を振り上げる。
その拳に、力は全く入っていなかった。

「いいぜ……テメェがあくまで自分の願いに、他人の犠牲が必要だっていうなら……」

当麻が拳を握る。この上なく強く握る。
腹の底から溢れる激情と持てる全ての力を拳にのせる。

「まずはその幻想をブチ殺す！！」

轟音が炸裂した。
当麻の拳が、垣根の顔面を確実に捉えた音だった。

拳を振り上げた垣根だったが、その拳が振り下ろされる事はなかった。
振り下ろせば、大切な人たちから完全に見捨てられる。
その事が、垣根の拳を止める理由となっていた。

六枚の翼が砕け散り、垣根は真後ろに吹っ飛ぶ。

（あぁ……そうか……これが無敵をも超える力……か）

例え何があっても絶対に諦めず、決して挫けない想い。
超能力者という壁があろうと、学園都市という壁があろうと立ち向

かう意志。
それが無敵をも超える力なのだと垣根は思った。

少しの土煙を上げながら垣根は地面へ倒れる。
その時、自分の中にわだかまっていた、何かしらの幻想が砕け散ったのを感じた。

本当の強さ

気を抜けばすぐにでも倒れる体に鞭を打って当麻は立ち続ける。
あれだけの強さを誇る相手が、一度の攻撃で倒れるとは思っていなかった。
必ず次の攻撃がくる、そう思ってずっと拳を握っていた。

だが当麻の予想に反して、垣根が立ち上がってくる事はなかった。
目はしっかりと空を見上げており、意識が混濁しているようには見えない。
なのに垣根は大の字で倒れたまま動こうとしなかった。

「り、理后っ！」

暫く垣根を眺めていると、切羽詰まった沈利の声が当麻の耳に届く。
慌てて振り向くと、ぐったりと倒れたまま動こうとしない理后の姿が目に入った。

「理后姉ちゃん！」

理后に何が起きたか分からないが、当麻はマズイ状態だと本能的に察知する。
フラフラとしながらも、当麻は理后の元に駆け寄る。

「おい理后！　目を開けろよ！　なぁ……目を開けろよぉ！！！」

荒い息をしながらうめき声を上げる理后に、沈利は精一杯の声をかける。

「理后姉ちゃん、どうしたんだよ！」

体を引きずりながらたどり着いた当麻が、理后の様子を見てギョッとする。

顔色は夜でも分かるほど青白く、それでいて大量の汗をかいていた。

息も荒く、肩で息をしているのが丸わかりだった。

「くそっ！　一体何なんだよっ！」

理后の体が弱いことは当麻も知っていたが、こんな状態に見たのは初めてだった。

どうすればいいか分からない当麻は、ただパニックを起こすだけである。

「っ！　当麻後ろ！」

理后を抱えて病院にいこう、やっと考えが纏まった時に沈利が焦ったような声を上げる。

その声を聞いて当麻が後ろを振り返ると、先ほどまで倒れていた垣根が当麻の後ろに立っていた。

やはりあの程度では倒れないか、そう思った当麻は拳に力を入れて垣根へ殴りかかる。

だが体勢が悪く、殆どスピードのない攻撃は垣根によって簡単に止められる。

「大人しくしてろ」

当麻の拳を受け止めたまま、垣根はもう片方の腕で懐から携帯電話と取り出す。

何度かボタンを押した後に通話ボタンを押すと、垣根は携帯電話を

耳にあてた。

垣根が何をしたいのかさっぱり分からず、当麻と沈利はただ黙って成り行きを見ていた。

「冥土帰しか。今から急患を六人連れて行く。内一人は崩壊の危険がある、最優先で治療しろ。ちょっとばかし派手な救急車でいくが、まぁ気にしないでくれ」

そう告げると垣根は相手の返事を待たず通話を切る。

そして、そのまま辺りを見渡す。

すると垣根の目に、ちょうどいい具合に破壊されているコンテナが目に入った。

近寄って強度を確認すると、それなりに剛性な作りである事が分かった。

「おいウニ頭。全員をコレに乗せろ」

「は？」

「その女は危険だ。今すぐ奴に見せなければ死ぬぞ」

コンテナの近くに倒れていた浜面の襟首を掴むと、垣根は問答無用で中に放り込んだ。

「いてぇぇぇぇ！」

ゴンッと何かにぶつかる音と共に、浜面の情けない悲鳴が聞こえた。

恐らくコンテナの底か何かに頭をぶつけたのだろう。

「何を企んでる……第二位！」

沈利は睨みながら垣根に問いかける。
今の垣根の行動がさっぱり分からなかった。
何を企んでいるのかすら。
だが、垣根は達観したような表情でボソリと呟いた。

「体晶……限界を超えて使っただろ。冥土帰しに見せないとマズイぞ」

「だからって……テメェを信用できるかよ！」

「ならソイツが死ぬだけだ。判断はお前に任せる、俺はそれに従う」

垣根はこの場にいる者全員を病院に運ぼうとしている。
その事は理解できたが、だからといって垣根が信用できるかどうかは別問題だ。
何しろさっきまで殺し合いをしていた関係だ。
今すぐ信じろ、と言われても沈利には出来なかった。

だが垣根の助けが無ければ理后は確実に死ぬ。
この場にいる者で、殆ど無傷に近いのは垣根だけだからだ。

「……理后姉ちゃんを頼む」

どうするべきかと悩んでいると、当麻が突然口を開いた。

「当麻！　お前っ！」

「沈利姉ちゃん、俺には分かる。コイツはもう戦う気なんてないっ

て……だから俺はこの男を信じる」

笑いながら当麻は言った。
その笑みを見て、沈利に語る言葉を全て失った。

「チクショウ……当麻はそういう所が卑怯だよ」

「ごめんね、沈利姉ちゃん」

当麻は一度だけ申し訳なさそうに言った後、垣根の方に顔を向ける。

「……その女だけじゃなくて全員運ぶ。そう言いたいんだな」

「ああ……頼む」

「はん、そう言うと思ってもう乗せてるよ。後はテメェら三人だけだ」

いつの間に乗せたのか、最愛とフレンダの姿がなかった。
どうやら垣根は嫌と言っても、無理にでものせるつもりだったらしい。
素直じゃないな、そう思った当麻は苦笑した。

「頼むぞ……えっと」

「垣根、垣根帝督だよ」

「頼むぞ垣根。俺は上条、上条当麻だ」

「……ああ、分かったよ上条」

そう言うと垣根は三人をコンテナの中に運びこむ。
どういう身体能力をしてるのか謎な程、垣根は当麻を軽々と持ち上げてコンテナの中に運んだ。

「全員乗ったな。じゃあちょっとだけ揺れるが我慢しろよ」

その言葉と同時にコンテナが少しだけ揺れる。
その揺れで、当麻たちは垣根が何をしようとしているか理解した。
同時に何て無茶な事をしようとしているのだ、そう思った。

「おい、コンテナごと運ぶつもりかよ！　んな事出来るかよ!!」

浜面の言葉は最もだった。
当麻たち六人分の体重が合わさったコンテナはかなりの重量がある。
それを垣根は、何の重機も補助機械もなしに持ち上げようとしているのだ。

「お前ら……俺を、超能力者を舐めるなよ」

どこか楽しそうな声で垣根は言う。

（頼む！　今更虫が良い事を言っているのは分かっている！　だけど今だけは……今だけは力を貸してくれ！）

全身の力を両腕に込めて、垣根はコンテナを持ち上げようとする。
少しして、コンテナが少しずつ持ち上がっていく。

（コイツらを救うために力を貸してくれ！）

だが今一歩という所から一向に持ち上がらなかった。

（頼むよ、こんな情けない男に力を貸してくれよ！　影花！　紅音！）

その瞬間、垣根の目に左右から腕が伸びてくるのが見えた。

誰か、なんて問わなくても垣根にはすぐ分かった。

『親友が困っていたら助けるのは当然だろ』

『やっと昔のあんたに戻ったね』

どこか楽しそうな子供の声が聞こえた。

その声を聞いて垣根は小さく笑った。

（ありがとうよ……影花、紅音……）

全神経を両腕に集中させ、垣根はすべての力を腕にのせる。

「この俺に……『俺たち』に常識は通用しねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

咆哮と共に垣根はコンテナを完全に持ち上げた。

重量挙げの選手がいたら、垣根の姿を見て完全に腰を抜かしただろう。

それほどの『常識外れ』な光景だった。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　マジで持ち上げやがったぁぁぁぁ！！！」

素っ頓狂な声を上げながら浜面は叫ぶ。
当麻や沈利は声を上げる事すらできないほど、驚きに目を見開いていた。

「超特急で病院に向かうぜぇぇぇぇぇ！！！」

地面を力強く蹴ると垣根は背中にある六枚の翼を羽ばたかせる。
轟音を上げながら、コンテナはぐんぐんと空へと上がる。
そして第七学区にある病院へ文字通り超特急で向かった。

ゴンッ！！　と地面が軽く揺れたのを冥土帰しは感じた。
その揺れの後、次に聞こえたのは軽い悲鳴だった。
何しろ前代未聞のことである。

救急車が止まる所にコンテナが飛んでくる事なんて。
それも翼を生やした人間が運んでくる事など。
次に同じ光景を見れる事など、まずないだろうと言える光景だった。

「随分と派手な救急車だね？」

「う……るせぇ。急患はこの中にいる。一人は体晶を使いすぎているから、脳がかなり危険だ」

コンテナを地面に置きながら垣根は冥土帰しに語る。
既に腕の感覚はなくなり、筋肉が悲鳴をあげていた。

いくら常人を超えた力を発揮しようと、人が持てる限界以上の重さをもったのだ。
腕が壊れてもおかしくはない。

「君も患者だね。急いでストレッチャーを用意するよ」

「俺の事はいい。コイツらを……コイツらを救ってくれ」

垣根は冥土帰しに頭を下げた。
もし垣根の性格を知っている者が見れば、目の前の光景は信じられなかっただろう。
プライドの塊に近い垣根が、誰よりも傲慢不遜な垣根が。
地面に跪いて頭を下げる光景など、一体誰が信じようか。

「私を誰だと思っているんだね？」

そんな垣根に冥土帰しはハッキリと答える。
全く動じていない表情をしたまま、冥土帰しは垣根へ背を向ける。
彼の視線の先は、急患として運ばれていく理后の姿があった。

「命を守り傷跡も残さず精神的なケアまで含めて完璧な形で君の希望に答えよう」

全てを任せろ、言葉にせずとも冥土帰しの背中はそう語っていた。

「頼んだぜ、冥土帰し……」

そう呟いた後、垣根は意識を手放した。

やはり常識が通じない男

垣根と当麻たちの戦いが終わって数日後。
当麻、沈利、理后、フレンダ、最愛、浜面は仲良く入院をしていた。
それも一つの病室で。

何故一つの病室かというと、当然ながら沈利たちが当麻と一緒の部屋を希望したからだ。
結果、少々狭いが全員が同じ部屋にいるという事になった。

六人の中で特に理后が酷かったが一命は取り留めた。
しかし依然として予断は許されず、長期に渡って治療を行う必要があった。
次に酷いのが沈利で全治一ヶ月コースだ。
その後に当麻たちが数週間近く入院という結果だ。

ちなみに垣根は気絶から復活した後、そのまま退院したらしいが。

「しかしよく生きてたよな、俺たち」

雑誌を読みながら浜面は呟く。

「超入院コースですが、生きているだけで超不思議です」

「明確な実力差があったって訳よ」

ベットに腰掛けている最愛とフレンダが浜面の言葉に付け足す。
実際、戦闘は最初から最後まで殆どが垣根の優位だった。
どうして当麻に殴られた後、垣根が戦闘を止めたのかは分からない。

もし垣根が徹底抗戦を考えていたら、入院なんて悠長な事にはならなかった。
少なくとも理后の命は完全に消えていただろう。

「お前らはいいだろう。私なんて全治一ヶ月だぞ」

左腕のギブスを掲げながら沈利はぼやく。

「上条さんは内蔵がやられてて、暫くはご飯がまともに食えませんよ」

お腹を抑えつつ当麻は涙を流す。
どうも垣根から臓器にダメージが行く攻撃を貰ったようで、普通のご飯が食べられなかった。
暫くは流動食という、非常に悲しい食生活の当麻だった。

「本当に超常識外れの人間でしたね」

「……うん、第二位の能力も本当に常識外れだったよ」

今まで黙っていた理后が、最愛の言葉に軽く頷きながら答える。

「そうだなー。あの破壊力といい応用力といい、他のどの能力にもない異質さがあったよ」

「ううん、違うよ。確かに力も凄かったけど、本当に常識外れなのはそこじゃない」

「うん？　じゃあ超なんですか？」

全員が理后に視線を向ける。
ちょっとだけ悩んだ理后だが、やがてゆっくりと言葉を口にする。
「あの瞬間、私は第二位のＡＩＭ拡散力場に触れたんだけど……おかしかったの」
「おかしかったって……何が？」
いまいち要領を得ない理后の言葉に浜面が疑問を述べる。
「確証はないけど……第二位からは本人が持っているＡＩＭ拡散力場の他に、もう二つ別のＡＩＭ拡散力場が補足出来たの」
「……は？」
理后の言葉に沈利が素っ頓狂な声を上げる。
フレンダも最愛も同じように、理后の言葉が理解出来ないのか呆然としていた。
当麻と浜面は、そもそも何が問題か分かっていなかったが。
「ちょ、超待って下さい！　ＡＩＭ拡散力場が三種類って……そんな事超ありえません！」
「自分だけの現実が三種類なんて、そんなのありえないぞ。つまり第二位は三種類の能力が使えるって事なのかよ！」
「多重能力者（デュアルスキル）って実現不可能のはずって訳よ」
沈利も最愛もフレンダも、理后の言葉が全く信じられなかった。
『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』は、一人につき一種類しかない。

二つ以上持とうとすれば脳への負担が大きく、それに耐え切れない為に実現不可能とされている。

だが理后の話では、垣根からはＡＩＭ拡散力場が三種類補足出来たという話。

それは垣根が、学園都市で唯一の多重能力者（デュアルスキル）を意味している。

「そんなんじゃない感じだった。何て言えばいいのかな……私にもよく分からないの」

申し訳なさそうな表情で理后は謝る。

「あ、いや……私たちもつい興奮しちゃった」

「ごめんなさいって訳よ」

「……まぁもう二度と会う事も超なさそうですし、この話はここで超終わりです」

謝る理后を見て三人はバツの悪い表情をする。

ちょっとだけ気まずい雰囲気が病室を支配する。

「いよぉ！　元気にしてるか？」

そんな空気をぶち壊すかのように、ひたすら明るい声と共に扉が開けられた。

「だ、第二位！」

扉を壊す勢いで開けたのは、先ほどまで話題に上がっていた垣根で

あった。
片手に大きめの袋を持っていた垣根は、呆然とした沈利たちの視線を無視して当麻のベットまで近寄る。

「上条、これは見舞いの品だ」

そう言って大きめの袋から、これまたでかいメロンを取り出す。
明らかに高級なメロンに当麻は顔をひきつらせる。

「何ですか、その高級そうなメロンは！」

「高級に見えるのか？　たかだか五万程度のメロンだぞ？」

「何という格差！　同じ年齢にしか見えないのに、何で垣根はブルジョアなんですかねぇ！？」

「そりゃだって……俺って超能力者だし？」

「くおおおおおお！！！　一度でいいからそんな高級メロンを躊躇いもなく買ってみたい！」

悶絶する当麻を見て垣根は楽しそうに笑う。
当麻の声で理解が追いついた沈利たちは、垣根を睨みながら叫んだ。

「おい！　何しに来たんだよ！」

「何って、見りゃ分かるだろ。見舞いだよ、見・舞・い」

殺気を込めて睨む沈利を見ながら垣根は飄々と答える。
その答えに、またもや沈利たちは頭の理解が追いつかなくなった。

「ひえぇぇ……流石第二位。麦野の殺気を受けても平然としてやがる」

沈利の殺気が怖い浜面は、部屋の隅っこで震えながら一部始終を見ていた。

こういう時、何故か浜面は巻き込まれて不幸になる事が多い。

よって近寄らない事が得策、そう浜面は判断した。

「はぁぁぁぁぁ！！？　誰のせいで入院するハメになったと思ってるんだ！」

「うん、俺のせい。だから見舞いに来たんじゃないか」

「この野郎……ぶっ殺す！」

「おいおい、病人を痛めつける趣味はないぞ？」

一触即発、というよりは沈利が一方的に怒っているだけだった。

垣根はどこか気の抜けた、それこそリラックス全開状態で沈利を見ていた。

最愛やフレンダ、理后は沈利ほどではなかったが、やはり垣根を警戒して見ていた。

「……垣根、このメロンをカットしてくれないか」

「当麻っ！」

今まで黙っていた当麻が、メロンを垣根に差し出しながら言った。

思わず叫んだ沈利だが、当麻はとても簡単な事と言いたげに口を開

いた。

「確かに垣根とは戦ったけど、もうそれは終わった事だろう？　なら、互いにいがみ合う理由はないじゃないか」

お人よし過ぎる台詞、だけど当麻は本当にそう思っているかのように微笑んでいた。

だから沈利たちは、何も言葉を口にする事が出来なかった。

「全く……当麻はお人好し過ぎるよ」

盛大に溜息を吐きながら沈利は言った。

「まぁ毎度の事だからな。上条がそういう性格なのは、麦野たちが一番知ってるだろう？」

「浜面の癖に超生意気です。罰としてメロンは没収です」

「あっ！　テメェそれは卑怯だぞ！」

「ははは……あー包丁とかは看護婦さんに借りてこないといけないかな。ちょっと待ってろ、今ナースコールを押すから」

ナースコールを押そうとした当麻だが、それより前に垣根が手で待ったの合図をした。

「包丁なんていらねぇ。俺にはそれより鋭利なもん持ってるからよ」

当麻が持っているメロンを持つと、垣根は片手で何度か上に上げる。

「んー、皿はこれでいいか」

大きめの皿があったので、垣根はそれを空いている手の方で持つ。
片手にメロン、片手に大皿。しかしメロンをカットするようなものは何も持っていない。

「よっと」

全員が首を傾げていると、垣根はメロンを上にほうり投げた。
瞬間、時間にして一秒も満たないほどった。
傍目からは単に垣根が上に放り投げただけにしか見えなかった。

「おっとと……危ない危ない」

落ちてきたメロンを大皿で受け止める垣根。
だが受け止めた瞬間、メロンが一つから六つに割れた。

「手刀でメロンを切りやがった……」

「……本当、よく勝てたよな。俺たち……」

「超化け物です……」

「二つ名通り『常識が通じない奴』って訳よ」

「おー、パチパチ」

「全身凶器かよ、垣根は……」

一人を除いて、その光景に唖然とする。

メロンは硬い皮で覆われており、その中の果肉を食する果物だ。
当然、硬い皮を切るには包丁やナイフが必要となる。
しかし垣根は、皮を手刀で切ったのだ。

唖然とした表情を浮かべている当麻たちに、垣根はどこかいたずらっぽい笑みを浮かべながら言った。

「この俺に常識は通用しねぇ」

守る為の力

垣根の手刀切り超メロン（最愛命名）を無言で食べる沈利たち。
浜面は感激しているのか、涙を流しながら食べていた。

「食いながらでいいから聞いてくれ」

椅子に座ったまま黙っていた垣根が、突然ポツリと言葉を口にする。
何事か、と思った沈利たちだが黙って聞く事にした。

「多分、上条が一番知りたい事だが……絶対能力進化実験は凍結になった」

「！　本当か！」

垣根の言葉に思わず身を乗り出す当麻。

「落ち着け、まだ凍結段階だ。実験自体が中止になった訳じゃねぇ」

「あ……」

実験が中止、ではなく凍結という事は、再開する可能性があるという事だ。
その事に当麻は悔しい思いをする。

「ただまぁそのうち凍結から中止になるがな」

「は？」

「まず絶対能力者になれるのは、やっぱり第一位しかいない。おまけに研究者どもは、俺のデータを打ち間違えていたようだ。だから俺では絶対能力進化実験を行う事が出来ない」

「しかし第一位は実験の参加を明確に拒否している。それ所か、実験そのものを破壊する工作にすら出ていた」

「第一位の行動、データの打ち間違えによるミスやその他諸々の過ち」

「それらを全部含めて検討した結果、実験の妥当性を疑われてしまい凍結扱い」

「研究者たちは全員解散、今までの研究成果は完全破棄扱いだ」

「速やかに処分するよう命令が下ったらしい」

処分、という言葉を聞いて当麻がビクッとする。
戦いの途中、垣根は妹達が辿る運命は一つしかないと言っていた。
その事が当麻の心に重くのしかかる。

「安心しろ、上条。妹達たちは全員無事だ」

「……そ、そっかぁ」

ホッと胸を撫で下ろす当麻。

「だが今すぐは会えない。アイツらも色々と調整が必要だからな」

「調整？」

「アイツらの体は無理矢理成長させられているから、短命なクローンが更に短命になっている。それをもとに戻すためには調整を行う必要がある」

垣根はどうして調整が必要かを当麻に説明する。

しかし専門用語のオンパレードな説明に、当麻は殆どの言葉が理解できなかった。

分かった事は、調整をすれば寿命は元に戻る事。

それから御坂妹を含む十二人が、少々特別な状態なので学園都市で調整をする事。

調整の間、御坂妹たちはこの病院にいる医者に預けるという事。

残りは学園都市協力施設にて調整を行う事になった事。

それ以外は、やれホルモンバランスを整えるやら、細胞核の分裂速度が早いから元に戻す必要があるとか、薬品が投与されているからその辺りも考慮する必要があるとか。

当麻にはさっぱり分からない内容だったので、右から左に聞き流す状態だった。

「……とまぁそんな感じだ。その内十二人とは会えるだろうな」

「そっか。それじゃあ誰一人として犠牲にはならなかったか。よかったよかった」

一先ず一件落着と思った当麻は、小さく笑いながら言った。

だが、そんな当麻を垣根はどこか陰りのある瞳で見ていた。

「……果たしてそうかな？」

「は？」

「上条、戦っている時にも言ったがクローン体は国際法違反だ。学園都市にとって足かせとなる連中を、どうして学園都市は『寿命を元に戻す調整が必要』という決定を下したんだ？」

それは垣根が戦闘中に言っていた言葉。

『妹達』はクローン体であり、明確な国際法違反の物的証拠となる。学園都市を忌み嫌っている機関が、その物的証拠を見逃すはずがない。

「それにクローンという事で、超電磁砲と妹達は好奇の視線を受けるだろうな。いや、超電磁砲はないかもしれないが、妹達は間違いなく受けるだろう」

「そんな世界が果たして幸せなのか？」

垣根はそれだけ言って口を閉じた。

その様は当麻の答えを待つ、そう見えた。

当麻は垣根の言葉に薄く笑う。

「それでもだよ。苦しい事に対して苦しい、辛い事に対して辛い、楽しい事に対して楽しい。そんな、誰もができる当たり前の事は、生まれてこなければ絶対に出来ない事なんだから」

「確かにあの実験は色々と歪んでいた所があった。だけど、自分が生まれてきた事だけは、きっと感謝しているんだと思う」

当麻の言葉に、垣根は勿論沈利たちも息を呑んだ。

「御坂妹たちが困るような事態になれば、また手を差し伸べてやればいい。ただそれだけ、ただそれだけだよ」

当たり前の事だと言いたげに、当麻は薄く笑いながら言う。

一瞬驚いた表情をした垣根だが、すぐに不敵な笑みを浮かべる。

「……そっか。お前は強いよな」

「強くなんかねぇよ。俺は俺が出来る事に対して必死なだけさ」

「思うだけと、思って実行するでは明確に違うのだがな。まぁそんな所が上条らしいか」

そう呟いた後に垣根は椅子から立ち上がる。

「今日の所は帰るわ。これ以上いたら、第四位たちから睨み殺されそうだ」

楽しそうに言う垣根の言葉を聞いて、当麻はふっと沈利たちに視線を向ける。

その瞬間、スタンガンでも浴びたように当麻はビクンとベットの上で跳ねた。

「……えっと……あの」

沈利たちは不満を隠そうともしないで当麻と垣根、特に当麻を睨んでいた。

それもそのはず、途中から完全に蚊帳の外に追いやられていたのだ。

姉妹たちがとてもつまらないと思うのは、当然の結果である。

「随分と仲良しになったじゃねぇか」

「とうま、私たちを放置して一人で盛り上がるのは、流石に応援出来ない」

「結局さ、当麻お兄ちゃんはお仕置きって訳よ」

「超覚悟してください」

ヤキモチ、ストレス、寂しさなどの色々な感情がない混ぜの沈利たち。
沈利たちを見て、当麻は全身から嫌な汗が流れる。

「えーっと……ご、ごめん」

あっはっは、と当麻は幾分引きつった笑みを浮かべながら言う。
そんな当麻の表情を見て、沈利たちはため息の後に渋々納得したようだ。

「おーこえぇ」

全然怖そうには思えないほど、陽気な声を上げる垣根。
手をひらひらと振りながら、もう片方の手で扉のノブを手に取った所でふと止まる。
顔だけ当麻に向けると、垣根は友人に向けるような笑みを浮かべた。

「上条、お前が困ってたら今度は俺が駆けつけるぜ」

「え？」

「あぁ、お前が迷惑だって言っても勝手にやるからなー。覚悟しとけよー」

「それじゃまたな上条」

そう言うと、今度は当麻の返事を待たず垣根は病室から出ていった。
呆然としていた当麻だが、少しして笑みを浮かべるとポツリと呟いた。

「ああ……またな垣根」

全てを話し終えた垣根は、深く深く息を吐き出した。
しかしその表情はどこか満足気であった。

「これが俺の知っている絶対能力進化実験だ」

つとめて明るく語る垣根だが、その表情はとても暗かった。
これから二人に嫌われるかもと思うと、気分が晴れる訳もなかった。

「……滝壺の体を壊したのは俺だ。そして俺は当麻を殺そうとした」

まるで裁きをしてほしいと願っているかのように、垣根は罪の告白をする。
自分がどう思おうと、彼女たちがどう思うかは彼女たちにしかジャ

ッジを下せない。
だから垣根は全てを語った。何一つ隠さずに……。
その二人はただ黙って垣根を見ていた。
呆れるわけでもなく、まして蔑むわけでもなく。
ただじっと垣根を見つめていた。

「それで、私にどうして欲しいのですか？」

「お前が感じた事、思った事を俺にぶつけて欲しい」

「……そうですか。では、目を瞑ってて下さい」

コキコキと腕を鳴らしながら優菜は言う。
きっつい一撃がくるな、そう思いながら垣根はゆっくりと目を瞑った。
しかし垣根の表情に、恐れも怯えも見えない。
一点の曇りも見えないほど、静かな表情をしていた。

「では、行きますよ」

ザッと地面を踏む音がした。
その音だけで、優菜が構えている事を垣根は理解した。
ゆっくりと優菜の手が上がる音がする。

（ビンタか。ちょっとシャレにならん痛みかもな）

どこか呑気に垣根は思った。
そして風を切る音が垣根の耳に届く。

同時にクスリと誰かが笑った声が聞こえた。

「ふおっ」

いきなり鼻を摘まれて、垣根は思わず素っ頓狂な声を上げる。
目を開いて状況を確認すると、心理定規と優菜が優しげに微笑んでいた。

「貴方は私を馬鹿にしているのですか？」

「ふおっ……そんなつふぉりはねぇ」

鼻を摘まれているせいでうまく言葉にならない。
しかし垣根が何を言っているのを理解しているか、優菜と心理定規は同時に頷いた。

「帝督、私はね……ううん、私たちは帝督を裁く気なんてないわよ」

「そもそも私たちが裁きを下す必要があるのですか？」

「そうだね。もし帝督が裁きを受けないといけないなら、帝督を信じられなかった私にも罪があるね」

「その時駆けつけられなかった私にも罪はありますね。当麻を危機から守る、なんて言いながら全然守れていませんから」

垣根はその言葉を聞いた瞬間、心の中から何かがストンと落ちた感覚を味わった。
肩の荷が下りるとはこの事を言うのだろう、何となく垣根はそう思った。

「私は貴方の過去に対して何か言うつもりはありません。貴方が当麻を傷つけたとしても、それはもう終わった話。今の貴方は当麻の友達ではないのですか？」

キュッと鼻を少し強めに摘んだ後、優菜はそう言って手を離した。
少しだけ痛みがあったが、今はその痛みが垣根にはありがたかった。

「私も当麻に言われたのですよ。道を間違えたからといって、そのまま道を間違え続ける必要はない。道を引き返して、今度はちゃんとした道を歩めばいい。そう言われましたよ」

「……そっか、そうだよな」

「帝督、今度は間違えないわよね？」

静かに尋ねる心理定規を見ながら垣根は力強く頷く。
それを見た心理定規は、優しげな笑みを浮かべる。

「なら何も問題はないわよ」

「そうですね。何も問題はないですね」

二人は笑みを見て、垣根は改めて誓う。
この笑顔を失いたくない、必ず守りきってみせる。
そして今度こそは、影花と紅音に誇れる守り方をしよう。
そう垣根は誓った。

「うっしゃあ！　湿っぽくて真面目な話は終わり！　時間もあるしどっか遊びに行くかー」

努めて明るく声を上げる垣根。
彼は本当に大切なものが何かの答えを、遠回りしたがやっと見つける事が出来た。
答えを見つけた時の垣根は、誰もが見惚れるほどの男らしい表情をしていた。

後日、垣根は今まで尋ねなかった場所を尋ねる。
その場所とは、今も尚寮の管理人を務めている紫穂の所だった。

再会してまず全力で殴られた。
次に今まで心配させた罰としてビンタを貰った。
そして最後に力いっぱい抱きしめられた。

「遅いんだよ、馬鹿」

あの時と殆ど変わらない顔立ちで、紫穂は泣きながら言葉を紡ぐ。
ヒリヒリと痛む頬と暖かな温もりを感じた垣根は、気付いたら涙を流していた。
涙もろくなったな、そんな事を考えながら紫穂の抱擁に垣根は身を委ねる。

「さぁ、今まで何していたかきっちり話してもらうよ」

努めて明るく言いながら紫穂は垣根の背中を叩く。

紫穂の言葉に頷くと、垣根は懐かしき部屋で紫穂に全てを話した。
影花と紅音の事、その後自分が何をしていたのか。
心理定規はどうしているのか、その全てを。
流石に暗部組織の事は語れなかったが、それ以外は全ての事を語った。

「……そっか」

やがて全てを語り終えた後、紫穂が言った言葉はたった一言である。
その他は何も尋ねようとしない。ただ黙って優しく微笑んでいるだけだった。

「腹減ってるだろ。待ってろ、お前の好きなカレーを出してやるよ」

事前に垣根が尋ねる事を知っていたのか、それとも単に偶然なのか。
それは分からなかったが、紫穂はそう言った後すぐにカレーを皿に盛った。
目の前に置かれた大盛りカレーを見て、垣根はスプーンを手に取る。
そしてゆっくりとカレーを口に入れた。

カレーの味はとても懐かしい味がして、そして同時に少しだけしょっぱい味がした。

守る為の力（後書き）

垣根の過去編　完結です。
次話から一方通行の過去編に突入。

二年前の出逢い

「はァ……酔っ払ったから回収しろと」

携帯電話から聞こえた言葉に、一方通行は幾分呆れた感じで呟く。

「そうなんですー。先輩も一緒に酔っ払っていてどうしようもないんですー」

電話の向こうから悲鳴のような泣き言が聞こえる。

どうやら本当に困っているらしく、その声はかなり必死な感じであった。

二回ため息を吐き出すと、一方通行は面倒臭そうな口調で言う。

「分かった。小萌は俺が連れて帰るから、テメェは黄泉川の方を何とかしろ」

「た、助かりますー」

「あーあー、気にすンな。取り敢えず今から向かうから待ってろ」

そう言うと一方通行は通話を切る。

最後の方に悲鳴が聞こえた気がしたが、多分黄泉川が何かしたんだろうと判断した。

適当な上着を羽織ると、一方通行はちょうど通りかかったアリシアに声をかける。

「小萌が酔っ払ったそうだ。迎えに行ってくるから後は頼ンだ」

「分かった。ああ、朝帰りしても気にしないから、存分に楽しんでこい」

その言葉に噴きだした一方通行。
そんな一方通行の表情を見て、アリシアはニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべていた。

「まぁ留守は任せろ」

ひらひらと手を振りながらリビングに入っていったアイシアを見て、一方通行は重いため息を吐く。
何だか最近、この手のからかいが増えたような気がする。
特にクリスマスを過ぎてから、からかいの回数は格段に増えていた。

「何だかなァ……」

そう呟いた後、一方通行は小萌の元に向かった。
能力で飛んで行こうと思ったが、そんな気分でもなかった一方通行は素直にタクシーを利用した。
小萌が黄泉川たちと飲んでいる場所は、決まってレトロな屋台だった。
どういう営業をしているのか分からないが、何故か屋台が潰れるような気配はない。

「……雨……かァ……」

タクシーの窓からふと外を見ると、ポツポツと雨が降っていた。
それほど大きな雨ではなかったので、車の窓に小さな水滴がつく程度だった。

「……もうアレから二年……たったンだよなァ……」

柔らかめの後部座席に背中を預けると、一方通行は目を瞑る。
二年という年月だが、今でも昨日のように思い出せる。
そう……小萌と出会ったのも、確かこんな小さな雨の日だった。

二年前の学園都市。
その頃の一方通行はただ孤独な毎日を過ごしていた。
朝から晩まで言われるまま実験に付き合う。
実験がない日で学校に行ったら、誰もが畏怖と恐怖の目で自分を見る。
同じ年齢のやつも、年上の教師もそれは変わらなかった。
当然ながら休日に誰かと遊ぶような事などなく、ただ家に引きこもるか散歩をするだけだった。

第二位と第七位は知らないが、それ以外の超能力者は誰かと付き合いがあると聞いていた。
その話を聞いた時、一方通行は素直に羨ましいと思った。
数少ないとはいえ誰かと繋がりがある事は、彼にとっては喉から手が出るほど欲しい物なのだから。
人との繋がりが手に入るなら、能力など無くなってもいい。
そう考えるほど、当時の一方通行は人との繋がりを渇望していた。

ある時、待っているだけでは何も起きない。
自分から行動しなくては、そう思った一方通行は思い切って行動に

出る。
だが結果は最悪だった。
誰に話しかけても怯えられ、無理に近づこうとすれば能力で傷つけてしまう。
それが連鎖的に続き、やがて一方通行の周りには傷ついた人しかいなかった。
呆然と立つ一方通行。その周りでうめき声を上げる人たち。
地獄図絵だった。これは夢だと思いたくなるぐらい悲惨な世界だった。

それからどこをどう歩いたかは覚えていない。
気が付いたらどこかの細道で、薄汚れたコンクリート癖を壁に座り込んでいた。
全身をだらりとさせ、ただ虚空を眺めるような瞳で前を見ていた。
だがその瞳は、何もうつしていなかった。

「クソッタレ……クソッタレェ……！」

憎いと思った。
ただひたすら理不尽で不条理な世界が、誰とも繋がれない能力が疎ましかった。
全てを破壊すれば何も感じなくなるのでは、そんな黒い衝動に襲われかけた。

「傘をささないと風邪をひきますよー？」

そんな時だった。全く悪意も敵意もない声をかけられたのは。
無気力状態に近かった一方通行は、億劫そうな感じで顔を上げる。

「先生の声、聞こえてますかー？」

そこにいたのは全身ピンク色の少女だった。
見た目は自分より少し下、もしかしたら園児の可能性すらある。

「……ハッ、テメェは誰を心配しているンだ」

嘘だ、本当は嬉しいはずだ。
そう思いながらも、一方通行は悪態をつく事を辞められない。
黒い衝動を吐き出すように、一方通行はただ自分の不満を口にし続けた。

普通なら嫌悪感を抱いて立ち去るだろう、そう思えるほどの言葉。
だがピンクの少女はただ黙って一方通行の言葉を聞いていた。
一方通行があらかた言い終えた後、黙っていた少女はこう言った。

「家出ですかー？　でしたら私の家でしたい事が見つかるまでいるといいですよー」

何かを感じたのか、結局はピンクの少女に言われるままついていく事にした。
気まぐれ、もしくは単なる興味本位なのかもしれない。
こんな小さな子を外に放り出す親の顔が見たい、そういう思いもあった。
まもなくして、それらの期待や考えなどは木っ端微塵に吹き飛んだ。

「大人ァ？」

超ボロい木造二階建てのアパートの前で、ピンクの少女はそう言った。

本人曰く、これでも大人で仕事もやっている。

今日は仕事で遅くなっただけ、そういう事らしい。

「……大人……だと？」

「あれー？　何でそこで疑問形が入るんですかー？」

ピンクの少女は可愛らしく首を傾げる。

一方通行はもう一度目の前の少女をじっくり見つめる。

園児服にしか見えない服装、身長はどう見ても百四十センチ以下。

童顔の顔つきに、色気とは無縁のスタイル。

世間一般で言う『合法ロリ』という部類に入る存在にしか見えなかった。

「まさかコレが『二百五十年法』の実態ってトコか。世界の裏の裏まで知ったつもりでいたが、俺は井の中の蛙だったみてェだ」

「何が言いたいか分かりませんが、何となく馬鹿にされている気がします」

子供のように頬を膨らませながら、ピンクの少女は抗議の言葉を口にする。

実際その表情も仕草も、大人とは思えないぐらい幼さがあった。

「まぁいいです。そういえば、お名前を伺っていません。名前はなんて言うのですか？」

「……一方通行」

吐き捨てるように一方通行は言った。

苗字は二文字、名前は三文字のごくありふれた名前が本名だった。

だがいつしか自分をさす名前は、能力名と同じ『一方通行（アクセラレータ）』となっていた。

そしてこの名前を聞いた後、学園都市に住む人間が取る行動はたった一つだった。

（どうせコイツも、俺の名前を知って態度を変えるンだよなァ）

罵声か？　それとも怯えながら逃げるのか。

そんな事を思っていた一方通行だが、予想に反して罵声も怯えの声もこなかった。

「一方通行って名前ですか。でしたら一方ちゃんですねー」

ガチャガチャと鍵を差し込んみながらピンクの少女は気軽に言った。

一方通行は呆けた顔をする。

今までそんな事を言われた事も、ましてやあだ名みたいなのを付けられた事もなかった。

ピンクの少女は鍵を開け終えると、一方通行の方に顔を向けて言った。

「私の名前は月詠小萌です。これでも先生なんですよー」

その顔に浮かんでいた笑みは、とても優しくそして暖かかった。

何やらルンルン気分で入っていった小萌だが、突然玄関でピタリと動きを止めた。
何があるんだ？　と思って部屋を覗いてみると凄い惨状が目に入ってきた。

「大人な教師……なァ？」

ビールの空き缶が床に散らばっていて、そして灰皿のタバコが山盛りである。
はっきりいって中年の親父みたいな部屋だった。

「ちょ、ちょちょちょぉーっとお待ちください！」

流石に恥ずかしいのか、小萌は嫌な汗を流しながら一方通行の前に立ち塞がる。
その様子は、中を見るなと言っているように見えた。
だが一方通行は気にせず、小萌をぐいっと横に押す。

「別にロリの部屋がどうでも俺には関係ねェよ」

元よりタバコの煙だろうが何だろうが反射してしまう一方通行だ。
流石に今は演算をオフにしているが、それでも眠れば大体オートで演算するだろう。

「いや別に先生は、部屋がすごい事になっている事を気にしている訳ではなくてですねー！」

背後から聞こえる小萌の言い訳を無視して、一方通行は勝手に部屋へ入る。

部屋を一瞥して一方通行は頭を抱えた。

何というか本当に競馬好きのオッサンでも住んでいるのかと思える部屋だった。

畳はボロボロだし、ビール缶はそこら中に散乱しているし。

銀色の灰皿には煙草の吸殻が山盛りにされていた。どうやって盛ったか気になるぐらいだった。

部屋の墨にどこから手に入れたか気になるほど、レトロな黒いダイヤル式の電話が見えた。

トドメは部屋の真中にある頑固親父がひっくり返しそうなちゃぶ台である。

「なァ……どうやったらこンな部屋に住めるンだ？」

普段は気にしないが流石にこの部屋は危険過ぎないか、と小萌が心配になった一方通行である。

「あ、あのー……こんな時に言うのも何ですけど、煙草を吸う女の人は嫌いなんですー？」

「いや別にいいンだけどよォ……」

それを問題にしてるんじゃないんだが、まぁいいかと一方通行は思った。

「ちっとのいてなァ」

小萌を手で後ろに下がらせると、一方通行は演算を開始する。
何が何だか分からないが、とにかく下がっていた方がいい、そう思った小萌は大人しく下がる。
演算が終わると、一方通行は腕を軽く振った。

「お……おぉ……」

その光景に気圧された小萌は、驚愕に目を見開いた。
何せ空き缶が自然と転がっていき、全てが部屋の墨にまとめられた。
灰皿に入っていた煙草は、踊るように全てゴミ箱に入っていく。
十秒もしないうちに、小萌の部屋は見違えるように綺麗になっていた。

「これが超能力者の力だァ」

意地悪っぽい笑みを浮かべて一方通行は言葉を口にした。

白い少年と小さな大人

目を開けたら飛び込んできたのは見知らぬ天井と、覚えのない少女の顔だった。
一瞬何が起きたか分からなかった一方通行だが、すぐに思い出す。

（あァ……そういえばロリの家に泊まっているンだよなァ……今日で四日ぐらいだったかなァ）

ぼんやりとしながらも現状を理解すると、一方通行はもう一度目を閉じる。
とりあえず眠いから、もう一度寝よう。いわゆる二度寝をしようとした。

「わー！　寝ちゃダメですよー。もう朝ですよー」

だがそれを実行しようとすると、小萌の慌てたような声が耳に届いた。
音を反射しておこうか考えた一方通行だが、そうした場合は意地でも起こそうとするだろう。

「……俺に構うンじゃねェ」

常人なら萎縮してしまいそうな視線を、一方通行は小萌に向ける。

「朝だからおはようですよ、一方ちゃん」

しかし小萌は、一方通行の視線に笑顔でそう言った。

「おはよぅ……」

「はい、おはようです。もう朝ごはん出来ていますよ」

一方通行の視線を受け止め、更にはにっこりと微笑む小萌。

そんな小萌が眩しくて、一方通行は視線をちゃぶ台の方に向ける。

言葉通り既に二人分の朝食が用意されていた。

面倒に思いながらも一方通行はのそのそと起き上がる。

「ふァ～……なンかタイムマシンに乗った気分だ……」

ちゃぶ台の上にはこれまた昭和世代の朝食がのっていた。

ご飯と味噌汁とおかずが数品という献立である。

「意味は分かりませんが、男の子ですからしっかりと食べましょうー」

「あァ……やっと納得したンだ。昨日はアレだけ女だって騒いでた癖に」

「ま、まぁその事は忘れましょう」

わたわたと焦っている小萌を見て、一方通行はニヤリと笑った。

「『だ、ダメですよー。先生は先生なんですからー』」

小萌の声をそっくり真似て一方通行は言葉を口にする。

その瞬間、小萌は瞬間湯沸かし器のように耳まで真っ赤になっていた。

「なンて言っていた大人な女性は誰でしたかなァ」

「そ、そそそそそれは忘れるのですー！」

両手を上げて抗議する小萌を無視して、一方通行はすたすたとちゃぶ台の前に座る。

（悪くねェ……）

座った一方通行は薄く笑いながら思った。

色々とあったが、徐々にどのぐらいの距離感がいいのか掴み始めた。

最初は掴みづらいだろうと思っていた。

しかし実際に生活をしてすぐにコレという距離感を、一方通行は本能的に掴んだ。

今ではすっかりこの距離感が定着している。

「まぁロリ、さっさと飯にしようぜェ」

「ロリじゃないです。私の名前は小萌ですよー！」

すっかり変なあだ名をつけられた事に、小萌はまたしても抗議の言葉を口にする。

何とか撤回して欲しい気持ちはあったが、一方通行にのらりくらりとかわされ続けていた。

「いただきます」

「わー！　酷いです、一方ちゃん！　先生を無視して一人で食べないで下さいー！」

食べる気はなかったが、両手をあわせて食前の挨拶をすると小萌は慌てて自分の席に座った。
その表情から、一緒に食べるのだ、そういう想いがヒシヒシと伝わってきた。

「……はン、馬鹿らしい」

そんな悪態の言葉を口にしても、笑みを浮かべる事を止められなかった。
拒絶する言葉と、繋がりを求める心。
相反する状態が今の一方通行の周りに渦巻いていた。

「それじゃあ、いただきます！」

「ごちそうさまでした」

「ちげぇ！　食前の挨拶は『いただきます』ですよー！」

一方通行のボケへ即座に突っ込む小萌。
何だかオシドリ夫婦みたいに見えるのだが、その事には二人とも気付いていなかった。

「おいおい、あンまり騒ぐなよ。近所迷惑だぜ、じゃいただきます」

「……何だかからかわれている気がします。いただきます」

両手をあわせて食前の挨拶をすると、小萌と一方通行は食事を開始する。
暫くは無言で食事を取っていたが、突然一方通行が箸を置く。

「つーかよ、別に飯なんて用意しなくてもいいンだぜ」

一日たって分かったが、小萌は何故か一緒に食事を取ろうとする。
昨日の晩、夜は適当なファミレスで食べてきたら烈火のごとく怒られた。
何となく理不尽さを感じたが、別に嫌だとは思わなかった。

「いえいえ、先生ですから当然ですよ。一方ちゃんも私の生徒さんです！」

小萌の中で子供イコール生徒イコール自分の生徒、という図式が出来ているらしい。
どういう理論の飛躍だ、そう思ったがあえて突っ込まない事にした。

「食い物なンざ、どこで食っても一緒だと思うンですがねェ」

そう言って再度箸を取り食事を再開する。
腹に入れば勝手に危険なものとそうでないものを切り分けてしまう。
だから何を食べようと、結局は必要なものしか取り込まれない。
そんな一方通行だからこそ、食事は栄養補給という側面しか捉えていなかった。

「こうやって一緒に食べるのがいいのです」

「……そンなものかねェ」

「一方ちゃんも、そのうち分かりますよー」

食事については譲るつもりはないのか、小萌の態度は一向に軟化しなかった。

結局一方通行が折れる方で決着はつく。

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

「だから何で一方ちゃんが言うのですかー！」

プンスカと怒る小萌、ソレを見てニヤニヤと笑う一方通行。

食後の挨拶もコントを繰り広げている二人だが、突然小萌が慌て始めた。

「いけません！　急がないと遅刻しちゃいます！」

「あァ？　つーかこの部屋時計がないけど、今何時だァ？」

「7時半ですね」

一方通行の言葉にサラっと小萌は答える。

余りに迷いがない為に、一方通行は呆けた顔をする。

「先生の体内時計は秒単位で正確なのです。だから時計なんていりません」

「……まァいいンだけどよ」

突っ込むのも馬鹿らしいと思ったのか、一方通行は頭をかきながら答える。

「さて先生は学校に行って来ます。一方ちゃんもちゃんと学校に行

くのですよー！」

本当に急いでいるのか、小萌はそう言った後慌てて部屋を出ていった。

カンカンと階段を降りる音がした後、少しして車が走っていく音が聞こえた。

「さて……寝るか」

暫くして一方通行はポツリと呟いた後、再び睡眠を取るために床へ寝転んだ。

「困りましたー」

「どうしたじゃん、小萌先生」

同僚の先生が頭を抱えて唸っているのが気になったのか、緑色のジャージを着ている黄泉川が小萌に声をかける。

その声を聞いて、小萌は唸りながらも顔を上げた。

「えっとですね。実は家出の子をウチに泊めているのですが……」

「またいつもの趣味？　今度はどんな少女をさらってきたじゃん？」

「……男の子なんです」

「は？」

一瞬、小萌が何を言っているのか理解できなかった黄泉川は、呆けた声を上げて首を傾げる。

「見た目がワイルドな女の子だと思ったら……男の子だったのですー」

「おいおい、大丈夫かじゃん。いくら小萌先生の見た目がコレでも、流石に年頃の男を泊めるのは良く無いじゃん」

ペシペシと小萌の頭を叩きながら、黄泉川は少しだけ真剣な顔をして言葉を発する。

確実に馬鹿にされていると分かっているが、今はそれより気がかりな事が小萌の頭を占めていた。

「いえ、そこは大丈夫です。問題はあの子が学校を行きたがらないのですよ。だから今頃二度寝をしているのではと……」

「あー大丈夫なんだ？　でも、何かあったら教えるじゃん」

「ありがとうございます、黄泉川先生。まぁ困っているといえば、随分とからかわれている事だけですねー」

そう言って小萌は今朝のやり取りを黄泉川に説明する。

黄泉川は最初難しい顔をしていたが、だんだんと意地の悪い笑みを浮かべ始めた。

「……というわけなんですよ。って何が楽しいのですか、黄泉川先生

？」

「いやぁ小萌先生、何というかそれって凄い会話じゃん？」

「どこがですかー？　単に私がからかわれているだけですよー？」

黄泉川が何故意地の悪い笑みを浮かべているのか、どうして楽しそうに言うのか小萌には分からなかった。

首を傾げて黄泉川に尋ねるが、黄泉川はただニヤニヤと笑うだけだった。

（どう聞いても夫婦漫才にしか聞こえないじゃん）

最初は年頃の男の子と一緒という事に心配したが、聞こえてくる話は単なる惚気話にしか思えなかった。

（気付いているかじゃん。小萌先生、とっても楽しそうに語っているじゃん）

やや怒り口調でも、口元は笑みを浮かべている小萌。

きっと今の生活を楽しんでいる、小萌の態度から黄泉川はそう感じ取った。

二週間目

小萌が一方通行と暮らし始めてから一週間ちょっとが経過した。
その間、一方通行は学校に行かない所か実験すらサボるようになっていた。
理由は小萌の家がとても居心地よく、外出するのが億劫になっていた。
何だかダメ人間にしか聞こえないのだが、一方通行は学園都市最高峰の頭脳を持っている。
よって学校に行かなくとも問題はない。

「あァ……クソダルイなァ……」

ソファーの上でダラダラしながら一方通行はボヤく。
オンボロ木造家屋に似つかわしくないソファーだった。
その空間だけ切り抜かれたかのように、全く異質な空間を醸し出していた。
通販で買ったそうだが意外と心地いいようで、一方通行はよくソファーの上でだらけていた。

ちなみにお値段は小萌の給料一ヶ月分を軽く上回っているが。

「やべェ……心地よすぎて動きたくない」

ニートまっしぐらな台詞を零しつつ一方通行は目を瞑る。
すぐに眠気が襲ってきたので、その眠気に一方通行は身を委ねた。

「こらー！　いつまでだらけているのですかー！」

もうちょっとで眠れる、そんな時に少女の声が聞こえた。
目を開けなくても誰か分かっている一方通行は、そのまま寝たフリをしようと考えた。

「随分とだらけているじゃん。別の意味で大丈夫じゃん？」

その時、見知らぬ女性の声が一方通行の耳に届く。
流石に知らない女の前で寝続けるつもりはなく、渋々だが一方通行は目を開けた。

「お、目を覚ましたじゃん」

上下緑色のジャージを着た、小萌とは全てにおいて正反対の人間が顔を覗き込んでいた。
ジャージ姿なのに妙な色気を醸し出し、美人と言っても差し支えない顔立ち。
スタイルも抜群で、モデルと言っても信じられるほどだった。

「……誰だテメェ」

「随分な挨拶じゃん。名前を尋ねるなら、まず自分から名乗るじゃん」

「チッ」

舌打ちをした後、一方通行はのそのそと体を起こす。
寝たままでもよかったが、その場合はまたお小言みたいなのを貰うかもしれない。
そう思ったので一方通行はソファーから起き上がった。

「一方通行。超能力者で序列は第一位だ」

サラっと一方通行は自分の名前を名乗る。

下手に隠すよりは、さっさと正体をバラして相手の動向を見ようと考えた。

緑ジャージの女がどうでるか、一方通行はあれこれ脳内で予想を立てる。

「知ってるじゃん」

だがその予想のどれにもヒットしない答えを、緑ジャージの女は答えた。

「……知ってるンならいちいち尋ねるンじゃねェ」

よくよく考えれば小萌と一緒にいる人物だ。

自分の事を小萌から聞いていてもおかしくはない。

今更ながらその事に気付いた一方通行は、軽く舌打ちをする。

「まぁこういうのは挨拶みたいなもんじゃん。私の名前は黄泉川愛穂。小萌先生とは同じ学校の教師じゃん」

「……本当に教師だったンだ」

実は今さっきまで疑っていた一方通行だった。

色々と状況証拠らしきものはあったが、決定的な証拠を見たわけではない。

なので小萌が教師というのを、信じきれていなかった。

「何でそこを疑っていたんですかー！　ちゃんと免許証も見せたじ

ゃないですかー！」

「子供が大人ぶっているだけと思っていました」

怒る小萌に一方通行はしれっと答える。

「こらー！」

「ははは、まぁまぁ小萌先生。今日はそんな事を言いたいわけじゃないじゃん？」

「うぅ……先生はいじられキャラじゃないですー」

「……その前に随分といいソファーじゃん。一体いくらしたじゃん？」

何か話そうとした黄泉川だが、その前に一方通行が座っているソファーが気になった。

それなりにブランド物だと思えるほど、そのソファーはいい出来だった。

まぁそこそこ高級品、黄泉川はその程度に捉えていた。

「百三十五万円」

だから値段を聞いた時、何桁か間違えてないかと黄泉川は思ってしまった。

小萌に至ってはそんな値段のソファーなど一度としてみたことはない。

二人揃って情けないような、呆けたような表情で一方通行を見ていた。

「は、はぁぁぁぁー！？」

理解の追いついた黄泉川が素っ頓狂な声を上げる。
小萌はまな板の魚みたいに口をパクパクとさせているだけだった。

「一括払いでェす」

「百三十五万円とかふざけてるじゃん！　なんつー金銭感覚をしてるじゃん！？」

「だって超能力者だしィ」

「そ、そそそそれでも百三十五万はやりすぎです！」

持ってきた時から妙に高級そうだなと思っていたが、まさか百万を超えているものとは小萌も予想外だった。
今まで普通に扱ってきたが、値段を聞いてから途端にソファーが威圧感を放っているように感じる。

「おいおい、俺は正しい経済活動してるンだぜェ？」

「そのぶっ飛んだ金使いのどこがじゃん……」

「わっかンねーのかよ。こンなの経済の初歩だぜェ？」

そう言うと一方通行は盛大にため息を吐く。
面倒くさそうに頭をかきながら、黄泉川と小萌を一瞥すると言葉を発する。

「これはちゃンと実験の報酬で得た金だ。別に汚い真似した訳じゃねェ。それでよォ、金持ってる奴が使わないと、金が回らないンだぜ？」

「お金が金持ちの所で止まってると、世間に出ずに止まったままだァ」

「体で例えると動脈硬化状態だなァ」

「だからそうならないように、金がある奴は一定額を使った方がいいンだよ」

「で、何か文句あるかァ？」

色々と飛ばしているが言っている事は至極まともだった。
その為、黄泉川と小萌は何も言い返せなかった。

超能力者は学園都市に莫大な恩恵を与えている。
その中でも、一方通行は序列が第一位。
つまり学園都市の中で、能力による利益が一番大きい存在だと言える。
そんな相手に支払う報酬もまた、常人には理解しがたいほど莫大な報酬なのだろう。

「（どうするじゃん。このままじゃコイツの思い通りだじゃん）」

「（そうは言っても、今のは反論が出来ません。仕方ありません、ここは一旦退くべきです）」

「（分かったじゃん。まぁ今日の所は適当に飲んで帰るじゃん）」

何やらヒソヒソと話し合っている二人を一瞥すると、一方通行はそのままソファーに寝転ぶ。
やっと静かになる、そう思った一方通行だがそれは甘かった。

「さて、今日は屋台のおっちゃんが休みだしここで飲むじゃん」

「……は？」

今度は一方通行が我が耳を疑う番だった。
慌てて起き上がると、既にちゃぶ台の上には酒の肴がいくつかのっていた。
完全にここで宴会を始める気だ。

「おいおい、ここで宴会を始める気かよォ」

「まーまー気にするなじゃん。今日は色々と聞きたい事もあったじゃん」

「いや俺の家じゃねェからいいンだけどよォ」

家主が連れてきたという事は、その事を問題にしていないという事である。
よって居候に近い一方通行が文句を言えるはずもなく。
ただ何となく本能的に言わないといけない、そう思って黄泉川に突っ込んだ。

「程々になァ……俺は寝る」

何度目か分からない睡眠を取ろうとしたら、突然襟首を掴まれた。

「お前が今日のメインディッシュじゃん。今日はとことん白状してもらうじゃん」

「……お前酔っ払ってるのかよ？」

「まぁまぁ、これもコミュニケーションの一つです」

ダルそうな表情をしていた一方通行に、台所から戻ってきた小萌がそう言う。

手には大きなお盆を持っており、その上に酒の肴らしき物が数点のっていた。

「いや待て。その言い方だと俺がコミュニケーション障害者に聞こえるンですが？」

「あれ？　対人恐怖症だから学校行ってないんじゃないのかじゃん？」

「おいこらァ！　どうしたらそンな素敵な考えを持てるンですかァ？」

「そういう事だったのですか。だったらちゃんと言ってくれればよかったですー」

今まで学校に行っていない理由がやっと分かった（盛大な誤解だが）小萌は、ニコニコととてもいい笑顔をしていた。

手間のかかる子ほど大好きな小萌である。

問題が分かれば、それをどうやって乗り切るかやる気満々で考えるだろう。

「いや待てよ、おい！　俺は超能力者だぞ？　第一位だぞ？　学校で習う事なンざとっくの昔に習得済だァ」

「でも対人関係はボロッボロっぽいじゃん」

「オーケー黄泉川、テメェ俺に喧嘩売ってるンですねェ？」

黄泉川の言葉にピクピクとこめかみを痙攣させる一方通行。
今にも黄泉川に殴りかかろうと立ち上がる。

「だってお前友達いなさそうじゃん。学生のうちに出来た友達は一生の宝ものじゃん」

「……」

だが『友達』という単語を聞くと、一方通行は息を吐き出した後、力が抜けたかのように床へ座った。
一方通行の態度が急に変わった事に、黄泉川と小萌は首を傾げる。

「友達ィ？　ハッ、出来るなら俺も欲しいよ……けどよォ、無理なンだよ」

遠くを見るように目を細めて、だけどどこか翳りのある瞳を浮かべる。
その表情は、まるで知らない場所に取り残された子供のようにも見えた。

「……誰も俺を見ていねェ……俺につくのは『第一位』だの『学園都市最強』だの、そういうレッテルばっかりなンだよ」

ポツリポツリと一方通行は言葉を紡ぐ。
たまたまなのか、それとも黄泉川も小萌と一緒で『一方通行』を見ていたからなのか。
心の中にある黒い感情と、少しばかりの弱音を言葉にして吐き出していく。

「学校にいる生徒も、教師も、研究者たちも、誰も俺を怪物扱いだ……特別にイカれた白衣の連中らですら……な」

特別にイカれた白衣の連中という言葉に、黄泉川がピクリと反応する。
その動きを見て、黄泉川は何を意味しているかはっきりと理解していると一方通行は思った。
反対に小萌は何の事か分からず、ただ首を傾げているだけだった。

（別に『特力研』や『虚数研』の事を知る必要はねェ……）

連中らが『置き去り（チャイルドエラー）』をどういう風に扱っているか、知ればきっと小萌は悲しむだろう。
わざわざ悲しませる必要もない。
そう思った一方通行は、それ以上は何も説明しなかった。

「俺に寄ってくるのは、俺を倒そうと考える半端な馬鹿能力者たちだけだ。でも馬鹿連中らが俺に勝てる訳ねェ……結局傷つくのは馬鹿連中だけって事だ」

「たまに研究者たちが俺に近づいてくるンだが……」

「誰もが同じ反応をする。俺を怒らせたくない、そう顔に書いてい

た」

「どれだけ待遇が格別になっても一緒だ」

そこで一方通行は言葉を区切る。

最初は自分語りをする一方通行に興味を示していたが、今は二人共真剣な表情をしていた。

その表情を見て、安易な考えで聞いている訳ではない。

そう一方通行は理解した。

「決して溶けこむ事のない距離感。表からも暗闇からも拒絶された存在」

だから一方通行は語った。

「それが俺なンだよ」

自分がどれほど危険な存在として、学園都市に存在しているのかを。

悪魔的な研究者すら恐怖する自分を、一方通行は虚しさを抱えながら語った。

第一位という壁

言い終えた一方通行は、深いため息を吐いた。
まるで溜まっていたものを全て吐き出すかのように。
辛いことと楽しい事を全て忘れるかのように。

（どうせ一箇所に二ヶ月もいられなかったンだ。またいつもの様に一人になるだけさ）

明日には出ていこう、そう一方通行は考えていた。

「怖いのですか？」

だから最初、小萌が何を言っているのか分からなかった。
だけど本能的に、一方通行は顔を小萌の方に向ける。
鋭い赤い瞳が小萌を捉える。
その視線を受けても、小萌の表情は微動だにしていなかった。
逆に小萌の表情を見た一方通行の方が、僅かばかりに動揺していた。

「一方ちゃん、貴方は怖いのですか？」

その表情を一方通行は一度として見た事はない。
食事をしている時でも、雑談している時でもない。
今の一方通行が持つ接点では、一度も見る事のない表情であった。

「ハッ、俺は学園都市最強だぜェ。何に怖がるっていうンだ？」

「人の好意」

一方通行の言葉に小萌は迷いなく言い切る。
一変の迷いも見せない姿に、一方通行は言うべき言葉を失った。
そんな一方通行に、小萌はまた尋ねる。

「一方ちゃん、貴方はどちらなのですか？　人との接点を持ちたいのか、それとも持ちたくないのか」

「……持てるなら持ちてェよ。だがよォ、一円の為に一億の負債を抱えてもイイって奴なんざ、誰もいねェンだよ」

一方通行の『関係者』になるという事は、一方通行が抱えている闇に関わりを持ってしまう。
超能力者という存在を、第一位という存在と関わるという事はそういう事の意味も持つ。

「好意を向けるだけで虚しい思いをするンだったら、最初から何も期待しねェ方がイイ。そう考えるのが自然じゃないかァ？」

「だったらどうして……どうして一方ちゃんは、そんなに泣きそうな表情をしているのですか？」

その言葉を聞いて一方通行はハッとなる。

自分が泣きそうな表情をいている？　そんな訳がない。
だけど何でだ。どうして言葉を口にする度に胸が痛むんだ。
何故だ。どうしてだ。どうして辛いなんて思ってしまうんだ。

一方通行は答えのない迷路みたいな思考に陥る。

「一方ちゃんが抱えている存在を、今の先生はちゃんと理解してい

ないでしょう」

そんな一方通行へ小萌は語りかける。

「ですが先生は教師です。一方ちゃんが辛いのなら、先生は生徒を守るために全力を尽くします」

その声は優しくも厳しさが混じった声色だった。

「何の説得力もありませんが……今だけは先生を信じて下さい」

そこでやっと一方通行は理解する。

「先生は絶対に一方ちゃんを裏切りませんから」

今の表情の小萌を表現する時、どういった言葉を使うのが正しいのか。

彼女がこのような表情をするのは、一体どういう時にするのかを。

（そっか……これが……小萌『先生』って奴かァ）

この日、一方通行は初めて『教師』という存在に出逢った。

結局壁を作っていたのは自分、その事に一方通行は気付いた。

例え誰が近寄ってきても、自らが壁を作っていては繋がりなど手に

入るはずもない。

（馬鹿だなァ、俺は……）

そんな簡単な事に、今まで気付かなかった自分を笑う。

（結局、俺は逃げていたンだ。傷つきたくない、だから関係を持ちたくない）

頭は人との繋がりを欲しているのに、心は傷つく事を恐れて繋がりを絶とうとする。

矛盾だった。それも救えないほど馬鹿な矛盾だ。

「あァ……そうだな。アンタを信じてみるよ、『小萌先生』」

もう無様に逃げるのは止めだ。今日からは立ち上がって立ち向かおう。

そう一方通行は心に決める。

「ありがとうです、一方ちゃん」

ニッコリと小萌は笑う。その笑顔は、生徒が成長して喜ぶ教師の表情だった。

（さっすが小萌先生じゃん）

今まで黙っていた黄泉川が、缶ビールを飲みながらそう思う。

「さぁさぁ、真面目なお話は終わり。今日は飲みますよー！」

そう言って小萌は缶ビールを手に取る。
その瞬間、一方通行が酷く意地の悪い笑みを浮かべたが、残念ながら小萌は気付かなかった。
プルタブを手に取り、指を手前に引く。

「きゃー！！」

瞬間、まるで噴水のように缶の中身が逆流してきた。
突然の事に何も出来なかった小萌は、頭からぐっしょりとビールをかぶる。

「おいおい、ロリ。何をやってるンですかァ？」

悪戯が成功して楽しい一方通行が、ニヤニヤと笑いながら小萌に声をかける。
明らかに何かした、しかしその何かが分からない黄泉川は、ただ謎だと思うだけだった。

「こ、こらー！　一方ちゃん、なんてことをするんですかー！」

「何言ってるンですかァ。俺は何もしてねェよ、『俺』はなァ」

明らかに嘘だと分かるほど、一方通行は笑っていた。
そのうち腹を抱えて笑うのでは、そう思えるほど楽しげに笑っていた。

「うっ！　で、でもいきなり缶が爆発するなんてありえませんー！」

「それで俺が犯人ですかァ。傷つくなァ」

「えぇ！？　ちょ、ちょっと一方ちゃん！　ご、ごめんなさいー！」

明らかに悪いのは一方通行なのに、何故か小萌はオロオロとしながら謝っていた。

「俺の心はガラスで出来てるンだァ。これは罰を受けて貰わないとなァ？」

「ば、罰ですかー！　せ、先生、今は懐事情が厳しいので……」

「ンなのいるかよ。金なら腐るほどあるンだ。そうじゃねェ……」

そこで一つ咳払いをすると、一方通行は軽く頭をかきながら言葉を口にする。

「俺のやりたい事……ロリと一緒に住めば見つかるかもしれねェ。だから、俺は暫くロリと一緒に暮らすぜェ」

恥ずかしかったのか、最後のほうになると言葉は小さくなっていく。その上視線を小萌からそらし、別の無関係な場所ばかり見ていた。

「え？　それぐらいなら別に構いませんよー？」

大した事はない、そんな雰囲気で小萌は言葉を口にする。むしろその程度の事を、何故断りを入れているのか逆に不思議に思っていた。

「まァケジメってヤツだ」

その言葉を口にすると、一方通行は小萌に手を差し出す。

一瞬、何をしたいのか分からなかった小萌だが、それが握手を求めていると分かると、慌てて手を差し出す。
二人の手がゆっくりと重なり、一つとなって繋がる。

「暫く厄介になるぜェ、ロリ」

「だから私の名前は小萌ですー！」

薄く笑う一方通行、少し膨れ面の小萌。
そんな表情をしながら二人は握手をした。

（すっかり蚊帳の外じゃんー）

二人の世界に入った一方通行と小萌は、それから三十分以上黄泉川を放置していた。

次の日、一方通行は久々に学校へ登校する。
相変わらず教師と生徒は怯えているだけだったが、それでも構わなかった。

（化け物と思うやつは思わせればいい。だが、いつか俺みたいな奴とダチになろうって考える、かなり奇特な奴が現れるかもしれねェ）

一方通行の進行方向にいる連中は、全て一方通行を避けていく。
今まではその光景すら嫌だった。だが、今は全く違う。

（『俺』を見ない奴なンざ、こっちから願い下げだ。『俺』は『第一位』じゃねぇ……『一方通行』だ）

不敵な笑みを浮かべると、一方通行は自分に割り当てられている特別教室に向かった。
しかし気張りすぎたのがよくなかった。
その上、一方通行は昨日までニートまっしぐらな生活をしていた。
ここまで言えば簡単だろう。

そう、一方通行は教師が来るのを待っている間に寝てしまったのだ。

怯えながら教室に入った教師が見たのは、豪快な態度で寝ている一方通行の姿だった。
どうするべきか数分悩んだ後、教師は一方通行を放置する事にした。

「ンあァ？」

ようやく目を覚ました一方通行だが、時刻は既に完全下校時刻手前であった。
豪快を通り越して、呆れるほど眠っていたようだ。

「……帰るか」

何だか昨日と変わらないなと思いつつ一方通行は椅子から立ち上がる。
教室を出ると、そのまま無人の廊下を歩いて行く。
下駄箱を通過し、校門を出た所で一方通行は背伸びをする。

「あァ……良く寝たァ」

結局家で寝ていたのが、学校に来て寝るに変わっただけの一方通行だった。

一ヶ月経過

一方通行が抱えていた心の幻想を、小萌によって破壊されてから数週間。
期間的には小萌が一方通行を拾って一ヶ月ぐらいの頃。
ある日、学生向けのスーパーに一方通行はいた。

「……クソッタレ」

目の前に広がる商品を前に、一方通行は吐き捨てるように言う。
彼がいるエリアは学生向けの中でも、高級な肉を扱っているエリア。
財布に万札さんが沢山いる、所謂大能力者とかエリート向けの商品だった。
当然ながら一方通行は買うだけなら鼻歌交じりに買えるぐらいの財力はある。
しかし、今の彼はとある理由により躊躇っていた。

「まァ世話になってンだし……なァ……クソッタレ……」

もう一度吐き捨てるように言う。
何故、わざわざ一方通行がスーパーなどに来ているのか。
それは昼間コンビニで買い物中、ある雑誌のタイトルが目に入ったからだ。
何で平日の昼間にコンビニにいるのだ、という突っ込みはこの際置いておこう。

そのタイトルとは『一ヶ月たったらお祝い☆』と、どこか電波じみたポーズを決めた女と一緒に書かれていた。
最初は馬鹿らしいと思った一方通行だが、流石に何もしないのはど

うなのか。
そんな思考が一瞬よぎってからは、だんだんとどう祝うべきかに思考がシフトしていった。
ついには思考が暴走して、昼間なのに小萌の職場に電話して焼肉パーティをする事を連絡。
一緒に黄泉川とか連れてこい、そう言った後に一方通行は電話を切った。

そして現在、スーパーで絶賛後悔中である。

ある意味でシュールな光景である。
何せスーパーの一角で、陳列している商品を前に頭を抱えているのだから。
一方通行を知っている研究者が見たら、余りに異常な光景に固まってしまうだろう。

「チクショウ……あァ！　もう適当に入れちまえ！」

面倒臭く感じた一方通行は、陳列している商品を左から取っていく。
百グラム八千円とか書いているが、一方通行は気にする事無く次々とかごに入れていく。
やがて買い物かご一杯どころか溢れるぐらいに肉を入れる一方通行。
何となく勝った気分になったのでそのままレジへと向かった。
残ったのは商品があらかたなくなった陳列棚だけだった。

「あ……野菜買わないとなァ……」

レジに向かう途中、野菜を買っていない事に気付く。
一人だけなら肉だけでもいいが、流石に野菜なしは厳しいだろう。
そう思って買い物かごをもう一つ持つと、一方通行はやはり先ほど

と同様に適当な野菜を入れていく。
中には「それって焼肉に入れたっけ？」という野菜まで入れていたが、本人は料理を余り知らないために気付かなかった。

「よぉし、これでオーケーだ」

もう一つの買い物かごもやはり溢れんばかりに野菜を入れた一方通行。
どう見ても外見からは持てそうにないが、一方通行はベクトル変換をして重さをなくしていた。
殆ど人がいない時間帯なので、特にレジが混んでいる事はなかった。

「いらっ……しゃいませー」

営業スマイル抜群の女性が爽やかに言うが、一方通行の商品を見た途端顔を引きつらせた。
それでも笑顔を維持しようと努力しているのだから、中々のプロ根性だろう。
店員は商品を一つ一つレジに打ち込んでいく。

「ご、合計で四十五万八千七百四十円になりまーす……」

「カードで、支払いは一括」

レジ打ちで初の十万超えにビビっている店員だが、一方通行は気軽な態度でカードを差し出す。
今頃になって「この人お金持ち？」などと考えた店員。

「こ、こちらお控えになります」

「ン」

ビビっている店員だが、一方通行は終始態度が変わらなかった。
レシートとカードを受け取ると、買った商品を無造作に袋へ詰め込んでいく。

（あァ……そう言えばこれだけ食えっかなァ）

今更ながら買った量が多いことに気づいた一方通行。
だが、減らす事も出来ないので仕方なしに全部を持ち帰る事にした。

（ダルイな。飛ンで帰るか）

そう思った一方通行は、ベクトルを操作して空へ『落ちる』。
普通なら飛ぶだが、一方通行の能力はベクトル操作なので空に向かって落ちるという表現が正しい。
とは研究者の言葉だが、今の一方通行にはどうでもよかった。

（こういう時は便利な能力だなァ）

後日、スーパーの袋を抱えた白いモノが空を飛んでいたと学生たちの噂になったとか何とか。

そして一方通行は一つだけミスをした。
一方通行が見た雑誌、その雑誌は見事に別の雑誌でタイトルが一部隠されていた。
正式なタイトルは『同棲して一ヶ月たったらお祝い☆』である。
つまりカップル向けの雑誌だったのだ。
その手には疎い一方通行だから、そこまで気付かなかったのである。

昼間かかってきた一方通行からの電話について、小萌は終始首を傾げていた。
いきなり「焼肉パーティすンぞ。黄泉川とか適当な奴呼ンでこい」と言われたのだ。
突然の展開に、流石の小萌も何が起こっているかさっぱり分からなかった。

「……と言われたのですが、どうでしょうか？」

一先ず黄泉川に声をかける小萌。

「まぁ別に用事はないので構わないじゃん。それにしても何を考えているじゃん」

「はぁ……流石に分からないのですー」

二人揃って首を傾げているので、当然ながら答えなど見つかるはずもなかった。
とはいえ、別に何か悪いことを企んでいる様にも思えなかった。

「んじゃこっちは鉄装でも呼ぶじゃん。アイツなら暇してそうじゃん」

「お願いしますー。まぁ他の方は……いませんねー」

「そうじゃん。まぁ大人数で押しかけるのも悪いじゃん」

「私は構わないのですが、一方ちゃんが嫌がりそうですー」

「あー、なんか仏頂面になりそうじゃん」

二人してその光景が浮かんだのかクスクスと笑う。

「しかし本当に突然じゃん。何かあったのかじゃん？」

「帰ってみればわかると思います。一先ず楽しみにしておきましょうー」

そう小萌が言った後、二人は仕事を再開する。

二人がもう少し考える余裕があれば、一方通行に確認の電話とかを考えただろう。

もしくは早く帰ろうと考えたかもしれない。

しかし二人は「よく分からないけど、いつも通りでいいかな」と考えていた。

だから少し遅くなって帰った時、部屋を見て絶句した。

その理由は――――。

「いよォ、遅かったなァ」

扉を開けたまま固まっている三人を見て、一方通行はニヤリと笑い

ながら言った。
小萌は勿論、黄泉川とついてきた鉄装も部屋の光景を見て唖然とした。

「な、なななななななんですかー！？」

「何ですかァ？　と言われても見たまンまだが？」

小萌は素っ頓狂な声を上げる。
それもそのはず、見慣れた部屋がすっかり変わっていたのだ。
ボロアパートの木造部屋が、小奇麗なフローリングの部屋みたいに変わっていた。

薄汚れていた壁は、白いクロスが貼られていた。
中央に鎮座していたちゃぶ台は、これまた綺麗なテーブルへと変貌していた。
床に至っては、畳が見えないほどカーペットが敷き詰められている。
突貫工事でリフォームしたとしか思えなかった。

「ど、どどどどどどどういうつもりですかー！」

住み慣れた部屋が変わっていれば、誰だって動揺してしまう。
小萌も変わらず、思いっきり動揺しながら一方通行に問い詰める。

「まァ……世話になってるンだし……なァ……」

「あーなるほどじゃん。小萌先生、一方通行は世話になっているお礼に、部屋をリフォームしたじゃん」

一方通行の態度で合点がいった黄泉川は、ケラケラと笑いながら小

萌に言う。

「で、でも別にそこまでしなくても……」

「まぁまぁ、これは一方通行なりの感謝の気持ちじゃん。どうせ少しでも快適に、と思ってやったんだろうじゃん。小萌先生はその思いをしっかりと受け止めてあげるじゃん」

ペシペシと小萌の頭を叩きながら、黄泉川は楽しそうに言った。
一方通行は黄泉川の言葉に舌打ちをしたが、その言葉自体を否定はしなかった。
小萌はその態度を見て、黄泉川の言葉が的を射ている事を理解する。

「うー、で、出来れば次からはご相談下さい。先生、びっくりしてひっくり返りそうです」

「ン、分かったァ」

「話が纏まった所で部屋に入るじゃん。ほら、鉄装も！」

「ひゃあぁ！　せ、先輩、ちょっと待ってください！」

その声で一方通行は気付く。
よく見れば見慣れない顔の人間がいる事に。
黄泉川を先輩と言った所から、黄泉川の関係者だとは理解していたが。

「誰だテメェ」

「ひぃっ！」

一方通行としては普通に声をかけたつもりだった。
だが、その女性は妙に怯えながら縮こまっていた。

「はっはっは、私の後輩で鉄装綴里って言うじゃん。まぁ見た目通り気が弱いじゃん」

「テメェが馬鹿みてェに強固な心臓持っているだけだろ」

「て、鉄装綴里といいます！　お話は先輩から伺っています。よ、よよよよろしくお願いしまひゅっ！」

慌てて姿勢を正した鉄装は、頭を下げながら自己紹介をする。
しかし最後、最後の最後で台詞を噛んだ。
口元を抑えながら、鉄装は涙を目に浮かべる。

「あー、うン。頑張れドジっ子」

そんな鉄装に一方通行はトドメの一言を口にした。

ＴＨＥ　焼肉パーティ

色々とあったが一先ず全員が席に座る。
相変わらず金に糸目をつけていないのか、テーブルにはクロスが敷かれていた。
テーブル自体も高そうに見えるので、黄泉川は楽しそうに笑い、鉄装はすごくビビりながら座った。
小萌はもう諦めに入ったのか、小さくため息を吐くだけである。

「まァ焼肉っつーても大した事は出来ないからなァ」

生まれて以来ロクに料理などした事のない一方通行である。
いくら調べたとしても、経験がないので体がそれについてこない。
野菜は不揃いなサイズだし、肉も単に皿へ盛っただけだ。

「まぁまぁこういうのは気持ちが大事じゃん。例え野菜が不恰好な切り方でも、気持ちが篭ってれば問題ないじゃん」

「そうですー。一方ちゃんが頑張った結果です。先生はとても嬉しいですー！」

一方通行が自らの手で準備した事に、小萌はとても嬉しい気持ちになった。
そのためニコニコと笑顔を浮かべていた。

「チッ」

恥ずかしかったのか、それとも小萌の笑顔を直視出来なかったのか。
一方通行は舌打ちをした後に、そっぽを向いた。

「しかし何だじゃん。随分と山盛りじゃん？」

「何だかお肉が凄くいい色をしている気がしますー？」

「見ているだけで何故だか威圧感が……」

小萌、黄泉川、鉄装の三人はテーブルに盛られている肉に注目する。
あの一方通行が買った肉だ、それ相応の値段がするのだろう。
そう思ったが、一体どれだけ高いのか三人には分からなかった。

「あァ……安いぞ。グラム八十円ぐらいだァ」

その言葉に黄泉川と小萌はホッとする。
流石に馬鹿高い肉なんて、食べた瞬間に胃がびっくりしそうだからだ。
唯一事情が分からない鉄装は、単に首を傾げるだけだった。

しかしここで二人はある思い違いをした。
一方通行が言った『グラム八十円』とは、言葉通り『一グラム八十円』である。
しかし小萌たちはグラムと聞くと、グラム単価である『百グラム』を指していると思った。
つまり一方通行は『百グラム八千円』と言いたいのであり、対して小萌たちは『百グラム八十円』だと認識したのだ。

「まァ食うかァ」

盛大な思い違いをしたまま、一方通行の焼肉パーティは開始を告げた。

一方通行は適当なジュース、小萌たちはビールで焼肉パーティを開始する。
本当はコーヒーが良かった一方通行だが、周りから全力で止められた。

そして焼肉奉行にあたる人物がいない。
なので一方通行は、適当に肉や野菜をプレートへ並べていった。
ジューッと音を立てて肉が焼かれていく。

「……なんか普段見慣れている肉と違う気がするじゃん？」

異変に気付いた最初の人物は黄泉川だった。

「まぁ確かにいい色合いをしています。何だか不思議ですねー？」

その言葉に小萌も微妙ながら賛同する。

「え、えーっと……どっかで見たような気がするんですけど？」

鉄装もおっかなびっくりな態度だが、やはり肉が何か違うように見えていた。
三人は揃って首を傾げる。どうにも肉に対して違和感が拭えないのだ。
そんな三人を見て、一方通行は面倒臭そうな表情をする。

「別にいいンじゃねェか。食えりゃ何でも一緒だろう？」

とりあえず肉が食えれば何でもいい、そんなアバウトな考えの一方通行だった。

三人も疑問はあったが、これといった証拠もない。

なので、場の雰囲気が壊れる事を敬遠するため、それ以上は追求しなかった。

「あ、美味しいですね」

「ほんとじゃん。結構美味しいじゃん」

やがて肉が焼けたので、黄泉川と小萌は焼けた肉を食べる。

結構な味に、先ほどまで感じていた疑惑は一発でどこかに飛んでいった。

「えっと、えーっと……」

鉄装はどれを取るべきか悩み、皿を持ったままオロオロとしていた。

だがやがてコレと思った肉を箸で取ろうとする。

瞬間、強い視線を感じた。

鉄装はおそるおそる視線を感じた方向へ視線を向ける。

そこには、両の目を細めて睨んでいる一方通行の顔があった。

（ひぇぇぇぇー！）

一瞬で腰を抜かしそうになった鉄装は、心の中で悲鳴を上げる。

既の所で抑えれたが、それでも心臓はバクバクといっていた。

「う、うぅ～……」

物凄く睨まれている事に萎縮しながら、取ろうとした肉を避ける。
その瞬間、一方通行の表情が和らいだ。
もう一度箸を戻してみる。一方通行の視線が険しくなる。
箸を避ける。視線が和らぐ。

（あぁ……そこは自分のエリアだから取るなと）

無言の圧力をかけてくる一方通行。
だが、その姿が鉄装にはとても可愛い子に見えた。
クスリと口元に笑みを浮かべると、鉄装は箸を持っている手を動かす。

「よ、よ～し」

何度か深呼吸すると、鉄装は『一方通行のエリア』から肉を取った。
その瞬間、一方通行の顔がこれ以上ないぐらい険しくなる。

「い、一方通行君。い、いいいいいいいたい事があるならハッキリ、いいいいいい言わないと」

物凄くどもりながらも鉄装は言葉を口にする。
なお、黄泉川と小萌は二人で勝手に盛り上がっており、こちらには全く意識を向けていなかった。

一方通行は一度だけ目を細めると、小さくため息を吐いた。

「……お」

「お？」

ボソッと何か呟いた後、一方通行は一気に息を吸い込んだ。

「俺の肉を取るンじゃねェぞ、ゴルァァァァァァ！！！！！」

「うひゃぁぁぁぁぁーーーー！」

机をひっくり返すような勢いで一方通行は叫ぶ。

その姿は好きな食べ物を目の前で取られた子供のような姿だった。

「俺が丹精こめて焼いた肉をォ！　テメェは無造作にとりやがった！！！　ちょっと面貸せやァ！？」

「ちょ、ちょっと！　お、おおおお落ち着いて！　先輩も笑ってないで助けてくださいー！」

鉄装と一方通行の絡みを、全く違う方向に捉えた黄泉川と小萌。

何だか見守るような視線で見ているが、鉄装からすれば助けて欲しい気持ちで一杯だった。

「鉄装ー。頑張って一方通行を抑えるじゃん」

「無茶言わないで下さいー！！！」

「メガネドジっ子！！！　言いたいことがあるならハッキリ言えって言ったよなァ」

口を歪めながら笑う一方通行。ハッキリ言って不気味である。

一方通行にビビっていた鉄装には数倍怖い顔に見えた。

「え、えええええ。い、いいいい言いましたよ！」

しかし私も警備員の端くれ。ここは根性で乗り切ろう。
そう考えた鉄装は、一方通行を前にして一歩も引かなかった。
正確には、引くに引けない状況と言えるが。

「……あ」

半泣きになりながら一方通行の顔を見てると、ふいに彼は表情を変える。
その表情は何かに驚いており、視線は鉄装のすぐ後ろを見ていた。

「お前気付いていないのかよ？」

「……え？」

「……そっか。そうかァ……」

物凄く憐れむような表情で一方通行は鉄装を見る。
その瞬間、鉄装の首筋に妙に生暖かい風があたった。

（え、えぇぇぇぇ！？）

恐怖の余り鉄装は体を硬直させる。
何だか背後に妙な気配を感じる。
しかし恐怖が、後ろを確認させる事を躊躇わせる。

「……あ、そうなンですかァ。ああ、はい……」

（何か会話してるー！？）

しまいには背後の人（？）と、一方通行は会話をし始めていた。

その事が、余計鉄装を恐怖に落としていた。

（お、落ち着け！　ゆ、ゆゆゆゆゆ幽霊なんて、いいいいいいるわけないじゃないですか！？）

（そんな非科学的な事なんて、あ、あああああありえませんって！？）

何とか自分を納得させようとする。

だが、人間とは本能的に見えないモノ、理解出来ないモノに恐怖を覚える。

いるかいないか、よく分からない状況は、数ある状況の中でも一番怖い状況といえよう。

この場合、背後に何かを感じるが見えないから、どんなに納得させようとしても心が恐怖を覚える。

「メガネドジっ子、短い付き合いだったなァ」

「な、なななななにを言ってるんですか！？」

「……後ろ見れば分かるさァ……うン、後ろを見れればなァ」

諦めたような、可哀想なものを見る目で一方通行は呟く。

「は、ははは。こ、怖がらせようと思っても……む、無理ですからね！？」

意を決して鉄装は後ろを見る。
そこには、単に扉が見えるだけで他には何もなかった。

「……あれ？」

再び視線を一方通行の方に向ける。
そこには、きちんと座って肉を食べている一方通行の姿があった。
黄泉川と小萌は、何だかハイテンションで食事と酒を飲んでおり、
こちらに全く意識を向けていない。

「あれ、あれあれぇ！？」

「何やってるンだ、メガネドジっ子」

「あれぇ！？」

何だか狐に化かされた気分の鉄装だった。
そんな鉄装に、一方通行はまたしても無情な言葉を投げる。

「やっぱメガネドジっ子だなァ」

その言葉を聞いた瞬間、鉄装は自分の頭にタライが落ちてきた感覚
を味わった。

愛情

黄泉川と小萌がビール缶片手にはしゃぐ。
一方通行が鉄装を弄り倒す。
弄られた鉄装が、何とか一方通行にやり返す。
何だかんだいいつつ全員が焼肉パーティを楽しんでいた。

しかし一つ、そう一つだけある問題が内包されていた。
それは一方通行以外は、全員がビールを飲んでいた事である。
おまけに焼酎ビンらしきものまで出ている始末。
つまりどういう事かというと、一方通行が誤ってアルコールを摂取する可能性があるという事だ。
普段の三人なら問題はないのだが、既に三人は酔っぱらいフルコース状態である。
いつ問題が起きるか、それは誰にも予想がつかない状態だった。
そんな状態で、焼肉パーティは更に続いていく。

「いやー本当に最高じゃん」

「久々の贅沢ですねー、黄泉川先生」

焼酎ビンを片手に黄泉川と小萌はハイペースで飲んでいく。
既にお腹はいっぱいなのか、食べるというより飲むという方向にシフトしていた。
そんな二人を一方通行は半分呆れた感じで見る。

「なンかロリが焼酎ビン持ってると、絵面的に危ない気がするンですが？」

外見年齢十二歳、赤いランドセルが似合う小萌が焼酎ビンを片手に持っている。
何となく背徳的な香りがするのは、決して自分だけではないと一方通行は思った。

「むっ！　また先生を馬鹿にしていますね、一方ちゃん」

ボソリと呟いたつもりだが、しっかりと小萌の耳に届いていたらしい。
酔っ払っているせいで、少々すわった目をしながら小萌は一方通行を見る。

「いンや、俺は世間一般的な感想を言ったまでだぞ？」

「はっはっは、まぁ小萌先生の見た目はコレだから仕方ないじゃん」

ペシペシと小萌の頭を叩きながら、黄泉川は一方通行の言葉に同調する。
どうやらそれがいたく気に入らなかったらしく、小萌は焼酎片手に一方通行へ近寄る。

「せ、先生だって大人の女性なんです」

そう言って焼酎が入ったコップをテーブルに置いた小萌。

「はァ……大人……ねェ」

「やっぱり信じてませんねー！　先生が本気を出せば一発ですー！」

その言葉と同時に、何やら奇妙なポーズを取り始めた小萌。

どういうつもりかさっぱり分からない一方通行は、心の中で首を傾げた。
黄泉川や鉄装も分からず、ただハテナマークを浮かべて小萌を見ていた。

「ど、どうですかー。せ、先生だって大人の色気満載ですよー！？」

一方通行は考える。
今さっきまでのポーズはどうやらセクシーポーズ（？）だったらしい。
だが、どう見ても奇妙なダンスにしか見えなかった。
色気なんて欠片も感じられず、逆に子供が背伸びしているようにしか思えなかった。

思わず不憫な気持ちになった一方通行は、目を抑えながら言う。

「不憫だァ……これは不憫過ぎるよなァ……」

「えーーー！！？　ど、どうしてそこで落ち込むんですかー！？」

小萌は黄泉川や鉄装の方を見る。
二人は小萌の視線を受けて、微妙に視線を逸らしながら苦笑いを浮かべていた。

「ま、まぁ小萌先生もオトナの魅力満載じゃん」

「え、えええ！　そ、そうですねー！　で、ですよねー！　一方通行君！」

「あァ……そうだよなァ……」

そう言いながら一方通行は『手前』にあったコップを手に取る。
余りに不憫だったのでその事を忘れようと、一方通行はコップの中身を一気に呑んだ。

「黄泉川先生ー！　言いたい事があるならハッキリ言って下さいー！」

その光景を三人は見ていなかった。
だから気付かなかった、一方通行が何を手にして呑んだかを。

「落ち着くじゃん小萌先生……って一方通行？　どうしたじゃん？」

小萌が両手を上げて抗議してるのを、何とかなだめようとしている黄泉川の目に、少しだけ俯いた一方通行の姿がうつる。

「……か」

「か？」

一方通行の様子がおかしい事に、小萌や鉄装も気付く。
少しだけ俯いていただけだが、一方通行は口を禍々しく歪めていた。

「くかきけこかかきくけききこかかきくここくけけけこきくかくけけこかくけきかこけききくくくききかきくこくけくかきくけくけくきくきくきこきかかか――――――ッ！！」

そして突然、天井を見ながら謎の奇声を上げ始めた。
これには誰もが驚き、いったい何が起きたのか分からなかった。

「……あれ？　あー！　一方ちゃん、それって先生のお酒ですよー！！」

「え！？　ほ、本当じゃん！　もしかして間違って呑んだかじゃん！」

「何て古典的な間違いをするんですかー！」

一方通行の顔は真っ赤に染まっていた。
そして手には、先ほど小萌がテーブルに置いたコップを持っていた。
つまり一方通行は現在酔っ払っている状態である。

アルコールを反射すると思われがちだが、アルコールも適量なら体に良い。
その為に、反射が適応されず一方通行の体に取り込まれてしまった。
そして体に素早く吸収され、酔っ払ってしまったという訳である。

「と、とにかくお水ですー！」

慌てて水を取りに行こうと思った小萌だが、誰かにがっしりと肩を掴まれた。
勿論、それは後ろにいた一方通行の手であるが。

「ロリよォ……あンなので男を魅了出来ると思ってンのかァ？」

妙にドスの利いた声で、すわった目つきをしている一方通行。

「あ、あのー……一方ちゃん？」

明らかにヤバい雰囲気を漂わす一方通行に、小萌は若干引きながら

声をかける。
しかし、一方通行は全く聞いておらず、ただ虚ろに近い瞳で小萌を見ていた。

「よォし、お前らにも見せてやンよ。第一位はこういうのも第一位だって事をよォ」

「は？　うひゃん！」

何が何だか分からず困惑している小萌の頬を、一方通行は優しく撫でる。
ソフトに、それも優しく丁寧に、まるで壊れ物を扱うかのように一方通行は撫でる。

「ちょ、ちょちょちょちょっと一方ちゃん！？　な、なななななな何をしてるのですかー！」

「第一位による女の扱い方講座ァ」

パニックを起こしている小萌を無視して、一方通行は優しく小萌の頬を撫でる。
その撫で方はかなり手馴れており、小萌はただオロオロとするだけだった。

「女の扱い方って……ここには女性しかいひゃふん！」

パニックを起こしているうちに、一方通行の指がそっと小萌の唇に触れる。
ぷにぷにと感触を楽しむような指の動きに、小萌は頭の中がパニックで一杯だった。

「お～、小萌先生が攻められているじゃん。これは結果が楽しみじゃん」

「なんだかドキドキしますね、先輩！」

黄泉川と鉄装は、静かに距離をあけて成り行きを見守っていた。
はっきりいって助ける気がないどころか、そのまま最後まで見届ける気満々である。

「ちょ……一方ちゃん、落ち着くですー！」

「俺は十分落ち着いてるンだぜェ？」

そう言うと今度は小萌の髪を撫で始める。
その辺りから小萌の顔は、お酒の酔いとは別な要因で真っ赤になっていた。
近くで見ている黄泉川たちに分かるほど、耳まで真っ赤である。

「は、はわわー」

小萌は完全にパニック状態だった。
何せ見た目が小学生である。
その手の趣味な人間にしか言い寄られた事はない。
だからこうやって、本当の意味で男に言い寄られた事など一度としてない。

「小萌の髪、綺麗だなァ……サラサラしてて気持ちイイ」

手櫛をしながら小萌の髪を撫でていく一方通行。

一方通行の一つ一つの動作に、小萌の心臓はバクバクと大きな音を立てていた。

「いいじゃん、一方通行。私が認めるから小萌先生を押し倒すじゃん！」

「キ、キスとかしちゃったりするんでしょうか！？」

外野は言いたい放題である。

黄泉川に至っては、二人の行動を携帯で動画撮影するぐらいお気楽モードだった。

普段なら止めに入るのだが、二人とも男っ気がないのと酔い為に思考を若干緩くしていた。

だから不純異性交際手前の行動すら、ただ温かい目で見守るだけである。

最も小萌は二人の様子に気付かないほど、自分の事で一杯一杯だが。

「い、一方ちゃんのテクニックは分かりましたから、落ち着きましょう！」

「どうだァ……第一位は……コレぐらい……よ……ゆうなン……だよ……」

徐々に一方通行の声が途切れがちになり、最後にはボソリと呟いた後に小萌へ倒れこんだ。

突然の事に驚いた小萌だが、何とか一方通行を支える事に成功する。

「だ、大丈夫ですかー！」

びっくりしながらも声をかけると、一方通行の口から小さな寝息が聞こえる。
どうやらお酒が全身に回って酔いつぶれたようだ。

「……母……さ……ン……」

ポツリと、小萌にしか聞こえないレベルの声量で一方通行は呟く。

「……クスッ」

一瞬何の事か分からなかったが、それが母を求める声だと理解した時、小萌は優しげな笑みを浮かべた。
学園都市最強でも、やはり中身はまだまだ子供だ。
その事が小萌には少しだけ嬉しかった。
ポンポンっと背中を優しく撫でると、一方通行をギュッと抱きしめる小萌。
母を求めているのか、一方通行も小萌を優しく抱きしめる。

「……つまらないじゃん」

「もう一歩でしたねー」

空気を読まず、最後まで外野は言いたい放題であった。
一方通行が酔いつぶれた事により、焼肉パーティは締まりもなく終わりを告げた。

遅刻は厳禁です

瞼に朝日の光を感じて、一方通行は徐々に意識を覚醒する。
しかしまだ眠気の方が強く、瞳を開ける気はなかった。

（なンかふかふかなモノでもあるンですかァ？）

更に腕から感じる柔らかな感触が、一方通行に目を開けさせる事をやめさせる。
それは程良い暖かさと、マシュマロのような柔らかさがあった。
少しだけ力を入れると軽い弾力を感じる。

（あァ……心地イイ……お休みィ……）

再び夢の中に落ちかけた一方通行。

「きゃあああああああああああああ！！！！！」

「ぐあァ！！」

もうすぐ意識を手放すその時、鼓膜を突き破るかのような悲鳴が聞こえた。
至近距離から食らった為か、一方通行は耳を抑えてうめき声を上げる。

「な、なンだァ！　一体、何なンですかァ！？」

反射されなかった事が謎だったが、今はそれより悲鳴の方が気になった一方通行。

辺りを見渡すと、少し離れた所に小萌がいた。
何故だか分からないが、物凄く一方通行を警戒しながら見ている。

「あァ？　何がおきたァ？」

「い、いいいい一方ちゃん!?　だ、だだだだだ駄目ですよ。先生は、先生ですー！」

パニックを起こしてるらしく、涙目で一方通行を睨む。
自分の体を抱きしめるかのように、小萌は自分の体をガードしていた。

「意味わからねェ……」

よく分からない状況だが、寝起きのためか一方通行は考える事を止める。
のそのそと起き上がると自分の携帯を手に取る。
流石に小萌ほど体内時計が正確ではないため、一方通行は文明の機器に頼る必要がある。

「……八時……かァ」

ポツリと呟いた一方通行の言葉を聞いた瞬間、小萌の顔が真っ赤から真っ青に変わった。
八時、そして今日は平日。そこまで理解すれば、後は何が起きたか簡単だ。

「ち、遅刻ですー！！！」

「あァ……そう言えば今日は学校だよなァ……」

「呑気に言ってる場合ではありませんー！　は、早く準備しないと！」

わたわたと準備していく小萌。
しかし距離的に考えて、今からどんなに頑張っても遅刻は免れない。
それが分かっている小萌だが、一分でも早く着くよう頑張る。

「チッ」

軽く舌打ちをした後、一方通行は頭をかく。
小萌が勤めている学校の位置から考えて、どんなに頑張っても時間内に辿りつけない。
その事が分かっている一方通行だが、ある方法を使えば時間内に辿り着く事は出来る。

「ロリ、ある方法なら時間内に辿り着けンぞ」

「ええ！　ほ、本当ですかー！」

「ちィっと目立つが、問題ねェかァ？」

「遅刻よりはマシですー！　それでお願いしますー！」

テンパっているのか、先ほどのような警戒心は全く感じられなかった。
一方通行は首を左手でコキコキと鳴らすと、久々に自分の能力を使う決心をする。

「まァ……大丈夫だろう。派手な事しなければなァ」

最近は自動反射の演算を変えている。
小萌や黄泉川には反射が適応されないように、なるべく人に危害を与えないように。
自動反射の演算を『強引』に変更した。

「おまたせです、それではお願いします！」

少し慌てながら小萌が戻ってくる。

「ンじゃ、行くぞ」

そう言って一方通行は部屋を出る。
小萌もそれに倣って少し慌てながら部屋を出た。

「ちょっとだけ我慢しろよォ」

その言葉と同時に、一方通行は小萌を抱きかかえる。
所謂お姫様抱っこというやつである。

「ちょ、一方ちゃん。何を！」

「口開けると舌を噛むぜェ」

その言葉と同時に、体に少しだけ圧力を感じた小萌。
よく見ると、高速で空へ飛んでいる事に気付く。

「え……えぇぇぇぇーーーー！！！」

あまりの急展開に悲鳴を上げる小萌。

だが、その間にぐんぐんと高く飛び、気付いたら自分の家が小さく見えるほどだった。
つまりそのぐらいの高さに移動したという事になる。

「うひゃあああああああ！！！」

一瞬止まったと思ったら、次の瞬間にはすごい速度で真横に移動し始めた。
もはや物理学の法則など完全無視の状態である。

「もうすぐ着くぜェ」

その言葉に小萌は前を見る。すると、通いなれた学校が目に入った。
家を出てから僅か一分ちょっとで、アレだけの距離を移動したという事になる。
それに不思議な事がある。速度の割に強い風を感じない。
少しだけ風を感じるが、目を開けてられないほどのものでもない。

「降りるぜェ」

「え……いやあああああああああ！！！」

一方通行が何かしているかも、そう思った瞬間体がふわりと浮く感覚に襲われる。
なんてことはない、上空千メートル近い位置から一気に真下へ落ちているのだ。

「校門前でいいかァ？」

呑気な一方通行の声が聞こえた後、小萌は意識を手放した。

「珍しいじゃん、小萌先生が遅いなんて」

もうすぐホームルームが始まる時間になっても、小萌の姿が見えない事に黄泉川は首を傾げる。
いくらお酒を飲んでも、次の日はきちんと来ていた小萌が遅い。
何か事件に巻き込まれたのか、そんな一抹の不安を感じつつ外を見る。

「ん？」

何気に空を見上げると、何かがキラリと光ったように見えた。
瞬間、高速で何かが校門前に落ちてきた。

「何だじゃん！」

轟音を立ててそれは地面に落ちる。
幸い通学中の生徒が少なかったために、遠巻きから見た感じでは被害が起きたようには見えない。
それでも何人かの生徒はいたので、黄泉川は慌てて校門前へ向かって走る。

「大丈夫かじゃん！」

校門前まで到着すると、黄泉川は辺りの生徒に声をかける。

何人か腰を抜かして座り込んでいるが、大怪我を負っている生徒は皆無だ。
その事にホッと胸を撫で下ろすと、黄泉川は落ちてきたモノへ視線を向ける。

「到着ゥ」

落ちてきたモノ、それは目を回している小萌と、楽しそうな笑みを浮かべて小萌を抱き上げている一方通行だった。

「……何やってるじゃん、一方通行」

「おゥ、黄泉川か。ロリが遅刻しそうなンで、超特急で連れてきてやったぞ」

「きゅう～」

小萌は完全に目を回していた。
もはや意識が別世界に飛んでいると言っても過言ではない。

「一方通行！」

「何ですかァ？　言っとくが、方法はこれ以外なかったンだぞ？」

「違うじゃん。そんな楽な方法があるなら、私もお願いしたじゃん！　寝坊しかけて走った私が馬鹿じゃん！」

「そっちかよ！！！」

黄泉川のずれた怒りに思わず突っ込む一方通行。

どうやら黄泉川にとって、地面に多数の亀裂を作った事も。
人を抱えて空から落ちてきた事も、問題にはしていないらしい。
単に二日酔いに近い頭では、余り深く考えられないというのもあるが。

「まー取り敢えず小萌先生は預かるじゃん。完全に目を回してるけど」

「よろしくゥ」

「終わったらお前も学校行くじゃん」

「へーへー、気が向いたらなァ」

明らかに行く気がない態度をしつつ一方通行は立ち去ろうとする。

「待つじゃん。せめて地面ぐらい応急処置しておくじゃん」

「チッ、面倒くせェなァ」

そう言って一方通行は地面を軽く蹴る。
コンっという音と同時に、地面に転がっていた破片がスルスルと一箇所に吸い込まれていく。
まるで破片が元の位置に戻るかのように、次々と集まっていく。
すぐに先ほどと殆ど遜色ない形で、地面が元に戻っていた。
流石にヒビとかは修理しきれないので、あちこちに無数の亀裂が残っていたが。

「流石じゃん。便利な能力じゃん」

「煽てても二度とやらねェ」

そう言って一方通行は地面を蹴る。

羽毛を踏むような感じだったが、それに反して一方通行は高く飛んだ。

飛んでいった方角は、小萌の家がある方向。

明らかに学校へ行く気がないと分かると、黄泉川は小さくため息を吐いた。

「やれやれじゃん。もう少し時間がかかりそうじゃん」

そう呟いた黄泉川だが、言葉に反して唇は小さな笑みを浮かべていた。

消えない不安

一方通行と小萌が同居してから三ヶ月。
同じ箇所に二ヶ月といられなかった一方通行には、今の状態はとても喜ばしい事である。
最も恥ずかしいので、決して口に出しては言わないが。

時々黄泉川や鉄装が来ては、理由をつけて騒いで飲んで帰っていく。
そんな騒がしくも平和な日々を、一方通行は過ごしていた。

小萌も黄泉川も鉄装も、一方通行に不条理な怯えをしたりしない。
ありのままの自分を見てくれる。
ここにいる間だけは、一方通行は第一位でも学園都市最強でもない。
ただの一学生でいられた。

しかし全てが平穏な訳ではない。
時には互いの主張がぶつかりあい、口論をする事もある。
主に一方通行の我儘からくる口論だが。
例えば……。

「オイオイ、弁当にカツは必須だろゥ？」

「野菜もちゃんと食べなさいー！」

小萌が作る弁当のおかずに不満を言ったり。
しかし不満の理由が『肉が少ない』という、何とも笑える理由だが。

「料理ィ？」

「今の時代、男性も家事スキルを覚える必要があります」

「ンな事覚える必要ねェ」

家事をお金で解決しようとした一方通行に、家事を覚えさせようとする小萌。

勿論、嫌がった一方通行だが最終的には折れた。

「こンな料理はベクトル操作だァ！　圧縮、圧縮ゥ！！」

「こらー！　インチキしちゃ駄目ですー！」

包丁をうまく扱えない一方通行が、能力という裏技（インチキ）を使ったり。

そんなちょっと微笑ましい毎日を一方通行は過ごしていた。

勿論、こんな生活をしている小萌と一方通行を連中が見逃すはずがなかった。

「で、一方通行とはどこまでいったじゃん？」

「そろそろ三ヶ月ですねー」

連中とは勿論、黄泉川と鉄装である。

いつもの屋台に集合した三人は、毎度ながらの質問を口にする。

そしてこの二人、事あるごとに一方通行と小萌をくっつけようと画作していたりする。

教師と生徒の爛れた関係になるが、その辺はいいのかという突っ込みは完全にスルーして。

「どこまで……と言われましても相変わらず我儘に振り回されている。それしか言えませんー」

小さくため息を吐きながら、小萌はお酒が入ったコップを手に取る。

「いやいや、小萌先生。それは凄い事じゃん」

「ほえ？」

お酒を飲んでいる小萌に、黄泉川はニヤニヤとしながら言う。
その顔は何か企んでいる事が丸わかりなほど、とても楽しそうな表情をしていた。

「知り合いの研究者に聞いたんだけど、一方通行って実験の時も普段の時も余り我儘を言わないそうじゃん」

「そうなんですかー。それって私が軽んじられているって事ですかー！？」

「そうじゃないじゃん。それだけ心を許しているって事じゃん？」

「そうですかねー？」

コップに入っている焼酎を一気に飲み干す小萌。
それでスイッチが入ったのか、少しだけ不満そうな目をしつつ言葉を発する。

「大体一方ちゃんは、お肉ばかり食べて野菜を嫌がるから困るのですー」

「『必要な栄養は取れるンだからイインだよ』って言うんですよー」

「おまけに先生を子供扱いするんですー！」

「この前何て『銭湯に一人で行くなンて心配だなァ』とか言いました」

「まぁ……ちょっとだけ怖かったのは認めますが……」

「でも『手ェ繋いでやろうかァ？』はないと思うのです！」

「先生は大学も出ているれっきとした大人な女性なんですー！？」

そう言いつつも口元に笑みが浮かんでいる小萌。

その事に気付いておらず、その後も延々と一方通行の事を語っていた。

最も聞かされた方は惚気にしか聞こえず、お腹いっぱいになっていたが。

その後も一方通行と小萌の生活は平穏であった。

それはもう寒気を覚えるほど、それこそ本当に何も起きなかった。

一方通行の立場を知っている人間からすれば、何も起きないのは不思議で仕方ない。

それ程に平穏だった。勿論、単に運がいい訳ではない。

ある人物の意向が絡んでいた為に、一方通行はつかの間の平穏を手

に入れていた。

「いつまで第一位のお守りを続ければいい」

金髪のアロハシャツ男、土御門は巨大なビーカーに浮いている人物へ問いかける。

彼こそが、一方通行につかの間の平穏を与えている人物。

「今しばらくは観察したい。イレギュラーな人物との出逢いが、一方通行をどの様に成長させるか興味が湧く」

「悪趣味だな、アレイスター」

逆さまに浮いている『人間』アレイスターは、土御門の嫌味に薄く笑う。

「イレギュラーこそ科学者の娯楽だよ。決まった路線の事など興味は沸かない」

「お前の計画では、第一位は重要な存在のはず。その人物で遊んでいていいのかね？」

アレイスターが実行している『プラン』とやらには、一方通行が重要な位置に存在している。

『第一候補（メインプラン）』の中核に近い存在なのだが、あろうことかアレイスターはその一方通行で興味半分に近い実験を行なっているのだ。

「無論、大幅なイレギュラーを生み出すなら処分する。しかし、今はこのままがベストだ」

「……だから第一位を狙う人物を片っ端から始末……か」

「存在価値のないモノに、この娯楽を邪魔されたくはないのでね」

薄く笑いながらアレイスターは言う。

その笑みは、嘲るようにも、楽しむようにも、憐れむようにも見えた。

その憐れみも誰に向けたのか、嘲りを誰に向けたのか、土御門には全く分からなかった。

「チッ、分かったよ。今しばらくは雑草刈りに励むとするよ」

「よろしく頼むよ、土御門」

舌打ちと共に吐き捨てるように言った土御門を見て、アレイスターは楽しそうな笑みを浮かべていた。

それすらも、土御門には嘲るような笑みに見えたが。

（所詮、この街にいる能力者はこの『人間』の所有物か……）

つまらなさそうな表情をしながら土御門はそう思った。

一方通行が小萌と住んで四ヶ月が過ぎた。

包丁がまともに扱えなかった一方通行が、普通に料理ができるようになった。

朝、二人で朝食をとることが当たり前の風景になった。
一緒の部屋で眠る事にも、殆ど抵抗がなくなった小萌。
学校に行っても寝るだけでまともに授業へ出ない一方通行。
そんな二人に、ある『事件』が発生する。

「遊園地ィ？」

「そうじゃん。知り合いにチケットを貰ったじゃん。来週までだから、皆でどうかと思ったじゃん」

もはや見慣れた風景、そう言えるほど黄泉川が小萌の家でお酒を飲んでいると、不意にポケットからあるチケットを取り出した。
そのチケットとは、第六学区に出来た新しいテーマパークのチケットである。
学園都市の中でも最先端の技術を駆使し、他では味わえないようなアトラクションが一杯であった。

「ハッ、この面で遊園地ってガラかァ？」

「そう思うなら、その可愛らしいエプロンは何だじゃん？」

「こ、これはロリが勝手に買ったンだよッ！」

一方通行の格好、それはいつものシマシマ模様のブランドシャツの上に、明らかに本人の趣味ではないエプロンを着用していた。
小さなうさぎが数匹と母親と父親らしきうさぎがプリントされた柄である。
罰ゲームやネタで着用している訳ではない。そもそもそんな事に付き合う一方通行ではない。

「ほほぅ、小萌先生が買ってきたのかじゃん」

ニヤニヤと笑う黄泉川を見て、一方通行はミスったと思った。
料理を（無理矢理）教えられてすぐに小萌はエプロンを買ってきたのだ。
だが、柄は一方通行の趣味とはまるで違うものだった。

流石に恥ずかしさがあったので、最初は全力で拒否した一方通行。
だが、小萌の涙目プラス上目遣いのコンボにあえなく撃沈。
結局料理する時は、このエプロンを着用する事が義務付けられた。
そのせいか、数週間もすれば着ている事が『当たり前』になってしまったのだ。
だから黄泉川が来た時も、一方通行は指摘されるまで全く気付かなかった。

「チッ、酔っ払いめ。ほらよ、酒のツマミだァ」

「さんきゅーじゃん」

差し出された皿を黄泉川は危ない手つきで受け取る。
少しだけ不安だった一方通行だが、黄泉川は何とか皿をテーブルに置く。

「で、遊園地どうじゃん？」

「……はァ、イヤだって言ってもお前なら強引に連れて行くンだろ？」

「当然じゃん。こういうのは皆でわいわいやるから楽しいじゃん」

「やっぱ強制かよ……」

ケラケラと笑う黄泉川に突っ込む一方通行だが、その突っ込みには力がなかった。
それはある悩みが、一方通行へ常に付きまとっていたからだ。

（……平和だ。平和過ぎるンだよ……異常なぐらいなァ）

それは何も起きない事への不安。
最初の二ヶ月は楽しい気持ちで一杯だった。
だがそれを超えてから、徐々に不安が楽しさを上回るようになってきた。

何故か、それは何もないからだ。
それが一方通行にとって最大の不安だった。

学園都市最強になってから、今まで数えきれない程の半端能力者（バカ）が現れた。
直接ではなく、家を襲撃したりという間接的な行動までしていた連中が。
小萌と出会ってからぱったり現れなくなった。
たまに街中でそんな連中を見かけるが、一方通行の顔を見た途端、怯えるように逃げるばかりだった。
まるで一方通行に関われば、自分に不利益な事しか起きないと言いたげに。

（一体何が起きてるンだ……）

どんなに考えても答えのでない疑問。

迷路のようにぐるぐると回り続ける思考にハマる。

「な～に考え込んでるじゃん」

考え込んでいると、黄泉川が酒臭い息をまき散らしながら一方通行の背中にのしかかる。

「くせェ、重ェ……」

「酷いじゃん。女を邪険に扱うとモテないじゃん」

「酔っ払いにモテたくねェよ」

無理矢理黄泉川を押しのけると、一方通行は小さくため息を吐く。
黄泉川の気楽さを見ていると、何だか考えるのが馬鹿らしいと思えた。

（ウジウジ悩ンでも仕方ねェ……もしそうなら俺が何とかするべきだなァ）

最初は欲しいと思った。同時に不要だとも思っていた。
だけど手に入れて、それがとても心地いいものだと知って。
普通の人間らしく扱って貰える事が、こんなにも嬉しい事だと知って。

（失いたく……ねェよなァ……）

この居心地のよい空間を、一方通行は失いたくないと思った。

遊園地

第六学区とは、アミューズメント施設の多い学区である。
観光客を狙った詐欺等も多い学区だが、それでも一定の人気はある。
特に学園都市の外から来た子供には、学園都市製のアミューズメント施設は夢の乗り物に見えた。

「遊園地……なァ」

その学区にある最新設備を搭載したテーマパークに一方通行はいた。
正確には小萌、黄泉川、鉄装の三人とだが。

「中々素敵な場所じゃん。外見は悪く無いじゃん」

「ちょっとカラフル過ぎると思いますー？」

「最新設備……どんな感じなのでしょう！」

三者三様、テーマパークを見てそれぞれの感想を口にする。
目を輝かせる鉄装、割と普通な感じの小萌、楽しそうにニヤニヤと笑っている黄泉川。
そんな三人を見て一方通行は再度ため息を吐く。

「はァ……」

「どうした一方通行。そんなにため息を吐くと幸せが逃げるじゃん」

ベシベシと一方通行の背中を叩きながら黄泉川は言う。

「いてェ……」

思いの外強く叩かれていたので、一方通行は痛みに顔をしかめる。

「おっと、悪いじゃん」

そう言って叩いた所を撫でる黄泉川。

くすぐったさがあるのか、一方通行は存外にその手を退ける。

「別にそこまでじゃねェ。それよりさっさと入るぞ」

「つれないじゃん。まぁそこまで慌てる必要はないじゃん。入場は優良客扱いじゃん？」

「まずは中に何があるか見ておかないと駄目だろうがァ」

一方通行としては、まず危険対策のために内部がどうなっているか知る必要があった。

何しろ夢の国という触れ込みのためか、内部に関する地図などが一切入手出来ないのだ。

中に入って初めて手に入るそうで、一方通行としては早くそれを入手したかった。

（こンな時に、無駄なセキュリティを構築するンじゃねェよ）

その気になれば風の流れから、建物の形状や高さから何まで計算し切れる。

一分もあれば、一方通行の頭の中には立体映像的なテーマパークの地図が出来上がるだろう。

だがこの手の演算は酷く複雑で、かつ膨大な情報量を扱わなければ

ならない。
その計算を面倒臭がった一方通行は、手っ取り早く中から地図を手に入れる方法を選択した。

「ほほぅ……実は一方通行も楽しみにしていたじゃん？」

そんな事を考えているとはつゆ知らず、黄泉川は一方通行が遊園地を楽しみにしていたと誤解した。

「はァ？……あ！　ち、違ェ！　そンなンじゃねェ！！」

ニヤニヤと笑う黄泉川に訝しげな視線を向けるが、すぐにその考えを理解する。
一方通行としては安全の為に地図が欲しかったのだが、その姿を見た黄泉川はどうやら一方通行が遊園地を楽しみにしていると思ったようだ。
慌てて否定の言葉を口にするが、時既に遅く黄泉川の誤解は誤解のまま確定となった。

「はっはっは、いいじゃん。別に恥ずかしがる事じゃないじゃん。おーい、小萌先生ー！　鉄装ー！」

盛大に笑っている所で、化粧室から戻ってきた二人に黄泉川は大声で声をかける。
何となく嫌な予感を感じた一方通行は、黄泉川の口を塞ぐべく手を伸ばす。

「一方通行が早く入りたいそうじゃん。急がないと二人共怒られるじゃん」

だがあと一歩足りず、黄泉川は一方通行にとって最悪の言葉を口にする。
その後、黄泉川は一方通行の腕をするりと避けていたので、どの道結果は同じだっただろうが。

「一方ちゃん、先生は嬉しいです！」

何が嬉しいのかさっぱり分からないが、とにかく小萌は嬉し涙目で一方通行を見る。
予想だが子供らしい趣味がある事に、小萌は喜んでいるのだろう。
そう一方通行は思った。

「ですよね！　ですよねー！　いやぁ、一方通行君も楽しみですよねー！」

鉄装は鉄装で、仲間に出会えたような雰囲気で一方通行に語りかける。
まず間違いなく勘違いしているが、一方通行は別にアトラクションに興味はない。

「ちょっと待てや、誰もそンな事」

思ってない、そう言いかけたが途中で小萌と鉄装から腕を掴まれた。
最も、小萌の場合はぶら下がる感じだが。

「さぁ行きますよー！」

「テーマパークにレッツゴー！」

そしてそのままズルズルと引きずられていく。

「ちょ、お前ら離せェ！」

能力を使って突き放す訳にもいかず、一方通行は自力で抜けだそうとする。

しかし二人の力は思いの外強く、ただジタバタと暴れるだけで抜け出す事は出来なかった。

「離せェェェェェェーーーーー！！！」

一方通行の雄叫びが虚しく辺りに響き渡る。

だが二人はやっぱり一方通行の言葉を無視して、テーマパークの入り口へと一方通行を引きずっていった。

「頑張れ、一方通行」

黄泉川は悪戯っぽい笑みを浮かべながらそう言った。

引きずられていった一方通行だが、勿論この程度の『事件』ではすまなかった。

まず入場すると、よくあるキリ番入場者だった。そして渡されたのは巨大なぬいぐるみ。

それだけでも羞恥プレイなのに、更には小萌と手と繋がされる始末。

「小萌先生が一番身長が小さいじゃん。だから、一方通行が手を繋

いでいれば問題ないじゃん」

と、楽しそうに言う黄泉川。明らかに何か企んでいる様子だった。
小萌は手を繋ぐ事で、一方通行が楽しめると誤解したのか、全く嫌そうな表情をしない。
むしろ一方通行が嫌と言っても繋ごうとする勢いである。

「はい笑って！　一方通行君！」

どこから用意したのか、ご丁寧にインスタントカメラを取り出す鉄装。
目を細めて鉄装を睨む一方通行だが、睨まれた本人はどこ吹く風。
全く意に介さず、好き放題写真を撮り続けた。

「この被り物をかぶるじゃん」

そう言ってやたらファンシーな被り物を被せる黄泉川。
まさにおもちゃ扱いだった、三人が好き放題一方通行を弄り倒していた。
三人から弄られる姿に、世のモテない男性陣は嫉妬の目で見ていた。

（呪いで人が殺せるなら！）

そんな八つ当たり気味な嫉妬を向けられている事を知らない一方通行は、ただ三人の弄りから逃げるだけで精一杯だった。

「くそゥ……不幸だァ……」

ファンシーな被り物の上に、ファンシーな巨大ぬいぐるみを背負う一方通行。

その姿はとてもではないが、超能力者にも学園都市最強にも見えなかった。
伊達メガネをつけているので、知的な雰囲気は滲ませているが。

弄り疲れたのか、黄泉川たちはジュースを買ってくるといって席を外した。
無論一方通行はついていかず、ベンチに深く腰掛けて休憩を満喫していた。

「不幸だぁぁぁぁぁぁ！！！」

「ン？」

まったりして少しした頃、背後から大声が聞こえたので一方通行は気になって視線を声がした方に向ける。
すると、髪の毛をウニのようにツンツンさせた男が、必死になって走っていた。
少し後ろにスキルアウトらしき人物が六名いる。
どうやらウニ頭の男がスキルアウトに追いかけられているようだ。

「ハッ、ちょうどイイ」

一方通行はニヤリと笑うと軽く地面を蹴る。
たったそれだけで、一方通行は弾丸のようなスピードで走り出していた。

「ストレス発散に使わせてもらうぜェ！」

溜まりに溜まったストレス、それを発散出来る相手を見つけて一方通行は歓喜の笑みを浮かべていた。

「うお！　しまった、行き止まりだ！」

三方を壁に囲まれた場所に、ウニ頭の男は追い詰められた。
おまけにテーマパークの隅っこに位置しているらしく、ちょっとやそっとでは人が通る事などない。

「やっと追い詰めたぞ、逃げ足大王！」

少ししして肩で息をしながらスキルアウトが追いつく。
その数は五人、どうやら一人は体力の限界で潰れたようだ。
しかしそれでも一対五という、どう見ても不利な状況だった。

「人の邪魔しやがって……テメェには痛い目を見てもらうぜぇ」

「女の子を無理矢理連れていこうとして、お前らは恥ずかしくないのかよ！」

「うるせぇ！　テメェのせいで面倒な事ばかりだ。ちょっとストレス発散に付き合ってもらうぜ」

リーダー格らしき人物が、手を鳴らしながらウニ頭の男に近寄る。
見た目からしてパワータイプの人間らしく、筋骨たくましい体をしていた。

「クソッ」

絶望的な状況に、ウニ頭の男は苦渋の表情をする。

「そうだなァ、俺のストレス発散に付き合ってくれやァ」

あと少しでリーダー格の男が、ウニ頭の男を射程圏内に入る。

そんな時に、スキルアウトたちの背後から声が聞こえた。

「ぐぎゃあ！」

同時に、スキルアウトの一人が弾丸のように壁へ激突した。

「誰だ！」

壁にめり込んだ仲間を気にしつつ、スキルアウトたちは後ろを振り向く。

そこには、ファンシーなぬいぐるみを背負ったファンシーな格好の人間が立っていた。

「俺は……あーそうだな……」

（やべェ！　ここで一方通行なンて名乗れねェ！）

かっこ良く登場したと思った一方通行だが、名乗る名前（ぎめい）を決めてない事に今更気付く。

少しだけ焦った一方通行だが、その時脳裏にある名前が浮かんだ。

そして一方通行は、その名前を迷わず口にした。

「鈴科……鈴科百合子だ」

鈴科百合子（一方通行）

毅然と立つ一方通行だが、内心は大後悔の真っ最中だった。
いくら焦っていたとはいえ、思いついた名前をサラっと口にした過去の自分を殺したい気持ちで一杯だ。

（鈴科百合子って明らかに女の名前じゃねェか！）

心の中で頭を抱えて嘆く一方通行。
だが既に名乗ってしまったので今更撤回する事など出来ない。

「鈴科百合子？　聞いた事のない名前だな、おい」

（そりゃあ適当な偽名だしなァ……）

ファンシーな帽子を深く被りつつ、一方通行は盛大なため息を吐く。
自分の軽率さに呆れてのため息なのだが、スキルアウトたちは自分たちが軽んじられていると思った。

「おいおい、テメェ一人増えた所で何になるんだよ？」

見た目が細い一方通行を見て、スキルアウトたちは余裕の表情をする。
何か能力を持っているが、取り押さえてしまえばこっちのモノ。
そう表情に書いていた。

（やっぱ落ちこぼれは落ちこぼれだなァ）

「おい、女の子を狙うなよ。狙うなら俺を狙え！」

どうやって倒すか考えていると、唐突にウニ頭の男が叫ぶ。

「あんた！　ここは危ないから逃げろ！」

（おォ……ヒーローだねェ）

叫ぶウニ頭の男を見て一方通行は少しだけ笑みを浮かべる。
学園都市にも、まだまだこんな熱血漢な男がいたのか。
その事を理解した一方通行は、少しだけ嬉しかった。

（お前みたいなのが沢山いれば……学園都市もちっとはマシになるかもなァ）

そう思いつつ一方通行は地面を軽く蹴る。
地面にあるのは小さな砂粒だけ。
だが一方通行から見れば、砂粒でも立派な武器になるのだ。

「なっ！？」

スキルアウトの目には、目の前の女が地面を軽く蹴っただけ。
それだけしにしか見えなかったし、それ以上は理解できなかった。
だから突然目の前に竜巻が発生しても、それが一方通行によって生み出された事に気付かなかった。

「うおっ！？」

あっけなく竜巻に巻き込まれたスキルアウトたちは、洗濯機で回されるようにシェイクされる。
少しして竜巻から放り出されたが、その時は既に意識を失っていた。

「すげぇ……」

ウニ頭の男は目の前の光景に、ただ感心するだけだった。
素早く、だけど余り傷つけないように攻撃した少女に、ウニ頭の男は好感を抱いた。

「あ、ありがとうな。えっと……鈴科百合子ちゃん？」

「チッ……別に気にすンな」

素直な好意に慣れていない一方通行は、舌打ちした後にぶっきらぼうな感じで答える。
普通なら嫌な態度に見えるだろう、だがウニ頭の男は特に気にする様子がない。

（コイツももしかしたら、ロリみたいな良い意味でのバカかもなァ）

見た感じ能力者には見えない、なのにあの人数相手に立ち向かった。
その事が一方通行に感心と同時に、少しだけのイラつきをもたらした。

「っと、いけない。ちょっと人を待たせてるんだ、何もお礼出来てなくて悪いけど……」

「アーアー、気にすンな。別に礼が欲しくてやった訳じゃねェ」

追い払うような感じで手を振る一方通行に、ウニ頭の男は苦笑する。
彼の目には、一方通行が照れくさくてそんな態度をとっている、そう見えたからだ。

「悪いな。俺の名前は上条当麻って言うんだ。縁があったらまたな！　百合子ちゃん！」

そう言うとウニ頭の男、当麻は脇目もふらず全速力で走る。
本当に脚力はあるようで、あっという間に姿が見えなくなった。
途中、不幸だぁ～という言葉が聞こえたが。

「……ヘッ、訳のわからねェ野郎だなァ」

そう呟くと一方通行は元いたベンチに向かって歩き出した。

「あ、戻ってきたじゃん」

元いたベンチまで戻ると、三人は既に戻ってきていた。
それなりに早く戻ってきたはずだが、どうやら三人の方が早かったようである。

「どこ行っていたのですか？」

「トイレだ、トイレ」

ストレスを適当な人間で発散しました、なんて言えない一方通行は適当な理由を口にする。

「そっかじゃん。いきなりいなくなってびっくりしたじゃん」
特に疑問を持たなかった三人は、疑いもせず一方通行の理由を信じた。
「さっと帰ってくるつもりだったからなァ。まァちっとばかし手間がかかったが」
「そうですかー。まぁ無事ならよいのです」
そう言うと小萌は笑顔と共に一方通行の手を握る。
「さぁ一方ちゃん！　まだまだ時間はあります。もっと遊びますよー！」
「そうですね！　最新アトラクションはまだ沢山ありますよ！」
鉄装もまた、そう言って一方通行の腕を掴む。
傍目から腕を組んでいるように見えるが、今の鉄装はそれに気付いていない。
「またこのパターンかよ！」
二人にズルズルと引きずられていきながら、一方通行は嘆くような感じで叫ぶ。
勿論、その叫びは二人には聞こえていなかった。
「今日はとことん弄られてるじゃん」
二人に引きずられている一方通行を見て、黄泉川はとても楽しそう

に言った。

その頃、潰れていたスキルアウトたちはというと。

「イテテ……あの女、なんつー力を使いやがる」

「まぁ何とか生きてるが……正直危険だったぜ」

気絶から復活したスキルアウトたちは、体についた砂埃を払いながら立ち上がる。

「くっそ……あのガキのせいで散々だ。見つけて……」

「見つけてどうするかにゃ～ん？」

言葉を口にしている途中、またもや背後から人の声がした。

しかしその声を聞いたスキルアウトたちは、一様に同じ感情を抱く。

「いやはや、当麻お兄ちゃんの事だから、超こんな事だろうと思いました」

「結局さ、姉妹を放置して人助けなんて、当麻お兄ちゃんはお仕置きって訳よ」

「大丈夫、とうまにスルーされたフレンダを応援してる」

声の主は四人。そして全員が女性だという事は、姿を見なくても分かる。

だがその声を聞くたびに、心臓を鷲掴みされる感覚に襲われる。

五人はおそるおそる背後に立つ声の主に顔を向ける。

「さてっと、人の弟を可愛がってくれたお礼をしないとねー」

そこには寒気を覚えるほどの笑顔を浮かべている女性が四人立っていた。

背後に黒い煙でも吹き出してるのか、空気が歪んでいるように見える。

「時間もかけれないし、手短にいくにゃ～ん」

四人の中で一番年上らしき女性が、コツコツとヒールの音を立てながら言う。

「テメェら……ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

日の当たらない裏道に、スキルアウトたちの悲鳴が木霊した。

疲れた。ただひたすらに疲れた。

それが一方通行の感想である。

朝から誤解を受けた上に、次々と襲いかかる『事件』で心身ともに疲れきっていた。

最新設備のアトラクションに、鉄装がハイテンションを常に維持していた。

流石にメリーゴーランドへ乗せられた時は、本気で設備を破壊しようか考えた。
最も、そういう時は決まって黄泉川の囁きに乗せられたが。

次々とアトラクションを制覇していく鉄装。
それに全部付き合わされる一方通行。
何だかんだで付き合う小萌。
三人を見て楽しそうに笑う黄泉川。

構図的には大人なお姉さんの黄泉川が見守って、やんちゃな姉の鉄装が弟の一方通行を連れ回す。
それに必死についていく末っ子の小萌という構図が出来上がった。
現実は、一方通行以外全員が大人だが。

全てのアトラクションを鉄装が制覇した時は、既に夕方近くの時間だった。
赤く染まっている空を見つつ、一方通行はポツリと呟く。

「はァ……疲れた」

だけど、と一方通行は言葉を続ける。

「楽しかった……よなァ……」

迷いのない表情で、心の底から湧きでた感情に従って一方通行は言葉を紡ぐ。

「ほら鉄装、そろそろ帰るじゃん」

「はひー、全制覇……しましたよ、先輩」

「久々に童心に帰れた気がしますー」

一方通行の背後でそんな会話をしている黄泉川たち。
その声は本当に楽しい気持ちで溢れていた。

「……悪くねェ」

悪意のない笑みを浮かべながら、一方通行はそう呟いた。

この時の彼は知らない。
この後、小萌の家で黄泉川たち三人による夜の宴会が行われる事を。

そして。
一方通行が築く幸せの世界に、黒い影がゆっくりと近づいている事も……。

窓のないビルで、アレイスターはモニターをずっと眺めていた。
モニターに表示されている内容は、全て一方通行に関する報告ばかり。

「悪い傾向だな」

すべての報告を見終えた後、アレイスターはポツリと呟く。
自分の想定以上に、一方通行の『プラン』に関する軌道がズレている。

「少しばかり遊び心が過ぎたようだ」

そう呟くと同時に、空中にモニターがいくつも表示されていく。
それは小萌と一方通行が出会ってからの『十ヶ月間』を記録した内容だった。
一つ一つ整理していき、プランに関する軌道のズレがいつ起きたかを探る。

「やはり幻想殺しと接触したのが問題か」

すぐに問題の箇所は見つかった。
それは一方通行が遊園地に連れていかれた時、当麻と接触した時の事だった。
そのタイミングで、一方通行に関する『プラン』のズレが明確になっている。
アレイスターの望まない方向でのズレに。

「ふむ……このズレを使って『プラン』の短縮が可能かもしれぬ」

ズレを戻すためにどうするべきか、その事を考えているとある案が思いついた。

それは常人なら思いつくことすらしない方法だが、アレイスターにとっては『プラン』の短縮に繋がるなら躊躇わず実行する。

「まずは情報の操作からだな。それがすめば――――――――」

薄く笑いながら言うアレイスターの表情は、楽しむようにも、憐れむようにも見えた。

朝起きて、朝食を小萌と一緒にとって、学校でだらける。

昼飯に小萌の弁当を食べて、また授業を適当にすっぽかして。

下校時間になれば帰宅し、家に戻れば晩飯の準備をする。

夜帰ってきた小萌を出迎えて、夕飯を一緒に食べる。

飯が終われば風呂へ入るために外出する。

道中黄泉川と鉄装と合流し、そのまま一緒に銭湯へ向かう。

銭湯に入り、日々の疲れを癒す。

風呂上りにコーヒー牛乳を飲み、そして銭湯を後にする。

そのまま帰宅すると、部屋に布団をしいて寝る。

そしてまた朝がくる。

平和だった。

幸せだった。

一方通行はぬるま湯のような幸せにただ浸り続けた。
手に入らないと思っていた平和が、普通の人間としての生活が。
彼から力を使うという考えを失わせていった。
このまま力を失っても構わない、そう思えるほど一方通行は能力に興味を失っていた。
もしこのまま第一位の力を失っても、一方通行は後悔など微塵も感じないだろう。

だから、油断していた。
警戒心が薄れている一方通行は、全く気付いていなかった。
自分と小萌に、学園都市の『闇』が迫っている事など。

「クソッタレ……黄泉川の野郎、何が『一周年を祝うじゃん！』だァ……」

夜道を歩きながら一方通行は悪態をつく。
既に完全下校時刻は過ぎているのに、未だ彼が外にいるのは理由があった。
それは突然の黄泉川からの呼び出し。
面倒に感じながらも指定された場所にいくと、黄泉川はニヤニヤと笑っていた。

『今日は一方通行が小萌先生の家に来て一年じゃん』

『一ヶ月は祝ったが、それからなーんもなしじゃ寂しいじゃん』

『そこでこの黄泉川先生が、一肌脱ぐじゃん』

『おっとこんな所にケーキがあるじゃん。これを持ち帰って祝うじゃん！』

『後は花か何かがあれば完璧じゃん！』

『ほら！　これ持ってはやく帰るじゃん！』

言いたい放題だった。

呼び出された一方通行に、反論のはの字も言わさずにケーキを渡す。

そしてそのまま追い返すように、一方通行を家へと帰宅させた。

「チッ、俺がケーキとかないだろぅ。全く黄泉川の野郎は」

そう言いながらもしっかりとケーキを持ち帰る一方通行。

本気で嫌なら捨てればいいのだが、生憎と今の彼はそんな事など出来るはずもなかった。

だからただ悪態をつく以外になかった。

「クソッ……」

もう少しで小萌の家に帰れる時、ふいに視界の隅で何かが動いていた。

だが一方通行は特に警戒することもなく、普通に歩き続けた。

むしろ警戒する必要などないのだから。

（ふンッ……久々だなァ）

そう思った瞬間、何かが飛んできた。
だがそれは一方通行の少し手前で、まるで軟質の壁に接触したかのように跳ね返った。
その事が当然の一方通行は、結果を見る事もせず歩く。
小さくため息をつくと、前方からゾロゾロと集団が近づいてきた。
この一年音沙汰がなかった連中。
そう、一方通行を倒して第一位にのし上がる連中らが、集団で姿を現したのだ。

「細いなぁ。こんな奴が本当に第一位なのか？」

「今の不抜けた第一位なら楽勝さ」

「ケーキなんて持って、これからパーティってかぁ？」

「はァ……久々の馬鹿登場ってかァ……ン？」

烏合の衆だと思ったが、すぐにその考えを捨てる。
集団で来た連中は、統一性のある服装をしていたからだ。
黒いライダースジャケット、その背中に真っ白なペンキで書き殴ったような頭蓋骨。
その頭蓋骨に重ねるような感じで、赤い色で数字が書かれていた。

何かの集団か、そう思った時に男たちが一斉に一方通行へ襲いかかった。
しかし一方通行はだらりと両手を下げたまま、ただ憐れむように男たちを見ていた。
何もしなくても、ただ自滅を待つだけで勝負は決まる。

小萌や黄泉川なら驚くだろうが、一方通行の『本来』の力は必要のないものは全て『反射』する。
しかしそれでは、小萌たちを傷つけてしまう。
そう考えた一方通行は、自動演算の方式を意図的に変えれるように努力した。
人知れず血の滲むような努力の末、彼は自動演算に使う方式を切り替えられるようになった。
今、一方通行が使っている演算方式。それは勿論ーーー。

「ぎゃあ！」

必要のないもの全てを『反射』する設定だ。
八人ほどいた男たちは、情けない悲鳴を上げて手首をおさえつつ蹲る。
恐らく攻撃のベクトルが、複雑でもろい手首の骨へと集中したのだろう。

「はァ……」

もう一度ため息を吐いた後、倒れている男たちを無視して歩く。

「ま、待てよ……」

少しだけ歩くと、背後から倒れている男の一人が声をかけてきた。
声に反応してその場に止まった一方通行だが、視線は男の方を向けていなかった。
男はくぐもったような笑いをした後、まるで勝利を確信したかのように語る。

「確かに第一位は健在のようだな。だがよ……」

その時、ゴソゴソと何かを取り出すような音が一方通行の耳に届く。
本能的に嫌な予感を察知した一方通行は、顔を男の方に向ける。

「あんたがツルんでいる連中はどうかなぁ？」

何かを手に持っている、その事を理解した一方通行。
だがそれが何か、どういう物かなんて考えなかった。
ただそれを使わせてはいけない、それだけの考えで一方通行は地面を蹴った。

「まずは一人だ」

音がした。
一つ目はカチッというスイッチを押すような音。

「あがあああああああ！！！」

二つ目は肉がはじけ飛ぶような音。
一方通行によって手首から先を吹き飛ばされた男は、激痛の余りにのた打ち回る。

三つ目は地響きがしそうなほどの轟音。
その音に一方通行は視線をそちらに向ける。
真っ暗な世界の一箇所だけ、真っ赤な色をしていた。
遠くから見えるほど、その空間だけぽっかりと明るかった。

「あ……ああ……」

光が見える方角、目視から分かる距離、轟音が聞こえた時間。

間違えるはずがない。間違える事などありえない。
その場所は、一方通行にとって本当に大切な場所なのだから。

「ア〝ア〝ア〝ーーーーーー！！！」

一方通行の悲痛な叫びが、全てを黒く塗り潰す世界に響き渡った。

「クソッ！　クソッタレ！！！」

頭の理解が追いついた一方通行は、すぐさま小萌の家に向かう。
常人なら時間がかかっても、一方通行には能力を使ってショートカットをする事が出来る。
僅か一分で燃え盛る木造二階建てのアパートにたどり着いた。
一方通行は舌打ちをすると、一気に二階まで駆け上り一番奥の部屋まで移動する。
無駄に頑丈だと言っていたドア板が、無残にもバラバラになっていた。
それだけで『どれほどの威力があったか』が想像出来た。

「ロリッ！」

一方通行は部屋に入ると、小萌がいないか探す。
普通なら燃え盛る炎の部屋に入るなど自殺行為だが、一方通行はこの時『小萌以外の有害な物を反射』する設定にしていた。
よって燃え盛る炎の熱は『反射』されていた。

「う……うぅ……一方……ちゃん？」

「ロリッ！」

屋根だったものの瓦礫の下から小萌の声が聞こえた。

一方通行は、その場にある瓦礫を吹き飛ばす。

「おい、大丈夫か！」

「何とかですー……それにしても一体何が？」

軽い火傷を負った小萌を抱き起こすと、一方通行はすぐさま体のチェックを行う。

服がスス汚れているのと、所々が焼けて穴が空いている以外は、軽いやけど程度だった。

ただ小萌の左腕だけが、明らかに曲ってはいけない方向に曲がっていた。

恐らく骨が折れているのだろうが、意識を取り戻した直後なので気付いていないみたいだ。

「……すまねェ……すまねェ……」

「何故一方ちゃんが謝るのですかー？　それより、一方ちゃんは大丈夫ですか？」

謝る一方通行に首を傾げながらも、小萌は一方通行の安否を尋ねる。

「あァ……俺は無事だァ……」

「そうですかー……！　一方ちゃん！　危ないです！」

ホッとした顔をしたが、突然何かに気付いたような表情をして小萌は叫ぶ。

「あ？」

小萌の声と同時に、一方通行は小萌によって後ろに押し倒されていた。

動く右腕で一方通行の胸を押した小萌。
その小萌の横側から、柱のようなものがふってきていた。
柱が小萌の頭に直撃する。ゴンッと酷く鈍い音が聞こえた。
そして柱に押し潰される格好の小萌。

そこで理解が追いつくと、一方通行は小萌の上にのしかかっている柱を蹴り飛ばす。

「おい！」

一方通行は小萌を再度抱き起こす。
抱き起こした時、手にあたたかい液体の感触がした。
おそるおそる自分の手を見ると、手は真っ赤に染まっていた。
それが何かなど、わざわざ問う必要もなかった。

「……一方ちゃん……無事で……よかったですー」

抱き起こされて意識を取り戻したのか、小萌はかすれるような声で言葉を発する。

「なンで俺なンかかばった！　俺は学園都市最強だ！　あンな柱如きに倒れたりしない！」

「でも……私の生徒さん……です。先生は……先生は生徒を守るために……全力を尽くします」

その言葉には聞き覚えがあった。

少し昔、一方通行が自分の事を語った時に小萌が言った言葉。

「！　馬鹿……野郎……！？」

本当に愚直なまでに、自分の命すら投げ出して生徒を守ろうとした小萌。

馬鹿だと思った。本当に救えないほど馬鹿だと思った。

俺なんかの為に、そこまでする必要などないのに。

本当に、本当に馬鹿だと一方通行は思った。

両の目から涙を流しながら。

「ちょっと……かっくいー台詞を吐いてみました。えへへ……本当に……無事で……よかっ……た……」

その言葉と同時に、小萌は意識を手放した。

「……待ってろ。今すぐ病院に連れていってやる」

一方通行は自身の能力を使い、小萌に応急処置を施しつつ病院へと向かう。

僅かな時間で病院にたどり着いた一方通行は、応急処置を施した小萌を医者に任せた。

「頼む」

たったそれだけを口にした後、一方通行は病院から立ち去った。

この日起きた一方通行襲撃事件。
それはこれから始まる事件のプロローグにしか過ぎなかった。

そして一方通行を狙った連中は知る事となる。
一方通行は決して不抜けたわけでも、腰抜けになった訳でもない。
見た目は力を捨てたように見えていたが、現実は違う。
ただ幸せの世界だけは、その力を全て封じていただけの事。
そして僅かな幸せを守るために、裏で牙を常に研ぎ澄ませていた。

だが幸せの世界を潰された今、一方通行の心は完全に真っ黒に染まった。
それは研ぎ澄まされていた牙が無作為に解放される事を意味する。
その時の一方通行は、一切の慈悲も容赦も加減もしないだろう。

そして一方通行の牙は、学園都市に住む『全』スキルアウトへと向けられる事となる。

解き放たれた獣

小萌の住む家が爆破された翌日、黄泉川は現場検証を行うため、現場へと足を運んだ。
まず最初に思ったのは、どれほどの爆発物を使ったらこうなるかだった。
木造二階建てのアパートとはいえ、建物を吹き飛ばすにはそれなりの破壊力が必要となる。
しかし現実にアパートは影も形もなくなっていた。

「……使った爆薬は相当な量じゃん」

瓦礫の山を見ながら黄泉川は呟く。

「しかし流石一方通行じゃん。あのリフォームはちゃんと意味があったじゃん」

そう呟きながら黄泉川はある一点へ視線を向ける。
そこだけ僅かばかり部屋の形をした、ギリギリ完全破壊を免れている場所があった。
今は地面に落ちているが、恐らくは『二階』にあった部屋だろう。

「……だから小萌先生が、意識不明だけど生きていた訳か。なのに一方通行、お前はどこにいるじゃん」

小萌を病院に運んで以降、一方通行の足取りが全く掴めない。
携帯は繋がらないし、監視カメラのデータを見てもそれらしい人物はヒットしなかった。
黄泉川は小さくため息を吐いた後、青空を見上げる。

「どうしてこうなったじゃん」

僅か一日の中の数時間、たったそれだけで全ては激変した。
二人は一周年を祝ってそれを次の日に茶化す。それが今日だと思っていた。
なのに現実は一方通行が行方不明、小萌は意識不明で入院。

「はぁ……やるせないじゃん」

その時、黄泉川のポケットの携帯が音を立てる。
誰かからの連絡と思った黄泉川は、だるそうな感じで携帯を取り耳に当てる。

「はい、黄泉川……はぁ！？」

最初はやるせない表情をしていたが、突然驚きに目を見開く黄泉川。

「分かったじゃん。すぐ戻るから！」

そう言うと黄泉川はポケットに携帯を突っ込む。

「どういう事じゃん。一体何が起きてるじゃん」

困惑の表情をしながら黄泉川はそう呟いた。

警備員第七三活動支部に戻った黄泉川は、プロテクター姿のまま会議室に駆け込む。
既に他の警備員は戻っていたのか、その場には多数の警備員がいた。
だが全員が同じ表情をしていた。

「あ、黄泉川さん。お疲れ様です」

近くに立っていた同僚が黄泉川の姿を見て声をかける。
やはり表情は他の警備員たちと同じ。
畏怖、恐怖、困惑、怯え、その他負の感情が全て集まったような表情だ。

「一体どういう事じゃん」

「詳細は今から説明されるそうです。あ、始まりますよ」

『諸君、電話でも連絡したが今大変な事が起こっている』

会議室の中央にいる男性が言葉を口にする。
マイクか何か使っているのか、その声は少しだけノイズがのっていた。

『学園都市には「スキルアウト」という武装集団がいる。その事は皆も知っているだろうから、「スキルアウト」についての説明は省く』

しかし表情は他の人間と同じだった。
重苦しい雰囲気の中、その男性は一言一言噛み締めるような感じで言葉を発する。

『本日、第六学区を根城にするスキルアウトが何者かに襲撃を受けた』

『我々は連絡を受け現場に駆けつけた。しかし、そこにあったのは……』

そこから先は言いたくないのか、口元を抑えて言葉を飲み込んだ。

少しだけ考えた後、僅かばかりの汗を流しつつ男性は言った。

『……現場の写真を見る方が早いだろう……だが、先に言っておく。見た者として言う、決して見ないほうがいい』

『一分待つ、その後スクリーンに表示しよう。見たくないものはその間席を立つがいい』

そう言うと座っていた男性は、ただ重苦しい雰囲気で口を閉ざした。

よく見れば肩が僅かばかりに震えていた。

その様子に只ならぬ事態を感じた警備員たちは、見えない恐怖に怯え始める。

一人、また一人と部屋から出ていき、一分後に残ったのは黄泉川を含む数名だけだった。

『この人数だと、マイクはいらないな』

その言葉通り、何かを胸元から外すとその男性はリモコンを手に持つ。

「……これが現場の写真だ」

ピッと音がした後、スクリーンに現場の写真がうつる。
余りにも現実離れした写真が。

「うっ！」

写真を見て黄泉川は吐きそうになった。
それなりの場数を踏んでいる黄泉川ですら、本能的に吐きそうになるほどの現場写真。

何とか嘔吐だけは免れたが、それでも胸に溜まった嫌悪感は消え去らなかった。
他の人物に視線を向けると、顔を真っ青にして立ち尽くす者。
ショックの余り立ったまま気絶している者。
頭を抱えて怯える者など、およそ平時の精神でいた人間は皆無である。

「……第六学区のスキルアウト組織、その襲撃事件での死者はゼロだ」

「なんだって……」

重苦しく口を開く男性の言葉を聞いて黄泉川は理解が追いつかなくなった。
スプラッタ映画より酷い、歴史書に残っている戦争の写真と同じといっても遜色ない。
そんな現場写真を見た後では、その言葉など到底信じられなかった。

「彼らは……人間が『死ぬ手前ギリギリのライン』まで嬲られている。だから、死んだ人間は一人としていない」

「だが……」

そこで男性は口を一回閉じる。

数秒思案した後、無理矢理吐き出すような感じで言葉を口にする。

「私個人の意見で言わさせて貰えるなら……アレでは『死んだ方がマシ』だと言えるだろう……」

「あんな『まともな場所を探す方が困難』な体にされるぐらいなら……」

「……」

誰もが言葉を失った。まともな思考の人間がする所業ではない。

間違いなく頭がイカれてないと、ここまで出来ない。

もしくは、対象に酷い憎悪を抱いていなければ。

（……ま……さか……）

そこで黄泉川はある考えが浮かぶ。

馬鹿馬鹿しいと切り捨てられるが、同時にそれが今の状況では一番しっくりくる。

「質問じゃん。スキルアウトの組織はいくつかあるが……その中で第一九学区の連中はどうなったじゃん」

「ん？　ああ……生存の調査をしたが、第六学区以外は何も起きていない」

何も起きていない、果たしてそうなのか。

黄泉川のカンが正しければ、数日以内に第十九学区に『彼』が姿を見せるはずだ。

（あの爆薬……確か第一九学区のスキルアウトが多用していたはず。ならば、小萌先生を狙ったのは、連中らの可能性が高いじゃん）

確証も何もないが、長年の警備員としての経験とカンが、それが答えだと叫ぶ。

（どうしてじゃん。どうして一人で抱え込むじゃん）

（何で相談してくれないじゃん……）

悔しそうに唇を噛みながら、黄泉川は心の中でそう叫んだ。

まもなく警備員や風紀委員は知る事となる。

これで終わりではないと、第六学区は始まりに過ぎないと。

それが予言から確信に変わったのは、次に上がってきた報告を聞いた時だった。

その報告にはこう書かれていた。

『第一〇学区を根城にする『ビックスパイダー』が襲撃された。リーダーの黒妻綿流は半死の状態で病院に運び込まれた』

そして更に警備員や風紀委員を震撼させる報告がもたらされる。

報告を書いた本人すら信じたくなかったのか、報告書に書かれていた文字は震えた手で書いたような文字だった。

その文字を読み取ると、こう書かれていた。

『第七学区で大能力者、強能力者合わせて二五名が何者かに襲われ

た。犯人は全く不明。しかし襲われた人間にされた手口は、スキルアウトを襲撃した人間と同じ手口。よって犯人はスキルアウトを襲撃した人間と同一の可能性がある』

数日もたてばスキルアウトが何者かに襲撃されている事は、学園都市中で話題となっていた。
警備員及び風紀委員は目撃情報を収集しようと考えた。
だがそれは困難を極めた。
その理由は、スキルアウトの存在理由にあった。

学園都市に住む学生のうち、六割は無能力者である。
四割は無能力者ではないというが、その内でエリート扱いされる強能力者クラスは更に数が少ない。
大能力者に至っては更に少なく、その上の超能力者は僅か七名である。
最上位は絶対能力者と言われているが、未だ誰も到達した事はない。

そして能力の強度は、そのまま学園都市における『序列』となる。
無能力者は権力構造で行けばよくて平民、悪く言えば奴隷みたいなもの。

そして無能力者たちが取る手段は概ね三つに分類される。
一つ目は強度をあげようと日々頑張る普通の学生として過ごす。
二つ目は無能力者同士が集まって、自分たちの居場所を作り上げる。
三つ目は強度の高い能力者に取り入る、所謂コバンザメのような感

じになる。

そして今回は二つ目の手段を取った連中らがターゲットとなっている。

話だけ聞けば特に害はないように聞こえるだろう。

だが実際は『学校では役立たず、その上迷惑ばかりかける面倒な連中』という存在なのだ。

彼らのやっている事は、社会的なモラルから反している。

だから一番、三番の道を選んだ連中からすれば、二番の道を選んだ連中は酷く迷惑なのだ。

そんな連中らを助けるような人間は、残念ながら学園都市ではほぼいない。

だから例え現場を目撃した、または犯人を見たとしても、警備員や風紀委員に情報を渡す人物は皆無といっていい。

そして更に事件解決を困難にしている理由がもう一つある。

それは犯人が一人で軍隊と対等に戦える程の力を持ち。

学園都市の中で七人しかいない超能力者の一角を占め。

その中でも最強を誇る、序列第一位の称号を持つ。

学園都市最強の能力者にて、学園都市最高の優等生。

その第一位の名前は。

「なァ……ちィっと聞きたい事があンだがよォ」

一方通行と呼ぶ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3007q/

とある当麻の家庭事情

2011年12月10日01時46分発行